
同居人はドラゴンねえちゃん

SAI-X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同居人はドラゴンねえちゃん

【Nコード】

N1403P

【作者名】

SAI-X

【あらすじ】

陰や隙間より現れ、人を食らう邪悪な怪物「シェイド」。そのシェイドを力でねじ伏せ、服従させることで力を得る戦士「エスパー」。

。そのエスパー同士による戦争から8年。平凡なアルバイターの青年・東條健にシェイドの群れが襲いかかる。戦う力など持っていない彼は死を覚悟した。だが、そんな彼を窮地から救ったのは、誇り高くてセクシーな白龍のシェイドだった！彼は突如として現れた彼女と契約を交わし、やがて戦いの渦へと巻き込まれていく！

！ 幼馴染みに爆乳ドラゴンと、個性的(?)なキャラクターが

続々登場！ バイトくんとドラゴンねえちゃんのゆるーい日常とヒロイックな戦いを描いた現代ファンタジー。不定期更新中。閲覧の際は携帯から見ると割と見やすいです。お持ちでない方はごめんなさい。また、残酷描写ありとありますが、度を越したものはありません。

登場人物紹介（前書き）

その名の通り、本編中に登場するキャラクターを紹介するコーナーです。ただし、全員が載るとは限りません。

物語の進行に合わせて更新されていくので、閲覧の際はネタバレに注意してください。

また、本編で記述されていないことも書きます。ご了承ください。

登場人物紹介

Vol. 1 } 2

とうじょう たける
東條健

19歳。この物語の主人公。高校を卒業してすぐに京都府で一人暮らしを始める。

比較的温厚で真面目だが、その一方でどスケベで密かにエッチな本を所持している。

家族構成は父、母、姉。父は8年前に仕事で遠出したきり行方不明。

平凡な青年で変化のない日常を淡々と過ごしていたが、得体の知れない怪物の群れから助けにくれたアルヴィーと契約したことにより、

炎と氷を操る能力と大型剣【エーテルセイバー】と盾【ヘッダーシールド】を武器に戦いへ挑む。

ルックスはバランス良好で更にバイトとはいえ市役所勤めの公務員であるため、ある意味勝ち組？

現在絶賛ハーレム状態でアルヴィーと長いこと同居しているものの、

女性への免疫はまったくついていない辺りスケベとしか言いようがない。

アルヴィー

年齢不詳…ちゅーか今更数えられない。

健の前に突然現れたグラマラスなねえちゃんだが、

その正体はシェイドの中でもかなり上位に入る白龍のモンスター

【アルビノドラゴン】。

しかし莊嚴で恐ろしい見た目に反して人懐っこい性格で無益な殺傷は好まず、

ひっそりと暮らしてきた。健の父親と面識があつたらしく、彼に運命を感じてそのまま契約する。

誇り高く強気で口調も古風で男勝りだが、人ならざるモノながら言動の節々が人間くさい。

バスト98cmというかなりの巨乳の持ち主で、ちよくちよく愛情表現として健を胸で誘惑する。

一見厳格そうだが、割とサブカルチャーに明るくノリのいいお姉さんの存在である。

健の家族や役所のメンツの前では白石と名乗る。

言い伝えに出てくる『黄金龍』に似ているらしいが、それとはどういう関係なのだろうか？

風月みゆき

18歳。この物語のヒロイン……なんだけど、この頃空気だなあ。

大丈夫かな

明るく純情な性格の女の子で健とは幼馴染み。普段はファミレス

『トワイライト』でバイトしている。

胸は可もなく不可もない普乳。一般人であるため健の戦いをそつと応援することしか出来ないが、

それでも彼の心の支えになっている。年頃の女の子らしくおしゃれ好き。

ウェイトレスとして働く傍ら料理の研究に余念がなく、料理に関してには非常に鋭い一面も。

不破ライ

27歳。健より経歴の長いエスパーで、卓越した実力の持ち主。

一見沈着冷静なクールガイに見えるが実際は好き嫌いが激しくア

グレッシブで、

やたらと他人にケンカを売る危なっかしいニーサン。不遜な自信家でもあり、

そのプライドの高さから健の事は頭では認めつつも内面ではほとんど強くなつていく彼に嫉妬し、

あまり快く思っていないようだ。近頃になつて和解し、

彼らとの関係にも少しずつ変化が表れてきている。2年前に連続発火事件で恋人を亡くし、

事件の首謀者・浪岡に異常なほどの憎しみを抱いていた。

警察に復帰するも、アクの強すぎる周囲の人々に振り回されており胃に穴が開きそうな状態になっている。誰か栄養ドリンクか胃薬を飲ませてあげて。

東條明雄とうじょうあきお

44歳。健の父。8年前に消息を絶つたきり行方不明。

大杉逸郎おおすぎいつろう

54歳。健のバイト先のチーフ。

面白い物好きのオッサンであり、何かと不安だらけの健にとってはよき相談役。

浅田ちあきあしたちあき

23歳。健のバイト先の先輩で、明るい性格のアネゴ。

今井、ジェシーといつもトリオを組んでおり『三人娘』の一角を担う。

同年代のジェシーと二人で後輩へのアドバイスを積極的に行っている。

今井みはるいまいみはる

20歳。健のバイト先の同僚で、いわゆる根暗で大人しい性格。

PC及びインターネットに関する知識が豊富な知性派で、ゲームも得意なプログラマー志望。
ネットでは明るくなれるらしいが、この頃リアルでも明るくなってきた。

ジェシー・西條・エレノア

24歳。健のバイト先の先輩で、おっとりした性格のお姉さん。
金髪碧眼の日系ハーフでいつでも親切丁寧かつ世話好きであり、何かと健のことを助けてくれる。

今でこそ庶民だが、かつては庶民に憧れる裕福な家庭の令嬢だったらしい。

実は妹がいるらしく、その妹は英会話の講師をやっているという。

ケニー藤野

35歳。健のバイト先の係長で日系人。ノリと思いつきを信条とするお調子者。

英語を交えた独特の喋り方だが、流暢なジェシーに比べるとややヘタ。

和洋問わない城マニアでもある。

割と健に辛辣な……もとい、やきもちを焼いているような態度をとることが多い。

既に三十代半ばにも関わらずモテ期が来ないらしく、なかなか童貞を捨てられないそう。

白峯とばり

27歳。才色兼備な妙齡の女科学者。おまけに料理もウマイ完璧超人。

明朗快活で言動に少し幼さが残っているが、

芯はちゃんとしていて物事の真相を見据えている大人の女性である。

色々あったが現在はやりわりとした日常を過ごしつつ、警察のシ
イド対策本部に協力している。
京都の西大路に研究所兼自宅を持っており、それも健たちがうら
やむほどの豪邸である。

くらた よしえ
倉田美枝

不破の恋人だった女性。アクセサリーショップの店員だった。
幸せの真つ最中だったが、2年前に起こった連続発火事件に巻き
込まれ死んでしまう。享年25歳。

なみおが じゅうじやう
浪岡十蔵

36歳。金髪に黒ずくめの格好をした不気味な男。
【ファイアスターター】、【フュリアスフレイム】の異名を持つ。
異名にそぐわず炎を操り、2年前に己の能力を実験するためだけ
に連続発火事件を起こした。

冷酷残忍で頭脳明晰だがうぬぼれやすく、他者を虫ケラ以下と見
下している。

大勢の部下を従え新エネルギーの研究・開発に心血を注いでいる
が、その真意はまったく読めない。

みどりかわ かずと
緑川和人

浪岡の副官。

冷淡かつ残酷な性格で彼の下でセンチネルズに仇なすもの達を闇
に葬り去ってきたが、
あることがキツカケで ?

おおくぼ としき
大久保敏樹

文部科学省に所属している生物学の権威。

『大久保生体リサーチセンター』の所長であり、
不破からシイドとの戦闘データを受け取る代わりに、

美枝を殺害した犯人の情報を提供することで協力関係を築いていたが……。
なんとすべきか、怪しい要素が服着て歩いているような雰囲気がある。

Vol. 3 / 4

市村正史 いちむら まさふみ

24歳。あるときは陽気なイケメンたこ焼き屋、ある時は粗野で攻撃的な謎の関西人。

その正体は大阪でその名を轟かせる【浪速なにわの銃狂い】。

センチネルズを壊滅させたことで有名になった健に目をつけ、健を倒し名を上げて全国的に有名になるべく彼をライバル視して執拗に付け狙う。

気さくで女性に目がない性格ながら、ライバル同士で馴れ合うのは嫌いらしい。

銃使いなのにヘタレじゃないのは気のせいだ。

村上翔一 むらかみ しょういち

28歳。警視庁捜査一課の警官で不破の同僚。

階級は警部補で、現在はシェイド対策課の主任となっており、モニタールームから指示を下している。警察でもきつての知性派でイケメンだが、

非常に嫌味な性格の毒舌家で思ったことはすぐ口に出す、有能ながら不破を何かとこき下ろす、

それでいてプレイボーイである等性格に問題点が多い。愛用のメガネは高級品らしく、

フレームだけで10万円はくだらないんだとか。こんな奴だが根

はいい奴で、

ドライな性格に反して部下想いである。信じてやるう。

穴戸小梅 ししじ ことめ

22歳。捜査一課所属の婦警で村上や不破の後輩。

ミニスカートが良く似合う活発な女性で、シェイド対策課のオペレーターも務めている。

架空の人物、それも小説内の人物である穴戸梅軒の子孫を自称しているが、真相は定かではない。

村上からイジられる不破を癒す数少ない理解者でもある。

鎌瀬拘太 かませ こうた

20歳。カラーギャング『グリーンスネーク』のリーダーである不良青年。

かまいたちを放つエスパーである事から【エアスラッシュ】の異名を持つ。

主に部下を率いてホームレス狩りや強盗・殺人未遂、婦女暴行などのまるで山賊まがいのやばいことばかりやっていたが……？

三谷ノキヤモレオン みたに

ストリートファッションを身に包んだねずみ色の髪のおしゃべりな男。

卑怯で大して強くないくせにしつこく、透明化する能力や目から出す光線などで健を何度も苦しめる。

狩谷シンジ かりや

25歳。ロックバンド『アルペジオ』のギター兼ボーカル。

他のメンバーとそりが合わなくなり、憤った拳句脱退してしまっ
た。

やや傲岸不遜だが音楽に対する情熱はまっすぐで、努力を欠かさ

ない性格。

甲斐崎拓海 / ????

三谷らを裏で操る謎の男。

無駄な贅肉などついていない引き締まった体に強い意志を秘めた視線、そして頭脳明晰。

必要とあらば平然と仲間を切り捨てる冷酷な智将であり、世界を支配するためなら手段を選ばないと豪語する。

とはいえすぐには見捨てずにチャンスを与える辺り、案外いい上司なのかもしれない。

Vol. 5 ~ 6

東條さとみ

40歳。健の母。

はんなりとした性格で、実年齢より若々しく美しい容姿の持ち主。料理がシェフ並に得意で、なおかつ白石さんことアルヴィーとは気が合う様子。

東條綾子

21歳。健の姉。勝気でサバサバした性格だが、家族思いのよき姉。

弟とは小さい頃よくケンカしたが、今ではすっかり仲良し姉弟である。

郵便局に勤める傍ら、趣味として英会話を学んでいる。

また、学生時代に軽音楽部にいた名残かたまにギターを弾いたりする。

はながた きよし
花形清志ノナルキツソス

失敗続きでしくじった三谷の代わりに行動を開始した上級のシエイド。

スイセンのような姿の怪人に変身し、実力は差ほどでもないものの搦め手に長けた厄介者。

オネエ口調でしゃべり、動きもどこかなよよしている。

筋金入りのナルシストでヒステリックかつ陰険な性格で、

人が苦しむ姿をビデオカメラで録画することが好きだという悪趣味な一面を持つ。

実は素性は短気で下品なチンピラであり、

そんな自分を嫌って普段は前述のオネエキャラで通している。

だが、短気な性格を直せていないため、実のところあまり意味を成していない。

糸居まり子ノアラクネアクイーン

女郎蜘蛛の上級シエイドにして、青紫の髪と緑の瞳を持つ魔性の女。

きわめて気まぐれかつ冷酷で唯我独尊だが、その割には比較的温厚でおっとりしている自由人。

その風格と威圧感から、仲間内では主に？クイーン？と呼ばれ恐れられている。

相手を死に至らしめる猛毒を持つほか、

使用者が極めて少ないとされるレアな特殊能力『サイコキネシス念動力』を操り、背中からクモの脚状の突起を出して相手を串刺しにするなどその

パワーは未知数。

本来は美しい成人女性の姿をしているのだが、わけあって現在は幼い少女の姿をしている。

大人になったときの姿は予想では『クール系の巨乳美女に違いない』とされているが、

果たして実際のところはどうか……。
巷の噂では、本来の姿に戻ったあかつきには健を別の意味で食べ
ちやいたいとお考えだそう。

たつみ りゅうすけ
辰巳隆介ノヒュドラワインダー

甲斐崎が率いる企業組織『ヴァニティ・フェア』の幹部であり現
場責任者。

大怪我でもしたのか顔を包帯で隠しており、表情を読み取ること
が出来ない。

また、意地でも素肌を晒す気がないらしく異常なまでにコートや
マントを着込んでいる。

甲斐崎に忠誠を誓うそぶりを見せているが、
隙あらばいつでも出し抜こうと企んでいるへびのような男。

三つ首の蛇のような不気味な姿に変身し、
口から毒液を吐き肩から生えた蛇の頭を伸ばすなど幹部の名に恥
じない実力を誇る。

ミスター・アンドレノアーマーライノス

突然健たちを襲ってきたサイの上級シェイドで、シェイドの中
も1,2を争う力自慢。

人間体は黒人のハゲのオッサンでプロレスラー並みの体格の持ち
主で、

鍛え上げられた屈強な肉体は鋼の筋肉に守られていて生半可な攻
撃は一切通じない！

こんなバケモンに勝てんのか、ホントに。

ヴァニティ・フェアの社員の中では意外と真面目で比較的常識人
であり、

仕事ならばためらいなく人を殺せるが、一方で無益な殺生を好ま
ぬ一面も。

堂島秀人どうじま ひでと

警視庁公安一課に所属する警部。この道20年のベテランで元々は捜査一課に所属していたが、いろいろあつて公安部に異動した。考えるよりもまず行動する事を好む肉体派だが、決して頭が悪いわけではなく現場で培った知識とテクニック、鋭い洞察力を併せ持つナイスミドル。

新藤剛志しんとう つよし

自警団『近江の矛』のリーダー。筋肉質な男性で20代半ばのチンピラのような風貌だが、侮ること無かれ。棒術を操るなどその実力は非常に高い。警察を激しく嫌っており、まるで彼らに親でも殺されたかのように憎しみをぶつける。しかし、その正体は……？

逢坂アズサおうさか あずさ

21歳。元気いっぱいいな市村のガールフレンド。老舗のお好み焼き店の娘であり、彼女自身もお好み焼きは作るのも食べるのも大好き。また、アニメや漫画が好きなオタク系女子でもある。

伊東英機いとう ひでき

20代。様々な形に変形する特殊な金属を操る流れ者のエスパー。関西出身で【エクステンジャー】という異名で呼ばれ恐れられ

ている。

金さえもらえればどこにでも着くという傭兵稼業を生業として
いるらしい。

祇園藤吾ぎおんとうご

20代。『近江の矛』に所属しているエスパー。

橋上鉄郎はしがみ てつろう

大阪府の府知事。

中丸兄弟なかもまるきょうだい

兄弟で銀行強盗をやっている荒くれものエスパー。

兄の細志は痩せていて雷を操り、

弟の太は太った巨漢で体を岩のように硬くして防御力を上げる。

二人そろって不破にあっけなくやられた拳句逮捕された。

ヴォルフガングノキングウルフェン

ヴァニティ・フェアの幹部。軍服を着た屈強な白人男性。

豪放かつ威風堂々とした性格の武人肌。

クラーク碓氷うすい

ヴァニティ・フェアの幹部で牧師風の男性。

卑小でズル賢い性格をしており、弱者を嘲り強者には媚びへつら
う。

斬夜耀司きりや ようじ

ニューヨーク市警からシェイド対策課へ配属された敏腕捜査官。

右目に片眼鏡をつけていて、オシャレかつインテリな様相。紳士
的だが齒に衣着せぬ物言いが目立つ。

そして　そこはかとなく怪しい。

葛城あずみ

17歳。私立天宮学院高校に通う二年生。エレガントな雰囲気、漂わせるお嬢様。

高飛車で強気だが根は真面目で誠実であり、多くの生徒から慕われている。

妃みどり

17歳。葛城と同じく私立天宮学院高校に通っている二年生。

元気いっぱい、明るく温厚な性格で、キツイ言動をとることが多い葛城のクッション役。

鷹梨夕夏

才色兼備で有能な甲斐崎の女性秘書。博識で聡明な、メガネが似合う美人。

多良場博次ノカルキノス

ヴァニティ・フェアに勤めているバイト。正体はカニのシェイドであり、

鉄筋コンクリートを粉砕するほどのパワーを持った自慢の怪力バサミを振るう。

用語辞典（前書き）

ここでは劇中に登場した用語、その意味を記していきます。

これで『わけわかんねえよ』が『わけわかる』に変わったら本望です（ただ、ますます分からなくなるかも……）

しかし！ ネタバレも多くなりますゆえ、できれば最新話まで読んでから見る事を推奨します。

エスパー

凶悪な怪物・シエイドを服従させ、^{ディール}契約を交わすことでなれる戦士の総称。

彼らから特殊能力と戦いに必要な力を得ることが出来、これでもうやく人はシエイドと対等に戦える。

『毒を持って毒を制す』という考えに基づいて発足され、相当な訓練を積まなければなれない。

だが、中には例外もあるようで、[？] 健のように正義の心を持ったものもいるが、

浪岡や鎌瀬のように力に溺れ悪事を働くものが多いのも事実である。

シエイド

物陰や隙間があればどこからでも現れる人食いの怪物どもの総称。無機物をかたどったものや、生物が突然変異を起こして禍々しい外見になったようなもの等多種多様。

人の負の感情を好み、とくに怒りや憎しみ、悲しみなどには強い反応を示す。

また、中には高度な知能を持つものもあり、人間に化けて人間界に潜伏していることもある為本当に油断のならないヤツらである。

彼らと契約を交わしてエスパーとなることで、人はようやくこいつらと対等に戦えるのだ。

一方でアルヴィーのように人間を襲わず彼らの文化に深い興味を示しているものや、

糸居まり子のように人を食らうことに興味を持たないものもいる。

ディール
契約

シエイドを服従させ、彼らから力を得る行為のこと。

訓練の末、これをやることでやっとエスパーになれるのだ。

だが、シエイドの方からエスパーの素質がある者に近付いてくるケースもあるようだ。

ちなみにディールというのは英語で『取引』という意味であり、契約という意味とはちよつと違う。

(『契約』は英語でContractである。たぶんテストに出るので覚えておこう)

特殊能力

エスパーがシエイドと契約することで得ることが出来る、その名が示すとおり特殊な力。

契約する相手によって得られる能力が違い、炎を出す、剛力の持ち主になれるなど実に多彩なバリエーションがある。

エーテルセイバー

アルビノドラゴンと契約したことでエスパーとなった東條健たけが武器として用いる長剣。

属性の力を凝縮した宝玉【オーブ】を柄の穴に装着することで属性を変えることが可能。

普段は粒子化して、アルヴィーの右腕に収納されている。

また、実体化したまま立てかけておくことも可能。

ヘッダーシールド

上記と同じ経緯でエスパーとなった東條健が防具として用いる、

龍頭の意匠がある盾。

エーテルセイバーと同じようにして属性を変えることが出来、現在の属性と同じ属性のバリアーを展開することが可能。これも普段は粒子化して、アルヴィーの左腕に収納されている。

光魔大戦

8年前に起きた善のエスパーと悪のエスパーの抗争。激しい戦いとなったが、両者共に多くの犠牲が出た末にこの戦いは集結した。

歴史的な出来事だった為、今では教科書にも載っている。

Vol.2

センチネルズ

浪岡十蔵が率いるエネルギー研究機関。

様々な方法を用い日々新エネルギーの開発を試みている。とい
うのは仮の姿。

実際は非人道的な方法でエネルギー開発を行い、
ゆくゆくは錬金術を現世に復活させて日本を中心に世界を支配しようとしたとんでもないブラック企業だった。

異空間

人間界の隙間や陰からつながった空間。シェイドであれば誰でも入ることが可能。

人間でもエスパーなら、パートナーのシェイドを伴った上で入ることが可能。

御門山

奈良県にある山。センチネルズの本部である研究施設がある。
春夏秋冬、どの季節でもまったく趣旨の違った美しい風景がウリの場所である。

秋なら紅葉が秀逸で、更にリンゴやキノコなどのおいしい味覚も採れると評判だ。

冬は言わずもがな、一面が銀世界。当然だが実在しない。

迂闊に『ミカド山って山あるんだぜ！ 知らなかったる！』などとみんなの前で自慢すると赤っ恥をかくので注意。

Vol. 3

グリーンズネーク

京都を中心に活動していたカラーギャング。リーダーは鎌瀬拘太。略奪行為や女性への性的暴行など山賊まがいの悪事を働いており、しかもリーダーがエスパーであったため警察も迂闊に手が出せなかった。しかし、彼らの悪事をよしとしなかった健によって呆気なく壊滅させられる。こんな奴らチーム青大将でじゅうぶんだ。

浪速なにわの銃狂い

謎の銃使いエスパー、市村正史の異名。というか本人が自ら名乗っている。

本人曰く『地元じゃ有名だが、よそでは南京虫並みにマイナー』
なんだとか。

しみずでら

もしかして：清水寺しみずのてら

アルペジオ

プロデビュールを目指して活動中のロックバンド。

メンバーはギター兼ボーカルの狩谷シンジ、ベースの麻倉タケシ、ドラムの佐島ミツル、キーボードの北崎シュウの4人。

一時期ゴタゴタが起きて狩谷が脱退してしまい解散の危機に陥っていたが、

後に狩谷が戻ってきたことで無事に活動を再開する事が出来た。

雷いかずちのオーブ

電気力を宿し、黄色に光る活力に満ち溢れた宝玉。

常に静電気を発している為、触ると痺れてしまう。

炎や氷のオーブと違い元々は存在しておらず、

天才女性科学者の白峯とばりが不破の協力のもとに開発した。

出力が強く、精神・体力共にその時点での倍以上の力量がなければ使う事は出来なかったが、

猛特訓の末に健はこれを使うことに成功した。

『クイーン』

アラクネアクイーンこと糸居まり子のことを示す異名。可憐な容姿にあわぬ冷酷さと下位の者を震え上がらせるほどの威圧感が由来でこう呼ばれるようになった。

帝王の剣

世界を支配するものだけが持つ事を許されるという伝説の剣。
だが、詳細は謎に包まれている。英語でエンペラーソードとも呼ばれる。

黄金龍

言い伝えに登場する龍。
黄金色のウロコにエメラルドグリーンの瞳という、
美麗で神々しい姿を持った伝説のドラゴンである。
帝王の剣が描かれた絵に載っていたので、もしかしたら帝王の剣
と何か関係があるのかもしれない。

ヴァニティ・フェア

知能・戦闘力ともに高い上位のシェイドが、
人間社会のそれに近い独自の社会体制を築いた結果設立された企
業組織。

構成員は幹部と幾多もの一般社員から成り立っており、
いずれも人の姿に変身する者たちばかりが集められている（人間
体をもたないものの中にはいるが……）。

企業方針は以下の通り。

- 一、忌々しい人間どもは見つけ次第殺すか痛めつける。
- 二、過去の栄光にこだわるな。我が社では結果がすべてだ。
- 三、邪魔をするものはたとえ同族でも生かしておくな。裏切り者は殺害しろ。
- 四、欲しいものは殺してでも奪い取れ。
- 五、生き残りたいなら業績を上げろ。

六、すべては甲斐崎様のために

このように、完全にブラック企業である。

あまりに苛烈でしかも役に立たないと判断されたものは捨てられるため、

一部の社員はもう限界かもしれない。

Vol.7

近江の矛

警察への不信を募らせた大阪府民たちが関西一円を守るために立ち上げた自警団。

リーダーは新藤剛志。街を守ってくれている反面警察や政府関係の施設に攻撃を仕掛ける、

銀行を襲撃する等黒い噂が絶えず、評判はあまり良くない。

トランスメタル

流れ者エスパー・伊東英機が操る特殊な金属。

持ち主の意思に応じて様々な形に姿を変え、ときには強力な武器となる。

伊東は普段、これを出前に使われそうな四角いアレのような形にして持ち歩いているらしい。

Vol.8

南来栖島

健たちがバカンスに向かった南の島。一年中暖かい気候で自然も

豊か。

科学と自然が同居している、夢のような島だ。

Vol. 9

私立天宮学園高校

風のオーブが眠っているという学園。

地元でその名を知らないものはいないとされているほどの名門校らしい。

小高い丘の上に建てられていて、街の景色を一望することが出来る。

高天原市

『たかまのはらし』と読む。東京と埼玉県の付近にある街で、野山に面した自然豊かな街。

観光名所も多く、更に名門とされている天宮学園高校があることから非常に賑わっている。

EPISODE 1…変革されし日常（前書き）

よいこのみんなへ

このおはなしには、えっちなばめんやすごくぼつりよくてきなばめんがときどきでできます。

おとうさんや、おかあさんといっしょによんでね。じゅーすやおちやをのみながらみちやダメだよ。

おにいさんとのやくそくだぞ！

12歳以上の方、保護者の方へ

この小説には頻度は低いですが、健全なエロや過剰な暴力が含まれています。

決して飲み物を口に含んだまま見ないで下さい。画面が唾や飲み物まみれになります！

EPISODE 1：変革されし日常

陰と隙間 『陰』はモノさえあればどこにも出来、人が光に当たればどこでも生み出される。いわば光があればどこでも生まれる闇のようなものだ。

『隙間』もまた、建物を建てたり道を作ったりすれば自然と生じる。この一見どこにもあるモノを通して現れ、人々を襲う人食いの怪物どもがいた。

奴らの名は……『シエイド』。この世ではない異空間に棲み、陰と隙間を介して人の世へ現れる。その姿は、禍々しい獣や無機物を模ったものなど 実に多種多様であった。

突如として現れた、人でもけだものでもない異形の怪物を前に、人々はただ恐怖に震えることしか出来なかった。

だが、忘れてはいけなことがある。ヒトは英知を持った生命体。原始時代のときから道具や火を扱い、狩猟を続けて優位に立ってきた。やがてそこからじつくりと飛躍的な進化を重ねていき、現代に到っては高度な文明と知性を持つまでに成長した。

そんなヒトが次に遂げた『進化』は 得体の知れぬ怪物・『シエイド』を力でねじ伏せて服従させ、契約ディールと呼ばれる行為を交わして常識を逸した特殊能力を得ること。

そうやって特殊能力を得たものたちは皆、超能力者になぞられて『エスパー』と呼ばれるようになった。

平和をおびやかす怪物かいぶつも戦士エスパーも、一般に広く認知され、一時は敵討ちや幼少時代に憧れたヒーローになりたい、己の欲望を満たすため 等、様々な理由からエスパーを志願するものでごった返していた。

やがて世界はエスパーを英雄視し、狂信的なまでに崇め敬うようになった。8年前ほど前に惨劇が起きなければ、今もそうだったのかもしれない。

強すぎる力を手にしたあまりに力に屈服し、人を襲うシエイドのように邪心に駆られ破壊活動や闘争を繰り返す邪悪なエスパーが現れ始めたのだ。

更に、当時最も強く有能だったエスパーが闇に染まり、人類へ反旗を翻した。

「集え！ 我が同胞たちよ！ 機は熟した。今こそこの日本を世界を闇に閉ざす時。邪魔するものはすべて……消し去れ！ 殺せ！ 砕いてしまえ！！ 世界は我と共にあるのだア！！」

出生・素性・経歴 そのエスパーは全てが謎に包まれていた。善と悪とに別れたエスパー達は、やがて雌雄を決するため、世界を懸けた全面戦争を繰り広げた。

両者共に多数の犠牲者を出し、死闘の果てに悪のエスパーたちの首魁は重傷を負い姿を消す。それに打ち勝った善のエスパーは皆、死んでしまった。悪のエスパーたちも僅かな生き残りを除き、ほとんどが息絶えていた。

後に『光魔大戦』と呼ばれるこの戦争は善側の辛勝に終わり、後世へと語り継がれることとなった。なお、今では教科書や一部文献に載っており、人々の記憶にもすっかりと刻み付けられている。

「……………んあ、うるさいなあ……………今何時だ？ ウソっ！ もうこんな時間！ バイトに遅れちゃうよー！！！」

世間ではかつてそういうこともあったのだが、とりあえず彼にそんな物騒なことは関係ない。何故なら彼は特別頭が良くなければ運動神経がいいわけでもない、ルックスだけがとりえのどこにもいるような平凡な男だからだ。

平々凡々という言葉がよく似合うありふれた高卒のアルバイト。それがこの男、東條健だ。高校を出てすぐに故郷の滋賀県を飛び出て、すぐ隣の京都で一人暮らしを始めた。

いつもと変わらぬ日常に辟易しながらも、彼は汗水垂らして頑張っていた。しかし、ひとつだけいつもと違うところがあった。

この時はまだ気づいてなかったのだが、『見えない何か』が健を見ていたということだ。物陰や隙間から、その鋭くも温かみのある眼を光らせて。

「はあ〜……元気でない」

「そう悲観的になってどうするのよ、東條くんっ」

「あ、浅田さん！ な、何でもないです。お気になさらず……」

昼休み、ため息をついているところへ先輩の浅田さんが声をかけてきてくれた。

浅田こと 浅田ちあきは、面倒見のいい姉御肌。いつも元気で明るくて、バイト先では周りを明るく照らす太陽のような存在だ。

それも、『元気があればなんでもできる！』を地で行くほどである。

「そ、そうですね。東條くんは、男の子でしょ……？ グズグズしてないで、元気出さなきゃ……」

彼女は、そんな明るい浅田とは対照的に冷静 というか大人しい、同僚の今井みはる。

このご時世に瓶底メガネ、所謂『ぐるぐるメガネ』というやつをかけており、そのままでも可愛いが、メガネを外したらもっと可愛くなりそうだ。そんな感じの顔をしている。内気だが、その反面ネットでは明るくなれるそうだ。

健には痛いほどその気持ちが分かる。そういう人も世の中にはいるからだ。彼もいつてしまえば、あまり人と話すのは得意ではない。

しかし、昔に比べればだいぶマシな方になった。だから、みはるには是非コミュニケーションが得意な人になって欲しいと彼は密かに願っていたのだ。

「ねえ、東條さん。そんなこと言わないで。もっと自分に自信を持ってみたらどうかしら」

浅田と今井に続き金髪のロングヘアと碧い瞳に、色白の肌が美しい女性がへばっている健に声をかけた。彼女は、おっとりぼわぼわしていて優しい日系ハーフの美人OL、ジェシー・西條・エレノア。

誰にでも優しく気配り上手で、健に対しても何かと親切にしてくれる。後輩や年下の職員の指導に自分から積極的に取り組んでもいるそうだ。たいへん素晴らしい人物である。こういう立派な人物に、健はなりたがっていた。

「ハイハイ、東條サンは少々ネガティブすぎるんじゃないかな？
ジェシーが言うように、もっと自信を持つとベリグーね！！」

陽気な彼は、世界中のお城が大好きな係長のケニー藤野。英語の教師を髣髴させる外見と口調がトレードマークのお調子者だが、たいへん陽気で快活。場を盛り上げてくれるムードメーカーだ。噂によれば彼もまたハーフとのことだが、日本語が少しヘタである。英

語混じりだからそう感じるのだろう。

「はっはっは！　そう落ち込むな東條くん。君はまだ若いんだから、な？」

そして、この壮年の男性が副事務長の大杉。バイト先のチーフであり、みんなの頼れる相談役だ。彼もまた心配性でまだまだ不安が多い健を支える良き理解者である。

「くよくよしててもしやあない。明日から頑張ろう……」

そんなこんなで仕事を終えて帰路に着く。肌が乾いて張り付くような寒さをこらえて、疲れた足を引きずりながら前へ前へ進んでいく。ヘトヘトになってしまったが今日も平和な1日だった。そう思ったかったのだが。

「え……ええっ……？！　う、ウソだあ……！！　しえ、シエイドが……ッ！！　なんで……」

どうも現実是非情だ。冷たい刃のように、残酷な運命が待ち受けていた。おぞましいうめき声を上げながら、化け物　シエイドが現れたのだ。やつらは、影や隙間がそこにあればいつでもどこでも現れて人を襲う。更にそいつらは、健にゆっくりと詰め寄ってくる。いくら頭の悪い彼でも、これからどうなってしまうかはすぐ予想がつく。捕食されようというのだ。この薄気味悪い怪物どもに。

「ひいつ、来るな……来るな、こっち来るなあーッ……！！」

今までこんなことは一度もなかった。街のチンピラやチーマーに絡まれたことは何度かあったが、怪物に襲われたことはまったくない。怖い、怖い、怖い！ 近寄るな。顔を向けるな。腕を伸ばすな、やめろ。やめろ。やめろ！ 心底おびえながら、かないやしないのに手のひらを向けて健は抗う。

「嫌だ……」

逃げようとしたが、路地裏の手前で足をくじいてしまった。嗚呼、なんて不幸なのだ。

絶体絶命のこの緊急事態にすってんころりんとは情けない。死にたくない。だが足が痛くて、まともに歩けやしない。立つこともままならないときた。

更に周りには薄気味悪いバケモノどもがうじゃうじゃしている。

まさに極限状態だ、このままいけば死はまぬがれないだろう。

でもやっぱり まだ、死にたくなかった。彼はまだ19歳、二十歳にすらなっていない。つまりまだ成人式に出していない。人生を満喫できてすらいらない。そう、彼の人生はまだまだこれからなの。
。

「……僕は終わるのか？ こんなところで、気味の悪い怪物に踊り食いされて、骨も残さず食われて。みゆきにコクれずに終わるのか？ 母さんや姉さんを残して死んじゃうのか？ い、イヤだ。イヤだよそんなの……」

とくに挫折を味わうことも無く、本気で死にそうな目に遭ったことも無く人生を歩んできた自分。今は本気で怖い目に遭っている。

もうダメだ。クネクネしたバケモノが集団で自分取り囲んでいる。イコール 逃げられない。

「イヤだ。イヤだ……イヤだあああああ！ 死にたくない！
まだ死にたくないよお〜！！」

自分でもわかっていた。こんなこと叫んでもどうにもならない。
これは運命だ。完全に諦めていた。現実には冷たい。

こうやって叫べば、誰かが助けにやってくるのか？ そんなはず
はない。現実はいつだって辛く厳しい。歌や童謡のように優しくは
ない。

今さら助けを呼んだって、誰にも届かない。スーパーマンでも彼
の悲痛な叫びを聞くのは無理だ。何故なら彼はアメリカ人。

日本から叫んだって聴こえやしないのだ、すごく遠いから。どう
せならこのままミジメに死んでしまおう。カッコ悪くもがき苦しむ
ぐらいなら、潔く死んでしまった方がマシだというものだ。

「ギャオオオオオオオツ！！」

完全に諦めかけて悲嘆に暮れていると突然姿なき咆哮が上
り、天から化け物どもに青い炎が降り注いだ。氷の塊も飛んできた。
健よりも遥かに大きい。それらが命中したバケモノどもは燃えたり
寒さに凍えたり、もがき苦しんだ拳句に消滅した。

「……え？ なんだよコレ、どうなってんの……」

信じられない。まさに奇跡だ。炎や氷の結晶が飛んできたかと思
えば、今度は空から白い龍が舞い降りてきた。何故だろうか？ 普
通なら絶望感を味わうところなのに 生きる希望が健の中でモコ
モコとわきあがった。

「うわあああああ！！」

しかし健が抱いた淡い希望もすぐ果てしない絶望へと変わってしまった。健を食らおうと白龍が急接近してきたのだ。神様は自分を何だと思っている。さつきから不幸の連続　　やっぱり死ねっ
ていづのか？！

そんなに自分が嫌いなのか？　なにか嫌なことでもあったのか？
？　　というか、誰だ。目の前のホワイトドラゴンさんは何者ですか
もしかしてあいつらのボス？　ボスなの？　使えない部下は殺し
てしまう、残忍なシェイドのボスなのか？

嗚呼、やっぱり何かがおかしい。さつき生きる希望がわいてきた
って思ったそばからこれだ。もういい、どうにでもなれ。暗くなれ、
目の前が真っ黒になってしまえ　　。あまりの出来事に健は混乱し、
今にもおかしくなってしまうそうだ。頭の中がメチャクチャになっ
てしまっている。

「食うなら食えよおおお！　僕は脂が乗ってないから、おいしくな
いぞー！！……ん？」

だが　　世の中、何が起きるかわからない。颯爽と現れて邪悪な
バケモノを一掃し、天から舞い降り眼前に迫ってきた白いドラゴン
はその大きな口を　　開けなかった。それどころか、『なでなでし
てください』と言わんばかりに頭を下げてきたのだ。

「ひ、人懐っこいのな。見た目はめっちゃくちゃおつかないのに」

不思議だった。そのミステリアスな見た目と愛嬌のある仕草
が腑りあわない。

雪のように真っ白な体に、ルビーのような赤い瞳という、一見す
れば不気味極まりない姿。見るものすべてを畏怖させ或いは敬おそわせ
る、見上げるような巨体。さつきの小物臭い連中とはわけが違う風

格。

威厳と高貴さ漂うそのオーラ。いろいろ怖いけどいいやつなんだな、と健はそう感じた。仕草も妙に人懐っこいし、人間臭さすら感じさせる。

何より、怖いと思っていたその姿は神々しくもあつたのだ。とても神秘的で美しい。まるで、人間の男でいうなら神秘的で男前のお兄さん、女でいうなら凛々しくてきれいなお姉さんのようだ。

「うおわっ！ こ、この光は……！？」

その時だ、ドラゴンの額に鮮やかな緑色に光る幾何学的な紋章が現れた。そして全身から青白い光を放ち。何があつたんだ。

白い光に包まれた空間はあまりにまぶしくて、何も目に映らなかつた。そしてドラゴンはいない。もしや、消えたのか？ 恐れをなして。いや、そんなはずはない。

何故なら健は一般人のうちの一人、それも飛びぬけて平凡な方に入る奴だ。そんなに恐ろしいチカラなど持っているわけがない。

もしそのチカラがあつたら、バイトなどやっていない。恐らくシールド相手に天下無双のチカラを振りかざして派手に暴れている。

とかなんとかあほらしいことを考えていると、まぶしい光は収まった。目を開けてみると、何も見えなかった。今度は白い煙が辺り一面を覆っていたのだ。

健は、「ふざけるな！ いったい何がしたいんだ？ こんなもの、絶対におかしいよ。気でも狂ってるのか！？ もし目の前に神様がいたら、一発ぶん殴ってやりたいよ！！」と、そう憤っていた。

「……ふざけて悪かつたな」

「えっ？ 今の声は……？」

「焦るでない。今から姿を見せてやるっ」

だが、このあと起きた出来事を見ていたらどうでもよくなった。
煮えたぎっていたアドレナリンも静まった。

「……ふふふ、驚いたか？ これにて契約完了だ」^{ディール}

「でい、でいーる？ なにそれ」

「知らんのか？ エスパーがシェイドを服従させて力を得るときに行う行為のことだ」

「……あ、あーっ！ そういう意味ね。シェイドってなんだっけ」

「影や隙間より現れ、人を食らう化け物どもの総称だ……って、そのシェイドである私にそんなことを聞くなーっ！」

「う、ごめんなさーい」

健が心の中である疑問を浮かべる。 神様、本当にいるなら答えてください。これも奇跡なんですか？ と。

さっきまで白いドラゴンだったそれは、妖艶な裸の美女に姿を変えていた。鮮やかな純白の長髪は膝丈か太ももの辺りまできれいにまつすぐ伸びていて、凜々しくグラデーションが美しい緋色の瞳とが織り成すコントラストは絶品の一言。

肌は透き通るようにきれいで、更に 片腕では隠しきれないほど豊かな乳房が、何よりも先に健の目に留まった。悲しいかな。彼はエツチな男だ。これも男のサガゆえ仕方が無い。

背も高く出て出るとこ出ていて、それでいてスレンダーな美人。あまりにも高身長なものだから、肩がぶつかりそうだ。そして下半身はむっちりした太ももと、カモシカのようにほっそりとしていてきれいなおみ足のバランスが絶妙。

髪の毛で局部が隠れているのも好印象だ。彼は髪の毛の長い人が好きである。とにかく ハダカだが、凛々しくて美しい絶世の美女だ！ 最後に、コスプレというべきか。それとも、本来の姿の意匠と

いづべきか？ 頭からはツノを生やし、背には一対の大きな翼を広げ、そしてしっぽを生やしていた。

「し……しかし、エクセレンスト」

「もしや褒めてくれたのか？ いやらしい目つきが少々気になるが、そう言ってくれて嬉しいぞ。 さて、お主は東條健たける、だな？」

「な、なんで僕の名前を……」

「さて……な？」

目の前のドラゴンは、腕組みしながらそうはぐらかす。片目を瞑りながらの微笑みは垂れ気味の前髪と相まって妖艶さを漂わせていた。

「……まあいつか。さつき契約完了って言ったよね。それで服従がどうかかって……えっ、僕エスパーになっちゃったの？」

「そうだ。お主も今日から、晴れてエスパーの仲間入りだ。……どうしたんだ、嬉しくないのか？ 何やら、浮かない顔をしているようだが」

「エスパーって怪物と戦う戦士のことでしょ？ 僕はそういうガラじゃないよ」

エスパーとは シェイド服従させて契約を交ディールわし、彼らから特殊能力を得て戦うものたちの総称。

その力を以って人々をシェイドの脅威から守り、戦い抜く勇敢な戦士だ。これはある大学教授の理論だが、毒をもって毒を制す。シェイドが『毒』なら、自分たちはもうひとつの『毒』。

強い毒は、ときには薬にもなる。だが、その力を持って余して悪事を働く者もいるらしい。どうしてそんなことをするんだろう 健はそのことが信じられなかった。

「それにエスパーになるための訓練なんかしたことはない。学生時代もケンカなんかしたこともなかった、よわっちいヤツだったのに。不思議だなあ……」

エスパーになるのは決して簡単なことではない。訓練に訓練を重ね、肉体・精神ともに強くなったものだけがエスパーになれる。ところがどっこい、健は完全に例外だ。仮に訓練したところで途中ですぐ投げ出してあきらめてしまうだろう。そのぐらい精神が未熟。

「そう悲観的になるな、お主には特別な才能がある。天賦てんぷの戦いの才がな。お主がそれを知らずに生きてきただけでの……」

「天賦の才？ 戦いの……？」

「ああ。私には分かる。だがお主……戦士として覚醒した以上は、シエイドと戦わねばならぬ。ろくに訓練もせずにエスパーとなった分も戦ってもらうぞ」

ドラゴンは、真剣な眼差しでそう語った。要するに健は特別らしくて、素質もあつた。だから訓練を積まずともシエイドである彼女ディールと契約できたというわけだ。

ただし、訓練しなかった分も戦わなければならぬ。そうやって当然だ。創作には苦勞せずに強くなるうとする、または何の苦勞も無く最初から神にも等しい無敵のチカラを振るうような主人公が良く出てくるが 断言しよう。そんなものは甘い。書き手が樂をしたいからそんな方針で書いているだけに過ぎない。そのような作品に意味など無い。

「これからはトレーニングを欠かさずにな。ところで……」

「なんだい？」

「服、持ってないかの？」

少し困ったような笑顔を浮かべながら、ドラゴンの女性はそう訪ねてきた。

（ヌードに気を取られて忘れてた、この人は素っ裸だったんだ。とりあえず、アパートまで案内しよう）

EPISODE 2…お父さんのゆくえ

「いきなりすまん。しかし初対面の相手に上着を貸してくれるとは、お主はいいヤツだの」

「ハハツ、困ったときはお互い様さ。それにさっきの恩返しもあるしネ」

このあと『下着くらいは穿いておけばよかつたかな』と女性は呟いた。コートを貸したので、当然ながらアパートに着くまで寒かった。今は師走の一步手前、死ぬほどとまでは行かずとも冷え込んでくる時期。

それはもうブルブル震えたし、足も同じように震えた。しかし、自分のすぐ近くにはもつと寒そうなナリの女性がいた。これが助けずに放っておけるだろうか。せめてレディーにだけでも親切にしないと。相手はハダカだったというのもあるが。

「ところで、ここはどの辺りかの？」

「京都駅の付近だよ。この近くのアパートで部屋借りてるんだ」

「ふふ、京都か。わびさびがあつていいな。私も好きだぞ。ところでお主はどこ出身だ？」

「ぼく滋賀県民」

「ということは……お主は関西人か」

「せやな、そーゆーことになるわ。大阪も行こかな、って思ったんやけど、ヤのつくオッサンたちが怖そうな氣イしてやめたんや」

そんな理由で京都にしたのか、と女性は笑いを含みながらそう言った。なぜか、律儀にネイティブな関西弁で喋ったことについてはスルーされた。話題にはなると思ったがそつもいかなかったようで、少し残念だ。

ちぐはぐなやりとりをしているうちに、健たちはやがてアパートについた。このアパート、『みかづきパレス』は4階立て。健はそのうち、2階に部屋を借りている。

「寒かったでしょ。お風呂沸かすから、どうぞあったまって」

健はせっせと風呂に水を入れ、ささっとワイシャツとジーンズを取ってくる。何も持たざるものである彼女の着替え代わりだ。

「ごめんね。男の独り暮らしだったからさ、女物の下着はないんだ。ホントごめん……」

「いや、いい。恩に着る」

照れ臭そうに紅潮しながら、女性はそう言った。

(今の横顔……なんてセクシーなんだろう)

「お主の父上も今頃は……喜んでおるだろうな」

「……ちよつと待って。おねーさん、父さんのこと知ってるの!？」

小学5年生の頃に家を出たきりいなくなった、敏腕の商社マンだった父親。多忙な為になかなか家に帰って来ず帰ってくれば面白おかしいことばかり言っていたが、家族思いの優しい父だった。そのオヤジのことをおねーさんは知っているのだ。どういう関係だったんだ、まさかエスパーってことは。

「……知りたいのか？」

「知ってるんだったら教えてよ！」

この時、彼は半べそをかいていた。涙が溢れそうなのを必死で抑えていた。本当はすぐにでも泣きたかった。だがまだ泣くには早い

気がしてならない。

「今後ずっと立ち直れなくなるかもしれないねぞ。それでもよいか？」
「それでもいい。教えてくれ、オヤジのことを！」

いつになく健は真剣になった。不思議だ、白髪の女性の方も話すのをためらっているように見えた。なぜだ？ 元々、この人はヒトではないのに。ヒトならざる者・シェイドなのに。まるで人間の心と理性、そして優しさを持っているように感じられた。

「……承知した。すべて話そう。お主の父上……明雄は、お主が幼い頃に何も言わずに出ていったきり、行方不明となった。ここまでは知っているな」

「うん。確か中学に入ってしまった頃だった」

「……明雄はエスパーだったのだ。お主ら家族には、危険に巻き込まぬよう『ビジネスマン』とウソを言っていたようだがの」

「え？ ……父さんが……エスパー！？ ってことは、あのとき契約できたのは……」

「目敏いのう。察しの通りだ」

彼はようやく気がついた。自分が女性と契約ディールできたのは父からエスパーとしての血を引いていたからだだったのだ。そうでなければ、健は今頃エスパーにはなれていないし、あの時バケモノどもに食われてそこでおしまいだった。

「ヒトの心に善と悪があるように、エスパーにも善し悪しがあつての。明雄は善きエスパーだった。私は元々ヒトを嫌っていたが、明雄は傷ついた私に優しくしてくれた。そんな明雄の優しさに触れて、私は変わることができた。明雄とシェイド、そして悪しきエスパーの戦いは激しくなっていた。やがて、悪党どもを統べていた

闇のエスパーに……明雄は殺されてしまった……。すまぬ、私が知っているのはここまでだ」

「そうだったのか……！ 道理でなかなか連絡をよこしてくれなかったわけだ。死んでたら、あの世に逝ってたら電話なんてできるわけ……！！」

遂に事実を知った。その時にはもう泣くのを我慢できるような状態ではなかった。限界を迎えた健は思い切り泣き崩れた。声が枯れるそのときまで。

「……どうして？ どうして父さんはどうして何も言ってくれなかったんだ？ 家族みんなで相談に乗ってあげられたのに、なんで一人でそんな辛い思いをし続けて……うっっ！」

「これ、情けないぞ。大の男がくよくよしてどうするんだ？ 私のおっぱいでもしゃぶって落ち着きなさい」

「からかうなよお。僕は赤ちゃんじゃない……」

「……なら、これで涙拭いて、鼻をかめ」

泣きじゃくる健を慰めようとからかい半分で、女性は箱ティッシュをとってきた。少しばかり嫌な気分だった。人が泣いてるときにからかうなんて不謹慎じゃないか。と。けれど、あとで彼は気付いた。彼女は冗談を言って、健を笑顔にしようと気を遣っていたのだ。口先と見てくれだけではない、本当に主人想いの優しい女性だった。

「……あ、ありがと。ところで……」

「なんだ？ 遠慮せずに言ってみよ」

「おねーさん、なんて名前なの？」

「……【アルビノドラゴン】というシェイドだ。個人としての名前はないがの。言うなれば、名無しのごんべえさんのようなものだ」

「そっか。じゃあ……アルヴィーなんてどう？」

一瞬空気が固まった。すぐ元に戻ったが。

「またえらく、かわいらしい響きだの。もつとこう、中学生がつけそくなネーミングでもよかったんだが……気に入った。採用だ！」

悲しい空気が一転、瞬間に明るいものへと変わっていった。初めて同じ屋根の下で共に飯を食べ、共に一晩を過ごしたその翌日。

「朝が来たぞー。そろそろ起きなさい」

「ねむねむ……あと、五分」

かくして、白髪の女性……改め、東條健とアルヴィーお姉さんの共同生活がスタートした。

EPISODE 3：共同生活！

「健うん、京都そっちに行つてからだいぶ経つけど、元気にやつてるかあ
〜?」

このおっとりした雰囲気の声は、健の母だ。名前は東條さとみと
いつて、年齢を感じさせないほどの美人。しかも優しい。今でもた
びたび周りからうらやましがられる。隣の芝は青く見えるというか
やつだろつか。「僕って結構、恵まれていたりして」「などと、
健は心の中でそう思っていた。ちなみに胸が大きいそうだ。

「うん、僕やつたら元気してるで。そっちはどない?」

「綾子もお母さんも、とくに問題ないで。綾子にかわるし、ちよつ
と待つててやあ〜」

今綾子という名前が聴こえたが、綾子というのは健の姉だ。男勝
りで少しきついいところもあるが、基本的には家族思いのよき姉であ
る。アルヴィーと性格がやや似ているが、胸はアルヴィーの圧勝だ。
あんなにポリウム満点の特盛りおっぱいは、漫画やアニメ以外
では中々お目にかかれない。あれはいいものだ。まさしく『貴重な
おっぱい』だ。天然記念物にも匹敵する。

「ハーイ 健、元気そうやなあ。市役所勤めの公務員なんやて?
それすっごーい!」

相変わらず、姉はテンションが高い。いや、自分がしけているだ
けか? ジメジメしているのは嫌だ。どちらにせよ湿気は取らなけ
ればならない。テンションを姉とあわせねば。

「公務員ゆつてもバイトやけどな……」

「バイト代高いんでしょー？ ま、がんばんなさい！ 正式採用されたら、もっとお給料アップは間違いないやろーしな！」

「ラジャー！」

「じゃあな、自慢の弟よ お母さんと一緒に待ってるから、また大津に帰ってきていちゃ！」

「またねー、いつも明るい姉さん そして、大好きな母さん！」

そういつて健は家族間通話を終えた。今使っている携帯は？ H A R D B A N K ? というメーカーの製品で、なんと家族間通話とメールが無料なのだ。こいつはすごい。しかし、だからといって使いすぎはいけない。

というのも、ついつい彼は携帯でインターネットをしてしまうのだ。お陰で携帯代が高くつく。既にノートパソコンがあるのに、何をしているんだろう。自重すると、健は自分を戒めた。

「さて、と。電話も終わったし……アルヴィー、バイト行ってくる！ 留守番よろしくね！」

「行くのは良いがちいと待て！」

そう言っアアパートを出ようと玄関で靴を履こうとしたら、アルヴィーが目の前に瞬間移動した。ワイシャツにブルージーンズ姿だ、ちなみにノーブラなので脱げば上半身裸だ。パンツは大家さんからお古をゆずってもらったので、下半身は大丈夫そうだ。

つくづく大家さんが女性でよかった。もし男だったら大変だっただろう。間違いない。健自身もなるべく、あられない姿の女性は見たくない。人前では、の話だが。

「待てといたら待つんだ。人の話はちゃんと聞かねばならんぞ」「えっ、いや、ちょ……待てません！ 通勤電車もバスも、一秒の

遅れがあとで響くのっ!」

「そうは言つが、もし通勤中にシェイドが出たらどうするんだ?」

「……確かにそうだった!」

なんとということだろう。彼はすっかり忘れていた。シェイドはそこに陰や隙間があれば、どこからでも現れるということ。たとえ日中だろうが夜中だろうが、おかまいなしにだ。そんなのが突然襲つて来れば 死あるのみ。何も持たざるものならそうなる。

「それに戦う準備も出来とらんだろうに。私に留守番を頼んでから先の事は考えてなかったのか? ……いま、この部屋には私ら以外誰もおらぬか?」

「え? ここには僕とアルヴィーだけだけど……何するの」

「しばし待たれよ。ふんツ……くっ!」

「ちょ、はがしたとこ赤くなって……!」

「大丈夫だ、問題ない」

「え、エルシャダイ!?!」

少しばかりドキドキした。アルヴィーがおもむろに上着を脱ぐと、ウロコをはがして健に与えたのだ。ヒトと同じように赤い血が出たが、すぐに傷が塞がった。かさぶたが出来たとか、そんなチャチなものじゃ断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗をあじわったウロコだけに。それにしても色っぽかった。ノーブラに裸ワイシャツで、それにくわえて局部を前髪で隠すとは規制が厳しい。だが、やはりおっぱいはいいものである。

「我々シェイドは、契約者^{エスパー}に体の一部を装備品として提供することが出来る。いま渡したウロコはお守りみたいなモノでの。シェイドの居場所を知らせてくれる。念のため、一応持っておいてくれ。それから、もし何かあったときは私にケータイとやらで連絡くれ」

だ。父親を亡くした健にとってはまさに父親代わりのような好人物だ。というか、この役所には いい人しかいないのではないだろうか？ こんなに恵まれた職場も、そうそうない。

「おーし、やるぞおー」

「腹減ったなあ。なんか買って帰ろうかな」

仕事が終わりに、コンビニへ寄ろうとする健。鼻歌交じりでスキップしていると 道行く通行人にぶつかった。

「アイタタ……もおっ！ ちゃんと前見て歩きなさいよ！」

「はわわわ！ す、すみませんでしたッ！ ……あれ？」

「何よ！ ……あれ？」

健がぶつかってしまったのは見覚えがある同年代の少女。歯を食いしばり、頭を掻いて痛がっていたがすぐに立ち上がって健と向き合った。眉を吊り上げて憤慨したがすぐに表情が和らいでいった。

「……あっ！ もしかして健くんじゃない？ さっきはゴメンね」

「……そういう君はみゆき！ みゆきじゃないか！ こんなところで会うなんて奇遇だなあ〜！」

「えーっ、そうかなー。うふふ」

彼女は、健の幼馴染みである風月みゆきだった。

優しく笑顔の明るい、純情な性格。藤色の腰上まである髪をサイドテールでまとめており、瞳は水彩画のように鮮やかな赤紫色。

そして、白くてつるつるした肌。

ただでさえ可愛らしい彼女だが、今日は満月に照らされて、また一段ときれいに見える。服は黒とグリーンのアーガイルのワンピースを着ているようだ。

そんなみゆきは年頃の女の子らしいおしゃれ好きな一面がある。その証拠と一緒に遊びに出かけるときは、いつもいろんな服装で来ていた。

更に幼稚園や小学校の頃から、クラスの中でも人気者だった。

頷ける。とても頷ける。実際、みゆきは見た目よし器量よしで、優しくて気配り上手の優等生だった。健は幼い頃からそんな彼女に自分には無いものを感じ　心奪われたのだ。

「この頃調子どう？」

「まあまあかな。みゆきはファミレスの仕事、どう？　うまくいってる？」

「順調よ！　ほとんどホールの仕事だけだね」

「いいなあ……僕、なかなか調子がすぐれないんだ」

「大丈夫だって！　健くんならきつと何とか出来るわ」

歩道を歩きながら二人は世間話をする。だがもう周りは暗い。途中で腕時計を見ると、もう18時前になっていた。本当ならもっと話をしていたいが、そろそろ帰らなければ。

「……いけない！　話してたら遅くなっちゃった」

「えっ！　ごめん……ちょっと、のんびりしすぎちゃったね。でも仕方ないか」

「そういうことだからそろそろ帰るね。じゃ、また！」

「バイバーイ！」

健は適当に話を切り上げ、久しぶりに会ったみゆきに手を振って

別れを告げる。といっても、最後に顔を合わせてから1週間も経っていないが。

EPISODE 4 : まるでダメなおにーさん

「実は昨日ねー……」

「す、すごーい！」

「でしょ、でしょ？ それでね……」

昼休みのことだった。一仕事終えて昼食にがつついていると、先輩の浅田達が何やら世間話をしてワイワイ盛り上がったのだ。何の事を話しているのか聞きに行ってみたら。

「浅田さん！ それにみはるさんとジェシーさんも。何の話をしてるんですか？」

あとで苦しむハメになる事など露知らず、食後すぐに駆け寄りながら健がそう言う。すると3人も嬉しそうな表情をしながら、ほぼ満場一致でこう言うてきた。

「昨日の晩、白いドラゴンが出たらしいですよー！！」

と。

「あ、なんだ。そっちな……」

健は胸を撫で下ろした。やはりアルヴィーはあの時、みんなに見られていたのだ。何しろ、本来の姿でいるときの彼女は巨大だ。図らずも目立ってしまう。

そんな彼女が降臨する様子をカメラは捕らえた、ということではフアイナルアンサーだろうか？ だとしたらまさに特ダネ！ 雑誌や報道で取り上げられても違和感は無いのではないか。

「髪ブラでヌードで、セクシーダイナマイトなおねえさんの方じゃなくてよかったです」

やらかした。でも事実だ。しかしどつちにせよまずいことをした。彼の唐突な発言が原因で、場の空気は一気に凍りついてしまったのである。あまりに寒く、どこかで誰かが悲痛な叫びを上げながら氷漬けになっていそうだった。

先輩方は3人とも引いているような視線を俺にぶつけていた。

やめて、そんな目で見ないで！　そ、そういうつもりで言ったんじゃないありません。

周囲の冷たい視線が痛い中、必死で謝った。しかし、謝りすぎがたたって周りの人々はますます困ってしまった。

またも自分の悪いクセが出てしまったようだ。昔頃からこうなんだよね、ダメなところは直さないと……。

「はあ……」

そして、退勤時間が訪れた。職場のみんなは落ち込む健を励ましてくれていた。だが肝心の彼はこの体たらくだ。しきりにため息をついている。

更には空気を読めなかった自分を戒めるため、人の話を聞いていないフリをする。でも実際こんなことをしてはダメだ。人の話もろくに聞けないやつはクビにされるのだから。

「そう落ち込まないで、東條さん」

しかし、そこへこの事務室の女神であるジェシーが健にそっと寄り、やさしく声をかける！

「誰にでも失敗はあるわ。次からその失敗を活かして、成功に変えれば大丈夫ですよ」

癒される。健は心の底から感じていた、心地よいゆらぎと安らぎを。自分のようならくでなしにも慈悲をくださるとは、あなたが天使か。いや女神様か。

女神の微笑みの破壊力にはすさまじいものがあり、現金にも健はすぐに立ち直った。こんなに美人でかわいい女性が、忙しい中わざわざ声をかけてきてくれたのだ。

たとえ自分がそんな気分ではなくとも、ここは笑顔にならなければ失礼というもの。あたたかい笑顔には、誠意を持って笑顔で答えねばなるまい。それが常識だ。鉄則だ。ルールだッ！

「あ、ありがとうございます！ 恩に着ます、ジェシーさん！」

抑えきれない高揚感を抱えて健は全力で職場から出る。すぐさまバス乗り場へと向かった。腹が減った彼は、今日の晩メシをどうするか考えようとした、だが 残念なことに

すぐにそんなことを考えられるほど彼の頭は回らない。だって、バカだもの。仕方がない。

（ハッ、待てよ。ここはひとつ、みゆきがバイトしてるレストランへ行こう。アルヴィーにもそう連絡しようかな……）

苦し紛れに健はそう思いつく。嫌らしくにやけながらアルヴィーの携帯電話にメールを打つと、彼は早速みゆきが働いているレストランの方へと走っていった。

「ふわぁ〜……何か、おもしろい番組はやってないのの。おやつのおむすびせんべいも、もう底を尽きてしまったぞ。……ん？ メールか、健からだな。……なにッ!？」

FROM: 健

TO: アルヴィー

「ごめん、今日みゆきがバイトしてるファミレスで食べて帰ってくる。

「おいら晩ご飯いらないから、てきとーに何かその辺のもん食べといてね。」

「またおかず買ってくるし安心したまえb」

「あ、みゆきつてのは僕のカノジョなんだ！ byあなたのご主人様

「あやつ、カノジョ持ちだったのか……まあそれはおいといて。あとで説教攻撃をおみまいしてやる!」

「この時彼は気付いていなかった。良かれと思ってやったことが、かえってアルヴィーの機嫌を損ねてしまったことに。」

「ご注文は以上でよろしかったでしょうか?」

「以上です」

「それでは少々お待ち下さい」

ファミレスに着いた健は笑顔で店員にそう告げる。店員の女性も清々しそくに笑っていて、たいへん気持ち良かった。彼が今来ているのは、ファミリーストラン『トワイライト』。全国にチェーン展開しているほど人気のレストランで、お客さんも多い。

ちなみに彼は、なけなしの金を払いハンバーグとライスのセットを注文。ドリンクはメロンソーダだ。これがまたおいしくて病み付きになってしまつのである。しかし問題はそんなことではない。ここへ来ても必ず、みゆきに会えるとは限らない。そのぐらい彼女は忙しい。常識を逸する働きぶりゆえに将来を約束されている。

「お待たせしました、ハンバーグとライス、ドリンクのセットです」

店員の女性は、手馴れた手つきでせつせと注文したセットをテーブルへ置いた。『やはりプロは違うな』と、健はしみじみ感じ取った。

「他にご用件がありましたらお伝え下さい」

「あ、あの……」

「なんでしよう?」

『?』マークを浮かべ、きよとんとした顔で店員は首をかしげる。

「ここで、風月みゆきさんって人は働いてませんか?」

「そのみゆきさんと同じ人かどうかは知りませんが、最近新しく入ってきたアルバイトの女の子がよく働いてくれて」

間違いない、ここだ。ここに彼女は勤めている。この前みゆきは『トワイライトで働いてる』と言っていた。同僚、いや先輩に当たるウェイトレスからそう聞けた以上ここで確定だ。

「あ、ありがとうございます！」

「？ いえいえ、どういたしまして〜」

「さあ、メシ、メシ！」

さて、ようやくランチタイムが訪れた。健は早速がつりハンバーグに食らいついた。舌をやけどしたので、肉をきっちり食べてから水を飲んだ。

メロンソーダと水は別なのだ、他のドリンクもそれは同じ。腹いっぱい食べ終わり、無事帰宅。スキップしながら玄関のドアへ行き、開けてみると？

「お帰りなさ〜い ……待っておったぞ、健！ お主におしおきをするこの時をな！！」

「あ、あ、アルヴィー……さん？ ななな何故そんなに怖い顔をしていらっしやるんです……か？」

腕を組んで玄関で仁王立ちしていたアルヴィーが、健が喜色満面で部屋へ入ることを許さなかった。頭から角を生やしていて、まるで鬼のようだった。更に殺し屋のような鋭い視線でこちらを睨んでおり、余裕で体が震え上がった。

「なんだあのメールは？ いったいどういうことなのか説明しろ！！」

「め、メールのことで怒ってんの！？ あ、アレは、その……」

「やかましいわ！ こっちへ来い！！」

「うわなにをするやめ……」

おしおきと称して健を部屋の中へ連れ込み四の字固め。彼女は細腕ながら力が強く、ホネが折れる。どころではなかった。全身に激痛が走ってホネが砕けてしまいそうだった。

それから休む暇もなくコブラツイストへ派生する。頼むから息をさせてほしい。だが彼女はかんかんに怒っている。話など今は聞いてくれそうもない。トドメに彼女は健を押し倒し、その大きなおっぱいを顔面に押し付ける。押し付ける。押し付けるッ！

「そ、それ以上はらめえええええええええええええええええッ！！！！
死んじやうつうつうつうつうつウ！！！！」

「ホレホレ、これでもか！」

ああ、至福のときだ。この巨乳に顔を埋めたまま死ねるのならば本望である。

EPISODE 5：初陣

冗談交じりで「激しい責めだった」とか寝言をほざいたら、健はアルヴィーにほっぺをつねられた。割とエロスな印象だったが、こういうところは意外と真面目なようだ。

「……健、シエイドだ！」

それから仲良くじゃれあっていると、突如『ピタツ』とアルヴィーが何かに気付いたように真剣で鋭い眼差しになった。どうやら、シエイドが出たらしい。

ちょうど同時刻にアルヴィーから貰ったウロコも、シエイドを感じ知して『ピピピ！』と、激しい音を出していた。懐かしの防犯ブザーそのまんまな音だった。興味本意で間違つて押したら、エライことになった小学校時代を健は思い出していた。あの時は大変であった。

「……あのさ、これ、人前で鳴ったら目立たない？ マナーモードとかないの？」

「すまん。そこまで親切な設計ではないんだ。全自動の防犯ブザーのようなものだと思うてくれんかの」

まあいいかと一人納得してアルヴィーと一緒に窓の方へ行き、ベランダから思い切り飛び降りた。とても勇気の要る行為だ、普段はこんなことできない。だが今は緊急事態、だったらやるしかないだろう。

ただ、足があとからガクガクしてきた。これがまた相当堪えたか、感覚がシビレてまともに歩けない。一方でアルヴィーはとくに様子に変化はなく、平気そうだった。さすが人外娘、と言うべき

か。それとも言わざるべきか。 。 ともかくにも今はシエイドを討伐するのが先だ。 反応を追って健とアルヴィーは疾走する。

「ば、 パパ…… ママ…… たすけてえええええっ！！」

駆けつけた健の目に飛び込んできたのは、寄つてたかつて幼い女の子を襲っているシエイドだった。 忘れもしない、あのゾンビさながらの不気味でにぶい動き。 気味の悪いうめき声。 。そして死を前に味わった恐怖。

「…… 昨日のヤツらの生き残りか！？ ともかく、 あの子を助けな
いと……」

「実戦は今回が初めてだろう？ いくらエスパーになつて身体能力が強化されたとは言え、素手で挑むのは無謀というものだぞ。 備えあれば憂いナシ、だ。 これを使え。 あと、これも」

飛び出ようとした健をアルヴィーが制止した。 『くいつ』と右腕を上げると、

彼女の前に長剣が現れた。 見るからに重たそうだが、振り回せるだろうか？ などという心配をよそに、

「お、重たっ！ く……ない？」

アルヴィーからそれをトスされた。 いきなりすることに戸惑いながらも受け取ると、見た目に反してその剣は意外と軽かった。

よく見ると刀身にシルバークレイに青いラインが入っていてカツコ良さげだ。 それに加え、赤と青のビー玉のようなものも2つ渡された。 これはいったい何だろう？ これから教えてもらえるのだろうか。

「それは長剣エーテルセイバーだ。そう私は呼んでおる」
「ふんふん、エーテルセイバーね……『大空の剣』ってどこか」
「本来1メートルの鉄骨と同じくらいの重さなのだ。私と契約する前だったら、今頃腕を壊していただろう」
「何そのヘビー級！ そんなのありか！！」

彼女からそう言われたら、健の両腕に急にズシツとした感覚が襲ってきた。やはりこれは重たかった。1メートルもある鉄骨など普通は持ち上げられるわけがない。それに健はブルーカラーではない。確かに背は高いが、工事現場でいつも汗水をたらしている屈強な男子ほどの腕力はない。まさかこれで戦えというのか？ それはない、いくらなんでも酷すぎる。

「だが、今のお主なら話は別だ。バットや木刀と同じ感覚で使えるだろう！」

「……OK、分かった。とりあえず振り回してみる！」
「誤って子どもを切ってしまうぬようにな」

アルヴィーに見送られ、健はシェイドの群れへと飛び込んだ。剣術の達人じゃないから、どう振ればいいかわからない。とりあえず棒切れを持ったときのようになり任せに振り回し、同じく力任せに腕をふりかぶってくるバケモノどもを片っ端から叩っ斬る。

何かなんでもあの子には近づかせない。あの女の子は、この前の健とおなじだ。戦う力なんか持たない一般人。だからこそ、同じ目に遭わせたくない。死の淵に立たされた時の絶望感を、あの辛さを味わってほしくない。怖い目に遭わせたくない。だから守りたい。何が何でも！

「寄ってたかって、まだ小さな女の子を　　うおおおおおおお

ッ！」

「今だ、カウンターを決めてやれ！」

「てやつ！」

腕を振り下ろしてきた相手を弾き、そこから切り上げて怯ませる。更に追い討ちをかける。このゾンビのようなクネクネした奴らは、思っていた弱かったみたいだ。

気付けばもう最後の一匹だった。これもエスパーの力なのか？
だとしたら、相当なパワーだ。正直、これほどの力を手にしてしまったことに驚嘆している。彼は本当に、目の前の女の子を助きたい一心だった。何も分らず、分からないなりに刃物を振り回してただけなのに。

「危ないから下がって！ アルヴィー、この子を頼む」

「あいわかった！」

女の子をアルヴィーに託し、神経を尖らせて最後の一匹に集中する。あとはこいつだけだ。こいつさえ倒せば、あの子を救える。恐怖も消えてなくなる。

「……健、よく分からぬかもしれんが一応聞いてほしい。私は炎と氷……2つの属性を持っている」

「炎と、氷……」

「2つとも相反するものだ、うまく使い分けて戦ってくれ。属性を変えるときは剣の柄の穴にオーブを入れるといい」

「お、オーブ？ 6つ集めるとラーミアが復活するアレ？」

「いや、そんなに大層なものではないぞ。さっき渡したビー玉のよくなヤツだ」

『OK。だいたいわかった』と親指でサインを出し、残ったバケ

モノの懐へ飛び込む。穴には何もはまっていない　　ということは今今の属性は何もなし。ならば、物は試しだ。赤く光るヤツを入れてみよう。

江に一つだけ開いた穴に赤色の『オーブ』をはめると　『ボウツ』と火がくすぶり、瞬く間に立ち昇った。刀身もそれに呼応して真紅に染まった。金色に光るラインがアクセントになっており、勇ましさを感じさせる。柄は、どぎつくも美しい猩猩色だ。紅蓮の炎を纏う刃。それに切り裂かれたバケモノの体が炎上し、如何とも表現しがたいうめき声を上げた。

「す、すーい……」

健は思わず感心してしまった。仕方ない、こんなのははじめてだから。だが、今はそんなこと考えている場合じゃない。目と鼻の先にいるバケモノを倒さねばならないのだ！

「この青いのが氷だな？　よし……！」

赤い『オーブ』を穴から取り外し、代わりに青い『オーブ』を入れた。猛々しい深紅に染まっていた剣は、瞬く間に落ち着いた青白い輝きを放つ氷の刃となった。

刀身に走るラインは爽やかなミントグリーン、柄はクールな紺色だ。さつきとは対照的な雰囲気だ。全体的に冷静で落ち着いている、そんな感じがする。それに今のこの氷の剣を握っていると何故だか気分が落ち着く。

「せえええいやああああああアつつつ！！！！」

力いっぱいその氷の剣を振り下ろす。力任せに無理矢理振りかざしただけだがその威力は絶大だ。敵は大きくよろめき、あまりの冷

たさに凍り付いた。これでもう身動きひとつ取れないだろう。こっとなればあとはトドメを刺すのみ。

「よし、トドメだ健！」

「オツケー！！」

これもエスパーになった賜物たまものか？ 運動神経はいまいちパツとしなかったのに、自然と体がきびきび動いた。空高く跳躍していったん宙返りし、そこからジャンプ斬りを繰り出す。

「うおりゃああああ

ッ！」

凍結、そして 粉碎。ゾンビのようなクネクネした怪物は、碎け散って粉々になった。その時豪快に飛び散った破片は、美しかった。狙ったわけではないが、どことなくカッコよい感じに決まっていた。そう、自分で言うのがおこがましいほどに。

「さ、もう怖くないよお嬢ちゃん。パパとママのところへ帰ろう」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「ふふふ。私も鼻が高いぞ」

敵は全滅。これで顔をこわばる必要はない、やっと笑顔になれる。さっきまで泣いてた女の子は、もうすっかり泣きやんでこやかに笑っていた。アルヴィーもまた、クールに暖かく微笑んでいた。哀しむ必要なんかない、みんな笑顔がいい。

どんなに辛い状況でも笑顔を保てば、きっと救われると そう健は信じている。根拠はない。けど、自信はある。小さい頃から、そうやってどんなに辛い時も乗り越えてきたからだ。ただ単に気持ち悪くヘラヘラするのはわけが違っただ。

「ねえ、おねえちゃん」

「お……お姉さん？ わ、私のことかな」

照れ臭そうにするアルヴィーは可愛い。どちらかと言えば色っぽくてかっこいい見た目に反してたまに可愛いとこ見せるとは、健にとってはどストライクだ。元々、彼は年上が好きでスタイルのいい人も好きなのだが、こういう気風のいいお姉さんは嫌いではない。むしろ好みだ、誇ってもいいくらい。

「おねえちゃんはさつき、おにいちゃんになんて言ったの？」

「ああ、さつき言ったアレだな。お姉さんはあのお兄さんに、戦いのことを話していたんだ。君にはちょっと、難しかったかな」

不思議だ。自分と話してるときより口調が優しい。同じ女性が相手だと優しくなるのだろうか。しかも口調だけではなく、雰囲気もどこが違う。

まるで年下の子どもをあやすお姉さんのようだ。ますます『美女に化けた化け物』とは思えなくなってきた。化け物と呼ぶにしても人間味がありすぎて容易にそうは言えない。

それこそ失礼に値する行為だ。仮に自分が、美男美女に化けたキツネやたぬきを目にしても化け物とは言い切れないだろう。

なぜなら自分は臆病者で、思い切ってそんなことが言えるタマではないからだ。それにたぬきやキツネは好きだ。前者は置物とかそばとかで世話になっているし、後者は耳とか尻尾がとくにたまらない。和服姿ならなおさら良し。

「ありがとう。おねえちゃんもおにいちゃんも、かっこいいよ！」

「うふふ、ありがとう」

こんな風に健たちは道中楽しく笑いあい、話し合いながら女の子

を家へ送り届けた。ご両親もとても嬉しそうだった。すごく気持ちが良い。これが人助けをするということか。

それから健は、戦いが終わった為ひとまず剣とビー球と盾のセツトをアルヴィーに返した。するとどちらにも光になって、アルヴィーの腕へと吸収されていった。なんともいえない不思議なつくりである。アルヴィーの力が具現化した。とか、そういう類のモノなのかもしれない。

「…………ツ」

だが、二人に束の間の休息などらせないかのように地面から振動が伝わってきた。どこからか轟音が鳴り響き、危機感を募らせる。そして、ウロコのお守りが強く反応していた。

「なんだ!」

「アルヴィー、もしかしてまたシェイドが……?」

「そのようだ。……急ぐぞ!」

こうなった以上まだ安心できない。反応を追って、二人は街中を走り抜ける。やがて、アーケード街をまっすぐに抜けたところにある大きな広場に出た。

「いやあああああ!」

先程の幼い子供とは違う、聞き覚えのある女の子の悲鳴が耳をつんざくように響き渡る。まさか、この声は? 悲鳴が聞こえた方へ向かうと、そこにいたのは。

「こ、来ないで! こっちに来ないで!」

悲鳴を上げたのは健の幼馴染みのみゆきだ。どうやら彼の力は当たっていたらしい、今の時間帯から察するにバイトからの帰りだろうか？

「みつ……みゆきッ！」

「みゆき？ まさか、あのおなごがお主の……いや、今はそんなことは関係なかったな」

「た、健くん……？ それに、誰……？ 気をつけて、かい……ぶつ……が……」

たどたどしくそう呟くとみゆきは気を失った。彼女の体を抱えながら二人が前を振り向くと、みゆきを襲っていた巨大な影がゆつくりとその姿を現した。

「で、でか……ッ！」

「気をつける健……、こやつはかなり手強そうだ！」

みゆきを襲っていたシェイド、それは 巨大なサソリのような姿をしていた。体は青紫色で全身が鋼のような分厚い外殻に覆われており、何から何までデカイ。推定で4メートル以上はあった。

健もアルヴィーもこの大サソリの足の上にすら届かなかった。

何から何まで圧倒的だ。勝てる気がしない。今日は初陣だ。なおさら自信がない。できれば勝ちたいが、うまくいけるだろうか。そして、みゆきを救えるだろうか。とにかく、今出来る事をやるしかない！

EPISODE 6 : 雷光ほとばしる

「……行くぞ！」

健は啖呵を切ってサソリの怪物に向かっていく。こうして近付いてみると、遠くから見たときより更に大きく感じる。トンでもない大きさだ。下手をこけば踏み潰されてしまいそう。

隙を見ては斬ってかかるが、いくら斬ってもヤツの甲殻には傷ひとつ付かない。どうやらあまり通じていないようだ。アルヴィーがそう危惧していたように、こいつは手強い。

確かにさっきの最下級らしいゾンビみたいなクネクネとは、強さも大きさも桁違いだ。どうすればいい？ どうすればこいつに勝てるのだろう。頭を捻る必要があるようだ。

「むう、何もなしは通じぬか。健、属性を変えてみる。ひよっとすれば効くかもしれんのだ」

「わかった！ じゃあ、さっきの氷で……」

アルヴィーから推奨されたように属性を変え、再び攻撃を開始する。この氷の剣が、あのデカブツに効くといいのだが。

今戦っている大サソリはその巨体のためか動きは鈍いが、攻撃は激しくて重い。故に斬りかかるにも一苦労だ。機敏に いや、他人から見れば遅いかもされないが、機敏に攻撃をかわしながら攻撃をくわえていった。

「ウギヤー！ てがあああああああああああ！」

「手のしびれに気を取られてどうする！ マジメに戦わんか、これは遊びではない。れっきとした命のやりとりなのだぞ！」

言われてみればそうだ。この状況で自分は一体何をしているのだ？ 落ち着け、冷静になれ。アルヴィーが言うとおりこれは遊びなどではない、互いの命と命を懸けあった殺し合いだ。故に真剣に向き合わねばならない。

「そ、そうだ……まじめになれ、僕っ」

ハツと健は我に返り、オーブを入れ替える。冷やしてもダメなら熱しようと思い、炎のオーブを装填。高く跳躍し、ちょうど尻尾の手前まで届いた。

「うらあ　　ッー!!」

そして、炎の剣を向かって真下に剣を突き出す。こいつで脳天に直撃だ。通じるかは分からない、繰り出したのは今が初めてだからだ。効果抜群のダメージ2倍、もしくは急所に当たってダメージ2倍であってほしい。そうなれば、相手はひとたまりもないはずだから。

「どうだ!」

しかし、大サソリはぴたりとも動じない。背中が急所だと勝手に思った自分が浅はかだった。容赦なく、尻尾による突き出しが僕を襲う。突き飛ばされて健はグロッキーになった。合掌。

(こんなことなら訓練しとくんだった。アルヴィーも明日からバシ仕込んでくるんだろうな、僕ってかっこわるい)

「健！ 健！ しつかりせいッ！」

わからないなりに突撃した挙句反撃を受けた昏倒した健。みゆきを抱えながら彼に駆け寄り寄るアルヴィー。何度も揺り起こそうとするも、案の定健は気を失っていて目を開こうとしない。

「困ったのう……」

本当なら自分が戦ってやりたい所だが、それでは彼の成長のためにはならない。それに今は彼のガールフレンドを介抱していて手が離せない。野ざらしにしたらシェイドに食われて死んでしまう。なるだけ自分の力でシェイドを倒させたい、しかし当の主人は絶賛気絶中だ。何か他に、手はないのか。

「誰かは知らねえが、お困りのようだな」

そんな折、音程の低い声が聴こえた。かと思えば声の主がすぐに姿を現した。髪は黄褐色で肌はこんがり焼けた小麦色。服は紺色のジャケットに白ズボン。見たところ口は悪いが、雰囲気から察するに健より年上で熟練しているのだろう。

彼は左手にランスを、右手にバックラーを装着していた。装備も整っている上、えらそうな口ぶりだがある程度熟練した雰囲気を見せている。

「てりゃあー！」

風のような、いや風そのもののような速さで動き回る男に、大サソリは翻弄されるばかりだ。すれ違ったびに攻撃を受け、気がつけば大サソリは傷だらけだ。ランスの男は変わらず小ばかにするよう

に超高速で動き回り、遂にトドメを刺そうとする。

「そろそろトドメと行くのか……」

ランスを真つ直ぐに相手へ向け、稲光が穂先へと集中する。雷光のように、いや雷光そのものになって鋭いランスを突き出し、前方に衝撃波をまといながら突進して貫く。

大サソリは大爆発、木っ端微塵に弾け飛んだ。男はランスと盾をいずこへ仕舞うと、清々しく笑いながらアルヴィーの方へ歩いてきた。

「よおー、姉ちゃん。あんたシェイドだろ。そしてこのへボのパートナーなんだろう?」

「ああ、そうだ。そういうお主はエスパーの兄ちゃんだろう?」

「……くっ、何故わかった!？」

「簡単なことだ。お主がヒトに化けたシェイドを気配で見抜けるように、私もエスパーとそうでないモノを気配で見分けることができる。たったそれだけのことよ」

得意げにアルヴィーの正体を見抜いた男だったが、それは向こうとて同じ。アルヴィーにも男がエスパーである事はお見通しであった。

そもそも、どう見てもあの超スピードとあの雷は、常人が出せるものではない。男は悔しがるように歯ぎしりしたが、一方でアルヴィーはクールに笑っていた。

「それはそうとひとつ言っておくが、こいつまともに訓練してないだろ? 背えばつか伸びててあとはガリガリじゃねえか……」

「うむ、今日が始めての実戦だったからの」

「ハハッ、そうか……」

やっぱりな、と男は納得して笑った。「もちろん今の不甲斐ない男のままにしておくつもりはない」とアルヴィーは続けた。

すると男は何を思ったか、腕を組みながら少しの間思考をめぐらせる。5分ほど経つと、ようやくランスの男の頭上に電球が浮かんだ。

「……なら、オレにいい考えがある。今度の休みにそいつと模擬戦をやらせてほしいんだが、ダメだったか？」

いい考えとは模擬戦の申し出。同じエスパー同士で訓練し、腕や技を磨きあう。そうやって他のエスパーと切磋琢磨する関係を築くのも強くなる方法の一つだ。

健がエスパーとして、ヒトとして成長する事を望むアルヴィーがそれを蹴るわけがなかった。今のだらしのない健のままではシェイドに殺されてあの世逝きだ。それだけは避けたい。仮に負けてもいい、健が一步だけでも強くなれるのなら。

「あいわかった。健が回復したらお主との事を伝えておこう。……ところでお主、名前は？」

アルヴィーからの問いに男はフツと笑うと、「不破ふわライってmond、よろしく！」と答えた。

「不破殿か。私の事はアルヴィーと呼んでくれ。気絶してる男は健、今私が介抱している女は、確か……みゆきと言ったかの？ 健のガールフレンドとやららしい」

「はいはい。健にみゆきちゃん、それにアルヴィーか。よろしくな、アルヴィーちゃん」

「……やめい、照れ臭いだろうが。『さん』でいい」

頬を赤らめながら、アルヴィーはぶいっつと顔を背けた。そして、
不破はさっさと退却してしまった。その速さ、まさに疾風のごとく。

「……じきに夜も更けるな。このおなごもアパートに連れてって、
一緒に寝させてやるか」

EPISODE 7：ひとつ屋根の下

「うつ……うつん」

気絶していた健が目を覚まして大きく伸びをする。気がつくところ、さっきまで自分がいた大通りではなかった。見覚えがあるというか、ここは自分の部屋。いつの間に移動したんだろうか。

「健、気がついたようだな」

「わわっっ！？ あ、アルヴィー！？ 僕、なんでここにいるの！？ あのでかいシェイドは！？」

「落ち着け。お主はあのサソリにやられて気絶した。その間に髪を茶色に染めた男がサソリを倒した」

「そっか……」

健が大声を出して驚く。もしかしてアルヴィーが自分をこの部屋まで？ 少し戸惑ったがすぐに状況を理解し、健は落ち着いた。

「……ねえ、みゆきは？ みゆきは大丈夫なの？」

「あのおなごのことか？ みゆきとやらなら心配はいらんよ、親御さんにも連絡をしておいた」

「よかった。無事だったのか 僕もあいつも助かって本当によかったよ」

ホッと胸を撫で下ろす健。しかしあることに感付く。ふと辺りを見渡すと、みゆきが自分の後ろで寝ていたのだ。暖かそうな布団にくるまって。

「……え？ あ……え、えええええっ！？ なんでみゆきが僕ん

ちに!？」

何故だ？ みゆきは布団にくるまっっているのに、何故自分は髪や背中にゴミがついているのだ？ 見たところふとんは二人分、用意してあった。恐らくアルヴィーが敷いてくれたのだらう。しかし、自分は床で雑魚寝させられていた。ということは。

「すまん、ご主人。みゆきは疲れておったから……。お主からふとんをかつぱらって被せたのだ」

「ちょ、ちょい待ち。なんで僕とみゆきの待遇が同じじゃないの？ 布団はもうひとつはあったはず……。どうして？」

「申し訳ない。もうひとつの方は私が使わせてもらった」

「やっぱりか……」と健は腰を落とした。

「あれ……？ ここ、健くんの住んでるアパート……？ どうなってるの？」

「みゆき、目が覚めた？ 待ってて、すぐ何か作るから！」

「あ、こらっ……無茶はよせ！」

直後にみゆきも目を覚ました。早く元気にしてあげないと！ 健は怪我をしているにも関わらず、料理を作り台所へとマッハで駆け込んだ。

「あいたた！ ほッ、ホネが！」

「だからいわんこっちゃんない……」

だがすぐに健の骨が軋む音が聞こえた。腰が抜けるような、健の情けないうめき声も。

「変われ。私がやる。お主は休んだ方がいい」

健をリビングへやると、いつの間にかエプロンに着替えていたアルヴィーが調理を始めた。二人仲良くやれ、ということか。なるほど、粋な計らいをしてくれる。健はアルヴィーの粋な計らいに関心を示し、テーブルに向かい合った先にいるみゆきと話を始めた。

「みゆき、あのバケモノにだいぶ怯えてたみたいだけど……大丈夫だったかい？」

「怖かったよ……。けど、健くんがあのお姉さんと一緒に助けに来てくれたから、安心できた」
「気絶しちゃったけどね」

そうみゆきは苦笑した。そうやって談笑しあっていると、やがてアルヴィーが料理を運んできた。ごはんと味噌汁、そして卵焼き。簡単ながらおいしい、日本人の朝の定番ともいえる組み合わせだ。

「おまちどおさま。味は保証できぬが、とりあえず……」

一同、手を合わせて。

「いただきまーす！」

その言葉を合図に朝のランチタイムがはじまった。健が卵焼きへ食らいついた。更にそのままお米をつぎ、口の中へと運ぶ。しばらく、むしゃむしゃと噛み潰したあと

「うまいー！」

キリリとした笑顔で、元気にそう叫んだ。

「ホントだ、おいしいーい！」

みゆきも喜色満面の様子で感想を述べた。料理好きの彼女を唸らせたということは、それだけアルヴィーの料理は上手いということだ。彼女の見込みでは、今はまだ荒削りだが叩けば伸びる。間違いないシエフになれる。

「そう言ってくれてありがとう。あまり自信はなかったが、とても嬉しいぞ」

「なに言ってるんですかー、こんなおいしいのに」

みゆきがアルヴィーの頬を軽く突つつく。やったな、とアルヴィーがさかさずお返し。健も釣られて頬をツンツンする。3人とともに非常に楽しそうだった。

だが、健にはしなければいけないことがあった。当の本人は危うく忘れかけていたが。

「……今、何時だろ？」

健がふと、壁にかけてある時計を見つめると 短い針が8を、長い針が7を指していた。つまり、現在の時刻は8時35分。普段ならもうバイトへ行かなければならない時間だ。

「やべえ、バイト行かなきゃ！ み、みゆきもファミレス行かなきゃいけないんだよな……」

慌てて朝飯を食べ終わると、急いで朝の支度をし出す健。アルヴ

イーやみゆきは制止しようと呼びかけたが、当の健の耳は日曜日。恐らく戦隊モノや仮面ライダーを見ている頃だろう。スーパーヒーロータイムはいいものだ。

だが、今日は平日だ。
休みなどない。

「健、さっきから言っているだろう。無理してバイトへ行くな。余計に体調が悪化するぞ」

「そうよ。向こうに連絡してお休みいただいたら？ あたしもそうするから……ね？」

アルヴィーが真剣に注意したり、健が慌ててカッターシャツに着替えようとしている中、みゆきが助け舟を出した。というか、具合が悪い時はこれが当たり前なのだ。

「そ、そだね。そうする……」

健が首をタテに振った。相手の意見に同意するサインだ。

「……すみません、アルバイトの東條です。昨日の夜、外出中に大怪我をしてしまって。今日一日休みをいただけませんか？」
「すみません、バイトの風月です。昨日の帰り、道でけがをしてしまった……今日一日休ませていただいてもいいでしょうか？ どうかよろしくお願いします」

バイト先へ連絡を入れる健とみゆき。健が今話している相手はチーフである大杉、みゆきが今話している相手も職場のチーフだ。結果は、どちらも「休んでOK、全力でケガ治ってきてね（意識）」だった。

「よし、二人とも。それでOKだ」

「ところでお姉さん……ツノとか尻尾とか、おっきな翼とか生えてるけど……それは何ですか？」

みゆきに痛いところを指摘されたアルヴィー。少し頬を赤らめながら、「こ、これはその……ドラゴンのコスプレ、かな」と不器用そうに言う。やや苦しい言い訳だったが、みゆきは何故か納得した。しかし健はそれを良しとしなかった。

「ねえアルヴィー。ホントのこと言っちゃっていいかな？ 僕、あまり隠し事はしたくないんだよね」

「……お姉さんの隠し事って？」

「どきっ」

みゆきが健に、とても気になっている様子で訊ねた。

「バレちゃ仕方ないなあ。実はねー、あのお姉さんは、ごによごによ……」

「……えっ！？ 専属のホームヘルパーさんだったの！？」

「ち、ちがう！ 断じてそんなではないぞ！」

なんと戸惑うみゆきに真実を話すどころか、ありもしない大ウソをついてしまった。余計に事態がややこしくなり、健もアルヴィーも苦い顔をするハメになった。

「……さすがに呆れたぞ。お主はでまかせを喋る天才だな。事をややこしくするんじゃない。……私の方からすべて、正直に話そう。それでいいいな？」

事実を話す前に、アルヴィーは健とみゆきに確認をとった。みゆきはむしろ話してほしいと懇願し、健は知らんぷりした。

「そうか、分かった。では……お言葉に甘えて」

アルヴィーは事実を洗いざらい告白した。自分が人の姿に化身したシェイドである事。シェイドに襲われていた健を助け、契約を交わした事。そして、健に戦う力を授けてエスパーにし、みゆきを助けたこと。

「……す、すごい」

みゆきは、驚くばかりか感心した。

「たとえコスプレする人じゃなくて怪物でも、お姉さんはいい人でした。少なくともわたしはそう思います！ それに殺されかけたところを助けてもらったんだし、文句なんか言えませぬ。とても美人でカッコいいと思います！」

もはや、みゆきはそれどころではなかった。今度はアルヴィーを同じ女性として尊敬し始めたのだ。

「お、お主は意志の強い子なのだ。だ、だが、そんなに褒めないでほしい。照れるじゃないか……もうっ」

今まで健や助けた少女に『かつこいい』『美人』だといわれてきたアルヴィーだったが、自分自身がこんなに褒められ、敬われたのは初めてだった。しかも同じ女性に、だ。強い恥じらいを感じたアルヴィーは顔を真っ赤にした拳句頭が爆発した。

「ごめん！ この人、照れ屋さんでその上感激屋さんなんだよ」

「そういうとこ、かわいい……かも」

「うう、そういうことだからあまり褒めちぎらないで欲しい……はずかしい／＼／」

そうみゆきに促し、アルヴィーは復帰した。

しばらく笑いあうと、3人でリハビリがてら買い物へ行くことにした。

その頃 スポーツジムで不破が一人、サンドバッグに何度もランスを打ち付けていた。

「食らえエ ……！！」

何度も叩かれた衝撃に遂に耐え切れず、サンドバッグが破れて中身が漏れ出した。息を荒げながら、破れたサンドバッグを見下ろす。まるで、自分と重ね合わせるように。

「ちょっとやりすぎたな……だが、まだまだ。こんなじゃ足りねえ」

ランスを床に置くと、右の拳をグッと握り締める。おのれの無力さを悔いて恥じるように。

「こんなんじゃ、あの人の仇なんか討てやしない……！！」

EPISODE 8：知りたい男

せつかくだからと記念に三人で買い物に行った翌日。みゆきを家族のもとへ送り届け、怪我もすっかり回復。健はいつものようにバイト先でコツコツ働いていた。

仕事の合間の休憩時間でお茶を飲んだり、ケータイをカチャカチャと触ったり、パソコンでネットサーフィンをしたりしながら。

「めばしい情報ニユースはあまりないね……うん？」

それは昼休みの出来事だった。ある人物の名前が、健の目に留まったのだ。

『大久保俊樹おおくぼとしき』

彼の名は、ニユースや新聞などで聞いたことはある。しかし詳細を知っているわけではない。この大久保のことが気になった健は、職場の先輩たちに聞いて回ることにした。

「大学教授の大久保さんって学会でも有名な人らしいですけど、どんなことを研究していらっしやるんですか？」

「うーんと……何だったかなあ。確か、生物学だったと思いますよ」

みはるからは、生物学の研究をしているということ。

「大久保教授ってなんで生物学をやってるんでしょうか？」

「それは本人に聞かなきゃ、わからないと思うなー。ごめんね、あたしもあの人のことはあまり知らないんだ」

なぜ生物の研究をしているのかちあきに聞くも、情報は得られず。

「えーとネ……実はミーもあまりプロフェッサー大久保には詳しくないんだヨ。ユーの力になれず、アィムソーリー……」

更にケニー係長も名前くらいしか知らないという。

そもそも、突然こんなことを聞いても答えてもらえるわけがなかったのだ。自分が悪かった、ここは潔くあきらめよう。

「どうしたのかな」

「あの、大久保敏樹っていう学者さんについて知りたくなっちゃって。それで皆さんに聞いて回ってたんですが情報がまったく得られなくて」

「そうだったんですね」

そうあきらめかけた時だ。ジェシーが優しく声をかけてきた。事情をまるまる説明すると、ジェシーは困った様子など見せず、むしろ喜んで健にこう教えた。

「確か大杉副事務長、前にその大久保教授にあったことがあるって言うってたわね」

「……あつ、ありがとうございます！」

「いえいえ。困ったことがあれば何でも聞いてくださいね」

「はっはっは。なーんだ、そんなことだったのかね。いやあ、聞きたいことがあるというから悩みの相談かと思っただが、そんなに

大それたものでなくてよかったよ」

退勤する前に、大杉に大久保教授の事を尋ねた健。すると大杉副所長は陽気に、豪快に笑いながら大久保との間に出来た思い出を話してくれた。

「確か前に京大で講演してたっけねえ。たまたまその帰りにばったり会っちゃまってね。まさか生物学の権威に会えるなんて思ってもみなかった。別に興味があつたわけじゃないんだがねえ」

「ふんふん、それでどんなことを言っていましたか？」

感慨深そうに大杉が語る。彼をもじもじと見つめながら話を聞いていた健の姿はまるで父親から昔話を聞いている子供のようである。

「講演の時も話しとつたが 技術が進歩すればいずれ死んだ人間を生き返らせることも可能だ、と胸を張って言ってたね」

「死んだ人を生き返らせる……？」

そんなことが出来るのか？ ゲームや漫画じゃあるまいし と、大杉が聞いたという大久保教授の理論を聞いて健が疑問を抱く。確かにそんな事は不可能だ。できたとしたらそれは神様仏様ぐらいである。

「本当にそんなこと出来るんでしょうか？」

「さあね、わからん。ただね、わしはそういうのはちょっと肯定できないな」

「どうしてですか？」

「人は死んだらそれっきり。どんなに生きてたつていずれば死んじまうもんだ。だからこそ今を精一杯生きることの意味があるんだと、わしはそう考えとるよ」

この男、大杉逸郎^{おおすぎいつろう}。人当たりがよい彼は、部下たちからも頼りに
されているよきチーフだ。面白いもの好きな一面もあり、とにかく
話していて楽しいおっさんである。

EPISODE 8：知りたい男（後書き）

なんか、先輩3人娘の中でジェシーさんが一番目立ってる感じがします^^；

EPISODE 9：復活の予感

それは2年前の出来事だった。

「今日も星がきれいだな。まるで君みたいに」

「えー、ライったら何言ってるのよ。恥ずかしい……」

夜の東京都内。仲良く手を繋ぐ男と女。男は警視庁捜査一課の警部補で、女はアクセサリーショップの店員。

二人はお互いに愛し合っていた。その絆は固く永遠に結ばれるものだと 誰もが信じていた。しかし 悲劇がこのアツアツのカップルを襲った。

「よ、美枝さんッ！」

当時、都内では人の体が突然発火して焼け死ぬ事件が多発していた。後にたびたび話題に上がるようになったほどの問題に発展した、『連続発火事件』だ。

首謀者に関しては謎が多く、目撃情報は多数上げられているものの今もなお謎の多い不気味な存在とされている。その中でもとくに有力な情報は、『金髪で黒ずくめの服装をした長身の男』という容姿に関するものだった。

「……ライ、愛してる……いき、て……」

結婚式の前日に彼女は焼かれ、彼より先にこの世を去ったのだ。死の瞬間まで、女は男のことを想っていた。

「うわあああああつ！！」

目の前で火に焼かれた恋人が息絶える光景。それが何度も彼の夢の中で繰り返され、うなされていた。

「ハッ！？」

目を覚ました『彼』は恐怖に喘ぎながら、自身の二つの手のひらを目をむき出して見つめていた。そして今いるこの空間が現実である事を確認すると、恐怖に震えていた体がようやく静まり返った。

「またあの日の夢か……」

彼はあと何回、見たくもない悪夢にうなされるのだろうか。

黄昏るように路地を歩くその男、不破ライ。彼は高校を卒業して、血も滲む努力の末に幼い頃からの夢だった警察官になれた。それも、警視庁の捜査一課というエリートに。

彼は後の恋人である『倉田美枝』とも知り合い、彼女との結婚も決まった。まさに文字通り、順風満帆の人生を送ろうとしていたわけだ。だが、式を挙げる前に美枝は不幸にも事故に巻き込まれてしまった。

「……見つからないなあ。どこにいるんだか」

連続発火事件の犯人へ復讐するため、ライは警察を辞めてでも工スパーになることを決めた。これまた努力に努力を重ね、何度も死にそうな思いをしてようやくエスパーになることが出来た。

だが、もちろんこれで彼の目的は終わったわけではない。まだ残っているのだ、恋人の命を奪った犯人への復讐が。

「見つけたらただじゃすまさねえ。絶対に復讐してやる……！」

そんな孤独な戦いをひたむきに続けている彼の前に、協力したいという人物が現れた。その人物はライに協力する代わりに、ある条件を持ちかけてきた。

シエイドとの戦闘データ、ならびに戦いで付着するであろうシエイドの細胞を提供すること。そうすれば、恋人を奪った怨敵の居場所をサーチするという。ライにとってこれほど有意義なことはない。利害が一致した二人は互いに協力し合う事を決めた。

その頃。

闇の中で先日倒されたはずのサソリの化け物が、バラバラになった体を再生させていた。

「こいつ、再生と同時に強化を計るとは興味深い。こいつで連中の実力の程度を見てやるとするか」

黒いローブを着た男性が、その光景を陰から見つめていた。そのフードの下には、目玉を模した禍々しい模様が施された仮面を着けていた。いったい、何者なのか？

「ほう、その大久保とかいう学者がそんなことを言っていたのか。いろいろと考えさせられるな」

「確かにね。人によっちゃ生命への冒瀆とかそういう風にも感じられるし」

「でも大切な人を亡くしたときに、その人が生き返ったら嬉しくないか？」

「言われてみれば」

健のアパートにて。聞く気があるのかないか曖昧だが、アルヴイーが壁に腰かけて座りながら話を聞いていた。その雪 或いは、真珠のように白くて長い髪を梳かしている姿は美しく、ある意味浮世離れしていた。

元より？彼女？は、非現実的な存在だ。そもそも龍というのは分類上は空想の生物いきもので、そもそも実在しているわけがない。その実在するはずのない生物が、今こっやってここに存在している。人の姿それも妖怪や化け物に至極ありがちな、美しい女性の姿をとつて。

「まあ、それはおいといて。おいら感心しちゃったよ。いつか、有名になってお金持ちになれるといいな……あれ、ポテチなくなってる！」

健がおやつを食べようと入れ物の蓋を開けると、中にごっそり入れておいたはずのポテチが姿を消していた。もしか、と健がアルヴイーに尋ねると。

「すまぬ、コンソメパンチがあまりにもおいしかったものでつい……。『冬の宿』とかいうせんべいとポッキーなら残ってるから、安心してくれ」

やはりか、と健は腰を落とした。そんな彼をアルヴィーは申し訳なきそうに見つめている。

「その2つ残してくれといてサンキューな。けど、大好きなコンソメパンチを食われた怨みは忘れないぞ！ いつか弁償してもらうからね！ フン！」

「これが食い物の恨みというヤツか……げに恐ろしい」

腕を組んで怒る健。文句を垂れながらも、健は『冬の宿』の袋を開けるととっさに食べ始めた。

「　　のう、健よ」

「なんだい？」

「少しばかりたずねごとをしてもよいかの？」

もぐもぐと口を動かしながら喋ったことで健は注意を受けた。かじりきつたせんべいを飲み込むと、アルヴィーは話を再開した。

「明日は土曜日、休日だ。おぬしのバイト先でも土曜は休みだったかの？」

「うん」と、健は即答。

「この前世話になった不破ライという男が、この休日にお主と模擬戦をしたらしい。場所は3丁目の空き地だそうだ」

「その不破さんって誰さ？ そんな人知らないよ。ふわふわしてんの？ 気持ちいいの？」

「ふふふ、冗談好きなヤツよ。この前、実はお主があこのサソリにやられた際に駆けつけてくれたエスパーがいたんだ」

「それが……不破さん？」
「ああ」

アルヴィーはくすりと笑い、以前助けてくれたエスパーについての話をした。人外の怪物にしては気品がありすぎる。

買いかぶりすぎかもしれないが、大胆不敵な王侯貴族か、はたまたエレガントな名家のお嬢様のようにも見える。

その鋭くもたおやかな瞳は一点の曇りもなく、細めているとはいえ中に星でも入っているかのように輝いている。

何より、人間臭すぎる。父親からの縁があるとはいえ、とても親身になって付き合ってくれている。こんなにも優しいもう一人の姉や母のような女性を、容易に化け物と同列に扱っていいものか？否。そんなことは雨が降ろうが槍が降ろうが、隕石が落ちてこようが、絶対に出来ない。この凜々しくも妖艶な笑みにかどかわされるのは、もはや時間の問題だった。

「どんな人？」

「見た感じは金髪のヤンキーだったな。それがチンピラに近い」

「えーっ……ヤダ、なんか怖そうじゃん」

「まあ、そう気を落とすな。明日不破殿に会って、ストレス発散がてら勝負して来い。何事も経験だぞ、ご主人」

「明日かあ……あっ！」

そのとき、ふっと健はあることを思い出した。

勢いでそのまま立ち上がり、

「いつけね、思い出した。明日みゆきんちに遊びに行くんだった！」
「なぬ！？」

日曜に延期してもらえ、とアルヴィーが怒鳴り散らしたのは言う

までもない。

いつもこんな調子の健に、人々をシェイドの魔の手から守るエスパイが果たして務まるのだろうか？

EPISODE 10：先輩はスパルタ野郎

やがて不破と模擬戦闘を行う約束をした休日がやってきた。みゆきに予定変更を申し込んでOKをもらった健は、傍から見れば目立つどころではない武骨な剣と盾を背負い、不破に言われた三丁目の空き地へ向かう。

「おう、早かったじゃないか」

着いてからほどなくすると、不破がやってきた。緊張によるものか、健は胸の高鳴りを押さえられずにいた。こいつが不破ライか？ 金髪に染めた髪に日焼けした小麦色の肌。聞いていたとおりガラが悪そうな外見。更に背も高く筋肉も隆々としている。彼はいかに強そうで（実際強いようだ）、見るものすべてを威圧するオーラを全身から放っていた。殺されたりしないだろうか、と健は少し不安になった。

「……あの、あなたが不破ライさん？」

少しばかり緊張しながら目の前のガラが悪い男にそう訊ねると、「その通り」と不破は首を縦に振った。その手には既にランスとバツクラーを握っており、まだかまだかと健を待ち構えていた。

「オツケー、しゃべる前にまずやるうってか……！」

苦笑いしながら、健。不破の対岸にいた健も既に長剣と盾を手にかけていた。不破は余裕の面構え。対して健は緊張から顔が強張っていた。

「そこなくつちな！」

勝負がはじまった。不破が先制し、その猛烈なスピードで健の出鼻を見事に挫いた。ぶつかりあう剣とランス、斬り合いが続く。

「訓練だからって手加減はしねえ。いつでも本気で向かい合わなきゃ、シエイドにもエスパーにも勝てないぜ！」

切り上げを食らい、健の体が宙へと舞い上がる。そのままランスで切り下ろし、横なぎ、すばやい突きと不破の攻撃が続く。あまりにも速すぎる。これでは手も足も出ない。

「ちよっ、タンマタンマ！ 本気でやりあわなきゃいけないのはわかった。けどさ、もう少しフェアにできませんか?!」
「ハア？」

グロツキーから立ち直り抗議するも、不破は健の言葉に耳を貸さうともしない。ナメられている。完全にナメられている。

「手加減しろだなんておまえ、バカか？ そんなの今更できるか！ 男と男の真剣勝負に、手加減なんざ必要ないんだよ!!」
「ぐあっ」

不破から一切容赦のない腹パンを受け、吹っ飛ばされた健はそのままドラム缶へと一直線。

「さつきから甘ったれてばかり……癪かんに障さるんだよ、このヒヨッコが!!」

「うっうっ！ がああああっ!!」

倒れたドラム缶に埋もれた健へ、不破の突き下ろし攻撃が襲いかる。転がってそれをかわし起き上がり、反撃に出る健。不破へ斬りかかるも瞬時に背後へ回りこまれ、またも先を読まれた。

「どこ見てんだウスノロめ！ オレのように高速移動するタイプの相手もいるってこと、よく覚えておけッ！」

健をなじると不破が三人に分身。健は身構えて攻撃に備える。本物がどれか分からず、やみくもに斬りかかる健に三人分の攻撃が波状に襲いかかる。もはや次元が違う。とてもじゃないが真似できない。

「ひ、卑怯だ！ こんな卑怯すぎる！！ だいたいどこが訓練だ。まるでイジメっ……………」

「少し黙ってる！！！」

背後に回りこんだ不破はかかと落としを繰り返す。健の左肩に命中してそこから全身へ痛みが走り 戦闘不能に陥った。

「あ…………ぐ…………がぁぁ」

「意味も無いのに喋りすぎだ。隙だらけだったぞ？」

困ったような表情で不破が言う。大きいため息をつくとうめき声を上げる健に情けをかけるように手を拾い上げ、服についたホコリを払う。

「しっかしてんでダメだなお前。パワー0点、スピード0点、あげくテクニクも0点。そんなんじゃシェイドに食われてオダブツだぜ？ それと見たところ、お前は人に手を出すのに抵抗があるよう

だ。まあ、気持ちは分からないこともねえが」

「だってさ、シエイドはいいとしてエスパーは同じ人間じゃないですか。うっかり殺しちゃったりでもしたら……っていうかアンタが容赦なさすぎる！」

「だから、それはお前がたるんでるだけだよ。いい加減人のせいにするのはやめろ」

「なっ……」

涙目で健が不破に打ち明ける。そして抗議する。

「ま、そう気にするこたアない。殺したくないならオレみたいに力を加減すりゃあいい」

眉をしかめる健。彼には不破のその言葉が信じられなかった。あの一切容赦のない攻撃の数々はどう考えても、自分を本気で殺しに来たようにしか思えなかったからだ。

本気で敵に立ち向かわなければならぬとはいえども、自分に反撃の隙を与えなかった不破は鬼としか言いようがない。ましてや偉そうに先輩風を吹かせていて、印象は最悪だ。こんな無粋で粗暴なヤツは尊敬しないに限る。

「『習うより慣れる』だ。あとは体で覚えろや、じゃあな」

不破が超高速で空き地から去っていく。

「……くそっ、なんなんだよアイツ。出会ったそばから偉そうに……！」

その光景を見届けた健は、彼がいなくなったのを確認すると落ち

ていた木の枝を遠くへ力いっぱい投げた。悔しかった。手も足も出ず、見下すような態度を取った相手に成す術もなく敗れた自分の不甲斐なさに、彼は激しく憤っていた。

「ちくしょおおおおおおおおおおおおお！！！！」

道中でフェンスや電柱、ゴミ箱など周囲のものに八つ当たりしながら健は帰路についていた。しきりに当り散らした拳句息を荒げて公園の前まで来た頃には、すっかり日も暮れていた。

「ハア、ハア……クソっ、こんなにイライラしたのは久しぶりだ」

すっかり傷だらけの体と足に鞭打って、ゆっくりと歩き出す。たまたまそこにみゆきが通りかかり、傷だらけの健を見て驚嘆した。

「た、健くん……どうしたのそれ!？」

「みゆき！　これは、その……そうだね、話は公園あちでしょう」

公園のベンチへ足を引きずって移動する健、ボロボロの彼の肩を持つみゆき。夕方の公園で二人きり、後ろにはこの公園のシンボルである噴水が空と同じ儂げなあかね色に染まっていた。

小鳥がさえずり子供たちが元気に戯れる中で、みゆきと健は場所に不相応なくらいシリアスな話をしようとしていた。

「ひどいケガ……いつたい誰がこんなことしたの?」

せめて止血だけでもと、みゆきは健に手当を施した。幸い訓練でつけられた傷は浅く、軽く布で押さえただけで血は止まった。

「……………この前金髪のお兄さんに助けてもらったの覚えてる？」

「ううん。気絶してたから覚えてない」

「そうか。あの人ね、不破さんっていうんだ。その不破さんから訓練という名のイジメを受けた」

さぞ悔しそうな自分の顔を今頃不破さんは思い浮かべてるんだろ
うな、と健は苦笑い。なお今の彼は鼻の上と頬にはんそうこう、両腕にもばんそうこうと一目見ただけで怪我人と分かる格好だった。

「腹に思いっきりパンチしてきたり、分身して3人がかりでボコボコにできたりしてさ……………僕、お媚に行けない体にされちゃったよ。ひどいと思わない？」

「まるでリンチじゃない……………。それで、その不破さんはどこ行っちゃったの？」

「マツハでどっか行っちゃった。それにしてもこんなに痛めつけられたんじゃ、またバイト休まなきゃいけなくなっちゃうじゃんかあ……………こっちは生活かかってんだぞっ」

「大丈夫、大丈夫。健くんは丈夫だからさ、すぐ治ると思うよ」

頭を抱え込む健。彼に寄り添い、優しく介抱するみゆき。

「……………ありがとう。今日はごめんね、この埋め合わせはまたするか
ら」

切り替えの早い健はベンチから立ち上がり、申し訳なさそうにそう詫びた。

「いいの、いいの。あたしのことはいいから、健くんはエスパーのことをがんばって。でも……たまにでいいから、あたしに顔見せてね?」

「……ああ、約束する」

健気にエールを送るみゆきに、健も笑顔でそう答える。約束の証に指きりげんまんをすると、二人はそれぞれ帰路を歩み始めた。

EPISODE 11：大サソリ復活

みたび足を引きずってアパートの自室へ戻ると、
案の定アルヴィーが退屈そうにTVを見ながらかりん糖を食べ漁
っていた。

「お帰り。……………ひどくやられたようだよ」

一旦かりん糖を食べるのをやめると、すぐに健の肩を持って洗面
所へ連れていった。

更に着替えも持ってきた。

「ありがと。ぜんぶ洗面所で着替えなきゃダメ？」

「それくらい自分で考えられんか？」

要するに、アルヴィーは目の前で着替えられたくないのである。
というか、そもそも野郎の着替えが見たい女性がどこにいるのだ
ろうか？

着替えを終えた健は、キッチンの棚からチョコチップクッキーの
箱を取ってからリビングへ。

「ひどいリンチだった。あんなの訓練じゃないよ。アイツが教師だ
つたら今頃逮捕されてるだろうね！」

「……………まあ気持ちは分かるが、それについては自分にも問題がある
とは普通思わんかの？」

「え？」

「要するに相手にも自分にも非はあったということだ」

「そっか……………」

「まあ、一方的に暴力を振るわれたなら話は別。そう気を落とすで

ない。また今度会った時に仕返ししてやればいいのだ」

とりあえず不破に対してむかつ腹が立っていたので愚痴る。

アルヴィーは最初どっちつかずの立場にいたが、気付けば理不尽なまでのその待遇に同情していた。

たまにイジメはイジメられる方にも問題があると言われるが、それにはイジメられている方が弱いからというニュアンスが含まれている。

要するに、イジメに負けないくらい強くなれ、ということだ。

決してイジメられっ子を貶す意味ではない。

「大変な目にあつたのだな……。でも、みゆき殿に会えてよかったではないか」

アルヴィーは消毒液をつけたティッシュで、健の傷をポンポンと優しく消毒していた。

ムスツとした表情のまま、時に笑いながらTVを見ている健。

その傍ら先ほど取ってきたクッキーをつまんでいた。

「今すつげえイライラしてっからさ、しばらくしたらシェイド吹っ飛ばしてくる……」

「あんまりイライラするものでもないぞ。イライラしすぎたら、王蛇になつてしまつぞ」

確かにイライラしすぎたら王蛇になつてしまつたろう。

焼きそばを食べたり弁護士を怨んだり、貝をそのまま食べたり。

トカゲの干物を相手に薦めたり、しまいにや芝浦さんでガードベントしたり。

最終的には因縁のライバルと決着を着けることが出来ずに発狂し、射殺も止むなしと判断した機動隊へ特攻するのだらう。たぶん。

「王蛇さんかあ……確かにカッコいいけど、僕はタイガの方が好きだな」

確かにタイガもいいが、その場合は英雄になるために恩師や友人などの大切な人までも手にかかるような人間になってしまうことになるだろう。

それもヤンデレの。そういえば、彼も『東條』だった。

「……む？ この気配、シエイドか」

それからおしゃべりをつつおやつを食べていると、ウロコのお守りがシエイドを感知した。

「……相当強い反応だな。私も行こう、そうしよう」
「オツケー、援護よろしく！」

そのころ、不破は。

「なっ、こいつは……!？」

不破が驚くのも無理はない、

彼が対峙したシエイドは先日倒したはずの巨大サソリ
ルペンド】だったからだ。

【スコ

「いっちょまえになりやがって！」

だがその姿は、以前倒した時とはまったく違っかけ離れたもの
なっていた。

甲冑を纏った成人男性のような上半身、巨大なサソリの下半身

。そう、このサソリの化け物は半人半獣の怪物と化していたのだ。
故に、以前より遥かに強大。

「グオオオオオオオオオオ！！」

スコルペンドは咆哮を上げ、全身に開いた小さな穴から針を射出

「しぶといヤツだ。今度こそ仕留めてやるよ！」

持ち前のスピードで針の雨の中を走る不破。

相手はただ闇雲に撃っているだけだと、不破はそう思っていたが

。皮肉にも、その慢心が命取りとなった。

「うおッ!?!」

鋭い尻尾の針による突き刺し攻撃が、油断した不破のもとへ飛ん
できたのだ。

それは右腕に突き刺さり、そこから全身へと猛毒が走った。

「や、野郎……頭までよくなりやがったか……げほっ」

動きが止まった不破に容赦のない攻撃が襲いかかる、まず下半身
のハサミによる吹き飛ばし。

次に針のシャワー。極めつけは、先ほどの尻尾による突き刺し。
今度は足のすねを刺され、神経毒によりもたらされた激痛が全身

に走る。

これでもう、立つこともままならなくなった。

「グウオオオオオオ……」

「く、くそ、これじゃ何もできねえじゃねえか」

低く唸りながら、満身創痍となった不破にゆっくりと近付くスコルペンド。

今出来るのはヤツの攻撃を左手のバツクラーで防ぐことのみ。しかし、それもいつまで持つかは分からない。

（何もできねえ……ハツ!? そうか。今の状況は、オレと東條の位置が入れ替わっただけで、アイツと模擬戦をしたときと同じ。オレってひでえことしてたんだな……そりゃ、嫌われるわな）

この時不破は思い出していた、自分が健との模擬戦で彼にやった事を。

そして自覚した。自分が彼にやった事はこいつが自分にしていることとまったく同じだったと。

今の自分は、あの時のあいつと同じ状況に置かれているのだと。

「よ、美枝さん。オレもう……ダメかもしんねえ……情けねえよなあ」

覚悟を決めたかのごとくうつ伏せになる不破だったが。
目の前のサソリ怪人へ向けて青色の炎が飛んで来た。

「ちよつと待ったああああー!!」

更に聞き覚えのある叫び声が、もしましと不破が顔を上げると。

「やい、サソリ男！ 確かにそいつは訓練と称して後輩エスパーをイジメたやなやつだったさ。けどね……無抵抗の相手をいたぶるやつもやなやつだ。やつつけてやる！」

声の主は健だった。では、あの青い炎はいつたい誰が？

その答えは、不破が空を見上げた先にあった。

本来の姿、白いドラゴン 【アルビノドラゴン】としての姿になったアルヴィーだ。

「ヘッ、後輩に抜かれちゃったか……ますますなさけねえ」

不破は苦笑いした。自分の情けなさを、自分自身で苦し紛れに嘲った。

針の雨が健を襲う。だが健はそれを盾で防ぐ。止んだと同時に大剣で切りかかる。

「気をつける東條ツ！ そいつは、そいつは……ごほっ、そいつの尻尾には猛毒が……げほっ！」

「あんたはもう喋るなよ！」

相手の攻撃を確実に防ぎながら、健は攻撃のチャンスをつかっている。

不破のように超高速で動くことは出来ないが、その代わりに堅実に攻める。

それが健が確立した、自分なりの新たな戦闘スタイルだ。

そして、不破が最も恐れていた尻尾による突き刺しが飛んで来た。

「こんなもの！」

金髪にサングラス、黒いロングコートの男だ。
男は静かにその場を立ち去った。

EPISODE 11：大サソリ復活（後書き）

スコルペンド

巨大な紫紺色のサソリ型シェイド。

強固な殻はナパーム弾すら防ぎ、そのハサミは鋼鉄をも引き裂いてしまうほどの切れ味を誇る。

一度不破ライに倒されたが、その後時間をかけて復活し　。

スコルペンド・リダックス

上記のスコルペンドが再生した姿。よりおぞましい半人半獣の怪物と化しており、以前よりも遥かにパワーアップしている。

全身に開いた穴から麻痺性の針を飛ばすほか、再生前はほとんど使って来なかった尻尾を突き刺して相手を猛毒に冒す攻撃もするようになった。

不破を圧倒するも、駆けつけた健の必殺技【ファングブレイザー】で爆死した。

名前の Redux^{リダックス}は『帰ってくる』という意味。

EPISODE 12：バイトサボりはほどほどに（前書き）

今回予告！

ゆるりと、時々シビアに過ごす健とアルヴィー。

そんな彼らとは裏腹に、不破は自主トレにケンカとハードな生活を送っていた。

京都を放浪する彼に、謎の男？浪岡？の魔の手が襲いかかる！？

EPISODE 12：バイトサボりはほどほど

「でさ、ヤスヒロがさあ……」

「へえ、あのヤスがねエ」

不良たちが屯する夜の高架下。時間帯なぞお構いなしにどんちゃん騒ぎしている不良たちの真っ只中へとやってくる、金髪の黒ずくめの男。

「君たち……」

サングラスをかけ、黒いロングレザーコートに黒いインナー、黒いズボン。黒いブーツ。不良たちの小物臭いそれとは違う、異質で邪悪な雰囲気。190cmに近い身長も、170〜180弱ぐらいまでの不良たちより大きい。

「強くなりたいとは思わないか？」

サングラスの下には、紫色に光る妖しい瞳。身の程知らずの不良たちが、黒ずくめの男に絡み始める。

「ああ？ 誰だオッサン？ 俺らに何か用？」

「君らの中にエスパーの素質を持った逸材がいるとしよう。私はその逸材をヘッドハンティングしてきたのだよ」

「なにワケわかんねーこと言ってるんだよ、ゴルア！」

黒ずくめの話を理解する気がない不良たちは下品に笑い飛ばし、殴りかかってきた。

男は、余裕たっぷりとその拳を受け止めると不良の腹に蹴りを入

れた。更に、黒ずくめが指を鳴らすと不良の一人がその場で燃え出した。

「ふふふ……残念だなあ。こんなところでくすぶっていないで私のところへ来れば、更なる力を手にすることが出来たというのに」

火だるまになった不良グループの一人を背に、男は残りの連中にも睨みを利かせる。

「ひ、ひい……！」

未知の恐怖におびえる不良たちなど眼中にない男は、右の掌で火の玉を形成していた。不敵に笑いながら。サングラスの下から、不気味な紫の瞳がのぞいていた。

「ご両親からよく聞かされたのではないかな？ 人の話はよく聞くものだ！」

「ば、化け物……！」

「いやだああああ！ 俺あまだ死にたくねえよお……！」

「地獄で悔い改めるがいい、虫ケラどもめ……！」

非情にも火の玉が放たれた。それも1つだけではなく、いくつも成す術もなく残った不良グループのメンバーは消し炭にされてしまった。

「いかな、また殺ってしまった……！」

火の中に佇む黒ずくめの男は、狂ったように高笑いを上げていた。

翌日。アパート『みかづきパレス』の自室で、健は朝食の支度をしていた。

惣菜パンと牛乳　　だけでは足りないので、体を温めるカップめんと野菜不足を補う野菜ジュース。更に、朝の栄養補給には欠かせないバナナ1本とおいしいみかんが2個。

一通り並べ終わると、健はTVを電源を点けた。流石に19歳になつて、特撮やアニメは見ても教育番組は見ない。

「ひゃー、高架下で原因不明の焼死!?　おつかないなあ……火の用心、火の用心っつと」

昨晚、高架下で不良グループのメンバーが全員原因不明の焼死を遂げたというニュースが入った。普通、何の脈絡もなしに人が焼け死ぬなどありえない。超常現象の類だろうか。それとも　。

「健、おはよう……といえはいいのよな？」

ほどなくして先に起きていたアルヴィーが新聞を持ってきた。

「うん。あ、新聞サンキューな」

健が朝食を食べる傍ら、アルヴィーは新聞を読みふけていた。まずは番組欄、次に見出し。見出しを読むだけでもかなりの情報量が得られる。

「健、バイトとシェイド退治の両立は難しいぞ。バイト先には連絡しておいたかの？」

「えっと、今後は毎日来れるかどうか分かりませんって副所長さん

に言つといたヨ」

苦渋の決断だった。月々金はバイトがある。自由な時間は土日しかない。

そんな状況でシェイドを討伐するのは簡単なことではない。だが、バイトしなければ生活費はためられない。シェイドを倒しても金は出ない。あれこれ健なりに考えた結果、バイトに行く回数を減らすという結論が出たということである。シェイドを倒せば金がもらえる仕事があればいいのだが。

「これで平日も休みだぜ」

「平日も休めるからってエロ本ばかり読んだらいかんぞ？」

胸を寄せながら健の凶星を突くアルヴィー。アルヴィーの巨乳に頬を押されて、健もどこか嬉しそうだ。現に鼻血が出始めていた。

「え、エロ本？ 何の事かな……」

「引き出しの一番下に隠しておっただろう？ そんなものより他の事にゼニを使うとか考えられないのか？」

おしくらまんじゅうはなおも続いた。あまりに長時間押し付けられたので、流石の健も鼻血を流しながら気絶してしまった。

「ふふふ、お主もウブよのう」

『やれやれ』と言わんばかりの視線を健に送るその表情は、まるで母か姉のようであった。

「あ、アルヴィーさんこそ……ウへへへ」

健にとってはさぞ至福だったことだろう。人一倍性欲が強いとい
うだけのことはある。

EPISODE 13：使い分けが肝心

「しかし 世の中も物騒になったものよな」

新聞にがつついていたアルヴィーが新聞を読み終わると、ようやく朝食に手をつけはじめた。

そのハムエッグを2つに分けると、自分の方へ片割れを持っていく。

彼女の皿には今入ってきたハムエッグの他に、ブロッコリーやプチトマトも入っていた。

ブロッコリーには、味付けにとマヨネーズがつけてある。見た目も彩りもバランスが取れた組み合わせだ。

「ホント、今後は火の用心しといた方がよさげだね」

残ったもう片方は、程なくして健の皿へ運ばれた。どうも彼はブロッコリーが苦手らしく、代わりにレタスが二枚盛られていた。なぜかプチトマトはそのままだ。

「人体が突然燃え出して、やがて死ぬ……。そんなの常識的に考えて、ありえんとは思わぬか？」

今朝のニュースや新聞で報道されていた、突然人が発火して焼け死ぬ事件。それと同様の事件が今から3年前にも起こっていた。

その時は少なくとも100人未満、多くて10人以上は焼け死んだという。アルヴィーはこの事件にシェイド、或いは 悪意を持ったエスパーが関与しているのでは、と、疑念を抱いていた。

なんの脈絡もなしに人が燃えて死ぬのは、確かに普通ではありえない。だが、発火する能力を持つシェイドやそれらと契約したエス

パーなら前述のように突然発火したように見せることが可能だ。

「そう……だよな。確かにそのテのシェイドやエスパーなら不可能じゃない」

ハムエッグとレタスをかじり、プチトマトもひとくち。そろそろカップ麺も食べられるはず。

「よっしゃ3分たった！」

もう待ちきれない。健はカップ麺のふたを猛スピードで開けた。

「この3分間が長いんだよね」

そしてズルズルとすくい上げる。カップ麺は本来あまり体にいいものではないが、体が温まるなら何でもよかった。そう、インスタントのみそ汁でも、春雨ヌードルでも。

「どんべいとやらはそれより長い5分間も待たなきゃならんそうだな。私だったらそこまで待ちきれんぞ」

ハムエッグと野菜を平らげたアルヴィーは、健が食べる予定の惣菜パンに手を伸ばす。

「あ、それ欲しいの？」

うむ、と、アルヴィーは頷いた。

「でもあげないよ。けど、みかんかバナナならあげる。それでいいかい」

「ありがとう、恩に着る」

代わりにみかんとバナナをもらったアルヴィーは嬉しそうだ。まずはみかんの皮を剥いて食べる。食べ終わると次は栄養満点、おやつに持つていけるかもしれないバナナだ。

「う……っん……美味だの〜」

恍惚を帯びながら目を半開きにし、ちゅぱちゅぱ、と、音を立てながらバナナをくわえるアルヴィー。

「あの、そういうヤらしい食べ方はやめてちょ……」

「あつ、すまなんだ……」

本人なりにちょっとふざけただけだった。しかし、相手にドン引きされたからには自分の責任。それを恥じてアルヴィーは普通にバナナを食べ出した。

「むっ……」

朝の身支度を十分に済ませたあとのことだ。アルヴィーが気配を感じ取った。シェイドがどこかに出現したのだ。

「健、シェイドだ！ 準備はいいか？」

「わかった！ 行こう！」

壁に立てかけていた大剣・エーテルセイバーと盾のヘッダーシー

ルドを手に、健はシェイドが発生した場所へ向かう。

シェイド反応は公園前の坂道から出ていた。

逃げ惑う人々をくぐり抜けると、その先にはオオカミのようなシェイドが群がっていた。それも、二色……赤と青にきれいに分かれて。いずれもでかく、2メートル弱はあった。

「こいつらはファンゲウルフェン……炎属性と氷属性の2種類がある。なに、属性をうまく扱いこなせるおぬしなら楽勝だろう」

唸り声を上げ、赤いオオカミが一匹、二匹と飛び掛ってくる。

「なるほど、赤が炎なんだな……それなら！」

エーテルセイバーの属性を氷に変え、赤いウルフェンの群れを切り裂く。紫の血と共に冷たい破片が辺りに散乱していく。

「でやあああああ　　！！」

ジャンプ斬りを赤いウルフェンの背面に決める、氷の結晶が幾つも連なり突き出て敵は結晶化と爆発を起こし爆散。

だが、休む間もなく青いウルフェンが3体同時に襲い掛かって来た。しかし、健はバク転で華麗に敵の攻撃をかわす。

「青が氷なんだよな……」

すぐに健はセイバーを炎にチェンジ。

「おアツいのを食らえ！」

地面に刃を叩きつけ炎の波を走らせると、青ウルフェンはいずれももがきながら燃えていった。が、それでもしぶとく生き残っていた一匹が健に向かって疾走してくる。

「あとはこいつだけか！」

「せい！」

迎え撃とうと構えたが、寸前で青ウルフェンの腹にアルヴィーの鋭いハイキックが炸裂。青ウルフェンはそのまま吹き飛び、消滅した。

「サンキュー。いいコンビネーションだった！」

健はホコリを払い、セイバーとシールドを仕舞う。そして、頭の後ろで手を組む。

「会ったばかりのときは一番格下のシエイドにもおびえていたお主も、今や一人前よな」

胸の下で腕を組みながらアルヴィーは頷く。

「すっごーい！」

そこへ聞き覚えのある少女の声が。振り向けばみゆきが向こうで手を振っていた。

「あっ、みゆき！」

「さっきの怪物の群れを倒したのは健くんとアルヴィーさんよね。すぐくかつこよかったよ」

笑顔で喜ぶみゆきと、まんざらでもなさそうに照れる健。やれやれ、と、微笑みながらその光景を見守るアルヴィー。が、しかし。

「キシヤアアア！」

「きゃっ!？」

突如として飛来した赤いトンボのような怪物が、みゆきにつかみかかった。かと思えば、彼女を抱え込んで空へと飛び去ったではないか!

これは放っておけない。戦えない彼女をどうするつもりだろうか。どちらにせよ、二人はこの行為を許さなかった。

「み、みゆき！」

「健、あやつを逃がしてはならん！」

「みゆきイイイイ!!」

急いで自転車を停めた場所へ戻ると、健はウロコのお守りをレーダー代わりに街中を奔走。

みゆきをさらったトンボのシエイドを追跡していた。ターゲットはやがて、廃ビルに辿り着くとそこへ陣取った。4階建てくらいはある。

「健、あやつはこの廃ビルに立ち止まったようだ。急いでみゆき殿を！」

わかった、と、軽く返事をする二人は廃ビルへ突入。

階段を駆け上がり屋上へ躍り出ると、そこでは先ほどの赤トンボ

のシェイド・レッドヤンマがみゆきを鎖で縛り付けていじめていた。しかも一匹だけではなく、二匹もいた。品性のない外見に反して、狡猾いものである。

「た、健くん。それにアルヴィーさん……」

赤トンボが口を開いたみゆきに、鋭利な刃がついた腕を叩きつける。

「こやつら、なんと……。みゆき殿は私に任せて、お主はこやつらを倒せ！」

頷くと健はアルヴィーからと分かれ、敵をひきつけることにした。

「たあ！」

しかし振りかぶるも、相手は空へ飛んで攻撃を避けてしまう。更にもう一体は高台へ移動。

陸上はともかく、今の自分に対空用の攻撃技はない。自分を嘲笑うような不快な羽音に、健は苛立ちを感じた。万策尽きたか、と、あきらめかけたが。

「……待てよ。古典的な方法だが、案外きくかもしれない」

古典的なその方法とは？ とても簡単なことだ。『相手にケツを向けて、それを叩く』。ただそれだけ。

バカにされた相手はたいてい怒り狂う。だが、よい子は真似しないように。

「やいやい、赤トンボども！ こっち向けや！」

尻を向け、ペンペンと2回叩く。すると健の思惑通り、レッドヤンマは激怒。興奮状態で飛びかかってきた。

しめた、と、健は炎の剣で切り上げて反撃。炎が燃え移るとレッドヤンマはパニックを起こし、迷走。

更に健は機転を利かせ、この隙にもう一体の方へ向かうと身構えた敵の眼前に人差し指を突き出した。いったい何をしようというのか？

「健、ふざけてる場合じゃなからう!？」

「まあ見ててヨ……小さい頃トンボ捕まえようとしてよくやったけど、全然捕まんなかったっけね」

アルヴィーの制止を振り切ると、健は小さい頃の思い出を語りながら人差し指をクルクルと回し出した。するとトンボの化け物は、目を回してフラフラになったではないか。

「しめた! たあ つ!」

真つ二つに叩き割って消滅させると、健は火がついてパニックに陥っていたもう一体にも着手。

火はもう消えていたようだが、すっかり相手は弱っていた。

金切り声で威嚇するも健はものともせず、赤トンボ目掛けて突っ走る。

「ゴゴゴッ…」

必死こいて逃げながら黄色い消化液を健に吐きかけるも、まるで当たっておらず悪あがきにしかなくなっていなかった。

「みゆきをいじめるヤツは許さん！」

瞬時に属性を氷に切り替えて高く飛び上がり、急降下しながら真っ直ぐに剣を地面へ向ける。

「アイスブレイカあ　　ッ！」

「ビビビユ　　ッ！！！」

急降下からの突きを受けて凍結したかと思えば、直後にヒビが入り赤トンボは雲散霧消。

このようにアイスブレイカーは氷の剣で急降下突きを繰り返して、相手を凍結させると同時に粉碎する荒々しくも美しい技なのだ。

剣をしまつと、健はみゆきとアルヴィーに駆け寄った。

「さ、もう大丈夫だよ。ケガはない？」

「助けてくれてありがとう！」

その場のノリかそれとも好意からか、みゆきは健の頬にお礼のキッスをした。

健は鼻の下を伸ばして照れ臭そうに笑っていた。

「青春、だの」

アルヴィーはそれを温かく見守っていた。

彼らの背後で、その光景をとらえていた小型の偵察メカが浮かんでいたことなど知らずに。

薄暗いその部屋は研究室らしく、ホワイトボードにはびっしりと資料や写真が貼られ、デスクにはピーカーと山積みのファイルが並

んでいた。

薄暗いその部屋には、二人の男がモニターの前にいた。白衣を着た壮年の男性と、ランスとバックラーを持っていて髪を金髪に染めた若い男性だ。

「あのすばやい身のこなしと柔軟且つ堅実な戦いぶり……彼が君の言っていた青年かね？」

「はい。教授」

興味深そうにモニターの映像を巻き戻し、最初から再生する白衣の男。

この男こそが、不破と利害が一致したため協力関係を築いている【援助者】だ。

「少々受け入れがたいですが……」

そう、いま白衣の男の隣にいる男性は「不破ライ」その人なのだ。

「君は彼に強いエスパーになれる素質があると言っていたね？となれば、今後化ける可能性は高い」

幾何学的な数式がいくつも記されたメモに、白衣の男・プロフェッサーが新たな数式を書き加える。

「彼はいま私が描いている、壮大な数式の不確定要素となりえる存在だ。これからもいいデータが取れそうだよ」

プロフェッサーのその言葉をよしとせず、不破は舌打ち。

「ですが、教授。彼はまだ未熟だ。ろくに戦闘経験もなく、その

上まぐれで強力なシエイドと契約して強い能力も手に入れただけにすぎません。そんな運の良さだけしか取りえのないあいつとオレと、どちらを支持する気なんです!？」

「気持ちには分かるが落ち着きたまえ」

憤った不破は壁を殴り、プロフェッサーに苦言を呈す。しかしプロフェッサーは興奮しているライを軽くあしらうと、すぐに解析する作業へ打ち込んだ。

「そう怒るんじゃない。確かに君は強いがね、少々慢心しすぎではないのかな？ 彼のように謙虚でまっすぐな心がなければ、君は今の段階で頭打ちとなるぞ」

飄々とキーボードを打ちながら語るプロフェッサーを前に、ライは苛立ちを隠せず拳を怒りのままに震わせていた。

「……今日はもう帰らせてもらいます」

不破は嫉妬していた。なぜだ。なぜおれよりあとに、それもつい最近エスパーになったばかりでろくに鍛錬もしていないあいつが強くなっている？

あいつの天賦の才と素質がそうさせているのか？ 分からない。解せない。認めたくない。

死ぬ思いをしてまでここまで登りつめた俺が、あんなぬるま湯に浸かりながら育ってきたようなふざけた奴に先を越されるなんて、絶対に認めやしない。

おれは温室育ちのボンクラとはわけが違っただ。そうだ。おれはあんなゆとり教育を受けてきたガキなんかよりずっと強いはずだ。

楽しんで強くなったあいつとは根本的に違っただ。東條健……おれはお前を認めない。

「くそッ！」

研究室を出ると不破は壁に拳を叩きつけ、なおも晴れないもやもやを胸に抱えながらその研究所をあとにした。

雨が降りしきる中、ライトに照らされた門のプレートには「ごう記」されていた。

『大久保生体リサーチセンター』

EPISODE 13：使い分けが肝心（後書き）

【ファンゲウルフェン・ブレイズ】

赤いオオカミのシェイド。

気性が荒く常に興奮しており、怒りに任せて火を撒き散らす危険なやつ。

動きはすばやいが打たれ弱く、比較的倒しやすい部類に入る。

【ファンゲウルフェン・フロスト】

青いオオカミのシェイド。

非常に凶暴で、相手に冷気を吐きかけて凍らせてからじわじわとかじり尽くす残忍なハンター！

動きはすばやいが打たれ弱く、倒しやすい部類に入る。

EPISODE 14：邂逅

冷たい雨を身体中に受けながら、不破はバイクで夜のハイウェイを疾走していた。やがて、京都へ着いた。空は月明かりをさえぎる雨雲に覆われ、彼を照らすのはおぼろげに輝く街灯だけ。誰もが眠りに就いている深夜　自分だけがこうやってバイクをかつ飛ばしていることに、不破は未だかつてない程の孤独感と哀愁を感じていた。

「3日ぶりだ」

激しい雨のシャワーを潜り抜け、不破は自宅へと辿り着いた。安心と信頼のマンションだ。ため息まじりに呟くと、びしょ濡れになった服を着替えリビングの灯りをつけた。

「天国の美枝さん、元気でやってるか。オレは元気だよ」

不破は幼い頃に両親を失い、孤児院に引き取られた。更に恋人の美枝と出会うも、発火事件で彼女を失った。いまや天涯孤独の身だ。復讐する為に警官をやめ、エスパーとなった彼は今では浮浪者同然だが、とくに金に困った様子はない。なぜなら彼は、警官時代は同僚がうらやむほどの超高給とりであり、一生遊んで暮らせるほど貯蓄もあつたのだ。更に毎朝の洗顔や歯みがきも欠かしていない。元々まじめな彼の性分が、復讐鬼と化した今でも彼をそうさせているのだろうか。

「んっんっ……気持ちいい朝だー」

そして、眠れぬ晩を過ごした不破に朝が訪れた。朝食と朝の支度

を速やかにすませ、棚に立てかけてある自分が美枝と一緒に写った写真を前に仇をとる誓いを立てると、今日も彼は外へ足を踏み出す。紺色のジャンパーにジーパンで。道路沿いの自販機で暖かいコーヒーを買おうとすると、そこに陣取っていたチンピラが不破に絡んできた。

「誰あんた？　ここ、俺らのテリトリーなんだけど……ぐふえっ！」

不破は無言で絡んできた男の顔面を殴り飛ばした。コーヒーを飲んだあと歩いている不破に立って続けにチンピラが襲いかかって来たが、不破はいずれも軽く叩きのめしていた。普段から鍛錬を欠かさない屈強な不破にとつて、この程度の連中は並みのシェイド以下だ。本気を出してやるまでもないザコだった。

「はあ……なんでオレに寄ってくるのはガラの悪い野郎ばかりなんだろうな。これが女の子だったらいいなだが」

不満を述べつつも、不破はバッテリーセンターへ。15分ほど打つと景品を手にセンターを出て、今度はスポーツジムへ。ここは以前、彼がサンドバッグをブチ壊したところと同じジムだ。勢い余ってまたまたサンドバッグを破壊してしまい、このあと弁償するこたになつたが。

「中々いい店じゃないか。このカフェ、穴場だったかもしんねーな」

そのあとは休憩がてら、府庁前のオープンカフェへ寄る。ここでもコーヒーを嗜み、それと一緒にカツサンドもほおばった。何にせよやるのが何もない。カフェをあとにしてからも放浪を続けた。京都は古都であるゆえに名所も多い。そしてとても広大で、一日だけでは探索しきれない。歩いていて飽きない場所だ。迷えば元も子

もないが。

「ふえ〜、さすが名所だ。いい眺めだぜ」

心地よい風が吹き、清らかな川がたもとに流れる渡月橋。多くの人
が行きかう中、不破は川の向こうをじっと眺めていた。

「俺って何やってんだろうなあ……」

ため息をつく不破。もたれて対岸の空を見上げようとしたが。

「この気配……誰だ！」

突如として漂ってきた焦げ臭いにおいを感じ取った不破は、すぐ
に守りの体勢へ入った。敵にいつ襲われてもいいように。

「そう怖がることもあるまい……」

橋の中心に火柱が立つと共に忌々しい声が聴こえてきた。人々が死
に物狂いで逃げてゆくと、火柱が消えると共に黒ずくめの男が姿を
現した。

「貴様は!？」

不敵に笑いながらゆっくりと歩み寄る黒ずくめの男。不破は黒ず
くめに対し、かつてないほどの剣幕で睨みを利かせていた。

「浪岡……十蔵……!」

「久しいな、不破ライ」

怨めしそうに呟く不破をけなすように、黒づくめの男はほくそ笑んでいた。1メートル離れた、不破の後ろで。まるでその姿は、地獄から来た死神のようだった。

「貴様と出会うのも、実に2年ぶりだなあ！」

不破のバックラーを弾き飛ばし蹴りを入れると、追撃で腹に強打。更に火の玉をぶつけ、不破を黒コゲに。

「憧れだった警官をやめてまでエスパーになったそうだな？　だが貴様は、今でも私に手も足も出ていないではないか」

左手でぐつと不破の首をつかみ、天へと掲げる浪岡。後光が浴びせられ、仰々しい雰囲気が漂い始める。

「皮肉なものよな。夢を捨ててまで力を手にしても、私には敵かなわないとは。まさに本末転倒　笑い話にもならんよ、虫ケラが！」

苦しい。悔しいが、手も足も出ない。強い、強すぎるのだ。目の前にいる怨敵が。警察を辞めてから、この2年間で培ってきた経験はすべて無駄だったというのか？　どうやっても、自分はこの男には勝てないというのか？　分からない。なぜだ。どうしてなんだ。俺は強いのに。少なくとも？ヤツ？よりは、圧倒的に強いのに。なのに、なぜだ。なぜなんだ？

「く、くそ。離せ……」

「なんだ、リクエストでもおありか？」

「その汚い手を離せ！」

「クツクツクツ……そう焦らすな」

バツ、と、浪岡は首を掴んでいた手を離した。すぐに右手で回転する軌道の炎を放つて。

「うっぎゃあああああ！！」

「フツハツハツハツ！ 貴様には地面に這いつくばりながら泥をすすする姿がよく似合うな。そうは思わんか？ 不破ライ！！」

炎上しながら不破は渡月橋のたもとに流れる清流へ落とされてゆく。その上では、浪岡が自分を見て嘲笑っていた。

「ちく……しょう……ッ！」

屈辱だ。いまだかつてないほどの、屈辱だ。不破は悔しかった。何も出来ずに川へ落とされ、流されてゆく自分を情けなく思っていた。もっと強くなってやると、心に誓っていた。悲しみの水が流れる清流の中で。

「このまま三途の川へ直通だろうな。フツハハハ！！」

不破を鼻で笑ってやると、浪岡は人気のない渡月橋から立ち去った。炎の中へ消えるように。

EPISODE 15：徹底リサーチ

翌日の水曜日。健はいつも通りにバイト先へ行き、今日もあくせく働いていた。もちろん情報収集は欠かさずに。自分自身を平凡とはいうものの、彼はパソコンに関しては意外と強い。キーボードは早く打てるし、苦手な、あるいはやったことのないことでも手取り足取り教えればキツチリこなせる。経験したことが、彼の中へ蓄積されていていつているのだ。その飲み込みの早さから、職場内では注目の的となっていた。本人は謙遜しているが、それほど彼のコンピュータに関する腕前は目を張るものがある。

「うわあ、またかよ。ホント最近はおっかないな……」

きょうの仕事の合間に見たニュースの中には、思わず目を疑ってしまうようなものがあった。嵐山の渡月橋で突然起こった発火事件。幸いこの前の高架下のものと違い、死亡者は出なかったらしい。

「普通はこんなものありえない。ってことは……エスパーのしわざだ！ みなさんに聞いて回ろう。何か手がかりが得られるはず」

健はサーチをかけはじめた。知りたいことには何かなんでも首を突っ込んでしまう、彼の悪いクセだ。これでもだいたいぶ深追いしなくなっただけであり、小さい頃はもっとひどかった。小学校のときに性教育の授業で余計なことまで聞いてしまい、この事は健にとって一番の黒歴史になったという……。健はマツハでちあきやみはる、ジエシーらにサーチをかけた。ケニー係長も気さくに話しかけてきたが、どうせまた城の話だろうと思いきや無視。最終的には、この職場のチーフである大杉に聞いてみた。聞いた事をまとめてみると、発火を起こしたのは黒ずくめの男性ではないかという確証が得られた。

「東條くん、今日もご苦労さん。また今度も頼むよぉ」

バイト代を受け取り、健は帰宅。

「ただいま」

「おう、早かったの」

やはり……というべきか、アルヴィーによつて健のおやつがまたも削られていた。今回犠牲となったのは、珍しい紫色の芋けんぴ。健は残念そうにしながら、洗面所へ駆け込んだ。

「こたつから出たくねえ」

「お主はネコか？」

こたつに入つてしばらくほっこりしたあと、健は今日起こった出来事を洗いざらいアルヴィーに説明した。ココナッツサブレを食べながら。やれやれ、と、少し呆れるように微笑む彼女の姿は、もう一人の姉のようだった。そういえば姉は、綾子ねえさんは元気にしているだろうか。母さんを支えてあげられているだろうか。ここ数ヶ月はまともに顔も見せていないし、そろそろ会いに行つたほうがいいのかもしれない。

（まるで姉さんがもう一人いるみたいだ。でも、あの人は怪物シェイドなんだよな）

それにしても、アルヴィーと出会つてからもう何週間経つのだろう。彼女は今でこそヒトの姿をとっているが、元はといえばバケモ

ノ。ヒトならざる者だ。

人知を超えた『人外』。元はあの怪物どもと対して変わらぬ、危険な存在。しかし彼女の本来の、莊嚴で神秘的な姿。シエイドとは次元が違う、あの壮麗さ。偉大さ。あれには文字通り魅了された。彼女は本当にシエイドなのだろうか？ 彼女はシエイドを名乗っているだけで、実際は幻獣とかの神に近い存在なのではないのだろうか？ 健は少し、不安になっていた。いつか食われてしまうのでは……と。気付けば自分は考え事をはじめて悩みを抱え出して、食指が止まっていた。アルヴィーが頭上に『？』マークを浮かべて、こっちを見ている。

「健、そんな暗い顔をしてどうした？」

「あ、いや……なんでもないよ。さ、食べよ食べよ」

そうやって再び食べたすと、容器にあんなにたくさん並んでいたサブレはあと一枚を残すのみになった。

「……アルヴィー、最後の一枚あげる」

「もうラスイチか、早いものよな。すまぬが、それはお主がもらってくれないか」

実はアルヴィーは、健が考え事をしだした時にサブレをこっそりとつまんでいたのだ。そのために数が減って残り少なくなっていたのだ。

「……うん、分かった。そうさせてもらうよ」

健は最後の一枚を、遠慮なくいただいた。

EPISODE 16：お医者さんなんて……

不破は川の下流で発見されたあと、緊急で市民病院へと搬送された。

大きなダメージは負っていたものの一命をとりとめ、現在は病室で入院生活中だ。

「っあ………」

不機嫌そうに不破が小さく唸る。彼のベッドの近くには、小さなテレビと棚、窓辺には花瓶が置かれていた。

入院してから3日。最初は薬品臭くて嫌だった病室にも、今ではすっかり慣れてしまった。

「不破さん、調子どう？ おれは元気だよ」

「いいなあ。オレはもう元気ないです……さっさと出たい！」

同じ病室の入院患者ともうまくいつていた。誰もかも、気さくで話しやすい人ばかりだ。

しかし不破はいまの状況に不満を持っていた。早く動きたくて体がウズウズしている。だが、まだ怪我は完治していない。このままでは体がくさる。

「速く外の空気が吸いたいなあ」

ため息をつきながら外の景色を眺めていると、年季の入った男性の声が聞こえた。担当の医師が入ってきたのだ。

これに関しても不破は、あまりよく思っていなかった。彼は本当は、かわいいナースか美人な女医に自分を診てもらいたかった。

「お体の具合はどうですかア？」

しかし現実には非情である。彼を診察してくれたのはオッサンだったのだ。それもハゲ頭な上にケツアゴで悪人ヅラをしており、実にうさん臭い。

「せんせエ、俺はいつ退院できるんですかア？」

「そうですね、あと2日もすれば退院できますよ。あなたの怪我ももう、だいぶ治ってきてますし。グへへへ」

不快な笑い声を上げると、医師はカルテに不破の様子を書き込んだ。

(こんなにイライラしたのは、何週間ぶりだろーな……ギギギ！)

不破のストレスはたまる一方だ。しかし入院生活はもうすぐ終わる。あと少しのがまんだ。もう待ちきれない。早く出せ。こんな薬品臭い部屋とはおさらばしたい。

翌々日

「あいたたた……」

ついに不破は薬品臭いあの病室から脱出できた。

ランス片手に足を引きずりながら、今日も元気に不破は歩いていった。

「くそッ、何があと2日で退院だよ。まだ身体中そこかしこが痛い

つつーの……ヤブ医者め、さてはめんどくさくなって俺をロクに診察しなかったな」

「ロクなやつがいねえ」と喘ぎながらも、不破は自宅を目指す。やっとこさ、バイクを停めてある駐輪場へ辿り着いた。

「ウチ帰ってさっさと寝よ……」

きしむ骨に鞭打ってバイクに乗り込むと、そのまま自宅へと直行した。

もちろん風呂にはキツチリ入浴し、歯みがきしたあとはそのまま寝てしまった。

さらに翌日

鍛練を欠かさない不破は、朝食と支度をすませるとすぐにトレーニング場に行っている三丁目の空き地へ向かった。

まずは鉄パイプをランスに見立て、素振り。次に、なぜか又んちヤクを振り回す。ゲーム機のリモコンにつけて遊ぶやつとはまた違う。あれはストラップのヒモをつけなければ危ない。

最後に、空のドラム缶をシェイドに見立て必殺技を当てる練習。このあと、近所のオジサンに怒られてしまったらしいが、それはまた別のお話。

「ま、こんなもんか」

そのとき、不破の腹の虫が唸りを上げた。『I・M HUNGRY!』と。

「早いなあ、もう昼メシの時間だ」

気付けばもう昼だった。腹が減るのも仕方ない。不破は昼食をとる場所を探しはじめた。途中でガソリンが切れ、ガソリンスタンドの世話になってしまったが。

「いっぺんココ行ってみるかね」

いろいろ巡った結果、ファミリーレストラン『トワイライト』に決まった。

みゆきがバイトをしているファミレスで、健もちよくちよく来ている場所だ。

「いらっしやいませ」

藤色の髪をサイドテールでまとめた、くりつとした赤紫の瞳がかわいらしいウエイトレスが不破を出迎えてくれた。

不破は彼女に見覚えがあった。この前サソリのシェイドに襲われていたところを助けた少女、みゆきだ。

これも運命か、と、呟くと、不破はみゆきに空いている席まで案内された。

「ハンバーグステーキの三点セットで」

三点セットとは、メインディッシュにライスと野菜サラダを付け加えた組み合わせのことだ。

この場合は、ハンバーグステーキにライスとサラダもついてくる。

「ハンバーグステーキの三点セットですねー。かしこまりました！」
「ウヒヒ、かわええのうー」

にこやかに笑顔をふりまき、みゆきは注文の品を受け取りに向かった。

不破はそんな彼女に見とれてニヤニヤしていた。当然他の客は、そんな彼を気持ち悪がっていた。

みゆきはバイトの身ながら、ホール担当としては非常に優秀だった。

一度聞いた事を忘れないようしっかりとメモし、ていねい正確にかつ速やかに注文の品を配っている。その働きぶりから職場の先輩からも好評を得ており、正式採用も時間の問題だとか。

「うーん、あのコ遅いなあ。早くこねえかなあ……」

不破が暇そうに頬杖をついて窓の外を眺めていたのも束の間、注文していたハンバーグステーキの三点セットがマッハでこっちにやってきた。

これにはさすがの不破も驚いたようで、目を何度も瞬きしながらハンバーグを凝視していたという。

「う、うめえ！ 来てよかった！」

がつつりいただくと、不破はトワイライトをあとにした。

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

みゆきの黄色い声とかわいらしい容姿に、不破はすっかりメロメ

口だ。健から彼女を奪ってしまわなければいいのだが。

EPISODE 17：いろいろと楽じゃない

「盗んだバイクで走り出す、なんつってなあー」

ファミレスから出た不破は、バイクにまたがり再び何処しよへと向かおうとしていた。食後の運動といわんばかりに、更なる鍛錬を積む気だ。健のように家でのおんびりしているわけではない。

「む……あいつは」

道路沿いのスーパーマーケットを横切ったところで、何の偶然か不破と健がばったり出くわしてしまった。不破はギロリと鋭く、健を睨んでいた。

「ほお、誰かと思えばずるい東條じゃねえか」

「ず、ずるいつて何が!？」

不破が憤った。バイクから降りて健に一発ブチかますと、そのまま胸倉を引つつかむ。

「とぼけるなよ。オレはな、血のにじむような努力を重ねてエスパーになったんだ。だがお前はどうか？ まぐれで強いシエイドに会って契約して強力な能力も手に入れてよ……。まるで無駄な努力と否定された気分だった。それが嫌だったんだ！ てめえみてエなクソガキでも頭使えば分かることだろ！」

「そ、それは違う。確かに強いかもしれないけど、まだ扱いこなせてるわけじゃない。だからどっちにしても不破さんのほうが僕より

……」

「うるさい黙れ！^{アマチュア} 三下が口答えするな！」

健をまくし立てた末に地面へ叩きつけると、バイクへまたがった。エンジンを鳴動させ、マフラーから煙を噴かせる。まるで不破の怒りに呼応するかのような激しさだ。まるでバイクではなく、鼻息荒い暴れ馬のようだった。

「いいか！ よーするに、いきなり上位のシエイドと契約できるなんて普通じゃありえねえってことだ。よく覚えておけ、じゃあなクソガキ！！」

怒り爆発のアクセル全開で、不破は疾風のごとく走り去っていった。

「……悪い事、しちゃったのかな。ま、いいや。買出し行こーっと」

スーパーといえば、特売。スーパーといえば、半額。スーパーといえば、争奪戦。

「ラッキー、空いてる」

健は今、おばちゃんもとい、奥様方の戦場へと足を踏み入れた。とはいえ、今は昼時。この時間帯なら比較的空いており、品定めもやりやすい。だが、問題は夕方である。主婦たちが一斉に駆け込んでくるのだ。そうなってしまうえば、ひとたびスーパーマーケットは文字通りの戦場と化す。少々大げさだが、事実である事をあえて言っておこう。

「どれにしようか……？ あ、アレとか良さそうだね」

買い物というのは意外と迷うものだ。なるだけ安いのを見つけたり、品物の分量を見て買うか買わぬか判断をしなければならぬ。値段だけではなく、分量も見て買うことを心がけるべきである。この頃はごちそう続きで食費がかさばっていたため、健はすぐに食べられるようなものや比較的安いものをカートへ入れていた。バイト代が高いとは言えども、使いすぎは厳禁なのだ。

「440円になりますー」

レジではかわいらしい女性店員が出迎えてくれた。健が買ったものは、鶏のからあげのしょうゆ味が1パックと栄養ドリンク1本、そしてバナナの束。それぞれ194円と88円、158円。割と安上がりだ。健は笑顔をレジ打ちの女性に振りまくと、買ったものを袋に詰めてスーパーを去っていった。

「ただいま」

「おう、早かったな」

健が玄関のドアを開けリビングへ入ると、アルヴィーがリモコンとヌンチャクのようなコントローラーを持ってゲームを遊んでいる姿が目にとまった。今日の彼女は白いワイシャツに黒いミニスカートを着いており、例によってボタンが弾けそうなほど胸が突き出ている。更に、スリットから太もが見えそうで見えない。きわめて扇情的なスタイルだ。それはネクタイをぶら下げたゴリラと、ぼう

しを被って服を着たチンパンジーのゲームだった。リモコンやヌンチヤクを振って地面を叩いたり息を吹きかけたり、転がったりするようだ。

「風呂場、洗っておいたぞ。5時以降に沸かしてくれんかの」

「わかった、サンキューな！」

手洗いうがいと着替えを済ませると、棚にしまったおいたビスケットを取り出しテーブルへ。アルヴィーもゴリラのゲームを中断し、イスに座った。

「今日は何か変わったことはなかったかの？」

健は今日の出来事を洗いざらい説明した。スーパーに行く際に、不破に出会って非難されたことだ。

「そうか、そういうことがあったのだな」

「どうしよう？ 僕、不破さんにとって悪いことしちゃったのかな……」

「そう気にすることもあるまいて。恐らく不破殿は頭に血が上っているのだ。彼の気が済むまで、言いたいことを言わせてやればいい。ほとぼりが冷める頃には、お主の事を許してくれるはずだ」

そう聞いて健もホツとしたのか、胸を撫で下ろした。辺りがすっかり寝静まった頃、アルヴィーは眠れずにいた。爆睡中の健の横で、考え事をしていた。

不破殿はなぜ健を罵倒したのだ？ 単にひがんでいただけだろうか。彼自身はとくに弱くはないはず。むしろ今の健より強いと思うのだが。そんなに健が上位のシェイドである私と契約デイルしたのが気に入らなかつたのか？だが、あの能力は、確かに強力だがクセがあつて使いこなすのは困難だ。それに比べたら、超高速で動ける不破殿の能力のほうがシンプルで使いやすいし、こういったモノかも覚えやすい。それに上級だからといって、必ずしもその能力が強いとは限らない。むしろ通常のシェイドの方が能力が使いやすいことも少なからずある。いろいろ考えたが 結局はただの嫉妬、なのだろうな。だが、その嫉妬から健への殺意に駆られることも出てくるかもしれない。いずれにせよ、不破殿と付き合うには用心がいるだろう。

「いかん、ムラムラしてきおつた……んんっ。お主、寒かろう………私があたためてしんぜよう」

考え事をして体が興奮してきたのか、アルヴィーはおもむろにその透き通るような白い乳房をはだけた。そしてそのまま、健に抱きついた。翌日。健が目覚めると、すぐ隣で豊満な胸をさらけ出したアルヴィーが自分に抱きついていて興奮してしまつたという。

EPISODE 18：バイト君は非常勤（前書き）

今回予告！

健がバイトに行く日数が月と水にしぼられた。

健がいない中でも頑張る浅田さん達が知らないところで、健は凶悪なシェイドどもを退治していた。

そんな中、銀行で爆発が起きる！ 果たして、健の運命やイカに？ タコに！

EPISODE 18：バイト君は非常勤

心地よい朝陽が窓から射し込む、朝のオフィス。

羽織ってきたコートをロッカーへ仕舞うと、女はメガネをかけて己の持ち場へつく。

「おはようございますっ」

彼女は今井みはる、この事務室に来て2年め。プログラマー志望で、細々と事務仕事をする傍らでプログラマーになるのに必要なことを少しずつ身に付けている。

将来は、ゲームのプログラマーを目指している。自身もかなりのゲーマーであり、休日は自宅でオンラインゲームなどで時間を潰しているのだ。

内向的且つ控えめな性格で、人と対面することが苦手な彼女だが、ネットでは元気で明るく振る舞っている。ネットでは基本的に相手の顔が見えないため、自然と怖じけずに喋れるそうだ。

「おっはよー」

腰上まである髪をひとつにくくっている彼女は、浅田ちあき。

職場内のみんなから頼りにされる姉御肌で、本人も面倒見がよく明るい性格をしている。ここへ来て3年目であり、1年上のジェシーと共に後輩への指導やアドバイスを自ら進んで請け負っているようだ。

ジェシーやみはるとは仲が良く、昼休みは三人でよく世間話をし、休日は三人でよくショッピングへ行くほど。

「今日は係長が休みみたいですよ。わたし、係長の分も仕事するわ

ね」

流れるようなプラチナブロンドの長髪に蒼い瞳が美しい彼女は、ジエシー・西條・エレノア。外国人の母と日本人の父との間に生まれた、ハーフである。

おっとりした性格で優しく、物腰柔らかい彼女は、この職場における最大の癒しである。

比較的裕福な家庭の生まれであったが、ひそかに普通の暮らし…つまり庶民の生活に憧れており、高校に入ってから一人で生活する力を身に付けるべく、それまでメイドや執事に任せていた家事や雑用を率先してやるようになり、結果として彼女は自立するのに十分な生活力とテクニクを身に付けた。

とはいえ、天然で高校の時から感覚がズレているところがあり、今でもボケてしまうことがしばしばあるようだ。

なお、彼女はちあきやみはるととても仲が良く、オフの日は良く遊びに行ったりシヨッピングしに行ったりしている。この三人娘の中では一番年上で、同じ年代のちあきと共に後輩への指導やアドバイスを自ら進んで請け負っている。

職場の同僚たち曰く、彼女がいるとなぜか安心感が伝わってくるという。誰からも頼りにされるお姉さんなのだろう。

「東條くんもいないわよ。あの人すっごい働き者だから、いざいなくなると辛いわねえ」

「本当によく働いてくださいますよね」

「東條さん、ちょっと荒削りなところもあるけど、叩けばきつと伸びるタイプよ。まさに期待の新星ね」

三人とも共通しているのは、健が月水のみ来るようになって寂しいということだ。

健は明るく話しかけやすい好青年で、しかもよく働く。彼がいる

だけ職場もだいぶ助かるというもの。

「みんなも、東條さんと係長の分も頑張って仕事しましょう」

「はい！ さて、あたしは郵便物を……」

「じゃあ、私は掲示物の作成をしますね」

今日は木曜日。健は来ないが、他のメンバーは気合を入れて仕事に取り組んでいた。

「待てエ ツ！」

「ゲゲゲ！」

その晩、健はエーテルセイバーを手に逃亡中のシェイドを追っていた。相手はカメレオンの人型、つまりカメレオンの怪人だ。

現ブツと同じように周囲の環境に併せて体色を変化させることで姿を消すことができ、その特徴ゆえ健も手を焼いていた。

「健、ヤツはあそこだ！」

アルヴィーに言われるがまま、道の少し歪んだ箇所ジャンプ斬りを浴びせると保護色が解け、カメレオンのシェイドが姿を現した。舌を伸ばし健へと反撃する。だが、健はそれを横に跳んで回避。カメレオンはまたも姿を消し、逃走を続ける。

「あいつ、どこまで行く気だよ……」

不満を洩らしながら追っていると、カメレオンは広いグラウンドのある校舎に逃げ込んだ。

ここは【松宮中学校】。4階建ての中学校で、大きな体育館が裏手にある。当たり前だが人気はまったくない。

夜だから　というのもあるが、それ以前に廃棄されたかのよう
な寂しさを漂わせていた。

「ここに逃げ込んだな？　よし、待ってる……あれ？　あ、あかな
い」

フェンスを乗り越え正面玄関から入ろうとするも、扉は開かない。
いくら押そうが一向に開く気配はない。当然だ、こんな夜中である。
もう職員全員も帰宅し、とつくに閉められている。今この校舎に
人がいるとすれば、せいぜい人体模型やトイレの花子さんくらいだ。
もつとも、これらは人ではなくおぼけの類だが……。

「押してもダメなら引いてみな、という言葉があつたであろう？
押してみたかどうかの」

「ふんぬーっ！」

しかし開かない。現実には非情である。たてつけが悪いのか、と、
健は首をかしげた。

「す、すまぬ。急がば回れ、だ。非常口なら開いているかもしれん
ぞ」

「それだ！　探してみよう！」

頷き、健は非常口を探す。校舎のちょうど裏手に回ったところに
非常階段を見つけた。

しかしだいぶガタがきていて錆び付いており、少々心許ない。そ
れでもこの階段を駆け登り、3階辺りで非常ドアを叩いた。

だが、案の定この非常ドアも錆びついていて開かなかった。今夜
は何かと阻まれてばかりだ。

「阻まれてばかりだの……健、こういう時はどうするか知っておるか？」

「それなら知ってるぜ。力を合わせて扉に体当たりするんだよ。でも僕しかいないからできないや」

とぼけたことを言うな、と、アルヴィーがやれやれと笑いながら人間体へ化身した。

荘厳な白龍ホワイト・ドラゴンから素敵なレディとなった彼女に肩を壊させるわけにはいかないので後ろへ下がらせ、二人で思い切りドアへ体当たりする。

二人分の重さによる衝撃が赤錆びたドアを貫き、校内への道を切り開いた。

一刻も早くシェイドを見つけなければ、と二人は躍起になる。学校中くまなく探し回ったが、クラスルームにはいなかった。他のところにもいない。

「音楽室にも視聴覚室にもいなかったぞ。ということは考えられる場所はひとつ……」

体育館はまずない。窓から入れるがそんな回りくどいことをしてまで入っている時間はない。

トイレも探そうとしたが乙女なアルヴィーに却下された。職員室はそもそも閉まっている。

美術室も考えられたがその辺まで行くと正直めんどくさい。夜の校舎で怖いところ、何かがいそうなところの定番といえば？

「もしかして理科室、ではないか……」
「え」

まさかと思い、理科室へ。また二人で体当たりしてこじ開けて入ったが、やはり誰もいない。

棚を物色するが、とくにめばしい物は入っていないかった。そうしているうちに部屋の奥の物置から音がしたので、恐る恐る扉を開けてみると。

「で……」

健の顔が引きつった。その傍らでアルヴィーが彼にしがみつく。

「出たあああああああああ！！」

二人そろって、絶叫。

その眼前には、脳ミソや五臓六腑、神経や筋肉が半身むき出しになっっている怪人物の姿が！

だが、その人物にライトを当ててみると。 。
正体は人体模型だった。ちびっ子を怖がらせることに関しては定評のあるやくものだ。

「な、なんだ。おしっこちびるかと思った……」

「健、おなごの前でそんなことを言うものではないぞ。まあ許す」

安堵の息をついて物置を出る。シェイドがない事を確認し、理科室をあとにしようとしたが……。

「ケケケケ……！！」

金切り声が、自分たち以外誰もいない部屋にこだまする。身構え辺りを見渡す健の背後に、長く伸びた舌が襲いかかった。

「た、健っ！」

「しまった！ 隠れてたのか！」

健を床へ叩きつけ、起き上がった健に毒液を吐いて追い討ちをかける。

吐き出された毒液を防ぎ、ジリジリとカメレオンのシェイド・インビジレオンへ近寄る。

剣を振るが持ち前の軽いフットワークでインビジレオンは回避。

健を嘲笑うようにインビジレオンは両手を上げ、自慢の長い舌を見せびらかしている。

このままでは埒があかない、と、苛立つ健にアルヴィーがアドバイスを授けた。

「健、相手の背後を狙うといい。まず左右に飛んで回り込んで、ヤツの背後を叩ききれ！」

「左右に飛んで回り込む、それで叩ききるね。わかった！」

まず相手の真横へ飛ぶ、次に転がって背後へ回り込む。そしてジャンプしつつ切り上げる。

するとインビジレオンは悲鳴を上げ、よろめいた。

「これでも食らえ、イボイボ顔め！」

とどめに、アルヴィーが顔を蹴っ飛ばす。更にかかと落としをお見舞いし、相手を地に伏せさせた。

「よし、じゃあトドメは僕が……うおおおオ

！！」

高く飛び上がり、倒れたインビジレオンの咽喉へ真っ直ぐに突き立てる。

うめき声を上げて汚い唾液を吐き出し、インビジレオンは息絶えた。消滅したシェイドを見届けると、健は安堵の表情でため息をついた。

「相手が一体でよかったの。さて、もう夜が更けておるぞ。そろそろ帰らぬか？」

「そだね、帰って寝よう」

「真っ暗だなー。あ、でも星がきれいだ」

「まっこと、その通りだのう」

街頭と手持ちのライトを頼りに暗い夜道を歩いていると、

自転車に乗ってパトロール中の警官が健を発見して近付いてきた。

「こらーッ！　こんな夜中にいつたい何をしていたんだ。正直にいなさい！」

「わわっ、すみません！　ほ、ホラ、アルヴィーも……ってあれ、いねえ」

「君は何を言っているんだ!？」

警官に捕まった健は交番へ連れていかれた。

事情を説明した健は謝罪し、警官も軽く注意を促してそのまま帰してくれた。マジメで敵しそうではあったものの、人柄のよい警官であった。

「あー……解放された。あのおまわりさんがいい人で助かった……
さて、帰ろう」

このとき、アルヴィーは既にいなかった。あとで分かったことだが、彼女は先に帰っていたという。

EPISODE 19：それぞれの隠し味

所変わり、ここはとある研究施設。その内部にあるモニタールーム。

無数のモニターの中で、何かを研究しているフロアが映ったモニターだけをずっと見ている者がいた。

「まいったな。どうも都合よく事は進まないようだ」

「困りましたねえ」

浪岡だ。その傍らにはカルテを手にした緑髪の男性がいた。

ベルトコンベアの上を、ガラスケースに入った発光体が通過していく。

浪岡は、部下たちを大勢率いてこの発光体に様々なエネルギーを加えて合成し、新たなエネルギーを開発する事をしていた。

すなわち、エネルギーの研究機関だ。だが、それは世を忍ぶ表向きの姿。その裏ではシェイドを密かに捕まえ、改造実験を行っていた。

しかし、状況は決していいとは言えない。

エネルギーの加えすぎで暴走して爆発事故が起きたりして、負傷者が多数。シェイドの改造実験も飼育担当が捕食されるなどして好調ではない。

「なあ、緑川。私たちが幼い頃に思い描いた未来絵図のような、高度な文明を見てみたことはないか？　だがその為には、今一度文明を活性化させなければならぬ。人類が過去に培ってきた知識、技術……。それらを使つてな。すばらしい考えとは思わないか？」

緑川は首を横に振った。いきなりこんなことを言われても戸惑うのが普通だ。

「そうか……。君なら分かってくれると思っていただけがなあ。ところで、なぜ我々が新エネルギーの開発に身を捧げているか知っているかね？」

「知りません、何のことですか」

「その理由については、いずれまた話そう。異論はないな、緑川？」

今度は緑川も首を縦に振った。

「分かっているじゃないか。ところで、以前私が新たな実験材料を見つけてきたのは知っているか？」

「……何のことでしょうか。詳しくご説明願います」

「いいだろう」

ニヤリ、と、微笑むと、浪岡はその実験材料について語り始めた。

「では教えてやる。東條という、上級シェイドと契約したエスパーの青年がいた……。ヤツはどうでもいいが、契約を交わしたシェイドは未曾有のエネルギーを秘めている。しかしまだ、しかるべきデータが不足していてね。連中の戦闘データを採取してこい、鹵獲はもう少しあとだ。いいな？」

確認をとると、内容を理解した緑川が頷いていた。

「ハッ！ おおせのままに！」

「では、私は部屋に戻る。お前はモニターで役立たずどもを見張れ」

口元を歪ませ魔性の笑みを浮かべると、浪岡はモニタールームを去っていった。

夜の校舎での戦いから2日後。ここは、駅前に新しくオープンした百貨店。健はみゆきと二人でここへ遊びに来ていた。女性の細腕に重い荷物を持たせてはいけないと、健が率先して手荷物を持っていった。みゆきはそこまで気遣ってくれなくていいと断つたのだが、健はその気であった。『無理に止めるわけにも行かないか』とみゆきが承諾し、今に至るといふわけだ。

「みゆき、おなか空いてないかい？」

「あ、健くんも？ 実はわたしもなのー！ どこで食べよつか。個人的には、1Fのレストランがいいなー。他に食べたいところない？」

健に異論はなかった。満場一致で、1Fにあるレストランで昼食をとることになった。買い物でせわしく動いていたので、ホッとひといきつくことにしたのだ。なお、みゆきが1階のレストランで食べたいと言っていたのには理由があった。よそのレストランはどのようなにして接客をしているのか、料理や内装にどのような工夫をしているのか。それをこの目で確かめ、研究するためだ。レシピを参考にするためもあるが。

「このハンバーグ……隠し味にトマトベース使ってるわね？」

(すごいな、そんなことが分かるなんて……)

「それだけじゃないわ。お肉の外だけじゃなくて、中にも切り込みを入れてる……。隠し包丁ね、どうやって入れたのかな？」

鋭い洞察力だ。食べ持つて気付いた点を語る　みゆきにこんな一面があつたとは知らなかった。これにはさすがの健も、動揺せざるを得なかった。

「……あれ？　健くん？　ごはん冷めちゃうよ……」

「へあつ！？　ごめんごめん！」

無理もない、みゆきの深い観察眼に驚いてナイフとフォークが進まなかったのだから。慌てて健はドリアを食べ始めた。なかなかうまくい。とろけるようにクリーミーで、ごはんはシャリシャリ。口に入れただけでも至福といえる味だった。そうして食事を終えた二人は、引き続きシヨップピングへ赴く。

「もう14時前か、早いなあ……あつ！？」

ニュース速報を見ると、思わず目を見開くようなことが取り上げられていた。

「健くん？　何かあつたの……？」

「ま、松宮中学校って聞いたことない？」

「ごめん、あんまり知らないけど……、取り壊して新しい校舎建てるっていうのは聞いたことあるよ」

「そうか、やっぱりね。実はさ、おとといシェイド追っかけてその松宮中に乗り込んだんだ。理科室で人体模型見つけたりしちゃって、ハラハラしたなあ」

買い物しながら、健はみゆきにおとといの晩の出来事を打ち明けた。不破ライやアルヴィー以外で、自分がエスパーだと言う事を知っているのはみゆきだけ。できるだけ、友人や家族には秘密にしておきたい。だが、エスパーとしての自分の気持ちを打ち明けられる、または辛さをほぐしてくれる理解者が欲しかった。他人を戦いに巻き込みたくなかった。それを踏まえたとえでの、健なりに考えた末の苦渋の決断だったのだ。

「そうだったんだ。あたしだったら多分、怪物シェイドに出会ったら気絶しちゃってる……。やっぱり、健くんはすごいよ」

夜の校舎。幼い頃に一度行ってみたいと考えていた場所だが、結局そこには怖くていけなかった。だが健は、平和を脅かす怪物シェイドを倒すために怖いのを我慢してその場所へ乗り込んだ。戦う力など持っていないみゆきにとって、今の健はヒーロー然として見える。現に健自身も、幼い頃に思い描いた、平和を守るために戦う正義の味方となっていた。ヒーローゆえの悩みも抱えているが……。

「そんなことないって」

照れる健。手元がおろそかになり、荷物を袋ごと落としてしまう。慌てて拾うと持ち直し、そのときの苦労話や何気ない世間話を続ける。

「今日はありがとね」

「どういたしまして。また今度、一緒に遊ぼうぜ！」

みゆきを家まで送り届けると、健はダッシュでアパートへ向かう。やっと手から荷物袋が消えたので大喜びしたい気分だが、もうすぐ陽も沈む。

アルヴィーも心配しているはずだ、あまりはしゃいだり遊んだりしている場合ではない。

「よし、マツハで帰るぞ！」

停めてあった自転車を足をフル稼働させて漕ぎ、無事アパートへ戻ることが出来た。

「ただいま！ つ……つかれたあ」

すっかりヘトヘトになり、床にぐったりと倒れこんだ健を、アルヴィーが暖かく出迎えた。

「その疲れは楽しんできた疲れだな？ お主の顔に楽しかったと、そう書いてあるぞ」

健を起こし、冷蔵庫から取ってきた栄養ドリンクを飲ませると復活。マツハで着替え、手洗いうがいも欠かさずに済ませた。

「大げさというか、なんというか。お主は漫画の世界から飛び出してきたようなヤツだの……」

その頃、東京都。街中を黒地のジャージ姿で駆け抜ける、一人の男。

「オレは強くなる……」

きついロードワークに耐えられなくなったのか、歩道橋を目前にして、都庁から新宿駅まで走ってきた自慢の健脚が悲鳴を上げた。悶えながら、不破は地面へ崩れる。

「こんなんじゃないダメだ。オレは、オレはもっと強くなる……！」

しかし一人呟きながら、雄叫びを上げて再び走り出した。東條のようなだらしのないヤツには、絶対に負けたくない。

あいつは、ぬるま湯に浸かりすぎている。許せない。熱湯にブチ込んで、ヤツにも自分が味わった挫折を味わわせてやる。

「もっと、もっとだ！」

強くなりたいという、まっすぐだが陰湿な形にぐにやりとねじれた願望。

静かに、日々高騰していく復讐心は誰にも止めることはできない。不破はひたすらに走り続けた。鍛錬のため、己の信念のため。

だが、彼は気付いていない。いや、気付けない。過剰なまでの正義感が膨張し、心に残ったわずかな光さえも闇に呑み込まれようとしていることを。

@@@@@@

そして、日曜日。

健は、家にも出来そうなトレーニング方法を模索していた。小一時間ほど悩んだ末、『筋トレが最適』という結論に至った。いや、常識的に考えれば当たり前なのだが。

「おう、健。こんな朝早くから、さてはトレーニングか？」

朝から特訓している健の声が耳に入ったのか、寝巻き姿のアルヴィーが起きて来た。健に質問すると、コップにお茶を淹れてそれを飲んだ。

「うん、その通り。最近サボり気味だったからね」

「だが、まだ6時だぞ。スーパーヒーロータイムはまだ始まらないぞ？」

彼の考えたトレーニングメニューはこうだ。

まずはじめに、腹筋20回。その次は背筋20回。更に腕立て伏せを15回。

なぜかスクワットは入っていない。

「最低でも腹筋だけやっとならば、少しは違うでしょ？ ね!？」

「ふむ、よい心構えだ」

健なりに強くなるうとしていたことに、アルヴィーは関心を払っていた。

「二度寝してくる。メシは私が起きてからにしてくれんかの」

「はいよー」

アルヴィーが再び起きると、さっきと同じ場所には真っ白に燃え尽きた健が横たわっていたという。

EPISODE 20：アイアンフィスト

そして、月曜日がやって来た。新しい一週間のはじまりの日だ、この時から機嫌が悪いと色々あぶない。

いつものように出勤し、朝のあいさつをして回ってから持ち場へつく。何しろ実に4日ぶりの職場だ。この頃は月曜日・水曜日のみしか来ていない為、その間の4日間が空白となる。

その為、月・水はどちらも溜まっていた仕事を消化することとなる。よって、いっぺんに2日・3日分以上取り返すつもりで仕事に取り組まなければならない。ちなみに、健の席には書類が山積み。更に、出勤簿らしきものまで置かれている。

「今日はまず、出勤簿のシール貼りと書類の内容をエクセルに写すのをお願いね〜」

「分かりました！」

正直覚えきる自信がない。A6サイズのリングノートに仕事の内容を書き綴り、一枚ちぎって机に置く。ジェシーから与えられたノルマは、ゆっくりでいいので丁寧・正確にやるということ。

だが、申し訳が立たないと考えた健は昼までに終わらせようと奮発している。相当なハードワークだが、これもバイト代の為である。彼は全力でこの難問に挑むつもりだ。全力でぶつかった結果、昼前に何とか終わらせることができた。大奮発した反動で、健は机の前へ突っ伏していた。

「東條くん、無茶しない方がいいよー……」

そんな健に、ちあきが心配そうに声をかける。現金なことに、浅

田の声を聴いた健はグロッキーから復活。

少し、休憩をとらせてもらった。お茶を少し飲むと、トイレへ行って気分転換。そして、昼休みへ。

朝早くに起きて作った自作の弁当をカバンから取り出し、のんびりとそれを食べる。今日はデザートとして、栄養満点のバナナが1本入っていた。

「ホッ、おなかいっぱい……zzz」

昼飯を食べ終わってホッとしていた健を、睡魔が襲う。睡魔の誘惑というのはなかなか振り切れないものだ。

主な原因は寝不足である。しかし、世の中にはこの睡魔に萌えた一心で夜もまったく寝ない変わり者も存在している。睡魔がかわいらしい美少女とは限らないのに、なんとも不思議な話である。

「zzz……ハッ！ いかんいかん、寝てどうするんだ」

とは言いつつも、眠気に耐え切れずまたも夢の世界へいざなわれてしまう。寝ちゃっていいのかな。今休憩時間だけどいいのかなあ。まあいつか、仕事始まる5分前に起きればいいだけだし。ちよつとぐらいいいよね。寝ちゃおう、寝ちゃおう。そうだ……寝ちゃおう！

そう思いながら深い眠りに落ちてゆく健だったが。そんな健に眠る事を許さないかのよう、爆音が響いた！ どこで起こったのか？ 衝撃で事務室全体にも一瞬、震動が走る。

「な、何が起こったんでしょか!？」

健が慌てて起き上がり、近くにいたジェシーに何が起きたか訊ねる。ジェシーがたまたま見ていた速報によると、銀行が襲われたら

しい。

「俺、ちょっと外を見てください!!」

「あ、あの、東條さん!？」

制止しようとしたジェシーだったが、健は突っ走って事務室を飛び出していった。もしか、現場へ行くつもりなのだろうか。

少し取り乱してしまったが、すぐに暖かい目でジェシーは健を見送った。もちろん、他のメンバーも一緒だ。今思えば、なんとなく健が何をしようとしていたのか分かっていたのかもしれない。もしかすれば、既に気付いていたかもしれない。

「健、いったいどうしたんだ!？」

「誰がやったか知らないけど、銀行がやばいんだって!　すぐに来て!」

アルヴィーに携帯で連絡を入れ、現場へと急行する。身体能力が強化されたお陰で、多少無理を利かせても足は大丈夫だ。

不破ほどではないが、走るのも以前よりうんと早くなった。銀行へ辿り着くと、爆破されたような痕跡があった。銀行の内部へ入ると、強盗が銀行員の女性を人質に立てこもっていた。

「動くなッ!　動いたらこいつを殺すぞッ!」

「解放してほしくば金を出せ。1億だ……今すぐに1億を準備しろ。できないなら、この女の命はない」

「そういうことだ!　3分間だけ待ってやる。それまでに1億持って来い!」

強盗は一人だけではなく、二人いた。一人は赤いツンツン頭の粗

暴な男で、もう一人は青髪の冷静そうで嫌味っぽい男。

青髪に呼応するように赤髪の男が脅しをかける。慌てふためく民間人と銀行員、人質の女性は耐えられそうにない。

「誰か、助けてー!」

女性が助けを求めた。健の耳にその声が飛び込み、健は悪党どもが待ち構える危険地帯の最中へ飛び込む。さなか

「その人を離せっ!」

「ぐがつ!?!」

「ありがとう……!」

「どういたしまして。危険ですから、下がっていてください!」

健は颯爽と赤髪の男を蹴っ飛ばし、銀行員の女性を救出。女性を下がらせ、銀行強盗に果敢にも素手で挑む。

「ここじゃみんなに被害が及ぶ……外に来い!」

「上等だ、その生意気な鼻へし折ってやるぜ!」

けん制程度に攻撃を加え、敵を外へおびき出す。ちょうど人気がない裏通りだ、ここなら全力をぶつけてもいくらかは問題ない。

「うがああああアア ツ!」

赤髪の男がいきなり殴りかかってきた、体を右へそらしてかわす。反撃とばかりに蹴りをお見舞いする。素手での戦いはあまり得意ではない、もしかしたら相手にやられてしまいかもしれない。とにかく、アルヴィーが来るまでの辛抱だ。

「やりやがったな小僧！ これでも食らえい！」
「うわっ！」

赤髪が地面を思い切り叩きつけると、地面がせり上がり鋭い岩が飛び出して健を突き飛ばした。

「受けてみな」

そこへ追い討ちをかけるように、青髪の男が針状の光弾を飛ばす。針のような光弾は健の肩を貫き、動きを止めさせた。

「い、今のは……。もしかして、あんたらもエスパーなのか……？」
「グヘヘヘ、その通りだ！」

健が洩らした疑問に汚らしく笑いながら、赤髪と青髪はハッキリとそう答えた。

二人そろって、やれ左フックだの、やれ右ストレートだの、やれローキックだのをかましてくる。健が動けないのをいいことに、殴る蹴るの暴行に出たのだ。

「しかも、お前のようなクズとはわけが違っただぜ」

過剰なまでにポコポコにされ、健は傷だらけに。拳をバキバキ鳴らしながら、赤髪が健にゆっくりと歩み寄る。青髪の方も指に挟むように針状のエネルギーを出していた。

「死ねエ！」

「待ちなよ、赤木！」

赤髪が殴りかかろうとする。が、青髪の男がどういうわけか、赤

髪を制止。

「あ、ア！？ おい青山、なにをボケたこと言っただやがる！」

「ボケてるのは君だろ？ ここでこいつを殺したら、緑川さんが戦闘データを採取できないじゃないか。そうなったら、僕たちもあとでリーダーから大目玉だ」

二人ともわけのわからないことを言い出すと、健の目の前で口論をはじめめる。

「あんなゴマすり野郎なんかどうでもいいだろ！ とにかくこのガキぶつ殺して、俺は手柄を立てるぞ！」

「ハッ！ 力しか能がないくせに、生意気なヤツだな」

そう口論をしていると、二人の元に白いドラゴンが滑空しながら現れた。

予想外の出来事に、体が固まって動けない。ドラゴンはうるたえる赤木をくわえて天高く上り、ちょうどいい高さから振り落とす。

「つつぎゃあああああああああー！」

赤木は強く地面に叩きつけられた。その衝撃で、何が起ったか分からない青髪も吹っ飛ばされ壁に打ち付けられる。

健はその白いドラゴンに見覚えがあった。というか、知らないわけがない。それもそのはず、そのドラゴンは。

「アルヴィー、来てくれたんだね……助かった！」

健のパートナーであるアルヴィーだったのだから。

「まったく。素手でゴロツキどもに挑むとは、お主も無茶が好きよな。ほれ」

少し呆れたように微笑むと、アルヴィーはエーテルセイバーとヘッダーシールドを具現化し健に手渡す。

「サンキュー。さて、と……第二ラウンドと行こうか！」

何が起こったのかわけがわからないし、見当も付かない。

見るからにおぞましい白いドラゴンが一見なんの変哲もなさそうな青年に武器を与え、話までしている。あまりの出来事に、赤木と青髪は腰を抜かしていた。

EPISODE 21：逆転せよ

「調子に乗るなあああ!!」

赤木が性懲りもなく健に殴りかかるも、大剣で叩つきられ吹っ飛ばされる。それを見て焦りを見せ始めた青髪が針状のエネルギー弾を飛ばすが、健は盾を構えながら青髪めがけて前進。飛んできたエネルギー弾は、すべて弾き返していた。

「でりゃあ!」

「きてはあッ!?!」

一気に懐へ入ると、なで斬りを浴びせよるめかせる。

「な、何なんだい君は!?! 報告ではエスパーになったばかりのドしろつて……ぐぼッ!!!」

うつたえる青髪を、今度は唐竹割りで黙らせる。

「ま、まずいぜ青山……こいつ、聞いてたよりずっとつええぞ!」

赤木は青髪の相方・青山に助けを求めたが、当の青山は逃げ腰。そんな二人に、ダッシュしながら健が急接近。

「な……なあ赤木」

「な、何しやがる!?!」

「ぶつちゃけ言つとさあ……ぼく、まだ死にたくないんだよね」

追い詰められて頭がどうかしたのか、青山は赤木の名を呼びかけると赤木の肩をつかんだ。そして持ち上げると、必殺技を繰り出さんとしている健の前へ放り出す。

「そーゆーことだし、じゃ……さよなら！」

保身を第一に考えた青山は、戦闘を放棄。赤木を盾にし、その場から逃走する。

「スパイラル」

健が剣に力を溜め、接近しつつ渾身の回転斬りを放つ。

「クラッシュュッ!!」

「ぶべらッ!!」

力を溜めてから放つ、気合をまとった回転斬り。それがスパイラルクラッシュだ。赤木は空中へ突き飛ばされ、爆発。黒コゲになって、地面へみたび叩きつけられた。剣と盾をしまい、アルヴィーも人間体へ。

「健、こやつをどうする？ トドメを刺すなら今のうちだぞ」

「……いや、僕なら警察に突き出す」

「つまり、どんな悪党でも不殺か……。フッ、お主らしい答えだの」

アルヴィーの質問にそう答え、もはや虫の息である赤木へ接近。返答を聞いたアルヴィーは、クールに微笑んでいた。

「もう悪さはしないか？」

「じ、自首する。だから、助けてくれエ……」

そう聞いて、にっこりした健。赤木の肩を担ぎ、警察署まで連れて行くとしたが。非情にも銃声が鳴り響いた。1発の銃弾が赤木の脳天を貫き、息絶えさせた。赤木の死体が、二人の方から崩れ落ちて地べたへ這いつくばる。赤木が死んだ事を確認すると、銃撃手の男が健とアルヴィーの前に現れた。

「だ、誰だ！」

赤木を銃殺したのは、緑色の髪の男。二人を見下すように高い所に立っていた。少し遠くて見辛いがその男が着ているコートには、よく見ると『盾の中にSの字を描いてへビが剣に巻きついている』『マークがついていた。アルヴィーは男から強い殺気を感じ取り、無言ですっと睨んでいる。

「さっきの赤木ってヤツと、逃げた青髪のヤツと同じマークがついてる……あいつらの仲間か!？」

健の事など意に介さず、緑髪の男は何らかのツールを見てデータを確認すると、嘲笑うように立ち去っていった。

「今日は昼休み中に無断で抜け出してしまい、申し訳ございませんでした！ 次からは気をつけます」

「よろしい。次回からホントに気をつけてくれよ、東條くん……」

必死でバイト先の先輩たちに謝る健。副署長たちに『分かってくれたらそれでいい』と許してもらい、荷物を持って退勤した。アパートに帰ると、いつもどおり手洗い・うがいをすませ、おやつを片手にテーブルに陣取る。ポテチのりしお味だ。ぐったりしている健をよそに、アルヴィーはエプロン姿で食器洗いをしていた。

「はあく、何だったんだろ。あいつ」

「あの緑色の髪の男かの？」

「うん……」

食器の泡を洗い落としながら、アルヴィーは健と話をしている。健は相当疲れているのか、目がとろんとしていた。念のため言っておくが、『メガトロン』ではない。

「なんであいつは仲間を撃つたんだ？ 残酷なことするよね……」

「それは本人に聞かねば分からぬが……恐らく、仲間を殺害した理由は情報の漏洩を防ぐためだろうな」

アルヴィーの推測に、健は賛成意見を出した。皿を洗い終わり、アルヴィーもイスに座る。

「さて、そろそろおやつにせぬか？」

「えっ、晩ごはんどうすんの？」

今は夕方の6時過ぎ、もうすぐ7時だ。おやつを食べるぐらいなら食事を作った方がいいと言つもの。

「そうだったな。ところでお主、財布に余裕はあるかの？ いざという時は、みゆき殿が働いているレストランで食べるといふのもありだぞ？」

「……それだ！」

「いらつしゃいませ〜 あっ、健くん！ それにアルヴィーさんも！」

トワイライトでは、みゆきが温かく出迎えてくれた。席へ案内され、二人はメニューを閲覧。アルヴィーが何やら、興味深そうにメニューを除きこんだ。

「もしかして、こういうのはじめてだったりする？」

そう健が聞くと、アルヴィーは、

「うむ、恥ずかしながら実はそうなんだ」

と、答えた。どうやら、アルヴィーがファミレスに立ち寄ったのは今回がはじめてのようだ。照れ臭そうに頬を赤らめるアルヴィー

に、何を注文するか健が訊ねる。いろいろ話し合った結果、健はカルボナーラを、アルヴィーは粗びきハンバーグを注文。

「お待たせいたしましたー。ごゆっくりお召し上がりください」

食事を運んでくると、みゆきはせつせつと他の客の食事を運びに行く。それだけ、ホール担当の仕事は忙しいのだ。

「……感動したぞ！ 次から次へと、注文を受けた料理を所狭しと運んでいるその姿。みゆき殿は働き者だな。もぐもぐ」

ハンバーグの味に感動を覚え、みゆきの働きぶりにも感銘を受ける。二重構造の感動を、アルヴィーはたんと味わっていた。

「ホール担当は伊達じゃないね。この前聞いたんだけど、正式採用も近いんだってさ。ちゆるちゆる」

カルボナーラを巻き取りながら健はそう語る。小さい頃、健はパスタを食わず嫌いしていたが、高校時代に Pasta 好きの友人である敬太郎の必死の布教……もとい、努力によって克服。アツアツの料理と、夜のレストラン特有の大人な雰囲気。この2つを味わいながら、二人はディナーを満喫していた。

「いやあ、今日はごちそうだったの」

「へへっ。あそこ、うまかったでしょ？ また今度からも行ってみようぜ？」

満足げに笑うアルヴィーと健。二人はみゆきに別れのあいさつをした後、レストランを出てアパートへ戻っていった。やさしく声を

かける健に「御意」、と、アルヴィーは頷いた。自転車をカッ飛ばし、健はアパートへ。アルヴィーは隙間に飛び込んで先に戻っていたアルヴィーが、玄関の前で立っていた。

「すまぬ、私の方が先に着いてしまった。さっ、早くカギを開けてくれんかの？」

玄関のドアを開き、ちゃっちゃと手洗いうがいを済ませる。そして着替える。この一連の流れはもはや通過儀礼といっても良い。立ちついでに風呂も洗い、湯を張っておく。

「一服、一服……。ねえ、アルヴィー」

「なんだ」

「シェイドは人間を食い殺しちゃうんだよな？ ってことは、アルヴィーも昔は……」

心配そうにしてそこまで言いかけたところで、アルヴィーが突然笑い出した。驚いた健に、アルヴィーは少しだけ謝った。

「案ずるな。前に言っただろう？ 私は人間が好きだ。襲ったりなどしない。それに私は、主の言う事をちゃんと守る主義だから。少なくとも、お主のもとにいるうちは人を食らうようなマネはせぬよ、ご主人」

「……やっぱりいい人だなあ、アルヴィーは！」

ホッとした健。風呂が沸くまでに先に布団を引き、着替えも準備しておく。そうこうしているうちに風呂が炊き上がった。先に入る

かどうか聞いたが、アルヴィーは「どちらでもいい」と答える。健は、アルヴィーに風呂の順番を譲りテレビでバラエティ番組を見始めた。

「ああー、面白かった。……うん？」

「我々センチネルズは、新たなエネルギーを皆様に提供すべく日々研究を続けています!!」

番組が終わり、しばらくしたあとニュースがはじまった。最初に報道されたのは、ある研究機関の記者会見。それだけならごく普通のことだが、健が目丸くしたのには理由があった。何故なら……。

「このマークって……」

「上がったぞ、健。何やら浮かない顔をしておるが……どうしたのだ？　む、これは……!!」

黙ってテレビ画面を指す健。アルヴィーの目にも、健が気にかけていたそれが入ってきた。盾の内側で、S字をなぞるように剣に巻きついたヘビ。赤木や青髪、緑髪の男の服についていた例のマークだ!

EPISODE 22：憤怒する雷光（前書き）

今回予告！

バイト、シェイド退治、そしてダラダラ……。健の毎日はゆるーいようであるは大変である。

公園でみゆきやアルヴィーに応援してもらいながらトレーニングをしていると、

突然怒り狂った不破が現れ、そのまま襲い掛かってきた！？

EPISODE 22：憤怒する雷光

「ふむ……」

所長室のデスクの上で、浪岡が部下の青山から提出された書類を読み上げていた。先日、銀行強盗を装いデータを回収するための戦闘を行った際のできごとが記されている。

「いいところまで行ったが例の上級シェイドに乱入され形勢逆転、完膚なきまでに叩きのめされ逃げざるを得なかった……か。緑川の報告と少し違う点があったが、どちらが正しいのだ？」

書類を読み終わると、浪岡は青山がいる方を向いてデスクの上に報告書を置く。

「答える、青山。返答次第によってはここで貴様を切り捨てることも考えてあるぞ？」

浪岡の右手の人差し指の先に火が灯る。おびえて震えだした青山を、緑川は鼻で嘲笑っていた。

「す、すみません、赤木を見捨てて逃げました」

正直に頭を下げると、浪岡の指先でくすぶっていた火が消えた。

「よろしい。まあ、赤木は死ぬ前に、気でも狂ったのか自首しようとしたらしいからなあ」

ほくそ笑む浪岡。何の事か分からない青山がキョロキョロしている

ると、緑川から銃を突きつけられた。

「やつに自首されて情報を漏洩されては困るからな。私が赤木を始末したんだ。で、どうするんだ。またお得意のとんずらをかますつもりじゃないだろうな？ どうなんだ、青山」

「ま、まさか。今度は必ず仕留めて見せますよ……見ててくださいよ、僕の活躍をね」

煽られる形で青山は出撃、緑川も例の戦闘データを採取するツールを持って後追いするように出撃した。

「オレ傘持ってきてねえぞ……ついてねー」

その頃、関東地方では朝から一日中大雨が降っていた。それも、雷を伴うものだ。仕方ないので、不破は皆が傘を差したり合羽を着て歩いている中を、ひとりそのままの格好で歩いていた。このままではぶ濡れ、どこかで雨宿りしたい。たまたま道端にあったコンビニへ入り、休憩がてら雨をやり過ごす。

「肉まんくださいーい。あ、このビニール傘も」

ATMから金を引き出し、傘と肉まんを買う。このぐらいははした金だ、貯蓄はまだまだある。なにせ、最低でも一生食っていける分はたまっているのだから。軒下で肉まんを頬張り、一息つくとな破は駐輪場へ。バイクを起動し、激しい雨の中を突っ切る。

いつもこうだ。不破は雨を呼んでしまいがちな体質、いわゆる雨男だ。どういいうわけでこうなってしまったかは分からないが。

もちろん不破は、自身がその『雨男』である事をよくは思っていない。

晴れ男に生まれ変わるべく、密かに改善策を模索しているのだ。これまでにもいろいろ試してきた。しかし、いずれも上手くいったためがない。雨の国道を走り、不破は東京をあとにする。彼が目指しているのは、大久保の研究センター。その次に健が住んでいる京都だ。しかし、どちらも、とくに後者はとんでもない時間がかかる。まずは1つめの目的地、大久保生体研究センターへ。バイクを駐輪場へ停め、研究所の中へと入ってゆく。

「教授、浪岡の居場所は突き止められましたか？」

「勝手口から来たな……。私は今忙しいんだ。悪いが、用事ならあとにしてくれないかね」

大久保のデスクには論文用の紙がびっしりと散乱していた。現在彼が書いているのはシェイドの生態に関する論文だ。専門の知識が分からない用語が所狭しと羅列されており、ひと目見ただけでも頭が混乱しそうである。

「一刻も早く、ヤツのアジトを突き止めたいんです。そして仇をとりたいんです。ですから、そんなわけの分からないものは後回しにしてください。お願いします！」

必死に懇願する不破。だが、肝心な時に限って教授は調べてくれない。嗚呼、なんてわずらわしいのだろう。

「黙れ！ 世界は君の都合のいいように出来てはいない！」

焦燥感が全身に走る不破に追い討ちをかけるように、大久保は憤

る。大久保の眉間にシワが寄っていた。普段からあまり人相がいいとは言えない彼の顔が、余計に悪く、怖くなっていた。

「それにデータも不十分！ 私の研究には、シエイドの細胞が必要不可欠なのだ。何度も言っているだろう。ひとかけらでも良い、必ず回収してきてくれたまえよ。……それと、もうひとつ」

「今度は何です？」

不破の拳がふるふると震えていた。理不尽な仕打ちに、よほど納得がいかないのか？

「いつまで君は、そのくだらないプライドにこだわり続けるのかね？」

「ですが、だからといってプライドを捨てたら終わりです！」

「実にくだらない！ 君のそのプライドが、自分が東條健たけるに追い抜かれつつある事を認めていないのだ。君は強くなりたいたんだっただけか？」

怒り心頭で、口も聞きたくなかった不破は無言で頷く。大久保がそんな彼を嘲笑するように、

「本当は分かっているのではないかね？ 自分の弱さを受け入れ、バネにしなければ強くなれないということを」

「うおおあああああああああああッー！！」

叫び声を上げながら不破は研究室を飛び出していった。とにかく

目に付いた物に当たりながら、駐輪場へと向かって歩いていく。

「全部東條のせいだ……。あの疫病神め！ ブツ殺してやる！！」

一方、京都では。健とアルヴィーが公園で特訓をしていた。

「ボサツとしない！ そんなんではカール・ルイスやベン・ジョンソンには追いつけぬぞ！」

「ちょ、ちょっと待ってよ。あ、あと、……な、何周させる気！？」

息を荒げながら走る健。そんな彼を、サンバイザーに半袖半ズボン姿のアルヴィーがメガホン片手に叱咤激励している。ベンチには、応援としてみゆきが来ていた。

「がんばれー、健くん！」

マラソンなど不得意な健にとっては地獄だった。頭がパーンと破裂してしまいそうだ。いつも頼りにしているアルヴィーはこちらのやる気は無駄に煽ってくる。よって、今のこの状況ではみゆきの応援だけが救いなのだ。

「応援ありがとーっ！」

走れ、健。そう、これも強くなるための特訓である。弱音をグダグダと吐いている場合ではないのだ。

「あと3分だ。そのまま振り切れ！」

言われずとも分かっている。健は最後の力を振り絞り、公園の敷地を爆走する。すべては早いとこ終わらせて、このランニングという名の地獄から這い上がるために。

「振り切るぜ！」

疾走。

とにかく疾走。

何が何でも疾走。

念願叶い、遂に残り3分間を走りきった。振り切ったのだ、ランニング地獄の呪縛を。

「や、やったぜ。ぜ、絶望が俺のゴールだ」

安心も束の間。全力を出し切った反動か、健は地べたへ這いつくばった。黄色い声を上げながら、みゆきとアルヴィーが健に駆け寄る。が、こんなこともあるのかとみゆきが用意していたペットボトルの水を飲ませると、健は復活。

「よく走ったの。えらいぞ、健！」

「健くん、お疲れ様！ あとでどっか食べにいこ」

ねぎらいの言葉に笑顔で返す健。その顔は、喜色満面。やり遂げた喜びと、応援してもらった嬉しさがあわさってひとつになっているのだろう。肩を担いでもらい、ベンチで休憩を取る。

ランニング20分のあとは、何気ない世間話をはじめた。シェイドとの戦いがぶっちゃけ辛いだとか、お金のやりくりが大変だとか、本当に他愛もない、ありふれた話だ。いつもシェイドと戦っている

若き戦士^{エスパー}も、この時はどこにでもいる今時の若者だった。人の姿に化身した白龍も、ファミレスのバイトも。そんな3人が談話を楽しんでいる中、黒いバイクにまたがった男が乱入。その男の背中には、長槍とバツクラーがあった。

「ふ、不破さん？ ど、どうしたんですか？ そんな怖い顔して…」

「……東條健ううううッ！！」

雄叫びを上げ、ランスを振り回しながら不破が襲いかかって来る。四方八方から繰り出される突きをかわし、健が、

「みゆき、ここは逃げて！ あとは僕とアルヴィーで何とかする！」

そうみゆきへ促し、この場から逃がす。自分に罵声を浴びせながら暴れる不破を押さえようと、健が懐に飛び込んでなで斬りを浴びせた。一瞬膝を突かせるが、すぐに不破は立ち上がりつばぜり合いに持ち込む。

「お前が気に入らない……まぐれでエスパーになったくせに！」

健が不破のランスを弾き、再び斬りあいへ。

「さぞご満悦だろうな、常人を遥かに上回るパワーを振りかざせて！ クソがッ！」

脇腹をランスがかさす。健を昏倒させ、その首根っこを左手でつかんで宙へと持ち上げる。その左手には、嫉妬に狂う不破の健への憎悪がこめられていた。ぎゅっと健の首を握り、悶えさせる。

「ち、違う。力を振りかざしてなんかいない……ッ、僕はただ、みんなを守るために……」

「図に乗るな、クズ野郎があー!!」

空中へ健を放り投げ、不破はその歪んだ嫉妬心を健へと思う存分ぶつける。地面へ叩きつけ、無理矢理起こしてかかとを落としそのまま蹴っ飛ばす。

「ケツ、何がみんなを守りたいだ。いきなりすげえ力を手に入れて調子に乗ってヒーロー気取ってるだけじゃねえのか？ 善人ヅラしやがって……!!」

お前が火を点けた。オレが心の中に抱えていた爆弾に。それが今、爆発した。

エゴか、正論か。嫉妬に狂う不破の怒りの矛先が健の体と精神へと向けられ、痛めつける。公開処刑とばかりに健をいたぶる不破の姿を見て、いても立ってもいらなくなったアルヴィーが駆け寄る。

「失礼」

「あぐう!?!」

不破の右頬に鉄拳が炸裂。

「何しやが……ぐふおっ!?!」

いきり立ったところに、左頬へ更に一発。

「に、二度もぶった……」

アルヴィーには不破の行為が許せなかった。どうせ男同士の喧嘩だし、放っておけば殴り合いの末に仲直りする。最初の方こそそう思っていたのだが、現状は相手のほうから一方的に言いがかりをつけ、殴りに来ている。云わば、リンチだった。

「すまぬ、私の主^{まぬし}が張り倒されているのが放っておけなくてな。話は聞かせてもらった。確かにお主の言い分の方が正しいかもしれんが、健にも言い分はある」

気を失った健の前に、アルヴィーが立ちはだかった。真剣な目つきだ。反論しようとした不破を、その鋭い瞳でひと睨みしただけで黙らせた。

「健は己の弱さを知っておる。そして向き合っている。だからこそ少しでも強くなりたいと、心から望んでおる。己の弱さを認めぬお主と違ってな」

「目先のものしか見ないこいつがか!？」

「お主は何も分かっていない。お主が今の状態から強くなれないのは、自分と真剣に向き合っておらぬからだ。一度、自らを省みればどうだ」

しかし、あくまでもアルヴィーは不破を諭そうとする。

「バカも休み休み言えよ。分かってないのはあんたの方じゃねえのか? バケモノのくせして、このクズとたった数週間付き添っただけで人間の女になった気でいやがってよオ!!」

怒りのままに罵倒を続ける不破に平手打ちが浴びせられた。腫れ上がった頬を押さえる不破の目から、涙が流れ出そうとしていた。

「この分からず屋！ 目先のものしか見ておらぬのはお主だ。力を求めるあまり周りが見えておらぬ今のお主の方が、クズではないのか？ 元来エスパーというのは、人々をシェイドの魔の手から守り抜くことが使命ではないのか！」

「黙れバケモノ！ 人を襲う側のヤツが偉そうに！！ オレに説教するなっ！！！」

振り向きざまにアルヴィーが不破を叱咤する。涙目になっても、頭の硬い不破は相手が言った事を聞こうとはしない。

「滑稽だの。そういうお主は自分の為だけにしか力を使っておらぬではないか。そういうお主が人に難癖をつける方がおかしかろう」

「違う！ 恋人の復讐の為だ！」

「なら、その恋人は今のお主をどう思っておるんだ！」

天がこの争いを嘆いたか、雨が降り始めた。遂に反論が出来なくなった不破は、バイクに乗って逃げるように公園を去っていった。

「……やれやれ。健も言っておったが面倒なヤツだの」

倒れていた健を起こし、その肩を担ぐ。

「ひどい目に遭ったの。今日はゆっくり休めよ、健」

E P I S O D E 2 3 : こいつらがいる

健が意識を取り戻した時、そこは公園ではなかった。

見慣れた光景……自分の部屋が目の前に広がっていた。

デジャヴだ。この前も同じように気付いたら部屋に運ばれていた事があった。

あの時は不破に助けられたが、今回は違う。

気でも狂ったかのように突然襲いかかってきた不破に叩きのめされ、気を失った。

もしかして夢だったのかな、と、健はのん気にも大きなあくびをした。

「気がついた？」

と、目の前にみゆきが顔を近づけた。

驚いた健が慌てて後ろへ座ったまま下がる。

「お、脅かすなよう、みゆきい。よいしょ、って痛ッてえ！」

「あ、まだ動いちゃダメ！」

立とうとするが全身に痛みが伝わった。

みゆきに止められたので、仕方なく座る。

自分の体をよく見てみると、そこかしこに湿布なり包帯なりが巻いてあった。

いや、湿布は貼るものだが……。

脇腹はまだ痛むらしく血の滲んだあとがあった、こつという傷痕は思わず見るのをためらってしまう。

自分がシェイドにやってることもよくよく考えれば、残酷なのではないか？

相手が人ではなく、怪物というだけで……。

いや、今はそんな小難しいことを考えている場合ではない。

それよりも、アルヴィーはどこへ行ったのだろうか。

みゆきはここにいるのに、彼女はどこにもいない。

「ねー、アルヴィーどこ行ったか知らない？」

「えっ？ アルヴィーさんなら、健が寝てる間に外に出かけたよ」

なるほど、そういうことか。と、健はひとり勝手に納得した。

彼の予想が正しければ、アルヴィーは不破をひっ捕らえに行ったのだろう。

そして不破を入れた4人で話し合いをするのだろう、と。

「おお、健。目が覚めたか。食料を買ってきたぞ」

アルヴィーが帰ってきた。左手には自分も愛用しているエコバツ

グ、

右手には……びしょ濡れになって縮こまっている、不破。

シユールな光景だった、188cmもある長身の男性が170cmを超えた長身の女性に服のすそを掴まれていたのだから。ゴミ袋を持つときの持ち方で。

「余計なものまで拾ってきてしまったがの……」

「余計なモノっていうなあ！」

「しかし、人間とは思議だの。こやつ、さっきまでは凶暴なノラ犬だったのに今はおとなしい子犬のようだ」

「人間扱いしてくれ……」

不破に服を貸してやり、代わりに不破が着ていた服を乾かすことにする。

不破を含めた4人はテーブルに座った。

「そついえば、どこで不破さんを拾ったの？」

早速、健は一番疑問に思っていた事を訊ねた。器に盛られたビスケットをかじりながら。

「よくぞ聞いてくれた。私が買い出しの帰りに商店街を歩いていたら、不破殿が傘も差さずかっぱも着ずに道中に傷だらけで倒れているの。先ほどそなたを酷い目に遭わせたとはいえ、さすがに可哀想だと思つて手を差し伸べたのだ」

なるほど、と、健とみゆきは納得。

しかし上半身にサラシを巻いた姿の不破は二人には目もくれず、アルヴィーの胸をことあるごとにチラ見していた。

「よく考えればオレもどうかしてたよなあ……。あんなこと言つてすまねえ、さつきは頭に血がのぼってたんだ。許してくれる……。か？」
「やだ」

しかし、健は非情にも首を横に振る。

不破は目を丸くしてシヨックを受けていた。

「健くん、そんなこと言わないで。不破さんだって反省してるんだし……。イイでしょ？」

「まあ、みゆきが言うんならいいか……。僕も不破さんに迷惑かけてしまいました、本当にごめんなさい」

ぺこり、と、健が頭を下げる。不破も頭を下げ、お互いに謝るこ

とが出来た。

そのあとはしばらく、おやつを食べながらの何気ない世間話が続いた。

「そういえば、どうして不破さんはエスパーになったんですか？」

一通り落ち着いたところで、みゆきが不破へそう訊ねる。

「それは……」

緊迫した空気が一同に漂う。

「わすれた!」

一同が揃ってその場にコケた。

「あんなね、期待させといて忘れたじゃないだろ!」

「すまんすまん、冗談だ」

不機嫌そうに健やアルヴィーがため息をつく。

みゆきに至っては半べそで今にも泣き出しそうだった。

「わ、悪かった。じゃあ、ホントのことを言っぞ。一回しか言わないから耳かっぼじてよく聞くんぞ？ あと、目はむやみに閉じるな。それから姿勢はキツチリ……」

「能書きはどうでもいいから、早くはじめんか!」

アルヴィーの鉄拳が不破の脳天へ炸裂。ご丁寧にもばんそうこう付きの巨大なたんこぶが、焼かれた餅のごとく膨れ上がっていた。

不破はしばらく、頭を押さえていた。タフな彼でも上級シェイド

に殴られては、痛いなんてレベルではすまない。

「あいてて……じゃあ言うぞ。オレがエスパーになったのは、恋人の復讐のためだ」

「復讐……ですか？」

立ち直った不破が語りだした。一同、みな真剣な目つきで彼の話
を聞こうとしている。

「2年前のことだ。オレは東京で警視庁の捜査一課に所属している
警官だった。その時にアクセサリーショップの店員だった美枝さん
と知り合ったんだ」

「美枝さんって？」

「オレの恋人さ。倉田美枝さん、な。オレと美枝さんは愛しあつて
いた。けど 死んじまった。連続発火事件に巻き込まれて……」

不破の脳裏に、思い出したくもないあの日の出来事がよぎる。あ
んなことがなければ、今頃は二人で幸せな日々を過ごしていた。

「美枝さん、はいこれっ！」

「やだ、もしかしてこれ……婚約指輪かしら？」

「給料3ヶ月分さ。なるだけ、いいものを買いたかったんだ。お粗
末なものはあげられないからさ」

「きれい……」

「君の方がもつときれいさ……ところで、結婚式いつだっけ」

「来月の15日よー」

二人は結ばれるはずだった。だが 二人を待っていたのは残酷

な運命。

「美枝さん！ 美枝さん！ 美枝さん！ しっかりしてくれえ！ オレたち、結婚するんだろ……二人で幸せになるんだろ？ お願いだ、死なないでくれ！」

「……ごめん、あたし……もうダメみたい」

「そんなこと言わないでくれよ！ まだ助かる見込みは……」

「……あなただけでも……生きて……。ライ、愛してる……」

「美枝さんあああ んッ！！」

「……そう言っつて、美枝さんは死んじまった。あの日の事は忘れられねえ……」

語り終えた不破がいつになく、深刻かつ悲しそうな顔をしていた。

「美枝さん、かわいそう……」

「いったい誰が美枝さんを殺したんだ……許せない！」

こうしちゃいられない、と、健は立ち上がった。

みゆきもいつの間にか手にした片手鍋を構えていた。

「もしかして、協力してくれるのか？」

「ひとりじゃ心細いでしょ。だから、僕もお手伝い致します！」

「あ、あたし応援ぐらいしかできませんけど混ぜてくれませんか？」

「断る理由がどこにあるというんだ？ それに、味方はひとりでも多くつけておいた方がそなたも安心できるはずだぞ」

そつだ。俺はひとりじゃない。こいつらがついてるんだ……。

あんなくだらない事で怒って、意地張るんじゃないかな。仲間が出来た喜びを、不破はそっと噛みしめた。

「ありがとう、みんなッ！」

EPISODE 24：そんなウワサ

不破と仲直りした翌日……。

「東條くん、カップ麺はあまりボディーによくないネ。それとパンだけでダイジョブですか？ アフタヌーンの仕事はベリーベリーハードね、甘くないヨ」

「だいじょぶです！ たぶん……」

その日の昼休み、健はケニーらと談話して盛り上がっていた。カップ麺をすすりながら。

「ま、それはそーと……ナウなハナシしまーす。なんでも、最近この街にヒーローがいるトカ、いないトカ。そんなウワサ、巷で話題になってるそうデース」

「えっ、ヒーロー？ それって何レンジャーですか？ それともお面ライダーですか？」

職場では、最近現れたこの街のヒーロー的存在の話で盛り上がっていた。

そんな中で健が発したとんちんかんな発言が、周囲を爆笑の渦に巻き込む。

「NO、NO、NO、違いマース。何でもそのヒーローはヤングなエスパーで、我々シズンのピンチに颯爽と現れて、強くてハートフォー。おまけに甘いマスクだそうデース」

「それって、まるで東條さんみたいね」

にっこりと暖かく微笑むジェシーからそう聞いて、健が顔を真っ

赤にした。

「ハハツ、違くないネー。 PERFECTネ………… PERFECTな…………ム力つき野郎ネエエエエエエエエ！！」

やきもちを焼いたのか、頭を抱えながらケニーが唸った。当分は狂ったように唸り声を上げ続けるだろう。

こうなってしまうと少々うるさいので、ちあきからケニーを除くメンツに耳栓が配られた。

「ああ、ありがとうございます。助かります。僕、なんか悪いことしちゃったみたいですね…………」

とりあえず、健はカップ麺をすすった。それも全速力で。

そうでもしなければ食事が止まったまま、せつかくの昼休みが終わってしまふ。

「いや、東條くんは何にも悪くないよ。どう考えてもあなたより、ひとりで勝手に怒ってる係長のが悪い！」

ちあきのその言葉に納得して頷いている頃には、健は既にカップ麺を片付けて惣菜パンに取りかかっていた。チョココロネとカレーパンだ。

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！ ミーは悪くないネ！ ユーのことみたいに思ったミスター東條がツケ上がるのが悪いんだYO！ NO BAAAAAAD！！！」

「やだ、今日の係長…………ちよつとヘンだわ。怖い…………」

「ちよ、ちよつと、係長！ ひとまず落ち着いてください。今井さん怖がってるじゃないですか！」

あさつての方向へ爆走し続けるケニーを健が制止。
ケニーを一度外へ出して落ち着かせたところで、楽しいお昼休み
を再開した。

「ああ、怖かった。係長はいつもテンションの高い人だけど、突然
大声出して暴れられたらびっくりしちゃう……」

「まったくです。あんなダメ上司は副署長に言いつけて、窓際に追
い込んでやります！」

「東條さん、それは言いすぎじゃないですか」

拳を握って間違った方向に意気込む健を、サツとみはるが止めた。

「でもさつき言ってた、若くてかつこいいエスパーさんって本当に
いるのかしら。一度会ってみたいな」

「えっ？」

健はこの状況に少し困っていた。話題に上っていたヒーローは恐
らく、いや確実に自分の事を指している。何故なら不破は強いが態
度も印象も悪く、せいぜい奥様方のヒーローが関の山。

だが、自分はどうか。自分で言うのもおこがましいが、少なくと
も不破よりはやさしいし、シェイドからみんなを守るために必死に
なつて頑張っている。

ちょうど、そろそろ噂ぐらいにはなるだろうとも考えていた。な
ので自分のことだという可能性は十分ありうる。

しかし、自分がエスパーであることを明かして、余計な迷惑をか
けたくない。シェイドとの戦いには巻き込みたくない。それが本心
なので非常にツライところだ。言ってしまうは、すぐ近くにジェシ
ーが会いたがっていたヒーローがいる。ああ、いったいどうすれば
。

「東條さん？」

「あつえ、なんでもありません。それと、ジェシーさん。さっきの若いエスパーさんがどうこうって話ですけど……あなたの方が若くて優しく、きれいです！」

「えーっ、大げさよ。でもそう言ってもらえて嬉しいわ。ありがとう」

「えへへ、いやあそれほどでもー」

ジェシーを褒め称える健。その鼻の下は、笑えるくらい伸びていた。

「あらあら、二人ともいい雰囲気じゃん。こりゃあ、こっから先は見逃せないわね」

「ですね」

EPISODE 25：危険が危ない

「ふう、今日も一日お疲れ様でしたっ。さて、帰るか！」

市役所をあとにし、健はバス停へと向かう。この頃、日光が照る時間が長くなってきた。17時前でも結構明るい。

バス停でベンチに腰かけながら、バスが来るのを待つ健。健と同じ労働者……かどろかはわからないが、自然と人々が集まってきた。

「いつもそうだけど、この待ってる時間が長いんだよね。いざ乗ると早いし……うーん」

独りでにつぶやいていたが、そこへバスがやってきた。疲れが出て頭が吹っ切れたか、健はバスに大はしやぎしながら乗り込んだ。

そしていつものように電車とバスとを乗り継いでゆき、駅前のアパートへ。

「やっと着いたぜ。さあ、おうちへレッツゴー！」

スキップしながら駐輪場へ向かう健。だが、そこへシェイドが物陰から現れる。

「こいつら！ こんなときにー！」

相手は例のゾンビのような最下級シェイドだ。だが、今は武器を何も持っていない。

「あわわわ」

よって素手で戦うしかない。とりあえず拳を前に構える健だったが、その物腰はぶるぶると震えており、足に至ってはすぐに根本からポキッと折れて倒れそうだ。

「くっそー！ これでもか！」

ヤケになって頭突きを相手にかます。彼は石頭だ、時にはその頭蓋骨も武器と

「あいてて」

ならなかった。一応相手は倒れたが、健の頭にもダメージが入ってしまった。

「頭突きは武器にならないのね……」

頭を抱え健がうづくまる。とはいえ、すぐに立ち直って自転車にまたがるうとしたが。

「げっ！ また出やがった！」

再びシェイドが沸いてきた。今度は一匹だけではなく、少なくとも3、4匹はいた。

「頭突きは通じない、ってことは殴っても意味はない……」

ノロノロと、ゾンビのような最下級シェイドが近寄ってくる。健は、慌てて自転車へ乗り込む。

「逃げるーッ！」

マツハで自転車を飛ばし、その場を去っていった。もちろん動きのぶい最下級シェイドは追いつけない。

「ここまで来れば……」

なんとかアパートまで逃げ切った健。武器を持たずに外出したことを反省し、アルヴィーへ連絡を入れる。

「もしもし、健だよ！」

「おお、健か。さっきシェイドに襲われて、慌てて逃げてきたらう？」

「えっ、そうだけど。なんで知ってるの？」

「私もシェイドの端くれだからな、陰や隙間に潜れる。お主が私ぬきでどう立ち回るか、陰から様子を見ていたのだ」

というところで、会話が切れる。健が背後に振り返ると、携帯を手にしたアルヴィーがそこにいた。

「びっくりした〜。僕のうしろにいたなんて」

「リベンジしに行くか？ まあ、無理に行かせようとは思ってらんが……」

「えっ、リベンジ？ いいよ。行く行く！」

健は、ヤル気満々。アルヴィーにいつもの大型剣を出してもらつよう、頼み込むが

「意気込むのはよいが……お主、頭を見よ」

「へ？ 頭が？」

アルヴィーが黙って手鏡を渡す。鏡をのぞきこむと、健の頭から真っ赤な噴水が。

「ぎゃああああ〜！ ち、血が出てるうつつう〜！」

右往左往した挙句、うつ伏せで倒れ 「もうダメだ。死のう」

「まったく、無茶しおってからに。ほれ、起きられよ。病院に行くぞ」

「へ〜い……」

応急措置で頭に包帯を巻き、二人は夜のシェイド退治へ出発。

静寂な夜道を歩いている通行人たち。老人から子ども、お兄さんからお姉さんまで何でも揃っている。だが、そんな彼らを隙間から虎視眈々と狙う？ 奴ら？ がいた。

「ギシヤアアアアアアアアアア！！！」

「ば、バケモノだああああ！！！」

「逃げろおおおー！！！」

「い、嫌アアアア！！！」

ゾンビのような下級シェイド・クリーパーが、群れを成して現れた。群れの中には二足歩行のジャガーのような、人型もいた。ジャガー的な怪人はその手に剣を構え、赤いなめし皮のマントを羽織っていた。

「きゃあああああつ！」

緩慢なクリーパーの群れを猛スピードで駆け抜け、OLの女性にジャガー怪人が襲いかかる。

「……えっ？」

しかし、OLへ剣が振り下ろされる寸前でジャガー怪人の攻撃が阻まれた。OLの眼前には、大型剣と盾を持った青年の姿が。

「ここは危険です、今のうちに逃げて！」

「わ、わかりました。ありがとうございます……」

OLを逃がし、健はジャガー怪人を睨みつける。斬りかかり、敵の斬撃を弾き返す。ジャガー怪人は後ろへ飛びのき、その俊足で戦場を逃げ回る。

「どこに行った……はっ！ あいつばかり気にしてる場合じゃない。このままじゃ、他の人たちも危ない……」

逃げたジャガー怪人をいったんあきらめ、健は他のシェイドを殲滅しに向かう。サラリーマンの男性を襲うクリーパーを回転斬りで蹴散らし、サラリーマンを逃す。次に老人を襲っているクリーパーたちを炎の剣で焼却し、老人をこの場から逃がす。一通り救助を終えた後、いつせいに群がり近寄ってきたクリーパーを炎を纏った回転斬りで粉碎。これで、ザコは片付いた。あとは本丸を叩くだけだ。

「出たな……」

「バオオオオオオオオオ！」

逃走していたジャガーが剣を突き立て、一直線に突っ走ってきた。健は盾で巧みに剣撃を弾き、反撃。ジャガーは距離を置き、再び走りだす。飛びかかってきたジャガーの攻撃を押し返し、つばぜり合いへと持ち込んだ。

「ノ〜ロ〜マ〜……」

「確かに僕はのろまさ……。けどね！」

「グゲグッ！」

ジャガー怪人とのつばぜり合いに打ち勝ち、なで斬りを浴びせる。炎の剣を縦に構え、叫びながら飛び上がる。

「パワーならお前なんかより僕の方が上だ！ 行くよ、アルヴィー

！」

「うむ！」

「グギギ……！」

赤と青の炎をまとい、呼び出されたアルヴィーの炎による後押しを受けジャガー怪人めがけてファンングブレイザーを放つ。ジャガーはよろめきつつも逃げようとしたが、炎を纏った突進はジャガーの足よりも速く……。

「ファンングブレイザーあああッ！」

「グボアアアアアア！」

断末魔の叫びを上げてジャガー怪人ことアクセルジャガーは盛大に爆死。地面へ降り立った健は、赤々とした爆炎をバックに剣を斜め上へと掲げていた。剣からオーブを外し、盾と一緒に背中にかけるとアルヴィーと一緒にその場を去る。自転車を停めた場所まで戻り、それに乗って道路の歩道を駆ける。

「健、またひとつ強くなったな。だいぶ慣れてきたのではないか？」
「うん、まあね」

「だがここで慢心してはいかん。強くなる過程で力に溺れたエスパ
ーを、私はお主と会うまでに何人も見てきた。お主もそうならない
と良いのだが……」

「大丈夫！ そうならないようにがんばるさ」

「よく言った！ それでこそ明雄の息子だ」

アルヴィーと話をしながら、健は自転車を漕いでいた。しかし、
そこへ針のようなエネルギー弾が飛んできた。健は慌てて自転車か
ら飛び降りるが、着地に失敗しズッコケてしまふ。健にこんなこと
をしたのは、以前戦った銀行強盗の片割れである青髪の男性・青山
だった。

「おやおや、これは失礼」

「お前は、この前の強盗！」

「フン、口の聞き方も知らないらしいね。これだから素人は困るん
だよ」

針状のエネルギー弾を指と指の間から飛ばす。健はこれを盾で防
ぎ反撃とばかりに踏み込むが、青山はすばやく後ろへ飛び退いてし
まふ。

「君たち倒さなきゃ、僕もやばいんだよねエ。大人しくしてもらっ
よ」

青山は健を嘲るように、縦横無尽に動き回り針状のエネルギー弾
を飛ばす。盾を前に構えて弾くが、脇にそれた針が袖をかすった。

「いつまでガードし続けるつもりかな？ それはちょっとつまらな
くないのかなあ！」

そう言うとメリケンサックを左手にはめ、急接近して健に左フツ
クを浴びせた。よろめく健を、青山はチャンスとばかりに何度も殴
り続ける。

「ハツハツハ！ たゞのしいねエ〜！」
「くっ！」

盾を弾き飛ばされ、守りが弱くなってしまった。両手で剣を持ち、
青山に斬りかかる。しかし、何度やっても寸前で避けられてしまう。

「ノーコンめ、いったいどこを狙っているのかなあ？ 僕はここだ
よ！ アツハツハツハツハ！！！」

空高く跳躍した青山は、次々に針状のエネルギー弾を投げつける。
健はそれを剣の腹で防ぐが、しだいに体がボロボロになっていく。

「く、くそ……こいつ……！」
「アマちゃんぼつやに用はないんだよねエ。さっさと死んじまいな
！」

ゆっくりとボロボロになった健へ近寄る青山。今度は右手にメリ
ケンサックをはめ、渾身の右ストレートを思い切り浴びせようとす
る。

「…………（シールドは遠いところに弾き飛ばされた。あの距離じゃと
ても取りにいけない…………。立ち上がってガチンコ勝負するしかない
か？ でも今は、それが出来るほど体力に余裕はないし…………くそっ

！も、もうダメだ……」

剣を眼前に掲げる健。そこへすかさず青山が右ストレートを浴びせ ようとした、そのとき。

「あぐえ！？」

横から乱入した何者かによって、青山は吹き飛ばされた。更に、向こうへと飛ばされたはずのシールドも拾ってきてくれた。乱入したその男は、ランスとバツクラーを装備しており。

「不破さん！」

「へへッ、待たせたな。さ、もう大丈夫だぜ？ あのメガネマンにリベンジと行こうや。東條！」

満身創痍ながらも盾と元気を取り戻し、立ち上がった健。そんな彼に流し目で微笑む、不破。すぐに不破は目つきを険しくし、カッと青山を睨んだ。健もそれに剣を構えた。

「な、なにをバカな！ 二人になったところで僕に勝てると思っ
っているのかい！？」

「ああ、勝てるさ。お前のへなへなレーザーにや、絶対負けねえ」

「さあ、かかってこい！」

「ほざけええええええええええっ！！」

二人そろって武器を目と鼻の先の青山に突き立てる。青山は怒り狂い、錯乱気味に針状のエネルギー弾を何発も飛ばした。しかし不破は弾幕の中を駆け抜け、すれ違いざまに青山を健の方へと突き飛ばす。

「てやつ！」

横なぎで青山を吹っ飛ばし、不破にパス。不破は激しくランスを振り回し、地べたへ強く叩きつける。おびえる青山を、不破は「覚悟しな」とでも言いたげに笑って見下ろしていた。

「よし、とどめはオレが刺す！」

「ひひひひひひっ！ や、やめる。やめるおおおおッ！」

不破がランスの穂先へエネルギーを充填。チャージに時間がかかると見抜いた青山は、隙を突いて逃げようとするが。

「あ、足があ！」

足をくじいてしまい動けない。こうなってしまえば、どうあがこうと無駄なこと。どうやっても逃げることはできない。そもそも動けやしない。だが、手は動かせないこともない。最後のあがきだろうか、様々な悪知恵を働かせる青山だったが。

「食らええええええっ！」

時、既に遅し。電撃オーラをまとった不破が、すぐそこへと迫っていた。突進の途中だ。

「バカなアアアアアアアア！」

消し飛ぶ青山。しばらく宙を舞っていたが、すぐに地べたへ落とされた。それなりに整っていた顔立ちはひどく歪み、目は白目を剥いており、頬に押されるような形で歯茎が飛び出していた。これでは入院と整形外科のどちらに優先していけばいいのか、分からない。

「よし。これで奴ももう、悪さは出来ないだろう」

「まさにその通り、ですね」

「うむ、終わったようだの。では帰るとしよう」

「じゃ、不破さんお元気で。さようなら」

「おう、またな。後輩！」

不破は西へ。健は東へ。別れを告げた二人は、それぞれの帰路へと着く。自転車をせつせと漕ぎ、健はアパートへと急ぐ。このままでは、夜が明けてしまいそうだ。大急ぎでペダルを漕いで、何とか駅前へ辿り着く。駐輪場に自転車を止め、アルヴィーと共にアパートへ向かう。

もう真つ暗だ。早く寝ないと。健は速やかに手洗いとうがいを済ますと、すぐにふとんをひいて寝息を立てた。風呂に入り忘れたが、1日ぐらいどうということはない。明日に昨日の分も洗えばそれでいい。アルヴィーの分もひいている余裕はない。二人は同じ布団のなかで仲良く眠った。

翌日。アルヴィーが目を覚ますと、外の方から健のものと思われるかけ声が。気になったアルヴィーが上着を羽織りアパートの外に出ると、近くの空き地に健がいた。

「こんなに朝早くから何をやっておるんだ？」

「朝練さ。運動部に入ってたけどね！」

健はワラを相手に、木の棒で素振りをしていた。ご丁寧に木ワラには、『しえいど』とひらがなで書かれた貼り紙がしてあった。

「ワラをシェイドに見立ててさ、それでこーやって素振りしてるんだ」

「そうは言つが、お主……これについてはどう説明してくれるんだ？」

アルヴィーは、健のその発言が引つかかっていた。何故ならば、明らかに『しえいど』でない貼り紙が貼られたものもあつたからだ。

「今までにひどい目に合わされてきたとはいえども。いくらなんでもこの扱いは可哀想ではないかの？」

「いいのいいの。本人もサンドバッグか何かを僕に見立ててタコ殴りしてるだろうし」

「本当にそれでよいのか？ せつかく生まれた友情が壊れても、私は知らんぞ……」

アルヴィーが眉をひそめながら見つめているワラ。それに貼られた紙には、こう記されていた。

『不破さん』、と。

歩道橋を渡る健。彼は今、近くのスーパーへ行っている最中だ。車がよく通つており、安全に気を配らねば轢かれて死んでしまうことは十分にありうる。この頃は交通事故も増えており、自分も他人事だと思つてうかうかしている場合ではない。気を抜けばあの世だ。ある意味、シエイドが現れて襲ってくるのより夕チが悪いことかもしれない。歩道橋を西から東へと渡り、交差点を渡つて川沿いの道路を歩いていると声をかけられた。

「強くなりたいとは思わないか？」

「だ、誰だ？ 不審者っぽいし、ここは無視しようか……」

無視しようとするが、声をかけてきた男は一瞬で先回りして道を阻む。

「待て……私を無視するんじゃない。せつかくの好機をふいにしようというのかね？」

「あの、すみません。通してください。僕はこの先のスーパーに行きたいんですけど」

「そうはいかない。私は君に用があるのだ」

怪しい男は金髪で、サングラスに黒いロングコート、黒い長ズボンに手袋やブーツと黒づくめの格好をしていた。怪しいという第一印象を抱かれても誰も異議を唱えない。むしろ余裕で満場一致だ。

「君がハッキリと答えるまで通すつもりはない。さあ、私からの質問に答えてもらうぞ。君はエスパーだな？」

「知りません。何のことですか？ 僕はただの一般市民です」

眉をしかめる健を前にしても、黒づくめの男は何も動じない。それどころか不敵に笑っていた。

「ウソだな。君はエスパーではないのか？ それもその辺のクズどもとはわけが違う、上級シェイドと契約できたエスパーだ。違うかね？」

「違います！」

「いつまでもごまかしが通じると思っな！」

いい加減うんざりしてきた健は、男を無理矢理どかして前へ進もうとする。しかし、どかしても男はすぐに健の前へ立ち塞がる。

「貴様のことはとつくに調べてあるんだぞ、東條健」

「なんで僕の名前を……もういいですからどいてください。スーパーで買いたいんです」

「そんなくだらないことなど後回しだ。我々は、君のエスパーとしての素質に注目していてね。今は荒削りだが、将来きつと強いエスパーになれる。その為の力が欲しくはないか？」

「そんなのいりませんからどいてください！」

黒ずくめの男は軽く舌打ちすると、健を裏拳で殴り飛ばした。

「興醒めだな。貴様のようなクズなどに用はない。虫ケラどものマーケットで買物するなり何なり好きにしろ……」

「そんなのこつちから願い下げですよ！」

「しかし、貴様が逸材というのも事実だからな。そう簡単に捨てるわけにもいかない」

黒ずくめの男は少し眉をしかめると、懐から何かを取り出した。何かの名刺だ。健はそれを受け取ると、目を丸めて驚愕した。言葉も出ないほどに。

「もし力を欲するなら、いつでも私の元へ来い。待っているぞ」

黒ずくめの男はそう告げると、炎に包まれながら姿を消した。

「……これって……」

健が懐にしまった名刺。それは、例のヘビが剣にS字を描くように巻き付いたマークを持つ、エネルギー研究機関『センチネルズ』のものだった。

EPISODE 25：危険が危ない（後書き）

【シエイド図鑑】

アクセルジャガー

ヒヨウのシエイド。赤いマントを羽織り、剣を持った怪人。15秒間に150mを12周出来るほどの俊足を誇り、走りながら繰り出す高速の剣技は鋭い切れ味を持つ。しかし攻撃面・防御面では平均以下であり、パワーのある相手との戦いは苦手。

EPISODE 26：強くなれ

アクシデントこそあったものの、なんとかスーパーから戻った健は買ってきたものをひととおり冷蔵庫に入れ、またはざるに置くテーブルでくつろぎはじめた。

「もらっちゃったけど、どうしよう」

ちよつとした問題を抱えて。

「この名刺かの？ ふむ、センチネルズのものか。健、不破殿を呼んでみられよ。何かわかるかもしれん」

「りょーかい！」

道端で出くわした明らかに怪しい男ともめた拳句受け取ってしまった、この名刺。もしかすれば不破の助けになるかもしれないと、不破を呼び出してみる。

名刺を見せたはいいが、不破は血相を変えて飛び出していった。まった。彼は名刺に書かれていた”浪岡？”という名前、ならびにセンチネルズの本部の場所に強く反応した様子だったが。

なぜ彼が急に怒って飛び出したのかを考察していると、アルヴィーが「もしやその浪岡というのは、この前言っておった恋人の仇のことだったのではないか？」

「そうかあ、なるほど。それなら不破さんが血相変えて出ていくのも納得が行く」

「しかし、何の策もなしで突撃するのは無謀というものだ。不破殿は強いが、相手はそれ以上に強いかもしれん」

同行すればよかつたか、と、健は眉をしかめた。センチネルズの本部は奈良県、この京都より本の少し遠くにある。自分が行けるかどうかはわからない。この状況で自分ができるのは、不破に加勢できるくらい強くなるために特訓することぐらい。今できることをやるのみだ。

「アルヴィー、トレーニングメニュー増やしてもいい？」

「ほう、よい心がけだが……まさかお主、限界ギリギリまでやるつもりではあるまいな？」

「そうなくてもいい。不破さんひとりじゃやられるかもしれない。だから俺も不破さんと同じくらい強くなって、不破さんを助けなきゃ！」

「……うむ。意気込むのは結構だが、ほどほどにしておけよ。体を壊しては元も子もないからの」

アルヴィーから承諾を得た健は、強くなるために特訓を始めることにした。内容はこうだ。まずは早朝にアパート周辺をジョギング、次に武器を素振り、その次はアルヴィーに稽古をつけてもらい、最後は寝る前に腹筋と背筋を20回。というパターンだ。

とてつもなくハードだ。だが、不破はこれを上回るほど厳しい鍛練を何度も積んできた。自分も彼に遠慮している場合ではない。先輩を支える一年生も、強くならなくてはならないのだ。

「あ、アルヴィー……今日はこの辺にしよう」

「何を言っておる！ お主、このままではプルシェンコに勝てんぞ！」

「いや、オリンピックじゃねーし！ っていうか、今日はもう限界

「なんだけど……」

「まだ終わっていない。もっと気合い入れて特訓せんか！」

ときには倒れることもあった。へこたれることもあった。だが、あきらめない。不破と同じくらい強くなるという、目標を達成するまでは。積み重ねがすべてなのだ。

「不破さんは孤独な戦いを続けている……一年生の僕が支えてあげなきゃ！」

雨の日も、風の日も。健は鍛練に励み続けた。ひとりで突っ走ってばかりいる、ちょっとばかり乱暴な先輩の助けになるために。

人々を守るために。トレーニングの結果、健はもっと速く走れるようになり、筋力も著しく上がった。戦闘センスにも磨きがかかり、これにはアルヴィーも一目瞭然だ。

「ぜえ……ぜえ……」

それから数日後。飛び出していった不破が、健のもとを訪ねてきた。

「あ、不破さん。どうぞ、上がって……って、どうしたんですか？ そのケガは！」

不破は傷だらけだった。ひどく負傷しており、とくにやけどの痕が目立っていた。応急措置で包帯を巻いてやり、横に寝かせる。

「と、東條」

「無理にしゃべらないください！」

「あのあと、ヤツらのアジトへ殴り込んだがこのザマだ。お前が行

「つたらどうなることやら」

不破が悔しそうに拳を震わせる。

「悪いことは言わねえ、死にたくないならセンチネルズには関わらな。連中は残忍冷酷なヤツしかいない。それにヤツらは手段を選ばない……何をしでかすか、わかんねーんだぞ」

「ですけど、敵討ちはどうするんですか!？」

「……東條、これだけは言っとくぞ。浪岡は……、敵のボスは、今度はお前に目をつけている」

「何のために……?」

「お前の……いや、お前だけじゃない。アルヴィーの特殊能力を利用して新しいエネルギーを作るつもりだ……うっ!」

病院に電話し、不破を病院へ送る。先ほど不破に言われたことをまとめると、センチネルズは新エネルギー開発のために健、およびアルヴィーの特殊能力を利用するつもりのようなのだ。

そして、その為なら、いかなる手段でも使うだろう……と。今度は健がセンチネルズ本部へ乗り込む番だろうか？

敵が本拠を構える奈良はここよりさほど離れてはいない。その気になればいつでも行ける。健もアルヴィーも、未知なる敵と戦う覚悟を決めていた。次は自分たちの番だ。

EPISODE 27：大脱走（前書き）

今回予告！

不破の見舞いに行った帰り、街にシェイドが出現。

みゆきと別れた健はこれを退治するが、そのあとに謎の武装集団に捕まってしまう。

謎の集団に連れてこられた先は、センチネルズの研究施設だった。健がそこで見たものとは　！？

EPISODE 27：大脱走

健とみゆきは、入院した不破の見舞いに行っていた。お見舞い品として、栄養満点のバナナと消化にやさしいリンゴ、ビタミンCが豊富なデコポンを持っていった。

「しかし、不破さんったらケガ人とは思えないほど元気だったよね。相変わらずアグレッシブだし」

頭のうしろで手を組みながら話している健と、彼の話にうなずいているみゆき。

二人とも楽しそうだ。健は、白いサーファースーツの上に赤のネルシャツを羽織っていた。

その下は深緑のスボンだ。ずらないようにベルトを巻いている。

「こりゃ、退院も近いかもね」

「うんうん！」

いつも髪をサイドテールにしているみゆきだが、今日は髪をとかしていた。

藤色の長い髪が風に揺れて、あまりの可憐さに道行く人々も思わず見とれてしまう。気がした。

服は赤いベストに山吹色のフレアスカートで、情熱的かつ活発な印象を周囲に与える。

「実は、ここだけの話なんだけど。話してもいいかい？」

申し訳なさそうに健が訊ねた。みゆきが頷いたのを確認すると、

彼女の耳元にそつと唇を寄せる。

まさか、接吻をしようというのか？　公衆の面前で。

「肉は腐りかけが一番おいしいって言うじゃん。それにあやかっさ、バナナもどうせ持つていくなら腐る寸前が一番いいんじゃないかって思ったんだ。わかる？」

接吻ではなかった。耳元でささやくように、しかも早口で健はそう言ったのだ。

「えっと、何の話かな」

「さっき不破さんにお見舞い品持ってったでしょ。あの中に腐りかけたバナナが……」

「えーっ！」

と、みゆきが目を丸くして驚いた。近くにいた健も、突然大声を出されて驚き、

ずっこけてしまった。慌てて起き上がると、健はお尻についたホコリを払った。

「アイタタ……いや、アレじゃん。栄養価の高いバナナをあげるなら、一番おいしくなる時期のをあげなきゃって思ってサ……」

「だけど、腐りかけはちよつと……」

やはりまずかったか、と、健は後悔した。そつばを向いてしまったみゆきに必死で謝ると、

何とか許しをもらえたのでお詫びに昼食をおごることに。二人が向かったのは、

もはや説明不要の大手ファーストフード店だ。ビッグハンバーガーセットのみゆきにおごってやり、自分はチーズバーガーセットを

注文。金がかかったが仕方がない。野郎は下手に出張るより、女に買いた方がいいものだ。下手に出ればかえって事態を悪化させる。だから女に任せたり、買いだりするのだ。

「ふう〜。おいしかった。今日はありがとね！」

「う、うん。ああ、とうぶん生活が苦しくなるぞ……」

喜色満面のみゆき。そんな彼女とは対照的に、健の気分はどんどん下降していく。

このまま生活が苦しくなって落ちぶれるか、それとも巻き返して極楽浄土のごとく快適な生活か。自分の明日はどっちだ。

「……むっ！ シェイドが出た！ 僕、行ってくるよ！」

「行ってらっしゃい、気をつけてね……」

そんな折、ウロコのお守りがシェイドを感知した。健はみゆきと別れ、急いで現場へと向かう。

シェイドが現れたのは府庁前だった。ヒョウのようなシェイドが2体いた。先日倒したヤツの仲間だろうか？

「うぎゃあ〜！！ 助けてくれー！！」

ユキヒョウのような白い方の個体が、サラリーマンの中年男性を締め上げてその首をつかんでいた。

それを許せない健は、白いヒョウ ゲイルジャガーへと突撃。
横から突き飛ばすと、男性を解放。

「た、助かったよ……」

「もう大丈夫です、早く逃げて！」

怒った白ジャガーは健にその鋭く大きなツメを振りかざす。健はすかさず、盾で攻撃をガード。

「へへっ、こんなこともあるのかと。武器を持ち出しておいたのさ！」

いったん間合いをとり、白ジャガーが走りながら飛びかかった。健はそれを迎撃し気絶させる。

一気に追い込もうとする健だったが、背後から攻撃を受ける。そう、敵はもう一体いたのだ。

クロヒヨウのような黒い個体が、蛮刀で殴りかかってきていた。挟み撃ちにされるも、横に転がりその場から抜け出す。

「ちょ、ちよつと待ってくれ……2対1って、こつち明らかに不利だぞ。あつ、でも……いけるかも！」

敵は2体。だが、こつちは一人。いかにしてこの状況を切り抜けるか？

しかし、落ち着いて考えてみて欲しい。健は機転が利く男だ。

柔軟な発想を浮かべて、逆転することも十分に考えられる。この程度のことなど、今の彼には朝飯前だ。

「やーい、お前の母ちゃんデベソ〜！」

実に古典的ではからしい方法だった。それも、相手に通じるかどうかも分からないほどにマヌケ。

だが、相手はそれ以上にバカだったらしくまんまと引っかかってくれた。

バカにされて怒りだした白ジャガーが、こちらへ向けて全力で走り出してきたのだ。黒い方はどういいうわけか、シヨックを受けてい

た。

「しめた！」

健は相手の攻撃を盾で弾き、ひるんだ隙に兜割りをお見舞いした。更にそこへ、ジャンプ斬りを浴びせる。

「よーし……」

とどめに剣を氷属性へ変え、相手を斬り付けて凍結させる。更にそのまま、アイスブレイカーへと繋げていく。

「アイスブレイカーあ　　っ！！」

凍った敵に急降下しながらの突きが炸裂！　白ジャガーはダメー
ジに耐え切れず、爆散した。

一瞬黒ジャガーが身構えたが、恐れをなしたのかすぐに逃げ出してしまった。

一匹逃してしまつたものの、とりあえず人々を襲うヤツらは去つた。健は勝利の余韻にひたり、武器を仕舞ってベンチへ腰かける。金にはならないが、人々の助けにはなる。人を助けるのに理由はいらぬ。損得は関係ない。

これでいいのだ。だが、もし自分が損得のみで動く人間なら今頃どうしているだろうか？

ひよつとすれば、市役所での事務仕事を辞めてシェイドを討伐して報酬をもらう仕事をしていたかもしれない。どっちにしろ、未知の脅威と戦うだけ立派だ。

と、少し考え事をしているところへ、多数の軍用トラックとともに武装した集団が現れた。いずれも屈強な男ばかりで、非常にむさ苦しく怖い。

「動くな。貴様は完全に包囲されている!!」

突然銃を突きつけられてわけがわからなくなった健はあわてふためくが、

ベンチから立ち去ろうとしたところを拘束されてしまう。

「残念だったな、我々からは逃げられない。おりゃ！」

武装集団のリーダー格とおぼしき巨漢が両腕を縛られた健を殴って気絶させ、軍用トラックへと放り込む。

「へっへっへ。おとなしくついてきてもらおうか」

健を乗せた車両が引率し、多数の軍用トラックがいずこへと向かって走り去ってゆく。

どの車両にも、例のセンチネルズのマークがあった。例のヘビが剣にSの字を描いて巻き付いているアレだ。

「……こ、ここは？」

不思議でたまらなかった。なんで自分が何のために、こんなに暗くてジメジメした、

得体のしれない変なところにいるのか。そしてなぜここに閉じ込められているのか。

そこは独房だった。なぜか隣の牢の様子が見られるよう、小窓が部屋の隅に開いていた。

「おい、起きろ！」

先ほどの武装集団のリーダー格の男が、乱暴に鉄格子を開けて独房に入ってきた。

「もう起きてますよう……」

「浪岡様がお呼びだ。すぐに所長室まで来い！」

襟をつかまれ、独房から出されると巨漢のうしろに立たされた。

ぞんざいに、乱暴に扱われ、健は正直まいつていた。だが、下手に抵抗すればどうなるか分からない。

とりあえず、ここは相手の言いなりになるしかないだろう。頭を切り替え、健は武装集団のリーダーについていく。

「浪岡様、例のガキをお連れしました。オラ、入れ！」

「あぐっ！」

男に蹴り飛ばされ、健は所長室へ。

監視用のモニターがたくさん並んでいるこの部屋のデスクに？浪岡？と呼ばれた金髪に黒いロングコートの男がふんぞり返っていた。その隣には、カルテを持った緑髪の男がいた。この前、赤木を銃殺したヤツと同一人物だ。

「申し訳ない。だが、我々も急いでいてね。強行手段に出させていだいたというわけだ。この場を借りて謝らせてほしい」

その言葉から反省の気持ちは感じられなかった。むしろ、見下されていた。更に不快な気分になった。

「さて、と。君のパートナーはここにはいないようだが、どこにい

るのかな」

「悪いですけど、あんたたちに教える義務はありません。早くこの変なところから出してください！」

「気持ちは分かるがね、そうはいかないんだよ」

浪岡がはずれたサングラスをかけ直す。

誰が見ても明らかに分かるくらい、見下した目つきで健に視線を向けていた。

「新エネルギーの開発には、君と君のパートナーの能力が必要なのだ」

「その新エネルギー使って、何をしようっていうんだ？」

「太古に禁忌として封じられた、錬金術の復活だ。そうやって全世界の文明レベルを上げるのだ」

浪岡が地球儀を出し、地球をかたどった球体を外す。

くるくると回し、自身の野望を自慢げに語り出す。

「これは、我ら人類の進化に貢献することにもつながる。とても有意義なことだ。だが、進化についていけないものはどうなると思う？」

まさかの問いかけ。こんなトチ狂った質問に答えてやる気はないが、ここは仕方がない。

眉をひそめた顔で、健が

「時代遅れだからいらない、一掃される」

「そう、その通りだ。そして私は進化を遂げた人類の支配者となる
！！！」

声高々に浪岡が叫んだ。うんざりした健は、部屋を出ていこうとするが、細長い炎が一瞬横切る。

「おっと、逃げようとしても無駄だ。この研究施設には各所に監視カメラが設置されている。貴様の行動は筒抜けだ。よって、逃げることはできない。あきらめるのだな！」

嘲笑された拳句、自分を拉致した巨漢にどつき回され独房へ戻されてしまう。

「あいたた……うん？」

ふと外の廊下を見ると、武装した男たちに連れてこさせられた誰かの姿が。

白衣を着ていたように見えたが、研究員だろうか？そしてその研究員らしき人物は、健の隣へとぶちこまれた。

「もしかして、僕以外にも捕まった人が！？」

「……あら、お隣に誰かいるの？」

隣の独房から、妙齡の女性の声が聴こえてきた。声の主が小窓に近づく。

「あらあら。あなたも捕まっちゃったの？ 可哀想……」

「そうなんですよ！。シエイドやつつけて休憩したら、さっきの武装した男の人たちが僕を拉致したみたいで」

「そっか。……ってことは、あなたはエスパーね？ あの男がさらってくるのは、たいていがエスパーかエスパーの素質を持った人だ

から」

隣の独房の女性は、センチネルズをあまり知らない健にその目的とねらいを親切に教えてくれた。

そして、彼女が元々はセンチネルズに所属していた博士であり、センチネルズのやり方に嫌気が差して逃げようとしたところを捕まったということも知った。

「そうですか、そんなことが……どちらにせよ、許せない！」

「けど、このまま待っていても始まらないわ。まずはどうにかして、ここから抜け出さなきゃ……」

何かできることはないだろうか？

健は部屋の中を探り出した。しかし、目ぼしいものは見つからない。ゴザの下にも何も無い。何もできないこの状況にイライラした健が、鉄格子を引っ張ると。

(あれ?)

お分かりいただけただろうか？

ガタが来ていたためか、少し力を入れて引っ張っただけで鉄格子が外れてしまったのだ。

「よっしゃあ！」

堪え忍んできた苦労が報われた瞬間だった。さすがの健もガッツポーズ。

「ねえ、キミ。喜ぶのはいいけど、見張りがいない今がチャンスよ。あたしのところもガタが来てるわ。ぶっ壊しちゃって。そうすれば

あたしも出られるから!」

脱出できた嬉しさのあまり気が狂ったか、女性に言われるがままに健は鉄格子に体当たりをかました。何度も重ねるうちに錆び付いていた鉄格子は次第にぐらつき始め、遂には破壊された!

「やったあ!」

「出られたあ!」

堪え忍んできた苦勞が再び報われた瞬間だった。さすがの健もガツポーズ。つられて、白衣のお姉さんもガツポーズ。

「さっ、早くここから逃げましょ!」

「はいっ!」

取り上げられていた武器も取り戻し、かくして、健は名も知らぬ白衣の女性と一緒に逃亡することとなった。

サイレンが辺りに鳴り響く。女性から逃亡するためのルートを教わり、その通り健は逃げてゆく。最終的には非常口から飛び降り、地面へ着地。

「おっと、このまま逃げられると思っているのか。そうはいかないぜ! かかれーッ!」

「下がってください、こいつらは僕が引き受けます!」

しかし、先回りした武装集団が立ちはだかる。女性を後ろへ下げると、

健はエーテルセイバーを手に襲い来る武装兵たちを蹴散らす。ちぎっては投げ、ちぎっては投げる勢いで。大勢いた武装兵は、いつ

の間にかリーダー格の男だけになっていた。

「よし、邪魔者はいない。あとは本丸を叩くだけッ！」

「さあ来い小僧オオオオオッ！！！」

健はその見上げるほどの巨漢の懐へもぐりこみ、ラッシュユを浴びせる。

そして、とどめにこの巨漢を上空へと打ち上げる！

「せいやーッ！」

「あびばー！」

リーダー格の男は倒れた。見るもぶざまな格好で。

「さあ、いきましょう！」

女性を連れて、再び健は逃亡を開始。全力で走って、センチネルズの研究施設が遠くに見える場所まで行った。

「ぐぬぬ……！」

「波岡様、いかがでしたでしょうか？」

「こうなれば奥の手だ。我々の秘密を知ったものは始末せねばならん。？ヤツ？を投入しろ！」

「しかし、アレはまだ実戦に投入できる段階では……」

「かまわん出せッ！」

モニターに映った映像を見て歯ぎしりする浪岡を、緑川がなだめた。

事態を重く見た浪岡は、緑川に実験体のシェイドを解放するよう指示を下す。

た。放たれたシェイドは、山をぴよんぴよん跳ねながらだっ

EPISODE 28：早くおうちに帰りたい

命からがらセンチネルズが所有する研究施設を抜け出した健は、隣の独房で捕まっていた女性を連れて逃亡を続けていた。追っ手は今のところは来ていない。野山を抜けたらそこは取り付け道路だった。お互い名乗りあったりしながら、とりあえず寝泊まりができそうなところを探す。

「ここまで来たら大丈夫なはず……」

「きれいね」

辺りは、すっかり真つ暗だ。満月が天に輝き、星々が夜の空を飾っていた。今の状況が呑めていないのか定かではないが、研究員の女性がのんきに空を見上げて目を輝かせていた。

「とばりさん、今はそんなこと言ってる場合じゃ……」

とばりと　そう呼ばれた研究員の女性は、冷静沈着で知的な雰囲気を漂わせていた。おまけに美しい。青みを帯びた美しい黒髪は満月に照らされ、透き通るようなその肌もいちだんと艶やかに照らされていた。更に、白衣とその下に着た藤色のシャツに開いた胸元から、豊満な乳房がのぞいている。ベルベツトスカートもスリットが深く、一瞬下に何も穿いていないのでは、と、相手に錯覚させてしまうほどだ。

「もしかしてここから先、どうするか不安なの？」

健がとばりに抱いていた『少し子どもっぽいな』という印象は

この時あっけなく覆された。彼女は、ものの見事に言い当てていたのだ。健が本心で何を考えていたかを。

「それなら大丈夫よ。別に野宿することになっても、文句なんか言わないわ」

「ですけど、もし見つかったら……」

「そのときはそのときよ。匿ってもらえそうなところ、探したらいいはあるんじゃないかしら？ みんながみんな、必ず匿ってくれてるってわけじゃないけど」

不安なあまり少しくずっていた健を諭すように、彼女はそう言った。

「……ありがとうございます。よく考えたら、ぐずるより行動したほうがいいですね」

健もようやく落ち着き、安堵の息をして少し微笑んだ。気持ちに整理がついたところで、二人は再び寝泊まりできそうなところを探しはじめた。この際、掘っ立て小屋でも僻地のボロ屋でも、プレハブ小屋でも誰にも使われていないようなあばら家でも、最悪電灯の下や公園のベンチでもいい。少しくらい寒くても我慢だ。

「見てください、とばりさん。いい物件がありましたよ！」

「ホントね。おんぼろだけど良さそう！」

やがて、道のはずれに廃棄されたホテルを見つけた。見た目はボロボロで中は汚いが、ベッドから少しホコリを払えば寝られる。と

りあえずロビーへ入り、ロウソクにマッチで火を点けて暖をとる。

「やったね！　ここなら寒くないわよ」

「そうですね！　ところで、ここってどこなんでしょう？」

そういえば、ここが日本のどこに当たるのかまだ知らなかった。健は、頭の中でひとりで考察をはじめめる。が、思い付かない。なので、とばりと一緒に考えることにする。

「僕たち、センチネルズの研究施設に捕まってたんですね？　この前浪岡っていう怪しい人からもらった名刺に……」

「……ねえ、ちょっと待って」

それまでお気楽そうにしていたとばりが、突然眉をしかめた。

「いま、なんて言ったの？」

「えっ、だから浪岡さんって人が名刺を……」

「そうじゃなくて。名刺にはどこに何があるって書いてあったの？」

あの時浪岡から渡された名刺には、果たしてなんと書いてあったのか？　おぼろげな記憶を確かに、複雑な迷路を右手の壁からたどるように過去の出来事をさかのぼっていく。とはいうものの、それほど遠い昔の出来事ではない。むしろつい最近の出来事だ。やろうと思えば、すぐにも思い出せるだろう。やる気の問題だ。

「あっ、そうだ。確か……、奈良県って書いてありましたよ。って、

なっ奈良県！？ めちゃくちゃ遠いじゃんかあ〜！」

思い出したはいいが、不覚にも彼は取り乱してしまった。この奈良から自分が住んでいる京都までは、距離が著しく離れているからだ。

「奈良はセンチネルズの本部がある場所……っていうか、あそこが本部ってことになるわね」

「うわーんツ！ おうちに帰れないよーツ！！」

「って、どうしたの！？ この子ったら退行しちゃってるし！」

あまりの出来事にパニックを起こし、健は子どもっぽくなっていた。車はない。金はある。しかし、奈良の地理にはあまり詳しくない。東大寺に奈良の大仏があることや、お寺がたくさん建っていることぐらいは知っている。ケータイも今は大丈夫だが、充電が切れるとヤバイ。だが、一番心配なことは、帰りの電車で迷ってしまったかもしれないということだ。とりあえず健を落ち着かせ、二人は就寝。行き先が不安な夜を過ごした。

その頃、健のアパートでは。昨日みゆきと一緒に不破の見舞いに行っただけの健が帰ってきていなかったため、心配になったアルヴィーは、みゆきと一緒にアパートで帰ってこない健を待っていた。

「あやつ、一向に帰ってこない……。昨日、健はみゆき殿と一緒にだったのよな？」

「はい、そうです。けど、お昼おごってもらったあとでシェイドが出たみたいで、健くんがシェイドを退治しに行ってからは見えないんです」

「そうか……。携帯にも出なかったからの。迷子になって電波の届かないところへ行ってしまったか、それとも……」

いったん言葉を切り上げ、アルヴィーが眉をしかめる。

「それとも……?」

不安げにみゆきが、アルヴィーを見つめる。

「誰かに連れ去られてしまったか、だ」

言葉につまったか、軽いショックを受けたか。みゆきは信じられなさそうに黙り込んでいた。

「まあ、そう暗い顔をしなさるな。あくまでこれは推測だ。またひよっこり帰ってくるかもしれぬぞ」

「ですけど、やっぱり心配だわ。悪い人たちからボコボコにやられてなきやいいんだけど……」

心配でしようがないみゆき。そんな彼女に寄り添い、アルヴィーは優しく彼女を見つめてこう言う。

「何も心配することはない。健を信じるんだ。あやつならきつと帰ってきてくれる」

「……はい！」

落ち込んでいたみゆきに光が戻った。暗かったみゆきから、元の太陽のように明るいまゆきへと戻ったのだ。

「さて、もう日も暮れておる。お主はご家族のもとへ帰られよ。あとは私に任せてくれ」

「わかりました。健くんのこと、お願いします！」

夕陽を背に受けながら、みゆきは帰っていった。健が必ず戻ってくると信じて。アルヴィーもみゆきを見送ると、運を天にゆだね、健を待ち続けることにした。テレビを点けて、チャンネルをニュース番組へ回す。迷子の健がニュースで取り上げられるかもしれないからだ。だが、目ぼしい情報はなし。

「ううむ。仕方がない、風呂でも沸かすか」

風呂に湯を張り、沸き上がるまで待つ。ニュースを見ながら。自分の携帯からも目を離さない、着信するかもしれないからだ。

しかし、着信なし。懸命に待ち続けているアルヴィーも、さすがに退屈してきた。どれだけ人を待たせれば、気がすむのだろう。あやつが帰ってきたら、たつぷりと叱りつけねばなるまい。シャワーをくぐり、寝間着に着替えてみたび着信を待つ。チャンネル回してテレビを観ながら、あやつを食べる。そうやって待ってもダメなら寝て待つ。

「まったく。心配で眠れんではないか……」

適当に夜食をすませ、不満を吐露しつつも、アルヴィーは健を寝

て待つことにした。『果報は寝て待て』の理論だ。ふとんに入つてすやすやと寝息を立て、アルヴィーは眠った。

「っ……うーん……」

次の日の朝。いつも強気な彼女も、この時は穏やかな寝顔を浮かべていた。まばゆいばかりの朝日を浴びながら。そして、何よりも心待ちにしていた。健が無事に帰ってきて、自分やみゆきの前に姿を見せることを。そして、枕元の携帯電話が鳴り響いた。まだ眠たそうにアルヴィーが目を覚まし、パカッと携帯を開く。アラーム機能だろうかと、思ったが……違った。それは着信の知らせだった、それも健からのだ。起床したアルヴィーは電話に出る。

「もしもし、健か!？」

「ああっ、やっとつながった! アルヴィー、いま奈良にいるんだけど……」

「奈良だと!? お主、なぜそのような遠い場所におる!」

「センチネルズに捕まって……あっ、それから……」

通話中、健が申し訳なさそうに言葉を切る。

「なんだ? どうかしたのか?」

「今、女の人と一緒にんだ」

そう聞いた瞬間。アルヴィーの肩がつり上がり、目つきも悪くなつた。

「おぬし、いったいどういうことだ。旅先で女をたぶらかしたのか？」

「そ、それはあとで話すよ。だから、迎えに来て！」

「……やれやれ。仕方ないヤツだの。わかった、迎えに行こう」

「奈良のどっかの古いホテルにいるから。お願い！」

健がそう告げたあと、電話は切られた。アルヴィーは寝間着からワイシャツとミニスカに着替え、その上にベージュのコートを羽織ってゆく。

「待っておれよ、健」

準備を終え、アルヴィーは隙間へと飛び込んだ。シェイドである彼女ならではの芸当だ。行き先は 奈良。

E P I S O D E 2 9 : お世話になりました

昨日から初めてのことだらけだ。たった数時間数日ふれあった程度の付き合いである、

赤の他人の見舞いへ行き、幼馴染みのガールフレンドには昼食をおごる。

そのあと怪しい組織に捕まり、もはやこれまでかと思ったが無事に脱出できた。

逃走者として奈良県の中を駆け回り、つぶれたホテルと一緒に脱走してきたお姉さんと二人きり。

そして、本来ならシェイドだけが通れる影や隙間を通り抜け、こうしてアパートの自室へ戻ってきた。一緒にいた女性 とぼりさんを介抱することになったが。

壮絶だ。実に壮絶極まりない出来事が、この2日間で起こっていたのだ。

普通ならどう考えてもありえない。だが、不思議かな、体験した数奇な出来事を味わってしまったのだ。アルヴィーに電話を入れたあと、健は彼女が来るのをひたむきに待ち続けていた。

長いこと留守にしていた上にそばに女性がいるから、アルヴィーは嫉妬なり心配していたなりできっと怒るだろう。だが、彼女は何も悪くない。

自分が悪い。元はといえば簡単に捕まってしまった、度胸なし、勇気なし、気力なしの自分が悪かったのだ。

憤怒した彼女のほとぼりが冷めるまで、付き合いおう。いかなる罵声も甘んじて受けよう。どんなに暗い夜でも、夜明けが訪れるまで。

「ね、ねえ。アルヴィー……まだ、怒ってる？」

「さよう、どうも機嫌が直らん。乙女心というのは複雑なものよ。フェミニニストのお主はそれを一番良く知っておるはずだが？」

眉をひそめ、腕を組んでそっぽを向いている。これは当分スネたままだろう。

シエイドにしては『人間臭い』彼女らしいといえば彼女らしいが、恐らく、主が戻ってきたことを、

素直に喜べないのだろう。なにせ、その戻ってきた主人はすでに幼馴染みの女と付き合っているのにも関わらず、別の女を連れて戻ってきたのだから。

お互いに気持ちのズレが生じたのだろう。それでアルヴィーは『健が女遊びが好きだったとは、見損なった』と、勘違いを起こしてしまいへソを曲げているのだろう。

「のう、健よ。どう落とし前をつけてくれるというんだ？」

そんな折、アルヴィーがようやくこちらを向いた。怒っているというか、呆れたというか、悲しそうな顔だった。

「え、えーと……明日の朝、あの人を家に送るから。それで、許してくれる……かな？」

そう言い終えたとき、またそっぽを向かれた。どうやら、思ったより事態は深刻だったようだ。

「上がったわよおー」

少し緊迫した空気を和らげるように、気の抜けるような甘酸っぱい声が浴室から聴こえてきた。

とぼりが風呂から上がったのだ。現在、彼女が元々着ていた服は洗濯中。その代わりに、

着替えとしてワイシャツを用意した。男性用の丈が大きいものだ、

彼女にあうかは分からない。

「健くん、シャワーとか着替えとか貸してくれてありがとう」

「え……あッ……あ……っ」

目が点になった。いや、目からウロコか？ 予想は的中だ。丈が
あわず、袖に手が隠れて指がなんとか出ている状態だ。すそからは
下半身が見えたり見えなかったりしている。太ももと腰の辺りや、
股の辺りが気になって仕方がない。そういえば、この人は下着をつ
けていただろうか。いや、それらはすべて洗濯中だ。明日には乾く
が、今日中は無理だ。

頭がどうにかなくなってしまいそうなくらい美しかった。鼻血が出る
くらいドキドキしてきた。なにせ大人の女性が二人も。

「……どうしたの？」

「い、いや、な、なんでもないで……す」

「さては興奮してるでしょ？ あなたエッチなのねえ」

凶星だ。否定できるわけがない。いや、否定しない。自分はハッ
キリ言ってしまうえばスケベだ。

そもそも、男が女に欲情してしまうのは自然の摂理。しょせん男
は、そういうだらしない生き物なのだ。学生時代によくそう教えら
れてきた。今さら、この事実を否定するわけには行くまい。

「ふふっ」

そんな二人の姿を見て憤っている自分がバカらしくなってきた
か、アルヴィーが微笑んだ。

「私も大人げなかったな。見ていてはかばかしくなってきた。この

落とし前は、また今度つけていただくでしょう」

「えっ、許してくれるの!?!」

「もちろんだとも」

「ホント? いやったーッ!?!」

健が嬉しさのあまり、年甲斐にもなく大はしゃぎした。とばりもアルヴィーも、

そんな彼につられて大いに笑った。先ほどまでそこに漂っていたギスギスした空気は洗浄され、マイナスイオンを含んだなごやかなものへと変わっていた。

「まあ、ごはんまで。本当になんてお礼言ったらいいのか……」

頬を染めながらとばりが微笑む。出された食事は、肉野菜炒めと味噌汁、

そして白ごはんという簡素なものだった。だが、今のこの状況ではわがままなど言えない。

腹が減っていれば、何もかもご馳走と思えるものだ。健に助けてもらってシャワーや着替えもさせてもらい、こうして料理まで振る舞ってもらっては、申し訳が立たないというもの。何かお礼がしたい。そんな気分だった。

「そんな、滅相もない。まだまだ素人ですって」

「……ふふふ、一番乗りだ! いただきますっ」

アルヴィーが先にハシをつけた。慌てて健もハシをつけようとするが、とばりに先を越されてしまう。

「食事とは弱肉強食、早い者勝ちだ。料理を作ったお主が出遅れるとは、笑ってしまうのっ」

アルヴィーの小皿には既にたくさん具が盛られていた。全体の3分の1くらいか。とぼりの小皿も同様だ。このままでは、自分の分がなくなってしまう。アルヴィーにすがりつくと言きじゃくるように、

「僕の分残しといてよぉ〜！」

「そう慌てるでない。ちゃんとお主の分はとっ」といってあるぞ？」

いらぬ心配だった。アルヴィーがそう言うように、

大きな皿には健の分の具がちゃんと残されていた。先ほどまで半べそかいていたのが嘘のように健は立ち直り、具と白ごはんとをかっ込んだ。そして、翌日。乾いた下着や白衣をとぼりに返し、着させた。

「昨日はありがとう。あたし、あなたたちに世話になってばかりね。なにかお礼しなきゃ……」

「いやいや、礼には及ばんよ。それに困ったときはお互い様ではないかの」

家まで同行しようと申し出たが、彼女はひとりで帰れるというのでこうして見送ることとなった。とぼりはにっこりと笑っていたが、どこか寂しそうだ。

「ところで、健くんは？」

「すまない、あやつは今おねむの時間だ。そなたを助けた上での敵地からの脱出と、自宅への帰還を最低2日はかけてやったからの」

それなら仕方がない、と、とぼりは返した。

「あ、そうだ。メモ帳かなんかないかしら？」

メモ用紙がほしいという、彼女からの最後の要求。受話器の横にあったメモ帳から一枚破ると、

それをとばりへと渡す。とばりはそれに何かを書き込むと、アルヴィーへと手渡した。何が書いてあるのだろうか。

「これは？」

「あたしのアドレスと住所よ。何かあったら、また連絡ちょうだいね。それから、あとであたしの家に来てもらえないかしら？ 何か予定があったらそつちを優先してくれてもいいから」

「承知した。健にそう伝えておこう。では、さらばだ」

「バイバーイ、またね」

笑顔で手を振り、とばりはアパートをあとにした。メモによれば、彼女は京都の西大路に住んでいるという。

EPISODE 30：東條は英雄なのか？

彼は、たいそう気持ちよく眠っていた。いや、眠っていたかった。ぐっすりと深く眠っているところを、同棲している気の強い女に叩き起こされたのだ。何故だ。何故僕は起きなければならぬ？ 今日日はバイトの日ではないのに。昼まで寝ても何も支障はない日なのに。何故だ。何故だ。なぜだ！　せめて、あと五分だけ安らぎを…。

「ひとつ訊ねよう。お主、いま何時だと思っとる？　当ててみい」

「あ、朝8時……」

一瞬、目の前の銀髪色白で巨乳の女性　アルヴィーは笑った。やけに嬉しそうである。そんなに今の僕がおかしく見えるか。ちょっとひどい気がする。

「正解は昼の1時だ。残念だったのう」

「い、ごはん……おなか、空いた……ぐふっ」

「メシは作つとらんぞ。自分でおかずでも買いに行くがよい。それとも、みゆき殿が働いている『あそこ』へ行ってみるか？」

「……グッドアイデアっ！！」

彼女からの問いに、親指を上突き立てる。金なら一応、まだあった。無駄遣いはしていない。だから残っている。別段ピンチというわけでもない。

「何にしようかな、うふふ」

アルヴィーに留守番を頼み、自分はトワイライトへ。金は3000円ほどある。お札が三枚だ。あとは小銭。たいていのメニューが買ってしまう額だ、迷うのも無理はない。しかし、交通費のことも考えるとあまり無駄遣いはできない。散々迷った末に、久々にガッツリ食べたい健はカツ丼を注文する。

「おまちどおさま。ごゆっくりお召し上がりください」

するとみゆきではなく、以前世話になったお姉さんがカツ丼を持ってきてくれた。待ちに待った甲斐があった！ 嬉々とした顔で礼を言つと、健はさっそく割りばしを割る。

「じゅるり……」

巨大などんぶりに入った、こんがりきつね色に揚がったカツレツと、黄金色に輝くつゆだくの卵とじ。その下で光り輝く、大盛りの白ごはん。腹が減ると何でも旨そうに見えるというが、もしそんな状況で目の前にカツ丼が置かれていたらどうなるだろう？ 人にもよるが、絶対に食べたくなることうけあいだ。カロリーは高いものの、体力作りにはもってこいのメニュー。それがカツ丼という逸品だ。

「いったただきまーす！ うっ、うまいっ！ うーまーいーぞー！！」

ハフハフ。うまい。とてもうまい。中までしっかり揚げられた、

ジューシーなカツレツ。ふんわり、トロトロの卵。全体的に茶色っぽい中で緑色に光るネギ。そして、それらの下で白く輝くごはん。最高だ。最高の組み合わせだ。嗚呼、こんなにおいしいカツ丼が食べられるなんて。なんて素晴らしいことなんだろう。

「ごちそうさまー。ふう、おなかいっぱい」

腹ごしらえを終え、健は帰路につく。自転車へ乗ると、ペダルを漕いで漕いで漕ぎまくる。食後の運動にはちょうどよい。

「きゃあああああッ！」

「シエイドか!？」

誰かの悲鳴が聴こえてきた。それに呼応するようにウロコのお守りから音が鳴り響く。健は自宅から一転、悲鳴が聞こえた方角へと猛ダッシュ。

「い、いや……来ないで」

湿った足音と共に、長い金髪の女性に近づくシエイド。毒々しい赤と黒に染まったためつとした体、水かきから鋭く伸びたカギ爪。カエルと半魚人を足して2で割ったようなそのシエイドは、今まさに金髪碧眼の女性を補食しようとしていた。嘲笑うような、金切り声を上げながら。

「すっこめヒキガエル！」

しかし、そこへ筋肉質な金髪の青年が割り込み、ランスでカエルのシエイドを吹き飛ばす。起き上がり、金髪の青年 不破をにら

むと、「オマエハ邪魔ダ」

「誰かは知らないが、あんたは今のうちに逃げな」

恐怖のあまり、女性は返事ができなかった。だが、頷くことはできた。立ち上がり逃げようとするが、不破がシェイドの攻撃を受けよろめく。

「何してんだ、早く逃げろ！ あんた、こいつに殺されちまうぞ！」

言われるがまま、全力で走る。だが、つまずいて足をくじいてしまふ。

「食らえバケモノ！」

不破が手にしたランス　ボルトランサーをかざし、放電。しかし、カエルのシェイドにはまったく効いていない。それどころか、電撃を吸収されている。

「バカな！　どうなってんだ、水棲生物に雷は効果てきめんなのに……」

「ギシャアアー！！」

カエルのシェイドの空中からの叩きつけ攻撃を受け、不破はその衝撃で倒れてしまふ。

「もうダメ……私も、あの人も助からない……」

覚悟を決めたかのように、彼女は眉をひそめて目をつぶる。悲嘆

に暮れながら。怪物相手に何もできない、抵抗することさえも。もはや私の人生はこれまで。生きることがあきらめ かけた、その時だ。

「たあああッ！」

「グエエ！？」

右手に大型剣を、左手に盾を持った青年がシェイドの前に立ちはだかった。彼は戦う。誰も死なせやしない、こんなやつらに人々の笑顔を奪わせないために。

「東條……さん？」

「話はあとです。ジェシーさん、離れて！」

大剣と盾を持つ、怪物から人々を守るため戦う青年。まさに噂になっていたヒーローそのままの姿。図らずも彼女は、ジェシーは知ってしまったのだ。

「絶対に許さない！」

都市伝説の正体を。そして、健がエスパーであることを。

一触即発。切っ先がシェイドに向けられ、緊迫した空気が漂いはじめる。ジェシーは足を引きずって物陰に避難。今の自分に何ができるのだろう。彼が、健が死なないように天に祈ることしかできないのだろうか。生きるために逃げることしか、できないのだろうか。応援以外にできることはないのか。

「次八 オマエダ。クロス！」

カエルがすばやい動きで健を翻弄。先に戦ってやられた不破と、足をケガしてあまり動けないジェシーが気がかりだ。なかなか戦いに集中できない。

「気をつける、東條！ そいつにエネルギー系の攻撃は通用しないっ！」

「つまり電気ですか!？」

何度もひつかいてくるカエルの攻撃を防ぎながら、健は不破の話聞いていた。エネルギー系が通じない　つまり電気やレーザーは一切効かない、ということだ。健がおもに使う炎や氷の属性。これらは、エネルギー系統に含まれるのか。ものは試し、やってみなければ分からない。

「まさかお前、そいつとやる気か!?　オレでさえ敵わなかった相手だぞ。お前が勝てるわけ……」

「やってみなくちゃ分からないでしょ！」

正直、なめていた。こいつは未熟者だ。仲良くなったところでこいつはまだまだ未熟、自分になう相手ではない。そう思っていた。今まで見てきたこいつの姿は、いつもシェイドにやられていた。かと思えば、シェイドを倒していたこともあった。どっちつかず。中途半端だ。気持ち悪くて仕方がなかった。そんなヤツが、赤の他人を襲っていたシェイドと果敢に戦っている。どうしてこいつは、あそこまでして他人のために戦える？　他人より自分の心配が先なのに。解せない。解せない。

「てりゃ！」

飛び跳ねて健の攻撃をことごとくかわす、カエル。動きがすばや
いせいで、相手に攻撃がなかなか当たらない。

「こいつ！ いい加減にしろ！」

こちらを小バカにしたような動きに、苛立ちを感じずにはいられ
なかった。憤った健を、チャンスとばかりに切り裂こうとする。だ
が、カエルの目前で盾によって攻撃が防がれた。弾かれて一瞬、カ
エルが怯む。そこへすかさず、切り上げをお見舞いする。少しは効
いたようだが、まだまだ相手は倒れそうにない。どうすればいい。
どうすれば、この薄気味悪いカエルを倒せる？

戦いは激しさを増すばかりだ。攻防の駆け引きが白熱する中、突
如として陽射しが強くなる。それも眩しさのあまり、思わず目を閉
じたくなるほどだ。

「ま、まぶしい……うん？ あいつ、何故だか分からないけど苦し
んでるぞ」

カエルのシエイドの体に異変が起きていた。乾燥肌ゆえ、強い日
光を浴びて体が乾いてきたのだ。ひび割れが生じるほどに。カエル
の弱点、それは熱と乾燥だ。変温動物ゆえ、寒さにも弱い。水陸両
方で生きられる両生類の代表格であるカエルだが、水分をとらなけ
れば彼らは干からびてしまう。よって夏の時期はほとんど水場にい
る。気温が高く、その上陽射しが強い日だとカエルにとっては地獄
のような一日である。人間なら『暑い』程度で済むが、カエルはそ
うはいかない。いきなり焦熱地獄の中へ放り込まれるようなものだ。

「そういうことなら……よし！」

これを好機と見た健は、剣に炎のオーブを装填。燃え上がる炎の剣を手に、カエルへと突撃する。焦りを感じたカエルは、その場から逃走を図るが体が乾いていて上手く動けない。

「終わりだあッ!!」

しかし健は逃さなかった。力を溜めてから空高く跳躍し、剣を地上のカエルめがけて突き立てる。地面へ突き立てられた剣の周りで炎の波が巻き起こり、カエルのシェイド　ギルフロッグは爆発炎上。木っ端微塵に砕け散った。

「名付けてバニシングダイブ、か……がくっ」

どうやら先ほどの技はそういう名前だったらしい。必殺技名を言えたのと、ジェシーや不破を救えたのとでご満悦の健は、必死で戦った所為かその場にうつ伏せで倒れこむ。

「あとから言うんだ……」

「あとから言うのね……」

二人は今の光景を見て、そう感想を述べた。ツッコむところが違う気もするが。と、冗談を言っていると、健が剣を杖がわりに立ち上がりジェシーのもとへ歩み寄る。

「ありがとうございます。あなたにはなんて言ったらいいの……感謝の言葉もあります」

「お、お礼なんかいりませんよ。僕も目の前で人が襲われてるのを、

黙って見てられなかっただけですから……」

「でも、お陰で助かったわ」

「あつ……はい。ところで、ケガとか大丈夫ですか？ 僕はこのくらいなら平気です！」

「ケガなら、私も大丈夫ですよ」

ケガを負っていないながらも、ジェシーはにつこりと笑っていた。本当は痛かった、苦しかったはず。それでも笑顔でいられるのは、健が助けてくれたから。守ってくれたから。そういった感謝の気持ちの表れだ。

「……ありがとうございます。けど、僕がエスパーだってこと、バレちゃいましたよね。できれば、関係のない人たちは巻き込みたくなかった。それに、みなさんに迷惑かけてしまう。できるだけ秘密にしたかったんです」

「そうだったのね。けど、ひとりで悩むことないわ。私たちと、それにご家族とお友達がいるじゃない。あなたはひとりじゃありません。だから、何でも自分だけで抱え込まないで、気軽に相談してね」

そうだ。ジェシーさんが言う通りだ。自分はいつも、悩みをひとりだけで抱えていた。他人に余計な迷惑をかけてしまうのが嫌だった、シエイドとの戦いに周りの人々。家族や友人、職場の人たちを巻き込みたくなかったからだ。しかし、それだと理解者は少ない。支持してくれる人がほしかった。でも危険な目に遭わせたくない。だから悩んでいた。ひとりで解決しようと迷走していた。

「……はいっ！ でも、他のみなさんにも教えるわけには……」

「それなら、大丈夫よ。うふふ」

人差し指を鼻に近づけて立てる。『しーっ、聞こえますよ』、もしくは『みんなにはナイショだよ』という合図だ。二人だけの秘密、ということだろうか。恐らく、ジェシーは気遣ってくれたのだろう。だらしのない、ハッキリしない、悩みがちな自分に。

「はい！ ありがとうございます！」

「でも、隠したままでもダメだから……いつかはみなさんに話しましょう。そう約束……できますか？」

「はいっ……！」

お互い笑顔になった二人は、それぞれの帰路へ歩き出した。健はアパートに、ジェシーは自宅に。どちらも自分が帰るべき場所だ。燃え上がるような夕陽と茜色の空が、二人を天から見守っていた。

「……そうだ。あいつはひとりじゃない。だが、オレは……」

あいつには周りに理解者がいる。だが、俺はどうだ。天涯孤独、早くに両親を亡くして孤児院に引き取られた。警視庁に行っても一人ぼっちだった。自分が横暴な態度をとっていたせいで孤立してた。頭じゃ、自分が悪いのは分かってた。だが、頭は認めても心では認められなかった。怖かった。そのうち居場所を失うんじゃないのか。と、内心おびえていた。そんな俺に、あの人は手をさしのべてくれた。だが、あの人も浪岡に。

「……悩むな、オレ！ オレも、誰かに相談しねえとな」

危うく自己嫌悪に陥るところであった。彼は寸前で、ハツと我に返ったのだ。頭が硬い彼もまた、精神的に成長することができた。不破もバイクを駆り、夕陽が沈む方角へと疾走するのであった。

EPISODE 31：支える人々

「えっと、製版してそのあと試し刷りしただろ。で、98枚刷って……ん？ 1枚、多いような……があゝッ！ 印刷ミスった！」

今日も彼は一生懸命に働いていた。しかし、そんな彼にもミスはある。コピー機で複製する紙の枚数を間違えてしまったのだ。ある程度仕方はない。誰にだってミスはある。彼とて、例外ではない。

「すみません、係長！ 書類を1枚多く印刷してしまいました」

「ハツハツハー、Don't mind.ネー。誰にだってミスありまーす。次からは気をつけて印刷してくらさーい。余った1枚、裏にイラストレーションなりグチ書くなりユーの自由デェース」

しかし、係長ことケニーはそれを許してくれた。彼の大らかな人柄がうかがえる。ややエキセントリックなところはあるが、彼もまたよき上司だ。健は上司に恵まれているといえよう。

「ひゃあ、難しいな。練習モードでこれなのか、ハードルたけえ」

昼休み、楽しみながら学ぼうと考えている健はタイピングゲームをやっていた。回転寿司を舞台に、言葉を打ち込んでいくという内容だ。難易度は高めのようで、練習用のモードですら時間制限が1分間とシビアだ。その上、皿が流れていく速度も早い。のんきにやっている暇はないのだ。

「こんなのできないよー」

だらけの低得点であった。回数にして、数百回。思わず笑いがこぼれてしまう数値だ。

「あつ、えーと、うーんと、えーっと、なんて言っただけならいいのかな……」

「今の醜態見ましたか？　これが現実です。みはるさん……」

机に突っ伏す健と、言葉に詰まって慌てふためくみはる。なんというか、この二人は性格は違えど似たもの同士なのかもしれない。ただ、どちらかといえば根暗で人見知りをする方であったみはるは、最近になって明るくなってきている。恐らく、わりかし快活な健の影響を受けたのだと思われる。

そして、定時。いよいよ退勤する時刻だ。荷物をまとめて上着を羽織り、帰る準備をしていた。近頃暖まってきたとはいえ、寒いことに変わりはない。厚着をしておけば、いざというとき困ることもないはず。暑ければ、脱げばいい。たったそれだけの話なのだ。

「東條くん、ちょっといいかな」

そこへなにやら、話をしたげに大杉がやってきた。

「はい、なんででしょうか？」

「話があるんだが……とりあえず来てくれ。ジェシーくんも一緒だ」

大杉に言われるまま、健は彼のうしろについていく。テーブルの席に座ると、先に呼ばれたジェシーがそこで待っていた。そろったので、秘密の談義を開始する。昨日何があったのか説明してほしい、

と、大杉は二人に訊ねた。すると健とジェシーは、お互いに洗いざらいすべて話した。少し眉をひそめ、のっぴきならない様子の大杉を前に、健は少しおびえていた。そしてやはりアレは シェイドの戦いは、深刻で重大なことだったのだと、いま改めて認識した。

「なるほど。二人とも、事情は分かった。健くん、わしは君を無理に止めようとは思わん。ただ、これだけは言わせてもらえんだろうか？」

叱られる。でも仕方がない、それほど危ないことをやらかしたのだから。唾をゴクリと呑み込み、健は覚悟を決めた。

「いや、そう怖がらんでもいいぞ。……おほん！ いいか、確かにシェイドと戦うのは立派なことだよ。わしら一般人にや真似できないことだ。しかし、だからって自分の命を粗末にはいかんよ。人間、死んじまつたらそれつきりだからねえ」

「はい」

「何にせよ、無理はいかん。ジェシーくんから聞いたかもしれんが、君にはわしらやご家族、それに友人の方がついている。もう聞き飽きたかもしれんが、何でもひとり抱え込むもんじゃないぞ。困ったことがあれば、遠慮せずわしらに言ってみるといい」

「ありがとうございます！ でも、僕がエスパーだって事は他の皆さんにはナイショにしてもらえないでしょうか……。戦いに巻き込まれたりして、迷惑かけたくないですから」

「心配いらんよ！ そこまで気遣ってくれなくても大丈夫だ。それにわしらも、君には世話になりっぱなしだからなあ。お互い様とい

うことだよ」

やはり暗くなる健を、大杉が激励した。

「ですけど、副所長。今はまだ秘密にしておきたいという要望が出ている以上、うっかり話の弾みで皆さんに話さないでください……ね？」

ジェシーが微笑みながら大杉へ催促する。相変わらず見ていて気持ちが悪われるような、癒される笑顔だった。ジェシーの笑顔で談義は幕を閉じ、健の心に残っていたモヤモヤもすべて晴れた。上着を羽織って荷物をしよい、ジェシーと大杉、そして他の職員に別れのあいさつをして健は退勤した。

「おお、私やみゆき殿以外にも理解者ができたのか。よかったの、健」

「うん。でも、職場の人全員にエスパーだってことを話したわけじゃないよ」

今日起こった出来事を健からすべて聞いたアルヴィーは、大いに感銘を受け喜んでた。彼のよきパートナーであり保護者的な存在である彼女からすれば、これほどまでに嬉しいことはないからだ。たとえるならなかなか友達が出来なかった子どもに友達ができたことを知って、喜ぶ母親の姿に近い。

「どちらにせよいいことだ。私も鼻が高いぞ」

健に寄り添い、彼の頭をなでる。幼い頃母によく頭をなでてもらった事をふと思い出し、感慨にふけるのだった。

よきパートナーであり、ときに今は離れて暮らしている母や姉の代わりとなってくれるアルヴィー。すぐ近くにも、職場にも遠くにも彼の理解者はいる。彼のみならず、人類はみな決してひとりではないのだ。

「ところで……実は困ったことがあるんだが、聞いてもらえぬだろうか」

「なあに？」

「実は、お主が帰ってくる前に風呂をわかして浸かっておいたのだが……湯が少なくなってしまうので」

「ええ〜！ もっと早く言ってよお！」

EPISODE 32：遊びに行くヨ！

いつも朝の7時くらいまで寝ている健だが、今日に限っては6時に起床していた。

その理由はとても簡単、みゆきと彼女の知り合いの家に遊びに行く約束をしていたからだ。なんでも、その知り合いから健に用があるのだそうだ。

先に身支度をすませ、朝食は惣菜パンやバナナなどですませる。遅れるわけにはいかない。どちらかといえば、自分は割りと行動が遅いほう。だからこそ少しでも早く、出かける準備に時間を割きたいのだ。

「準備終わりつと。さて、みゆき来るまでひと休み、ひと休み〜」

「おはよう、健。早いほう」

「おはよう……って、わーわーっ!!」

準備は終わった。空いた時間でテレビを見てみると、遅れてアルヴィーが起きてきた。

それも大胆不敵というか、エロチックというか。その手のフェチなら瞬く間に意欲を掻き立てられるような、そんな格好で。

「ん？ どうかしたのか」

「前、前！へそまで全開なってるし！」

「む？……ああ、これか。胸がキツくてのー、つついはだけてしまったようだ」

髪はボサボサ。服にいたってはあろうことが、へその辺りまで無造作に開いていた。

下着を穿いているかどうかは一見分からない。それよりも問題は局部が隠れているとはいえ、

乳房が露出しているということだ。家の中ならまだしも、さすがにこのままのハレンチな格好でよそへ行くわけには行くまい。仮にそのまま行くとすれば、それはとんでもないアバンチュールだ。ついでに、あの格好で欲情するのもよそではとてもできっこない。家ならやりたい放題のし放題だが。

「メシはまだかの？ それとも、先に食べてしもうたか？」

「食べたよっ！」と言いつ返すが、今はそれどころではない。着替えだ！

いつになく痴的な彼女に着替えを用意せねば。何が良いだろう。彼女が来てからちよくちよく服屋へ行くようになったが、自分の感性が彼女のそれとあっているかは分からない。気を遣ったつもりがかえってこっ恥ずかしくなったり、ダサくなったりしては申し訳が立たない。では何がいいだろう。下はジーンズやスカートでいいとして、上はどうしよう。

この前奈良のおんぼろホテルまで来てもらったときに着ていた、ベージュのコートか？ それともワイシャツの下に大きめのブラジャーか？ ハデめのストリートファッションか？ いっそ裸一貫で行くか？ 些細な悩みはどんどん膨らんでいく。現にそんなことを考えている健の頭は、今にも爆発して噴火しそうだ。

「あちゃー……お主、知恵熱を起こしてしもうたか」

というか、普段使わぬ頭を使いすぎてとっくに爆発していた。頭から『ボンッ！』と、白煙を盛大に上げて。

「可哀想に。みゆき殿には私から言っておくから、今日は休め。く

れぐれも無理は……」

「大丈夫ですっ！　っていうかアンタ、どんな服がいいのっ!?!?」

「えっ、昨日クーラーつけっぱにして寝ていたせいで40の熱が出たから、今日は休むんではなかったのか」

「出してねーし！　大丈夫だし！　ねっ造乙！」

「これ、余計に体調を悪くするぞ。今日は休め」

「熱でてないし！　休まないし！　ぜってー行くし！」

「休め」

「いやだ」

「やーすーめ！」

「いーやーだ！」

「やーすーめーよ！」

「いーやーだよー!?!」

アルヴィーに服のことを聞くつもりが、いつの間にかコントのよ
うな光景になっていた。

この部屋に普通の大人はいない。そこにいるのは、さながら暴走
特急のごとき勢いでどんちゃん騒ぎをし、お互いにブチキレて八つ
当たりしあう大人げない大人である。

「健くーん。いるなら返事くださいーい」

「あっ、みゆきの声だ。やべっ！」

ブザーの甲高い音が、玄関から鳴り響いた。ばか騒ぎも収まり、
ほとぼりが冷めた健は玄関へ向かう。

「おはよう、みゆきっ！　今日もかわいいねー」

「えへへ。準備とかもうできた？」

「うん！　早起きまでして準備したよ」

「そうなんだ。ところで、アルヴィーさんは？」

「ドキッ」と、健の肩がびくついた。バカみたいに騒いでいてすっかり忘れていたが、
彼女をまだ着替えさせていない　ピンチだ。このまま出てきたら、やばい。あんな痴的な格好で外には出せない。どうしよう、何とかしよう。そうしよう。

「おお、みゆき殿。おはよう……」

「ごめんもうちよい待って！　すぐ終わるから！」

「いいけど……健くん!？」

大急ぎでドアを閉め、カギまでかけてアルヴィーを着替えさせるべくダンスを漁る。

とにかく、乙女の柔肌があんなにも晒された格好では遊びにいけない。とにかく急がなければ。せわしなく、健はダンスを漁り続ける。

「どんなやつでもいい!？」

「別に私がかまわんが……」

「よしわかった！」

服漁りが終わり、ようやくアルヴィーを着替えさせるときが来た。急いでワイシャツを脱がせ、下着をつけさせジーパンとスカートどちらがいいかも聞く。決して油断はできない、一秒一秒が死闘なのだ。

「お待たせーっ！」

「……に、似合ってる……か？」

健が緊急でアルヴィーに着せたのは、パールホワイトのコートに

黒いミニスカート。

彼女の白髪に映えるかもしれない組み合わせだ。そして足には口
ーファー。自信がなくて少し恥ずかしげに後ろに手を組んだアルヴ
イーは、似合っているか否かをみゆきに訊ねた。

「……きれいですっ!!」

だが、いらぬ心配であった。感激の眼差しでアルヴィーを見てい
たのだから。

「ありがとう……」

「大急ぎで着させたから、メチャクチャなんだけどね……。ところ
で、今日つてどこまで行くんだっけ？」

「西大路だよ。知り合いのお姉さんが健くんに会いたいんだつて
!」

「……む？ 西大路？」

アルヴィーには心当たりがあった。そういえば、この前一晩を共
に過ごした女性の住所も西大路だった。みゆき殿の知り合いの方は、
もしや？

などと考えながらも、三人は意気揚々と西大路へ向けて出発。古
きよき街並みを堪能しつつ、みゆきの知り合いの家を目指す。

「着いたわよ」

3人はみゆきの知り合いの家に辿り着く。そこは比較的大きく、
中々にモダンなデザインをしていた。外観は白い壁で、屋根の上に
パラポラアンテナらしきものまでついていた。広い中庭には、車か
何かのガレージも見える。高さは、どうやら2階建てのようだ。

「で、でかい。いい家だなー」

「夢の豪邸というやつだの」

「白峯しうみやねさん！」

ただならぬ感心を示しながら家を見る二人をよそに、みゆきはブザーを押しながら家主の名を呼ぶ。

「みゆきちゃくん、こんにちは。あつ、健くんたちも来てくれたのね」

「あ、あなたはっ！」

「お、お主はッ！」

ドアから出てきた人物を見て、二人は思わず目を見開いた。我が目を疑った。これは、偶然なのか？ いや、必然だったのか？ 健が以前センチネルズ本部からの大脱走を共にした女性が、そこにいたではないか。他人の空似という可能性はあるが、そんな理屈などぬきに『同一人物』だと肯定せざるを得ない。

「とばりさんッ!?!」

「とばり殿!?!」

「えっ、白峯しうみやねさんのこと知ってたの!?!」

「驚かせちゃってゴメンねー」

動揺した理由は違えど、戸惑いを隠しきれない3人を白峯 とばりは家の中へ案内する。

玄関に上がらせ、スリッパを履かせるとリビングへ3人を招待。茶を淹れて持ってくる。とばりの家は見た目のみならず、中も相当に広かった。今いるリビングだけでも、健の部屋の倍以上はある。天井を見上げれば、そこには煌びやかなシャンデリア。こんなに裕福な暮らしが出来ていてうらやましい。いずれはこういう豪華なマ

イホームを建ててやると、健は心の中で密かに誓っていた。

「大したものないけど、ごゆっくりどうぞ〜」

「はいっ!」

テンションが高揚しつつあった。恐らくこんなに広くていい家の中にいられてもらえて、

つい嬉しくなってしまったのだろう。アルヴィーも花瓶や肖像画などのインテリアに興味しんしんだ。高級感溢れていて、王侯貴族の生活を味わっている気分になれる。湧き上がる気持ちを抑えられず、まるで子供のようにはしゃぐ健とは対照的に、アルヴィーとみゆきは静かにお茶を楽しんでいた。

「ところで、僕らに用事ってなんですか？」

「あ、それなんだけど……この前の剣と盾、見せてもらえないかしら?」

とぼりがみゆきだけではなく、健とアルヴィーを呼んだ理由は他にもない。

なんでも、エーテルセイバーとヘッダーシールドのメカニズムに興味を持ったので、一度調べてみたかったそうだ。要望に応えるべく健はすぐさまそのふたつを取り出し、とぼりへ手渡す。

「どうぞ!」

「はい。うーんと……ふたつとも、古代のオーパーツか何かかしら。この幾何学的な模様とか、いかにもって感じだわ」

一通り見終わった後、もう一度細部まで調べる。

するとセイバーの柄と盾に小さな穴を発見し、「何かはめられそうなもの持ってない?」と訊ねる。心当たりがある　というか、

該当するものを持っていた健から穴にはめられそうなものを受け取り、それをはめてみる。すると剣から火が出たり、刃が凍りついた。盾も同様だった。

「このビー玉みたいなやつ、すごいパワーね！」

「一応オーブという名前があるんだが……まあ、そっちの方が覚えやすいのは確かだの」

「今のすごかったー……。いつもあんな感じで戦ってるの？」

「ま、まあね。うん……」

感銘を受けたとばかりは、一晩セイバーと盾を貸してほしいと願い出る。一瞬迷ったが、健はOKサインを出した。いろいろと謎が多いこの剣と盾について、何か分かるかもしれないと思ったからだ。

EPISODE 33：びっくり、ドッキリ

「さて、感想はどうでしたか？　こんなに大きな家の中にお邪魔できるなんて、滅多に出来ないわよ」

「地下室！　地下室とかつてありますか！？」

「その言葉、待ってました！　もちろんあるわよ」

とぼりの研究所兼自宅を一通り見終わった健とみゆき、そしてアルヴィー。人間誰しも、ブルジョアな暮らしに憧れるものだ。いつかは豪邸を立てて暮らしてみたい。王侯貴族がごとき、優雅な生活を満喫したい。そんなことを夢見ながら。

地下室はないのか、という健の質問に答えて見せたとぼりは、3人を地下室へと案内する。そこは比較的大きい空間で、研究室と発明品の実験場があった。3人はとぼりが持つ高度な科学技術と、ラックに飾られた発明品に興味津々だ。とくに健は誰よりも目を輝かせており、興奮の渦中にいた。

「おお、この銃かつこいい！」

「警察のシェイド対策本部の人に頼まれて作ったの。威力バツグンよー。よかつたら、試し撃ちとかしてみる？」

「はい！　やってみます！」

大型の銃らしきものを持ち、健は大はしゃぎ。

とぼりに試し撃ちを奨められると、喜んで実験場のドアを開いた。何故だろう。今日の健は輝いて見える。元々子どもっぽい気性の彼だが、今日はまた一段とはしゃぎっぷりに磨きがかかっていた。メカ力を見るとワクワクせずにはいられない、現代っ子の性分からか。

「撃つべし！　撃つべし！！　撃つべし！！！！」

一発、二発、三発　ハイテンションで銃を撃ちまくる。

しかし反動を受け、撃つたびによろめいていた。それだけ出力が強く、扱うのに技術がいるということだ。撃つたびに上半身へ来る反動を下半身は受けきれなくなり、ついに床に尻をつけてしまった。

「どうだった？」

「気軽に撃てるシロモノじゃなかったです……」

「そりゃそうだ」と、満場一致で健へツッコミが入る。

「他の発明品も、せっかくだからじゃんじゃん見ていってね」

「白峯さん、これはなんですか？」

「携帯空気清浄機よ」。持ち運びできるから、いつでもどこでも室内の空気をきれいにできるわよ」

空気清浄機を小型化し持ち運びOKにした画期的な発明品が、今みゆきが手に持っているこの携帯空気清浄機である。たいへん便利そうだが、とばり自身は商品化する気はないようだ。その理由としては、十時間ほどで電池が切れてしまうという携帯ゲーム機ほどの消費電力と、充電式が流行りのこのご時世に電池式という古臭さが挙げられている。なお、これは開発者であるとばりが独断と偏見で下した結論である。

「おお。いいメガネだ。左目にスカウターみたいな機能がついておる……」

「それは電波サーチ機能つきメガネよ。いざテストしてみたら、携帯でサーチした方が早かったからお蔵入りにしちゃったけど……」
「漫画みたいで面白いのか？　そりゃあ、残念な話だの」

そのメガネをかけながらアルヴィーはお蔵入りを惜しんでいた。元々のミステリアスな雰囲気がそうさせるのか、意外とメガネが似合っている。

「他にもねー……しゃーっ！」

「うわああああっ！ か、噛まれるーッ！」

「ふっふっふ、ホレ見たことか！ でも本物じゃなくて、限りなく本物にそっくりなヘビのおもちゃよ」

健も思わずビビるほど、リアルで怖いヘビのおもちゃ。

限りなく本物に近くするため、実際のヘビ革を素材に使って作られたのだそうだ。この他にも、魔法の鏡のごとく饒舌にしゃべる上音声パターンが豊富な『おしゃべりミラー』、熱気ではなく冷たいエアが吹き出す『びっくりドライヤー』等、実生活で役に立つかも分からないような、完全に趣味の領域で作られている発明品が多数ラックに飾られていた。

「どう？ 面白かった？」

「確かに面白かったですけど……これじゃ才能の無駄遣いだ！」

「まあ、あたしの趣味で作ってるのがほとんどだしね。他に聞きたいこととかはない？ 遠慮せずに、何でも質問していいわよ」

「えっ、いいんですか？」

『何でも質問していい』とは言われても、少し遠慮してしまうのはよくあることだ。だが、本当に聞いてしまっただろうか。みゆきの前で、とばりがかつてセンチネルズに所属していたということとかを。

そして、自分がセンチネルズに捕まったときに一緒に逃げてきて一晩を共にしたということ。傷つかないだろうか、怒られないだろうか。気にさわってしまわないだろうか？ 健は質問の前に立ち

止まって、そんなことを考えていた。

「どうしたの〜?」

知りたい。でも言えない。どうすれば　いや、ここは聞いてみよう。勇気を振り絞って。何かが分かるかもしれない。何故彼女のような人が、センチネルズなんかにいたのかが分かるかもしれない。

「えっ……と、と、とばりさんはなんでセンチネルズにいたんでしようか?!」

「それについてだけど、生まれ持った才能を無駄なことに使うんじゃないくて何かの役に立てたい! ……って思っていたときに、向こうからスカウトが来たのよ。ひよっとしたらあたしの才能が役立つかもしれないって思って、センチネルズに入ったわ。けど、現実は厳しかった。犠牲をいとわない改造実験とか、望んでいないことばかりやらされた。そのことで浪岡に抗議したら、監禁されちゃった。健くんに助けてもらわなかったら、あたしきつと獄中死してたわ。あの時は助けてくれて、本当にありがとう」

過去を語り、その中で改めて礼を言う。当の健は照れていたらしく、顔が真っ赤になっていた。

「……悪いのはあいつらだけど、何も知らずに加担した私にも責任があるからね。だから発明してみたいの。誰かの役に立つものを」
「なるほどのう。これで、あの剣と盾を解析したい……ということにもつながったわけだ。とばり殿なら大丈夫だ、きつといいものが作れる。影からになるが、私は貴殿を応援したい」
「私も白峯さんを応援します!」

他の二人からも激励の言葉が飛び出す。ここまで言われたんじゃ

頑張るしかない、と、とばりは決意を新たにする。あの剣と盾に描かれた、ミステリアスな幾何学模様きかがくに興味を惹かれたのもあったが、誰かの役に立てるなら光栄だ。悪いやつらに加担した償いのためにと誓ったからには、全力で向き合おう。科学者として、ひとりの人間として。

「今日は楽しませてくれてありがとうございます。さようならー」

「また来ますねー」

「じゃあー」

「また遊びにきてねー」

帰ってゆく三人を見届けると、とばりはさっそく研究室へ。今から健の剣と盾の謎を解明し、そのルーツに迫ろうというのだ。複雑に絡み合った謎を少しずつ紐解いていくのが、楽しくて仕方がない。

「これは手強そうね……うふふ」

もしかしたら、誰かが既に挑戦したのかもしれない。けれど、謎を解けなかったのかもしれない。ならば解き明かしてみせよう。まだ見ぬ謎を、今まで誰も解けなかったからくりを。

「さて、今日は徹夜よーッ!」

EPISODE 34…じめじめしたヤツら

「ハア……ハア……ッ」

どうすればいい？ 全身傷だらけ、とくに顔に至ってはひどい有様だ。

更にメガネをなくし、視界がボヤけて何にも見えない。このまま本部へ帰ってもあの方はお怒りになられる。もう破滅だ。浪岡様は僕を許さないだろう。ごまかしは通じない。どうあがいても公開処刑は時間の問題。でも、ウソついて生き延びたい。

「く、クソオ……あいつら……こ、この僕を、コケに、しゃがって許すもんですか……」

喘ぎながら足を引きずり、健や不破への怨み言を呟く、かつてメガネをかけていた青髪の男・青山。

そんな彼に、湿った足音を立てて何者かが忍び寄る。半魚人のような青白い不気味な体には、装甲とコイルのような器官、更に曲がった背中から、機械のアームが伸びていた。明らかに普通の動物ではない。こいつはシェイドだ。それも誰かの手で改造処置を加えられたヤツだ。

「な……、なんだあ？」

ゆっくりと歩いてきた改造シェイドは、獲物を見つけるや否や急速に接近。

立ち止まると、腕が当たらない程度の距離から虎視眈々と青山を狙う。この改造シェイドをなめきっていた青山は、軽はずみに針状のエネルギー弾を射出。だが、まるで効いていない。そんなはずは

ない、と、焦燥感を覚えた青山はエネルギー弾を乱射。しかしそんなことをしても目の前の現実が変わるわけではない。

「う、ウソだ……ありえない……！　グアアアアアアアアアア！！」

彼を始末しに来た邪悪なハンターはエネルギー弾を吸収、

自分のエネルギーに変えてパワーアップしていた。背中のアームで首をつかみ、そこからカギ爪で胴体を寸断。更に電気を帯びた力ギ爪で何度も全身を切り裂き、自分の愚かさに気付かなかったあわれな青山を消し炭へ変えてしまう。

「お前、そこで何してる！」

たま通りかかっていた不破は、その一部始終を目撃。

疾風のような早さで改造シェイドに突っ込み、戦いを挑む。切り払いや突きを目にも留まらぬ速さで繰り返すも、すべて見切られ呆気なく避けられてしまう。

「こんにやるー……こうしてやるー！！」

イライラを募らせた不破は、ボルトランサーの穂先から放電。しかし効いていない。更に苛立ち、電気を纏った鋭い突きを繰り返す。だが、やはり効いていない。

「……しまった。こいつ、この前のカエルと同じタイプだったか！？」

今頃そのことを思い出した不破を嘲笑うように、ニヤリ、と、改造シェイドが不気味に笑った。

全身を発光させ、背中のアームで巨大なエネルギー弾を作り出す。

不破はこれを防いでみせようと、バックラーをかまえ防御体制に入った。しかし、それは防ぎきれるようなシロモノではなかった。弾こうとした瞬間に大爆発が起き、不破は吹き飛ばされる。その際に、改造シエイドには逃げられてしまった。

「イテテ、見くびりすぎたか……。しかしなんで、センチネルズの人間を狙ったんだ？ たまたまそこにいたから襲っただけなんだろうか？ わっかんねえなあー……」

なぜセンチネルズの青山を襲い惨殺したのか？ 疑問を抱きつつも、不破はバイクにまたがりその場をあとにする。

翌日

「東條くん、きれいに作れるようになったわねー！」

「いえいえ、皆さんが手取り足取り教えてくださったおかげですよ」

「今の聞いた？ 頼りにされてんじゃん、みはるちゃん！」

「えー、そんなあ。ありがとうございます」

「あらあら、私たちもそう言ってもらえて嬉しいわ。ありがとうございます、東條さん」

先輩のちあきからアンケートの表をエクセルで作成するよう頼まれた健は、

アドバイスを受けつつも自分なりに考えて表を作成。バイトになりたての頃はド下手で失敗ばかりだったが、今ではだいぶ上手に作れるようになっていた。健自身、エクセルだけでも自分の上達を感じられて嬉しいようだ。これについて、周囲は『彼に蓄積されていた経験値が彼自身の成長につながった。素晴らしい上達ぶりだと評価している。』

エクセルのみならず、健はできる仕事を順調に増やしている。来客への対応も徐々にこなせるようになり、シュレッダーの中のゴミ捨てやポスターはがし、ハンコ押しなどいわゆる雑用の仕事も板についてきた。この辺りについても、みな口を揃えて『はじめて来た時よりもっと良くなっている』、『彼なら正式採用も夢じゃないかも』と高い評価を述べている。

そんな彼が一段落ついてお茶を飲んでいると、携帯電話から着信音が鳴り響く。

「誰からだろう？ すみません、ちょっと電話に出ます」

もしかしたら急な用事かもしれない。周囲に一言断ってから、健は電話に出る。

「もしもし、京都市役所事務室の東條ですが……」

「東條か。今からこっち来れそうか?!」

「不破さんですか？ すみません、今バイト中でして」

「何時には終わりそうだ？」

「17時には退勤します。それまで待つていただけませんか？」

「分かった。お前のアパートの前で落ち合おう」

電話の相手は不破だった。通信が切れたことを確認すると、またせつせと仕事を再開する。そして、退勤時間がやってきた。

「お先に失礼します、さようなら」

EPISODE 35：傷つけられてもかまわない

バスが混んでいたせいでだいぶ遅れてしまった、もう18時過ぎだ。

不破はまだいるだろうか。シェイドに食われたりしていないだろうか。心配性ゆえの余計な心配を胸に、健はアパートへ急ぐ。

自分の部屋の前に着くと、不破がイライラを募らせて待っていた。なんとすべきか、予想通りだった。

「遅いぞ！ 何時だと思ってる！！」

「……こんばんは。遅れてすみませんでした……なんですけど、相変わらずピカピカの一年生に対して上から目線ですね。そうやって偉そうにして楽しいですか？」

メチャメチャ元気そうだった。それも心配がいらなかったくらいだ。

とりあえず腹が立ったので、辛辣な言葉を浴びせてやる。凶星だったか、相手は動揺して言い返せない。ざまあみろ。

「と、とにかく。寒いから中に入れる！ 早く！！ このままじゃエターナルフォースブリザードだ。相手は死ぬ！！！！」

「はいはい」

中に入り、相手が入ろうとした瞬間にドアを閉める。不破の悔しそうな顔が目に見え。適当にあしらってやる。なんてことしたら可哀想になってきた、中に入れてあげよう。

「おう、お帰り。しかし余計なものまで連れ込んで、今日はどうし

たのだ？」

「ごめん、明日には段ボールに入れて元の場所に帰しておくから…
…ね？ いいでしょ？ だってポチ、可哀想だったから」

（ポチ！？ なんだ。オレは犬じゃねーぞ！）

なぜだ。なぜこいつらは犬扱いするんだ。笑えない冗談だ。すぐにでも訴えたい。

二人とも手洗い・うがいをすませ、テーブルへと座る。客人に対して茶も出さないのか、と、健を批難する不破だったが、見かねたアルヴィーに諫められ首を絞められてしまう。

「て、テメエら……あまり人をおちよくってるとブツ飛ばすぞ！

ギギギ……」

「すまんすまん。ところで、私たちに用があるそうだが？」

その言葉を待っていた。したり顔で答えると、不破は用件を話し出す。

「西大路の白峯って人知ってるか？」

「おつきなおうちの？」

「たぶんそれだ。この前、西大路の辺りでカエルのシェイドを見かけたんだ。それも、ただのシェイドじゃねエ。あからさまに誰かに改造処置を施されたヤツだ」

「改造……処置？」

どうやってそんなことを。シェイドがシェイドを改造するのか？ 疑問に思った健は、まさかと思いつつも不破へその疑問をぶつける。

「まさか、人の手で？」

「だろうな。よくはわからんが、昨日見た限りではセンチネルズの人間がそいつに殺された。青山っていうメガネかけたクソ野郎だ」

青山　。青髪でメガネをかけた、この前の銀行強盗の片割れだ。そして、その実態はセンチネルズ構成員。電気の針を打ち出して、痺れた相手をメリケンサックで殴る卑怯者。

一度、いや二度もボコボコにされた相手だが、アルヴィーや不破のおかげで勝つことができた。そんなあいつが、なぜ改造されたシエイドに殺されたのだろう。失敗続きが祟って、用済みになったからか？

「なあ、東條。さっき言ってた白峯って人はセンチネルズにいなかったか？」

「いました。僕が奴らに捕まったとき、一緒に脱走してきました」

「……そういうことか」

それまで二人の話を静かに聞いていたアルヴィーが、何かに感付くようにそう呟く。

「センチネルズの目的がわかった。裏切り者と組織の秘密を知ったものを、その改造したシエイドを使って始末するつもりだろう。…

…とばり殿が危ない！」

二人もアルヴィーに言われてようやく気づいた。

元々センチネルズに所属し、秘密も知っていたであろうとばりを、普通に考えれば狙わないはずがない。

この前のカエルのようなヤツも、元々はそのために送られてきたということか？　いずれにせよ、急がねばとばりが殺されてしまう！

「今すぐ行かねえと……！」

不破がランスとバックラーを身につけ、玄関を抜け出す。健もそれに続こうと飛び出す。だが、そんな彼らをアルヴィーが寸前で制止する。

「待たんか、お主ら！ 今日はまだ遅い。ゆっくり休んで、明日には向かえばよからう」

「だけど……」

「だが、フラフラのまま行ってやられては元も子もないぞ？」

そうだ、すっかり忘れていた。自分の武器をとばりに預けていたのだった。

アルヴィーに言われた通り、ここは不破に任せて自分は寝ることにする。それが本当に正しいことかは分からないが。

翌朝

早朝からテレビで、西大路区でシェイドが暴れているという情報が入った。

急いで向かうと、案の定例の改造シェイドがクリーパーを従えて人々を手当たり次第に襲っていた。武器はないが、できるだけのこととはやってみる。そうしてでも阻止しなければ。

「ターゲット確認……クロス！」

「くっ、僕も含まれていたのか！」

アルヴィーが最下級シェイド・クリーパーの群れを相手するなか、健は素手で必死に応戦していた。

たとえ体が何度も切り裂かれて血を流そうとも、守りたい。誰かが悲しむ姿は見たくない。笑顔を守りたい。ただ、それだけのために。

「そんなに僕を殺したいなら殺せ！」

その気になれば命を投げ出すことも考えている。命知らずなことこの上ないが、かまわない。

「他の人はやらせないけど！」

改造されたカエルのようなシェイドに、パンチを一発ぶちこむ。もちろんただのパンチだ、相手に効くはずがない。もう一発浴びせようとすると、敵は素早くかわしてしまふ。元々早くないゆえ、こういうのは苦手だ。

とてもではないが、追い付ける気がしない。不破なら話は別だが。そういえば、この緊急事態に彼はいない。

どこにいるのだ。まさか、逃げ出したのか？ 流星にそんなことはありえないと信じたいが。

「健くん！！！」

「来ちゃダメです、とばりさんッ！」

殴ったり蹴られたり泥臭い戦いの最中、黒髪に白衣、紫のシャツの女性が剣と盾を抱えて走ってきた。

とばりだ。狙っていた獲物を見つけ、残忍なハンターがとばりに襲いかかろうとする。その寸前で、目にも留まらぬ速さで何者かが横切りとばりを救う。まさか！

「オレも来ちゃダメだったか？」

「不破さん……」

疑うべきではなかった。颯爽と現れた彼はとばりを救うと、彼女をかばいながらシエイドと戦い始める。「急いで武器を返してもらえ」と促され、とばりを連れて一緒に安全な場所へ向かう。

「とばり殿！」

全力で走ってきて疲れたとばりを、アルヴィーが介抱する。

「ごめんね、あたしのせいでこんなことに……」

「あなたのせいじゃない、悪いのはあいつらです！」

「あつ、これ……返さなきゃ」

健に剣と盾、そしてオーブを返却。どれも少し手が加えられており、手にすると力がモコモコと沸き上がってくる感覚が全身に伝わった。

とばりが解析した際に、ツールが何かを伝って彼女の温かい心が入って来たのだろうか？ そのくらい不思議な感覚だった。

「ありがとうございます。僕、行ってきます！」

「健、とばり殿は私に任せられよ。思い切りあのヒキガエルとぶつかってこい。今のお主なら楽勝だ」

「そうは言うけど、勝てるかどうか……」

「大丈夫よ、あなたならできる。自分を信じて！」

「……はい！」

不安がる健を、二人が励ます。グズグズしている場合ではない。

自信を取り戻したかのように頷き、剣と盾をかまえ果敢に敵のもとへ向かっていく。

「いっ！」

突然の襲来に驚く改造シエイド スカルフロッグを、剣を大きく振りかぶって牽制。怒ったスカルフロッグが爪を振り下ろすも、即座に盾で弾く。

「がら空きだぜ！」

背後から不破がランスで切り上げ、上空へと打ち上げる。助走をつけながら跳躍し、レシーブの要領で地面に打ち付けると相手は横たわった。

両者共に、一気にとどめを刺してしまおうと駆け寄る。が、地面から吹き上がった炎の壁が行く手を遮った。

更に、どこからともなく火の玉が飛んできた。横に跳んで間一髪かわすが、隙を突いたかもう一発飛んでくる。それは健に命中したが、盾で弾かれていた。

「今を防ぐとは。やるな、小僧……」

「浪岡……ッ!!」

EPISODE 36：とばりにお任せ

浪岡。黒ずくめの服装をまとい、炎の中から現れたその姿はまさしく、地獄の悪鬼。腹立たしいことに、やつはこちらを見下し鼻にもかけていない。

「我らセンチネルズが独自に改造処置を施したシェイドはもう見ていただけたかな？ 愚劣な虫ケラどもよ！」

「ああ……」 最悪？ だったよッ！！」

「そりゃ、残念だなあ！！」

いきり立った不破が穂先を突き立て突進。だが、浪岡は一瞬の間にそれを見切って回避する。

浪岡の掌から炎の渦が巻き起こり、不破を焼き付くしながら空へと打ち上げる。打ち付けられ、地面へ横たわる不破へ追い討ちをかけるように踏みつける。

「あきらめろ。貴様はどうあがいても私には勝てない！」

「へッ、どうだかな……」

浪岡の左手が燃えた。狙いは無論、今踏みつけている不破だ。

こいつは逃げられない。簡単に消し炭にできる。本気で相手してやるまでもない。隙を突いた健が剣を振るも、刹那、浪岡は振り向きその攻撃を腕で弾く。

「背後をとったつもりだったのかな？」

「くっ……！！」

「残念だが、外野に用はない。失せる小僧」

健をあっさりと上空へ放り投げると、火の玉を打ち上げ爆破。2メートルほど先へ落とす。そこには、カエルの改造シェイドが爪を突き立て待ちかねていた。すぐに起き上がり、こちらも身構えてスカルフロッグとの戦闘に挑む。

地面に拳を打ち付ければ衝撃波を起こし、時にはアゴを砕かん勢いのアッパーも繰り出す。厚い鉄板も紙のように切り裂くその爪も脅威的だ。極めつけは俊敏な動き。勝てるのか？ いや 勝ってみせる、絶対に！ 振り下ろされた爪を盾で弾き、ひるんだ相手を斬って斬って斬りまくる。幸い相手は、動きこそ俊敏なものの耐久性はそれほどでもなかった。

「ゲゲゲ……ゲロオオオ！！」

突然の巻き返しに驚き、怒る。電線を引きちぎり、その真ん中に立って電流をありったけ浴びる。

パワーを存分に『充電』したスカルフロッグは、電線を離すと仕返しとばかりに健への反撃を開始。縦横無尽に跳ね回り、その拳句に巨大なエネルギー弾を放出。

「こんなもの！」

だが、健はそれを一刀両断。爆風をも切り抜け、怖じ気づいた改造シェイドを何度も斬りつける。横たわった改造シェイドに、健はとどめを刺すべく剣を天に立てて力を溜める。

「とどめだあ！！」

「グエエエエッ！？」

衝撃波を伴うジャンプ斬り、その威力に耐えきれなかった改造シ

エイドことスカルフロッグはあえなく爆散。あるものはその光景を見て喜び、あるものは憤り。

「バカな……、我が無敵の布陣が！ なぜ破れた!？」

「ざまあねえな……。あのカエルの特性でオレを無力化して、お前はあいつをその間にじっくり焼き殺すつもりだったんだろう？ だが、お前は自分の力を過信しすぎた。あいつをナメすぎたんだ。あいつはオメーが思ってるよりずっとつええぜ」

怒る浪岡、笑う不破。怒り心頭の浪岡は不破を拾い上げると、その首をつかんで力強く握りしめる。腕が燃え、その火の手は不破にも上がる。

焼け焦げた不破を投げ捨てると、怒りでそれなりに端正な顔を自ら崩しながら健を指差す。

「まあいい、今日のところは見逃してやる。だが、次はこうはいかんぞ!！」

「待てっ！ 浪岡ツ！」

斬りかかるも、浪岡は目前で炎の中へと消えてしまう。

倒せたかもしれないのに、と、地面に突っ伏していた不破は悔やんだ。己の力不足か、それともなくしたはずの甘さが抜けきっていなかったのか？ 物事には必ず何らかの理由がある。今回の件と同じだ。どうすれば、解決できるのだろう。同じように、健もあまり不破の役に立てなかった事を呪っていた。

「……逃げられちゃった。こうなりゃ、直接アジトを叩きに行っただ方が早いかもしれない」

「それより、不破さんは治療を受けた方がいいんじゃない？」

健が、またも重傷を負った不破の肩を持つ。それも普通にはなく、重たそうに。

どこまでもぎこちなく足を引きずり、とばりを介抱しているアルヴィーのもとへ。不破をドサツと下ろすと、『やっと解放された』と言わんばかりに健は大きく伸びをした。

「おお、戻ったか。少し心配しておったぞ」

「二人とも、相当やられちゃったわね」

戦っている間はずっと緊迫した表情だった彼女らは、無事に戻ってきたという安堵から少し笑顔になっていた。とばりから家で疲れを癒していくように言われ、健とアルヴィーは目を輝かせた。無理もない、あの豪邸に再びお邪魔させてもらえるのだから。あのセレブリティな優越感に再び浸れる以上、文句など言えない。その一方で、とばりの家になど上がったことがない不破は不気味な研究所を連想したらしく、皆がとばり宅の話題で盛り上がる中でひとり怯えていた。

少し歩き、とばりの豪華な研究所兼自宅へ到着。あまりのスケールの大きさに不破も思わず息を呑み、同時にホツとした。よかった、自分の予想とまったく違っていて。

「イデデデデ！ し、しみるウー！」

「安静にして。もっと痛くなるわよ」

リビングを借り、救急箱を持ってきてもらう。背中傷に消毒液を染み込ませたティッシュをポンポンと当てられ、悶絶。他にも患部に湿布やかいはんそうこうを貼ってもらったり、包帯もサービスで巻いてもらったりと至れり尽くせりだ。一度ぐるぐる巻きにされてミイラのような姿になったが。

とばりにいじられる不破の滑稽な姿は、他の二人には大ウケだ。

腹を抱えてケラケラと笑い、時には拍手喝采も起こった。いじつていたとばりも雨のような拍手を送った。一方で不破は怒った。少しおちよくられただけで怒るほど沸点が低い、その生真面目な性質ゆえのことだった。しかし、怒りに身を任せ暴れようとすると体がとくに骨がきしむ。暴れかけたせいで余計に苦しみ、余計に笑われる羽目になった。短気は損気とは、まさにこのことだろう。

「そういえば……とばりさん」

「なにかしら？」

「あの剣と盾調べてみて、何か分かったこととかありましたか？」

彼もアルヴィーも、あの二つのことをすべて知っているわけではない。

というのも、彼はアルヴィーから渡されただけ。アルヴィーはたまたま持っていたものを健に渡しただけ。そんな謎だらけな、どの馬の骨とも、ましてやどの店で売れ残った骨董品アンティークかも分からないその謎解きを、彼女に預けるといふ形で丸投げしてしまったのが気がかりだった。だが、優れた科学者である彼女にもこの謎が解けるかは定かでは。

「それなら安心して。謎はすべて解けたっ！」

心配せずとも、謎は解けていたようだ。みな大いに喜び、その場で歓声が上がった。お灸をすえている不破を除いて。

「アレはやっぱり、古代に作られたオーパーツだったみたい。詳しくはこの資料を見てちょうだい」

とばりから手渡された資料。それを受け取り覗き込むと、元々所持していたアルヴィーも知らなかった事実が書かれていた。

「伝承によれば、かつて怪物から世界を救った戦士が使っていたらしいわ」

「す、すごい……そうだったのか」

目からウロコの事実、ただ感心するしか他はない。動揺ぎみの健は、何度も資料に目を通していた。

アルヴィーも健よりは冷静に、何度か見返していた。この怪物はシェイドの前身　つまり自分の祖先にあたるのではないか、戦士とはエスパーの前身なのではないか。だが自分は、古来よりずっと生きてきた。日本で徳川家康が天下を取ったり、太平洋戦争で大勢死者が出るよりもずっと前からだ。

しかし、こんなことは身に覚えがない。我らシェイドは長寿、中には伝承のルーツとなった者もいるほどだ。自分も例外ではない。言い伝えの戦士の時代には自分は既に生を受けていたし、確かに存在していたはず。なのに、何故その時代の記憶がないのだろう？

他の歴史上の出来事はすべてこの目で見てきた。すべて覚えているはずなのに。何かがおかしい。そう考察しながら。

「でね、オーブだっけ？　あのビー玉みたいなヤツだけど、アレは属性の力を凝縮したものとみたい」

「でも今あるのは、炎と氷だけなんですよね。まさか、他のもあつたりするんですか？　でもそんなうまい話、あるわけないや」

「あれれ〜？　そんなこと言っちゃっていいのかしら。ないものは作ればいいじゃない」

ないものは作ればいい　とはいうが、何の根拠もなしにどうやって作るというのか。

『適当にやれば何とかなる』で済めばいいのだが、そういう問題ではない。任せきりにしていいのか？　不安で仕方がない。

「もしかして心配してるでしょ？」

「だ、だって、未知の技術の結晶でしょ？ そんなものをどうやって……」

「……のう、健。何がそんなに不安なのだ？」

不安がる健を、アルヴィーがなだめた。

「作ってもらえ、少なくともとばり殿はその気だ。だからお主も、とばり殿を無理に引き止めてはいかん」

「アルヴィーさんもそう言ってるじゃない。あたしもできるだけ努力するから……ね？」

決心がついたか、健が首を縦に振った。そんな彼に微笑みながら手を差し伸べ、拍手を求める。

「今後もどうかよろしくお願いします！」

「こちらこそっ！」

とばりの微笑が、心のこもった満面の笑みに変わった。

やはり笑顔はいいものだ、見ていると自分も笑顔になって力が沸いてくる。ちょっぴり嬉しくなった。今日はもう遅いので、泊めてもらえることとなった。まさか、この豪邸で一晩だけとはいえ泊めさせてもらえるとは。この前の恩返しなのかもしれない。

「たわけが……！」

センチネルズ本部にて。浪岡が憤慨し、炎で部下に八つ当たりす

る。その対象となったのは緑川と、シェイドの改造を担当した研究員だ。

「申し訳ございません。不破ライの無力化を前提に強化改造を行え、という指示があつたものですから……」

「先を見越した設計もできないのか、このクズが！」

怒りの治まらない浪岡が舌打ちし、緑川に追い討ちをかける。

「何をヘラヘラしている。貴様も同罪だ！ この役立たずがー！」

「す、すみません。次からはちゃんと……オオオオツ！」

浪岡が手を震わせると、火柱が研究員を飲み込んで焼き尽くしてしまつた。ちょうど隣にいた緑川は、その非情さに戦慄を覚える。

「無能はいらん。必要なのは有能な人材だけだ……」

冷静な口ぶりの浪岡だが、未だに心の中では怒りが煮えたぎつていた。

それを察知したか、緑川の体の震えは止まらない。逆らえば殺される。今、この状態で余計な口出しをすれば確実に自分も死ぬ。まったく、恐ろしい方についてきてしまつたものだ。自分の不幸を呪いたい。

「緑川！」

「は、はい。なんでしよう？」

「我らの崇高なる思想を理解できぬウジ虫どもに、もっと私の恐ろしさを思い知らせねばならん。次がヤツらの最期だ。フハハハハハハハハハハッ……！」

EPISODE 37：縁切りと仲間

日中だというのに雨が激しく降り続き雷鳴が空で轟く、この悪天候の中。

相変わらず薄暗く、怪しいムードの漂う大久保生体研究センター。その所長である大久保俊樹教授の部屋へ、円錐状の槍　ランスえんすいを持った男が乱暴に押し入る。

「何の用だね？」

座ったまま振り向かず、何らかの機械をいじりながらその男に用件を訊く。

ここは関係者以外立ち入り禁止だ、関係者以外でそこへ入ってこれるのはスポンサーか、

または知り合いのみ。だが、男はいずれも当てはまらない。では何か？　協力者だ。縁もゆかりもなく、利害が一致したから組んでいるだけに過ぎないだけの。

「あんと手を切りにきた」

金色に染めた髪に赤い瞳の筋肉質な青年　不破の目的はひとつ。大久保との協力関係を断ち切ることだ。センチネルズのアジトがどこにあるか分かった以上、

もはやこの男と組む必要などない。そもそもシェイドの細胞と戦闘データを回収し提供するというわけがわからなくて辛気臭いことをやり続けるのに、もううんざりしていた。だから縁を切る。短い付き合いだったが、こいつに会うのもこれで最後だ。こいつのうざん臭い顔を拝まずに済む。

「そうか……。ちょうど、私も君を鬱陶しく思っていたところだ！」
「だったら話は早い。お別れしましよや……。大久保さんよオ！！」

罵声を交え、不破がランスの穂先を大久保の喉へ向ける。

悪の芽は育つ前につまんでおかなければならない、余程のことがなければしないだろうが、いざという時はこの危険人物を殺すことも考えている。

「何のつもりだ……。？ まさか、私を殺す気かね？ そんなことをしてみる。君に協力する人物は誰も……」

「いるよ。あんたなんかよりよっぽど信頼に値する……。仲間ってヤツがな！」

「な、なんだと！」

「そう言いに来ただけだ。研究の邪魔して悪かった……。じゃあな」

大久保の甘言をはね除け自信満々に、清々しく笑いながら不破は言い切った。

彼はもう孤独ではない、れっきとした仲間がついているのだ。快活で子どもっぽい天才女博士とばり、料理好きで優しくてかわいい風月みゆき、そしてまだまだ荒削りだが叩けば伸びる後輩の東條健と、そのパートナーである白龍のシェイド・アルヴィー。まだまだ知り合ったばかりだが、得体の知らない怪人物である大久保より彼らといった方がよっぽど楽しいし、心も安らぐ。

ランスを下げ、肩に担ぐと不破は帰っていく。一人だけになった研究室で、『手駒を失った』と、大久保はむなしく憤慨していた。

「ハッ！」

街中のスポーツジムにて。

膝まで流れるように伸びた髪が翻るほど勢いよく、女性が鋭い蹴りを繰り出す。

健は体をそらし、蹴りをかわす。当たれば顔面に直撃し大ダメージだ。なんとかかわせてよかった。

だが、そんな安堵の息をつく健に今度は空を裂くほど強力なパンチが浴びせられる。頬にめり込むほどの鉄拳だ、空中で切りもみ回転しながら健は転倒。

「油断しすぎだ。これで100回は死んだぞ」

「そっか……僕、あと何回死ぬんだろ」

角を生やした白髪の女性・アルヴィーが膝まで届くその超ロングヘアをなびかせ、

どこかで借りてきたホワイトボードに書き込む。記念すべきか忌むべきか、今書かれた『正』の字で50個めだ。これまでに攻撃を受けて死亡した回数　という設定で書き込まれていた。

「健、そろそろ休憩せんか？　ほどほどにしておかねば体を壊す。無茶はするな」

「で、でもさ。不破さんは毎日やってるんだよ。身の危険を顧みないくらい、厳しいトレーニングを……」

殴られたあとやばんそうこうをあちこちに貼っている健が起き上がり、アルヴィーに異を唱える。

だが、アルヴィーは言うことを聞かない健を力づくで引つ張り、律儀にもホワイトボードの字を消してから部屋の外へ連れていく。

「た、健くん!? その傷、どうしたの?!」

「ああ、これね……ちょっとやりすぎた」

待ち合い室へ戻ると、一緒についてきたみゆきが待っていた。

救急箱を開けると、応急措置を施し健の傷を治す。

「ありがとう……ところで不破さんは？」

元々、このジムには不破に連れられてやってきた。ここは不破の行き付けだ。

もつとも、よくサンドバッグを壊しているためたびたび注意されているが。だが、その不破がいない。ジムのどこかで訓練中なのだろうか？

「不破さん？ さっきグローブつけてボクサーパンツはいて、サンドバッグ殴りに行ったみたい」

「そうなんだ。でもなんでボクサーに……？」
「チャンプに勝ちたいんじゃないのか？」

どうやら、そんな奇抜な格好でサンドバッグを殴りに行ったらしい。なんとも滑稽な話である。三人いつせいに爆笑し、笑いの渦が巻き起こった。と、そこへ戻ってきた不破が現れ。

「今オレを笑ったな！」

「いえいえ違います」

「はてさて、何のことやら」

笑われて怒った不破を相手にしらばっくれる三人。

元々つり上がっている目を更につり上げて、不破が苛立つ。

「いや、確かにさっき笑われた気がするぞ！」

「知りませんって」

「わたし、そんなの知りません！」

「そんなもん知らぬ」

面白がった三人は、更に不破をいじり倒す。やるからには、とことんやる。中途半端は嫌いだ。

「ホントか？」

「ホントですって。プツ」

「ホントよ、うふふ……」

「ウソは言つとらんぞ……くっ、くくくっ」

もう我慢できない。三人とも思わず吹き出し、大爆笑。不破の怒りは大爆発。

「お前らなあああああア！！！」

「わっ、逃げろー！」

たまりにたまった怒りのマグマを爆発させる不破をよそに、

三人とも蜘蛛の子を散らすように逃げていく。結果、不破はおいてけぼりにされた。ボクサーみたいな格好のまま。

「オレって何やってんだらうな……は、ははは」

EPISODE 38…よりどりみどり

「でね、この前友達とユニバー行ってきたんだ。あそこって何度行っても楽しいのよね。とにかく、アトラクションがすごくてさ。あたしだったらもうね、興奮しっぱなし！」

職場の昼休み、テーマパークに行ってきたことを楽しげに話す健の先輩・浅田ちあき。

彼女の話聞いてみると、何故か行きたくなってしまった。また遊びに行く計画を立てておくか、と、健は思い付いていた。何故テーマパークの話をしているのか？

というのも実は、この休みにどこに行ってきたかという話をする事になってた。それを誰から話すかをジャンケンで決め、ちあきが一番乗りしたというわけだ。ちなみにジェシーは二番目、みはるは三番目、そしてドンケツ（いちばん最後のこと）は健。

「いいなー。僕も行ってみたい。ところで、おみやげは買いましたか？」

「よくぞ聞いてくれた！ そう言われるだろうと思って買ってきたわよ。ほらっ！」

「おおっっ！」

皆が驚くのも無理はない。ちあきが土産に買ってきたのは、大胆にも40個入りのバスケットだった。ちょっと多すぎる気はするが、事務室の職員全員に配るにはこのくらい数が必要なのだ。

形はよくあるテーマパークのマスコットキャラクターを型どったもので、味はプレーンとココアの二種類。しかも人気商品らしく、それも同テーマパーク内では売り上げナンバーワンを誇っているほ

どだ。つまり、シンプル・イズ・ベスト。それだけ美味しいということだ。ちなみに余った場合、二周目するか自宅に持って帰って3時のおやつにするかを考えているという。

「ひゃあ、40個入り！ 浅田さん、豪快ですねー」

「このくらい買わなきゃ足りないだろうな、って思ってた」

「もしここが少人数だったら、もっと少なくてもすんだかも知れませんがね」

「ありがとうございます、あとでいただきますねえ。さて、次は私の番でしたね。ちよっと待っていてね……」

そう言うと、紙袋を出してその中から何かを取り出す。

どうやら和菓子のようだ、それも卵のような形の。袋入りのそれは白いコーティングが施されており、その下には黒いあんこのようなものが隠れていた。

「東京に行ってきました。これ、おみやげのごまたまごです。どうぞお召し上がりください」

ジェシーから配られた『ごまたまご』。美味しそうなの『ごまたまご』。

生まれてはじめて味わう『ごまたまご』。一同の中でも、とくに健は興味津々だ。

小袋を開け、まず一口かじる。ゴマ入りのあんこが、口の中で静かに、まったりととろけていく。

ああ、おいしい。なんとというおいしさだ。食わず嫌いしていたあんこが食べられるようになって、本当によかった。もし食わず嫌いしたままだったら、この天にも昇ってしまいそうなほどの甘味を味わうことなどできなかっただろう。

「ああ、この舌先を駆け巡る甘味……素晴らしい！」

健は『ごまたまご』の味と、それを手渡したときのジェシーのエンジンジェル・スマイルに酔いしれていた。すっかりメロメロだ。そんな健に周囲は、とくにジェシーは困惑ぎみ。

「えっと、次に私行かせていただいても……いいですか？」

「どうぞどうぞ」

「あつ、分かりました。じゃあ遠慮なく……」

健の同僚である、今時ぐるぐるメガネをかけている女性・今井みはる。

少し恐縮したようなそぶりを見せつつも、バナナのような形のお菓子を配っていく。東京ばな奈だ、たつぷりのバナナカスタードをふんわりとしたスポンジ生地で包んだバナナ型の菓子である。(Wikipediaより) それを見た瞬間、またも健は目を輝かせた。

「あ、ありがとうございますッ！ 僕、これ、大好きなんですよね。姉が東京に遊びに行くとき、よくお土産に買ってきてくれるんですよ」

「へえ、そうなんですか。実は私も、コレ好きなんです。お姉さんも好きなんですか？」

「はい！ 家族全員が東京バナナ大好きなんです！」

「ああっ！ 気が合いそう……東條さんのお姉さんにお会いしたいなあー」

そうして、いよいよ大トリ。健の番が回ってきた。

ここまで土産菓子をもらいっぱなしで喜色満面の彼だったが

彼は土産を持ってきたのだろうか？ 残念ながら、持ってきていなかった。では、どうするのか。

「次、僕でしたね。えっと、皆さんからたくさんお土産いただいたいてアレなんですけど……えっとね。お土産、買ってません！」

健以外、全員がずっこけた。

「す、すみません！　で、ですが。土産話ならありますよ。いかが……でしょうか？」

それなら話は早い。聞かせて聞かせて、と、皆目を輝かせてそう頼んできた。

健が語ったのは、この前白倉家にお邪魔して一晩泊まったときのことだ。自分のアパートより広いリビングでくつろがせてもらい、更に風呂場はホテル並の大浴場。しかも、混浴OK。本当は女性と一緒に入りたかったが、自重したなどと健は思いのままにそう語り続けた。

「たっだいまー」

「おっ、帰ってきたか。えらく早いの……」

そして、帰宅。いつもの様式美ていめいじゆつがみをすませ、

部屋に入るとアルヴィーがパツキーを口にくわえながら新聞を読み漁り、そのついでにテレビも見ていた。少しつまらなそうな、淡々としたような、何か考え事をしているような。

そんな顔だった。アルヴィーによく考え事をするクセがあるのは知っている。彼女や周りの人々から何度も教わってきたが、何でもひとりのためこむべきではない。相談するなりして、発散すべきなのだ。それは彼女とて同じこと。いつも世話になっている彼女に気

さくに、優しく声をかけ、何を考えているのかを訊ねる。

「……本当に、話しても良いのか？」

彼女は眉をひそめ、本当に健に話して良いのか少しためらっているようだった。

切なげな瞳がそれを物語っている。「いつも愚痴とか悩みとか聞いてもらってるから」と諭し、彼女の悩みを聞いてみる。

「この前、とばり殿の家に泊めてもらっただろう」

「うんうん……」

「その時に読んだ資料の年代が気かりでの……。最後まで聞িয়েくれるか」

答えはもちろん、イエスだ。断る理由がどこにある。進んで、話を聞く。

「……のう、健よ。私たちシェイドは、いつごろから存在していたと思う？」

「10年前かな？ よく分かんない」

「ふふつ、もつと前だ。何せ私は、お主のひいおじい様のそのまたおじい様の先祖が生まれる前から存在していたからの。ついでに言えば、私の場合生まれてから10年程度ではまだ赤ん坊だ」

彼女らシェイドは長寿だ。

誰しもいつ生まれたかはハッキリとは覚えていないが、少なくとも紀元前1万年には存在していたという。下手をすれば、地球が生まれた頃からいたかもしれないと、アルヴィーは語る。長生きしすぎが祟って、記憶が耄碌せうろくとしていいるのだ。

「少なくとも私の場合、徳川幕府の頃にはもついたぞ？」

「すつげー。1万年近く生きている……ってことは、おばあちゃんだね！」

「そういうことになるのう」

普通年寄り扱いされれば怒るものだが、アルヴィーはそうではない。

彼女には、自分が長生きしすぎているという自覚があった。1万年、ましてやその半分に満たない年数だけでも生きていけば余裕で年寄りの仲間入りだ。かつての同胞には悪魔や妖怪のルーツとなつたものもいるし、神話や伝承に出てくる神々や妖精のルーツとなつたものも存在している。

「じゃあ、肩揉んであげなきゃ……」

「お主はそれより乳を揉め」

冗談で肩を揉み解す姿勢ほぐに入った健の両腕をつかみ、自分の胸へと回す。

紅潮しながら、アルヴィーは微笑む。しきりに揉みしだく健だったが、やめられなくなったらしくストップをかけてもやめない。仕方ないので肘でどつき、健を落ち着かせた。

「揉めつて言ったのそつちじゃ……！」

口答えする彼の唇をつねり黙らせる。

「……だいぶ話がズレてしまったの。あの時、とばり殿に見せてもらった伝承の資料のことなのだが、あの時代には私は確かに存在していたはずなのだ」

「『していた』はずって……どういこと？」

健からそう訊ねられたアルヴィーの表情が、だんだんと曇ってゆく。

答えるのを避けたかった、だが健なら聞いてくれる。ここは思い切って打ち明けねば。

「私自身もどういふことなのか、よく分からぬのだが……」

ああ、言ってしまった。だが、今更後悔したところで遅い。落ち込むな。前向きになれ。

自分もこうやって彼の悩みを聞いてきたではないか。ちゃんと目の前の現実と向き合わないと。

「……その時代の記憶だけが、ぽっかりと抜け落ちているようなのだ」

「え……?」

EPISODE 39：火の玉飛ぶ

「えっ、記憶が？」

昼時の駅前のファーストフード店、その二階にて。
健とみゆきが二人用の席に座り、食べながら話をしていた。

「そうらしいんだよ。アルヴィー自身も言ってたけど、その時の記憶だけがきれいさっぱりなくなってるんだって。モグモグ」

チーズバーガーを食べかけながら、さりげなく健は語る。

昨日アルヴィーが話していたことが気がかりだった。なぜそこだけ喪失してしまったのか？

何事にも首を突っ込みがちな健が、このことを気にしないはずがなく、

原因究明を独自にやり出していた。その一環として、

まず誰かから意見を聞いてみることにしたわけだ。自分で考えられないなら誰かに聞いてみるのも、立派な知恵のひとつ。分からないことは分かるまで聞くのだ。

自分の中で出した答えに自信が持てず、人に確認をとるのは違う。

「ま、それはひとまずおいとこうか。むしゃむしゃ」

しかし、あわてて解決しようとしたところどころでどうにかなるわけでもない。

それにあまり深追いするものでもない。アルヴィーもきつと無理に思い出したいとは思っていないはず。この話は一段落置き、みゆきと好きなようにおしゃべりを始める。無論、メシを食べながら。

「昨日のお昼休みね、すごく楽しかった」
「ホント？　ねーねー、どんなことしたの？」

興味深そうに目をキラキラと輝かせ、みゆきがそう訊ねる。

「聞きたい？」

「うんうん、聞かせて」

「いいよ！　実はねー、職場の皆さんとどこへ外出したのか、発表会をしたんだ。ちょっとしたね」

清々しいくらい、聞いている方も笑顔がこぼれそうなくらい、健は嬉しそうに言っていた。中で星が輝いているような、活き活きとした瞳がそれを物語っている。

「僕とはりさん家ちの話をしたんだ。あそこ、すごーい大きかったよねー！」

「でしょでしょ」

「何もかもビッグサイズだったよねー！」

「うんうん」

「とくにお風呂は最高だったなー。10人、少なくとも5人以上は一緒に入れそうだったよねエ」

いろいろあったとばりの豪邸だったが、

とくに大浴場としか言いようのない大きさの風呂場が健の印象に一番強く残っていた。

次点で地下室、そしてリビング。それだけ彼に思い出を残しただけでも、とばりは只者ではないといえるだろう。

店を出て、二人で川沿いの沿道を歩いている二人。

そんな彼らを、禍々しい黒ずくめの服装に身を包んだサングラス

の男が植え込みから覗いていた。サングラスの下では、紫の瞳が狂
気じみた鈍い輝きを放っている。「ニタア」と、不敵に笑っていた。

どいつもこいつも平和というぬるま湯に浸かり、薬品臭い空
気に酔いしれたバカな奴らばかりだ。

東條に秘められた才能に興味を持ったが、それも興醒め。奴は力
を持って余したアマちゃんだ。ゆえに己の力をすべて出し切らない。

結局はエスパーとしての力をすべて解放せず、スポイルされたま
ま庶民として一生を過ごしてゆくつもりなのだろう。ぬるい。ぬる
すぎる。この世でもっとも優れているのは、やはり自分しかない。
それ以外は、みなウジ虫。せつかく我ら人類が生まれ持った英知
を開花させてやろうと思っていたのに、現状はこのざまだ。こんな
んでは、私が錬金術を蘇らせ、進化を促したところで何も変わりは
しない。ならば、愚かな虫ケラどもは皆殺しにしてやる。人員整理
だ。最後に笑うのはこの私だけ。ゆくゆくはこの世界を我が手に掴
み取る、この私だけだ！

「なんか、コゲ臭い……。どっかで何か焼いてるのかな？」

浪岡につけられているとも知らず、健とみゆきは仲睦まじく歩い
ていた。

もしかして、田舎でよく見られる畑を焼いてカラス等の害獣を追
い払うアレだろうか？

しかし、それなら煙が遠くから上がってくるはず。だが、さつき
の『焦げ臭いにおい』にはそれに伴う煙がない。では何が。そ
う考えにつまったところで、火の玉が飛んできた。

それも一発だけではなく、何発も。狙いはいずれも健だ。みゆき
を守りながら盾で防いだが、その後も道を歩く都度定期的に襲って
きた。独りでに火の玉が飛んでくるなど、普通ならありえない。と
いうことは、考えられることはひとつ。何者かの仕業だ。シェイド

か、それとも。

「グオオオオ!!」

今はそれを考える暇すらない。隙間からシエイドが現れ、こちらを狙ってきたのだから。狙いは恐らく、みゆき。

もしや彼女をさらうか、または殺そうというのか。そんなことはさせない。

「みゆき、下がって!」

「う、うん!」

切れ味鋭そうな厚手の鉈、それを振り回して暴れている黒豹のようなシエイド　ラヴィツジジャガー。狡猾で自分より弱いものしか襲わず、金目のものを略奪しようとするハイエナのような奴だ。くわえて足も速く、むやみに攻撃しても避けられてしまい一筋縄では倒せない。

「!」

自慢のスピードで軽やかに攻撃をかわす、かわす。かわす。

追い付けないのが悔しい。だが、手はあるはずだ。勝てないということはない。

「うまく行けばいいんだけど……」

敵がこっちへ走ってくる。迎え撃つために腰を深く落とし、身構える。そして、敵は鉈を振りおろす。

「今だ、当たれ!」

だが、盾がそれを弾き返す！ 発想の転換だ、武器は剣だけではない。

身を守り、時には人を守る盾も立派な武器となりえる。敵の攻撃を弾き、ひるませるために。

相手はよろめいている、今がチャンスだ。高く跳躍し、回転しつつ体当たりする。

相手の背後へ着地し、更にもう一発叩き込む。

元々直接的な戦闘力がそれほど高いわけではないこのシェイドは、早くもダウンしかけていた。それだけ健の攻撃が堪えていたのだ。苦し紛れに、黒豹が鉈を振り回す。健の足をかすった。

「た、健くん！」

「大丈夫、平気だよ。すぐに終わらせるから……ねっ！」

もう相手はへろへろだ。足が言うことを聞かず、思うように走れない。

これでは自慢のスピードも出せないというもの。もう少しだ。もう少しで倒せる。だが、そこへ思わぬ邪魔が入った。両者の間に火柱が立ち上ったのだ。

「なんだ？」

「健くん、うしろ！」

飛んできた火の玉を盾で弾くと、同時に向こうにも火の玉が放たれた。

背中に火が燃え移り、黒豹はハチャメチャに慌てながら逃げている。

さっきの火の玉、火柱。誰の仕業だろうか？

その答えはすぐにわかった。掌に火をくすぶらせ不敵に笑い

ながら、
黒づくめの男が現れた。「ああ、こいつの仕業だな」と、健は納得がいった。

「これは失礼。シェイド退治の邪魔をしてしまったようだな」
「な、浪岡……何しにきたんだ！」

浪岡は「ニヤリ」と笑い、いきなり健へ殴りかかる。ストレートをかかわすも、

身をかわした方向に突然出された炎が健を襲う。炎を切り抜け、浪岡を斬りつける。

大型剣による攻撃を、浪岡は腕ひとつで受け止めていた。

「どうした？ そんなものか？ ふんッ！」

腕先から炎を伴う竜巻が放たれた。至近距離で食らったために受けきれず、

健は吹っ飛ばされてしまう。それでも立ち上がり、走りながら浪岡を攻撃。

だが浪岡は健を鼻にもかけず、鳩尾みそおちを突いてダウンさせる。うめき声を上げる健を嘲笑うと、みゆきを締め上げ見下す。

「貴様にはガツカリしたぞ、小僧！ いくらパートナーが強くても、契約した奴が虫ケラでは無意味！」

残り火が静かに燃え上がる中、膝を突いた健を浪岡が嘲笑う。その手元でみゆきが苦しそうにもがいていた。

「み、みゆきを……離せ……！」

「健くんッ！」

深いダメージを負わされた。この剣を杖代わりにして立つのがやつとの状態だ。

ぐぬぬ！ と歯ぎしりし、浪岡を睨んだ。浪岡の腕の中でみゆきがもがき、暴れる。

「離して！」

「ええい、この小娘が！ 暴れるな！」

浪岡が腕を噛みつかれ、噛まれた腕を押さえる。不敵で不遜な笑みは、

一瞬崩れ去っていた。まだ痛みが残るものの、苦し紛れに浪岡は再び笑い出す。

「小僧、私からの最後の情けだ！ 白峯博士を連れて奈良の本部まで来い！ そうすれば、白峯と引き換えにこの女を解放してやる…」

「…」
「来ちゃダメ！ これは罠よ！」

やかましい女だ、もう我慢ならない。健を止めようとしたみゆきの口を塞ぐと、

浪岡は炎の中へ消えていった。そこに残ったのは消えかけた炎と、己の無力さを嘆く青年だけであった。

EPISODE 40：未知なる次元

「っ……っん……」

今日も陽射しが強い。窓辺で寝そべり、アルヴィーはひなたぼっこを満喫していた。

昼時の日光というのはポカポカとしていて生暖かく、その心地好さからいかなる状況でも眠気を誘う。

不思議なことにこの眠気に打ち勝つのは難しく、誰しも完全には防げないというのだ。

ガムを噛めば、ある程度は抑えられるというが果たして事実なのだろうか。

是非一度試してみたい。だが、今はそんなことは関係ない。

どうにも頭がスカツとしないのである、だから思いつきり寝てやるろう。

前髪を垂らして、目の前がまったく見えなくなるくらいに。

深く眠りすぎて、目覚めたら夜になっていたくらいに。なんなら日干しになっただっていい。

そのくらい、眠っていたかった。大音量で鳴り響いた携帯電話の着信音が、アルヴィーの眠りを妨げた。

「うみゅ〜、うるさいのう……。いったい誰からだ？ 健か……」

気だるそうに起き上がり、ケータイを開く。

電話の主が健である事を確認すると、すぐに斜めを向いた受話器のボタンを押し応答する。

「もしもし、健か」

「あ、アルヴィー！？ 大変だ！ 大変、大変、大変！ 大変！！ どうし

ようッ！！！！！」

ハチャメチャなほど、右往左往しているのかと思わされるぐらい健は慌てているようだった。

いつも穏やかな彼が声を荒げて喋っているのを聴けば、何があったのかはなんとなく分かる。

「何か起きたのか！？」

「み、みゆきがさらわれたんだ！ 浪岡にッ！」

「なに……？」

ショックを受け一瞬耳からケータイを離す。

自分にとってもこれは緊急事態だ。何とかしてやりたい。

「そういうことだから、えっと……。とりあえず駅まできて！」

「わかった。今すぐそちらへ参ろう」

いざ行こう！ と意気込んだのはよかったが、あることをすっかり忘れていた。

何を着ていくかだ。寝すぎで頭がボケてしまったのかもしれない。とりあえず適当にワイシャツとコートを羽織り、ミニス力を履いて健のもとへ急行する。

「よオ、相変わらずセクシーだねエ。もしや、あんたも東條に呼ばれたか」

「あんた『も』、とはどういうことだ？ 不破殿」

「なーに言っただ、カンの鋭いあんたならすぐに分かるんじゃないか」

健のもとへダッシュで向かう、その途中でどういいうわけか不破と

合流した。

「どうやら、彼も健に救援を頼まれたらしい。もう駅は目と鼻の先なので二人で何気ない世間話をし合いつつ、ゆっくり歩いていく。」

「あつ、二人とも来てくれたんだ！」

駅前で時間を潰していると、やがて健がやってきた。抛り所をようやく見つけたかのような、今にも泣きそうなほど嬉しそうな顔をしていた。

「さつき言ってたな。浪岡が白峯さんと交換にみゆきを解放するとかって」

「はい。でもとばりさんに迷惑はかけられませんし、そのまま乗り込もうかなって」

健が二人を呼んだのには、協力を要請する以外にも理由があった。このままセンチネルズの本部へ乗り込むべきか、とばりにも相談してから行くべきか。

それをどうするか、二人に確認をとるためだ。あの狡猾な浪岡がそう簡単にみゆきを手離すとは思えないし、仮にとばりを連れていってみゆきを返してもらってもとばりが監禁されるだけ。頭では分かっていたのだ、浪岡が約束を守るような男には見えないと。

「まあ、迷惑かけたくねえならこのまま連中のアジトに乗り込もうや。少なくともオレならそうするぜ」

「うむ、それがいいだろう。あんな悪らつな奴との約束を守る筋合いなどないからの」

決心がついた。このまま浪岡のアジトへ乗り込んでしまおう。そうした方がとばりのためにもなる。

「……ありがとう。やっぱりそうするべきですよ。行きましよう、奈良に！」

「おうよ！」

「合点承知！」

仲間が揃い、準備は整った。幸い明日は休みだ。心置きなくセンチネルズとの決戦に臨める。

「そうと決まれば話は速い。さっそくダイヤ探すぞ！」

「待たれよ、お主ら！」

奈良行きの電車を探し出す健と不破だったが、そんな彼らをアルヴィーが止めた。

「な、なんだよ。ここまで来て引き返すってのか？」

「違う、違う。そういうことではない」

疑問に思う不破と、わけがわからず振り向く健。すると、アルヴィーが物陰を指差した。

腕を組みしばし考えた不破だが、何を意味するかはさっぱりわからなかった。だが、健は違った。シェイドと同じように隙間と隙間を移動することを、以前にやったことがあるからだ。一番乗りして飛び込み、そのまま隙間の先にある異空間へ赴く。

「私たちは、今からシェイドと同じようなことをして移動する。早ようせねば置いていくぞ」

「で、でもよ。それって危なくないか……？」

信じられない。こいつらはそんなことをしていたのか。

危険すぎる、少なくとも自分はこのことしない。移動手段なら自慢のバイクで間に合っている。にわかには信じられない不破は、体が少し震えていた。無理もない、こんなことをするのははじめてだからだ。

「もしや、初体験か?」

「お、おうよ。だが、死んだらどうするんだよ!」

「大の男がだらしないぞ。ほら、飛び込め!」

「ま、待てよ……うわぁー!」

怯え出した不破を無理矢理隙間の先へ入れ、自身もあとから飛び込んだ。行き先はもはや言うまでもない。奈良だ。

「なんじゃこりゃあああ!」

驚いたのも無理はない。不破の目の前に広がっていたのは、

どこぞの猫型ロボットがタイムマシンに乗っていきそうな異次元空間だったからだ。あまりに異質、あまりに奇抜。じつと眺めていたら酔いそうな景色だ。

「体がふわふわ浮いてるが、いったいどうやって進むんだ!」

「そりゃ決まってるじゃないですか。空を飛ぶんですよ」

「バカかお前エエエ! オレたちやピーターパンじゃねーんだぞ!

こんなわけのわからない空間で、I can flyなんかできるかあ!」

あまりの出来事に頭がおかしくなってパニックを起こしたか、不破が暴れます。

健が殴られながらも不破を取り押さえ、とりあえず落ち着く。

「まあ、不破殿が不安なのは分かる。しかしだかの、私はお主に直接飛べとは言つとらんぞ？ のう、健」

「うん！」

「じゃあどうすんだ!？」

不安に駆られる不破。「まあ見ておけ」と、諭すように言つとアルヴィーは姿を変えた。

一度白い影のような姿になり、影の形が瞬く間に巨大な龍のような姿へ変わってゆく。

「あぐがが……す、スゲエ迫力だな……」

不破が唾然とした。顎が外れて口を閉じられない。

「そ、それにしてもでけえ……ブルブル」

「どうした、乗らぬのか」

不破は威圧感に圧倒されて、ただただ打ち震えていた。全長だけでも10mはあるだろうか。

何から何まで自分の10倍以上はある大きさだ。しかもその巨大な龍が人語を話しているのだ。普通に考えて怖いことこの上ない。今の彼女から見れば、不破などちっぽけな虫けらでしかないだろう。いや、ノミ程度にしか思われていないかもしれない。そんな巨大で威厳のあるこの龍の背中に、健は飄々と掴まっていた。正直、自分では無理だ。怖すぎる。

「不破さん、置いてきますよ〜?」

「ま、待てよ! それはやめてくれよ! 乗せてくれ!」

慌てて不破が飛び乗る。「しっかり掴まっているよ」と促し、ア

ルヴィーが全速前進する。

すさまじい風圧だ。それも、今にも振り落とされそうなほどの。
ジェットコースター並みか、

それ以上のスリルを味わうことが出来た。ひっきりなしに叫びまくっていると、気がつけば異空間を脱出して奈良にたどり着いていた。なんだったのだろう、アレは。悪い夢でも見ていたのだろうか。いや、現実の光景だ。シェイドはいつもあんな風にして、人間界に進出しているのだろうか。背筋がゾツとした。エスパーになって2年以上経つが、あそこまで人懐っこいシェイドや、そのシェイドと向き合って生活しているやつは見たことがない。あいつらが異常でおれが正しいのか、おれが異常であいつらが正しいのか。よく分からなかった。

EPISODE 41：フュリアス・フレーム PART？

「ご気分はいかがかな？ お嬢さん」

センチネルズ本部・所長室のベランダ。浪岡が十字架に縛り付けられたみゆきを見上げながら、

「ご満悦そうに問いかけた。この言葉には気遣いなど一切感じられず、

心のこもっていない冷血な口調だ。

「こんなことして、いったい何が狙いなの!？」

「東條健……あの男は甘すぎるんだよ。あれだけの力を秘めておきながら、それを解放しようとしめない。あのままもてあましていては室の持ち腐れというものだ。何とかして、彼に眠る絶大なパワーを引き出せないものか……そこで私は考えたのだよ」

「っ……」

自分に酔いしれるように、浪岡がべらべらと語り出す。みゆきは浪岡を、至極嫌そうな目で見ていた。

「奴にとって大切なもの……家族や知人を手にかけてたら、奴はどうなると思う？ 怒りで力が目覚めて、瞬間に最強クラスの 에스パーとなる！ そこに私がつけ込んで最強の尖兵へと変えてくれよう」

「……正気じゃないわ。そんなこと……!!」

「ぬるま湯に浸かりながら生きてきた小娘に何が分かる？ 目的のためなら、手段は選ばん。如何なる手を使っても、私はこの国の頂点トピクに登る!」

浪岡はサングラスをかけなおし、くくりつけられたみゆきを見上

げる。

自信過剰で冷酷な、いやらしい視線を集中させた。

「そんなの絶対おかしい、間違ってる!!」

「うぬぬ……」

憤りを感じたみゆきが、吐き出さんばかりに叫んだ。

空気が裂けそうな勢いだ。わめく彼女に苛立ちを隠せなくなった浪岡が、

赤いボタンが浮き上がったスイッチを取り出す。

「力なき虫ケラが、この私に向かって偉そうにほざくなッ!!」

「きゃあああああっ!!」

浪岡によって十字架に電流が走る。

同時に耳の鼓膜が張り裂けそうなほどの悲鳴が、部屋中に響き渡った。

「人が下手に出ればいい気になりやがって……この浪岡様をなめるなよ!!」

ヒステリーを起こしたためにその端正な顔が、いびつな形にねじ曲がった。

罵声を浴びせると、浪岡は更に電流を流す。

「何よ、偉そうにしてるのはそっちじゃない!!」

「口の聞き方すら知らぬのか! よほど死に急ぎたいらしいないだろっ、一思いに殺してやる!!」

浪岡がヒステリックにそう吐き捨てた。右の掌が燃え始め、みゆ

きへとその魔の手が向けられる。

茶番は終わりだ。文明に革命的な進化をもたらし、人類を進化させる。進化についていけない、

愚かで劣った旧人類は皆殺しにしてやる。進化についてきた連中は、

新世代の支配者たりえるこの私がすべて統制する。逆らうものは無論皆殺しだ。

根絶やしにしてくれる！　だがその前に、この小娘を私好みの女にせねばな。

可憐で主人に従順、積極的に貢いでくるような女に！

そのときである。十字架を前にみゆきを燃やし尽くそうとする浪岡の背後で大爆発が起き、壁が吹き飛んだ。

「ええい、何事だツ！」

彼が怒るのは至極当たり前、たしなみを邪魔されたからだ。燃えていた右手の火をおさめ、爆発した方を向いて怒鳴る。

噴煙の中から現れたのは長剣と盾を持った青年とその青年よりも大柄な、

ランスとバックラーで武装した男だった。

「き、貴様ら……ッ!?」

浪岡が怒り心頭で歯ぎしりしながら、乗り込んできた青年たちを睨み付ける。

青年たちもすこぶる険しい表情をして浪岡を威嚇していた。

そのうちの、剣を持った方がその切っ先を浪岡に向ける。

「健くん……助けに来てくれたのね！」

「ああ、もう大丈夫だよ。　みゆきを返せ、浪岡！」

青年 東條健から、すさまじい威圧感を感じた。この前までの腑抜けとは、

明らかにオーラが違う。なぜ、これほどまでに強い覇気を放つようになったのだ。

怒りがそうさせたのか、それとも。

「ま、待て。白峯と交換する約束だったはずだぞ？ あの女はどこにいる」

「あいにくだが浪岡。オレたちや、お前との約束を守る気はないんでね。白峯さんは置いてきた」

「くっ……!!」

なぜ白峯を連れてこなかったかを不破から告げられ、

「ふざけやがって!!」

と、浪岡が舌打ちした。

せつかくの取引も、これでは台無しだ。そもそも、話を通じなさそうないつらに取り引きを持ちかけたのが間違いだった。

「そっちがそうなら、こっちも約束を破らせてもらっぞ。あの小娘を血祭りにあげてくれる!!」

「卑怯だぞ、浪岡!!」

「黙れ小僧！ 今更止めようとしても無駄だ!!」

それでも阻止しようと健が飛び出す。その傍らで「頼む、間に合ってくれ」と呟き不破が加速。

健が横から浪岡に飛びかかるも、既に浪岡が火弾を放ったあとだった。

「しまった！」

「うわははは、バカめ。だから無駄だと言っただんだ！」

ほくそ笑む浪岡。そうはさせじと、十分に加速した不破が空高く跳躍する。

「これ以上犠牲を出してたまるか！ もう誰も……死なせやしない！！！」

空中でランスを薙ぎ払い、みゆきを縛っていた鎖を断ち切る。

そしてその両腕にみゆきを抱き、地上へ着地する。俗に言うお姫様抱っこだ。

ギリギリで外れた火弾が虚しく、十字架に命中し爆炎をあげる。

みゆきを下ろし健のそばへ寄せてやると、不破はランスの穂先を焦燥に駆られた浪岡へ突きつけた。

「観念しろ！ 今日ここで、美枝さんの無念を晴らす！」

「ぐうお！」

疾風のごとき速さで浪岡へ突撃し、その勢いで窓ガラスを破壊し外へ飛び出す。

みゆきを抱きかかえながら、健もそのあとを追って飛び降りる。

多少の痛みを我慢して林を駆け抜け抜けると、その先では不破と浪岡が戦っていた。

手出ししない方が良さそうと思い、健はみゆきと共に岩陰から不破を見守ることにする。

火の玉が弾け飛び稲妻が飛び交い、拳と長槍がぶつかりあう。

息をする暇もまばたきする暇もないほど激しく、目まぐるしく展開していく。

なんというべきか、ハイレベルだ。とてもじゃないが、今の自分ではついていける気がしない。

「フアハハハハ！ その程度かあ！ 怒りや憎しみでは私は倒せない！」

「うるせえ、貴様だけはオレの手で倒す！」

掌や指先から放たれた炎を自慢の超スピードで切り抜け、不破が浪岡を切り上げる。

確実に仕留めるべくひるんだ浪岡の急所を狙い、一か八かの突きを繰り返した。

しかし、浪岡が腰に忍ばせていた杖から長ドスを抜く。仕込み杖だ。杖をはじめ、

普段から持ち歩いている多種多様な日用品の中に刀が仕込まれている。

マニアックなものでは、傘や三味線にも入っているものもある。

更にこの長ドスは鍔がない『長脇差』と呼ばれる刀の一種であり、その中でも長さが一尺八寸、つまり54.545454545cm以上のものを指す。時代劇をはじめ、

任侠映画などでもよく見られるシロモノだ。

「スピードだけじゃ勝てんよ」

「う……お、おっ……ううっ……！」

ニヤリと笑い、ランスによる急所狙いを刀で巧みに防ぐ。

そのまま弾き返すと、不破の左肩に刀を突き刺した。刀を抜かれ出血する左肩を押さえながら、

不破が苦悶する。更に至近距離からの火炎を食らい、

健とみゆきが見ている付近まで吹き飛ばされてしまう。

「虫ケラめ。もうスタミナ切れか？」

掌で炎をくすぶらせながら、浪岡がゆっくりと横たわる不破へ近寄る。

しかし不破は臆することなく立ち上がり、

「まだだ！」

浪岡へ向けて何度も走りながらの突きを繰り返すが、すべて避けられてしまった。

嘲笑うように、浪岡が「引導を渡してやる」と宣告。彼の背後で炎が激しく燃え上がり、

蛾のような巨大なシルエットがゆらめきながらその姿を現す。

「も、モスラあ!？」

浪岡以外、みな口を揃えてそう驚いた。

燃え盛る炎をまとった巨大な蛾のようなシエイドが、ハッキリとその異様な姿を露にしたからだ。

「あんなチンケな怪獣と一緒にするな。見よ、この美しい姿を！」

我が最高の下僕たるシエイド、ピュラリスだッ!！」

「つつ、きもち……わるい」

「なにイ!？」

みゆきが吐き気を催すようにそう洩らした。

無理はない、そもそも蛾というのは害虫に分類される羽がついた無脊椎動物の一種。

おもにきれいなチョウチョと間違えられることが多く、蛾と気づかれたときにはとくに気味悪がられやすい。毒を持った

ものも存在しており、
なおいつそう嫌われやすい哀れな昆虫だ。一般人にも蛾を嫌うものは多く、

みゆきも例外ではなかった。ただ、それだけのことだ。

「虫ケラめ、このセンスがわからんというのか！？ 焼き払え！」

「ヤバい、伏せて！」

己の美的感覚を否定された浪岡が、怒りのままピュラリスへそう命じる。

口から熱線が放たれ、だ円形に焼き払うと周囲を爆発炎上させる。爆風から皆を守るべく、

健が盾を前に構える。爆発がおさまると、辺りに煙が漂い始めた。あれほどの威力だ、生き残れる確率はほぼゼロに近い。

「これで終わりだな」

満月を背に、勝ち誇ったように笑いながら浪岡がそう言った。邪魔者はいなくなった。

これから世界に改革をもたらしてやる。まずはこの消毒液臭い日本列島から、

じっくりと作り変えてやろう。一面赤茶けた焦土に変えてから、錬金術の偉大なるパワーを使う。

瞬く間に焼け野原に緑が戻り、愚かな人々は私に感謝し崇め始めるだろう。

やがて人々は私を祀りたて、私は新世界の王者となるだろう！
すべてが私にひれ伏し、私にのみ従う。

そこにあるのは今のような腐りきった日本ではない。発達した科学と元通りの自然が調和した、

私の為の私による私の為の理想郷だ！
ユートピア

刀剣を収め邪魔な連中がくたばったことを確認すると、本部である研究施設へ戻るべく歩き出す。

「 なっ 」

その途中、さわやかで涼しげな、凍てつくような音が聴こえた。足の方からだ。

まさかと一瞬思ったが、気にせず歩き続ける。しかし、何かがおかしい。

どんどん足が鈍り、しまいには身動きできなくなってしまった。いったいどういうことだ？

ふと足元を見ると、足が凍っていたではないか。

「これはいったいどういうことかな？ 説明していただきたいのだが……」

にわかには信じがたかった。まさか、そんなはずはない。確かに叩きのめしたはず。

あの熱線攻撃による爆発に巻き込まれて、助かったものを見た事は今まで一度もなかった。

生きているはずがない まさか。まさか。まさか！

「なぜ答えない。貴様に口は無いのか？ 答えると言っているだろうが …！」

激しい憤りを感じた。こんなことはどう考えてもありえないのに。なぜその『ありえないこと』が私の目の前で起きているのだ？

なぜだ。分からない なぜだ！

「 とっ 」

なぜこいつは生きている？

「とっ！」

なぜこいつは私に刃を向けている!？

「とっじよオオオオオオオ!?!」

EPISODE 42：フュリアス・フレイム PART？

健は憤怒していた。といつても、浪岡の自分勝手なヒステリ
ーなどとはわけが違う。

仲間を一方的にいたぶったことへ対する、正義感が強く仲間思い
で心優しい彼だからこそ『怒り』だ。目の前の悪党へ刃を向けた
その表情からも、決意の固さが伺い知れる。

「貴様あ、この期に及んで私をとことん邪魔立てしたいらしいな！
鬱陶しいヤツめ！」

「……はあああっ！」

憤慨した浪岡が次から次へと火弾を放つ。狙いは正確、ターゲッ
トはすべて健だ。

だが、健は氷のオーブを剣に装填すると火弾を次々と打ち消し或
いは『凍らせて』いく。ますますありえない、なんなんだこいつは。

「ば、バカな。気体を凍らせただと！？ そんな非科学的なことな
ど……！」

凍てつく冷気を放つ氷の剣を掲げ、氷の上をスノーボードで滑る
ようになめらかに滑空していく。

大気中の水分を凍らせ、即席で氷の道を作り出したのだ。浪岡の
背後に回り込むと、唐竹割りを浴びせ吹き飛ばした。

「ぐほっ……ば、バカな。ありえん。貴様のような虫ケラふぜいが、
何故にこれほどまでの力を発揮しているんだッ！？」

「そんなこと……」

仕込み杖を抜き、心臓めがけて突き刺す。だが、健はそれをも容易く弾き返した。

「自分で考えるッ！」

攻撃を弾き、そのまま鬼のような猛攻を浴びせる。

滅多切りにされた浪岡は、なおも立ち上がり指をパチンと鳴らしてピュラリスを呼び出す。

「図に乗るなよ！ さっきはどうやって防いだか知らんが、大方仲間を盾にして身を守ったのだろう？ 美しい友情だなあ！！！」

この時は、皮肉を浴びせた つもりでいた。

ピュラリスの口がゆっくりと開き、口内が赤々と輝きはじめる。先程と同じように、熱線による爆破攻撃を繰り出そうとしていたのだ。

「それとも違つたかな？ …… まあいい、お望み通り木っ端微塵にしてやるう！」

「焼き払え！」と、浪岡がピュラリスに指示を出した。赤々とした高熱レーザーが周囲を焼き払い、爆発炎上。ヤツはそこそこはやつてくれた。だが、結局は無駄なあがき。

これで二度目だ。今度こそ生きてはいまい。浪岡が高笑いを上げた。だが、彼の思惑通りに事は運ばなかった。

「危ない、危ない……」

噴煙が収まると、そこには今度こそ灰塵に帰したはずの健がいた

のだから。

「ギギギ……貴様、私を何だと思っているんだ！ 仲間の身を顧みずに防いだのではないなら、どうやって防いだ！」

「あいにくだけどね、盾なら間に合ってる！」

防御体制を解き、健が立ち上がる。

「とばりさんが盾にバリア機能をつけていたんだ。それでレーザーから身を守った。それだけだ」

浪岡が放った、すべてを焼き払う灼熱のレーザー。

周囲を爆発炎上させ地面が内側から吹き飛ぶほどのすさまじい威力だったが、

健はバリアーを張ってそれを防いでいた。盾にもオーブをはめる穴があり、

そこにオーブをはめればその属性に対応したバリアーが発生するシステムとなっていたのだ。

しかし、シエイドとの戦いをはじめてからそれなりに経ったものの、健はこれを知らなかった。

だが、以前泊まった際にとばりがこの機能を解明し教えてくれた。だからとつさに、みゆき達を守ることができ、自分の身も守ることができたのだ。

「あ？ あ……？ あの女狐めエ……。何故だ？ 何故想定外の事態ばかり立て続けに起こる？」

信じられない。自分にとって、取るに足らない足元にも及ばない相手だと思っていたのに。

何故だ。何故こいつは死なない？ ありえない。ありえなさすぎ

る。こいつのようなぬるま湯育ちの小僧ごときが、何故この私を圧倒している？ 怒りで甘さが抜けたからか、それとも仲間が傷つけられたからか？ わからん。何故だ？ ありえない。ありえない。ありえない！！

アリエナイ！！

「ふ、ふふ……ふふふふふ」

気がふれて頭がおかしくなったか、浪岡が突然笑い出した。だがすぐにその表情は、身勝手な怒りに満ちた鬼の形相へと変わっていく。

「ふざけやがって！ まとめてブツ殺してやる！！」

ヒステリックにそう叫ぶと、放物線を描くように火の玉を飛ばす。更にピュラリスが、口から火炎の息を吐き出した。火の玉は健に向かつて飛び、強力な火炎は広範囲に渡って周囲のものを焼き尽くす。波状攻撃にたじろぎ、ついには炎に囲まれてしまった。

「ハツハツハ！ もう逃げられんぞ。そこで見ておくがいい、仲間が焼け死んでいく光景を！」

今度こそ、と、浪岡が笑った。だが健は、勇気を振り絞り炎を切り抜けて仲間の元へと戻る。舌打ちした浪岡はそれを阻もうと、火の玉をいくつも空中に打ち上げ雨のように降らせていく。

「急げ急げ！ 仲間たちが消し炭になってもいいのかなア~~~~!?」

憤ったあまり浪岡は頭に血が上りきっていた。もはや健たちを抹殺することしか頭がない。錬金術うんぬんは完全に蚊帳の外だ。

「うあっ！」

全力で走った。結果、路傍の石につまずいて動きがそこで止まってしまった。

膝を擦りむいてしまった、血がおおじんですごく痛い。泣き言をほざいている場合ではないのは、

十分に承知していた。だが、すぐには立てそうにない。 。 足以外は動かせるが、たどたどしい。盾を構えられるかはわからない。このまま、浪岡によって自分が望まぬまま火葬される運命なのだろうか。

「はあ……はあっ。僕、死ぬのかな」

しかし、このまま死ぬのはごめん。まだ死にたくない。生きて皆を守りたい、たくさんの人達と仲良くなりたい、家族を支えたい、みゆきに。

「いや……、死んでたまるか！」

そうやって糸で吊り上げられたマリオネットのようにまっすぐ立ち上がって前を向き、盾を構えて防ぐ体制に入る。

同時に、どこからともなく咆哮が上がった。神々しく威厳に満ち溢れた白龍が現れ、風に乗るようにしてあらぶるように空を舞う。

「なっ、何だ!？」

神か、悪魔か。全身から放たれた、神々しくもおぞましいオーラ。見上げるような巨体は全長十メートルを軽く超しており、人間などまるでちっぽけな虫ケラに見えるほどの威圧感があった。その腕は大きな体よりは小さいものの大きさはヒトの胴回りほどもあり、握り潰すことは容易。鋭く巨大な眼は紅く光っており、口には獲物を噛み砕く鋭いキバが生え揃っていた。対して浪岡のパートナーであるピュラリスは三メートル弱しかなく、軽く引つ掻くだけで吹っ飛んでしまいそうだ。『彼女』にとってピュラリスは、まさに取るに足らない相手でしかないだろう。

「やらいでかつ！　だが、上級シェイドと言えども所詮貴様は育ちすぎの白蛇でしかない。私のピュラリスとどちらが強いか比べてやろうか？　アルビノドラグーンよ！」

両者睨みあつた後にピュラリスが羽ばたき、全力で激しく燃えるその体をぶつける。

だが、アルビノドラグーンはそれをわしづかみにし、そのまま地上へと放り投げた。

「なん……だと……？」

信じがたいほどに圧倒的なパワー。それは最強だと思っていた己のパートナーを、羽虫でも叩き落とすかのようにねじ伏せてしまった。

「ええい、この役立たずめがー！」

地べたに落ちたピュラリスに罵声が浴びせられる。自信過剰な自分が原因だとも気付かず責任を相手に転嫁して罵詈雑言を浴びせる姿は、ある意味では清々しかった。

「まあ良い……。今はそれより、貴様を片付けるのが先だ。死ねイ
東條ッ！……！」

「く……っ！」

浪岡がいきり立ち、巨大な火の玉を健めがけて飛ばした。

アルヴィーは高いところにいてすぐには来れないし、火の玉は盾で防げるサイズには見えない。バリアを張っても破られる可能性がある。もはや、これまでなのか？

否。何故ならば、彼は独りではなかった。かけがえのない仲間がいたからだ。

ひとりは、己のパートナーである白龍。強敵だったピュラリスを軽くいなし、窮地から救ってくれた。

もうひとりは、幼なじみの少女。戦う力を持たない一般人だが、何より心の支えとなってくれる。家族と同じくらい大切な人だ。そしてもうひとりは、少しぶっきらぼうだが、今の自分より遥かに強く経験豊富。頼りになる上級生だ。そして、ずば抜けて足が速い。

その足が速い仲間、不破が間一髪飛び込んで共にその場を切り抜けてくれたのだ。

「怪我はないか？」

「不破さん……！」

「よく……頑張ったな。見直したぜ、東條！」

「ありがとうございます！」

いつもぶっきらぼうで、粗暴な印象だった不破が優しく微笑んだ。信頼できる『仲間』がいたからこそできた芸当だ。

「おいおい、照れるじゃねえか。礼はあとにしてくれや」

「ふん、虫ケラどもが何をごちゃごちゃと……」

「……さて、選手交替と行こうぜ。オレが浪岡の相手をする。お前はみゆきちゃんを守るんだ！」

「はいっ！」

健がみゆきの元へ向かって走り出した。この際、擦りむいた膝の痛みは我慢だ。

他人を傷つけたくなくても、人を守るためなら己が傷付くことは厭わない。だから痛がつてうるたえるわけにはいかないのだ。

「さて、と……浪岡、覚悟はできたか？」

「いつまで粘着する気だ……お前の怨み言を聞く気はないぞ！」

「オレもお前の理想に同意するつもりはない。罪もねえ人々を、次から次へと殺しやがって！ 絶対に許さねえ！」

「ハッ、誰でもよかった！ 私の能力が試せるのならな！ お前の恋人も、たまたま巻き込まれただけのことだ！ 私は何も悪くない！！！」

両者の意見がぶつかりあい、火花を激しく散らした。

どちらも負けられない、負けるわけにはいかない。いよいよ、長きに渡る因縁にも終止符が打たれようとしていた。

「黙れ。お前だけは……お前だけは！ オレが倒してみせる……！」

「図に乗るな。貴様ごときは素手で捻り潰してくれる……！」

不破か、それとも浪岡か。果たして、運命の女神はどちらに微笑むのだろうか。

EPISODE 43：フュリアス・フレーム PART？

「みゆき！」

「健くん！ 怪我とか、大丈夫？」

「大丈夫！ ……か、よく分かんないや」

「でも、来てくれて嬉しいよ」

不破と交代した健はアルヴィーと一緒にみゆきの元に戻り、彼女の身辺を固める。

悲しいことに、最近の悪者には傍観者をみすみす見逃すほど、優しいヤツはそういない。

ひよっとしたら浪岡以外にも敵がいて襲ってくるかもしれない。

そんな状況では、か弱い乙女である彼女は誰よりも心細いはず。

きっと誰よりも恐怖を感じているはず。だから守ってやらなくてはならない。

身を挺してでも人々の盾となる覚悟はできている。

彼はその為に、エスパーとして戦う決意をしたのだから。さつきすりむいた膝のケガなど、

彼女の恐怖心に対すればしょうもないものだった。あの時自分たちが駆けつけなかったら、

そのまま浪岡にもてあそばれて辱められていただろう。そう考えるとつくづく助けに来てよかったと思える。

「感動の再会はあとだ、まだ安心はできないぞ」

人の姿に戻ったアルヴィーが促し、健が「確かに」と返事した。

新手下で浪岡の手下か、シェイドが襲ってくることは十分に推測できる。というか、思ったそばから襲ってきた。

「かかれッ！」

緑色の髪を束ねた男　緑川とその手下だ。
狡猾にも二人の手下にケガを負っている健を襲わせ、羽交い締めにする。

「お主、卑怯だぞ！」

「卑怯もクソもあるか。手段を選ばないヤツだけが生き残れるんだ！」

緑川が殴りかかる。アルヴィーは攻撃を軽くかわし、顔面にパンチを入れる。

「チツ、やるな。だが、女だからといって容赦はせんぞ！」

素手でかなわないなら、と言わんばかりに懐に忍ばせていたコンバットナイフを取り出し、

何度もそれを突き出す。華麗なバックステップを踏み、アルヴィーはことごとくナイフによる突き出し攻撃を軽くかわした。やがて、ナイフを突き出したまま緑川が全速力で突撃してきた。

「いくら上級シェイドといえども、今はか弱い女の子ちゃんだ！
俺の相手ではない！」

何度もナイフで切りかかる。もちろんアルヴィーはすべてかわしたが、

一度だけナイフが頬をかすった。雪のような白い肌を開いた傷口から、

赤い血が光るように流れ出ていく。やった、と、緑川はぬか喜びした。

「……ほう。こいつ、やりおる」

手で血を拭き取り少しだけ見つめる。きやつは一瞬の間とはいえ、自分とほぼ互角に戦った。

それだけの実力と格闘センスがありながら、なぜ浪岡のような悪党に従っていたのだろう。

と、考えながらも、すぐに緑川を見て睨みを利かせる。

「お主、こんな傷をつけて満足か？ 小さい奴だのう」

「なにッ！ どういう意味だ！」

「知りたければ自分で考えてみる」

「人をコケにしやがるのもいい加減にしろオ！！」

緑川がいきり立ち、みたびナイフを振りかざして襲いかかる。最初こそ戦闘のプロのように見えたが、それはまやかし。

その中身は、ただ刃物を振り回して暴れているだけのチンピラ。今や取るに足らない相手だ。軽くいなしてやるか。

「オレを侮辱した罪は重いぞー！ 串刺しか細切れか、好きなほうを選べえッ！」

ナイフをめちやくちやくに振り回しながら、緑川がジリジリと迫る。アルヴィーはいとも簡単にナイフを避け、健を羽交い締めにしていたセンチネルズ構成員の二人につかみかかる。

「お主ら！」

「ひっ！」

「いつまで！」

「ひいっ！！」

「野郎同士で！」

「ひええええッ!!！」

「絡んでおる!!！」

健の腕から強引に引き離され、ゴチン！ と二人の頭をぶつけて
ごつつんこさせる。

気絶させた構成員の服の袖をつかみ上げると、肩に力を入れはじ
めた。

「よそへ行けえ〜！」

「のーん！」

そしてともえ投げ。もう一人の方もつかまり、空へ空へと思い切
りぶん投げた。

哀れ、彼らは空の星となったのである。これでようやく健は解放
された。

「こいつ、できる……!!！」

「さて、と。次はお前だ！」

ナイフを弾き飛ばすとその勢いで緑川を押し倒し、そのまま馬乗
りになる。

ニヤリと笑い、「覚悟せい」と言い放った。羽交い締めから解放
された健と、

ずっとアルヴィーの戦いぶりを見て応援していたみゆきは、思わ
ず息を呑んだ。これはすごい、と。

「でえーい！ これでもか！ これでもか！ これでもかあ!!！」

「痛い！ 痛い！ いたくない!!！」

馬乗りになつたまま、左右から交互に鉄拳が飛び交う。それと一緒に、アルヴィー自慢の爆乳も激しく揺れ動いていた。つまり緑川には拳だけではなく、己の顔よりも大きい乳房も当たっていたというわけだ。

まあなんといふべきだろうか、凄まじくけしからん光景であつた。

「そら、そら、そらあー！」

「痛い、痛い、いやいたくない！」

「とどめだ！」

「やっぱり痛エー！」

きつつい一発と包まれるような幸福感。それらが顔面に交互に当てられ、

気付けば緑川はアルヴィーに魅了されていた。そして、とどめを刺された。

「これで懲りたか？」

「も、もう悪いことしません……」

とどめのあとは、『ばふばふ』で仕上げた。

『ばふばふ』とは、ご両親に聞くなりして、自分で意味を調べてほしい。

ただ、青少年をドキッとさせるものであることは明言できる。

「こっ、これはスゴい……」

「ほ、ホントね」

二つの大きな脂肪の塊　　といえは、聞こえが悪い。

しかし、いざこの大きな『おっぱい』に挟まれてみれば、

何事にも変えがたいほどの心地よさが俺を優しく包み込んでくれ

た。

冷酷な淑女に見えたあの女は、本当は地上に降りてきた翼なき女神だったのかもしれない。

少なくとも、俺はそう思う。女神から生まれるのは天使だと相場が決まっている。

なぜなら、今この場で俺がそう決めたからだ。では、女神は実在するのだろうか？

そんなの、わざわざ聞くことではない。もしかすれば死ぬ間際に見た幻かもしれないが、

間違いない女神は存在する！俺がこの目にしかと焼き付けた以上、これは夢ではない。現実だ、奇跡だ！

何より彼女の胸は、極上の乳だ！！

「ああ……オレっち幸せだなあ。もう浪岡さんとかセンチネルズとかどうでもいいや。おっぱいに顔を埋めて死ねたら本望だぜ」

「あれま、この人アルヴィーにメロメロだよ」

「ありやりや。いいなー、わたしもぱふぱふしたいなー」

「健、今つらやましいと思っただろう？」

「ドキッ」

「心配せんでもあとでやるから、安心せい」

「健くん、いやらしいーっ！」

さながら寸劇のようなやりとり。そこに緊迫した空気はない。

やんわりとした感触の空気が代わりに漂っていた。

敵だったはずの緑川はまさかの色仕掛けに完敗してセンチネルズをほっぽり出し、

健はただの色ボケとなり、みゆきはそんな健を少しからかい、アルヴィーはそんな彼らを暖かい目で見ていた。

「みつ緑川！？ ええい、あのメストカゲにたぶらかされおつてが
あ！！」

「人のことに首突っ込んでる場合かッ！」

不破が隙を突いて浪岡を突き飛ばした。そのまま走って追い詰め、
ランスを振り回して更に吹き飛ばす。そこからまた走って接近し、
何度も突きを繰り返した。

素手で十分などと、浪岡は根拠のない余裕をこいている場合だろ
うか。

不破は全身全霊を込めて浪岡に真っ向からぶつかっている。状況
的には浪岡のほうが追い詰められていた。

「ぐぬぬ」

前言撤回。素手で不破を倒すと豪語したにも関わらず、

浪岡が齒軋りしながら仕込み杖から長ドスを抜く。すばやく巧み
に攻撃を防ぎ、

隙あらば反撃を加えていたが、所詮は悪あがき。その速さは、所
詮スピードに特化した不破には及ばない。

「バカな。この前までとは明らかに攻撃の精度が違う！？」

「ヘッ、変わったんだよ！」

血にまみれた長ドスに火を灯し、未だなお抵抗を続ける不破にそ
のまま斬りかかる。

しかし何度斬ろうが突こうが叩こうが、

何度血を流そうが不破はあきらめざるぶりなどまったく見せない。
理由は、死ねないから。浪岡を倒し、

恋人をはじめとする犠牲者の無念を晴らすまでは死ねないからだ。浪岡を前に不破は連続突きを繰り返して、ひるんだ隙にキツイ一発を叩き込む。

更に三人に分身し、三方向から助走しながらのドロップキックを浪岡にぶち当てた。その衝撃で武器が遥か遠くへと吹っ飛んでいく。

「ぐっ……ぬっっっっ」

血を吐きながらよろめく浪岡。

もはやまともに動くことすらままならない状態で立ち上がった。

目を見張った先には、自分へ向けてボルトランサーを構えて穂先へ電気を充填している不破が。

「うおおおおおー!!」

狙いは一直線、高電圧の稲妻をまとった槍が浪岡を貫く。更にそれだけではなく、

天に槍をかざし雷を落とすと、共に己のパートナーであるシエイドを呼び出してその背中に搭乗する。その姿は全身に装甲をまとい角を生やした機械的な黒い暴れ馬であったが、ひとたび手綱を握ると途端に大人しくなった。

「ギャロップ、変形だ!」

「ヒヒーン!」

掛け声と共に馬が、豪快かつ精巧に形を変えていく。黒き暴れ馬は、

漆黒の大型バイクへとその姿を変形させた。エンジン全開で、浪岡へと突っ込んでいく。

「な、なんだこれは？ ふざけるなア！！」

左腕をかざし、手のひらに炎を集中させる。

全身全霊をこめた一撃だ、少なくとも関西地方を焼き尽くすほど強力なパワーを秘めている。

ただし、無事に炎を出せればの話だが。その向こうでは、不破がバイクに乗りながら稲妻をまとったランスを突き出していた。

こちらは既に充填を負え、最大まで出力を上げていた。こうなればもはや勝負は見えているようなものだ。

「これで終わりだ……浪岡ああああッ！！！！」

「ぐがあッ……！？」

それは、あらゆる暴れ馬のごとく。それは、荒れ狂う雷雲のごとく。

覚悟を決めた稲妻の槍が、うろたえる黒き炎を、浪岡を貫いた。

彼の負けだ、間違いなく。皮肉にも己が他者をさんざん見下したように、

ちっぽけでみすばらしい虫ケラのようにその場に這いつくばっていた。

「ば、バカな……。この私が、負けたというのか？」

「観念しろ。お前ももう終わりだ」

不破がランスを突き付け、冷酷そうな口ぶりで浪岡へ言い放った。ようやく、復讐が終わろうとしている。恋人の無念、浪岡への怒りや憎しみ。

すべてが振り切られようとしている。

「終わる、だと……？ この私がか？ は、ははは、はははは……！」

「何がおかしい！」

「これで終わりだと思つなよ」

立ち上がるも戦いで負つたダメージの影響か、疲弊しきつた手足は言つことを聞かない。

どういふわけか、勝手に体が崖の方へと後ずさりしていく。

「我が理想は、我が野望は絶対に滅びぬ！ 必ずや蘇り、錬金術を何としてでも、復活……させ……て……ッ」

足元から、小石がころんと、滑り落ちていく。恐る恐る後ろを振り向けば、

そこはもう崖っぷち。地面はもろく、すぐにでも崩れそつだ。落ちればそこは、

奈落の底。もはやこれまで、助かる術は何もない。

「うっ、うへあああああッ」

非情なる男、浪岡十蔵。優れたエスパーでありながら、

世界を支配してやろうと企んでいた希代の野心家である彼はやつれて奈落へ落ちていき、

あまりにも呆気なく、しかし惨たらしい最期を遂げた。

捨てきれぬ野望を、己が頂点に立つ王国の理想を抱いたまま。

同時刻、ダメージを負つて著しく弱つていたピュラリスも消滅した。

「へッ、ざまえねえな……」

これですつきりした。確かに仇は取った。

これで天国に行った美枝も報われる。この二年間、
ずっと復讐の炎をたぎらせてきた俺にも、ようやく安息の時が訪
れる。

憎かった敵の最期を見届けると、不破もまたその場に横たわ
った。

慌てて健たちが駆け寄り、その体を揺り起こす。

「不破さん！ 大丈夫ですか？ 不破さんッ！！」

「……ま、まあな。お前からこそ、大丈夫か？」

「はい、わたしたちなら元気です……」

「そりゃよかった」

仲間が駆けつけてきてくれたことによる安心がそうさせたのか、
疲労感漂う顔に笑顔が戻った。その背後で燃えていた炎は、寂し
く消えてゆく。

「しかし、あやつもまた……己の力に溺れたエスパーだったという
わけか。哀れみを感じるの」

「ねえ、アルヴィー。僕もああいう風になっちゃうのかな……」

強くなりたい。だが、浪岡のようになってしまいかもしれな
い。

力を持てあました拳句に心が歪んで、目的のために、
強くなるために手段を選ばなくなってしまうかもしれない。それ
が心配だった。だから、彼女にああやって訊ねた。

「健よ、それなら心配いらん。正しいことだけにその力を使えばい
い。ただし、そうと決めた以上は何があっても道を踏み外してはい

かんぞ

「……うん！」

荒れ果てた奈良の野山。熱く激しい夜は過ぎ、東から輝かしい朝日が昇り清々しい朝が訪れた。朝焼け空を見上げながら山を歩き去る。途中で緑川も拾ってやった。

どうやら彼はアルヴィーの虜になったどころか心も入れ替わったらしく、責任をとって自首するという。残忍冷酷だった以前の彼と、本当に同一人物なのか疑ってしまうほどに謙虚な姿勢だった。

EPISODE 43：フュリアス・フレーム PART？（後書き）

シェイド図鑑

ピュラリス

ヤママユガのシェイド。3メートル近い巨体を持ち、全身に炎をまとっている。

炎を自在に操る能力を持ち、作中ではセンチネルズの代表取締役に
して連続発火事件の犯人『浪岡十蔵』と契約していた。

高熱レーザーによる爆破攻撃や口から吐く強力な火炎で健たちを苦しめたが、

自分より更に大きいアルビノドラゴンにはかなわなかった。

その後、浪岡が死亡すると同時に消滅した。

EPIISODE 44：新たな気配！

翌日。

京都の西大路では、早朝からとばりがシャワーを浴びていた。朝風呂だ。

彼女の生活上よくありがちなことだがうっかり先日の夜、研究に没頭しすぎたが為に入浴するのを忘れていたのだ。もっとも人間、

1日ぐらいは風呂に入らずとも大丈夫ではある。しかしそれを差し引いても、

朝風呂というのは気持ちがいいものだ。

浸かれば体の芯から暖まり、仕事などでたまった日々の疲れやストレスも自然にとれていく。

『風呂は命の洗濯』と比喻されることもあるが、まさにその通りだと言えよう。

もう十分なところで湯船から上がり、バスタオルで体を拭いてそれを裸体に巻く。

濡れた黒髪をドライヤーで乾かしてタオルをカゴに放り込み、代わりにバスローブを羽織ってリビングへ。ふかふかのソファに座り、ゆっくりとくつろぐ。

風呂上がりの艶々しい黒髪にはわずかに水気が残っており、はだけた襟元からはメロンかスイカほどはある大きさの乳房がのぞいていた。

髪色に対して雪のように白い肌に、隠れていて見えないものの、チェリーのようなピンク色とのコントラストが美しい。

上がるついでに持ってきたカップには、紅茶が淹れられていた。

「ふう」と一息つくくと、

液晶テレビの電源を点けてチャンネルを回す。今の時間帯はとく

に面白い番組がやっていないようなので、とりあえずニュース番組を観ることにする。

「昨晚未明、奈良の御門山^{みかどやま}で原因不明の山火が発生しました。火の手はエネルギー研究機関・センチネルズ本部の付近から上がり、瞬く間に広がっていきましました。なお現在火は消えており……」
「……えっ？ どういうこと」

女性アナウンサーが冷静に、真摯にそう読み上げる。ちなみに御門山^{かどやま}とは、

奈良にある山のひとつ。春夏秋冬、どの季節でもまったく趣旨の違った美しい風景が売りの場所である。

秋なら紅葉が秀逸で、更にリンゴやキノコなどのおいしい味覚も採れると評判だ。冬は言わずもがな、一面が銀世界である。

「……次のニュースをお伝えします。たった今、奈良県警にセンチネルズ^{みどりかわかすこ}の緑川和人氏が出頭したとの情報が入りました」

思わず目を疑った。かつてセンチネルズにいた頃にチラッと顔を見ただけが、

少なくとも自分の知る緑川は自ら警察に出頭するような奴には見えなかった。

周囲が言っていたように、ひたすら浪岡に従い、
冷徹なまでに与えられたミッションを忠実にこなす男だと
そういう印象をずっと抱いていた。そ

だから、この報道は自分にとっては意外だった。
警察に出頭するという行為は彼からしてみれば、組織の機密情報をみすみす外部に洩らしに行くようなもの。

だからそうしようとした奴は容赦なく殺す。
そうやって緑川はセンチネルズで生きてきた。

見た目こそ好青年だが、その中身は浪岡に負けず劣らずの性根がねじ曲がった冷酷な男だった。

それが何故。

気になるのは緑川だけではない、センチネルズ自体はいつたいうなったのだろうか。

報道だけでは分からないことも多い。

そうだ、こうしよう。不破が健くん辺りなら、何か知っているかも知れない。

少なくとも自分が知っている中でセンチネルズに自ら喧嘩をふっかけに行くような勇猛果敢な人物は、彼らしかない。

いちど聞いてみよう、そうしよう。以前交換しあった電話番号を入力し、健へと繋げてみる。

「アニメみよーつと！」

「よそ様に見られても恥ずかしくないものにするのだぞ」

同時刻、健は自宅のパソコンでのんびりとネットをしていた。

なけなしの金で買ったノートPCだ。色はクールで渋いネイビーブルーで、

マウスは外付けタイプ。隣には、オレンジジュースのペットボトル。これは水分補給用だ。

他にもビスケットが小皿に置いてある。これは、言うまでもなくおやつだ。

「なんも無い……」

彼は動画サイトにアクセスしていたのだが、お目当ての動画がまったく見つからなかった為にテンションがいつになく下がっていた。一生懸命探したのに、なんだかなあ。と、拗ねていると、携帯電話のランプが激しく点滅しだした。

「もしもし、東條です」

「やつほー、健くん!」

「あつ、とばりさん。おはようございます!」

「ニューズ見た? センチネルズがさ、なんかすっごいことになってたわよ。もしかして、健くんがやったの?」

「えっ、まあ……そういうことになりますね。不破さんもその時一緒でした」

「そうだったんだ〜……んー」

電波の向こうで、とばりが右の人差し指を手にそえて考え事をはじめた。

……気がした。なんとなく、頭の中にそんな光景が浮かんだのだ。

「ねえ、今そつちに何か予定とかある?」

「あつ、ないです」

「じゃ、こつちまで来て詳しいこと聞かせてくれない? お友達と

一緒にでもいいわよ　じゃあね〜」

電話が切られたことを確認。目の色を変えてノートPCの電源を切ったかと思えば、

すぐに服をよそ行きのものに着替え、瞬く間に準備を終えた。眠りかけていたアルヴィーを叩き起こし、彼女にも大急ぎで支度をさせた。

二人はみゆきも電話で誘い京都駅で合流。三人で電車に乗り、とばりの家へと向かう。

ちなみに不破も誘ったが、断られた。恐らく彼には、他にやるべきことがあったのだらう。今はそつとしておいてやるう。なにせ、センチネルズの件で、一番辛かったのは彼のはずだから。

「ごめんください」
「さ、どうぞ上がって」

目を見張るほどに広い敷地を通って玄関に上がると、とばりが温かく出迎えてくれた。

見た目は完全にアダルトな雰囲気を漂わせる妙齡の女性なのに、相変わらず明るくて愛嬌がある人だ。見ているこっちも思わずにっこりしてしまいそうだった。

「わざわざ来てくれてありがとネ」

「いえいえ。僕もとばりさんには世話になってますから。それにあなたのお家うちにいると安らげますし」

「もう、お世辞が上手いんだから！」

リビングへ移動し、出してもらったお茶とおかしを味わいながら楽しいひとときを過ごす。

そのうちとばりからセンチネルズの話話を振られたので、あの時起きたことを洗いざらいすべて話した。

少し深刻そうにしていたが、すぐにいつもの屈託のない笑顔に戻った。

「そっか。そういうことがあったんだ。じゃあ全部……終わらせてきたのね」

「はい」

「とにかくすごかったですよ！ 最初どうなるか心配で心配で……。でも、健くんが来てくれたお陰で助かりました！」

「ちよつと。あなた、とっても感謝されてるじゃない？ 照れちゃって、この、この〜」

楽しげに、とばりが健の頬を突っついた。健がみゆきに好意を抱

いていることと、

みゆきもまた健に好意を抱いていること。彼女の鋭い観察眼の前にはすべて、お見通しだった。

なかなかウブなやつだ、決めた。

お互いに初恋であろう彼と彼女の行く末を、酸いも甘いも経験してきた自分が見守ってやるうじやないか。

でもただ見守るだけではつまらない。ちょっとからかったりして、恋心を刺激してやらないと。

甘くて切ない男と女の密かな恋。それを見守る女。そこにあったのは少しのいたずら心と、温かくやさしい微笑みだった。

おびえた様子で路地裏を歩いている、一人の若い女性。彼女は追われていた。

うかうかしてられない。きつとまた、私を殺しに？奴？がやってくる。

こつしちやいられない、早く逃げなきゃ。

でも、どうやって？この先は袋小路。私を狙うアイツは残忍なハンター。

狙った獲物は執拗に追い回し、何が何でも絶対に逃さない。けれど悩んでいる場合じゃない。

でも、もうダメだ。私は殺される。生きて帰れない。ほら、もう足音が近くまで。

死んでたまるか、と、女は全力で走った。だが、石につまずき転んでしまった。

地面に座り込んでしまった女の右手から、べちゃっ　と、水か

何かに触れたような音がした。

恐る恐る右手を見つめると、女の手を濡らしたのは、水ではなくさらさらできれいな赤色をした『血』。

「ひあつ……」

真つ赤に染まった右手を見て、女が恐怖に泣きわめく。

足音を立て、ゆっくりとハンターが女に歩み寄る。その手に握られているのは、

自分の頭と同じくらい大きな鉞^{ナタ}。女には、自分の運命がどうなるかもう分かっていた。

2本足で立つ黒ヒヨウのようなハンターが持った鉞には、既に誰かの血がこびりついていた。

つまり、自分もこれからこのハンターの刃のサビにされようというわけだ。

鉞が今、自分に振り下ろされた。一寸先は闇。もう、助からない。

「グアオオオオオオオオ！！」

「えっ？」

そのとき一発の銃声が鳴り響いた。左目を撃ち抜かれ、視界を失った黒ヒヨウが激痛に悶え苦しむ。

何が起こったのかわからない女は、ただおびえるばかり。底知れない恐怖に震えていると、

更なる銃声が響いた。今度は神経が集中している肩を撃ち抜かれ、黒ヒヨウはもう何も出来なくなった。

「ここ危ないで。はよう逃げてや！」

やがて黒ヒヨウに銃を撃った男が颯爽と現れた。身長は女より頭ひとつ分大きかった。

被害を受けた女には優しく声をかけ、その場から逃げるよう促す。だが、女を襲った加害者には一転して容赦はしない。

女が無事に行ったことを確認すると、銃を向けて何度もヒヨウに発砲する。

「どないや、痛いかな？」

「ぐウウ……」

「痛いかって聞いとんじゃア！ このボケエ！！」

頭を、胴を、足を。そして仕上げに、心臓を。あわれな黒ヒヨウの目には何も見えていない。

頼れるものは嗅覚と本能だけ。肩を壊し両目を失い自慢の足も失った彼には、ただひたすらに弾を受け止めることしかできなかった。皮肉にも弱い者に暴力を振るっていた狩猟者^{かがいしや}は、今、銃撃主の前で被害者となったのだ。

「うすらトンカチがあ、なんば言つても分からんらしいのお。よろしい、せやったらワシにも考えがあるわ」

そして今、男が銃の引き金を引いた。グツと、力強く。

重厚な銃身の先が光り出す、狙いは無論黒ヒヨウだ。

「弱い者いじめはアカン。口で言つても分からんなら、今からオノレの体で分かせたる」

そして、人差し指を離した。

「死ねやアアア！！」

巨大なエネルギー弾がバチバチと火花を散らしながら黒ヒヨウへと飛んでいく。

身動きできぬ黒ヒヨウの体を焼き尽くし、大爆発。残された火が激しく、

静かにメラメラと燃えていた。銃口から煙が上がり、それを息を吹きつけて消す。

「まったく迷惑なやつだった。ほな、帰ろ」

EPISODE 44：新たな気配！（後書き）

シェイド図鑑

ラヴィッツジャガー

黒ヒョウのシェイド。ナタと自慢の俊足を武器に獲物を狩る狡猾なハンター。

自分より弱そうな相手、それも金目のものを持っていそうな者ばかりを狙う。

健の前に何度か現れては撃退され、ある晩ひとりの女性を執拗につけまわしていたところを謎の銃使いに見つかり爆砕された。

EPISODE 45：オレの新生活

（3日後）

遠くから海を臨む丘。そこは見晴らしがよく、花が咲き誇り、すさんだ心を癒すには最適な場所だった。小高いその丘には、

『せめて死者に安らぎを』とでも言いたげに、荒涼とした墓地が建てられていた。

その中でもひととき縦に長いのっぴな墓石の前には、花束を抱えた、

ほどよく鍛え抜かれた体つきをしていて背が高い男性が静かにたたずんでいる。

眼前の墓石には、『倉田家之墓』と刻まれていた。花束をたもとに置いて、黙祷を捧げた。

「……美枝さん。オレ、仇を討ったぜ。やっと君の無念を晴らすことができたんだ。君がいなくなってから、ずっとひとりで戦ってたんだ。すげえ辛かった。けど、そんなオレにも仲間ができたんだ。お陰で浪岡の奴を倒せた。君と過ごした幸せな日々は長いようで、あまりにも短かった。だけど、君との思い出は数えきれないほど残ってる。天国でも達者でな。愛してるぜ、美枝さん」

天国へ逝った恋人へ向けて、儂げに微笑んだ。不器用な自分なりに彼女に贈ってやれるものは、

他には花束だけ。でも、十分だった。安らかに眠れるようにと祈り、

愛する気持ちが天に届けば十分。彼女が喜んでくれるのなら、それで良かった。

「さて、行くか」

恋人への報告と供養を終え、気持ちの整理が出来たところで、不破は墓地を去る。

これでやっと、ケジメがついた。墓地から少し歩いたところに停めてあったバイクを駆り、

己の古巣である東京へ戻る。以前に住んでいた京都のマンションから、

東京の新しいマンションへの引っ越しも既に終えていた。心機一
転、

自分が生まれ育った東京で新しい暮らしを始めようというわけだ。更に彼は、

今の生活がもう一段落ついたら警察に復職することも考えていた。もともと恋人の仇をとりたいたあまり、勝手に警察を辞めてしまったクチだ。だから、

勝手なことをした償いがしたい。二年間のブランクは大きいが、今度はいち警官としてだけではなく、エスパーとして役に立ちたい。

ただひたむきに人々を化け物シエイドから守ろうとする東條や、そんな彼を支える周囲の人間を見て、

思った、痛感したのだ。人を守るといふ、警察官として当然の義務が果たせていなかった。

復讐にとらわれるあまり、少々利己的になりすぎていたのだと。

青春真っ只中の学生、ちゃらんぼらん且つオシャレにストリートファッションを着こなした若者、

美しい容姿ながらも近寄りがたい雰囲気をかもし出すキャリア・ウーマン、

スーツに身をくるんだサラリーマン、だいぶ昔から生きてきた杖を突く老人。

たくさんの人々でごった返す、混沌とした都会の雑踏。きわめて真剣な面構えで、

不破が人ごみの中をくぐり抜けていた。雑踏を抜けて路地を歩いていると、やがて向かい側から歩いてきた男と肩がぶつかった。

「おい、気を付けろよ！ ……つて、不破じゃないか？」

「ゲツ、村上！ お前だったのか」

その男、村上翔一むらかみ しょういち。警視庁捜査一課の警官で、階級は警部補。

青髪に赤紫色の瞳で、前髪に入っているピンクのメッシュがアクセントになっている。

知的な銀縁の伊達メガネに、きっちり着こなしたダブルスーツが、スマートにひきしまった彼にはいやというほど似合っていた。おまけにハンサムだった。今風にいうならばイケメン。

「やっぱりな。人に肩ぶつけといて謝らないのは、君しかないだろうなああって思った」

「道理でなあ。オレも人に対してそんな嫌味な言い方する奴は、お前ぐらいしかいないだろうなって思ったぜ」

お互い感じていた、やはりこいつは読めない。

人前でプライベートに関わる話を延々するのもアレなので、馴染みのバーで酒でも飲みながらゆっくりと他愛もなく話し合うことにする。

不破はアーリータイムズを、村上は生ビールを注文した。酒は、大人だけのたしなみだ。

未成年が味わうには強すぎるほどの刺激と快感が、そこにはある。クセは強いが、一度はじめるとなかなかどうしてか、やめられない。止まらない。かつばえびせん。

ただ、その快感に溺れて昼間から酒びたりの毎日を送るものも中

にはいるが。

「聞いたよ。警察に復職するらしいじゃない」

「ああ。この2年間、遊びすぎたからな。そろそろ仕事しねえと、
って思ってたよ」

不破が酒を少し飲む。

「そりゃあいい、僕は力仕事は苦手だからね。ホントに助かるよ。
まあこれからお給料減らされるんだと思うと、正直ゾツとしちゃう
けどさ」

対する村上は、そう言うときビールをイッキ飲み。

「なんで？」

「寝ぼけてんじゃないよ。君が高給取りだからに決まってるだろー
！」

一気に半分まで飲み干すと、声を大きくしてそう叫んだ。知性派
な見た目ながら、

こういうときは意外と豪快　　というか、はっちゃけるようだ。
人は見た目によらないとは、こういうことを言うのだろう。

「それと高給取りだったってことが、どう関係あるんだよ？」

「あるね！　あんたが復帰したら、僕らの分の給料がその分だけ、
け、けずらるる！　まマスター、もう一杯！！」

酔っぱらったからか、村上の滑舌が著しく悪くなっていた。

ものすごい勢いでビールをお代わりし、村上は最終的に泥酔。

最後に暴れたそうとする彼を、不破が何とかすべく取り押さえる。

「おいおい、落ち着け！」

「うるひゃい、ほかあ酔っ払ってなんかいないのら〜……」

「うわっ、面倒なことになったぞ……」

泥酔した村上の分もマスターへ支払うと、村上を背負って店から出ていった。

そして村上の酔いを覚ましてやろうと、水をいっぱい入れたバケツを用意して顔を突っ込ませた。

「あ、あれ。僕は何をしてたんだ？ 何だか顔が冷たいんだが……」

「……はいはい、やっと目覚めたか。お前さつき、真っ昼間からビールかつくらってただろ」

「そうだったけ？」

「おいおい、覚えてないのか？ しっかりしろよオ」

村上の酔いを覚ましたところで、今日はひとまず彼と別れてマンションへ戻ることにした。

その前にビールやおつまみを買ひ込み、意気揚々とマンションの自室へと入った。

「うげえ、整理整頓忘れてた……」

まだ引越してきたばかりゆえ、部屋の中は荒れ放題。ろくに片付けも出来ていない。

プチプチ付きの梱包や私物が入ったままのダンボール、新聞紙に配線が繋がっていない電化製品。とにかく、様々なものが散乱して辺りを埋め尽くしていた。

このままでは折角のマイルームが台無しだ。どうせ住むならきれいな部屋がいい。

大急ぎで荷物があるべき場所へせつせと運び、ひとりで雑巾がけし、カーペットを一人で頑張つて敷き、

ローラーをコロコロしてホコリを取り、最終的に掃除機をかけ。これではまるで大掃除だ。終わるまで一苦勞であった。この大作業を終えた不破は汗にまみれながらも達成感を噛みしめ、清々しい笑顔を浮かべていた。しかし馴れない掃除で体力が限界を迎えたか、しばらくして床へ豪快に倒れ込んだ。そして、そのまま夜を過ごした。端からみれば、なんとも言いがたいマヌケな光景である。

浪岡が倒れ、No. 2である緑川が出頭。更に本部である研究施設はもぬけの殻。

センチネルズが事実上壊滅してから、早くも3週間以上が過ぎようとしていた。

緑川の供述によってセンチネルズの裏の顔と所業が公の場おおやけに公開され、

世間を騒然とさせた。そして、日本中に平和がもたらされたのである。

だが、センチネルズが壊滅しても悪は滅びていなかった。

誰もいなくなりすっかり寂れた空気が漂うセンチネルズの研究施設、その所長室に黒いローブの男が立ち入っていた。禍々しい装飾が施された一つ目の仮面を着けているため、素顔は見えない。手には何らかの暗証番号が書かれたメモが握られていた。

その男は放置されていた浪岡のPCを立ち上げるや否や、メモにつづられた5ケタの暗証番号を手短にし極秘のファイルを起動これに記されていたことを速やかに読み上げ、更に深層へ向かうべくパスワードを入力しにかかる。これもどこかで知っていたのかすばやくし、データの深層を閲覧。浪岡の後ろの壁を調べ、隠されたスイッチを押すと壁に扮した隠し扉が開いた。それは地下の深くへ続いており、仮面の男は階段を下つていく。下りきった先には、古びた書物がガラスケースの中で嚴重に保管されていた。

「おお、これだ。古代に封印された偉大なる力、進化をうながす灯とも火しび 錬金術ッ！」

ガラスケースを力ずくで破壊し、その中身である書物を手に取る。

「そのすべてがこの古文書に記されているッ！」

心地よい風が巻き起こるほど速くページをパラパラとめくる。やがてすべてを閲覧すると、それを横領するかのように懐に仕舞いこむ。

「もはやここに用はない……」

仮面の男はひとり不敵に笑いながら、闇の中に溶けるように消えていった。

その頃、京都では。

「おじさんビビってんのオ？」

夕方、ある大通りの脇道にて。フード付きのパーカーを着た男と、スカジャン姿の男、

ダウンジャケットの男が薄汚くみつともない格好の老人に寄つてたかつて暴行を加えていた。

いずれも服の色は緑色で、刃物や鈍器を持って、嫌がる老人を一方的にイジメていたのだ。

おびえるホームレスの老人に、血も涙もない悪漢どもが牙を剥く。

「ウヒヤヒヤ！ 見ろよ、このジジイ泣いてやがるぜ！ なっさけねえ〜！」

「なんか可哀想になってきたよなあ？」

「へへッ、いっそ楽になっちまいなあ！」

ホームレス狩りの一人が嘲笑いながらボールのようなものを振り

下ろす。

が、下ろそうとした瞬間に顔面を蹴り上げられ転倒。ボールを持つていた男を蹴飛ばしたのは、

青いチエックシャツにベージュのズボンを穿いた別の男だった。だが男の顔から悪意は感じられない。

瞳も濁っておらず、純粹で正義感が強く、むしろホームレス狩りの連中の行為を快く思っていないようだった。

「な、なんだテメエ!? 邪魔すんな!」

「だったらこんなことすぐにもやめろ! このおじいさんが何したって言うんだ」

「こいつクサいんだよ! ただのクサい匂いじゃねえ、何ヶ月以上も頭洗ってねえ臭いがしてんだよ!」

「そうだ! こいつはゴミだ! クズだ!」
「……ああそう」

口答えする男たちを前に、チエックシャツの青年 健が大剣を抜く。

右手には大剣、左手には盾を持っていた。明らかにその辺のチンピラとは格が違う。

それでも命知らずなチンピラは健に喧嘩を売ろうというのだ。

日夜シエイドと戦い訓練を積んでいるエスパート、暴れるだけしか能のないチンピラとは差は歴然。本気で相手してやるまでもない連中だった。

「ゴミならおじいさんの前にいっぱい落ちてるじゃない。悪臭を放つ腐ったゴミがさ!」

「野郎、フザケやがって!」

「ブツ殺してやる!」

ホームレス狩りのチンピラどもがナイフやバットを手に、罵声を浴びせながら殴りかかってきた。

だが軽くかわし、背後を狙ったの攻撃も盾で巧みに防いだ。これまでに何度もシェイドや悪人と戦って来た健にとって、この程度の手合いは話にならない。

一見危険な凶器も、ただチカラ任せに振り回して暴れているだけ。

「やああっ!!」

横に振られた剣の腹がパーカーの男に命中、腹を押さえて後ずさりしながらパーカー男はダウン。

「なめんじゃねえ!」と、スカジャンの男がボールで殴りかかるも弾かれる。

弾かれた隙に肘打ちを食らい、剣の柄で喉をどつかれ気絶。あまりの痛さに口から血を垂らしていた。

「こ、こいつバケモンか!? ひえ〜っ!」

「待て!」

ダウンジャケットの男がおびえて腰を抜かす。逃げ出そうとする彼にも健は容赦しない。

襟を掴むとそのまま剣で、なでるように斬った。血しぶきが飛んだりはしたが、

誰しも死ぬほどの重傷を負ってはいない。健は相手を殺すというより、懲らしめる気持ちで戦っていたのだから。

「どつする。まだやるのか?」

健が剣を突きつける。これでもし「まだやる」などとほざくようなら、

もう一発キツイのお見舞いしてやるつもりだ。そのくらいしないと、

こいつらは反省しそんでもないからだ。一方でホームレス狩りのギャング達は、

恐怖に引きつった顔で健を見ていた。勝てる気がしない。こいつは桁違いだ、

強さが化け物じみている。むしろ殺されなかったただけ幸運だ。

「も、もうかんべんしてくれエエエー!!!」

一目散にチンピラたちは逃亡。それを見届けると、「ふう」と、健がため息をついた。

襲われて尻餅をついていたおじいさんに「もう大丈夫ですよ」と優しく声をかけ、

腕を持って立たせてやる。「お礼がしたい」と言ってきたが、「そんなのいりません」と即答。

あえて多くは語らず、健はその場を去っていった。

「ただいまー」

「おう、お帰り。今日は遅かったようだが……」

アパートの一室に帰ると、テレビと雑誌を見ていたアルヴィーがリビングにいた。

そんな退屈そうにしている彼女も健が帰ってきたとたんに笑顔になり、

帰ってきた健をあたたかく出迎えた。手洗いとうがいを終わると、アルヴィーに早速今日の帰りにあった出来事を話す。

ホームレス狩りについて、「同じ人間とは思えんな」と、アルヴィーは苦言を呈した。

「ところで夕飯はまだかの」
「もうちよい休憩してからでもいい？」

健は疲れていた。情け容赦のないシェイドに比べれば、あんなチンピラごときは正直屁でもない。

だが、今日は頭が痛くなるくらい難しい事務仕事のあとだった。仕事でフラフラだったのを押してまでチンピラどもを片付けた。それがかえって疲れを増長させたのだ。センチネルズを壊滅に追い込んだとはいえ、

まだまだ未熟で荒削り。上には上がいる。精進しなければ。

「前にも言ったけど、今月ピンチなんだ。あまり贅沢は出来ないよ」「うむ、分かっておる。別に質素なメシでも私がかまわん。卵焼きでも納豆ごはんでも、何でも来い！」
「納豆はイヤ……」

納豆といえば、ネバネバした豆。

これに醤油をつけてかき混ぜたりしてごはんにかけて食べるほか、様々な用途に使える秀逸な食品である。しかしながら評価は千差万別で、

ネバネバが気持ち悪いと嫌うものや、健康にいいから大丈夫、むしろ食べというもの。

見事に意見が二つに別れていた。健は完全に前者で小さい頃から納豆が大嫌いであり、

それも口にしたいくもないほどだという。理由はネバネバが気持ち悪いからと、

あんなゲテモノを食べている場面が想像できないから、である。しばらくすると、健がトレイに肉野菜炒めとインスタントの味噌汁（二人分）を乗せて運んできた。

夕飯のメニューに困ったときはとりあえず、この組み合わせが一番だ。味噌汁のにおいと、

塩コショウの利いた野菜炒めのおいが食欲をそそる。まだ腹が減るならバナナなりみかんなり、

プリンなりを食べればいい。もう十分なら一服してから風呂に入る。風呂から上がってしまえば、そのあとはもう布団に入るだけ。

「すやすや……」

そして、就寝。今夜はぐっすり寝られることだろう。だが、健は眠らなかった。

いつもいたずらを仕掛けてきているアルヴィーに、今度は自分が仕掛けようというのだ。

寝ている間は無防備、はだけた襟元から覗いているおっぱいを揉んでやるうとしていた。

「にひひ」と、少しいやらしく聞こえない程度の音量で笑いながら、アルヴィーに這い寄った。

(よ、よし。あともう少しだ……ひひひ)

性欲をもてあました右手が、彼女の放漫で顔より大きな胸を鷲掴み！

更に、左手でも乳房をつかむ。身体中のアドレナリンがみなぎってきた。

このままアレをやってしまおう。一度やってみたかったことがある。

たった一度でいい、この時しかできないことをぜひともやりたい。

「ぶんだばああああア！……」

興奮のあまり、健は如何ともしがたい奇声を上げながら未知の空間へ、
エロスの極致へと頭から突っ込んだ。というのも、会ったときからずっと挟まれてみたかったのだ。

あの谷間に。自分も『ばふばふ』してもらいたかった、それだけなのだ。

あの時、ばふばふでとどめを刺された緑川をうらやましいとさえ思っていた。だから、この晩にこんなことをした。

そこは気持ちよかった。どんな樂園よりも、どんな極楽浄土よりも。

やらかしてしまった感じが否めないが、至福のひとときだった。

こんな快い思いをしたかったのだ。自分がこんなスケベな性癖を
持ってしまったのは、

幼い頃の些細な出来事がきっかけだった。母に抱かれた際にその
大きな胸に触れて、

快感を味わったからだ。これをきっかけに、自分は巨乳に目覚め
てしまったのだ。今となっては言わずもがなだ。

「ん……」

「あ、やばい」

だが、長くは続かなかった。お楽しみの中で相手が起きてしま
ったのだ。

こればかりはもうどうしようもなく、相手から手痛い反撃を受け
るしかほかにはなかった。

「ふふふ。お主、さてはやりおつたなあ〜？」

「ドキッ」

「よろしい、ならば……しかえし報復だ！」

その晩、駅前のアパートから耳をつんざくほど大きい男の悲鳴が聞こえたという。

EPISODE 47：細々、ぼちぼち

「やつ、たあっ！」

今日はバイトは休み。別に家で一日中ゴロゴロしていても罰は当たらない日だ。

健もそれは同じだった、前までは。だが、今は話が違う。

少しでも強くなるために、日々精進を重ねているのだ。だから今、こうやって公園で素振りをしている。

「はっ、でやああああ！ うおりやああああ！！」

「おう、上手くやっておるようだの。差し入れ置いとくぞ」

「ふーっ。ありがとう、あとで食べるよ。……っっていうか今食べた！ 疲れた！」

なけなしの金をはたいて練習用に買った木刀をポイツとその辺に投げ捨て、

すぐさまアルヴィーがいるベンチへ駆け込む。アルヴィーだけではなく、みゆきも救急箱持参で来ていた。

「なんだ、もうやめたのか。現金なヤツだの」

「こつちは朝からぶっ続けだったんだよ。それと、ほどほどにしかけて言ったのはそっちならっ！」

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

健が冗談混じりにアルヴィーに突っかかり、またも乳を揉んでやるうとする。

相手も冗談だというのは分かっていた。それをみゆきが仲裁し、ひとまず落ち着かせる。

「ねえ、ところぞさ」

「なんだい？」

「健くんっていつもああいう風にして戦ってるの？」

「うん！ まあ、ね」

自慢気に腕を組んで「どうだ！」とでも言いたげに、誇らしく健は笑った。所謂『ドヤ顔』というやつだ。

昔だったら虚勢を張っているようなものだったが、今は違う。しすぎが良くないだけなのであって、自慢してもいいくらいの事なのだ。

「けど、仕事に戦い、それから家事。毎日大変なんだよ……わかる？」

「うーん。そうでもなくない？」

「え？」

「いや、私ってガンガン働きたいタイプなの。健くんと違って戦えないけどね……」

「えらいっ！ お主は将来いいお母さんになれるぞ……」

「マジ？ じゃあお父さんがニートでも安心だね……」

そう調子のいいことをみゆきの前で言っていると、頭を平手打ちで思い切りどつかれた。

それは頭を抱えてうずくまるほど強烈で、健はずっと「痛い、痛い……」と言っていたという。

「どアホが。働かざるもの食うべからず。動かざるものニャンニャンするべからずだ」

「す、すみませんした」

「ニャンニャン……ってなあに？」

「あッ！ えーっと、あーっと、うーっと……」

健は意味を言おうとした寸前で思い直して立ち止まっていた。

ここはストリートにどういう意味か言うべきだろうか。そうするととなると「ニヤンニヤン」という言葉の意味を知ってしまったみゆきの将来が不安になる。

しかし、仮に意味を伏せたり、ごまかしたところで何になるだろうか。

知らないほうがいいことではある。だが、いずれは知ってしまう。でも、教えるわけには。

(こうなりゃヤケクソだ　！)

「ねえ、どついう意味なの？」

「あ、ああ。アレはね。その……猫の鳴き声だよ。にゃーん」

「にゃーん……あつ、そつか。普通そつだよね！ 変なこと聞いてゴメン」

これでいいんだ。よかったんだ、と、健は胸を撫で下ろした。

「良かったじゃないか」と、アルヴィーが健の肩を叩いた。

「ところで差し入れは食わんのか？ あんなに腹を空かせておつたのに」

「あつ、忘れてた！」

「む？ もしやまだ腹が減っていなかったか？ なら、私が食べてしまつぞ」

「ま、待って！ 食べないと死んじゃうよ！！」

「フッフ、冗談だ。ほれ、たーんと食われよ」

アルヴィーから手渡された差し入れ。かわいらしいピンク色のラシチクロスを解いてみると、

中には ほどよいサイズの弁当箱。しかも2重構造だ。上も下も中身が気になって仕方がない。

「こ、これは……！ みゆきの手作り弁当！」

「驚くのはまだ早いわ。さあ、遠慮せずに開けてみて！」

期待を胸に乗せてふたを開けてみれば、シャケ味の混ぜ込みごはんの上に刻み海苔が『ガンバレ！』という形に散りばめられていた。二段目の箱には、肉から野菜、魚介類までおかずがありっただけ入っていた。朝食を抜いてまでトレーニングに励んだ健にとっては、嬉しいことこの上ないご褒美だ。

目を見張るほど豪華な食事にキラキラと瞳を輝かせ、うっかりヨダレを垂らす。そして、声高々に「いただきます！」と誠意と感謝の気持ちを込めて叫んだ。

同梱されていた割り箸をペキツときれいに割ると早速手を付け、ごはんとおかずを交互にがつつく。

「ね、ねえ。お味は……いかが……？」

「うむッ！ ふりかけを一生懸命に混ぜ込んだごはん、トリの唐揚げのウマさ。さっぱりしたブロッコリーににんじん。小さく切られた塩の効いたシャケ、そしてお約束のたこさんウインナー……絶品だ……！」

「ありがとうっ！ そう言ってもらえてすっごく嬉しいわ！」

「よかったの。作った方も食べた方も大満足だ。私も鼻が高いぞ、健！」

噴水が見える正午の公園でのランチタイム。楽しげに盛り上がる3人の男女。そこは笑顔で溢れかえっていた。男の方は今にも歌って踊りだしそうだ。空に輝く喜色満面の太陽も、また一段と地表を明るく照らしていた。

そんな微笑ましい風景を、路傍からひっそりと見つめているものがいた。その者は移動屋台と思しき車をたずさえて、屋台の前で手配書のようなものを手に持っていた。

「アイツか」

屋台の前に佇む男は、青髪と水色の瞳にそこそこ整った顔立ちをしていた。

頭にはねじり鉢巻を巻いており、黒いダボダボのシャツを着ていた。まだ若いながら、

たこ焼き屋か何かを営んでいるような雰囲気だ。写真の男と公園で素振りをしていた男が同一人物かどうかを、照らし合わせるように向こうを見ていた。

「なんや、あんまし強そうやないやんけ。こりゃあ、思ったより歯応えなさそうやわア」

ため息混じりに屋台の青年が呟く。表情もどこか辟易としていてとても残念そうだ。客もなかなか来ないようで、そのうち退屈そうに空を見上げて物思いに耽った。

「あの〜……」

空を仰ぐように見上げていると、カジュアルな服装に身を包んだ若い女が声をかけてきた。ひと目で今時の女性だと分かるようなフアッシュョンだ。

「へ？ か、かんにん！ お姉ちゃん、たこ焼き欲しいんやな。今から準備するさかい、ちょーっただけ待っというてや！」

突然の来客に男は大慌てだ。急いでたこ焼きを焼く準備に取り掛かった。紅しょうがにネギ、たこ焼きの素となるクリーム色の液体。どれもおいしく焼くには欠かせない材料だ。

たこ焼き器のくぼみに豪快に、時に慎重に流し込んでいきしばらく様子を見る。

焼き具合を見て行けそうなら、ひっくり返す。これを繰り返し、焼き上がったらパックに入れてソースやマヨネーズをかけ、ネギやかつおぶしをパラパラとふりかける。これで完成だ。関西における食の定番であるこのたこ焼きだが、なんと大阪では一家に一台たこ焼き器があるそうだ。

「いっちょ上がりい〜！」

「わーい！ ありがとう！」

「お代は200円や。わしのたこ焼き、ほつぺた落ちるぐらいウマいで！」

「ホントだ！ おいしいー！」

「せやるオ！？ 今度来たら家族の分も買ったってや！」

「ありがと。また来るねー！」

「まいどおおきに！」

その後、雪だるま式に客足は増えていった。これで屋台は大繁盛。じゃんじゃんぱりぱり、銭が受け皿に溜まっていく。たこ焼きは当然バカ売れし、あまりの美味さに誰もが舌鼓を売った。売るほうも売られたほうも大満足、これでよし。

「いやあ、ドえらい儲けさせてもらいましたわ。これで漫画何冊か買えるでえ」

その晩、屋台を閉めた男が売上げを数えていた。合計で2万円、それなりに売れていた。彼自身は売れっ子かどうかと言われたらそ

うではなく、まだまだ修行中の身。

とはいえ、これでも頑張っている方ではある。酷いときは5000円を下回っていたのだから。

父から家業を継ぐ形で始めたこのたこ焼き屋だが、これだけでは食っていけないのも事実。

ともかくにも金が足りない。無駄な買い物はせず、消費を最小限に抑えるなどして資金繰りには気を遣っているつもりだが、それでもついつい金を使ってしまう。

しかしいくら待っていても、今日はもう客は来そうにない。更にものすごい眠気が襲ってきた、寝たいときは寝る主義である彼は睡眠には一切抗わない。故にそのまま就寝するのだ。風呂はまた明日の朝、銭湯にでも行けばいい。最悪シャワーを浴びるだけでも十分だ。

「もうええわ、寝たる。寝る子は育つんやあ〜……」

戸締まりを済ませると、運転席で毛布をくるまってそのまま就寝。今日はもう、これにて休業だ。

また明日にでも売りさばこう。明日は明日の風が吹く、その時に売ればいいのだ。すやすやと寝息を立て、いざ、深い眠りへ。何が起きるか分からない夢の世界へ。

EPISODE 48：雷光のリスタート

翌朝、午前8時30分、警視庁捜査一課。

警察官の朝は早く、早朝から既に何人かオフィスに入っていた。

その中でもとくに目を引いたのは、銀縁メガネに紺色のダブルス
ーツを着こなした知的な青年 村上だった。

「あゝあ、ついにこの日が来てしまったか……」

息混じりに村上がそう呟いた。神経質そうに腕時計を何度も見て
は、

オフィスの出入口の方向を見返していた。その意図は分からない
が、
少なくとも誰かを待っているようには見えなかった。

「警部補、おはようございますっ!!」

「うわっ!!」

そんな村上のうしろから、たいへん元気の良い黄色い声が聞こえ
た。

声の主は、少し緑がかった黒髪のショートヘアに赤い瞳の婦警
だった。

それなりにふくよかな胸を除けば、可もなく不可もない標準的な
スタイルに、

ミニスカートの警察の制服がよく似合っていた。

「な、なんだ宍戸か……驚かさないでくれよ」

「あわわっ! も、申し訳ありませんでした!」

良かれと思い元気にあいさつをしたもののかえって村上を驚かせ
てしまった快活な婦警が、慌てて謝った。

彼女の名は、穴戸小梅^{しほ}。彼女はかの宮本武蔵と戦ったとされ
ている、

鎖鎌を得物としていた盗賊・穴戸梅軒^{しほけん}の血を引いているらしい。

だがあくまでそれは本人の弁であり、実際に彼の子孫なのかどう
かは不明である。というのも、

祖先に当たる梅軒自体が小説内に登場する架空の人物であり、そ
もそも架空の人物なら実在などしていかないはずなのだ。

なのに彼女は、自分が『梅軒の子孫』であることを否定せず、そ
れどころか頑^{かたく}なに強調しているという。謎は深まる一方であり、そ
れ故か警察内でも彼女のことはたびたび話題に挙げられていて、同
僚の間ではしばしば彼女に関する談義も行われているほどだ。

そんなやや電波ゆんゆんな彼女だが、意外や意外、生い立ち自体
は到って普通で何も問題はないようだ。

ちなみに盗賊の子孫である彼女が何故警察、それも捜査一課に入
ったのかは不明である。

「ところで警部補。？アノ人？が帰ってくるって本当ですか？」

「？アノ人？？ 帰ってくる？ 誰のことだい穴戸ちゃん？」

「ヤダなく、高給取りのあの人ですよ！ 警部補ならご存知のはず
！」

「……ああ、そういうことか！」

今や、捜査一課をはじめ警視庁内の全課が『アノ人』の話題で持
ちきりだった。

何でもその人物は誰もが嫉妬し憧れたほどの高給取りで、その上
犯人の検挙率が高く、

バリバリの硬派な肉体派でしかも高身長で美男子だったらしい。

「おはよーございますッ！ 皆様、お久しぶりですッ」

そしてその美男子が、満を持してオフィスに入って来た。あいさつを一通りして回ると、

村上と穴戸がいる辺りへと歩き出す。

「よお、帰ってきたぜ！」

「ほら、主役の登場ですよ！」

「お帰り、元高給取りの不破アアア！ 復職おめでとおおおお
お！！！」

知的な印象を与えていたはずの村上が、どういうわけか凄まじい形相で不破へ絡んでいった。

一瞬暴言を吐いたかと思えば、すぐに席へ戻って何事もなかったかのように仕事を始める。

これには不破も穴戸も、少しばかり驚いていた。

「ず、ずいぶん手荒い歓迎だな……ところで君は？」

「ああ、そっいや君と彼女が会うのは今日がはじめてだったな……。ほら、コイツにあいさつしてあげて」

不破が穴戸へそう言った。不破は彼女とは面識がない故、必然的な反応だ。

村上に催促された彼女は前に出ると、背筋をピンと正して職場に於ける基本の姿勢をとり、

「村上警部補の部下の穴戸小梅です！ よろしく願います！」

「本日付けで捜査一課に復職した不破だ。よろしく頼む」

お互いあいさつを交わし、穴戸が再び村上の傍らへつく。

村上と穴戸へのあいさつも終わったので、2年前に自分の席があった場所へ行く。

ダークグリーンのジャケットを脱いでカッターシャツ姿になり荷物をいったん机に置こうとしたが、そこへ村上が来て不破を止めた。

「悪いが君の席はそこじゃない」

「え？ どういうことだ？」

「それはこれから説明しよう。穴戸、一緒に来てくれ」「はい！」

そこは自分の席ではなくなっていた。

脱いだ上着と荷物を背負って村上の引率のもと、廊下に向かう。

エレベーターに乗り込むと、村上が地下フロアを指定。

そのあと、ボタンを無闇やたらに押し出した。

「お前何やってんだ！ そんなメチャクチャに入力していいわけ…」

「まあ見ててくれ」

苛立つて注意しようとしたが、目前で穴戸に止められた。

「大丈夫です、信じてください」と言いたげな視線と笑顔を向けられ、憤りをなんとか押さえ込む。

そうしている間にもエレベーターはどんどん下へ下がっていく。

やがてアナウンスが入り、地下の終点へと辿り着いた。ハイテクな扉を抜けると、

そこは無数のモニターが取り付けられたモニタールームだった。

オペレーターがせわしそくにキーボードを打ったり、真摯にモニターと睨めっこをしたりしていた。

「す、すげえ。なんだこれは？」

「東京二十三区に設置された1万台のカメラ……それが捕らえた映像はすべて、このモニタールームに映し出されるんだ。だからここにいれば、いつでも東京中の様子が見られるってわけなのさ。情報収集と容疑者の監視・発見には欠かせないね」

「なるほど……ってことは、シャワールームとかも覗けるんだよね？」

「確かに出来るけどのぞきはいけないなあ。そんなこと言うぐらいだったら、君、警察辞めたら？」

「うっ……」

悔しいが言い返す言葉が出ない。冗談で場を盛り上げようとしたら冷たい皮肉で返され、

後輩の穴戸からはあからさまに嫌そうな目つきで見られ、とにかくいいことがなかった。

よかれと思いやったことが裏目に出ってしまったのだ。

なんとも不運な結果を招いてしまったものである。

後悔する間もなく引率され、今度はモニタールームから更に奥の部屋へと案内された。

近未来的な設備が施された広い部屋の中には、中央に会議用のテーブルと椅子がきちんと並べられていた。

どうやらここは、会議室か何かのようだ。3人とも席に座った事を確認すると、村上が

「ようこそ、シェイド対策課本部へ！」

「へえ、そういうことか。今度のオレの職場はオフィスじゃなくてここってか……」

遠い目をしながら不破がそう呟いた。

「やだなあ。そもそも君、どつちかといえば小難しい事務仕事より
肉体労働のほうが得意だろう？」

「まあ、一応な」

「それに君は、シェイドとの戦いを幾度となく重ねてきたエスパー
じゃないか。ピッタリの仕事だと思うよ？」

村上が言つとおり、彼はどちらかといえば肉体労働のほうが得意
だ。

それに極端に苦手というわけではないものの、デスクワークはあ
まり得意な方ではない。

だから村上是、不破を対策本部へ引き入れてシェイド討伐を依頼
したので。

もともと厭味いやみ もとい、自分に正直で思ったことを口に出す故
に、

余計な事をつい口走つてしまう村上だが、何だかんだで不破との
付き合いは長く彼の得意・不得意は分かっていた。

つまりは彼なりに不破を信頼しているからこの仕事を頼んだ、と
いうことだ。

「それだけじゃなく、この対策本部は機動隊みたいに暴徒鎮圧も担
当しているんだ。手間かけるけど、そつちもよろしく頼むよ」

「あいよ。とりあえず期待に応えられるようにはする」

「そう言っていたらけると、あたし達も嬉しいです！ すっごい助
かります！！」

この張り詰めた空気を緩和するかのよう、穴戸がにつこりと笑
った。

「ウチは武器や装備は充実してるんだけど人手不足だからね、不破
君みたいな一騎当千クラスの強豪が来ればそれだけでも大助かりさ」

「なあ、その武器って誰が作ったんだ？」

「よくぞ聞いてくれた。穴戸ちゃん、こいつに紹介してやって！」
「はいっ！」

村上から指示を受けた穴戸がいったん外へ出る。

すぐに彼女は藤色のワンピースの上に白衣を着た女性を連れて戻ってきた。

「なっ……！？ この人は……！」

見覚えがあった。明らかに一度会ったことのある人物だ。

確か研究所も兼ねた立派な家を持っていて、東條と面識のある人物だったはず。

自分も何回か会っていて世話になっているが、東條の方がよく知っているだろう。

「紹介しよう。我々、対シエイド部隊を何かと技術面でサポートを行ってくれている、IQ160の天才でおまけに美人な……白峯博士だアアアッ……！」

やっぱりか！ と、心の中で不破が呟いた。そして、ひとり悶絶した。

「こいつちでもよろしく〜」

EPISODE 49：倒せ、カラーギャング

それから2日が経った。

「えー、そんな……。本当にそんなことが？」

「それがホントの話なのよ、困ったもんよねえ……」

昼休み。健が呑気にネットサーフィンをしている傍ら、ジエシーと浅田が何やら世間話をしていた。ふと目を向けてみるとその雰囲気と表情から、あまりいい話題ではなさそうなのが窺えた。

「すみません、何の話をしてたんでしょうか？」

「最近この辺でギャングがうるついでるんだってさ。それもヤバイことばかりしてる連中らしいよー……」

「ぎゃ、ギャング？　なんでまた物騒な……」

「強盗、殺人未遂、老人虐待、性的暴行、ホームレス狩りにおやじ狩り……酷いことばかりですよ。同じ人間と思えないわ」

「確かにそれは許しがたい！　でもそこまでやらかしてるなら、警察も黙っちゃいけないはずなんです……」

健がその疑問を口にすると、ジエシーも浅田も顔を曇らせた。もしや？

「それが、そのギャングのリーダーがエスパーらしくて警察も下手に動けないそうなの」

「エスパー！？」

「わっ！？」

信じられなかった。何故人を守るべきエスパーが、ギャングなど

率いて人々に暴力を振るったり略奪行為を行ったりするのか。浪岡と同じようなヤツが他にもいたということか？

黙っていられない、そんなこと許されるはずがない。懲らしめなければ。そう言おうと思ったが、自分がエスパーである事は浅田達にはナイショだ。絶対に言えない。くすぶる怒りを押さえて、心の中で呟くだけにした。

「ビックリした〜…突然大声上げてましたけど、どうしたの？」

「い、いや。エスパーって僕ら一般市民より絶対強いですから、そりゃあ警察の人たちも迂闊に手が出せませんよね…は、ははは」「もう、東條くんったら。脅かさないでよー」

眉毛を？ハ？の字にして浅田が笑い、ポンと健の肩を叩いた。ジエシーもいつもの優しい笑顔に戻り、暖かく微笑んでいた。

「そんなわけで帰りは危ないですから、十分に気をつけて帰ってくださいね」

「はい！」

ジエシーから催促を受けた二人が元気よくそう答えた。

彼女らには隠しているが、健はエスパーである程度経験も積んでいるのでまず負ける事はない。

だが、浅田やジエシー、それにみはるらは本当に非力な一般人。彼女らにとってシエイドと同じくらい、街のチンピラやギャングは危険極まりない存在だ。もし浅田達が襲われていたらどうすべきか、健はもう分かっていた。その際は正体がバレてももう仕方がない。彼女たちも自分の顔や特徴はよく知っている。故に誤魔化すつもりもない。

「さて、ギャングはとりあえずおいときましょ。そーいや最近、話

題になつてゐるたこ焼き屋さんがあるらしいよ。みんな知つてる？」
「市村さんでしたっけ。あの人のたこ焼きおいしいですよね！ あたし、ほつぺた落ちちゃいました」

おしゃべり好きの浅田がすかさず新しい話題を振つた。今話題のたこ焼き屋のことだ。

その話にみはるが乗つかつてきた、どうやらその？市村？のたこ焼きを食べたことがあるらしい。

「そう、市村さん！ あの男前だし料理も美味しいし、きつとモテるタイプだと思うよー」

「私も何回か行ったことがありますよ。本当においしいですよね」

「そのお店ってどこにありますか？ まだそこで食べたことなくて」

「あら、東條さんもたこ焼きがお好きなんですか？ 私と気が合いそうですね」

「えへへ　実はそうなんです」

このとき健は、ジェシーから気があいそうと言われた喜びのあまじりやましい事を妄想していた。

口を開けたジェシーにたこ焼きを運んだり、その逆でたこ焼きを口の中へ運んできてもらったり。そんな至福の光景を思い浮かべて、思わずにやけてしまった。

「あの、東條さん？」

「わっ！？　な、何でもないです」

「今やらしいこと考えてたでしょ？　このイケズう！」

「ち、違います！」

浅田にからかわれた健が否定しながら、顔を真っ赤に染める。

まるでいじられ役だが、かくいう本人はまんざらでもないようだ。

「ところでそのお店、どこにあるんでしょうか？」

「それがさ、市村さんって移動屋台なのよねえ。日本各地回ってるらしいから、もしかしたら会えないかも」

「えー……」

「でも、当分は京都で営業するそうだから大丈夫ですよ。今はアサガオ公園前でやってるみたいですから、一度行ってみてください」

アサガオ公園とは 健が特訓をしたり、以前不破と揉めて乱闘をしたりした場所である。

大きな噴水を中心とした広めの公園で、坂道の途中に建てられている。自然が多く景色もきれいなため、デートスポットや子どもたちの遊び場にはもってこいの場所だ。

「そうだったんですか。よかったです……また今度行ってみます！」

「是非寄ってみてくださいね、本当においしいですから うふふ」

その晩 。 以前健に懲らしめられたホームレス狩りの不良どもが、

仲間をゾロゾロと引き連れて性懲りもなく悪さを働いていた。今度は若い女性を標的に、バッグや金品を奪おうとしていた。

「ねえちゃんよー、そのバッグくれよ。そうすりゃ何もしない

「へげええええええッ」

まず一人を切り上げ、そのままもう一人めがけて吹き飛ばす。これで2人。

「うおつきえええ」

次に寄ってきた2人を切り払い、気絶させる。これで4人。

「なめんじゃねええええ!!」

残った3人のうち一人がナイフを突き出すが、健はそれを首を動かすだけでかわした。

ナイフの男の腹を蹴飛ばし、残った二人を料理しにかかる。

「はあああッ!」

最後に回転斬りで残った二人を蹴散らし、これにて終局。女性も無事に助かった。

「ありがとうございます……」

「もう大丈夫です。さ、早く逃げて」

女性を逃がし、倒れた不良どもの一人に近寄る。

「これでもう懲りただろ、もう悪さしないな」

「う、うるせえ! 説教垂れてんじゃねーぞ! お前なんかリーダーにかかれば一発だ!」

「リーダーだと……? そいつはどこにいるんだ!」

「し、知るかよ!」

「意地でも言わないつもりだな?!」

そう言つて不良は口を割ろうとしない。出来ることならあまりやりたくないが、首根っこをつかんで脅してでも聞き出そうとする。

「ひいひい! こ、この先の路地を曲がったところに昔使われてたバーがある。そ、その辺が俺らのアジトだ! リーダーもそこにいる! だ、だが、オメーが行ったところでリーダーにやかなわねえぜ……へ、へへへっ!」

「この先の路地にあるバーだな?」

「あ、ああ……ば、場所言つたんだから離してくれよ!」

もがく不良を離してやると、再三悪事を働かないように促して走り出す。健に成敗されたギャングたちは皆すっかり腰を抜かしておびえており、健が走り出した頃には一目散に逃げ出していた。

そして、健が今目指しているのは彼らの溜まり場となっている路地と、そこにあるバーの跡地だ。なるほど、ギャングの溜まり場にはちょうど良さそうだな と、健は心の中で呟いていた。

やがてその溜まり場と思しき路地へと辿り着くと、バーの入口にいかつい風貌の男が立っていた。さっき倒したギャングは全員緑色の服装で、この見張りと思われる男も緑色のジャケツトを着ていた。間違いない、さっきギャングの一人が言っていたことが本当ならここが連中がアジトにしているバーだ。まず男に近寄り、通じそうもないが一先ず話し合いをもちかけてみる。

「すみません、ここのリーダーさんに用があるんですけど……」

「なんだアンタは? ここは関係者以外立ち入り禁止だ。あっち行け、シッシー!」

「僕、路上であなたの仲間の人が見すばらしいホームレスの人たち

を襲ってるのを見て、かつこいいな！って思つて。それで僕もああいうことしてみたいなあつて思つたんです。どうしてもリーダーさんに会つて仲間に入れてもらいたいです。そこをなんとか！」

「ダメなもんはダメなの！ さつさとおうちに帰つてママのおっぱいでも吸いな！」

「えー、そんなんですか……じゃあ、仕方ないですね」

残念そうな顔をしてその場を立ち去ろうとする。

無論、これは演技である。交渉しても通じなかった、ならば仕方がない。こうなれば力づくだ。

強行突破するしか他はない。立ち去ると見せかけ、剣と盾を抜いて携^{たずさ}える。

見張りの大男が一瞬驚いたが、程なくして健は剣をまつすぐに構えて突進。男を巻き添えに扉をそのまま突き破り、強引にバーの中へと乱入。

「なあ、パイオツ揉ませてくれよオ」

「い、イヤ……やめて、触らないで！」

「いいじゃねえか、揉んでも減るもんじゃねえだろ？ ウへへへ……」

一方、バーの中では表で何が起きているかなど露知らず、悪党どもが酒に溺れては踊り狂うわ、誘拐した女が嫌がつているのにはべらせては無理矢理マッサージするわとバカ騒ぎしていた。

女性にセクハラして悦に浸っていたのは、鎌を片手に持ち、黄色っぽい茶髪に染めた髪に、緑色のジャケットをはじめとしたカジユアルな服装に身を包んだ男だった。三白眼で目つきが非常に悪く、ひとめでワルだと分かるような出で立ちだった。恐らく景気がいいので調子づいているのだろう。これから何が起きようかも知らずに飲んだくれている辺り、実に馬鹿馬鹿しく哀れである。

「リーダー、おいらにも触らせてくださいよオ」

「あ、ア？ テメー、今なんつった」

「え？ いや、おいらもそのネーチャン触りたいって……」

「生意気いつてんじゃねえぞ」

不機嫌そうにせがんで来た子分の右手首をつかむと、鎌で勢いよく中指までの3本を切り落とした。

返り血が少し、鎌瀬と呼ばれた男の頬に付着した。

「今日は機嫌がいいんだ、指2・3本で許してやらあ」

指を切られた子分は、恐怖にわななき逃走した。その隣にいた女もまた、この男の残虐さに恐怖していた。当のリーダーと呼ばれた男は首を鳴らし、不敵に笑っている。

そして、彼らにとつてはまさに予想外だった事態が起きた。見張りをさせていた男ごと壁をぶち破って、大剣と盾を構えた別の男が現れたのだ。どんちゃん騒ぎのお祭り騒ぎから一転、その場の全員が突然現れた乱入者を相手に慌てふためき、騒ぎ立てることとなった。

「な、なんだてめえは！？」

「あんだ達を潰しに来た……」

「ハア？ おめえバカだろ！！」

両脇によそで捕まえた女を侍らせていたリーダー格らしき男が、己の身の程も知らずに剣を持った男に罵声を浴びせる。

「ここ、俺らのテリトリーなんだけど？ 勝手に土足で上がりこんでいいと思ってるの？」

「そんなの知るか。その女の人を離せ！」

「ヤだね！ こいつはたった今から俺の女だ。誰にもわたさねえよ！」

バカの一つ覚えか、リーダーがあっかんべーをして挑発。しかし健は挑発に乗らず、高く跳躍するとリーダー格の男の懐へと潜り込む。抵抗する間もなく男は吹き飛ばされ、壁へ強く叩きつけられた。

「あ、あの……」

「もう大丈夫です！ さ、早く」

女性の全身を両腕を使って抱え上げ、再び跳躍して敵のと真ん中から速やかに退避。俗に言う？お姫様抱っこ？というヤツだ。何せよ見栄えがよくやる方もその気がなくともカツコつけられ、優越感に浸れる。

「ここ、危ないです。速く逃げて」

先程と同じようにまず女性を逃がし、それからギャングたちに刃を向ける。

まだ外に連中の仲間がうろついているかもしれないが、もしそうならさっさとこいつらを片付けて助けに行くまでのこと。こんな場所に長居は無用、ただでさえ忙しいのにギャングたちを倒すのに時間をかけてはいられない。

「ちきしょう、ナメた真似しやがって……」

叩きつけられてのびていたリーダーの男が立ち上がった。まだ痛みらしく、頭に手を当てていた。怨めしそうに歯ぎしりし、仕舞っていた鎌を取って

「俺たち『グリーンスネーク』に逆らったらどうなるか、この鎌瀬かませ様が思い知らせてやる！ 殺っちまえええええええッ！！！」

怒り狂うリーダーのかけ声に呼応するかのように、手下のギャングたちもやかましいことこの上ない叫び声を上げた。

EPISODE 50：廃墟バーの乱闘

数十人ものギャングが大勢で押し寄せてきた。

自分と同じエスパーやシェイドに比べれば烏合の衆のようなものだが、

さすがにこれだけの数だと圧倒されてしまいそうだ。そして、あつという間に健の周りはギャングたちに取り囲まれてしまった。

「へっへっへ。覚悟しな！」

ギャングのひとりが得意げな顔でそう言った。個々の力は大したことないくせに、

あろうことが己より遥かに強いものを相手に、周囲を取り囲んだ程度で勝った気でいた。

ここまで来ると、もはや呆れを通り越して乾いた笑いしか出ない。

「……ねえ、こついう卑怯なことして何が楽しいの？ 失業者やホームレスばかり襲って、何がおもしろいの？ 自分達はそれで良いって思ってるの……？」

「ごちゃごちゃうるせー！！」

正直、悲しかった。嘆かわしかった。

表に出さずとも、これが同じ人間がやることなのか と、
彼らの非道ぶりに心を痛め嘆いていた。

そんな彼の気持ちや痛み、その優しさゆえの辛さなど知らず、金属バットを持ったギャングが健へ飛びかかる。

「そんなの 良くないに決まってるッ！！」

剣を振りギャングを軽く吹き飛ばす。

いきり立って他のギャングも襲いかかるがもはや彼の相手ではなく、ことごとく蹴散らされてゆく。

最終的に大きく回転しながら斬りつけ、圧倒的な強さにおびえていた連中を一掃した。

残るはリーダーの鎌瀬だけ、あとはこいつを倒せばすべて終わる。
無言で唇を噛みしめながら、キツと鎌瀬を睨み付けた。

「けつ、役に立たねえ連中だ。なにをチンタラやってんだ……」

「子分たちは皆片付けた。あとはアンタだけだ。どうするの、降参するなら今のうちだよ」

「何だよ何だよ？ このおれに偉そうなクチ聞きやがって。ブツ殺されてえか!!」

口答えした鎌瀬がその手に持った鎌で健へ斬りかかる。

当たる寸前でかけられた鎌をすばやくかわし、飛んできた追撃も盾で弾いた。

「死ねやゴルアああ!!」

鎌瀬が大きく鎌でなぎはらうと、鋭い真空の刃が一直線に飛ばされた。

回避するも腕をかすり出血。間一髪だった、もし直撃していれば危なかったかもしれない。

「デヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！ どうだあ！ 俺様の鎌かましたちの切れ味は!!」

下劣な笑い声を上げ、健へゆつくりと近寄っていく。

もし彼の思惑通りに話が進むなら、健は鎌瀬に嘲笑されながらそのまま八つ裂きにされて一生を終えるだろう。

これから人生を謳歌することもなく、呆気ない最期を遂げるだろう。

あくまでこのあとが鎌瀬の思い通りになるのなら、の話だが。

「おい、なんか言えよ！」

「……ふんっ！」

だが、鎌瀬の思い通りになどならなかった。

幸いにも健は、大してダメージを負っていなかったのだ。

剣の柄で鎌瀬の腹を突き飛ばし、そのまま跳躍しながらの斬撃を浴びせた。

地面に叩きつけられた鎌瀬が、それまでホームレスやか弱い人々に振るってきた暴力を返されたかのように苦悶の表情を浮かべ、情けないうめき声を上げていた。

彼から見て、ここまで自分を追い詰めた健はさながら暴虐の限りを尽くす悪鬼のように思えた。

自分が暴力を振りかざしてきたことなど棚に上げて、すっかり腰を抜かしていたのだ。

「な、何なんだおめえは……！？」

「ただの市役所勤めのアルバイトさ。それ以上でもそれ以下でもない」

「テメーふざけんなよ。こんなことしてただで済むと……」

憤慨しながら鎌を手にして再び立ち上がり、

「思ってんじゃねえええええええええええエエエ！！！」

全力で鎌を振り下ろす、もはやヤケクソだった。そうしてでも目の前の自称・バイトの男には通じず、終いには発狂しメチャクチャに鎌を振り回す。もちろん通じず、すべて盾に弾き返されていた。

もはや、ここまで来れば負けは確実。奴の腕にかすり傷を作ったのが精一杯だった。

「な、なん……だと……？」

健ももう我慢が出来なくなっていた。やり場のない怒りが抑えきれなくなり、

その怒りは放出された。氷のオーブを装填し、その有り余ったパワーを氷の剣へと乗せていく。

「い、いったい何がどうなってんだ？ こ、氷の剣？ そ、そうか。あいつは俺と同じエスパー……！」

ようやく気が付いた。そうでなければ、奴が自分を窮地に陥れることなどまず出来ないからだ。

ただ、気付くのが遅すぎた。既に鎌瀬の体は、健の左手から放たれた凍てつく冷気によって凍り付いていたのだ。

一切の身動きがとれない、氷の彫像に。

「うおおおおお ツー!!」

鎌瀬はもう、動かなかった。動けなかった。

憤怒する健によって粉碎され、白目をむき、苦痛を訴えて叫ぶように口を開いたやつれた表情となってその場に昏倒した。

「はあ……はあ……」

怒りが静まると、喘ぎながらその場にうなだれた。爆発した怒りの感情が抑えられず、

それが絶大なパワーとなつてあふれでた。その反動による疲労が襲つてきて、体から魂が抜けるように地面へ倒れ込んだのだ。

「まだ脈がある。よかった、死んでない……」

鎌瀬やギャングの脈を計り、まだ生きていることを確認すると、よかった、殺すまでは到っていないかった。と、安堵の息をついた。

外を出てこの路地を去ろうとしたが直後、場の空気を濁すかのように、望んでもいない拍手が送られた。

「お見事、お見事。やりまんなあ！ 流石はセンチネルズを壊滅させた男やで。東條は〜ん！」

拍手を送った男が路地裏の暗闇からひっそりと姿を現した。

黒い革ジャンの下に白いシャツ、ベージュの長ズボンを穿き、右肩に大型の銃のような火器を担いだ水色の髪のおちゃらけた男だ。

流暢に関西弁を喋り陽気に振る舞っていたが、その言葉の裏には粗野な素性ととてつもない凶暴性が潜んでいた。

「なんで僕の名前を知ってるんですか？」

「なんでも何もあらへん。あんた、ワシらエスパーの間じゃ有名人やで」

「え……？ どういうことですか」

「それにあの東條明雄（あづま けいゆう）の息子ゆうたら、尚更や！ そーゆー人が有名にならへんわけがないんや、東條……えーっと」

自分の名を言おうとして詰まったのだろうか？
流暢に喋っていた関西弁の男が、急に頭を使って考え事をはじめた。

「なんて読むんや？ 読み方分からへんねん、えーと。せや、確かあんたは……ケンちゃん！」

「ケンじゃない、健たけるだ！ ……なんで父の名前まで知ってるんですか？」

「そんなんいちち聞くなや、まどろっこしいやつちなあ〜！」

ひよつとすればわざと名前を間違えたのかも知れないが、かといって名前を間違えられたまま覚えてもらうのもそれはそれで嫌なものだ。

反射的に訂正するよう迫り、同時になぜ父親の名を知っているのかも聞き出す。

しかし、銃の男は教えてくれそうにない。

「要するにお前さんはハリーポッター並にすごいヤツで、オトーチヤンはそのハリーポッターのお父ちゃんみたいにエライ人やったつちゅーことや」

「あー、そう来たか。分かりやすいなあ」

「せやる？」

何を思ったか、ものたとえに堂々と稲妻のような傷を持った魔法使いの少年の名を口にした。

「どつやら彼は冗談好きらしい。」

「……せやけどなあ」

「二ヤリ、と銃の男が笑った。

口調もそれまでおちゃらけたものと違い、冷静沈着ながら凶暴性を秘めたものとなっていた。

「有名なんはあんたとあんたの親父だけやない」

「えっ」

戸惑う健をよそにそう言いながら担いでいた銃を下ろし、弾を装填。銃口を健へと向けた。

「あんたも聞いたことくらいあるやろ？ 『浪速なにわの銃狂い』って呼ばれとるエスパーの名前をなあ」

恐らく、いやどう考えてもここはシリアスな場面。

率直に言えば相手はショックを受けるだろうし、かといって首を横に振るわけにもいかない。

空気を読むべきなのだろうが、でも、黙っているのがもどかしくなってきた。

「ここは素直に白状してしまおう。」

「すみませーん、実は今言ってもらうまで知りませんでした」

『がーん』と、銃の男が目を丸くした。ガツクリして銃も下ろした。

「なんやねんソレ！ そーゆーことは先に言ってくれや！ ……」と

にかく！ ワシは地元じゃ『浪速の銃狂い』呼ばれて有名なんや」

「ふむふむ」

「せやけど、飽くまで地元だけの話や。こっちじゃマイナーもマイナー、南京虫くらい地味らしいんよ」

「まーた微妙な例え方を……」

どうやらこの男は地元では有名なエスパーだが、京都ではあまり有名ではないらしい。

そのことで延々と愚痴をこぼし、健に半ば無理矢理聞かせては呆れさせていた。

悲しいかな、ほとほと呆れがついたか健は心の中では同情していたものの、表には乾いた笑いしか出さなかった。

「……そういうわけや、期待の新星であるあんたを倒して名を上げる！」

愚痴がやっと終わったかと思えば男は再び銃を携え、銃口を健へ突き付ける。

姿を見るだけですさまじい殺気が伝わる。今度は本当に殺す気のようにだ。

「勝負や、東條はん！」

EPISODE 51：浪速（ナニワ）の銃狂い

「……受けて立ちます！」

大剣と盾を再度構え、申し込まれた決闘に臨む。お前に勝つて名を上げる　と、

あの銃使いは言っていたが、何故だろう。ただ単に名を上げたいだけで自分に戦いを挑んだようには見えなかった。純粹に戦いを楽しみたいのか、はたまた正々堂々とした勝負がしたかっただけなのか。そんな風にも見えた。

「トロいトロい！」

転がりながら移動する、姿勢はそのままに地面をスライドしながら高速で動くなど、

人間業とは思えない動きで縦横無尽にすばやく駆け回りながら、銃使いが挑発した。

不破ほどではないものの、かなりの速さだった。目が追いつかない。

「おわっ！　あぶねー……」

向けられた銃口からエネルギー弾が飛ぶ。転んで切り抜けたが、その背後で小さく爆発した。

なかなか威力がありそうだ。もしまともに受けていたら、これだけでもかなりの深手になっていただろう。

「なに動いとんねん！」

即興だが作戦を立てた。相手の武器は銃だ、撃つていればいつかは弾切れを起こす。

そうなれば相手は自ずと弾を補充するはず。だから撃たせるだけ撃たせておいて、

リロードしたところを狙って攻撃すればいい。もし弾が無尽蔵だつたらこの作戦は瞬く間に意味がなくなるが、その時はその時だ。何とかするしか他はない。

「うらうら！ ブツ飛べや！」

連射も連射、銃使いが超スピードで銃を連射する。

健は盾でそれを防ぐ、あるいはかわすなどして何とかやり過ごしていた。スピードでは勝てない。

だが、パワーとテクニクでなら勝てなくとも互角にまでは持ち込めそうだ。騒々しくしながら銃を乱射しているものの、この男はそのぐらい強い。

「どないした、いつになったら俺に手エ出すんや？ まさか、出方を伺つとるんとちやうやるな……」

銃使いが乱射を止めた。まさか、こちらの狙いに気付いたのか？ そんな口ぶりでこちらを睨んでいた。

「ま、ええわ。とりあえずもらつとけや！」

再びマシンガンばりの乱射が始まる。こんなものに直撃でもしたら間違いない蜂の巣だ。

何としてでも凌がねば。やがて乱射が途切れ、銃使いがぱっとしない顔を浮かべた。そう、弾切れだ。

「チツ、もう補充せなあかんやないかい……」

「今だ！」

「しもた！　それが狙いやったんか！」

いよいよ転機だ！　剣を天に掲げ跳躍する、そして渾身の一撃を振り下ろす。

「ぬおおおおお！！！」

予想外の事態に困惑する間もなく、まともに攻撃を受けた銃使いが吹っ飛ぶ。

それもただ吹っ飛んだのではなく、空中できりもみ回転しながら喋り方からして関西人のようだし、こいつは生粋のコメディアンなのか？

自分もそうだが関西人といえばややケチでお笑い好き、故に笑いを取るためならときには全力で取り組む。

よろしい。彼自身は浪速の銃狂いと名乗っていたが、本名が分かるまでは彼のことを謎の関西人と呼ぶことにしよう。出生も素性もまだ分からないのだから、謎をつけても誰も文句は言わないはずだ。

「やりまんなあ……」

転倒していた謎の関西人が起き上がった。口ではそう言いながらも、まだ奴はピンピンしている。

その証拠に、余裕そうな笑みを浮かべていた。対して自分は手負いで、それにさつきギャングのリーダーと戦ったときに腕に傷を負った。

だからどこまで持つかは分からない、だが　今はやれるところまでやるしかない。それが戦いなのだから。

「いえいえ、そつちこそ」

健はそう謙遜した。ひよっとしたら、あの関西人は手加減してくれているのかも知れない。

『人の顔色を伺うな』みたいなことは言われたが、もし自分と彼の立場が逆で余裕があったら、

まずは小手調べ　として、ちよくちよく様子を見ながら攻撃に出していただろう。

相手もこつちもはじめて戦うわけだから、普通ならそうするはず。しかしそうではないということは、あの関西人は心から真つ向勝負を望んでいるということになる。

だったら、こちらも残った力を出し切るまでだ。やられる前にやれ！ 相手に攻撃させる前に、こちらから斬撃を仕掛ける。一気にケリをつけねば。

「ノーコンや、どこ見とる！」

しかし、やはり相手はすばやい。紙一重で斬撃を避けてしまった。なんとか、相手の動きを妨害できそうにはないものか？

「そもそもそんなデカイもんでワシは倒せへんのや！」

「くつ」

また挑発だ。この関西人、よほど実力に自信があるらしい。悔しいが、なかなか手が出せない。リロードするとき以外、隙もまったく見せない。

「くそ、ちよこまかと……！」

関西人が動いているときにいくら剣で切ろうが突こうが、ことごとく攻撃を回避されてしまふ。やはり弾をリロードするときが狙い目なのか？

いや、何を考えているのだ。ヤツが動かないのはその時ぐらいだ、なのに何を今更焦っているのだ。冷静になれ、健。

焦燥したら負けだ。まだ経験は浅いが、これだけは身をもって知っている。仕事も戦いも、なるべく冷静に物事を運ばねば負けだ
ということ。

「なんや、エライ手こずってはりますなあ？ なんなら、ご自分のパートナーに助けてもろてもエエんやで？」

「……そろそろ本気出せよ」

「は？ 今なんちゆうた？」

よし、今度は逆にこっちから挑発してやろう。

幸いこいつは挑発に乗りやすそうなタイプだ、少し煽っただけでもすぐに怒るだろうし、冷静さを欠いて攻撃の精度も低くなるだろう。

「あんだ、こつちが怪我人だからって手加減するのか？ こつちはあんだと違って手負いで腕をケガしてるんだ。けど、こつやって必死で戦ってる。本気も本気、大本気おほんまなんだ。でもあんだはどうだ
手を抜いてるようにしか見えないなあ！」

「ああ！？」

「名を上げたいんでしょ？ だったら本気出すなり、大技を出すなりして一気に畳み掛けてくださいよオ！！」

こんなひねくれた言い方は柄じゃないが、敢えてここは悪びれて言ってみよう。そうした方が相手もイライラするはず。

「うっさいわ！」

謎の関西人が舌打ちし、引き金を引いた。

横に跳んで弾をかわし、次から次へ飛んでくる追撃も同じようにかわした。思った通りだ。

強さは明らかに彼の方が上だが、我慢強さではこっちの方が勝っていた。何より相手は煽りに耐性がない。

きつとインターネットでは煽られて本当は顔を真っ赤にして怒っているのに、それを隠して冷静を装った書き込みをして余計に煽られて笑われるタイプだろう。

自分もどちらかといえば我慢強いが、大人になるにつれてその辺は粘り強くなってきた。こちらと毎日しんどいオフィスワークをこなしてきたのだ、こればかりは譲れない。

「ナメんなやボケエ！ わしやハナから本気なんじゃあー！」

銃口にエネルギーが集中していく。まさか、大技を出す気になったのか？

バリアを張って防げたらいいが、もしかするとあまりの威力に破られるかもしれない。

かといって、避けられるかどうか自信がない。では、どうするか？ 答えはそう難しいものではない。

「なんじゃい、まさかビビってへんやろなあ？！」

「さあ、どうでしょう……」

関西人が大技を出す前に、こっちから潰せばいいだけのことだ。

炎のオーブを装填してから高く跳躍し、そこから炎をまっとうして真下に突き出すようにして勢いよくダイブ！

「確かにちよつと怖いかもねえ！ ……燃えるッ！！」

見事、大剣が地面に突き刺さった。着地の際に爆炎を伴い、ドーム状になって健の周囲に広がった。

「うわっちいいいいッ！！」

ちょうど爆発の中心にいた関西人の銃使いは、火だるまになって地面を転がっていた。

自分がやったとはいえ見るからに熱そうで、少しばかり痛々しい。水が入ったバケツでも探そうというのか、その場から姿を消した。

「ふう……」

これで終わりだろうか。いや、そう思うにはまだ早い。

油断した隙に奇襲攻撃を仕掛けてくることもありえる。いつ反撃されてもいよいよ、健はしっかりと身構えた。

「しめたああああああア！！」

後ろから叫び声が聞こえ、振り向くとヤツがいた。

危惧きくしていた通り、どうやら背後から不意打ちするつもりだったようだ。

「この距離やったら流石のアンタも……！！」

（も、もうダメだ！）

「死ねや東條オオオオオ！！」

引き金が引かれた。こうなった以上負けは確実だ。悔しいが事実だ、認めるしかない。

「……あれ？」

「へ？」

ところが、弾が出ない。

「おかしいのう、弾はさっき入れたはずなんやけど……」

いくら引き金を引いても弾は出なかった。今のうちに少し離れ、健は相手の様子をうかがう。

「撃てや！」

明らかに関西人の様子がおかしい。弾切れを起こしたのか、それとも弾が詰まったのか。

わけもわからず、ただひたすらに銃へ八つ当たりしていた。

「撃てや言つとるやろーが！ はよ撃たんかいボケエー！」

あきれて いや、返す言葉が見つからない。というか、この状況は何とも言えない。

「グフエエエ！？」

そうやって関西人が銃を叩いたり蹴ったりしていると、やがて爆発を起こした。銃が暴発したのだ。

「うぐぐ、目エやられてもうた」

「しめた！」

この機を逃す手はない。走って近寄り、そのまま飛び上がった大剣を叩きつける。

更になで斬りして追撃を加える。とどめに切り上げて上空へ打ち上げ、跳躍して唐竹割りだ！

「ぬわあああああッ！！」

関西人は激しく地面に叩きつけられた。その周りには、衝撃でくぼんで亀裂が入っていた。

「つつ……」

腕の傷を押してまで戦っていた健だが、もう限界だった。

激痛が腕から全身へ走っている。今日はもう、これ以上は戦えそうにない。

「へへへ、さすがは東條はんや」

息をあらげながら謎の関西人が立ち上がり、這い上がった。

その表情は笑っていたが、かなりのダメージを負ったためか血まみれで右目を瞑っていた。

「お、思ったよりずっと」

負傷した左腕を右腕で押さえながら、ジリジリと健に近寄っていき。

その手に握られていたのは 銃。健に追い討ちをかけようとい

うのか。

「ゴッツイヤんけ」

しかし、彼は引き金を引かなかった。引けなかった。

健を目前に倒れ、愛用していた銃は手元から離れるように地面を滑っていった。

戦いは終わった。クルクルと回してから鞘を剣に仕舞い、いつもよりかっこよく決めてみた。

(……………どうしよう)

そしてその場を去ろうとしたが、なかなか去れない。

さつき戦った謎の関西人の安否が気になるからだ。殺していないだろうか、

まだ生きているだろうか。できれば後者であってほしい。

「……………行こう。みゆきもアルヴィーも、きっと心配してる。帰らな
きゃ」

やっと決心がついたのか、そう思いながらも健はその場をあとにした。

妖しくも美しい輝きを放つ、蒼い月の光を浴びながら。

EPISODE 52：たこ焼き屋の事実

「……モヤモヤするのう」

雨。見渡す限り一面の雨。

降り続ける雨と、よどんだねずみ色の雲が星々輝く夜空を遮る。

そしてこの天気は、大切な人が 己の主が帰ってこない不安感を余計に煽る。

心配で心配で仕方がない。

以前拉致された時のように、また眠れぬ夜を過ごせとこののか？
それだけは絶対に厭^{イヤ}だ。

(なかなか帰ってこないな……まさか、悪いやつらにいじめられて
いるのではないか!?)

街のチンピラやギャングに捕まり、どこかの倉庫で鎖に縛られ天井から吊るされて暴行を受けている そんな光景を思い浮かべて、
アルヴィーが目を丸くし驚嘆した。

発想がまるで、外に出掛けたきり帰ってこない子どもを心配する
母親のようだった。

「まさかあやつに限ってそんなことはないだろうが ああ、もう
っ！」

やがてアルヴィーは頭を抱え込んだ。

健がもし死んでいたらどうしよう、後日変わり果てた姿で発見されたらどうしよう と、不安が膨らんではかりだ。

そろそろじれったくなってきた、早く帰ってこないものだろうか？

「ただいまぁー……っ」

(この声は!?)

ちょうど不安がピークに達したそのとき、心の底から帰還を待ち望んでいた男が遂に帰ってきた。

「いやぁー、夜になってからこんなに降ってくるなんて聞いてなかった。おかげでびしょ濡れだよ」

相も変わらず、元気に且つ気楽に声を出してそう言っていた。

この瞬間を待ちわびていたのだ、声を聴いたからには待つてはいられない。

急いで玄関に向かい主を迎える。

「お帰り、健！ 外は大雨だっただろう、早く中………に………？」

確かに彼自身は無事には帰ってきていた。だが、体は違った。

何から何までボロボロで傷だらけ、とくに腕は傷跡があって見えて痛々しいほどだ。

その上服はびしょ濡れで、みつともない格好だった。

それでも彼は、こうやってアルヴィーの前でいつもの屈託のない笑顔を見せていた。

「ど、どうしたんだその傷は?!」

「ちよっと、ね」

「事情はあとで聞く、早く中へ入れ!」

「うおっ!?! イテテッ!?!」

靴を脱いだ健を引っ張ってでも玄関から上がらせ、部屋へ入れる。

「たぶんお医者さん行った方が……」

「大丈夫だ、エスパーはケガの回復が著しく早い。だから傷もすぐに塞がる。それに医者になど行っていたら金がかかるだろう?」

救急箱を持つてくると中から慌てて消毒液やばんそうこう、包帯と行った怪我した時には欠かせない必需品を取り出した。

「軟膏塗ってその上にガーゼを貼ってから寝れば、腕の傷などはあつという間に治るはずだ」

「だといいんだけど……いてっ!」

心配する健をよそに、アルヴィーが右腕につけられた傷を消毒。そこに軟膏を優しく塗り、その上からガーゼを貼った。

簡単に剥がれてしまわないよう、テープを2つほど貼り付けた。

「ところで、一体どこへ行っておったのだ?」

「ギヤングたちを退治して、それから帰ろうとしたら変なエスパーの人に絡まれて……あいたた」

今度は体に包帯を巻き、顔に入ったかすり傷を消毒してばんそうこうを貼る。

痛いながらも少しの辛抱だ。

「ほう、そうだったのか。そりや大変だったのう」

「でかい銃持っててさ、すごく強かった。勝てないかと思ったよ。ギヤングのリーダーもエスパーだったんだけど、そいつはあまり強くなかったなあ」

健は気楽そうに語ったが、アルヴィーには分かっていた。

彼は必死で戦っていたのだと。こうやってボロボロになるまで戦

い続けていたのだと。

「僕、一人でやっつけたんだよ！ 凄いでしょ？」

「確かにスゴいのう。だが……」

嬉しそうに笑う健を見て、アルヴィーが口元を歪めた。

いつも通りつり上がってはいるものの、目付きもどこか哀しそうだった。

「もうそんなに強くなったのか？ 少しばかり鍛えすぎだ……もつと私を頼ってくれたっていいのに」

「だ、だけど。あんまり頼りすぎたらダメかなって」

「何故そう思ったんだ？」

「……いつまでも頼ってたら、強くなれないって思った」

「そうか」

健の言うことは一理ある。

確かにアルヴィーは強く、それも他者を圧倒するほどだ。

彼女ほど頼りがいのあるパートナーはいない。

だが、彼女に頼りすぎてはいつまで経っても強くなれない。

慣れないうちは手伝ってもらっていたが、この頃になって自分が着実に強くなっているのを実感できた。

だから極力、彼女の力を借りることは避けてきた。

最近になってアルヴィーをアパートに置いていきがちになったのはその為だ。

結果としてアルヴィーは家にこもりがちになり、寂しがることも多くなった。

「……実は私も同じような事を考えておったのだ」

「えっ!？」

「まあ、そう驚くな。お主に私への依存心が生まれぬよう、お主に力を貸すのは余程のことがあった時のみにしていたのだ」

「そうだったんだ……」

「だが、無駄な気づかひだったようだのう。お主も似たようなことを考えておったからな」

気が付けばそれまでむすつとしていたアルヴィーが笑顔に戻っていた。

普段クールにすましているからか余計にそう映るのかも知れないが、心底嬉しそうな笑顔だ。

逆に言えば、それだけ寂しい思いをさせていたということになる。などと熟考していると、アルヴィーがささつと布団を引いてしまった。

「さ、今日はもう遅い。早く寝ないと日が昇ってしまうぞ？ 風呂なら明日にでも入れればよい」

「うん、そうするー！」

着替えるとささつと布団に入り、すやすやと寝息を立てた。疲労が著しく溜まっていた健が就寝するのは時間の問題だった。健の寝顔を見てクスリと笑うと、アルヴィーも続いて眠りに就いた。

↳ 4日後、日曜日

「みゆき、アルヴィー！ あそこだよ、あそこー！」

「あれが『市村』さん？ もしかして食べに行くの？」

「うん、そうだよー！」

「たこ焼きかー！　ちょうど腹も減ったことだし、食いにいかんか？」

「もちろんさ」

戦いで受けた傷もすっかり完治し、気分をリフレッシュさせるべく健はみゆきやアルヴィーと一緒に外出することにした。

目的は京都の中をブラブラする　　だけではなく、職場でも話題に挙がっていた『市村』のたこ焼きを買って食べることも入っていた。

『市村』のたこ焼きを食べるかどうかについて聞くと、満場一致で食べることとなり、早速アサガオ公園へ向かった。

そこには噂になっていた通り、移動屋台が停まっていた。

これが今話題の『市村』だ、ご丁寧にひらがなで『いちむら』と書かれた旗も見える。先に来ていた客の姿も何人が見られ、その人氣ぶりが窺える。

これだけ人気が多い　　ということは、味は十分に保証できるだろう。そのくらい美味しいということだ。

「ようこそいらっしやい！　ぎょうさん買ってってやー！」

頭にねじり鉢巻を巻き、水色のはつぴを調理シャツの上に着た若い男性が懸命にたこ焼きを焼いていた。

よく見ると焼いているのはたこ焼きだけではなく、大判焼きと見られるものも売ってあった。

これは今川焼きとも呼ばれる食べ物で、小麦粉を主体として型で焼いた和菓子である。

中に入れるのはあんこが主流だが、カスタードクリームや白あんを入れることも多い。

「今なら大判焼き売ってるでえ！」

「あ、あたし大判焼き！」

「私も欲しいー!!」

「俺も俺も！」

次から次へと客がやってきては、誰もかもせわしそくに注文をして来る。

その大半は女性で、若い女の子から母親、おばちゃんからおばあさんまで年齢は様々だ。

しかしこの青年は手短に該当するものを焼き上げては、速やかにパックに入れて渡していた。

そして必ず、思わずときめいてしまうようなウィンクをしながら渡していた。

女性はともかく、野郎にとっては不快なことこの上ない屈辱である。

「あ、空いたよ。行ってみよう！」

やがて列が空いた。これでようやく買いに行ける。

ソースたっぷりで大きい、あつあつのたこ焼きを味わえる。

「ほいほい、いらっしや……」

そして新しくやって来た客を見て、たこ焼き屋の男は思わず目を見張った。

3人いる客のうち一人は何となく見覚えがあり、会うのも今日がはじめてではない。

一度どこかで、何らかの形で会っている人物が一人いた。

あとの二人は今日が初めてだ。戸惑って思わず手を止めてしまった。

「あのー……どうかなされましたか？」

「えっ？ あ……いや。何でもあらへん。3名様やね？」

首を傾げたのはたこ焼き屋だけではなく、健も一緒だった。

目の前の彼と似たような顔や容姿をしていた人物と、どこかで会った事がある。

確か4日前に、ギャングを懲らしめに行ったときだった。

そのときの帰りに彼とそっくりな男に喧嘩を売られて

「エエのお。美人の姉ちゃん二人も連れ歩いって、うらやましいわい。このスケコマシがあ」

「あ、あの。たこ焼き3パックください……」

「おう、かんにんかんにん！ 600円や」

財布から1000円札を出し、たこ焼き屋の青年に手渡す。

太っ腹だとおだてられながら、お釣りの400円とたこ焼き3パックを受け取った。

アツアツでほんのり暖かいが、ずっと持っているとかケドしそうだ。

こつこつものは暖かいうちに食べるのが一番だ。

早速パックを開け、串を刺してたこ焼きを口に運ぶ。

噛んだ瞬間、口の中がとろけ出す。

「う、うまい！」

「確かにおいしいの……！」

「とろけるう……！」

3人とも思ったことは同じだった。あとは自然と食指が動いてゆき、

「これはヤバい。やみつきになるぞ！」

「道理で売れるわけだの！」

「ソースとかつおぶしがよく効いているわ。それに青海苔もうまい！」

「せやるオ？」

彼らは口々に『うまい！』と叫んだ。

たこ焼き屋の青年も満更ではないらしく、自慢げに笑っていた。

「おいしかったな。この頃の京風のカリカリしたやつばっか食べてたからなあ」

「また来てみよっか！」

「うむ、それがいいと思う」

近くのゴミ箱にパックを捨てると、そのまま3人は去ろうとする。だが、そうは問屋が卸さなかった。

「待たんかい」

突如として、屋台からたこ焼き屋の青年が低い声で呼び止めてきたのだ。

何事かと思い振り返ると、屋台から出た青年が凶悪なニヤケ面を浮かべて仁王立ちしていたのだ。

それも青筋を浮かべており、よく見ると笑いながら歯ぎしりもしていた。

「え？ ど、どうしましたか？」

「ただでさえ実力あんのに、リア充やったんかい東條はん。こりゃあ『爆発しろ』言われんのも時間の問題やで」

「よ、余計なお世話です。でもなんで僕の名前を？」

「しらばっくれんなや」

彼とは今日あったばかりの、見ず知らずの他人のはず。なのに何故、健の名前を知っているのだろうか？

「この前わしのことボコつといてよう言つわ！ このポケが！」

「え！？」

「や、やだ。この人……怖い……」

凄まじい剣幕でたこ焼き屋が怒号を浴びせる。

あまりの迫力におびえたみゆきが健の腕に抱きつき、ギョツと掴んでいた。

一方でアルヴィーは飽くまで冷静に腕を組みながら、しかし鋭くたこ焼き屋を睨んでいた。

鋭い彼女のことだ、何かに気付いたのかもしれない。

「で、でも。そんなことした覚えは……！」

「セコいやっちゃ。どこまでもシラを切るっちゆうんか。せやったら、嫌でも思い出させたるわい」

戸惑う健を前に舌打ちし、たこ焼き屋が懐から大型の銃を取り出す。

そしてそれを己の顔の前に添え、これ見よがしに見せ付ける。

「この銃……まさか！」

ようやく気付いた。そうだ、この男は以前に戦った。

「せや、泣く子も黙る？ 浪速の銃狂い？……」

銃をすばやく回し、その銃口を健の前に突きつける！

「市村正史やあああッ！..！」

EPISODE 52：たこ焼き屋の事実（後書き）

彼の正体に気付いていた人はたぶん気付いていたと思います。一応それっぽい台詞を吐いていたりしてバレバレでしたし。

EPISODE 53：まっすぐじゃない男

「そ、そんな。市村さんがこの前の……!?!?」

一同、愕然とした視線でたこ焼き屋を　市村を見つめた。
恐怖に震えるみゆきや目を丸くしている健を見て、市村は勝ち誇ったように笑った。

「どや、恐れ入ったか!」

「……そうか、そうか。それがお主の正体だったというわけか、たこ焼き屋よ。くすくす」

だが、アルヴィーはこの程度の脅しなどには動じなかった。
腕を組んだまま、いきがる市村を見て皮肉な笑いを浮かべていた。
それも気取ったものではなく、大人の余裕を感じさせる笑みだ。

「滑稽だのう。ぶっ……くくく」

「な、何がおかしいんやネエちゃん!？」

もはや笑いをこらえるのに必死だった。

市村に突っかかられても、彼女は微動だにしない。

「あーっはっはっはっはっ!?!」

遂には左手を口に添えて大笑いした。

端から見れば高飛車で嫌な女に見える筈だが、彼女自身としてはただ単に市村があまりにも面白かったので笑っただけに過ぎない。

「うわはははははは!」

「うふふ……」

誰かが笑うとついつい釣られて笑ってしまうものだ。

さっきまで恐怖に震えていたみゆきは口を綻ばせて微笑しており、健にいたっては銃を眼前に突き付けられているのにも関わらず、腹を抱えてゲラゲラ笑っていた。

何故こんなにも笑っているのか、市村にはさっぱり分からなかった。

「も、もしかしてワシのことナメとんのか!？」

「いや、そうではない。今のが笑いどころだったから皆で笑っただけだ。のう、みんな?」

アルヴィーが左手を口に添えたまま、健とみゆきに問いかける。

二人とも嬉しそうに、こくりと首を縦に振った。

呆然とした市村の手からは、握られていた銃がストーンとコンクリートの地面へ落っこちた。

「こ、こんちくしょ〜ッ!」

銃を拾うと、実に悔しそうな様子でそう叫ぶ。全速力で屋台へ逃げ込み、

「きよ、今日のところは勘弁しといたる! 覚えとれよ、忘れんなよ〜ッ! おしりペンペーン!」

結局彼は、何がしたかったのか。

喧嘩を売って健たちに脅しをかけたかと思えば鼻で笑われ、悔しさのあまり移動屋台も兼ねた車に逃げ込む。

逃げ足は速いらしく、市村はさっさと店を畳んで車を飛ばし、ど

こかへ去ってしまった。

「あちゃー、逃げられてしもつたか。まあ、過ぎたことを気にしても仕方がないのう」

「よっしゃ、次行こう。二人ともどこ行きたい？」

「うーん。そうだ、商店街いこーよ！」

「私もみゆき殿に賛成だ。共に参ろうぞ」

「じゃあ、商店街で決まりだねッ」

次に行く場所は決まった、多種多様な店が所狭しと立ち並ぶ商店街だ。

故に品揃えは豊富である。きつと優雅に、京都らしくはんなりとしたショッピングを楽しめることだろう。

～同日同時刻 本庁～

機械が随所に轟く、対策課本部をたずさえた地下室。

両手いっぱい資料が挟まれたファイルを重たそうに持ちながら、不破は廊下を歩いていった。

「む、村上。ドア開けてくれ」

苦悶の表情を浮かべながらうめき声を出すようにそう言うと、ドアのロックが解除された。

自動ドアゆえ、重たい荷物で手が塞がっていても安心のつくりとなっているのだ。

村上の白々しいしたり顔と穴戸のほがらかな笑顔を交互に目にしながら、

運ぶ際に四苦八苦しただほどの大荷物を机に置いた。
置いた際に、ズシン！ と大きな音を立てて部屋が少し揺れた。

「ごくろーさん。疲れだろう、座ってくつろいでもいいよ」
「お気遣いどーも」

村上のねぎらいに対してすこぶる嫌そうな顔をして答え、パイプ椅子に腰掛ける。

肩が凝ったのが軽く回したり、自分で叩いたりした。
結果、余計に痛めてしまった。

「し、穴戸。悪いがマッサージしてくれないか」
「はい、ただちに！」

「おいおい、僕じゃダメなのかい？ 同僚じゃないか」
「野郎に揉んでもらっても嬉しくねえよ、バカ」

不破は呆れるように即答した。
女性に肩を叩いてもらったりするのがよほど気持ちよかったのか、村上が声をかけてきたとき以外は至福そうな顔を浮かべてリフレッッシュしていた。

「ところで女タラシの不破君」
「今度はなんだ！？」
「君にひとつ、やってもらいたい仕事があるんだが……」

村上が頼みごとをしてきた。

穴戸のゆつたりとした肩揉みを満喫しながら、必死で資料の山を漁る村上を凝視していた。

ひたすらに、ジーツと。ときにポーツと。気付けば不貞寝していた。

「起きんしゃい！」

そんな彼を一喝して叩き起こすと、説明用に作った書類を手に説明を始めた。

「いいか、一度しか言わないので聞き漏らさないように。我が部隊で使用する武装、その種類は拳銃から特殊警棒、バズーカまでさまざまだ。なんだが……」

「なんだが？」

「中には扱いが難しいものもある。そこで、だよ」

いったんその多弁な口を止めると、少し格好つけた動作を取りながら分厚い冊子のようなものを渡した。

B5サイズのムック本かテレビゲームの説明書を連想させるようなデザインで、表紙には『シェイド対策課専用特殊武装取扱説明書』と書かれていた。

早口で読めばすぐにでも舌を噛みそうな、長くてしかも字数の多い名称だ。

「おい、まさかオレにこのいかにもパズル並みに難しそうなマニュアルを読んで来たっていうのか？」

「目ざといねえ、正解！ それを今晚中に読破してきてもらえないかな」

「えー！？」

思わず声を上げて目を丸くしてしまった。

別に読書は苦手ではなくむしろ好きなほうなのだが、流石にこんなのは読めるわけがない。

抗議しても別に文句は言われなはずだ、だから今ここでさせて

もらつ。

「冗談じゃない！　なあ、これってしおりとか挟めないのか？　別に明日あさつてでもいいだろ？」

「そんな怠惰な人は我が部隊のサポーターに相応しくない。いやなら帰ってくれ」

「な、なんだとー！　ぐきぎぎぎ……」

頭が村上の理不尽な仕打ちへ対する怒りで沸騰しつつある。できれば我慢したいが、なぜか抑えたくても抑えられない。

しかし、穴戸に肩をもんでもらうとなぜか落ち着く。

もし俺が怒ったら、穴戸があまりの怖さに泣いてしまいそうだ。女の涙は見たくない、ここはひとつ抑えよう……。

「怒っちゃやーよ、元高給取りさん」

「そ、それもそうだな。分かった、3分で読んでやる」

「本当だなあ？」

もちろんこれは冗談だ。

本当に3分で読めたらそうしている。

「じゃ、そういうことだから頼んだよ。あとよろしくね、穴戸ちゃーん……」

くるつと回って二人を指差し、ウィンクしてクールに決める。

言いたいことをすべて言い尽くすと、村上はさっさとその場から去っていった。

実に強引で唐突なヤツだ。その上口がよく動く。警察官ではなく、漫才師を目指した方がいいのではないかと、不破は思った。

「……村上警部補っていつもあなんですか？」
「……」
「いつもあななんだよ。ところでオレ、耳疲れちゃったよ……」

EPISODE 54：ケジメつけたい

「くっそー！ 何が何やらさっぱりわからん。オレにはちんぷんかんぷんだ！」

その晩、不破は都内のマンションの自室で村上から受け取ったマニュアルを必死で読んでいた。

何故に必死なのか？ その理由は至極簡単なものだった。

難解な用語や読みにくい漢字が多く、しかもフリガナ等は一切なし。

こんな翻訳なしの古文書並に読むのが難しいものを読めというなど、実に不合理で理不尽な話だ。

しかもそういう仕事だというのだから、なおさらタチが悪い。

「これ、マニュアルじゃなくて暗号文じゃないのか？ 誰かは知らんが、こんなわけわからん用語の多いライトノベル並にハードルの高いもん発行しやがって！」

ひとりでに逆上するとマニュアルを閉じ、ポイツ！ と床に投げ捨てた。

不破は頭を使いすぎた故にパンクしそうになり、結果としてこんなことになってしまった。こうなってしまえばもはや、読む気も起さない。

今度からは誰でも読めるものを作って欲しいと、缶ビールを飲みながらそう思うのであった。

「ぶはあーッ！」

缶ビールを飲み干した不破は、溜まったものも一緒に吐き出すように豪快に息を吐く。

唾が伴うほどの大きな息だった。鬱憤を晴らし、ベッドに入るのも面倒くさくなった彼はソファアの上で就寝しようとする。

(いや待て……)

興奮する猛牛の如く大荒れしていたものの、ソファアの上で寝そべりながら、不破は思いとどまっていた。

これでいいのか、読まなかったらいざというとき困るのではないか　そう考えながら。

(……今後のこと考えたら、やっぱり読んどいた方がいいよな)

やがて熟考するうちに考えを直し、寝るのをやめて起き上がる。ページを曲げられたり床に捨てられたりして無残な姿になったマニユアルを拾うと、今度は冷静にまじまじと読み進めていく。

最初はあれだけ騒ぎ立てながら読んでいたのが、頭を空っぽにしてみれば不思議なことにスラスラと頭の中へ入っていった。

よくよく考えれば、最初から落ち着いて冷静に読めば分かることだったのだ。分からなかった為に顔を真っ赤に染めて激怒していたのがすごく恥ずかしい。

「アレがコレ、ソレがソレなのか……なんだ、意外と分かりやすいな」

そして、読みふけてから数時間後。

「よっしゃ、覚えてたぜエ」

遂に彼は、この知恵の輪ばりに解読の難しいマニュアルを読破することが出来た。

ところが疲れ果てた彼は、魂が抜けるようにそのまま寝転んでしまった。

そしてソファで毛布を被って安らかな寝顔を浮かべながら、夜を越すのであった。

翌朝、警視庁

「みんな早いなあ。こんなときは、おはようというあいさつを謹んで贈らせてもらいましょう」

いつも無鉄砲で荒々しいところのある彼にしては、らしくないくらいに清々しい笑顔で朝のあいさつを交わした。

今日の彼は機嫌が良いのか、まるで憑き物でもとれたように爽やかだった。

「おつ、おはようございますッ！」

「元気そうで何よりです！」

「不破さん、ステキー！あとで顔をナメナメしてあげるわぁ」

一名やや変態チックな乙女もいたが、不破に心惹かれたか、穴戸をはじめとした婦警たちが少し紅潮しながら敬礼した。

「い、いや。君たち。そんな興奮しなくてもだな……」

「おーおー、厳しい性格ながらたまに見せる甘いマスクですぐ女の子にモテなさる……！」

そこへ水を差すような言葉を投げかけて、村上が嫌味ったらしく

振る舞いながらやってきた。

口元を歪ませながらあからさまに嫌そうな視線を、不破は隣の彼に浴びせていた。

「うらやましい！ さすがはホスト並にハンサムでリッチモンドなことはありますねえ、不破さん！」

「おだてる時はもっと下手に出るもんだぜ、村上エ……」

苦笑いしながら、不破はそう言った。

警視庁でもきつての知性派で、しかも屈指の美形であることで知られている彼が、今こうやって自分の前で自ら嫌味のある知性派キアラを崩すようにふざけまくっている。

何とかならないものだろうか？

「さあさあ、どうしたのかなあ。アタックしないのかい？ 君たち女の子でしょ？ どうせならお金持ちと結婚したいでしょおー！？」

結婚後のことを考えると、確かに金持ちと結婚した方が資金には困らない。

それでいて美男子イケメンなら尚嬉しい。

しかしながら、たとえ貧乏で不細工でも心はダイヤモンドのように純粹で汚れなく、ひた向きな男性も中にはいる。

金持ちで見た目もいい男が、貧乏でブスだが心のきれいな男か。

これは性別を逆にした場合でも当てはまるが、まさに究極の選択と言えるだろう。

「この人元高給取りだからね、お金いっぱい持ってるよ。みんな、どうせならブルジョアな暮らしをしてみたいだろー！？」

村上によるおだてと煽りの波状攻撃が、不破と婦警たちに襲いか

かる。

「み、みんな騙されるな。コイツはウソをついてる！ 金持ちで高給取りなのはメガネの方だ！ 第一オレは金持ちじゃない。金ならこっちの方が貯蓄あるし、資金繰りだってこいつの方が断然うまいぞ！」

このままでは埒があかないと思った不破が切り返し、騒然とする婦警たちの気をそらす。

更に村上也困惑し、一石二鳥だ。

「それにこいつは頭もいいし、どうせならこいつと結婚した方があと助かるぜエーッ」

やられたらやり返す。

無理矢理左腕で肩を組んで近付けさせると、右手の人差し指で村上のしたり顔をしっこいぐらいに指差す。

元々そうではないのだが、この時の不破は瞳孔を小さくして悪役っぽい笑みを浮かべていた。

「は、離せよ。気色悪いなあー！」

「じゃあねエな。誰か、こいつを婿にもらってやってくれ」

とは言われても婦警たちにはすぐに決められそうにない。

高給取りで頼りがいのありそうな不破か、知性派で的確なアドバイスを授けてくれそうな村上か。

二人とも真面目で見た目もいいしで、彼女らはどちらにするべきか悩んでいた。

「ねえ、どっちにする？ あたし、ガッツのある人が好きなのー」

「私は知的な人がいいなあ。宍戸さんは？」

「えっ、私ですか？ うーんとね……」

見事に意見が別れた。

宍戸としてはどちらでもいいのだが、二人のうちどちらに意見を合わせたらいいのか分からなかった。

出来るだけこの無益な争いを、平和に終わらせたいのだが。

「審議中、か……」

「審議中だねエ。むふふ」

肩を組んで組まれあつた二人が顔をあわせてそう呟いたかと思えば、不破の方から村上を突き放す。

そして息を大きく吸い込み、

「あーもう、まどろっこしい！ やめだやめだッ！ みんな、オレのために不毛な争いをするのはやめてくれ！」

突然の大声にその場にいた全員が驚き、すくみ上がった。

震えている宍戸と手を繋いでやると、廊下の奥の方にあるエレベーターへと進んでいく。

「じゃ、オレは宍戸と一緒に先行つとくわ。あとよろしくな」

エレベーターに乗り込んだ二人に続こうと駆け寄るが、あと一歩のところまで扉が閉まる。

ということとは、事の後始末は自分でやれということだ。

思えば、少々おふざけが過ぎていた。

この婦警2人をどうやって巻けばいいのだろうか。

いっそ、二人とも自分の愛人にしてしまおうか。

その方がいいかもしれない。

元はといえば、己がまいた種だ。

芽が出てくる前に自分で取らなければなるまい。

(……やるしかないッ)

覚悟はできた。

眼前には、迫り来る婦警の姿が。それはどんどん大きくなっていき、

ついには前かがみで村上を見下ろすように。

「警部補おー、この落とし前どう取ってくれるんですかあ？」

「ねえってばー！」

村上の絶叫が警視庁全体に響いた。

それは地下へと向かった不破と穴戸の耳にもハッキリと届いていた。

いったい村上の身に、何が起こったのだろうか？

EPISODE 55・うしろの用心

「さっきの絶叫、すごかったですね……大丈夫でしょうか」

村上が上げた、警視庁全体に響くほどの絶叫。

それは地下にも届いており、やかましいくらいに響き渡っていた。あまりにも痛々しい感じだったので、宍戸は少し心配していた。あんなのも一応上司である、彼の身に何が起こったのかが気がかりで仕方なかったのだ。

「ま、大丈夫だろ。あいつは機転が効くから、うまいこと切り抜けてるんじゃないか」

不破はそんな宍戸に優しくそう言って励まし、彼女を落ち着かせていた。

その一方、以前村上が入力していた暗号が思い出せず、自身のうる覚えの記憶を辿りながら四苦八苦していた。

更にほとんど当てずっぽうで入力していたためか、かえって思い出せなくなっていた。

「……宍戸お！パスワードわからん！」

そして、こともあろうか宍戸に泣きついた。

こればかりはある意味仕方はないのだが、先輩が後輩に見せる姿にしては非常に情けなかった。

宍戸も少し、そんな彼を見て困っていた。

「もう、しょうがないなあ。しっかり見て、覚えてくださいな」

村上が入力していたときとまったく同じように、すばやく特定のボタンを押す。

ただひたすらに押し続ける。不破も次こそは、と言わんばかりにメモ帳にその順番をしっかりと記録していた。

「今と同じようにやれば、地下フロアに行けますよ」

「だいたい覚えた。サンキュー穴戸お！」

自分の周りには、こんなにだらしない先輩ばかりだ。

だらしないままでは、足元がぐらついてそのまま転落してしまう。だから後輩である自分が、しっかり支えてやらねばならない。

その為には、誰からも頼りにされるような人にならないといけない。

そうなるための努力は、絶対に怠らない。

可憐な穴戸だが、その意志は鉄のように硬くて強く、何事にも動じない。

他人に尽くしつつ、自分のスタンスを保つ。彼女はそういう女だった。

シェイド対策課、その本部。

二人とも会議室の椅子に腰かけると、朝から溜まった疲れをどつと吐き出すように安堵の息をついた。

しばしの間もたれてほっこりと休憩すると、不破が息を吹き返したように起き上がった。

「もしかして、俺たち二人だけか？ だつたら寂しいよなー」

「一応オペレーターの人とか、待機中の隊員とかはいますけどね」

そういえばモニタールームにオペレーターは何人かいた。

ほとんどが女性で男性も何名か居たものの、その数は少なかつた。対して、戦闘部隊はほとんどが男性で女性はほぼいなかった。穴戸の話によれば、これは上層部から対策課の課長を任されている村上の意向によるものらしい。

ただ、中には自ら戦闘に参加することを望む女性も少なからずいるそうだ。

「私も混ぜてもらえる？」

「あつ、白峯さん！ ご無沙汰してます」

穴戸と話をしている途中、とばりがクリアファイル片手に会議室に入ってきた。

相も変わらずそのアダルトな容貌に不釣り合いなくらい陽気で、見ているとこつちまで元気になつてきそうだ。

容姿にしても若干20代後半で博士号を得ていることを踏まえても、彼女は実年齢より若々しかった。いろいろな意味で。

そんなとばりが来てからというもの、一気に話が弾んだ。

仕事に関する話やとばりが今何を研究しているのかという話、何を開発しているのかという話、あれから東條と会っているのかという話。

彼女一人いれば、話題には当分困らなそうだった。

何気ない世間話の中でさり気無く、不破が昨日必死で読み明かしたマニユアルの話が出てきた。

何でも『マニユアルが読みづらい、そもそも読む気になれない』という風な苦情が殺到したため、あれから用語に関する脚注や補足読むのが難しい単語にフリガナを振った改訂版を作ったのだという。あんなに必死になつた拳句クールダウンしてまで読んだのに、まるで苦労が水の泡。このとき不破は、尋常ではないシヨックを受けていた。

「宍戸さん、どういうタイプが好きなの？」

「うーん……自分に正直な人かなあ」

「そうなんだ」

「白峯さんはどういう人が好きですか？」

「あたしはね、優しくしてくれる人なら誰でもー！」

落ち込んでうつ伏せになる不破をよそに、とばりと宍戸は二人楽しくガールズトークで盛り上がっていた。

こうなれば完全に、不破は蚊帳の外だ。立ち直るまでに相当な時間がかかるだろう。

「や、やあ皆さん……元気そうで」

やがてそうしていると、村上も遅れて部屋に入ってきた。

サラサラしていた髪はくしゃくしゃでスーツはよれよれという、すっかり変わり果てた姿で。 皆が口をそろえてこう言った。

「一体何があった!？」

と。

「うらやましいだろ不破君……美女二人に囲まれて、濃厚なデビューキスを何百回も味わったんだぜ」

見ている痛々しいほどの虚勢とその姿、首をかしげながらの苦笑い。その目は遠いところを向いていた。

顔中キスマークだらけで、見れば見るほど哀れみを感じる。そうやって謎の哀愁を漂わせながら、村上は椅子に座った。

「いやあ、人気者は辛いねえ」

それが無様な自分へ対する精一杯の皮肉だった。
見苦しくなるともいえない、疲れたような笑顔が村上の身に起きた出来事を物語っていた。

「……村上君ってああいう人なの？」

「なんスカね、オレにもよくわかりません……」

辺りもすっかり暗くなつた頃、不破は退勤した。

いろいろあつたが、とくに変化はなくいつも通りの一日だった。

対策課に来てからというもの、村上にアゴでこき使われているばかりで不破としてはたまつたものではない。

仕事も荷物運びや村上のどうでもいい話を聞く等望んでもいないことばかりで、

自分にあつたような仕事はほとんどやらせてもらえていない。

気分はまるで周囲からイジメられている雑用か、報酬も貰えずにタダ働きさせられている何でも屋である。

そんな不破の中には、ストレスが溜まりに溜まっていた。沸騰したなべ物のごとく煮えたぎっており、今にも火山噴火を起こしそうである。

そんな彼にとっての唯一の癒しが、年下の婦警との交流やいつも一緒にいてくれる宍戸小梅とたまにやって来る白峯とばりの存在だ。とくに後者は、二人を見ているだけでじわじわとストレスもなくなっていく。

とはいえ今の彼は、猛烈にイライラしていた。触らぬ神に祟りなし　というように、そつとしてやった方が身の為だろう。

「今日は近道すつか」

地下道を通り、マンションの近くまで近道することにした。

この薄明るい地下道はいろいろなところに通じており、この時間帯は少ないながらも何人が通行人もいる。

とぼとぼと道を歩いてると、後ろから何者かに追われているような、背筋がゾツとする気配を感じた。

しかし振り返ると、そこには誰もいない。気のせいだと自分に言い聞かせ、再び歩き出す。

その後も不破は何度か同じ気配を察知して振り向いたが、やはり誰もいなかった。

「よし、あともうちよいだ！」

いよいよマンションの付近に通じる一歩手前。またもあの寒気がする気配が背筋を伝ってきた。

冷や汗をかき心拍数を上げていく不破に、背後から凶刃が襲いかかる！

「ふんッ！」

間一髪、それを回避。

自分をつけてきた何者かの腕をつかみ、その手に握られていたナイフを叩き落とした。

「さつきからつけてきやがって　しつけえんだよ！」

その者の姿は見えなかったが、凶器は見えていた。

やがて想定外の事態に困惑した何者かが、その正体を現した。

どぎついピンク色と紫色に染まった、カメレオンのな怪物だった。不破を小ばかにするように、軽妙に動いて挑発する。

「それがめえの正体か……」

もちろんその程度の挑発に、不破が乗るわけはなかった。背中からランスを抜き、バックラーを右腕に装着して戦闘態勢へ入る。

「いいぜ。その長い舌ひっこぬいてやる！」

さあ、戦いだ！

EPISODE 55・うしろに用心（後書き）

更新速度が上がった？

違う……その分だけクオリティが下がったんだッ

EPISODE 56：高給取りと苦勞性

姿を消し、消えては現れる。カメレオン型のシェイド　インビジレオンの踊るような軽妙な動きは、不破の苛立ちを更に募らせようとしていた。

ただでさえ今怒らせたら手がつけられなさそうな状況であるにも関わらず、インビジレオンは彼を挑発するような行動をとるばかりだ。

これから自分がどうなるかなどまったく知らないのだろう。あまりにも哀れというか、愚かしいというか。

「ごんにやるー……」

辟易した様子でそう呟くと、左手に握ったランスを天にかざす。

穂先から放たれた稲妻が荒れ狂い、周囲にほとばしる。

その稲妻がカメレオンに直撃し、感電する。

「おらっ！」

そこへ容赦なく鋭い突きがひとつ　いや、ふたつ。

いやいや更に多く、疾風怒濤の勢いで秒間に何百回も突きを繰り返す。

相手は体が痺れて身動きがとれないため、全弾命中。

一方的に痛め付けられ逆上したカメレオンは、奇声を上げてその長いしっぽをくねらせる。

「くっ」

それはランスの穂先に、がっしりと分厚く締め付けられた。武器を奪われては状況が瞬く間に不利に変わる。何とかこの逆境を切り抜けねば。

「うおおおおッー！」

腰に力を入れてしっぽが太くしめつけられたランスを引つ張り、雄々しく叫ぶ。

周囲からガテン系と認知され、自らも硬派な肉体派を名乗る不破は、腕力に自信があった。

パワーでは東條に負けているものの、このくらいは余裕だ。

「ゲゲエー！」

しっぽが豪快に引きちぎられ、ドロドロとして気色悪い黄土色の体液が周囲に散乱する。

ちぎられた痕から全身に耐え難いほどの激痛が走り、カメレオンが悲痛な叫び声を上げた。

「ゲゲゲ！ ゲヒャアーツ！」

「ぐおっ!?!」

情け容赦なく襲いかかってくる姿に恐れをなしたか、カメレオンは不破を突き飛ばして地下道の外へ逃亡。

このまま野放しにしておけば、奴は間違いなく誰かを襲うだろう。警察官としても、エスパーとしてもそうするわけにはいかない。一刻も早く追いかねば！

(くそ、どこに行った？ 一刻も早く見つけ出さねえと……!)

地下道を出て、自身が住んでいるマンションの付近へ。
やり場のない焦燥に駆られ、キョロキョロと辺りを見渡す。
しかし、この夜の闇の中だ。街頭などの明かりも点いていて極端に暗くはないものの、なかなか見つからない。
苛立ちながら三日月を背に受けていると、地下道入口の屋根の上から長い舌のようなものが飛んできた。

「そこか！」

しめつけられる目前で掴み取り、そのまま舌を伸ばしてきたカメレオンを地面へ叩きつける。

更に、思い切り舌を引っ張り引きちぎった。浴びたくもないグロテスクな唾液が、豪快に散乱する。

そのまま胴体を切り上げて宙へ浮かし、狙いすませた突きを一閃！カメレオンの体は仰向けになり、そのまま吹っ飛んだ。
しかし、尚もカメレオンは立ち上がる。

「ヘッ、シツポに続いてベロまでとられたらもう……ん？」

しっぽがある。綱引きの要領で引きちぎったしっぽがある。

何故だ、あのとき確かにちぎったはずなのに。

この時不破は、底知れない違和感を感じていた。

同時にあることに気付いていた。こいつはさっき相手にした奴と違う個体なのでは、と。

案の定違う個体であり、背後からもう一体が不破に襲いかかる。寸前で振り下ろされたツメをかわし、槍で捌く。

こちらにはしっぽが生えておらず、感電して焦げたあとが体にあつた。

「2体1組か……ハッ、おもしれえ。やってやるうじゃねえか！」
自信たっぷりにそう言うと、跳躍してカメレオン2匹を飛び越す。かなりのスピードであったため目が追いつかず、キョロキョロと辺りを見渡す。

不破がどこに行つたか分からなくなった2匹には、ただひたすら戸惑いながらキョロキョロすることしかできなかった。

「おーい、どこ見てる！」

不破の声に2体が反応し、声が聴こえた方向へ攻撃を仕掛ける。しかし、そこに不破はいなかった。

それもそのはず、不破はお得意の超高速移動でカメレオンの周りをグルグルと回っていたのだ。

姿が見えたときにはもう遅く、仮に攻撃が届いたとしてもそれは残像。

何をしてもまったく通じず、戸惑うカメレオン2匹をすれちがいざまに攻撃していく。

「ほらほら、こっちだ！」

一閃。

「どつしたどつした？」

また一閃。

「遅すぎるぜお前ら！」

更に一閃。

「ああもつ、まどろっこしいな」

そして跳躍。丁度よい高さでランスを真下に構え、蒼く輝く三日月をバツクにそのまま一直線に降下する。

弾ける稲妻と空気の摩擦が合わさり、とてつもないエネルギーとなつて穂先へと集中していた。

「2匹まとめてブツ飛べやあーッ!!」

地面へ激突し、一気に大爆発!

2匹のカメレオンは跡形もなく吹っ飛び、灰燼に帰した。

むなしく燃え続ける残り火をあとにし、不破はマンシヨンの自室へと向かう。

手洗いうがいを欠かさずきっちりを行い、シェイドが吐き散らした溶解液などで汚れた上着を洗濯機へ放り込む。

長袖のシャツを羽織り、リビングへと戻る。ソファーに腰かけてテレビの電源を点けるが、とくに面白い番組がやっているわけでもなく、すぐに消してしまった。

かと思えばやはり気になつたか、またすぐに電源を入れた。今は独りぼっちでただでさえむなしなのに、これから晩飯を食べるのに無音では味気が無さすぎて飯が喉を通らないというもの。

明日も早いので、とりあえずすぐに食べられるもの　カップ麺とコンビニで買ってきた鮭おにぎりで済ませることにする。

「みんな高給取り、高給取りっていうけどよ……」

食事の最中、口からぽつりぽつりと独り言が勝手に飛び出していく。
テレビを見ながらカップ麺をすすり、ひとり呟く姿はどこか哀愁があった。

「高給取りが金持ちとは限らねーんだぞ……」

高級感溢れるいいマンションの快適で過ごしやすい部屋。

それとは不釣り合いなほどに質素な飯。そしてそこに住んでいるのは、周囲からやれ高給取りだの、やれ金持ちだのと、勝手に憧れられたり嫉妬されたり、なんやかんやで持ち上げられている不憫な男。

それもひっきりなしに、毎日のように行われるため、不破は心底うんざりしていた。

「っあー、全然落ち着かねえ」

日々、同僚から無理難題を押し付けられ　もとい、激務を引き受けさせられ、清涼剤となる存在がないわけではないわけではないものの、帰るのが遅かったり朝は早かったりで自宅についてもまったく落ち着けないでいた。彼に安息は許されないのだろうか？

「なんたるなあ。オレ、復職しない方がよかったかもなあ」

晩飯と呼ぶにはあまりにも質素で、庶民的というか貧乏くさい食事を終えて不破は大きいため息をついた。

「ああ、疲れた。今日は早く寝ますかね……」

ボヤきながらさっさと歯みがきをすませると、風呂もシャワーで

すませて五分も経たないうちに上がってしまった。

寝間着に着替えるとリビングに置いてあった自分のケータイを携え、電気を消してそのままベッドへ直行。

どうにも頭がスカツとしないので、今日はこのまま寝てしまおうとする。

「ぐがー、ぐがー」

でかいイビキを立てながら、不破はぐっすり眠ろうとしていた。

どうせ独り暮らしで自分以外は誰もいないのだ。

だから自分では立てたかすら分からないイビキを立てたところで、誰にも聞こえやしない。

できればこのまま朝まで眠りたかった。眠りたかったのだが。

「んあ……電話ア？」

どうも現実には彼に冷たいようで、まったくといっていいほど優しくしてくれない。

枕元で鳴り響いたケータイの着信音が、彼の眠りを妨げた。

「もしもし、警視庁捜査一課の不破ですがあ」

安眠妨害にイライラしながら気だるげにそう応えると、

「あつ、不破くん？ おやすみ中だった？」

「し、しっ、白峯さん!？」

相手はなんと、白峯とばりだった。

村上でなくてよかった、奴だったら胃に穴が開いて死んでいたと

ころだった　と、不破は心の中でそう思っていた。

「急な用事で悪いけど、明日あたしんちまで来てもらえないかしら？」

「えっ？　べ、別にいいですけど……」

「じゃ、そういうことだから。また明日ね、バイバーイ」

そうしてとばりからの連絡が切れた。

不破の魂が再び抜け、ケータイを手にしたまま仰向けに倒れ込んだ。

それにしても、とばりのいう急な用事とはいったい何なのだろうか？

EPISODE 57：俺たちの明日はどっちだ

彼は疲れていた。

彼は気分がすぐれないでいた。

彼はイライラしていた。しかし、もはや怒鳴る気力すら残っていないかった。

先日、就寝中に突然入ってきたとばかりからの連絡。

それは急用らしく、朝から彼女が住んでいる京都に来てほしいという内容だった。

あえて言おう、冗談ではない。こちらは日々の激務と、嫌味で口先ばかりな同僚のどうでもいいおしゃべりに付き合わされた疲れと鬱憤がたまっているのだ。

少しくらい休んだって、誰も文句は言わないはずだ。

なのに何故、そんな俺に頼み事をするのか。彼女なら、白峯ならこの状況下で、穴戸以外で自分を癒してくれると信じていたのに。

何ゆえ彼女にまで無理難題を吹っ掛けられねばならないのだ？

ありえない、ありえない、ありえない！ いったい俺が何をしたというのだ。

「ついてねエー……」

己の不幸を嘆き、これから次に我が身に起こるであろう理不尽な出来事を予想していると、今度こそ胃にギアガの大穴ばりに巨大な穴が開いて死にそうだ。

どっかで滝にでも打たれて何事にも動じない精神力を身に付けるのと、このままアゴでこき使われ続けて過労死するのとどちらが早いのだろうか。こんな予想を立てている自分が恐ろしい。

「うわーっ！ また渋滞かよー！」

東京がある関東地方と、京都や大阪のある関西地方はかなり遠く行くまでにもとてつもない時間がかかる。

朝6時からバイクを飛ばして高速道路を突っ走っていた彼だが、関西まであと一歩というところで恐ろしいほどの大渋滞に巻き込まれてしまった。つくづく運のない男である。

「これは相当やべーぞ。京都に着く頃にや、白峯さんきつと怒るだらうなあ……」

角を生やし、鬼のような形相でこちらを睨みながら怒り狂う白峯の姿。

そして白峯からボコボコにされた拳句、踏みつけられる自分脳裏にそれを浮かべることは容易だった。謝って許してもらえたらいいのだが。

「や、やっと……ついた。あ、あと少し」

心身共にフラフラになりながらも、不破はようやく京都に辿り着くことができた。

あとは白峯が住んでいる西大路に行くだけだ。

疲弊しきった不破とは対照的に疲れ知らずのバイクを唸らせ、一気に飛ばす。あともうひとふんばりだ。

「ぜえ……ぜえ」

そして、白峯の研究所兼自宅の手前にたどり着いた。

呼吸を荒くしつつブザーを鳴らし、もはや棒になりかけている足

を引きずりながら玄関へと向かう。そしてドアを開け、

「し、白峯さぁん」

「不破くん！ 来てくれたの……」

白峯がドアを開けると、そこには疲労のあまりやせ細って倒れている不破の姿があった。

「ちょっ……どうしたの!？」

「い、胃薬ください」

変わり果てた不破を拾い上げてやると家の中へ。

目がうつろな不破をソファーに寝かせてやり、すぐに薬や栄養ドリンクを用意する。

「これ飲んで不破くん！」

もはや生気のない顔をしていた不破の口を無理矢理こじ開け、その口へ栄養ドリンクを注ぎ込む。

「ふがふが……おげげえーっ」

白峯から注がれた栄養ドリンクを飲み干す。

一気に口に入れられてしまい、奇声を上げながらむせていた。

「お、オエツプ……」

思わず吐き戻しそうになった。しかし、その目には活気が戻り

「うおおおお！ パワァーッ全快ッ！！ ふつかあああああつ
！！！」

「あらら、すんごーい。お薬いらなかったね」

鼻息荒く、筋肉はムキムキに。やせ細っていた体に活力が戻った。それだけ白峯が不破に飲ませてやった栄養ドリンクの威力はすさまじく、彼女が言う通り薬などいらぬくらいだった。

元気を取り戻しすぎたあまり、不破は鬱陶しいくらいに筋肉を『ムキッ』と強調する変人と化していた。白峯も最初は乗り気だったが、そのうち飽きてイライラしてきた。

「あなたねえ……」

最終的には、どこからともなく巨大なピコピコハンマーを取り出し

「身の程をわきまえなさいッ！」

一発、また一発。仕上げにもう一発。これだけ不破の頭を思い切り叩けば、彼ももとに戻るはずだ。

とくに最後の一発は気合が十二分に入っており、確実に元に戻せる自信があった。

「で、オレに用事って？」

元に戻ると、途端に不破はシリアスな男に戻った。

ガツシリとした腕に浅黒い肌、意志の硬そうな目つき。

一言で言い表すなら、『細マッチョの美男子』だった。

ただし、頭からでかでかと生えた大きなたんこぶを除けばの

話だが。

「えーつとね。この前東條くんに、あの剣とか盾とかの話をしたでしょ。それにくつついていたオーブのことなんだけど……」

「え？ オレ、そんなときは蚊帳の外だったんすけど……」

「その時は治療中だったし、仕方ないわ。でね、そのオーブを……」

そう言いかけたところで、あえて白峯は言葉を区切った。

簡単には教えず、ある程度焦らしてから教えようという算段だ。

「そのオーブを……？」

「さあ、どうしたでしょう？ 正解したらあとでいいこととしてあげる。うふふ」

もちろんただ焦らすだけでは相手に失礼だ。

ちゃんと報酬こぼしびも準備しておかねばなるまい。

ちなみにいいことというのは 言わせるな、恥ずかしい。

「分かったぞ。レイアムランドまで行って取ってきたんでしょ！」

「ブツブツ。そっちのオーブじゃありません。東條くんがビー球って呼んでた方よ」

「えーつ」

仮にそこへ行っていたのだとしたら寒い中、やれごうけつくまでの、やれヘルコンドルだのといった猛者を相手にしてきたのだと思われる。

もしそうだとしたら、白峯は剛の者と呼ぶに相応しい女性だろう。それが本当の事だったならの話だが。

「じゃあなんスか。もしかして、オーブを作っちゃったとか!？」

不破が知恵を絞って考えた質問。
それを聞き受けた白峯はにっこりと微笑み、

「半分正解！ けど、半分残念」

「はい？」

「というのはね……」

再び白峯は言葉を区切った。

あくまで相手を焦らして行こうという魂胆のようだ。

知るまでを焦らされた分だけ、知ったときの快感は大きい。

かつて幼い頃、父や母からそうされたように、

白峯は不破を焦らしていた。

「オーブを作る方法を見つけた、正確には作れるかもしれない……
ってことなの」

「ま、マジですか。本当ですか？」

「ええ、本当よ。でも今東條くんが使っているのは、炎と氷だけだ
から」

アゴに手を当てて、熟考。

今からすぐにでも作れそうな属性が何かを、自分なりに推測して
いた。

まず人間にとって身近な属性 水や電気、風辺りからはじめて
いこう。

ただ、これらのものは東條が本来持っている属性とはまったく違
う。

もしかすれば、彼に負担をかけてしまうかもしれない。

「……そうねえ」

しかし、電気ならいけそうだ。
不破を色っぽい目つきで見、悩ましげな視線を送る。
そして、にやりと笑った。

「『電気』なんかいいかも。ねえ、不破君」

「ま、まさかそのためにオレを？　じよじよ冗談じゃない……、帰らせてもらおう！」

マツハで逃げようとする不破。

しかし、白峯に服の襟を掴まれ　振り向かされると、眼前には
白峯の顔がどアップで映っていた。

「まあまあ。このお返しはいつかしてあげるから……ね？」

「お返し……ハッ！」

そ、そうだ。確かにこれから人体実験とかされたらたまったもの
ではないが、

それに耐え抜けばいつかあんなことやこんなことをしてもらえ
はず。

『ばふばふ』してもらい放題、ビールも飲み放題。

いやいや、きつと焼肉屋でもきれいな姉ちゃん侍らせて焼肉食い
放題だ。

まさに両手に華、酒池肉林ッ！

美枝さんには悪いが、彼女はもう天国の人だ。彼女には悪い事を
してしまうが、

ここはひとつ　神様から与えられた試練だと思って乗り越えね
ばなるまい。

「……喜んで参加させていただくッ」

「つぶふ、そういうことだからよろしくね」

口くなことにならないのは分かりきっていた。

だから彼女に協力する事を選んだ。たとえ彼女の実験でこの身が滅びようとも、だ。それに見返りが大きいのならやる価値も十分にある。

しかし、彼は知らなかった。

これから想像を絶するほど酷い目に遭わされるといふ事を、

苦難の末に待っているのが夢にまで見たハーレムと飲み放題の食
い放題でなく、

更なる茨の道だということをして。

ああ、なんて哀れなのだろう。

なんと愚かなのだろう。

元々自分があまり運が良くないのを知っておきながら、自ら地獄
へ飛び込んでいくその姿。

まるで、明かりを求めるあまり火に飛び込む蛾のようだった。

EPISODE 57：俺たちの明日はどっちだ（後書き）

レイアムランド、それからごうけつぐまやヘルコンドルのくだりは『ドラゴンクエスト3』のネタです。

知らない方はごめんなさい><

EPISODE 58：橋上の戦い

その頃 京都ではシェイドが出現し、人々を襲っていた。
場所は、かつてあの弁慶と牛若丸が出会ったとされている五条大橋である。

「ギューイイイイツッ!!」

濃い水色を基調とした体躯に、毒々しいピンク色の目玉。

この巨大なシオカラトンボのような不気味なシェイドは、名をソルティヤンマという。

2足歩行で発達した前足は太く鋭い刃物のようになっており、比較的がっしりとした胴体とは対照的に足は異様に細長い。

ベースとなったシオカラトンボと同様、水辺や水田地帯を主な生息地としている。

「た、助けてくれえー!!」

逃げ遅れた老人にソルティヤンマが襲いかかる。

老人の足を切りつけて転ばせると眼前に右腕の鎌をかざし、そのまま切りかかるようにする。

もはや、これまで

「たあああッ!!」

ではなかった。

間一髪で大剣と盾を手にした男、健が横から助けに入り、老人は命を取り留めた。

「ここまで来れば安全です、速く逃げて！」

老人の肩を担ぎ、安全そうな場所まで運んで逃す。
すぐさま青いトンボが出現した橋まで戻り、相手を迎え撃つ。

「ごめん、待たせた？」

気丈にもそう言いながら、剣を両手で持って跳躍。そこから唐竹
割りをソルティヤンマに命中させ、見事にダウンさせた。

すさまじい威力の前に窮地に陥ったソルティヤンマは、起き上が
って飛翔し川の方へ逃亡した。

しかし、こちらへ対する戦意を失ったわけではなさそうだ。もし
かすれば、また戻ってくるかもしれない。

「さあ、どっから来る……？」

眉をしかめて、緊迫した表情を浮かべながら盾を構える。

敵の不意打ちを防ぐため、先にこっちから仕掛けるか、予め防衛
しておくか どちらかの行動をとる必要があった。

とくに今回は相手が機敏に動くタイプだったため、なおさら慎重
に出なければならなかった。

（ 来たッ ）

やかましい金切り声を上げ、これまたやかましい羽音を立てて水
しぶきを舞い上げながらソルティヤンマが滑空して戻ってきた。

このまま健に体当たりを仕掛けようというのだ。両手でしっかり
と剣を握り、迎撃しようとするが、足元の隙間から現れたクネ
クネした人型の 最下級シェイド・クリーパーによって背後から
羽交い締めになってしまう。

「がつ……は、離せえ!!」

全身で踏ん張って振りほどこうとするが、なかなか離そうとはしてくれない。

それでももがき、抜け出そうとする。

「ゲゲヤー!!」

「くっ……!!」

しかし、眼前にはソルティヤンマが全速力で迫ってきていた。

しかも衝突寸前だ。こうなればもはやここまで 攻撃を受けるしかない。

「大丈夫か!」

しかしそこへ、長い白髪のクールな女性 アルヴィーが、空中のソルティヤンマめがけてドロップキックを当てる。

もがき続けられて体力が持たなくなったクリーパーを振りほどいて突き放すと、

「アルヴィー、来てくれてありがとう!」

「礼などあとだ。それより今はこいつらを!」

二人は互いに背を預けあい、敵を迎え撃つ姿勢に入った。

こうやって背を預けられるのは、どちらもお互いを信じあっているから。

かけがえのないパートナーだという強い認識と、固い絆が二人の間にあつたからだ。

「ギユイギユイイイ!!」

ことごとく行動を阻まれ怒り心頭のソルティヤンマが、耳障りな雄叫びを上げた。

怒りに燃える奴に呼び出されたか、橋の隙間という隙間から大量のクリーパーが現れてこつた返す。

大袈裟だが本当に数が多く、この五条大橋を埋め尽くさんばかりの勢いだつた。

「やれるか、この数？」

「わかんない。けど……」

数では圧倒的に敵の方が上だつた。

不安げな表情で呟くも、すぐに険しい表情に変わり、前へ飛び出す。

「やるしかないでしょ!!」

行く手を阻むクリーパーたちをちぎっては投げ、ちぎっては投げ

健は猛烈な勢いで敵を蹴散らしていく。

剣の属性を切り替えて、相手を燃やしたり凍らせて砕いたり器用に立ち回りながら。

「健!」

「なんだい!!」

ある程度片付いて向こう岸が見えるようになったところで、アルヴィーが問いかけてきた。

「そろそろ本丸を叩きに行ったらどうだ? あの最下級の連中は、

そやつらより強い奴がどんどん呼び出す。三下は私に任せて、お主はあのトンボを！」

「分かった、あとよろしく！」

「うむ、任せておけ」

そう言って別々に戦うことにした。健はソルティヤンマを、アルヴィーはクリーパーたちの相手をそれぞれ引き受ける。

長いこと戦っている体には堪える、なるべく早く終わらせねば。跳躍して高欄に止まっていたソルティヤンマを切り裂き、川に落とす。すぐにソルティヤンマは飛び上がり、そのまま滑空。

「待て！」

たかってくる鳥合の衆を切り捨てながら、健は飛んで逃げるソルティヤンマを追う。

驚きの速さだが、何度となく強力な一撃を受けてきた奴のスタミナはほとんど残っていない。

もう一度地面に落とせば、今度はもう上がれないはずだ。

「ふらついてんじゃないの!？」

動きがふらつきはじめた、すかさず飛びかかりながら切りつける。羽を横に寸断して飛べなくすると、背中を掴んで持ち上げ切り上げる。

「うわっ」

起き上がった相手に脇腹を切られ、出血。だが、このぐらいでは健はへこたれない。

屈せずにそのまま斜めに切り下ろして片腕を切断すると、炎のオ

ーブを装填。

そのまま宙へ舞い上がり、その燃え上がる剣を真下へ突き出す。

「とどめだぁ　ッ！」

もはや相手は満身創痍、逃げ切れなかった。

健が地面へ激突して大爆発が起き、それに巻き込まれたソルティヤンマは木っ端微塵に砕け散った。

「おう、お疲れ！　早かったの」

「そつちこそ早かったね。これぐらい朝飯前だったり？」

「まあ、一応な」

「やっぱり強いなあ！」

大剣と盾を仕舞うと、二人一緒に橋を渡る。

故意にそうしたわけではないが　端から見れば、まるでカップルのような様子だった。

自宅で包帯を脇腹に巻いてから出直し、二人はみゆきがバイトをしている『トワイライト』へ向かった。

何を食べるかについては、向こうに到着してから決めることにしていた。

両者とも戦いの後で、しかも激しく運動していたため腹が減っている。

腹の虫の悲痛な叫び声に悩まされつつも、二人はトワイライトへ辿り着く。

「しかし今日は残念だったのう。見違えるほど強くなったお主の戦

いぶりをもつと近くで見てみたかったものだが……」
「しーっ、声が大きいよっ！」

とは言うものの、アルヴィーにそう注意した健の方が大声を上げており、他の客にまる聴こえであった。

よかれと思ってやったことが裏目に出てしまい、結果として彼が恥ずかしい思いをするはめになった。

悔しさを噛みしめつつも、健はメニューをとってアルヴィーに渡す。

ファミリーストラン 略してファミレスなだけはあるって、そのメニューは相も変わらず豊富であった。

「どれにしようかなあ。あ、アレとかおいしそうじゃね？」

「うーん、そうかの？ 私はこっちの方がつまそうに思えるが……」

こう腹が空いている時に、メニューに載せられている食べ物の写真を見ると余計に腹が空いてきて迷いが生じるというもの。

現に二人とも、どれにすべきか迷ってしまっていた。別に今は急ぎの用事があるわけではないので、こういう時ぐらいは焦らずにゆっくりと決めれば済む話なのだが。

「いらっしゃいませ、ご注文はお決まりになりましたでしょうか」

そうこうしているうちに、若いウェイトレスが注文を取りにやって来た。

『ハッ』と我に返った二人は慌ててウェイトレスの方を振り向くと、

「か、カツカレーで！」

「わ、私、ざるそばでっ!!」
「かしこまりました。もうしばらくお待ち下さい」

よく考えれば、別に取り乱すほどの出来事ではなかった。と、健は思った。

それはアルヴィーも同じで、かなり恥ずかしそうに顔を背けていた。
しすぎなほど反省しながら待っていると、やがて先ほどのウェイトレスが注文の品を持ってやって来た。

すぐに立ち直り、受け取ったカレーとざるそばに手をつけはじめた。

だが、その前におしぼりは欠かせない。しっかりと手についたばい菌や脂を拭き取るとスプーンや箸を持ち、改めて食べ始めた。

「かつ……辛あああ　っ」

「おお！ さっぱりしていてうまいのう！」

カツカレーとざるそば　どちらも味が全く違う食べ物だ。
前者は甘口もあるが基本的に辛く、食べば水が飲みたくなる。
一方で比較的早く食べられる食べ物でもあるため、時折『カレーは飲み物』と比喻されることもある。

本場であるインドでは、なんと手で食べられているという。文化の違いを感じる。

現地人ならともかく、日本人はスプーンで食べた方が上品というものだ。

後者は後味がさっぱりしており、清涼感の漂う一品だ。

どちらかといえば夏によく食べられるが、中にはのど越しのよさを味わいたい者もあり、そういった者には季節など関係なく食べられている。

このざるそばはその名の通りざるに盛られたそばを、別の器に入

つたつゆにつけてすする　という食べ方をする。
シンプルながらおいしく、上述のように愛好家も存在しているの
だ。

「ハア〜ッ、おいしかったなあー。アルヴィーは？」

「たまにはアツサリしたものもいいのう。またそばが食いたくなっ
てきおったわ……」

ホールでの仕事が忙しかったのか、結局みゆきには会えなかった。
レストランを後にし、二人はそそくさと帰路に着く。

そんな彼らをつまわそうとしていたものが、ひとり。

たこ焼き屋兼エスパーの市村だ。ニット帽に薄手のジャケットと、
カジュアルなファッションに身を包んでいた。

誰もいない事を確認すると、レストラン前の植え込みから出て、

「なんやねん、二人してうまいモン食いおって……」

二人が見える範囲で遠くへ行った事を確認すると、市村は尾行を
開始した。

「あの姉ちゃんだけでも追っかけたろやないかい！」

「いったい、彼の目的は？」

二人を追跡して何をしようとしているのだろうか。

EPISODE 58・橋上の戦い（後書き）

ソルティヤンマ

シオカラトンボのシェイド。濃い水色の体にどぎついピンク色の目、鋭い刃物のような両腕を持つ。

発達した複眼のお陰で視界がたいへん良く、周囲を360度見渡せるため死角がない。

しかしそれは弱点でもあり、強い光には極端に弱い。また、目の前でものを回されると目を回してしまう。

早い話、レッドヤンマの色違いである。こいつは消化液を吐かないが、その分格闘戦に特化している。

五条大橋で人々を襲って暴れていたが、駆けつけた健とアルヴィーによって倒された。

EPISODE 59：ただいま追跡中

「どうから見つからんよーに……」

小声でそう呟きつつ、市村は植え込みや電柱の裏などに隠れながら二人を追跡していた。

このままついていけば、二人について何か分かるかもしれないからだ。

「うん……？」

彼がある程度尾行を続けているところで、ターゲットの一人であるアルヴィーに感付かれた。

「どうしたの？」

「今誰かいたような……」

「気のせいでしょ。いーいー」

「そっだの」

かに見えたが、どうやら勘違いだったようだ。

(ほんまビックリしたあ……東條はんがアホで助かったわ)

危うく見つかるところであったが、この場はなんとか凌げた。

引き続き、極力見つからないことを肝に銘じて市村は進む。しかし、彼は肝心なことに気づいていなかった。ニット帽やジーンズはともかくとして、暗めの金色と濃い青色のスカジャン　今の自分の服装が、すこぶる目立つものであることに。

(こいつらさっき飯食ったトコやのに、もうコンビニ行くんかい…)

追跡中、健とアルヴィーはコンビニに立ち寄った。

雑誌か、飲み物か。それともエッチな本か？ 何を買おうとしているのか、それはまだ分からない。市村はとりあえず、窓の雑誌の棚の裏に当たる位置に張り付いて様子を伺うことにする。

「パチンコの雑誌買うようには見えん。マNDERとかドンドンとか買うようにも見えん。ちゅーことは、ゲームの雑誌かアダルトのどつちかやな……」

市村がブツブツと独り言を呟きながらショーウィンドウに張り付いている姿は、端から見ればまるっきり不審者のようだった。

「というか、今時わざわざこんなことをするような輩もそうそういない。やがて見回り中の警官が市村を発見し、

「おい！　そこで何をしている」

「ひええええッ」

彼にとっては予想外の出来事だった。

「くそ、どこに消えた……？」

「あ、あぶなあーっ」

危つく警官に捕まりそうになったものの、電信柱の上へ登ってやり過ぎず。

警官が通り過ぎたことを確認すると地上に降りて先程のコンビニへ戻る。流石にもういないかと、思った市村だったが。

「なんや、まだおつたんかい」

呆れたような安心したような、曖昧なため息をつくると再び物陰に身を隠す。

今度は店の手前に立て掛けてある看板だ。足さえはみ出さなければ見つかることはまずないので、隠れるにはちょうどいい役物だ。

(何を買ったかしらんが……続行や！)

二人がコンビニを出てからも市村は追跡を続ける。

この間は、生業のたこ焼き屋は休業だ。更にもしものときの為、得物である銃も持ち歩いていた。

「……むう」

その途中やはり後ろが気になったか、アルヴィーが振り返った。植え込みに隠れていた市村の背筋に、おぞましいほどの悪寒が走る。慌てた市村は、シャッターが閉まった店の軒下へしがみつく。

「どうしたの？」

「いや、その……なんだ。誰かにつけまわされている気がしてならんのだ」

「つけまわす……ハッ！」

怪しい男に捕まり衣服を剥がれて嫌がらせを受けるアルヴィーや、倉庫に閉じ込められていじめられるアルヴィー、あられもない姿をパパラッチに撮られてしまうアルヴィー……健の脳裏に、よからぬイメージが次々と浮かんでいく。そうしているうちに居ても立ってもいられなくなり、

「うがーっ！ 変態ストーカー野郎殺すッ！！」

「ま、待て。落ち着け！」

憤りを感じて暴れだす健を、アルヴィーが取り押さえる。

その光景を見て市村はおびえていた。そして確信を得た。見つければ殺される、と。それだけはまぬがれたい彼は、考えた末にとっておきの策を思い付いた。

「へへっ、コレ最強や！」

それは段ボールに潜みながら匍匐前進ほふくぜんしんで進むこと。

スニーキングの基本である方法だが、同時にかなり有効なテクニクでもある。

（あの伝説の傭兵も使った方法や……こっちからハマせえへん限りは絶対に見つからんで！）

もぞもぞと段ボールが動く様子は人目に目立つが、そういうときはピタッと動きを止めればいい。

何より、市村には絶対に見つからないという自信があった。何故そう思ったのか、その根拠はどこにもないが。要するに当てずっぽうである。

彼には、この方法が健やアルヴィーに通じなかったときを見越して別の方法を考えるほどの知恵はなかった。つまり、そこまで対策を立てられるほど頭が良くなかったということだ。

「ふへへへ〜」

薄ら笑いの中で浮かべながら、市村は性懲りもなく二人を追い続

ける。

段ボールがもぞもぞしながら動いている上に笑い声を上げたとなれば、ますます気味が悪くなり、余計に目立つようになる。もちろんそんなことなどお構いなしに、彼は動いたり止まったりを繰り返しながら、健とアルヴィーを尾行する。

「……のう、健」

「なんだい？」

「やっぱり、つけられているような気がするのだが……」

「気にしすぎじゃない？ けど……」

脇道にあった怪しげな段ボールに、健が近付いた。前屈みになって中を覗こうとする。

「ここまであからさまに怪しいと気になるよねえ」

そういつて段ボールの穴を覗きこむ。中が暗くてよく見えなかったが、何者かの目が光っているように感じた。

「確かにこれは、のう」

アルヴィーも屈んで、不思議そうな顔をしてその中を覗きこむ。乳房が膝に当たりそうだ。

「ひえっ」

肩に悪寒が走り、市村が思わず声を上げた。

間違いない、誰か隠れている！ そう確信した二人は段ボールを持ち上げ、中にいた市村を見て

「い、市村さん!？」

「お主……この前のたこ焼き屋か？」

見つからない自信があつたのに、なぜ 市村は冷や汗をかいて
ビクビクと震えていた。

「な、なんで分かつたんや!？」

「だって怪しいし……」

「そんなに道端にある段ボールが怪しいんかい」

「その段ボールが動いたら、普通怪しいと思わんか？」

「うっ……」

言葉が詰まり、何も言い返せない。どもる市村を壁際に追い込んだアルヴィーは、彼に脅しをかけるように問い詰めはじめる。

「答える。何故お主は我々をストーキングするような真似をした？」

「あ、あんたらのことをもっと知りたいからや……」

「ほお〜？」

気のせいかな否か、その視線は殺し屋のように冷徹だった。表情も冷たい笑みを浮かべており、するどい瞳も相俟って、見るもの全てを震え上がらせそうだった。

「それだけか？ 返答次第では二度とたこ焼きを焼けなくすることも考えているぞ……」

「ほ、ホンマや！ 嘘やない!」

「分かつた。詳しくは家で聞こう」

それは市村にとっては願ってもいない幸運だった。

見つかつて怖い目に遭ったとはいえ、向こうから彼らの住居に連れていってくれたのだから。そこへ至るまでの過程はどうあれ、結果として彼は得をしたと言えよう。

「さあ吐け。吐くんだ！」

「お主は本当に我らのことをもつと知りたかったただけなのか？」

もつとも今の状況と待遇は良いものとは言い難く、まるで取り調べを受ける容疑者のそれであつたが。

「ご丁寧にも机には古ぼけた照明と蓋つきのどんぶり鉢まで置いてあつた。ただし、どんぶりに中身は入っていない。」

「へん、そう簡単に教えてたまるかい」

「うわっ！ 何なのこの人、僕んちに案内までさせといてこの態度だよ。あつかましいヤツ！」

「コイツ最悪だの。いったいどんな教育を受けてきたのか、聞いてみたい気分だ」

「なんやと！ 人をバカにしくさつて」

「嫌なら白状せい」

「できれば罪を軽くしたいでしょ！？」

「ひいいい」

二人とも未だ口を割らない市村に顔を近付け、それぞれそう言つて揺さぶりをかける。

ふてぶてしい態度をとっていた市村も、もはやあとがないことを察知したのか、

「ほ、ホンマに東條はんや姉ちゃんのこともつと知りたかつただけなんや。ら……ライバルのことをなんも知らんとケンカ売るのもな

んかアホみたいでカツコ悪いしな。せやないと、お互いに正々堂々とした勝負がでけへんしなあ」

「……なんだ、そういうことだったのか」

しきりに事情を話した市村の真剣な眼差しを見て、アルヴィーが呟いた。

この時既に、先程までの鬼気迫る表情ではなくなっていた。

「せ、せや。べ、別にあんたらと友達になろうやなんて思ってないんやからなっ！！」

顔を真っ赤にしながら市村がそう言った。素直になれないあまり、彼は好意を突っぱねるような態度をとったのだ。彼自身、あくまでも健とは友達ではなく、ライバル同士でいたいと考えていた。

「あ、市村さんってもしかしてツンデレ？ 分かりやすうー」

「ちゃ、ちゃうわい！」

「ライバルというのは大抵ツンデレだからのー。このたこ焼き屋も例外ではなさそうだぞ」

「そんなんやない！」

顔をゆでダコのように真っ赤にして市村が叫ぶ。

「もうええわ、ワシ帰る！」

やがているのが恥ずかしくなり、市村は健の部屋から猛スピードで飛び出していった。

「……こりゃあ、デレたときが楽しみだね。悪い人じゃなさそうだし」

「まったくもって同意だ」

EPISODE 60：きれいな花にはトゲがある

「どれにしようかなあ〜」

市村と一悶着あつたあと、健は夕飯の買い出しに出ていた。

鼻唄まじりに買い物カゴへ品物を放り込んでいく姿はとても楽しそうで、シエイドと戦っているときの険しい彼とは違って変わってどこにでもいるようなごく普通の青年だった。

「あ、これいいかも。買いだね」

鶏の唐揚げ（しょうゆ味）を手にとり、カゴへ即入れる。

量はそれなりに多く、値段は普通よりも安めだった。どうやら広告に載っていた品だったようだ。

「これも良さそう」

次に彼は、袋入りのコールスローサラダをカゴへ入れた。

健康のことを考えると、バランスよく食事を摂らねばならない。肉だけでは栄養が偏る、だから野菜も買う。至極当たり前のことだ。

「おっといけない……」

買うべきものを買い揃えたところで、ふと思いついたようにドリンク売り場に慌てて走っていく。

「コイツで決まりだ！」

ゼロカロリーのサイダーをカゴへ入れると、健は今度こそレジへ向かう。

幸いあまり混んではおらず、このスーパーマーケットに於ける最大のライバル、主婦たちおはちやんと争わずに済んだ。

「ただいまー！」

意気揚々とアパートの自室に入ると、アルヴィーがTVを見ながらせんべいをかじっていた。

とくに何も言うことはない、いつもの光景である。手洗いうがいをすませてリビングに入り、彼女の隣に座った。

「おう、お帰り。ずいぶん買い込んできたようだが」

「まあねっ」

「しかしのう、確か今月はピンチではなかったのか？ そんなに買すぎてはあとが辛いぞ」

「それは言ってる。けど、たまには贅沢してもいいじゃない」

気楽そうに健が言った。どこかパツとしない顔をして、アルヴィーはそんな健を見つめていた。

垂れた眉と、それとは対照的につり上がっている目が、少し色っぽかった。

「これで当分買い物をせずにはすむっ！」

「そういうことだったのか！ お主、賢いの！」

「でしょでしょ〜？」

「だが……」

「ごそごそと音を立て、買い物袋から一本のペットボトルを取り出す。」

容量は500ミリリットル、ひとりで飲むにも二人で飲むのにも手頃なサイズだ。

「……私の分は無いのか？」

「え？ あ、あの、それはね、えーと……そういうわけじゃないんだけどね……うーんと、あッ！」

戸惑う健の頭の上で、豆電球が光った ように見えた。

恐らく迷った末の苦肉の策だろうが、何か考えが浮かんだのだろう。

食器棚まで行ってコップをひとつ取り出すと、すぐ机へと戻る。何をする気なのであるうか。

「ちよつと貸して」

「うむ、分かった……」

アルヴィーからペットボトルを受けとると、コップにそれをなみなみと注いでいく。

「おお、そうか。最初からこうすれば良かったのだな！」

「そういうことっ。これも節約のうちさ！」

自慢げに笑うと、健はアルヴィーと一緒にサイダーを飲み始めた。口の中で炭酸が弾け、爽快感が喉を通り抜ける。サイダー以外では他に味わえない、爽やかな感触だ。

「しかしゼロカロリーか……どっちかと言えば、ゼロじゃない方が好きなんだが」

「ご、ごめんよ！ また今度買ってあげるから……ね？」

「すまん。そういうことだから頼んだぞ」

健とアルヴィーが共同生活を始めてから、もう何日が過ぎただろうか。

かたやありふれた高卒のアルバイター、かたや見るもおぞましく神々しい白龍。

スケールも、覇気も、何もかも、こうして並べただけでも格の違いが分かるというものだ。

父親からの縁がなければ今頃は生きてはいなかったし、こうしてじゃれあう事もなかった。

本来ならばどんなことをしても釣り合わないはずのひとりと一匹。人と怪物が馴れ合い、親睦を深めることなど、普通に考えてまずありえないことなのだ。

ことの経緯いきさつを話したところで誰も信じてくれそうにないほど、これはイレギュラーな事態なのだ。

もつとも、この二人にはそんなことなど微塵も関係ない話だろうが。

あまりに仲が良すぎるため、端から見ればいちゃつく恋人同士にしか見えないが、あくまでパートナー同士だ。

それなりに距離は置いているし、何より片方には思いを寄せている幼馴染みがいる。

もう片方もそこまで干渉するつもりはなく、一步退いた立場から見守っている。

今後彼らの関係は、こんな感じに続いていくのだろう。

翌日

時代劇に出てきそうな古きよき街並みの路地。

人通りそれほど多くはなく、どこかわびさびを感じさせる。

その隙間で得体の知れぬ触手のようなものが、獲物を欲してい

るかのように轟めきうねっていた。

無論そのようなことが起きていようなど、この時は誰も知らなかった。道行く人々はほとんどがなんの力も持たない一般人。

エスパーはほとんどおらず、この場にいたとしてもほんの一握りだ。故に、危険極まりない状況。

「な、なんだこれ……ウワーツ」

そして、危機は訪れた。

轟音を立てて、茨のような不気味な触手が隙間からせり出し、逃げ惑う人々の手足に絡み付いては引きずり込んでいく。

その締め付ける力は強く、誰もが抵抗したが振りほどくことは出来なかった。

「な、なんだ。一体何がどうなってるんだ……?!」

ウロコのお守りから発せられた反応をキャッチし駆けつけた健も、その異様な光景を見て目を丸くして驚いた。

隙間から出ている巨大な植物の根っこがひしめきあいながら、その辺の建物やオブジェを破壊しているのだ。驚かない方が不自然だというものだ。

「た、助けておくんましいい」

そして今また、逃げ遅れた舞妓が悲鳴を上げながら異空間へと引きずり込まれようとしていた。

この悪意ある根っこを放置しておくわけにはいかない、襲われた人々を助けねば。健は剣を構えて駆け出す。

行く先々でうねる異形の根っこを断ち切りながら、舞妓のもとへ向かう。

「舞妓はん！ 今助けますッ！！」

舞妓の足首に絡み付いていた根っこを切り落とすと、舞妓を抱えて安全な場所を探す。

根元を叩きに行くのは今抱きかかえている舞妓を避難させてからだ。

危険に巻き込むわけには行かない。

「わざわざ助けてくれてごめんやす。ところでお兄さん、怪我とかしてない？」

「平気です。……じゃあ、行ってきます」

「え……ちょ、ちょっと。お兄さん、どこ行かはるんどすか！？」

叫ぶ舞妓を尻目に、健は前に屈むほど必死で根っこがひしめいていた場所へ急ぐ。

このままでは被害の拡大は確定 どこかに本体がいる。

叩いて根絶せねば。火のオーブを装填し、炎の剣を握って搜索を始める。

「どこだ……本体はどこだ！！」

襲来する根っこを焼きつくしながら、健は根っここの本体を探し回っていた。

あれだけひしめいているが、本体はどこにもいない。

この状況で何もできない自分にイライラしていると 見覚えのある白龍が、隙間からニユツと顔を出していた。言わずもがな、この龍はアルヴィーだ。

「健、こっちだ。一緒に参ろう！」

「ああ、頼む！」

異空間へ飛び込み、彼女の背にしっかりと掴まる。

四方八方から風が吹いている故に、少しでも気が緩めば追い風に吹き飛ばされてしまう。

だからこの空間は非常に危険だ。しかし、今はこれしか方法がない。

「健、あの根っこを見たか？」

「うん。あんなデカいのはじめて見たよ」

「あれは、植物型のシェイドが伸ばしているものだ。その力は計り知れない」

「早く何とかしなきゃ。どこに本体がいるか分かる？」

目を閉じてアルヴィーが鼻を嗅いだ。やがて気配を感知し、目をカッと開く。

「わかったぞ……ここを曲がった先だ。しっかり掴まっとれよ！」

「おげーっ！」

今の彼女は数十メートルほどはある巨体だ。

動いただけで物凄い風圧が周囲に発生する。

「あいてて……」

出る寸前に振り落とされた健が、痛そうに頭を掻く。

ふと辺りを見渡すと、そこは鬱蒼と林が生い茂ったどこかの参道だった。

痛みをこらえて立ち上がり、とりあえず道なりに参道を登ってい

く。

気味の悪いことに、道中では無数の複雑に絡み合ったツタが地面を埋め尽くしていた。

やがて健は、建物などがメチャクチャに荒らされた痕跡を目にする。

「酷いなこりゃ……………」

「流石に根っこの本体がいるだけはあるな。さっきの場所よりも荒れ果てておる」

「アルヴィー、いつの間に！　ところでここは……………」

「うーんと」

腕を組み、深刻そうな表情を浮かべながらアルヴィーが熟考しはじめた。

「……………確か、しみずでらといったかの？」

「ちやうちやうちやう、それ言うなら清水寺きよみずでらやないかい！」

突然出たボケに、すかさず鋭いツツコミを入れる。

「そうであったな……………とにかく今は急がねば！」

シェイド反応を追い、道中で行く手を阻む根っこを切りながら二人は寺の本堂へと向かう。

やはりというべきか、京都でも屈指の観光名所にして重要文化財である本堂はこっ酷く荒らされていた。

一連の騒ぎの主犯へ怒りを覚えながら、二人は中へと入っていく。

「真っ暗だ……………」

中は瓦礫で光を遮られていて、ほとんど何も見えなかった。吐き気を催すほどに轟めいているツタや根っこに軽い嫌悪感を覚えながら、更に奥の方へと進んでいく。そして、更なる戦慄が二人を襲う。

「穴が開いてる……まさか、この先に？」

その床には大きな穴が開けられていた。

飛び降りれば、地下深くまで行けそうなほどの深さだ。

もし飛び込んだ先に根っここの本体がいるとするなら、少々気が滅入るが、降りるしかない。

勇気を出して、二人は巨大な穴へ身を投じた。

「あいたー……」

無事　とは言いがたいものの、着地することができた。

一息つこうとしたが、次の瞬間アルヴィーが遅れて落下してきてずしん！と、背中にとてつもない衝撃がのしかかった。

「ふう、下にクッションがあって助かった。……うん？」

何があるか気になったアルヴィーが下を見ると、そこにいたのは自分の下敷きになって伸びていた健。

慌てて飛び退き彼の体を揺り起こすと、軽く謝って土埃を払う。

「すまんかった……しかし、こんな地下深くまで続いているとはのう」

「ホントだ、天井が高い……」

このような空洞が清水寺の地下にあったことなど、誰が想像した
だろうか？

炎の剣をたいまつ代わりにして、更に空洞の奥深くへと足を進め
ていく。

奥に行けば行くほど地面 いや、壁にもツタが繁ってきて、如
何にもという不気味で寒気がする空気が辺りに漂いはじめた。

やがて、つい先程落ちてきた空間と似たような場所に出た。
背筋を伝う悪寒が、より一層強くなっていく。

「…………アレかな」

「かもしれないの……………」

薄暗くてよく見えないが、壁を茨が覆ったこの空洞の真ん中には
巨大な何かがぼつんと立っていた。

恐らく、あの蕨く根っこの本体だろう。だが、いやに静かだ。

ここまで静まり返っていると、かえって恐怖感を煽られるという
もの。

案の定、その不安は的中した。二人の存在を察知すると急に
動き出し、閉じていた花びらを展開させる。

大きな口にはキバが生えそろっており、その肉食植物然としたグ
ロテスクな姿はお世辞にも美しいとは言えなかった。

ポテツとして丸っこい球根からはその花びらだけではなく、ヒト
でいう手に当たる触手も生えていた。

絡み付けるよりは薙ぎ払ったり叩いたりする方が向いているよう
な形だ。

いずれにせよ、時間をかけてはいられない。被害を食い止め
る為にも、早々に倒さねばならない。

「アオオオオオオオオオオオオ!!」

花びらが咆哮を上げた。

空洞全体に響き渡るほどの大きさで、思わず足がすくんだ。だが、怯えている場合ではない。この怪植物を伐採せねば！

「まるで怪獣だ……！」

「健、相手は世界にひとつだけの花だ。だからって手を抜く必要はない……！ いっそ刈り取ってやるぞぞ！」

「ああ、そうしよう！」

さあ、戦いだ！

EPISODE 61：異形の花

身の毛もよだつような唸り声を上げながら、巨大な植物がその人間の胴回りほどはある触手を横に振るった。

地面がえぐれるほどの威力だ、盾ではとても防ぎきれそうにない。次から次に繰り出される攻撃をかわしながら、健は反撃のチャンスを探る。

「ヤツの動きは大振りだ、腕を振る前に叩いてしまえ！」
「分かった！」

確かに威力は凄まじいが、冷静に見てみれば隙も多かった。こちらから仕掛けて一気に叩けば十分いける。かもしれない。確信を得た健は、一気に畳み掛ける戦法に出はじめた。

「うわっ！」

そう思った矢先、あの大きな口から毒液が吐き出された。大したダメージは受けなさそうだが、毒に冒されてしまうと危険なことに変わりはない。

転がってかわし、隙を突いて毒液を吐いてきた花びらに飛びかかりながら斬りつける。

頭部を斬られたこと、炎が燃え移ったことよって激痛が走り、頭部に当たる花びらが悶絶しながら唾液を吐き散らした。

「よし！」
「いいぞ！今のうちに片腕を切り落とせ！」

アルヴィーの指示通り、相手が炎上して苦しんでいる間に片腕を

切り落とすことにする。

地面に飛び降りて回り込み、跳躍して触手を切り上げる。

切り落とされた触手が地べたに落ち、炎上していく。怒った花びらが唸り声を上げると、地中からいくつもの根っこが突き出され健を遠くへ弾き飛ばした。

「ゆ、油断した……」

「困ったの……健、今度は慎重に出る必要があるぞ」

こうなった以上、迂闊に近づけば根っこが絡み付いて動きを封じられてしまう。

だが、かといって手を出さないままでは戦いが終わらない。

今の状況は非常に危険で、なおかつ切り抜けるのが難しい。

遠距離から攻撃するべきだろうか？　しかし、その手段は限られている。

何より自分の得物は剣だ、近距離に特化している。では、どうすれば？

いや、そこまで難しく考えることはない。細心の注意を払いながら根っこを切つて、切つて、切りまくればいいのだ。

それか、凍らせて動きを封じてしまってもいい。どちらにせよ、攻めるに越したことはない。

「健、じつとしている場合では……!!」

「ああ、そうだった!」

熟考している隙を狙い、轟めく根っここのうちの一本が襲いかかった。

転んでかわすとそれを切り落とし、燃やしていく。だが、切られた痕から根っこが再生した。

ならばこうするまでだ、と、健はオーブを入れ替えた。どう出よ

うとしているのだろうか？

「いいアイディア浮かんだ！」

「……え？」

まだ余裕があるのか、健がのんきにそう言った。そんな彼を見て、アルヴィーは目を丸くした。

「簡単なことさ……」

轟めきあう根っこが、槍の鋭くくねりながら健を襲う。だが、それをものともせず健は斬りかかる。

「うねうね動くこいつらを……凍らせるっ！」

冷たく輝く氷の斬撃を浴びた根っこが凍結し、その動きを止める。同様に他の根っこにも次々斬りかかり、動きを封じていく。

「そういうことか。流石だの、健！」

「いやー、それほどでも」

アルヴィーから賞賛の言葉を贈られ、健が照れる。

その隙を狙って、敵の本体の触手が凍り付いた根っこをなぎ倒し、粉碎しながら健に襲いかかった。

油断した隙を突かれて空高く打ち上げられるも、すぐに体勢を立て直し一回転して剣を振り下ろす。切られた先から凍り付いていき、やがて碎け散った。

「危ない危ない……」

「いいぞ健、あともう一息だ！」

両腕をやられ、もはや巨大植物は息も絶え絶えだ。

「よし、一気に行くぞ！」

オーブを入れ替え、炎の剣に変えるとケリをつけるべく、健が走り出した。

巨大植物も最後の悪あがきと言わんばかりに、まだ残っていた根っこを地中から次々に突きだし、くねらせた。それでも健は突き進み、本体を前にすると空高く跳躍。

「でやあああああ！！！」

丁度よい位置で激しく燃え盛る剣を斜め下へ突き出すと、そのままオーラをまとって降下し巨大植物を貫通。

苦痛に喘ぐような断末魔の叫びを上げながら、巨大な肉食植物ブルームマンチャーは爆発四散した。

根源を絶たれたことにより、この空洞や清水寺に犇めいていた根っこが枯れ、塵と化していく。

早期に討伐されたためか引きずりこまれた人々は解放され、全員もとの暮らしへ戻っていった。

「あつ、根っこが！」

「ふふつ。これでひと安心、だの」

「うん！ 国の重要文化財も無事……じゃないけど助かったしね」

「重要文化財……？ ああ、しみずでらのことか」

もう名は覚えていたはず。しかし、それでもアルヴィーは言い間違えてしまった。

「違つよ、清水寺！」

「すまんのう……」

「頼むよ……そういつところかわいいけどさ」

二人で談笑しあいながら、彼らは地上へ戻ろうとしていた。

だが、こんな地の底からどうやって帰ろうというのか？ その答えは簡単だ。隙間から異空間にダイブし、適当なところで外に出るだけ。

無事に地上に出た二人は、仲良く我が家へ向けて歩き去っていく。その後ろでは、空に浮かぶ夕陽が沈もうとしていた。茜色の雲とオレンジ色の空は美しく、赤い夕陽と相俟って酔いしれそうなほどに優美な夕焼けを演出するのに一役買っていた。

真つ暗闇に覆われた、どこかの礼拝堂のような部屋。

唯一の明かりである中央の特殊なもやを、幾つもの黒い人影が取り囲んでいた。

「どういうことだ。あんなモヤシみたいな小僧がどでかいシェイドを倒しちまったぞ。奴ら、いったいなにもんだ！」

低い男性の声で、大柄な影がうるたえた。暗くてハッキリと顔は見えないが、口調からして少なくとも粗野で豪胆な性格であることが窺える。

「違つな、あれは武器とパートナーの力だ。あの小僧が強いのではない」

うるたえる影を、冷静な壮年男性の声でもう一体の影が落ち着か

わせていた。

皆の姿がこの暗闇のせいで視認できない中、この男だけはハッキリとその容姿が見えていた。

男にしては長く、女から見れば短い髪にサングラス。瞳は青緑色だ。

「悠久のときを経て現世に蘇った武具とそれを振るう小僧」

若く知的な男の右に、健が握る剣・エーテルセイバーのイメージ映像が映し出される。

「我らを裏切り愚かな人間どもに味方する白龍」

そして左手には、その白龍・アルビノドラゴンと、人間体である白髪の女性のイメージが浮かび上がった。どういうわけか彼は眉をひそめ、表には出さなかったものの心の中で憤っていた。

「どちらにせよ我らの敵ではない。今は精一杯泳がせておけ」

眉を釣り上げたまま、若い男は悪魔のように冷酷で残忍な笑みを浮かべた。

ただならぬ威圧感、得体の知れぬ謎の影　　いつたい、彼らは何者なのだろうか。

EPISODE 61：異形の花（後書き）

ブルームマンチャー

植物型のシエイド。

肉食植物がそのまま怪物化したような外見をしており、無数に伸びた根っこを影や隙間から通ずる異空間から伸ばして獲物を捕食する習性を持つ。

清水寺の地下深くに根を張り京都中の人々を食らおうとその根っこを轟かせたが、地下へ駆けつけた健のファングブレイザーにより爆破された。

EPISODE 62：元氣、湧き出る

「間に合うかなー……」

健はいつもより10分ほど早く家を出て、早めにバイト先に向かっていた。

何でも今日は仕事が多く、朝早くからヘルプに行かないと人手も足りないのだという。

道中で腕時計を何度もチラチラ見ては、逐一現在の時刻を確認していた。

「おはようございまーす！」

元氣よくあいさつをすると気持ちがいいものだ。

カバンから必要なものを全て取り出し、上着もロッカーに入れてくるとすぐ持ち場に着いた。

今の段階でできそうな仕事がないかどうかも聞いたが、待機を命じられたので座って待つことにする。

「よいしょ、よいしょ……」

「あっ」

やがて、見るからに重たそうな荷物を持ち運んでいるジェシーの姿が目に見え込んできた。

これは放っておけないと思った健は立ち上がり、彼女のもとに向かう。

「ジェシーさん、女性の細腕でそんな重たい荷物を運んじゃ腕を壊してしまいます。ここは僕に運ばせてください！」

「えっ、運んでくださるの？　すごく重たいですよ……」
「いえ、平気です！　やらせてください」

ジェシーから荷物を渡され、それを健は腰に力を入れて持ち上げる。

だが、思った以上に重量があり　いつも１メートルの鉄骨と同等の重さを持つ剣を握っている彼でも、流石にこれは堪えたようだ。

「あゝ、本当に大丈夫ですか？」

「ふ、二人で運びましょう。力もちょうど二倍になりますしね！」

二人で協力して荷物を指定された場所まで運び、上げっぱなしだった腰をようやく下ろすことができた。

「休憩とりましょう。無理したら体を壊しますから」

そう聞いた健は、足をふらつかせながら自分の席へ戻った。

直後ぐったりと伸びたが、すぐに立ち直って次の仕事が来るまで茶でも飲んで、気長に待つことにした。

「東條くん、これ配ってきて！」

「東條さん、これワードで打ち出してください」

その後も次から次に仕事を頼まれ、健はせわしくノルマをこなしていった。

最初は出来ないことばかりで周囲の足を引っ張っていた彼も、今や何かと頼りにされる便利屋のような立場にいた。

笑顔を絶やさず、何事にも真摯に取り組み、必要なことさえ教えれば何でもこなせる。そんな彼に、周囲の人々は男女問わず好意を持っていた。

「さて、ランチにしますか」

そして、昼休みが訪れた。

思い切り肩の力を抜いても、昼寝をしてもいい　要するに悪さをしないのなら、何をしても許される時間だ。

「おっ、このお弁当おいしそうね。もしかして自作？」

「はいっ！」

「スゴいじゃん！　あたしなんかいつもお弁当屋さんで頼んでるのよ」。それに比べたら東條くん、えらいッ！」

ちあきからそう誉められ、健が照れながら笑った。

朝起きてから時間に余裕があるからこそ出来る芸当だ。

たとえ昨日の夜食の残りでも、おかずにはなる。わざわざおにぎりを握らずとも、ごはんをケースに入れるだけでも良い。

弁当を作るのは、そこまで難しいことではないのだ。

「も、盛り付けはまだまだですけど……いいと思いますよ！」

「はい！　盛りつけがんばります！」

まだ荒削り、しかし叩けば伸びる　というニュアンスを含めて、みはるがそう言った。

何事にも真剣に取り組む性分ゆえか、健もその期待に答える心づもりをしているようだ。

「ほどよい量でおなかにも優しいそうですね。ここにも東條さんの人柄が出てると思うわ」

「いやあ、それほどでも……」

「私なんかいつも定食並のボリュームだから……もう、おなかがパ

ンパンになっちゃうんです」

さらりと彼女は言ったのけたが、根っからの庶民である健やちあきからすれば想像を絶することだった。

毎日の昼食が、飯屋やレストランで出される定食並に豪華で量が多いというのだから。

ある意味うらやましくもあつた、何故なら普段自分たちが食べているのは質素なもので、量もその半分以上。

うらやましいと思わないほうが無理だというものだ。

(そ、そうだ、忘れてたわ……！)

(今でこそあたしらと同じ庶民だけど、ジェシーさんは元資産家のお嬢様……！！)

(僕たちが到底かなう相手じゃなかったんだ……！)

ジェシーを除いた三人は、その厳しい現実と高嶺の花である彼女の前に打ちひしがれていた。

体内に何の前触れもなく高圧電流が流れ込んできたような、如何ともしがたい衝撃が走っていた。

しかしジェシーには、何が起きたかサッパリ分からなかった。

だいぶ庶民の生活に慣れたとはいえ、一般人とズレた感覚を持っているからだろうか？

「ふーっ」

昼食も無事食べ終わり、気持ち良さそうに健が大きく伸びをした。

その顔はどこか幸せそうで、充実した生活を送っている証のようだった。

「ヘイ、東條サン。チョットこっち来るネ」

そんな彼に、係長のケニー藤野が招集をかける。

健とは対照的にふてくされたような態度をとっており、やや機嫌が悪そうだ。

「キミ、調子乗ッテルデシヨ。ミーにはわかるネ」

「い、いや、そんなつもりは……」

「ユーはお城でいうなら安土キャツスルみたいなタイプ。今でコソ繁栄シテルけど、すぐに崩壊するネ。一度崩れたら最後、ユーは何もナツシングの廃墟みたいにナルヨ」

「そう……ですか。肝に銘じておきます」

「ユー自身のタメにも、あまりお調子に乗らないことデス」

ただのひがみにも聞こえたが、今思えば係長は彼の事を氣遣ってそう忠告してくれたのかもしれない。

事実、強すぎる力を手にした人間はうぬぼれてその力に溺れ、周囲に振りかざすようになるものだ。

それが強大であればあるほどに、心が闇に染まり歪んでいく。

まるで、己自身が人である事を捨てるように。

もはやこの世にいない浪岡が、そうであったようにだ。

強すぎる力には、それ相応の代償が伴う。

それは、捨てるはならない、背負っていかねばならない宿命なのだ。

時には力に酔いしれる自分を罰し、戒めねばならぬこともある。

厳しい現実には打ちのめされながらも、果敢に立ち向かわねばならぬときもある。

それが、強くなるということなのだから。

「大杉さん、失礼します」

ケニー藤野からの忠告を聞いて相談したいことが思い浮かんだ健は、事務長室に入り大杉に悩みを打ち明けようとする。

「おお、東條くん！ 何やらワケありに見えるが、どうしたのかね」

大杉は眩しいほどに明るかった。

一点の曇りもないほどに。

もやもやする暗雲を抱え込んだ自分とはまったく違う。

これが、大人特有の『余裕』というやつなのだろうか。

「……最近、思っています。僕はこの力をみんなを守るために使ってるんじゃないかと、意味もなく振りかざしているんじゃないか。強くなった自分に酔ってるんじゃないか、って……」

「わしは君と違ってエスパーじゃないから、なんとも言えんが……その、なんだろうね。別に力を持つってこと自体は何も悪くない。本当に正しいことだけに使えばいいんだ」

真剣な眼差しで健を見ながら、大杉はそう語る。

いつにないほど真剣で、厳格な表情だった。

「たとえ誰から何を言われようが、自分の意志を貫く。鉄のように硬くて揺るがん意志を持つんだ。君にはその覚悟はあるかね？」

「……いえ……」

眉をしかめた健が、その表情を曇らせた。

誰だっけ自分が正義だ。自分では正しいとは思っていても、それ

は間違いだと指摘されるかもしれない。

絶対に正しいものなど、この世には存在しないのだ。
覚悟を問われ、確固としていない健の心が、未だかつてないほどに揺れ動いていた。

「いいかね、決して一人で溜め込んだじゃいかんよ。溜めたものを吐き出せずに爆発させてしまうのが、一番危険なんだ。だから、何か困ったことや悩みがあったらわしやみんなに遠慮せず言ってみなさい。みんな、君の味方だからね」

「……はい」

「大杉さん、失礼します」

話が済もうとしたところで、思いがけない来客がやってきた。

このおっとりとした優しい声と口調は、ジェシーだ。

「……すみません。大事な話をしているらっしゃったみたいですね」

「いや、かまわんよ。君も悩みとかないかね？」

「とくにはありません。ただ、東條さんのことが気がかりで……」

大杉の言うとおりだ。

すぐ近くにも、こうやって心配してくれているものがある。

親身になってつきあってくれている仲間がいる。

「ジェシーさん……」

「あなたは他人への心遣いが十分できてます。だから、今度は自分を大事にしてください。無理をしすぎて体を壊しちゃったら、そっちの方がみんなイヤですから」

「はい……わかりました！」

沈んでいた彼にも元気が戻ろうとしていた。

現にこうやって、憂鬱で曇っていた顔も元気で明るいものになった。

「頼りにしてますよ。うふふ」

その微笑みは暖かく、なんのやましい心もない。

心の底から癒されるような、清々しい笑顔だ。

俄然、元氣も湧いてきた。

「おや、ちょうど退勤時刻だな。東條くん、また元氣で来てくれるかね？」

「はいっ！ もちろんです！！」

「そうだよ、それ。その笑顔だよ！ 久々にいつもの東條くんを見れた気がするぞっ」

「私もそう思います」

「そう言ってもらえてとても嬉しいです！ ではまた……お先に失礼しますッ」

「癒されるのう」

健が混み合う電車の中で息を荒げながら悶絶している頃、アルヴイーは先に風呂に入ってたまってた。長い髪をタオルでまとめていたが、それでも前髪がはみ出していた。

そのうちの一本は、鼻や口に当たりそうなほど長く伸びていた。

もしこのタオルをほどけば、浴槽は瞬く間に髪の毛で埋め尽くされることだろう。

「あやつと会ってからだいぶ経つが、本当に立派になりおった。明

雄もきつと天国で泣いておろうなあ。私も鼻が高いというものだ」

彼女は感傷に浸っていた。

健と初めて出会ったのは師走の風がきつい季節。その頃は肌寒く、しかも何も身に着けていない生まれのままの姿で健と出会っていた。どこからどう見ても変質者そのものだ。それでも彼は、彼女に服を貸してこのアパートまで案内した。

あの親切心から来る行動も、今思えば偶然ではなく必然だったのかもかもしれない。

今ではすっかり仲のいい同居人、季節もちょうど桜が咲き始める温暖な季節だ。

「……一度でいいから、水着を着て泳いでみたいのう」

これからより暖かくなって肌の露出も増えてくるだろうし、海にも行ってみたい。

そんなささやかな願望を、彼女は抱いていた。

十分温まったところで風呂から上がり、タオルをほどいてその膝まで流麗に伸びた髪をなびかせた。

拭き取ってもなおも残る水気が、彼女の長髪や白い肌をより美しく引き立てていた。

「アルヴィー、ただいま……ッ!？」

運の悪いことに、そこに健が入って来た。

別に彼に悪意はなかった。ただ単に手を洗おうと洗面所にいっただけなのだ。

たまたまそこに風呂上りのアルヴィーがいて、しかも服をまだ着ていなかった。

不運なのか、幸運なのか、すこぶる微妙なところである。

「た、健……おぬし何のマネを……」

慌ててバスタオルを巻いた。

だが、それでもアルヴィーの豊かな胸は収まりきらずに上半分が今にも零れ落ちそうだった。

恥じらいを感じた彼女の白い肌が、ほのかに赤く染まっていた。

「あ、あ、えーと……ごめん、そんなつもりは」

「乙女の風呂上りをのぞくな、このどスケベがあゝゝ……！」

「うぎゃあ　　っ……！」

いても立つてもいられなくなったアルヴィーが、健に飛びついた。突然のしかかたれて、健もタジタジだ。

それでも二人は幸せそうだった。

EPISODE 63・影は動き出す

翌日、西大路

「つぎつぎ」

地下の実験場で、不破は槍の穂先からの放電をもう何時間以上も続けていた。

それも朝からずっと立ちっぱなしでだ。もう足が棒になっているし、腕にいたっては既に吊ってしまっている。

髪の毛はボーボーでチリチリだ。そのうち、手足が年老いた木の枝のようにポキリと折れてしまいそうだ。

とばりから聞いた限りでは、いま眼前にあるコイルに電気を集中させ、それを凝縮してオーブを作るとの事だったが。

一体いつ、それはできるのだろうか。それまでに耐えられる自信がない。

「半日ずっとこれだ。これじゃゲームもできないよ……」

「へえ、そんなことしたかったんだ。不破君って意外とだらしないのねえ」

白峯が、とばりがいないのを見計らってふと洩らしたその言葉。

事もあるつか、とばり本人に聞かれていた。

これは諷められても当然、文句は言えない。

「疲れたでしょ。いいわよ、休憩して」

「その言葉、待っていた！」

実験場から地上一階のリビングに上がり、体が暑くなったので上

着を脱いでタオルを首にかける。

ため息をついて虚ろな目付きをしている彼を見かねたとばかりは、『英気を養え』と言わんばかりに栄養ドリンクとクッキーを差し入れに持ってきた。

「よかつたら昼寝しててもいいわよ」

「恩に着ます！」

少し人をからかうような口振りではあったが、ちゃんとこちらを労ってくれている。

どこぞの警部補にしてシェイド対策課の課長さまとは、どう考えても器が違う。

ヤツは働かせるだけ働かせて何もくれない。何かをくれるとしても、それは嫌味だけだ。

それに比べて彼女はちゃんと差し入れを持ってきてくれるし、働いた分だけ見返りもくれる。

人としても、ひとりの女としてもよく出来ている気がする。

そう思いながら、不破は一時の休息を心行くまで満喫していた。

「ところで白峯さん。あれってあとのどのぐらいで完成しますかね？」

「うーん……そうねえ、もうひと頑張りってトコかしら」

「本当ですか？ やった！」

形はどうあれ、ようやく自分の能力を活かした仕事をやり遂げられそうだ。

不破は大いに喜び、年甲斐にもなくはしゃいだ。

無理もない、それまでの苦労がようやく報われた瞬間だったのだから。

「よし……」

午後からも不破は放電を続けた。
あともう少しと言われたからには、さっさと終わらせねばなるまい。

とぼりも出来るだけ完成を急ぎたいはずだ。

「仕上げだ！」

しばらく出力を中くらいにしていたが、ここに来て一気に放出。
今日までそそぎ込んできた分も含めて、膨大な量のエネルギーが溜まっていた。

はち切れんばかりのそのエネルギーは、今にも弾けとんで爆発しそうだ。

自分の仕事はここまで、次はとぼりが動く番だ。

「つ、疲れたア」

ため息をつく、肩を落とし千鳥足でとぼりに報告しに行く。

「白峯さん、作業終わりましたよ。次はどうしたらいいツスか？」

「そうねえ。これからあなたが電極に貯めた電気を凝縮してみるわ。作業終わるまで、休んでていいわよ」

「よっしゃああああ！！！！」

それならお言葉に甘えて思いつきり休んでやろう、と不破は意気込んだ。

今度はガッツポーズまでとり、心底嬉しそうだった。

しかしこれがぬか喜びであることを、彼はまだ知る由もなく。

「だけど、あなたにはまだ頼みたいことがあるから、外には出ないでちょうだい」

まるで出勤日を迎えたアルバイトやサラリーマンのように、盛り上がっていた気分が一転して不破の顔が青ざめた。

「こ、今度はなんですか……?」

「それは作業終わってからね。……さっ、お風呂入るなり寝るなり、あとは何をするのも不破くん自由よ!」

「え、じゃあメシは?」

「うふふ。そういうだろうと思って、もう作ってあるわ。暖めてから食べるとおいしいよ〜」

ちょうど腹も減っていた。これでようやく食事にありつける。

大急ぎで不破はリビングへと駆け登っていった。

「おお、これは……すばらしいっ!」

新鮮な野菜や魚に如何にもうまそうな肉類、そしてツヤツヤのお米。

完食する頃には計り知れないほどのスタミナがつきそうだ。

「このご馳走を食わないなんてもったいなえ……ありがたくいただきます!」

働かざるもの、食うべからず。彼のケースに限らず、仕事をやり終えたあとの食事は絶品である。

たとえそれが質素な食事で、高級食材が使われていなくても、だやがて豪華な夜食を馳走になると彼は健からも好評だった大浴場に向かい、ここまでにたくさん流した汗をきれいさっぱり洗い流し

た。

風呂に浸れば、嫌なことも疲労もすべて吹き飛ぶ。至福のひとときだ。

思う存分体を暖めると、不破は風呂場を出た。

どうやら長く浸かりすぎてのぼせたらしく、赤くなっていて足取りも不安定になっていた。

ソファーに腰かけると、職場では絶対に出来なさそうな伸びをしてそのまま就寝。

何も上から被らずに寝れば湯冷めしてしまいそうだが、平気なのだろうか。

（翌日、早朝）

薄い霧に覆われた首都・東京。暖かい季節にはなったが、まだまだ朝は寒い。

朝焼けの美しい空が見下ろす中、徐々に人々の姿が増えて行く。

そんな首都の一角に立ったネットカフェに、こんな朝早くからネットカフェに入り浸っている一人の男の姿があった。

その男はくすんだねずみ色の髪に黄緑色の瞳をしており、見るからにちやらんぽらんで品性は無さそうだ。次に、緑色がメインカラーのストリートファッションに身を包んでいた。そして、大きくあくびを上げていた。

「これ、おもしろえなあ〜！ オイ！」

彼はネットサーフィンの途中で目にしたブラウザゲームにどっぷりハマったらしく、歓喜の声を上げながら楽しんでた。

しかしその割には難航していたようで、ミスをして怒ることも何

度があった。

そして飽きれば、ため息をついてまた別のモノを探す。そうやって遊んでいると、途中で映像が流れ込んで中止させられた。

「貴様、何をやっている！！」

「うわっ！ か、甲斐崎か。おどかすなよ……」

「まったく……少し目を離せばこれだ。社会性のないヤツめ」

どうやらただの映像ではなくテレビ電話だったようで、画面の向こうの相手と会話が成立していた。その相手は黒髪に、ハイライトのない青緑色の瞳をしていた。

「まさか与えられたミッションを忘れて遊んでいるわけではないだろうな？」

「と、とんでもねえ。ちゃんとやるって、これから……」

「ならいいが……」

「バカな人間どもを混乱させて、あの剣持ったガキになりましたらいいんだろ？ 楽勝だつてばよオ！ ヒーツヒツヒツ！」

「でかい声を出すな！ 周りの連中に聴かれるだろうが！！」

別にこの男は大声など出してはいない。出していたのは、スクリーンの中の男である。

それも、思わず耳を塞ぐほどの音量だった。

咳き込んだ男は、ズレた話を戻すように

「いいか三谷、まずはあの男と親しい人物に片っ端からイヤガラセをしる。そして汚名を着せて陥れるんだ」

「へいへい」

「乗り気じゃないようだな……この作戦はお前の大好きなイタズラから始まるんだぞ？ 今口頭で指示したのもそうだ」

「ケツ！ えらそうにしゃがって。悪いがあんたの指図は受けねよ！ じゃあな」

「おい、三谷……！」

パソコンの電源を切ると、三谷と呼ばれた男はネットカフェをあとにした。

肌寒い街の中を、気だるげに歩いてゆく。

催促されなくても最初から、与えられた任務を遂行するつもりではあったようだ。

ただ、彼は肝心な事を聞き忘れていた。

「……あのガキ、住所どこだっけ？」

剣を持った男の住所を。

E P I S O D E 6 4 : 悪質なるフェイク

「この辺りだなあ？ ボスが言ってたのは……」

先程のねずみ色の髪の男・三谷が、人混みの中に紛れてにやついていた。

東京から、何らかの特殊な方法を用いて瞬時に京都まで移動したのだ。

その目的は、自身がボスと呼んだ男から与えられた任務をこなすためだ。誰かに命令されることを好まない彼にとっては、正直不本意ではあった。

しかし、当たり前ながら力関係では「ボス」にはかなわない。命が惜しい、だからその「ボス」に従う。

下手に逆らえば、「ボス」の手でその場で首をはねられてしまう。つまり嫌々従っているということになり、これは一種の強迫観念だった。

「ひひひ」

目に留まったスーパーマーケットを前に薄ら笑いを浮かべると、男の姿がぼやけてモザイク状に歪んでいく。

やがてモザイクが消えると、男の姿は先程までとはまったくの別人に変わっていた。文字通り他人に「化けた」男は、そのままスーパーに入っていく。

（けっけっけ。お一人様につき1パックだあ？ そんなの関係ねえ！）

特売品である卵1パックを買っては外に出て、違う誰かに化けて

はまた1パック、また違う誰かに化けてはもう1パック　これをなんと、推定5回も繰り返していた。

もちろん彼、三谷に買った卵を食べる気など毛頭なく、店側がこの悪質なイタズラのことを知ったら大いに怒り狂うことだろう。

犯人はその都度他人に成りすましていたため、その怒りにはやり場がないが。

「……あれ？　あの人さつきも……」

しかし彼の悪事はあるひとりの人物にしっかりと目撃されていた。バイト先に行く途中のみゆきだ。三谷が何度も他人に化けてスーパーに出入りを繰り返すさまを、この目にとらえていたのだ。

この事を咎めようと、みゆきは元の姿に戻った三谷に近寄る。

「ちよつと！」

みゆきの声に気付いた三谷は、慌てて逃げようとする。だが、ズルをして買った卵5パックは重石になる。

では、どうすればいいのか？　近くにいる適当な人間に化けて押し付ければいいのだ。重石を他人に押し付け身軽になった三谷は、その場から逃走。

「待ちなさい！」

「待てと言われて待つわけねーだろ！」

しかし相手の方が脚力は強くて速く、全力で走ってもみゆきは追いつけなかった。

だが相手もスタミナはそれほどなかったらしく、道中のベンチで休憩をとっていた。

「や、やっと追いついた……。あなたが買ってしまったあれって、一人につき1パック……」

みゆきがそう言って注意しようとした瞬間、三谷はまた別の姿に変わっていた。

今度はみゆきもよく知っている人物だ。

「う、ウソ……健くん？」

薄ら笑いを浮かべながら舌なめずりすると、健に化けたまま三谷は再び逃走。

みゆきは軽いショックを受け、しばらく動けなかった。少し落ち着いたところで、腕時計を見ると。

「い、いけない。もうこんな時間！ 急がなきゃ！」

このままでは遅れてしまうことに気付いたみゆきは、駆け足でバイト先であるレストランへ向かった。

その頃、うまく逃げ切った三谷は 何を思ったか、京都市役所に足を踏み入れようとしていた。

「ここで聞けば何か分かるかもなあ……ヒヒヒ」

ここに狙いを定めたのが悪辣に笑い、舌なめずりする。

誰も見ていないところでモザイク状に姿を歪ませ、健に化けると正面から堂々と入っていく。その手には鉞まさかりが担がれていた。

「おはよーございちゃーっす」

気だるげにそう言いながら、扉を蹴り開けて三谷が化けた健が事

務室に入ってきた。

明らかにいつもと様子が違っていた為に、ジェシーらは動揺を隠しきれないでいた。

「と、東條くん？ 今日に限っていったいどうしたの？」

「ちょうどイライラしてたんで暴れに来たんですよオ。あんたらがあーだこーだ『俺』に命令しやがんのが腹立つんでさア！」

『俺』？ いつも彼は自分のことは『僕』と言っていた。それに口調もどこか乱暴、何か違う。

突然刃物を振り回して暴れだす健を眼前にして、浅田のみならず事務室にいた全員が底知れない危機感と激しい違和感を抱きはじめていた。

「やめなサイ東條サン……」

みなが動揺し恐怖に震えているなか、係長が周囲のものに当たり散らしている健に近寄る。

「ストオー……ッブ……！」

「うるせえんだよオツサン……！ いつもいつもこの『俺様』にエラソーに注意しやがってよオ！ 上には上がいるってこと知らねえのか！ アホ！ ボケ！ カス……！」

つかみかかってきた係長を蹴り飛ばし地べたに落とすと、そのまま踏みつける。

更に無理矢理起こし、ケニーの胸ぐらを掴む。

「あぐぐ……ユー、東條サン違うネ。東條サンはこんなコトしないヨ」

「あゝあ！？」

「確かに、東條サンちよつとチヤホヤされすぎ。のさばってるね。ケド、ミーの知ってる東條サンは少なくとも、ユーみたいにバイオレンスなクソ虫ヤローじゃなかったネ！」

「ごちやごちやうるせえんだよ……死ねええッ！」

いきり立った偽東條が、その手に握ったまさかりを大きく振り上げる。さすがのケニー係長も、これでご臨終　しなかった。

「は、離せや！」

まさかりがケニーに振り下ろされる前に、背後から偽東條の腕を何者かの手がつかんだ。それは紛れもなく　東條健その人の手だった。

「えっ、東條さんが二人！？」

「なにこれ……どっちが本物なの！？」

「たぶん……いや、どう見ても乱暴なぼうがニセモノよ」

「ハハハ、ミーの思った通りデス」

そもそも彼らが騙されるはずがなかった。

まだまだ短い付き合いとはいえ、東條健がどのような人物なのかは皆だいたい分かっていた。

ややおつちよこちよいで心配性で頼りないが、基本的に明るく温厚で誰にでも優しく、真面目な性格。それでいて働き者。

そんな彼がいきなり他人に暴力を振るったりモノを壊したりするなど、想像がつかないことだ。ゆえに今取り抑えられている東條はニセモノ。簡単に見分けがつく。

「す、すみません。すぐに戻りますので……それまで待つていただ

「けませんか？」

あとからやってきた東條が言った。皆がその要求を呑んで頷いたことを確認すると、振りほどこうともがくニセモノを引っ張って、東條は市役所の外に向かう。

適当な場所でニセモノを離すと、血相を変えて睨み付けた。自分そっくりなニセモノの姿がみるみるうちに歪み、まったく別の姿に変わってゆく。ニット帽にねずみ色の髪、黄緑の瞳と服装だ。

「姿を変えた……？ 目的はなんだ！」

「ヒヒヒ……そんなの知ったところで意味ねえぜ？ 何故なら、お前はここで死ぬんだからなああ！」

舌なめずりするとまさかりを担ぎ上げ、男が駆け寄って切りかかる。

横に跳んでかわすも、男は執拗に追撃を入れる。やがて健は、芝生の木の下まで追い詰められてしまった。

だが見切った。相手は大振りで技術力はあまりなく、ただ単にまさかりを力任せに振り回しているだけ。だがパワーは強い。それを上手く弾き返せば、行けるかもしれない。

「なにっ!？」

一瞬の隙をついて男の攻撃を弾き返し、そのまま反撃をありったけ加える。

「は、早い！」

突然の反撃に対応しきれず、ニット帽の男は防御を強いられた。

それでも健の猛攻は止まらず、最終的に鼻や右肩に傷ができた。

「こ、このガキ……よくも俺様の顔に傷をつけてくれたな!!」

「うっ、ぐあーっ!!」

いきり立った男がまさかりで切りかかる。その動きは早く、かわしきれなかった健は腕と足のすねを切り裂かれた。裂かれた箇所から真っ赤な血が流れ出る。

「へっへっへ……」

相手に見せつけるように舌で刃についた血をなめまわし、不気味に笑う。

対して健は、切られた箇所から血を流しながら苦悶していた。そんな健にとどめを刺そうと、ねずみ色の髪の男はゆっくり近寄る。

「冥土の土産に教えてやんよ。おれはオメーに化けて親しい連中に嫌がらせするつもりだったが、何故だか気が変わっちゃまってなァ……オメーをアジのひらきみてえにしたくなっただんだ!」

(……やっぱり!)

ペラペラと流暢に喋りながら、男は逆手で持ったまさかりを引きずっていた。地面で摩擦している音がやかましいことこの上ない。

「ま、どっちにしる生かして帰さねえってこった……キエエエエエエッ!!」

耳を塞ぎたくなるような奇声を上げてねずみ色の男が走り出す。

このままいけば健はまさかりで一刀両断され、亡きものにされるだろう。

著しいダメージを負って動きが鈍っている以上、とっさには動けない。ならばやるべきことは一つだけ。

運を天に任せ、反撃に出るか。それとも盾でガードするか。ふたつにひとつ、どちらかをやらなければこの逆境は切り抜けられない。

(攻めか守りか……どっちにしよう?)

熟考している場合ではない　ということ、彼自身もよく分かっていた。

だからといって無策で飛び出しては終わりだ。そして、答えはすぐに出た。

「ここは攻めるッ!」

考え終わったとき、既にねずみ色の男は眼前にまで迫っていた。健はそれをなぎ払い、宙へ吹き飛ばす。更に浮き上がった男の体に狙いを定め、落下しながらの斬撃を繰り出した。地べたに叩きつけられてもなお、男は立ち上がる。

「うづくぐ……この三谷様をコケにしゃがって!　殺してやるウウウウ!」

自分を手こずらせる健に怒りの矛先を向け、まさかりを掲げながら疾駆する。

鬼気迫る勢いだった、思わず圧倒されそつだ。だが、それを前にしても健はひるまない。

「隙あり!」

「げッぶああああ!」

鋭い反撃が炸裂！ 敵が接近するタイミングを見計らい、一瞬の隙を突いて切られる寸前で迎撃したのだ。

ねずみ色の男は奇声や血しぶきを上げながら前方に宙返りして吹っ飛び、地べたに叩きつけられた。

「ギギギ……やりやがったな、このクソガキツ！！ 覚えてやがれえ！！！」

ねずみ色の髪の男 三谷が立ち上がり、左腕を押さえながら苦しそうに、悔しさ混じりに喋った。

恐らく、『こんな奴は俺の足元にも及ばない』という強烈な過信が彼の中にはあったのだろう。

その自惚れが原因で油断が生じて、味わいたくもない屈辱を味わった。

憤慨した三谷は顔を歪ませながら、カッとその瞳孔を光らせる。両目から放たれた光線は楕円を描き、健の前に炸裂。火花が散ると共に白い煙幕が上がった。

「し、しまった。目眩ましか……？」

咳き込みながらそう呟く。煙が晴れる頃には、そこに三谷の姿はなかった。

「それにしても、アイツは何だったんだろう……」

三谷が忘れていったキャップを拾い上げ、市役所のオフィスを目指して歩き出す。

そうしながら、先程三谷と戦ったことを回想していた。奴が流していた血は、赤色ではなく 青みがかかった紫。

動物の種類によって色が違うこともあるが、基本的に血液は赤い。

地球上の生命体なら、みな赤い血を流しているはずなのだ。

次に思い当たる点は、あの分厚くて切れ味鋭いまさかりを軽く振り回していたこと。もちろんそれ相応の重量もあるだろうし、常人にはとても振り回せそうにない。

ということは、あの三谷という男は見た目に反して体を鍛えていたのか？ それとも、巨大な岩ですらサッカーボールのように軽く持ち上げてしまうほどの怪力の持ち主だったのか？

だが、どちらもサツパリ見当がつかない。奴はどう見ても今のチャライ若者であまり体を鍛えているようには見えなかったし、腕もそんなに太くはなかった。だからこの考えは間違いだ。

だが、気になる点はこれだけではない。あの不気味な雰囲気は普通の人間が出せるものではないし、そもそも普通の人間なら目から妙な光線は出さない。

姿を変えて誰かに成り済ますことだって不可能だ。あれは変装なんてレベルのものではなく、姿・形を文字通りコピーして『変身』しているようだった。

人間業とは思えない、きっと奴には何らかの特殊な能力があり、それを使って。

「……………うん？ 待てよ、あいつもしかして……………」

もしかや三谷はその手の能力を持ったエスパーか、あるいはシエイドが人間に化けた姿なのでは？ それなら違和感を感じたのも納得が行く。このとき健は、不確かなりに推測していた。三谷に隠された秘密、そしてその正体を。

「……………うっ」

「東條くん、どうしたの。また出血したの？」

「い、いえ。大丈夫です」

「ならいいんだけど……あなた怪我人なんだし、あんまり無理はしない方がいいよー」

医務室で治療を受けた健は仕事に復帰し、怪我を押しあくせく働いていた。

表面上は明るく笑顔を振りまいていて一見大丈夫そうだが、頭の中では不気味に笑う三谷のイメージが何度もよぎっていた。

本当は辛かった、だが弱みは見せられない。人々を未知なる恐怖から守るため、そして笑顔を守るために戦っている自分が弱気になっただけではない。ここはせめて、表面上だけでも元気に振る舞わねば。

「しかし暴れてた方がニセモノで良かったわ、ホント」

「あたしもそう思いました。東條さんはあんなに乱暴な人じゃないですからねー」

「わかるわかる！」

「あつ……、ありがとうございます」

「東條さんつてすごく優しくいい人ですからねー。それにしても東條さんに成り済まして悪いことするなんて……ひどすぎるわ」

「ホントですよー。やる方は楽しいんでしょうけど、やられる方はたまったもんじゃありません」

本当に自分は上司や同僚に恵まれている。みな優しい人ばかりだ。こうした何気ない会話の中でも、自分がどれだけ信頼を寄せられているかを、健はしっかりと感じ取っていた。

「ただいまーっ」

いつも通りにアパートの自室へ入ると、さつさと手を洗ってアルヴィーに顔を見せに行く。

「どういうわけか部屋がきれいになっており、ものもあらかた片付けられていた。」

「おう、お帰り。モップがけと部屋の片付けをしておいたぞ」

「ありがとう！　しっかし、そこまでしてくれるなんていい人だね
くっ」

「私でもモップぐらいはかけられる。それで……今日は何かあった
のの？」

それまで笑っていた健の顔が、急に深刻な表情に変わった。

「あまりにも突然だったために不審に思ったアルヴィーに、健が語り出す。」

「……ねえ、アルヴィー。シェイドも血は赤いの？」

「いや、赤くない。みな青紫色の血が流れておる。ただ……」

恥らうように少し目をそらすと、アルヴィーが、

「どういうわけか私の血は赤いんだ」

「えっ？　そういえば……ウロコはがしたときとか……」

「他のシェイドはみな紫の血なのに、何故私だけがそうなのかわからん。だが、抜け落ちた記憶と関係しているかもしれない」

視線を戻したアルヴィーの顔は、どこか夢げで人間味があった。

「抜け落ちた記憶を取り戻したいという強くてひたむきな思いも、ひしひしと健の心に伝わった。」

「記憶かぁ……どうやって取り戻せるかな。僕もできるだけのこ」

とはするよ」

「かたじけない」

「ところで……その紫の血なんだけど、今日どう見ても人間だったのにそれを流してたやつがいたんだ。そいつと戦ったんだけど……」

何か予感的中したような顔をしながら、アルヴィーが健に詰め寄る。

「……どんな奴だった？」

「えーと……斧持ってて、チャラチャラした感じでカジユアルな服着た奴だった」

「そうか、そいつは怪しいのう……ハッ！」

「どうしたの!？」

「そやつは人の姿形をしているにも関わらず紫の血を流していたのだろう？ だったら、『上級シエイド』かもしれぬぞ」

「上級……シエイド？」

その言葉は何度が聞いたことがあった。以前戦って打ち倒した浪岡がたびたび口にしており、その手下である緑川という男も一度口にしていた。

だが、あくまで聞き覚えがあるだけ。意味などはまったく分からない。上級とつくからには、通常のものより格が上だということか？ 健はまたもや、分からないなりにそう推測をしていた。

「なんなの、それ」

「シエイドの中でも一線を描く戦闘力と知能を併せ持った、文字通り格上のモノたちの事だ。分かりやすくいえば 普通のシエイドがヒラや派遣社員で、上級シエイドは社長や部長といったところかの」

「そうか！ 確かにそんな感じ！」

「驚くにはまだ早いぞ。その社長や次長課長は、みな人間の姿に化身して人間界に潜り込んでおる。だから　ひと目見ただけでは見分けがつかんのだ」

人間の社会に、人知を超えた力を持った恐ろしい怪物が人に化けて潜り込んでいる。

ひよつとすれば身近な人間や、あるいは自分の家族もそうなのかもしれない。

怪物はどこから襲って来るか分からないというのに、近くに潜んでいるかもしれないとなればより一層恐怖心が膨らんでいく。

考えても見れば、恐ろしい事極まりない話である。

「お主が今日出会ったというその人物は、上級シェイドである可能性がある。いや、確実にそうだ」

「やっぱり……なんとなく、普通じゃない感じはしていたけど」

「さっきも言ったように連中はいずれも手強いからの。決して抜かすらぬことだ」

無造作に伸ばした髪をかき上げ、アルヴィーがそう警告した。

彼女も薄々感じていたのだ　平穩が訪れたばかりか、戦いがこれから一段と激しさを増していくということに。

「ちなみに私も一応は上級シェイドに入る」

「え~~~~~~~~ツ!!」

「そ、そんなに大きい声を出すな！　お隣さんに聴こえるぞ！」

それでも彼女は、密かに願っていた。

如何なることが起きようとも、これからも健と共に戦い続けたい、と。

たとえ彼が年老いてこの世からいなくなっても、人間を見守り続

け
た
い

と。

EPISODE 65：謎の影と策謀

「なんだよなんだよ？ あのクソガキはよお……この俺に恥かかせやがってさあ」

その頃。全てにおいて自分に劣るはずの人間に出し抜かれ、逆転されたことが認められず、失意のままに三谷はさまよっていた。何より強く 屈辱を受けたことへの怒りと憎しみが、彼の中で燻っていた。トンネルに入った彼の独り言が、大きく反響。

「キエエエエエツッ！！」

耳をつんざくほど大きな奇声を上げて、三谷が憤慨した。

爆発する怒りの感情が抑えられず、何度も自分の左腕を手で叩いていた。

そのまま叫びまくって周りのものに当り散らしながら、周りに誰もいないことを確認すると廃工場の中に身を隠した。

人っ子ひとりいないこの廃工場を、もう何年も前から点けっぱなしの古ぼけたオレンジ色の照明だけが寂しく内部を照らしていた。

奥の方まで入ると、座り込んで安堵の息をつく。やる気なさげに伸びをしていると、上の方から別の男が現れて階段を降りてきた。

「ずいぶん派手に暴れてくれたらしいじゃないか。あれだけ流血しておいてよくも呑気でいられるものだな……三谷！」

「か、甲斐崎……い、いや、しゃ、社長自ら来てくださるとはなんと光栄な……ひひっ」

その男の名を呼んだ瞬間 否、目にした瞬間から、三谷の背筋には恐怖による悪寒が走っていた。その鋭い緑青色の瞳は、確実に

三谷を蔑視していた。取るに足りない、下の下の存在　　としか思
つていなかった。

「いくら人の姿に擬態しているとはいえ、血液の色ひとつで簡単に
区別はついてしまう。それに人間どもは敏感だ　　奴らの視点から
考えてみる。紫色の血を流すヤツがどこにいる？　そんな奴がいる
わけがない。それを見た瞬間、奴らは感付くだろうよ……こいつは
同じ人間ではない、とな」

三谷は恐怖に震えて何も言わなかった。何も言えなかった。足腰
がすくみ、立ち上がれないほどに狼狽していた。それほどまでに、
この　　甲斐崎かひさきという男は強く、シェイドにとっておぞましい存在
なのだ。

「人間は愚かな生き物だが……口先ばかりでろくに頭の回らないお
前はそれ以下だな。せめてあの場で逃走していれば良かったものを」
「う、うるせえ……！　いつもいつもエラソーにしゃがって。だい
たいあんたが最初から俺を手助けしてくれていたら俺が恥かかねー
で済んだのによオ！　……ウツ！？」

先の尖った石を拾い上げ、見下したような視線を三谷に送ると、
甲斐崎は彼の左腕をつかみ上げた。手に持った石をそのまま、彼が
負った傷に突き刺した。

紫色の血が吹き出、甲斐崎が石でえぐる度に、湯水のように血が
どくどくと溢れ出す。失言したことへの許しを乞うように、三谷は
右手をぶるぶると震わせながら甲斐崎の肩に伸ばした。

苦悶する三谷を見て、甲斐崎は悪魔的で冷酷な笑みを浮かべてい
た。やがて石を抜いて放り捨て、惨めな姿をしている三谷を見て、

「なんとも味気が無い……お前が人間だったら今頃大笑いしている

ところなのだが」

「ひ、ひいひい」

「まあいいだろう。だが三谷……」

立って三谷を見下していた甲斐崎が屈んで三谷の顔を覗きこみ、

「次にしくじったとき、お前の命はないと思え！」

壁際でびくびくと震えている三谷を尻目に、甲斐崎は廃工場から去っていった。

自分へ対する理不尽な仕打ちに対しての怒号だけが、そこら中にむなしく響いた。

「戻ったぞ、お前たち」

どこかの礼拝堂の中。

以前三谷らと会合を開いたその場所に、甲斐崎は戻っていた。軍服を着た大柄の白人男性と、メガネをかけた牧師風の服を着た壮年の男がそこにいた。

「ああ、あんたか……三谷はどうしたんだ？」

「少しイビってやった。奴はそうでもしないとやる気を出さんからな」

「確かにそういうタイプでしたなあ、あいつは」

腕を組みながら軍服の男が笑った。

見たところ頑強な肉体の持ち主で、その腕っ節は決して侮れなさそうだ。

その歴戦の武人といった感じの出で立ちが、彼から強者の余裕と

底知れぬ威圧感を感じさせる。

「それで、三谷がしくじったあとのことは考えてあるのですか？」
「慌てるな。あんなヤツの代わりなどいくらでもいる。お前たちも例外ではない」

気難しそうな顔をしているメガネの男に対し、余裕と嫌味たっぷりに甲斐崎が言い放った。

用が済めばいつでも捨てられるように、捨てたものの代替も用意しているのだろう。

本意は定かではないにせよ、策士然としたその佇まいからそう思った意図が受け取れた。

「つまり同胞でも捨て駒にすると？ 社長らしい冷酷な考えですな」
「ありがとうございます」

嫌味ったらしく、甲斐崎がメガネの男性に礼を言った。
もちろんバカにする目的でだ。

「ところで『クイーン』はどうしたんだ？ この前から全然姿を見かけないんだが……」

「『クイーン』か？ あいつなら今産気づいているらしいが」
「またか……何度招集をかけても来ないと思ったたらそういうことだったとはな。よほど俺の言うことを聞きたくないらしい」

甲斐崎が不満そうに名を呟いた『クイーン』なる人物。
名前からして女性である可能性が高いが、その正体はまったく見当がつかない。

産気づいている ということとは、当然出産もするはず。
シェイドも他の生物と同様、子を成すということになるのだろう

か。

「フツ、まあいい」

鼻で笑いながら、懐から懐中時計を取り出して開く。
それを掲げるようにして見つめると、

「焦らずとも、時間はまだたっぷりあるからな」

雷鳴が轟き、一瞬光が外から室内に飛び込んだ。

その時照らされた影は人のものではなく 人とはかけ離れた異形
の影だった。

〜翌日〜

上級シェイドの三谷は、なぜ自分に成り済まそうとしていたのか？
いったい何を企んでいたのか？ そのような疑問を抱いていた健は
一晩中熟考しており、その結果一睡もできずに一夜を過ごした。

お陰で目の下に隈ができ、頭はクラクラだ。朝っぱらから彼は、
立ちくらみに悩まされていた。

「はあーっ。今日バイトじゃなくてホント良かった……」

「健うゝ、メシはまだかか？」

「はいよ。ちよっと待ってねー」

アルヴィーが甘えるようにそう言った。今はこんな状態である。
本当は文句のひとつでも言いたかった。

だが、自分はそれでいいと思っていても、そんなことをすれば相手は悲しむ。それに女性には優しくしなければ　そんな健が出す答えはたったひとつだけ。

それ以外の回答を彼に求めるのは野暮というものだ。専用のフライパンの上で卵を割って手早くかき混ぜ、こしように味付け。

ここからの派生として、ほうれん草やベーコン、カニの身を混ぜることもある。これで卵焼きの完成だ。これをまず、アルヴィーの元へ持っていく。

次に白ごはんを茶碗に入れ、二人分用意してから持っていく。すると『暖かいものがほしい』と言われたので、今度は味噌汁がわりにお湯をカップ麺に注ぐ。3分待つタイプと5分待つタイプがあった。

「お待たせー！　ちよつと貧乏臭いけど……どうかお許しを」

「いや、余裕で許そう。それに庶民の味のほうが、私らには似合っておるからの。では……」

二人同時に手を合わせ、食事前の定例である『アレ』を行おうとしていた。

「いただきますー！」

そして爽やかでささやかな朝食会がはじまった。

品揃えはどれも庶民的かつ質素なものだが、すべて共通点があった。

それは、人の愛が籠っているということだ。

変な意味での愛ではなく、他者への思いやりという意味で。

料理を作るのに、上手いも下手も関係ない。愛と情熱を持って取り組めば、それでいいのである。

「さあ、リフレッシュしよう」

今日は元々バイトに行く日ではない。

それにアルヴィーも、自分が部屋に置いていきがちなせいで退屈しているはず。

だからこうやって、気分転換の為に外出するのだ。

二人とも日々の鬱憤を晴らすかのように、よそ行きの服を着て行った。

しかし行く宛がなかった。とりあえず、駅前の百貨店に寄る事にする。

ここは広くて多種多様な店があるし、品揃えも豊富。

歩いて見て回るだけでも退屈しない場所だ。

だから、健はこの百貨店を選んだのだ。この前みゆきとショッピングに来たときに彼は確信したのである。ここなら半日、いや、一日中遊べると。

554

「こういうの似合っんじゃない？」

「ワンピースか。一度着てみたいと思っただけ……やめとこう」

「へ？ なんて。お上品な感じなのに」

「私はそんなに清楚ではないぞ。むしろ武骨なほうだ」

折角だからと二人は服屋に立ち寄り、どの服を買うべきか決められるべく試着をしていた。

紳士服に婦人服、それから洋服 広い服屋には何でもそろっていた。

「じゃあ、このプリント入りTシャツはどうだい」

「胸でかいからのう……ちゃんと入るかどうか」

「じゃあ、ノーブラで着てみたら」

「これ。あまり年上をからかうものではないぞ」

照れながら健が謝った。紅潮したことでアルヴィーの色白の肌がほのかに赤く染まっており、思わず見とれるほど綺麗なコントラストを演出していた。

「なら、このボディコンでどうだい」

にやついた健が次に持ってきたのは、胸元が大胆に開いたボディコンスーツだった。

色っぽいこの服をアルヴィーのような乳房の大きい女性が着れば、寄せられた胸の谷間に男たちは瞬く間に引き寄せられていく。

まさにダイ ンばりに脅威の いや、胸囲の吸引力だ。

「これを着れば、元から高いお姉様のセクシー度も爆上がりよ！
やつほーい！」

「やめんか恥ずかしいっ！」

「ぎよえー！ー！ー！」

恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして健の顔に怒りの平手打ちを叩き込む。

頬を押さえふるふる震えながら、恐怖する眼差してアルヴィーを見つめていた。これにはいつも陽気な服屋の店主も驚いた。

しかしながら、彼女にもすっかり羞恥心が身についてしまったものだ。

はじめて会ったときの一糸纏わぬ姿で大胆且つ堂々とした佇まいを魅せてくれた彼女は、もういないのだろうか？

「ふう。だが、悪くはないのう」

「え？」

ため息をついてクールダウンしたアルヴィーが口元を持ち上げた。いつもの自信に満ち溢れた、余裕たっぷり表情だ。

それは健にとつて、彼女が信頼に値する唯一無二のパートナー足りえる所以^{ゆえん}である何よりの証拠でもあった。

「着るのイヤなんじゃなかったっけ……？」

「人前では、な。しかしお主と二人きりの時なら話は別よ。　　ふふふ」

ピチピチのボディコンスーツに身をくるんで、悩ましげに腰を振る姿。そしてそんなアルヴィーに見とれ悩殺される自分。余裕で目に浮かんだ。

近い将来ボディコンのみならず、露出の多いベビードールの服やネグリジェ一枚で自分を誘惑しにかかってくるのだらう。

そのメロンやスイカにも例えられる大きな胸をたくし上げてそんな光景を想像して、健は胸が熱くなった。

それどころか、興奮のあまり自分からは地味と言い張っている整った顔が崩れ、鼻の下を伸ばして目がニヤけているという実に淫^{みだ}らかな顔に成り果てていた。

「ふわあ〜っ。あ、今呼び捨てしちゃった」

「ん？ 何のことだ」

「いやいや何でもないよ」

それからというものの、二人仲良くこの広大な百貨店を散策していた。

回るだけでもいい運動になる上、立ち並ぶ店はどれも個性的でそれぞれの良さがあり、入らずとも見るだけで楽しくなってくるもの

だ。

くどいようだが、この二人はあくまでバディ同士であって恋人の真柄ではないことを伝えておく。

「あつ」

やがてエスカレーター付近で、たまたま居合わせたみゆきと目が合った。

白いベストにホットパンツにニーハイソックスと、この年頃の女の子らしいおしゃれで可愛げがある服装をしていた。

「ま、まさかデート!?!」

「ち、違う! そんなんじゃない! ねえアルヴィー……」

「何をぬかすか。早く次の店に行かせて。ねえダーリン、ダーリンってばあ」

冗談かそれとも本気か? いつものハスキーボイスが凛々しい彼女とは違う、甘えるような上ずった声をアルヴィーは出していた。

しかも、こともあろうか健の腕に抱きつきながらだ。

「どうした? 今時の男は大人しいのが多いものよ。みゆき殿からしかけねば……健は私のものとなってしまっぞお」

「ちょ、ちよつとお! まだそんな段階までいってないのに! 酷いですう!」

「ハハハ、すまん。冗談だ」

「な、なーんだ。びっくりさせないでくださいよお」

「ほ、ホントだよね。あはは……」

思わず目を丸くして驚いた二人だったが、それを聞いて安心した。アルヴィーがこのような紛らわしい事をしたのには、実は理由が

あつた。

彼女はみゆきが健に惚れていることを見抜いていた。同様に、健がみゆきに好意を抱いているのにも気が付いていた。たまたま出くわした彼女は、とっさの思いつきで両者の恋心を煽ったのだ。

二人の恋を進展させねば　そう思つてのことだった。

「……ちょっと健くん借りていいですか？」

「もしやデートか？　好きにしてもいいぞ」

「ありがとうございますっ！　じゃ、ちょっと付き合ってもらつたよ。健くん」

健と強引に手をつないで物陰の方に連れて行く。

不審に思ったアルヴィーは、こっそりと彼女を尾行する。

「あのさ……この前、スーパーで卵5パックも買ってかなかった？　一人1パックだったのに」

「え？」

「しらばつくれなひでよ。それとも……『あの人』、健くんじゃなかったのかな」

健が知らないのも無理はない。

先日スーパーでせいこい事をしてかした健は、彼に成り済ました二世モノだったのだから。

果たして、そのことを知らない健はどうかこの場を切り抜けることができるのだろうか？

EPISODE 66：卑劣！ 三谷の猛攻

「え……あ、う……、ち、違っつてば。そんなことしないよ」
（む？ どうやら告白ではないようだが……）

健が言葉に詰まるのも無理はない。その日はバイトで、しかも通勤中。

偽者のようにスーパーに寄ってられる時間などなかった。みゆきから逃げている時間もなかった。もちろんそのようなことは身に覚えがない。

何故なら彼は真正銘、本物の東條健そのもの。特売品の卵を何度も買い漁った拳句他人に押し付け、健になりすまして市役所で暴れていたほうが偽者。

しかしみゆきから見れば、そのときの健が偽者だったかどうかを確認することは出来なかった。偽者がみゆきに振り向いた瞬間、すぐに逃げ去ったからだ。

「ホントにしてないの？」

「うん。絶対にできないよ、そんなズルすぎるよ」

（……ほうほう）

とはいえ、この場はなんとか抜けられそうである。問題は落ちてしまった信頼をどう取り戻すか、だ。

「……決めた。今わたしの目の前にいる方の健くんを信じるわ」

みゆきはあることに気がついていて、だからそう言ったのだ。

人間、嘘をつくときもある。つかなければならぬ事もある。だが、健の瞳は澄んでいる。口からウソは出ても、目はウソをつけない

い。

思い返せば、卵を何度も買い漁っていた方の健は瞳が濁っていた。まるで嘘という名のドロで塗り固められたように。だから、信じたのだ。自分の知っている健ならこんなことはしないはずだ、と。

「ホントに？　ありがとう！」

「ううん。お礼なんかいいよ。元はといえば健くんのこと疑ったわたしが悪いんだもん……」

「みゆき……」

肩透かしを食らっていたアルヴィーだったが、そんな二人のやり取りを見て気が変わったのか、口元を少し上げて微笑んでいた。

こっそりと見守るのが野暮っなくなっただか、そのうち彼女は二人の間に加わって3人でシヨッピングを楽しもうと提案。

無論結果は可決で、3人とも心の底から大いに喜んだ。やれ3人一緒にUFOキャッチャー、やれ3人一緒に音ゲー、やれ3人一緒にボウリング。

3人揃えばキバを剥く　とは少し違うが、とにかく3人いれば楽しさも3倍。誤解も解け、みゆきと合流してからは嬉しいことばかりだった。

「じゃあ、あんたココやってちょうだい」

「へーい」

健たちが3人で楽しんでいる裏側、やりたくもない仕事をやらされてゲンナリしているものもいた。

トイレ掃除だ、この迷彩柄のつなぎを着た男は主任のおばちゃんに指定された区画の男子トイレを掃除するよう指示を受けていた。

「ケツ、めんどくせーっ！」

その男は延々とそんな調子で文句を垂れながら、至極面倒くさそうに洗剤をぶっかけたり、モップがけて床を拭いたりしていた。

やる気がない。あまりにもやる気が無さすぎる。どうやらアルバイトのようだが、これではクビにされるのもそう遠くはないだろう。

いつの時代も働くものにやる気がなければ、そのものは容赦なく首を切られ職場を追い出される。それが文明が開花し、機械化の進んだ現代社会における自然の摂理だ。やがて男は、モップを投げ出し仕事も一緒に放棄した。

「あーあ、やってらんねえ！」

壁に腰かけて腕を組むと、大きくあくびを上げた。

元よりものぐさなのか、それともただ単にやる気がないのか。床に投げつけたモップを立ち上げると、それに顔と両手を乗せた。

「どうせなら楽しんで稼ぎたいよなあ……ん？」

携帯電話が鳴り響いた、誰からだと思ひ電話に出ると

「はい、三谷ツスけど」

「私だ。この建物に例の小僧がいる。殺れ！」

「へいへい」

その言葉を待っていたかのように、三谷はニヤリと嫌らしく笑った。

これでこの小汚ない便所を掃除せずに済む。トイレを出て先に清掃を終わらせて待っていたおばちゃんにモップを押し付けると、すぐに走り出して健たちがいる場所を探す。

「ねえ、これからどこ行こっか？」

「うーん。どこにしよう……」

「それより腹が減ったのう。そろそろメシにしないか？」

「そだね。ちようどいい時間だし！ 行こっ」

気がつけばもう昼過ぎだった。満場一致で昼食を食べることになり、空いていそうな場所を探す。フードコートにレストラン、定食屋 探そうと思えば、いくらでも見つけられるだろう。

そうしているうちに三人はフードコートで食べることに決め、それぞれが今食べたいものを注文した。

健はポリユームたっぷりのカツ丼、みゆきはスパゲッティ、アルヴィーは旬も近付きつつあるざるうどんだ。

「ひゃあ。そのカツ丼大盛りじゃない。全部食べられるの？」

「平気、平気。デスクワークって体力要るんだよね。だからスタミナつけとかなきゃ！」

「たまにはあっさりしたものを食べたほうがいいぞー」

やろうと思えば、自分だけ先に食べることもできた。だが、皆は敢えてそれをやらなかった。せつかくの機会であるゆえ、みんなで揃って食べたかったからだ。

現に三人とも実に幸せそうな雰囲気で食事をしていた。見ているだけでもおいしそうな、嬉々としたイメージが伝わってくる。

それはフードコートの端っこからその光景を見ていた三谷にもしっかりと伝わっていた。驚いたあまり、パスタをすする口が一時停止するほど。すぐに食べるのを再開し完食すると、食い入るように三人を見つめた。

ターゲットを見つけ、目的も果たせそうな三谷はまたも良からぬ

ことを思いつく。そのにやけ面から、隠す気もない悪辣さと陰湿さがにじみ出ていた。

それはさつきまでほがらかに笑っていた周囲の気分を萎えさせるほど。三人が食べ終わって別の場所へ行こうとするのを三谷は見逃さなかった。

誰も見ていないところで透明になって文字通り姿を消し 尾行を開始した。『絶対に見つからない』と豪語するも、よく見ると彼がいる辺りだけ、空間が少し歪んでいる。

「うん……今なにかいたような」

「アルヴィーさん？」

「いや、何でもない」

姿を消したまま、執拗にこの三人を尾行する。

見つからないという揺るがない自信が、彼にはあった。

だが、またしてもこの過信が命取りとなるうとは彼は思っても見なかっただろう。

(くそっ、あの女……さては気付いたか!?)

徐々に焦りが生じてゆく。

だが、それでも三谷は同じ要領で尾行を続ける。

「ぬ……!」

やはり誰かにつけられているという確信。

アルヴィーの瞳が鋭く研ぎ澄まされたかと思うと、誰もいないはずの方向で姿なき何者かをその手が掴み上げていた。

よく見てみれば、かすかにその部分だけ風景が歪んでいた。不審に思った彼女は、そのまま姿の見えない何者かを突き飛ばす。

やかましい唸り声を上げながら、床に大きく迷彩柄のつなぎを着た男が張り倒されていた。

「うわぁぁぁ……」

昨日健につけられた左腕と顔の傷がうずき、三谷が歯を軋ませながら悶える。

姿を露わにした三谷にアルヴィーは詰め寄り、再び掴み上げる。

「野暮なことはしないでほしいのう。今はデート中だからな」

「へっ……何を言うか。上位のシェイドであるお前が、人間にキバでも抜かれたかぁ!？」

「ほう、なぜそれを？ ぜひ理由を聞かせてもらいたいものだが…

…」

「う」

三谷は、彼女の正体を見抜いていた。

それでも彼女は動揺することなく、むしろ余裕を保ったまま三谷を挑発していた。

その視線には覇気があり、見るものすべてを震え上がらせることはたやすかった。

対して三谷は弱々しく、覇気をかけすらも感じさせない。

実力を隠しているわけではなく、あくまでアルヴィーが放つオーラの前に慄いているだけ。

いくら強がっても、その小さな本性は隠しきれなかったということだ。

「いつまで偽りの姿でいる気だ？ 私は隠す気などさらさらないぞ」

「は、離せ。首がイタイ……」

「もしや人前では見せられぬほどヒドい姿なのか？」

アルヴィーはなおも三谷を挑発する。

あえてこのまま責め続けて、正体を晒させようというのだ。

「こつやって醜態を晒し続ける方が、私は醜いと思うぞ」

「だ、黙れ！ クソ女！」

度重なる挑発の前に、遂に逆上。

アルヴィーの腕を振りほどくと、三谷は目を大きくむき出してツメを伸ばし始めた。

「貴様ら、あの世に送ってやるッ！ キエエエエエエエー！！」

黄緑色に染まった三谷の姿がモザイク状に歪み、人ならざる異形の姿に変わっていく。

それはまるで、カメレオンと小型の恐竜を足したような姿だった。腕は太くツメは鋭く伸びており、肩などには軽装の装甲のようなものがついていた。

何より先に印象に残るのは、なんといってもその目玉だろう。

大きな目の瞳孔が360度回転し、辺りを一望していたのだから。

「キキキキ！ 死ねえええ！！」

どこからどう見ても異様な光景だった。

百貨店のド真ん中でカメレオンの化け物が人語を喋り、目から蛇行している軌道の怪光線を放っていたのだから。

「うわっ！！」

三谷の攻撃の手は休まらず、両目から次々に蛇行する光線が放た

れ、辺りを手当たり次第に破壊していく。その影響で煙幕が立ち込め、状況は悪くなる一方だ。

「けっけっけ。逃げる逃げるお！」

己の力をよほど誇示したかったのか、逃げ惑う買い物客に対しても三谷はその鋭い爪を振りかざす。理不尽な蹂躪を止めるべく視界が悪い中を突っ切るも、三谷は一向に見つからない。

このままでは被害が拡大してしまう！一刻も早く三谷を探し出して倒さなければ　そう思った矢先、背後から三谷が突然現れ健を拘束した。

「っ！　し、しまっ……」

「動くんじゃねえぞ」

それと同時に煙も晴れた。自分の目と鼻の先にいるのは　縄で縛られさるぐつわを噛まされたみゆき。彼女をいつでも殺せるようにか否か、近くには三谷より格下のシェイドもいた。

目付きとくちばしが鋭いキツツキのような姿をしており、それも一体だけではなく二体。下手に出れば自分だけではなく、みゆきも危ない。

「お前が動けばあの嬢ちゃんが死ぬ。逆にあの嬢ちゃんが喚けばお前が死ぬ。どっちにしる無事じゃすまないぜえ？」

「くっ……!!」

表情を曇らせる健を解放すると、三谷はどこからともなくまさかりを取り出した。そしてそのまま、健の左肩を切り裂く。

厚みのある研がれた刃は切れ味鋭く、ましてや人肌を切り裂いて出血させることなど容易。そのまま何もできない健を嘲笑うように、

何度もまさかりで切りつけて流血させていった。

「ひやははは！ まだだ。俺様が味わった屈辱はこんなもんじゃねえ！」

「うっ……ぐ……」

悔しいが下手に動けない以上、何もできない。

身体中至るところから走る苦痛に息を荒げながら、健は三谷を見ていた。

「そっぴやお前エスパーだったな？ なんでエスパーなんかになった？」

「……し、死ぬかも知れない状況で、言葉にできないくらいの恐怖を味わった。だ、だから……みんな、には……僕と、同じような目に……」

「けっけけけ！ あっそ！ ばっかじゃねえの、お前！」

死に直面したとき全身に走った恐怖を、味わわせたくない。そんな彼がエスパーになった動機を嘲笑い、三谷は健の腹を蹴り飛ばす。

「何が同じような目にあわせたくねーだあ？ もう恐怖感してるじやねえか、お前のお友達がなア！！ しょせんお前ら人間は口先だけ、いくら大層なこと言ったところで何もできやしねえんだ！」

吐血して腹を押さえ、苦しみながらも剣を取ろうとするその右手を、三谷は無慈悲にも踏みしじる。

人の思いを踏みしじるのみならず侮蔑するそのやり方は、あまりにも残酷で卑劣だった。

「うらー！ うらー！ うらあっ！..！」

這いつくばった健を何度も踏みつけては蹴り、健が立とうとすればそれを邪魔立て。

いわゆるリンチだ、どうやら反撃の隙すら彼には与えないようだ。

「けえーっけけけ！ 媚びろ！ 詫びろおー！ ……ん？」

健を蹂躪し続ける三谷の目に、何者かに突き飛ばされて横たわるキッツキの姿が飛び込んだ。

目は焦点があつておらず、くちばしは強い力で曲げられており、更に身体中の羽という羽がすべてむしられ無残な姿となっていた。

「お、おい。誰にやられた？」

「シ、白髪ノ 女ガ、イキナリ俺ヲ……」

苦しむうめきながら不慣れな人語を話すキッツキのシェイドの顔を、容赦なく何者かが踏み潰す。

これでこのキッツキは意識を失った。動揺する三谷の目に、次に飛び込んできたのは 膝まで伸びた長い白髪の女性。

一見すれば華奢で、とても戦いには向いてなさそうだった。あくまで見た目『だけ』は。事実、その右腕は鋭いツメを生やした龍の腕のような装甲に覆われ、彼女の凛々しく美しい容姿に不釣り合いなほど武骨で威圧感があった。

そんな彼女の後ろには、縄とさるぐつわを解かれたみゆきが立っていた。心なしか少し表情が誇らしげだ。

「まったく、世話の焼ける主人だの」

三谷と対面しているときは凜々しく険しかった表情が、健と話す

ときだけは柔らかくなっていた。

それほど彼に信頼を置いている事のあらわれだ。右腕を元に戻し、健の手をつないで立ち上がらせる。

「あ、アルヴィー……、ありがとう！」

「もう一人で無茶をするでないぞ。さて……こやつ、どう料理してくれようか」

両者は三谷の方を向き、臨戦態勢に入った。

アルヴィーが来たとたんに焦燥を感じた三谷は、後ずさりして逃げようとする。

「あ、アルビノドラグーン……！ お前……！」

「相変わらず汚い手段が好きらしいのう。大人しくやけつくいきでも吐いておれば良かったものを、この大イグアナめ！」

「い、粹がつてんじゃねえぞ。ブラッドペッカーはまだもう一匹いるんだからなあ！」

ブラッドペッカーとは、先ほどアルヴィーにコテンパンに叩きのめされたキツツキ型のシェイドのことだ。

その名の通り真っ赤な羽毛、鋭いくちばしとカギ爪を持ち、獲物の肉を引き裂いてはらわたや脳ミソをついばむ残忍なハンターである。

更に鳥であるため飛行能力も有しており、一筋縄では倒せない。だが、上位のシェイドであるアルヴィーの前ではヒヨコも同然。いくら強くても所詮は下級でしかないのだ。

「せいやあああああっ……！」

気配を察知したアルヴィーは瞬時に振り向き、ブラッドペッカー

の腕を掴み上げる。

気合の入ったかけ声と共に、そのまま三谷のほうへと投げ飛ばす！
投げつけられたブラッドペッカーの重みとぶつかった衝撃が一気にのしかかり、三谷の体を容易くなぎ倒した。

「うが……くそッ……」

のしかかるように倒れこんだブラッドペッカーの体をどかすと、まさかりを担ぎ込んで健めがけて疾走。

「ナメンじゃねええエ！！」

「ふっ！」

「ぬおおお?!」

傷を押してまで健はその凶刃を腕力だけで弾き返す。
その隙に脇腹を突き、そこから更に宙へ打ち上げる。
高く跳んで落下しながら勢いをつけ一閃。三谷を床へ叩きつける。

「ウギギ……お前ら、なにやってる！ 援護しろ!!」

紫の血を流しながら、無理矢理ブラッドペッカーたちを起こす。
だが、二体とも既に虫の息。あと一押しで倒されてしまう状態だ。
にも関わらず宙を舞い金切り声を上げながら、二羽の怪鳥が襲いかかる！

「ふんッ！」

「こんなものッ！」

たったの一振りで、たったの一突きで。

攻撃する隙もなしに、ブラッドペッカーは爆散し消し飛んだ。

もはや万策尽きたか？ 三谷はただ、おびえるしか他はなかった。

「じよ、冗談じゃねえ……」

恐怖に震えながら建物の外に三谷は逃走。

一息ついて人間体に戻るも、油断したところにアルヴィーによる顔面への鉄拳制裁を浴びせられてしまう。

その威力はあまりにも強く、勢いあまって転倒させられてしまうほどだ。

おびえながら起き上がるも震えながら後ずさりすると、そのまま逃亡した。

「お、お……覚えてやがれ!!」

三谷をなんとか追い払った。如何にも卑怯で器の小さい台詞回しが腹立たしいが、その実力は間違いなく本物。

事実、その辺のシェイドに比べてだいぶ手強い相手であった。悔しいが、流石に上級シェイドというだけのことはある。

これまでの相手より遥かに、下手をすると今の自分より強かったかもしれない。

それにしても 今日には本当にいいことがない。三谷からランチを受けた体はボロボロ、せつかくのシヨッピングやデートも台無しだ。ただ、これだけは自信を持って言える。

あの三谷という男は、必ず倒さねばならない、と。

帰路に着こうとしたところ、健が苦悶に喘ぎながら昏倒。先程の戦いで、あまりにも傷を負いすぎたのだ。

慌ててみゆきが救急車を呼んだことで健は病院に搬送、みゆきとアルヴィーもそれに同伴することにした。それに理由などない。仮にあるとしても、ただ単に心配だったから たったそれだけであ

ろう。

「まさか、病院の世話になるうとはのう」

「傷は浅いって言われてたけど……心配だなあ」

病院の診察室前の廊下で、みゆきとアルヴィーは寂しく、しかし健気に健の無事を祈っていた。

どうやら健が無事に退院できるまで張り込む腹積もりのようで、アンパンや三角おにぎりを持ってきてスタンバイしていた。

もちろん患者でもない者が病院で寝泊りなどできないことは承知の上。そのくらい二人は、彼の身を案じていたという事だ。

「なーに、心配はいらぬだろう。あやつは丈夫だからのう」

「そう、ですよね」

不安がるみゆきを、そうアルヴィーが諭す。とはいえ、彼女もなんだかんだで健のことが心配だった。

エスパーは傷の回復が早いとは言えども、今回はかなりのダメージを負わされた。

少なくとも完治するまでに3日はかかるだろう。だが、三谷も他のシェイドもいつ襲ってくるか分からない。

本来ならゆつくりと傷を癒すべきなのだろうが、今はそうしている時間が無い。

「そろそろ夜更けだ。ここはひとつ、あやつの無事を祈って帰らぬか？」

「……はいっ！」

彼は無事に退院できるのか、バイト先にはどう伝えればいいのか、

彼がない間食事はどうすればいいのか？

などといった些細な不安を抱えながらも、二人はそれぞれが帰るべき家に戻っていった。

EPISODE 66：卑劣！ 三谷の猛攻（後書き）

ブラッドペッカー

キツキ型のシエイド。

鋭いカギ爪と飛行能力を有し、翼を持たぬものを空から嘲笑う陰湿な狩人。

素早く巧みな動きで獲物を翻弄し、その頭部をかち割って脳髄を啄ばむことを好む。

三谷に引き連れられ百貨店で健たちに襲いかかるも、戦いの中であっけなく倒された。

EPISODE 67：東條、はじめての入院

憂いを帯びた表情をしながら、健は爽やかな朝の景色を窓から眺めていた。入院してはや二日目、安静にしていなかつたといつまで経つても治らないのは分かっていた。

病室の薬品臭いニオイや、あまり美味しくない病院食に難色を示したこともあつたが、もちろんそんなことは口には出せなかつた。

世話になつている以上、大きな声で不満を垂れ流しにすることなどとても出来ないからだ。バイト先の方々は、今頃自分を心配しすぎて仕事が捗っていないだろうか？

故郷しがけんの母と姉は大丈夫だろうか？ みゆきは自分を心配しすぎて眠れぬ夜を過ごしていないだろうか？

アルヴィーは、また部屋でひとりぼっちになつて沈んでいないだろうか？ そうやって色々なことを気にしながら、健は早く退院できることをひた向きに祈っていた。

「東條さん」

聞き覚えのある声と共に、見覚えのある人物が入ってきた。

ジェシーだ、その手には見舞品の果物を持っていた。

「ジェシーさん！」

「まさか入院するなんて。最初聞いたときはビックリしましたよ」

相変わらず穏やかで、その場に彼女がいるだけで、彼女の声を聴くだけで気分が癒された。

自分がエスパであることを知っている数少ない人物だ、他にバイト先で自分がエスパであることを知っているのは大杉だけ。

彼女のように気兼ねなく話せる相手を作るのはいいことだ。だが、

あまり打ち明けすぎてもかえって迷惑がかかってしまう。とりわけ、今は下手にそうするよりは現状を維持したいという願いが強かったのだ。

「お忙しい中わざわざ来てくださって、ありがとうございます！」

「みんな心配してましたよ。早く元気な姿を見せてくださいね」

「はいっ！」

「あと、つまらないものですが……お見舞い品です」

ジェシーから手渡されたカゴの中には、リンゴやバナナ、メロンといった果物が入っていた。

どれも健康によく、消化に優しいものばかりだ。自分などのためにはわざわざここまでしてくれるのだ、早く退院して元気な姿を見せなければ　と、健はより一層決意を固めた。

「あ、ありがとうございます〜！　すっげえ美味しそう〜！」

「いえいえ、こちらこそ〜。ところで、お体の方はどうですか？」

「はい、それならもう大丈夫です！　腕もこの通り……」

左腕を曲げて力こぶを浮き上がらせようとする　が、ボキッ！　ときしんだ骨が悲鳴を上げ、程なくして凄まじい形相で左腕を押しさえながら本人も悲痛な叫び声を上げた。

恐らくこれは、退院できそうとはいえまだ無理をしてはいけないということを示していたのだろう。健自身にとってもよい経験になっただけだ。

「あ、あの〜。まだ安静にしておいた方がいいんじゃないかしら……」

「そ、そうですね。アハハ……」

「じゃ、私……そろそろいきますね〜。さようなら〜」

微笑みながら別れを告げ、ジェシーが病室をあとにした。さつきまでせっかく和やかな雰囲気だったのに、また孤独感が漂う寂しい病室に戻ってしまった。

しょんぼりとしながら、健はまた誰かが来るまで寝ることにした。しばらくしていると、女性の看護師がやってきた。

息を吹き返したかのように、健はバツと起き上がり看護師のほうを向いた。

「……あの、いつごろ退院できそうですか？」

「そうですね。東條さんはケガの回復が早いですから……早く見積もって今週末か来週の月曜日くらいでしょうか」

健からそう訊かれた女性看護師が、やや信じられなさそうな目でカルテを見ながら答えた。

彼がエスパーである事を知っているかどうかは不明だが、その回復力に若干戸惑っているような節があったのは確かだ。

エスパーは皆に必ずしも受け入れられているわけではないのか？ エスパーの中には浪岡のように差別的な発言をしているものもいた。

もしかすれば、エスパーを同じ人間として認めない所謂レイシスト 差別主義者中にもいるのかもしれない。

今日の前にいるこの看護師さんは違うかもしれないが。そう思いながら、健は看護師のそばで複雑な表情を浮かべていた。

翌日の正午、みゆきは自宅で花に水をやっていた。

彼女は滋賀県大津市に住んでおり、そこから電車で京都にあるファミレス『トワイライト』まで通勤しているのだ。

毎朝電車が混んだりで大変だが、それでも彼女は今の生活を楽し

んでいた。

「ふーっ。今日はいい天気ねー」

「みゆきー、ごはんにしましょー」

まばゆいほどの暖かい日光をしっかりと浴びた後、母に呼び出され家の中に入る。

彼女は医者まひしの父・雅史と専業主婦である母の間に生まれているが、どちらかといえば母親似。

医療に関しては応急手当の心得があるぐらいで、自分では父の後を継げそうにないと思った彼女は、ウェイトレスとしてファミレスで働く道を選び現在に至る。

「今日あたしが作るねー」

「それじゃお願いねえ」

風月家においてキッチンに立つのは、みゆきとその母の役目だ。

二人は変わりばんこに昼食と夜食を担当し、今日は昼のみゆきが、夜を母の紗江さえがそれぞれ担当することになっていた。

みゆきが今調理にとりかかっているのはハンバーグだ。どうやら得意らしく、ポウルで混ぜ合わせた挽肉を慣れた手つきで手早く揉み解していた。

そしてそれを油を引いたフライパンに乗せ、焼き始める。ちょうどいいと思ったときに裏返し、焼き目をつける。これを何度も繰り返し、焦がさないように注意しながら焼いていった。

「お待たせ。ちょっと焦がしちゃった……」

「えー、そうかしら？ おいしそうだけど」

そして完成。黒い焦げ目が少しだけついてはいたが、とくに支障は

なさそうだ。

口直しにとプチトマトも皿に盛り付けられていた。

なお、父の分はラップに包んで台所に置いていた。

これは彼女の父が忙しく、まだ帰って来れそうにないからである。

「あれ？ お客さんかしら……」

昼食を食べて一息ついていると、玄関の方からブザーが鳴る音が聞こえてきた。

紗江と一緒に玄関へ行つてドアを開けると、そこにいたのは。

「こんにちはーっ」

なんと、健だった。まさかもう退院したのだろうか？

だが、仮に退院したなら連絡をくれるはず。それにまだ見舞いにも行っていない。

とりあえず家に入れることにした。

一瞬後ろで舌なめずりしていたような気がしたが、恐らく気のせいだろう。

そうであることを祈りたい。

「おばさん、お久しぶりです」

「久しぶり〜。健くんだったらこんなにな大きくなっちゃって。あたしじゃ届かないわ」

「えー、そんなことないですよ。アハハ……」

紗江と話している彼は、いつもと変わらず元気そうだった。

だが、少なからず違和感も感じる。現に目に生気がなく、顔は笑っていない。目だけ曇っていた。

それに会話の節々で舌なめずりをしている。少々下品でいやらしい、本当に彼なのか？

みゆきの知る東條健という男は、舌なめずりをしょっちゅうしているような品のない男ではない。

まったく気にしていない様子だった紗江もそのうち寒気を感じたか、少し引きはじめた。

「にしても、退院するの早いよねー」

「え？ そうだったけ？」

「何言ってるの。この前大怪我して病院に……」

彼の性格から考えて、リハビリ中に抜け出したとか、お忍びでこっそりやってきたとは考えにくい。

むしる病室でひっそりとしているはずだ。

やはり、今ここにいる健はどこか様子がおかしい。おかしすぎる。みゆきは健に向かって、疑うような視線を浴びせていた。もしかして健本人ではないのではないか、ひよっとしたら誰かが化けたニセモノなのではないか、そう疑念を抱きながら。

台所でコップに水を入れて、のどが渴いたのであるう健に飲み水を持っていく。この間みゆきはコップに目が行っていて、健は視界に入っていない。その間に健は外に出て、あるうことか みゆきの水をやった花を踏んづけていた。

しかも実に嬉しそうな、下品に歪んだ悪辣な笑顔を浮かべながら。みゆきに呼ばれてすぐにリビングに戻り、顔を元のあどけないものに戻す。

二人を邪魔しないように気遣ったか、紗江は家の2階に行っていた。

「ねえ、何かおやつ食べようよ。今日ごはん食べ忘れちゃってさ」

「何かあったかな……ちよっと待ってね」

「速く出せよ」とでも言わんばかりに健は舌打ち、露骨に不満そうな顔を浮かべていた。

この時みゆきはキッチンの上の棚までおやつを探しに行っていたため、やはり彼女の視界には入っていない。

「お待たせ〜」

みゆきが持つてきたのはしょうゆ味のせんべいだった。定番中の定番、おやつには最適だ。

しかし次の瞬間、何を思ったか袋を開けてせんべいを取ろうとするみゆきの手を払いのけて、あるうことか独り占め。

彼女の制止も聞かずそのまま全部口に放り込んでしまい、水を飲むと見せ付けるように大きなゲップを上げた。

「ちょっと、どういうことよ……？　こんなのいつもの健くんじゃない」

「仕方ないだろ〜？　僕おなか減ってたんだしさ。君はさっき食べたばっかだろ？　それなのにまだ食べんの？　おまえバカじゃねーの？　親の顔が見てみたいなあ！　きつところ、ゴリラと鯉足したようなマヌケ面してんだろうなあ！」

突然流暢に喋りだしたかと思えば悪口ばかり延々と喋り続け、また舌なめずりした。

しかも言っていた事は全部陰湿で悪意のあるものばかりだ。彼らしくない。

病院で頭をいじられたわけではないとすれば　。

「あっはっは……あ？　ちょっと、何すんのさ……」

眉をしかめ目を吊り上がらせたみゆきが、怒りのあまり健の頬にピンタを浴びせる。

それも一発だけではない、何度も往復してだ。鬼気迫る表情に健らしき何かは、ひどく腰を抜かしていた。

「バカ……バカ、バカ！ 健くんのバカ！」

「ひ、ひイイイ」

罵詈雑言を浴びせてきたおびえる健かどうかすらも怪しい男に詰め寄り、報復するかのようにとどめにきつい一発を浴びせる。

既に何度も叩かれて晴れ上がっていた健のような何かの顔はボロボロになり、叩かれすぎで鼻血まで出る始末だった。

「ち、違うんだ。さっきのアレはつい出来心で……」

「うるさいっ！」

もう何度目か忘れてしまったが平手打ちで顔を思い切りはたき、玄関まで追い詰める。

そして、健とは思えない物体を閉め出し、

「出てって！ もう顔も見たくない！」

ひりひりする顔を片手で押さえながら、とぼとぼと歩いて帰っていく。

道中で怒鳴り声を上げ、物という物に当り散らしながら。

「くそーッ！ くそ、くそ、くつそーッッ！ あの女アタマ軽そうで簡単に騙せると思ったのによオ……！！！」

その当り散らす様子は傍から見れば異常そのもので、公園のフェ

ンスを何度も蹴るは空き缶を見かければ執拗なまでに踏み潰すは、自販機の横を凹むまで蹴り飛ばすは閉まっている店のフェンスに頭突きをかますは、店先の植木鉢を地面に叩きつけて破壊するは交番の窓ガラスを鉄パイプで破壊するはと尋常ではなく荒んでいた。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょおおおおおおおッ!」

憤るあまり化けの皮が剥がれ、やがてその正体が露わとなった。

ねずみ色の髪に黄緑色の瞳をした男　三谷だ。

頭が回らないなりに健を貶めようと思っていたのだろうか？

「ぜえ……ぜえ……何が頭を使えだ。えらそうにしゃがって……あのしたり顔！　ああもう、思い出しただけでもムシヤクシヤしてきやがる！」

その辺に落ちていた木の枝を拾い上げると、ゴミ箱に近付いてそれを振り下ろす。

そして何度も叩きつける。そのうち枝が折れて使い物にならなくなった。

「甲斐崎のヤロオオオオオオッ!!!!!」

今度は叫び声を上げながらゴミ箱を力づくで蹴り飛ばし、中身を散乱させた。その晩、三谷の雲を突き抜けるほど大きな怒号が辺りに響いたという。

EPISODE 68：熱意の迷走

入院生活5日目

「あいたたた！ う、腕が、ヒザがああああ！！」

「ダメですよ。まだ安静にしていなさい！」

ケガが治ったのかそうではないのか、とても微妙な状態だった。下手に体を動かせば骨が聞くも痛々しい音を上げてきしみ、かといって動かずにジツとしていれば体がそのまま腐っていきそうな嫌な感覚が襲ってくる。

自分に注意を促した担当の女性看護師にただならぬ敬意を払いながら、健は気長に退院を待つことにした。そんな中、ある疑問を抱く。

なぜ一番心配しているであろう母と姉が来ないのか、その理由を考察していたのだ。だが、その疑問は一人で勝手に解決してしまっただ。

その理由はとても簡単、そもそも入院したことを家族には伝えていないからだ。ただでさえ一家の大黒柱である父 母にとっては夫を失っているのだ、加えてそこに自分が大ケガをして入院したなどと知ればますます気が重くなってしまふ。これ以上の辛い思いは、なるべくさせたくはない。だからこのことは家族には言わなかったのだ。

「あっ」

そうして物思いに耽っていると、なにやら浮かぬ顔をしたみゆきが病室に入ってきた。彼女一人だけではなく、アルヴィーも一緒だ。

彼女も健のことが心配なはずだが、いつものように余裕たっぷり
で凜とした笑みを浮かべていた。きこちなく重たい腰を上げ、彼女
らに向かって振り向く。

「みゆき、それにアルヴィー……」

「よかった、入院してて…… やっぱりこないだの奴は偽者だったん
だわ」

「ヒドイ言い方しないでよー…… って、偽者ってどういうことだい
？」

彼女の口から飛び出た『偽者』という単語　その意味が気にな
ったか、詳しく話してもらおうと健はそう訊ねた。

するとみゆきは、この前大津の自宅までやってきた健らしき人物
が、陰湿な嫌がらせばかりしてきたということをおもむろに語った。
最後までその話を聞いた健は眉をしかめ、「その日は病室で安静
にしていた。そんなこと天地がひっくり返ってもできない」と
説明した。

「じゃあ、やっぱり。こないだの健くんは……」

「真つ赤なニセモノ……、ということになるな」

腕を組んで佇んでいたアルヴィーが、相槌を打った。

手ぐしで髪をかき上げる仕草は、やはりというべきかクールで凜
々しい。そのあまりに流麗な一連の動作は、見ていて惚れ惚れする
ほどだ。

「あわわ。なにか怒まれるようなことしたかな……」

「みゆき殿、そのニセモノとやらは健本人と完全にそっくりだった
のだな？」

「はい。でも舌なめずりしたり悪口言われたりしました。他にも、

私が見てないところでお花を踏んでたみたいですよ」「
「そうか……まったく、手口が陰湿きわまりない」

姿勢を保ったままアゴに手を添え、アルヴィーは思考を巡らせる。
しばらく経つと、思い当たる節があると彼女は言った。

「舌なめずりに悪口、そして陰湿な嫌がらせ……三谷の仕業かもし
れん」

「三谷ってこの前百貨店で襲ってきた……」

「うむ、そいつだ。世界広しと言えども、あそこまで性根の腐った
『三谷』は奴しかおらんぞ」

三谷。あのねずみ色の髪に、蛍光グリーンの瞳をした男。

吐き気を催すほど口が汚く、その性格は陰湿で狡猾。とにかく最
悪なヤツで、ヤツに関わるとうるくなことがない。と、健は思い出
したくもないような表情をして心の中で呟いた。

「あやつはカメレオンの上級シエイドだ、カメレオンといえば
格下の中にもそんなタイプがいたの。覚えておるか？」

「あー、いたいた！ 確か透明になって……」

それは、松宮中学校がもうすぐ廃校となるうとしていた時の出来
事だった。

夜の町で出くわしたそのカメレオンの怪物は、戦いの最中で逃げ
出した。

逃すものかとカメレオンを追っていくと、奴は古びた不気味な校
舎に逃げ込んでいた。

必死の搜索の末に何とか打ち破ったが、まさか、それと同じよ
うな特徴を持ったシエイドがいたとは。健は少し、驚いていた。

「あやつは色々アレだが同種の中ではかなり高位に入るのだ。ズル賢い上に、下位の者のいいとこどりに加えて高い実力と変身能力まで持つておるからの……」

「えーっ。今までそんなのと僕は戦っていたのか……人は見た目によらないね」

「正直、私もあんなイボ顔が上級シェイドとは思いたくない」

「なんか触ったらザラザラしてそう……うひえー」

シェイドの中でも上の上の存在のことを話し合っているのに、三人の間にはまるで緊張感がなかった。

それどころか、どこかで三谷がくしゃみをしそうなくらい辛辣なことを言っていた。

奴がもし、この場にいればきつと怒り狂いながら罵詈雑言という罵詈雑言をありったけ浴びせていただろう。

「……いかん。嬉しくなつてついしゃべりすぎた。これでは周りの迷惑になるのう」

「あちゃー」と言いたげに、アルヴィーは恥ずかしげに後ろ髪に手を当てた。

クールでミスティアスな彼女にしては、珍しく可愛げのある仕草だ。

これもまた、凛々しく美しい容姿とのギャップがおのずと目を引きつける。これもこれで、思わず惚れてしまいそうだ。

「じゃ、そろそろ帰るね」

「早く元気な姿を私たちに見せてくれ。リハビリ、頑張るのだぞ」

「うん！ おしゃべり出来て楽しかったよ。今日はありがとう……」

礼を告げると、速やかに二人は病室を去った。健を気遣っての行動なのだろうが、それでもやはり、あの二人がいなくなると寂しくなった。

だが、もう少しの辛抱だ。あともう二日か三日我慢すれば、退院はすぐ目の前なのだから。

「ワン、ツー、スリー」

どこかのライブハウスにて。あるバンドがその一室を借りて練習をしていた。

ドラマーの男の呼びかけに呼応するように、ギター、ベース、キーボードがそれぞれ演奏を始める。最初は揃っていたが、そのうちズレが生じ段々と噛み合わなくなっていく。やがてギターの男が憤りを感じ始め、急に弾き手を止めた。

「おいっ！全然揃ってねえじゃねえか、ヘタクソ！」

凄まじい剣幕だった。彼を除く他のメンバーはその迫力を前に、一瞬だがプルプルと震えて怖じ気づいた。

「な、なあシンジ。そんなに怒ることないんじゃないか？」

「うるせえぞシュウ！」

怒るギター担当・シンジをなだめたキーボードのシュウを、シンジは罵倒する。

彼は茶髪にサングラス、ベストにジーンズという出で立ちをしていた。また、無精ヒゲを生やしている。

「だいたいお前らはテンポが悪いんだよ。俺たちはノリが重視のバ

ンドじゃなかったのか？」

「ちや、ちゃんと家で練習してるよ」

そう答えたベースのタケシに対し、鬼気迫る勢いでシンジが詰め寄った。泣く子も黙るような恐ろしい顔だった。

「……まあいい。もっかいやろうぜ、もっかい！」

「ワンツー、ワンツー！」

イライラがまだ収まらないシンジから促され、他のメンバーは再び練習を開始する。

今度こそ最後までやり通さねば。だが、またしても演奏に失敗してしまう。

今度は他のメンバーは上手く行っていたものの、シンジが誤って音程をずらしてしまった。

「ちよっ、シンジ！」

「悪い、手が滑っちまった」

「なんだよお前、人のこと言えねーじゃん！」

ミスをして照れ臭そうに話すシンジを、ドラマーのミツルがなじった。

「なんだと！？ミスしたのはお前らも同じだろ……このおおおおッ……！」

シンジが唸り声を上げ、怒りに任せてミツルに殴りかかるようにする。そんなシンジを、慌ててシュウとタケシが止めようとするも振りほどかれてしまう。

二人は無残にも床や壁に叩きつけられた。シンジはそのまま、何

度もミツルに殴る蹴るの理不尽な暴行を加えていく。

バンド解散の危機だ、このままではミツルがドラムを叩けなくなってしまう。それを何とかして防ごうと、シユウとタケシは足にしがみついても止めに入る。

「や、やめるシンジ！ やめてくれっ！」

「このままじゃ俺たちは、『アルペジオ』は……」

アルペジオ　とは、このバンドの名前である。ノリが重視をモットーに活動しており、武道館ライブを目標に目指して活動を続けている。

元々それなりに知名度があり、近頃テレビ出演を果たしたことで爆発的に人気と知名度が上昇。まだ目標は達成できていないものの、CDもこれまでに三曲ほど出していた。

「そうだよ！ さっきは悪かった。みんなで武道館目指すんだろ？
また四人一緒にがんばろうぜ。な？」

「黙れミツル！ 今のままで武道館でライブできると思ってたのか？ お前らやる気なさすぎ！ こんな調子じゃあ、一生かかってもムリだ！」

「そっ、そんなことないって。昔に比べたら売れてるし、力合わせたら……」

この時シンジは、様々な理由から来る苛立ちが募ったあまり疑心暗鬼になっていた。

半端な自分自身の腕前にコンプレックスを感じ精神的にもかなり追い詰められていた彼は、仲間からの慰めや謝罪の言葉を素直に受け取れずにいた。少し落ち着き始めた彼は、呼吸を整えると

「もういい！ アルペジオなんかクソ食らえだ。俺は一人でプロを

目指すッ！！」

しがみついて自分を止めていたシュウとタケシを振りほどいて引き離すと、ギターをケースに仕舞いこんで部屋の出口へと歩いていく。決意を固めたような少し寂しげな表情が印象的だった。

「じゃあな、お前ら！」

「お、おい、シンジ？ シンジーっ！！」

ミツルが呼び止めようとしたが時すでに遅く、シンジはさっさとその場をあとにしてしまった。

これによりシンジは今日限りでアルペジオを離脱、メンバーが一人欠けて戦力と士気は大幅にダウンしてしまった。

彼は不遜な態度でやや直情的ではあるものの実力は確かで、十分に信頼が置けるギタリストだった。同時にボーカルも務めており、その夢にかけるまっすぐな熱意と熱心に練習に打ち込む姿勢もあって、このアルペジオというバンドには欠かせぬ存在だった。

それが今こうして、彼は決別を宣言して去ってしまった。一人でプロを目指すとは彼は言ったが いったいどこへ行こうというのか？ そして一人で何をはじめようとしているのだろうか？ 残されたメンバーは、ただうなだれるしか今は出来なかった。

EPISODE 69：退院祝いとストリートミュージシャン

それから、三日後……

「ただいまーっ！」

「おかえりーっ！ ずっと待ってたよー！」

「おお、お帰り。入院生活は楽しかったかの？」

「まあ、一応……」

あれから健は、無事に退院することが出来た。

部屋にはアルヴィーだけではなくみゆきもあり、三人は大いに喜びあった。

ようやくあの辛気臭い空気から解き放たれたのだ、彼は嬉しさのあまり年甲斐にもなくはしゃいだりしていた。

立派な大人になったとはいえどもまだ19歳。まだまだ学生時代のヤンチャさと子どもっぽさが抜けきっていないのだろう。

「退院祝いにお料理作ったのよ。はいっ！」

みゆきがキッチンからラップに包んで保温していたランチを持ってくる。

目玉焼きを上乗せしたハンバーグにベーコン、コーンとグリーンピース、そしてフライポテト。味付け・彩り共に秀逸でボリューム満点な組み合わせだ。何よりデミグラスソースが食欲をそそる。

「おっっ！ 旨そうだなっっ！」

「名付けてみゆきスペシャル・ファミリーレストラン風よ！ ちゃんとチンしてね」

喜色満面で健はそれを電子レンジへせっせと運ぶ。

このままでもいいが、どうせなら温めてから味わいたい。このミックスグリルならびにハンバーグを食べるのなら尚更だ。

1分間温めた退院祝いのランチを取り出し、机へ持って行って早速箸をつける。

とろけるような卵の味とジューシーなハンバーグの肉汁が合わさり、口の中で絶妙に弾けていく。

「お、お味は……?」

「う……うっ!」

拳をぐっと握りしめ、わなわなと体を震わせる。あまりの不味さに悶絶したのか、それとも逆に旨すぎて言葉も出なかったのか? ある程度食べかけたところで、彼が出す答えは。

「うーまーいーぞー!　なんか元気が湧いてきた!　まさしく絶品料理だあ!」

「あっありがとう!　そう言ってもらえてすごく嬉しい!」

余計な心配だった。なぜならみゆきは元々料理好きで腕前も口顔負けだし、健自身もそんな彼女が作る料理を心の底から旨いと思っている。それに自分のために時間を割いて手間暇かけて作ってくれている以上とても文句など言えない。

「良かったの、健。久々にうまいメシが食べたんだから、そりゃあ嬉しくなるものよな」

アルヴィーが微笑みながら言った。ふと何かに気付くと、キッチンに行つて電子ジャーのフタを開ける。そこから手頃なサイズの茶碗にごはんを入れ、健のもとに持っていく。

「これ、そう慌てて食うでない。こういうときぐらいはゆっくりと味わった方がいいものだぞ。ほれ、ライスもついてきた」

「ありがとう！　こんなに豪華な料理、母さん以外じゃ初めてだよー！」

わざわざ自分のためにここまでしてくれるなんて。

みゆき、アルヴィーの両者に健は言っても言い切れないほどの感謝の気持ちを抱いていた。

ここまで尽くしてもらったからには、何か礼をしなくてはならない。だが、何をしたらいいだろう。何をプレゼントしたらいいだろう。顔には出さずとも心の中ではそう考えを巡らせていた。じつくりと退院祝いのスペシャルメニューを味わい、堪能しながら。

「ところで二人はお昼食べたの？」

「ああ。先に食べてしまったぞ」

「でも焦らなくていいよー」

つい気になって口から飛び出してしまったその言葉にも二人は答えてくれた。

どうやら先に昼食をとっていたらしい。胸のうちのモヤモヤしたものがとれた健は食べることに集中し、そのスピードはゆっくりながらも完食。最後まで食べきってみての感想は、聞くまでもなく。

「ぶはーっ！　おいしかった。最高の味だっ！」

「さ、最高だなんて。でも嬉しいわ」

褒められて気分がよくなったか、照れ臭そうにみゆきが言った。

元気の良い健に純情なみゆき　そんな仲睦まじい二人を見守るよ

うに、アルヴィーはひっそりと微笑んでいた。

退院した翌日、すっかり元気になった健はさっそく仕事へ復帰する。

相も変わらず通勤電車は混んでおり、吊り革を握って突っ立っているだけでもしんどい。

少し微妙なところだが、辛うじて車窓の向こうに映る景色が見えるのが唯一の救いだろうか。

やがて目的地に着くと、その駅で電車を降りた。バスに乗り、市役所の前で降りる。

通勤中、とくに目新しい事は起きなかった。シェイドも出現していない。今日一日ぐらいいつもどおりに働いて帰って平穩に過ごしたいものだ　と、健はそう思っていた。

「係長、これ1000枚ほど印刷してもらえんかね」

「おつぷ。いくら副事務長の頼みでもそんなの無理無理！　退屈す

ぎるね！　サレンダー！　マッス！」

「おはようございまーすッ！」

威勢のよい挨拶がオフィスに響き渡った。思わず手に持っていたコーヒーカップや書類が下に落ちてしまうほどの大音量だ。これには人生の酸いも甘いも知り尽くした副事務長も驚いた。

「お、おはよう東條くん。しょ、職場では静かにな」

「はいっ、すみません！」

「頼むよホントに」

気を取り直して健は仕事に取り掛かる。もう1週間以上は休んでいるため、とにかく仕事が溜まっていた。

これ以上仕事を溜めてしまつとやがて片付けられなくなる。少しずつペースを上げながら、健は仕事を消化していく。

以下しばらく、延々と消化試合が続いた。そしてひとしきりついたところで昼になり、昼食の弁当を食べた。そして大きく伸びをすると昼休み終了の5分前まで昼寝をした。

その後は絶え間なく襲つてくる睡魔と格闘しつつ、時に誘惑されつつ残った仕事と新たに課せられたミッションをこなしていった。

そして、退勤する時のことだ。浅田やみはる達　いつもの3人が帰ろうとする彼を呼びとめたのだ。

「東條くん、月末に飲み会あるんだけどよかつたら来てみない？」

「えっ！　でも僕、お酒まだ飲めませんよ……」

「大丈夫だつて。お酒が飲めなくても食べるコトはできるでしょ？」

「んー……」

そうは聞かれても、彼は優柔不断な性格ゆえなかなか答えを出せなかった。

まだ未成年で酒臭い二オイはどちらかというと苦手だが、大人になつたらいつかは酒を飲まなければならぬときが来る。一度行つてみた方がいいのかもしれない。

だが、本当に行つてしまつてもいいのかどうか心配だ。一応考えたり相談したりしてみた方がよさそうである。

「えっと、必ず参加しなきゃダメなんでしょうかね？」

「嫌になつたら一言いつてから帰つてくれてもいいよー」

「それに強制じゃないですよ。参加するかどうかはその人の自由です」

「もしなにか予定とかありましたら、そつちを優先してくださいってもかまいませんよー」

この短時間で悩みに悩んだが、ジェシーのその言葉がきっかけでようやく決心がついた。まず一晩寝て考えて、それからアルヴィーに相談する。

予定に関してはとくになかったはずだが、また確認する。これでよし　と、健はそう判断を下した。

「分かりました。また考えておきます」

その帰りのことである。駅前の階段を下った辺りで一人の男が座りながらギターを弾いて何やら歌っていた。

低音でキレのある声を出している彼はどうやらストリートミュージシャンのようで、彼の歌の歌詞にはある種独特のセンスを感じられた。確かテレビか何かで彼を見たことがあるような　？　少し興味が沸いた健は、そのどこかで見た覚えのあるミュージシャンに近付いてみる。別にファンだったから声をかけたとかではなく、ただ単に気になっただけのことである。それに彼の茶髪の逆立った派手な髪型は嫌でも目を引き印象に残る。

「あ、あの……」

「ん、お代ならその募金箱に……」

そう健が問いかけたところ、ギターを弾いていた男性の手がピタリと止まった。そして瞬きしながら健を見上げる。

このミュージシャン、人相は悪いものの目は澄んでいた。音楽に懸ける情熱やひた向きの姿勢がひしひしと健にも伝わっていく。

「歌お上手ですね」

「おいおい照れるな。あんた、もしかして俺のファン？」

「いや、そういうわけではないですけど……」

「ハハッ！ なんだよそれ」

男が少し苦味を含めた笑いを飛ばした。

「そつだ、お代。別に払ってくれなくてもいいけどさ」

要するに払うも払わないも自由。しかしこの男、金に困っているようにも見える。

とりあえず健は、いい歌を聴けた礼として200円ほど募金箱に突っ込んだ。

ミュージシャンからすれば願ってもいなかったことなのか、少し驚くような感じの笑顔を浮かべて喜んでいた。

「あれ、そう言えばどこかで見たような……」

「俺のこと？」

「はい。えーっと確か……あつ！ 思い出した！」

つろ覚えなりの推測が確信へと変わった。左の手のひらで右手の拳を叩くと、確信を得た人物の名を口にしようとする。

「『アルペジオ』の狩谷シンジだ！ この前でテレビで見ましたよ
つ
つ」

嬉しそうに大声を上げてその名を言った。一瞬シンジ と思しきミュージシャンの肩に悪寒が走り、ピクピクと震えた。彼のみならず突然相手に大声を出されたら誰でも驚くというものだ。

「あつ、えと……すみません」

「い、いや大丈夫だ。だけど、あまりアルペジオの名前は出さないでもらえるかな」

「……どうしてですか？」

「そんなの知ってどうするんだよ。このままじゃ遅くなっちまうぜ、早く帰んな！」

深追いをするなどということだろうか？ 所属しているバンドの名を出してほしくない理由を聞こうとしたところ、狩谷は急に血相を変えて健を突き放した。

ここまでですということとは、何かあったのだろうか。だからなるべく『アルペジオ』の話題に触れてほしくなかったのだ。

そう推測をしながら健は、住んでいるアパートにてくてくと帰っていった。

その頃、警視庁捜査一課

「はい、もしもし。……はい、はい！ 分かりました」

突然かかってきた電話に、村上が応対していた。いつもの嫌味で砕けた雰囲気ではなく、一転して真剣な表情だった。

それほどまでに電話先の相手が重要な事を彼に連絡しているということになる。村上もいつものようにおちゃらけた口調では話せないというわけだ。

受話器を置いて一息吐いたところに紅茶を持って穴戸がやってきた、彼女以外の婦警も一緒だ。

「警部補、さっきの誰からですか？」

「大久保教授だよ。シェイドの細胞とデータ持ってきてくれてさ」

「また大久保さんから……」

少しきよとんとしている穴戸へ対して、ため息混じりに村上がそう言った。

相手をするのに疲れた、またはうんざりした様子だった。

現に眠たそうな目をしている。穴戸が淹れた紅茶を少し飲むと、

「ここんどこ毎日電話来てるよねえ。そんな得体の知れないモン、一体なにに使うんだか……」

「大学の研究で使うとかじゃないですか？」

「どうせロクな事に使われぬよ。それにこつちも、あの頭のネジが外れたジジイにいつまでも構ってられるほど暇じゃない」

電話中の真剣で知的な雰囲気はどこへやら、いつもの飄々として嫌味つたらしい口調で村上が語りかける。大きくあくびをすると、すぐに凜とした表情に戻って穴戸達を見つめる。

紅茶を飲み干し、一息ついてからタバコを啜える。そして重要そうな書類を手に取った。

「それはさておいてだ。……新宿の方でシェイドによる被害が出たそうだ。戦闘班と不破に、武器の準備とチェックを……って、不破は今どうしてる？」

不破が現在何をしているかすっかり忘れていたのか、村上が慌てて穴戸達にそう訊ねた。凜とした表情は崩れ、ややマヌケな顔になっていた。くすりと笑う穴戸達を叱り付け、顔に青筋を立てながら不破の状況を聞き出す。

「す、すみません。えっと……京都の西大路で白峯さんを手伝っているとか」

「なんだって?! あっ……そういえば、この前不破を貸して欲しいって連絡があつたような」

「えーっ。そのこと忘れてたんですか!？」

「その辺は完全に僕のミスだ。だが僕は謝らない」

自分のミスを認めたような、認めてなかったような どちらともとれない曖昧な言い方。だがよくよく聞いてみれば、格好よくは聞こえるが謝るつもりなど毛頭ないことも伺える。

言う側の『自分はこの場の誰より偉いのだから謝る必要など無い』という傲慢さと卑小さが嫌というほど伝わってくる口調だ、無論相手はその理不尽さと身勝手さに苛立ちと何ともいえないもどかしさを覚える。

無論このような輩は咎められて当然 なのだが、どうも現実は厳しく中々そうはいかないのが辛いというもの。

「そんなのダメです。謝ってください!」

「いっ、ごめんなさーいっ」

部下が上司を咎め叱咤するのどこかおかしい気はするが 今回のケースはどう見ても謝罪をしなかった村上のほうに非がある。だから穴戸たちのおつた行動は正しい はずである。

EPIOSDE70：友達じゃねえ！

その翌日。健は起床すると玄関のポストに突っ込まれていた新聞をとり、リビングで目を半開きにしながら読みふけていた。

昨晩は早めに寝て彼自身も十分に睡眠をとっていたはずなのだが、それでも目が至極眠たそうにしていた。

寝過ぎでかえって眠たくなった。ということなのかもしれない。もしくは、いま読んでいる新聞の字が細かい上に、びっしりと狭いところに並んでいたために眠気を誘発したのかもしれない。

「おはよう健……今日は早いー」

気だるそうに喋りながらアルヴィーが起きてきた。まだまだ眠気が抜けきっておらず、閉じた片目を少しこすっていた。

この頃血圧が低いらしく、いつも寝起きはこんな調子なのだそうだ。その妖艶な肢体をくねらせながら、ふらついた足でキッチンまで水を飲みに行く。

適当なコップを洗って、浄水を入れればすぐに飲み水が手に入る。飲み干すとやはりフラフラしながら、新聞を読んでいる健の近くまで移動した。あまりに距離が近かったため、健は少し驚いた。

「ふあ〜っ」

大きなあくびを上げると、そのまま机に伏して二度寝を始めた。

元々、髪が長いからというものもあるが、寝癖が一段と目立っていた。あくびをする姿も、すやすやと寝息をたてる姿も、寝起きで気だるそうにしている姿も。不思議なことに、いずれの仕草にも一言では表せないような神秘的な色気と魅力があった。

それもあるが、何より人間味があって見ているだけで安らぎが訪

れる。そういえば、アルヴィーと一緒にいると感じるこの安心感は何なのだろうか。

恋煩い ではないとして、単に自分が彼女をパートナーとして信頼しているからこそ感じるもの なのだろうか？

それを差し引いても彼女にはまだまだ謎が多い。そう思いながら、健はジツと眠りこけているアルヴィーを見つめていた。思わず目を引くほど可愛らしい寝顔だった。

「可愛いなあ……あつ」

その時、健の頭の中をよからぬ考えがよぎった。

「待てよ……いいことを思いついたぞ。ムフフ」

つい淫^{みだ}らな性癖が表に出たか、寝ているアルヴィーの目を覚まさせないようにその体を起こし、静かに横たわらせる。

悲しいかな、真面目な彼も己の欲望には抗えなかった。本能をむき出しにして、欲望の赴くままに今にも弾け飛びそうなシャツのボタンを外していく。

まるで時限爆弾のコードを切って解体するときのような慎重さを持って。ボタンを外せば外すほど、彼女の透き通るような素肌が露になっていく。

興奮したことによるものか彼の胸の高鳴りもその都度激しくなっていく、緊迫感が段々と上がっていた。

やがて乳房がはだけるところまで外すと、指を静かに震わせながら触ろうとする。 が、その前に立ち止まって一考。

「触ってもいいよな……いいのか？ いいよね……！」

自問自答した彼は欲望に駆られてそのまま、アルヴィーの胸を鷲

掴みにする。やはりこれは　大きい。つかんだこっちが逆に埋ま
ってしまいそうだ。

興奮するあまり鼻血が出てきた。にやつきながらもう片方の手で
もつかみ、興奮する自分を抑えながら揉み始める。

「ん……っ」

察知されたのか、それとも寝言か？　アルヴィーが喘ぐようにそ
う声を上げた。

健も思わず冷や汗をかき、やがてためらいが生じた。考えている
うちに茫然と意識が遠のき、心の中で激しい葛藤が始まった。

天使のような姿の良心と、禍々しい悪魔のような姿の邪心とに別
れ、両者共にせめぎあい睨み合っていた。

「もうやめてください！　あなたはとてもマジメで優しい人です。
それがこうしてセクハラしてるなんて知られたら、みゆきさんや周
りの人は悲しみます！」

「なに言っただ、ふざけんな。それがいいんじゃないか！　好き
な子ほどイタズラしたくなるのが男つてもんだろーが！　イケない
こと、どんどんやっちまえーい！」

「でもそれはパートナーとしての『好き』であって、恋愛とは違
います！」

「えっ、そうなの……？」

「そうです！」

「うるせー！　んなこたあどうでもいい。男の子ならおっぱい揉み
たいだろーっ！」

「ダメです、悪魔の言うことに耳を傾けては！」

「その欲望、解放しろ！　こんなチャンスもう二度とないぜーッ！」

鉄拳制裁！　勢い付いた悪魔が天使を殴り飛ばす。

「ダメなものダメなのっ！」

天使が反撃！ 鋭い飛び蹴りが炸裂し悪魔が吹っ飛ぶ。

「やれー！ Youやっちまいなよ！」

「ダメ、絶対！」

「やれッ！ やるなら今しかねエ！」

「悪魔のそそのかしなど聞いてはならない！ 今なら間に合う！
その辺でやめてください！」

「今更自重できるかってんだよー！」

天使と悪魔のぶつかりあい 良心と邪心のせめぎあい、ますます激しさを増すばかりだ。

底知れぬ欲望と焦燥と、その他諸々が渦巻き、なんともいえないもどかしさを生み出していた。

「だあーっ！ どっちもじゃかましいわああああアアアア！」

僕の好きにさせるおおっおおおおー！！

「うげげー！ きらーん……」

とうとう耐えきれなくなったか、憤った健は両者を吹き飛ばす。

興奮のあまりためらいの鎖を解き放ち、天を仰いで雄叫びを上げた。

「もう我慢ならん。僕は！ 僕を！ 抑えきれないいいいいッ〜！！」

雄叫びを上げながら発狂したような勢いで胸を揉みしだく。満足が行くまで、十分に快楽を得られるまで揉み続けた。

だが、それがいけなかった。とうとうアルヴィーが目覚めてしま

ったのだ。おぼろ気ながらも健にエツチなことをされていたのを感じていたらしく、少し頬をピンクに染めていた。

「お主……やらかしたな」

「え、いや……これは、その、つい出来心で」

慌てて謝ったが、彼女は口元を綻ばせて笑っていた。果たして許してもらえたのだろうか。安心して一息吐いていると。

「まあ許す……わけなかるうがあゝ！」

「あう！ へげえっ……い、痛いよお……ぐすん」

許してもらえず というか、そもそも許してもらえないはずがなかった。鉄のように硬くて重いゲンコツが健の頭にクリーンヒットし、たんこぶが出来た。

しかも三段重ねだった。あまりの激痛に健は頭を抱え込み、ぴくぴくと震え上がった。その横で、アルヴィーは呆れた表情を浮かべて腕を組んでいた。ボタンは全部閉まっておらず、上の方を少しはだけていた。

「頭は冷やせたか？」

先程まであんなにあらぶっていた健は反省したのか、急に縮こまり、真剣な顔で何も言わずにかしずいていた。

「なら良い。ところで今日は休みだが……なぜ早起きしたのかの？」「んー……いろいろ考えちゃってさ。だからあまり寝れなかった」

健は何を考えていたのか？

それはアルヴィーにも働かせようということと、彼女が働けそうな仕事についてのことである。彼なりに色々と考えを巡らせていたのだが、それが原因でなかなか寝つけなかったのだ。

「ほおー？ 私には、夜な夜なパソコンの前で激しく自慰をしていたことへの言い訳に聞こえたのだが……」

「わーっ！ やめて！ でかい声で下ネタはやめて、お隣に聞こえちゃう！」

慌てて健がアルヴィーの口をふさぐ。大声を出すな　とは言うものの、彼自身が大声を出して騒いでいた。これではまるで注意する意味がない。

「すまんすまん、冗談だ。で……寝る前に何を考えていたんだ？」

「えっと、僕だけで生計立てるのは大変だから、アルヴィーにもそろそろお仕事してほしいかな……って、思ってさ。頭ん中で色々シミュレーションしてたんだ」

「そうだったのか。私が働くために……さぞや手強いシミュレーションだったはず」

「うんうん、気に入ったステータスが成長するまで何度リセットを繰り返したことが。って、そのシミュレーションじゃないやい！」

すかさず健は突っ込んだ。二人で漫才でもやれば売れそうな感じはするが、これ以上言及すれば荒れる原因になると思われる。よって深追いはしないでおこう。

「……ふう。さて、アルヴィーには何が向いてるかなあ。メイド喫茶でご主人様にご奉仕する？」

「いいのう、それ。ちょうど思っておったのだ。一度フリフリが着てみたいのう」

「僕も見たいみたい！ でもこの辺にメイド喫茶あったかなあ……」

健が言った。その言葉を聞いたアルヴィーは、少し残念そうだが、残念しそうな顔をしていた。

「他にもキャバクラとか」

「うーん。キャバ嬢はちよつとなあ……」

「じゃ、じゃあ……執事カフェ！」

「それは私に男装しろと言うことか？」

「うん」

「ムリだ。胸がデカイからすぐバレる」

「えーっ。アルヴィーって綺麗だけじゃなくてカッコいいし、イケると思うけどなあ」

「その考えはイケんなあ」

割と真面目な話をしてきた話をしていたはずが、気がつけばユルユルと楽しそうな内容になっていた。この二人にとってはよくあること、と言ってしまうばそれまでだが。

「まあ、それはおいといて。腹が減ったのう」

「おいとかないで。えっと……ごはんだよね。すぐに食べられるものがない？」

口を閉じて目をパッチリと開き、健をじつと見つめながらアルヴィーが頷いた。なんとなくその真意を理解した健は、あることを思いついた。

「コンビニのやつでもいい？」

「うむ。腹が減れば何でもご馳走になるから」

「じゃ、行ってきまーす！」

満面の笑みを贈ると、健は愛用のサブリュックと財布を持って近くのコンビニへ出掛けていった。自転車を漕いでも、歩いても、すぐに辿り着ける。つまり好きな方法でコンビニまで行けるのだ。

「いらっしやいませー！」

コンビニの中に入ると、受付の男性店員が見ていて気持ちが良いほどの笑顔を振りまいていた。この仕事を、あるいは人生を心の中から楽しんでいるような顔だった。

実際にそう考えているかはわからないが、少なくとも健はこの店員を見てそう思っていた。シンパシーを心の中で感じていたのだ。

カゴを持って品物を見て回り、菓子や飲み物、パンや雑貨に雑誌何か良さそうなものはないか探していく。雑誌コーナーを通りすぎたとき、見覚えがある男が彼を見ていた。その男は健を呼び止める、

「奇遇でんな、東條はん」

「い、市村さん。こんなところで何を？ たこ焼き屋はどうしたんですか？」

「心配してくれてありがとうございます。あいにくやけどな、まだ営業時間やあらへん。わしゃあここにメシ買いに来たんや。そういうあんたは何しに？」

「僕も朝ごはんを……」

「そうでつか。ほな一緒やな」

一見すると物騒で近寄りがたい雰囲気だが、いざ話しかけてみれば割と気さくで付き合いやすい。

敵対している　というより、相手からライバル視さえされてい

なければ、彼とは良い友人になれそうだった。

買うものを買って外に出て、自転車のカゴにレジ袋を乗せる。自転車のロックを外して運転席にまたがると、そのままペダルを漕いでいく。そうやって帰宅する途中、健は市村から言われた言葉を思い出していた。

「 ええか、東條はん？ 俺とあんたはライバル関係。たこ焼き買いに来てくれるときはお客様として扱うから別やけどな……、基本的にあんたと馴れ合うつもりは無い。俺は有名になりたいんよ、せやからこれからアントアを狙い続けたる。手加減はせえへんいつ命奪られてもええように、死ぬ準備しときや。東條はん」

それは市村から叩き付けられた挑戦状だったのだろうか？

それとも、自分に倒されるまで死ぬなと言う彼からの警告だったのだろうか？

もしくは、遠回しに仲良くなりたいたのだったのだろうか。単なる挑発かもしれないが、またいろいろな事を分らないなりに推測し考察しながら、健はペダルを漕ぎ続けていた。

EPIOSDE70：友達じゃねえ！（後書き）

真剣にエロいことしてるシーン書いててあほらしくなってきました。
いい意味で（笑）

EPISODE 71：白龍対猛虎

一方、東京都では。早朝から都会の中心を、強化スーツに身を包み武装した集団が駆け巡っていた。その強化スーツは軽装ながらも局所を守るべく装甲が取りつけられており、機動性と安全性を両立していた。

更によく見れば、胸部や肩に警視庁のマークがついていた。銃や特殊警棒といった装備で武装していることと、警察の関係者であることから察するに。つまり彼らは、シェイド対策課の戦闘部隊というわけだ。

「こちら第一戦闘隊！ 新宿駅付近でシェイドを発見、等身大です！ チーフ、応答願います！」

「よし、発見したか……。許可を出す、ただちに駆逐しろ！」
「ラジャー！」

等身大とは 身長が人間とほぼ同じ大きさということ。現在第一戦闘隊が対峙しているシェイドはがっしりした体格で、口には発達した巨大なアゴがあり、全体的な姿はウスバカゲロウの幼虫アリジゴクのような姿をしていた。

戦闘隊のメンバーは果敢にも銃や火器を乱射し、中には特殊警棒やスタンガンを手につっ込んでいくものもいた。

だが力は相手の方が強く、次々蹴散らされていく。更にアリジゴクはアゴを天に上げ強い磁気を発生させる。隊員の装備はいずれも金属製のため、次々とアリジゴクのシェイドの近くへと引き寄せられていった。

「チーフ！ こいつ、手強いです。仲間が次々に負傷しています！」
「何をしている。早く『アレ』を使い！」

「で、ですが『アレ』はまだ試作段階。それに周囲に被害が」

無線機でチーフ 村上と通信する。『アレ』と呼ばれた兵器を使えという指令が下ったが、通信を入れた隊員は戸惑い気味だ。

本当に『アレ』を使うべきなのか、『アレ』を使っても倒さなければならぬのか 迷いが生じていた。

「かまうな、使え。『アレ』は持ってて嬉しいコレクションじゃない……さあ、早く！」

無情にも決断のときが迫ってくる。彼が迷っている間にもアリジゴクのシェイドは磁気だけでなく、己の周囲に砂地獄を発生させ隊員たちを引きずり込んでいく。

このままでは仲間たちが捕食されてしまい被害も拡大する。だが、『アレ』の威力は強大でしかも試作段階。上手く使えるか分からない……。

表情が見えないメットのバイザーの奥には、躊躇し焦燥感に駆られた青年の顔があった。そして決意を固めたか、負傷した仲間の一のそばにあつた『アレ』と呼ばれた大型の火器を取りに行く。

「おい、待てよ……。まさかお前、それを使うのか？」

「ああ。こいつは暴発するかもしれない危険な武器だ。けどな……」

そう言って銃口の先に線路のような、戦艦や空母というカタパルトのようなパーツがついた火器 レールガンを手にとると、アリジゴクのシェイドの真正面に立ち、引き金を引く。

だが、すぐには撃てなかった。何故ならこの武器は、エネルギーを充填して打ち出すまでに時間がかかるからだ。

普通に攻撃するだけなら、ハンドガンやマシンガンといった他の火器や他の装備の方が早い。そんな欠点がありながら、何故実用化

されようとしているのか？ それは 確実に高威力の攻撃が可能で、相手に決定的なダメージを与えられるからだ。

「それでもしなきゃ、あいつは倒せない！ 超電磁砲^{レールガン}、発射アアアアア！！」

チャージは終わった。稲妻弾ける光の弾丸がレールを伝って射出、身構えて相手の様子を窺っていたアリジゴクを襲う！

「ブハアアアアア！！」

時間をかけて撃たれた極大な電撃弾、それが相手を焼き尽くすのは時間の問題だった。

あまりの威力に耐えきれず、アリジゴクのシェイド・マグネアントルは爆発炎上。砂地獄と化していた周囲の地形も元に戻った。

「こちら第一戦闘隊！ なんとか敵を撃破しました！」

「よくやった。すぐに救急車を手配しよう。それまで待機だ！」
「了解！」

シェイドとの戦闘で傷を負った第一戦闘隊のメンバーが全員病院に搬送されたあと、チーフこと村上はモニタールームの中央で優雅にティータイムをたしなんでいた。

ダブルスーツにネクタイ、そして白を基調としたティーカップ。紅茶の似合う上品な紳士であった。見た目だけは。

「オッス！ 村上、戻ったぞ」

自動ドアから不破がモニタールームに入ってきた。彼もまたシェ

イドの討伐に向かっていたのだ。ちょうどその帰りだった。

「はいはい、おかえり。ゆっくりしてちょーだい」

あくまで嫌味つたらしく不破にねぎらい(?)の言葉をかけると、再び紅茶を飲み始める。

「オレや戦闘班が汗水垂らして働いてる間に、お前はオペレーターの女の子と一緒にハーレムごっこかよ」

「ふふん。うらやましいだろ？」

「ああ。変われ！ お前ばっかりイイ思いしやがって。オレだってイチャイチャしてーんだよ！」

「あ、変わってくれるの？ 別にいいけど大変だよ。次から次に指示なきゃいけないし、モニターから目が離せないし、目は疲れるし。あと座りっぱなしだからお尻も蒸れるぜい」

眼鏡のブリッジを上げ、キザに振る舞いながらそう語る。

疲れていたところに村上の妙にかっこつけた立ち振舞いを見せられ、不破はイライラが爆発した。だが寸前で抑えた。怒ったら負けだからだ。

「そうか。オレはそういうの30分も我慢できないから無理だな！」

「子どもか！ お前は子どもか！」

「らしくねえなア、村上。さっきの台詞をいつもみたいにメガネのブリッジ上げて言ってみろよ」

苦虫を噛み潰した顔で不破に睨みを利かせると、メガネのブリッジを人差し指で持ち上げ

「まったく君はお子様だねえ」

「うつわ何こいつ、ム力つく！ 余計ム力つくんだけど！！ メガネ貸せや、割つてやるから！！」

「や、やめる！ これがいくらするか分かってるのか？ このフレームだけで5万円以上はするんだぞ！ だからやめっ……」

彼の呼びかけもむなしく、他のメンバーが見ている中で不破との乱闘が始まってしまった。

インテリで肉体派ではなく、運動もあまり得意ではない彼は圧倒的に不利である。

日頃鍛えている上に戦い慣れている不破の方が完全に有利である事は明らかだ、こうなれば最後、村上は負けを認めるしか他はない。執拗にメガネを奪って叩き割ろうとする不破の魔の手からメガネを護ることしか、村上にはできなかった。

「二人ともケンカはやめてください！！」

「ぎええええエ！？」

が、そこに思わぬ助け舟が入った。額から汗を流し、激しく緊張しながら取っ組み合う二人の間に穴戸が割って入ったのだ。二人のすそを持ち上げると、首を少し後ろに引かせて後押しするように頭同士をぶつけた。すると先程までの喧騒で張り詰めた空気が、あつと言つ間に静まり返った。

「もうっ。二人ともだらしないですよ。しっかりしてください！」

「あいてて……穴戸ちゃん、それに不破も。さっきはすまなかつた」「オレも悪かつた。本当にすまないと思っっている！」

穴戸と他のメンバーに二人は大慌てで謝った。どちらも素直に謝りそうには見えない性格なのになぜすぐに頭を下げられたのか、不

思議な話である。

ただ、もしかするとそれは、体を張ってまで止めに来た穴戸を泣かせたくない　　という思いからとった行動だったのかもしれない。

その頃　　京都でもシェイドが発生していた。ウロコをリーダー代わりに反応を追っていくと、最も反応が強い場所でそのシェイドに出くわした。いかつい体格をした、アムールトラの怪人のような姿だ。その鋼のように硬そうな筋肉や太くがっしりとした腕から察するに、パワータイプ。防御力も高そうだ。

そしてそのトラの周りを多数の最下級シェイド　クリーパーが取り巻いている。まずはこいつらを片付けねば本体を叩けないだろう。

「健、まずはこやつらを片付けるぞ！」

「オッケー！」

右手に長剣、左手に盾を持った青年。その背後には白龍。白龍が咆哮を上げ、その場にいた者すべてが立ちすくんだ。

その隙に群がるクリーパーを蹴散らしていき、最後の一体は空中から突きをかまして雲散させた。

これでは本丸を叩くだけとなった。逃げるシェイドを、健と白龍が追いかける。幸い相手はあまり速くはなく、すぐに捕まえることが出来た。張り倒して気絶させるも、すぐに起き上がって健を突き飛ばしてしまう。

「待てッ！　こいつッ！」

強力な一撃を受けるも健は立ち上がり、再びトラを追跡。壁やコンクリートを自慢のツメで破壊していくトラを追い続けていると、

やがて池のそばにある雑木林に出た。足元を落ち葉が埋め尽くしており、やや走りづらそうだ。

「しかし、龍と虎か　ふんっ」

「どうしたの、アルヴィー？」

白龍　アルヴィーが目と鼻の先にいるトラに対して鋭い睨みを利かせた。人の姿のときと比べて表情が読みとりづらいのにも関わらず、健には彼女が眉をしかめている姿が見えていた。これもパートナーとしての付き合いが成せる業なのだろうか。

「面白い。この勝負、絶対に勝つぞ！」

「あつ、そういうことか！　それなら僕も本気でいく！」

「勝手ナ　因縁ヲ　ツケヤガツテ！　二匹マトメテ　ヤツザキニシテ　ヤル！！」

龍と虎　それは強大な力量を持ち、実力が伯仲する二人の英雄や豪傑のことを示す。

今対峙しているのも龍と虎　とはいえ、いくら強くても相手はアルヴィー白龍に比べて下の下。運がなければ勝てそうにはない。

対してアルヴィーは上級シェイドで、虎に比べて実力は上の上。よほど運が悪くなければまず負けないはずだ。

ただたどしい人語を発しながらトラが健へ向かって駆け出す。その大きな爪で切りかかるが、健は盾で弾く。

すかさず切り込んで、そのまま自分のペースに持ち込み連続で斬撃を浴びせた。相手の傷は浅く、まだまだ倒れそうにない。

トラは巨体に合わせ俊敏な動きで健を翻弄するが、一瞬の隙を突かれ確実に攻撃を叩き込まれていった。殺るか、殺られるか？　龍と虎の駆け引きは激しいデッドヒートを迎え、ますます白熱していく。

「パワーは互角……」

「スピードは奴の方が上、となれば」

「あとは技テクニクッ！！」

健が赤いオーブを柄に装填すると同時に、トラが雄叫びを上げながら疾走。

健にアツパーカットを命中させ、空中へ打ち上げるとそのまま追いつちをかけようと飛び上がる。

そうはさせじと空中で体制を立て直し、逆にトラを地べたへ落とす。そのまま斜め下へ剣を突きだし、赤と青　二色の炎をまわって急降下。一直線にトラを貫き、爆発させた。

「よっしゃ！ やったねアルヴィー！」

「ああ、龍が虎に勝ったのだからな！」

雌雄は決した、龍が虎に勝利した。かに見えた　なんと、立ち上る炎の中から手負いのトラが現れたのだ。

「くっ……ぬか喜びだったか」

「そうらしい。あいつ、今度こそ！」

歯を食い縛り再びトラに立ち向かっていく。受けたダメージは致死量、それでもなおトラは生きていた。

体格に似合ったタフネスが彼にはあったようだ。とはいえ先程受けたダメージが響いているのか、動きが鈍っていた。

ここで油断しなければ、今度こそこのトラに勝てるだろう。巧みに防ぎ、巧みに反撃しながら引き続き激戦を繰り広げていく。

やがてトラの動きがふらつき、もはや先程までの速さは微塵も感じられなくなった。あともう一息、今だ！　健が横に大きくなぎ払

った、そして立て続けに跳躍しながらの必殺の一撃を浴びせる！

「グオーオーツ」

大きく吹き飛ばされたトラは大爆発し、今度こそ灰塵に帰した。

「ふう……手強かった」

「ああ。なんともしぶといヤツだったの」

激闘の末に強敵に打ち勝ったのだ、喜びもひとしお。切羽詰まっていた二人の顔は柔らかくなり、にっこりと微笑んでいた。だが、安心した次の瞬間だった。

「うりや、うりやああああ！！」

いったい誰が予想しただろうか？

池の中から突然大きな銃を持った男が飛び出し、手早く銃を撃ちながら健に接近してきたのだ。狙いはバラバラで、盾を構えていた健には一発も当たっていない。

「今のは……威嚇射撃！？」

「その通り。しかし油断しましたなあ。いつの時代も主役つちゅうのは、遅れてやってくるもんや」

「まさかお主、あのシェイドが倒れるまで池の中に潜んでいたのか？」

「し」名答」

銃を手回しして健を挑発するように喋りながら、関西弁の銃使い

市村が近寄る。

相変わらず挑発的で過剰なまでに自身に満ちた粗暴な態度が目立ち、思わず冷や汗が出る程度の威圧感を漂わせていた。

「あんたらがチンタラ消化試合やっとするせいで、ワシ溺れ死にするところやったわ」

「ほおー。ところでひとつ訊くが……お主、私たちとあのトラとどちらを応援していたんだ？」

「うっ」

相手を挑発し、余裕綽々に振る舞いながら格好良く現れた。

ここまでは良かったが 戦うことで頭がいっぱいで、戦う前のもやり取りまでは視野に入れていなかった。

なんてことは口が裂けても言えない。その理由はとても簡単、格好つかないからだ。

「あ、アホなこと言うなや。そりゃあトラに決まっとするやろが。そいうあんたらはなんや、ドラゴンズのファンか？」

「うーん。野球はあんまり……」

「ほなこの中でタイガースのファンはワシだけやっちゅーことか！？ なんやそれ！ 中日ファンのお前ら応援して損したわ！」

「それは関係ないんじゃないですか……って今なんて言いました？」

あろうことが隠していたことが口からこぼれてしまった。激しく取り乱しながら市村は慌てて口を塞ぐ。

よく喋る関西人ゆえのミス だったのかもしれない。それを見た健は、腹を抱えてゲラゲラと笑い出した。アルヴィーも釣られて大笑いした。

「じゃかましいいわボケエ！ 関係ない話すんなや！！」

短気な市村が憤慨した。空に向けて何度も発砲し、爆笑の渦中にいる二人を脅す。

更に地獄の門を見張る番犬のように恐ろしい顔で銃口を向け、威圧した。

急に張り詰まった空気が漂い、二人は息を呑んだ。白煙を上げる銃口に息を吹き付け、落ち着いたかに見えたが再び健とアルヴィーをにらみ始めた。

「おらおら、かかってこんかい！」

戦いのあとで疲れている二人に容赦なく弾幕のシャワーが襲いかかる！

当たらなかつたエネルギー弾は爆発して火の粉を散らし、大きなものは火柱を噴き上げる。

あまりにも激しすぎるその猛攻を盾で防ぐか避けるかしか、今の健には出来なかつた。

「逃げる逃げる、今日こそワレぶつ殺したるわぁ！ ひゃーっははははははははははは！」

狂ったように弾を乱射し健ばかりを執拗に狙う。盾に弾かれ跳ね返った弾は枯れ木をもなぎ倒し、そのまま燃やしてしまう。

度重なる爆発により落ち葉も吹き飛ばされ宙を舞っていた。こんなものをまともに受けていればきつと今頃はチリとなっていただろう。

「ていつ」

「うつぐー！」

健とていつまでも負けてはいられない。隙を突いて相手の懐に踏み込み、そのまま一撃を入れた。

「このっ！ いつまでも弾避けとったらええものを！！」

ふりかかる火の粉を払い除けるように銃を振りかぶり、健を遠ざけようとする。

ゼロ距離射撃も出来なくはないが、確実性には欠けるため従来通りに中距離〜遠距離から撃つことにした。だが、健は食いついたまま中々離れようとなしない。

「ふんっ！」

炎を伴う切り上げをバックステップでかわし、健から離れると再び銃撃。高く跳躍してそれをかわした健は、そのまま急降下しながらの突きを繰り出した。

「重装備のくせしてちょこまかちょこまかと……！！」

市村の中にイライラが溜まっていく。地上に降りた健を狙い乱射する。

だが、いくら乱射しても盾でガードされたりかわされたりしてしまっ。

何故だ！ 何故奴は倒れない。手負いなのに、自分より弱いはずなのに！ 何をやってもあまりに上手くいかず、もはや市村は心の底から沸き上がる怒りを押さえきれないでいた。

「ブツ飛べやアアアア！！」

エネルギーをチャージし終わり巨大な弾を発射、健へ向かってま

っすぐ向かっていく。

無防備な状態でこれを食らえば流石の東條健も生きてはいられないだろう。彼はそう思っていた。大爆発が起き、健の姿が白煙の中に消えていく。にやり、としたり顔を浮かべる市村だったが。

「うおおおお〜!!」

「いつ!?!」

大気中の水分を凍結させて氷の線路を作り出し、健がその上を滑りながら煙幕を突き抜ける!

驚天動地、何が起きたか分からない市村にはどうしようもなくすれ違いざまに何度も斬られそのまま吹き飛ばされた。

「つぎぎ……」

見くびっていた。以前戦ったときはまだ確信を得られなかったが、確信した今なら言える。まだまだ青臭さはあるが、やはりこいつは強い。

そして手応えがある! こいつに狙いを定めた自分の目に狂いはなかったのだ。ライバルはこうでなければつまらない。武器もちょうど相反するものだ。

「ふっ、へへへ」

負けたにも関わらず、笑いながら市村が立ち上がった。

倒れ込んださいに付着した落ち葉や泥を払うと、銃を仕舞い左手で健を指差す。

「楽しませてもらうたで、東條はん。それでこそ俺のライバルや」

「いや、勝手にそう決めつけられても」

「どうでもええねん！ そない細かいことは！」
「お互いそう認めあっているわけでもなく勝手に主人公をライバルと決めつけ、それ以降何度も粘着する 漫画によくあるパターンだの」

迷惑がっている健のそばで、人間体に戻ったアルヴィーが笑った。
これにより市村は、またしても『ライバル』の前で恥をかいてしまったことになる。

「それともお主、もしやかまっつてちゃんだったか？」
「う、うっさい！ 次にあったら叩きのめしたるっ！ 覚えとれよーッ」

凶星を突かれたか、顔を真っ赤にして市村は走り去っていった。

「……今日は『ゴツツイヤンけ』って言うってもらえなかった」
「あやつ、この前はそう言うってたのか？」
「そうなんだよ……」

EPISODE 71：白龍対猛虎（後書き）

マグネアートル

アリジゴクのシェイド。発達したアゴは磁気を帯びており、これを磁石代わりにして金属を引き寄せせる特徴をもつ。

また、周囲の地面を砂地獄に変える事も可能。警視庁の戦闘部隊を苦戦させるが、隊員の一人が決死の思いで放ったレールガンの前に撃破された。

ウオリアタイガー

アムール虎のシェイド。3メートル近い巨体の持ち主で全身が鎧のように硬い筋肉に覆われており、いかつい見かけに似合わない俊敏な動きも兼ね備えているガチガチの武闘派。

京都の一角で暴れていたが、駆けつけた健とアルヴィーの前に敗れ去る。

EPISODE 72…めぐりめぐって

「はあ……」

来ない。

「はああ……」

誰も来ない。

「はあ~~~~~っ」

さっぱり儲けられない。彼はいつまで経っても鳴かず飛ばずだ。募金箱を置いたのがいけなかったのか？ 通行人を邪魔してしまうからか？

気難しい顔を浮かべながら、今日も狩谷は駅前で淡々とギターを弾いていた。そのうち彼の腕前を気に入った通行人たちが、わずかながらも銭を入れていく。

気持ちはありがたいが、しかし、これっぽっちでは満足はできないし納得できないのも事実。彼は密かに待っていた、金持ちがやってきて諭吉を三枚ほど恵んでくれるようなことを。

「うまくいかねえなあ」

そのうち考えるのもギターを弾くのも面倒臭くなり、狩谷は駅から別の場所に移動することにした。ここよりもっと、人通りが多いようなところに。静かで打ち込みに集中できるようなところに。

たまった金をはたいて、彼は電車で京都の隣である滋賀県へ。石

山駅の広場で歌を披露して見せるも、誰も来ない。

みんな通り過ぎていき、ふと振り向いたかと思えば彼の奏でる曲が気になっただけ。何せ時間が時間だった。

その時はもう夜遅くで、みんな自分のことで頭がいっぱいだったので、彼自身に目を向けていられる余裕はなかったのだ。

「くっそー！　ここもダメだったか……」

その後も狩谷は各地を転々とした。すぐ近くの大阪に山科、和歌山に奈良、三重に福井、そして淡路島や神戸　本州を中心に何度もライブや弾き語りを続けたが、結果集まったのは数人だけ。

金銭に至っては、これだけ活動したにも関わらず約5万円ほどだ。だいぶ抑えれば一応食っていけないこともないが　余裕があまりない。

一応銀行にそれなりに貯蓄はあるが、もちろんギャンブル等の無駄なことには使えない。アルペジオを脱退してから毎日が苦しい、だから金を欲している。

しかし現状はこのさま　このまま売れないミュージシャンとして一生を終えてしまうのだろうか？　将来そうなってしまうであろう可能性があることを予想した狩谷は、少し憂鬱になっていた。

いきなり孤立してしまった故に相談できる相手は一人もおらず、行く宛もない。彼はとにかく心細かった、胸が張り裂けそうなくらい悩みを抱え込んでいたのだ。

「ふう……」

各地を回った末にやがて東京に戻った狩谷は、芝浦ふ頭で夜景を見ながらたそがれていた。

彼の荒んだ心も、星空や海面に映った都会のネオンを観ていれば少しは安らぐかもしれない。そして狩谷は、ため息が出るほどにう

っとりしていた。

「俺って何やってんだろうなあ。みんなに文句垂れてまで独立したけど結局なんにも出来てねえし、閑古鳥は鳴いてるし……」
「お困りのようだなあ？」

ジッと夜景を見つめている狩谷の肩を、何者かが叩いた。
慌てて振り向くと、サングラスにグレーのスーツを着た見るからに怪しい男がそこにいた。ズボンのポケットに手をつ込んでおり、見下すような目線で狩谷を見ている。

「誰だあんた……!?!」

「そう警戒しなさんな。私は芸能プロの社長なんだが、同時に君のファンでもあってね……」

「へえ、社長さん？ そりゃどうも」

至極嫌そうな顔をしながら、怪しい男に向かって皮肉混じりにそう答えた。

「確か一人でプロ目指すって言って、バンドの仲間と揉めて抜け出したんだってな？ そいつは気の毒なこった」

「なんでそれを……てめえ何もんだっ！」

「そうカリカリするんじゃない」

相手の神経を逆撫でするような嫌味ったらしい口調。

小バカにしているような上から目線。狩谷はどうしようもないほどに苛立っていた。そのうち殴りかかろうとしたが、寸前で手を止められ

「待て待て、ちょっと待て。人の話はよく聞くもんだぞ」

「むう……」

「私はね、君のプロデビューを支援したいと思っているんだよ。君ほどの才能の持ち主を腐らせてしまつのはもつたいない。だが、しかした。その為にはマネージャーと金がいるだろう？　そこでだ、私の方から金を用意しよう」

酒でも入つたような勢いで、サングラスの男が喋り出す。呆氣にとられるほど早口で饒舌だった。

しかし注目するべきは、マネージャーになつてくれるという上に金を用意しようという発言をしたこと。

こんなにも面白い話があるわけがない　　というのは頭では分かっていた。だが、背に腹は換えられない。それに自分は貧乏だ、プロデビューしようとなるとかなりの金額が必要となる。ほぼ間違いなく今の自分の稼ぎでは到底払いきれないだろう。

「それでどうだ？」

「……乗った！　その代わりに、ちゃんと約束は果たしてくださいよ」

「ああ、約束しよう」

こうして狩谷は、疑念を抱きながらも芸能プロダクションの社長（と名乗る男）と契約を交わした。このとき狩谷は見えていなかったが、芸能プロの社長らしき男はにやりと笑い舌なめずりをしていた。

明け方、都内の廃ビルにて。黒装束の男とその仲間と思われる者たちが屯していた。

仲間とトランプに勤しむもの、ソファでふんぞり返っているもの、鉄パイプを肩に担いでいるもの　容姿・服装や行動まで多種多様であったが、全員に共通していることは、誰しも近寄りがたい雰囲気であったということだ。そして黒装束の男たちがいる部屋の

中に、芸能プロダクションの社長と名乗った男が入ってきた。

「今回の作戦……お前にしてはよく考えたじゃないか、三谷？」

「ヘッ。相変わらずヤナ言い方しやがりますねえ！」

三谷　と呼ばれた男の姿がモザイク状に歪んでいく。元に戻った時、その姿はカジュアルな服装をした今時の若者になっていた。

これが彼本来の姿だ。彼はエボシカメレオンの特徴を持つ上級シエイドであり、その能力を使って他者に化けることが出来る。

それに加え、周囲の景色に溶け込み透明化することも可能だ。如何なるセキュリティにも引つかからないし、レーザーにも映らないというのは、本人の弁。実際にそうなのかはまだ、その目で確かめなければ分からない。

「嫌な役目は全部俺に押し付けておいて、あんたらは遊び呆けてたつてののか？　それはねエよなあ」

「おい三谷！　てめえ余裕こいてる場合か？」

「あぐう！？」

鉄パイプを持った男が三谷に近寄り、地面で摩擦していた鉄パイプを　思い切り叩きつける！　三谷は床に転がり、そのままの姿勢で鉄パイプの男に踏まれた。

この男はバンドナを巻いており、細身ながらがつちりとした体格をしていた。革製のジャケットを羽織っており、見るからに粗暴で威圧的な態度が目立つ、ワイルドな風貌の男だ。

「お前、今回失敗したらもう次は許してもらえないんじゃないか？　そうですよ、社長？」

三谷を踏みつけたまま、黒装束の男　確認をとる。鉄パイプを

持った男に甲斐崎が近寄ると、冷淡とした表情のまま睨むように顔を寄せた。

「そのくらいにしておけ」

鋭い眼光に恐れをなしたか、それとも全身から発せられている覇気に威圧されたか。

素直に甲斐崎の言うことに従って鉄パイプの男が引き下がった。

三谷を立てさせて諭す　　と思いきや、壁際に追い詰めて更に恐怖を与えんとしていた。

「いいか、三谷。もうよく知っていると思うが、私は失敗が嫌いなんだ」

「へ、へい」

「今回もまた失敗すれば、私はお前を切り捨てるぞ。しくじれば4度目はない！……そう肝に銘じておけッ！！」

壁と密着している三谷の体が腰から下にずり落ちていく。彼に背を向けて歩き出し、今度はトランプでババ抜きを嗜んでいた二人に近寄る。

その二人のうち片方はファンキーな服装に身を包んだ男で、動きが少しなよなよしていた。もう片方は顔に色あせた包帯を巻いた男でロングコートを着ており、表情が読み取れない為不気味なイメージを漂わせている。ただ、視界を確保するためか目の周辺には穴を開けていた。

「　行くぞ」

「は、はいっ！」

「ただちにッ！」

慌てて立ち上がり、鉄パイプの男と共に甲斐崎のうしろに並んでついていく。壁際に追い詰められた三谷は、案の定置き去りだ。なよなよした男が一瞬だけ振り返り、バカにしたような表情で三谷を見ていた。

「く、くそ！ みんなそろってバカにしゃがって」

甲斐崎たちが廃ビルからいなくなったあと、憤った三谷が壁に拳を叩きつける。

周囲からことごとくコケにされ、プライドをズタズタにされてしまったのは怒りたくもなるというものだ。

せめて一度くらいはバカにした連中を見返したい。そして汚名を挽回、いや、返上したい。

今の三谷はそのことにひたすらこだわり、狂おしいほどに固執していた。

「見てろよ……ぜってえ手柄立ててやるっ！」

EPISODE 73：姿を変えしモノ

「……ん？ 今のは……」

都内のある廃棄されたビル。その中で変装を解いたのではなく、姿形を変え　つまり変身した男と、彼と会話を交わす者たち。

そこでの一連の流れを、カメラはしっかりと捉えていた。いくつも画面が並ぶモニタールームの中で、男が別の姿に変身する瞬間を目撃した男性オペレーターは、他のオペレーターの方を向いて

「おい、さっきの映像巻き戻してくれ」

と頼んだ。普通ではありえない光景を見たからか、少し動揺しているように見えた。

「はい！　ちょっと待ってください……」

女性オペレーターが映像を巻き戻す。もしかしてあれは、単なる見間違えだったのではないか？　変装を解くのが早すぎて姿自体を変えたのではないか？

どちらにしても一度見ただけではすぐに事態は飲み込めない。だから、彼はもう一度同じ映像を見て事実を確かめたかったのだ。

「……あつ、そこそこ。そこでいったん止めて」

そしてくさんの、男が姿を変える場面。画質が粗いため見辛いが、目を凝らしてみると変身する瞬間に姿がモザイク状に光りながら、確かに『変身』していた。

なんらかのトリックを使った……とも考えられるが、あからさま

に人間業ではない。男は実はタヌキか何かで、カメラを化かしたのではないか？

事の真相が気になって仕方がない男性オペレーターは、食い入るようにモニターを見つめていた。

「おはようさん。……どうしたんだ、朝からモニターに引っ付いて」

「あつ、警部補。これを見てください！」

「なんだあ？　もしかしてカワイコちゃんのビデオでも見てたのか？」

「ま、まさか。違います！　とにかくこれを！」

気さくに喋りながら村上がモニタールームに入ってきた。片手には難しそうな内容の本を持っており、今日もダブルスーツに銀縁眼鏡の必殺おすましスタイルが決まっている。

持ち前のインテリさと端正な顔立ち、そしてエリート気取りで嫌味つたらしい雰囲気。この村上翔一むらかみしょういちという男性が持つ魅力すべてを引き立てている最高のプロポジションだ。そんな彼の部下であるオペレーターたちが、彼に先程自分達も見ていた映像を見せる。

「お、おい。これは」

やはりというべきか、初見では信じがたい。きょとんとした顔をしながらも、村上は眼鏡のブリッジを上げて

「さっきの映像を最初まで巻き戻してくれ」

と、オペレーターに言った。女性オペレーターが映像を巻き戻す。

「……変装を超高速で解いたとかじゃないよな」

「はい、どう見ても変身してるように見えましたよ」

「なあ、穴戸ちゃん。この男は他に、どこのカメラに映ってた？」
「少し待ってください。えっとね……」

女性オペレーターこと、穴戸小梅こづめが他のカメラが捉えた映像を再生する。いくつかのモニターの映像が、穴戸の操作に応じて差し替わっていく。

「ここです。確か、……芝浦！」

「芝浦？ あのサイのライダーかい？ あいにくだけど僕、あいつ嫌いなんだよねエ」

「それは芝浦さん違いだと思いますよ」

少し困った笑顔で穴戸が答えた。そのライダーらしい芝浦は大学生であり、経済学部にて頭は良いが性格がもう最悪。

戦いをゲーム感覚で楽しむ幼稚さと強い残虐性の持ち主であり、どんなお人好しでも彼の極悪非道ぶりを目にすればこう言うだろう

『最低』だと。

まあ、そんな彼も火遊びが過ぎたのが運の尽きだった。何を血迷ったか、よりよって一番危険な爆弾に火を点けてしまったのだ。その最期であったがどう反論しても、どう考えても自業自得であった。何しろその爆発物の近くにいた彼が悪かったのだから。悲しいことだが、ライダー同士の戦いはこういうものである。

「まあ、それはおいといて。……さっきの男が別の男と一緒に映ってるわね」

「なんだこいつ？ 穴戸ちゃん、拡大してみてくれ」

「はい」

穴戸が昨晚芝浦で録られた映像を拡大する。

先程の変身男が化けているスーツ姿の怪しい男と、逆立った派手

な髪型の男がそこにいた。このうち髪が逆立っている方はギターを持っている。

「あれ、この怪しいやつ隣の人って……ちょっと、やだ！ 狩谷シンジじゃない！ かつこいー！」

「狩谷シンジ？ 誰それおいしいの？」

「ご存知ないんですか！？ 彼こそロックバンド『アルペジオ』の元ギター兼ボーカルで今では脱退したギター王子、狩谷シンジですよ！」

「……えっ？ 狩谷シンジって、あのアルペジオの！？ だったら超有名人じゃないか！」

村上が驚愕するあまり目を丸くした。いつも冷静沈着な彼とは思えないほどに動揺し、床にしりもちまで突いてしまった。

しかしすぐに立ち上がり、ホコリを手で払い体勢を立て直す。わざわざやる必要性は微塵も感じられないが、このとき眼鏡のブリッジも指で上げていた。

「おい、チミ達！ 狩谷シンジだぞ、狩谷シンジ！ どこぞの高給取りさんなんか霞んで見えるぐらいの有名人だぞ！ もちろんみんな知ってるよなあ？」

さりげなく不破の悪口を交えながら、村上がその場にいる全員にそう呼び掛けた。

どこか調子外れで妙にテンションが高く、普段の彼らしからぬ言動だった。周囲のメンバーは一瞬戸惑ったが、すぐに空気を読んで

「知ってます！」

と、一斉に口を揃えて答えた。その様子はさながら、カエルの合

唱である。聞いた方もこれには驚き、目を丸くして口を細めていた。

「まあ、なんだ。そんなことはどうでもいい……狩谷シンジとあの男がどういう関係か調べてくれ」

「はいっ」

「それから……変身していた方は人間ではない可能性がある。こっちも念入りに調べる。それと、そいつと話していた集団についても調査してほしい」

「分かりました！」

おどけた空気が一転、村上の表情が険しくなった。

口調も厳格になり、その冷徹なまでに真剣で確固たる信念を感じられる表情はシェイド対策課をまとめるのに相応しいものだった。

その晩。都内の銀行に一つの怪しい影が忍び込もうとしていた。周りに誰もいないことを確認すると、ずかずかと銀行内に侵入していく。

「いらっしゃいませ、どのようなご用で……」

その姿は、人間のものではなく……二本の足で立ち、左手にまさかりのような武器を持ったカメレオンの姿に変わっていた。

異形の怪物が目に残り、銀行員たちが悲鳴を上げて逃げ惑う。そのうちの足をつまずいた男性に詰め寄り、カメレオンの怪物は喉元にまさかりをあてがう。

「用件はひとつだ。金を出せ！」

「し、しかし……ここにあるお金はすべて、お客様から預かっている大事なお金です……」

「うるせー！　んなこたアどうでもいい！」

いきり立って金切り声を上げたカメレオンが、銀行員の男性の腹を思い切り蹴飛ばす。苦しそうなうめき声を上げて壁に叩きつけられた。追い討ちをかけるように詰め寄り、カメレオンは壁にしがみついている銀行員に顔を急接近させた。

「早くこの銀行のカネ全部持ってこい！　さもないと……ここ一帯に血の海が出来上がるぜえ〜！！」

「ひえーっ！　わ、分かりました、いくらでも出します！　ですから命ばかりはあーっ！！」

「へっへっへ……中々ものわかりがいいじゃねえか」

銀行員を脅したり、或いは姿を消してセキュリティを潜り抜けたり　あらゆる手段を使って金銭を強奪した。

ただ、透明化の件はあくまで姿を消しただけであり、レーザーにはもちろん映ったし、赤外線センサーにもばっちり感知されていた。両手でも持ちきれないほどの現金が入った袋ごと隙間に飛び込み、そのままいずこへと移動する。そして行き先は　どこかの地下駐車場。

広々としており天井も比較的高く、隠れるにはちょうどよさそうだ。かなり重たそうな様子で金の入った袋を持ち上げて置くと、随分と萎えたような顔でため息を吐いた。

周りに誰もいないことを確認し、姿を変えてゆく。カメレオンの姿から　今度はスーツを着た怪しげな男性になった。そして携帯電話に誰かの電話番号を入力し、電話をかける。

ところ変わり　若者の街、渋谷。きらびやかなネオンが輝きを増す中、『x』の形にクロスした特徴的な交差点の中を多数の人々

が歩きすれ違っていく。

その人混みの中に一人、逆立った髪型でギターケースを背負った若い男性がいた。生きていくのに疲れたような、ふて腐れたような複雑な表情を浮かべていた。

やがて交差点の人混みから、人気がなく薄暗い交差点へと反れていく。それから転々と街中をさまよい、最終的に高架をのぞむ河原へと躍り出た。

河のほとりに座って、淡々とギターを弾きはじめる。まるで今の彼の心情を表しているような、哀愁が漂う音色を奏でていた。

違う、今奏でたいのはこんな湿った音ではない。違和感を感じ、焦って音程を変えようとす。だが、それでも上手く音を奏でられない。苛立ちが募ったミュージシャンの男は、やがてギターの打ち込みをやめた。

「ダメだ。こりゃあ、ソロデビューしても長くはもたねえ」

ため息混じりに河原へ続く坂道で寝転び、ギターケースを枕がわりにして夜空を見上げる。

星々が光っているもののあまり鮮明とは言い難く、彼の気分はさっぱり癒されなかった。

むしろ、ますますブルーな気持ちになったぐらいだ。そこに電話がかかり、携帯電話が震えて着信音をかき鳴らしていた。

「もしもし。狩谷ですけど」

「私だ。いきなりですまんが、君と二人で話したい」

「なんでまた……場所はどこッスか？」

「今から言う場所にきてほしい……」

声の主は、以前マネージャーになりたいと言って近づいてきた男性だった。彼に言われるがまま、ミュージシャン 狩谷シンジは

指示された場所へ向かう。

やがてその指示された場所である 地下駐車場に足を踏み入れた。熱気が籠っていて、少し蒸し暑い。

マネージャーになりたがっていた男を探し回ってしばらくすると、大量の現金を大きな袋やトランクに積めて待っていた怪しい男を見つけた。断言できる、こいつだ。

「あ、あんた、そんな大金どこで……！」

「細かいことは気にするな。全部君のものになるんだから……手に入った経緯なんてどうでもいいだろう？ 宝くじで一等が当たったといえば回りの連中は誤魔化せるさ」

マネージャーを名乗る怪しい男がにやつきながら舌なめずりする。やはり心配した通りだった、こいつは怪しい。そう確信した狩谷の背中に、おびただしいほどの悪寒が走った。

「……やめだ」

「なにイ？」

「こんな怪しい金積まれてプロデビューなんかゴメンだぜ！ この話はナシだ！ 一人でプロ目指す夢は捨てる！ ……けど、アルペジオの皆と一緒にプロ目指す夢は……捨てねえ！」

スーツの男が舌打ちし歯を食い縛る。駐車場から走って逃げ出そうとする狩谷の前に、そうはさせじと怪しい男が回り込んだ。

「捨てるだと？ そんなのもったいないだろうが。お前に捨てさせるくらいなら……」

スーツの男が黄緑色に発光し、その姿をモザイク状に歪曲させていく。

ねずみ色の髪をした不気味な青年になって不敵に笑った。かと思えば、今度はカメレオンの怪物のような姿に変わり、うるたえる狩谷を殴り飛ばして壁に叩きつける。飛び散った血が壁にこびりついた。

「そんな夢ブツ壊してやる!!」

「うわああああっ!!」

鋭利な爪を生やした腕を振り下ろされた。もうダメだ、逃げられない! 身を守ろうとして悲鳴を上げた狩谷だったが、おかしい。確かに鋭い爪で引き裂かれたはず、なのにこうして生きている。それどころか、血を一滴も流してもいなかった。不審に思い、腕をどけて冷静に前を見てみると、目に映ったのは激しく狼狽しているカメレオンの怪物。そして ランスを構えた金髪で長身の男性。紺色のジャケットをハードに着こなしていた。細身ながら筋肉質でだいぶ戦い慣れたような、頼りがいのある雰囲気醸し出していた。

「危なかったな……あんた、狩谷シンジだったか? 医者にケガ治してもらって、早く仲間のところに帰りな」

「あ、あの……」

「礼ならいらねえよ。ほら、今のうちに逃げる!」

金髪の男性に逃がしてもらい、狩谷は駐車場の外に走っていく。彼が無事外に出た事を確認すると、金色に髪を染めた男性 不破はランスをカメレオンに突きつけた。

「あちこちの銀行から通報があつたんだ。化け物が金を盗んだとか、銀行員を脅して無理矢理現金を出させた……とかな」

「ヘッ、そんなの嘘っぱちだ。証拠はあるのか」

「証拠？ んなモン数え切れねえぐらいあるよ。たとえばてめえの後ろとか、他には……カメラとかな！」

自信満々にそう言い放った。気を取り直し、不破はカメレオンに再度ランスの穂先を突きつける。

「さて。盗んだ金、返してもらおうか」

「断る！ 俺様は大金持ちになるんだ！ あれだけありゃあ、当分遊んで暮らせるぜ！ ひゃーっはっはっはっはっはっはっ……あれ？ なんもない」

唾を飛ばしながら、下品にカメレオンが笑った。ところが、その直後。後ろを振り返ると 盗んできた金がすべてなくなっていた。いつの間に消えた？ いったいどこに行った？ カメレオンが呆然としている中、不破はまたも余裕たっぷりに笑っていた。

「悪いな、お前から被害者を守るまでにすべて回収させてもらった。今頃きつと輸送車の中だろうな」

「こ、この野郎……！」

怒りを露わにしたカメレオンにランスをみたび突きつけ、今度は目をカツと開いて睨みつける。

表情も真剣そのもので、それだけではなく 非道な行いに対する激しい怒りも感じられた。

「おしゃべりはここまでにしようぜ……腐れ外道さんよオ！」

さあ、戦いだ！

EPISODE 73：姿を変えしモノ（後書き）

どうも。このたび人気投票を設置いたしました！

といっても、実はだいぶ前から作って設置してあったのですが…（

^^；

目次や各ページの下から飛べますので、よければ投票してください。
投票していただけるとSAI-Xのモチベーションが上昇しますし、
更にその結果が本編の内容に反映されるかもしれません。

では、投票に限らず評価と感想、そして質問をお待ちしております
！

EPISODE 74：こちら激戦区

カメレオンと不破、両者はにらみ合い直立したまま一步も動かない。お互い様子を伺っているままだ。先に動いたのは 不破だった。

先手必勝と言わんばかりに、相手が対応しきれないほど凄まじい速度で猛攻を加えていく。もちろんこのまま完封できるとは思っていないが、もし相手が打たれ弱いのならすぐに片付けられるだろう。やや過剰すぎる節はあるものの、こういった自信があるからこそ不破は思いきった戦い方ができるのだ。

そのすばやい動きの前では、ただ力任せに武器を振るうだけではかすりもしない。事実、カメレオンの攻撃はことごとくかわされ、当たっても弾かれる有様だった。

「は、早い」

「ここじゃ狭い……外でやろうぜ！」

不破が構えたランスの穂先で稲妻が激しく弾け飛んでいた。うるたえるカメレオンを蚊ほども気にせず、そのまま勢いに乗って突撃して壁をぶち破った。

壁をぶち抜いて飛び出した先は 高架下に広がる河川敷だ。広々としており、ここならあまり被害は出ないし迷惑もかからない。つまり、戦うにはうってつけの場所だということだ。

「ぐえええっ」

先程の突進しながらのチャージ攻撃が直撃して倒れていたところへ更に追撃が加えられ、無様にも大きく吹っ飛ばされて転がっていく。

小石に体を痛め付けられ、やがて頑丈で硬い塀に叩きつけられた。容赦ない突き攻撃をかわしたかと思えば、保護色で周りの景色に溶け込んで姿を消した。

「くそつ、どこ行きやがった？」

「けーっつけ。お前の後ろだあ！」

「ご親切にどうもッ！」

すばやく振り向き同時に切り払う。奇声を上げながら上空へ打ち上がったカメレオンに追い討ちをかけ、地面へと叩き落とした。

その軽妙で隙のないフットワークの前では、反撃など一切許されない。つけ入るわずかな隙すらもなく、無謀にも彼に戦いを挑んでしまった相手はただ一方的に攻撃されて押されるのみだ。

次第にカメレオンは焦燥を隠しきれなくなり、ついにそれが表に出た。怒りに任せて襲いかかるもその乱雑な振り方では不破には通じず、何度切りかかっても返り討ちに遭った。

「化^{シナイト}け物にしてはそれなりにやるようだが……よくそなんんで今までやってこれたな」

「う、うるせえ！」

カメレオンが軽快に動きそのまま飛びかかる。

だが それでも不破には通じない。軽くいなされ再び地面に叩きつけられた。

「おせえよー！」

「こ、こいつ……強すぎるっ……！」

幾度となく地面を転がされ、ランスを何度も打ち付けられ カメレオンは心身共にボロボロだった。だが、彼も負けっぱなしでは

なかった！

「だ、だが……一対一では強くても多数が相手ならどうかなあ!?」
図々しくも勝ち誇ったような金切り声を上げると、声に応じるかのように隙間から大量の最下級シェイド　クーパーが現れた。ざっと数えて五十匹。いや、百匹ぐらいはいた。熟練しているとはいえ、この数を相手にするのは流石の不破でも少々厳しい。

余裕のある顔つきで挑んでいた彼の表情も、さすがに張り詰めたものとなっていた。見渡す限り周りは　うねうねとひしめくシェイドの集団。

無論、このまま呑み込まれて食われるつもりはない。では、どうするか。考えるまでもなくその答えなら既に出ていた。

力を振り絞って敵をすべて一掃するまでだ！　不破がランスをかざすと円錐形をした穂先から、激しい電撃がほとばしり最下級シェイドを蹴散らしていく。

一体、また一体。気付けば不破を取り囲んでいた最下級シェイドはほとんどいない。不破がランスで自分の周囲を回転しながら切り払ったときには既に、全員霧消むしょうしていた。

「さて、どうすんだ？　お前のお友達はみんななくなったようだ
が」

「ギギギ……！」

頼みの綱もなで斬りにされ、もはや行き場はなくなった。恐怖に怯えたか、カメレオンの体が著しくびくついていった。

「それにお前ももうボロボロだ。こっちは部下を呼んでお前をそのまま取り押さえることだってできるんだぜ。さあ、どうすんだ？」
「に、逃げるが勝ちだあっ！」

後ずさりしていくカメレオンだったが、隙を見てすたこらさつさと逃亡。

高架の真下まで追いかけるも、隙間に飛び込まれ逃げきられてしまった。

舌打ちすると不破は携帯電話を取り出し、モニタールームに連絡を入れるための番号を入力する。

「オレだ。敵を逃してしまった……すぐそちらへ帰還する」

先程壁をぶち抜いた駐車場へ戻って愛用の黒いバイクにまたがり、全速力で警視庁を目指す。

あと少しで倒せたかもしれない相手を見逃してしまったのは腑に落ちないし、自分に対して怒りたくなるが　すべては自分の甘さが原因だ。

だが、逆に言えばそれは　東條健と知り合ってから心持ち優しくなった、ということなのかもしれない。

「戻ったぞ！」

「おかえり。惜しいね不破くん、良いところまで行ったのに逃しちゃうなんてさあ」

手元にある資料を見ながら、ふて腐れたような、呆れたような曖昧な口振りで村上が話しかけてきた。

眉を若干吊り下げながら言うており、こちらの神経を逆なでするような、嫌がらせも含まれた口調であった。メガネのブリッジを指で上げている仕草が、余計に腹立たしい。

「すまねえ、オレが気を抜いたばかりに……」

「この役立たず！」

急に立ち上がったてなじったかと思えば、裏拳を不破の左頬に叩きつける。床に突っ伏した不破の胸ぐらを掴み上げると、威圧するよきな目付きで睨み付けた。

「反省するのは結構だが、わざわざ口に出さなくてもいい。ヘドが出るんだよ」

「うっ、く……」

「それに僕が失敗が嫌いだってことは、君もよく知っているはずだ。あとはわかるよなあ……不破？」

今にも血を吐き出しそうなうめき声を上げ、苦しそうに不破がもがく。自分の襟を掴んでいる村上の手をどけようと必死になっていた。

「なんのマネだ、離せ……離せえッ！」

「誰に口を聞いているのかなあ？ 僕は君の『上司』なんだぞ。その上司に偉そうな口を聞くのは止してもらいたいものだが」

「ふ、二人ともやめてください！」

険悪なムードに周りも狼狽する中、ただ一人だけその渦中に飛び込んだ勇氣ある人物がいた。黒髪に赤い瞳をした婦警 穴戸だ。

いつものような笑顔はたたえておらず 凜として険しい表情をしていた。そして彼女は二人の襟をつかんで勢いよく頭をぶつけ合わせ 『ごつつんこ』させた。

その衝撃で不破と村上 両雄は突っ伏した。不破は目を回しておかしな表情を浮かべたまま座り込んでおり、村上は白目をむいて舌を出していた。更に頭上には星が回っている。

「ケンカはダメです！」
「ごめんちゃい……」

村上と不破。ケンカの絶えぬ二人を止めるのは大抵が宍戸小梅の役割。はじめは気が咎めていたものの、気がつけば彼女もすっかり仲裁役が板についていた。

「うっぐ」

どこかの廃工場。送電線の鉄塔の隙間から突如としてカメレオンのような怪物が飛び出して転がってきた。

人食いの怪物どもが跋扈し人を襲うこの世では、普通なようで普通ではない光景だった。しかもその怪物が人語を解し喋ったとしたら、なおさら『普通の光景』ではない。

「へへっ。ここまで来れば……」

モザイク状に姿を変化させ、人の姿になって廃工場の付近を歩いていく。入り組んだ地形だ。

それでいて狭いため普通に歩く分ならともかく、仮に戦うとなれば動きづらいことこの上ない。

廃工場を出て街中へ出ると、何度か見たことがある顔ぶれと出くわした。

茶髪で外ハネの青年、東條健たけると　その隣には長い白髪の女性、それから東條とは同年代と思われる藤色の髪をした女性。以上の三人だ。

「お前は……三谷みたに！　何しに来た！」

「きやつ……来ないで！」

「な、なあ そんなこと言わずに助けてくれよ！ 俺あ悪い奴らに追われてるんだ！ あいつらとても強くて俺がかなう相手じゃねえ。だ、だが、お前と手を組めばそいつら倒せるかもしれないんだ」

何を血迷ったか、戸惑い敵意を露わにする3人をよそにそんな話を持ちかけた。とはいえ、だいたい当たってはいた。どの道このまま帰っても甲斐崎ホスから挨拶代わりに大目玉を食らうだけ。

しかも自分は既に用済みと宣告されたクチ。人間社会で言うならば、会社の窓際に追いやられた拳銃リストラを宣告されたようなものだ。

だからといってそのまま辞めてやるつもりはない。どうせ辞めるなら、自分を散々バカにしてきた連中を見返してやりたい。

口うるさいだけの上司に下剋上がしたい。そこで彼は思いついたのだ。東條健という男に協力してもらえるように持ちかけ、手を組もうと。

彼はまだ未熟ながら日々強くなりつつあるし、実際に戦ってみて分かったが新人ルキのエスパーにしてはかなり強い。

着目した理由はそれだけではない。かつて同士であったアルビノドラグーンが、彼のパートナーとして契約ディールを交わしていたから、というのもあった。

彼女は上級シェイドの中でも指折りの実力と地位を誇り、上手く丸め込めば強力な味方となってくれるかもしれないからだ。

現在上級シェイド 否、シェイドすべての頂点トップに君臨している甲斐崎も強大だが、それとタメを張れるほどアルビノドラグーンも強い。

彼女や東條健と組めば、につつき甲斐崎を打ち倒し世界中の笑いや者にするのは容易い！ 自分はなんと天才的なのだろうか。そう三谷は思い込んでいた。

「俺は上の上のシェイドで、お前は超つええスーパールーキー。俺

たちが組めば怖いもんなしだ！　一緒に悪い奴らと不破をやっつけようぜー！！」

「　そういうことか。仲間を出し抜こうと思ったが、失敗したから守って欲しいと？」

アルヴィーが胸をたくし上げるように腕を組みながら、呆れた口調で鋭く冷徹な視線を浴びせた。

「……断る」

「なぜだ。悪い話じゃないと思うんだが」

「確かにそうかもね。けど、心の底からそうは思えない。それに……不破さんは大切な仲間だ。何されたか知らないけど、その悪いヤツと一緒にするな！」

「ケツ！　そうかい！　じゃあ死んでもらうしかねえなあ！」

帰ってきた答えは言わずもがな『NO』だった。そもそも三谷は彼らを何度も陰湿で卑劣な手段を用いて苦しめてきた。

ゆえに彼の要求を拒否するのは当然の事であった。にも関わらず、三谷は彼らに協力を持ちかけた。　文字通り、愚の骨頂といえよう。

舌打ちした三谷は怪物の姿に変身し、その凶刃を振りかざす。狙いは　藤色の髪をしたみゆきだった。しかし間一髪、健が盾で攻撃を弾いた。

「チイツ！」

「アルヴィー、みゆきを頼む！」

三谷を遠くへ吹き飛ばし、戦場は街中から廃工場へと移る。

複雑な地形から長引けば長引くほど不利になる。両者とも　早々にケリをつけねばと思っていた。

「うぐ……」

不破との戦いで負ったダメージが響いたか、三谷は思うように体を動かせなかった。

苦痛でよるめいている間にも健はどんどん攻め込んでいく。このままでは三谷の負けは確実。

更に健はパワーも強く、今の状態ではただ単に剣を振りかぶられただけでも致命傷になりかねないほどだ。

やがて反撃も出来ぬまま押されていき、遂には膝を突かされた。

「こ、降参だ！」

「……なに!？」

「もう悪さはしない。だからここは見逃してくれ」

「本当だな？」

やや信じがたい。卑怯な三谷のことだ、背を見せればすぐさま切りかかってくるかもしれない。

だから迂闊に背中を向けて去ることは出来ない。だが、一度くらいは情けをかけてやってもいいかもしれない。

熟考した末、健はこの場に免じて見逃してやろうとした。

それがいけなかったのだ。

「んなワケねえだろバーカ！」

立ち去ろうとしたところを一気に詰め寄せられ背中を切られたのだ。幸いかすり傷だったものの、体に激痛が伝わっていく。

どくどくと背中の中の流れ出る血がなんとも痛々しい。うめき声を上げながら、無残にも健は相手の逆転を許してしまったのだ。

(甘かった……こいつが悪いヤツだっことは分かってたのに。なんてバカなんだ……！)

「騙されてくれた記念にプレゼントをやるっ」

痛みを堪えて立ち上がると、三谷が舌で血をなめとり薄ら笑いを浮かべていた。両手でまさかりを持ち上げそのまま突撃し、眼前で振り下ろす！

自分を責めている暇はない。出し抜かれてしまったものの相手は手負い、ここから形勢逆転して畳みかければ。勝てるかもしれない。勝てなくても相打ちには追い込めるはず。

「地獄への片道切符だああああ……！」

「デエヤアアアア……！」

それは火事場の馬鹿力のようなものか？ 勇気を出して捨て身の一撃を一太刀浴びせた。

「ぎよおおおおお……！」

仰向けに吹き飛んだ三谷から紫色をした血液がべったりと飛び散り、地面へこびりつく。体力を大きく削った健は、剣を杖代わりにして立つのがやっとの状態になっていた。

大ダメージを受け人間体に戻った三谷は死なずにすんだもののひどく恐怖して情けない声を上げながら後ずさりしていた。

「こ、こいつ、バケモノか！？ ひえ っ」

騙まし討ちしてから見せた威勢は単なる虚勢でしかなかった。その恐怖にひきつった顔を見れば一目瞭然であり、彼がもはや東條健

より弱いのは否定できないことであつた。

そもそも三谷は直接戦闘は得意ではなく、どちらかといえればかく乱やその透明化する能力や他人の姿に化ける能力を駆使した騙まし討ちを得意としていた。

彼自身も上級シエイドとしてはまずまずの強さだったが、実力の低さをその卑怯さと狡猾さでカバーしていたといえる。

「はあっ……はあっ……」

相打つたものの三谷を退けた健は工場を後にし、みゆきやアルヴイーのもとに戻る。背中の傷がうずき、時折苦しげな唸り声を上げていた。

「健っ！」

「健くんっ！」

「安心して。あのカメレオン野郎は、追っ払ってきたから……うっ
！！」

二人に肩を持ってもらい、治療してもらつべく近くの病院へと急ぐ。二人とも苦痛に喘ぐ声を聞いていても立つてもいられなくなつたのだらう。

善は急げだ、それにこのままでは健は死ぬかもしれない。時は一刻を争っていた。

息を荒げるほど走つた末、診療所に辿り着いた。メガネをかけた優しそうな顔つきの医者 of 男性に用件を話すと、医者は快く承諾して診察してくれた。

「切り傷によく効く薬を塗っておきました。あとはご自宅で安静にしていれば翌朝には治るでしょう」

「かたじけない」

「本当にありがとうございます！ なんとお礼を申し上げたらいいのやら……」

「いえいえ。困った時はお互い様ですからね」

焦燥に駆られていた二人の顔が満面の笑みに変わった。診察代を払い、3人は診療所を出て駅前にあるアパートへ向かった。

ここまで来れば一安心だ。途中でみゆきとも別れ、二人はアパートにある自室へと入っていった。

「浅い傷で済んでよかったな。しかし三谷のヤツ……騙まし討ちまでするとはますます許せん」

「ホントだよ。少しでも信じた僕がバカだった」

「なあに、心配するでない。次からは騙されぬように警戒心を強めれば大丈夫だ」

「そうだね！」

二人で仲良く雑談していると、突如として健の携帯電話から着信音が鳴り出した。

いつもながら激しく振動しており、音量も大きかった。

背中 of 傷に響かぬようそろりと静かに携帯をとり、相手と通話する。

「もしもし、東條です」

「あっ、東條くん。まだ起きてるかしら？」

「はい、白峯さん。さっき帰ってきたところですよ」

「そっか。実はね、あなたとアルヴィーさんに嬉しいお知らせがあるの。どんなことが聞きたい？」

「いい知らせですか？ 是非！」

いい知らせがあると聞いて健は興味しんしんだ。近くにいたアル
ヴィーも期待に胸を膨らませてスタンバイしていた。

「はい！ じゃあ、言うわよ。実はねー……このたび、新しくオー
ブを作っちゃったの！」

さり気無く白峯はそう言っていたが　この時、二人にただなら
ぬ衝撃が走った。

EPISODE 75：新兵器登場

「ちょ、ちょっ……それホントですか!？」

「ええ、ホントよ!」

オーブを作った。確かに白峯はそう言っていた。

二人とも驚愕のあまり言葉も出なかった。未知の力を凝縮した結晶であるオーブについて構造を解析するだけではなく、実際に作ってしまったのだから。

「ところで明日空いてる？」

「え!？ は、はい! 明日はバイト休みです」

「そう。じゃあ、あたしの家まで来てもらえないかしら」

「はい!」

「じゃあねー お茶とおかし用意して待ってまーす」

そこで通話が切れた。二人の表情には戦慄が走ったままだ。

このまま顔が凍り付いて二度と表情を変えられなくなりそうな勢いだっただ。

とはいえ、白峯のことだ。彼女がウソを言っていたとは思えない。彼女は文字通り『天才』な上にかんりの美人。研究に没頭するあまりオシヤレはあまり気にかけていないものの、同年代のヘタな女優よりも綺麗かもしれないほどの美貌を持っていた。

それでいて年齢不相応なほどに子どもっぽく、快活。世間の荒波に揉まれて曲がりなりにも曇っていきそうなものだが、瞳は澄んでいてある種の純真さも感じさせる。

そんな彼女にうそつきなどと勝手にレッテルを貼り付けて目の前でそう呼べるだろうか？ そんなことはできない。そもそも 仮にやるとしても実行する気も起きやしないだろう。

だから、彼らは白峯は信じる。とくに健に到っては、浪岡が生前率いていたセンチネルズの本部から共に脱走してきた仲だ。雨が降ろうが槍が降ろうが、隕石が落ちてこようが　今更彼女を疑うことなど、彼には出来なかった。

「コケコツコー!!」

そして天に日が昇ると共に、ニワトリの高らかな鳴き声と小鳥のさえずりが朝を告げた。それと同時に枕元に置いてあった携帯電話から大音量でアラーム音が鳴り響き、おぼろげに健が目覚ました。

目が半開きで右目は閉じており、まだまだ眠たそうだ。窓のカーテンを開けると、眩いばかりの日光が部屋の中に注ぎ込まれた。

あまりに眩しかったので、つい思わず手で遮ってしまった。その後ろでは、これまた眠たそうにアルヴィーがうめいていた。

窓の前で日光をたっぷりと浴びている健の後ろで、少しだけ開かれた彼女の紅い瞳の中に光が差し込んだ。白くて長い髪と一緒に体を揺り起こすと、足で立たずに膝で健のそばまで歩み寄った。

「眩しい……いや、暖かい。早起きして損はなかったのう」

「まだ寝てて良かったんだよ。僕も今日はバイト休みだし」
「ははっ。そうだったなあ」

寝癖でボサボサになっていた髪をなで上げ、アルヴィーがくすりと笑った。時間がかかりそうだが、その背中を覆いそうなほど長い髪をくしで整えてやりたいと思った。

少し浮いているかもしれないが　どこか現実離れたこの妖艶な雰囲気は彼女の最大の魅力だと彼はそう思っていた。

更にまだ起きたばかりで気付いてはいないだろうが　前髪で右目が隠れ、よりミステリアスな雰囲気を醸し出していた。

口に入りそうなくらい長く伸びた前髪が1本だけちよろんと出たいつもの髪型もいいが、このヘアースタイルもカッコいいのであるかもしれない　と、健は感じていた。

準備を済ませた健とアルヴィーは、期待に胸を膨らませながら西大路へと向かった。そして白峯家に辿り着き、玄関のインターホンを鳴らす。

相変わらずの広さと大きさだ。既に何度か来ているとはいえ、見るたびに思わず我が目を疑ってしまう。

わくわくしながら待っていると、やがてとばりが玄関のドアを開けた。全員につこりと笑いながら家へ入っていき、靴を脱いでリビングにお邪魔させてもらう。

「相変わらず広いですね〜」

「そうですね。あたしもこの家にして正解だと思ってるわ。狭かったら研究用の機材とか本棚とかあまり置けないしね」

「さすがはとばり殿。賢明な判断だと思っぞ」

せっかく来たのにいきなりオーブの話をしてさっさと帰ってしまったのは少し失礼な気がした。なので二人は雑談で盛り上がり、ゆとりのある空間と茶と菓子をゆっくりと心行くまで味わわせてもらった。

この場にみゆきを誘っていないのが残念なくらい楽しいひとときだった。次は彼女も呼ぼう　と、健は考えていた。

「あっ、いけない。今日はオーブのことで尋ねてきてくれたのよね……ちよつと待ってて。すぐ持ってくるから」

しばらくしてふと思い出したようにとばりが、オーブの話題を持

ちかけた。

彼女の言うとおりの少しの間待っていると、ゴム手袋をはめたとばかりが黄色いビー玉のような物体を持ってきた。

バチバチと、微弱ながら電気が弾けているのが見える。球体の中でも稲妻が激しく轟いている。

「お待たせー」

「こ、これが昨日言ってたオーブですか!？」

「ご名答　電気の力を凝縮した雷のオーブよ。不破君に協力してもらったの」

とばかりからオーブを受け取り、早速触ってみる。
バチッ！　と、静電気が指先から全身に伝わった。思わず肩が少し浮き上がってしまった。

「し、シビれる……!」

「本当か!？　私にもソレを」

静電気にやられたおかしな表情のまま、アルヴィーに雷のオーブを渡した。

彼女にもバチッ！　と静電気が伝わり、一瞬だけ全身が痺れた。

もし握ればどうなるだろうか　いや、ここはやめておこう。感電して下手したらそのまま死んでしまうかもしれない。

わざわざとばかりがゴム手袋などを着用していた理由もこれでようやく分かった。迂闊に触らないほうが賢いといえるだろう。両者ともそう判断を下した。

「でもこれ、すごいなあ！　すぐに使えますか!？」

「それなんだけど　」

新しいオモチャを買ってもらった子どものような表情で訊ねる健に対して、白峯は少し顔を曇らせた。

しばし目を閉じて沈黙した後、突然目をカッと開いて、

「すぐには使えないわっ！」

と大声で叫んだ。突然とばりに大声を出されたことにより二人は思わず腰を抜かした。

とくに健はすっ転んだあまり尻もちをついてしまい、尻を痛そうに掻いていた。

「ど、どうしてですか？」

「それはね、ハッキリ言っちゃうけど……本来あなたが持っている能力じゃないからよ。それとこれは出力がだいぶ強めだから、そうね。体力と精神力、どちらも今の二倍は無いと使いこなせないかも」
「なるほど……」

ゴム手袋をはめたまま雷のオーブを見つめながらとばりがそう説明した。

不破と共にこれを開発したとばり自身も、このオーブを高出力にして本当に大丈夫なのか危惧していた。

しかし、シエイドを倒すためには生半可なエネルギー量では許されない。使用した反動で健の肉体にダメージが及ぶ危険性があることも予測していた。

それでも とばりは出力を高めることを実行したのだ。健くんならきつと、これを必ず使いこなしてくれる。そう信じていたからこそ起こせた行動だった。

「今の二倍……大丈夫かな」

「そう不安にならないで。健くんならきつと使いこなせるわ。あな

たにはそのくらい高い素質と才能が備わってるんだから 努力して開花させないとね！」

「はいっ！」

またも彼に、成長の兆^{きざし}が見えた気がした。一見冴えない若者ではあったが、そのダイヤモンドのように純粋な輝きを放つ心と強い意志、そして活力に溢れたその瞳。

努力を肯定し、己を良い方向に導くための努力を怠らないその根性。そして、明るい笑顔と優しい心。

彼はこれからも強くなり続けるだろう、やがて父親のように誰からも慕われる人物に成長していくのだろう。腕を組みながら佇むアルヴィーの紅い瞳は、今日もまた健を見守っていた。

「これから大変だのう。まあ、ぼちぼちとやっていこうではないか」「うんっ！」

「頑張つてね。応援してるわ！」

新兵器ともいえる『電気』を宿した黄色のオーブ。失われた超古代の技術で作られたそれが、現代となって人の手で新たに作り出された。

まだ若いながらも独自に構造等を解析し、このようなものを作り出した白峯とばりは、やはり真正銘の稀代の天才だといえるだろう。

彼女自身も生まれ持った知識と技術力が誰かの役に立てて、嬉しかったに違いない。

その頃。雷雲が覆い稲妻が轟いている空の下、岩山の切り立った崖に古びた洋風の城が建っていた。ところどころ朽ちかけてお

り、左半分は機械的な部分がむき出しになっていた。

その古城の中で、例の黒装束の男が玉座にふんぞり返って見下すような視線で眼前に集った同志たちを見ていた。

ねずみ色の髪に黄緑の瞳の男が酷くおびえた様子で、顔を下げながらまっすぐに黒装束の下に歩いていく。

「二度のみならず三度も……よくも私の顔に泥を塗ってくれたな、三谷！」

「ひ、ひいいッ！ た、頼む。もう一度だけチャンスをくれえ！ この汚名は必ずそそぐ！ だ、だから……」

甲斐崎が冷酷な視線を三谷を浴びせた。細身ながらもおぞましいほどの威圧感を彼は漂わせていた。

周りのものが思わずすくんでしまうほどだった。元々、小心者である三谷はそれが顕著で、際限なく生まれ出る恐怖心によって全身を震わされていた。

「何を言っているんだお前は？ 言ったはずだぞ……もう次はないと。お前が使えない奴だということは今回の件でよく分かった。ここまで醜態を晒してしまった以上もう言い逃れは出来ないぞ。それでもまだお前は、俺に対して見栄を張る気か？」

「うっ……」

「まあいい。こつちへ来い……」

手ぐすねを引いて三谷を自分の近くへと誘う。甲斐崎の隣にいた包帯を巻いていて素顔をうかがえない男が、甲斐崎に毒々しい紫色の液体が入った怪しげなアンプルを手渡した。

「こんなものを摂取しても大丈夫なのか？ 三谷は得体の知れぬその薬品を前に、唾をゴクリと呑み込んだ。」

「これは増強剤だ。頭が足りないなら力で補うんだな」

鋭い目で三谷を睨んだまま、甲斐崎が嫌味を含んだ冷たい笑みを浮かべた。

三谷に怪しげな『増強剤』を手渡し、引き下がらせる。

「それを飲めばパワーも、スピードも、能力も……何もかもが3倍に増幅する」

「さ、3倍!? スゲエ!」

「最後のチャンスをやろう。これを使って東條健を八つ裂きにしてこい」

「ありがてえ! ヒヤッハー!」

使えば能力が3倍強化される　そう聞いて三谷は大いに喜び、大いに騒いだ。そして意気揚々と玉座の間を飛び出していった。

「……バカめ」

そんな三谷を見送り、彼がいなくなった途端に彼はそう呟いた。どす黒い悪意がこもったような、他者を陰で嘲笑う冷酷な悪魔のような笑顔だった。

EPISODE 76：訓練する男

「健、背中の傷はどうだ？」

「もう大丈夫。さあて、特訓しますか！」

轟く雷いかすちの力を宿せし黄色のオーブ。とばかりから渡されたその新たな力は、本来持つ能力ではない為にいきなり使うことは出来ない！と注意を受けた。

そしてこの荒れ狂う稲妻の力を使いこなすには 少なくとも今の倍以上の力量が必要だとも言われた。

決してあきらめない体力、何事にもくじけぬ精神力。この2つを身につけた時、大いなる力をこの手に掴み取れるかもしれない。

不安は残っているものの 覚悟はできていた。これから敵は強さを増していくかもしれない。今のままではやがて太刀打ちできなくなるだろう。

だから ほんの少しだけでもいい。今は鍛錬を重ねて力を身に付けるべきなのだ。その為なら 彼は絶対に努力は怠らない。

「いち、に、さん、し……」

とはいえ、いっぺんにやり出すと体を壊してしまう。これでは意味がない。まずは家でも出来るようなことから始めようと、健は独自にトレーニングを行っていた。

腹筋と背筋をそれぞれ20回、加えて腕立て伏せ10回。少し休憩を挟んでスクワットも行った。何十回も体を動かしたのが効いたか、体中から汗が吹き出していた。

よく見れば、こともあろうか湯気まで立ち昇っている。それほどまでに今の彼は、体に熱を帯びていたのである。

「お主、さつきから必死にトレーニングしておるが……たまには休めよ」

その隣ではアルヴィーが机に頼杖を突きながら雑誌を眺めていた。スタイルの良い女性が表紙を飾っているファッション雑誌だ。

彼女はとりわけオシャレに関してあまり気にしないようなイメージがあつたが、意外にそうでもなかったようだ。

もっとも、彼女を見てそのようなイメージが浮かぶのは、基本的にワイシャツとジーンズ、またはスカートですませてしまっているからというのもあつたが。

そもそもアルヴィーは初対面の時、こともあろうか全裸で健の前に人としての姿 人間体を現した。もし髪が長くなければすべて丸見えだっただろう。

傍からみれば変質者にしか見えなかった。それでもそついった変態臭さを微塵も感じさせなかったのは 彼女が人知を超えた神秘的な存在だからということに他ならない。

「でもさつ、心と体を鍛えなきゃ『アレ』は使えないんでしょ」

「それはそうだが……」

「だったら鍛えるしかないじゃないか！」

自分がいまさら水を差したところで彼は止まらないだろう。せつかくやる気になつているのだ、ここはあえて止めずにそのまま続けさせよう。

どの道、やっているうちに体が疲れてくる。そうなるまでやらせておけば勝手に彼は休むだろう そうアルヴィーは思っていた。

などと思つたそばから、気付けば健は床でぐつたりと突っ伏していた。

「ちょ、ちょっとやりすぎた……かも」

「そのようだよ」

次の日。体のほうはもう十分に鍛えた。しかし、問題は精神力の方だ。

「どうやって鍛えればいいのか？ とぼりさんが冗談で言っただけという事も考えられるが、鍛えておいた方が良さそうだと、健はそう考えながらバイト先に向かっていった。

相変わらず電車が混んでいる。ぎゅうぎゅう詰めで今にも押し倒されてこの群衆の中で生き埋めになりそうである。

まるでこんな風に、世間の荒波に揉まれなければ心も体も強くないということを示唆されているようだった。

いつものようにあくせく働き、ときに茶を飲み、また働き――
― 応背中を怪我しているというのに、苦しそうな素振りは一ひとも見せなかった。

それほど彼の回復力がすごかったのか、はたまた先日診療所で医者に塗ってもらったクスリが効いたのか。恐らくその両方があわさったのだと思われる。

そうしているうちに昼休みが来た。自家製の弁当を早々に食べて一息つくくと、メモ帳とペンを持って回る。

職場中の同僚や上司に自分の手が届く範囲で、いいトレーニングの方法はないかを聞いてメモを取ろうというのだ。

いろいろな情報が聞けた。瞑想にヨガ、座禅に筋トレ、断食。そのうち健は、いつも世話になっている浅田達にも聞いてみることにする。

「すみません、心と体を鍛える方法を探してるんですが……何かいい方法ありませんか？」

「エッ？ と、東條くん。いきなりどうしたの……」

「あっ、いえ、何でもありません」

「変なのー。でもイイこと教えてあげる！ そうね、坐禅とかいいかもしれないよー」

「なんでですか？」

「それはね、坐禅って姿勢を正して坐るのを保つじゃない。我慢大会みたいなもんなの。あたしに聞くより実際にやってみた方が早いかもしれないヨ」

浅田からは坐禅を薦められた。他にも彼女は、自分もたまに家でやっているということを教えてくれた。人というのはときに、意外な趣味を持っているものだ。

健自身も大の特撮番組好きで、小さい頃は怖がってその手の番組は観てすらいなかったものの、中学3年生になる頃には大好きになっっていたという。

しかしその一方、着ぐるみによるキャラクターショーは抵抗があるようだ。それは恐らく、キャラクターの着ぐるみが無表情だから怖い というのがあったからかもしれない。

次に彼は、コンピューターに関する知識では誰にも引けをとらない今井^{いまい}みはるに聞いてみることにした。

「すみませーん、精神力を鍛えようと思うんですけどどうしたらいいでしょうか？」

「そうですね。わたしの知ってる範囲だと……ネット上の掲示板で煽りあいをするとか」

「えっ！ 匿名ですか！？ それともコテハンつけてですか！？」

「コテハンはちょっと痛いと思うんで、匿名のほうがいいんじゃないですかねー」

「今井さんはそれ、実際にやった事ありますか？」

「いやいや、してないです！ 流石のわたしもそこまで過激には…」

…

「で、ですよね……アハハ」

今井からは『掲示板での煽りあい』　　というのは冗談で、『新聞の記事などの打ち込み』や『1時間は集中して文章を打ち続けること』というトレーニング方法を教えてもらった。

そういえば自宅アパートにノートパソコンを持っていた。もつとも彼の場合、職場には仕事用にPCが置かれているため、ほとんど趣味にしか使っていないかったが。

しかしながら、トレーニング方法としてはいい線を行っていた。今井に感謝を告げると、続いてジェシーに聞きに行く。

彼女にはいつも世話になっていて健であったが、今でこそ庶民の暮らしをしているとはいえども彼女は元々お嬢様。

どこに住んでいるか、何を食べているか、家で何を過ごしているか　ほとんど想像できなかった。そもそも彼は平凡な庶民の端くれで、くどいようだがジェシーは大富豪の娘。

だいぶ親切にしてもらったりしているものの、身分がつりあわないというものだ。当然コンプレックスも感じていたし、話しかけるのを遠慮したりすることもあった。

しかしながら、その彼女の方から親身になって日々付き合ってくれたり、相談に乗ってくれたりしているのも事実。

今更何かを聞く事を遠慮する必要などいらないはずである。そういつもそうしているように聞いてみればいいだけのことだったのだ。

「すみませーん、精神力を鍛えるにはどうすればいいと思いますか？」

「うーん……そうね。お坊さんみたいに、滝に打たれるとか」

「なるほど、冬場はつらそうですね。ハハハ……」

「それは言えてますね。うふふ」

相変わらず心が洗われるようなきれいな笑顔だ。見ていただけ

心が癒されるといふもの　自分が入りたての頃に必死でふりまいていた表面上だけの笑顔とは比べ物にならない。

ようやく彼女や浅田さんのように心の底から喜んで、清々しい笑顔を浮かべられるようにはなったが……まだまだ彼女らの足元にも及ばないだろう。

健はそう物思いに耽りながら、ジェシーを照れ臭そうに見ていた。

「いろいろ聞いたけど……何をしたらいいんだろう」

心や体を鍛える方法　とは一口に言っても、今日は実に様々な方法を聞かせてもらった。

同じ方法をもう何度も聞いた気がするのは否めないが　、少なくとも参考になったことは確かである。

これを取り入れつつ、自分なりの最良の方法で鍛練を積み重ねていきたい。そう健は決心していた。

通勤ラッシュならぬ退勤ラッシュで混んでいる電車や、満席で座ることすら許されないバスを乗り越え、ようやく駅前にある自宅アパートへ辿り着いた。

「ただいまーっ」

「オウ、お帰り。先に風呂使わせてもらったぞ」

「うん、分かった」

手洗いとうがい、そして着替えをすませリビングでくつろぐ。健はバイトに行く際はほとんど目立たない服装ですませてはいるが、プライベートでは暖色系を中心とした服装で過ごしていることが多い。

また、趣味の一環で何らかの文字がプリントされたTシャツを着ることもある。今日は『たられば』と書かれたシャツを着ていた。

ズボンはベルトを巻かなくてもいいタイプのゆったりとしたものを履いており、何となく着心地が良さそうだ。部屋でくつろぐには最適だったといえるだろう。

しばらく経ち、健はバスタオルと着替えのシャツとパンツを用意して風呂に向かおうとしていた。しかし、寸前でアルヴィーが「待て」と呼び止める。

「先に風呂入るのか？」

「うん。どうして？」

「いや、その……」

頬をほのかに赤く染め、顔をそむけた。

どうも頭の浮かんでいる言葉を口に出すのが恥ずかしいようで、何か気まずいことを言ってしまったのではないかと、健も少し戸惑っていた。

お互いにもじもじしていると、やがてアルヴィーの方から口を動かした。

「……私は腹が減ったんだ！」

「そっちかい！」

予想の斜め上をゆく返答に、健が驚きざまにツッコんだ。彼は恐らく、アルヴィーが運命的な告白をしようとして告白するのをためらっているのだと思っていたのだろう。

でなければあのような反応はできないというものだ。「お風呂上がってから作るからもうちょい我慢して」と彼女に言い聞かせ、健は風呂場に入ってしまった。

体を洗ってさっさと浴槽に入り、さっさと上がった。早めに上がったのは、腹を空かせているアルヴィーをあまり長い間待たせるわけにはいかなかったからだ。体を拭いて寝間着を着ると、すぐさま

キッチンへ向かう。

「まだかのー……」

「お待たせしましたっ！ 今夜は塩焼きそばだよ」

「おお！ これはうまそうだ！」

漂う塩胡椒しおこしの香り。それを嗅いだ瞬間、空腹となったことで湧き上がった食欲が更に増長した。

焼きそばといえばソースをかき混ぜて召し上がるのが主流だが、塩焼きそばも前述のソースに負けぬほど流行っており、そのあっさりした後味の為たまに食せばおいしいと思えるほどだ。

故に需要は高く、主にこってりした味の食べ物に飽きた頃に作られることが多いのも特徴のひとつ。

「うまいっ！ ソースもいいが、塩味も捨てがたいなあ」

「でしょ、でしょー。母さんもたまーに作ってくれるんだよ」

「つまりこの味は、母上からお主に受け継がれたということか……胸が熱くなるのう」

「む、胸が熱く……はっ！」

健の母をまるで自分の母としているような口ぶりでアルヴィーが感心した。

彼女自身には別に悪意はなかったものの、やたらと『胸』を強調して発音したために一瞬健の心臓が『ドキッ』と揺れ動いた。

しかしながら、彼女に胸があるのは紛れもない事実。『谷間』が気になってそこに視線が行ってしまうこともあれば、事ある毎に『胸が揺れているんじゃないか？』と疑問に思うこともあった。

更に言えば、「そんなに大きくて邪魔にならないのだろうか」という疑念を抱いたことも何度かあった。

自分はいったい何を考えているのだ。煩惱を捨てなければ

とは思いつながらも、健は焼きそばを食べ続けた。

そんな彼をアルヴィーは、「お主の場合、まず煩惱を捨てなければならんかなあ……」と、少し困ったような目で見て咳いていた。

EPISODE 77：久しぶりの模擬戦

「ふっ、くっ……!!」

「がんばれ！ あと1回だ！」

「ふんぬーっ！ はあっ、はあっ……できたあゝッ」

その翌日、健とアルヴィーは朝からスポーツジムへ入り浸って特訓していた。

家で筋トレするだけではダメだと実感し始めたのと、もっと他にいろいろなことをしなければ強くなれないと確信した彼は、ジムに設置された様々な器具を使ったトレーニング法を思いついたのだ。

つい先程までやっていたのはベンチプレスだ。ウエイトトレーニングの中でもとくに代表的なものひとつで、主に大胸筋や腕の筋肉を鍛えることが可能だ。

また、これを行うだけでも上半身の筋肉の60〜80%を鍛えることも可能だという。

この他にも以前やったようにアルヴィーに稽古をつけてもらったり、不破がいつもやっているようにひたすらにサンドバッグを殴り続けたりもした。

しかし、何をやってもいまいちパツとしない。もしや、使えずじまいで終わってしまうのでは　そう危惧して不安になり始めた二人の前に、助け舟を差し出したものがいた。

そのものとは　そう、不破ライだ。彼だけではなく、その傍らには微笑みをたたえながら手を後ろに回して何かを持っている女性ふうげつ 風月みゆきもいた。

「オツスオツス！ 張り切ってるみたいだなあ、お二人さん」

「不破さん、しばらくぶりです」

「えへへ。またお弁当作ってきちゃった」

「みゆきまで！ それってホント？」

3週間ぶり、いや もっと経っていただろうか。とにかく、健もアルヴィーも、そしてみゆきも久々に不破と出会えた。

以前の常に怒っていたり、どこか重苦しい表情ばかりを浮かべていたりした不破と同一人物とは思えないほど豪放で、陽気になっていた。

以前までの不破が『ぶつきらぼうで近寄りがたい先輩』なら、今の彼は『よき兄貴分』というにふさわしい。

「話は白峯さんから聞いたぜ。例のオーブが使いこなせるように特訓してたんだってな？」

「はい。とにかくいろいろやってみたんですけど、あんまり効果がないような気がして」

「……そういっただろうと思った。オレが特別に訓練してやろう」

「本当ですか！？」と、健が感謝の言葉を口にした。しかし同時に、以前のように一方的にボコられ何もできない状況にされるのではないだろうか？ という不安も抱いていた。

不破に誘われるまま、3人はどこかの空き地に向かう。そこはかつて健が不破と模擬戦を行った3丁目の空き地だった。

当時の嫌な思い出が蘇ったか、健は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。思えばあのときは、自分の態度にも問題があったかもしれない。

しかしそれ以上にいけなかったのは 不破の態度だ。思い出しただけでむせ返りそうである。事実、健は顔を土気色にしていた。

そんな彼の顔色を見て、アルヴィーとみゆきは「大丈夫だろうか」と心配していた。

「おい、どうしたんだよさっきから？ 顔が曇ってるぞ」

「べ、別になんでもありませんよ」
「そう。大丈夫かね、そんな暗い顔で」

不破が呟いた。少し呆れた表情だ。しかし、すぐに険しい表情に変わり左手に握ったランスを突きつける。

円錐状の穂先は、しっかりと、まっすぐと健に向けられていた。

「まあいい。はじめっぞ！」
「望むところッ！」

戦いの火ぶたが切って落とされた。先攻をとったのは不破だ、捉えるのが困難なほどの速度で走って健をかく乱する。

確かに直接、肉眼で相手を見るのは少々辛いかもしれない。だが、心の目を開けば見える！

振り向きざまに一閃！ だが、当たったのに当たった感覚がしなかった。感覚が矛盾している。まさか！

「残像だ！」
「っぐ！」

背後から大きく蹴り飛ばされ、地面を転がって行く。しかしすぐに立ち上がり、不破目掛けて走っていく。

そのまま切りかかるもかわされ、不破は「動きを乱すな！」と指摘。

「戦いつてのは相手にペースを崩されたら終わりなんだ。自分のテ
ンポを保て。相手の動きを読めば、自然と息は乱れない」
「……はいつ！」

アルヴィーもみゆきも、訓練とはいえ緊迫感漂うこの戦いを見て

思わず息を呑んでいた。

危なっかしい二人のことである、いくら訓練といえども下手すればお互い殺しあうことに繋がりがかねない。

だから戦いを傍観する方もそれなりに覚悟が必要だったのだ。みゆきはやや心配そうに、アルヴィーはあくまで冷静に　二人の戦いぶりを見ていた。

「ついてこれるか！」

不破が再び加速。あまりの速さに自分が遅く感じてしまう。いや、それは至極当然の事ではあるのだが。

それを差し引いても彼は速い。しかも、完全にこちらのペースを崩そうとしている。

いつまでも相手の好きにさせてはられない　ヘナヘナしていた健の目の色が、険しいものへと変わっていく。その瞳の中は、熱い闘志で燃え上がっていた。

「どうした？　こっちは全速力じゃないんだぜ」

不破が自信に満ちた口調でそう挑発する。だが、健は一步も動じない。不審に思うも、これを好機と見て思い切り振りかぶる。

しかし、健はすぐさま振り向き　油断していた不破を横薙ぎに切り払った。うしろに仰け反りながら、「やるな」と不破が呟いた。

「だが　コイツはどうかな！」
「ぬっ」

不破が静かに歩き出す。かと思えば　途中で3人に分身して一気に加速をつけた。誰が分身で、誰が本物か？

一瞬では見分けが付かない。だが、心を研ぎ澄ませれば　見破

れる！

「本物が誰か当ててみな！」

言われずとも分かっていた。健は剣を構えて立ち向かう。やがて彼を中心に三角形を作るような形で囲まれるが 健は剣を構えたまま微動だにしない。

業を煮やした3人の不破が一斉に襲いかかるが、待っていたと言わんばかりに健は回転しながらの斬撃を浴びせたッ

斬られたうち2人は雲散霧消し、残った一人は悶えていた。つまり他は幻で、こいつが本物だ。

「腕を上げたな」

「不破さんもね！」

剣とランスが幾度となくぶつかりあい、火花を散らす。パワー、テクニック、そしてスピード 己が持つ力すべてが問われる場面だ。

単なる武器のぶつけあいではなく 己の意志ならびに魂もぶつかりあい、弾け飛ぶのだ。

健に腕力で押し切られ、距離を空けた不破は疾走し跳躍。空中で激しくランスを振り回しながら、落下する勢いを利用して渾身の一撃を叩き込もうとする。

すさまじいスピードに加えて全体重も加算されている。生半可な攻撃や防御では打ち破れないし防ぐこともままならない。

では、一体彼はどうやってこの場を切り抜けようというのか？

その答えは簡単だ。少々荒っぽいが、やられる前にやってみればいいのだ。

今更あとには引けない、攻め切る姿勢あるのみ。健が大きくその長剣を一振りしたとき、とてつもないほどのパワーが不破の魂に刻

み付けられるッ！

「ぐえアアアアア！！」

「まだまだ行きますよ……不破さんッ！！」

宙を舞い、地面に叩きつけられた不破が立ち上がる。しかし、反撃する機会はなかった。

健は剣に炎のオーブを装填し 剣に力を溜める。

「ちょ、ちよつと。健くん、それはやりすぎじゃないの……。アルヴィーさんもなにか、あれ？ いない！」

それと同時に、アルヴィーがみゆきの隣から忽然と姿を消していた。

まさか、自分が戦いに気を取られている間に ? 気付いた頃には、アルヴィーは龍の姿となって健のそばを舞っていた。

そして跳躍し 剣を斜め下へと突き出す。狙いは無論、少し息を荒げてきた不破だ。

「うおおおーっ！！」

「くっ。ダメだ……防ぎきれねえ！！」

燃え盛る赤い炎と、灼熱の青い炎 ふたつの炎を纏い、急降下しながら不破へと突撃する！

対する不破も自然と体を動かし右手のバックラーを突き出して防御体制に入ったが 健はこともあろうか防御ごと不破を貫き、着地と同時に爆発を起こした。

吹き飛ばされた不破はボロボロになりながらも、ランスを杖代わりにして立ち上がる。苦痛にうめきながらも、少しだけ笑っていた。

「おいおい……、必殺技使うのなら使うつて最初から言ってくれよ」「すみませんでしたっ。ついいつもの勢いでやっちゃって……」

先程まで激情的になって、お互いに訓練という範疇はんちゆうを超えた激戦を繰り広げていた相手に 健は頭を下げた。

そんな彼を前に「やれやれ」、と不破は呆れるように返答した。

「さつきはすみませんでした」

「もういいって……アイタタ」

少々やり過ぎてしまった気がしたが、幸い不破の傷は浅かった。彼に応急処置を施したのはみゆきだった。彼女は曲がりなりにも医者いしやの娘である。医学にはあまり明るくないものの、応急手当の心得はあった。

それに加え、エスパーは傷の回復が常人より早い。明日か明後日になれば、もう治っているだろう。

「それより東條。お前、もう例のアレ使えるんじゃないか？」

「えっ？ でも……」

「そう謙遜しなさんな。お前さんはこのオレ様を打ち破るほどのパワーをもつ持ってんじゃないかねえか。精神力だつてとくに問題ないと思っぜ」

豪快に不破が笑い飛ばした。思わず釣られて、他の3人も笑い出す。

「ありがとございます。明日試しに使ってみますね」

「そうだな。それがいい」

むくりと不破が立ち上がった。「まだ安静にしてない！」とみゆきが呼び止めようとしたが、不破はにっこり笑ってサムズアップと共に「このくらい大丈夫さ！」と誇らしげに言った。

そのまま玄関で靴を履き、不破は健の自宅アパートをあとにした。3人とも呆気にとられたような表情で、同じような事を思っていた。「ずいぶんエネルギーシユだなあ」と。

「そうだ！ お弁当まだ食べてなかった！」

「わたしもお昼まだだった！」

「そういえば私もまだだ。困ったのう」

「えっっ」

2人の声を聞いた健は、すぐにでもみゆきの手作り弁当を食べたいという気持ちを押さえつつ手を洗ってキッチンへ向かう。

キャベツやもやしににんじんといった野菜や豚肉、そしてそばを取り出し、手早く調理してフライパンに入れてかき混ぜていく。

こうしているうちにもアルヴィーとみゆきは腹を空かせて待っている。早く作り上げてしまわないと。

「お待ちせう。今日はソース焼きそばだよ！ 3人でわけっこしよう」

やがて完成した料理を2人の下へと持つていく。大きなお皿いっぱい盛りに盛り付けられたソース焼きそばだ。

トッピングされた青海苔が香りと風味を引き立て、空腹をより一層加速させる。素朴な作りながらも思わずだれが出てしまいそうな出来だ。

「もぐもぐ……おいし〜！」

「野菜と肉がほどよく入っておるな！ こいつはうまい！」

「そんなに大したことないよオ」

一人暮らしをしている為か、料理好きのみゆきほどではないものの健は料理が上手だった。

その腕は知り合いなら皆絶賛し、自分で弁当を作ってバイト先に持参するほどだ。

現にアルヴィーもみゆきも舌鼓を打ち、満足げな表情で焼きそばを食べていた。

ちなみになぜ健がこの場で焼きそばを炒めたのかというと 簡単な上にすぐに作れて、それでいておいしいから。

更に付け加えれば、肉も野菜も、炭水化物も全部入っていて一粒でいろいろとおいしいからである。

そんな中で健は弁当箱を包んでいたランチクロスをほどき、ふたを開けると トリの唐揚げと白ごはんをメインに野菜やスパゲティを散りばめたちよっぴり豪華なランチが入っていた。

「いただきますーす！」

健もまた舌鼓を打ち、心の底から満面の笑みを浮かべた。

EPISODE 77：久しぶりの模擬戦（後書き）

どうもSAI-Xです。このたびPVアクセス数が100000を超えました！ 皆様、誠にありがとうございます。

人気投票の方は、ただいまアルヴィー姐さんと不破さんがトップを競っております。

あとは健と白峯さんが1票ずつ入っているみたいです。

こちらも遠慮なさらず、じゃんじゃんぱりぱり投票をお願い致します。

EPISODE 78：模倣の達人

それから次の日。多くの人々が行き交うオフィス街を見下ろすビルの屋上。

そこに足を踏み入れたのは、ねずみ色の髪に、蛍光ペンのような黄緑の瞳をした男。街を一望するとにやつき、「今日はにぎやかだな」と呟いた。

黄緑に発光した体は姿をモザイクの形に歪ませ、カメレオンの怪物のような姿へと変わっていく。舌を長く伸ばしてビルからビルへ飛び移り、地上に降り立って暴れだす。

「うらうら！ 逃げる逃げる！！」

カメレオンの目から次々に放たれた光線が蛇行し、建物や人々に襲いかかる。命中した光線はビルの壁を破壊し、ガラスの破片が雨のごとく降り注ぐ。

突然現れたバケモノが暴れ始めたことにより、人々はパニックに陥り逃げ惑っていた。逃げ惑い悲鳴を上げる人々を見て、カメレオンは嘲笑い大いに喜んでいた。

彼らシエイドにとつて、人が上げる悲鳴や、怒りや悲しみといった負の感情は蜜の味がする。

直接ヒトを捕食することでも彼らは飢えを満たせるが、彼のように、ヒトが上げる悲鳴を好むものも少なからず、いや、大多数存在していた。

「ひゃーっはっはっは！ 絶景だなあおい！」

そう笑っていたカメレオンの目に、逃げる男女のカップルの姿が留まった。

狙いを定め舌なめずりをすると、軽妙にすばやく動いてその二人に襲いかかる。男を殴り飛ばし、立て続けに女に掴みかかり押し倒す。そのまま女の頬を軽く踏みつける。

「へっへっへ。テメエいい顔してるな……ゾクゾクするぜえ〜」

「い……いやああッ」

「もっといういで泣けやア！」

悪辣で汚らしい笑みと声色で女をなじり、踏みつける。それが許せない先程殴り飛ばされた男はに立ち上がり 逃げずにカメレオンへ立ち向かう！

「やめろ！ やめてくれ！」

「邪魔すんな！ くたばつてろ！！」

「ぐあッ」

しかしカメレオンは男を突き飛ばし、再起できないよう追い討ちをかける。鬱憤を晴らすように何度か踏みつけたあと、バラバラに引き裂こうと爪を突き立てたが どこからともなく放たれたエネルギー弾が阻んだ。

「な、なんだ！？」

動揺したところへ極大のエネルギー弾が命中し爆発、カメレオンはよろめきながら後ずさる。「誰だ！」とカメレオンが怒号を上げると、煙の中から銃撃主が現れる。

「……おい、さっきこらで暴れつつたんはお前か？」

「それがどうした」と、唾を飛ばしながらカメレオンはそう答え

た。銃撃主は歯ぎしりし、カメレオンに近寄るとその顔を蹴り上げる。仰向けに吹き飛んだカメレオンには目もくれず、襲われたカップルを助けに行く。

「あんたらケガとか大丈夫か？」

「はい、なんとか……」

「ほなったら早よお逃げや。ここ、危ないさかい」

男女ともに怪我は浅かった。逃げるように促し見送ると、苛立つカメレオンの方に振り向く。その表情はものすごい剣幕となっており、目付きを鋭くして歯を食い縛っていた。

「おい、大イグアナ！　ワシが嫌いなヤツ教えたるか。人を襲って喜ぶヤツと、それから……女を泣かせるヤツやあああッ！！」

銃口を向けドスが利いた声でそう宣言する。そのまま歩み寄りながら銃を連射し、相手を追い詰めていく。

余裕がなくなっただか、カメレオンはよろめきつつ額から汗を流していた。ひるんだ隙を突いて急所に蹴りを入れ、突き放すようにエネルギー弾を撃ち込む！

吹き飛ばされたカメレオンは硬いアスファルトで出来た地面の上を転げ、最終的に街灯に打ち付けられる。銃口から上がる白煙に息を吹き付けて消し去ると、再び銃口を突き付ける。

「なんや、大したことないのう。どうせ自分より弱いヤツばかり狙^{ねろ}うて喜んでっただやろ？　最低なやつちやな、お前は」

「へっ！　減らず口聞きやがって……」

むくりと立ち上がってホコリを払うと、懐から薬品が入ったアンブルを取り出す。紫色をした如何にも怪しげな液体が中に入ってい

た。

「これを見てもそんなことが言えるのかア!？」

「なんやそれエ!？」

「聞いて驚け、見て笑えツツツ!！」

アンブルを見せつけたカメレオン　三谷みたにが勝ち誇ったような笑みを浮かべる。いきなり取り出されたそれに驚愕すると同時に、銃使いの男　市村いちむらの背筋に悪寒が走った。

「これは俺様のボスから預かった……、　　増強剤だアアアア〜
ツ!！」

アンブルの中身を飲み干した三谷が狂気じみた叫び声を上げると、三谷の周りから禍々しい紫のオーラが立ち上った。

それと同時に三谷の体がマツシブに膨れ上がり、身体中に禍々しい模様が入っていく。黒く染まった爪はより鋭くて大きくなり、腕や足は太く力強そうな印象を与える。

特徴的な大きな目は赤く光り、口を開けば鋭く巨大なキバが生え揃っていた。更にツノまで生やし、もはやカメレオンというより

小型の肉食恐竜や往年の特撮番組の怪獣のように獰猛で凶悪な姿だった。

「ひいッひッひッひッ!　これで俺様のパワーは三倍だあ!！」

早速腕を振りかざし市村を襲う。何とかかわしたものの、土煙がおさまると地面がえぐられていた。どうやら三谷が言っていたことは嘘ではなさそうだ。

「何が三倍じゃ!　調子に乗んなや!！」

調子づいた口ぶりに憤り、市村は銃を乱射する。しかし何発撃つても敵には傷ひとつつかない。次第に市村は追い込まれ、どんどん不利な状況へ陥っていく。

「効かねえなあ！」

「くそッ……！」

攻撃の手は休まるどころか、更に激しさを増していく。今は逃げ回ることしかできなかった。だが、まだチャンスがなくなつたわけではない。何かなんでも逆転せねば！

市村は一旦物陰に隠れ、エネルギーの充填を行った。普通のエネルギー弾は通じなくとも、最大限までチャージしたエネルギー弾なら少しくらいは効くはず。そう考えたからに他ならなかつた。

エネルギーを十分にチャージした市村は、颯爽と飛び出て極大なエネルギー弾を発射。超カメレオンの顔面に直撃し、大爆発を起した。

「グエエー！」

「やったか！？」

うめき声が聞こえた。思わず息を呑み喜んだが、煙の中から現れた超カメレオンはピンピンしており、残念ながらやってはいなかつた。体の細胞から戦斧を精製し、一気に接近して切りかかる！

「俺様は無敵だあ！」

「ぐはああああ」

切れ味は抜群だった。脇腹から血しぶきを上げながら、市村は吹っ飛ばされる。その勢いで壁に叩きつけられ、ゆっくりとずり落ち

ていく。

追い討ちをかけるように超カメレオンは市村をサッカーボールのように蹴飛ばした。何度も叩きつけられた衝撃で市村は吐血し、体のほうも相当ガタが来ていた。

全身　とまではいかずとも、どこかの骨が折れてしまったかもしれない。そんな状態だ。どちらにしても形勢が不利であることに変わりはない。

「　　なんやねん……なんやねんお前はあつ！」

しかし市村はあきらめない！　ダメージを強引に押しきってでも疾走し、跳躍しながら頭部に集中砲火を浴びせる！

巨大な敵の弱点は大抵頭だと相場だと決まっている。そう考えてとつた行動だった。しかし大して効いている様子ではなく。超カメレオンは市村を嘲笑うようにくるりと全身を回転させて市村の体を弾き飛ばした。

「っ……ぐっ」

地面に叩きつけられ、衝撃で銃を手放してしまった。這い寄りながら手を伸ばして拾いに行こうとするが、超カメレオンが無情にも眼前で銃を踏みつけてしまう。

「こつすればお前は無力だ。もはや何もできやしねえ。立つことも戦うこともなあ！」

「くッ」

「死ねエエエエ！！！」

勢いよく左腕を上げ、超カメレオンがまさかりを振り下ろす！　市村は身を守ろうとしたが、防ぎきれぬ自信はないしかわしきれそ

うにもない。あきらめかけたその時。

「も、もうアカン……！」

どこからともなく雄叫びが上がり 刹那、超カメレオンの左腕が凍りつく。氷の彫刻のような状態になっていて動かせない。

唐突な出来事に、両者は啞然としていた。そこへ剣と盾を持った青年が飛び込み 超カメレオンに斬りかかる。

奇声を上げて超カメレオンはぶっ飛ばされた。着地して再び身構えた彼の傍らには、白龍が空を舞っていた。

「と、東條はん。なんでここに」

青年の表情はとても険しく、凜々しかった。だが、市村に名を呼ばれて振り返ったときは穏やかに笑っていた。

悔しいが 今回ばかりはとも頼もしく、何よりカツコよく見える。今の自分にはこんなオーラは出すことも出来ない。

「強いシエイド反応がしたのと、誰かの悲鳴が聞こえたからいても立ってもいらなくなってる……それより市村さん、大丈夫ですか？」

「まあ、なんとかな……それよりあんた、まさかあのバケモンに挑む気か？」

市村がそう言うと、健の体は既に超カメレオンがいる方向に向いていた。盾を構えて、まるで市村を守るかのように。表情は険しく、強い意志を感じさせるものとなっていた。

「一応言うとか、あいつなんやわけのわからん薬使ってパワーアップしよった。ワシでもかなわんかったんやぞ！ あんたでも勝てるかどうか」

「確かにそうかも……ですけど、やってみなきゃ分からないでしょ！」

超カメレオンの攻撃から市村を守りながら、健はそう語る。不安そうでやや頼りなさそうだが、その熱意に揺るぎはなかった。

「へっ！ 何をゴチャゴチャと！」

二人を嘲りながら超カメレオンがジリジリと詰め寄り、腕を振り上げ切り裂こうとする。しかし眼前で白龍が咆哮を上げ、超カメレオンは足がすくんだ。

「ほう。今度は先祖帰りでも起こして恐竜に退化したか。だが、そこからどうやって進化をするつもりだ」

そのまま白龍が挑発する。それには超カメレオン 三谷に対する皮肉がこめられていた。青筋を立てた三谷は歯ぎしりすると、すぐに目を大きくして奇声をあげる。

「なめんじゃねエ！ 『模倣もほうの達人』 キヤモレオン様の真まの恐ろしさ、思い知らせてやる！」

三谷こと キヤモレオンがそう叫ぶと共に目から閃光が放たれ、爆発が起こった。市村をかばいながら爆風を切り抜けた健は、彼を安全なところへ避難させてからキヤモレオンとの戦いに赴く。

相手はまさかりを振り回し健に襲いかかるが、動きは大振り。防ぐまでもなく健はひよひよいとかわしていく。隙を突いて切り上げて空中へ打ち上げ、跳躍してそのまま打ち落とす！

地べたに落とされたキヤモレオンの周囲の地面が衝撃で少しくぼんだ。だが唸り声を上げながら這い上がり、目から蛇行する光線を

放つ。しかし、健はそれを切り抜けてキャモレオンの背を飛び越す。

「逃げてもムダだ！ そいつはお前をどこまでも追い続け……」

そこまで説明し終わろうとした瞬間　その光線が直撃。キャモレオンは目をやられた。いきり立ってしっぽを叩きつけ、健を吹き飛ばす。

しかし健は空中で体勢を立て直し、剣を振り下ろして反撃！ キャモレオンのけぞるほどの威力だった。力が三倍に増幅したとはいえ、やはりパワーでは健に負けるのか。

しかし、キャモレオンはしぶとく起き上がって唸りを上げる。保護色を使って健の視界から姿を消し、見失って戸惑っている健に目から光弾を放って不意打ちをしかけた。一度だけではなく　二度も三度も。

「どこに消えた……？」

「あせるな、健。ここは慎重に行こう」

相手が姿を消すことを見す見す許してしまった。こうなれば最後、どこから攻撃を受けるか分からない。出方を窺いながら、健とアルヴィーは慎重に行動を続ける。その背後で見えない何者かの目が光り　長い舌が伸びて健を絡めとる！

「！ し、しまっ……」

「キエエエエエエエ！……」

そのまま地面へと強く叩きつけられ、反動で空中へ打ち上げられた。体勢を立て直し、舌が伸びた方向に回転しながら斬りかかる。

しかし、そこには既に姿を消したキャモレオンはいなかった。まさか、と、額から汗を流すと……再び背後からの不意打ちが襲いか

かった。

盾で防ぐ暇もなく、まさかりで切られ仰向けに吹っ飛ばされてしまった。

「つ……強い！」

「けっけっけっ」

歯が立たずにやられっぱなしの彼を嘲笑う声が聞こえる。悔しいが、確かにこいつは強い。だが負けたくはない。しかし、勝つためにはどうすれば？

その疑問はすぐに答えが出た。ふと脳裏に浮かんだのだ。たっ
たひとつだけ、この逆境を切り抜けて形勢逆転する方法が。

その方法を思い付いた健は、懐から黄色に光るビー玉のような物体を取り出した。

「……健、それは！」

白龍の姿をしたアルヴィーが驚きながらそう呟く。何を隠そう彼
が取り出したのは雷のオーブ。

女性天才科学者の白峯しうみねとばかりが、雷を操るエスパーである不破ライの協力のもとに作り出したオーブだ。力量ならびに精神力が現時点の二倍はなければ使うことはできないとされていた。

「ちゃんと使えるかどうか分からないけど」

不安だった。強すぎる雷の力を抑え込み、自分のものにできるかどうか。それでも彼はやるしかなかった。選択肢はひとつだけ
必ず奴を倒す。そう心に決めていたのだ。

「やるしかないッ！」

意を決して立ち上がり、思いきって雷のオーブを剣の柄にある穴へセツトする。

凄まじいエネルギーが激しい電流となって剣全体に走り、体にも感電による激痛が伝わっていく。

痛い、苦しい　だが、ここは耐えしのぐ。耐えなければ道は開かれない。電流が途切れるそのときまで健は叫び続けた。そして電流は止まった。

「はあっ、はあっ」

雷の力を抑え込み、見事自分のものとした。淡い紫色のラインが入った黄金の剣を馴染、力強く振り払う。

構えると同時に青い稲光が周囲に激しく降り注いだ。近くにいたキヤモレオンは当然、その餌食となる！

「ゲゲエー！　な、なんだこいつは！？」

稲妻に打たれたキヤモレオンが、黒こげになりながら驚愕する。

「　次で終わらせてやる！」

雷のオーブ　果たして、その真の力とは？　戦いはますます激しさを増していく！

EPISODE 79：覚醒！ 雷の剣

健の力強い意志に呼応するかのようになり、バチバチ！ と、剣にほとばしる電気が激しく弾け飛ぶ。

恐れを成したキヤモレオンは透明になって背景に溶け込み、逃亡を図ったが 稲妻の剣で大きくなぎ払われてひるんだ。まるで自分の居場所を見破られたかのように。

なぜわかった、と言わんばかりにキヤモレオンは取り乱し、懲りずに健へ突っ込む。しかし剣から稲妻を伴う衝撃波が飛び、キヤモレオンを吹っ飛ばしてコンクリートに壁に叩きつけた。

ものすごいスピードだった、それでいて威力も生半可なものではない。なんとというパワーだ、これが自分が手にした新しい力なのか？

自分自身でも信じがたいそのパワーを發揮した黄金の剣をまじまじと見つめながら、健は思わず我が目を疑っていた。そして勝てるという確証を得たのか 固かった口元を持ち上げて笑った。

「……………いけるッ！」

気がつけば彼は、計り知れないパワーを宿したその刃をまるで自分の手足のように振り回していた。先程までのぎこちない動きが嘘のような機敏さだ。

形成も完全に逆転し、優勢だったキヤモレオンはあっという間に窮地に陥った。こうなれば遠慮はいらさない、反撃を許さないほどに押しきってしまうまで。

「ひいひい、冗談じゃねえ！」

体がしびれてうまく動けないキヤモレオンは後ずさりし、透明化して逃れようとしたが できない。何度やろうとしてもそれがで

きなかったのだ。

「と、透明にならねえ……!!」

「教えてやるうか、キヤモレオン！ お主の透明化能力は保護色だけでなく、光を屈折させることにより周囲から姿を消すことが可能な能力であつたな」

「そ、それがなんだ！」

「稲妻による激しい光を浴びた影響でお主は姿を消せなくなった。たつたそれだけのことだ！」

アルヴィーが何も原因がわかっていない哀れなキヤモレオンに理由を説明してやると咆哮を上げ、口から吹雪を吐き出す。

身も凍り付きそうなほど強力で、実際にキヤモレオンは下半身が凍ってしまった。そんな状態で逃げようとしたために上半身が倒れ込み、起き上がれなくなってしまった。

こうなるともはや、逃げることは不可能。振り返ればうしろには、雷の剣を携えて疾走する健の姿があつた。

「うおおおーッ！ ライトニングフラッシュっ!!」

そして健はそのまま跳躍し、稲妻を纏った剣で大きくキヤモレオンの体を切り裂く！

「こ、この俺様がああああッ!!」

閃光と共に大爆発が起き、キヤモレオンは跡形もなくこの世から消え去った。爆発の残り火が燃える中、健は剣を携えたまま立ち尽くしていたが、やがて疲労から地面に崩れ落ちた。

剣を杖がわりにして立つのがやっとの状態だ。疲労に喘ぎながら、健は隠れていた市村のもとに向かう。このときアルヴィーは人の姿

に戻って、健の肩を持っていた。

「な、なんちゆうパワーや……一撃で倒してまいおった」

強い、強すぎる。もしかしたら今の自分よりずっと強いのではないか？ 少なくとも今の自分では勝てる気がしない。

健が見事手に入れた新たな力 雷の剣の圧倒的なパワーを前に市村は戦慄を覚えていた。下手すれば殺されるのでは、自分はとんでもないヤツに手を出してしまったのでは と、密かに怯えながら。

「あのー……市村さん」

市村がそんなことを考えていることなどつゆ知らず、健は気軽に話しかけた。背後から声が聞こえたため、市村は驚いて飛び上がった。

「な、なんやあんたか。脅かすなや」

「カメレオンはやつつけました。僕らと一緒に帰りましょう」

「ニツ」と笑って市村に手を差し伸べる。だが市村は健の手など借りずに、一人で立ち上がった。お世辞などいらぬ、または立つことぐらい相手の手を借りる必要はない とでも言いたげな、拗ねた表情をしていた。

「わしをガキんちよ扱いするなや。一人で帰れるわい」

「そうは言うがの……お主、そんな傷で大丈夫か？」

「心配ご無用！ わしやあこの通り、ピンピンしてまっせ」

アルヴィーが心配しているように、市村は強がってはいるものの

体の方は満身創痍であり、文字通りボロボロだった。

しかし傷はそれほど深いものではないようなので、応急手当を受ければ何とかなるかもしれない。それにエスパーは、常人より傷の回復も早いときている。少なくとも死にはしないはず。

「ところで姐さん、あとでおっぱいもませ……げふっ！」

ヘラヘラと笑う市村の顔面にアルヴィーの情け容赦のない鉄拳が炸裂し、めり込んだ。鼻血を流した情けない顔でうめき声を上げながら、市村は気を失う。

彼自身としては、軽い気持ちで言った冗談のつもりだった。問題は男同士でそれを言うならともかく、近くに女性がいるにも関わらずそのような下品な言葉を口走ってしまったことだ。あきれた様子で市村を肩に担ぎ上げ、彼女は健にこう問いかける。

「……健、病院までたこ焼き屋を連れていくぞ」

「うん、そうだね。それがいいね……」

苦笑いしながら健が答える。彼は内心殴られた市村を気の毒に思っていた。しかしよく考えなくとも悪いのは、市村のほうである。

市村でなく自分が言ったり、実際にそれをやったりしたのなら許されたかもしれないが、やはり言っただけいけないことだったのだなあ、と、健はそう思った。

同時刻、黒い雷雲が上空で轟く岩山の切り立った崖にそびえる古城。その内部で三谷 キヤモレオンが倒される光景を、特殊な方法で見ているものたちがいた。

「三谷^{みたに}め。死におったか」

苦虫を噛み潰したような顔で憤慨するように、神父風の格好をした壮年の男性が呟く。メガネの向こうで濁った瞳が光る。仲間の死を嘆いていると言うよりは、役に立たなかった三谷に対して舌打ちしたような口調だった。

「惜しいところまでいったのにねエ」

「まあ、あいつは悪知恵はあっても戦いはからつきしだったからなあ」

神父風の男性に続いてしゃべったなよしたファンキーな服装の男とジャケットを着たワイルドな男も、大して仲間のことを気にしていないような様子だった。

彼らに共通している事項だが、まだ余裕があるような雰囲気も感じられた。ちょうどそのとき、部屋の奥の影から黒装束の男性が歩いてくる。

礼拝堂らしきこの部屋で怪しげな身なりの集団が話し合う姿は不気味なこと極まりなく、ある種の異様な雰囲気醸し出していた。

「何の話をしている。もしかや三谷のことか？」

黒装束の男を除いた三人がうなずく。

「それなら気にする必要はない。奴は最初から捨て駒にするつもりだったからな……」

黒装束の男 甲斐崎が笑った。これまた三谷が爆死したことを蚊ほども気にかけていないような、冷徹で余裕のある笑みだった。

「……社長オッくん」

おどけた口調でなよなよした男が言う。腰を曲がりくねらせながら甲斐崎に近寄る姿は、このメンツの中でもひとときわ異彩を放っていた。

「次は私にお任せを。三谷なんかと違ってあたくしは単細胞じゃありませんから」

「いいだろう。お前の好きにしろ、花形」

花形はながた

と呼ばれたファンキーな服装の男性が歓喜した。

「ははっ、ありがたき幸せーッ！ ららんら、らーん」

大はしやぎしながら花形は礼拝堂の出口に向かい、スキップしながら立ち去った。花形が去ったのを確認すると、残った三人は一斉にため息を吐いた。

「いいんですかい、あんな頭のおかしいやつに任せちまって」

「あなたが何の考えもなしに任命するとは思えないのだが……」

バンドナを巻いたワイルドな男と神父風の男性が同時にしゃべった。声が重なったために驚いて、二人はお互いの顔を一瞬見つめ合う。

男同士で見つめ合うことに薄気味悪さを感じ取り、すぐに甲斐崎のいる方向に向き直した。しばしの沈黙のあと 甲斐崎がその重たい口を開く。

「……別に任せても大丈夫だろう」

ところが彼が見せた反応は至って普通のものだった。切れ者であ

る甲斐崎らしいクレバーな返答を期待していたが、とんだ期待はズレであった。肩透かしを食らった二人は、汗をかきながら啞然とする。

「まあいいさ。他の手はいくらでもある」

三谷を打ち破ってから3日が経った。

通勤電車の混み具合や、夏期が近付いたことで上昇しつつあるに不平不満を抱きつつ、健は今日もまたバイト先に向かっていた。

いつもの市役所の事務室だ。見慣れた先輩方も同僚も、みんなとくに異変もなく至って平和だった。

「おはようございまーす！」

「オウ、東條サン！ 今日でもエネルギーですねー！ そんなユニにプレゼントがあらまーッす」

荷物を置いて朝のあいさつをすると、ケニー係長が最初に話しかけてきた。プレゼントがあると言われ、淡い期待を抱きながら彼の席に行くと、プレゼントされたのは、ライブチケットだった。

「こ、これって……」

「察しがいいネ。もう一枚オマケにドウゾ」

そう言ってケニーは一枚のみならず、もう一枚ライブチケットを手渡した。彼の分のはずだが、なぜ健に渡したのだろうか。

理由は説明するまでもなく簡単なものだった。予定がこった返し

ていてライブになどいけないからだ。

「あ、ありがとうございます。でもコレ……」

「ダイジヨブね。おトモダチと一緒にエンジョイしてきてください」

ケニー係長が陽気に、豪快に笑い飛ばした。そこにジェシーら三人娘も現れ、場の雰囲気がいより明るなものへと変わった。

「あつ。東條さんももらいましたか？」

「じえ、ジェシーさん。これってあのバンドじゃ……」

「そう、『アルペジオ』ですよ」

「ほお。それでチケットを貰ってきたから折角だし行ってみようというわけか」

「そうなんだよアルヴィー！ しかもアルペジオだぜ、アルペジオ！ つい最近トラブル起こしてギターが離脱して一時はどうなることかと思われたけど、この前ギターが仲直りして奇跡的に解散を免れたあのアルペジオ！」

帰宅後、嬉々とした様子で2枚のチケットを見せびらかしながら健はアルヴィーに語りかける。その興奮ぶりとくればもう、酒でも入ったかのような勢いだっただ。

滅多なことでは動じないアルヴィーも、あまりに健がエキサイトしていたためにこのときはばかりは流石に引き気味だった。

「そのアルペジオのギターって誰だと思う？ 狩谷シンジだよ狩谷シンジ！ この前駅前でギター弾いててさ、そんなとき声かけちゃったんだよ！ 僕男だけど、あの人カッコいいと思ったよ！」

「そ、それは良かったのう。それで、どこがどうカッコよかったん

だ？」

「そうさね……声？ あとやっぱり、あのロックなファッションとワイルドな無精ヒゲ！ 茶髪ブロンドに染めてるのもチョーCOOしだぜ！！ さすが狩谷シンジだ、僕達に出来ない事を平然とやってのけるツ！ そこにシビれる、あこがれるウ！」

そこまえ言い終ると健は「ゼエゼエ……」と息を荒げた。鼻息もかつてないほど荒く、彼のトーク番組顔負けのマシガントークに最後までつきあったアルヴィーは痛感した。

ロックバンド、それもパンク系に憧れる辺り彼もやはり現代っ子なのだなあ　と。しかしながら、アルヴィー自身も興味がないわけではなかった。

むしろ一度見に行ってみたいという願望も抱いていたのだ。外出することに健は抵抗を示すかもしれないが、既に駅前の百貨店などに行った身分である。

その気になればどこへだって行けた。だからついていってもとくに咎められるようなことはない　はず。

「……のう、健。それはどこで開かれるんだ」

「んーと、ちょっと待ってね。ふむふむ、大阪城か。しかも明日じゃないか！」

「明日か……よし、今日は早めに寝るぞ！」

健が落ち着きを取り戻した矢先、気変わりしたのか今度はアルヴィーが興奮し出した。彼女にやたらとせかさね風呂も早めに上がり、夕飯も就寝もいつもより一段と早かった。

あたふたしたが布団に入る頃には既にすやすやと寝息を立て、その意識は何が起こるか分からぬ夢の世界へと旅立っていた。

「んあ……7時か。……やっべ急がなきゃ！」

翌日。耳をつんざくほどやかましいアラームにたたき起こされ、健は大急ぎで身支度をはじめた。

朝食は適当なもので済ませ、服はよそ行きのもをチョイス。一通りできたところで時間を確認するとまだ余裕があったので、アルヴィーを起こしに行く。

「起きて！ ライブ満席になっちゃうよ！」

「うにゅ……あと5分」

アルヴィーの体を揺らし起こそうと試みるも、当の彼女はまだまだ眠っていたらしく起きる気配を見せない。

しかし今は寝かせてやっている場合ではない。一刻も早く急がねば！ チンタラとやっていては間に合わない。

その上大阪城のライブ会場までは遠い。京都と大阪はそれほど距離が離れているわけではないものの、それでも行くまでに所要とする時間は結構ある。

とにもかくにも 健は急ぎたかった。だから彼はしつこく、アルヴィーを揺り起こそうとするのだ。

何度もトライした末、ようやく彼女は起きてくれた。ただ、寝起きで少し機嫌が悪い様子だった。

「ほら、アルヴィーも早く準備！」

「そう焦らすでない……ところでメシは？」

「んー……ちよい待ち！」

一難去ってまた一難、今度は腹をすかせていた。速攻で電子ジャークから白ごはんを取り出して海苔を巻いておにぎりを作り、せっせと机まで持っていく。

アルヴィーはおにぎりを一口かじると、至極嬉しそうな表情を浮かべた。おにぎりと言えば、手軽に作れる最もポピュラーな食べ物のひとつ。

そのままでもいけるが、味付けに塩や海苔でもつければより一層おいしくなる。混ぜ込みごはんからの派生で作ればもっとおいしくできる。

「お主……前から思っておったが料理上手だのう！」

「そんなにすごくないよお。っていうか、あんたもスピード上げて！ あっぷっぷ……」

食べ終わったところでアルヴィーにも身支度をさせる。起床が遅かったもののいざ動き出せば彼女は早く、歯磨きも洗面も、着替えもすぐに終わらせた。

胸元を少しはだけたワイシャツにミニスカートというやや露出の多い格好であったが、とくに支障はないだろう。

これからの季節、どんどん気温は上がっていく。いつまでも長袖は着てられない。

しかしながらあまり色っぽすぎても（自分が目のやり場に）困るので、健は薄手のコートを上から着させた。

こうしてようやく、出発することが出来る。二人とも玄関で靴を履き、駅へと向かった。

EPISODE 79：覚醒！ 雷の剣（後書き）

キヤモレオン

エボシカメレオンのシエイド。

他のシエイドとは一線を画す戦闘力と知能を持つ『上級シエイド』の一体であり、

三谷というストリートファッションに身を包んだ若い男性に化身していた。

下位種が持つ保護色を使った透明化に加え、他者に変身する能力や目から蛇行する光線を放つなど多彩な技を持つ強敵。

とくに姿を消してから体細胞から生成する斧『ハイドブツチャー』による背後からの不意打ちは脅威の一言。

陰湿なやり方を好むが基本にお調子者で、頭はあまり回るほうではない。

キヤモレオン強化態

甲斐崎から渡された増強剤を摂取したことでキヤモレオンがパワーアップ。

全身の筋肉がマツシヴに膨れ上がり、爪が鋭くなり角が生えるなど全体的に凶悪な姿となった。

強化前を遥かに凌ぐパワーとより凶悪になった特殊能力で市村や健を苦しめたが、雷のオーブを使いこなした健の猛攻を受け敢えなく爆死した。

EPISODE 80：関西熱狂

「いつも思うんだが、デカイところだのう」

「でしょ〜？ 僕も今でもビックリしちゃうぐらいさ」

京都駅についた二人は階段を登り、券売機で切符を買う。一応健は通勤用に定期券を買っていたものの、それによって無料になるのはあくまでバイト先までの範囲のみ。

守備範囲外では意味がない。だから切符を買った。だが、これだけでは大阪城には辿り着けない。地下鉄やバスにも乗る必要があった。

先のことを視野に入れて少し考えを巡らせながら、二人は改札を抜けた。外から気持ちいい風が吹き、その身に受けたものを心地よい気分にくれた。

曇りの日や雨の日では味わえない感触だ。 天気にも恵まれた日にか、この心地よく涼しい風を浴びることはできない。

「いつも人が多いからねー。それに加えて今日はアルペジオのライブあるから、今日も電車が混んでる可能性は十分にありうるよ」

「みな考えていることは同じ、ということか。……ふふっ」

くすりとアルヴィーが微笑んだ。

「どうしたの」

「いや、何でもないぞ」

アルヴィーがそう言い終わったとき、駅の構内にアナウンスが入った。おっとりとした優しい口調の女性の声だ。

アナウンスが終わってしばらくすると、ようやく電車が駅のホー

ムに到着した。しびれを切らしていた二人は電車に乗り込むと、意外なことにそこまで混んではいなかった。

安堵の息を吐く 前に、空いている席を見つけてすぐにそこへ座った。こういうのは早い者勝ちである。

ただ、年寄りや妊婦さんのように優先して座らせた方がいい人が来た場合はもちろん席を譲るつもりをしていた。これは人として当たり前のことである。

足腰の弱い老人や、お腹に身ごもった子供を大事にしなければいけない妊婦さん、それに足が不自由な人に無理をさせるわけにはいかない。

なのに同年代や年上に限って、そういった思いやりや優しさに欠けた非常識な人物が多いことを、健は内心嘆いていた。

「大阪城はまだかのう？」

「まだまだだよー。こっからが本番！」

それから紆余曲折を経て、健とアルヴィーは大阪城公園に辿り着いた。

澄んだ水をたたえた水路や大きくて美しい噴水が、華やかに彼らを出迎えた。遠目に見える大阪城の天守閣は小さいようで大きく、何よりスケールの違いを感じられた。

「おっ、あれが大阪城か……見た感じ昔と何も変わつとらんのか」

「そ、その昔つてどのくらい昔？」

向こう側に見える天守閣を指差して懐かしんでいるアルヴィーに対して、苦笑いしながら健がそう訊ねた。彼が疑問を抱くのも無理はない、彼女は若々しい見た目に反して寿命が長いのである。

最低でも千年以上、つまり今の健の倍以上は生きていくという。更に言えば彼女を含むシェイドはみな長寿であり、一万年前には既

に存在していたのだそうだ。

そんな彼女が言う昔とは、いったいどれほど前のことを指しているのだろうか。

「そうだな。んー……豊臣秀吉が討たれる前ぐらいの時期かの」

「なんだそれ！ 昔どころじゃねーっ！」

「いや、徳川幕府の時代だったか……？」

「どっちみち大昔じゃなか！」

こんな感じでいつも通りの面白おかしいやりとりをかわしながら、二人はアルペジオのライブが開かれる場所である大阪城ホールを指していた。

この広い公園を数十分歩いて散策した末に、二人はようやく大阪城ホールに辿り着く。二人には実のところ大阪城の天守閣に入りたという気持ちもあったが、今回の目的はあくまでライブを観に行くこと。

天守閣には行くこうと思えばいつでもも行けるが、ライブは今回限りだ。ならば断然後者を見に行った方が得をする。ときには思いきった決断も必要なのだ。と、健はひとり考えていた。

「いらっしやいませ。お二人様ですか？」

「はい、そうです」

「ではチケットをお見せください」

「これですか？ はいっ」

受付の男性に件のたぐチケットを見せて渡す。

「確かに受けとりました。Dの1番から3番付近の席にお座りください」

「わかりました！　ありがとうございますー」

心の底から嬉しそうな表情を浮かべながら健はアルヴィーと共に入場。暗い会場の中でこれからいったい何が起こるのだろうか、二人は楽しみにしていた。

ある意味この待ち時間こそが一番、ライブやコンサートにおける心躍る瞬間かもしれない。事実、焦らし焦らされ、焦らされた末にお目当てのアーティストが登場したときの興奮には計り知れないものがある。

ここぞとばかりにファンからの歓声や黄色い声が一斉に上がるのだ。カラーキャンドルやデジタルカメラがあればより一層盛り上がるかもしれない。

「この辺前のほうだから特等席なんだよね。あーっ、待ち遠しい！」
「私もだ！」

とくにこの二人は、口では待ち遠しいと言いつつも既に待ちきれぬ状態だった。アルペジオのメンバーはまだかまだか、と、その瞳を輝かせていた。

「Yeah！　みんなノってるかい？」
「イエー！」

やがてステージがライトアップされるとともに、『アルペジオ』のメンバーが現れた。待ちに待ったこの瞬間、会場にいる観客全員が一斉に歓声を上げる。その中にはもちろん健やアルヴィーも含まれていた。

「夢は持ってるかい！？」
「イエース！」

「俺も一度はアルペジオを抜けちゃったけど……今度はもうケンカなんかしないぜー!!」

マイクを手にしていたのは、ギター兼ボーカルの狩谷シンジだった。ファンの前で彼が誓った言葉からは、夢に対する決意の硬さと力強さをひしひしと感じられる。彼と違ってアーティストではないものの、健はただならぬシンパシーを密かに感じていた。

「夢は生きる力をくれる。だからみんなも、でっかい夢叶えようぜーッ!!」

「オーッ!!」

集まったファンがみな握りこぶしを天に上げた。まだ演奏は始まってはいない、しかし 会場には既に熱狂の渦が発生しようとしていた。それほどファンはみな、この瞬間が来るのを待ちわびていたのだ。

「みんなが来てくれて嬉しいから、今日はいきなり新曲から行っちゃうぜー! その名も『ドリーム』!!」

狩谷がそう宣言すると共に演奏がはじまった。ドラムが稲妻のごとく激しく鳴り響き、キーボードからは川の流れるように穏やかかつ激しい音が流れ行く。

ギターも負けじと轟くような唸りを上げ、その対岸でかき鳴らされるベースとこれ以上ないほどに共鳴していた。

やがてギター担当の狩谷の口から低音で力強いシャウトが発せられ、会場の熱気はより高まっていく。

この熱狂の渦と揺るぎなき情熱からは 誰も逃げられない。アルペジオのジャムセッションが終わるそのときまで。

「いやー燃えたね。燃えまくった！」
「燃え尽きそうだったのう！」

興奮冷めやらぬ中、アルペジオのライブが終わった。長いようで短かったが、それでも会場にいた全員が熱狂し存分に楽しむことができた。大阪城ホールを出た二人は、散歩がてら公園に向けて歩き出す。

「あつ、東條さん！ こんにちは〜」

「ヤッホー、東條くん！」

「ど、どうも〜」

おびただしいほどの人混みの中から、健にとっては非常に馴染み深い、アルヴィーにとっては誰だかわからない人物が三人飛び出してきた。

ひとりには金髪碧眼の優しげな女性で、ふたりめは茶髪をくくってまとめた快活な女性。三人目は紺色の髪に眼鏡をかけたやや気弱そうな女性だった。

「ジェシーさん！ 浅田さんに今井さんも！」

「もしかしてライブ、見てました？」

ジェシーからの問いに「はい」と答えながら頷く。

「と、東條さん達はどの辺りで見てましたか？」

「D席ですよー。前のほうです！」

「いいなあ。私たちは三人とも後ろのほうでした……でも楽しめて良かったです〜」

今井やジェシーとしゃべっている健の無邪気な笑顔ときたら、それはもう嬉しそだった。しかしいきなり自分が知らぬ人物、それも三人に対して楽しく話し合っている健を見てアルヴィーは動揺する。とくに首は落ち着きがなく、何度も左右を行き来していた。

「ところでお隣の人は？」

「えっ、あ、あの、私はその……」

「もしかして……」

何かを感じ取ったか、はたまたひとつ勘違いをしたのか　茶髪の女性・浅田がニヤリと笑う。これには健もアルヴィーも動揺してしまった。

「……恋人だったり？」

「いえ、同居人です！」

「そっか……変なこと聞いちゃったわね」

案の定浅田がそう聞いた。これまた紅潮しながらアルヴィーは否定する。返答を聞いた浅田は少し残念そうにしていた。

「あ、あの！　お名前は……」

今井から名前を聞かれて両者の肩がビクツと浮き上がった。頭の中には即座に『アルヴィー』という言葉が浮かんだが、果たしてそう簡単に言ってしまったっていいものだろうか　と、二人の中で迷いが生じていた。

とくにアルヴィーからしてみれば、見知らぬ怪しい人物（しかも女性）に見す見す名前や個人情報を見せてしまうようなものだった。プライバシーは尊重しなければならぬし、プライベートな情報は悪いやつらから守らなければならない。迂闊に不審者に教えるよ

うなことをしてはいけないのだ。

しかしよくよく考えれば、今彼女の目の前にいる三人は別に不審者でもなんでもない。その上健とは知り合いと来ている。

それなら自己紹介しないほうが失礼ではないか？ やっと頭の中で結論を出せたアルヴィーは、考える姿勢をやめて胸を張り前を向く。

「わっ、私の名前は……！」

名を言おうとした瞬間、身の危険を感じ取ったか健がとつさに前に出た。その表情とくればそれはもう切羽詰まっております、見ただけで危機感が伝わるほどだった。そして何を思ったか、突然大声で喋り出す。

「こっ、この人シロちゃんっていうんです！ 美人だし料理はうまいし、それでいてカッコいいんですよー！ ねえ、シロちゃん！」

「え………？」

一同、啞然とした。アルヴィーは苦笑いしながら冷や汗をかき、浅田は引き気味に笑い、ジェシーは目を丸くして驚く。

今井にいたっては動揺するあまりあたふたして、落ち着きがまるでなかった。そんな光景を見て、原因を作ってしまった健も動揺し始めた。

「あ、いやシロちゃんはあだ名です。確か本名は白石さんだったかな……」

「そ、そうなの。シロちゃんあらため白石さんね。あたしは浅田っていいです、よろしくね」

戸惑いながら浅田が簡単に自己紹介をする。終わらせた浅田は後

るに下がっていき、あとの二人に前に出るよう催促する。

「い、今井……です」

「ジェシーです。よろしくお願いいたします」

続けて二人もあいさつする。今井はまだ動揺していたが、ジェシーはもうすでに落ち着いていた。いつもの彼女らしいおっとりとした、丁寧な雰囲気醸し出していたのだ。

「し、白石です。よ、よろしく……」

ここまで気遣われて黙っているわけにもいかないので、想定外の事態に困惑しつつもアルヴィーはついに重たい口を開いた。いつもと違う慣れない口調でしゃべっていた。

「そ、それじゃそういうことなんで……また職場で！」

「さ、さようならー」

あいさつが終わり健が相槌を打つと、やけに慌ただしい様子で二人はその場をあとにした。マッハで駆け抜けながら。

「……行っちゃったねー。それにしてもあの人きれいだったなあ」

「せ、背も高いですしね」

「すごかったよかった。モデルの人みたいだったわ」

EPISODE 8 1：新たな始まり、何度でも

役所の朝は早い。10時から仕事が始まるものもいれば、それよりも早めの朝8時には既に到着して仕事を始めているものもいる。

更に言えば、朝日が空へと昇る頃にはもう来ているものだって存在している。そんなに彼らの共通事項は 報告・連絡・相談の3つ。略して『ほづれんそう』だ。

「おはようございますーす」

長い茶髪をくくった活気のある女性が、先に来ていた同僚や上司に朝のあいさつをした。これはできて当たり前のこと。

やや面倒くさいが、これすらできない者に社会で生きていく資格はない。あいさつをすれば友達が増える という言い伝えがあるように、あいさつをするということはそれだけ大事なことなのだ。

「おはようございます」

「お、おはようございます」

茶髪で元気のいい女性 浅田^{あさだ}ちあきに、気品のある金髪碧眼の女性と眼鏡をかけた気弱そうな女性があいさつを交わす。

金髪のほうはジェシーという名で、紺色のショートヘアで眼鏡をかけたほうは今井という名だ。この三人はプライベートでも交流関係があり、三人で仲良く遊びに行ったり買い物を楽しんだりしている。

「あれ？ そついや東條くんは？」

「今日はお休みみたいですよー……」

今井が言ったその言葉に、「えっ」と、浅田が目を丸くして言った。近頃は月曜日と水曜日にしか来ていないとは言えども、東條健はきわめて真面目。

無断で休むことはほとんどしない働き者で、いつも笑顔を絶やさない。更によほどのことがなければ決して休まないタフネスも持ち合わせていた。

ゆえにバイトでありながら同僚の間では将来に期待が持てる有望株であり、正式採用も夢ではないと言われるほどだった。

「……なんでまた？　もしかして、また大ケガしたとか？」

「そうじゃないみたいですよ」

心配そうに表情を曇らせる浅田をなだめようとジェシーが言う。

このときの浅田の表情は、いつも明るい彼女らしからぬほど辛気くさくて暗いものだった。

この中では姉御肌でひときわ明るい彼女もこう見えて繊細であり、ゆえに健のことが心配で仕方なかった。最近は病院に搬送されたりもしたからなおさらだ。

「しばらくは実家に帰ってリフレッシュするそうよ」

「な、なーんだ。心配して損した……」

ジェシーが笑顔でそう告げた。東條は怪我をしたわけでも何でもなく、ただ単に気持ちを切り替えるために休んだだけだと知り、浅田の表情が明るいものに戻った。

「ところで東條くんの実家ってどこだっけ？」

「滋賀県の大津市らしいわ」

「滋賀かぁ。よく何も無いトコだって言われてるけど……あたし、あののどかな雰囲気っちゅーの？　あの空気が好きなのよねー！」

「私も好きですよ。たまに遊びに行きますけど、ホントに落ち着けるよね」

「びわ湖もきれいですよね」

東條健の心配からはじまった話が、気づけばいつの間にか滋賀県に関する話題にシフトしていた。

三人とも実に楽しげで、そこには「気に入らないから貶めてやる」という陰惨さも、余計な気遣いもなかった。

単に女性職員同士でトークを楽しんでいる。ただそれだけである。余計なものなどひとつもなかった。

「ハイハイ！ ユーたち、おしゃべりしないで仕事しなサイ！」

そんな二人の間に英語混じりの口調でしゃべる男。係長のケニ―藤野が割って入った。お調子者でノリと勢いをすべてとしている彼だが、仕事に対する姿勢は真剣そのもの。

誰かひとりでもだらしない態度や行動をとっていれば即座に注意しに行く。だからこそ彼も彼なりに、周囲から信頼や尊敬を寄せられているのだ。

「かつ、係長！？ すぐに戻ります！」

「す、すみませんでした……」

「申し訳ございませんでした。何をすればいいでしょうか」

「おっぷ！ そんな畏まらなくてもイイね。何をしたらいいか？

うえ、ウエイト……」

いっぺんに謝られてケニ―も少し困惑していた。

普段は注意したり、逆に注意をされてもお互いに軽く受け流したりしていてこういうことはあまりないからだ。

それが今日に限ってこの態度である。動揺してしまうのも無理は

ない。

「……ああもう！ 細かいことを気にすることはナッシング！」

やがて血管がぷつぷつりと切れたか、ケニー係長はヒステリーを起こして怒鳴った。驚いた三人の肩が上がる。

「とりあえず待機してくらさい！」

返事をした三人は、せつせとそれぞれの持ち場につく。今日からしばらくは東條が不在、自分たちが張り切らなければならない。そう思いながら。

同時刻、京都の西大路にある白峯の研究所兼自宅にある男が訪ねようとしていた。

愛用のバイクを家の前に止め、少し歩いて門をくぐりインターホンを鳴らす。

「あら、不破くん。こんな朝からどうしたの？」

すぐにドアを開けて家主の白峯が現れた。いつものような白衣姿ではなく、半袖のワイシャツにジーパンと比較的ラフな服装だった。襟元からは『谷間』が見えている。これには不破も思わず唾を飲み、興奮しても鼻血は出すまいと必死に自分の中に溜まっていた欲望を抑えていた。

「は、話があつてお邪魔しました！」

「わかったから胸ばかり見ないでよ。ヤらしいわねー」

クスクスと白峯が笑った。あわてて「ち、違う！」と即座に否定するも、白峯はお見通し。

からかわれたことに憤慨しつつも、不破は家の中に入れてもらう。相変わらず広くて大きい。

彼が住んでいるマンションの部屋がいくつも入りそうなほどだ。リビングへ案内してもらうと、不破はとばりの眼前でいきなり頭を下げる。

「ちよつ、いきなりどうしたの？」

「東條ばかりパワーアップしやがってズルい！ あいつだけやれ炎だの冷気だの出しちゃって、おまけに今度は雷まで。そんなの不公平だ！」

こともあろうか、不破は気でも狂ったかのように次々と東條に対する不平不満を並べていく。普通なら人の悪口は言わないのが筋というもの。

不破自身も最初は東條を快く思っていなかったものの、今ではかけがえのない仲間同士だ。しかし 心の中では未だに見下したり、不満を抱いたりしていた。

更にいえば、8つも年下のガキに負けるはずがない などと思いながら自惚れてもいた。

「そこで、オレの武器にもオーブを装填できるようにしてもらえませんかね！」

東條だけズルいから、自分もオーブを使って他の属性の力を操りたい たったそれだけの理由だった。

実に大人げなく、彼の先輩に当たるエスパーとは思えぬ発言だ。流石の白峯も、これには少しばかり難色を示したか陰しい表情を浮かべていた。

「……ちよつといいかしら」

「へ？」

「あなた、東條さんと仲が良かったんじゃないの？」

「は、はい。まあ……一応は」

曖昧に不破が答える。さっきまで見せていた東條への嫉妬を今更隠そうとする不破の態度に、白峯は眉をしかめた。

「ホント？ あなた、さっきの様子じゃまだ東條くんのこと見下してるようにしか見えなかったけど」

「くっ……!!」

舌打ちした不破が突然、だん！ と床を踏みつけ立ち上がる。その瞳は怒りで燃えていた。

「不破くん……？」

「くそっ！ 東條！ どいつもこいつも東條！ あんなクソ野郎のどこがいいっていうんだ？ なんであいつが、あいつだけがオーブを使えるんだ!？」

溜まっていた鬱憤を爆発させるかのように、不破が怒鳴り声を上げる。

「落ち着いて!」

「あんたもこっちの身になってくれよ！ ……どうしてオレが、8つも年下のガキに負けなきゃいけないんだ？ こっちはあんなわけのわからないビー玉に頼らずに頑張ってきたんだ。なのに東條のやつは思い切りあんな道具に頼って戦い続けてきた！ あれは全部オーブの力だ！ あいつが持つてる力じゃない!!」

不破としては自分より年下で未熟な健に追い抜かれつつあることにコンプレックスを抱き、同時に『先輩』としてのメンツが保てなくなってしまうのではないかという不安を感じていた。

尤もこれは、プライドが高く相手を見くびりがちで、好き嫌いも激しく喧嘩っ早い彼の気性にも問題があったのだが。

「なんであいつにばかり肩入れするんです？ 一人じゃ何もできない青二才アヲニサイに、どうしてあんな強大な力を秘めたものを使わせるんです！？ 危険すぎる…… あれじゃあ頭のおかしいヤツに刃物を持たせるようなもんだー！」

「……はいはい。何が言いたいのかだいたいわかったわ」

不破の意図を感じ取ったか、ため息混じりに白峯が呟いた。

子供っぽく自分に正直な性分がそうさせたのか、露骨に嫌そうな顔で不破を見ている。

「要するに健くんばかり強くなっていくのが気に入らないから、自分の武器も強化してくれと？」

「そ、そうだ。それにオレの方がオーブを上手く扱えます」

「根拠は？」

「オレの方があいつより経験を多く積んでいるからです！」

「……あきれた」

その一言だけでハッキリと不破の要求を断り、再度白峯はため息をつく。

紅茶を飲んで一息つくと、狼狽ロウタイしている不破に凄みを効かせるような視線を浴びせる。

「確かに私はあの子の装備について解析したし、あなたの力を借り

てオーブを作ったわ。けれど、まだそのすべてを知ったわけじゃない」

いつになく真剣に白峯が語り出す。いつも明るく元氣のよい彼女らしくないほどに、緊迫した顔だった。

「あなたが言うように、オーブはひよつとしたら危険なものだったかもしれない。それも、己の命を削るような……」

「だったらそんな得体の知れないもの、どうしてあいつに使わせるんです？ あいつはまだ未熟、なのに命に関わるようなものを使わせるなんてなおさら危険だ。やはりオレが……」

「今更そんなことを言っただけで止められると思う？」
「えっ……？」

あくまで彼女なりに冷静に事を語る白峯と、未だに現実を受け入れられずにわめき散らす不破。どちらも立派な大人だ。しかし、これではどちらが『大人』なのか分からない。

「あの子はいつだって命懸けで戦ってる。みんなを守るためなら、進んで自分を犠牲にできる。仮にオーブが東條くんの生命に関わるものだとしても」

そこで一度白峯は言葉を区切る。

目の前のワメク男につらく当たってはいたものの、白峯自身は東條にも不破にも信頼を寄せていた。

とくに前者は命の恩人だし、後者とは警察のシェイド対策課の方で世話になっている。

「それを知ったところで、東條くんの考えは変わらないと思うわよ。あの子の覚悟は浅はかなものじゃないから」

「かつ、覚悟……」

知っているようでよく知らなかった、突きつけられたその事実
心を動かされたか、先程まで激しく憤っていた不破はようやく落ち
着きを取り戻す。

顔をそむけた彼の表情は、どことなく浮かないものだった。白峯
から改めて知った事実 それは、東條健の覚悟が決して浅はかで
薄っぺらなものではなかったということ。

自分を犠牲にしても少しでも多くの人々を助け、怪物シェイドから守る
うとしていること。 犯罪者と怪物が入れ替わっただけで、
まるで一人の警察官として正義と使命に燃えていたかつての自分を
思い出させる。

思えばあの頃はまだまっすぐで、今のようにこじれてはいなかつ
た。 このとき不破は思った。今一度自分自身の存在を見つめ直
すべきではないか、と。

「……ほとぼりは冷めた？」

「えっ……は、はい」

「そう。それにしてもなんか、しんみりしちゃったわね。どっかに
食べにいかない？」

「が、外食ですか？」

「うん」と白峯が首を縦に振った。表情は険しいものではなく、
いつもの明るい笑顔に戻っていた。

「どこでもいいわよ。ただし！ お金はあなたが払ってね」
「そ、そんな。ひどい……」

EPISODE 81：新たな始まり、何度でも（後書き）

どうも。

今回からVol.6です。結構お話が進んできましたね。

人気投票の結果は変わらずとも、まだまだやっておりまして、評価や感想もできればいいのでお願い致します！

EPISODE 82：たんけん、ぼくの町

近畿地方にある滋賀県・大津市。日本でも最大級の大きさを誇る琵琶湖と深い関わりをもつ街だ。

県内の南部にかけて広がり、県庁が位置している滋賀の首都というべき場所である。

京都や大阪、東京といった大都市に比べれば規模は小さいもの、それでも県内では大規模な町だった。

そしてその大津に、足を踏み入れたものがひとり。いや 三人もいた。

「っしあ！ 帰ってきたぞ、久々の滋賀っ！」

ひとりは茶髪の外ハネヘアが特徴的な青年で、薄手の白い上着や『あけぼの』と書かれたオレンジのTシャツを着て、下にはジーンズを穿いていた。

暑いためか袖を関節までまくっており、極力涼しくしようとクルビズを心がけているようだ。

「澄みわたるような青空だの。本日は晴天なりっ！」

ふたり目は長くきれいな白髪をなびかせた若い女性。

赤いワイシャツに黒いスカートを身につけて、空に手のひらをかざしながら体いっぱい太陽の光を浴びている。

透き通るような肌に切れ長の赤い瞳のコントラストが美しい。

「ホントいい天気よねー」

三人目は藤色の髪のもれまた若い女性。腰上まである長い髪をサ

イドでまとめ、若草色のワンピースシャツを基調とした着ている。
下はホットパンツと紫とピンクのしましま模様が入ったニーハイ
ソックスを穿いていた。

ウエストポーチには携帯電話や手鏡をはじめ、この年頃の女の子
には欠かせないものがぎっしりと詰まっている。

「滋賀のことはあまり知らないからの。健、みゆき殿。案内よろし
く頼む」

「オツケー。任せといて！ この辺は僕の庭みたいなものだし」

「おいしいお店も楽しいところもいっぱいありますよ」

「そうと決まれば、出発進行！」

茶髪の青年 健と、藤色の髪の女性 みゆきの主導のもと、
アルヴィーに大津を案内するツアーが始まった。

「駅前にあるだけあって大きいのう」

「でしょー？ どのお店も大きくてさ、見てるだけでも楽しいよ」

「暇潰しにもちょうどいいですよ」

まずは駅のすぐ近くにある平和堂。滋賀県のほぼ全域に展開して
いるスーパーマーケットで県内でその名を知らぬものはいない。

『イトーヨーカドー』や『フレンドマート』のように、場所によ
って内装や名称が異なるのも特徴のひとつ。

この大津店の内部は大きめの書店にフードコート、1000円シヨ
ップなどがあり、他の店舗の種類も豊富だ。時間を潰したり、誰か
と待ち合わせするのにはもってこいの場所である。

「実は平和堂とこのお店は直結しているのです！」

「おお、そうか。それは便利だな！」

「ここも待ち合わせにぴったりだよ」

二人が次に案内したのは駅前某有名ファーストフード店。
ここは平和堂の一階と繋がっており、駅前にある上にすぐ平和堂
に入れるということから立地条件の良さから利用者は多い。

「ふむ　でかい建物だのう」

「これは滋賀会館！　中にはでっかいシネマホールがあるんだよー」
「宝塚とかに比べたらちっちゃいけどねー」

「それは言わないお約束……」

大津には二つ大きな会館がある。ひとつはいま三人がいる滋賀会館。これは県庁からまっすぐ行つたところであり、距離もそれほど遠くはない。

よつてご近所同士といえる関係だ。二階建ての中にはシネマホールがあり、上下に別れた観客席から劇や舞台を観賞することが可能。もうひとつは大津市民会館。こちらは滋賀会館から北に行き、更に京阪島ノ関駅や京阪浜大津駅を北上した先にある。

びわ湖の湖岸に位置し、なぎさ公園や琵琶湖文化館が近くにある。大ホールがありイベントが開催される市民会館とレクリエーションを主に行う公民館にわかれている。

このように役目もキツパリと分かれているのが最大の特徴と言える。ちなみに滋賀会館の方は違う場所で新しい建物が建設中で、県庁前にある古い建物は現在封鎖されている。

「ここは京阪島ノ関。石山寺や浜大津に行けるんだぜ！」

「ほう、そうなのか。それは便利だの」

「更に浜大津から京都やひらパーにも行けますよ」

こんな感じで、二人はアルヴィーに（自分たちが独断と偏見で選んだ）観光名所を紹介して回る。

他にはさまざまな場所に通じるアーケード街や市役所、歴史博物館といったそうそうたる場所をアルヴィーに案内していた。

そのときの三人とくればまるで修学旅行中の学生さながらにはしやぎまくっており、実に楽しそうなことこの上ない。

「ふーっ。楽しかったの」

「ありがとう！ そう言ってもらえて嬉しい」

「わたしも楽しかったよー」

ひととおり案内が終わったところで三人は休憩。ジュースや水でも飲みながら、次はどこを案内しようか相談することになっていた。

「次はどこを案内してくれるんだ？」

「そうだね　うーん。あらかた紹介し終わったけど、次はどこにしようかに」

「かにかに　どこかに……」

「冗談も交えて話し合っていた三人だったが、いざ話にキリをつけようとしたところで腹の虫が鳴る。

「……ごはん食べない？」

「確かに　、いっぱい歩き回って腹も減ったからのう」

「どこで食べますー？」

腹が減っては戦はできぬ。ついでに散策もできぬ。

健の脳裏には一瞬、『コンビニ飯で済ませよう』『というアイデアが浮かんだがすぐに却下された。

さんざん悩んだ末、健はいい考えを編み出す。

「　僕にいい考えがある！」

「いい考え、か。その言葉は人事以外ではろくなことが起きないというジンクスがあったはずだが」

いい考えがある。最初にその言葉を口にしたのは、正義の変形ロボットたちで構成された軍の司令官だ。

しかしながら、その司令官がよく口にしていた『私にいい考えがある!』という台詞は実はアテにならず、かえって失敗やピンチを招いてしまう結果となるが多かった。

しかしながら人事に関しての『いい考え』は結構うまく行くため、あながち悪いとは言いい切れないことがあるのも事実。

他にも正義の味方らしからぬ物騒な言葉を吐いたり崖からよく転げ落ちたりなど悪い点があったが、そういったところも踏まえて、彼は良き司令官として皆から尊敬を集めていたのである。

「まあ、それはおいといて。どんな考えなんだ？」

「簡単さ。僕んちでこはん食べよう!」

「えっ?」

「うそ、健くんちで!？」

ふたりとも、彼のこの発言には驚きを隠せなかった(いい意味で)。舌の根も乾かぬうちに「やったー!」と大喜びしていたことから、内心それを望んでいたような節も見られた。

みゆきにとつては久々に幼馴染みの家にお邪魔するわけだし、アルヴィーに至ってははじめての訪問だ。

とくに後者は以前のパートナーである明雄あきおにも案内してもらったことがなかったため、嬉しい気持ちになるのは当然だった。

二人の様子を見た健は「そうと決まれば早速!」と言い、肩にかけたカバンのポケットからケータイを取り出す。

そしてアドレス帳から手早く『お母さん』と書かれた項目を選び、電話をかける。

「……もしもし、お母さんいる？」

「健？ 今どこにおるん？」

「浜大津や！ みゆきちゃんも一緒やで」

「ほうか〜。みゆきちゃんも一緒なんや。もうお昼やけどなんか食べた？」

「なんも食べてへんよ。おなかペコペコやあ」

「そっか。ほなごはん作つとくし、家に帰っておいで。浜大津やったら近いやろ」

「わかった！ ありがとう！」

「気をつけて帰つといでや〜」

母との通話を終え、健は携帯電話をカバンに仕舞った。久々に家族と話ができたからか通話中の彼はすこぶる嬉しそうで、そのときの笑顔は純粹そのもの。たとえるならば屈託のない子供のようだった。

「よっしや！ 僕んち行こうぜみんな！」

「うむ、賛成だ！」

「わたしもおなか空いちゃった！」

神の思し召しか、それとも日頃の行いが良いからか？

健が自分の母に電話を試してみたところ、昼食を作ってもらえることとなった。

こうして三人は、昼ごはんを健の家を目指して再び出発するのであった。

EPISODE 83：東條家にて

東條健たけのの実家は、彼や母親が言っていたように浜大津の住宅街にある。

京都で借りているアパートの部屋に比べたら大きな家で一階には広いリビングや客室があり、二階には健の部屋、その姉である綾子の部屋や父と母の寝室がある。とはいえ、本当に何もかもが大きい白峯家に比べればまだ中くらいの大きさだったが。

「お母さん、健が帰ってくるってホンマ？」

「うん。さっき電話もかかってきたよ。せやからごはん作ってるんや」

「へえー、そうなんや」

一階にいたのは黒いセミロングで活気がある女性と、おっとりした口調の黒いロングヘアで前者より年上の女性。前者は健の姉の東條綾子あやこ。学生時代は軽音楽部と文芸部（+マンガ研究会）に所属していた。

活発で割とサバサバした性格であり、幼い頃からちよくちよく健を翻弄し時にはケンカすることもあった。そんなこともあってか今ではすっかり仲良しである。

現在は郵便配達屋として働く傍ら、趣味でギターや英会話を楽しんでいる。ちなみに今日は休みなので、こうやって家でくつろいでいるというわけだ。

後者は健と綾子の母である東條さとみさとみ。割と控えめでおっとりした性格をしており、とても料理が上手い。

またご近所の旦那から羨まれるほどの美人であり、夫である明雄が生前によく周囲に自慢していたほど。彼とも仲むつまじく娘に息

子と子宝に恵まれ、まさに幸せな家庭を築いていた。

明雄が行方不明になってからは健を女手ひとつで育て上げ、綾子もそんな母を出来る自分に限りの範囲で支援した。

紆余曲折を経て現在は綾子とともにやんわりとした平穏な日常を過ごしている。今でもその若々しく美しい外見は変わらず、周囲からも『和服を着たら絶対似合う!』と言われるなど高く評価してもらっている様子。

「あいつ今年に入ってから全然帰ってこーへんかったしなあ。楽しみやわ」

「せやね〜」

両者ともに口元を上げて笑った。久々に健と出会えるゆえ、嬉しくてたまらないのだ。その為かどうかは分からないが、さとみは調理が弾んでいた。

「できたで〜」

そして完成。綾子にもそう告げてその完成した料理を持っていく。大きなざるにありつたけ入った冷やそうめんだ。ちりばめられた氷がまた涼しげで食欲をそそる。

「スゴい量やな!」

「綾子も健もぎょうさん食べるやる? お母さんそう思って多めに湯がいたで。それにみゆきちゃんも来るみたいやしなあ」

にんまりとさとみが微笑む。対する綾子も心の底から嬉しそうな笑みを浮かべ、健の帰宅がより待ち遠しくなったことうけあいだ。

ラップを張り、そうめんを食べるための器も用意した二人はテレビを見ながら待ち続けることにする。やがて待ちきれなくなった綾

子が「まだかー!?」と叫びながら容器をハシでドラムのごとく鳴らしはじめたが、すぐにさとみに止められた為しよんぼりした。そうしているうちに　玄関のインターホンが高い音を鳴らした。ハツと振り向いた二人は緊張したのか凜とした表情を浮かべながら、玄関に赴く。恐る恐るドアを開ける、すると　そこにはいつになく嬉しそうに笑う健がいた！　よく見れば彼だけではなく、みゆきや見知らぬ白髪の女性もいる。

「ただいまー！」

「お帰り〜！　相変わらず元気そうやな」

「えへへ、おかげさまで」

「あれ？　お母さん、みゆきちゃん以外にあと一人いるけど……」

「言われてみれば」と口を細めたさとみが言う。確かに電話ではみゆきと一緒にだと健は言っていたが、実際会ってみれば彼を含めて三人もいたではないか。しかも見知らぬ女性だ　だが、今更細かいことは気にしない。それに新しい友達かもしれないのに、彼女だけ追い払ったら可哀想だ。

「まあ、ええやん。どうぞ上がってくださいまし〜」

「はい！」

「お邪魔しまーす」

さとみがスツと身を横に引き下がり、それを合図に健とみゆきが靴を脱いで上がっていく。しかし、白髪の女性の様子がどこかおかしい。

先程までニコニコしていて乗り気だったのに、今は遠慮しているのか少しためらうような表情と仕草を見せている。

顔を横にそらしていてちょっと恥ずかしそうだ。気になったさとみが「　お姉さん、どないしました？」と声をかける。

「いや、その……本当に上がったもいいのかなくて」
「何を言ってるの」

恥ずかしがる彼女を励ますように、綾子がそう言った。サンダルを履いて外に出ると彼女の肩をポンと叩き、

「そんな遠慮せんでええって。別に悪いことしませんし」
「は、はいっ」
「ほら、お姉さん上がった！」

精一杯励まし、女性を元氣付ける。そして半ば強引な形で女性をグイグイと家の中へと連れ込む。全員家に上がったことを確認すると、さとみは家の扉を閉めた。

順番に手を洗った三人はささっと座り、手荷物を近くにおく。さとみや綾子も敷かれた座布団に正座して、皆で手を合わせる。

「いただきますっ！」

透明な器に注がれた赤茶色のめんつゆに無色の氷が浮かび、燦々と輝く。

そこへ運ばれる白く細い麺もまた美しい。色合いからする音まで、これほどまでに清涼感を漂わせる食べ物があるだろうか？

「おいしーっ！ さすがおばさま！」
「メチャメチャおいしい！」
「うむ、うまいっ！ うーまーいーぞー！」

ひんやりとしていてのど越しもツルツル。

暑くなりはじめるとこのシーズンにはもってこいだ。現に三人ともこの味を絶賛していた。小さい頃から世話になっている健とみゆきはなおさらそう感じている。

「せやる？　ウチのお母さんはミシユランもビツクリの料理上手やからなー、ウチもどないしたらこんなにおいしくできるんかわからんのよ」

「うふふ。お肉と野菜もあるからそつちも食べてや」

さとみが作っていたのはそうめんだけではない。大皿に焼き肉のタレで味つけた豚肉炒めと、千切りキャベツを盛り付けたものもそこにあつた。

これもまた美味だったようで、健たちは再び歓喜の声を上げた。さとみの味付けや調理が上手かつたのもあつたが、理由はそれだけではない。

彼女の優しさと愛情も料理の中に隠し味として入っていたのだ。それを差し引いても料理好きのみゆきを唸らせるほどの腕前を持っているのだから、まったくもって恐れ入るというものだ。

その後も談話しながら皆で昼食を楽しんでいたが、気がつけばあつという間に食べ終わっていた。やや惜しまれるが、楽しい時間はあつという間に過ぎる。世の中はそんなものである。

「うちそうさまーっ！」

正しい姿勢で手を合わせ、その場にいた五人が声を揃えて言った。感謝の意味合いも込めたこの一言だけでも、彼らが如何に清々しい気持ちで食べていたかがひしひしと伝わる。

「こんなにおいしいの久々や。お母さん、ありがとうー！」

「どづいたしまして〜」

腹がふくれた健が満足げに言った。こう言われた方も作った甲斐があったであろう。それだけおいしかったという事になるのだから。全員一服してから食器を片付けると、ソファーに座ったり昼寝をしたりしながら各自のびのびとくつろぎはじめ。

「仕事のほうはどうや、健？ うまくいってる？」

「うん、まあ。データ入力とか荷物運びとかが多いで」

「ええなあ、あんたは気楽で。ウチなんか肩こるし、帰ってくる頃にはへ口へ口やし。めっちゃ大変やわ」

「たっ、大変そうですね……」

多少嫌そうな顔で肩を回したりため息を交えたりしながら、綾子はそう語った。

みゆきが心配する一言をかけたあと、綾子は「おかげで毎日 I'm tired」と流暢な発音の英語も付け加える。

「そういうみゆきちゃんは何の仕事してたっけ？」

「ファミレスでウェイトレスやってます」

「へえー、そうなんや。毎日楽しいんちゃうか？ 顔にもそう書いたるでー」

「えーっ。そんなことないです、むしろ大変なんですよ〜」

「そうなん？ ちょっと考えすぎやったかなあ……アハハ」

照れるようにみゆきが笑った。とはいえ、彼女自身も忙しいウェイトレスの仕事を楽しんでいる節があるので、そういう点では綾子の指摘はあながち間違いでもない。

健、みゆきと話した綾子が 次に視線を向けたのは、今日で初めて顔を合わせた女性。入る前は気弱そうにしていたが、食事した

辺りから緊張がほぐれたか今はほがらかな笑みをたたえている。全体的に漂うどこか浮世離れしたような妖艶な雰囲気、綾子は引き寄せられていた。

「そ、そういえばまだきいてへんかった。お姉さん、名前はなんて言います?」

突然そう言われた白髪の女性がドキッ! 肩を震わせ、綾子に振り向く。なびいた長い髪がまた美しい。

「……し、白石です。息子さんと同居してます」

「白石さんやね。ウチは健の姉の綾子です」

「母のさとみです。よろしくお願いいたします」

「こちらこそ」と白石 と名乗った女性は二人に返事をする。

「しかし、健と同居してるんか……」

綾子が顎に手を添え、しばし思考する。もしかしたらできているのでは、毎日イチャイチャしているのでは そんなことを考えていた。

「……うまくいってます?」

「はい、おかげさまで……」

「もしかして……ラブラブ?」

綾子がそう白石()という名前らしい()に訊ねたとき、それぞれベクトルが違ったもの 綾子以外の全員が一斉に口にした。

「えっ!?!」と。

「ちつ違います違います違います!!!」

もちろん白石（誰のことかはもうわかるはず）と恋人同士ラブシヨなわけがない。第一彼には幼馴染みのみゆきがいる。

浮気などともできないというものだ。ということで健は全力で否定した。涙目で大声を出しながら。

「そ、そうですよ！ 第一アル……」

何か言いかけたところでみゆきがむせる。いったい何を言おうと
していたのか？ 言っではいけない言葉だったのか、それとも。

「おほん。……白石さんと健くんはあくまで同居人です！ ねえ白石さん！」

「そ、そうだ……です！ みゆきさんの言う通り！」

みゆきから確認をとられた白石（そろそろこつ名乗るのも苦しくなってきた）が断言する。敬語にやや慣れていないような口調で、少しばかりぎこちなかった。

みゆきや白石（さて正体は誰でしょう）本人に推測が否定されたため、見当はずれな推測をしまった綾子は「ありゃりゃ」と苦笑い。

「あらら。まあ、そういうこともあるわ。気にしない気にしない」

そんな一連の騒動にさとみはあえて口を挟まず、事態が収まるまでの様子を見守っていた。やはり母は強し、か。

あれから健は白石　もといアルヴィーと一緒に二階へ上がり、一息つくことにした。いろいろあって騒がしくなっていたが、ようやく落ち着けそうだ。ちなみにみゆきは下でまだ世間話をしている。

「ふう、なれない敬語は堅苦しい」

「でもあんなにかしこまることなかったのに。らしく無かったよ」「そうかの？」

ふたりとも軽く笑い合う。アルヴィーもようやく肩から力が抜けたのか、たどたどしい敬語からいつもの堂々とした口調に戻っていた。

「……のう、健。ひとついいか？」

笑っていたアルヴィーが突如、その表情を曇らせる。まだ何か心配なことがあるのか？

何にでも首を突っ込み、困った人を見捨てられない『お人好し』である彼は相談に乗ってやらねば　　と思い、首を縦に振る。

「明雄はこうして家に入れてくれたりはしなかった。だがお主は入れてくれた。なぜなんだ？　私のせいで明雄が死んだようなものなの」

「なに言ってるの、そんなの決まってるじゃないか。……アルヴィーは僕にとって大切なパートナーだからだよ」

「え……？」

「それにサ　　みんなでごはん食べるのに一人だけ仲間外れじゃ可哀想だっと思っし」

さりげなく彼は言いきったが、理由は一貫して『アルヴィーを信頼しているから』、『仲間外れにしたら可哀想だから』。他に理由

はない。これも東條健という男が持つ優しさの賜物だ。

「そうだったのか……お主、やはりいい奴だのお」

眉を垂らしたアルヴィーが笑う。嬉しくなったあまり彼女はバツ！と飛び出してベッドに座る健に抱き付く。

「……ありがとう！」

「どういたしオオオオオオウ!?」

ありのままに起こったことを書き記す。健がいきなりアルヴィーに抱きつかれたと思いきや、その豊満な胸おっぱいが猛烈にアタックしていた。

興奮したあまり彼は奇声を上げた、というわけだ。むっつりスケベの彼にとってこれほど嬉しいことはなかっただろう。

ただ、声あまりにでかくて近所には丸聞こえだったが。そしてその光景は案の定部屋の外から見られていた。見ていたのは綾子だ。我が目を疑ったか何度もまばたきしていた。

「……お、お邪魔しました」

苦笑いしながら綾子は自分の部屋に入った。この気まずい空気をなんとかできないだろうか。本当にまずいかもしれない。

EPISODE 84：戦慄のクモ地獄

翌日、早朝。暖かい日光が差し込む警視庁の廊下を一人の男が歩いている。前髪にピンク色のメッシュを入れた青い髪にピンク色の瞳をした男だ。

凜としたその瞳を隠すように知性的な輝きを放つ、銀縁のメガネをかけていた。いつも軽い調子の彼だが、今回は凜々しく真面目な表情を浮かべており、いつものおちゃらけた雰囲気も微塵も感じさせなかった。

「きゃっ」

「じ、ごめん」

しかしながら婦警や上司に肩がぶつかれば慌てふためきながらもちゃんと謝る姿は、いつもの彼らしいといえる。

そんな軽い調子が抜け切らない、冴えない男である彼　村上翔一が向かうは、捜査一課の先にあるエレベーター。

エレベーター内で特定の数字を打ち込み、地下へ地下へと下っていく。エレベーターを降りた先にあったのは　警視庁が誇るシェイド対策課の本部。東京二十三区の様子を一度に見渡せるモニタールームをくぐり、主要メンバーが集う会議室の扉を開く。

己の席について、戦闘部隊、オペレーター、調査班　全員そろっている事を確認する。

「……全員そろっていますね。では、これより作戦会議を行う！」

この中には年下の者はもちろん、彼より年上かつ経験豊富なものも少なからずいた。村上はいつも、そんなプレッシャーと戦いなが

らの確な指示をこなしてきた。

今でもベテランの突き刺さるような厳しい視線に威圧感を感じるが、それでもこの職についた以上はそれしきのことです。屈するつもりはない。

シエイドに屈さず、上からのイヤガラセやプレッシャーにも屈さず。それが、シエイド対策課主任を続ける条件だ。

「先日から池袋、新宿、渋谷　この3つの副都心を中心にクモ型のシエイドが発生しています。調査班の報告によれば、大きさは約1メートルから2メートル弱。立ち上がれば我々人間とだいたい同じぐらい。そして調査の結果、そいつらは都内の下水道で繁殖しているということがわかりました。そこで皆さんに
「主任、他にそいつらの特徴は!？」

話しに割って入るように戦闘部隊の男性が手を上げた。目を丸めた村上は眉をしかめながら、別の資料を手に取り

「奴らは硬い外殻に覆われている。唯一カラに守られていない腹部や頭を狙えば倒せる……かもしれない」

胸を張って特徴をなるだけ簡単に説明する。語尾がやや頼りなさそうに感じられるのは、きつと気のせいであろう。

説明を受けて満足した隊員は軽く礼を告げる。他に質問があるものはいないか聞いてみるが、先程の男性以外には誰もいなかった。

「……質問は以上でよろしかったですか？」

「はい」

「わかりました。……では、これより本題に移ります。複数の場所でシエイドが発生している以上、戦力をひとつだけに固めておくわけには行かないですね？　そこでシエイドが発生した地域の数だ

け戦力を分散させます。そこで皆さんには池袋に向かうA班と新宿に向かうB班、そして渋谷に向かうC班　この3つのグループに別れていたきたい」

「だが村上君、敵が強かった場合はどうするんだね？　君の案は確かにいいアイデアかもしれないが、そいつらは仮に少人数で相手をして本本当に大丈夫なのか？」

年配の刑事（所轄のベテラン）が村上に抗議する。正直所轄の仕事はどうだっていいと村上は思ったが、そのような下品な言動はとりたくないのここは耐えることにする。

「ご心配なく。今回の作戦におきましては出来る限り強力な武装とありつたけの銃弾を用意してあります。必要とあればレールガンや焼夷弾、特殊ガス弾やマイクロミサイルといった兵器類を使用しても構いません」

立ち上がった彼は胸を張って自信たっぷりにそう返答。他のものからすればやや鼻につくような態度だったが、それも己に対する絶対の自信から来るものだった。

エスパーでなくとも対シエイド用にカスタマイズ及び開発された武器を使えば討伐すること自体は可能だということは、これまでの戦闘で証明済み。

今回思いついた作戦は、少々、いや　かなり危険な賭けだ。この前のように巧くいかないかもしれない。それでも今は、やるしかない。

すべては市民を怪物の脅威から守るため、手段など選んでいる場合ではない。かつて善のエスパー、悪のエスパー、そしてシエイドが三つ巴の戦いを巻き起こした時、警察は無力で何も出来なかった。しかし、シエイド対策課本部が本庁に設置された今は違う。今は生き残るためなら何でもしなければいけない時代なのだ　そう

村上是考えていた。

「しかしその手の武器を使えば街に甚大な被害が……！」

「あなたのような歴戦の猛者が、何を今さら臆病風を吹かせているのです？ わけのわからない怪物に壊されるよりはマシでしょう！ なんなら自衛隊から許可をもらって核兵器や戦車でも持ち出しませよ」

「ふざけないでくれ！ 君は東京を吹っ飛ばしたいのか!？」

今度は初老の警察官僚が抗議を申し立てる。このままでは收拾がつかなくなる！ 眉をひそめ、メガネのブリッジを上げると「静粛に」とこの場に全員に言い聞かせ落ち着かせる。

初老の官僚はまだ、ほとぼりが冷めていないよう^{いか}で厳めしい顔をしていた。咳をして一旦呼吸を整え、

「とにかく、今は攻めるべきなのです。多少強引な手でなければ奴らには勝てません。会議はここで終わりにしましょう」

強引に話を切り上げて会議の終了を告げた村上は、そのまま会議室を出て行く。そんな彼を見て心配になった黒髪赤眼の婦警 穴戸も会議室を飛び出す。

向かった先はモニタールーム ではなく、外においてある大型トレーラーだった。数台あるそのトレーラーの内部にはモニターや武器庫が設けられており、大型自動車であることを忘れてしまいうなほど広がった。そのうちの1台に、穴戸と村上はいる。他にはオペレーターや待機中の戦闘部隊メンバーがそこにいた。

「警部補っ！ いいんですか、無理矢理終わりにしちゃって！」

「大丈夫だよ、穴戸ちゃん。ああいう頭でっかちなジジイどもにはあれぐらいキツク言っ^てやらなきゃ」

「でも、そんな言い方は……」
「そうは言うが、最近の政治家を見りゃ分かるけどね。今のご時世お偉いさんは口ばっかりだ。シェイドというのがどれだけ危険な化け物なのか、何もわかってない」

壁にもたれ、腕を組みながら村上が語る。その表情は警察の上層部 ならばに、ここ数年の日本における政治界の内情に嘆き、呆れがついているようだった。

彼が言うように近年の政治の状況はあまり褒められたものではない。トップはほぼ毎年交代し、誰も彼も必ずといっていいほど問題発言を口にする。

とある総理大臣が辞任したのをきっかけに、連鎖的にこんな信じがたいことが起きている。たとえるならば、うっかり踏んでしまった地雷が連鎖的に爆発しているようなものだ。

もしかすれば日本列島も村上も、巧妙に仕掛けられた悪意ある地雷の中でも一番大きくて、危険なものを踏んでしまったのかもしれない。

「……まあ、愚痴っついても仕方ないか。穴戸ちゃん、他のトレーラーにいるメンバーと連絡を取ってくれ。オペレーションも頼むぞ」
「わかりました」

穴戸が頷く。彼女はすぐ席に着いてモニターに向き合う。

「要、落合！ 君達もオペレーション頼む」

「分かりました、警部補！」

「……ここではチーフって呼んでくれ。それが主任で！」

「分かりました、主任！」

「よし、では持ち場につけ！」

要と呼ばれた女性と落合と呼ばれた女性がそれぞれモニターの席に座る。ちなみに要は^{かなめ}ピンク色のロングヘアで、落合はきれいなエメラルドグリーンの短髪である。両者共に上司である村上からの信頼も厚い、優れたオペレーターである。

「準備完了だ。あとは……」

戦闘部隊のメンバーがいる控え室に入り、一人一人に準備が済んでいるか確認を取る。いずれも最新技術で作られた強化スーツに身を包み強力な武器で武装した強豪揃いだ。

そんな彼らに村上が確認したところどうやら全員OKだったようで、中には既に戦いたがっているものもいた。

「なんでオレまで……」

「全員OKだな。……ん？ その隅っこでふてくされてるヤツは誰だ？」

「え？ あ、ああ。あれは不破さんです」

戦闘部隊が着ている強化スーツはいずれも頭から足のつま先まで全身が入る設計となっており、誰が誰かを見抜くためには体格や癖に注目する必要があった。

さて、防御力と機動性を両立したこの強化スーツだが、部屋の端でふてくされている男 不破にとっては走りづらいらしい。事実、彼は念仏でも唱えるように『重たい』だの『さっつあと脱ぎたい』だのと次々口にしていた。

「……ま、まあいいか。ともかく！ 君たちは敵の巣がある下水道に突入することとなっている。敵は強大だ、心してかかれよ」
「ラジャー！」

気合の入ったかけ声と共に、戦闘部隊メンバーが一斉に敬礼する。ただ、一人だけやる気がなさそうに「へーい」と気の抜けた声を出しているものもいた。言わずもがな、不破だった。

そんな彼らに乗せたトレーラーは、目的地にして敵地である下水道の入口へと進んでいく。やがてシェイドの発生源であるそこにトレーラーが到着し、後部の重々しい扉が開く。

強化スーツに身を包んだ戦闘部隊が一気に降り立ち、下水道の中へと突入していく。この東京の地下に広がる水路の中は汚い下水に満たされているため非常に臭く、しかも生ゴミやヘドロが流れ付いていて不衛生だ。

バクテリアが蔓延しているとかネズミが病原菌を運んできているとか、ゴキブリがうじゃうじゃと群れを成しているとか、もはや『汚い』の一言で済むレベルではない。

「きつたねーな……ちゃんと掃除とかしてるんですかね」
「するにしても、こんなに広くて複雑じゃあお掃除ロボットが何かに任せた方がいいんじゃないか？」

などと冗談を交えながら、戦闘部隊（+不破）は強烈な悪臭と散乱するゴミの中を切り抜けていく。やがて彼らは、壁に大きな穴が開いた区画を発見する。

電車一本は入りそうな大きさで、天井も高い。そして何よりココより先、恐ろしい『何か』が出てきそうな悪寒がする。

隊員たちは皆、覚悟を決めて唾を呑んだ。幸いここまでくたんのクモ型シェイドとは遭遇しておらず、誰一人消耗していない。

万全の状態が保たれているというわけだ。下水やヘドロの猛烈な悪臭がついたままではあったが。

「こちら村上。レーダーが強力な反応を察知した……全員気をつけろ」

「……了解」

村上からの警告をあとに、彼らは大穴の中へ入っていく。下水道の横に無理矢理開けられたその穴は、まるで新しく出来た洞窟のようだった。

ひんやりとしていて、異様なほどに静まり返っている。コウモリは飛び交うし、遠くから水滴の音も響いてくる。一種の神秘的な雰囲気と不気味さ。その両方をこの大穴は醸し出していた。

穴の奥へ奥へと進むにつれ、そこかしこにクモの巣が張り巡らされるようになっていく。例のクモ型シェイドも出始め、隊員の緊張感は増していく。

「来るな！ あっちいけ！」

人間一人分ほどはある大きさのクモが身軽に動き、噛み付いたり飛び掛ってきたり、捕食しようとその糸を絡めてきたり。

しかしその度に彼らは銃や特殊警棒などで立ち向かい、駆逐してきた。ときには不破もその槍でクモをなで斬りにし、邪魔なものはどンドン駆逐していった。

やがて 大穴の最深部に戦闘部隊は辿り着いた。天井が非常に高く、まるで大きな空洞のようだった。そしてこの、静まり返った空気。このとき全隊員が同じ事を考えた。

嫌な予感がする、と。

「……ここにはオレら以外に誰もいないのか？ ここまで静かだとかえって怖いぞ」

そう不破が呟いたその時 この場にいる全員が抱いていた『嫌な予感』が的中した。上から巨大な何かが降ってきたのだ。

「な、なんだコイツは！？ クモの親玉か！？」

全体的に黒ずんだ青紫色に染まった見上げるほどの巨体。緑色に光る複眼。鋭いキバ、大きく太い足と爪。

一言で表すなら『異様な光景』だった。相手のその大きさときたら、体長約4メートルから5メートルほどはあった。その巨体と鋭い眼光、禍々しい外見が戦闘部隊を威圧し恐怖を与える。

「…………ぐツ！？」

一瞬巨大グモの額から紫の波動のようなものが発せられたかと思えば、それと同時に不破の頭に激痛が走る。肉体ではなく、精神に攻撃を仕掛けているというのか？

殺シタナ。ワタシノ 子供ヲ

狼狽し激痛に悶える不破の頭の中に声が響く。それは重々しく低い女性の声だった。テレパシーか何かの類だろうか？

立て続けに予想外の事態が起こり部隊は混乱、経験豊富な不破もこれには動揺を隠せない。

「うっ……………」

許サナイ……………ユルサナイ

「あ、頭が」

コロシテヤル！！

「ぐああああッ!!」

不破が頭を抱えて苦痛に叫んでいる間に、他のメンバーが巨大グモに蹂躪されていくのは時間の問題だった。

巨大グモの堅牢な体には並の銃弾は弾かれ、やわな刃物ではかすり傷ひとつつかない。対してクモが吐く毒液はいとも簡単に強化スーイツの装甲を溶かし、その鎌の様に鋭利な爪はやすやすと強化スーイツを切り裂き、穴を穿つ。

「はあ、はあ……くそッ！」

死屍累々。ようやく頭痛が治まりまともに立ち上がれるようになる頃には、他のメンバーは皆血を流し息絶えていた。

「みんな先に死んじまいやがって！ 残るはオレだけかよッ！ ちくしょおおおおおおお！」

あまりに絶望的な状況の中で絶叫しながら、不破は巨大グモに立ち向かっていく。たった一人でランスを手にしながら。

EPISODE 85：女王蜘蛛

巨大グモの背中に飛び乗り何度もランスの穂先を突き刺す。だが、弾かれてばかりでまったく効いていない。背中がダメならどこを狙えばいい？

確か弱点があったはずである。殻に守られていない頭か、もしくは腹部を狙えと　会議のときに村上是言っていた。そこを集中して狙えば……！

確信を得た不破は戦法を変えて弱点を狙うことにする。だが、腹部に潜ろうにも大きな足に守られているし、頭を狙おうにも前足で防がれる。今はただ、走って相手の攻撃をかわすしかなかった。

「あれだけの巨体だ。こうやってかく乱すれば……」

と、思った矢先。自分が走ろうとした方向に巨大グモが先回りしていたのだ。見た目によらない身軽な動きで。

足を上げたクモはそのまま地面に勢いよく叩きつけ、不破を吹き飛ばす。地面に落ちた際に強い衝撃が全身に走り、身動きが取れなくなった。

何とかして上半身だけでも起こした不破の瞳に映っていたのは向こう側で体を立ち上げて何か吐き出そうとしている巨大グモの姿。

未だ残る激痛のせいで片目を瞑っつていながらも、その目にしっかりと捉えていた。敵はさつき戦闘部隊の仲間をそうやって蹂躪したように、また毒液でも吐こうとしているのか？

しかし今は距離が離れている。自分には届きそうにないが。直後、不破のその予想は大きく覆された。吐き出されたのは強力な火炎。

「うおっ！」

激痛できしむ体を無理矢理にでも起こし、間一髪横に転がって回避する。凄まじい熱量だった、近くにいるだけでも相当な熱さを感じる。

かすただけでも大ダメージはまぬがれなかっただろう。これが仮に直撃したら この防御性に優れた強化スーツでも防ぎきれなかったはず。

「くそっ、どうすればいい？」

弱点を狙おうにもなかなか敵の腹の下には潜れないし、そもそも足が邪魔をする。敵は弱点を見せもしてくれない。具体策はないならば、今出来ることをやるしか他はない。戦いが激しさを増す中、「待てよ」と何かを思い立った不破はランスをかざして放電。

「くっやって気をそらせば……！」

動揺したか相手が立ち上がる。やはり思った通りだった。道中で戦ってきたクモのシェイドと同じように腹部は無防備。

不破はすかさずそこへ潜り込み、武器を激しく振り回し叩きつける。その末に渾身の一撃を命中させひっくり返す。

「よし、これでしばらくは起き上がれないな……ぬんっ！」

ひっくり返ってもがく巨大グモの腹の上に飛び乗り、何度も槍を突き刺す。飛び降りたかと思えば何度も切りつける。紫の返り血が不破の強化スーツに少しずつ やがてびっしりとこびりついていく。

「仲間のカタキ　とらせてもらうぞッ!!」

高く跳躍し、ランスの穂先に電気をまとってそのまま急降下。巨大グモの腹にまっすぐ突き刺さり、そこから全身に電撃がほとばしる。そして巨大グモは　死んだように動きを止めた。

「……やったか？」

動かなくなつた巨大グモを見て不破が呟く。だが、彼ともあろうものがうっかりそんなことを言ってしまったのがいけないかったのか……、ピクリと巨大グモが動き出し立ち上がる。「なんだと……?」と目を丸くした不破は、危険を察知したかすぐさま離れる。

「傷が再生したのか!? ……うっ!!」

だが逃げている途中で体に糸が絡まり、地面に倒された状態で引きずられていく。振りほどこうにも向こうもかなり強い力で引つ張っており、抜け出すのは容易ではない。だからといって黙ってこのまま食われる筋合いは彼にはなかった。

「ぬおおおおおー!!」

食われる寸前で雄叫びを上げて気合いで糸をほどき、離脱!　空中で体を捻るように回りながら着地し、再び走り出す。

一瞬の隙を突いて腹の下に潜り込んで打ち上げるが、今度は先程のようにはうまく行かなかった。何せ相手は巨体の持ち主だ、その体積と同じくらい自重があった。

うまく浮かせてひっくり返すことができず、巨大グモにのしかかられてしまう。このままでは食われる!　まだ死ぬわけにはいかな

い 何とかしてわずかな隙間をくぐり抜けた不破は反撃を開始しようとした瞬間、巨大グモにまたも飛びかかられる。

眼前には巨大グモの禍々しくおぞましい顔が迫っていた。その鋭い前足を突きつけられた彼は負けじとランスで押し返そうとするが、予想以上に相手の力は強く。

「な、なんてパワーだ……ぐぬぬぬぬ!!」

「キシヤアアアアア!!」

「なにっ……!？」

攻防の末、不破にとって一番厄介なことが起きた。あまりに強すぎる圧力に耐えきれなくなったランスにヒビが入り、へし折れて砕けちってしまったのだ。

「まずい!」と本格的に危機感を感じた不破は、この場を切り抜けようとまず巨大グモの顔を殴って怯ませる。

相手はとても強い再生能力を持っている。その強さときたらその辺のシェイドとは比べ物にならない。パワーもスピードも、何もかもが桁違いだ。経歴の長い彼もこれほどまでの体験はしたことがなかった。

敵の圧倒的な強さを前に仲間全滅、残されたのは自分だけ初めてだった。彼が本能的に『恐怖』という感情を感じ取ったのは更に不破は、この絶望的な状況をどうやって切り抜けたらいいのかという不安も抱えていた。

一応ランスの他にバククラヤーや手榴弾、サブマシンガンを持っている。奴を倒すには、これだけで何とかするしかない。

必要とあらば先に倒されてしまった仲間から装備を拝借することも考えてはいた。懐にしまっていた手榴弾とサブマシンガンを見てふと不破は村上が会議のとき言っていた言葉を 彼の持論を思い出す。

(今は手段を選んでる場合じゃない。そう言ったよな、村上……?)

不破は「こうなればヤケだ!」と叫び、サブマシンガンの引き金を引く。一発、また一発。秒間に何発もの弾丸が銃口から放たれ、ことごとく巨大グモの体に命中していく。

「下手な鉄砲数撃ちや当たるッ!」

銃撃しながら不破が唸った。しかし込められていた弾丸をありつたけ命中させても、まだまだ相手が倒れる様子はない。

幾度とない銃撃を受けても巨大グモが宙へ飛び上がり、大きく体を広げる。狙いはもちろん、不破。弱った相手をこのまま押し潰してしまおうという算段だと思われる。

だがひとつ誤算があった。それは他でもない、不破にとっては嬉しい誤算。そう、腹部がガラ空きなのだ!

「当たれ!」

これをまたとない好機と見た不破はすかさず、手榴弾を空中にいる巨大グモへ投げる。腹部にあたったそれは大爆発を起こし、真っ黒焦げになった巨大グモが地面に落ちこちた。

「今度こそ……!」と不破は思ったが、敵はまだピクリと動いている。とはいえ相手はもうボロボロ、つまりは虫の息だ。

強い再生能力を持っているといえども、恐らくは先程の爆発によるダメージが響いてうまく傷を再生できなかったのだろう。

「こいつ……! いい加減にしろっ!」

とどめを刺すべくサブマシンガンの弾を腹に向けて連射。途中で弾をこめ、更に撃ち続ける。やがて巨大グモは金切り声を上げ

体から黒い霧を吹き出しながら体が崩壊していった。

苦痛に喘ぎながら怪物の最期を、勇敢な戦闘部隊メンバーの最期を見届けた不破はこの空洞をあとにする。自分がすっかりしなかつたせいで仲間たちを死に追いやってしまったことへの悔恨と、未だに去らぬ恐怖を胸中に抱いたまま。

これですべて終わった。　　はずだった。

黒くて小さいクモのようなものが巨大グモの亡骸だったものに集まったかと思えば、それは骸むくろと混じりあって次第に形を成していき紫色に発光する液体に覆われたそれは人の形に、否、人そのものとなった。これが意味することはひとつしかない。『恐怖』も『絶望』もまだ終わっていないと、そういうことだ。

EPISODE 85：女王蜘蛛（後書き）

アラクネア

クモのシェイド。体長約1〜2メートルほどで、口から強い粘着性を持つ糸を吐く。

身軽で硬い甲殻に覆われており、倒すには唯一殻に守られていない柔軟な腹部を狙うしか方法は無い。

アラクネアクイーン

ジョロウグモのシェイド。上級のシェイドで通常の個体の2倍以上はある巨体を誇り、見た目相応の自重があるにも関わらず機敏に動く。

それに加えシェイド対策課が着用する強化スーツの装甲も溶かしてしまう毒液や強力な炎を口から吐く、受けた傷を数十秒もかからないうちに回復してしまう高い再生能力を持つなど通常のシェイドとは比べ物にならない強敵。

また、念動力サイコキネシスの一種と思われる謎の力で相手に精神的なダメージを与える、テレパシーで相手の心に直接語りかけるなど謎が多い。

EPISODE 86：悲しみと策謀

その頃、トレーラー内では 村上をはじめとした待機メンバーがみな表情を曇らせていた。悲鳴が聞こえたきり、戦闘部隊との連絡が途絶えていたのだ。

連絡がとれない以上安否を確認することができない。不安を抱いてしまうのも無理はないというものだ。地上にいるシェイドの駆逐を担当していたA\C班は全員無事だったのだが。

村上が目を瞑りあきらめかけた顔をしたとき、通信が入った。下水道に突入した班からのものだ。血相を変えた村上が「応答してくれ！」と穴戸に叫び、通信を受けとると。

「なんとか生還したぜ」

「お前、不破……！」

声の主は不破だった。一同、目を丸くした。何せ敵は強大で、無事に生きて帰ってこれるかもわからなかった。

それがこうして奇跡の生還を遂げたのだ。これが喜ばずにいられるだろうか？ すぐに不破をトレーラーに入れ、全員嬉々とした様子で彼を出迎える。

強化スーツを脱ぎ、首にタオルを巻いてランニングシャツと半ズボンで休憩する不破に「のど乾いてませんか」とピンク髪の要がミネラルウォーターを持っていく。

「おっ、サンキュー」

笑顔で不破が礼を言う。とはいえ、まだ戦いの傷や疲れが残っている。あまり調子がいいとはいえない状態だ。もらった水を飲む不破のもとに、要と入れ替わるように村上と穴戸がやってくる。

「それで、他のメンバーはどうした。無事なのか？」
「……いや、それが」

村上が不安げにそう訊ねた途端、不破の表情が一気に曇りうつむいた。少し気まずそうに村上が少し後ずさる。

「みんなやられちゃった。生存者はオレだけだ」
「そんな……」

自分を残して戦闘部隊は全員死んでしまった　と、不破は二人にそう告げた。部下ならびに同僚の死を聞いた二人の顔が悲哀によつて、暗く染まっていく。

「それに……相手を倒したっていう実感がわからない」
「え……倒したのに、ですか？」
「ああ……なぜかわからんが、とにかく嫌な予感しかしねえ。それが怖いんだ、オレは」

同時刻、どこかの岩山の切り立った崖にそびえ立つ古城。その中では会議が行われていた。厳粛な雰囲気の中、なよなよした言動の男　花形が腰をくねらせながら礼拝堂の扉を開ける。

「ねえ聞きましたあ？　あの『クイーン』が死んだんですってよ！　子どもを殺されて憎しみに身も心も焼かれるなんて、バカな女！」
「死んだだと？　フツ……」

空気を読まずに割って入ってきた花形の発言に対し、部屋の一番奥にふんぞり返る黒髪に緑青色の瞳の男　甲斐崎が突如として高

笑いを上げる。苦虫を噛み潰したような顔を浮かべ、「なにがおかしいんです!？」と花形が怒鳴る。

「まさかお前、知らなかったのか? 『クイーン』はあの程度では死なない」

「つまり死んだ奴が生き返るとても? そんなのありえるわけない!」

「……無知ですねえ。フッフ」

甲斐崎が親切かつ丁寧の説明しているにも関わらず、花形は真っ向から否定し反論する。そんな彼を嘲笑うように、向かって右側にいる包帯姿の男が咳く。「た、辰巳さん……?」と、花形は彼の名を呼んだ。どうやら包帯の男は『辰巳』という名を名乗っているようだ。

「『クイーン』が死なない女であることは我々の間では常識です。

それすらも知らないなんて……これだから若いのは困る」

「ふ、ふん! 知ってましたわそれぐらい!」

「騒ぐな、バカが。うつつうしい!」

ムキになってまたも反論する花形を、包帯姿の男がなじった。彼はミイラよろしく顔中に包帯を巻き付けており、更に何着ものコートやマフラーで厚着をしている。

一応目元は見えるものの素顔を伺うことはできない。声色からして比較的若そうではあったが、発言の内容から察するに長い年月を生きていそつだ。

花形よりもずっと年上なのだろう。次に「それより花形」と、礼拝堂の左側にいる神父風の身なりをした壮年の男性が花形の名を呼び掛ける。

「お前の作戦とやらは進んでいるのか？」

「え？ ええ、まあ……慌てずじつくりと進めてるわ。順調そのものよ」

「やや信じがたいが……まあいい」

神父風の男が笑う。もしやさつきから、みんな自分のことをバカにしているのでは？ と、眉をしかめながら花形は思った。と

くに話すこともなくなったので礼拝堂を去ろうとする花形を止めるように甲斐崎が、「もう一度だけ言っておく」

「まったく、しつこいなあ！ 今度はなんです！？」

「これだけは肝に銘じておけ。失敗を犯したものは死あるのみ……とな」

やはり思った通りだ。こちらを見下すような高圧的で傲慢な態度。最初から期待すらしていないような冷たい視線。見るだけでも、声を聞くだけでもアタマに来る。怒りを露にした花形は舌打ちし、扉を乱暴に開けて礼拝堂を去っていった。

「ちえっ。どいつもこいつもバカにしゃがって……辰巳さんまであんなこと言うなんて、ホント信じられないわ。あいつらにあたくしがバカじゃないってことを証明しないと」

古城から隙間を経由して花形は移動していた。向かった先は滋賀県のどこかにある森の中だ。行く宛もなくトボトボと歩いている彼の目に、あるものが飛び込んでくる。

二足歩行の牛のようなシェイドだ。全身に黒い毛を生やしており、その筋骨隆々とした頑強な姿は神話に出てくる怪物。ミノタウロスを彷彿とさせる。「イイコト思い付いちゃった」と、花形は牛の

シェイドに近寄る。

「ブモ？（誰やお前）」

「ンモオー。モーモー、ンモオーン」

「……モー（アホか。普通にしゃべれや）」

「はいはい分かったわよ……じゃあ言うわよ、あなたにお願いがあるのよ」

顔を牛のシェイドに近づけて「実はねー」と耳元でささやき、そのまま何かをひそひそと吹き込む。相手が言っていることを理解したのか、にやつきながら牛はうなづく。果たして、何を吹き込まれたのか。そして花形はいつたい何を企んでいるというのか？

EPISODE 86・悲しみと策謀（後書き）

今回短めです。

ご要望があれば前の話と足してひとつにします。

お暇な方は評価・感想、および校正や誤字の指摘等お願い致します！

（人気投票もやっていますよー）

E P I S O D E 8 7 : アバレ牛とカメラ小僧

ところ変わって、翌日の東條家。健はアルヴィー（ここでは白石と名乗っている）と共に、久々に訪れた我が家でのんびりと休暇を過ごしていた。

いつも汗水垂らして働いているのだ、たまにはこうして家で寝転がってもおつりが来るはず……と思いつながら、健はケータイ片手に部屋でゴロゴロしていた。

データフォルダに保存した画像を見たり友人とメールでやりとりしたりなどして、ケータイをいじくっていた。『にへら』と少し淫らな笑みを浮かべており、その実ずいぶんと嬉しそうである。

何を見てにやついているかは 何となくわかるはずだ。職場では明るく真面目な人間でも、自宅ではそうでもない というのは実際によくあるパターンである。

何も不自然なことではない。アルヴィーも健と同じく、部屋でくつろいでいる。彼女はベッドの上で膝を前に出しながら座り、窓から外の景色を見ていた。頬杖を突いて見つめるその姿もまた、流麗だ。

「のどかだの〜」

うつとりしたような表情でそう呟く。この昼時、外は日本晴れで眩しいほどに日光が注いでいる。明るいその陽射しを浴びれば途端に体は気持ち良くなり、眠気を誘う。

そしてそのまま昼寝をする というのもよくあるパターンだ。事実、先程までニヤニヤしながらケータイをいじっていた健も既に眠っていた。

このまま二人で夢の世界に旅立つのもいい と思いついた瞬間、アルヴィーの頭の中に閃光がほとばしる！ 持ち前の超人的な感覚

で何らかの気配を感じ取ったのだ。

「健、シエイドだ！」

「え!？」

アルヴィーにそう言われて叩き起こされた健は、彼女につられるまま家を飛び出そうとする。

「健、おやつ食べへんか？」

「ごめん! 急用が！」

「ちよつと、あんたどこ行くん!？」

一階に降りた彼は母のさとみと姉の綾子に一言だけそう告げると、慌ててサンダルを履きアルヴィーと共に家を出発。行き先は シエイドが出現した場所。

「……白石さん行ってもうた」

「二人のぶん、残しときましょ」

シエイドの反応を辿りながら、家を出た二人は出現した場所を指して疾走する。やがて反応が出た場所に辿り着くとそこは商店街だった。

悲鳴を聞いた二人は襲われた人々を放っておけなくなり、商店街のアーケードへと突入していく。そこには牛の獣人のような怪物とシエイドを前に狼狽し恐怖する人々がいた。

「ここは危険です! みんな逃げて！」

動揺する人々に避難を呼びかける。アーケード街から逃げる人混

みをかき分けながら、健とアルヴィーは暴れているシェイドを止めに向かう。

その近くには逃げ遅れて怯えているものがいた。それは女性で、髪は薄紫色で瞳は赤紫色。健もアルヴィーもよく見慣れた相手

「みゆきッ！」

健がその名を叫び駆け寄る。鼻息を荒くして角を突き出そうとした牛のシェイドの寸前で盾を構えて攻撃を防ぐ。

姿勢をそのまま顔をみゆきに振り向いた健は「もう大丈夫だ」と呟き、恐怖にひきつっていたみゆきが笑顔に戻る。すぐに表情険しく、健は牛のシェイドを切り払って引き離す。

「アルヴィー、みゆきを！」

「承知した！」

今はシェイドの相手をするので手一杯だ。みゆきをアルヴィーに託し、怒りで興奮する牛のシェイドに立ち向かう。

攻撃をしかけるも、このシェイドはその屈強な見た目通りパワーが強く、力押しで攻撃を弾いてしまう。拳を地面に叩きつければ表面が割れて周囲に衝撃波が発生する。

幸い盾で防ぎきれぬレベルの威力だったが、もしその豪腕で直接殴っていたらさすがの彼も 大打撃を受けることは確実。

その大きく猛々しいツノも心臓を簡単に貫くか、あるいは人の体など余裕で突き飛ばしてしまうだろう。どちらにせよこれだけは断言できよう。こいつは手強い相手であると。

「ブモオオオー!!!」

牛が唸り声を上げる。猛烈な勢いで繰り出された突進をとっさに

転がってかわし、方向を変えて再び突進する牛を避けてすぐに切り上げ反撃。浮き上がった巨体が地面に重々しく叩きつけられる。

「とんだヘビー級だな……こいつッ！」

しかし相手はまだまだやる気だ。あの程度の攻撃では倒せない。パワーだけでなく、その耐久力もかなりのものだった。しかしゲーム的に考えて、攻撃力と防御力が高いということは……。

「健、そやつはその辺のシェイドより頑丈だ！ 剣がそのままでは力負けしてしまうぞ！」

「そのままじゃダメか……」

今戦っているあの雄牛のシェイドは、ゲームで例えるならば攻撃と防御に秀でた典型的なパワータイプ。こちらはパワー強めとはいえどもバランス型。

力でごり押しされたら攻撃を防ぎきれない自信はない。しかし、オーブで属性を変えたとしよう。まずはゲーム的な発想になるが、それで相手に属性攻撃に対する耐性がなければ いける！

「……よしわかった！ バーベキューにしてやるっ！」

作戦はこうだ。まず氷のオーブを装填し、敵を冷気で氷漬けにする。次に炎のオーブを装填して焼き尽くす。

きつね色になったところで雷のオーブを装填し、最後は黒焦げにする。少々危ないが、なにもしないよりはマシだと健は思っていた。

「ブモー……！」

そうはさせまいと牛のシェイドがどこからともなくハンマーを取り出し、力任せにそれを叩きつける。

地面に強い衝撃が走るほどの威力だ。直撃すれば致命傷はまぬがれない。隙を見て氷のオーブを装填し、牛のシェイドに斬りかかる。

「凍りつけっ」

体が冷えてよろめいたところで掌から冷気を放ち、瞬く間に暴れ牛を凍結させる。冷凍したままでは牛肉はおいしく味わえない。

「燃えろ！」

今度は炎のオーブと入れ換える。烈火をまとう剣で何度も斬りつけ、地面に叩きつけて炎を噴き上げ敵を宙に浮かせる。これで解凍ができた。

身震いするほどの冷たさと焦げてしまいそうなほどの熱さが間髪入れずに襲ってきて、牛のシェイドはしっちゃんかめっちゃんかだ。

しかもこれから電撃ビリビリの刑に処せられようというのだから、とてもじゃないが彼からすればたまったものではない。

「仕上げだ……でりゃあああ！」

空中で雷のオーブと炎のオーブを入れ換え、電気を帯びた剣を叩きつけて牛を地べたに落とす。はじめは全身に電気ショックが走って悶絶したものの、今や己の体の一部がごとく使いこなしている。我ながら成長したものだ、健は目頭が熱くなっていた。戦闘中にも関わらず、だ。よほど体に堪えたか、牛のシェイドはぎこちなく起き上がる。

「モォー……グググ」

「とどめだ！」

全身に力をみなぎらせ跳躍。地上にいる標的に狙いを定め 剣にたまったパワーを思い切りぶつける。稲妻をまとった刃に切り裂かれ今度こそ雄牛のシエイド バysonハンマーは爆散した。

剣からオーブを外したあと、クルクルと一回転させてから仕舞う。少しカッコつけた仕舞い方だ。うまく決められるとちよっと嬉しい。

「さ、これで大丈夫……」

「うっ」

戦いが終わるまでアルヴィーに守られていたみゆきが、苦痛を訴えるような顔でうめく。

「みゆき殿、どこか怪我でもしたのか!？」

「いや、そうじゃないの」

「え!？」

「おなか空いちゃって……」

このとき健もアルヴィーも本気でみゆきのことを心配していたのだが、思っていたほど深刻な事態には陥っていなかった為呆気にとられた。要するに心配して損したのだ。

「ハハハ、そうだったのか。なら、体の心配はいらなかったな」

竹を割ったようにさっぱりとアルヴィーが笑う。ちょうど腹が減ってきたので近くにある店に食べに行くことにする。彼らが過ぎ去ったのと時を同じくして、商店街の物陰に潜んでいた何者かが姿を現す。

「チツ、しくじりやがって……。まあいいわ、まだ他に手はある」

「肉まんうめえ！」

「コンビニも捨てたもんじゃないな。メロンパンうまい」

「チキンちゃんおいしーっ！」

最初はどこかの定食屋やJUSCOのフードコートで食べようと
考えていたが、よくよく考えればそんなことをしてしまうと食事代
がかさばる。

そこで今回は募る気持ちを抑えて所謂『コンビニ飯』で済ませた
のだ。我ながらいいアイデアじゃないか？ と、健は思っ
ていた。

右手に肉まん、左手に野菜ジュースを持ちながら。他にもニワト
リを模したかわいらしい紙パックに入った唐揚げやメロンパン、お
にぎりを購入してみんなで食べていた。

おにぎりの味は、健が鮭でアルヴィーはツナマヨ、みゆきがおか
かだった。三人ともおいしそうに食べていた。

「おなか膨れた？」

「うん！」

「よし、では行くでしょう」

これにて完食。食後の運動と言わんばかりに三人は散歩する。街
路樹のそばや湖岸沿いの道路を歩き、気持ちいい風や日の光を両手
いっぱい浴びていく。

清々しい気分で道を歩いていると、唐突にカメラのシャッターを
切った音が響く。前方からデジタルカメラを持った男が駆け寄っ
てきた。途中で一度つまずいても大して気にせず。

「いいわねーその笑顔！ 気に入ったわあ。ほら、もつと笑って！」
「誰だ？ お主は……」
「あたくしは花形！ はながたきよし花形清志よ。キヨちゃんって呼んで」

突然現れてそんなことを言われても困る。眉をしかめてあからさまに怪しい男を疑うアルヴィーだったが、眼前でフラッシュを焚き付けられて眩しくなってしまう。

「そんなしかめっ面しないの。ささ、笑って笑って」
「は、はい」

怪しいカメラマン 花形の妙なテンションの高さに他の二人も困惑きみだ。正直引くが、ここはとりあえず笑っておくか、と三人は思った。

一方であれだけ人に笑笑えと指図をしていた怪しげなカメラマンは、額から汗をかきながら不気味な笑いを浮かべている。何か良からぬことでも企んでいるのだろうか。

「はい、チーズ！」

パシャッ！ とフラッシュを炊いてシャッターが切られた。カメラのレンズにはぎこちなく笑う三人の姿が写し出されている……。
「うーん」と怪しいカメラマンが微妙な表情を浮かべる。

「イマイチぱつとしないわねー。もうちよい何とかかない？」
「そんなこと言われても困ります。だいたい、あなたは誰なんですか？」

さすがの健も機嫌を悪くしたか、初対面なのにやけに図々しい上に馴れ馴れしい態度をとるカメラマンに対して怒りはじめていた。

そんな彼や初めから自分を警戒しているアルヴィーを見た彼は、「え？ あ、あーっと……」

「……ほおー、まだシラを切ろうというのか」

アルヴィーが何かを察したような態度をとる。見られた方が思わず悪寒が走るような、鋭く冷血な視線をカメラマンに浴びせていた。

「失礼ね！ あたくしはただのフリーのカメラマンだってば。シラなんて切つてないわよ」

「本当にそうか？ ならいいんだが……」

ひよつとしたら勘違いだったかもしれないが、どちらにしても怪しい。この花形という男は警戒したほうが良さそうだ。と、アルヴィーは思った。そこに再び、頭の中で閃光が走る。まるでタイミングを見計らったかのように。

「また出た！？」

「くっ！」

健とみゆきが目を丸くして空を見上げている先には、八チのような姿のシェイドが1匹。いや、2匹。片方はオレンジ色で、もう片方はピンク色。オレンジの方が若干大柄で凶暴そうな風貌をしていた。突然飛来した2匹の八チが地上に降り立ち、花形を含んだ4人を取り囲む。

「ひえええええ！ なによこいつら！ あんた達の知り合い！？」

「同じ大学のルームメイトだ。仲は悪かったがな！」

細身の剣とボウガンが突きつけられる。二匹を健ひとりで相手に

きるだろうか？　しかし、相手はそこらの三下とは違う戦い慣れているような空気を漂わせている。少し心配だ、助けてやらねばと思ったアルヴィーが、剣をまっすぐに構えた健の隣へ躍り出る。

「二人とも下がって！」

「こいつらは私らで倒す！」

さあ、戦いだ　！

EPISODE 87：アバレ牛とカメラ小僧（後書き）

バイソンハンマー

雄牛のシエイド。屈強な肉体の持ち主で怪力無双を誇り、防御力と突進力もかなりのもの。

大きなハンマーを軽く振り回す豪腕による一撃を受ければ、どんな防具も役立たずと化すだろう。

そのパワーと耐久力で一度は健を圧倒するが、氷・炎・雷の3つのオーブを総動員した攻撃の前に敗北する。

EPISODE 88：狡猾なる花形

「いくぞ……って女性型のシェイド!? シェイドにも性別ってあったんだね……」

ピンク色で胸が丸く、オスの八チより細身で小柄なメスを前にしての発言。思ったことを包み隠さず正直に言っただけであり、別に健に悪意はなかった。しかし隣にいたアルヴィーは気が触れたか、むすつとした顔で彼に目を向けていた。

「……と、とにかくいくぞ!」

「ブーン!」

気を取り直して開戦。ダンスのステップを踏むようにすばやい動き、ブレが一切ない鋭い一撃。そしてやかましい羽音。三拍子そろった八チのようなシェイドが二人を翻弄する。

「落ち着けっ! 相手の隙を突くんだ」

「わかった!」

オスの八チがしなやかに動き、身構えている健を翻弄する。空中から健に狙いを定め、勢いに乗って突きを繰り出す。

横っ飛びでかわした健がそこですかさず、横に斬って反撃。元々、身軽な相手である。攻撃と回避には秀でていたが、攻撃を受けた際、のよるめき加減からして防御はさほどでもなさそうだ。ということ
はメスの方も ?

(あの様子じゃ意外と打たれ弱そうだ。一気に畳み掛ければ、この

勝負……いけるかも)

確信を得たか健の表情が自信満々な笑みへ変わっていく。はたして根拠のないその自信はどこから来るのか？ 恐らくはとにかく何とかするというその熱意から来ているのだろう。

「キイイイー！」

黄色い奇声を上げてメスバチが弓を引き絞り矢を放つ。まばたきする暇もなく飛んできたそれがアルヴィーの紅い瞳の中に映る。

このまま目に突き刺さるかに見えたが、険しい表情の健が駆け寄り盾で矢を弾く。動揺するメスバチの隙を突き、縦にたたつ斬る。

更に横、斜め上　と続けて斬りつけ一気に畳み掛けた。だが、安堵の息を吐くことを許さないかのようにオスバチが背後から現れる。

元々、如何にも凶暴そうな顔つきをしていたこいつだが、今回はメスバチがやられたせいaka激昂しているように見えた。怪物とはいえ、大胆に言ってしまうえばシェイドも生き物。思いやりなどはなくとも感情はあるのだろう。

「クオオオオオ！！！」

「のわっ！」

オスバチが健の肩をつかみ、右手に持った細身の剣で突き刺そうとする。直感的に危機を察知した健が振り向いたときには、既に剣を突き立てられる寸前。

やられてたまるか！　と、健は長剣　エーテルセイバーで切り上げて反撃。(メスバチよりは屈強だが) 華奢華奢で軽いオスバチの体が仰向けで宙に浮かび上がる。

そこにアルヴィーが飛び蹴りで追い討ちをかけ、強い力で蹴り飛

ばす。奇遇にもその先にはメスバチがおり、オスとぶつかって仲良く『共倒れ』した。

「なんだ。こいつら、思ったより弱いやつらだったのう」

「ぶ……ブーン！」

一息ついたアルヴィーが口元を綻ばせる。まだまだ余裕綽々な二人を見て具合が悪くなったか、今回は見逃してやる……と、言わんばかりに二匹のハチ型シェイドは空を飛んで逃亡した。

「……ふう。なんとか追い払えた」

腕で汗を拭きながら健が安堵の息を吐く。剣を仕舞い、後ろに下がらせたみゆきと花形の下にいくが、なんと、二人がいない。いつの間に？ どこへ消えたのだろうか？

素朴だが深刻な疑問を抱く二人の安息を引き裂くように、体が背中からしびれるような感覚が健を襲う。

地面に伏して苦悶を浮かべながら後ろを向くと、そこにはスタンガン片手に邪悪な笑みを浮かべる派手な髪型の男の姿があった。すぐ隣には口にガムテープを貼られたみゆきの姿も……。

「んふふ、おバカさんねえ」

「は、花形さん……！？ これは、いつたい……」

「寝てなボウヤ！」

しびれがとれない健の腹を蹴って転がす。「待て！」と厳しい口調で呼びかけるアルヴィーを気にも留めず、花形はみゆきを連れのまま跳び跳ねながら去っていった。

「お主……大丈夫か？」

アルヴィーの手を借りて健が立ち上がる。スタンガンによるしびれは既に消えていたが、一瞬とはいえ全身に走ったあの激痛は耐え難いものだった。

「な、なんとか……。そつちは？」

「私は何ともないぞ。ただ、みゆき殿が心配だの」

二人とも険しい表情で、花形が逃げていった方向を見つめる。その瞳には奴のどす黒い本性を見抜けなかった悔しさと、見るからに怪しかったあの男を疑わなかった自分たちへの怒り、そしてみゆきを守れなかった後悔。それらが混じった複雑な感情が宿っていた。

「……悔しい。僕がもっとしつかりしておけばこんなことには……」

「私も油断しておった。あやつから　花形から感じた邪悪な気配は勘違いではなかった」

「今はこうやってよくよくよしてる場合じゃないよな……ひとまず僕んちに帰ろう」

嘆いている場合ではない、ひとまず気を落ち着かせよう。考えるのはそれからだ　と考えながら、二人は家に戻った。

少しくつろいでから二階へ上がり、ふかふかのベッドで体を休める。窓辺から外を眺めながらたそがれていると、「手紙きたで〜！」と下から母のさとみが彼を呼ぶ声が聞こえた。

「えっ？　て、手紙？」

「うん。まだ読んでへんけど……嫌な感じしかしいひん」

おっとりした口調は変わらず。いつも通りの母だ。ただ、何かあ

きなさいな〜」

「う、うん。そうする」

「切り替え早いのう……」

母に言われた通り、健は茶を飲んで気を落ち着かせた。今は緊急事態だ。だからといって冷静さを失い、取り乱しては元も子もない。こんなときだからこそ冷静な判断が必要となってくるのだ。息を大きく吸って吐き出し、健は先程起きた出来事を整理する。

「あの……お母さん」

「あれ、白石さんでないした〜？」

「今日は、健のお姉さんじゃないんですか？」

「綾子なら今日は仕事行ってますよ〜。あの子毎日大変やからか、帰ってきた時はたいい機嫌悪くしてるんよ」

「そうなんですか。あの明るいお姉さんが」

「こっちまで不機嫌になってまいそうです〜」

真面目に物事を考察している健のそばで、さとみとアルヴィー（念のため言っておくがここでは白石さん）がさりげなく世間話をはじめていた。

顔をあわせてからまだ数日しか経っていないのに、まるで何カ月以上も前から知り合っているような馴染み具合だ。

案外この二人はお互い似た者同士で気が合うのかもしれない。さりげなく健の幼少時代の恥ずかしいエピソードが語られたような気もするが、気のせいだろう。たぶん。

「ところで、お母さんは何かお仕事はなさっていられますか？」

「パートやってるで〜。毎日楽しくやらせてもってます〜」

（関係ない話してるし！ けど、和むなあ）

整理もついで他愛のない世間話を聞いてくつろぎはじめた、そのときだった。携帯電話が振動してランプを点滅、やかましい音を鳴らし始めたのは。

「健、電話鳴ってるで〜」

「ほいほい、出るわ」

携帯を手に取り電話に出る。相手は非通知。普通なら出ない相手だ。だが、このタイミングで電話がかかってきたということは相手はみゆきをさらったアイツという可能性もある。根拠はないが、ここは出るしかない。

「……もしもし」

「東條 健ダナ？」

緊張感漂うなか、携帯電話から聞こえる不気味な声。機械で合成されたそれはまるで、報道番組で取り上げられた殺人犯のようだった。

「そうですけど……？」

「デハ、手紙ハ モウ読ンデイタダケタカナ？ 今夜12時、旧滋賀会館へ 来イ。オマエノ 大事ナ人ト一緒ニ 待ツテイルゾ」

誘拐犯 おそらく花形からの電話が切れた。まるで挑戦状でも叩きつけるような口ぶりだった。

「……誰からやった？」

「悪いヤツから。呼び出し食らってもうた、深夜0時に来いって言うてた」

「夜中の0時か……場所はどこなん？」

「旧滋賀会館やって」

「行くんか？」

さとみが心配そうにしながら健に訊ねる。ちょっと心配だが、0時までには姉さんは帰ってくるはず。なら、答えはひとつしか考えられない。

「行ってくる！」

「私も行きます。お母さん！」

EPISODE 89：みゆきを捜せ

「や……やめて」

「強情なヤツねえ。いったいいつんなつたら泣くのかしら？」

深夜0時の旧滋賀会館　新しい滋賀会館が建つために閉鎖された、誰もいないはずの建物の放送室にて。

前髪を右に流した派手な髪型の誘拐犯こと、花形が縄で巻かれた藤色の髪の女性　みゆきをムチでひっぱたいていじめていた。机にはビデオカメラや、（花形の）水分補給用のペットボトルなどが置かれている。

「や、やめて……！」

「あはアん。いいわよそれ……その表情ヨ！」

何を思ったか傷だらけのみゆきを目にした瞬間、右手にビデオカメラを構えて食らいつくように撮影し出す。声にならない声を出すみゆきを見て、花形は心底嬉しそうに邪悪な笑みを浮かべていた。

「アハハ！ サイコーの瞬間だわ！ あたくしはねえ、人の笑顔を撮るのが好きだけど……人が苦しんでるところを撮るのはもっと好きなのよおん！」

「い、いや……撮らないで」

「もっと泣けやオラァ！」

悲鳴を上げるばかりでちっとも涙を流さないみゆきを蹴っても、花形は彼女を泣かせようとす。

「これ以上撮ってほしくないなら教えなさいよ……アンタが泣きわめく方法を！」

「……あたし、泣かない……健くんがきつと、助けに来てくれる。そしてあなたをやっつけてくれる……！」

まだ彼女の中には一片の希望が残っている。ちよつと情けないが強くてかっこよく、優しく頼りになる青年　東條健が助けに来てくれるという希望が。

みゆきからその言葉を聞いた花形は青筋を立て、「あつそう！他力本願なことぞ！」と怒りながらムチを投げ捨ててみゆきの顔をはたく。

「どうせ、その健くとやらもあたくしの前でサヨナラしちゃうでしょうよ。せいぜい白馬の王子様が来てくれる事を期待するのね……」

深夜0時、旧滋賀会館。昼はそうでなくても、夜の闇の中でそびえ立つその外観はまるで幽霊屋敷か廃墟のようだ。そこを訪れた人影が二人　言わずもがな、花形の魔の手からみゆきを奪還しに来た健とアルヴィーだ。

「ここだな……旧滋賀会館とかいうのは」「そうだよ。前に案内した場所でもある」

表面上は穏やか。だが、その心中は穏やかではなく　花形へ対する怒りから煮えたぎっており、さながら敵の組にカチコミかけに来たヤーさんのように興奮していた。

カギがかかっていたいなかった扉を開き中へ入ると、そこはゴミやガレキが散らかっていた。ブルーシートが上からかけられたところも

あり、全体的に荒れ果てていて近寄りがたい雰囲気を感じさせる。

「久々に入ったけど、ずいぶん荒れてるなあ……」

「突然敵が出てくるかもしれん。ここから先は用心して進もうぞ」

薄暗くて明かりもない中で敵が不意討ちを仕掛けてくるかもしれない。いつ襲われてもいいように、身構えながら二人は進んでいく。塞がれていて進めない左側ではなく、右側の階段に。二階へ着いた瞬間、突如として窓ガラスをブチ破って何者かが現れる！

「なんだ!？」

現れたのは先日戦った八手型のシェイド二匹組。それだけではなく、最下級シェイド・クリーパーも物陰から数匹出現した。

「悪いけど相手してる暇はないんだ!」

「失せるッ!」

体をくねらせながら襲いかかってくるクリーパーを剣技や体術で蹴散らしていく。中には四つんばいで高速移動するものもいたが、いずれも難なくいなされた。

残るは二匹の八手だけだ！メスは弓を引き絞り矢を放ち、オスは細身の剣をすばやく振り回す。最初は手こずったが、もはや二人にとっては取るに足らない相手。隙を突いてガンガン攻撃していく。

「おりゃー!」

健は氷の剣でオスを凍結、粉碎。氷の破片が宙を舞い、思わずうっとりするほど煌めく。

「せいやあ！」

続いてオスがやられて動揺するメスに、アルヴィーが全力でジャーマンスープレックスをかける。地面に強く叩きつけられたメスバチは霧散して闇に還った。

その後も二人は、捕らわれたみゆきとにつくき花形を探して旧滋賀会館を駆け巡った。残った場所は……大きなシネマホールのみ。

「そ……それだけはダメえええ」

「ふっふっふ……別におさわりしたっていいじゃないの。ほら、服脱ぎなさいよ」

シネマホールの奥にある控え室。ビデオカメラを持った花形の手によってみゆきのあられもない姿が晒されようとしていた、その瞬間。

「花形あああああ！！」

「ほへ？ ひえ、ひえ、ひえひいひいひい！？」

扉を派手にブチ破って健とアルヴィーが現れた。花形は世紀末救世主を目にしたモヒカンのごとく奇声を上げながら狼狽し、更にビデオカメラを落としてしまう。一方でみゆきには明るい笑顔が戻った。

「よ、よく来てくれたわね。待ちくたびれてこのコいじめちゃったわ」

見苦しくも平静を装い、ビデオカメラ（ゾーシンで売ってた新品）を拾い上げようとする。しかし先にアルヴィーに拾われてしまった。

ビデオカメラの画面に情けない顔の花形が映る。

「かつ、返しなさいよ！ それにはあたくしが今まで録ったお宝映像が……」

「そつちがみゆき殿を返すのなら返してやる」

少々悔しいが、言われた通りにするしかなさそうだ。渋々みゆきを解放し、「返したわよ！ あたくしのカメラ返して！」とメンチを切りながらアルヴィーに詰め寄る。だが、アルヴィーはビデオカメラを拳で叩き割る！

「あーっ！ なんてことしてくれんのよ！ この前ゾーシンで買ったばっかだったのに！」

「知るか。電気屋のオヤジさんにも直してもらえ！」

険しい表情で花形が歯ぎしりする。唸り声を上げながらアルヴィーに殴りかかろうとするが、腹に鉄拳が炸裂。腹を押さえながら後ずさる。

「そもそもお主との約束を守る気など毛頭ござんせん」

「そうだそうだ！ みゆき、早くここから逃げよう」

「うんっ！」

もはや呆れて相手する気も起きなかった。みゆきを取り返した健とアルヴィーは、シネマホールの控え室を抜けようとしたが、その瞬間 耳をつんざくような怒鳴り声とともにしなった蔦が飛んできた。

「テメエらタダで逃げられると思ってんじゃねえぞ！ まとめて血祭りにあげてやる……！」

先程までのなよなよした所謂オネエキャラから一転、花形の口調や態度が粗野で凶暴なものへ変わった。

「オレの美しすぎるほど怖い真の姿を見るッ！　ぬうおおおお〜！
！」

怒り狂う花形が両手を広げ、少し気合いを入れて叫ぶ。すると黄色と白のモヤに包まれて、花形が異形の姿へと変貌を遂げた。花びらが髪の毛がわりに頭に咲いた植物の精のような、邪悪な道化師のような異様な姿だった。

「……………なんだ？　この前戦った三谷と似たような感じがする……………」

以前健が戦った上級のシェイド　三谷。カメレオンの姿をしたそいつは変幻自在かつ神出鬼没で、今はもういないもののもしつこい上に卑劣な相手であった。その三谷を連想させる嫌な気配を感じ取った健は、より一層警戒心を強める。

「あ、ア^ん？　三谷だあ？　あんなハエ以下のヤツと一緒にしないでくれるウ？　あいつはあたくし達の中では最弱！　足元、いや花びら一枚にも及ばないわ」
「ほう……………やはりな」

三谷程度と一緒にするな　と見栄を張って粹がる花形の言葉を聞いて、アルヴィーが笑った。まるで何かに気づいたような雰囲気だ。

「何がおかしいんだクソババア！！」

「いや……………前から思っておったのだ。お主や三谷のような小物が一

人でこんな行動を起こすとは考えられんな」

自分が気づいたことをアルヴィーは語る。それを聞いた健とみゆきは「なるほど！」と合点が行ったような顔をした。

確かに三谷は卑怯でズル賢い相手だったが、頭はあまり回るほうではなかった。今対面している花形は三谷より賢いが、彼も一人だけで行動を起こせるとは考えがたい。

ひよつとしたらシェイドで構成された何らかの組織に身を置いていて、上からの指示で動いていたのでは？　そう彼女は推測していたのだ。

「ところで私がババアならお主はガキだな。それとも若造のほうが良かったか？」

「うぐぐ……なめんじゃねえ！」

花形の蔓の腕がムチのようになり、一同を壁を突き破るほどの力で吹き飛ばす。追い討ちをかけようとまた蔓が襲いかかるが、とつさに健が剣で鶴を切り落とす。

「気をつけて健くん！　そいつかなり強そうよ！」

「そうみたいだね……行くよアルヴィー！」

「ああ。早いとこケリをつけようぞ！」

力強く呼応したアルヴィーが一度白い影に姿を変え、そこから白龍の姿へと体を変化させていく。スイセンの怪人のような姿の花形とにらみ合い、見事に打ち勝つ。

「醜いやつらね！　滅びておしまい！！」

苦虫を噛み潰したような顔で花形が怒号を上げた。さあ、戦いだ！

EPISODE 90：激情のナルキッソス

みゆきを安全なところに下がらせ、花形との勝負に挑む。既ににらみ合いで負けたにも関わらず虚勢を張る花形が、腕からゴワゴワとした蔓を伸ばす。

ある時はムチのようにしなり、ある時は獲物を捕らえる縄のように。難なくかわして反撃を加える健であったが、連続で攻撃している最中に逃げられてしまう。振り返っても誰もいない。不審に思った瞬間、彼の首筋を蔦が締め付けた。

「くっ……」

「こつちだバカめ！」

苦悶の表情を浮かべながら、健は蔦を振りほどこうとする。だが、もがけばもがくほど蔦が強く締め付けられていく。

「ホホッ、美しくないわねえ！ そのまま窒息なさい！」

このままではあのオカマに負ける！ だが、よく考えればまだ勝機はあるのではないか？ 首はこの通り締め付けられているものの、腕や足は蔦が絡まっていない。

ということはい。上手く行くかは分からないが、やるしかない。そう思い立った健は、剣を蔦に当ててそのまま切り落とす。

「チィッ！」

「でやっ！！」

舌打ちする花形。その隙を突いて懐へ潜り込み、健は一気に斬りつけ宙へと打ち上げる。浮き上がった花形の体にエーテルセイバー

を突き立て、そのまま勢いよく降下。

衝撃波が吹き上がり、周囲の地面がめり込んで亀裂が入った。起き上がった花形から一旦距離を置き、相手の出方を伺う。

「食らえええええ」

花形が急に頭を健へ下げた　　と思いきや、そこから黄土色に光る花粉が飛び出す。完全に不意打ちだ、かわしきれずに直撃してしまう。浴びてしまった健の体がビリビリとしびれ出す。

「か、体が……うっ！」

「へエーッへッへッへ！　そいつはシビレ粉！　一度浴びればすぐには治らないわよ！　オホホホ！！」

体がしびれて上手く動けない。健の動きがにぶったのを良いことに、花形は罵でビシバシ叩き始める！　まるで拷問のようなこの状況をひたすら耐えるしか、今の健には出来なかった。

「これでもか、これでもか！　これでもかアアアア！！　ヒューッ
ヒッヒッヒッヒー！！」

「くっ……貴様ッ！」

攻撃が途切れた隙を突いて斬りかかるが、寸前で避けられてしまう。しびれがまだまだ抜けず、息を荒くする健めがけて花形は花びらを丸いノコギリ状にして飛ばす。

「死ねやクソガキアアアア！！」

花びらのカッターが健の肩を切り裂いた。血がブシューウウ！！と吹き出し、歯ざしりしながらその激痛を耐えしのぐ。切れ味は

中々のものだったが、一発だけなら大丈夫そうだ。

そう、それが一発『だけ』だったのなら。

「ままだ、もういっちょ！」

現実には甘くはない。花びらカッターはもう一発飛んできていたのだ。立ち上がって盾を構えようにも、体のしびれはまだとれていない。

仮に避けられたところで、自分は回避できても後ろにいるみゆきに当たる可能性は高い。いったいどうすれば？

そうだ。一番近くに頼れるパートナーがいるではないか。彼女に何とかしてもらえば。だが、花びらカッターがもう眼前まで迫ってきている。彼女を、アルヴィーを呼び出す時間は無い！このまま八つ裂きになるしかないのか？

「も、もうダメだ……」

「た……健くん！？ 健くんっ！！」

泣きそうな顔で必死に自分の名前を呼ぶみゆきの声。邪悪な笑みを浮かべるスイセンの怪人。そして殺されるかもしれない自分自身。

花形の狙いはこれだったのか？ みゆきの目の前で自分を惨殺して絶望させようとしていたのか？ 感づくも時既に遅し。

ノコギリ状の花びらが健の首をはねようと迫っていた。あわや八つ裂きにされようとしていた刹那、どこからともなく放たれたエネルギー弾が花びらを破壊。それだけではなしに

「な……なにツ!? うぎゃあつ!!」

最後に放たれた極大なビームが花形に直撃し、爆発するッ
! いったい誰が、と周囲が騒然とする中、銃撃主が姿を現す。
建物の屋上から颯爽と飛び降りて華麗に着地したその人物は、青
髪青眼。黒いベストに青いジーパンとブラウンのブーツを履き、メ
タリックブルーをした大型の銃。ブロックバスターを持った若い
男性だった。そのつり上がった瞳は、たぎる闘志と揺るがない自信
に満ちている。

「カリは返したでえ、東條はん!」

「……市村さん! どうしてここに……?」

「話はあとや! 今はこいつを殺ることに集中せえ!」

歯ぎしりする花形へ銃口を向け、そのままビームを連射。ひるん
だ隙を突いて健が跳躍しながら唐竹割りをお見舞いする。

だが、彼は先程しびれ粉を食らったはずである。ここまできびき
び動いて大丈夫なのか? 答えは簡単だ、そんな心配はいらない。
何故なら 既に体のしびれは消えたからだ。

「うりゃああああ!!」

「デエヤアアアア!!」

絶え間なき銃撃と強力な斬撃、その二つが花形へ容赦なく襲いか
かる。花形も負けじと蔓をしながら花びらのカッターを飛ばすが、
二人の猛攻を前にことごとくいなされ、状況は彼にとって悪いもの
へとシフトしていく。

「ちよ……ナニすんのよ! 2vs1なんて卑怯じゃない!」

「うっさいわボケエ! ワレみたいなクサレ外道が何をぬかすかア

「アアアア!!」

口答えに耳も貸さず市村は銃を乱射。いったん弾をリロードするとこれまた凄まじい速さで乱射し、花形に反撃どころか息をする暇すらも与えない。銃撃が終わったと同時に怯えて逃げ出そうとしたが。

「今やで東條はん!」

「はいっ!」

そうはさせない。氷のオーブを装填し、健は手のひらから冷気を放ち花形を凍結させる。身動きひとつとれぬ氷像と化した花形を斬って、斬って、斬りまくる!

とどめに跳躍しながらの必殺の一撃を繰り出し 粉碎。花形は情けない叫び声を上げながら爆発した。爆発が収まった場所には、満身創痍で横たわる無様な男の姿がそこにあった。言うまでもなく花形の人間体だ。

「みんな、ありがとう……本当に死ぬかと思った」

「もう大丈夫だ。ケガとかない?」

「うん、なんとか」

「それは良かったのう」

何はともあれ助かった。市村も加わり、お互い安堵の表情を浮かべて笑い合う。みんな爽やかに笑っていた。あの短気でチンピラ的な性分の市村さえも、だ。

「それより……こやつ、どうしてくれようか」

「ひ、ヒューッ!」

人の姿に戻ったアルヴィーがそう言うとともに、全員が鬼のような形相で振り向いて花形を睨み付ける。逃げようとする花形。しかし、頭を踏みつけられ無様にも再び地べたへ這いつくばる。

「お主や三谷みたにに命令を下していたのは誰だ？ 答える！」

「し、知らねえよ！ 第一それを教えてオレに何のメリットがあるって言うんだ!？」

「そうか、教えられぬか……」

足をどけて花形から少し距離を置く。安堵する花形だったが、すぐアルヴィーに体を起こされ顔面に鉄拳を浴びせられた。紫の鼻血を流しながら歯が欠けた花形がみたび横たわった。

「情報もらえなかったね……いったい何なんだろう、あいつらがいた組織って」

「さあな。教えなかったということは、それだけ上司に首をはねられるのが怖いということなのかもしれぬ」

何をしてもされても、花形は頑かたくなに口を割らなかつた。しかしながら彼らは分からないなりに推測し、この件は保留することにする。やっと落ち着けると思われたが、あきらめの悪い花形は懐からナイフを取りだし健に襲いかかるッ！

「あかん、東條はん！」

「健くんあぶないッ!！」

「オレ様の美しい顔を汚しやがってエエエエ!！」

しかし健は自分に突き刺さろうとした凶刃の存在に気付き、振り向きざまに剣の腹を花形に叩きつける。続けて花形の喉元に柄の先端を突き付け押し倒す。

このとき弾き飛ばされたナイフは壁に突き刺さり、花形は恐怖にひきつった顔をして後ずさりしていた。そんなみじめな花形に切っ先を向け威嚇する。

「失せる小悪党！ 二度と僕たちの前に現れるなッ！！」

「お……おたすけえ……！！」

もはや万策尽きた。何をしてもこいつらには勝てっこない。完全に戦意を喪失し、花形は全速力で逃走した。「おムコにいけな——い！」などと悲痛な叫びを上げていた気もしたが、恐らくは気のせいだろう。

「逃げよったか……ま、エエわ。あんな倒しても東條はんの名が汚されるだけやしな」

「まったくです。ホントやなヤツだった！」

「うんうん。わたしなんか昼からずっとアイツに捕まってて、何も食べさせてもらえなかつたんですよ。もうおなかペコペコ！」

「まあ、愚痴っておっても仕方なかるうて。そろそろ帰るとするか
のう」

アルヴィーが適当なところで相づちを打つ。みんな答えは同じだった、あとはそれぞれが帰るべき場所へ帰るだけだ。

その頃、新宿・歌舞伎町では 。

「ハア……ハア……なんなのよあいつら！？ 聞いてたよりずっと強かったじゃない……！」

例の剣を持った小僧やアルビノドラゴンに顔を傷つけられた。

それだけではない、短い時間で幾度となく味わわされた辱しめと苦痛に喘ぎながら、右に向かつて流れた前髪が特徴的な男　花形清志は逃げ延びていた。

そこは歌舞伎町のとある路地裏にある薄暗い区画で、灯りはわずかしかなく非常に視界が悪かった。幸い今夜は満月で、暗い夜にしては明るかったのが幸いか。歩き疲れた花形は壁にもたれ、右手を壁に伸ばしたままの姿勢で休息をとった。

「けど、ここまで来れば……あら？」

ふと彼の目に、この暗い路地をさまよう一人の幼い少女の姿が飛び込んだ。身長はだいたい120センチで自分より小さく、黒いワンピースを着ている。もしや道に迷ったのだらうか？

可哀想だから家に帰れるように道案内をしてやろう　と見せかけて、誰にも見つからない場所でいじめてやろう。

ちょうど耳をつんざくほどの悲鳴が聴いてみたかったところだ

。腹の底にどす黒い思惑を抱えながら、花形はオロオロしている少女にゆっくりと近寄っていく。

「あれー？　お嬢ちゃん、こんなところで何してるのかなあ」

「ママと……はぐれちゃったの……ぐすん」

「そっか。じゃあ、お兄ちゃんにママがいた場所教えてもらえないかな？　教えてくれたらそこまで送ってくからさ」

「うん！」

（っていうのはウソだけだね！　ヌフツツ！！）

「？」

表面上は年上の親切なお兄さんを装い、少女に一片の希望を抱かせる。母親のところに連れていくと見せかけ　途中でいじめて悲鳴を上げさせる。

見たところ彼女は純真無垢で、人を疑うことなど知らないように見える。それなら尚更、痛め付ける甲斐があるというものだ。

叩けば叩くほど、きつと極上の悲鳴を上げるだろう！ ああ、痛め付けたくてたまらない。我慢なんかしてられない。

笑顔の裏でそう悪巧みをしながら、花形は幼い少女と一緒に彼女の母親を探してやることにする。そんな花形に少女は感謝を示したか、明るく笑っていた。

花形の笑みは悪意をはらんだ表面上だけのものだったとはいえ、少女は彼の好意によほど感謝しているのだろう。

本当にそうならば、花形が見ていないところで見せる小悪魔のように妖しく、冷たい微笑みは何なのか……という話だが。

「ねえ、君のお母さんどこにいるのよ？ さつきから探してるけど全然見つからないよ」

「あれー。さつきまでこの辺にいたんだけどなあ」

「（チツ、手間かけさせやがって！）お兄さんも暇じゃないの。早く本当の居場所教えなさいよお」

こんな感じのやりとりが、もう何度も繰り返されていた。

あまり我慢強くない花形にとってはストレスがたまる一方で、今度少女の方から何か言えばすぐにでも憤慨して彼女を襲いかねないほどに溜まっていた。

そして、とある団地に辿り着く。住民はみんな寝静まっており、部屋の電気はほとんど点いておらず真っ暗闇に包まれていた。

「ちがう〜。このマンションじゃないよお」

「えーっ……じゃあどこに住んでるの。教えなさいよ」

「うーん、どこだっけ。あっちのほうかなあ」

（このクソガキいいいいいい！！ この俺をおちよくってんのか！？）

団地のマンションにも少女の母親はいなかった。怒りを通り越して呆れさえ覚えつつも、花形は少女が言っていた場所に連れて行ってやることにする。

今度は人気のまひとけったくない倉庫だった。こんなところに母親がいるとは到底思えない。もはや花形には怒る気力すら残っていないかった。

「あのねえ。もしかしておね……、お兄さんをからかっているの？」

ううん、と、少女が首を横に振った。真意がつかめない気まぐれな態度に、花形が眉をしかめて苛立ちを露にする。

「チツ！ 言つとくけどさ、ここに住んでるのは作業員のお兄さんとおじさんぐらいよ。それも昼だけだから。こんな夜中に来たって誰もいないよ？」

「うん、それは知ってるよー」

「ギギギ……」

イライラが爆発し怒髪天を貫きそうな段階までたまった花形を逆撫でするような一言を、少女は一切の容赦なしに浴びせた。

妖精を彷彿させる可憐な容姿の中に潜んだ鬼畜で冷酷な一面を、このとき花形はうつすらと感じ取った。もつとも、この少女がそのような悪意をはらんでいるとはまだ確定できなかったが。

「このクソガキイイイイイ！！」

顔に青筋を立て、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながらついに憤慨。怒鳴り声を上げながら少女を手にかかけようとする。

「がつ……！？」

が、その瞬間に体が独りでに宙に浮き上がり壁に叩きつけられてしまう。壁かくぼみ、そこから亀裂が入るほどの力だった。それが何度も繰り返され、花形の体はより一層ポロポロになっていく。

（これは……さ、サイコキネシス念動力？ こんなレアな能力をなんでこのメスブタちゃんが……！？）

いったい誰がこのような力を発揮したというのか？ その答えは一目瞭然だった。何を隠そうサイコキネシス念動力を操り花形を痛めつけたのは、彼の隣にいた幼い少女だったのだ。

サイコキネシス念動力とは、いわゆる超能力の一種にしてもっとも代表的なもののひとつ。強い念力で精神的にダメージを与えたり、人や物体を相手の意思とは関係なく動かしたりすることが可能だ。しかしながら、強すぎる力ゆえに使用できるものはあまり多くないと言われている。

「て、テメエ……ただのガキじゃねえな、何者だ！？」

「あれー？ もしかしてわからないの？」

幼い少女が清々しい笑顔を浮かべながら、ゆっくりと花形に近寄る。純真無垢なゆえの残酷さが、その声や口調からあふれ出ていた。

「あなたとは面識があると思ったんだけどね」

「な、何を言ってるやがる。お前みたいなガキとは会ったことなんかないぞ！」

一歩、また一歩。少女が自分に近寄れば近寄るほど、恐怖心が未曾有なまでに膨れ上がっていく。そのまま全身が恐怖心に食われて、最終的に破裂してしまいそうだ。額から流れる冷や汗と恐怖

にひきつった顔が、今の花形の心情を痛々しいくらい物語っていた。少女がまたもその左手をかざすと、糸が手首から飛び出してあつという間に花形に絡み付いた。そのままヨーヨーで遊ぶような要領で壁や地面に叩きつけ花形を痛め付けると、苦痛に悶える花形に追いつきかけようように笑顔のまま近付いていく。

「どうしたの？ もっと泣いてよ。泣いてわたしを笑顔にさせてよ」
「ば、バケモノ……！ 俺に近寄るなあああ！！」
「バケモノお？ なに言ってるのよー」

にっこりと笑いながら少女はそう答えた。嘲笑うような笑みではなく、あくまであどけない、年齢相応の笑顔。

だが、それにはおぞましいほどの冷酷さも潜んでいた。無垢な見た目に不釣り合いなほど冷静で達観したような態度もまた、腹の底が見えない不気味さを醸し出していた。

「それはあなたも同じじゃない……？ そうでしょお？ 何が違うのをお？ よくわかんないから教えてよ」
「ひゃ……ひゃめろお、来るなあ！」

端正な顔は恐怖に崩れ落ち、もはや原型を留めていない。ただでさえ上昇していた心拍数が更に上がっていく。

膨れ上がった恐怖心が体を蝕んでいく。立ち上がって逃げようとしたが、体がべったりと何かにくっついて離れない。

背筋に伝わる悪寒を辿り振り向くと、そこには大きな蜘蛛の巣があった。ちょうどヒト一人ふらいなら余裕で捕まえられる、手頃なサイズの蜘蛛の巣が。奇声を上げて花形が暴れだすが、しかしいくら暴れてももがいても、体が離れない。

「そんなに暴れちゃダメえ。お兄さんもっと苦しくなっちゃっやうよ？」

「や、やめろ、やめろ。やめろ！」

気付けばもう、少女の顔が近くにあった。少女の背中から鋭く禍々しい蜘蛛の脚が現れて、目にも留まらぬ早さで花形の肩に突き刺さる。紫の血が刺された箇所からどくどくと溢れ出す。しかもそれだけではなく、蜘蛛の脚は肩を貫通して壁にそのまま刺さっている。

「そつだ、名前まだいってなかった。せつかくだし教えてあげるね」

「あ……あつ……？」

「わたしはあなたの事を知っている。あなたもわたしの事を知っている。けれど、あなたはわたしの名前を思い出せていない。だから教えてあげる」

花形からすれば、少女が言っていることはわけがわからない。この状況で言われたらなおさら理解不能だ。ゆえに　怖いのだ。少女の存在そのものが。

「あ……？　あ……？　や、やめろ。聞きたくもない……は、離れる、離れるおおお」

「やだなあ。いつから忘れっぽくなったの？　わたしは……」

ラベンダーを彷彿させる美しい青紫の髪。覗くと思わず吸い込まれてしまいそうな緑色の瞳。そして黒いワンピース　毒々しくも美しい容姿をした少女が、嬉々とした表情で名前を言い始めた。最初の一文字を口にした瞬間、どこかで誰かが苦痛の叫びを上げた。もしかしたら誰か死んだかもしれない。

「糸居まり子いとゐ」

黒い服の少女が名前を言い終わったそのとき、あれだけ身震いしていた花形の動きが凍るように一瞬ピタツと止まった。おびえていた小悪党の体はすぐに活動を再開し声にならないうめきを上げた。

「う、ウソだありえない！ 死んだはずのやつが生き返るわけがないんだ！」

「また寝ぼけちゃって……私が『不死』だつてことも忘れたの？ それとも『全然知らない』つて言つた方がよかつたかなあ」

「や、やめろ……やめろおおおおオオオオオオオオオオオオ！！」

少女はもはや怯えることができなくなった哀れな男の首筋に、抱き付いた状態で顔を近付け 大きく噛み付いた。

花形がどんなにわめこうが、苦しもうが、ジツと抱き付いたまま離そうとしない。気持ちよくなった少女は顔を上げると、ようやく花形を苦痛から解放した。

その命も一緒に。体液を吸われ、代わりに猛毒を体内に注入された花形の肉体を毒が蝕み、毒によって枯れ果てた肉体は崩壊していく。

「うちそうさま」

花形清志はもはやそこには存在していなかった。いじめて泣かせようと思っていた相手にもてあそばれ 『養分』にされるといふ皮肉な最期を遂げたからだ。うつとりしたような妖艶な笑みを浮かべながら、少女は花形だった灰をあとにした。

EPISODE 9 1：ひとまずの別れと女王と波乱の予感

みゆきを花形から奪還し、家に帰った健は何が起こったかを話した。母と姉に心配をかけすぎない程度に。

だが正直にすべて話したわけではなく、少し捏造が入っていた。自分が戦ったのではなく、たまたま通りかかったエスパーに助けしてもらったという捏造が。

心配性な母を想つての事とはいえ、健は家族にウソをついてしまったことを悔やんでいた。そして　夜が明けた。

「行くんやね？」

「うん。そろそろバイト先の皆さんに顔見せにいかなアカンしな」

「また何かあつたら連絡ちょうだいや。京都あっちとは近いんやから、いつでも帰つておいで」

「オツケー！」

健が満面の笑みでサムズアップ。不思議なことにその場にいる全員が彼の笑顔につられて明るく笑った。

「それから白石さんも！　また健と一緒に来てくださいな」

「はい！　こちらこそ！」

「ほな、そろそろ行くわ。また今度な！」

二人とも手を振って家族に別れを告げ、自宅アパートがある京都へと戻っていった。そんな彼らを見下ろす太陽は今日も青空に浮かび、明るい光で広大な地上を照らしていた。

一方、例の暗雲立ち込める切り立った岩山にそびえ立つ古城では

。黒装束の男とその同志達がレクリエーションに興じながら花形が帰還してくるのを待っていた。彼らが楽しんでやっているのはトランプで出来るゲームの一種　ポーカーだ。
テールを囲むよう時計回りの順番で、バンダナをしたワイルドな風貌の男、包帯で顔を隠した厚着の男・辰巳、神父風の格好をした壮年の男性、そして彼らのリーダーである黒装束の男　甲斐崎が座っていた。

「そろそろ花形のヤロウ帰ってこないかなあ。ツーパー！」

「彼のおびえた顔を見るのが楽しみで仕方ありませんねえ。フルハウス！」

「よし、フラッシュだ！　しかしこんなにも暇潰しにちょうどいいモノを考案するとは、案外人間もバカにできませんなあ」

「確かに。だが、優れているのはやつらではない。あくまで我々だ……なっ、ワンペアだと!？」

花形が帰ってくるまでの間、ひたすらカードゲームに興じて盛り上がる4人。他にも定番の七並べやババ抜き、神経衰弱なども行った。そうしているとやがて、礼拝堂のドアを花形　思われる誰かが開く。

「オッ！　やっと帰ってきたか、花が……た……？」

しかしそれは、花形ではなく　身長約120cmほどで華奢な体格の幼い少女だった。その場にいる全員が衝撃を受け、啞然とした表情でその少女をみつめる。

「だ……誰だお前!?　どっから入って来た!」

「入口あいてたよ。ちゃんと閉めなきゃダメじゃない」

「ここはお前みたいなガキが来るトコじゃない。さっさと帰んな、お嬢ちゃ……ん!？」

ビビった顔を見て笑ってやろうと思っていたら違う奴が出てきたではないか。これはいったいどういうことだ？ 状況が把握できないバンダナの男は、目の前にいる少女を強引につまみ出そうとするが、体が勝手に宙に浮き上がり壁へ叩きつけられてしまう。

「い、今のはなんだ？ あの子供の体が独りでに動いた……」

「アレは……念力だ。だが、ただの念力じゃない。その中でも飛びぬけて強いチカラ……念動力!!」

「なっ……念動力!？ そんなバカな。その使用者は今ではごくわずかしか存在しないはずですよ。それを何故こんな子供が……!」

摩訶不思議な謎の力で気絶させられたバンダナの男。その謎の力を操ったのは、突然現れた幼い少女。わけのわからない状況に陥った周囲の者たちは騒然とする。

「人間の子供か？ いや、違う。感じるぞ……我々と同じ気配を、シェイドの気配を」

甲斐崎が歩いてくるのを見た包帯男と神父風の男が道を作るようにそこをどく。これで甲斐崎と謎の少女が対面できるというわけだ。礼拝堂、いや古城全体におびただしいほどの緊張感が漂い始める。

「ハッ！ その紫の髪に緑の瞳……心当たりがあるぞ。まさか……」

一見すればあどけない表情をしたごく普通の女の子。だが、その内面には無邪気ゆえの冷酷さと背筋が凍りつくほどの鬼畜さははら

んでいた。つまりただの少女ではないと、そういうことだ。

「まさかお前……『クイーン』か!？」

「フフツ。そうよ、そのまさか」

起き上がったバンダナの男、甲斐崎の近くにいる神父風の男、同じく近くにいる包帯の男、そして甲斐崎。少女以外の全員に衝撃と戦慄が走った。彼女こそが以前少しだけ話題に挙がっていた『クイーン』という女だった。

「『クイーン』!？ この子どもがですか!？ そんなはずはない。私を知る『クイーン』は大人の女性だった! 甲斐崎さん、今のはあなたの勘違いなんじゃないんですか!？」

やや納得がいかなそうな様子で辰巳が大声でまくし立てる。包帯の下に隠れているため表情は読み取れないが、少なくとも鼻息を荒くして興奮状態になっていることだけは確かだ。

「どうなんですか! なんとか言ってくださいよ!」

「静かにしろ! ……勘違いなどではない」

「え……どういうことです?」

「お前はそれしか言うことが無いのか? この子どもは確かに? クイーン? だ。姿は違えど、気配は同じ……」

騒ぎ立てる辰巳を制止した甲斐崎が語る。淡々とした語り口ではあったが、実のところ彼も内心では信じられずにいた。しかし、事実であることが発覚した以上否定することはできない。

「それより花形は……何故『クイーン』がいるのに奴はいない? 一緒ではなかったのか?」

横槍を入れるように神父風の男が疑問を抱く。それを聞いた？ク
イーン？はニタアと口元を釣り上げ小悪魔的な笑顔を浮かべる。

「花形さん？ ああ、あの人もういないわよ。私が殺しちゃっ
た」

「なに！？」

確かに私が殺したと 彼女はそう言った。さりげなく、そう、
さりげなく。悪びれる様子もなければ言うことをためらうことも無
しに、あくまでさりげなく答えた。まるで虫の手足をちぎったり、
砂場で山を作ったりして遊ぶ子どものような。

「ちようどおなかも減ってたの。いいところで会えてよかったわ」
「なんだと貴様ア……！」

恍惚を帯びた表情で少女が言う。その態度を快く思わなかった辰
巳が激しく憤り、口調や態度が紳士的なものから乱暴なものへと変
わっていく。

「この魔女め！ なんてことをしたくれたんだッ！ 適当な人間を
襲えば済んだ話だったのに、何故我らが同胞を！」

「同胞？ フフッ！」

激昂する包帯の男を見て？クイーン？こと 糸居まり子が微笑
む。バカにされたと思っ込んだ辰巳は怒号を上げるが、すぐ仲間に
取り押さえられた。

「いいじゃない、おいしかったら何でも。それに人間は食べない主
義なの。ま、血とか体液はたまに吸いに行くけどね」

「でも同じシエイドを食らうことはないでしょう……こんな間違っている！」

「……おかしいのはあなたの方でしょ？」

取り押さえられてもなお、抗議を続ける辰巳を見下ろしてまり子がそう言った。

「花形のこと、バカにしてたくせに。なんで今頃になって仲の良かった友達みたいな言い方するの？」

「うっ！」

「……ハア、疲れちゃった」

ほとほと呆れがついたようにまり子はため息をつく。少しだけ後ろを見ながら、まり子は礼拝堂の扉を向いた。もう帰ろうというのだろうか？

「今日は顔見せにきただけだから。それじゃ」

「ま、待て！ どこへ行く！」

「私の勝手よ。フフッ」

甲斐崎の制止など聞かず、まり子は礼拝堂を去っていく。彼女の姿が消える頃には、あれだけ唸っていた辰巳もようやくクールダウンしていた。少し散らかった部屋を片付けた後、何事もなかったかのように中央へ集まる。

「……いいか、お前たち。肝に銘じておけ。あの女にはヘタにケンを力をつっかけないことだ……おもちゃにされても知らないからな」

EPISODE 9 2 : たとえ火の中水の中草の中

故郷である滋賀でしつかりと羽目を外し、自宅アパートに帰った日の晩 健は、夢の中で今まで戦ってきた敵のことを回想していた。

お前のようなクズとはわけが違うんだぜ！

いつまでガードし続けるつもりかな？ それはちょっとつまらなくないのかなあ！

卑怯もクソもあるか。手段を選ばないヤツだけが生き残れるんだ！

最初に思い出したのは赤木、青山、緑川 三人ともエネルギー研究機関・センチネルズに所属していた屈強な男たちだ。

この頃の健はまだ未熟で、彼らと戦う度に苦しめられた。それでも勝つことが出来たのは、アルヴィーのお陰であることに他ならない。

これは、我ら人類の進化に貢献することにもつながる。とても有意義なことだ

だが、進化についていけないものはどうなると思う？

時代遅れだからいらぬ、一掃される

そう、その通りだ。そして私は進化を遂げた人類の支配者となる！！

センチネルズの総統 浪岡十蔵。表向きはエネルギー研究の第一人者で、日夜新エネルギー開発に心血を注いでいる優れた科学者だがその実態は己の能力を試すためだけに連続発火事件を起こし、

不破の恋人である倉田美枝をはじめ多くの罪なき人々の命を奪った冷血漢にして筋金入りの大悪党。

その真の目的は古代に封印された鉄を金に変える禁忌　錬金術を復活させ、文明を発展させると共に世界を支配することだったが、今はもういない。幾度に渡る死闘の末に、不破に倒されて死亡したからだ。

何が同じような目にあわせたくねーだあ？　もう恐怖感じてるじゃねえか、お前のお友達がなァ！！

このねずみ色の髪に黄緑の瞳と、ストリートギャング風のカジュアルな服装に身を包んだ男は三谷。健がはじめて戦った上級シェイドだ。

しつこい上に卑怯で小物くさい相手だったものの、その実力は高く上級の名に恥じぬものだった。そして何より、最大の特徴はその異常なまでのしつこさ。

少なくとも四回は戦った。しかし、こいつも既に健に引導を渡され爆死したため、もうこの世にはいない。

オレ様の美しい顔を汚しやがってエエエエ！！

このスイセンマン　もとい、スイセンのような、邪悪な道化師シヒロのような敵は花形。スイセンの上級シェイドだ。

普段はオネエ口調で軽妙に喋っていたが、その本性は下品なチンピラそのもの。みゆきをさらったことが命取りとなり、激昂した健や市村によって（おもに顔を）完膚なきまでに叩きのめされ、

「おムコにいけない！」などと悲痛な叫び声を上げながら全力で逃げ出した。実に情けない。その後彼がどうなったか、健もアルヴイーも知らない。

他にも鎌瀬という悪党とも戦ったことはあるが、健にとってそんなヤツはどうでもよかつたらしくひとかけらも思い出さなかつた。

正確には、思い出したくもないというのが正しいかもしれない。並み居る強敵たちとの戦いを回想していたはずの健だったが、気付くと彼はイメージトレーニングを行っていた。

設定はこうだ。健はアルヴィーと共に雷雲轟く荒野で、浪岡率いる悪の軍団と対峙する。その中には彼に洗脳されて寝返った市村や不破の姿があった。

ちなみに鎌瀬はいない。というかそんな奴は知らぬ。では、気を取り直して。これからちよつとヒーロー番組チックなイメージトレーニングの様子をご覧いただく。

「ハッハハハ！ 久しぶりだなあ、東條健ウ！ この数ヶ月間、どれほど貴様を憎んだことか！！」

「貴様は……浪岡！ なぜ貴様がここにいる……？」

「生き返った理由が知りたいかね？ 錬金術だよ……。こんなこともあるつかと、それを応用して死んでも一度だけなら復活できる術式を、己の肉体に施していたのだよッ！ ハーッハッハッハ！！」

生き返ったトリックを説明し、浪岡が高笑いを上げる。笑いすぎで咳き込んだような気もするが、恐らく聞き間違いだらう。これだけの人数だ、そうなってしまうのも仕方がない。

「つまりレイズか……許さん！ もう一度やっつけてやる！ 行くよアルヴィー！」

「うむ！ 今度こそトドメを刺してやるっぞ！」

アルヴィーが女性の姿から猛々しい白龍へ姿を変えると同時に、

剣と盾を構えた健が浪岡率いる悪の軍団へ勇猛果敢に突撃する。

「バカめ、貴様らに何ができる。……殺れッ!!」

「ウオオオオオ!!」

浪岡の号令と共に、赤木や青山、三谷といった悪党どもが雄叫びを上げて突撃する。だが、健は彼らを難なくいなして突き進んでいく。

「こ、こいつ……つええ!!」

「ぼ、僕たちではかなわない! 浪岡様、あとは頼みましたよ!」

「おれらは先におさらばします! うぎゃあああああ〜!!」

赤木、青山、そして三谷。三人並んできれいに爆散していく。「ええい、この役立たずどもめ!」と憤った浪岡は、次に花形をけしかける。スイセンの怪人体に変化した花形は手強く、蔓のムチで剣を絡めとられてしまう。

「あら、その程度であたくしに勝てると思いで?」

「くっ……!!」

「健、これを使い!」

苦戦する健にアルヴィーが、赤いビー玉のようなものを授ける。

それは炎のオーブだった。隙を見て柄に装填し、刀身からあふれでる炎の力で花形を焼き尽くす!

「ぐぎゃああああア! あっちいいいい! うおおおおお

お!!」

「くそッ、貴様もか! こうなれば仕方あるまい……」

花形を火葬し、残るは浪岡ひとりだけとなった。真つ赤に燃える長剣を構えながら、健は浪岡へ立ち向かう。歯ぎしりする浪岡は、腰に忍ばせていた日本刀を鞘から抜き、その鋭い切っ先を健へと突き付ける。

「私が自ら貴様を闇に葬つてやるとしよう！ 死ねエエエエ！！」
「それはこつちのセリフだ！」

剣と刀とがぶつかりあい、火花を激しく散らす。やがて浪岡が刀から炎を発し、健を切り払って吹き飛ばす。

「ファハハハハハ！ 愚か者め。炎で私に勝てるとも思っていたのか？」

「くっ……強い。どうすれば……？」

同じ炎では浪岡にはかなわない。では、どうすればいい？ 炎と相反する氷の属性なら立ち向かえるかもしれないが。

（頼む……氷のオーブよ、僕に力をくれッ）

確証はない。だが、今はやるしか他はない。健は己の可能性を信じて氷のオーブを柄に装填する。浪岡に殺された仲間 不破や市村の為にも、彼は戦わなければならなかった。

「うおおおおおッ！！」

氷のオーブを装填した瞬間、健の周囲に強力な冷気が発生し吹雪を巻き起こす。すさまじい力だ、浪岡も思わず目を丸くする。

「な、なんだこの力は！？」

「行くぞ、浪岡アアア!!」

「図に乗るな! 貴様ごときに負ける俺ではないわ!! 身の程を思い知れエ!!」

青白く輝く氷の力まといし長剣。それと対峙するは紅蓮の炎をまとった日本刀。再び両者は激しくぶつかりあい、つばぜり合いへと持ち込まれていく。

はじめは浪岡が優勢だったが、次第に状況は健にとって有利な方向へ傾いていく。やがて、浪岡の刀から炎が消えた。

「ば、バカな……我が炎を消し去っただと!？」

「これで終わりだ! うおおおおお!!」

高く跳躍し氷の剣を振り下ろし唐竹割りを繰り返す。切り裂かれた浪岡は爆発し、その場に転倒する。

「うぐ……これで勝ったと思うな……俺が死んでも悪は滅びぬ! 光ある限り闇もまたある!!」

浪岡が死に物狂いで叫ぶ。電流が体にほとばしっており、闇に溶けかけようとしていた。

「お前が私から勝ち取った平和などほんのひとときのモノでしかないのだ! 終わらぬ戦いという呪縛に囚われ続けるがいい……! グオオオオオオオ ツ!!」

雄叫びを上げながら浪岡は爆死した。大爆発のあとに残った火の中に立ちながら、健は人間の姿に戻ったアルヴィーと共に空を見上げる。

「……これですべて終わったな」

「ああ。……不破さん、市村さん、みゆき……戦いは終わったよ」

「ぼきゅはへいわをとりもどしたんだあ……ZZZ」

「おーい、健」

と、ああいう感じの夢を見ながら健は爆睡していた。先に起きていたアルヴィーは既に朝飯と洗顔をすませ、彼の布団の前に居座っていた。

「ふえ？ おはよう、アルヴィー。いま何時い？」

「朝8時だぞ。お主、急がんでいいのか？」

「何いつてんだよう。今日はまだ休みじゃないか」

眠たくて目をこする健。頭は寝癖が目立ち、ボサボサだ。まだ半分寝ているような状態ともいえる。

「あー……一応言つとくがの、今日は月曜だ。確かバイトに行く日だったはずだが」

「……ええええええええええええ！ ヤバい、遅刻しちゃうよオオオオ！！」

今日は休日ではなくバイトに行く日だった。このままでは遅刻だ、急がねば！ 大慌てで健は支度をすませ、食パンを加えてアパートを出ていった。ダッシュで京都駅へ向かう健。急ぐあまり彼は気付かないでいた。自分を物陰から見つめる、あるひとりの少女の存在に。

「不思議ねえ。あのお兄ちゃん……懐かしい感じがする」

EPISODE 9 2 : たとえ火の中水の中草の中 (後書き)

補足の為のQ&Aコーナー

Q : どうして浪岡さんはノリノリなの？

A : このサングラスのおじさんは、きつと久々にシャバの空気を吸えてご機嫌になっていたのです。たぶん。

Q : なんで緑川だけ浪岡軍団にいないの？

A : いい人になったからです。Vol. 3のラストで奈良県警に出頭しましたが、現在は釈放されてると思います。

EPISODE 93：不吉な前兆

あろうことが、寝坊して遅刻。一応「少し遅れます」と事前に連絡して無事に辿り着けたとはいえ、遅刻は良くないことである。

上司のひとりからお叱りを受け、「次からは気を付けます」と健は誓った。しかし、二度あることは三度あるのがこの世の定理。またヘマをして遅れてしまいかもしれない　と、健は内心おびえていた。

「ほえ〜。極楽、極楽〜」

それはさておき　昼休み。職場における楽しみのひとつだ。というのも昼休みは、勤務時間中で唯一何をして過ごしてもいい時間なのである。更に今日から冷房が入ったのでより一層ゆったりできるといふもの。至れり尽くせりである。

昼寝しようがゲームやケータイ電話で遊ぼうが、ネットを楽しもうが、お昼のおやつを食べようが……昼休みだけならこんなことをしても許されるのだ。それ以外でやるのは論外だが。ただ、職場によってはおやつは許されるかもしれない。

「東條くん、おひさー！」

「おお、浅田さん！　ご無沙汰してます！」

「久々だから疲れてんじゃない？　お昼ぐらいゆっくりしなよー」

陽気に振る舞う茶髪の女性　浅田のうしろには、金髪碧眼で青い服を着た女性や控えめな雰囲気を漂わせるメガネの女性もいた。ジェシーと今井だ。二人ともとくに変化はなく、元気そうだった。にんまり微笑む健の耳元に浅田が顔を寄せて、

「……ところでおみやげある？」
「わっ………忘れましったっ！」

浅田が目丸くする。うしろの二人も密かに期待していたのか、残念そうな表情を浮かべる。それなら仕方ないからまだ今度にしよう、と、健の席から去ろうとしたその時。

「ウソです！ ちゃんとありますよー」

「マジ!? 持ってきてくれたんだ！ うれしー！」

「はい、こんなこともあるつかと前日からカバンに入れてあったのですー！」

歡喜する浅田。今度こそ期待に答えるべく、健はロッカーへ直行してカバンからおみやげを取り出し、それを持ってオフィスへ戻る。

「じゃじゃーん！ おせんべい買ってきました。皆さんどうぞお食べください」

「何これ、おいしそうじゃん！ わざわざありがとねーっ！」

「ホントだ、おいしそう！ さっそく食べてもいいですか？」

「あぁっ、この形！ ゴワゴワした表面！ こういうのを食べてみたかったの〜」

その後、健から「どうぞ召し上がれ」と笑顔で言われ、お言葉に甘えて土産のせんべいを食べる。三人ともそれぞれ違った反応を示したが、一番嬉しそうなのは意外にもジェシーだった。

目をキラキラ輝かせ恍惚の表情を浮かべながら、市販のせんべい（しょうゆ味）を見つめる姿は少々ズレてはいるが、ある意味ではかわいらしい。

「……もしかして、おせんべいは初めてだったりします？」

「いえ、自立する前にちょっと高級なところから取り寄せたものは食べたことあるんですけど……こういう市販のおせんべいを食べるのははじめてだったの。本当にありがとうございます〜」

（さ、さすがは元お嬢様だ……とてもじゃないが、僕たちじゃかなわないーッ！）

（うっ！ 眩しくてなんにも見えない……）

（メガネが、メガネが割れちゃううううう）

ジェシー（ 念のため言っておくが、海外の某ホームドラマに出てくるジェシーおいたんではない）を除く一同に衝撃が走る。今では独立しているものの、もともとの彼女はとある資産家の娘。

大富豪の中でも上の上に当たる存在だ。よって粗相のないようにしなければならぬ。もつとも、ジェシー本人はそこまで気にしていないのだが、どっちにしても、健たち庶民からすれば雲の上の存在であることに変わりはない。

「キーッ！ ナゼだ、ナゼ東條サンばかりOLにモテる！ ウラヤマシイにも程があるネ！ あいつ年下のクセに生意気だゾ！ ここがアメリカだったらミィの方がモテモテなのに、ウキーッ！！」

そんな彼らのうしろで唸っている英語の先生のような雰囲気の方は、係長のケニー藤野。日本通（ただし自称）で日米を問わず城が大好きな日系人だ。

とくに大阪城とノイシュヴァンシュタイン城が好きらしいが、実は大阪城が割れて中から金ピカの大坂城が出てくると思い込んでいるらしい。

もちろんそのようなことなどないのだが、何故そう思い込んでいるのだろうか？ まったくもってバカバカしい話である。

同時刻　どこかの岩山の切り立った崖にそびえ立つ古城。機械仕掛けで半分が機械化されたその城の中で、緑青色の瞳を持った黒装束の男　甲斐崎は己の部屋でふんぞり返っていた。動植物を模したエンブレムが刻まれたカードを手にしながら。

「三谷は死に、花形は散った。次に死ぬのはどいつだろうなあ……」

彼が手にしていたカードにはイカや狼、蜘蛛や三つ首の蛇などを模したエンブレムが刻まれている。そのうちカメレオンとスイセンのカードには赤い斜線が入られ、机の上に置かれていた。

これはエンブレムに描かれた動植物に該当するものが死んだことを意味する。まず『カメレオン』の三谷ことキャモレオンはしっかりと東條健に襲いかかったが雷のオーブの力にかなわず、盛大に爆死。

『スイセン』の花形こと、ナルキッソスは戦いのあとで弱っていたところを不運にも糸居まり子に見つかり、彼女によって自分が他者にしてきたようにいたぶられた拳句彼女の『養分』となった。

畏敬の念を込めて女王クイーンと呼ばれる彼女の生け贄となれたのだから、ある意味ではきれいな死を遂げたと言えるだろう。

もつともその時の本人からすれば、たまったものではなかったかもしれないが。カードを見てひとり物思いに耽る甲斐崎だったが、部屋の扉を乱暴に叩く音が聞こえた為不機嫌そうに扉を開けに向かう。「誰だ……」と呟きながら扉を開けると、

「甲斐崎さん遅いですよ！　さつきから何度もお呼びしてるじゃないですか！」

「辰巳か……そう騒ぐな。話なら中で聞いてやるから、な？」

そこには顔を包帯でぐるぐる巻きにして、その上でコートやマントなどで過剰なまでに厚着をした男がいた。辰巳たつみと呼ばれた包帯男は、己の要求をのんだ甲斐崎に連れられて部屋の中へと入っていく。

「……で、用件は？」

「あれからあのクモ女について調べていました。あらゆる文献を読み漁りましたよ。いやあ、苦労した。ですが、東京で一番デカイ図書館にも、この城の図書室にも参考になる文献は何もなかったのです！ 一生懸命調べたのにですよ！ 徹夜でね！！」

辰巳が次々に、なかなか知りたいことを知れないことへの不満を捌け出す。表情は読み取れないが、恐らくは包帯の下で目をカッと開いて鼻息を荒くして、歯ぎしりしているのだろう。彼は冷静沈着かつ知的なようで、意外と直情的である。

「……まあ、そんなわけです……何一つ情報は得られず。せつかくあの女が持つ不死の力の秘密が明らかになるかもしれないのに……苦労が水の泡だ」

「お前はよく舌が回るな……出来ればおしゃべりは控えた方がいいぞ。それで他にはないのか？」

饒舌に　　というか、少ししゃべりすぎている辰巳に甲斐崎が苦言を呈する。これには『余計な情報が漏れるから控える』という意味と、ただ単に『うるさいから少し静かにしろ』という二つの意味が込められていた。

「申し訳ない。ですが……代わりにひとつだけ知ったことがありますよー！」

「ほう、それはなんだ？ 言ってみろ」

「ふふふ。そう慌てなさらず……」

クモ女こと糸居まり子と、彼女が持つ不死の力については何も知ることが出来なかった。だがズタズタにされた己の知的好奇心をそ

のままほつたらかしには出来ず、彼はその代わりになる何かを調べていたのだ。それは。

「あなたはもうご存知かもしれませんが……」

「いや、俺でも知らないことはたくさんある。ぜひとも聞かせてほしい」

「では、あなたもご存知ではないことを」

そこで辰巳はいったん言葉を切った。表面上は礼儀正しく振る舞っていたものの、内心では密かに企んでいたのだ。甲斐崎を出し抜いてやるう、少し驚かせてやるう　などと。

「ズバリ、『帝王の剣』です。一部ではエンペラーソードとも呼ばれてますね」

「フツ。『帝王の剣』か。世界を支配する資格を持つものだけが、手にすることを許されたという……」

鼻で笑いながら、あたかも最初から知っているような口で甲斐崎が語る。冷酷な知将のような笑みをたたえたその瞳は、鋭く冷たい刃のように輝いていた。

「ハッハッハッハ！　ご存知でしたか。これは失敬！」

「つたく、にぎやかだな。お前は……」

「余計なお世話です！」

腹が立ったか、辰巳が冷笑している甲斐崎をなじる。

「ところで気になることが……」

「またか。今度はなんだ？」

少し苛立つた態度で甲斐崎が辰巳に訊ねる。流石に辰巳の長話を延々といつまでも聞いてやれるほど、甲斐崎は人がよくなかった。口には出さなかったが早くひとりにして欲しいと、彼は辰巳に対して少しばかり不満を抱いていた。

「例の東條健たけるって青年が持っているあの剣、文献に載っていたエンペラーソードと似ていたような気がしてならないんです」

「まさか。見間違いじゃないのか？」

「だといいんですが」

そう首を傾げた直後、「では失礼しました」と言つて辰巳は甲斐崎の部屋から出ていった。彼がいなくなつてから、甲斐崎は椅子に腰かけたまま、頬杖を突いてうしろの大きな窓から景色を見つめる。見渡す限り暗雲に覆われていて、その下には岩山だけ。その岩山の下も雲で覆われていて何も見えない。なんとも味気ない光景で見ている面白くなかった。

（東條健が持つアレは恐らく帝王の剣を真似た粗悪品まがいものだ。仮に帝王の剣だったとしても、奴にそれを握る『資格』があるとは思えない）

見ている代わり映えもないつまらない景色を見ながら、甲斐崎はひとり考察する。やがて城の外で、雷を伴う激しい雨が降りだした。まるで、これから起きようとしている波乱の前兆のようだった。

EPISODE 94：ゴーカイな秘密兵器

「ただいまあゝ……もうフラフラだあ」

帰宅後、健は荷物を置いて洗面所へ向かう。彼は手洗いとうがいは毎日欠かさないのだ。

外から帰ってくると手にバイ菌がついている可能性があるし、うがいをサボると風邪をひいてしまう可能性がある。

とくにこの時期にひく危険性がある夏風邪はタチが悪く、なかなか治らないので手洗い・うがいは尚更重要になってくる。

ただ、手荒れが気になる場合は無理に石鹸で洗わず水だけでしっかり洗うといい。雑菌を殺してくれる頼もしい石鹸も、使いすぎれば肌を荒らしてしまうからだ。洗いすぎには注意されたし。

「おう、早かったの。それでどうだった？」

「間に合わなかった。お陰で部長から大目玉食らっちゃったよう」

机でぐったりとしながら健が語る。膝まで伸びた長い白髪に紅い瞳の女性　アルヴィーは、どこかパツとしない顔で彼の話聞いていた。

「はあ……。バイトってのは大変だのおゝ」

「ははッ！　まあ、そう落ち込むでない。生きていればそういつこともある」

「そ、そうだよね！　こんなしょーもない事で落ち込んでる場合じやなかった」

アルヴィーから励ましの言葉を送られ、健は奮発。思わず目を丸

くしてしまうような速さで夕飯を作り上げていく。

使用した食材は、昨日の残りである冷やごはん。これを使って何を作ったのかというと　アツアツのチャーハンだ。本人曰く、母や中華料理屋のシェフほどではないがおいしく作れる　のだそうだ。信憑性はあまりないのだが。

「おっし！　完成！」

勝ち誇った笑顔……いわゆる『ドヤ顔』で健が言う。チャーハン二人分に加えてスーパードで買った千切りキャベツや野菜ジュースを持っていき、それらを机に置く。

それから箸置きにハシを補充し、机に持っていく。あとはチャーハンを食べるための蓮華だけだ。この蓮華というのは、ラーメン屋や中華料理店などで見られるいわゆるチャイナスプーンであり、同名の花とは何も関係はない。

「おまちどおさま。今夜はチャーハンだよ！」

「おお、チャーハンか！　うまそうだの……もう食べてもいいか？」

「もちろん！　僕も食べたいよ」

「では、お言葉に甘えて……」

もう空腹を我慢できない。箸置きからハシをとってチャーハンを食べようとしたアルヴィーを、健が「ちよい待ち！」と叫んで制止する。

「な、なんだ？」

「お箸じゃ食べづらいぞー。スプーンかレンゲだったら食べやすいけど、どっちがいい？」

「うーん、と……レンゲで」

そう聞いて健が嬉しそうに笑う。何を隠そう、彼はその言葉を待っていたのだ。

金がなくて中華料理屋には滅多にいけない、だから気分だけでも思いレンゲでチャーハンを食べようと思っていた。

まあ、その気になれば食べに行けないこともないのだが、細かいことはあまり気にしなくてもいいものだ。

「いったただつきまーす!」

黄金色に輝くチャーハン。散りばめられたネギやハムが、黄金色の丘のようなそれを彩る。このチャーハンというのはハシで食べるのはもちろん、スプーンやレンゲで食べるとより食べやすくなり、よりおいしく感じるようになる。

作る際は、お米は固めるよりパラパラさせた方がいいだろう。他にもこのチャーハンは、冷やごはんを炒めて作る光景が由来してか焼き飯と呼ばれることもある。どちらにせよ美味であることに変わりはない。このままでも十分おいしいが、五目チャーハンやエビチャーハンにすればよりおいしくなるだろう。

「ふうー、食った食った……」

そして、完食。そう言って水を飲むと、「げぷ」と健がゲップをする。この行為が正しいかはともかく、おいしく食べられたことに変わりはない。

「結構ハラふくれたのう」

「でしょ? ところで……」

「なんだ、健?」

「中華料理店のシェフか、僕か! どちらのチャーハンのがおいしい?」

ドン！ と、重々しい音が聞こえた。気がした。健がアルヴィーに質問を投げ掛けると同時に、急に張り詰めた空気が漂う。

経験を積んだプロが作った味か、それとも素人なりに頑張った味か？ どちらにするかすぐには選べない、難しい質問だった。だが、アルヴィーは選んだ。どれにも当てはまらない選択肢を。

「……そうだな。どちらも作り手の心がこもっていてウマイ！」

「すばらしいッ！ さすがアルヴィーだ！ 僕たちにできないことを平然とやってのけるッ。そこにシビれる、あこがれるウ！」

こんな感じで盛り上がりながら、夕食を終えた。少し休憩したあと食器を洗い、すべて洗い終わると、健はテレビを見ながらひと休み。

先にアルヴィーを風呂に入らせ、自分はあとから入るといふ算段だ。どうせ何もせず待っておくよりは、彼女が入浴中に食器を洗ってしまった方が後々ラクになる。なにもしないよりは断然こっちのほうがイイというものだ。

「あはは、おもしろーっ。その発想はなかった！」

ちなみに彼がいま見ているのは、ありふれたお笑いバラエティー番組。しかも二時間SPだ。^{スペシャル}他に見るものはあつたが、お笑い好きの彼にとってはこれほど面白いものはない。

もう何度目かもわからないくらい、腹を抱えてゲラゲラ笑っていた。そうしているうちに、アルヴィーが風呂場から上がってきた。バスタオル一枚で、パンツははいているがブラジャーはつけていない。水気をおびた白い髪と、隠しきれない胸の谷間がなんとも色っぽかった。健が鼻の下を伸ばしてにやつき、鼻血を出すのは時間の問題だ。

「は、はうつ！　いつも思うけど……美しい！」

「胸がかの？　まあ確かにデカいし、形もきれいだが……」

「ブハツ！　ち、違うよ。他にも髪とかお肌とか……ブフツ！」

興奮を抑えられぬまま、鼻血を吹いて健が昏倒。これが日頃から真面目なそぶりを見せているが、その裏では性欲を持って余しているスケベな男の真の姿である。

別居中ならともかく、もし家族と一緒に住んでいるのなら、こういうみだらな姿を見られないように細心の注意を払うことだ。

その後、健はアルヴィーと入れ替わりで入浴。職場で流した汗を十分に洗い流し、体にたまった疲れを癒した。

「よーし……寝るぞー」

そして消灯。「神は言っている……まだクーラーを点けるべきではない」と唱える彼は窓を開けて、外からの風を体に浴びる。

その上で扇風機を部屋中に回せば涼しくなること間違いなし。扇風機も扇風機で電気を使ってしまうが、クーラーよりは少なくて済む。エネルギーの無駄遣いはやめたほうがいいのだ。気持ち良さそうに寝る二人。

だが、悲しいことに寝かせてもらえそうにはなかった。アルヴィーの頭の中を閃光が走り、目を覚ましたのだ。気配を感じ取ったのだ、怪物シェイドの気配を。

「健、シェイドだ！　早く準備せい！」

「えー！？　わ、わかった！」

飛び上がった健は慌てて準備を済ませ、アルヴィーと共にアパートを飛び出す。まだ京都に戻ってから一日も経っていない、できればゆっくりしたかった。だが、いまは緊急事態だ。ゆっくりしているヒマはない。急がねば！

シェイドが発生した場所はどこかの廃倉庫。建物はガタが来ており、いつ取り壊されてもおかしくない状態だ。

だが、こういう近寄りがない雰囲気を漂わせる場所を、シェイド達は好んで住み処にしていることが多い。何も知らずに建物に近付いてくる、うっかり者の人間を襲うにはちょうどいいからだ。

「くっそー！ キリがあらへん……何匹出てくるつもりや！」

そこでは健が来るより先に戦っている人物がいた。大型の銃を手にした青い髪の男 市村正史だ。

「市村さん！」

「おう、東條はん！ エエとこ来てくれたな！」

「シェイド反応がしたものですから、やっつけなきゃって思って…

…」

「ほづか！ エエこっちゃ！」

廃倉庫の中で大量発生し、ところ狭しと暴れまわる怪物ども。倒しても倒しても、次々にわいてくる彼らを前に市村は少しばかり憤怒を感じていた。口調がやや乱暴そうだったのは恐らくそのせいだろう。

「せやけどな、東條はん。あいにく、今日はあんたと勝負するとヒマはあらへん。先にこいつらしばいたらなあかんのや！」

「それならお手伝いしますよ！」

少し冗談もまじえた余裕のあるやりとりを交わす二人に、最下級シエイド クリーパーが体をくねらせながら襲いかかる。

だが、健はひとふりでクリーパーを霧散させる。最下級の不名誉なその名が示すように、見た目が不気味なだけで彼らクリーパーは非常に弱い。

数だけが取り柄だ。しかし、いくら弱い相手でも数が多いと簡単には対処できない。言わずもがなこの二人の猛者ソウモウにとっては烏合ウカウカの衆だんのようなものだが、果たして全滅できるだろうか。

「まとめて面倒みてやる！」

「引っ込んでれエー!!」

飛び交う光弾と斬撃。それらに撃ち抜かれ、或いは切り裂かれたものは皆闇に溶けて消えていく。戦いが始まってからしばらくし、だいぶ数を減らしたが まだまだ途絶えそうにはない。

「くそ、質より量つてか……このままじゃジリ貧だ！」

「まだぎょうさんおるやんけ……どないせいつちゅーねん!!」

質より量。一匹でダメなら大勢でかかれ という、数の暴力。

このままではラチがあかない。いったいどうすればこの逆境を切り抜けられるのだろう と悩んだ矢先、市村が何かをひらめく。

「しゃあないな……こうなったらアレを使うしかないで！」

「アレって？」

「秘密兵器に決まっつとるやないかい！ 悪いけど、時間稼ぎしていってくれや」

そう言われてその『秘密兵器』が作動するまでの間、健は時間稼ぎの為にクリーパーの群れの相手をする事に。

疲弊しきっている以上油断はできない。やれるところまで精一杯やり遂げなければ、この戦況からは抜け出せない。

うめき声を上げながらゆっくりと歩み寄り、時に四つんばいでこちにやってくる怪物どもを健は斬り伏せていく。

白龍の姿をしたパートナー……アルヴィーも青い炎を吐いたり吹雪を吐いたりして、彼を徹底的にサポートした。

「準備完了や！ あんたら、避難した方がエエよー！」

「はいっ、そうしますッ！」

「承知した！」

そして、いよいよ 市村の『秘密兵器』が動き出すッ！

地面の陰から競り出すように現れたそれは見上げるような巨体を誇り、全身がメタリックブルーに染まったイセエビのシェイドだった。もっとも頑丈な装甲に覆われ、重火器をいくつも搭載したその姿は どこからどう見てもイセエビ型の巨大メカにしか見えなかった。

へたなSF作品の機動兵器よりよっぽど迫力があつたし、何より強そうだ。特撮ヒーロー番組よろしく、乗って動かしてみたいという欲望をそそられる。

こういう巨大メカは、健や市村のようなロボ好きの特撮好きな日本男児なら一度は憧れるものだ。これでオモチャが発売されていれば、買いたくなること間違いなし。

「こいつを見てくれや。どう思う？」

「すごい……大きくて強そうです！」

「よーし、ほないつちよブツぱなしたるかアー……！」

市村がバツ宇宙でイセエビメカのしつぽへと回り込み、しつぽの付近にある差し込み口に大型の銃を差し込む。彼が引き金を引くと同時に、イセエビメカこと ブルークラスターのハサミや背中、そして額。

全身のあらゆる場所からおびただしい数のビームやミサイルが放たれ、その驚異の弾幕を前に怪物どもは逃げ惑う。

だが、必死の抵抗むなく クリーパーの群れはついに逃げ切れず、すべてにビームやミサイルが命中し大爆発を起こす。

撃ち尽くされた弾薬のシャワーの範囲は広く、シエイドの群れだけでは飽き足らず、倉庫の壁さえもきれいに吹き飛ばしていた。

「どや！ スカツとしたやろ！！」

「た、確かにこれは……スカツとしますね！」

真正面から月明かりに照らされながら、市村が勝ち誇るように笑う。ガレキが散乱する内部や、崩れた壁から見える美しい夜景を見て 健は苦笑いを浮かべた。

EPISODE 95・無垢なる魔女

「何はともあれ、これで一件落着！　かな」

「……いや、そうでもないようだぞ」

「え？　どういふことぞつか、姐あねさん？」

戦いは終わった。男二人と龍一匹の熱い夜も終わりを告げようと
していなかった。

「そうだよ。敵は殲滅したからもういないはず……」

「まだ残っているんだ。一匹だけ　それも飛びきり強くて大きい
のがな」

「ホンマや、わしのリーダーもビンビンに反応しとる！　えらいゴ
ツツイぞー！」

一匹だけ強くて大きいものが残っている　そうアルヴィーから
言われて気付いた市村が、懐からリーダーを取り出す。外見はある
漫画のあのリーダーにそっくりだ。それとの違いは対象がドラ
ポールか、シェイドかだけ。と思いきや色も違っていて、なんと青
色だ。クールで使い勝手が良さそうな印象を与える。

「……それ、ドラゴンリーダー？」

「ちやうちやうちやう！　そんな大層なもんやない。こいつはシェ
イドサーチャーや！　あのエビちゃんディールと契約したらついてきたんや。
あんたも似たようなモン持つとるんとちやうか」

市村が持っているシェイドを探知するための機械　シェイドサ
ーチャー。スイッチひとつで周りにシェイドがないかサーチし、
ほったらかしにしてもシェイド反応をキャッチすれば音で知らせて

くれる優れものだ。

それと似たようなものを持っていないかと訊ねられ、健は懐から一枚の白いウロコを取り出す。はじめてエスパーになった時、バイトに行こうとしてアルヴィーから止められた際にもらったものだ。

彼女が自分の体から無理矢理はがした為に出血したものの、すぐに傷がふさがったあの場面は今でも印象に残っている。それからお守りがわりに持ち歩いてきた健だが、今になって最近使っていないことに気がついた。

「これでつか？」

「はい。お守りがわりに持ち歩いています。自動で温度調節もしてくれるんですよ」

「エエの持つてるなあ……ま、わしのレーダーのがカッコええけどな」

自慢するように市村が豪快に笑う。少しむかつ腹が立ったか、健は不機嫌そうに頬つぺたを膨らませていた。「これはこれでカッコいいのに……」と思いながら。

市村が『秘密兵器』による爆撃で壁を吹き飛ばした倉庫から出て近くにある別の倉庫に向かう。錆び付いた扉を開いて、薄暗い倉庫の中へ入っていく。ここも恐らくは、建物の老朽化や衛生上の問題などでやむなく廃棄されたのだろう。

「あんたら気イつけなはれやー。敵さんはいつどっから襲ってきよるか、わからんからなあ」

「はい。言われなくてもそのつもりです」

「ええこつちや。それでええ」

健は長剣 エーテルセイバーを構えながら、市村は大型の銃
ブロックバスターを構えながら、それぞれ廃倉庫の内部を進んで
いく。

外からわずかに差し込む光と、炎のオーブを装填したことで炎を
まとった剣の刀身だけが頼りだ。周りの景色に溶け込むこと、つま
りカモフラージュが得意なタイプの敵や、暗闇でも問題なく視界が
確保できるタイプの敵からしてみれば、これほどまでに動きやすい
場所はない。だからこの場所は危険なのだ。

「敵かつ!?」

ガサゴソ……と、何者かが物音を立てる。音が聞こえた方角に市
村は発砲し、撃たれたものがポトリと、地面に落下した。落ちた方
向に行くとそこにいたのは、こういつた場所に良く住み着いている
小動物にして害獣。

病原菌をよそから持ち込んできているため、噛みつかれたら何ら
かの病気にかかると言われている嫌な相手 ネズミだ。あの国民
的アニメの青いタヌキもとい、猫型ロボットも嫌っている。理由は
ネズミに耳をかじられたのがトラウマになったから、だ。

「なんや、ネズミか……おどかしおって」

「今はネズミよりシエイドです。先に進みましょう!」

「せやつたな、早よお倒しにいかな!」

勘違いで殺ってしまったネズミに黙祷を捧げながら、彼らは更に
奥へ奥へと進んでいく。ちなみに先程のイセエビメカは市村が引ッ
込ませたようだ。あの巨体だ、あのまま引き連れていけば建物を必
要以上に破壊してしまっていただろう。引ッ込めたのは賢明な判断
だといえる。

やがて二人と一匹は、クモの巣がそこら中に張られた不気味な区画に足を踏み入れた。市村が持つリーダーの反応も、より一層強くなっている。例の強大なシェイドに近づいているという証拠だ。やがて彼らは道をふさぐ巨大なクモの巣を発見する。

「見てみい、でっかいクモの巣やで」

「ホントだ……でかい。このままじゃ通れそうにないぞ……」

その辺に落ちていた角材や鉄パイプで叩いてもくつつくだけ。銃からビームを撃つても弾かれる。手は尽くしたが、何をしてもダメだった。いったいどうすれば？ そんな折、健はあることを思いつく。

「待てよ……燃やせば……」

それまで松明がわりにして掲げていた炎の剣を振りかざし、行く手を阻むクモの巣を切り裂き焼き払う！ 斬られた箇所から全体に火の手が伝わり、巨大な壁のようなクモの巣はきれいに全焼した。ある種の芸術のような光景だった。

「っあー……その発想はなかったで」

「なんで気づかなかったんだろなあ。ゲームとかだと良くある方法なんですけどね」

それからも似たような光景が何回か続いたが、そのたびに炎の剣やアルヴィーの青い炎で焼き払ってきた。最初はサッパリわからなかったが、対処法がわかってしまえばこっちのものだ。

クモの巣だらけの不気味な区画を抜けると、何やら広い空間に出た。市村が持っているリーダーが、これ見よがしに発光しせわしな

く音を立てる。

「オオツ！ ……東條はん、来ましたでエ。ゴツツイ反応がすぐ近く！」

「そうみたいですな。 ……準備、いいですか？」

「もちろんや！ そーゆーあんたは？」

「僕も ……バツチリ！」

「右に同じだ。気を引き締めていこうぞ」

覚悟はできた。勇気を出して飛び出すと、そこは広い道だった。

景色から察するに、どうやら外へ出たようだ。他の倉庫やコンクリートの地面と、その近くには林が見える。

道なりに歩いていき、曲がり角に差し掛かると、突如クリーパーが飛び出してきた。身構える二人と一匹だったが、敵の様子がどこかおかしい。胸を押さえて苦しんでいるように見える。その左肩からは 紫色の血がどくとどくと溢れ出していた。

「なんやこいつ ……誰かに噛まれたんか？！」

「ウ ……ウオオオオオ」

「あぶないッ！」

銃を向ける市村に手負いのクリーパーが襲いかかる。彼を守ろうととつさに守りに入った健だったが、クリーパーが腕を振り上げた瞬間に その体は灰となって地面へ崩れ落ちた。もしかすればそのクリーパーは、助けを求めているのかもしれない。

「えっ ……？ アルヴィー、今のどうなって ……」

「ふむ ……いま死んだあやつは、体が灰になるほどの致命傷を負っていたのではないか？ それにあの噛まれた痕^{あと} あんなに弱っていたのは何者かに、血か、あるいは体液を吸われたからという可能

性があるぞ」

「……なるほど。つまり吸血鬼っぽいのにやられたってことかな」
「そうなるのう」

アルヴィーが冷静に推測する。その話を聞いて理解できたような、できないような曖昧な表情を浮かべながら角を曲がる。

途中で見かけた紫色の血痕に、心の底からゾツとするような戦慄を覚えながら。林に面した道を進んでいると、誰かが何かをかじって食べているような、生々しい音が二人と一匹の耳に飛び込んだ。

「食事中か？」と、耳を疑いながら近づいていくと、そこにいたのはシェイドの死骸をむさぼる、黒服を着た幼い少女。

その青紫の髪や色白の肌、クモの巣のような意匠がある黒服には紫色の血液がびつちりと付着していた。相手の存在に感付いたか、腕で口についた血を拭き取ると健たちの方を振り向き、

「……………誰？」

「き、君こそ誰だ。ここは危ないから早く逃げた方がいい」

何が起きるか分からない。健も市村もそれぞれ武器を構え、警戒を強める。

「逃げる？　なんで逃げなきゃダメなの？」

「なんでって……………危ないからに決まってるやろ。早よおせんと、お嬢ちゃん、わるーい怪物に食われてまうでー！」

市村が叫ぶ。こんないたいけな少女を死なせて何になるのか。きっと、まだ生き続けたいはずだ。ところが少女は避難を呼びかける健や市村を気にもとめず、その場から離れようとしな。

「そない得体の知れんもん食うてる場合とちゃう！ 早よ行き！」
「うるさいなあ」

眉をひそめ、気だるげに少女が呟く。刹那、謎の力が働き 市村の体が石のように硬くなり動かなくなってしまう。

体が石になったわけではないのに体が自由に動かせなくなってしまう、いわゆる金縛りだ。銃を落とし、直立したまま市村は苦悶する。

「か、体が……うつつ！」

「これって……金縛り？ いったい何が……」

市村を見ながら健が呟く。何が起こったか見当がつかない。ひとまず幼い少女の方に向き直すが、既にその方向には誰もいなかった。

少女の姿もシェイドの死骸も 後者は跡形もなく喰らい尽くされたか、あるいは灰になって風に吹き飛ばされたか。それより問題は黒服の少女だ。

「どこに行ったんだ……」と不安げに呟く健だったが、そのとき背後から誰かに抱き付かれた。背筋に悪寒が走ったような、安心感を感じたような ハッキリしない感覚が全身を疾走する。目を向けると健に抱きついていたのは、黒服の少女。

「驚いた？ フフツ」

「え？ あ、ああ……うん」

「あつたかい！ すごくあつたかいよ！ だけど……」

苦笑いしながら健が答える。対して少女は、一切屈託のない心の底からの笑顔を浮かべていた。一見すれば無邪気な少女のようだ。

しかし内面は 読めない。たとえどれほど感覚を研ぎ澄ませた

ものでも、彼女の考えは読みようがない。そんな少女は華奢な見た目に似合わず、しっかりと健を抱き締めている。

まるで兄か父親に甘える、無垢な幼い妹のようだ。だが、気が変わったか少女は一転して険しく冷酷な表情を浮かべる。

「……私の邪魔、しないで」

「えっ……?」

「今度邪魔したら　　殺すよ」

そう告げる少女の目付きはおっとりした印象を与えるタレ目のま。だが、目だけで相手に威圧感を与える程度の威厳と迫力を存分に発揮していた。

民衆を恐怖で支配する冷酷な女王のような冷たい視線　。だが、また気が変わったか少女はニツコリと笑い健から離れた。

「なーんてね　　剣のお兄ちゃん、バイバイ!」

嬉しそくに健へ手を振ると、少女はどこかへ去っていく。それはまさしく、過ぎ去る疾風のごとく。それと同時に市村の金縛りも解けた。

「……行っちゃった。あの子、何者なんだろう」

「どないやる。ま、かわいかったのは確かやけどな」

市村が高笑いを上げる。如何にも関西人らしいポジティブな思考だ。細かいことは気にしないタイプなのだろう。そうしてライバル同士で笑っていると、人の姿に戻ったアルヴィーがすました顔で「ただ、一応気を付けた方がいいぞ」

「……なんでや、姐あねさん?」

「あの女の子は さつきお主のレーダーにも反応していた、とてつもなく強いシェイドだからだ」

「えっ!? そんな……」

「あのコが、シェイドやつちゅうんか……?」

あの少女は大きな反応を示していたシェイドだと アルヴィーはハッキリとそう言った。健と市村、両者に衝撃が走る。発言したアルヴィー自身もやや信じがたそうな表情をしていた。

「要するに、目に見えるものだけがすべてではないということかの」

アルヴィーがいつになく、深刻そうに呟く。実はこの時、彼女はあの少女にどこか懐かしさを感じていた。その理由は 本人と例の少女だけが知っていることだろう。動揺を隠し切れない3人（正確には二人と一匹だろうか……）がとぼとぼと倉庫の外周を歩いて帰路につきだすと、突然健の携帯電話が音をたてはじめる。

「もしもし、東條ですが……」

「こんばんは、東條くん！ 元気してる?」

「白峯さんっ！ 一応元気ですよー」

彼に電話をかけてきた相手は白峯とばり。黒髪のロングヘアに金色の瞳、そして雪のように白い肌が美しい女科学者だ。技術力の高さに加え、頭が良くて料理もうまい。おまけにナイスボディな美人。

そんな優れた技術屋である彼女だが、若くして博士号をとったことを考慮しても若々しく、子どもっぽい一面も持っていた。健とは気が合うのか、彼と話しているときの彼女は妙に楽しそうである。無論健自身もそれは同じだ。

「それでご用件はなんですか？」

「そうねえ。研究したいことがあるのよね……悪いんだけど、また武器貸してもらえないかしら」

「え？ はい、わかりました。いつそこちらに行けばよろしいですか？」

「また空いてる日にでも来てちょうだい。詳しい事はその時に話すから。じゃあねー！」

そこで電話が切れた。にんまりと健が微笑む。

「な、なあ東條はん。いま話とった白峯はんってどんな人や？」

「そうですね、頭はいいし料理は上手いしおまけに美人！ だけど子供のようにかわいー一面もある素敵な人ですよ！」

「なんやてエエエエ！？」

「これこれ、二人とも取り合いはよくないぞ」

EPISODE 96：知りたいけれども知りたくない

それは先日の夜中のことである。彼はセンチネルズの本部から共に脱出して以来何かと世話になっっている女性科学者、白峯しろみねとばかりから「また武器を貸して欲しい」と頼まれていた。彼女が言うには、暇なときにまた来てほしいとのことだったが？

彼にとって暇な時間というのはなんだろうか。月曜日と水曜日はバイトに行く日で、暇どころかなり忙しい。金が配給される以上仕事も手を抜く事はできない。

だが、逆に言ってしまうえばそれ以外の日はどれも時間が空いている。バイトに行かない日はおもにアパートで過ごしたり、筋トレなどをして体を鍛えたり、のんきにおやつを食べたりしている。

そう、時間はたっぷりあったのだ。幸い今日は木曜日、バイトは昨日行った。だからとばりの下へ行っても何も問題はない。

「ふあ〜っ。良く寝た……」

彼はいつもより遅めの8時半に起床した。たっぷりと睡眠もとれてさぞや元気なことだろう。ただ、寝すぎでかえって眠たくなることもある。

現に学生時代、バスなどでうつかり寝過ぎしてしまうことも多かった。今もたまにあるのだが、昔に比べればだいぶマシになった方だ。

爽やかな朝を迎えて気持ちが良いそうな健だが、一方でその隣のふとんで寝ているアルヴィーは目が半開きでまだまだ眠たそうだ。隙あらばまた寝てしまいそんな様子だった。

「ん〜？ いま何時だ……たけるっ〜」

「8時過ぎだよ。もうちょいで9時になっちゃっ」

「そうかあ……少し、寝すぎたかの」
「いいんじゃない？ 僕も今日バイトないし」

健が笑いながら言う。湯飲みに茶を淹れ、アルヴィーに渡す。寝起きの為か、髪のあちこちがあさつての方向に向かって跳ねていた。まるで爆発に巻き込まれてチリチリになったような雰囲気だ。黒コゲのアフロヘアー、というわけではないが。

「朝ごはんと支度終わったら、とばりさん家に行くよ」

「確か剣と盾を渡すんだったか。また、面白いものを作ってもらえそうなの」

「そうだね」

朝食をすませ支度も終わると、二人はアパートを出た。どちらもよそ行きの服装だ。健は青いベストとその下に格子柄のシャツと、ベージュのズボン。靴はいつも通りのベージュだ。

アルヴィーはワイシャツに爽やかな印象を与える青いミニスカートと、同じく青いしま模様の子ハイスックスを身につけていた。ちなみにブーツは黒かった。下着は　まあ、つけていることを祈ろう。果たして下に穿いているのは細い紐のパンツか、それとも安全性のあるスパッツか？ 真相は神のみぞ知る。

「いめんくださーい！」

昼前、西大路の白峯家前にて。健がインターホンを鳴らし、とばりを呼び出す。

「あつ、東條くんはアルヴィーさん！ 来てくれたのね！」

「こんにちは」

「ご無沙汰してます」

「ウフフ。久々に見たけど、相変わらず元気そうね」

ペコリ、と少し頭を下げる。こうやって会うのも、雷のオーブを受け取りに来たとき以来だ。更にその間に滋賀に帰省していた。

その時は知り合いのみゆきも健たちに同行していたゆえ、彼女にも会えなかった。きっと寂しい思いをしていたに違いない。

それだけに今日、こうやって対面できたのが嬉しかったのだろう。大人の女性ながら とぼりは屈託のない子供のような、とても嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「ところで今日はみゆきちゃんと一緒じゃないの？」

「……あっ！ そういえば、あいつのこと忘れてた……」

うつかりしてみゆきを誘うのを忘れていた。そんな健に「おいおい」と、白峯とアルヴィーがツツこむ。

「まあ、でも……あの子最近気張って働いてるみたいだしね。無理に呼ぶ必要もないんじゃないかしら」

「そ、そうですね。かえって迷惑かけちゃいそうだし……」

「人生そんなときもあるわよ。さ、立ち話も難だから どうぞ上がって」

彼女の言葉に甘えて家へ上がり、応接室のソファークルクるぐように座り込む。相変わらずソファーというのは座り心地がいいものだ、健とアルヴィーは心の中で思った。

白峯とぼり 彼女が住んでいるこの家は研究所も兼ねているためか非常に大きく、地上二階に地下一階とその規模は健が住んでいる安い物件のアパートとは段違いだ。

更に広々とした庭までついており、もはや豪邸の域である。彼女

によれば、研究用の機材や書斎を設けるために大きな家が欲しかったのだとか。

結果として地下に発明品の実験フロアやラックを作ったり、ゆつたりとしたスペースに書斎を築くことが出来たため、この豪華なマイホームを建てて得をしたのだそうだ。

「お茶淹れたわよ。コーヒーもあるから、好きなほうを選んでね」「それじゃあ、お茶で」

「私は眠たいからコーヒーを……」

それぞれが飲みたいものを手に取り、少しだけ飲んでいく。ちなみにとぼりはまるやかなコーヒーを選び、のびのびと味わっていた。

「……さて、と。今日あなたたちを呼んだのは他でもないの。この資料を見てもらえる？」

コーヒー入りのカップをいったん置いて、とぼりが二人に何らかの資料を手渡す。表紙をめくると、そこには 何やら神々しくも禍々しい、とにかく覇気を感じさせる剣の絵図が描かれていた。

その背後には、同じく覇気のある装飾が施された盾と、昇竜が描かれていた。その体色は 金色。まばゆいほどの輝きを放つ、まがう事なき黄金色。

「……これは……？」

「あれから更にサーチをかけてみた結果がこの資料に記されているわ。かつて世界を救った戦士が使っていたとされる剣 それが今あなたの使っている剣なのは覚えてる？」

「はい」

「その剣だけど、今渡した資料に書かれたやつと どういうわけか似てたのよ」

「えっ？」

お茶を飲みながら資料を見ていた健の手が止まる。その横でアルヴィーは真摯に、資料に描かれた絵図をみつめていた。

「このなんか凄そうな剣とですか？」

「うん。なんでもそれは『帝王の剣』っていう名前で呼ばれていた
そうなの」

「帝王の……剣……」

呆気にとられた顔で健が呟く。隣にいるアルヴィーは資料に描かれたその『帝王の剣』の絵図から、何かをひしひしと感じ取っていた。

(……不思議だな。この剣も、盾も、そしてこの黄金の籠も　　まるで昔から知っているような……そんな感じがする)

自分が生まれてからもう何年生きているのか。なぜ今より何千年以上も前の記憶が無いのか、その時代には既に産み落とされていたはずなのに、なぜその時の記憶だけが抜け落ちてしているのか。彼女にはそれが分からなかった。思い出せなかった。長く生きすぎたゆえに記憶が耄碌としていたのか？ トシのせいでボケがはじまったのか？　自分でもその理由がよく分からない。ただ、彼女には確固たる決意があった。今まで生きて来た途中で抜け落ちた記憶を取り戻したいという、密かな願望が。

「……のう、とばり殿」

「なあに？」

「この絵に描かれた黄金の籠　　どこか私と似ているような気がするのだが」

「不思議よね、私もそう思ってた！ 色は違うけど、見た目はアルヴィーさんの本来の姿に似てたわ」

「ホントだ、確かに似てる！」

空を昇る黄金の龍。神々しいその姿はアルヴィーの本来の姿である白い東洋の龍のようなシェイド アルビノドラグーンとよく似ていた。

絵を見た限りでは、体や眼の色が違うだけであとはほとんどそっくりだ。ちなみにその眼というのは、吸い込まれそうなエメラルドグリーンだった。

ちなみにこの黄金龍 中国では神の化身、否、神そのものとされており、その強さは獅子や虎をも凌駕し、震え上がらせるほどだとか。

「もしやこの絵……私の失われた記憶と関係があるかもしれない」
「その可能性は大いおおにありうるわ。もしかしたら健くんけんくんの武器とも関係があるかも……」

「ゴクツ……（す、スケールがどんどんでかくなっていく……どうしてッ!? だけど……知っておかなきゃ損する気もする）」

もしかしたら自分たちは、触れてはならないものに手を出してしまったのではないかと 健は不安になっていた。

だが、アルヴィーの記憶を何とかして取り戻してやりたいのも事実。それに帝王の剣と今使っている剣 エーテルセイバーの関係についても知りたい。悩んだ末に、健がくださった決断はひとつ。

「とぼりさんッ」

彼はソファアールから立ち上がり、とぼりに頭を下げた。誰かにものを頼み込む合図だ。更に彼は、アルヴィーから剣と盾を受け取って

それをとばりに差し出す。

「ひよっとすれば僕たちは、パンドラの箱みたいに触ってはいけな
いものに触ろうとしているのかもしれない。無事じゃすまないよう
な事をしようとしているのかもしれない。それでも、知りたいこ
とがあるんです。お願いしますっ！」

「東條くん……」

感じた。彼女は健から感じ取っていた。胸にこみ上げてくる
思いと、絶対に曲がらない強い意志を。ときにお人好しと揶揄され
るほどのやさしさと、まっすぐな熱意を。

「……わかりました。あなたのその武器を、責任を持って今一度お
預かりします！」

「ありがとうございますっ！ それでお時間はどのくらい……」

「そうね……3日くらい待ってもらえないかしら？ 私もできるだ
け詳しく調べてみるから」

「わかりました！ 気長にお待ちしております」

「これにて交渉成立ね！」

とばり、健、そしてアルヴィー……その場にいる全員に明るい空
気が戻る。条件は整った、交渉も成立した。あとは気長に待つだけ
だ。

何事も 急いではことを仕損じる。こういつときこそ『急がば
回れ』だ。急いでいる時ほど冷静になって、近道をせずにあえて遠
回りをすると言う、そういった意味のことわざだ。

「さて、お茶しましょ」

「ハイ！ よろこんで！」

「コーヒーおかわり！ 今度は砂糖なしで頼む」

その頃、（いい加減書くのも億劫になってきたが）例の雷雲轟く岩山にそびえ立つ古城では。薄暗い部屋の中で誰かがコンピュータをいじくって調べ物をしていた。包帯を巻き異常なまでの厚着をした男　辰巳だ。

「違う、これじゃない。これでもない……いったいどこにあるというのだ？　あ、でも……保存しとこ」

彼は驚くべきで速さでキーボードを打ちながら、何かを探しているようだ。だが、彼が求めるものは見つからない。ただ、「見つからない」と嘆く一方で、情報を検索する過程で見つけた画像（おもにグラビア雑誌）を保存するようなことはしているようだ。

「ふっ、こうして見てみると人間の女というものもなかなか……いやいや、今はそれどころじゃない！　なんとしてでも見つけ出さなければ……」

性欲をもてあまし、エッチな画像に見とれつつも検索に没頭する辰巳。そんな彼の背後に、ひとつの影が忍び寄る

「おい、辰巳。こんなところで何をしている」

「！？　か、甲斐崎さん……ッ」

「てつきりナイショでオンラインゲームでもやっているのかと思っただが、どうやら見当違いだったらしい」

甲斐崎と呼ばれた、その黒装束の男性は狼狽する辰巳の頭をどけてモニターを覗き込む。辰巳が個人的に保存した画像を見て、「フン、いい趣味をしているな」

「……だが、好色も度が過ぎると危険だ。ほどほどにしておくんだな」

「うっ……ですが」

「それに知りたいことがあるならここで調べる必要はないぞ？ 俺に聞けば大抵の事はわかるから、な」

「は、はいっ！」

楽しみを邪魔されたことに不満を抱きながら、辰巳は甲斐崎のあとをついて、いつも集合して会議を開いている礼拝堂 ではなく、玉座の間へと向かう。玉座の手前で辰巳は膝を突き、甲斐崎は支配者だけが座ることを許される王の椅子に座る。

「ふう……ここが一番落ち着くな」

玉座にふんぞり返り、一息吐くと、「聞きたいことがあるんだっただな？ ひとつだけ聞いてやろう」と辰巳に告げる。

「それでは 伝承に載っていた黄金龍について教えてください！」

「黄金龍か……そんなことまで調べていたとはな。侮れんヤツ……」
「伝承の龍と、あの白龍アルビントラゲンはなにか関係あるんですか！？」

辰巳が大声でまくし立てる。知識欲が強い彼は、一度知りたいと思っただけはどうしても知らなければ気がすまない一面も持っていた。一度狙った獲物にいつまでも執着する蛇のごとく。

「教えてやろう。あの女と黄金龍の関係は……」

いったん言葉を区切る甲斐崎。その間は長く、顔に巻いた包帯の

下で辰巳は待ちくたびれて眉をしかめていた。気が短いものは長くは待てない。

最初は我慢できても、そのうち苛立つて待ちきれなくなる。辰巳はその気が短いものであるため、待つのは極めて苦手だった。彼の中で焦燥と苛立ちがだんだん募り始めていく。

「……俺も知りたい！」

ところがあれだけ待たされたにも関わらず 甲斐崎は辰巳に彼が知りたがっていた『黄金龍』と白龍の関係について教えるどころか、適当にはぐらかした。

単なる嫌がらせか、それとも焦らしていくつもりなのか？ どちらにしても期待はずれな返答をされて、辰巳が憤慨することに変わりはない。

「ふざけないでください！ ホントは知っているくせに！ ごまかしても無駄ですよ！？」

「いや、本当だ。俺もまだまだ勉強が足りなくな……」「ならいいです。帰らせてもらおう！」

しらばっくれる甲斐崎に憤る辰巳。いたたまれなくなった彼は口汚く吐き捨てる、玉座をあとにしてどこかへと去っていく。

「ま、本当は知っていたんだがな」

甲斐崎が冷たい笑みを浮かべる。本人もそう述べているように本当は知っていたのだが、あえて辰巳には教えなかった。

何度も焦らされた末にようやく事を知ったときの達成感を彼に味わわせるためだ。彼が短気で我慢強い性格なのはもちろん把握した上でそうしている。

まるで明智光秀にあえてつらく当たり、傍若無人に振る舞っていた織田信長のようだ。そのうち本能寺の変でも起こされて首を討ち取られるかもしれない。

「……本当にいいんですか？ 何も教えなくて」

辰巳が去ってからすぐ、玉座の後ろから声が聞こえた。それは若い男性のものだったが、声の主は姿を見せなかった。というのも、物陰に潜んでいて姿が見えなかったからだ。

「フツ。お前だって推理小説や映画の結末をいきなりネタばらしされたら嫌だろう？」

甲斐崎が玉座のうしろに視線を向ける。

「ネタバレ……ですか？ 確かにあまりいい気分には……」

「それと同じことだ」

語りかけるときの口調から、声の主と甲斐崎は親しい仲か、或いは上司と忠実な部下の関係と思われる。現に声の主は面従腹背な辰巳とは違い、従順で誠実な雰囲気を漂わせていた。

「しかし、辰巳さんがご執心なさっている『クイーン』……あの美しい姿をもう一度拝見したいものだ」

「確かに、早く見てみたいものだな」

「私は美人には目がありませんからね。この前からずっとウズウズしてて待ちきれないんですよ。では、失礼しました」

甲斐崎と話していた若い男性が去っていく。一人きりになった甲斐崎は、うっとりするようにため息をついて天井を見上げた。

「『クイーン』も、黄金龍も、帝王の剣も」

独り言を呟きだしたかと思えば、彼はグッ！と右手を握りしめる。まるで世界をつかみとるかのよう。

「すべて俺の手中に納める！そして俺は世界の支配者となるッ！……」

そして宣戦布告をしかけ、蜂起したかのように甲斐崎は雄叫びを上げた。

EPISODE 96：知りたいけれども知りたくない（後書き）

97が短かったなあ…と思い、EPISODE 96と97を合体させて投稿しなおしました。

誠に申し訳ございませんでした。

EPISODE 97：まさかのアイツと黒服の男たち

「お邪魔しましたー！」

「どういたしまして！　また3日後ねー」

とばりに別れのあいさつをすると、健とアルヴィーはとばりの家をあとにした。彼らとはばりに長剣　エーテルセイバーと、龍頭を模した盾・ヘッダーシールドを託し、ある約束を彼女と交わしていた。

この武具と伝承に載っていた天を昇る黄金の龍、そして世界を支配する資格があるものだけが持つことを許されるという『帝王の剣』とばりに武器を3日間預けて、それらについて調べてもらうのだ。

もう半年近く戦ってきた健だが、未だに自分の武器については分からない点が多かった。もともと所持していたアルヴィーにさえもわからないことがあったのだ。なにせ、剣も盾も何千年以上も前に作られた古代の遺物。

それを所持していたアルヴィーには、その武具が使われていた時代の記憶がない。長い年月を生きてきた中で、どういうわけかそのときの記憶だけが抜け落ちているのだという。そこで協力を申し出たのがとばりだ。

彼女もひとりの研究者として、そして困っている二人のために伝承の時代について調べてみようと考えていた。彼女の好意をしかと受け取った二人はそれを承諾。そして今に至る　、というわけだ。

「あ、暑い……」

「ホント暑い……」

二人は今、自宅アパートへの帰路についていた。歩けばいい運動になるが、今は夏。とてつもなく暑い季節だ。

日の光を浴びるのはいいことではあるが、あまりに気温が高いために少し歩くだけで汗が身体中から流れ出る。家に着く頃には汗びっしょりだったということは珍しくもななんともない。

「うう。このままだと服を脱いでしまいそうだ……」

「え？ なんだって？」

ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべながら健が言う。アルヴィーが暑いから服を脱ぎそうだというものだから、真面目だが実は好色な彼はついいけない妄想をしてしまったのだ。

現に彼の脳裏には、服を脱いであられもない姿になったアルヴィーが浮かび上がっていた。まったくもって度しがたい男である。

「い、いや。あまりに暑くて焼けそうだ」

「まーまー、そう言わずに」

「やめんか恥ずかしいッ！」

「ぐえええええ！！」

彼女の豊満な胸を揉んでやろうと近づくと健に制裁がくだされた。

その鉄拳は顔面へめりこみ、見事にノックアウトされた健はその場に倒れ込んだ。どうやら効果は抜群だったらしい……。

「まったく、お主は度しがたいな……」

「ず、ずびばせんでじた……びくびく」

このとき、アルヴィーは羞恥心から顔を赤くしていた。その抜群なプロポーシオンは、人前では晒せないのだろう。案外恥ずかしがり屋なのだろうか？ 健とふたりきりならばそうでもなさそうでは

あるが。

「しっかし、暑いのに……どこも日焼けサロンみたいだ」

「日焼けしたアルヴィーもきつと美人だと思っよ」

「そうかー？ そう言われるとちよつと嬉しいの」

夏場は陽射しが強い。外出するときも家にいるときも半袖を着ることが多くなってくる。故に肌が日光に晒されやすく、自然と焼けて小麦色になっていく。

肌が小麦色になるまで日焼けした男子や女子はいつもよりかっこよく、または美しく見えるため、夏場は彼らの独壇場だ。

ただし、すべての男子や女子がモテるわけではない。所謂イケメンや美女だけがモテるのだ。世の中残酷なものである。

「それよりアイス食べない？」

「アイスか！ 賛成だ！」

「今ならバリバリ君がウマイよ」

「え？ 私はーゲンダッツがいいんだが」

「それは高いからダメだよ……」

「じゃあ、サーイワンは？」

「あれは毎日食べるもんじゃないよ！ たまに食べるぐらいがちよつどいいんだ」

「レイーーデンは？」

「……えーと……あれは、一人占めしたら高カロリーだし、多分ごはんいらなくなるよ」

そこは路上のど真ん中　アイスキャンディー、またはアイスクリームについて二人が熱い議論を交わしていた。

しばし言い争った結果、安価でおいしい『バリバリ君』を食べる

ことに決まり二人は近くのコンビニへ直行。ソーダ味とレモンスカツシュ味をとってすぐレジへと急ぐ。

「120円になりまーす」

「はい」

ニツコリと微笑む店員に商品を手渡すと値段を告げられた。この店員は長身の若い男性で、髪の毛は緑色。長いので後ろで髪を束ねていた。

一見優男だが、その赤い瞳からは力強い視線を感じ取れる。彼が浮かべている笑顔は営業スマイルか、それとも心からのスマイルか。真相は神の味噌汁 いや、神のみぞ知る。

「ん？ お客さん……お二人ともどこかで見ることがあるよーな、ないよーな……」

「え？ どういうことですか？」

「いや、待てよ……あなたたち、よく見たら……」

戸惑う健とアルヴィー。緑髪の男性店員は、彼らの顔を懸命に覗きこむと、急に何かを思い出したかのように赤い瞳をカツと開く。

「あーっ！」

そして二人を指差し、「あなた、東條健たけるとこの前の白い髪のネエさんだなー！」

「そういうあんたは……センチネルズの緑川みどりかわ！？」

「お主、たしか奈良県警に出頭したんではなかったのか！？」

驚くのも無理はない。何を隠そう彼は、かつてエネルギー研究機

関・センチネルズの代表取締役　浪岡に仕えていた副官の緑川和みどりかわか人ずとだったからだ。

彼は浪岡の右腕として、組織に反抗するものや裏切ろうとしたものを達を闇に葬ってきた。背筋がゾツと冷酷な男だったのだが、浪岡との最終決戦の際にアルヴィーに敗れた。

その後改心し、奈良県警に出頭してセンチネルズが裏でしてきたことを洗いざらいすべて供述した。今は刑務所に服役しているはずなのだが　そんな彼が何故、こうやってコンビニで働いているのだろうか？

「あんたは今警察のお世話になってるはずだ！　それがなんで……」

「……釈放されたんだ」

「そうかお主、釈放されたのか……って」

「え〜〜〜っ!？」

なんと緑川は釈放されていた。二人ともそろって大声を上げ、驚愕する。

「しーっ、声がでかいぞ！」

「いったいどういうことだ!？　あれだけ悪いことしてたのに！」

とくに健は激しく動揺していた。彼を落ち着かせると、緑川は

「それは外で話す。店長！　しばらく空けます！」

店長（未だに童貞）にカウンターを任せ、二人を連れてコンビニを出た。ちなみに代金はちゃんともらっている。

先程買った『バリバリ君』を食べながら、健とアルヴィーは緑川の話聞いていた。なぜ彼がセンチネルズに入ったのか、なぜ釈放されたのか。彼はすべてを快く打ち明けた。

どうやら彼はもともと真面目な人間だったらしいが、大学を出て社会に出てからというものの、自分は何をすべきかわからなくなっていたのだという。

路頭に迷い、ヤケになっていた彼は偶然浪岡が人を焼き殺している場面に出くわし、浪岡が自分に視線を向けたときは殺されるかと思っただろう。だが、彼は緑川を殺そうとするどころかやさしい言葉を投げ掛けた。

「お前、いい目をしているな……私の右腕になれ。共に理想郷を築こう！」

「はいっ！」

彼は浪岡からカリスマ性を感じ取り、喜んでついていった。それからどうしたかは健やアルヴィーが知る通りである。

話の途中で、緑川は「いま思えばとても褒められるような仕事じゃなかったな」と後悔するように洩らしていた。

「そういえば……あんた、センチネルズにいたときの白峯さんとはどういう関係だったんだ？」

「ん……白峯さんとはあまり顔をあわせてなかったぞ。というか、相手の方から俺を避けてた。そうやって当然なことをしちまったからなあ……」

健の素朴な疑問に答えてからも、彼は話を続けた。はじめは心から喜んで浪岡に仕えていたが、次第に彼を恐れるようになっていったことや、彼のもとで殺し屋シッターのような仕事をするのがだんだん辛くなってきたことも話し、そのうち話題は出頭してから釈放されるま

でのことにシフトしていった。

「刑期が終わるまでずっとムシヨで臭いメシを食うつもりだった。死にたいって思いたくなるくらい後悔もしてた……」

「そこで釈放の知らせが……」

「ああ。そんなところだ」

「なんで釈放されたのか、今でも不思議に思う」と彼は続けた。それから彼は社会復帰を望んで、アルバイトをしながら各地を転々としたのだそう。そして現在に至るのだという。長話を終えたところで、緑川はふと左腕の腕時計を見つめる。

「やっべ！ もうこんな時間だ。店長に怒られる！」

「えっ！？ じゃあ僕たち、そろそろ……」

「じゃ、じゃあ、お二人さん……お達者で！」

超高速で緑川は店内へ戻る。すぐに店長らしき中年オヤジが怒鳴る声と緑川が必死に謝る声が聞こえてきた。真面目に働いている様子が見えて何よりである。

彼が社会に復帰できることを祈りながら、アイスの棒をゴミ箱に捨てた二人はコンビニをあとにした。

それから帰路についた健とアルヴィーは、アパートへ帰るために駅を目指した。いまは昼時、いちばん暑い時間帯である。

だが、そろそろ夕方も近づいている。できるだけ早めに帰ろうと思つた矢先、二人の前に黒いスーツの男たちが現れた。思わず避けたいくなるような、おびたらしい数だ。

「……ど、どちら様でいらっしやいますか？ もしかしてMIBのメン・イン・ブラック

方ですか？ 僕たちエイリアンじゃないですよー」

「……健、どうやら冗談を言っている場合じゃなさそうぞ」

「エッ……？」

「こいつらから邪悪な気配がする……しかも私たちを殺る気だ」

アルヴィーが緊迫した様子で健へ語りかける。彼女が指差した方向を見てみると 黒スーツの集団は拳をバキバキと鳴らしていた。その中でも身なりが立派なリーダー格らしき男が、二人に詰め寄る。男は黒人で、スキンヘッドに鋭い眼光と屈強な肉体が威圧感を放っていた。要するにこいつは、見た目が怖い黒人のハゲのオツサ。恐らくブラジルかアフリカ系だろう。

「我々はさるお方の命令で動いている……悪いが、おとなしくしてもらおうぞ」

「へえ、おサルさんの命令で動いてるんですね。面白っ！」

「違うわい！ そーゆー意味じゃない！」

この状況でポケた健に動揺したか、即座にリーダーらしき男がツツこむ。クスクス笑いながらアルヴィーが、「ではどういう意味だ？ 私たちはあまり利口でなくての〜」と挑発。

「『さるお方』というのはだな、誰かの名前を言いたくないときに使う言葉だ。そんなことも知らんのか！ さては貴様ら、国語1だな？ 違うか！？」

「うっそー ホントはどーゆー意味か知ってました」

実は言葉の意味を知っていた健がさういうと同時に、黒スーツの男たちがずっこけた。だがすぐに立ち上がり体勢を整える。

「気を取り直して……お主ら、誰の命令で動いておる？」

「お前らが知る必要はない……」

嘲笑うように呟きながらリーダーらしき男は健を掴みあげ 頭突きをお見舞いして突き飛ばす。信じられないほどの激痛が健を襲った。

「いきなり何するんだ……このっ！」

健が立ち上がり、リーダーらしき男に殴りかかる。だがあっけなく受け止められ、健は啞然とする。

「ほう、俺に素手で挑むつもりか？ 面白い！」

拳を離して飛び退くと、男は少し気合いを入れてその正体を露にする。鎧のようにゴツゴツして堅そうな体をもった、サイのような姿だ。体格もかなり大きく、とくに自慢の角で突かれたり体当たりでもされたりしたらただではすまなそうさだ。

「俺に勝てたら教えてやろう。行くぞ、小僧！」

周りは黒いスーツの男たちに囲まれたまま。しかも健は素手だ。アルヴィーの助けがあるとはいえ、少々不利な戦いになるだろう。

さあ、戦いだ！

EPISODE 98：サイ大の危機

黒いスーツの男たちのリーダーらしき男が変身したサイのシェイドが、両手の拳を打ち鳴らし挑発する。健も負けじと拳を構え、迎え撃つ準備をする。

「格の違いを教えてやる！」

のっし、のっしとサイ男がその重たい足を上げてゆっくりと歩み寄る。その途中で助走をつけサイ男は健めがけて突進する。あまりに突然の出来事だった。

それに油断していてかわしきれず その大きなツノで突き飛ばされてしまう。心臓を突き破られそうなほどの勢いだった。それほど威力が高かった 次に攻撃を受けたらやられてしまうかもしれない。

「健、大丈夫か!？」

「なんとか……このくらい何ともないよ」

心配するアルヴィーにそう答えて起き上がり、再びサイ男に立ち向かう。対するサイ男は仁王立ちしてすっかり余裕綽々だ。強者の余裕というやつだろうか。

「大した自信だな。だが、実力はそうでもないようだ」
「どうだか……！」

サイ男がその筋骨たくましい豪腕で殴りかかる。骨を、いや鋼鉄を凹ませ、或いはそのままブチ破りそうなパワーだった。この驚くほどの怪力はまさに見た目通り このいつの実力は本物だ。三谷や

花形とはわけが違う。

「うおおおおおお！」

よほど己の強さに自信があるのか、サイ男はみずから動こうとしない。むしろこちらの攻撃を待っているようにも見えた。チャンスとばかりに助走をつけ、サイ男めがけて殴り込む。だが、効かない。何発殴ってもまるで効いていない。

何故なら奴の体は鋼のように分厚く頑丈で硬い皮膚と、鍛え上げられたムキムキのこれまた鋼のように硬い筋肉に守られていたからだ。対して健はひよろひよろで、パンチもただのパンチでしかない。サイ男に全然効かないのも合点がいくというものだ。

「蚊でも止まったかア？」

「なに！？」

「パンチってというのは……こうするんだ」

余裕を崩さないサイ男が左手を握りしめて腰を深く落とす。そこからまっすぐに……健の腹にフックをかけて吹き飛ばした。

血ヘッドを吐き苦悶する健に休む暇も与えず、サイ男　アーマーライノスは一気に畳み掛けようと仰向けに倒れた健に飛び乗って踏みつけた。それだけでは飽き足らず、アーマーライノスは立て続けに健を何度も殴り付ける。

「っグハア！　うつぐあああああー！！」

馬乗りの姿勢から繰り出される豪腕による力任せの連続攻撃が、絶え間なく押し寄せる。殴られるたびに血しぶきが上がり、健は苦痛の叫び声を上げていた。このままでは首がねじきれて血だまりができるだろう。

「健ッ！」

彼を放っておけなくなったアルヴィーが飛び出して加勢に入ろうとする。だが、周りを囲って壁を作っていた黒いスーツの連中が行く手を阻む。そのうちの二人がアルヴィーの腕をつかんだ。

「離せえ！ ふんっ！！！」

だがすぐに彼らは塵と化した。そもそもアルヴィーはシェイドの中でも屈指の強さを誇る、アルビノドラグーンが人化した姿だ。

そんな彼女に戦いを挑むのは、徒党を組んでいるとはいえ自殺行為に等しい。事実、取り押さえようと襲いかかった者たちはみな霧散した。

「今さら駆けつけても手遅れだ。こいつは直まに死ぬ！」

サイ男が手を止めて姿勢も変えてアルヴィーに話しかけたかと思いきや、すぐに強力な一撃を健の腹にお見舞いする。更に無理矢理健の体を起こし、自慢の角で頭突きを浴びせた。おびただしく血が飛び散り、地面や壁、アルヴィーやサイ男に付着する。

「ハッ！ 手応えのないやつだ。三谷や花形を倒せたのは、お前の力ではなく武器のお陰だったということか」

「くっつ！ ……はあ、はあ………」

傷つき、ボロボロになりながら、相手になじられながらも 健はなお立ち上がる。周りを見渡し近くに落ちていた木の棒を拾い上げると それを武器にしてアーマーライノスへ先端を向けた。

「ほづ、まだやる気か？」

「……武器がなくなたって、お前なんか……」

一歩前に踏み出し、助走をつけて棒を振りかぶる。かわされても振る。

「お前なんかには負けないッ！」

「くっ、あきらめの悪いヤツめ！」

やがて隙を突き、ついに命中。ポキッと折れてしまったがあともう一発はいけそうである。相手にも少しは効いたらしく、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべていた。

「貴様ア！ 大人しくやられていけばよかったものを！」

「悪いけど……僕たち、しつこいんだよね」

「まだ殴られ足りないらしいな……」

相手のパワーは絶大。しかし、その反面動きは遅めだ。硬い皮膚に守られていないであろう脇や首筋を狙い、健は折れた木の棒を振る。

だが、悲しいかな、威力は雀の涙ほどしかない。そして頼みの綱であった木の棒は、とうとう使えなくなってしまった。

「どりゃあああー！」

「ぐはああああッ」

抵抗むなしくみぞおちに右ストレートを受けてしまい 健は地面に倒れ込んだ。体はボロボロで血まみれだ。骨はきしんでいる。もはや戦うどころか、鼻くそをほじる力も残っていないかった。

「しぶとい奴だ。貴様にはずいぶん手こずらされたが、あがいたところで結果は変わらない」
「くっ……うっうっ」

首を持ち上げた健が歯ぎしりしながら前を見ると、そこにあつたのは拳をバキバキ鳴らして待つているアーマーライノスの姿。後方には健を心配しているアルヴィーがいた。その周りには、叩きのめされた黒いスーツの男たちもいた。のびている理由は彼女にポコポコにされたからだ。もはや言うまでもない。

「死ぬがいいイイイイ!!」
「た、健……? 健うっうっ!!」

アルヴィーが絶叫する声が聞こえる。もはやここまでか。両腕で体を守ろうと身構えたが、防御しきれそうにはない。だが、そのとき……

「な、なんだ!？」

生き残っていた黒いスーツの男たちが空中を浮遊したかと思えば、鋭い爪のような突起が生えた蜘蛛の脚のようなものが瞬く間に突き刺さり、次々と黒いスーツの男たちを消滅させていった。突然の奇襲をまぬがれた者にも容赦なくそれは襲いかかり、紫の血しぶきを上げながら消滅した。

「う……ウアアアアア!」

最後の一人が恐怖のあまり逃げ出そうとする。だが、背後から右胸を貫かれ、致命傷を負った彼は灰になって絶命した。

「貴様は……！」

サイ男は今起きたことが信じられなような表情を、健とアルヴィーは安堵と恐怖が入り交じったような複雑な表情をそれぞれ浮かべていた。突如として現れた乱入者は左手に付着した血をなめとり、妖しげに微笑んでいた。瞳を淡い紫色に光らせながら。

「フフツ」

小柄で華奢な体格の乱入者は、青紫の癖毛に緑色の瞳で蜘蛛の巣の意匠がある黒いワンピースを着ていた。9歳〜11歳ぐらいの小さな女の子だった。

だが、しかし 彼女は周囲がおびえるほどの凄まじいオーラを放っていた。風格があった。まるで大国の姫君、いや、冷酷な氷の女王のようだ。

背中から生えた蜘蛛の脚や両手から滴り落ちる紫の血が、より一層底知れない不気味さを引き立てていた。

「……最高ね。恐怖におののき逃げ惑うミジメな愚か者の味は」
「何様のつもりだ、『クイーン』……ッ」

「見たらわかるでしょ？ わたしが何をしたいのかは」

険しい表情でアーマーライノスが少女を見つめる。健をいじめ倒していたときとは違い、余裕がなくなったような口調だった。対して少女は微笑んでおり、余裕をまったく崩していない。

その気になれば今ここにいる全員を皆殺しにできるほどの余力を残している。彼女からしてみれば、怪力無双のサイ男など足元にも及ばない。

赤子の手を捻るがごとく簡単に倒せてしまう。あとの二人も時間はかかるが簡単に倒せる。つまり彼女が負ける要素はひとつもない

ということだ。冷静で達観した大人のような口調が不気味で印象的だった。

「ふざけるな……ッ！」

「あはは！ 別にふざけてなんかいないわよ？」

「こ、小娘があー！」

激昂しアーマーライノスが掴みかかろうとする。だが、『クイーン』と呼ばれた少女が目を光らせ紫色のオーラを発すると同時にピタリと動きが止まった。

「小娘？ ふふふ……わたしのことをそう言っているのはこの世に五人とこないわ。あなたがはじめてかもねえ」

「あ……がが……！？」

「こんなところで死にたくないでしょ？ さっさと帰りなさいよ、ゴミ野郎」

金縛りにされたサイ男がうめき声を上げる。哀れに思ったか、少女はその力を使って痛み付けることをやめた。続けて何を思ったか、次に自分の標的となるであろう健とアルヴィーをかばうように左腕を広げた。獲物に手を出すなということか？ どちらにせよここは危険だと判断したサイ男 アーマーライノスは、

「命拾いしたな、小僧。次は武器を装備して来ることだ……」

捨て台詞を吐いて建物の隙間に飛び込み、退却した。

「……ありがとう、助かったよ。ところで君、この前の……」

左胸を押さえながら、目の前に佇む少女に礼を告げる。微笑みながら少女は血まみれの健に振り向き 唐突に抱きついた。戸惑う健とアルヴィーのそばで、少女はにんまり笑った。

「あーん お兄ちゃん、やっぱりあたたかい。一緒にいてもいい？」

「け、ケガ治ってからまた相談しようよ……いつ会えるか分からないけど」

「えーっ！ まあいつか……」

少しショックを受けた様子で少女は健から離れる。その際についた彼の赤い血をなめとって、「おいしい……」と呟いた。

「……いま、おいしいって……？」

「うん。でも、ちょっと後ろめたいっていうかなんていうか……よくわかんないや」

彼女は人を襲っているわけではないのか？ 疑問に思う二人に少女は「それじゃ、またね」と呟き、帰ろうとしてとぼとぼ歩き出した。だが、途中で立ち止まって振り返る。

「どうしたんだい？」

「まだ名前聞いてなかった。お兄ちゃんもお姉ちゃんも、なんていうの？」

「ぼ、僕は東條健たけっていうんだ。アルバイトやってるよ」

「私は……まあ、アルヴィーって呼んでくれ」

名前を訊かれ、少女にそれぞれの名前を告げる。しっかり聞いていた少女は、満面の笑みでこう答えた。

「わたしはねー、糸居まり子っていうの」

旋律が走った。宇宙で小惑星が弾け飛び、銀河の彼方で超新星爆発が起き、惑星がひとつ滅びたような　そんな不条理でわけのわからない衝撃が二人に走った。

健もアルヴィーも冷や汗をかきながら少女に視線を向けていたが、少女　まり子にはなぜ二人が驚いているのか見当もつかない。彼女自身はいたって普通に名乗っただけなのだが　。

「……あれ、どうしたの？」

「い、いや……一瞬まり子ちゃんからスゴいオーラみたいなのが飛んできたような気がするんだ」

「わ、私もだ。ひっくり返りそうなくらいビックリしたぞ」

「ふっしぎ。わたしの名前聞いてビックリする人いるのねえ」

苦笑する健とアルヴィー。まり子の本心からの笑顔とは違う、ぎこちないスマイルだった。

「それじゃあねー」

「またどこかで会おうぞー」

「またね、まり子ちゃん！」

用も済んだので、まり子は今度こそ帰っていった。二人が見送る姿に優しさやぬくもり、そして懐かしさを感じながら。

「……あの人、もしかして明雄さんの子供かな？　だとしたらいいパートナーにめぐり会えたわね、シロちゃん」

「……しかし、もっと早く気付くべきだったのう」

「えっ？」

「あの糸居まり子という女の子……私の知り合いだ」

「えええええええっ!？」

実はまり子もアルヴィーも、それぞれが帰り道で感づいていた。
相手の正体に。

EPISODE 98：サイ大の危機（後書き）

補足のQ&Aコーナー どんどんぱぱぱ

Q：まり子ちゃんのはあの冷酷な口調と子どもっぽい口調と、どっちが素なんですか？

A：どっちも素です。ただ、彼女は自分が心を開いている相手には女の子らしい一面を見せるので、どちらかというと後者かも。

Q：メン・イン・ブラックなサイ男の人間体の名前は何ですか？

A：ミスター・アンドレです。ミスターは敬称であって名字ではありませんよ。

Q：健がフルボッコされてるとき、市村は何してたの？

A：イッチーはたこ焼き焼いてました。サイドワークが忙しかったのです。

Q：前も素手でカエル相手に苦戦してたけど、健って素手はダメなの？

A：からつきしです。なのでスカルフログ戦や今回のような事態が起きました。

Q：不破さんは？

A：そのうち出るんじゃないかな

EPISODE 99：言えないことと癒えない傷

とばりに武器を預けた帰りに起きた、黒いスーツの男たちによる突然の襲撃。そのリーダー格の男が変身したサイ男　アーマーライノスの猛攻により、健の体はボロボロにされてしまった。

武器もない状態ながら彼は必死に抵抗したが、敵の圧倒的なパワーの前には無力だった。もはや命運尽きたかに見えたそのとき、思わぬ助け船が入った。

以前廃倉庫で市村と一緒にシェイドの群れを討伐していた時に出会った少女　糸居まり子が乱入して敵を殲滅、更にその摩訶不思議な力をもってアーマーライノスを退散させたのだ。

無邪気ながら冷酷さと底知れない不気味さを感じさせる彼女と名前を教えあうと、二人は別れを告げた。その後重傷を負わされ家に帰るところではなくなった健は、アルヴィーが呼んだ救急車に乗せられ病院に搬送された。

それから治療を受け、3日が経った。健のバイト先である市役所の事務室では　。

「こちら京都市役所事務室です……はい、わかりました。お大事に……」

かかってきた電話の受け答えを終え、係長のケニーが受話器を戻す。一息ついてコーヒーを飲んでいると、金髪碧眼の女性職員が近くにやってきた。

彼女はジェシーだ。おっとりした性格で優しく、気配り上手な女性である。今でこそ一般市民の一人である彼女だが、元々はとある資産家のお嬢様であった。そのためか今でも時折、やや価値観のずれた一面を見せるらしい。

「係長、コーヒー入りましたよ」

「おお、センキューね。ジェシーさんの淹れてくれるコーヒーはベリーベリーおいしいネ！」

「どづいたしまして」

互いに満面の笑みを浮かべる。コーヒーの味は誰が淹れても変わらない気はするが、実はそうでもない。気持ちの問題だ。先程ケニーがジェシーの淹れたコーヒーをうまいと評価したのは恐らく、心がこもっていたからだろう。

「……さっき東條サンから電話があったネ。外出先で大ケガしたから、明日は休むそうデス」

「えっ、そんな……大丈夫なんでしょうか」

「マダわからないネ。ドツチにしても心配だから、早く元気な姿を見せてほしいヨ」

「はい。私もそう思います……」

このときジェシーは、以前シェイドに襲われた際に健に助けももらったことを思い出していた。あの時も体を張って彼女を守っていたが、今回はそれ以上に危険な事態に陥っているのだろうか？

彼がケガをしてバイトを休んだことは、これまでも何度かあった。今回もまた無茶をしたのではないかと、ジェシーは心配になっていたのだ。

「さ、こうしてちゃ東條サンに申し訳立たないネ！」

「そうですよね。こういうときこそ私たちが頑張らないと！」

だが落ち込んでいる暇はない。彼がいない分を補わなければならぬのだ。気分を切り替え、彼らはおくせく働いた。そして、仕事

が終わったあとのことである。

ジェシー、浅田、今井の三人はファミレスに立ち寄っていた。今夜は三人で食事とおしゃべりを楽しもうというのだ。

ちなみにどこのファミレスかというと 健の幼なじみであるみゆきが働いている『トワイライト』である。

「東條くん、この頃急にムチャするようになったよねえ。何度も病院やお医者さんの世話になってるみたいだけど、ホントに大丈夫かな……」

「確かにちょっと心配ですよ……。職場に来たばかりのときはそんなことなかったんですけど」

浅田と今井は、健を心配するあまり表情を曇らせていた。バイトといえども彼は何かとよく働き、それでいて嫌な顔ひとつせず毎日通い続けていた。

来るのが毎日ではなくなっても、その仕事ぶりは健在。無論明るい笑顔も変わらぬままだ。だが、今年の春に入ってから彼はたびたび無茶をするようになった。

それどころかケガをして休むことも何度か出てきた。もしや自分たちが見ていないところで、彼は体を壊しかねないような何かをしているのではないだろうか？

彼女たちは心配で仕方なかった。浮かない顔で水を飲む浅田や、窓を見つめてたそがれる今井を見かねたジェシーが、

「大丈夫よ、東條さんを信じましょう。あの人は強いから……それにそんな顔してたら、せつかくの食事もおいしくなくなっちゃうわ」

笑顔でそう語りかけた。やましい考えをやんわりと浄化するよう

な、癒されるような笑顔だ。

「そ、そうよねジェシーさん！ あたしら何考えてたんだろ……」
「と、東條さんなら大丈夫ですよ！ はい！」
「ええ。彼を信じて待ちましょ」

場の空気を変えたところでジェシーがテーブルの隅にあるボタンを押し、ウェイターを呼ぶ。注文は既に決まっていた。

浅田はミックスグリルで今井はカルボナーラ、ジェシーはオムライスやサラダ、そしてコーンスープだ。期待を胸に抱いて待つっていると、中肉中背で整った顔立ちの爽やかなウェイターがやってきた。

「ご注文をお伺いします」

「あたしミックスグリルで！」

「じゃあ私はカルボナーラを……」

「わたしはオムライスとサラダ、それからコーンスープで。あとドリンクバーもお願いします」

「かしこまりました！」

注文を聞き届けた爽やかなウェイター（思わず見とれるほどのイケメン）が厨房へ向かっていく。あとは腹を空かせながら待つだけだ。再び期待に胸を膨らませながら、三人は食事が届くのを待っていた。

その頃、西大路の白峯家では。机に剣と盾を置き、ノートパソコンと向き合っている女性がいた。言わずもがな、子の家の家主である白峯とばりだ。

すごい速さでキーボードを打ち、健から頼まれた伝承の時代について調べていた。スクリーンの横には、調べたことの中でもとくに

重要な部分を書き連ねている。

「ふんふん……あれがこれで、これがそれで。へえ、そういう事だったの」

かの黄金龍と帝王の剣ならびに盾の関係、その盾がどんなものだったか、かつてエーテルセイバーを振るっていた戦士はどのような顛末を迎えたのか、そもそもエーテルセイバーと帝王の剣は同じものなのか。

彼女はとくに、それらについては念入りにサーチをかけていた。ウェブ上の百科事典や神話について詳しく紹介しているサイトなど、参考になりそうなところを探し回った。そして彼女は驚くべきことを知る。

「じつ、これは……!？」

そこに記されていたのは信じられない出来事。メモ用紙に殴り書きで記録し、更に調べてみる。それ以外にも思わず目を丸くしてしまつようなことが、そのサイトにはいくつも載せられていた。

「……どうしよう。これ全部、東條くんたちに話してもいいのやら……」

翌日、健が住んでいるアパート『みかづきパレス』では。

「健、調子はどうだ？」

「まあまあかな」

病院で治療を受け、帰宅した健は大事をとってバイトを休んでい

た。敵の攻撃で大ダメージを受けてから日にちが経っていたが、傷はまだ完治していない。サイ男との戦いで受けた傷が完全に癒えるまで、自宅で療養することになっていた。

「けどまったく動けないってわけじゃ……あいたた！」

そうやって彼は立ち上がり右腕を動かすが、すぐに骨がきしみ左手で右肩を押さえた。

「まだ無理に動かしちゃダメよ！　もう少し安静にしてた方が……」
「そ、そうだよね……いでで」

そんな健を見かねたみゆきが彼を叱りつける。健が大ケガして病院に搬送されたと知った彼女は、心配するあまり病室に乗り込んできた。

彼がアパートに戻ってから、彼女は家にも戻らず付きっきりで健を看病していた。その間買い出しはもちろん、料理や洗濯といった家事も彼女が行った。

かなり厳しいのチェックも交えながら、だ。やはりというべきか、家事は女性の方が上手なのだろうか　健もアルヴィーも彼女には驚かされるばかりだ。

「で、でもいいの？　そろそろ家帰った方が……お父さんもお母さんもきつと心配してるよ」

「いいの。家にはあらかじめ連絡しておいたし」

「え？」

「それにバイトも休んでるしね。健くんが私のことで心配することは何にもないよ」

「と、ということらしいぞ、健？」

話し合う二人の間にアルヴィーが口を挟む。顔がにやついているのは恐らく、二人をからかってその仲を進展させようと考えているからだろう。

「これも何かの縁だ。今のうちに二人で愛を育んでみてはどうかの？」

「いやいやいやいや！ 僕とみゆきはそーゆー関係じゃ……」

「何を言うか！ お主に付きつきりて身の回りの世話をするみゆき殿の姿は、まるでダメな夫を支える健気けなげな妻のようだったぞ」

彼女はハッキリとそう言った。そう、言い切った。説明しなくても分かると思われるが、念のために説明しておく。ダメな夫とはずばり健のことで、健気な妻とはみゆきのことである。少々言い方がまずいような気はするが、今のところはとりあえずこれでいいのだ。

「け、健気な妻？ わたしがですか！？」

「うむ。他に誰がある」

「えー、いや、でも……まだ結婚するとは決めてないしなあ。言われて嬉しいのは確かですけど」

「ダメな……夫、だと……？ くそう、良くできた夫になってやるう！」

寸劇のような、楽しげ(?)なやり取りをかわす三人。少し盛り上がりつつ来たところで、健の携帯電話からポップな音楽が鳴り響く。誰かから電話がかかってきたことを知らせるための着信メロディだ。メールを受信したときはまた違うメロディに設定してあるようだ。

テーブルの上に置いたケータイを手にとると 電話は白峯からのものであった。何か大事な連絡にちがいない。これを受け取らない

わけがなく、健は電話に出る。

「もしもし、東條です」

「東條くん、あれから帝王の剣や黄金龍について調べただけど…
…大変なことがわかったの。今からこっちに来てもらえないかしら
？」

「ほ、本当ですか！？ でもケガがまだ治ってなくて……」

「ほんと？ 難ならあたしのほうからそっちまで行くけど……」

「いえ、歩くぐらい大丈夫です！ それに外に出なきゃ体くさつち
やいますし」

「そっか。じゃあ、お手数かけるけどこっちまで来てちょうだいね」

「はい、わかりました！」

通話し終わり、相手が電話を切ったことを確認すると自分も電話
を切った。するとみゆきとアルヴィーに振り向き、「とばりさんが
家ウチに来てくれたって」

「白峯さんが？ でも、大丈夫なの？」

「平気さ、このくらい！ それにそろそろリハビリしておきたいし」

両腕をがっしりと構えニツと笑った。が、すぐに片腕が悲痛な叫
び声を上げる。

「イデデ！ あいてて！」

「何かあったら心配だし私もついていくわ。いいでしょ、アルヴィ
ーさん」

「うむ！ それが良さそうだな」

これにて一致団結。アルヴィーが打った相づちを皮切りに、三人
はアパートから出発した。頭や腕に包帯を巻き、（服を着ているの

で見えないが、肩や胸に湿布を貼った健の姿はやや痛々しいが、まあ大丈夫だろう。

EPISODE 100：英雄の顛末

奥行きのある廊下。広々とした部屋。アパートの部屋がいくつも入りそうな応接室。重厚で落ち着いた雰囲気漂う書斎。やはり、白峯家はスケールが違った。自分たちの家とは比べ物にならない、と、健たちはそう思った。

「お茶持ってくるわ。ちょっと待っててねー」

応接室に入ったところで、とばりが茶を持ってくるのを待つ。ソファアの座り心地ときたら、それはもう気持ちよいものだった。健もアルヴィーも、みゆきも、ゆつたりとそこでくつろいでいた。そこに緑茶のペットボトル（たつぷり入った2リットル）と人数分のコップをトレイに乗せたとばりがやってくる。

「お待たせしました。外暑いから冷やしておいたわよ」

「ホントですか！？ありがとうございます！」

喉が乾いていた健が真っ先に冷えた茶を飲む。喉ごしスッキリ、後味もくどさがなくておいしかった。カラカラに乾いていた喉が一瞬で潤ったのだから、おいしかったに違いない。

「それで、例のことについてなんだけど……聞いてもらっても大丈夫かしら」

「はい！ぜひお聞かせください！」

「私も聞きたい！」

健もアルヴィーも、いつになく真剣な顔で言った。正直なところ、とばりは自分が調べたことを話してしまってもいいのか悩んでいた

が 二人の真摯な態度を見て決意を改めた。話しておかねば、彼らも自分もきつと後悔すると。

「……わかったわ。調べてみて分かったこと、全部話します。長くなりそうだけど、みゆきちゃんも時間とか大丈夫？」

「はい。バイト休んできたので」

「そっか。それじゃあ話すわよ……」

念のためみゆきにも確認をとったところ、彼女も快く承諾してくれた。これで心置きなく話すことができる。彼女もまた真剣な表情になり、くだんの伝承について調べたことを語り出す。

「まず1つ目、エーテルセイバーだっけ？ あの剣と帝王の剣は、ひよっとしたら同じものかもしれない」

「えっ？ あれと帝王の剣が……。それってホントですか？」

「いえ、まだそうと決まったわけじゃないわ。ただ……」

とぼりがそこで一旦言葉を切る。壁に立てかけてあるエーテルセイバーを手に取り、柄の部分に開いた穴を指差した。

これは各属性の力を凝縮した宝玉・オーブを入れるための穴で、1つしかはめることが出来ないはずなのだが 何故かその穴が3つに増えていた。

「穴が3つ……？」

「ええ。まだ秘密が隠されてるんじゃないかって思って、少しいじってみただけど そしたら見ての通りになったわ」

白峯以外の三人がそろって驚愕する。オーブは雷属性のものが白峯の手で作られるまでは2つしかなかったはずなのだが。

「……とばり殿が雷のオーブを作るまで、オーブは炎と氷の2つしか存在していなかったはず。……どうなっているんだ」

「恐らくは 伝承の時代から既に、オーブが3つ以上存在していたのかもしれないわ」

アルヴィーも白峯も、そろって難しい顔をする。かの『考える人も、こうして悩みながら考え事をしていたのかもしれない。』

謎というのはそう簡単には解けないのがこの世の定理だ。いま彼らの目の前にある大きな謎も決して例外ではない。

「いずれにしても、この謎は簡単には解けないわ。これからゆっくりと少しずつ紐解いていくしか方法は無さそうよ」

エーテルセイバーをそのまま健に返却し、次にとばりは盾を手にとった。猛々しい龍の頭を型どったその盾は、名付けてヘッダーシールド。

剣と同様にオーブを装填することで属性の力を添付でき、更にとばりが手を加えたことでバリアを展開する機能も追加された。

「この盾にも秘密が……?」

差し出されたヘッダーシールドを見て、目を丸くしたみゆきが呟く。

「ええ、そうよ。2つ目はこの盾と伝承に載っていた盾について」

「以前この盾のバリアーに守ってもらったことがあるんですけど、もしかしてバリアー以外にもまだ ?」

「そうなのよ」

みゆきは以前、センチネルズとの決戦の際に組織の首領^{リーダー}である悪

漢・浪岡にさらわれたことがある。

みゆきが助け出されたあとの戦いで浪岡は周囲を熱線で焼き払ったのだが、そのときに健がバリアを展開して後ろにいた仲間たちを守ったのだ。

「みゆきちゃんは多分知らないと思うけど、例の帝王の剣と黄金龍が描かれた絵の背景に盾もあったの。その盾は『月鏡つきかがみの盾』っていうらしくて、その名の通り光とかを反射する力を持っているそうよ。英語でミラーシールドってトコかしら」

「つきの、かがみ……ですか」

その月鏡の盾は、表面が銀色に輝いていたという。軽くて頑丈で、傷付きにくい金属を素材として使っていたらしい。

そしてその名が示すように、三日月の紋章が描かれていたようだ。それと相反するように、帝王の剣は黄金色を基調とした装飾が施されていた。

「帝王の剣が太陽なら、月鏡の盾はさしずめお月さまってトコかしら。ちよつとスケールが大きくなってきたわね……」

「太陽と、月……星はないんですかね」

みゆきが「うーん」と首を傾げる。彼女が並べた単語はいずれも、宇宙上に浮かぶ天体だ。

太陽はどの天体よりも大きい灼熱の恒星で、爆発を繰り返すことで摂氏6000もの熱を放って輝いている。

月は我々が住む地球の周りを回っている衛生だ。朝、昼と輝く太陽が夜になって役目を終えたとき、代わりにやってきて夜空で輝く。月齢により満ち欠けし、夜空の闇に包まれて見えないときもあれば、一片も欠けずに空で静かに輝くときもある。

そして星は月と同じく、夜空で燦々と輝くものである。惑星や衛

星なども平たく言ってしまうえば星であるが、この場合は夜空を彩る小さな星々のことを示す。このうち、特定の形に並んだものを星座と呼ぶ。オリオン座やさそり座、蛇使い座やしし座などがとくに有名だ。

「星か……ひよっとしたら、オーブがそれに当たるかもしれないわね」

「オーブが星だとすると……げっ！ 太陽系の惑星の数だけあるってことに!？」

「いや、流星にそれはないと思うけど……」

勝手に想像して驚く健を落ち着かせるように、白峯が冷静なツツコミを入れた。直後、「でも、どうなんでしょうねー……」

「……次行ってもいいかしら、みんな？」

「はい。お願いします」

「オツケー！ 最後に3つ目だけど……」

健に盾を渡してすぐに、白峯は「ちよっと待っててね」と告げて応接室から出た。何かを持ってくるつもりだろうか？

緑茶を飲みながらおとなしくして待っていると、なんと白峯はホワイトボードを持ってきたではないか。これを使って説明するつもりなのだろうか、ホワイトボードには簡単な説明や、分かりやすいように絵が貼られていた。

かわいらしくデフォルメされている上にとても上手だ。技術屋で料理もウマく、絵の才能もあるということは……やはり彼女は天才だったのだ。

「す、スッゲー……たったの3日でここまで」

「うふふ。約束はちゃんと守らなきゃって思っただけよ」

「やっぱり白峯さんって……スゴいわ！」

「まさに希代の天才だ！ すばらしい！」

「ちよつと、話脱線してるわよ！ 言われて嬉しいけどネ……」

照れながら一回「おほん！」と咳き込み、白峯は脱線していた話を戻す。

「3つ目は黄金龍についてと、世界を救った戦士のその後について説明します」

教鞭でホワイトボードを指差し、彼女はくどくならない程度に詳しく説明し始める。3つ目は黄金龍とかつてエーテルセイバーを振るっていた戦士のその後について話すようだ。

「勇気ある一人の戦士はエーテルセイバーを振るって平和を脅かす怪物を見事打ち倒し、世界を救った英雄になったわ。ここまでは以前に言った通りよ。けど、この話には案の定続きがあつたの。怪物を倒したのはいいんだけど、また新たな怪物が現れて人々を苦しめたの。そいつはとても強くて、流石の英雄もかなわなかつたのよ」

休憩を挟み、緑茶を飲んで体を癒すと白峯は教壇(?)に戻る。長い話になることは確実である、よって白峯は何回か休憩を挟むつもりをしていた。そうした方が聞く側も楽なはずだと思い、気を遣つたからだ。

「そこで黄金龍が……」

「そう！ 彼は遠い地の山奥に棲んでいた黄金龍に助けを求めたのね。今一度世界を救うための力が欲しいってお願いしたんだけど、黄金龍は彼に試練を与えたの。力を貸すにふさわしいかどうかを確

かめるための……ね。試練は辛いものばかりだったけど、英雄はそれをすべて乗り越えた。そして彼を認められた黄金龍が彼に授けたのが……帝王の剣だったってわけ」

「やっぱり！ 帝王の剣と黄金龍は関係があっただけですわね！」

健が納得が行ったような表情でそう言った。まるで難しすぎて解けなかった謎が解けて喜び、大はしゃぎしている子どものような様子だ。

「月鏡の盾も、そのときにいただいたそうよ。黄金龍に認められて、契約を結ぶことができた英雄はやつとの思いで怪物を倒すことができました。こうして世界には平和が戻りました。めでたし、めでたし」

「やった、ハッピーエンドだ！ 絵本出ませんかー、今のお話……」

「ところがぎつちゃん、このお話には続きがあったのよ！」

世界に平和が戻った。これにて一件落着！ そう思っていた健たち三人のお祭り気分を、白峯のその言葉がすべてぶち壊してした。

三人とも同じようなことを考えていたのか、ずっとけるときの夕イミングも一緒だった。確かにハッピーエンドはいいものだが、逆にバッドエンドだからこそ映える物語も世の中には少なからず存在している。

とはいえ、人間やはりハッピーで終わった方が気分が良くなるものだ。ハッピーな終わり方をしたほうがいいという考えはあながち間違いでもない。

「悪い怪物を倒した英雄は国を築き上げ、王様になりました。みんなから慕われるいい王様になれたみたいよ」

「そうだったのかー。世界を救って自分の国も作る。まさにハッピ

「エンドだの」

「だけどある日を境に王様は変わってしまったみたいなの。国を築くほどの力を手にしても王様は満足できなかったらしくて、更なる力を求めたそうよ。他の国という国からあらゆるものを奪い取っては自分のものにしたらしいわ」

「そんな……ひどい。それじゃまるで悪の帝国じゃないですか」

「あろうことか、英雄と呼ばれた王が暴君へまさかの転身を遂げており。まるでヒーローが悪の心に染まったときのような衝撃が一同の間に走った。」

「ホントひどいことするわよね！。それから暴君と化した王様は、黄金龍に自分を不老不死にするよう頼んだんだけど、当然のように聞いてもらえなかったわ。そしたら王様は逆ギレして黄金龍を手にかけたの！」

「なぬ！　なんとバチ当たりなことを……けしからん奴がいたものだ」

「アルヴィーがムツ！　としかめっ面を浮かべる。あくまで伝承の話であって他人事のはずなのだが、まるで自分のことのように怒りを露にしていた。」

「……ん？　おかしいのう。他人事のはずなんだが、なぜか他人事とは思えないぞ」

「気のせいじゃない……こともなさそうね。黄金龍はもしかして、アルヴィーさんのご先祖さまだったのかも。こうして、欲におぼれた王様は黄金龍と相討ちとなり、彼が建てた国も滅んでしまいました。ぜんっぜんめでたくなかったわねえ……うーん」

『めでたし、めでたし』で終わるはずだったその伝承は、残念な

ことに後味の悪い終わり方を迎えてしまった。最後の最後でスツキリしないものが残ってしまったが、かくして長い昔話　もとい、歴史の勉強は終わり、全員茶を飲んで一息ついた。

「……さて、長くなっちゃったわね。みんな疲れてないかしら？」
「いえ、平気です！　それにいろいろと参考になりましたし」

健が元氣そうに言う。ただ、どこか眠たそうではあったが。

「邪魔しましたー！」

「また来てね」

外に出るとすっかり日が暮れていた。健たちは帰路につき、それぞれが帰るべき場所へと帰っていった。健たちが帰った頃、研究室に戻った白峯は机に置かれたものを見つめて物思いにふける。それは穂先が円錐状の形をした槍　ランスのようなものだった。

「さて、と。こっちも仕上げなきゃ、不破くんに怒られそうね」

「ただいまー。……あれ？」

「どうした？」

「なんでかわかんないけど、カギ……開いてた」

とくに怪我をすることもなく、白峯の家から無事に帰宅した健とアルヴィー。だが、どういうわけか閉めたはずのドアの鍵が開いていた。

それだけではなしに、部屋に入るとそこはクモの巣だらけだ。衛生上あまりよくない状態になっていたし、見栄えもいいとはいえない。早々に掃除しなければ。

「おかしいのう。この前掃除したばかりだったはずだが……」

アルヴィーが首をかしげた。部屋を出る前はとくに散らかってはいなかったし、汚れてもいなかった。なのに何故、ここまで汚くなっているのだろうか。

「……ねえ、誰がいるってことに気付かない？」
「えッ!？」

疑問に思う二人のもとに 声が聴こえる。幼い少女の声だ。天井から逆さまになった状態の少女が、糸を伝って降りてきた。

「君はッ……!」
「どうせ住むならセキュリティが万全なところじゃないとね。フフッ!」

その少女、糸居まり子。空に浮かぶ雲のようにつかみ所のない態度できわめてマイペースな自由人である故、彼女が何を考えているかは誰にもわからない。その意図を知っているのは本人だけ。

「あ、白いの見える……」

だが彼女は気付いていなかった。宙吊りで、しかも逆さまになっているので……あろうことか白いパンツが丸見えになっていた! これは恥ずかしいどころではない。

「ふえ? うわっ、パンツ丸見えだあ! はずかしーっ!」

慌てふためくまり子。その勢いで糸がほつれ、床へと落っこちた。長いスカートがブワツとめくれた為、またもパンツを見られてしまった。これによりパンツのセキュリティが万全でなかったということが明らかとなったので、まり子は人の事を言えないということになる。

しかし、二人とも善意から見なかったフリをしようとしたが、まり子には通じず 飛び上がりざまに顔を思い切り蹴られた。ただし、なぜか対象は健だけだった。どうやら相当堪えたらしく、健はしばらく顔をおさえてその場に屈んでいたという。

EPISODE 101：新しい同居人

コロコロ転がしてホコリを取るローラーのようなもの、ほうきとちりとり、掃除機　あらゆるものを駆使した結果、まるでクモに呪いでもかけられたようにクモの巣だらけになっていた、健の部屋の掃除が終わった。

なぜクモの巣まみれになっていたのか？　それは後にまり子の口から語られたが、どうやらクモの巣を張ったのはそこが自分の縄張りだ^リということ^リを証明するためだったらしい。以前廃倉庫で出会った際に道中に巣を張っていたのもそのためだったそうだ。

勝手に部屋に上がりこんで汚してしまった事を、まり子は素直に謝った。このときアルヴィーは驚いていた。彼女とは旧知の仲、いわば腐れ縁だったのだが　傲慢で非情な『女王』であるまり子が他人に頭を下げたことがやや信じられなかったのだ。彼女が心を開いたものには優しく、純粹で明るい女だというのはよく知っていた。だが同時に、あまり他人を寄せ付けようとしないう孤高な一面も持っていた。

その苛烈とも善悪の区別がつかぬ純真無垢ともいえる二面性がある性格から、まり子には友と呼べるものが少なかったのだ。そんな彼女の数少ない友人がアルヴィーであった。彼女とは約700年ほど前からの付き合いであるが　話すと長くなるため、この辺りで割愛しておく。

「お兄ちゃんの料理、おいしー！　とくにお肉がたまらない！」

「野菜も食べなきゃダメだぞー？　あとお魚もだね……」

「いーもん。わたしは肉食系だもん」

掃除を終えて手もきれいに洗った健とアルヴィーは、いつの間にか部屋に入って来たまり子と一緒に夕飯を食べていた。今日のお品

書きは肉野菜炒めとみそ汁と白ごはん、すべて健の手作りだ。すぐに食べられるメニューを考えた結果、この組み合わせとなったのだ。

手抜きと言われるのでは、と危惧していた健だったが、見ての通り評価は上々だ。いつも食べているせい、それともジェラシーか、アルヴィーはとくに何も気にせずに料理を味わっていた。やはりウマかったのか、無上の喜びを浮かべていた。

噛んでいたものを飲み込んで一呼吸おきはじめて彼女は、微笑みながらまり子に視線を向け

「ふふふ。ホントは立派な大人なのに、まるで子どもようなの。のう、まり子？」

「むっ……言ったわねー。早く大人になってやるーッ」

ムキになったまり子が、大食いタレントもビックリして腰を抜かすような勢いでおかずやごはんを食べていく。その食いつぷりには流石の健やアルヴィーも目を丸くするばかりだ。やがて瞬間にまり子は満腹になり、迂闊に動けなくなった。嘔吐するか腹を壊す可能性があったからだ。

「た、食べすぎた……」

「あちゃー……。暴饮暴食は体に良くないよ」

「う、うん……。次から腹八分目にするね。うっぶ……」

糸居まり子……その可憐で美しい外見に似合わず、意外と大食いな女である。だが、それもそれでまたかわいらしい。

休憩をおいて消化しきった頃に、まり子は健とアルヴィーに自らの正体を打ち明ける。本当は大人の姿だったということや、産気付いて子どもを産み落としていた時期に警察のシェイド対策課の襲撃を受けたこと、更に街中で暴れていた子グモともども討伐されたこ

とを。

「……へえ、そんなことが……大変だったんだね」

「うん。力が不足してたから、不完全な状態で復活しちゃったの。それで子どもの姿になったってわけ」

「そうだったのか……」

この経緯を聞いた健は顎に手を当てると、何やら考え事を始める。その内容は『大人のまり子はどんな姿なのか?』というものだったが、最初は真面目に考えていたものの、途中からどんどん淫らでおかしな方向へとそれていった。それに伴い、表情もいやらしくなっていく。

「お兄ちゃん、今エッチなこと考えてなかった?」

「えっ? いや、何も……」

図星だった。うるたえて目を丸くしている健と少しませたように笑っているまり子の間にアルヴィーが割って入り、「そうかの? お主なら考えかねんが」

「かつ考えてない! 考えてないから!」

「へえー。じゃ、これはなあに?」

あわてふためく健の前にまり子が、彼の愛読書を突きつけた。とはいっても読んでダメになるようなことは書いていない。

むしろ煩惱を満たせるような内容だった。なぜならそれは、水着姿の若い女性の写真が載っている。いわゆるエロ本だったからだ。

「引き出しに隠してあったの見つけたよ。こーいうの好きなんですよ?」

「へげえ〜っ!? ど、どうしてそれを……」
「フフツ。わたしもお兄ちゃんがどーいう女の人が好きなのか知っておきたかったんだー」

恥ずかしそうに両手で顔を隠す健だったが、そんな彼をまり子は笑って許した。彼女はある意味、このくらいの心意気がある男性が好みなのかもしれない。

「それよりまり子 お主、ここに住みつく気か？」
「ここに住むつもりよ。ずっとじゃないけどね〜」

まり子が微笑んだ。その笑顔は幼いながらも、やや大人びている。裏に何か思惑が潜んでいるような気がするが、恐らくそれは思い過ぎである。アルヴィーの知り合いなら悪い奴ではないはず。ここは彼女を信じてみよう、と、健は思った。

「……そっか。分かった！ ここにいてくれてもいいよー！」
「いいの!? ありがとう」

また、笑った。とても無邪気で、どこにも捻じ曲がったところがないような笑顔で。彼女は健が思っているよりもピュアで健気だ。だが、ひよつとすればそれは上っ面だけで、本心は以前サイ男との戦いで見せたように鬼畜で残忍冷酷なものかもしれない。

とはいえ今のところ、彼女は敵対するもの……つまり己が嫌っているものには容赦がないだけで、仲間や自分が好意を示している相手には温厚で優しい態度で接している。必要以上に警戒しなくても大丈夫 なハズだ。

「ただしッ！ 条件がある。ひとつ、クモの巣をやたらめったらに張らないこと！ ふたつ、なんの罪もない人たちを襲わないこと！

そしてみつつッ！ お隣さんや大家さんに迷惑はかけないことッ！
以上の3つを、部屋にいてくれる間でいいからできるだけ守って欲しい。わかったかね？」

「わ、わかった。そうするわ」

いきなり大声（しかも早口）でまくし立てるように健がそう催促したのだから、まり子はやや動揺していた。素性がかめめない以上、これくらい言い聞かせてやらないと何をするかわからない。と思つての行動だったが、いま思えば少々やりすぎたかもしれない。健は少し、心の中で反省した。

「それからたといえイケメンでも怪しい人にはついていっちゃ……」

「ま、まあ落ち着け健……まり子は利口だからそれくらいは朝飯前だ」

「う、ごめんっ」

そんな風にアルヴィーから制止され、気を取り直して麦茶とお菓子を仲良く味わっていると。ピンポン！ と玄関のブザーが音を鳴らした。誰かが来たようだ。「こんな時間に誰だろう」と少し怪しみながら、玄関のドアを開けると、そこにいたのは

「宅配便です！」

「あ、あんたは……！」

そのいかつい体格をした大男は、どこからどう見ても気のいい運送会社のあんちゃんには見えなかった。黒いスーツを身に纏い、洋画によくいる黒人のシークレットサービスのような、沈着冷静で戦い慣れているであろう雰囲気醸し出すその男はただならぬ威圧感を放っていた。

それ以前に健たちは、その男に見覚えがあつた。この前武器を持

たない健を完膚なきまでに叩きのめしたものの、まり子に難なくいなされて逃亡したサイのシェイドだ。

「傷は癒えたか、小僧？ それに私はあんたではない、そうだな……アンドレとでも呼んでくれ」

「そのアンドレさんが何の用だ！」

「待て待て、俺は戦いに来たのではない。様子を見に来たのだ……今後俺と戦って果てるであろう相手の具合をな」

こちらをおちよくるような態度に憤った健を、アンドレと名乗った黒人男性は鼻で笑った。健からしてみれば、自分をボコボコにした相手が自分の様子を見に来るその神経と思考回路の構造が理解できなかつたのだと思われる。

妙にフレンドリーなのがまた腹立たしいことこの上ない。しかし、その自信に満ちた言動とその自信に裏打ちされた実力は本物だ。こればかりは反論のしようがない。

「それに俺は万全な状態の相手としか戦わん主義でな。できるだけ無益な殺生は避けたいんだよ」

「無闇やたらに周りのものは壊すくせに」

まり子が敵意を示した視線をアンドレに向ける。目つきも先程まで健に見せていた明るいものではなく、冷酷で険しいものへ変わっていた。まるで別人のようだ……。まり子が呟いた言葉を聞き流せなかったか、アンドレは少し眉毛をぴくつかせる。

「まあいい……とにかく、貴様らが戦える状態になるまでは暴れたりなどしない。それだけは約束しよう」

「本当だな……？」

「ああ、ウソじゃない。では、また」

律儀にも頭を少し下げた後、アンドレは玄関のドアを閉めてアパートを去っていった。態度は紳士的ではあったが、それでも健は彼を許せなかった。

アンドレとしてはあくまで温厚で人間味のある態度をとっていたつもりだったが、その彼にほとんど反撃の隙を与えられずにいたぶられた健からしてみればバカにされているように感じたのだらう。

「……アンドレ、か。勝てるかな、あいつに」

夜の京都。満点の星空が見下ろす静まり返った市街地の中を、黒いスーツを着た黒人男性が一人で歩いていた。

「……ミスター・アンドレ」

高架下を通り過ぎようとしていたそのとき、柱の近くで新聞を読んでいた男が大柄な黒人男性の名を呼ぶ。その男は顔に包帯を巻いて目元以外を隠しており、更にこの暑い中なのにコートやマフラーをいくつも重ね着していた。

若干涼しい夜ならともかく、朝や昼間は蒸し暑いはずだ。そこそ焦熱地獄のように。熱中症で倒れたりはいないのだろうか。冬場ならとにかく、この夏場に耐えられるかどうかやや心配になってくる服装をしていた。

「何故あの場で連中を抹殺しなかった？ 君ならそのくらい簡単だろっ」

「お言葉ですが……私、できれば万全な状態の相手と戦いたい主義です。弱った者に手を出したくはないのです」

「フン……正々堂々とした考えでいらっしやる」

アンドレの主張を鼻で笑い、包帯の男は詰め寄って無理矢理肩を組む。そして睨むように顔を近づけた。

「だがそれでは仕事にならない。まさか我々『ヴァニティ・フェア』の企業方針を忘れたわけではないだろうね？」

「い、いえ……決して忘れたわけではない」

包帯の下で至極不機嫌そうな表情をして舌打ちしながら、辰巳は顔をどけてアンドレから少し離れる。だがそれでもその蛇のような鋭い眼光はアンドレにしっかりと向けられていた。コートの懐からメモ帳を取り出し、包帯の男 辰巳隆介は自分達の組織の企業方針をつづったページを開く。

「一、忌々しい人間どもは見つけ次第殺すか痛めつける。二、過去の栄光にこだわるな。我が社では結果がすべてだ。三、邪魔をするものはたとえ同族でも生かしておくな。裏切り者は殺害しろ。四、欲しいものは殺してでも奪い取れ。五、生き残りたいなら業績を上げろ。六、すべては甲斐崎様のために」

辰巳は企業方針を淡々と、時折己の感情を交えながら読んでいく。さりげなく読まれたが、その内容はいずれも実に極悪非道極まりないものだった。

まるで略奪者のような残虐さだ。こんな会社があったとしても、自ら入りに来るようなものはまずいないだろう。それが人間であつたら、だが。そもそもこのヴァニティ・フェアという企業を創立したのは非情な怪物だ。シキイト故にこのように悪の組織を地で行くような方針となつたのだ。

創立者にそのようなつもりは無かつたのだろうが、これは紛れも

ないブラック企業である。今も昔も真に恐ろしいのは、無自覚な悪意という事なのだろうか。誠に恐ろしいことである。

「君はこの中のひとつでもちゃんと守ったことがあったのか？ 現在進行形でひとつも守れていないじゃないか。それじゃダメだ、君は業績はゼロだが実力が高いから生かされてるようなものだしな」
「し、しかし……私は自分の意見を変える気はありません」

「言い訳するな、結果を出さない結果を。何度も言うが君は真面目すぎるんだよ……。どんな汚い手段でもかまわず使え！ ガンガン壊せ、バンバン叩け、女が出来たらとにかくイカせる！ くだらないプライドは肥溜めに投げ捨ててしまえ！！」

大声でまくし立てながら辰巳はアンドレに罵詈雑言を浴びせていく。このとき、口調が丁寧なものから乱暴なものへと変貌していた。言い終える頃には息を荒げ、口元の包帯を一瞬だけほどいてペットボトルに入っていたミネラルウォーターを飲んだ。目にも止まらぬ早業で、すぐに口元は見えなくなってしまった。

「……はーっ。ま、いろいろ言っただが……そのぐらいの覚悟をしなければ幹部に昇進できないぞ。君の戦闘能力は幹部社員と比べても遜色ないからね。上層部や私の部署の者たちも君ほどの逸材がヒラ社員のままなのが惜しいと口々に言っている」

「あ……ありがとうございます」

喝を入れてすっかり落ち着いた辰巳は、礼を告げられて気分がよくなったのか包帯の下で微笑みを浮かべていた。しかし、その表情はすぐにまた険しいものへと変わり、

「だが！ 君は見てくれは手練だがまだまだ青い。翌日、私は例の青年と戦う。君は本部でプロの業を見ていてくれたまえ」

「わ、分かりました……」

自慢げにそう告げて、辰巳は高架下を去っていった。彼がいなくなつてから、「よき上司なのかそうでないのか、あの人はさっぱり分からん……」とアンドレは呆れるように呟いた。

EPISODE 102：スクラムの脅威

翌日の昼、健は坂道の途中にある『アサガオ公園』の付近にある市村の移動屋台を訪れていた。この公園は健がちよくちよくトレーニングを行っていたり、不破との仲がこじれていた時期に戦場となっていたりした場所だ。

マンションの手前に作られたココは小高い丘の上に作られており、周囲が木々に囲まれていて環境豊かである。噴水もあり、全体的にゆったり雰囲気が漂っているのでリラックスするにはちょうど良いと言えるだろう。

「んで、お前さんそのコと一緒に住みはじめたんかいな？」

「はい！ 最初会ったときは正直怖かったんですけど、いざ付き合いたい始めたらまり子ちゃんとっても可愛くて！ まるで妹が出来たみたいですよ！」

「そーでつか……」

苦笑いする市村に嬉々とした様子でまり子が自宅アパートに来たことを話す健だったが、それもそのはず 彼には姉や母がいたものの、自分より年下の兄弟は誰もいなかった。そのため少し、肩身が狭い思いをしていたのだ。友人やクラスメートに同じ男子は何人かいたが、友人と兄弟姉妹は違う。

周りを気遣ってあまり表には出さなかったが、彼は姉以外に兄弟がいないことにちよつとしたコンプレックスを抱いていたのだ。幼い頃に一度そのことで母に相談したことがあったが 今思えばこの頃から、いささか好色なきらいがあったのかもしれない。だが今

は違う。糸居まり子という、自分を兄のように慕う小さいようで実は大きい同居人ができたのだから。

「でも氣イつけや。あのコは化け物シエイトや、それもそこらの三下とは比べモンにならないくらい強いやつちゃ。いつ本性表してあんたブチ殺しに来よるかわからんで」

「確かにそこは氣がかりですけど……今は大丈夫そうです」

前向きというか、人の良いところしか見ていないような健を見て、「ホンマ気楽なやつちゃのう」と市村は苦言を呈した。

「ナニを根拠にあのチビ信じとんねんや？ 意外と優しそうやからか？ それともいたいけな女の子やからか？」

「両方です！ それに近寄りがたい雰囲気なのは最初だけ……アチチツ」

何故糸居まり子のような腹の探りようがない相手のことを信じようとするのか？ 健はたこ焼きを食べながら市村の疑問に答えるが、たこ焼きがあまりに熱かったために舌をやけどしてしまう。水分補給のために持ってきた水を飲んで健は舌を冷やした。

「あのなあ東條はん……人信じるのもエエけどなあ、少しは疑わなあかんで」

「市村さん！ このたこ焼きアツアツでおいしいですね！」「って全然聞いてへんやないかい!？」

軽く聞き流して健はほっかほかのたこ焼きを食べていたが 市村の言葉に対する答えは出ていた。人の悪いところばかり見るよりは少しでも良いところを見た方がいい、と。200円払って買ったたこ焼きを完食した健が、近くのゴミ箱に容器と串を捨てて一息つ

いていると。

「……ッ!？」

「声になつたらんでそれ……ぬつ、出おつたな!！」

鳴った。健と市村、双方が持つレーダーが。健は龍のウロコのようなもので、市村は7つ集めれば願いが叶いそうな球の在りかを示してくれそうな機械だ。形は違えど効能はほぼ同じ。

「行きましょう!！」

「すまん! わし、店のことあるさかい……先行つといてくれや」

「わ……、わかりました」

市村は店を一度畳まないといけないので、先に健だけでシェイド反応が出た場所へ向かう。反応が出たのはどこかの土手だ。草野球やサッカーをするのにはちょうど良さそうな場所だった。だが

「おかしいな、誰もいないぞ……?」

確かに反応はあった。しかしそこには、シェイドの一匹も襲われている人々も 誰一人としていなかったのである。

勘違いだった、と思い帰ろうとした健だが、油断しきっていたそのときに川の方から何者かが飛び出すッ!

海に住んでいる魚類の一種である、オニオコゼのような姿をしたそれは空を飛んで、いや 泳いでいた。ホームグラウンドである水中を泳ぐように。

「くそっ! 気配を隠していたのか!！」

噛みつこうと急接近してきたオニオコゼ型のシェイドを切り裂き、霧散させる。だが相手は一匹だけではなく、いっぺんにおびたらしい数で健に迫ってきていた。

「せいっ！ ヤアー！」

何十匹もの大群で迫るオニオコゼ型シェイドを、健はちぎっては投げてちぎっては投げる勢いで叩き斬っていく。どうにか一掃して静寂を取り戻した。かに見えたが。

「……まだまだいるのか!？」

敵はまだ全滅していなかった。オニオコゼ型シェイドは先程よりも多い数で健を圧倒し、気がつけば健を取り囲んでいた。

まるで自分より体が大きくて凶暴な魚の群れの中に放り込まれた、一匹の弱くて小さな魚のようだ……。この世は弱肉強食である、強ければ生き弱ければ死ぬ。威圧感を与える数の暴力を前に、健は何もできず、いや、何かできるはずだ。

「こいつらっ！ 寄ってくるな！」

その場で回転しながらオニオコゼ型シェイドを切り払い、少しでも多く数を減らしていく。一匹一匹は弱い、これだけの数だ。こいつらを全滅させようとなると、少々骨が折れる。

「くっ……キリがない」

それからも自分を踊り食いしようとするオニオコゼ型を何匹も叩き斬った健だったが、未だに敵の勢いは止まるところを知らない。状況は健にとって有利になるどころか、ますます不利なものになっ

ていく。だからといってこのままおとなしく食われるつもりなど彼にはなかった。

何とかして逆境を切り抜け、生き延びなければならぬからだ。人々のためなら自らを犠牲にする覚悟はあったが、まだ死ぬわけにはいかない。家族の知らぬところで儂く散った父や、怪物に脅かされ苦しむ人々の為にも！

息を荒くしながらも必死で戦い続ける健。そんな彼を救うかのように、天から降り注ぐ青い炎が魚の大群を焼き尽くしていく。いったい誰が、と、思うまでもない。彼には心当たりがあった。楽しい同居人にして自分にとってかけがえのないパートナー、そう

『彼女』だ。

「アルヴィー！」

「今は話しておる場合ではない。一気に片付けるぞ！」

「オツケー！！！」

白い龍の姿をした彼女がいれば百人力だ。次々に沸いて出てくるオニオコゼなど相手にもならない、今度はこつちの番だ。

「健、相手は魚だ。炎で焼いたり雷でしびれさせたりしてやれ！」

あと冷凍するのもいいぞ」

「了解！ とにかく数を減らさなきゃね……」

今持っている炎や氷、雷の力。それぞれを宿したオーブを駆使して群がるオニオコゼ型シェイドを蹴散らしていく。ほぼ全滅する寸前までに追い込んだが、そのとき。ひととき巨大なオニオコゼが現れた。体長は2.5メートルほどで、恐らく群れのボスだろう。

「シャゲエエエエエエエエ！！！」

大きく口を開け、巨大オニオコゼは火の玉を吐き出す。だが今更そんなものでは二人は止められない。高く跳躍して火の玉をかわして健はそのままアルヴィーの吐いた炎の後押しを受け、赤と青の炎をまとって突撃！

「食らえー！ー！ツ！！」

激しく燃え盛る炎をまとった突進で貫かれ、巨大オニオコゼは爆散した。着地した健は、残り火がくすぶる川べりにたたずむ。少し格好つけてエーテルセイバーを風車のようにクルクル回し、剣を仕舞った。アルヴィーも人の姿に戻り、地上に降り立つ。

「ほう、噂通りの実力だな。東條健……そしてアルビノドラグーン！」

土手の上から若い男性の声が聴こえる。爽やかだが腹黒い策謀を秘めたような口調だ。再び剣を抜いて身構え、坂を上がった先には包帯を顔に巻きコートやマフラーをいくつも重ね着した男がいた。

「私たちのことを知っているのか……お主、何者だ！？」
「くつくつく……よくぞ聞いてくれました。私は辰巳たつみゆすけ隆介！ 泣く子もだまるブラック会社、『ヴァニティ・フェア』の幹部がひとりッ！」

若干大袈裟な身振り手振りで、包帯の男 辰巳は名乗りを上げた。妙に高いテンションについていけず、健とアルヴィーは少し難色を示していた。

「ば……なんだって？ ヴァニライス？」

「……ちがあああう！ バニラじゃない、ヴァニティ・フェアだ！ 我らシェイドのためのシェイドによるシェイドのための企業組織ですっ！！」

健に組織名を間違えられた辰巳が激しく憤慨する。が、憤るあまりうつかり正体をバラしてしまった。咳払いして話題を戻そうとする辰巳をよそに、何か心当たりがあったのかアルヴィーは難しそうな顔をしていた。

「ヴァニティ・フェアか……聞いたことはあるぞ。辰巳とやら、お主らの組織に三谷や花形とかいう奴はいなかったか？」

「……ええ、いましたよ。そういえば、あなた方に倒されたんでしたっけねえ。まったく不甲斐ないヤツらだ」

「仲間がやられたのに、あんたらは何とも思わないのか！？」

「知ったことか。連中のような役立たずは我が社には必要ないのでね」

ニタア と、辰巳が不気味に笑って聞き流す。顔の包帯の隙間からのぞく鋭く大きな眼光もまた、おぞましい。この辰巳という男口調は一見丁寧だがさりげなく相手に対して無礼な口を聞いていた。慇懃無礼というやつだ、丁寧が過ぎてかえって失礼になっているのだ。

「そんなことより、街の方に行かなくていいんですか？ みなさん今頃、悲鳴を上げてお二方に助けをお求めになられているはずだ」「なにッ！？ どういうことだ！」

「クカカカ！ 行ってみれば、すぐにでも分かりますよ……では、また」

電柱の影に潜って辰巳はいずこへと消えた。ドライで終始自分を嘲笑うような態度に健は怒りを覚えるが、今はそれよりも街の人々が気がかりだ。

健は全力で疾走し、市街地へと向かう。そこでは多くの人々が逃げ惑っていた。「いったい何が……？」と目を丸くする二人のもとに、シェイドに襲われたと思われる一人の中年オヤジが現れた。

「あつ、あんたたち！ 早く逃げた方がいいぞ！ でなきや石にされちまう！」

「石……？ 何故ですか？」

「ば、バケモノがいきなり広場に現れたと思ったならみんなを石に……うぎゃああああ」

サラリーマンの中年オヤジが最後まで言葉を言おうとしたとき、生々しい音が響いた。何者かが背後からサラリーマンを切り裂いたのだ。

血のしぶきを上げたサラリーマンは、うめきながらゆっくりとその場に崩れ落ちる。サラリーマンを斬った何者かは手に持った剣についた血をなめずりまわすと、次は健たちに狙いを定めた。

「へッ……さつさと逃げりゃあ助かったものを」

「お前か！ お前がみんなを！」

「おうよ！ 俺様はアイアンガーゴイル！ テメーらがあまりに遅いもんだから、イライラしてこの人間どもをみーんな石にしてやったのさ！」

悪魔の彫像のような姿のシェイド アイアンガーゴイルが下品に笑った。彼が自分から話したように、周囲の人々は灰色の物言わぬ石と化していた。あまり卑劣で外道なそのやり口に、健は慟哭する。

「辰巳さんの命令だ。貴様らの首……切り落としてやらア！」

「ふざけるなクソ野郎！ お前を倒してみんなを元に戻すッ！」

一触即発　激闘がまた、始まるうとしていた。

EPISODE 102：スクラムの脅威（後書き）

レギオンフィッシュ

オニココゼのシェイド。小型で一匹一匹は非力だが、集団で行動する習性を持つ。

大きな口に生えそろったキバには毒が含まれており、噛み付かれたものは体内から焼かれるような苦痛に喘ぐこととなる。

3メートル弱もある巨大な個体が群れのボスとなり、ボスとなった個体は口から火を吐くなど他のものより遥かに強い。

EPISODE 103：悪魔の彫像と嘲笑う毒蛇

「貴様らごとき30秒で十分だ！」

アイアンガーゴイルが挑発し、同時に空へ飛び上がる。滑空しながら脇目も振らずに健へ突撃する。当たる寸前で健は横へ飛んで回避する。

「チツ！　かわしやがったか！」

地上へ降り立ったアイアンガーゴイルに斬りかかり、そのまま接近戦へと持ち込む。悪魔の石像のような外見に反して、相手はなかなかすばやい。その上攻撃も正確だ、なかなか隙が見つからない。

「どうしたガキがア！　うりゃっ！」

卑怯にもアイアンガーゴイルは健へ足払いをかけて、転倒させる。「卑怯だぞ！」と叫ぶ健に耳など貸さず、ガーゴイルは健を切り上げて吹き飛ばす。めげずに立ち上がる健を狙い、再び空中から突撃する。今度は避けず、当たる瞬間に反撃。地面に落ちたガーゴイルに唐竹割りを浴びせた。

「やるじゃねえか、だが……」

アイアンガーゴイルが後ろへ引き下がる。「何をやる気だ……」とアルヴィーが疑念を抱くが、その答えはすぐに出た。なんとアイアンガーゴイルは、あるうことが石化した人々を人質にとったのだ。しかもその人物は、健も良く知っている人物だった。

「これならどうだあ？」

「みゆきッ！」

「へへへ、知り合いだったのか……」

右手に持った剣を石化したみゆきにあてがい、ガーゴイルは「石化した人間を砕いたらどうなると思う？」と嘲笑いながら問いかけた。だが、健もアルヴィーも答えられなかった。いや、答えたくなかった。

「確かに俺を倒せば元に戻る。しかしその前に壊してしまえば……その人間は死ぬッ！」

「くっ……貴様！」

「ヒヤハハハハ！　そういうことだ、動いたらこいつの命は無いぜ！」

勝ち誇ったようにガーゴイルが笑う。石化したみゆきを盾にされては迂闊に動けやしない。それに卑怯な相手のことだ、他に自分が石に変えた人たちも盾にしてくれるかもしれない。

「へへへ、手も足も出まい……」

物言わぬ石となったみゆきを脇に抱えてガーゴイルがまたも笑う。だが、がら空きだった彼の背中を狙って誰かがガーゴイルを蹴っ飛ばした。その弾みで石にされたみゆきがその場に転がる。

「だ、誰だ……ぐはっ!？」

うつたえるアイアンガーゴイルへ、容赦なくビームが撃ち込まれる。次々に放たれ、最後には特大のビームがガーゴイルに爆裂した。

「ふーっ」

銃撃主は白煙を上げる銃口に息を吹き付け、煙を消す。おびえるガーゴイルに再び銃口を向け、威嚇する。

「わしのライバルの女に手エ出すとは到底許しがたいヤツ……」

「市村さん！」

「へへっ、すみませんなあ、遅れてもうて」

剣の健と銃の市村 両雄が肩を合わせ、共にアイアンガーゴイルへ武器を向ける。もはやこのような外道、真面目に相手をする必要などなくなつた。

「くそッ、生意気な……まとめてナマスにしてやる！」

滑空しながらアイアンガーゴイルが二人と一匹めがけてまっすぐ突撃。だが地上から市村に撃たれ、よろめいたところを龍に変身したアルヴィーから飛び移つた健によつてそのコウモリのような翼をもがれた。勢いを失つたガーゴイルは地べたへ落ち、そのままビームや斬撃、そして氷のつぶてや炎による猛攻を受ける。

「お、お前ら……俺様に何の恨みがあるんだ!？」

「うっさいわこのダボ! 早よう地獄に墮ちろや!」

焦燥を覚えたアイアンガーゴイルを市村が罵倒し、銃口からチャージしていたビームを射出。大きく吹き飛びコンクリートの壁に叩きつけられた。早く逃げないとやられてしまう! その場から逃げようとしたアイアンガーゴイルだったが、時すでに遅し。雷のオーブを剣にセットした健が跳躍し、ガーゴイルの背後に迫っていたのだ。

「ひ、ひぎい!?!」

「デエヤアアアアア!?!」

とどろく稲妻をまとった金色の長剣がアイアンガーゴイルを大きく薙ぎ払う! 悲鳴を上げるアイアンガーゴイルだったが、何故か健の技は効いていなかった。

「な、なんだ。アルビノドラゴン白龍と契約したエスパーさんって案外大したことねーな……ウツ!?!」

何事もなかったかのように歩き出したその時である! アイアンガーゴイルの体内に入り込んだ技の余剰エネルギーが、彼の体内で爆発したのだ。

「ウゲエエエエガアアアア!?!」

あれれ、もとい、哀れにもアイアンガーゴイルはマイクを一本破壊しそうな叫び声を上げて大爆発、チリと化した。卑怯者にふさわしい末路である。

「ざまあみるやい……」

「まったくですよ」

アイアンガーゴイルが死ぬと同時に、灰色の石にされていた人々が元に戻った。もちろんみゆきも自由の身だ。

「……健くん! アルヴィーさんに市村さんも……」
「もう大丈夫や、みゆきちゃん。わしと東條はんとあね姐さんで頑張ったさかい、石にされてた人みんな元通りやで」

石にされていた間は記憶がなかったのか、状況が飲めず戸惑うみゆきに、市村がサムズアップしながら素敵なスマイルで状況を説明する。刹那、アルヴィーから「姐さんと呼ぶな！」と鉄拳による制裁が下った。もしかして、恥ずかしかったのだろうか。

「次に姐さんと呼んでみる。目潰しか四の字固めを決めてやるぞ、ふっふっふ……」

「アルヴィーの関節技は強力ですよー。市村さん、ただじゃすまないかもクツクツク……」

不敵に、時にいやらしく笑う二人を、殴られた弾みで地面にコケた市村はおびえた子猫のような目と姿勢で見つめていた。額から流れる冷や汗が何とも言えない。

「暗くなってきちゃった……さ、みゆき。みんなで帰ろう」

「うん！」

何はともあれ戦いは終わった。明日に備えて、夕陽をバックに健たち4人は土手を歩いて帰路に

「……おっと、君たち。誰か忘れていないかな？」

帰路につきたかった。だが、それを許さないものがいた。先程現れて市街地で人々が襲われていることを告げた包帯に厚着の男辰巳隆介だ。

「……あんたは、辰巳！」

「三谷に花形、そしてあのガーゴイルと　ことごとく私の部下を倒すとは大したものだ。どうやら、我々は君たちを過小評価していたらしい……」

右手をくいくいと動かし、辰巳は憎らしげに笑う。

「……誰でつか、このミイラ男か透明人間みたいなヤツは？」

「こやつは辰巳……泣く子も泣き止まないブラック会社、バナラ・アイスの幹部だそうだ！」

わざとか、それとも天然ボケか……辰巳にメンチを切る市村にアルヴィーは辰巳のことを簡単に説明したが、所々間違っていた。

「違います！ 私は辰巳……泣く子もだまるブラック会社、ヴァニティ・フェアの幹部がひとりだ！ 次から間違えるなよ！」

辰巳がガミガミ怒りながら間違っていた箇所を訂正し、言い直す。わざわざ健たちを指差して催促まで入れた。

「おほん！ 本題に戻らせていただく。東條健と市村正史、そのお知り合いの風月さんとお見受けしましたが……」

「……それが何か」

眉をしかめ、健とアルヴィーがしかめっ面で辰巳を睨む。念のため言っておくと、アルヴィーはガーゴイルを倒した辺りで人間体に戻っている。

「そのうち東條さんと市村さんには是非とも我が社に来ていただきたい。人間とはいえあなた方は強力で将来有望なエスパーだ。上層部には私から話をつけましょう。給料も弾みますよ」

「……お断りや」

「そんなのこつちから願ひ下げだ。あんたにはついていけない」

答えは一目瞭然、全員が満場一致で『NO』と答えた。現在進行形で人間を襲っているシエイドに協力することなどできない。

アルヴィーや糸居まり子のように人間が好きだったり無益な殺生を好まないものはともかく、今話している辰巳からは悪意と卑しさしか感じられない。こんな奴についていく必要はあるのだろうか？
ないに決まっている。

「そうですね……それは残念だ。ならば仕方ありませんね」

呆れて手を広げる辰巳。少し疲れたような口調だったが、恐らく苛立っている。神経質で気難しい彼は、ことが自分の思い通りに運ばない事を良しとしない。

「だが、私もただで帰るつもりはない……逆らった報いを受けていただきますよ」

包帯の隙間から見える鋭い目がオレンジ色に光った。とつさに健は「伏せて！」と全員に呼び掛け、自身は盾を構えて他の三人をしやがませた。背後で小さな爆発が起きたので振り向くも、幸い誰にも当たっていないかった。

「ちっ……流石にこけおどしは通じないか」

「あいにくな、わしら戦い慣れてんねん。あんなんで倒せると思うたら大間違いや」

「また減らず口を……余興は終わりにしますか」

少し気合いを入れて、辰巳は低く唸り声を上げた。体が黒く染ま

ったかと思えば、だんだんと禍々しい姿に変わっていき　気がつくくと三つ首の蛇のような不気味な怪人になっていた。

肩が蛇の頭になっており、更に右腕は紫で左腕は緑で、真ん中の首と胴体はケバいい水色だった。無理矢理つぎはぎにしたような雰囲気、顔を漂わせており、極めて醜悪で腹黒い本性をこれ以上ないほどに表現した姿だった。まるで、ギリシャ神話に登場する不死身の水蛇^{ヒュドラ}を髣髴させる。

「へひやハハハハハハ！　これが私の真の姿……ヒュドラワインダ―だ―！」

その見た目通り、凶暴で残忍な口調で辰巳が叫ぶ。先程までの慇懃無礼で冷静な口調でしゃべっていた彼とはもはや別人だ。さつそく真ん中の口から毒液を吐き出し、一同を牽制する。

「東條はん、みゆきちゃんはわしに任せとき！　あんたはあのキシヨいへび野郎に集中するんや！」

「わかりました、お願いします！」

白龍に変身したアルヴィーと共に健は辰巳に向かって走っていく。一発入れようとするが、辰巳はそれを避けて健の脇腹を鋭い爪で切り裂く。毒でも塗ってあったのか、出血が酷い。手で押さえても血が止まらないのだ。

「うっ……！！」

「ノーコンめ！　正確な攻撃もできないのか？」

右肩のへびの首が伸びたと思いきや、すぐに口から炎を吐き出した。盾で防ぎ、炎が途切れた隙を突いて攻撃を加えようとするが、逆に隙を突かれて腹を殴られてしまう。

「まだまだ青いな……ぬん！」

よろめく健に容赦なく、両肩のへびの口から吐き出された火炎と毒液の波状攻撃が襲いかかる。かわしきれずにそのまま浴びてしまい、健は坂を転がり落ちてしまった。「健くんッ！」とみゆきは悲痛な叫びを上げる。

「クツクツク………そこで見ている！ 大切な人が目の前で死ぬのをなあー！」

狂気じみた笑い声を上げながら辰巳は坂を飛び降りて健をいたぶりはじめる。爪で切り裂き、足のつま先で蹴り飛ばし、肩のへびを伸ばして噛みついたり首を絞めたり。その方法はあまりに非人道的だ。ずっと人々を守るために戦い続けてきた健が成す術なく敵に蹂躪されるその光景は、あまりにも凄惨で残酷だった。みゆきは耐えきれなくなつて慟哭し、市村は外道すぎる辰巳のやり方に激しい怒りを感じていた。

「はあっ、はあっ………」

「ハッハハハ！ こんなものか青二才め！！！」

果たして、健の運命は？ 戦いはまだ、始まったばかりだ。

EPISODE 104：決死の三位一体

目を両手で覆いたくなるほど惨たらしく、目を背けてしまうほど痛々しく。自分にとって大切な人、あるいは自分にとっての宿命のライバルである東條健が、何もできずに立ち尽くすみゆきと市村の眼前で抵抗むなしく蹂躪され、悲痛な叫びを上げている。

「うつ……くッ」

「みつともないな。いつまで私に抗う気かな？」

体を冒していく毒と、著しいダメージによる苦痛に喘ぐ健。そんな彼を嘲笑い、三つ首の蛇のような姿を現した辰巳は健の体を踏みつける。すぐに彼の体を強引に起こすと、鋭い爪を咽喉いんこうに突き立て

「時にはあきらめも肝心だぞ……ぬんッ！」

腹を強く殴った。フェンスに叩きつけられ、その衝撃で吐血し頭から血を流しながら、健はその場でうなだれた。

「ぐっ……グハッ」

「驚いたな、まだ息があったか。普通ここまですれば死ぬもんなのだが？」

「し、死んでたまるか……」

これほどの血を流してもなお健は立ち上がり、剣と盾をその手に握りしめる。その隣では、アルヴィーがヒュドラのような姿の辰巳に対して睨みを利かせていた。

「お前みたいなヤツがみんなを襲う……泣き叫ぶみんなを嘲笑う！
そんな奴らの好きにはさせない！！」
「ふん、何を言うかと思えばなんと陳腐な」

息を吹き返したような、力強く勢いのある動きで辰巳に斬りかかる。それを防ぎきれず、辰巳はそのまま斬られてよろめく。更に間髪を入れず、健は斜め上への切り上げと切り下ろし、唐竹割りと空中からのかち割り攻撃をいっぺんに浴びせた。

「ば、バカな……貴様は毒と著しいダメージで弱っているはずだぞ」
「そんなの気合いでなんとかなるッ！」
「チイツ！」

回転斬りとそこから繋げて縦に武器を振り下ろす連続攻撃！そこから更に上空へ打ち上げ、高く跳躍して辰巳を地べたへ叩き落とす。地面にくぼみが出るほどの威力と衝撃を与えた。

「おつ……いけるか！？ いや、行けるわコレ！ 東條はん勝てるかもしれない！」
「希望がちよつとだけ見えてきたわ……健くん、お願い。負けないで！ あいつに勝って！！」

彼らの目に一筋の光が見えた。既に毒に冒されたにも関わらず、それを押しても辰巳と戦う姿は頼もしいものがあつた。市村とみゆきの声援を受け、奮い立った健は渾身の一撃を繰り出し辰巳を川岸へと吹き飛ばす。苛立つようなうめき声を上げ、上半身を起こすと「痛いじゃないか！」

「だが、これしきの傷は……屁でもない！！ むっつっつっつんッ」

頭の皮をつまんで少し気合いを入れて唸ると、すっぱりと皮が脱げてその下にはツルツルした質感でピカピカと光る新しい肌が光っていた。

「だ……、脱皮した!？」

「ハツハハハ！ 残念だったなボウヤ！ ヒュドラは死なない！ こうやって脱皮すればいくらダメージを受けようがチャラに出来るのだ!！」

ヒュドラは実際脱皮していたのかどうかは分からないが 現実のヘビは脱皮して大きくなる。その原理を応用したかどうかは不明だが、辰巳はこうやって受けた傷を無かったことにすることが可能。更に脱皮せずとも、少し気合いを入れたらその場で再生できる。だが、脱皮しない場合は限度があるらしい。

「くそつ、そんなのありが！ ズルいぞ!！」

「ズルいもへつたくれもない！ 勝負はあつたな東條健……人間は傷の治療はできても、自分の意志で再生することはできん。脱皮して皮を新調することもな！ つくづく弱い生き物よなあ……なぜ貴様らのようなチンケで弱い生き物にその白龍が味方するのか？ 信じられんよ!！」

ゼエゼエと息を切らしながら、仁王立ちして勝ち誇る辰巳を睨む。腰を落として剣を構えている健の隣で、アルヴィーは低く唸っていた。

「あのヘビ野郎、ふざけおつて……！ なんちゅうヤツや!！」

「健くん……アルヴィーさん……」

「なんとでも言え！ こいつが死んだら外野の君たちにも後を追わせてやるつ。その時までこのクズが苦しむさまをとくと見ておくが

いい」

落ち込み、または憤る二人をあしらい、真ん中の首が口を大きく開けると強酸が吐き出された。健はこれを転んでなんとかかわすが、振り返ると 健の代わりに直撃した地面がドロドロに溶けていた。「あぶなかった……」と呟いて安堵するが、直後にヒュドラワインダーは自らのキバを抜き なんと、そのキバをサーベルのような形に変えた。

「そろそろ爪を研ぐのも飽きてきたのでね…… 今度は真つ二つにしてやろう！ このハイドラサーベルでな！！」

彼がハイドラサーベルと呼ぶ、この毒蛇のキバを模したようなデザイン凶刃は猛毒を秘めており、いかなる金属も貫き粉碎するといわれている。それだけ強力でガードも難しいということだ。巧みな剣さばきは付け入る隙もほとんどなく、今の健には相手の攻撃をかわすか防御することしか出来なかった。

「シャアアアアア！！」

「ぐあっ！！」

やがて動きが緩んだ隙を突かれ、毒を秘めた斬撃をその身に受けてひるんでしまう。辰巳の爪に仕込まれていた毒と、ハイドラサーベルに含まれていた毒が重複したか 激しい疲労が健を襲い、視界がぼんやりと霞んでいく。

「ハッハッハ！ いくらエスパーといえども所詮は脆弱な人間ではない！ それだけ毒が重複すれば生きてはいられんよ！！」

「はあ……はあっ、ウツ」

目の前には喉元に突きつけられた毒牙。その傍らには、泣き叫び崩れ落ちる幼なじみと怒りのあまり敵へ銃を向ける、一応ライバル扱いの青年。敵は強い、ここでやられてしまえばあとの二人も間違いないく助からない。二人を助けるため、ここは自分が踏ん張るしかない。

「クツクツク……痛いか、苦しいか？ 早く楽になりたがるう。さあ、助かりたければ私に許しを乞え！ 泣きわめけ！ 命乞いをする！ そうすれば命だけは助けてやる……」

「へっ、誰がするもんか……お前なんかに！」

「ごさかしい！！」

要求を拒んだ健の顔を殴り、転倒。辰巳はハイドラサーベルの切っ先を向け、健の胸に突き立てようとす。

「善人ぶりおって……ヘドが出るわ！ 君も男なら潔く負けを認める」

そう吐き捨て、狂気じみた笑いを浮かべながら剣を上へと上げる。

「そして……、ブザマに死ねッ！！」

グサリ、と、健の左胸を凶刃が貫いた。声も出さずに健は驚愕の顔を浮かべ、そのままゆっくりと 地面に崩れ落ちた。

「うわはははは！ まあこんなもんさ！！」

辰巳が高笑いを上げる中、みゆきと市村は深く悲しんでいた。パトナーを手にかけれられ、怒りに震えた白龍は けたたましい咆哮を上げた。そして倒れてもなお、健をいたぶり続ける辰巳を見て、

みゆきはついに感情を押さえきれなくなり。

「健く　　んッ!!!」

天に向かつて慟哭した。叫んだところでどうにもならないことは分かっていた。それでも爆発した感情を抑えることはできなかった。それほどまでに大切な人を傷つけられたことが耐えがたかったのだ。

そのときである！

「くくく、叫んだところで何も起きないぞ！　さあ、次はお前たちの番だ……ん!?!」

突如として健が息を吹き返し、立ち上がったのだ。心臓を貫かれたはずの彼が、なぜこうやって息をして立っているのだろうか。

「き、貴様ア！　死んだはずでは無かったのか！」

「へへっ　　残念でした」

片目をつぶり息を荒くしている彼が、上着の胸ポケットからポロポロになった何かを取り出す。それは　　血で汚れ、ひび割れた白いウロコだった。かざした瞬間にパラパラと崩れ落ちる。

「アルヴィーからお守りもらってて良かった　　。これがなかったら、さすがの僕も即死だったよ」

その白いウロコは　　かつてアルヴィーが自分の体から剥がして

健に与えたもの。周囲の気温にあわせて自動で温度を調節し、シエイドが現れたら音を響かせて知らせてくれる優れものだ。健は普段からこれを持ち歩き、もっぱらお守りがわりに持ち歩いていた。それがここで、健の命を守るために役目を終えた　　というわけだ。

「これが砕けたとき、あなたの毒もきれいさっぱり消えた……それだけじゃなしに、僕に活力も^{エネルギー}与えてくれた。こんな機能があるなんて知らなかったけどね」

アルヴィーも知らなかったのか、それとも面倒くさがって教えなかったのか？　健自身もこのことについては知らなかったらしく、少し驚いたな様子で語っていた。それを見ていたみゆきと市村は、「生きててよかった……」と口々に呟いた。

「ぐぬぬ……そんなものはハツタリだ！　都合が良すぎるぞー！」
「そうか、お主……こーいうご都合主義は嫌いだっただかの？」
「クツソオオオオ！！　この死に損ないどもめ、今度こそ仕留めてやるッ」

しゃべる余裕ができたアルヴィーのメタ発言に、辰巳はいきり立って襲いかかる。しかし雑ぎ払い攻撃を受けてサーベルを弾き飛ばされ、怒った彼は口から毒液を吐き出して健を溶かそうとする。だが、転がって難なくかわされた。

「生意気なあゝッ！　プロの技を味わわせてやるッ！」

あきらめの悪い辰巳は肩のへびを伸ばし、健の首を絞める。拘束すれば動けなくなるから、その隙にいたぶってやる……と考え、ツメを振りかぶるが逆に肩のへびごと斬られ「げふっ！」

ると、突如として刀身が赤・青・黄色の3色に輝き。

「た、健……お主いま、何をした？」

「え？ な、なについて……その、3つ同時にはめたらそのパワーで相手を倒せるかもしれないって思ったんだけど……うわっ！」

すさまじいエネルギーだ。激しい炎と冷氣、そして稲妻　3つの力が唸りを上げて飛び交う。近付くだけで燃えるか凍りつくか、痺れるか。そのくらい危険な状態だった。さすがの辰巳も、これには（元々青いが）顔を蒼くせざるを得ない。これなら間違いない。奴を倒せる、と思った。だが現実には甘くはなく、強すぎる力に彼の体は振り回され。

そう、暴走する剣に振り回されているのだ。

「あ、熱い！」

まず一発目、炎を伴う斬撃。地獄の業火のごとき勢いで燃え盛る炎の波に、辰巳の体は飲まれていく。

「っ、つめたい!!」

二発目は、冷たすぎて輝くほどの冷氣を帯びた一撃。炎を消し去ったそれが辰巳を凍てつかせ、その身を切り裂くのは時間の問題だった。不死身の怪物にして巨大な毒蛇であるヒュドラも、平たく言ってしまうと変温動物に分類される。ゆえに先程の業火とあわせて急激な体温の変化についていけず、身体に致命的なダメージを受けてしまったのだ。

「し、しびればびねぶーっ！！！」

最後の三発目は、激しい稲光をまとったトドメの一撃。爆発して轟くようなその必殺の一撃が直撃した辰巳の体はもう限界を迎えている。耳をつんざくほどの叫び声を上げ、そのまま食えそうなくらいこんがりと焼き焦げた彼は地面をすべりにすべった拳句硬い堀に叩きつけられた。ここまでされれば、再生には途方もない時間がかかりそうだ。とても戦えるような状態ではない。

「く……くそ、傷がうまく再生できん」

ヒュドラのような姿から包帯を巻いた厚着の男性の姿に戻り、負傷した片腕を押さえながら立ち上がると

「まさかその剣にそんな力があるうとはね……もしかして、本当に帝王の剣だったりしてな」

「えッ!? あんた、帝王の剣のこと知ってるのか!？」

「すまないが、それは教えられないな。……また会いましょう!」

辰巳は健が知りたいことをはぐらかして返事をする、咳き込んで血を吐きながら隙間に飛び込んでいく。そのままどこかへと姿を消した。同時に、安堵していた健がうめき声を上げて地面に倒れこむ。

「健くんッ!」

「東條はん!!」

「健ッ! 無事か!？」

ぐったりと倒れた彼のもとに、誰よりも健を心配していた二人と、

龍から白髪の女性の姿となったアルヴィーが駆け寄る。もしや、さっきの激しい戦いで受けたダメージがたたって死んでしまったのでは　みゆきが不安になりながら彼の手首をつかんだが、まだ脈はあった。更に喜ぶべきことに、健はその上半身を起こし

「へ、平気だよ。ちょっと……疲れちゃっただけさ」

笑顔でそう語った。心配しすぎだった。何の根拠もなく、彼はいつだって元気で明るく振舞っている。恐怖を与えようとする怪物から、人々の笑顔を守るために戦っている。そんな彼からすれば、これしきのことは大して苦しくはないのかもしれない。彼を見て、周りに駆け寄っていた3人は安堵の表情を浮かべた。

EPISODE 105：修羅場の予感？

その頃、健が住んでいるアパート『みかづきパレス』では。

「お兄ちゃん遅いな〜……」

健の部屋でまり子が茶の間に座ってテレビドラマを見ながら、義おにい兄ちゃんの帰りを待っていた。器に盛られたせんべい（しょうゆ味）を食べながら。

「うっ、うっ……イイ話だなー」

ちょうどドラマモラストシーンに差し掛かっており、夕陽が沈む中で若い男女が岬でお互いに抱き合ってキスをした。そして次のカットでは夕陽が沈む海をバックにでかでかと『完』の文字が浮かんだ。これにてこのドラマはジ・エンド　というわけだ。感動のラストにホロリと涙を流したあと、まり子は突然なにかを思い出したように笑い出す。

「あははははっ！　あーっ、面白かった！　それにしてもお兄ちゃんまだかなー。シロちゃんもまだかなあ」

ドラマも見終わったので、まり子は他に面白そうな番組がないか探すためにチャンネルを回し出す。ニュースに子供向けの教育番組、アニメに野球中継　目ぼしいものは見つからなかったので、とりあえずニュース番組を観ることにする。町中で人が突如として石化した事件がピックアップされており、まり子はこれを食い入るように観ていた。というのも、ある青年のお陰で無事に解決した　と

いう情報が気になったからだ。「もしかしてお兄ちゃんが……？」と推測していると、玄関からブザーが鳴った。気になってドアを開けに行くところ。

「お兄ちゃんっ！」

「ま、まり子ちゃん……いい子にしてた？」

健が帰ってきた。彼だけではなく、アルヴィーはみゆき、それから市村も一緒だ。だが、まり子はみゆきとはお互いに認識がなく疑惑を抱いた視線を健に浴びせた。

「お兄ちゃん……この人、誰？もしかしてカノジヨなの？」

「健くん……この子誰よ？親戚の子？」

「えっ？いや……あの……なんて言ったらいいのやら」

いっぺんに訊ねられては答えにくい。しかも二人とも凄い剣幕だったからおさらだ。健はうろたえてばかりで何も答えられていない。近くにいた市村も何とか機転を利かせて事情を説明しようとしたが、どう説明したらいいか思い付かず結局何も出来ずじまい。そこでこの状況を打破しようと、アルヴィーが「事情はあとだ！とにかく上がらせてくれ！」

「……へえ。このまり子って子、アルヴィーさんと同じで人間好きなシェイドだったのね……」

「ふーん。このみゆきって人、お兄ちゃんの幼なじみだったんだね」

あまりくどくどと話しても相手にイライラを募らせてしまうため、とりあえず健とアルヴィーは簡潔に事情を説明した。先程の戦いに

よる疲れも相まっつてか、健は今にも死にそんな顔をしていた。足はふらつくし手はすぐにへたるし、何より体がボドボドだ。これでまだ息をしているというのが奇跡的に思える。市村はそんな彼の代わりに、台所で料理を作っていた。といつてもちよūd余っていたキヤベツや豚肉、まだ使っていなかったお好み焼きの粉を使用したお好み焼きだが。

「はーっ、良かったわ。赤の他人で。てっきり隠し子かと……」

「か、隠し子！？ 誰とのだよっ！！」

「アルヴィーさんとの間に決まってるでしょー、もう」

「えーっ！ そんな風に思われてたなんて……」

まり子の（外見）年齢的に無理があるが、どうやらみゆきからはそう思われていたようだ。がつくし、と、健は肩を落とす。そこへ市村がやってきて、

「おまちどーさん！ お好み焼きできたで、みんなで食べてちょうだい。わし店の方に戻るさかい、あとは皆さんごゆっくり」

大きな皿に乗せたお好み焼き焼き（四人前）をテーブルに置いて、そのままアパートを出ていった。行き先はもちろん彼の店である移動屋台だ。

彼が去ったことで、残されたのは女が三人。男が一人。何となく嫌な気配がしたが、とりあえず何も気にせずにお好み焼きとごはんを食べ始める。

「うまいー！ 市村さんのお好み焼き、おいしいねーっ」

「ホントウマイよねー！ あたしも見習いたいくらいだわ」

「たこ焼き屋あらためお好み焼き屋を名乗るべきだな、うむー！」

「ハハッ！ これぞ関西のグルメだね！ 豚肉とキャベツがよく焼けてるし、ヤマイモもいい味出してるよな！」

四人とも口々においしいと口走っていた。だがその一方で健はひとりで勝手に将来起こりうるであろう出来事を妄想し、そうなるっってしまうことを恐れていた。

（今は小さいが将来クールな巨乳美女になるであろうまり子ちゃん、胸のサイズは並だが可もなく不可もなくバランス良好でマイルドな幼なじみのみゆき、そして今のところパートナーとして好意を寄せられているが何だかんだで僕に異性として興味を抱いているかもしれないなくてセクシーダイナマイツ！ なアルヴィー……）

今でこそ（表面上は）仲良くしている三人の女たちだが、もしかすればそのうち健を巡って醜い争いを繰り広げるかもしれない。血で血を洗うような戦いにまで発展するかもしれない。健はそれが怖いのだ。

（修羅場だ………これは間違いなく、将来修羅場だ………）

「申し訳ございませんッ」

彼はいま、囲まれている。自分以外の幹部や社員が座している円卓の真ん中で汗にまみれて怯えながら、伏せた視線の先にいる社長 甲斐崎と向き合っている。同僚や部下たちの視線が冷たく、彼の背中に突き刺さっていた。

「部下に手本を見せてやるつと出撃し、例の青年と戦いました。途中までは順調でしたが、その……予想外のアクシデントが起きてしまいました」

「……ほう、それで？」

「結果として当分は戦闘が出来そうにないほどの重傷を負いました。やはり奴を甘く見るべきではなかったと私自身、深く反省しております！」

能面のように無表情で死んでいるような雰囲気を漂わせる社員たちと、険しく冷徹な顔で辰巳を見つめる同格の幹部たち、そして甲斐崎。皆の視線が痛い。包帯に隠れていて見えないものの、辰巳はひどく狼狽し震えていた。震えたまま頭を下げ、

「今後同じような失敗は二度としません。……この通りです！ どうかお許しくださいッッッ！」

「……見苦しいぞ。下がれ。治療に専念してさっさと現場に復帰するんだな」

「……ハッ！ 承知いたしました！」

いちおう彼は、許してもらえたようだ。円卓のある会議室をあとにし、彼は廊下へ出た。扉を静かに閉めてうつむきながら歩いていると、通路の脇で立っている大柄な壮年の黒人男性の姿が目にとまった。彼の部署で働く部下である……ミスター・アンドレだ。戦い慣れた佇まいとスキンヘッド、それから鋭い眼光が威圧感を醸し出していた。

「辰巳さん、甲斐崎さんはなんと？」

「社長ならへこへこしてる私の姿が見苦しいから下がれとおっしゃったよ……他には治療に専念しろとも言っておられた。こたびの失敗を許してもらえたかどうかはわからんが」

ため息混じりに辰巳が語る。相変わらず包帯をしていて表情をうかがえないが、恐らくは著しい疲れを帯びた顔を浮かべていたのだろう。その後アンドレに延々と会社や仕事に対する愚痴や不満を聞いてもらいながら、彼は休憩室へ足を踏み入れる。

基本的な構造は人間の会社のそれと同じであり、ゆえに一部の者からは反感を買われていた。自販機も人間のそれを模倣している。自販機には会社の特徴をよく表した禍々しいプリントが施されており、賛否両論別れているが基本的にはそのデザインは好評を得ているようだ。

「……苦労なさっているんですね」

「ああ……幹部になるというのは大変だぞ。上司と部下の間に板挟みされるしネチネチ嫌味言われるし暴力振るわれるしとにかくボロクソ言われるし部下は言うこと聞かないし毎日毎日残業させられるし……はあ~~~~っ」

「胃もたれとかしてませんか？」

「してないよ……」

コーヒーを飲みながら、貯まっていた鬱憤を晴らすように。辰巳は休憩室へ来るとき以上に愚痴と不満を連ねていた。そのくたびれた面倒くさいオッサンのような語り口にアンドレはやや引ききみになりながらも、彼の機嫌を直そうとなだめはじめ。幹部に昇進した日には、いずれは自分もこうなってしまうのだろうか。

「なあ、アンドレ。君も不満とかあったら遠慮なく吐き出していいんだぞ。愚痴も立派なストレス解消法だからな」

「いえ、とくに不満はありませんが……ただ、ひとつだけ」

「なんだ、言ってみろ」

本当に言ってしまったでもいいのか、と言いたげに　アンドレが戸惑う表情を見せる。冷静沈着な彼にしては珍しいことだ。彼はもう何年も勤めているベテランだが、仕事以外での殺生をしない、お人好しがすぎるなどの理由から中々業績を上げられていない。その点に関して何度も幹部連中や部署での上司である辰巳から注意を受けていたが、そのやり方を変えるつもりは無かった。彼にも意地がある。ずっと戦いに身を置いてきた勇猛な戦士としての意地と矜持を捨てられないのだ。　これが実際の会社なら速攻でクビにされてしまうが。

「ひとつだけあるとすれば……上司が口ばかりで嫌味ばかり言うてきていつも偉そうで珍しく優しい態度を見せたなと思ったら今度は愚痴と不満を自分にぶちまけてきてやっと終わったと思ったら誰が得するかサッパリ見当がつかん昔語りをしてきてもうとにかくうるさい！　こんな感じでしょうかね」

「……もしかそれは私のことかな？」

「はい、そうですとも」

「こいつめ！ 誰のお陰で働けると思ってたんだ、ハハハッ」
「ですな、ワハハ！」

実のところ失礼に当たらないかどうか心配していたのだが、結果は見ての通り笑い合いに発展という形になった。半分冗談だったからか、とアンドレはひとり安堵する。存分に笑い、再び廊下へ出たあとに辰巳が、「そっぴやお前、またあの青年と戦いに行くんだっ
たな」

「はい」

「……受け取れ」

懐から怪しげな紫の液体が入ったアンプルを取り出し、アンドレに手渡す。以前三谷が死の間際に服用した増強剤だ、全能力を三倍に引き上げるという恐ろしい効果を持っている。

「これは……ネクロエキス！」

「ああ。我々シェイドの能力を限界まで強化する劇薬だ。その代償として寿命が急激に縮むが、三谷はそれを知らずに使った……」

「彼は組織の中でも末端でしたからな……つくづく不憫なヤツだ」

アンドレが『ネクロエキス』が入ったアンプルを見て複雑な表情を浮かべる。本来は喜んで受けとるべきなのだろうが、それも行かなかった。何故ならこれは、最後までヴァニティ・フェアという会社のために戦って死ぬか、あるいは会社を辞めて屈辱を受けたまま生き続けるか という重要な選択肢だからだ。

そして死刑宣告でもあった。確かに辞めることは出来るがその場合、反逆者の烙印を押され上層部や同僚のものたちから罵詈雑言を浴びさせられる。更にヴァニティ・フェアを辞めたことを一生責め続けられる。シェイドは人間と違い何百年以上も生きられるため、

下手をすれば死ぬまで屈辱を受け続けるはめになってしまう。

そうなるくらいなら死んだほうがマシだと言えよう。会社に逆らえば死あるのみ。どうせ死ぬのなら、いつそ会社のために散っていく方がいい。そう考える者の方が圧倒的多数を占めているのが現状だ。

「だが君も私も、この劇薬の効果は知っている。使うかどうかは君が決める」

「私がですか？」

「最期まで会社に尽くすか、それともこんな会社辞めてよそで働か、だ。ただ私は、できれば部下を鉄砲玉にしたくはない」

「……わかりました。出来る限りのことはやってみます」

ネクロエキスを懐に仕舞うと、アンドレは辰巳の下を去っていく。彼は、健たちとの決着をつけに向かったのだ。ヴァニティ・フェアの社員として、または誇り高き戦士として。お世辞にも現在の健の状態は万全とは言いがたいが、果たして両者ともどう出るだろうか。

その頃健は、いつもどおりバイト先で働いていた。ウロコが砕け散った代わりにもたらされた回復効果の恩恵は大きく、こうして働ける程度の状態になるまで体力が回復していた。あれほどの傷だ、本来ならそのまま死んでいただろう。ウロコのお陰で辰巳に辛くも勝てたようなものだ。戦いはじめて以来の付き合いだった『お守り』がなくなってしまったのは少々寂しいが、あのウロコとそれを与えてくれた相棒アレクサイには感謝しなければなるまい。感謝してもし足りないのは目に見えているが。

「もぐもぐ……我ながらおいしいなーっ」

ちょうど今は昼休み。早起きして作った弁当を食べながら、健はネットサーフィンを楽しむ。主に大型掲示板やニュースサイト、その他には彼がいまハマっている特撮番組『電影戦隊スクリンジャー』、『兜ライダーMAX』の公式ホームページを見て回っていた。元来特撮というのは、基本的に児童向けのヒーロー番組である。だが、児童向けだからといって侮ってはいけない。健のような大人が観ても楽しめるつくりとなっていているからだ。いくつになってもヒーロー、それに対抗するライバルや悪役はカッコいいものである。怪人が倒された際にドカン！ と爆発するのも変えがたい爽快感があつてなかなか良い。一方でどの作品も物語に深みがあり、ひとつのドラマとしても楽しめるのも良い部分のひとつ。特撮番組やロボットもののアニメを（無論他のアニメも）心から楽しんで観賞している健は実に、日本男児らしい趣向を持っていると言えよう。

「ぬう……最近こんな事件ばかりだ。なんでこんな事するのか本

「当に信じられない」
「とーじょーくんっ」

最近発生しがちな、理不尽な犯罪に対して苦言を呈していると背後から突然声をかけられた。声の主は彼の先輩に当たるOLの浅田だ。「うわッ」と声を上げ、健は机に伏せながら首を浅田に向ける。

「最近物騒な事件多いけど、大丈夫？ ケガとかしてない？」

「はい。僕なら今日も元気です！」

「それは良かった！ この前、人が石にされる事件があったでしょ。あれに巻き込まれてないかって心配になっちゃって……」

「そういえば、そんな事件がありましたね……」

他人事のように健は言うが、彼は思い切りこの事件に巻き込まれていた。しかも解決までしてしまった身だ。でもそれを話すわけには行かない。出来れば自分が戦っていることは内緒にしておきたいからである。余計な迷惑を他人にかけたくはない故の決断だ。辛いことだが、人々はみな怪物シェイドに怯えている。彼らをこれ以上苦しませたくはない。だから健は戦わなくてはならない。人々が本当の意味で安心できるまで。

「あの時ねー、あたしの友達が石にされちゃったのよねえ。もしかしたら助からないんじゃない……って不安になっちゃったのよ」

「確かにそれは不安になりますね……それでその、お友達の方は助かったんでしょうか？」

「誰かが人を石にしたシェイドを倒して助けてくれたそうよー。二ユースでも取り上げられてたから、たぶん東條くんも知ってるはず。果たしてどんな人だったのかなあ……」

「ここで「それは自分です！」などとは口が裂けても言えない。正直やや面倒くさい状況だ。どう切り抜けたらいいのか、健は少し悩んでいた。そこへ今井とジェシーもやってきて、仲良しOL三人組が勢揃い。

「きつとあの噂のエスパーさんですよ」

「強くて優しくして……しかもカッコいい人よ。そんな感じがするわ」

「まさか、東條くんみたいなカンジの？」

「そうそう、そんな気がするの」

ドキッ！ と、一瞬 健の心臓が止まった。ジェシーは以前シエイドの魔の手から健によって救われている。その時に彼がエスパであることを知った。彼女のことだ、シエイドから救ったときに交わした『今はまだみんなにはナイショ』という約束を破るようには見えないし、話の中でうっかり話してしまうこともなさそうだが。

「あれ、東條さん……さつきから顔が青いような気がするんですけど、大丈夫ですか？」

「ご、ご心配なく！ 僕なら大丈夫ですから！」

「そ、それは良かった」

自分が元気であることをアピールする健。しかしやや空回りしており、OL三人組も含めた周りの人々は少し引いていた。

「さ、さて、気を取り直して……違う話題してみない？」

「そうね……あ、インターネット上で好きなことをつぶやけるサイトがあるんだけど、皆さん使ってるかしら」

「『つぶやいたー』だっけ？ あたししょっちゅう使ってるよ！」
「違う違う、カタカナで『ツブライター』です。僕もバスとか電車
の中でよく呟いてますよ！」

「気軽に書き込めていいですよねーっ」

「でも仕事中に呟いたらダメよ。立派なサボりになりますから」

パソコン・携帯電話の両方から呟けるインターネット上のサイト・
ツブライター。その利用者は数えきれぬほど多く、インターネット
に繋げる環境がある者はそのほとんどが利用しているようだ。その
中には芸能人やタレントもいるらしく、利用している層の幅広さが
伺える。健もこの『ツブライター』を利用しており、通勤中や帰宅
中などにしょっちゅう自分が思ったことを呟いているらしい。なお、
この『ツブライター』だが、Botというプログラムを上手く使え
ばアニメや漫画のキャラクターのセリフを自動的に喋らせることが
可能だそうだ。そこに副事務長の大杉（50代・生え際が気になる）
もやってきて談笑に加わり。

「エエー？ わし、呟いてるけどなあ……」

「いやいやいや、そりゃダメってもんですよ大杉さん。僕たちお金
もらってるわけですし……」

「どこがいけないんだね？ わしが呟いたら何か問題でもあるのか
ねエ？ ん！？」

「いえ、なんでもありません……ぶるぶる」

仕事を終えて帰る途中、健は駅前の百貨店に寄ろうとしていた。
明日は休みなのと、冷蔵庫の中身もスカスカになってきたので食材
を買いに行こうと思ったのだ。それにまり子も新しく同居人となっ

たため、そのぶん食費が増える。しかもまり子は育ち盛り（？）なのでよく食べる。よって、今のうちに食料を買いだめしておかなければあつという間に底が尽きてしまう。留守番しているアルヴィーとまり子に「百貨店で買いもんしてから帰るね」と電話をかけ、健は百貨店に入っていた。

「およ、意外と人いないのね。混まないうちに買って帰りましょ」

ややオネエっぽい口調で宣言すると、健は食料品売り場を見て回る。肉類や野菜、魚やおやつ……その中でもなるだけ安いものを選び、カートのカゴの中へ放り込んでいく。自分が好きなものに限って安売りされていないことが多く、それを見る度に健は唇を噛みしめていた。

「ありや、これ安いな。買ってこか」

今晚のおかずを選びに向かった先で、健はアジフライを発見。安かったのでカートへ入れた。他にはイカの唐揚げも安かったので買おうとしたところ、パックを取ろうとした誰かの手がぶつかり、「あつ、すみません」

「いえ、こちらこそごめんなさい……って、東條くん!？」

イカの唐揚げを取ろうとした女性が驚く。女性は黒髪のロングヘアに琥珀色の瞳で、肌は雪のような色白。服装は緑色のシャツにグレーのロングスカートで、ツリ目だが柔らかい顔立ちをしており、そこまでキツそうな印象はない。むしろ優しげで献身的、かつ聡明に見えた。見ず知らずの他人に見えるが、健の名前を知っているということは彼の知り合いである可能性がある。事実、健自身も彼女には見覚えがあった。そう、この女性は。

「そーいうあなたは……白峯さんッ!？」

健が何かと世話になっている天才（災）女性科学者、白峯とばりだ。

「たまには百貨店でお買い物したいなーって思って……あ、おなか空いてるでしょ？ どうぞどうぞ、わたし食料まだあるから」「いえいえ、白峯さんもおなか空いてるはず。栄養はしっかり取らなきゃ……」

イカの唐揚げの譲り合いが続くこと5分。收拾がつかなくなりそうだと危惧した白峯が健に唐揚げを譲ったことで譲り合いは幕を閉じた。

「そういえば白峯さんはどうしてここに来なさったんですか？」

「それはねー……まずはレジ行きましょ。話はそれからね」

「はい」

それからというもの、健と白峯はレジに向かってそれぞれが買ったものを袋またはエコバッグに入れた。まとめ終わったところで二人はベンチに座る。

「さて、なんで私がこっちに来たか知りたい？」

「はいっ!」

「たまには遠出して大きなお店で買い物したかったからよ！ あと、私って引きこもってそんなイメージあるでしょ」

「白峯さんが引きこもり……あんましそうは見えないな。むしろ

アウトドアとか好きそうに見えますよ」

「そうだったー？ ま、確かに家にいること多いけど、それじゃくさっちやうからネ」

こんな風に談笑がしばし続く。確かに白峯は研究者ゆえ、家の中にいることが多い。しかしながらこもりっぱなしではなく、気分転換のためにちよくちよく外出している。今回この百貨店に来たのもその一環だ。

「あつ……そうだ。みゆきちゃんから連絡あつたけど……」

「なんですか？」

「人が石にされた事件あつたよね。あのあと、また違つやつと戦わなかつた？」

「はい。事件解決して帰ろうとしたら、メチャクチャ強いヤツが出てきて。オーブ3つ同時に使つてようやく撃退できたんです」

「そっか……みゆきちゃんの言つてた通りね」

右手をそえて白峯が考え事をはじめ。ずいぶん難しい顔だ。健が彼女のそばでパツとしない顔で彼女を見ていると、白峯が「……明日休みだったよね？」と呟く。

「はい、バイト休みですが……」

「腕時計はずして」

困惑した。当然だ、社会人にとって腕時計とはすぐに現在の時刻を知ることが出来る貴重品。それをそう簡単に外して他人に渡すわけにはいかない。だが、それを渡してほしいと要求している白峯の目は無垢な子供のようだった、もし断つてしまえば彼女は落ち込むに違いない。だが、この腕時計は社会人の生活に必要不可欠。簡単には渡せない、だが。

「これでも……ダメ？」

白峯も簡単には諦められなかった。悩ましい表情を浮かべたまま彼女はおもむろにボタンを外し、その豊満な胸をさらけ出す。ここまですべてダメなわけがない

「フオーーツ！ こ、これはけしからん……ど、どうぞこれを」

煩惱を刺激する大人の色気 元々、スケベな健が彼女の『谷間』を見て平静を保てるはずがなかった。

「ありがとう！ これで何か作ってみようと思うから一晩だけ貸してね」

「わ、わかりました！」

服のボタンを閉じて借りた腕時計を懐に仕舞うと、「それじゃーねー」と白峯がエコバッグを吊り下げて帰っていく。白峯に誘惑されたことが頭から離れず、健は至福の表情で笑っていた。

「東條くんはおっぱいに弱い、と……メモメモ」

次の日の朝、健はゆったり眠っていたところを携帯電話から鳴るアラームに叩き起こされた。気持ちよく眠っていたのに無理矢理起こされ、不機嫌そうに彼はアラームを止める。

そして寢息を立てて二度寝を始めた。三人（そのうち二人は女性）もいれば一人くらいは寝相が悪かったりイビキをかいていたりしていそうだが、不思議なことに誰もそんなことはなかった。皆すやすやと健やかに寝ていたのだ。

「ぐう……ふいー」

健が二度寝を始めてから小一時間経つと、玄関から誰かがインターホンを押した音が三人の耳に飛び込んできた。気だるげに起き上がり、アルヴィーとまり子を寝かせたまま玄関に向かう。

「こんな朝早くにどちら様ですかー……」

ドアを開けると、そこにいたのは 白峯だった。健は驚いてそのまま「あッあなたは!？」と大声を上げる。

「おはよう! 昨日言ってたアレ、できたわよ」
「そうなんですか! どうぞ上がってください」

白峯が言っていた例の『アレ』が早くも完成したようだ。それがどのようなものなのかを確かめなくてはならないし、何よりせっかくな来てくれたのを追い返すわけにもいかない。健はニコニコ笑いながら、白峯を部屋の中へ上げた。

「うん……おはよう、健」

「お兄ちゃんおはよー……って、その人だれっ!？」

寝ていたアルヴィーとまり子を起こし、少し散らかっていた部屋をパパッと片付ける。手早く正確にやったお陰で、お客様が来て大丈夫な程度には片付けられた。白峯が訪問したことについて、アルヴィーは見慣れているためとくに何も気にしてはいなかった。

だが、まり子は違った。そもそもまり子と白峯は初対面である。それだけならいいが、問題は彼女の目には健が知らない年上の女性を連れ込んでいるように見えたことだ。当然嫉妬するだろうし敵意も向けるだろう。

ただもしかすれば、『お兄ちゃん』と敬愛してやまない健を取られないように他の女を殺してしまおうと考え出してしまいかもしれない。まあ、そこまで病んだりはしないとは思われるが。

「この人は白峯とばりさん。みゆきの知り合いで科学者なんだぜ」

「そーなんだ。みゆきさんの知り合いなんだね」

「すっごく頭が良くて料理上手！ 絵もお上手！ おまけに美人さんなんだ」

「やだあ、照れるじゃない、もぉー」

「きれいだなー、いいなあ」とまり子はうらやましがるところで何故まり子はみゆきを『お姉ちゃん』ではなくさん付けで呼んだのか？ その理由は『将来ストレス溜めすぎてしわくちゃになりそう。あと30過ぎたら胸が垂れそう』だからだそうだ。

「しかし、とばり殿がこっちまで来てくれるとは珍しいのう。それで、どんなものを作ってきてくれたのかな」

「うふふ。気になる？ 気になっちゃうよねー」

店頭に並んだおもちゃをショーウィンドウ越しに見つめているようなアルヴィーの視線を受けた白峯は、「ちよつと待ってねー」と告げてカバンの中をこそごそと漁る。奥の方にしまっていたのか、出てくるまでにだいぶ時間がかかった。

「昨日東條くんから受け取った腕時計から、こんなの作っちゃいましたあ〜」

白峯が三人の前に差し出したもの、それは腕輪のようなものだった。ライトブルーを基調に金色の装飾が施されており、はめたらちよつとしたヒーロー気分が味わえそうだ。ただ、かつての腕時計としての面影はすっかりなくなっている。

「……………これはなんですか？」

「腕輪型余剰エネルギー吸収装置、名付けて『セーフティブレス』よ。3つ同時にオーブを使うようなことをしても、これがあれば大丈夫。身体的な負担を軽減してくれるし、この腕輪に吸収された技の余剰エネルギーを解放して体力回復や攻撃に使うことも可能よ」
「腕輪かあ……………これがあったらバクダン花が抜けるよ！ やったねお兄ちゃん！」

「それは腕輪違いっ」と、健がまり子にツッコむ。腕時計からこんなにも凄いものを作ってしまう白峯の高度な技術力に感銘を受ける一方で、健は嘆いていた。愛用していた腕時計がすっかり変わり果ててしまったことを。

「ふむ……………負担を減らしてくれるのか。確かにすごくいいものだが、何ゆえこれを？」

「みゆきちゃんから聞いたのよね、健くんが無茶してまで自分たちを守ってくれたってことを。自分まで気絶するような技を出したってことも聞いたわ」
「そっついえば……」

健は思い出した。辰巳という包帯を顔に巻いた厚着の男が三つ首の蛇のような怪物に変身し、襲いかかってきたことを。その辰巳は生半可ではない強さを誇り、連戦で消耗していたとはいえ健を追い詰めるほどだった。

死ぬ寸前まで追い詰められたがその時、ウロコが身代わりとして砕け散ったかわりに体力が全快。逆転するも相手はただの蛇の怪物ではなかった、如何なる傷を受けようと無限に再生してしまうヒュドラだったのだ。

万策尽きたかに思われたとき、彼はある行動をとった。それが『オーブを3つ同時に使う』ということだった。結果としてヒュドラに大打撃を与え退却させるまでに追い詰めるも、その反動は大きく健は気絶してしまった。

「……わかりました。これ、使わせてください！」
「どうぞ　ただし、ひとつだけ守ってほしいことがあるわ」
「守ってほしいこと……ですか？」
「確かに負担を軽減してくれるけど、だからって過信しちゃダメ。くれぐれも無茶は禁物！　それだけよ」
「……はい！」

とぼりと約束を交わし、健は『セーフティブレス』を受け取った。心配になって時計としての機能はないのかどうかを聞いてみたものの、残酷なことに時計機能はないとのことだった。健が頭を突っ伏して落ち込んだのは言うまでもない。

それから立ち直った健はさっそく使いこなすための訓練をしよう
と思い立つが、アルヴィーから速攻で断られた。「何故だ、どうし
て」と健はアルヴィーに訊ねたが返答はすぐに返ってきた。口を細
めた柔らかい表情でアルヴィーが、「お主はもう十分に強い。たま
には息抜きせい」と彼に告げたのだ。

「エツ？ でも、こーいう状況って普通訓練しません？」

「でもさー、お兄ちゃん。使ったびに負担がかかる技を何度も使っ
てたら体が持たないよ」

「そりゃそうだけど……」

「暮らしの中に修行あり、よ」

まり子がにんまりと微笑む。確かに日常生活でもちよつとした工
夫をすればそれだけで訓練にはなる。たとえば、鉛の入った靴やゲ
タで歩いたり、重りの入った腕輪をはめてダーツを投げたての当
てたり これだけでも己を磨くことが出来るのだ。まり子もアル
ヴィーもそういった意味合いを込めて発言したのだとすれば、とて
も有意義なことだ。今後ぜひ参考にしていきたい。戦いも特訓もゆ
とりを持つのが必要だということを、健は改めて認識した。

ガンガン壊せ、バンバン叩け、女が出来たらとにかくイカせる
！

君は真面目すぎる……

同時刻、公園のベンチでタバコを吸いながら、アンドレは上司の

言葉を思い出ししていた。確かに彼は真面目すぎた、ヴァニティ・フェア 会社の方針とあまり性格があつていないようにも見えた。

仕事なら躊躇せず人を殺せるものややお人好しで無益な殺生はしない性分のためか、幹部と遜色ないほどの実力を持っていながらも昇進できないでいる。

最期まで己の意志を貫くか、それとも会社の歯車となつて散るかふたつにひとつだ。どちらかしか選択できない。

「……俺にどうしろというのだ」

増強剤こと 『ネクロエクス』 入ったアンプルを見つめて呟く。これを使えばあらゆる能力を三倍に引き上げることが出来るが、その代償として己の寿命を縮める。

つまり使えば死ぬ 彼が所属するヴァニティ・フェアでは、上層部から『いらぬ』と判断された社員にこのネクロエクスが配られる。一種の死刑宣告のようなものだ。

「戦つて死ねるなら本望だ。だが、今のターゲットは東條健のみ……他の連中を巻き込むわけには」

そのネクロエクスを渡されたということは、自分は組織にとってもはや用済みと判断されたということだ。今までヴァニティ・フェアに尽くしてきた以上、他の職に着いたところで何もできない可能性は高い。というか、人間界に帰化して暮らすことすら難しい。……ならば、今やるべきことはひとつ。

「……だが、俺に道は残されていない。戦士として果てる以外に……」

アンドレは立ち上がった。そして、東條健と戦うために歩き出す

。ヴァニティ・フェアの捨て石として、一介の戦士として果てるために。

「お兄ちゃん、がんばれーっ」

「へへっ。よし僕、ストライク出しちゃうぞー」

アンドレが自分たちを狙っているとも知らず、健たちは遊んでいた。エスパーと言えども戦い続けていればいずれは疲れてくる。たまには楽しいことがしたい。だからこうやって遊ぶのである。

「そりゃーっ！」

みんなが見ている、少しでもカツコつきたい。まり子やアルヴィー、白峯が見守る中、彼はボールを全力投球する。力強く投げられた16ポンドのボールはレーンを転がり、途中で曲がりながらもピンを薙ぎ倒す！

「よっしやストライク！……あり？」

結果は見事ストライク と思いきや、隅っこに2本残っていた。方向は斜めだ、うまく届けばいいのだが。

「東條くん、がんばってー！」

「うし、今度こそ！」

ストライクがダメならスペアを狙うしかない。当たることを願う

ながら、健は再びボールを投げ出す。曲がれ、曲がれと念を発するが届かない。もはや手遅れだ、スペアはとれない。そのとき、不思議なことが起こった。何故かボールが独りでに動き出し、ピンを見事に倒したではないか。

「す、スペアとれた……やったーッ」

「やったねお兄ちゃん！」

一斉に拍手が起こった。何が起こったかまったくわからないが、とにかく嬉しいことに変わりはない。実はこれ、誰かが何らかの力で動かしていたのだ。それは誰かというところ。まり子である。うしろで見ていたまり子は目を紫色に光らせ、ボールを念動力で動かしたのだ。ややずっこいが、つまりは敬愛する健のお膳立てをしたのである。

このあとも白熱したゲームが繰り広げられ、みな高得点をたたき出していますます盛り上がっていった。ちなみに一番スコアが高かったのはアルヴィーだった。本人が言うには初めてだったそうだが、とてもそう思えないほどの腕前であった。

「次、どこいこっか」

「映画観たい」

「えーっ、でも明日バイトだしなー……」

「むう。いいじゃん別にー」

気付けばすっかり夕方だった。ボウリング場を出て植え込みを歩き、茜色に染まった美しい夕空を見ながら帰路につく。先日買い溜めしたので食料を買いに行く必要はない。なので、あとは家に帰って寝るだけだ。

「今日は楽しかったわね。また遊びましょ　それじゃ、バイバーイ」
「とばりさん、お元気でー！」

途中で白峯と別れ、あとはアパートを目指すだけとなった。三人で仲良く道を歩いてきた健たちだったが、そんな彼らの前に黒いスーツを着た屈強な黒人が現れ、「ずいぶん楽しんできたようだな」

「アンドレ……！」

「お主、何用だ？　まさか私たちに喧嘩を売る気か？」

「いかにも。それ以外に何がある」

アルヴィーの問いを軽く流すと、両手の拳を打ち鳴らし不敵に笑う。相変わらず威圧的で近寄りがたい、強そうな雰囲気醸し出していた。

「俺は戦いが好きでな……それ以外に楽しみが見い出せないんだ。のんきに遊んでいるお前らと違ってな」

「つまりサッカーとかしても楽しく思えないってこと？　それはちよつと悲しいね……」

「……ふん、そんなことはどうでもいい。今度はちゃんと装備もそろえて来たようだな……楽しみで仕方が無い」

「……ミジメなオツサンねえ。それしか言うことないわけ？」

まり子が明るい微笑みから一転、冷徹にアンドレを嘲笑する。いや、もしかすれば彼女なりに哀れんでいるのかもしれない。

「どうせ上の連中からイビられて仕方なくやってんでしょ？　なのにあなたは戦うのが楽しみだって言い張ってる。ホントは現実から逃げたいんじゃない？」

「黙れ！ そんなではない！ 俺は純粹に戦士として……」
「はいはい」

口では大層な事を言っているが、本当はヤケになっていることはお見通し。わめくアンドレの言葉を適当に聞き流すと、まり子は健の後ろに下がった。

「……とにかく！ 小僧、純粹に貴様と戦いたいというのもあるが、それだけではない。俺は使命を果たしにきたのだ。ヴァニティ・フエアの一員として、貴様を消しにな」
「要するに僕に死ねと。そういう解釈であってたかな」
「そうだ」

アンドレの返答を聞いた瞬間、健の目つきが険しいものに変わった。使命がどうか抜かしているが、結局は命が惜しくて従っているのでは。生きるために必死になっているのでは？ だが、こっちも大人しくやられるわけにはいかない。

「貴様に恨みはないが……ここで消えてもらっぞー！」

アンドレが気合を入れるとうつつすらと彼にモヤがかかり、見る見るうちにその姿を変えていく。気付けばアンドレはサイの怪人のような姿になっていた。

「健……来るぞー！」
「ああー！」

さあ、戦いだ！

その頑強な肉体と分厚い皮膚、鋼鉄をも余裕で引きちぎりそんな豪腕 相手を威圧するのはたやすいことだ。このサイ男は以前に健を圧倒し、あと一歩で倒せるところまで追い詰めている。

「どうした……怖じ気づいたか」

「そっちこそ仕掛けてこないのか？」

健もアンドレも、お互いに身構えたまま一歩譲らない。張りつめた空気の中、先に仕掛けたのは アンドレだった。健めがけてまっすぐに突進し突き飛ばそうとしたが、健は転がって回避。彼も以前は一方的にボコボコにされていたが、今度はそうはいかない。あの時は素手だったが、今回は武器をちゃんと装備してきている。これなら勝てる とまではいかなかったも、互角には戦えるはずだ。

「せいっ！」

「ぐっ」

方向を変えてまた突進しようとした隙を突き、懐に踏み込んで叩く斬る。アンドレは少しよろめいたが、すぐにパンチを入れる。だが盾で防がれた。

「備えあれば憂いなし！ ってね」

「ふん！」

パンチを盾で弾き返し、ひるんだ隙に斬る。すかさずもう一撃入れ、今度は間合いをとって様子を伺う。

「少しはやるようになったな。だが、まだまだ軟弱、軟弱ウ！」

力をためるようにしばらく足で後ろを蹴ると、アンドレはツノを突き立てて突撃した。そのいかつい外見に似合わず、速い。何とかかわしたが、一度だけではなく、二度、いや三度。何度も連続して健へ突撃をかました。突っ込まれるたびにかわしていた健だが、次第に疲弊していき。

「おっお兄ちゃん、うしろッ！」

「！？ しまっ……」

息を荒くして立ち尽くしていたところを突き飛ばされた。そのまま街灯に叩きつけられ、健の全身に激痛が走る。痛みを押して起き上がり、健は身構えた。

「油断は最大の敵だぞ、小僧！ お前は隙が多すぎる。注意力が散漫なんじゃないのか？」

「そーいうあんたも余裕こいてる場合じゃないんじゃないか？」

飛び上がりながら剣を振り下ろし、今度は自分から先に攻撃を仕掛ける。少しひるんだ隙を見計らい、健は連続で斬撃を叩き込む！ 相手を転倒させる程度のダメージを与えるも、アンドレは倒れることなど知らぬかのように立ち上がり豪腕で殴りかかって反撃に出る。盾で受け止めるもその衝撃は強く、少し後ずさりしてしまったほどだ。何度も耐えられそうにはなかった。

「臆病者め！ 縮こまっている場合ではないぞ！」

だが、嫌な予感的中してしまった。実際にアンドレは、何度も

その豪腕を振るって無理矢理ガードを崩そうとして来たのだ。文字通りの力押しである。そのうち攻撃の手が止まったので、健はいったん距離を取る。すると次にアンドレは、飛び上がりながら両手の拳で殴りかかって来たではないか。これはまずい。転がって回避し、そのまま相手の後ろに回り込めた健は切り上げて反撃。振り向いたアンドレは再び両腕を地面に叩きつけるが、健は後ろへ宙返りしてそれをかわす。

「す、すごい……直撃したらヤバそうだ」

やはりというべきかその威力は凄まじいもので、殴られた箇所は窪んでいた。もしこれが直撃したら、以前アンドレと戦ったときのような事態になりかねない。ならばそうなる前に　このサイ男を倒さねば！

「……お兄ちゃん！」

「な、何だいまり子ちゃん？」

「ゲームやるときにこういうやつが出たら、どうしてた？」

「うーんとね……確かにいるんだよねー、こーいうカタい奴。パワータイプで防御力が高い奴には……」

まり子から言われたことをもとに、健は考えを巡らせる。少しの間考えたのちに、彼の頭上に電球が浮かび上がった。気がした。要するに何かひらめいたということだ。

「そうだ！　魔法あるいは属性攻撃っ！」

「属性攻撃か……前にもそんなことがあったの」

アルヴィーは健の発言を聞いて、以前猛牛のシェイドと戦った際の出来事を回想していた。あの時も相手はパワータイプで、体が頑

丈だったため生半可な攻撃は通じなかった。普通に叩くだけではダメだと判断した健は、あることを思い付いた。それが属性付きの攻撃だった、というわけだ。オーブを入れ替えながら連続攻撃を繰り返した末に相手は爆死した。今思うとこれは、辰巳との戦闘で放った命懸けの三位一体の技の前身だったのかも知れない。

「あれだけごっつい体しとるんだ、熱とかあまり逃せんだろうな」
「熱ね……よし！」

アルヴィーの発言で確信を得た健は赤いオーブを装填。刀身が瞬間に赤く染まり、炎が燃え上がる。鎧や岩のようにいかつく分厚い皮膚を持つサイ男だが、もし炎で体を焼かれたらその熱を逃せるだろうか。

「何をごちゃごちゃと！」

戦闘中に延々としゃべる健たちに憤ったアンドレが助走をつけながら殴りかかる。真面目な性質ゆえに彼らの行動が不真面目で、戦いの場にそぐわないように見えたのだろう。だが、そう何度もやられる健ではない。盾でパンチを防ぐと、すかさず炎の剣をお見舞いする。上手く熱を排出できず、体内から焼かれるような感覚がアンドレを襲う。見てくれは立派でも内側からの攻撃には弱かった、ということだろうか。

「うっ……ごおおおお」
「熱して……冷やす！」

オーブを入れ替え、今度は青いオーブを装填。今度は刀身が真っ青に凍っていき、輝くほど冷たい冷気を周囲に発生させる。燃えていたサイ男の体を冷ましていくが、今度は内側から裂けるような冷

たさがサイ男を襲う。急激な体温の変化に耐えられず 鉄壁の守りを誇っていた皮膚にヒビが入った。

「なにッ、おっ俺の体が」

「もらった！」

相手の防御力は下がった。あとはありったけ攻撃するだけだ。凍らせてから縦、横、斜め上と切りつけたあと、

「でやあああああッー！」

トドメに空高く飛び上がってからの唐竹割りを繰り返し、粉碎。サイ男は爆発し周囲には氷の破片が輝きながら散っていった。

「やったか!？」

アルヴィーが叫ぶ。だが、ぬか喜びだった。相手はまだ死んではおらず。

「いや、まだまだ！」

煙の中から片腕を押さえて立っているアンドレの姿がゆらゆらと浮かび上がった。あまりにしづとい。そして執念深い 三人とも戦慄し、息を呑んだ。

「中々やるな……だが、まだまだ！ まだ負けるわけにはいかん！」

そう叫ぶとアンドレは懐から紫色の液体が入ったアンプルを取り出し、飲み干す。

(あれは……ネクロエクス？ そっか、あいつ組織の捨て石に……)
「これ以上生き恥は晒せぬ！ 最期くらい派手に散らねばな……それが同胞たちへのせめてもの手向け、ぐおおおお！」

黒い稲妻が、黒い霧が、アンドレの周囲に巻き起こる。雄叫びを発しながらアンドレの体はみるみるうちに膨れ上がっていき。

「ウガアアアアアアア！」

霧の中から巨大な四足歩行のサイの怪物が現れた。四階建てのビルほどはあろうかと思われる見上げるような巨体に、黒い岩のようにゴツゴツした表皮。トチの実のように赤い眼に人がちっぽけな虫に見えるほど巨大な足、そして鼻先や肩から生えた巨大なツノまるで怪獣のようだ。理性をかなぐり捨てた雄叫びは恐怖を通り越して、哀しささえも感じさせる。

「やらいでか……ッ」

「……伏せて！」

危険を察知したまり子がそう促した直後、巨大なサイの怪獣が両足で地面を大きく踏み鳴らす。激しい揺れと衝撃波が発生し、土煙と共に三人は吹き飛ばされてしまう。そのままサイ怪獣は突進し、街の方へ走っていく。

「あいたたっ……あいつ、どこ行ったんだ」

起き上がった健が呟く。するとアルヴィーが、「オフィス街の方だ。何にせよ急がねば！」

「オフィス街！？ このままじゃヤバい……みんな、あいつ追わな

きゃ！
「うん！」

絶大なパワーを手にした代わりに、アンドレは理性を失った。怒りに満ちた奴が向かった先はオフィス街。このままでは多くの犠牲者が出てしまう。一刻も早くアンドレを止めなければ！三人はオフィス街がある方向へと疾走した。

EPISODE 111：巨星散りゆく

凶暴化し理性を失ったアンドレは、もはや単なる怪物と化していた。その巨体で突撃し、行く手を阻むものを破壊することしか頭がない。ただ、今でも考えていることはひとつだけある。何故人類だけが栄光を謳歌し、平和をむさぼるのか？ 氣にくわない。

そんな彼が向かう先は オフィス街。もしこのままこの怪物がオフィス街に突撃をかましたなら、被害は甚大なものとなる。建ち並ぶビルは全て瓦礫の山と化し、人々はなす術もなく殺されてしまう。こいつが適当に暴れ散らすだけでも街が火の海になってしまうのは確実。なんと少しでも止めなくてはならない。

「アルヴィー、あそこ！ サイいたッ！！」
「わかった。……しっかり掴まっつれよ！」

健が指差した先に巨大なサイの怪物がいた。本来の姿である白龍に変化したアルヴィーが、空中で急激に加速をつけてサイに突進する。なんとか山の方まで突き飛ばすことに成功したが、まだ安心はできない。山のふもとに街があった場合、そこも漏れなく敵の攻撃対象となる。

ゆえにこれは、一刻を争う事態なのだ。再びアルヴィーは、全力でサイの怪物が吹き飛んだ先の山へ向かって滑空する。雲を突き抜け、林を駆け抜けるほどの速さだ。もちろんその引力と空気抵抗は生半かなものではない。しっかり掴まっていなければ、健もまわりも今頃地上に落ちていただろう。

「……いたよっ！」

まり子が叫ぶ。彼女が指差す先にあったのは、見晴らしのいい岩場と見境なく暴れてひたすらに周囲を破壊するサイ怪獣の姿。近くには廃棄されたと思われる古びた採石場もあった。他に人はいなさそうだ、ここなら奴がいくら暴れても安全かもしれない。

「……お兄ちゃん」

「まり子ちゃん、どうした？」

「あいつ、見ての通り頑丈そうだけど　　ツノとか目を狙ったらいけるかも」

「ツノと目が……わかった!！」

まり子が言った部分が弱点だとすれば、そこを狙えば勝てるはず。早速背中に飛び乗ってツノを破壊しようとする健だったが、突然サイ怪獣は咆哮を上げ自分の周りに黒い稲光を落とす。かわしきれずに命中し、健はアルヴィーの背中から落ちてしまう。

「ヤバい踏まれるッ!」

人の体など余裕で踏み潰せそうな大きな足が、健の眼前に迫る。転がったり、跳び跳ねたりして回避するが、このままではいずれやられる。速く背中に登ってツノを破壊せねば。だが、どうやったら登れるのだろうか。

「ヴオオオオオオ!」

そのとき、サイ怪獣が突然飛び上がって全体重を乗せた押し潰しをしかけた。衝撃波を伴って地面を揺るがし、健を吹き飛ばすのにはわけはなかった。絶叫を上げながら健は吹き飛ばされ空中へ舞い上がる。

「健ッ」

そこへアルヴィーが通りかかり、健を背中受けて止める。なんとか持ち直した、今度こそ相手の弱点に近づいて攻撃しなければ。

「グボオオオオオ!!」

接近する最中、敵のツノの先にエネルギーが集中。邪悪な黒っぽい紫色に染まったそれは巨大化すると足踏みと共に空中へ拡散し、黒いエネルギー弾が雨のように降り注ぐ。

「うわっ!　すごいパワーだ……」

「あいつ、理性を捨てたのよ。だから何のためらいもなく周りを破壊する……動きを止めなきゃ!」

「でもどうやって!?!」

どうやって止めようというのか?　見当もつかず、心配するよう健がまり子に問う。あの巨体である。あのパワーである。あの堅牢さである。今更止めようがないと思っただろう。だが、そんな不安を吹き飛ばすかの如く、まり子は「まあ見て」と言い放つ。

「ふっ!」

かわいらしい外見に合わないような、凜々しい掛け声を発して左手をかざすと　その掌から青紫の波動を放った。一瞬サイ怪獣の体に激痛が走り、体勢を崩して地面に倒れ込んだ。

「今のは……?」

「念動力って奴。サイコキネシスとか、テレキネシスって言った方が分かりやすかったかな」

「ああ、超能力ね！なるほど！」

「うん、その一種だよ」

「……って今はしゃべってる場合じゃなかった！今のうちに……」

「アルヴィー、距離詰めて！」と健が呼びかける。「うむ、わかつた！」と返事したあとアルヴィーは敵に急接近し、ツノの付近に健が飛び降りる。動きを止めているうちに倒しきってしまおうと考え、ひたすらに斬って叩いてダメージを与えていく。

見たところ顔面も硬い表皮に覆われているし、目も攻撃したところで相手から視界を奪うことくらいしか出来ないだろう。よってここは、奴の力の源にもなっているであろう自慢のツノを叩くしかない。

「てっ！ やっ！ でやあああああ！！」

叩く、斬る、叩く、斬る、叩いてぶった斬る。これを繰り返す単調な作業だ。だが、これ以外に勝つ方法はない。しかし相手もいつまでも気絶しているわけがなく、立ち上がって咆哮を上げ、健を吹き飛ばす。

「わっ」

またも空中に吹き飛ばされる健。駆け寄ったアルヴィーの背に飛び乗り、再び様子を伺う。もしかしたらまり子に念動力で相手の動きを止めてもらわなくとも、背中に飛び乗れば、そう思い付いた直後、サイ怪獣が口から火の玉をいくつも吐き出し、見境なく周囲を破壊する。

そのうち岩壁に命中し、頭上から岩が降りだす。落石の中を巧みにくぐり抜けるも、火の玉の流れ弾がアルヴィーに命中し、アルヴィーは岩壁に叩きつけられ、その衝撃で健とまり子は転落してし

まっ。

「あいたた……やられた。でも回り込むくらいなら……まり子はど
うする？」

「わたしは……シロちゃんを守る！ お兄ちゃんはいっつを倒して
！」

「わかった！ 頼んだよ！」

だが、彼はそれしきの事では屈しない。オーブを柄に開いた3つ
の穴に装填し、準備は万端。踏みつけをかわし、降り注ぐエネルギー
弾の雨を掻い潜り、地を走る衝撃波を飛び越えて 敵の額に生
えたツノまで跳躍。

「これで終わりだ……アンドレエ ツー！」

真っ赤に燃える灼熱の炎、輝くほどに冷たい吹雪、激しく轟く稲
妻。三つの異なる斬撃がサイ怪物を切り裂き、砕き、破壊する。
やがて雄叫びを上げながら、アンドレは大爆発し砕け散った。息を
荒くしながら、健が

「やった！」

爆炎が収まると、その中には人の姿に戻ったアンドレが倒れてい
た。右腕で左胸を押さえており、もはや息も絶え絶えで戦える状態
ではなかった。

「……お、俺は何を」

彼は正気に戻っていた。まるでさっきまで巨大な怪物と化してい
たことを覚えていないような口振りだったが、すぐにそれを思い出

したような複雑な表情を浮かべた。そうか、奴に負けたのだなと。

「あいてて……私としたことが油断してもった」

人の姿に戻ったアルヴィーが起き上がり、頭をなでる。髪はチリチリで何故か服が破けており、胸の下半分がはみ出しヘソも見えており、更にスカートも少し破れているという目のやり場に困る格好をしていた。一応局部は隠れているのが幸いか。

状況を把握すべく辺りを見渡す彼女の目に、立ち尽くす健とまり子の姿が留まった。立ち上がって駆け寄ると、二人が見下ろす先にはもはや虫の息であるアンドレの姿が。

「……あ、アルビノドラグーン。ずいぶんハレンチな姿じゃないか」「悪かったのう……下乳出してて」

「まあ、それも悪くない……ところで、小僧」「何だよ」

「以前約束したな。俺に勝ったら誰の命令で動いてるか教えてやると……」

健はそう言われて、以前アンドレと戦ったときのことを回想した。あの時は武器を白峯に預けていたため素手での戦闘を余儀なくされ、更に素手での戦いが苦手だったためかなり苦しい戦いとなった。

アンドレはこの時に「俺に勝ったら教えてやろう」と言っていた。健は相手に見くびられてからかわれたのだとばかり思っていたが、彼の口振りから察するにどうやら冗談ではなかったようだ。

「……それがどうしたんだよ」

「お前は勝者だ。たった今知る権利を得た。敗者は何も知らないま

ま散るのみだ」

「……じゃあ、教えてくれ」

恐らく、こんなチャンスは二度と訪れないだろう。ここで少しでも敵の事情を知っておけば、戦いは有利になるはず。健はアンドレの話の聞き届けてやることにした。

「……三谷と、花形。前にこの二人と戦ったことがあるだろう」

「ああ」

「俺はこいつらと同じ組織に所属していた。それが『ヴァニティ・フェア』。英語で虚栄の市、虚栄と軽薄の世界という意味だ」
「ヴァニティ・フェア……」

健が顎に手をそえる。以前辰巳と戦った際に聞いた組織の名だ。まさかそれに属していたとは。彼の隣にいたアルヴィーは納得が行った表情を浮かべ、まり子は目を伏せて影のある表情をしていた。彼女も何か知っていそうだが。

「構成員はみな、人間に化けることができるシェイドばかりだ。こちらのザコとは桁が違う。更にいえば、上級のシェイドはほとんどがヴァニティ・フェアに所属している。だが、立場は平等ではない階級制度が設けられているのだ。幹部と一般社員、という感じにな」

「……それじゃまるで、人間の会社みたいではないか」

「確かに言われてみれば……。ところで、あんたは幹部なのか？」

「いや、社員だ」

その言葉を聞いて健とアルヴィーが目を丸くする。アンドレはかなりの強さを誇っていた。自ら幹部だと名乗っていた辰巳と同格だと、二人は思っていたのだが。実際は彼の言う通りだ。違ってい

た。勝手な思い込みであった……。

「……幹部は全員、俺たち社員より遥かに強い。だが、社長はその幹部を上回る。俺からすれば雲の上の存在だ」

「社長か……名は何と申す？」

「甲斐崎……」

「なにっ!？」

その名を聞いたとき、アルヴィーがいつになく動揺した。いつも余裕を見せていた彼女が取り乱したということは、それほどその『甲斐崎』は危険な相手なのだろうか。

「……あ、アルヴィー？」

「いや、何でもない。気にするな」

「もしや恐れているのか？ それはおれも同じだ……くどいようだが社長はそれほどまでに強い、うぐっ」

アンドレがむせる。このままだと、今にも血を吐いて死んでしま
いそうだ。

「強くなれ……」

「な、なんだよ。いきなり」

「お前は強い。もつと強くなれ……誰より強くなって、恐怖の帝王を打ち破ってみせる！ そっ……そのくらいの覚悟がなければ、人を守ることなどできんぞ……ご、ごほっ」

「わ、わかった……。アンドレ、あんたはどうするんだ？」

「俺は……もう……うぐ」

左胸を押さえつけてアンドレが苦悶する。目を閉じて歯を食い縛っている表情が、なんとも辛そうで痛々しい。今にも命が尽きそう

だ。

「さ、最後にひとつ教えてくれ」

アンドレの体が崩れていく。闇に還ろうとしているのだ。こ
うなればもう、助からない。

「アルビノドラグーン……お、お前は何故　本当の力を……か、
解放、しないのだ……」

そう言い残してアンドレは散った。闇に還り、髪の毛一本も残さ
ず消えたのだ。今まで戦ったどの相手よりも手強い敵をようやく倒
したのだ、喜んでもいいはずだが　健は儂げな顔をしていた。そ
の隣で「本当の力……」とアルヴィーが呟く。心当たりが無さそう
な口調だ。

「……他に生き方あったと思うのに、どうして死んだりなんか」

「あやつは、戦士として討ち死にすることを望んでいた……中途半
端に生き延びるより、潔く死ぬことを選んだのかもしれんな」

表情を曇らせる健に、アルヴィーが語りかける。あの様子や言動
から察するに他にすることもなかったのだろうか。それともヤケを
起こしたのだろうか。　真相は誰も知らない。

「行こう、健。くよくよしとる場合ではないぞ？」

「う、うん！」

アルヴィーが笑顔で呼びかける。いつもの自信と余裕がある表情
だ。ぎこちないながらも健も笑い、彼女についていく。だがまり子
は、先程までアンドレが倒れていた場所をじっと見つめていた。

「……ホント、バカなオツサンよね。あなたなら戦い以外に色々できたはずなのに」

ため息混じりに呟き、どこかパツとしない表情で空を見上げる。空は一面オレンジ色だ。もうすぐ日が沈む。すぐ笑顔に戻った彼女は、

「あの世でも達者でやりなさいよ、アンドレ」

「おーい、まり子ちゃん！」

「ふえ！？」

「モタモタしてると置いてっっちゃうぞー！」

「ま、待って！　すぐ行く！」

少し離れたところから健が自分を呼んでいる。まり子は慌てて振り向き、健とアルヴィーに駆け寄った。そしてそのまま、帰路に着くのだった。

EPISODE 111：巨星散りゆく（後書き）

どうも。SAI-Xです。

アンドレさんが遂に殉職……。

武人肌の堅物である彼は、作中でも珍しい正々堂々とした好漢でありました。

生き恥を晒すまいと理性を捨てて怪物になってまで戦いに殉じ、自らを打ち破った敵を褒め称えたその壮絶な最期　敵ながらあっぱれでございました。

さて！ 第2回人気投票がはじまつたり、タイトルもさり気無く変わったりしてますます盛り上がるであろう『同ドラ』。

これからもよろしくお願い致します！

E P I S O D E 1 1 2 : 血まみれの女

都内のある一件の廃ビルとその周辺が暗雲に覆われている。黒い雲の中では雷鳴も轟いており、風も吹きすさんでいた。まるで嵐の晩のようだ。髪を染めたひとりの男がビルの中に入り、最初に目にしたのは 真っ赤な血の痕と、見るも無惨な姿で倒れていた人々。言葉も出ないほど凄惨な光景を目にして戦慄を覚える間もなく、血の海の奥から誰かのうめき声が聞こえる。気になって恐る恐る、ビルの奥に進んでいくとより多くの血痕が見つかった。しかもまだ新しい。冷や汗をかきながら、男は階段を登っていく。二階に登ると、そこはえぐられたソファや壊されたパーティション、ガラス片などが散らかっていた。もしかしてこれは、誰かと誰かが争った形跡では？ 男の背筋に悪寒が走る。

おぼろげに光るライトを頼りに辺りを照らし、惨劇が起きたビルの中を更に進む。やがて誰かがすすり泣く声が聞こえた。若い女性のものだ。道を遮る瓦礫やモノをどかして女性の声が聞こえた方向に向かい進んでいくと 見えた。この血の海の中で泣いていた女性の姿が。

「……………君は？ 大丈夫か？」

男は女性に声をかけ、立ち上がらせる。唯一の生存者だ、何か知っているかもしれない。一緒に抜け出さねば。女性は青紫の地面に着きそうな長髪にライトグリーンの瞳で、透き通った白い肌をしていた。服はシックな黒いワンピース。惨劇を物語るように赤い血がこびりついている。泣きじゃくる彼女に声をかけ、笑顔で手を差し伸べる。 儚げで美しい。今は気が沈んでいるが、笑顔になればもつときれいになるはず。だから彼女のためにも、一刻も速くこのビルから出なければ。

だが、その願いは叶わなかった。気がつくや彼は地面に倒れていた。辺りを見渡すと　そこは血だまりの中。何が起こったのか？　さっきまで女性と一緒にいたのに、なぜ血だまりの中で気を失って倒れていたのだろうか？　男の頭は混乱する。だが、あるものを見て彼は正気に戻った。それは

血を流して地面に崩れている首がない自分の姿

「くすくす……」

この惨状を前にして、泣いていた女性は平静を保っていた。それどころか首をはねられて死んだ男を見て笑っているではないか。それもそのはず　この惨劇を引き起こしたのは他ならぬ彼女だったからだ。

「ハッ！」

男が目を覚ますと、そこは　いつもと何も変わらぬ自分が住んでいるマンション。自分の部屋。既にこの世には居ない自分の恋人の写真立て。血も何もついていなければ誰かの死体もないし、泣き叫んでいた女性の姿もない。辺りを見渡した末に両手を見てようやく男は認識した。あれは悪い夢だったのだと、夢で良かったと……。

「ゆ、夢か……」

朝食や身支度を終えた男　不破ライはバイクに乗り込み、ある場所へ全速力で向かっていた。そこは、海を望む小高い丘に立てられた墓地。以前副都心を中心に大量発生していたクモ型シエイドの親玉を討伐した際に散っていった同胞たちの墓参りに立ち寄ったのだ。

あの悲劇が起きてから不破はすっかり元気をなくしていた。散髪屋で前髪を切って全体的に短くしてもらい、金髪に染めていた髪も黄褐色に染め直した。あまりの変わりように同僚たちが心配し出している。

（オレがもつとしっかりしてればこんなことには……みんな、あの時はごめんな）

同胞たちの墓前で祈りを捧げ、次に彼が向かったのは　連続発火事件に巻き込まれて命を落とした恋人の墓。そつと花束を置いて黙祷する。

ここのところ彼はしょつちゅう、亡くなった恋人　倉田美枝の墓参りに行っていた。もう誰も死なせたりはしないと誓っていたのに、また死なせてしまった　という責任感に駆られての事だ。

「……ん？」

天国にいる恋人に祈りを捧げて帰ろうとした矢先、彼は美枝の墓に花束がもうひとつ供えられていたのを発見する。美枝の遺族がお供えしたのか、それとも。

だが、彼が抱いた疑問はすぐに解決した。もう一人の男がこの墓地を訪れていたのだ。その男は青い短髪で、前髪に赤紫のメッシュを入れていた。彼は不破もよく知る人物。

「お前……村上！」

「そう不景気なツラするなよ。こつちまで元気なくなっちゃうじゃない」

村上翔一だ。彼は警視庁捜査一課の警部補であり、現在はシエイド対策課の主任も務めている。まだ若いながら、冷静沉着で頭脳も明晰で優秀な司令官であったが、齒に衣着せぬ物言いとシエイド討伐のためなら手段を選ばない過激な思想が上層部から危険視されていた。

「何しに来たんだよ」

「だいたいは君と同じだ。以前の作戦で命を落とした部下たちと、それから 美枝さんの墓参り」

一見クールな彼だが決して非情なわけではなく、リーダーとしての自覚と責任感、そして仲間思いな一面も持っていた。誰にも見せなかったが、以前の掃討作戦で戦闘部隊が戦死したという訃報を聞いたときは、悲しむあまり自宅で泣きじゃくっていたそうだ。

「……まあ、なんだ。美枝さんの件はあまり力になつてやれなくてすまなかった。センチネルズ側から警察に圧力かけられてたからさ

……」

「いいんだよ。もう過ぎたことだ。そんなに気にすることねえよ」

「そうだよな」

表向きは飄々と振る舞っていたが、どこか後ろめたいものを感じていたのか村上はやや暗くなっていた。自分が身勝手なことをやらかしたせいで戦闘部隊のメンバーを死なせてしまったことを、今もなお悔やんでいるのだろうか。

「ははっ、なんか暗くなっちゃったな。不破、辛いのはお前だけじゃないぞ。僕らも同じだ。それに今の君は不破らしくない」

「オレらしくないって……どこがだよ」

「今の君には活気がない！ あとパワフルさも足りないね」

「……どういう意味だよそれ！」と不破が冗談半分で怒る。いつの間にか笑顔が戻ってきていた。

「さて！ 君をパワフルにするにはまず英気を養わなきゃ……ラメンでも食べに行こうぜ」

ガッツリ食らいつくように村上が不破と肩を組む。自分の携帯電話を見せびらかし、「女の子も誘ってさ！」

「あ、ああ！」

それからというもの、野郎二人だけではむなしい　ということ
で警察関係者の若い女性陣に次々電話をかけてまわったが、オペレ
ーターの要由かなめ ゆみこや落合おらあひカオルにはあつさり断られた。

二人とも休暇をとって、プライベートで遊びに出かけていたよう
だ。不破と村上がいつも世話になっている宍戸しじう小梅こづめにも電話を入れ
たが彼女もダメだった。どうやら彼女は買い物中だったらしい
結局、来てくれたのは白峯だけとなった。待ち合わせ場所も決まっ
た、京都府内の某有名中華料理店だ。餃子がウマイことで知られて
いるが、餃子以外にも焼き飯やラーメンも上等のウマさを誇ってい
た。

「こんにちはー！　思ったより速かったわねー」

「新幹線乗ってきたもんでね、ハハハ」

白峯は先にその店に来ていた。彼女は席を予約してまで二人を待
っていたらしく、少々待ちくたびれた様子を見せていた。そんな彼
女に頭を下げると、二人は白峯の向かいのソファアに座った。ちな
みに白峯と向き合っている方向（窓側）に座ったのは村上で、不破
はその隣だ。なかなかいやらしい。

「それじゃ、何食べます？　僕ギョウザとチャーシュー麺で」

「わたしチャーハンね！　不破くんは？」

「……激辛ラーメンセットで」

他が笑顔になっている中で、不破は一人だけふてくされた態度を
とっていた。プツ、と村上が笑うのを必死でこらえる。

「むウウウらかみイイイイ!!」

「ちょ、ちょ何すんだよ離せって!!」

不破の血管がキレた。たとえ同僚といえども人をバカにして笑う奴は許せないのだ。胸ぐらをつかみ上げ顔を近付けると、「いまオレを笑ったな! 明らかにオレを笑ったな!？」

「笑ってない! 笑ってないから離せって、暴行の容疑で訴えるぞ!!」

乱闘が始まりかけた。だが、寸前で白峯がその勝負に待ったをかけた。仲良く頭をこつつんこさせられ、二人の頭上で星が回る。そして不破の沸点の低さと大人げなさに呆れた。

「二人とも職場の同僚なんでしょ? もっと仲良くしなさいな」

「はい……」

白峯が取っ組み合いを起こそうとした二人を黙らせてから、その後とはとくに何も問題は起こらなかった。三人とも何事もなくそれぞれが注文した料理をおいしく味わって食べていた。このまま、無事に終われば良かったのだが、そうはいかなかった。またハプニングが起きようとしていたからだ。

「白峯さん、こんにちはー!!」

「東條く〜ん! こんなところで会うなんて奇遇ねー」

「……えっ!？」

不破より年下で後輩にあたるエスパ、東條健も来ていたのだ。

彼は一人だけではなく、白髪赤眼の美女とラベンダーのような青紫

の髪の少女を連れてこの中華料理店まで来ていた。

今では和解してそれなりに交遊を深めてはいるものの、元より不破は健を快く思っていない。雰囲気が出るのが気に入らないとか、自分より女性にモテているのが気に入らないだとか　理由は深刻なものからくだらないものまで様々だ。

「あつ！　不破さんちース！」

「なっなんでお前がここに来てるんだ!？」

「えー？　別にいいじゃないですか。僕もたまには中華料理食べたいなーって思っただけですよ」

「いや、けどな。ラーメンとか餃子とかなら別の店でも食えるだろ!！」

「まったく、お主は相変わらずすぐ怒るの……」

白髪の美女　アルヴィーがため息をつく。彼女だけでなしに、健や幼い少女も眉をしかめていた。

「さっ、こんなヤツはほつといて席座らんか？」

「そうだね、それが良さそう。じゃ、とばりさん、あと不破さんもごゆっくり〜」

「はーい！　それじゃーねー」

人間、すぐ怒ってわめき散らすような奴とは一緒には座りたくないものだ。それは健たちも同じで、白峯と不破に声をかけてからすぐ後ろの方にある席へ歩いていった。その後村上は不破に「……さっきの知り合い？」と訊ねたが、不破はまたもふてくされて何も返答しなかった。

「……しっかし」

何か気になるものでもあるのか？ 目を伏せた不破が後ろを振り返り、仲良く談笑しあっている健たちを睨むように見つめる。

「野郎、ついに幼女コメにまで……うっ！」

唐突に頭痛が走る。それだけではなく不破の頭の中にあるイメージが流れ込んだ。それはいいものではなかった。先日の悪夢の中に出てきた青紫の長髪の女性。その女性と健たちと一緒にいる少女の姿が被ったのだ。一体どういうことなのか？ 何故こんなことが起きたのか分からぬまま、不破は長髪の女性に殺される自分のイメージに苛まれていく。もしかあの幼女が成長したら夢の中に出てきた女性になるというのだろうか？ ますますわけがわからない。

「お、おい、不破？ 大丈夫か？」

「不破くん、どうしたの？もしかして具合悪くなった？」

「あ……いや、何でも無いッス」

苦しみかけた不破を村上と白峯が呼び戻す。直後、何事もなかったかのように不破は料理を一気食いしはじめる。自分が元気であり、別に具合が悪いというわけではない事を証明するような勢いだ。しかし無理矢理一気食いを始めたものだから、のどに詰まってしまった。不破は水を飲んで押し流す。そしてむせた。

「なにやっとするんだ、不破殿は……」

アルヴィーが言う。彼女は餃子とライス、たまごスープのセットを頼んでいた。言い忘れていたが、元々彼女は龍のシェイドである。中華料理にシンパシーを感じたか、とてもおいしそうに味わって食べていた。

「ぼ、僕に聞かれても」

健はあつあつのチャンポンを食べていた。野菜や海の幸をふんだんに使ったぜいたくな一品だ。それに加えて鶏の唐揚げも注文していた。こういう店にはなかなか来れないせいか、なるだけじっくりゆっくりと味わっているようだ。

「あはは！ ラーメンおいしいー」

まり子は健の隣でラーメンをおいしそうに食べていた。健から唐揚げを分けてもらいつつ、ラーメンとセットで頼んだチャーハンも食べている。本場だけあってか、ラーメンもチャーハンもなかなかウマイ。まり子が、いやこの三人が目をキラキラと輝かせるのも必然というもの。

傍からみれば、まるで家族のようだ。健が父か兄だとすれば、アルヴィーは母か姉だろうか。そしてまり子は仲睦まじい夫婦の間に生まれた娘。いや、待つてほしい。健とアルヴィーはまだ若い。後者は恐らく有史以前から生きていると思われるが（外見）年齢は20代の若い女性だ。

対してまり子の（外見）年齢は10歳前後。仮に子どもを産んでいたとしても、まり子ぐらいの年までいくには10年を要する。仮に二人が、現時点での年齢で子どもを産んでもまだまだ赤ん坊である。つまりまり子は二人の間に出来た子どもに例えるにはデカすぎるのだ。よってここは、歳の離れた妹のように彼女を見るのが正しい。

「今日はありがとう。また誘ってね」

食事を終えた後、白峯は微笑みながら手を振って不破たちと別れた。対する二人も笑顔で「また会いましょう」と手を振りながら彼女を見送った。

「ふー、ハラ膨れたなあ。そろそろ帰りますかね。不破はどうするんだ？」

「いや、まだ帰らねえ」

「エッ？」

不破が気難しそうな顔で呟く。さつきまで大食い選手権のチャンピオンもビツクリして腰を抜かすほどの食いつぶりを見せていた男には見えない。多くの修羅場をググって……もとい、多くの修羅場をくぐってきたようなハードボイルドな面構えだ。

「さつきの女とチビ連れたヤツとは知り合いなんだ。そいつらと話がしたくてな」

「そうか、わかった。じゃあ、僕はお先に帰らせてもらおうよ」

まだ京都に用事があるという不破の要求を聞き入れ、村上は「また連絡くれよ、バハハアイ」と言い残して先に帰っていった。肩を少し鳴らすと、不破は携帯電話に健の番号を入力する。そして、電話をかけた。

「ん……？」

アパートに帰るために歩道を歩いている途中、健の携帯電話が振動する。着信したという合図だ。マナーモードに設定してあるため振動を起こすのみだが、これが通常モードの場合は着信メロディが鳴り響く。

「健、電話か？ 誰からだ」
「不破さんからみたい」

アルヴィーからの問いに答えると、健は不破との通話を始める。

「東條、今どこだ？」

「アパートに帰る途中ですけど……」

「そうか。……お前、いま紫の髪の子ビ連れてるだろ？」

「は、はい。確かにそうですけど、その子がどうか」

「そいつについて話がある。いつもの空き地まで来い、そこで待ってる。じゃあな！」

いつもの空き地 とは、三丁目の空き地のことだ。不破が京都に滞在していた時、よく鍛錬に使っていた場所である。

「……どうだった？」

「呼び出し食らっちゃった。アルヴィー、まり子、先に帰っというて」

「うん、わかった。でも早めに帰ってきてよー」

「はい」

アルヴィーとまり子と一旦別れ、健は三丁目の空き地へと走っていった。もしかしたら戦闘に発展するかもしれないので、長剣と盾そしてオーブも持参で。

EPISODE 114：後輩への警告

不破から話があるという連絡を受けた健は、三丁目にある空き地を訪れていた。土管や廃材などがそこかしこに置かれており、まるでスクラップ置場のようだった。入ってから少し奥の方で、不破は背を向けて佇んでいた。どうやら、空を眺めて待っていたようだ。

「来たか」

足音に反応したか、不破が背を向けたまま言う。相変わらず歴戦の戦士エスパーとしての風格があり、近寄りがたいハードな雰囲気を漂わせていた。

「不破さん、僕に話っているのは……」

「そんな難しいことじゃない。あのチビから離れろってことだ」

「えっ………どういことですか。言つときますけど、僕はロリコンじゃないですよ」

「ちげエよバカ！」

振り向いた不破が怒ってそのまま健の頭を軽く叩く。本気で殴ったわけではないためか、叩かれた健はそんなに痛くは感じていなかった。「のっけから話スラしやがって」と毒づきながらも、不破は話を続ける。腕を組んでいてやや偉そうに見える態度だが、この際触れないでおこう。せめてここでぐらい先輩としてのメンツを立てなければ。

「………それで、なんであの子から離れないといけないんですか？」

「オレ自身もよくわからねエんだが、あのチビからは何か嫌な予感

がするんだ。内面に何か危険なものを秘めてるんじゃないか、つてな」

「危険なもの？ 何が危険だっていうんですか？ あの子は確かにまだわからないところ多いですけど、とくに問題は見当たりませんよ」

「お前から見ればそう感じるだろうな。けどな、オレから見れば……なに考えてるかわからないヤツほど危険だ」

真剣な表情で不破が語る。「できればわかりやすいヤツの方と付き合いたい」と付け加えて。

「あと、そうだな。オレは昨日夢を見たんだ。あのチビと似た雰囲気の子に殺される夢をな」

「……何が言いたいんです？」
「お前の身近なところに一番危険なヤツが潜んでいるかもしれないってことだ」

「き、危険なんですか？ そうは思えないんですが」

確かにそのチビ　まり子はまだまだ謎が多い。見た目はあどけない子どもながら言動も立ち振る舞いも摩訶不思議でつかみどころが無く、何を考えているかわからない。平たく言えば食えないタイプだ。しかし、今のところとくに健の身に危険を及ぼす可能性があるようには見えないが。

「今はそうだろうな。その様子じゃとくに何もされてないようだが……そのうちあの女はお前にキバを剥くぞ。オレが見た夢でもそうだったからな」

「近いうちに僕が彼女に殺されるってことですか？」

「ああ、そうなるな。だから離れろって言ったんだ」

健が表情を曇らせる。まり子はいつも微笑んでいる。だが、時折さびしげな顔を浮かべる。過去に何かあったような雰囲気だった。守ってやらねば、と、彼女の寂しそうな顔を見るたびに健は思っていた。なので、そう簡単に彼女と別れるわけには行かない。

「できません。あの子を自分から引き離すなんて」

「なに寝ぼけてんだ！ お前、平気なのか？ 自分が殺されるかもしれねえんだぞ」

「それにあの子は僕に懐いてる。あなたが思ってるほど悪い子じゃない」

「そんなの猫被ってるだけだ。そのうち本性を表してお前を殺しに来るぞ。早く別れる」

「なんでそんなこと！」

「シェイドの言うことを信じるのか！？」

不破が叫ぶ。どうやら彼は既に、まり子がシェイドである事を見抜いていたようだ。以前も健が知らないところでアルヴィーがシェイドだということを見抜いている。ただ、そのときは警告は発しなかった。

「何度も言わせないで下さい、彼女はまだ子どもだ！ 突き放すことなんてできない！」

「ふざけんな！ オレたちエスパーとシェイドがどういう関係か忘れたのか？ 力で服従させて特殊能力を授かる！ 共にシェイドと戦う！ それだけだ！ 奴らに情けをかけるんじゃない！」

「アルヴィーのときは何も言わなかったのに、なぜ今頃になって！」

「あの女は信用できるからだ。だが、今お前と一緒にいるチビは信用できない。別れる！」

「だからできないって何度も……」

そのとき、健の頬を不破の鉄拳がかすった。今度は本気だ、逆上した彼の怒りがおぞましいほどに籠もっていた。殴られた衝撃で地面に座り込んだ健を見下ろし、不破が、

「クソツタレ！ お前のために言ってやったのに！ こうなったらお前の好きにしる。だが、もうどうなっても知らないからな！」

不破がまたも毒づく。イライラを少しでも晴らそうと近くにあつたドラム缶を蹴飛ばし、健を横切つてずかずかと歩き去っていく。もしかして、自分の心配をしてくれていた不破さんの好意を突っぱねてしまったのでは……。少し不安げな顔をしながら、健は立ち上がる。

「……………大変なことになっちゃった……………」

まり子のことと健ともめてしまった翌日、心機一転して不破は警視庁のシェイド対策課に来ていた。久々の通勤だ、周りの同僚や先輩は突然の復帰に驚いていた。

「あつ、不破さん！ おはようございます」

エレベーターの前で黒髪赤眼の若い婦警　六戸が不破にあいさつする。彼女は不破が警察から抜けていた時期に入った若手だ。事務処理能力が高く、シェイド対策課でオペレーターとして働いている。まだ未熟で若いながら、上司である村上から期待の目を向けられているらしい。

「おう、穴戸ちゃん。久しぶりだな」

「はい、こちらこそ。長い間不破さんが来てないものですから、ちよつと心配になってました」

「そうか……迷惑かけちゃったな」

自分が落ち込んで喪に伏していた間、周りはそのような自分のことを心配していたのか。不破は少し申し訳が立たなそうな顔を浮かべた。

「さて、主任がお呼びです。わたしに着いてきてください」

穴戸が言うとおりに彼女についていき、共にエレベーターに乗る。シエイド対策課本部には、エレベーターのスイッチを特定の順番で押せば行くことが可能だ。

だが、順番を間違えたら当然行くことは出来ない。もう覚えたぞと言わんばかりに不破はためめにスイッチを押すが、反応はなし。どうやら間違っていたようだ。

「違います、違います！　今から正しい順番で入力しますから、しっかり記憶してくださいよー」

不破に注意したあと、穴戸は正しい順番でスイッチを押す。今度はちゃんと反応があり、下へ下へとエレベーターが下がっていった。

「久々に来たけど相変わらず目えチカチカするな……」

「そうですね。わたしなんか、しょつちゅう目薬差してます」

エレベーターから降りた二人はモニタールームに入った。ここは東京23区に設置されたすべてのカメラがとらえた映像を映してお

り、ゆえに部屋中あちこちにモニターが設置されていた。つまりこの部屋にいれば、東京の全エリアの様子が一目瞭然というわけだ。

「村上主任、不破さんをお連れしました」

「おつ、来たねお二人さん」

穴戸の呼び掛けを聞き、部屋の中央に陣取っていた村上が椅子ごと振り向く。相変わらず軽いノリだ。やや腹が立つが、これでも根は真面目で冷静沈着。更に仲間思いである。時にはイヤミも言ったりするものの、リーダーシップは十分にある。

「さて、不破くん。君を呼んだのは他でもない。頼みたいことがあるからだ」

「頼みたいこと？」

「ああ、ちよつくら大阪の方まで行ってほしいんだ」

「大阪ッ!？」

不破が大声を出して驚く。部屋中に反響し、周囲の人物はあまりの騒音にみな耳を塞いだり驚いたりした。オーバーリアクションをとった不破に、「お、お静かに」と穴戸が動揺しつつも注意を促す。

「つ、次から大声出すんじゃないぞ……鼓膜が破れるかと思った」

「わ、わりい」と不破が頭を下げる。

「おほん! ……まずはこの資料を見てくれたまえ。今回頼みたい仕事の内容について記されているからね」

そう言って村上は、不破に資料を手渡す。そこには今回の指令の内容と、何をしたらいいのかが書かれていた。

「これは一体……」

「大阪に首都機能を分散するって話は聞いたことあるかい？」

「あ、ああ。一応知ってるがそれとどう関係があるんだ？」

首都圏である東京は広く、当然ながらたくさんの人々が住んでいる。その分シエイドに狙われるケースが多く、対策課の手は行き届いていたものの危険なことに変わりはなかった。そこである政治家が、もしものことが起きた時のために首都機能の一部を大阪に移設するという案を出し、その結果大阪は発展。これを機に安全面や交通面等も見直され、大阪府民は以前より快適な暮らしを送れるようになったというわけだ。

「それに伴って大阪にもシエイド対策課が設置されることになったんだ。まだ人員不足で準備でバタバタしてるみたいだから、助けに行ってやってほしい」

「ああ、わかった」

「僕らもなるべく君をサポートするから安心してくれ」

内容を把握し指令を引き受けた不破から、村上は資料を受け取る。

「そうそう、もうひとつ。『近江の矛』っていうのを知ってるかい？」

「『近江の矛』？　なんだそりゃ？」

「最近になって結成された自警団さ。シエイド対策課がなかなか来てくれないから、自分達で関西一円を悪人やシエイドから守らなきゃってことで結成されたらしい」

「ちなみに近江ってというのは昔の滋賀県の呼び名のことみたいですよ」

村上の解説に宍戸が補足を入れた。「ああ、なるほど。そういう意味だったんだな」と不破は納得する。

「ただね、その近江の矛つてのが怪しいんだよ」

「なんで怪しいんだよ？ 市民が立ち上がって悪い奴らを独自に取り締まったり、怪物を退治したりするわけだろ？」

「確かにそうですよね。すごく危険なのにそれを恐れずに立ち向かうなんて、立派なことだと思います」

「確かに立派なことだ。だが、問題はそこじゃないんだ。黒い噂が絶えないらしい」

村上の言葉に疑問を持った様子で不破と宍戸は、「黒い噂？」と口々に呟く。

「ああ。街を守ってる一方で人を殺してるんじゃないかとか、街を守るのはタテマエで裏で何か企んでるんじゃないか、っていう感じだね」

「確かに怪しいな、それは……。そこでオレに自警団の動向を探れと」

感付いたような様子で不破が言う。

「そういうこと。二つの仕事を掛け持ちすることになるけど、大丈夫かい？」

「大丈夫だ。それに久々の勤務だ、遅れた分を取り戻さないと」

「よし！ それじゃ頼んだよ」

「ああ！」

力強く不破は答えた。大阪に向かうため、そのままモニタールームを立ち去ろうとする不破を「ちよっと待った」と村上が呼び止め

る。

「今度はなんだ？」

「大阪に行く前に君に渡したいものがある。穴戸ちゃん！」

不破に渡したいものがあると村上は語る。穴戸にそれを持ってく
るよう呼び掛け、穴戸は保管庫へと向かった。何を持ってくる気だ
ろうか？ お茶で水分補給をしながら待っていると、穴戸が戻って
きた。「よいしょ、よいしょ」と彼女が重たそうに両腕で抱えてい
るのは、円錐形の槍・ランス型の武器だ。

「どうぞっ、お受け取りください……せーのッ」

「あ、ありがとう……って超重てえぞコレ!？」

穴戸がランスを不破に手渡した。不破の両腕にズシッ！ と、ラ
ンスが乗った。結構重たいようだ。鍛え上げられた不破の太い
腕でも重たく感じるということは、それだけ重量があるということ
になる。

「それは白峯さんが君のために作ってくれた特注品だ」

「白峯さんが!？」

「ああ。何週間もかけて作ったらしいから、大事に使いなよ」

村上からそう告げられ、不破は頷いた。何を隠そうこのランス型
の武器 機動槍イクスランサーは、以前巨大グモのシェイドと戦
った際に大破した同型の武器を参考に、白峯が独自に開発したもの。
開発には何週間もかかった。参考にした武器より性能が高くなって
おり、とくにパワーと使いやすさは折り紙つきだ。外見もメカニカ
ルでとてもカッコいい。

「あとで白峯さんにお礼言わなきゃ……」

「そうだ、不破。大阪に着いたらまた連絡くれ。そしたら指示出すから」

「うし、わかった。じゃあ行ってくるわ」

「はい。不破さん、お気をつけて！」

こうして村上と宍戸に見送られ、不破は大阪へと向かうことになった。果たして天下の台所である大阪で、いったい何が待ち受けているというのか？

EPISODE 114：後輩への警告（後書き）

Q：なんで前回の不破と村上はわざわざラーメンを食べるためだけに京都に行ったんですか？

A：二人はわざわざ白峯さんに遠出をさせるわけにはいかないと思っただので、彼女を気遣って自分たちのほうから京都に向かいました。……って、これもなんか変な話ですね（・・・）

Q：市村さんは今なにしてるんですか？

A：タコ焼いてます

EPISODE 115：食いだおれの街

翌日、早朝。東京からバイクをかつ飛ばし、不破は高速道路を突っ走っていた。朝焼け空を拝みながら、ときに渋滞に悩まされながら、ちよくちよくサーブエリアで休憩しながら、不破は走り続けた。そして、数時間後。

「ふう、長かった」

不破は無事に大阪へたどり着いた。通行の邪魔にならないようバイクを道の脇に止め、懐から携帯電話を取り出す。連絡先は村上だ。

「こちらシェイド対策課です」

電話に出たのは若い女性だ。れっきとした大人だがまだ声色に幼さが残っており、可愛らしい。

「おう、宍戸ちゃんか。相変わらず明るいな」

「いえいえ、昨日は早めに寝たので……あつ、ご用件はなんでしょうか？」

「そうだな、村上に変わってもらえないかな。あいつに連絡するよに言われたんだ」

「了解しました。……村上さん！ 不破さんから連絡入りましたよー！」

不破の用件を聞き届けた宍戸は村上を呼ぶ。何となくだが、不破の頭の中に宍戸が慌てて村上を呼びに行く光景が浮かんだ。実にほえましい。

「……おはよう、不破くん。無事大阪に着いたようだね」

「ああ。これからどうすればいい？」

「君、今どこにいる？」

「ん？ ああ、通天閣が見える辺りだが……」

「通天閣か……わかった。今から場所を言うから、対策課の大阪支部に向かってくれ」

「了解！」

村上からの次の指示は、シェイド対策課の関西支部に向かうこと。場所は道頓堀にあるビジネスホテル『ドリームランド大阪』の付近だそう。まるで遊園地のような名前で、一回聞いただけではホテルとは思えないが、この際どうでもいいだろう。再びバイクにまたがり、不破は対策課大阪支部へ向かうことにした。が、その瞬間、不破の腹の虫が唸りを上げた。

「……やっべ、朝全然食ってなかった」

腹が減っては戦はできぬ。近くの屋台でたこ焼きを買って食べ、コンビニで買った鮭おにぎりを食べ、またたこ焼きを買い、ほとんどその場しのぎだが、とりあえず空腹は満たせた。あとは気を取り直して大阪支部に行くだけだ。

それから不破は村上から聞いたとおり、バイクで道頓堀へ向かった。彼が言っていたホテルの近辺の駐車場でバイクを止め、そこからは徒歩で大阪支部を目指す。やがて周りのものよりやや高くて立派なビルが、不破の目に留まる。近くには警察関係のものと思われる大型トレーラーも、もしかここが、大阪支部なのだろうか？
そこで不破の携帯電話から着信音が鳴り、相手は村上だった。

「不破、目の前にでっかいビルが見えるだろ？」

「ああ。このビルがシェイド対策課大阪支部なんだよな？ 近くに対策課のトレーラーもある」

「 大当たり。とりあえず中に入ってみ。あ、守衛さんにちゃんと警察手帳見せてから入りなよ」

「はいはい。わかってるよオ……………」

思った通りだった。不破のカンは当たっており、このビルがシェイド対策課大阪支部だった。警備員に手帳を見せてビルの中に入り、受付嬢にも爽やかにあいさつ。意気揚々と中を進んでいくと、やがて『対策会議室はこちら』というプラカードが目にとまった。どうやらこのプラカードから右折すれば会議室があるらしい。更にそのプラカードの近くには、タバコを吸いながら佇んでいる壮年男性の姿があった。

「……………あれ、堂島警部！」

「ん？ おお、誰かと思ったら不破じゃねえか！」

「お久しぶりです！」

「へへっ、こっちこそ」

堂島　と呼ばれた男性は濃いグレーのスーツ姿で、髪型は茶髪
の角刈り。瞳の色も同じく茶色。腕が太めで全体的にいかつく、い
かにも行動派といった風貌をしていた。口調や態度から察するに、
不破とは知り合いか、あるいは上司と部下の関係のようだ。

「しかし警部、どうしてシェイド対策課に？」

「ん、ああ。それはだな　立ち話もなんだ、会議室にでも入ろう
や」

堂島が言うとおりに、不破は会議室の中に入った。がら空きであまり人はおらず、警備員が入口に立っているぐらい。缶コーヒを片手に、堂島と不破は適当な席に座って話し合っていた。

「それで俺がこつちまで来た理由だが、アレだ。暴動が起きるかもしれんってことで、ちよいと警備を頼まれてな」

「ぼ、暴動？ いったい誰がそんなことを……」

「『近江の矛』だよ」

近江の矛　とは、関西一円、主に大阪を中心に活動している自警団。警察が大阪に中々シエイド対策課を設置しなかったことに不満を抱いたものたちが結成し、犯罪者やシエイドから人々を守る一方で黒い噂が絶えず、どこか怪しいところがあるらしい。

「お前も聞いたことぐらいはあるだろう？」

「は、はい。村上の奴から聞きました」

「連中、どつから手に入れたか知らねえが……手榴弾やら拳銃やら、それからナイフにスタンガンやら、やたらと物騒なもんばかり持っているそうさ。まるで誰かのもとにカチコミでもかけるようにな」

「なにっ！ それじゃまるでギャングか強盗みたいじゃないですか。あつ、カチコミならヤクザか」

「それだけじゃねえ、構成員の中にはエスパーも混じってるらしい……だから俺たちも迂闊に手が出せねえってわけだ」

事態は思っていたより深刻だった。話を限りでは近江の矛は自警団とは名ばかりのかなり危険な連中で、今にもデモを起こしそうだという。話を聞けば聞くほど信用できない。街を守るどころか、逆に脅かしているではないか。

「とにかく、下手なギャングよりタチが悪い。気を付けた方がいいぜ」
「はい！」

堂島と再会したあと、不破はいつ大阪支部が襲われてもいいうように身構えていたが、結局誰も来なかった。とくに何も変わったところはなく、そのまま夜を迎えた。近くにあるビジネスホテルに泊まることにし、部屋のベッドで不破は寝転がっていた。ビジネスホテルだからとはいえ、あまりにも狭い。荷物を置いたらスペースを圧迫してしまう。少し不満を感じたが、そこはホテルの方針なので仕方がない。怒ったところで何も始まらないのだ。

「どっかで爆発でも起きるんじゃないかと思っただが、結局たこ焼き食って堂島警部と久々にしゃべったぐらいだったな 実に平和な一日だった」

一日を振り返り、しばらく休憩するとシャワーに直行。熱いシャワーを浴びて大阪に辿り着くまでに流した汗をしっかりと流し、頭や体を念入りに洗い流してシャワーから上がる。湯上がりに浴びるクーラーの冷風（環境に配慮し設定温度は28℃）は気持ちいい。

「プハーツ、生き返る〜ッ！」

そして風呂上がりには飲むビールは冷たくておいしい。牛乳のように腰に手を当てて飲むことなど出来ないが、それでもウマかった。だが、ビールは二十歳からである。二十歳以下は炭酸飲料やカルピスなどで我慢するべし。あまりにビールが旨いので気分がよくなつた不破は、パンツ一丁から寝間着を着て就寝。だが、その前に

やらなければならぬことがひとつだけあった。おもむろに携帯電話を触りはじめると、誰かの電話番号を入力し。

(今日は何も起きなかつたが、『近江の矛』の連中が何しだすかわからない以上いまの大阪は危険だ。あのゆるキャラ野郎に注意しとかなきゃな……)

同時刻、京都駅前のアパート・みかづきパレスにて。自室で寝ていた健を、携帯電話の着信音が叩き起こした。

「こんな時間に誰だよ……うるさいな」

夜中に起こされ、少し苛立っている健。携帯電話を開き、「もしもし……」と電話に出ると。

「東條、こんな夜中に電話してすまん」

「ふっ不破さん!？」

携帯電話が光る暗がりの中、驚いた健が急に大声を出す。あまりのでかさにアルヴィーとまり子が起き上がり、二人は肩をピクツと震わせた。

「で、でけえ声出すな。ビビったじゃねえか」

「す、すみません」

「……おほん、まだ起きてるよな? お前にちよいと話がある」

「話ってなんですか?」

「大阪には行くな」

「……えっ? なぜですか?」

健がきよとんとした顔で言う。彼の後ろでは大声で叩き起こされたアルヴィーとまり子が、座ったままじっと健を見ていた。二人とも寝癖がいつの間にかやらついており、どこか可愛らしい。とくにまり子はパジャマ姿といつてもより癖のある髪の毛のせいで、ますます可愛らしくなっていた。

「最近、自警団気取りのギャングどもが大阪を中心に暴れ散らしている。出会ったら最後、血で血を洗うようなことになりかねん。それが嫌なら行かないことだ」

「ですけど、友達と大阪で遊ぶ約束が……」

「いいから行くなッ！ 行ったら死ぬかも知れないんだぞ、それでもないのか？」

「不破さん、それはちょっと大きさんじゃ……？」

「大げさんかじゃない、ホントのことだ！ ……まあ、どうしても友達との約束を果たしたいんならオレも無理に止めはしない」

やや切羽詰まった様子でしゃべっていた不破だったが、次第に落ち着きを取り戻していった。「京都でおとなしくしとくか、大阪に行って死ぬかはお前次第だ。好きにしる、じゃあな！」と告げ、不破は電話を切った。彼は何を焦っていたのだろう。執拗に『大阪に行くな』と警告したのは、二度と誰かを失いたくないという思いによるものだったのだろうか。それとも、先輩としてはせつかくできな後輩を失いたくないからだろうか。

「……健、誰からだった？」

「不破さんから」

「不破殿か。彼はなんと？」

「大阪に行くのはやめとけってさ」

「えー！ それじゃたこ焼き食べられないじゃん。わたし、そんなのやだ」

言葉は聞くだけではその真意はつかめない。だが、今はとにかく体を休めねば。不破からの警告を胸に受け止めた健は、トイレで用を足して手を洗ったあと、明日に備えて寝る事にした。寝る子は育つ。気のせいかまり子の身長が少し伸びているように見えるが、それはまた別のお話。

EPISODE 115：食いだおれの街（後書き）

Q：堂島警部はどこに所属しているんですか？

A：警視庁公安部の第一課です。元々、堂島さんは捜査一課にいたんですが、いろいろあつて公安に異動しました。

Q：不破さんって友達いるの？

A：少ないよ。だってあんな性格だし、乱暴だし……。

Q：市村さんは近江の矛に所属してますか？ してませんか？

A：恐らく所属してません。流石の彼もそこまで過激ではないです。

EPISODE 116：せまられた選択

「あーあ……何だかなあ」

先日の晩に不破から『大阪に行くな』という警告を何度も受けたせいか、健はすこぶる不機嫌だった。バイト先でも浮かない表情のまま仕事を続けており、周囲が「何かあったのか」と心配してしまうほどだった。昼休みになっても延々愚痴りながら弁当を食べている始末。これでは周りがつい彼のことを心配してしまうのも無理はない。

「東條さん、何か嫌なことがあったんですか？」

「じえ、ジェシーさん！」

そこに青い服を着た金髪碧眼の女性職員　ジェシーが現れた。日系ハーフでおっとりした性格の彼女は、噂では元お嬢様らしい。また、巷ではメガネをかけたら似合うんじゃないかと噂されていたりもする。

「えーとね、実は……知り合いに警察の人がいまして」

「あら」

「それでその人がしつこいぐらい言ってきたんです、大阪は危険だから行くなって」

「あら……それは大変。どうしてですか？」

「自警団を気取ったギャングが警察に対してデモを起こそうとしてる、って言っていました」

「自警団……」

きよとんとした顔でジェシーが呟く。少し困った様子で人差し指

を口にそえながら、「大阪に自警団なんていたかしら……」

「それって『近江の矛』ってやつ的事？」

そこに茶髪をなびかせた明朗快活な女性　浅田が割り込んだ。
いつもは髪を後ろで束ねている彼女だが、今日はなぜか髪を下ろしていた。

「お、近江の矛って？」

「ニュースとかで見たことないかな？　爆弾だの拳銃だの、とにかく危ないものばかりで武装した人たちよ」

「……あ、ああ！　確か、この前報道されてましたね！」

「そのニュース、私も見てました。確か市庁舎に火炎ビンとか手榴弾を投げ込んで騒ぎになってたとか……」

浅田からそう言われて、健もジェシーも以前に見たニュースのことを思い出す。一週間、いや二週間前だっただろうか。日本列島が夏休みシーズンに入ったばかりの時の出来事だ。暑さと戦いながらも夏を楽しんでいた人々を混乱に陥れるような事件が起きた。自警団『近江の矛』を名乗る連中が現れ、そのリーダー格が「警察も政府も我々を守ってくれなかった。だが、今は違う。我々近江の矛が大阪を、関西を守る。もはや誰一人として守れない無能な警察や、腐りきった政府の連中は必要ない！　奴らに天罰を下す！」と雄叫びを上げたのを合図に、彼らは市庁舎など政府関係の施設でデモを起こした。はじめは市民からそれなりに信頼されていた『近江の矛』だったが、この事件をきっかけに信頼はがた落ち。今ではすっかりいい評判を聞かなくなってしまうたというわけだ。

「世の中物騒になったよねえ……暑さで頭をやられたのかな」

「そういうことが立て続けに起きてるんじゃない、遊びにも行けなくないっちゃいますね。まったくイヤな世の中だ」

「あら、東條さん。もしかして大阪に遊びに行く予定を立ててたのかしら？」

何かを察知したような口調でジェシーが問う。彼女からの問いに、健は少しビビりながら「はい」と答えた。

「土日に友達と海洋博覧会に行く予定だったんですよ」

「海洋博覧会、ですか。楽しそうね……私も行ってみたいです」
「でもさっき言ったように、知り合いの警察の人から行くの止めるように言われてて……」

言葉の最後に健は、「残念きわまりないです」と付け足した。真面目に働くのはもちろんだが、たまにはパーツと遊びたい。本来なら友達と遊びに行くはずだったが、行き先の大阪が何やら揉め事が起きそうな雰囲気になっており、迂闊には行けなくなってしまった。非常に残念なことである。ただ、健はエスパーである。当然戦えるし、程度にもよるがギャングぐらいなら楽勝だ。しかし、友達をそいつらから守りきれるかどうかは 正直、自信がない。

「はあー……」

バスを降りた健は、ため息をつきながら歩道を歩いていく。夏だからか、夜とは思えないほど外は明るい。夕方だとウソをついても通じそうなくらいだ。

「ただいまー」

アパートに辿り着くと玄関の扉を開け、低いテンションのまま呟く。スリッパを履いてトボトボと洗面所へ向かい、手洗いとうがいをすませる。リビングに移動するとそこでは、アルヴィーとまり子が仲良くおやつを食べていた。

「おかえりー。元気ないけど、何かあった？」

「なんでもなーい……」

まり子からの問いに疲れきりで、そっけなく答えた健。器に盛られていたせんべいを一枚取りだし、バリバリとかじる。そんな健にアルヴィーは、「なんでもないことないだろう。相談に乗ってやるから、話してみい」と気さくに声をかけた。

「土日にもゆきと海洋博に遊びに行く予定してたんだ。そのことについて職場で話したら憂鬱になった。あとはご覧のとーり……」

「海洋博か。どんなところだ？」

「大阪港の辺りでやってる博覧会さ。海についていろいろ展示してるんだって」

「何が展示されてるの？」

「海はなんで青いのかとか、海の生き物とか、海の底はどうなってるのかとか……そういうのを展示してるらしいよ」

「へえ、面白そう！」

「私もまり子に賛成だ！ その海洋博とやらに行ってみたい！」

海洋博覧会のことを話してみたところ、二人とも目を輝かせながらただならぬ興味を示した。だが、いけない。この二人も、みゆきも、危険な目にあわせたくはない。楽しんでいるところに水を差すようで悪いが、ここはちゃんと伝えなければ。意を決して健は「でも行けないよ」と二人に告げる。

「えっ、どうして？」

「不破さんから止められたんだ。行ったら死ぬかもしれないからやめとけてさ」

「そんなー……」

「あと、わるーい人たちが刃物とか拳銃とか、爆弾とかで武装して暴れてるらしいんだ。ちよつと残念だけど、そんな危険なところにはおちおち遊びに行けないよ」

それを聞いてさっきまで興味を沸かせてはしゃいでいた二人が急に黙りこむ。よほど外に遊びに行くのを楽しみにしていたのだろう。

「そうは言うが……お主としてはどうしたいんだ？」

「できれば約束は守りたいけど……うーん」

「じゃあ、行けばいいじゃない」

「えっ？」

「それで、みゆきさんとの約束もあの人の事もあなたが守ればいいのか。それでいいでしょ？ お兄ちゃん」

まり子にそう言われて、健はきよとんとした表情で彼女を見つめた。確かに自分たちは戦えるが、危ないものは危ない。それに無駄な争いと血で血を洗うようなマネをしたくはない。健は再三悩んだ。不破からの言いつけどおりに事を運ぶべきなのだろうか。それとも自分の考えを貫いてみゆきとの約束を果たすべきなのだろうか？
悩んだ末に彼が出した答えは。

「……わかった。やっぱり君の言う通りにするよー！」

「ホントに？ やったー！ 海だ、海だー！ 泳ぐよー！」

「いや、泳ぎには行かないから……」

「えーっ」

沈んでいた空気が一転、再び活気が戻った。楽しげにやり取りを交わすまり子と健を見守るように、アルヴィーはにっこりと微笑んでいた。

窓の外では、そんな彼らの様子を、目玉を模したような小型の機械がまるで行動を監視するかのようにつめて見ている。その目いや、カメラにはしっかりと彼らの姿が捉えられていた。

「ほう……これは面白いことになったな……」

その部屋にはびっしりと写真が貼られたホワイトボードがあり、ファイルは机の上に山積みで、怪しい液体が入ったビーカーがいくつも棚の上に並べられている。部屋は薄暗く、デスクに座っている人物の姿は良く見えない。ただ、低い声やかすかに見える外見から察するに、壮年か初老の男性である事は確かだ。白衣も着ている。

「高慢ちきできわめて冷酷、きわめて非情！ あのクモ女が例の青年に懐きおつたとはな！」

目玉のような偵察メカが映し出した映像を見ながら、誰も居ない部屋でひとりハイテンションで叫ぶ。傍から見れば、異様な光景だ。いい歳の男性がひとりで、部屋にこもりつきりで叫んでいるのだから。何度でも言おう、これは異様な光景だ。

「ヴァニティ・フェアに『クイーン』……警察に白龍。そして、東條健」

映像だけでなく、古い書物も読みながら男は呟いた。羊皮紙で作られた、その書物の表紙には魔方陣が記されており。

「今はこいつらの漬し合いをじっくり見物するでしょう」

雷鳴が轟き、窓の外で激しく光る。一瞬、この男の研究室が明るくなった。かすかに見えた部屋の奥の方にあつたのは、棚に置かれた中心に一つ目を模した禍々しい模様が刻まれた仮面。そこから更に奥にあつたのは、培養槽の中に漬けられている 人とも機械ともとれぬ、不気味な怪物。

「フハハハハハ、ファハハハハハハハ……！！」

EPISODE 116：せまられた選択（後書き）

Q：まり子と契約したらどうなるの？

A：できません。理由は後述。

Q：多重契約はできないの？

A：実はできないことはないです。ただ、身体的にかかる負担がより過酷になると、負担に耐えられても強すぎる力に精神を蝕まれて正気を失ってしまう恐れがあるので基本的には禁じられています。

Q：最後のほうに出てきた怪しい人はだあれ？

A：このシリーズの最初の方であからさまに怪しい人が出てきましたが、覚えている方はいらっしやいますでしょうか？ 名前は確か、えーと……名字に『大』ってついてたな！。

EPISODE 117：海洋博覧会

不破が言ったとおりにするべきか、大切な人との約束を守るべきか
健の心はその間で揺らぎ、なかなか決心がつかなかったがま
子の一言を聞いた健は振り切った。やはり約束は守ったほうがいい
と。そして、ついに遊びに行く約束をしていた休日を訪れた。

「おおつ、ここが海洋博か！ でっけえ！」

週末、炎天下の中暑さを堪えて健たちは大阪港付近で開催中の博
覧会『海洋博』に来ていた。この博覧会は屋外で開催され、海の科
学や海中の生態系などについて展示されている。元々海について造
詣が深いものやそうでないものの興味を引く内容となっていた。更
にただ見るだけではつまらない児童の為に、展示物の中には遊べる
ものもあるようだ。

「これだけ広いとはぐれたら大変そうねー。みんな、どこから行く
？」

「そうだのー、うーんと……」

辺りを見回したみゆきが一言。彼女への返事は、みな口々に「時
計回り」だった。ここに来るのははじめてだったからか、どれもこ
れも面白くて勉強になるものばかりだった。時には辛いことに耐え
ながら学んでいくのが勉強というものだが、どうせなら楽しみなが
ら学びたい。

「おや？ 水槽の中でボールがプカプカ浮かんでいるぞ。なんでだ
ろうねー」

「わたし、これ知ってるわ！ 浮力だったっけ？」

「正解！ 軽いものは水面へ浮かび上がって、重いものは逆に沈んでいくんだ」

「えへへ。科学の力ってすごいなー！」

今や社会人の一員である健もみゆきも、今日というこの日は童心に帰って遊んでいた。まるで学生時代に戻ったようだ。まり子もそれに便乗するように大はしゃぎしていた。見た目は子どもとはいえ、中身は大人だ。だがあまりに楽しいものだから、彼女もこつやって年相応の女の子らしい振る舞いを見せているのだろう。展示物を見て回るだけではなく海の幸を使った食べ物を味わったり、冷たいソフトアイスを食べて体を冷やしたり、飲み物をほしがるみゆきやまり子にジュースを買ってあげたり、4人の中では一番大人っぽく見えたアルヴィーまでもがとうとうはしゃぎ出したり。会場内は楽しい事だらけだった。皆、暑さに負けない活気を見せている。むしろそのまま吹き飛ばしてしまいそうなくらいだ。

「あぢい〜……」

だが、この祭典を楽しむことが出来ないものもいた。不破だ。一見観客の中に混じってこの催しを楽しんでいるように見えたが、実は違う。彼はパトロール中なのだ。怪しいヤツが観客に紛れ込んでいないか、または会場内で暴動が起きたりしないかを見張っている。シェイドが出た場合は観客に避難するように促す役目も持っていた。彼は決して暇ではない、むしろ忙しいのだ。

（つたるような暑さだな……このクソ暑い中を見回りしろだなんて、村上也正気じゃねえ。オレだってたまには息抜きしたかったのに！
最悪だ！）

心の中で愚痴りながらも、不破はパトロールを続ける。途中でベ
ンチに座ったり、水分補給したり、アイスを食べたり　ちよくち
よく休憩も挟んだ。そうでなければやってはられないからだ。

「ま、今の所は異常なしと……ん？」

そんな彼の目に止まったのは　ゆうゆうと遊びに来ている東條
の姿。彼のガールフレンドであるみゆきと同居中のアルヴィーとま
り子もいる。　　もじゃ、来てしまったのか。あれほど注意をして
おいたというのに。困り顔をしながら健たちに近付き、「おい、お
前！　結局来ちまったのか！」

「ふ、不破さん！？　こんなところで何をなさっているんですか！
？」

「何って、仕事だよ。お前らと違って遊びにきたわけじゃない。こ
うやって観客に紛れて、怪しいヤツが何かしでかさないかパトロー
ルしてんだ」

突然不破から声をかけられ、健は背筋が震えた。彼だけでなく、
他の三人もきよんとした顔で不破を見つめていた。

「じゃ、じゃあ、お仕事に戻った方が」

「あいにく異常なしなんだ。それより今は……話がしたい」

急に険しい表情になると健を睨みつけ、威圧する。彼の目つきに
おびえたみゆきは後ろへ下がっていく。みゆきの前には彼女を守る
ように、アルヴィーとまり子が立ち並ぶ。

「……クソツタレめ。まだあのチビと一緒にいたのか。別れろって

言つたらうが！」

「「忠告ありがとうございます。でも、何度言われようと考えを変
えるつもりはありません」

「へッ、何がそうやってお前を意固地にさせるのかねエ……」

呆れるように不破が言う。彼が言うチビとは言わずもがな、まり
子のことだ。不破は以前、彼女に似た女性に惨殺される夢を見た。
その翌日立ち寄った中華料理屋でまり子を見た途端、夢に出た女性
と彼女を重ねてしまい。彼女と同居している健の身が危ないと
思った彼は、こうやって何度も健に忠告をしているわけだ。このま
まだといずれ食い殺されてしまう、だから本性を表さないうちに別
れると 同じような内容を何度も繰り返して言っていた。

「僕も不破さんと話をしに来たわけじゃない。みゆき達と一緒に遊
びに来たんです。不破さんもこんなことしてないで、お仕事に戻っ
てください」

「チツ……これだけ言つてもわからんとはな。見下げたヤロウだ！」

不破が至極不機嫌そうに舌打ちする。急に健の胸倉をつかんだか
と思えばそのまま地面に叩きつけ、まり子に近寄ると彼女の手を無
理矢理掴み取る。「ちよっ、離してよ！」とまり子は不破の腕を振
り解こうともがく。

「ふ、不破さん！ 何を……」

「今回話をしてみてわかったことがある。お前とはいくら話をして
もムダだったことだ！」

「離してよ、離しなさいよ！」

不破は制止も聞かず、嫌がるまり子の頬をはたき、無理矢理にで
も引つ張って健たちから引き離そうとする。そこへアルヴィーが、

「待たれよ！」と止めに入る。不破の手を払いのけてまり子を解放する。まるで悪党から幼い娘を守ろうとする母親か、あるいは妹を守ろうとする姉のようだ。

「まり子はお主が思っているような邪悪な輩ではない。少しだけでもいい、まり子を信じてやってくれ」

「かばい立てする気かよ？ あんた、こいつの知り合いか何かか？」

「ああ、そうとも。まり子とは古い付き合いでの。彼女の事は大体知っておる」

「それだけじゃ信じていい理由にはならねエ。根拠はあるのか？」

「まり子は人を襲わぬし、食いもせぬ」

本当なのか、と言いたげに不破が眉をしかめる。そもそも彼はまり子のように底が知れない、つかみ所のない人物を嫌う傾向がある。彼女がバケモノだからというのもあるが。

「これでもまだ信じぬか？」

「わ、わかったよ…… あんたにそう言われたんじゃ仕方がねえ」

「それは良かった。さ、手を差し出せ」

アルヴィーに言われるがまま、不破は手を差し出す。「な、何のマネだ？」と不破はアルヴィーに問うが、「仲直りの握手だ」という返答が帰ってきた。対するまり子もつられて手を差し出す。

「わ、悪かったな。疑ったりなんかして……」

「……ふん」

不本意ながらも、握手を交わした。へソを曲げた様子でまり子は「もう顔も見たくないわ。帰って、ゴミ野郎」

「ご、ゴミだと!? 貴様ア! 日夜市民を守り続ける国家公務員がゴミだというのか!？」

「わたしは事実を言ったままでなんですけど? あなたの職業は関係ない。中身が問題なのよ。そんなにわたしのこと嫌いなのか? どうしてそこまでわたしのことを極端に恐れてるの?」

「っ……お前が目エ離れた隙に東條や、周りの人々を殺すかもしれねえからだよ。それ以外に何かがある!？」

「わたしが健のお兄ちゃんを殺すってなんで言い切れるの? 証拠はあるの?」

「うっ……」

まり子が冷たく不破をなじる。その見下すような姿勢はきわめて傲慢、微笑みは健に見せているようなあどけなく明るく明るいものではなく、冷酷な女王のような笑み。

「見たところ、おじさんがわたしを嫌がるのには他に理由もありそうねえ。教えてもらえないかしら?」

「!?!? お前、まさか……」

戸惑う不破。彼とは対照的に、まり子はほくそ笑む。このとき、不破は薄々感付いていた。このチビはもしや、以前の掃討作戦で倒されたシェイドではないか、と。

「そうよ、わたしはあるときあなたに倒された」

「や、やめる。もう何も言っな!」

「じゃ、言わない」

「そうそう、あなたにやられた事はそんなに気にしてないから」と付け加え、まり子は健に寄り添った。その視線は不破への敵意がこもっていた。

「す、すみません。この子、自分が嫌いなものには冷たくて……」
「いいんだ。そいつからもう聞いたかもしれんが、オレは以前そいつと戦って倒したことがある。そのときに大勢仲間を失った」
「そういえば」

表情を曇らせた不破が語る。確かに彼が言うように、健はまり子が以前警察のシェイド対策課に倒されたことがあるという話を聞いていた。一度聞いて知っていたことだとはいえ、改めて知ると過酷だ。それでは不破がまり子を恐れて警戒するのも、まり子が不破を嫌うのも無理はない。どちらも辛かったはず。

「……そのチビに復讐してやろうなんて思っちゃいない。復讐が虚しくて何の意味もないものだってことは、浪岡の件で思い知ったからな」

「不破さん……」

「だが、勘違いするなよ。オレはそのチビのこと、まだ完全に認めたくわけじゃねえからな!!」

そう吐き捨てて不破はズカズカと歩き出し、健たちの前から失せた。この一件はどちらが悪いともいえないし、どちらも責める事は出来ない。どちらも必死だった。片方は我が子と巣を守るために、もう片方はシェイドによる被害におびえる人々を一刻も早く救うために戦っていたのだから。

「……行っちゃった。お兄ちゃん、それにみんな……さっきはゴメンね」

「いや、いいんだ。不破さんも少しだけだけど分かってくれたみたいだし」

「まだ行ってないところあったよね。今度はそういうところを見て

「回りましたよ」

申し訳なさそうに頭を下げて謝るまり子を、健もみゆきも笑って許した。いつまでもくよくよするよりは、前を向いて歩いた方がいい。それで前向きに楽しんだ方がいい。まだ行っていないところがあつたのを思い出し、4人は再び会場内を回る。今は楽しまなければ、だが、楽しい事は長くは続かなかつた。

「……っ!?」

突然、どこかで爆発が起きる音が聞こえた。「な、何があつたんだ? とにかく行かなきゃ!」と健はアルヴィーと共に走り出す。二人を追うようにみゆきとまり子も走り出した。爆発音がした方向を辿ると、そこには驚きの光景が! タコのような姿をした不気味な怪人が、その触手をうねうねと動かしながら人々を襲っているではないか。

「ヘッヘッヘ! ウマそうな人間どもがウヨウヨしてやがるぜ!
! おい、そのネエちゃんよ!」

「い、いやあああああ!」

タコのようなシェイドは触手を近くにいた女性に巻きつけ、緊縛。その柔らかな肢体をしめつけて苦しめる。

「俺はいい女のホネがきしむ音が好きなんだなあ! オメーにはたつぷり、悲鳴上げてもらうでタコ! タッコオオオオ!」

更に力を入れてタコのシェイドは女性を締め付ける。締め付ける。締め付けるッ! 触手で若く美しい女性を緊縛して苦しめようとは、女好きもここまで来ると卑猥というか性悪というか とにかく、

悪趣味である。そんなタコのシエイドに人々は恐れをなし、逃げ惑う。だが、こいつの蛮行も長くは続かなかった。現場に駆けつけた健が、「やめろ！」と叫びながらタコの触手を叩き切ったのだ。

「お、お前！ 何しやがるタコ！ ぐえっ！？」

不謹慎なタコを払いのけ、健は女性の手をとって「大丈夫ですか？」と優しく声をかけ、「速く逃げて！」と逃走を促す。次に健はタコのシエイドに切っ先を向け、威嚇する。その背後には、腕を組んだアルヴィーが立っていた。眉をしかめて睨むみゆきとまり子の姿もあつた。

「みんな海洋博を楽しんでたのに、それを邪魔するなんて！ 許さん！」

「う、うるせえ！ 俺様の侵略を邪魔するヤツは、痛い目にあわせてやるタコ！」

茶色かったタコのシエイドが怒りのあまり真っ赤になり、全身から湯気を噴出す。その触手もあらぶっていた。

「死ねええええ！！！」

さあ、戦いだ！

EPISODE 118：侵略！ タコ息子

タコのようなシエイドが触手をうねらせ、それをムチで打つように叩きつける。転がってかわし、健は攻撃すると同時に触手の一本を叩き切る。紫の血が散乱し、タコのシエイドはうめき声を上げた。

「うぎーっ！ このポットパス様のウデを切り落とすとは！」

「自分に様付けとは、いかにもザコが言うことだね！」

「なめんじゃねーっ！」

ブシューッ！ と、タコのようなシエイド ポットパスが口から盛大に黒いものを吹き出す。タコが吐くものといえば、そうタコ墨だ。

「め、目の前が真っ暗だ」

タコ墨というのは、タコが外敵から身を守るために吐き出すもの。これを相手の目にぶっかけて視界を悪くする。その際にタコは敵の魔の手から逃走するのだ。

「健、うしろだ！」

「っぐはっ！」

視界が悪くなった健を狙い、ポットパスがドロップキックをしかける。アルヴィーはすぐ回避するよう健に呼びかけたが、目の前が真っ暗になっていてほとんど見えない彼が後ろからの攻撃にとっさに反応できるわけがなく、直撃。起き上がって目を袖で拭き、体勢を整える。

「ケケツ、ざまあみる！ 次はこれでも食らえタコ！」

ムチのように触手がしなる。だが、健は跳躍してポットパスの懐に飛び込み、一撃浴びせる。

「タコタコうつさい！！」

剣を突き立てそれを軸にして鋭い蹴りを繰り出し、突き飛ばす。湯気を吹き出して怒ったポットパスは近くにあったポールを投げつける。だが、盾で難なく弾かれた。ポットパスの怒りのボルテージはますます上がっていく。

「このクソガキ~~~~ッ！ ゆるさーんッ！！」

怒号を上げながらポットパスが突撃する。体当たりされて吹き飛ばされないよう、盾を構えて防御に入る健だったが。銃声と共にビームがいくつも飛来し、すべてポットパスに命中して火花を散らす。

「おいおい、何の騒ぎや！？」

陽気だがどこか攻撃的な声とともに、空中での宙返りを華麗に披露しながら青い髪の男が颯爽と現れた。メタリックブルーの大型の銃を手にしたその男の名は。

「市村さん！」

「なんや、会場からみんな逃げてったから何があったんや思ったが……えらいごっついタコおるやんけ！」

その男は何を隠そう、浪速の銃狂いと呼ばれ恐れられている男

市村正史。「お前か、お前の仕業やな！」と叫んで怒りを露にすると銃口からビームを放ち、ポットパスを攻撃。更に追撃を加えながら、「みんな、この炎天下の中楽しんでったんやぞ！ それを邪魔しよってからに！！」

「お前みたいなヤツは焼いても食えんわい！ 真っ黒焦げにしたるわぁーッッ！！」

ポットパスを待っていたのは自分を有利にするチャンスではなく、ビームの連射というもらつても嬉しくない応酬。その勢いと来たら健が加勢に入る隙も見当たらないほどだ。

「なんとという気迫だ……市村さんに加勢する隙がない！」

「このまま任せちゃつても大丈夫そう」

「いや、まだわからんぞ」

「……焼いたらおいしそう」

市村の戦いぶりを見た他の四人がコメント。それぞれまったく意味が異なることを呟いていた。まり子は「じゅるり」とよだれを出しており、既にポットパスを食べ物扱いしているようだ。

「東條はん、突っ立つてんと手伝ってくれや！」

「は、はい！」

健に協力呼びかけ、駆け寄つた彼に「タコやつたら焼いて食わなあかな！」と冗談を飛ばす。元から協調性は少なからずあったとはいえ、以前の健を常に敵視して隙あらば倒そうとしていた市村と同一人物とは思えない。

実はこれ、単なるジョークではなく 健にヒントを与えていたのだ。相手はタコ。タコは軟体動物。軟体動物はたいてい水中に棲

んでいる。いきる上で体内の水分が重要となってくるため、それを強い熱で乾かされたりすると　また、雷にもあまり強くない。つまり……？

「焼いて食つか……はいっ！　喜んで！」

市村が言った言葉の意味に気付いた健は、長剣の柄に赤色のオーブをセットする。シルバーグレイを基調とした長剣の色が、瞬間に炎に包まれ赤を基調としたカラーリングに変わっていく。見るからに熱く、少し近付いただけでかなりの熱気が肌が焼かれてしまいうさだ。

「よっしゃ、準備完了！」

「あとは焼くだけですな」

「ヒイヒイ！　なんなんだこいつらあ！　ここは逃げるタコおー
ー！！！」

なんとという威圧感だ、勝てる気がしない！　恐れをなしたポットパスはびくびくしながら、逃走を図ったが　。逃げた方向には大きな蜘蛛の巣が張られていた。まるで行く手を阻む壁のようだ。その近くの木の枝には、まり子が座っていた。見下すような視線でポットパスを見ている。

「残念でした、東尋坊。じゃなくて、とおせんぼ」

「え、えーっ!？」

「酢漬けもいいけど、タコといえばやっぱりタコ焼きよねえ……フフツツ」

　食い物にするのを前提でしゃべっているまり子に、動揺を隠しきれないポットパス。蜘蛛の巣に引っ掛かって身動きが取れなくなっ

た彼に極大ビームが着弾。

立て続けに炎の剣を携えた健の踏み込みながらの斬撃を受け、ポットパスは情けない悲鳴を上げながら爆発した。爆発をバツクに、健と市村はそれぞれカッコいいポーズを決めた。とくに健が剣を振り回しながら鞘にしまふ仕草はキザで少し憎たらしい。

「さ、これでもう安全やで……むっ！」

「ひと安心ですね……むむっ！」

爆発が収まり振り返ると、奴がいた。あれほどの大攻撃を受けてまだ息があるとは大したものである。とはいえ、既に相手は虫の息。ピクピク震えることしか出来ていなかった。それを見た市村は、みゆきとアルヴィーがいる方へ振り向き

「……タコの丸焼き、いつちよ上がりや！ 誰か食べへんかー？」

「いいです、遠慮します」

「あとで屋台で買うからいらぬ」

市村からの問いに二人は首をかしげ、即答した。にやついていた市村はきよとんとした顔を浮かべる。そんな彼の後ろで「じゃ、わたしがもらうね！」と声がしたので振り向くと、まり子が背中から出した蜘蛛の脚を突き立ててポットパスを喰らっていた。少しかじりだしたかと思えばあつという間に食べ尽くしてしまい、腹がふくれた。

「食べすぎたー」

「た、確かにそうだね……」

健が冷や汗をかく。あくまでさりげなくポットパスを食べていたまり子だが、かわいらしい言動とは裏腹にその光景には恐ろしいも

のがあった。相手は人ではなくシェイドだったが、これがもし人間
だったらと思うと。彼女は無邪気なようで残酷である。

EPISODE 118：侵略！ タコ息子（後書き）

Q：タコが人間界を侵略しちゃダメなの？

A：ダメな事はない。けど、どうせ侵略されるなら女の子がいいです

Q：ポットパスの名前の由来は？

A：ぽつと出+ポット+オクトパス。ポットはこの場合はツボです。
タコ壺ってことで。

EPISODE 119：推参！ 近江の矛

いろいろとシヨツキングな出来事もあったが、とりあえずポットパスは倒した。これでひと安心　というわけにはいかなかった。シェイドがまだ会場内にいたからだ。その証拠に市村のリーダーが強く反応を示していた。

「まだおるみたいやな……」

「市村さん、場所は？」

「南ゲートや。しかもぎょうさん沸いとる！」

「わかりました！　南ゲートへ急ぎましよう！」

「おう！」

シェイドはまだ、南ゲートで発生していた。一刻を争う事態だ。襲われている人々を救うべく、健たちは広場から南へ疾走した。そこで待っていたのはトンボのようなシェイドや最下級シェイドクリーパーで構成されたシェイドの群れと、ひとりで人々を守りながら戦う不破の姿。ランスをかざして放電したり、走りながらランスを振り回したりして必死に敵を蹴散らしていた。

「プツプルアアアア！！」

「こいつらッ！　いい加減にしやがれ！！」

執拗に襲いかかるシェイドに対して怒りをぶつける不破。すぐ後ろには逃げ惑う人々がいた。　。気を抜けば皆殺されてしまう。たった一瞬でも油断は出来ない。とにかく、戦い抜くしかない。だが、疲弊ひへいにより生まれた隙を突かれ転倒。あっという間に劣勢に追い込まれてしまう。

「くっ……」

トンボのシエイドのうち一体がその腕についた鋭い鎌を振り上げる。このまま斬り殺されてしまうのだろうか？ そう思った不破を助けるように 何者かが背後からトンボを切り裂き、一刀両断。真つ二つになって消滅したトンボの後ろにいたのは。

「東條！」

「危なかった……会場内にいた人たちは無事でしたか？」

「ああ、大丈夫だ。だが全員が避難し終わったわけじゃない……オレの後ろにまだ何人も残ってる」

不破が後ろを親指で指差す。そこには親子連れや老人、若者年齢を問わず何人もの人々がいた。いずれも避難しようとして、その途中で沸き出てきたシエイドに襲撃されたのだ。不破はそんな彼らを敵の魔の手から守りながら戦っていたというわけだ。

「なら話は早いですね、敵を全滅させないと！」

「よし、お前らと一緒にならすぐにカタが付きそうだ！」

「みゆきちゃん達、危ないからうしろ下がるときゃー」

「誰だお前!？」

「それはあとで話したる」

みゆき達を後ろへ下がらせ、健、不破、市村の三人はそれぞれ武器を構えて敵を迎え撃つ。その間みゆきことは近くにいるアルヴィーとまり子が守ってくれる。この二人に任せれば安心だ。

「ふっ、はっ！」

「おらッ」

「うりゃうりゃー!!」

剣が切る。稲妻が走る。槍が貫く。ビームが敵を落とす。飛ぶ鳥を落とすような勢いで、三人は矢継ぎ早に敵を蹴散らしていく。たくさん群がっていた敵は、あっという間に赤いトンボと水色のトンボのシェイドを一匹ずつ残すのみとなった。

「凍り付け!」

空を飛びながら二匹のトンボはすばやく動き回る。だが、すばやい敵は動きを止めればいい。狙いを定め、健は冷気を放って赤いトンボを凍結させる。そしてそれに市村がビームを当てて粉碎。赤いトンボは砕け散った。

「逃がすかよ!」

逃げ惑う水色のトンボを狙うのは、不破。ランスから放電して敵をしびれさせ、その隙に跳躍。

「食らえ、ジャベリンサンダアツ!!」

空高くから電気をまとったランスを勢いよく投げつけ、水色のトンボに見事命中させる。激しい稲妻をその身に浴びた水色のトンボは、金切り声を上げながら爆発した。

「み、みんなスゴいわ……あんなにたくさんいたのにあっという間にやっつけちゃった」

「うむ、実にいいチームワークだった」

「三人とも、普段からあれぐらい仲がよかつたらいいのにね」

健たち三人の見事な戦いぶりを見ていたみゆき達が、それぞれ違

った感想を呟く。これでシェイドは全滅、近くにいた人々は歓声を上げた。照れ臭そうに健は笑い、不破と市村は豪快に笑った。英雄になった気分だ。だが、まだ終わっていないかった！ シェイドが新たに数匹沸き出たのだ。気配を感じ取った健たち三人はすぐに振り向き、身構える。

「クソッ、しつこいな。まだやるのか！」

「やっと一息つける思うたらこれや。イヤらしい！」

「でもやらなきゃ……やられます！」

息をする間もなくシェイドは襲いかかる。早くカタをつけるべく三人は武器を携えて突撃するが、寸前でどこからともなく銃撃を受ける。シェイドと民間人、両者へ対する威嚇射撃だ。

「なんだ今のは……？」

不破がきよとんとした顔をしながら呟く。だが間もなくして手榴弾が投げ込まれ、爆発。かわしたいところだが背後にいる民間人を守るため、しっかりと身構えて爆風を耐えた。煙が立ち込める中、「いまだ！ かかれ！！」と何者かの声が響く。低い声だったので恐らく男だろう。だが、考察をする暇も無く銃や刃物等で武装した屈強な若者たちが数十人も現れ、機敏で統制の取れた動きでシェイドを翻弄。瞬く間に追い詰めていく。

「そりゃ！ うりゃっ！」

「でりゃああああ！！！」

「バケモノめ、これでも食らえ！」

「くたばれ！」

思わず目を見張るような動きだった。まるでよく訓練された兵隊

のような。シェイドが残り一匹となったそのとき、リーダー格
と思しき男が現れる。髪は金髪でユニオン・ジャック柄（イギリ
スの国旗をモチーフにした柄のこと）のバンダナを巻いており、革
ジャンをハードに着こなしていた。「どけ、そいつは俺が殺る」と
告げて部下達をどけると、その男は背負っていた鉄パイプを抜き出
し 荒々しく振り回してならず。

「ギ……ギイ」

「みんなでワイワイやってるときに空気も読まず現れやがって」

バンダナの男は歯を食いしばった表情で鉄パイプを振り上げ、

「テメーみてえなクソツタレは……脳髓ブチまけて死ね!!」

相手を口汚く罵倒しながら、そのまま敵の脳天を力チ割った。一
瞬の出来事だったががすさまじい力が一撃でこめられており、事実、
頭を割られたクリーパーは消滅した。格好つけながら鉄パイプを振
り回すと、背中に背負ってニヤツと笑いながら民衆に振り向く。

「安心してくれ、もう大丈夫だ。会場に現れたシェイドは俺たちが
ブツ潰した。この海洋博で遊ぶのを再開してくんな」

チンピラまがいの風貌だが、あの技量とすばやい身のこなし、そ
して高い統率力。この男、ただものではなさそうだ。何はとも
あれ、脅威は去った。民衆はバンダナの男に笑顔を見せて いな
かった。むしろ、戸惑っていたりおびえたりしていた。健たちも無
論、あまりいい顔はしていない。そんな中で不破がバンダナの男に
詰め寄り、「なあ、ちよつといいか」

「……なんだ、オッサン？」

「オッサンじゃない！ オレは警察関係の者だ」

バンダナの男に警察手帳を見せ、己の身分を証明する。これで相手は、目の前にいる茶髪のガラが悪そうな屈強な男性が警視庁の不破である事を認識した。

「あー、刑事さんね。それで俺に何の用だ？」

「単刀直入に聞こう。君ら、最近話題になってる『近江の矛』か？」

「そうだと云ったら？」

「……聞くところによると、君たちはたびたび問題を起こしているようだ。本当にそういうことをやったのかどうか、署まで来て聞かせて欲しい」

「へえ、署まで来いと？」

真剣な顔で語りかける不破に対して、リーダー格の男は彼を馬鹿にするような憎らしい笑顔を浮かべていた。嫌らしく笑うと、「だが断る」

「警察なんて信じねえ。いつも口先ばかりで、肝心な時に限って行動を起こさない。みんながシェイドに襲われてるときだってすぐに助けに来てくれない。そんなヤツらを俺たちが信じると思っているのか？」

「関西ではそうだったな。だが、関東ではちゃんと守備が行き届いている。こっちにもシェイド対策課は立ったし、君のその考えももうしばらくすれば変わるはずだ」

「権力の犬が！ えらそうにほざくな！」

バンダナの男が逆上し不破に掴みかかる。周囲の人々は皆驚愕の顔を浮かべ、辺りは再び騒然とし始めた。

「その善人ぶつた態度が気に入らねえ！俺たちから集めた税金を何かに使ったことが一度でもあんのか！一人でも許しがたい理不尽な犯罪を犯したヤツをきちんと罰したことがあるのか！？どうなんだ、言ってみろよ！！」

「くっ！ 離せ！」

「し、新藤さん！ 落ち着いてください！」

激昂しあらん限りに不破と警察の事を罵るバンダナの男。『近江の矛』のメンバーの一人がリーダーの名を呼びながら止めに入った。納得が行かなかったのか、新藤しんどうと呼ばれた男は至極不満そうに舌打ちした。

「なー、刑事さん。悪いことは言わん。新藤さんは警察が嫌いやさかい、ごつつキシやすいんや。せやから、ワシらにはあんまり関わらんといってくれへんか」

「……そうか、それはすまなかった」

メンバーの一人が不破にそう告げると、新藤のもとに他のメンバーが全員集まった。新藤は怒りを抑え切れぬ様子でメンバーを連れて帰っていった。

「……あれが、『近江の矛』……街の人たちを守ってくれるのはいいけど、ちよつと物騒だったなあ」

立ち尽くす不破の後ろで健が呟く。『近江の矛』とそのリーダーである新藤のことを信じられないような口調だった。それは彼以外にも同じことを思っており、やはり新藤の粗暴な言動とやり方は信用しがたかったようだ。

「警察は信じられぬ、か。私にはあのゴロツキどもの方がよっぽど

信じられんよ」

「どうしてだい、アルヴィー？」

「怪しいからだ」

アルヴィーが呆れるように語る。彼女が『近江の矛』のメンバーを怪しいと思う理由がわからなかったのか、「え？」と健が呟く。

「他の構成員はギリギリ信用できる。だが、あの新藤という男は…
…血生臭い」

「ええっ！？ た、確かにちょっと荒っぽいなーとは思っただけど…
…」

「とにかく、私にはあの男が俗にいう『正義の味方』には見えんのだ。ああいう荒っぽいヤツは根は優しいのというのがよくあるパターンだが、やつからは良心をカケラも感じなかった」

驚くことに、アルヴィーはひと目見ただけで新藤がどうい人物なのかを見抜いて冷静に分析していた。これには健たちもビックリだ。みゆきも同じような考えを持っていたのか、「確かにあの人、血に飢えたような目をしてた……」と少しおびえながら語る。

「あの新藤って人、どっかで見たことあるような……」

この状況の中で、まり子は密かに心当たりがあるようなことを呟いていた。実は似たような容姿と性格をしていた男を、彼女は見たことがある。その人物は。

EPISODE 120：曇りのち雨模様

不破とまり子の間に生じたこじれ、突然発生したシェイドの襲撃、そして颯爽と現れた『近江の矛』。海洋博覧会を楽しむ一日になるはずが、気付けば不穏な空気が漂う嫌な一日になってしまった。このままでは、楽しむつもりで来た自分達の気が晴れないというもの。

「大変な一日だったね。みんなでワイワイやるはずだったのになあ……」

「まあ、そういうこともある。気を落とすでない、また今度楽しみが良いではないか」

「そうだよね……ははっ、はあ〜」

不破や市村と別れた健たちだったが、気分は晴れから所変わって曇りのち雨。アルヴィーが落ち込む健をなだめるが、彼は立ち直らないまま。

「シロちゃんの言う通りだよ。また明日楽しんだらいいじゃないねー」

「う、うん、そうだね。まり子ちゃんはどこ行きたいの？」

「わたし？ えーつとね……泳ぎに行きたいなあ」

「おっ泳ぎたいの？ どこがいい、海、それとも川？ それともプール！？」

「お兄ちゃん、興奮しすぎよー……」

健が興奮するのも無理はない。海といえばビーチ。ビーチといえばスイカ割りに、水着の女の子やピキニのお姉さん方。海の家で食べる昼食も絶品だ。海に比べてやや地味だが川で泳ぐのもなかなか

楽しい。泳ぐだけ泳いで体を乾かしたら、次はバーベキューだ。ただし噛みついてこちらの血を吸うヒルや、川の流れるには気を付けた方がいいだろう。

最後にプールだが、こちらも非常に気持ちいい。広いプールならスライダーもあるし、何より水着の女子が海と同じくらい多い。楽しさも海と互角だ。どちらにしても健は興奮するだろう。まずは胸の谷間に目が行き、次にお尻と太もも。スケベなら仕方がない。それが男のサガである、でも健はそれに逆らわない。彼は意外と己の欲望に忠実なのだ。

「泳ぎに行くの？ いいわね、それ！ 私はプールがいいと思うけど、みんなは？」

みゆきが健の提案に興味を示す。何の偶然か、ちょうど彼女もたまには泳いでみたいと思っていたところだったのだ。どこがいいのかを健とアルヴィー、それからまり子に訊ねたが、答えはバラバラだった。

「海！」と答えたのが二人、「プール！」と答えたのが一人。みゆきも含めればプールに行きたいのは二人だ。これによって川で泳ぐという選択肢は消え、半分に分かれた。ちなみに市村と不破はこの場にいなので含まない。市村なら海を選んでいただろう。不破は夏のお嬢さんが拝めるならどちらでも良さそうである。

「半々かー……これじゃひとつにしばれないな。ここはジャンケンで決めようー！」

このままではどこにも行けない。健の言葉を合図に、ここはジャンケンで行き先を決めることとなった。その結果は。

「よっしゃ、海にけつてーい！ ビキニの女の子、見放題だぜーっ

「!!」

「うむ、これで日焼けできるな!」

「ま、まけちゃった……トホホ」

「スライダーで滑りたかった……」

結果は、健とアルヴィーの『海に行きたいチーム』の勝ち。惨敗したみゆきとまり子の『プールに行きたいチーム』は悔しさから唇を噛みしめていた。よほど負けてしまったのが残念だったようだ。負けたシヨックは奥深い。お互いに眉をしかめて見つめ合い、みゆきが「な、何よ。ジツと私のこと見ちゃってさ」

「……べ、別にあんたと同じことなんて考えてないんだからねっ!」
「そりゃこつちのセリフよ! そーゆーまり子ちゃんは何考えてたのよ?」

「うーん、そうね……わたしの水着姿で男はみんなイチコロ!
健お兄ちゃんはメロメロ!」

「あっはははは! 何それ、笑っちゃうわね!」

まり子の考えを聞いたみゆきが面白おかしく笑う。普段の割と清楚な彼女からは想像もつかないような嫌味のある笑い方だ。

「何よ、何がおかしいのよ」

「あなたみたいなお子様が健くんをメロメロにしようだなんて無理、無理!」

「ふーんだ。見てなさいよ? わたしが大きくなったら、みゆきさんが貧相に見えるくらいセクシーになっちゃうんだから」

「何よこいつー! お子様のくせにい!」

「並乳のくせにー!」

喜ぶ健の傍らで、女二人が勝手ににらみ合いをはじめてしまった。

片方は幼なじみ、片方は将来確実にスタイル抜群になることが約束されている少女。健にとっては、どちらも捨てがたい。

「まあまあ二人とも、落ち着いて」

「なによッ!」「なんなのよッ!」

「え、えーっと……で、できれば仲良くしてね。出来ないなら海には行けないから、うん」

「わ、わかったわ……」「はい」

二人の気迫に少し戸惑いながらも、健はそう呼びかけてこの場を丸く収めた。みゆきもまり子もやや納得が行かないような表情をしていたが、果たして当日はどうなるだろうか。

「ん……あ、雨? まさか……」

そして、翌日。雨が窓を叩く音を聞いて健は目を覚ました。つられてアルヴィーとまり子も目を覚まし、健と一緒に茶の間へ向かう。まさか、と思いテレビの電源を点け、天気予報がやっているチャンネルに回すと。

「今日は全国的に一日中ずっと雨が降るでしょう。お出かけの際は傘を忘れずに持って外に出てくださいね。本日の天気予報は以上です」

「あ、雨……だと……?」

「そんな、バナナ……」

「じゃなくてバカな……」

容赦のない言葉が突きつけられ、テレビの前の三人はショックを受ける。そう、今日は雨降りだ。しかも豪雨で、迂闊に外に出よう

ものなら確実にびしょ濡れとなってしまう。故に傘があっても安心できない。いつもお世話になっているお天気お姉さんだが、このときばかりは残酷に思えた。こともあるつか、シヨックのあまり健は突然床に転んでじたばた暴れだし

「うわああああああ！ な、なんてことだああああ！ とばりさんにもお忙しい中来てもらう約束してたのにいいいいいい！！」

「お、お兄ちゃん！？」

「なんてことだ。シヨックのあまり健が子供に戻ってしもうた……！！」

手足をじたばたさせ、オモチャを買ってもらえなかった子供のようにわめく健。これには流石のまり子とアルヴィーも頭を抱えた。元々、健には幼さが残っている一面があったが、こんなケースははじめてである。それほどまでに雨が降って海やプールへ泳ぎに行けなくなったのがシヨックだったのだろう。

「ど、どうしよう。シロちゃんはこういう事があつたらどうしてた？」

「健がシヨックで幼児退行を起こすなんてケースははじめてだ。どうやって落ち着かせるかなんてわからん」

「じゃ、じゃあさ、おしゃぶりとかガラガラとかある？ それであやしたら落ち着くんじゃない？」

「そんなもんじゃない」

「えー！？ そ、それじゃあ哺乳瓶は？」

「それもウチにはない」

「そんなあ……」

愛してやまない健がぐずるのを前に戸惑つまり子。難しそうな顔で腕を組むアルヴィー。なかなかいい案が思い付かない二人だった

が、悩みに悩んだ末にあることを思い付く。それは。

「……そうだ！ シロちゃんのおっぱいをお兄ちゃんに飲ませたらどうかなあ？」

「や、やめんか恥ずかしいッ！ そんなことしてみろ…… P T A がキれるぞ。それはもう烈火のような勢いでな！」

「えーっ！？ 授乳もダメなら、どうしたらいいの？ もう手の打ちようがないよお」

もはや何も出来ない。長いこと健と同居してきたアルヴィーでもどうしようもない事態となっていた。だがそんなとき、健の携帯電話から着信音が大音量で鳴り響く。

「……ハッ！ 電話だ、誰からだろう」

「嘘っ！？ 元に戻った……」

「はて、こんなに立ち直りの早い奴だったかの」

つい先程までわめき散らしていた健だが、どういうわけか突然正気に戻った。電話に出るときぐらいはちゃんとしなければ、と思っただろうか。ちなみに電話の相手はとばりだった。

「もしもし、東條です」

「あつ、東條くん！ 海、行けなくなっちゃったねえ……」

「はいー、すごく残念です……。なんで雨降んのかなあ。昨日は晴れてたのに」

「ホントよねえー……こっちは干からびそうなくらい暑いけど」
「えッ！？」

目を丸くした健が大声を出して驚く。とばりも残念そうに喋っていたが、一方でどこか楽しそうな雰囲気だった。実は、健は彼

女が今どこにいるのかまでは知らない。

「と、と、とばりさんっ！ 今どこにいらっしやるんですか!？」
「あなたのうしろー」

ビクッ！ と、健の背中に悪寒が走る。そのうしろで話を聞いていた二人にも同じく悪寒が走った。しかし、後ろにとばりはいなかった。彼女は脅かしてやろうと健に冗談を言っただけだったのである。なんとも心臓に悪い。

「うっそー！ そこには誰もいませーん」
「じゃ、じゃあどこに!？」
「実はね、わたし……南の島にいるの」

その瞬間、三人に脳ミソに電流を流されたような衝撃が走った。雨が降ったために海に行けなくなったにも関わらず、とばりが嬉しそうに話していたのは南の島でバカンスを楽しんでいたからだったのだ。道理で健たちが海洋博に行った日に彼女が来なかったわけである。

「え……、えーっ」
「またお土産買ってくるから待ってて。それじゃあ」

そこで電話は切れた。健にはもはや、先程のように喚き散らす気力すら残っていない。ガクツとうなだれた。その隣にいたアルヴィーはハトが豆鉄砲を食らったような何ともいえない表情を浮かべており、まり子は魂が抜けたかのように目が点になって口をぽっかりと開けていた。

「ん〜……やっぱり夏といえば海よね〜」

その頃とばりは、南の島でのバカンスを満喫していた。日光を存分に浴びて色白の肌を焼き、ビーチチェアに腰掛けながら気ままにハイビスカスの花が添えられたソーダを飲む。フード付きのスィムシャツと、黒いビキニが眩しい。透き通るような肌を水に濡らしたその姿は、何より妖艶で美しい。同じビーチに泳ぎに来ていた男性だけでなく、他の女性も虜になってしまったほどだ。美女一人を拝むのに性別は関係ない。暑さもどこかへ吹っ飛んでしまいそうだ。

「東條くんたちには悪いけど、せっかくだし楽しんでいかなくちゃねえ」

それにしてもこの白峯とばり27歳、ノリノリである。

EPISODE 121：妄想クイーン

「じゃあこれ、会計課まで運んでください」
「はい！ わかりました！」

翌日の月曜日、健は張り切ってバイトに取り組んでいた。パソコンでデータを打ち込んだり荷物を運んだり、大忙しであった。でも、ジェシーや浅田、それにメガネをかけた今井。いつも何かと世話になっている彼女ら三人の笑顔を見ると、自然と頑張れるし疲れてこない。むしろ喜んで仕事を次々とこなしていった。

「東條くんだったら、相変わらず元気ねエ」

「何かいいことあったんでしょっか？」

「あつたんじゃないかしら？ あの様子を見る限りは」

そんな健のことを、浅田ら三人は暖かく見守っていた。その後ろで「マンセーしすぎネ、みんな東條サンを過大評価し過ぎネ……」と健を憐むような、健に嫉妬するような誰かの声が聞こえたような気がしたが、恐らく気のせいだろう。

「うえ〜……え、エネルギー切れだあ」

だが、みなぎっていた健の元気も仕事が終わる頃には種切れ。頬が痩せこけ、背筋も曲がって歩き方もぎこちないものに。彼はすっかり生気を失っていた。しかも、天候は今日も大荒れ。傘がなければ歩くことも満足に出来ないほどの大雨である。

「いつちむらさーん！ ……ッ!? いない!!」

だが、市村も屋台もそこにはなかった。「えー、そんな……」と少しシヨックを受けた健は仕方なく、コンビニで肉まんなりフライドチキンなりおでんなり　その辺の体が温まりそうなものを買って帰ることにした。

「た、ただいまーッ！」

「おう、お帰り。ずいぶんハデに濡れたの」

「ホントだ。ずぶ濡れになってるっ」

急に冷え込んだ夜の肌寒さと冷たい雨に打たれながらも、健は帰宅した。コンビニで買ってきた食べ物や物をテールブルに置く到着替えを持ってすぐに洗面所に直行し、手洗いをした。早いところ温まりたいので「先にお風呂入ってもいいかい!？」とアルヴィーとまり子に聞いたところ、「別に構わんぞ」「お兄ちゃんが先に入っていいわよー」と返答が帰ってきたのでそのまま浴室に特攻した。

「それにしても、この頃雨続きよねえ。それに寒くなってきちゃったし……」

「確かに肌寒くなってきたのう。お主はムシだからそろそろ冬眠をする準備をしておいた方がいいかもな、まり子よ」

「ま、まだ早いわよう！ シロちゃんったら冗談キツイんだから」

「ハハハ、すまんすまん」

健が入浴中の間に食べてしまうのも気が滅入るので、二人はその間テレビを見たりガールズトークをしたりして時間を潰していた。お互いに相手が旧友だからか、健にも見せていない一面を見せあっている。口調も表情もいつもと少し違った。その様子と来たらまる

で年が離れた仲良し姉妹のようだ。

「ねーねー、ところでさ」

「なんだ、まり子？」

「シロちゃんとみゆきさんはどういう関係なの？ 恋のライバル同士？」

「うーん、そうだな……。別にお互いライバルというわけではないな。私とみゆき殿は、いわば姉妹分のようなもの」
「姉妹分かあ……」

二人のやりとりの中で名が拳がった風月みゆきは、まり子にとってはある意味恋のライバル。彼女が敬愛してやまない健の幼なじみであり、それゆえにまり子よりも付き合いが長くその仲は親密。もちろん健との距離は近い。対してまり子は健と出会ったのも彼に心奪われた（？）のもつい最近であり、距離はあまり近くはない。故にみゆきには焼きもちを焼いている。そしてアルヴィーは、そもそも健には恋愛感情を抱いてはいないし、みゆきの事もライバルとは思っていない。健の事はかけがえのないパートナーとして、みゆきのことは大切な仲間として認識している。もちろん自身もそう発言したように、みゆきのことには姉妹分として扱っているようだ。

「姉妹……ハッ！」

アルヴィーおねえさま……

みゆき……

ずっと一緒にいてもいい？

もちろんだとも

チユッ

バラの花に包まれた華やかな空気の中で、お互いに胸を寄せ合い

抱き合うアルヴィーとみゆきの姿。まるで同性愛という禁忌^{タブー}を犯した高貴な姉妹のようである。と、まり子の脳裏にこんな感じの風景が浮かび上がっていた。もちろんこれは彼女の妄想。彼女は見た目は子どもだが、中身は大人。アルヴィーよりは若い、もう何百年も生き長らえている。でもリビドーは未だに衰えを知らないらしく、どうやらリビドーが妙な方向に働いてヘンなスイッチが入ってしまったようだ。いわゆる乙女の百合妄想というやつだろう。

「……悪くないかもねえ。フフツ、フフフツ」

「ま、まり子？」

「ふえ？ あ、いや、こつちの話だよ。気にしないで！」

うつとりとした表情で淫らに笑うまり子。アルヴィーに声をかけられてハツと我に帰ったが、それまでの彼女はまさしく女王を名乗るに相応しい妖艶な雰囲気を漂わせていた。将来シェイドたちの間で、女王^{クイーン}たるもの妄想できなければ女王を名乗る資格なし　という法律が新たに出来上がるかもしれない。

そうこうしているうちに健が風呂から上がってきた。さっぱりできたからか妙に爽やかな笑みを浮かべており、しつとりした髪も夏特有の清涼感を感じさせる。そこにジメジメした空気は一切ない。むしろ彼がこの場に現れたことで空気が清浄化されたようにも感じられた。

「お待ちせ。それじゃ、食べよっか！」

「うん！」

「ちょうどお主が上がる前に食ってしまおうかと思っておったところだ！」

フライドチキンにおでん、肉まんに生野菜、それから野菜ジュース。レジ袋の中から買ってきたものを次々に取り出し、机の上

にずらつと並べていく。もちろんこれだけでは腹は満たされないの
で、健は白いご飯を3人分入れて持っていく。そのあとに大きめの
緑茶のペットボトルも冷蔵庫から取り出し、コップも用意して準備
完了。あとは食べるだけ。

「いただきます！」

その瞬間、食卓に満面の笑みと和んだ空気が蔓延した。コン
ビニで買えるような安い食事でもおいしく味わって食べることが出
来るのは庶民の特権である。高級食材でも味わえない至高の味が、
そこにはあった。どれほど美味であったかは、楽しみに食べている
三人の顔を見れば一目瞭然だろう。

EPISODE 122：たこ焼き屋には出逢いが待つ

その頃、いつの間にか京都を去っていた市村はどこにいたかというところ。

「誰か来いひんかなあ」

大阪の名所・通天閣の付近でタコを焼いていた。彼は大阪育ちの大阪生まれであり、創業50年という老舗のたこ焼き屋の息子であった。一人っ子で幼い頃から父親がたこを焼き、母が家事を切り盛りする姿を見ながら育った。当然たこ焼きも大好きだった。

「知り合いすら来いひんのってどういうこつちゃ……ま、焼くだけ焼いて待つときましょか」

そんな父のあとを継いでたこ焼き屋をはじめた市村だったが、まだまだ修行中の身である。店の売れ行きはそれなりだ。情熱をこめて店を営んできた父親の背と技を見ながら育ってきた彼だが、なかなか父のように繁盛はしない。一応味は良い評価を受けてはいるのだが、世の中、そう簡単にはいかないという事だろうか。

「……あつ、タコ切れてもつた。買ってこなあかな……」

客を待ち続けてタコを焼いて数十分、やがて材料であるタコを切らしてしまう。これでは営業できないと思い、財布をポケットに入れて買い出しに行こうとする市村だったが。

「イッチー!!」

「!?!? そ、その声は……」

彼の名を呼ぶ若い女性の声。その女性は蜂蜜のような金髪のウェービーヘアに碧色の瞳で、薄手で半袖の上着に薄紫のＴシャツと、その下にデニムのミニスカートを履いていた。屋台の前に出て女性の顔を見ると、市村は大いに喜び歓声を上げた。

「……………アズサ！ アズサちゃんやないか！ ひっさしぶりやおー！！」
「この頃電話もメールもしてくれへんから、心配しとったんやで。ホンマにも〜」

どうやら彼女は、市村とは知り合いだったようだ。しかもかなり親しい仲の様子。再会した記念と言わんばかりに、「ハラ減ったやろ、なんか食べてき」と市村はたこ焼き１パックを差し出す。

「た、食べてええの？」
「アホやなあ、ええに決まっとるやろ。カネ払わんでいいし、そう遠慮せんと。な？」

お言葉に甘えて、梓はパックを開けてたこ焼きを食べ始める。ソースや海苔、かつおぶしがたっぷりとかけられたその姿には食欲をそそられる。「フー、フー」と息を吹きかけて冷ましながら、アズサはたこ焼きを食べていく。

「はうっ！ め、めっちゃおいしい〜！」
「せやるオ？ わしの自慢のたこ焼きやさかいなあ」
「イツチー、ホンマにありがとーなー！」

あまりの美味しさにアズサが嬉しそうな声を上げる。それを聞いた市村の様子と来たら、鼻の下を伸ばしてまんざらでもなさそうだ

った。やがてアズサは、あっという間にたこ焼きを完食。

「ごちそうさま！ 久々にイッチーのたこ焼き食べたけど、めっちゃおいしかったわ！」

「へへっ、アズサからそう言われるとわしも鼻が高くなってまうわ」

鼻を伸ばすようなしぐさをしながら、「そりゃあもう東京タワー、いやスカイツリー並にのう！」と冗談混じりに市村が笑う。

「ウソやー！ ピノキオでもそこまで長^{なが}う伸びひんで！」

「ウソやなーい！」

「そんなに鼻高^{たか}うしてどないするーん？」

「せやなあ、確かに何に使えるんかわからんなー！」

「もー！ 後先考えてへんやろー！」

談笑する市村と梓。久々にガールフレンドと出会えたからか、市村はすこぶる嬉しそうだ。二人とも心の底から思い切り笑っていた。

だが、和気あいあいとしている二人に水を差すように誰かが屋台の近くにやってくる。髪は短めの黄褐色、要するに黄色っぽい茶髪で瞳は赤みがかった茶色。つり目で真面目そうな、鋭い目付きだった。服は紺色のカッターシャツで、ズボンはベージュだ。

「おう、また会ったな」

「ん？ この前食いに来たニイさんか？ 奇遇やな〜！」

「こんにちはー」

茶髪の若い男性 不破を見たアズサが、「イッチー、この人知り合い？」

「ん？ ああ、この前来たお客さんやわ。確か張り込み中のおまわ

りさんやったかいな」

「だいたいそんなところだ、お嬢さん」

ややかつこつけた仕草をとりながら、不破がアズサに挨拶する。

「不破つてもんだ、よろしく！」と名前まで教えた。市村のことは無視して。

「お、逢坂です。よろしくお願いします」

「ハハッ、こちらこそ」

「……おいおいおいッ！」

自分を無視してアズサに話しかけた不破が気に食わなかったか、市村が憤慨する。アズサと不破の間に割って入ると、

「何をさりげなくわしのカノジヨ口説いとんねん！ この女タラシがあー！！」

「わっ！ お、脅かすなよ、オイ」

「早よおアズサから離れんかいワレエ！ せやないとたこ焼き売ったらへんぞゴラァ！」

市村が目をカツと見開き不破を睨み付ける。すごい剣幕を前に少し動揺しながら、不破は後ろへ一歩下がった。

「……そ、そんなかしこまらんでもええで」

「い、いや、あれは誰でもビビるぞ……ところでたこ焼き、いくら？」

「お値段でつか？ んー……」

市村が顎に指をそえ、難しい顔を浮かべながら考えを巡らせる。

やがて「次のでタコは最後やしな。200、いやちよつと値上げして300か」と呟きながら、値段をいくらにしようか悩み出した。なかなか答えが出ず、市村は悩み続ける。

「いくらにしよ……この頃繁盛してへんしなあ……」

「じゃあさ、イッチー」

「なんや、アズサ？」

「間をとって250円はどない？」

「……それヤツ!! その発想は無かつたツ!!」

アズサが助け船を出した。目を見開いて彼女を指差して喜びながら、市村は屋台へ駆け込み最後のタコを焼き始める。あっという間に焼き上げ、パッケージに詰めると不破へ手渡す。

「……おう、すまん。それでいくら出せばいい？」

「250円や」

「た、たけえなオイ!？」

「あんたラッキーやな、それで最後のタコやで。せやからちよつぴり高め」

「200円ポッキリじゃねえのか、ポツタクリめ……この前もいつもより安くしとくって言いながら300円も払わせやがってよオ」

「クソうゝ……」と悔しがりながら、不破はしぶしぶ財布から250円を出して市村に支払った。市村の経営方針に不満はあったが味には満足したらしく、その後何度も「うまいツ!」と舌鼓を打っていたという。

EPISODE 123 : おいでませゴーストタウン

不破が市村から買った最後のたこ焼きを完食し、一息ついてから数分が経過。不破は市村に、自分が何をしに来たかを話した。彼にはどうしても気になることがあったのだ。それは、市村が『近江の矛』の一員なのかどうか ということだった。

あの無駄のない身のこなし、巧みな銃さばき。どう見ても素人のそれではなかった。故に疑ったのだ。彼が『近江の矛』に力を貸しているか否かを確かめるため、不破は市村にその事を質問したのだが、その答えは

「……そうか。あんたは『近江の矛』には手を貸していなかったか」
「あつたりまえやろ。あんな物騒な連中と一緒にドンチャン騒ぎするほどわしもアホやない」

「よく考えりゃあんた、あの時奴らに加勢してなかったな。変なこと聞いてすまん」

謝りながら不破が頭の後ろを搔く。まだ引つ掛かる。堂島警部から聞いた情報では『近江の矛』の構成員の中にはエスパーも混じっているという情報があったが、それは市村ではなかった。となると、いったい誰が？

不破が抱いていたモヤモヤは未だにとれず、更に膨らんでいく。もしや新藤がエスパーなのだろうか？ だが、彼からはエスパーの気配を感じられなかった。しかしあの荒々しくも巧みな身動きや棒術から察するに、タダ者ではないことは確か。彼ではないならいったい誰がエスパーなのだろうか。

「それもあるけど、あの新藤って奴はどうも信用できひん。あいつ

からこの関西を守る気はひとつも感じられへんし、ただ暴れたいだけなんちやうかって思えるんや。……ま、そういうこっちゃ」

「せやんなあ……イッチーも言ってるみたいに、ウチもその辺がひつかかんねんな」

「アズサちゃんもそう思うのか？」

「うん」

アズサが頷く。口を細めた不破は「ここまで人望ないと笑えてくるな」と呟いた。

「おいおい！ ずいぶん盛り上がってんなア、あんたら！」

そこに低い声が響いた。粗暴な口調の若い男性 声の主は黒が混じった金髪でユニオン・ジャック柄のバンダナを頭に巻いており、ネイビーブルーの革ジャンを着てその手には鉄パイプを握っていた。

「……新藤！ 何の用だ！？」

「用件はひとつだ。だが、刑事のオツサンに用はねえ。引ッ込んでな」

「くっ！」

新藤に無理矢理その場からどかさされ、不破は後ろへ下がった。不破を下がらせた新藤は市村に詰め寄り、「なああんた、この前海洋博にいたよな？」と訊ねる。

「……せやけど、それがどないした？」

「見てねえようで俺は見てたぜエ？ あんたのあの銃さばきと高い戦闘能力をな！ きつと凄腕のエスパーに違いねエ、なあそうだとッ！？」

「……ほんで？ わしにどないせえ言うねん」

市村は眉をしかめ、目を伏せて新藤を睨む。

「簡単さ。あんた見たところ腕利きのようだし、どうだ。『近江の矛』に入らねえか？ もちろんタダで、とは言わない。あんたの実力に見合った報酬を用意するぜ」

「アホか。そないなもん興味あらへんわ、ボケエ！」

屋台の前に出た市村は銃を突きつけ、新藤を脅す。「ヒイツ」と情けないうめき声を上げ、新藤は少し後ろへ下がった。

「警察や政治家相手に暴れたいんやったら好きにやってる。シエイドからみんなを守んのも別に構わん。せやけどなあ……みんなのために命懸けて本気で戦う気ないんやったら、早ようこの街から出てけッ！！」

市村が新藤へ威勢よく啖呵を切る。彼はいつになく本気で、心の底から怒っていた。不破もアズサもそして新藤も、その剣幕には驚かされるばかりだ。新藤の顔に焦りが表れ、額から冷や汗が流れた。

「……そ、そうかい。だったら俺にも手はある！」

苦笑いを浮かべる新藤。バツと飛び出しアズサに近寄ると 無理矢理彼女の肩をつかんで喉元に鉄パイプをあてがった。「は、離して！」と抵抗するも、新藤はことあるうかグツとつかんだまま離さない。

「……何のマネじゃ、新藤！ アズサを離せ！」

「そうはいかねエ！ 離してほしけりや俺たちの仲間になるって言え！ それができねえなら俺もこいつを離さないぜ」

「イツチいいいいつ!!」

汚い。手段が汚すぎる。彼の卑怯な行いは到底許しがたいことだった。アズサを返してもらおう代わりに近江の矛に入るか、それとも入らない代わりに彼女を見捨てるか。どっちも市村には出来なかった。

「ほらほら、嬢ちゃん叫んでるぜ？ 助けてやんねエのか、ん？」
「野郎オ……！」

銃身を握る両手が震える。ここで新藤を撃てばアズサを助けられるかもしれない。だが、下手に撃とうとすれば相手もアズサを殺そうとするだろう。だから迂闊に手は出せない。それは不破も同じだ。

「どうした、答えられねーのか？ だったらこいつはもらってく！」

二人が躊躇しているのをいいことに、新藤は隙を突いて逃走。アズサを脇に抱え、「返してほしいけりやついてきな！ だーっはっはっはっ！」とバカ笑いしながら飛び去っていく。

「待て、新藤ッ！」
「アズサあああッ!!」

このまま逃してはならない！ 新藤のあとを追って二人は疾走する。ある時はまっすぐに走り、ある時は角を曲がり。やがて誰もいない寂れた区画に辿り着いた。

「なんだ、ここは？ 人っ子ひとりいないぞ……」

「まるで廃墟やな……新藤のヤツ、どこに逃げよつた？」

「わからん。だが、近くにヤツが隠れてるかもしれん。隅々までくまなく探そう」

「わかった。……アズサのことも心配やさかい、なるべく早めに見つけられたらエエんやけど……」

待っていても何も起きない。アズサを助けるため、新藤を止めるため、二人は付近を探し始める。誰もいない、とにかく誰もいない。隅から隅まで探し回ったが、本当に誰もいない。照明もなにひとつ点いておらず、まるでゴーストタウンのようだ。ここままで静まり返っていると、かえって不気味ささえも感じさせられる。

「なんやねんここ……？ 誰もおらんぞ」

「おぼけなら出そうだが……想像したら背筋が震えてきやがったあゝゝゝ」

「おいおい、んな縁起の悪いこと言わんといてくれや……」

そんな風に冗談も交えながら、二人は探索を進めていく。こういう状況だからこそ慎重に、冷静にしていかなければならない。時には冗談を言つて場を和ませたり、エッチな本を読んだりする余裕も必要となる。そのくらい心に余裕を持たなければ発狂してしまうからだ。やがて二人は、路地の外れにある潰れたクラブを目の当たりにする。

「……残るはここだけやな」

「ああ。早いとこ新藤をブチのめしてアズサちゃん助けて、こんな気味悪い場所からさっさと出ようぜ」

「せやな……わしもそうしたいわ」

改めてアズサを救い出すことを胸に誓い、二人はクラブの中に入

つていった。中は真つ暗で、外から差し込む光しか明かりがなかった。隅つこの壁にあるスイッチを見つけて明かりを点けると、そこかしこに物が散らかっていた。

テーブルは倒れ、割れたビンの破片があちこちに散らばり。この荒れようから察するに、使われなくなつてから長いときが経っているのだろう。ここに新藤が逃げ込んだ可能性は高いが、果たしてどこにいるのだろうか？ 奥の方に階段を見つけた不破は「手分けして探そう。オレは一階、あんたは二階を探してくれ」と市村に持ちかけ、市村もそれを承諾。二人で手分けして探すこととなった。

「おーい、誰かいたか？」

「いや、誰もおらんわ。そつちは？」

「こつちもみつかんねえ」

「そつちもかいな！ アズサも新藤もどこにおんねん……」

だが、一階にも二階にも誰もいなかった。諦めてクラブをあとにする二人だったが、外に出たその時である！

「探しまんは何でつかー？ 見つけにくいもんでつかー？」

「ッ！？ 誰だッ！？」

「どこにおる！？」

どこからともなく低い声が聴こえた。周りを見渡したが誰もいない。うしろを振り返ると、屋根の上には若い男性がいた。緑がかった黒髪に黒い眼で、左手にはラーメン屋などが出前に使う金属製の四角い入れ物。おかもちのような物体を持っている。右手はなぜか後ろに回していた。何かを隠しているように見えるが。

「誰やお前！？」

「わいか？ わい、用心棒の伊東いとういまんねん」

屋根の上に座ったまま、四角い金属製の何かを持った男　伊東が名乗りを上げる。

「用心棒だと？」

「オウ、わいは近江の矛にカネで雇われたクチや。ほんで誰を探してはるんや？」

気さくな、しかしどこか怪しい笑みを浮かべながら伊東が訊ねる。

「逢坂アズサつちゅう女の子と、新藤つちゅうゴロツキや。新藤やつたらあんたも知つとるやろ？」

「あー、あのねーちゃんアズサちゃんつちゅうんか。またひとつ、お利口さんなつたわ……」

すつとぼけた顔で伊東が呟く。本当は知っているのにしらばっくれたようにも見え、そんな彼の様子を見て市村と不破は苛立つ。

「しらばっくれんな！　お前、あいつらがどこ行つたか知ってるんだろ。どっちか一人だけでもいい、答えろ！」

「そうカツカせんといってくださいや。ネエちゃんの方やつたらすぐにでも顔見したるがな、ほれ」

そう告げたあと、伊東は後ろに回していた右手を前に出す。それと一緒に　さらわれていたアズサも姿を現した。立ち上がり、彼女と手を繋いで伊東は屋根から飛び降りる。着地して一息つくくと、
「ほれ、感動の再会や」とアズサを前にやった。

「アズサっ！」

「あーん、イッチー！」

市村とアズサが抱き合った。悔しそうな顔を浮かべる不破とニヤつく伊東の目の前で。

「……さて、これでアズサちゃんの無事が確認できた。次は新藤がどこへ逃げたか教えてもらおう」

「あ？ 新藤がどこ行ったか？ んなこと俺に聞かれても知らんがな」

不破の質問を受け、またも伊東はしらばっくれた。もちろんそんなことが許されるはずがなく、不破と市村は伊東を鬼のような形相で睨み付ける。アズサは隣できよとんとした顔でその様子を見つめていた。

「う、ウソやウソや。ちゃんと教えたるっちゅうねん」

「ホンマけえ？」

「おう、ホンマや。ただし……」

そこで伊東は言葉を区切った。鋭い目を見開き、四角い金属製のおかもちのような何かを空中へ放り投げると、それは液化化したつのナツクルのような形に変わって伊東の両手に装着された。

「わいに勝てたららの話やけどなア！！」

びっしりとトゲが生えたナツクルをはめた両手を構え、伊東が二人を威圧する。

「二人とも、氣いつけて！ あいつめっちゃ強そう！」

「そうらしいな……なんちゅうか、ごっつう強いオーラを感じる！

ピンピンになあ！」

二人を心配するアズサと、笑いながらも汗をかく市村。「危ないさかい、うしろ隠れとき」とアズサを後ろへ下がらせ、市村は伊東に銃を向ける。不破もランスを構え、その穂先を伊東に向けた。

「覚悟はええか？ お二人さん」

「もちろんだ。お前を叩きのめして、新藤の居場所を聞き出す。そしてアズサちゃんを連れてこっから抜け出させてもらう」

「威勢のいいこと言わはるなア」

宣言する不破を前に伊東が薄ら笑いを浮かべる。そして両手の拳を打ち鳴らし、腰を深く落として身構えた。

「そうと決まれば、レッツ・パーティーや!!」

さあ、戦いだ。

EPISODE 123：おいでませゴーストタウン（後書き）

Q：アズサとイッチーって仲いいの？

A：もちろんです。幼なじみの関係ですもの。

Q：それじゃあ、アズサとイッチーってできてんの？

A：んなもんワシに聞かれてもわからんがな（伊東つぼく

Q：伊東ってそもそも何者？

A：エスパー伊東さんです。ウソです。流れ者のエスパーです。擬態が得意なタコのシェイドと契約したためか、自由自在に変形する金属という特殊な武器を手にしたようです。あ、この前出てきた夕コとはまた違うやつだよ

Q：伊東の必殺技は？

A：ワイのワイルドワイバーンや（冗談です

EPISODE 124：衝撃のエクステンジャー

先に攻撃を仕掛けたのは伊東だった。すさまじい瞬発力であつたという間に不破へ詰め寄り、腰を深く落としてアッパーカットをししかけ彼を上空へ打ち上げる。

不破が上空から地面に落下し叩きつけられる様を見届けると、彼を踏みつけ顔面を思い切り殴って追い討ちをかけた。後ろへ宙返りして不破から離れると、

「おいおい、えらい弱つちいやないの」

と挑発。不破は立ち上がり、武器を構え直して反撃。ランスを激しく振り回し伊東を切りつける。火花と赤い血が少し飛び散った。

「油断しとつた……」

「オレもずいぶん甘く見られたもんだ」

「えらいすんまへん！」

ランスとナツクルがぶつかり合い、激しく火花を散らす。巧みに防ぎ、巧みに攻め。その中で伊東が繰り出した鋭い回し蹴りが襲いかかる。だが、不破はそれを宙返りでかわした。

「今だたこ焼き屋！」

「たこ焼き屋やない、市村や！」

市村が不破の背後で銃を構える。不破が横つ飛びで彼の射程圏から離れると、市村は待ってましたと言わんばかりにビームを乱射。

「へッ、こんなもん！」

伊東はそれをナツクルの手甲で受け止める。しかし、表面から香ばしく焼き上がるような音がして。伊東が冷静になって手甲を見つめると、溶けていた。しかもかなり熱い。すぐに熱が伊東の手から全身へ伝わり、

「あつちいいいいいいイイイ！！！」

あまりの高熱に悶える伊東。手を振って取り乱しその勢いでナツクルの片方を放り投げる。幸いもう片方は無事だったようだ。ナツクルが外れた方の手に伊東はフー、フーと息を吹きかけ冷やした。

「もらったぜ！」

「ガハッ！」

そこへすかさず不破が一撃入れる。ランスが脇腹をかすり、傷口から血が流れ出た。かすり傷だったため傷は浅かったが、右手で出血を押さえ左腕を天へ上げながら伊東は「もどれッ」と叫ぶ。伊東の掛け声に呼応してナツクルは液状化し、彼の左手に装着された。不破と市村は思わず我が目を疑った。だが驚く間もなく伊東が反撃に出る。

「よそ見しとる場合かア！？」

「ぶへっ！！！」

強烈な右ストレートが不破の頬に炸裂。不破の体は浮かび上がりすぐに地面へ落っこちた。更に伊東は立て続けに市村へドロップキックをかまし蹴っ飛ばす。

「イチー！ それから……警察のおっちゃん！」

「へへっ、こんくらい何ともないわい……」

「お、おっちゃんだと!？」

敵はあまりに強大。二人がいたぶられる光景を見ていたたまれなくなつたアズサが叫ぶ。だが、二人はまだ大丈夫だった。そこに拳を鳴らしながら伊東が近寄り、二人を見てほくそ笑む。

「てめえエエ……」

唸りながら不破が起き上がりランスを携える。その後ろで市村も銃を構えていた。

「何度も何度も形を変えて……お前が持つてるそれはなんだッ！」
「こいつは『トランスメタル』。持ち主の意思に応じて変幻自在に形を変えるステキなアイテムや」

巻き舌を上手にまじえながら、おもむろに伊東が語り出す。やはりアレは、ラーメン屋などが出前に使いそうなただの四角い金属製の物体ではなかった。あらゆる形に姿を変える魔法のような金属だったのだ。妙にユーモラスで、親切かつ丁寧な説明であった。

「せやからいろんなことに使えるんや。たとえば……」
「ん……?」

ニヤリと伊東が笑う。左手をかざすとナツクルが液状化してその形をダガーナイフに変え

「こんな風なのオ!!」

「うっ!!」

不破の腹に突き刺した。すぐさまダガーを引っこ抜き、腹を押さえる不破を蹴り飛ばし倒れた彼にサマーソルトで追い討ちをかけた。

「あんたもジツとしてんと!」

「ぐっ」

「ちつとは動けや!」

「のわっ!!」

一発、二発、三発。荒々しくも鮮やかなステップを踏みながら伊東は市村をナイフで速やかに切りつけていく。血しぶきが飛び散る中で舞うように動く伊東の姿はある種の美しさを感じさせる。立て続けに攻撃を受けた市村は、あえなく転倒してしまふ。

「きゃあっ!!」

「ん……すまんう、ネエちゃん。そう怖がらんでもええよ、すぐにでも終わらせたるさかいのう」

いるだけでも心強かった二人が簡単に蹂躪されていく。アズサは身の危険と、とてつもない恐怖、そして仲間を失うかもしれない絶望感。その三つを同時に感じていた。優しく語りかけてくる伊東も何がしたいのかわからないし、怖い。あの二人を殺したあとで自分のことも殺すつもりなのでは? アズサの中では恐怖心がどんどん膨れ上がっていた。

「終わらせたるやと……?」

だが、まだやられるわけにはいかない。立ち上がった市村は伊東に、もう何度目かわからないが銃口を向け

「それは！ こっちのセリフじゃ！」
「あぐうツ！？」

至近距離からビームを放って爆発させ、伊東を吹き飛ばした。彼の意思に呼応するように不破も立ち上がり、超高速で伊東に詰め寄りランスで上空へ打ち上げる。

「さつきはよくもやったな！」

空中で伊東を切り払い地べたへ叩き落とす。伊東が落とされた付近はくぼみ亀裂も入った。そこへ市村が駆けつけ伊東にビームを乱射。何度も爆発が起き防御するために身構えていた伊東の姿が立ち上る煙幕の中に消えるが、すぐに伊東は煙の中から飛び出して市村に切りかかった。

「やるやないけエ！ そう来いひんとオモロない！」

「あんたもわしに接近戦を持ちかけるたあアツパレやな！」

「さいでつか！」

鋭いナイフが市村の頬を横切り、メタリックブルーに輝く大型の銃が伊東を殴る。鋭い刃物といかついビーム銃という、おもむきが異なる武器のぶつかり合いだ。ナイフによる斬撃を頑丈な銃身で防ぎ、中距離からのビームをナツクルを盾がわりにして弾き。戦いはますます激しさを増していく。

「まずいのう、ナツクルやとガードが難しい……よし、ここは！」

そのうち市村の銃が弾切れを起こした。彼が弾をリロードしているうちに、伊東は右手にはめたナツクルを バックラーに変形さ

せた。両手持ちの武器を扱う者でも装備できる小型の盾だ。

「今度は盾にしまったな……」

「これでバッチリ！ お前のへなちよこビームなんか効かへんわい

！」

「熱に弱いんちゃうんか、そのトランスメタルっちゅうんはよオ！

！」

市村がビームを撃ちながら前進。

「アホやなー、効かへん言つたやろうが……」

勝ち誇った顔でビームを防ぐ伊東だったが、防いでいるうちにバツクラーはどんどん熱くなっていき。

「あつっううううう！！！」

先程のように手から熱が伝わった。熱を少しでも冷ますためにバツクラーを投げ捨てようとしたが、それを攻撃のチャンスと見た不破が超スピードで近寄り放電。

「うげエエエ……っ!?」

バツクラーから全身に電撃が走り伊東は感電した。これにより、今度は熱と電流が同時に襲いかかってくる事態となった。

「……何なんこの人、強いんか弱いんか全然わからん！」

「わしもやアズサちゃん……」

「ダーッ！ どっからツッコんだらいいのか見当もつかねエ！」

ビリビリしびれたり手にフーフーと息を吹きかけたりする伊東を前にして、三人は立ち尽くしていた。正直、どう反応したらいいものか三人にはわからなかった。やがて伊東が落ち着いた頃、

「うう……まさかここまでやりおるとは。正直なめとったわ……」

「どうすんだ、伊東。降参するなら今のうちだぞ？」

「降参やと？ くくっ……」

「何がおかしいねん？」

「まだまだ降参なんかするかいな。お楽しみはこっからじゃ！」

伊東はまだ諦めていなかった。バックラーとナイフを地面に投げ捨てる両手を空に向けてかざし、液状化した金属が合体してひとつとなった。

「！？ あれ見て、……めっちゃデカイ！」

「ホンマや、これはヤバいで……アズサちゃん！」

合体したトランスメタルは、ひとふりの刀剣に形を変えた。全長2メートルくらいで、伊東の身の丈をゆうに超えるほどの長さだ。

「俺の自慢の剛剣や。威力はデカイが両手持ち……カタイ鉄でも真つ二つ！」

頑丈な銀色一色の剛剣。それを軽く振り回して慣らし、伊東は不破と市村にその切っ先を向けた。

「第二試合ラウンドじゃ！ どっからでもかかって来んかい！」

「……クソッ！ やるしかねえのか！」

相手は変幻自在の金属を操り、さまざまな武器を使いこなす強敵

。果たして市村と不破は、伊東に勝てるのか？

「イッチー、不破さん！ 負けたらあかん、がんばって！！」

EPISODE 124：衝撃のエクステンジャー（後書き）

おまちかね？ Q&Aコーナー

Q：伊東の剛剣ってどんくらい長いの？

A：13kmや。……ウソです、2、3メートルくらいあります。

伊東の身の丈（182cm）より長くて大きいです。

Q：不破さんボコボコにされすぎじゃね？

A：気のせいだ。あなたが見ているのは不破さんのそっくりさんです。彼のような強豪が伊東みたいなチンピラに負けるはずがない！
…たぶん。

EPISODE 125：うなれ剛剣！ 伊東、必殺の刃

伊東が持つトランスメタルが次に形を変えたのは 両手持ちの剛剣。当然大振りだがこんなものが直撃すれば 間違いなく真つ二つだ。その剛剣を片手で引きずり地面で摩擦させながら、伊東が不破と市村に接近する。

「おんどりゃああ!!」

右足で踏み込み大きく、豪快に剛剣を振り下ろす。二人は何とかその一撃をかわしたものの、剣が振り下ろされた地面がえぐれた。見た目を遥かに上回るパワーだ。「ちっ……外してもうたか！」と伊東が舌打ちする。

「な、なんちゅう威力や!」

「こんなもんが直撃したらぺしゃんこだ。早いところいつを倒した方が良さそうだぜ……」

二人とも剛剣の恐ろしい破壊力を前に額から汗を流す。ここは短期決戦に持ち込んだ方が良さそうだが、相手はすぐに倒れそうにはない。むしろまだまだ余裕がありそうだ。

「しゃべつとる場合か!？」

伊東が剛剣を大きく振りかぶる。しゃがんでかわしたが、間髪入れずに二撃目が入った。今度はその場で跳んで回避し、そのまま反撃。市村は跳躍しながらの銃撃を浴びせ、不破は斜め上から伊東に突撃をかました。

「ぬおっ！」

左手に持った剛剣に引つ張られるように伊東がよろめく。だがすぐに体勢を立て直し、大きく横に薙ぎ払う。今度は回避が間に合わず二人は吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

「きゃあっ！ い、イッチー！ おっちゃん！」

アズサが悲鳴を上げた。伊東と死闘を繰り広げる二人を見ていたたまれなくなつたか、今にも泣きそうな声色だった。

「大丈夫やアズサ……わしやったらまだ大丈夫や。そない心配せんでええ」

「そうだ、オレたちはこんなやつには絶対負けねえ！」

悲しげなアズサにそう言い聞かせながら二人は立ち上がる。実のところまだ27なのに『おっちゃん』呼ばわりされて、不破は正直嫌な気分になつていた。だが、今はそれどころではない。目の前にいる敵を倒さねば！

「のんきに話しとる場合か？ 勝負はまだ終わってへんで！」

二人が立ち上がったのを見て、空気を読んで黙っていた伊東が攻撃を再開。自分に向けて振り下ろされたランスを剣の腹で受け止め、力押しで無理矢理弾き返す。そのまま不破をたたき切りひるませる。血しぶきを上げた不破だがすぐに立ち上がって、「今は痛かつたぜ」

「……相手の攻撃を力で強引に押し返す。それがお前の戦法か！」
「せや！」

「くッ!」

ランスと剛剣による切り合いが続く。やがてつばぜり合いが始まった。単に力が強ければいいのではなく、ある程度技量と気迫が必要となる。とくに相手に気迫で負けたらそのまま一気に押されて負けてしまう。なので時には相手の力を逆に利用するということも重要となってくるわけだ。

「どないしたワレエ! 腕の筋肉は飾りけえ!」

「へっ、てめえこそ! 背エばかり高くてあとはひよろひよろじやねえか!」

パワーではどうやっても相手が有利だ。スピードも互角。ならばあとは今までに培ってきたテクニクを活かすしかない。

「そついやいたっけな、お前と似たような戦い方をするヤツが」

「あ、ア?」

「ま、そいつはお前と違って守りもしっかりしてたけどな!」

相手の力を利用し、そこに気合を上乗せして押しきった不破。息を荒くする伊東に連続突きを浴びせ、更にそこから上空へ打ち上げ自身も跳躍。力強い一撃を浴びせて伊東を地べたへ叩き落とした。

「痛いやないか……」

「はいバババーンとお!!」

うめきながら立ち上がる伊東。その隙を狙って市村がビームを連射し爆風で伊東を吹き飛ばす。

「にやるオオオ!!」

「おっと、動いたらあかん」

突っ込んでくる伊東を銃で牽制しつつ後ろへ下がる。そしてエネルギーを充填し、発射。　だが標的は伊東ではなく彼の頭上。

「ノーコンめ、お前の目エ節穴か！」

「節穴あ？　上をよう見てみい！」

市村がとつた妙な行動を嘲る伊東。だが彼が言うように上を見上げると、上から鉄骨が落ちてきたではないか。気付くのが遅かった為避けきれず、伊東は鉄骨の下敷きとなった。だがすぐに鉄骨を吹き飛ばして立ち上がり剛剣を構える。頭から血を流していたが、それでもまだまだ体力は残っていそうだ。

「クソッ、こーいうことかい！」

「そういうこっちゃ！」

「またひとつお利口さんになったわア！」

腰を深く落とし剛剣を振りかぶる伊東。斬撃をかわし射撃を行う市村。そのうち苛立ってきた伊東が、「えらい鬱陶しいのう」

「こっぴなったら……」

腰を落としてどっしりと両手で剛剣を構え気合いを溜める。何をやる気だ、と彼を見つめる二人をよそに伊東は回転しながら激しく斬りかかる。

「わいの必殺、大回転斬りを受けてみい！」

回転しながら斬りつけるだけという至極単純でわかりやすい技。だが得物である剛剣がとにかく大きいため、その範囲は極めて広い。よって回避も防御も困難であり、不破と市村は攻撃をかわしきれず吹き飛ばされてしまう。

「ッ！ はあっ、はあっ……」

「こ、こいつ、つええ……」

地面に膝を突き、息を切らす二人。伊東が剛剣を担いで左肩に乗せながらゆっくりと二人に歩み寄る。

「勝負ありましたなあ、お二人さん。あと一撃で俺の勝ちや。楽しかったでえ？ 久々に楽しませてもってなあ」

伊東が勝ち誇ったように言い放つ。彼が喋っている間に市村は、大型の銃　ブロックバスターにエネルギーを充填する。

「……往生せい！！」

目を見開いた表情で伊東が剛剣を大きくゆっくりと振り上げる。己の勝利を確信した笑みだ。だが、それは誤算だった。その隙を突いて市村が充填していたビームを発射し爆風で伊東を吹き飛ばす。壁に叩きつけられた伊東は吐血し、地面へ落下した。

「し、しもうた……そういう狙いやったんか！」

「もう遅い！ 出番やで、おっちゃん！」

「おっちゃんじゃない！」

市村が身をかわした後ろには、ランスをまつすぐに構えた不破が待っていた。そのまま突撃していきそうな格好だ。その円錐形の穂

先には電気が集中している。

「……行くぜ！ サンダーストライクッ！！」

溜めていた力を解放し不破が一気に突撃。「こんなもん！」と言わんばかりに伊東は剛剣を構えそのパワーで押し返そうとするが、その高い貫通力の前には抵抗もむなしく そのまま貫かれ絶叫を上げながら爆発した。

「決まったぜ！」

口元を吊り上げながら不破が笑う。ようやく勝てたという達成感に満ち溢れた、少しキザな笑い方だ。

「やった！ イッチーと不破さんが勝った！」

「勝ったったでえ、アズサ！ これで一安心やな」

「うんっ！」

不破と市村が伊東に勝った！ 子どものようにはしゃいで大喜びするアズサに近寄り、市村はアズサとハイタッチをかわす。

その光景を少し離れたところから見ていた不破は、「青春……してるなあ」と優しく微笑んだ。だが、喜んでいる三人の後ろでゆらめく炎の中から人影が現れた。伊東だ。フラフラとよろめきながら近寄る伊東を、不破が「まだやる気か！」と叫びながら牽制する。

「まいった！」

「……はい？」

「まいりました！ 俺の負けや！ 約束通り新藤の居場所教えたる」

「あ、ああ……頼む」

勝者は知る権利をその手につかみとり、敗者は何も知らぬまますべてを失う。不破と市村との戦いに敗れた伊東は、戦う前に交わした約束通り新藤の居場所を話す。

「……新藤の奴やったら用水路の方に逃げていきよつたわ」

「どこの用水路だ？」

「こつから先の道を曲がったとこや」

伊東が親指で自分の後ろを指差す。「今もそこでジツとしとるかは知らんけどな」と付け足した。

「すまねえ、恩に着る。でもいいのか？ 雇い主の居場所を話しちまって」

「別にええ。わいは新藤のヤツに金で雇われただけやからのう」

「ほうか、つまり新藤がやろうとしとる事には興味あらへんってことかいな」

「せや。そもそもわいはあいつがどうも気に入らんかったからなあ。雇われたんもつい最近や」

「そつやつたんや……やっぱりあの新藤って人、あかん人やったんやな」

「お嬢ちゃんのおつしゃるとおりやな」

他にも伊東は『近江の矛』が起こした暴動には参加していなかったことや、新藤が肝心なときに限って違う用事があって居ないことがあったことも話した。洗いざらい話せてスッキリしたか、「追うんやったら早い方がええよ。ほな、また」と言い残して去っていった。

「……用水路か……」

「行くんやったら早いに越したことは無い。行きまひよ。」

「いや、あんたはアズサちゃんと一緒に帰ってくれ」

自分も一緒に行くという市村の好意を突っぱねるように不破が告げる。

「……なんでや？」

「こつから先は危険だ。それにアズサちゃんは一般人だろ、あまり危険に巻き込まない方がいい」

「……」

考えてもみよう。今回一番辛い目にあつたのはアズサだ。市村のところに遊びに行っただけなのにいきなりチンピラのような風貌の男にさらわれ、その先では不破と市村がボコボコにされる姿を見せつけられ。

二人とは比べ物にならないほど苦しかったはずだ。それで今から一人だけ置いていかれようものなら、なお心細い。家に帰るところではない。誰かがアズサを守ってやらねば。

「……わかった、わしがアズサを守る！」

「イッチー……でも、新藤さん追わんでええの？」

「心配いらん。新藤やったらデカのおっちゃんに任せといたらええのう、おっちゃん？」

「だから、オレはまだおっちゃんじゃねえってばよ……」

何度もおっちゃん呼ばわりされては正直、辟易するというもの。だが今はそんなことでよくよくよしている場合ではない。一刻も早く新藤を止めなければ。

「……まあなんだ。オレは今から新藤のくそつたれを止めに行く。

あんたはアズサちゃんをしっかりと守ってやりな」

「もちろんや！ ほなアズサ、一緒に帰るか」

「うん！ 二人ともホンマにありがとう！」

ブロックバスターを仕舞うと市村はアズサと手を繋ぎ、二人一緒に帰っていった。微笑みながら二人を見送った不破はその表情を陰しいものに変え、用水路へ向かった。

EPISODE 125：うなれ剛剣！ 伊東、必殺の刃（後書き）

Q&Aコーナーだよー

Q：伊東さんの名前の由来はなんですか？

A：剣豪の伊東一刀斎からだよー。エスパー伊東からじゃないよ

Q：え？エスパー伊東じゃなかったの？

A：いや、そういうシャレをいっぺんやってみたいなあとは思ってました。でも違うのよ、これホント

Q：白峯さんはまだバカンス中ですか？

A：多分今帰宅中だと思います。

Q：みゆきは何してんの？

A：おうちのお手伝いやってます。もしくはバイトに行ってます。

EPISODE 126：銀ピカの侵略者

伊東から教えてもらった情報の通り、曲がり角を曲がるとそこには用水路があった。ここに新藤がいることに間違いがないのなら奴に見つからないよう慎重に、ゆっくりと行動する必要があるそうだ。

「……いた！」

誰かの足音がしたので物陰から覗くと、そこにいたのは 新藤。より慎重に、より警戒心を強め不破は新藤を追跡する。カニ歩きは少々カツコ悪いが、今は手段を選んでいる場合ではない。新藤を追い続けていると、やがて水路の岸で新藤は腰を下ろして座った。懐から携帯電話を取り出した新藤は誰かの電話番号を入力する。

（誰と話す気だ？ まさか奴には協力者がいるっていうのか？）

柱の影に隠れながら不破は新藤の様子を伺う。 行動を起こすにはまだ早い。新藤が誰と連絡をとるのか、しっかりと聞いておかねば。

「……ええ、お陰様で順調です。大阪の連中、思ってた以上にバカなヤツばかりで仕事が捗りましたよ」

「そうか。幹部への昇進が約束されているだけあって気合いが入っているようだな」

「もちろんでさあ」

「その調子なら心配はいらなそうだな。……だが、油断するなよ」

「なんでですかい？」

「人間を甘く見ない方がいい……もう何人も仲間がやられている。次はお前の番かもしれんぞ？」

「まさか。俺がやられるわけないでしょう」

「大した自信だ。……今回の作戦にはお前の昇進だけではなく、会社の威信が懸かっている。絶対に成功させる。今回の作戦は先に殉職した者達への手向けでもあるからな」

「……了解！」

何者かと連絡を取り合う新藤。敬語を使っていたことが察するに、彼の協力者だろうか？ それとも。物陰で一部始終を聴いていた不破は、にやつく新藤に歩み寄り

「手を上げる！」

不破が拳銃を構え新藤を威嚇する。突然声をかけられたかと思えば銃を向けられていた為、新藤はやむを得ず両手を上げた。

「話は聴かせてもらった！ 署まで同行願おう。それともこの場で取り調べしようか？」

「そんなの誰が……！」

額から汗を流しながら新藤が舌打ちする。ひどく焦りを感じている表情だった。

「それより聞きたいことがある」

「あ………？」

「お前が話をしていた相手は誰だ？ 答えろ」

「へッ、誰が教えるか」

しらばつくれる新藤。教えないどころか不破に殴りかかり転倒させる。銃を仕舞って立ち上がり、不破は「何が狙いだ！」と身構えながら訊ねる。

「俺の知ったことじゃない！ ……盗み聞きされた以上生かしちゃおけねえな」

新藤が鉄パイプを携え不破を殴る。それを受け止め不破は鋭いキックで反撃。腹部に命中し、新藤は腹を押さえながら後退。

「ハアアアアア……！！」

少し気合いを入れながら新藤が唸る。みるみるうちに新藤の体が液化化し、その姿を変えていく。

「……やっぱりな。最初っから怪しいとは思っていたが……」

不破が戦慄する。彼がいま対面している新藤の姿は凶悪な歯牙をむき出しにして笑うイカの怪人のような姿に変わっていた。体は白く、顔はガイコツのような凶悪な面構えで大きな眼が黄色く光っていた。そのびっしり生え揃った歯牙も合わせて凶悪さは三割増しだ。両腕は太くガツシリしており、触手をいくつもぶら下げている。その身には銀色の軽装の鎧をまとっている。全体的に銀ピカで良く目立つカラーリングだ。ある意味では「俺は強いから近寄らない方が身の為だぞ」と言いたげな警告色かもしれないが。

「こうなったら武力行使だ。力づくでもお前を止める！」

「警察の犬が吠え面かきやがって。返り討ちにしてやるぜ！」

不破はランスとバツクラを携え、新藤は鉄パイプを握り 戦いの火蓋が切って落とされた。まず新藤が先に攻撃をしかけ鉄パイプを振りかぶる。不破はそれを防ぎ弾き返す。攻撃を弾き返されてひるんだ隙に不破はランスで相手を切り上げる。しばらく激しいぶ

つかり合いが続き、その中で新藤の鉄パイプがポキッと折れた。

「ちっ！ やっぱりこれじゃ不利か」

舌打ちして不破を殴り飛ばす新藤。どこからともなく新しく武器を取り出すと思いい切り荒々しく振り回して不破を威圧。その武器は槍で、穂先がイカの腹のような形をしていた。色はやや赤い。まるで獲物の返り血がこびりついたように。

「だが、これならどうだ！ うらあああー！」

「ッ！」

両手で槍を構えた新藤が連続で突きを放つ。目にも留まらぬ速さだ、急に繰り出されたため防ぎきれず不破はその連続突きをまともに受けてしまう。

「やっってくれるな……お前！」

左肩を押さえながら後ずさりする不破。刹那、新藤の突き刺し攻撃を跳んでかわし空中から飛び込んで反撃。新藤を突き飛ばした。立て続けにランスを激しく振り回して周囲に電撃を流す。電撃は見境なく周囲を破壊し、新藤の頭上から瓦礫が落下。新藤は間一髪でそれを回避するが、油断したところに「そこかッ」という掛け声と共に飛んできた電流を浴びて感電した。

「どうだ！」

「やりやがったな……」

紫の血を流しながら新藤が立ち上がる。所々黒焦げになっていたがまだピンピンしていた。笑いながら「いい武器持ってんじゃねえ

か」と呟くと新藤は両脇から垂れ下がった触手を伸ばし、「少し借りるぜ！」と唾液を飛ばしながら叫ぶ。

「なにッ！」

「へへへっ……」

汚ならしく新藤が笑う。不破から奪ったランス　イクスランサーを豪快に振り回して周囲に電撃を放ち不破を遠ざける。更に新藤は、電撃が収まったところでイクスランサーを取り戻そうとする不破に嫌がらせするように口から墨を吐き出す。

「ぐっ」

一見何の変哲もない墨。だがそれは爆発し不破の目を眩ませた。

「ハハハ！　どうだ、俺様の墨爆弾の味は！」

「ああ……『最悪』だッ！！」

不破へ向けて次々と墨爆弾を吐き出す新藤。不破はその中を超スピードで駆け抜け、新藤の懐へ一気に詰め寄る。又メツとして気色悪い新藤の顔を殴り、「返せ！　そいつはお前が勝手に振り回しているもんじゃない！！」と怒号を浴びせた。

「うるせエ！　この、権力の犬が！」

「イカメシ野郎がッ！！」

「ヒーロー気取りが！」

「スルメ野郎がッ！！」

両手が塞がっている新藤は頭突きをかまし、更に足で不破の下顎を蹴り上げる。血のしぶきが少し宙に舞った。だが不破はめげずに

膝で新藤の腹を蹴り上げ、更に腹に強烈な右ストレートを浴びせる。口から墨と紫の血が混じったグロテスクな液体を吐きながら、新藤は後退した。

「うっぜエ！」

歯ぎしりする新藤。いきり立った彼は勢いに身を任せて不破が持っていたイクスランサーを投げ出した。当たる寸前で身をそらして転がり不破は回避。立ち上がって振り向くと、柱にイクスランサーがでかかど突き刺さっていた。もしかかし損ねていたら恐らくは。少し力を入れてイクスランサーを引き抜くと、不破は「ずいぶん手荒な返却だな！」と啖呵を切った。

「ふんっ！」

「へっ！」

「このッ」

「おらよッ！」

真正面から斬りかかり、新藤にぶつかり合いを挑む不破。何度も火花を散らす連戦による疲労から不破はどんどん押されていく。一瞬でもよろめいた隙を突かれ、不破は新藤の反撃をみすみす許してしまつ。

(やべえ、さっきの戦いで消耗しすぎた……ッ！)

「うらっ！」

「ッ！」

槍で右肩から左脇にかけて斬られ、

「生ゴミめ！」

「ガハッ！」

腹を思い切り強く蹴られて血を吐き、

「ごく潰しめ！」

「うぐっ！」

頭突きで顔面を強打され鼻をくじかれ、

「警察の飼い犬め！」

「ぐおッ！！」

左肩を突き刺され血を豪快に噴き出し、

「その顔をグチャグチャに潰して肉団子にしてやる！！」

「うがああああ！！」

拳句の果てに顔を掴まれて地面に押し倒され、馬乗りで何度も刺されたり殴られたりした。

「泣け！ 叫べ！ そして死ね！！」

身動きがとれない不破。それをいいことに新藤は立て続けに不破へ殴る蹴るの暴行を加える。こうなったらもはや 勝負どころではない。殴りに殴って気がすんだ新藤は不破の首をつかみ上げるとほくそ笑み、

「グへへへッ！ いい顔だ。あとで鏡でも見てみな、きつと驚くぜエ？」

皮肉を言つて新藤が嘲笑う。不破の顔は傷だらけでその上血まみれで、唇は腫れて右目には青アザが出来ていた。更に服もボロボロで血がこびりついており　とても外には出歩けないようなみじめな格好にされてしまった。

「つ……」

「今さら止めようとしたつてムダだぜエ？　刑事さんよオ」

不破を壁に押し付けた状態で新藤が言い放つ。片目を大きく見開き不気味な笑みを浮かべていた。

「……この大阪はもうじき俺たちのものになる！」

「なにっ！？　そんなことはさせねえ……！！」

「おーおー、勇ましいねエ」

嘲笑う新藤。少し気合いを入れ　不破を殴つて壁ごとぶち抜いた。吹き飛ばされた不破は瓦礫が散乱する中で胸を押さえて悶える。

「そこで指をくわえて見てな！　この大阪が侵略されるのをなあ！　イーカッカッカッカッカ！」

新藤が下品に、汚ならしく笑い声を上げる。そのまま彼は用水路を流れる水の中に飛び込み、その場から泳いで去つていった。

「く、クソツ……」

激しい戦いが繰り広げられ、その最中に荒れ果てた用水路。そこに残されていたのは瓦礫の山と二色の血の痕、そして重症を負つた不破だけだった。

EPISODE 126：銀ピカの侵略者（後書き）

なぜなにQ&Aコーナー

Q：エスパーの武器は他人が持つても能力は使えますか？

A：使えないよ

Q：でも新藤がイクスランサーを奪って電撃出してたけど、あれはどういうことなの？

A：電撃発生は武器の機能です。なので赤の他人であるイカメシが振り回しても使えたというわけです。不破さんが持ってたときは、その上に不破さんの能力（雷を操る）が上乘せされていたというわけですね。

Q：じゃあ健やイチー、伊東さんの武器は？

A：使えます。が！ その3人の武器全てが使えるかどうかはわかりませんよ

Q：そもそもイカメシはなんで他人の武器を奪おうとするの？

A：新藤ことバイキングラーケンは卑怯者で、勝つためなら手段を選ばない人です。なので他人から武器を奪うようなことも平然と行います。

Q：要するに、エスパーの武器は特殊能力より『機能』のが多いって事ですか？

A：そうですね。

Q：あれ？ Vol.4の辺り読み返してたら新藤と似た格好の人がいたんだけど

A：もしかして三谷をイジメてたりした人ですか？
実はその人と
新藤は同一人物です

EPISODE 127：特訓しようぞうしよう

その翌日、健たちは何をしていたかということ。

「よいか、健。あそこに燃えているドラム缶があるだろう？」

「うん。それで僕はどうしたらいいの？」

「戦い方と、それと技の練習だ。あれを敵だと思え」

「……よっし、わかった！」

どこかの河原にある空き地。そこは廃材置き場でもあり、先程アルヴィーが火をつけたドラム缶や工事現場に置かれているフェンス、赤いコーンとコーンの間に置かれる黄色と黒のポール、鉄パイプや角材、それから鉄骨にコンクリートの瓦。

とにかく様々なものが置かれていた。ここには今、健とアルヴィー、みゆき以外は誰も来ていない。周りは壊しても大丈夫そうなものばかり。つまり特訓するにはもってこいの場所というわけだ。

「健くん、あんまり無茶しないでね」

「大丈夫だって。わかってる、わかってる！」

心配するみゆきに元氣よく言葉を返すと、「よーし、行くぞー！」と健は威勢よく飛び出した。

ドラム缶の前で切り合いを演じ、横っ飛びでかわして斬り、転がって攻撃を切り抜け。

相手は動いていないものの、健の動きは本番さながらのキレの良さだった。

「す、すっ……！ 健くん、前より頼もしくなった気がする」

「ああ、私も同意見だ。だが油断はできん」

「えっ、どうしてですか？」

「健だけではなしに、この頃敵も強くなってきたらんだ。今後いつ辰巳やアンドレのような強敵が襲ってくるかわからない」

「そういえばこの前……」

確かに健は強くなり続けているが、敵も強くなってきているから油断はできない。アルヴィーのその言葉を聞いてみゆきは以前、アイアンガーゴイルによって石にされたときの事を思い出す。バイトから帰る途中突然目の前に悪魔の彫像のようなシェイドに襲われ石にされてしまった。

健たちがそのシェイドを倒したことで石化が解けたので一緒に帰ろうとしたら、今度は顔に包帯を巻いた男が現れた。更にその包帯を巻いた男はヘビの化け物のような姿に変身、圧倒的な力で健を苦しめ。思い出すだけでも大変だ。だが、健はもつと辛い目に遭っていた。彼のために何かしてやれることはないのだろうか？ みゆきは思い詰めた表情を浮かべる。

「……まったく、あやつもあの時はずいぶんと無茶をしおつたものだ。もう少し自分の体を大切にしてほしいものだが」

腕を組みながら、アルヴィーは全力で訓練に挑む健を見守る。

胸が大きいゆえ、図らずも腕でたくしあげる形になってしまう。

だがそういうものなのだから仕方がない。

「よし、そろそろ属性つきで行くか」

ドラム缶を前に健が呟く。属性なしの時に行く攻撃と防御はバツチリできた。

次からは属性ありで行こうと 彼はまず最初に赤いオーブを長

剣の柄に装填。

刀身が赤く染まり炎をまとった。

「ていつ！ ヤア！！」

炎の剣を振るう健。ひとふりするたびに炎が宙を舞う。

逆手に持って振り上げれば地面に炎の波が走る。その姿は荒々しく、美しかった。

「次はビリビリ行くか！」

そう言っただけはオーブを入れ替え、黄色いオーブを装填。

今度は青白い電流が走り、刀身が金色に光り出した。気合いを溜めてから振ると三日月状の衝撃波が飛び、空高く飛び上がりながらの唐竹割りを決めれば健の周囲に稲妻が落ち地面に電撃が走った。どれも威力は絶大だ、何故ならこのオーブのエネルギーは高出力だからである。

「熱くなってきたな……今度はクールに行こう」

少しカツコつけた声色で呟きながら健はまたもオーブを交換。

今度は見るからに冷たそうな青白いオーブを装填した。

これは氷属性をこの長剣 エーテルセイバーに付加する効果がある。

敵を凍らせて動きを止めたり、火を消したり、空気中の水分を凍らせて空中に道を作ったり、水面を凍らせてその上を渡ったり。

何かと便利で扱いやすい為か、健はこのオーブを気に入っていた。炎のオーブと同じく戦い始めた頃から世話になっているので愛着も自然に湧いてくるといふもの。

「凍りつけッ」

健が手のひらから冷気を放つ。

するとあれだけ激しく燃えていた炎が、みるみるうちに小さくなっていくではないか。

それほど今の冷気は強力なものだったのだ。剣を振れば冷気が巻き起こり、地面に剣を叩きつけければ氷の刃が突き出す。

これにより攻撃面でも他と比べて遜色なく、汎用性が高いことをアピール。息抜きに少し剣を振り回して遊ぶと涼しげな一筋の風が辺りに吹き始めた。

「おお、心地よい風だの」

「気持ちいいーっ」

後ろにいたみゆきとアルヴィーにもその風は届き、二人とも和やかな笑顔を浮かべた。

この季節である、この暑さである。涼しい風ほどありがたいものはない。

「よし、……最後に三つ同時に行ってみるか！」

「うむ、それがいい！ あれはここぞという時に使うに限るからの」「あと一息よ、がんばってー！」

声援を受けながら健はエーテルセイバーの柄に赤と黄色のオーブを装填。この柄に開いたオーブをはめる穴は、当初はひとつだけだった。

だが白峯とばりが研究と解析を重ねた結果、突如として新たに二つの穴が開いたのだ。これにより今までに手に入れた三つのオーブを同時に使用しての必殺技を繰り出せるようになった。

だが、当然負担も大きく 事実、はじめて使用した辰巳との戦

いでは使用後に健の体に激しい疲労が襲いかかった。

未知のパワーの塊であるオーブを三つ同時に使っているためであり、そのエネルギー量はおびただしいものがあった。

そこでとばりは健から腕時計を拝借して、それを素材に余剰エネルギーを吸収して負担を軽減する装備品　セーフティブレスを開発。

時計としての機能は完全に失われたが、その代わり戦いは楽になった。三位一体の必殺技だけでなく、他の必殺技を使用した際の負担も軽減してくれるからだ。

「行くぞ、三位一体ッ！　名前はそうだな、えーと……そうだ！」

いざ三位一体の必殺奥義を繰り出す！

と思われた矢先、技の名前をつけていなかった健は思い悩む。あまりに間抜けな彼の姿を見て肩透かしを食らったアルヴィーとみゆきはずつこけた。

二人とも、最初から考えとけよ……と呆れたに違いない。

「　　そうだ、これでいこう！　トリニティスラッシュー！」

やっと技の名前を思い付いた健は大きく剣を振りかぶった。

最初に剣を振ると激しく燃え盛る炎が龍の如く空を舞い、次に振れば輝くほど冷たい吹雪が辺りに吹きすさび、最後に振れば激しい稲妻が辺りに降り注いだ。三色三属性の必殺の刃はあまりに威力が強く　耐えきれなくなったドラム缶は大爆発した。

「よっしゃ決まった！」

健が嬉しさのあまりガッツポーズ。それは特訓が終わった事を示す合図でもあった。

ただ、セーフティブレスを装備していても反動は大きく 健の動きはふらつきそのまま倒れた。

倒れた彼に駆け寄ったアルヴィーとみゆきが、「健!」「健くん!」

「だ、大丈夫 でもやつぱり堪えるね、これ」

駆け寄った二人に支えられながらぐったりと、しかし笑顔を絶やさずに健が言う。

やや苦しげではあったが、その笑顔からは心強さと頼もしさが感じられた。

以前の情けない彼からは想像もつかないほどだ。

これも長い間アルヴィーと共に暮らし、鍛練と経験を積んできた賜物^{たまもの} かもしれない。

「さ、腹も減ってきただろう。メシでも食いに行かんか?」

「うんっ、そうする! みゆきはどこで食べたい?」

「健くんが好きなので良いよー」

わかった、と健が返す。

自分を支えてくれた二人に「もう大丈夫だよ、離して」と告げるとどいてもらい、一人で歩き出す。

さあ食事だ、と意気込みを見せたその時。

「うん? 誰からだろ」

その時、みゆきの携帯電話が振動した。

「もしもし、風月ですが」

「あつ、みゆきちゃん？」
「白峯さん！」

電話の相手は白峯だった。口調から察するに少し慌てているようだ。

「昨日不破くんが大ケガして病院に運ばれたみたいなの」
「えっ！？ びよ、病院に……？」

不破が病院に運ばれたと聞いてみゆきが声を上げた。
ちようど近くにいた二人も驚きを隠せなかった。

「どこの病院ですか？」
「大阪市内の総合病院みたい。これからお見舞いに行くんだけど、よかったら一緒に来てもらえる？」
「はい！」
「わかりました。大阪駅で待ってるから一応健くん達にも話しといてね。それじゃ」

そう言って白峯は電話を切った。
みゆきは携帯電話を仕舞い二人に、「大変よ、不破さんが病院に運ばれたって！」

「えっ！？ ど、どこに？」
「大阪市内の総合病院みたい。白峯さん大阪駅で待ってるらしいから、早く行かなきゃ」
「大阪駅で待ち合わせか。うむ、わかった。急ごう！」

アルヴィーが走り出す。彼女に続いて健とみゆきも走り出した。
特訓で破壊したドラム缶の火を消し忘れていた事を思い出し

たアルヴィーは途中でUターンして消火。急いで二人のもとに戻り再び走り出す。

「不破さんに何があったんだ……？」

「いったい、不破の身に何があったのだろうか？ 少し不安になりながらも三人は疾走していた。」

EPISODE 128：病院へいこう

「うーん」

「白峯さん、どうしましたー？」

その頃、大阪駅では外のベンチに座りながら白峯が健たちを待っていた。その隣にはシェイド対策課のオペレーターを務めている若い女性警官　　宍戸もいた。当然ながら二人とも私服姿だ。

白峯は藤色のワイシャツにグレーのフレアスカートで、胸がキツいからかは不明だが少しはだけていた。割とシンプルながらも全体的に大人っぽい服装だ。

宍戸はチュニックワンピースにデニムのスカートで、他にも若者らしさを醸し出したカジユアルな格好をしていた。公私はキッチリ分ける彼女の性格が表れている　　とも言える。

「やっぱり現地集合の方が良かったかしら」

「他に誰か待つてる人がいるんですか？」

「うん。知り合いの女の子とその友達なんだけどねー」

宍戸にその知り合いの話をしようとしたその時　　「白峯さん！」と聞きなれた声が聞こえた。若い男性の声だ。

「あつ、東條くん！　電車どうだった？」

「すみません、ちょっと遅れてました」

「あらら」

申し訳なさそうに頭を掻く健。もちろん彼の隣にはみゆきとアルヴィーもいた。大急ぎで電車に乗ってきたため、服装は特訓をしていたときのままで。

「知り合いの人って、この人たちのことですか？」
「そうよ。二人とも私の友達なの」

につこり、と白峯が笑う。三人をバツクに白峯が上向きの手のひらを差し出したのを合図に、自己紹介が始まった。

「東條です！ お役所でバイトやってます」

「風月です！ ウェートレスやってます」

「……えーと……」

健、みゆきと順番に名乗っていく。しかしアルヴィーだけ戸惑いを見せていた。といっても理由はそんなに複雑なものではない。

健が役所で世話になっている人々や健の前で使っている『白石』と名乗るべきか、それともそのまま『アルヴィー』と名乗るべきか？

たったそれだけだ。いつも威風堂々とした振る舞いを見せる彼女だが、こういうところは意外と繊細である。

「東條くんにみゆきさんね。……アレ？ あっちの白い髪のお姉さんはなんていうのかしら」

穴戸がきよとんとした顔で言う。

「わ、私はしら……」

「ああ、この人ね？ この人はアルヴィーさんっていうの！」

（と、とばり殿！？）

ここは白石と名乗ろうとした瞬間、白峯が先にアルヴィーの名を教えてしまった。「あわわ、あわわわ」とその後ろで健とみゆ

きがあたふたするもすぐに「まあいつか」と自分に言い聞かせて落ち着いた。

「そ、そっか。アルヴィーさん……っていつのね」

アルヴィーを見て穴戸が紅潮する。少し照れ臭そうと　　いうかアルヴィーに見とれたような、モジモジした声色で喋っていた。

「……？」

「わ、わたし穴戸って言います！　み、皆さんよろしくお願いしますすっー！！」

「ど、どうも。こちらこそお願いします」

穴戸が名乗りながら頭を下げる。少し緊張して顔を赤くしていたが、彼女はそれだけでなく　　女性が女性に好意を抱きそのまま惚れるといういけない感情も感じていた。この場にまり子が居合わせていなかったのが惜しまれる。

「……さて、これで全員そろったわね。それじゃあ病院まで行きましょー！」

「はいっー！」

白峯の呼び掛けに全員が元氣よく返事をする。彼女の引率のもと歩いていくと近くの駐車場へ辿り着いた。どうやらここから車に乗って不破が搬送された病院へ向かうようだ。

「それじゃあみんな、車に乗って！」

白峯が他の四人を車に乗せる。全員が入ったのを確認し、彼女も運転席に腰掛けた。白峯の車は比較的大きく、最大で七人は乗れそ

うだ。

そもそも彼女が七人乗りの大きな車を買ったのは研究機材などを運ぶためであり、誰かを乗せるよりは荷物運びに使っていたことが多かった。

最近知り合いのみゆき達と遊びに行くことが増えて人を乗せることも多くなったため、白峯も車も嬉しいというものだ。

「着いたわよ」

車を飛ばすこと約一時間。白峯一行は不破が入院中の総合病院に辿り着いた。

「ここに不破さんが？」

「うん」

「でもお見舞い品なんか持ってきてきてないぞ……」

「それなら大丈夫よ！ わたしの方で用意しておいたから」

「あ、ありがとうございます！」

ここまで来て見舞品を持ってきていないことを思い出して慌てる健だったが、白峯の一言を聞いてホッと息をついた。気を取り直して健たちは病院の中へと入っていく。ちなみにこの病院の名は『狭山総合病院』というらしい。

「……にひひひ」

だがこのとき、まだ誰も気づいていなかった。怪しい男が近くに潜んでいたことに。この男はいつたい、何者なのだろうか？

「見つけたでえ〜ッ！ いひひっ」

EPISODE 128：病院へいこう（後書き）

Q & A コーナーだよ！

Q：最後に出てきた関西人は誰？

A：イッチーじゃないです。伊東でもありません。男なのでアズサちゃんでもないですね。

Q：穴戸ちゃんはアルヴィーに惚れたんですか？

A：あの様子だと惚れたんでしょうなあ。いいことだ。

Q：まり子は？

A：お留守番中。いいもん、ひとりだけでできるもん！

Q：村上は？

A：今忙しいみたいですよ。

EPISODE 129 : 404号室

『総合』とつくだけあってこの狭山総合病院は広大だ。構造は地上九階立て、地下一階立て。医療設備も最新のものが取り揃えられており、市内では患者に優しい病院としてたいへん有名だ。不破はその病院の四階にある病室のひとつ　404号室にいた。

「ここに不破さんが？」

健が白峯に聞く。

「そうよ。ここに不破君がいるのよ」

「なんかこの番号ってエラー画面みたいですね。八八八……」

「お邪魔しまーす」

404号室の中に入ると窓に近いベッドで頬杖を突きながら、不破は気難しそうな顔を浮かべて外の景色を眺めていた。ビル街のど真ん中から更に向こうには、海と港。近くには緑色に染まった野山が見える。色とりどりで意外ときれいだ。

村上が言っていたように、そんなところに首都機能を一部移設するとなればよりこの街は豊かになり発展する。だがそうなれば、先日入ったゴーストタウンのように寂れた地区がどうしても出てくる。豊かになる一方でそうした豊かではない場所が出来てしまうのはある意味仕方がないことではある。

貧富の差　　というやつだ。だが、それを快く思わないものがないのも事実。そうした政府の方針に不満を抱いているものは少なくない。　まさか、新藤はそこにつけこんだというのか？

「……くそつ、あのイカメシ野郎め……」

つけこんだのが本当だとすれば奴の目的は恐らく、人々の政治家や警察への不信感を煽って混乱に陥れること。何故もつと早く気付けなかったのだらう、と不破は唇を噛みしめた。震わせている拳には何も出来なかった不甲斐ない自分への怒りと悔しさがこめられていた。

「お邪魔します〜」

しばらくして、病室のドアを開けて見覚えがある女性が入ってきた。彼女だけではなく、不破より年下または同年代の男女も四人。

「白峯さん！ それにみんな……」

そう、白峯一行だ。棚の上に見舞品の花束を置いて白峯は、

「不破くんが入院したって聞いたから、みんなでお見舞いに来たの。大丈夫そうで良かったわ」

「いえいえ、ありがとうございます。みんなもありがとうな」

自分を気遣って見舞いに来てくれた五人に、不破はこの場を借りて礼を告げた。最初は孤独だった彼だが今では仲間がこんなにいる。そう考えると感慨深いものがあった。

「それで不破さん、お怪我の方は……」

「心配すんな、穴戸。こんくらい平気さ。ほら、このとおり」

身体的にとくに問題は無いことを肘を曲げて証明する不破。だがすぐに腕が悲鳴を上げた。

「あぐつ、イデデッ！」

「ま、まだムリをしちゃダメです！　どうか安静に」

「す……すまん」

左腕を押さえて痛がる不破。彼を心配した穴戸に不破は、「ところで村上のヤツは？」と訊ねる。

「あいにく主任は多忙で離れられないそうでした……それで私が代わりに行くことになったんです」

「そうだったのか。あいつ薄情だな……今日ぐらい休んでも良かったのによ」

不破に村上の様子を伝えた穴戸が下がり、今度は健とみゆき、アルヴィーの三人がベッドに近寄った。彼ら三人のスペースを確保するため、穴戸と白峯は窓側に回り込んだ。

「ところで不破さん、そのケガはどこで？」

「……新藤だ。あいつにやられた」

「新藤……ハッ！」

警察なんて信じねえ。いつも口先ばかりで、肝心な時に限って行動を起こさない。みんながシェイドに襲われてるときだってすぐに助けに来てくれない。そんなヤツらを俺たちが信じると思ってたのか？

その善人ぶった態度が気に入らねえ！　俺たちから集めた税金を何かに役立てたことが一度でもあんのか！？　一人でも許しがたい理不尽な犯罪を犯したヤツをきちんと罰したことがあるのか！？　どうなんだ、言ってみろよ！！

テメーみてえなクソツタレは……脳髓ブチまけて死ぬー！！

どこで入院するほどのケガを負ったのか？ 不破によればそれは新藤につけられたものだという。そう聞いた健は海洋博がシエイドに襲撃を受け、自警団『近江の矛』が駆けつけてシエイドを駆逐したときのことを思い出す。

「……『近江の矛』の新藤ですか！？」

「ああ、そいつだ。あの野郎、シエイドだった。ヤツは端っはなから怪しかつたが、みんなも疑ってた通りだ。あのくそつたれは大阪のみんなを騙してやがったんだ」

「そうか……やはりな。道理で信用できない雰囲気だったわけだ」

やはり、とアルヴィーが腕を組みながら呟く。左手を口元に添えていた。相変わらず下からたくしあげるような形だ。胸が大きいゆえ仕方がないことだが。

「あんた、もしかして気付いてたのか？」

「いや、そうではない。ただなんとなく、あの新藤というヤツから血生臭さを感じ取っただけだ」

「つまり殺気か。確かにヤツは殺気立っていたし凶暴だったが……」

「それでその新藤さんって人は？」

「逃げられちゃった。どこに消えたのかわからない」

アルヴィーと話し終えたところにみゆきがひとつ問いを投げるが、答えは彼が言う通りであった。不破は新藤に蹂躪された拳を逃げられたことをとても齒がゆく感じていた。

「くそっ！ 奴のニヤケ面が目には浮かんで来やがる！ 行かせてく

れ。ヤツを止めるには今しか無いんだ！」

「ふ、不破さん！ 落ち着いて……」

やがていても立ってもいらなくなった不破は、ベッドから這い出しても新藤を止めに行こうとする。そのひどく傷ついた体で、だ。もちろんそんな無茶を許せるはずがなく、健たちは不破を止めようとする。

「何しやがる！」

「ダメですよ、今は安静にしないと！ 新藤の事は僕たちで何とかしてみます。だから不破さんは体を休めて……」

「寝ぼけたこと言っただんじゃねえよ！ 大阪がシェイドのものになるかもしれないんだぞ？ なのにこんなところでジツとしてられるか！」

健の静止も聞かず不破は「行かせてくれ……行かせてくれッ！」

としきりに叫びもがく。そんなことをすれば余計に状態が悪化する。何とかして止めなければ 他の四人が取り押さえている中、白峯は意を決して「待つて不破くん！」と呼び掛ける。

「これはあなた一人だけの戦いじゃないの。ここは健くんたちを信じて」

「ですが白峯さん、オレ一人だけここで大人しくしてるのは嫌です。だから行かせてください！」

「ダメよ！」

「っ……」

「あなたに自分を蔑ろにしてほしくないの。ここは健くんたちに任せて、あなたは治療に専念して」

不破は頭ではわかっていた。今は行くべきではないということだ。だが、心では許せなかったのだ。病室（びつ）でいつまでも何もせず寝てるわけにはいかないと。

しかし白峯が言うように、下手に動けば命に関わる危険性がある。反発しても出ていくつもりをしていたがこんな自分を本気で心配してくれている白峯の言葉を聞いて　　不破は考えを改めた。

「……わかりました。ちょっと悔しいですが、ここは東條に任せてみようと思います」

白峯の思いを受け取った不破が言う。落ち着いたからかいつもより穏やかな笑みを浮かべていた。そんな彼を見て、健たちにも笑顔が戻った。

「ただし東條！　お前までやられたら承知しねーからな」

「はい！　わかってます」

「ああ、任せてくれ。健とともにあのゴロツキを必ずや倒してみせる！」

健とアルヴィーが力強く宣言する。それを聞いた不破は至極嬉しそうに「なら安心だな！」と返した。

「新藤がシェイドであることが分かった以上、リーダーか何かを使えば奴の居場所はすぐにわかると思っています」

「でもリーダーはこの前……」

穴戸の言葉を聞いたみゆきが心配そうに呟く。なにを隠そう健がリーダーとして使っていた白い鱗は　　辰巳との戦闘で彼の身代わりとして碎け散ったからだ。

「心配ご無用！ それなら用意してあるわ」
「えっ？」

そんな心配はいらないと白峯が微笑む。カバンに手を入れてこそごと音を立てて取り出したのは レーダーだった。それも七つ集めたらシェンロンが現れて願い事を叶えてくれる玉を探すのに役立つような形の。

「じゃじゃーん 東條くん専用のドラゴンレーザー……じゃなくしてシェイドサーチャーよ。はい、どうぞ」

「す、スゲエ！ 僕のためにここまで……ありがとうございます！」
「うふふ。今後も役に立つと思うから、是非とも使ってみてね」

嬉しそうに白峯が微笑む。健はやや興奮した様子で白峯に礼を告げた。

「それじゃあね、不破くん！」
「今日はありがとうございました。他のみんなも元気だなーっ」

不破が早く退院できることを祈りつつ、健たちは病室をあとにした。なお、宍戸はもう少し病室に残るようだ。面倒を見てから帰るか、あるいは大阪での思い出話を聞いていきたいのだろう。

「これから頑張んなきゃね。東條くん、準備はできてる？」
「はい、もちろんです！」
「よっしゃ、その意気よ！ ところでみんなお腹空いてない？」

帰り道、駐車場へ向かう途中で白峯が他の三人に訊ねる。食事に

行くかどうかを聞いてみたのだ。それには及ばないと答えるつもりをしていた三人だったが急に腹の虫が鳴り。

「あらあら、それじゃ食べに行きましょう」

「ま、マジですか!？」

「もちろんマジよ」

「やったーッ!！」

「おおっ、かたじけない!」

「どこにしようかなー……」

喜色満面。手を繋いでスキップしながら駐車場へ向かう四人だったが、その行く手を阻もうとする者が一人。

「悪いが食事は中止や」

「!?!? 誰だッ」

ハツと真剣な顔で健がみゆきと手を繋いだまま辺りを見渡す。その速さ、コンマ一秒。ルンルン気分から一転して真面目な顔になるその切り替えの速さには驚かされるばかりだ。

「誰……どこにいるの?」

「姿を見せよ!」

「逃げも隠れもしまへーん。シャウッ!！」

若い男性の声が人をおちよくなるような態度をとる。声の主は木の枝に乗っており、そこから飛び降りて姿を見せた。その男は金髪の逆立った髪型で肌は小麦色。

ヘビ柄の革ジャンを着ていて他にも耳にピアスや顔に稲妻のようなギザギザの模様を入れており、まるでパンクロッカーを彷彿させ

るような派手な服装だ。

「皆さんお揃いでー。ワシは祇園藤吾（おんかふじご）！ 『近江の矛』の一員じゃい！」

「『近江の矛』だつて！？ いったい僕たちに何の用だ！」

「新藤さんの命令や。邪魔するヤツはブツ殺せてなあ！ いひひひっ！」

「なにッ……！」

パンクロッカーっぽいというかチンピラにしか見えない男 祇園藤吾が嫌らしく笑う。唇を噛みしめる健のうしろでは、いち早く危機感を感じたアルヴィーがみゆきと白峯をかばい立てしていた。

そんな緊迫した空気の中、健の携帯電話がプルプルと震え出す。知っている誰かから電話がかかってきたか、或いは誰かからメールが届いたかのどちらかだ。

「もしかして電話でつか？ それぐらいやったら待つといたるさけえ、どーぞ出てくらはいやあ」

「わざわざどうもー……」

なんと藤吾は電話に出るのを待ってくれるようだ。少々不本意ながらも礼を言つと、健は電話に出た。

「もしもーし」

「あ、お兄ちゃん？ わたしよ、わたし！ まり子よー！」

「ま、まり子ちゃん？ どうしたの？」

「遅いよー！ いつまで特訓やつてるのよー！」

電話の相手はまり子だった。特訓する為に出掛けた健に留守番を頼まれ、ひとりで寂しい思いをしていた。待っても待っても健たち

が帰ってこないため、退屈したのだろう。

「い、今大阪の狭山総合病院の辺り！」

「病院？ 何しに行ってるのよっ！」

「不破さんのお見舞いに行ってるの！」

「ホント？ 早く帰ってきてよー！」

「わ、わかった！」

「切るよ、もうッ！！！」

しきりに騒ぐだけ騒いで健をまくし立てると、まり子は電話を切った。あの騒々しさから察するにまり子は相当寂しかったのだろう。早く帰って彼女を喜ばせてやらねば……。

「話は済んだみたいでんなあ？」

「ああ……待っててくださいって、どうもありがとございました」

にやつく藤吾に対して健が皮肉混じりに言う。

「ほうか……。ほな、戦ってええんやな」

「こつちには待ってる人がいるんだ。さっさと終わらせてもらっぞ
！」

片方はバイオリン型の奇抜な形状の剣を、もう片方は水色のライ
ンが入ったシルバーグレイの長剣と龍の頭を模した盾を携え 腰
に力を入れて身構えた。

「ええ度胸やないの。いざ……尋常に勝負じゃああああー！」

戦いの火蓋は切って落とされた！

EPISODE 130：スーパージャンパー

「行くでえ！ ひよっほーい！」

戦いが始まると同時に祇園藤吾は、奇声を上げて空高く跳躍。見上げると同時に盾を構える健だったが、藤吾はどこにもいない。どこだ、とキョロキョロする健に「こっちじゃワレエ！」と藤吾が罵声を浴びせ健の喉にバイオリン型の剣をあてがう。

「へっへっへー」

「卑怯者！」

汚い戦法に憤った健は藤吾の脇腹に肘を当てて振りほどき、盾で殴って反撃。ひるんだ藤吾を切り上げて転ばせた。

「やるやないけえ！」

藤吾は起き上がりざまに健に一太刀浴びせる。よろめいたところに両足で飛び蹴りをかまされ地面に転がった。だがすぐに起き上がって藤吾を斬りつける。

「いよっほーい！」

健の追撃をかわし、藤吾は大ジャンプで健を攪乱。まるでこちらをおちよくるような動きと態度だ。実に腹立たしい。

「東條くん、相手を良く見て！ 動きに惑わされちゃダメよ」「はいっ！」

藤吾のすばしっこく不規則な動きに苦戦している健へ白峯がアドバースを授ける。そういえば不破も、以前似たようなことを口にしていた。息を乱すな、攻撃を読まれるぞ　と。

「すばやい相手は動きを止めればいい。けど、通じるかな」

健がしばし考えを巡らせる。やがて動きを止めたいなら凍らせれば良いという結論を出し、長剣に氷のオーブをセットした。刀身が涼しげな青白い涼しげな色に変わり、剣全体に走っているラインは爽やかな緑色に変わっていく。そして辺りに冷気が発生した。

「なにをボサツと突っ立つとる！」

健が動かずにジツとしているのを好機と見た藤吾は跳び跳ねながら急接近。目を大きく見開き下品な笑みを浮かべて空中から剣を振り下ろそうとするが。

急に涼しげな音を立てて両足が固まり、地面に急降下。「どういうことや!?」と狼狽するが、その隙を突かれ体当たりを受ける。そして立て続けに逆手持ちからの切り上げを受け再び気絶してしまふ。わずかながら、藤吾の体には氷がついていた。

「冷たいやんけこのボケがあああ！」

怒り狂う藤吾。起き上がって再び大ジャンプし、今度は足だけではなく両手も使いながら健の周囲を跳び跳ねる。

「四股をフル活用して跳び跳ねてる……まさかバネみたいになってるのか？」

「せや！ おっしやるとーりー！」

メチャメチャに跳び跳ねながら藤吾が叫ぶ。近くの横向きで適当な壁に当たるとそこから一気に跳ねて、「伸びて、ちぢんで、ボヨンーン！」と叫びながら健めがけてまっすぐに突撃。

「ッ！」

「イイヤツフー!!」

頭頂を相手に向けまっすぐ突っ込んでいく姿は、まるでミサイルのようだ。速度もかなりのもので、まるでとある野球選手のレーザービーム並だ。だがあいにく健は盾を構えており。

「必さあああつツ！ ロケットヘッドストラアアアイクツ!!」

ゴツン！ と藤吾が頭から盾の表面に激突。健にものすごい衝撃が走ったが、それ以上に痛い思いをしたのは藤吾だった。大きく弾き飛ばされて転倒した彼は起き上がったものの、頭を抱えてうずくまり「痛い痛い！ めっちゃ痛い!!」と悲痛な叫び声を上げているのではないか。

「今だ、健！ やるなら今しかないぞ！」

「そうよ、今がチャンス！ どうぞやっちゃって!!」

「よし！ ちょっとかわいそうだけど……いっちょやるか！」

「フアイトっ！」

アルヴィー、白峯、そしてみゆき。三人から声援を受け、健は藤吾にトドメを刺すべく動き出す。空気中の水分を凍らせて道を作り、その上を滑る。とにかく滑る。滑るったら滑る！

「痛いよーおかーちゃん……あ、あれ？」

未だに頭を抱えながら情けないうめき声を上げている藤吾。肌寒さを感じた彼がふと見上げると、すぐ近くには空中に出来た氷の道の上を健の姿が。

「な、なんやねんコレは！ 何がどうなってんねん！」

騒ぎ立てる藤吾だったが時すでに遅し。勢い良く滑っている健に斬られて大きく吹っ飛ばされ、そこから更に連続で斬られた拳句に地面に叩きつけられて 爆発した。爆炎が収まるとそこには、満身創痍で地面に倒れ込んだ藤吾の姿があった。

「やったわ！ 健くんが勝った！」

「へへっ。そんな、照れるじゃんかー」

安堵の表情を浮かべて佇む健。彼のうしろにはガッツポーズをとってまで喜ぶみゆきと、微笑みながら親指を上へ突き立てている白峯、そして微笑みながら見守るアルヴィーの姿があった。

「……な、なんやねんお前はあ」

信じられない。なぜこんな奴に負けたのか？ 自分は『近江の矛』の中でも新藤さんに次ぐ実力者なのに。そう思いながら藤吾が呟く。

「……悪いことは言わない。新藤とは手を切った方がいいですよ」

「なんやと？ どういうことや……」

「新藤はあなたたちを騙してるんだ。そして大阪を乗っ取ろうとしている」

「新藤さんがワシらを騙しとる……やと？」

立ち上がった藤吾が目を伏せ眉を吊り上げながら答える。直後歯ぎしりして健につかみかかり、「ふざけんな！」と罵声を浴びせた。

「そんなん真つ赤なウソや！ お前の方こそワシらを騙そうとしてるんやろ！」

「ち、違うんです。聞いてください！ 新藤の正体はシェイドで、あなた達を騙して利用してたんです」

「ウソばかりつきおって……このアホが！」

怒りに身を任せて藤吾は健を地面へ放り投げる。背面からの痛みを堪えながら健は立ち上がり、そんな彼にみゆき達が駆け寄る。

「健くん、大丈夫？」

「ま、まあね……このくらい平気さ」

心配しているみゆきにそう言い聞かせて、健は藤吾へ「信じられないから本人に直接聞いてみてください」と告げる。

「うっさいボケ！ 何様のつもりや！」

もはや聞く耳持たずか？ 健の言葉を強引にはね除け藤吾が雄叫びを上げる。

「仮に新藤さんがワシらを騙しとったとしたら、他に誰を信じろっちゅうんじゃ！！ 政治家も警察も役人も……もう誰も信じられへんねん！！」

涙を流しながら藤吾が訴える。口で言うばかりで何も行動を起こそうとしない、日本の政治家や警察へ募らせていた不満と疑念がここへ来て一気に爆発した。我慢して感情を抑えるのにもはや限界

が来ていたのだ。

「だけど……」

「まだなんか言うつもりか!? なんぼ綺麗事言っても無駄やぞ！
ワシの考えは変わらん!!」

今にも暴走しそうな藤吾を止めようとする健だったが、藤吾は健の言葉を拒絶するばかり。もはや手の打ちようがない。
それぞれ複雑な表情を浮かべる中、金属製の何かを引きずるような音とともに路地裏の方から何者かが現れる。その者は髪を黒が混じった金髪に染めた男性で、革ジャンを着ていて手には金属バットを持っていた。だが何より印象的だったのは 頭に被った三角の帽子。

「……なにあれ、イカ?」

白峯が呟く。彼女が言う通りその男が被っている三角の帽子はイカのようにも見えた。しかも厚紙とセロハンテープで作られている。もしかやイカが好きすぎて自作したのか? だとしたらかなりの熱の入れようだ。

「おーおー、お熱いこって」

「新藤さん!」

「なにチンタラやってんだ。あんな三下も倒せねえのか?」

イカの帽子を被ったコミカルな外見に似合わず、藤吾を気遣うどころか暴言を浴びせた新藤は金属バットで藤吾を殴り気絶させる。その状態で何発もバットを叩きつけて藤吾に血しぶきを上げさせた。

「キヤツ!?!」

「ひどいわ、なんてことを……」

血が出るほどまでに藤吾をいたぶるその光景はあまりに残虐きわまりない。おびえるみゆきに白峯が駆け寄り、少しでも彼女を落ち着かせる。

「役立たずが！ さっさと立ちやがれッ！」

「うっ！ ぎゃあああっ！！」

興奮した新藤はまだまだ藤吾を殴り続ける。藤吾は先程の戦いで消耗しているゆえ、体にガタが来ていた。危機を察知した健とアルヴィーは「このままじゃ死んでしまう！」「早くあやつを止めねば！」と飛び出し、新藤を止めに向かう。

「予定変更だ、藤吾！ 今後革命はお前抜きで行う」

「エッ！？」

「つまり用なしってことだ」

冷徹にも新藤は藤吾にそう告げ、不敵に笑う。そして金属バットを両手で振り上げ。

「そんなアホな！」

「悪く思うな。お前みてえな出来損ないは、『近江の矛』には必要ないんでな。……死ねえ！！」

目を見開いて笑う新藤が容赦なく金属バットを振り下ろす！ 藤吾に死刑宣告が下されようとした瞬間 盾を構えた健が間に割って入り、藤吾をかばった。

「邪魔すんじゃねえ！」

「だったらこんなことすぐにやめる！」

「このヤロウ……！」

邪魔された新藤は盾を構える健にも怒りの矛先を向けるが、そんな彼に真横から アルヴィーがドロップキックをかました。「うぎゃあっ」と情けない声を上げながら新藤は突き飛ばされた。

無事に着地したアルヴィーはいい仕事をしたような清々しい表情で一息つくと、健たちの方を振り向いて凜々しく微笑んだ。

「あ、あんたら……なんでワシを？」

「すまんな、すぐに助けてやれなくて。しかしお主も良く耐えたものだ」

アルヴィーが優しく語りかける。つい先程まで敵同士だったにも関わらず彼女や健たちの姿を見て一筋の希望を感じとり、絶望を感じていた藤吾の表情には笑顔が戻った。

すさんだ空気が一転して和やかになるが、向かいで地面に倒れていた新藤はそれを良しとせず唸り声を上げながら立ち上がった。口から血 いや、真っ黒な墨を吐きながら。

「……墨？ やっぱイカだったのね」

白峯がそんな新藤の姿を見て呟く。イカの帽子を被っている上に墨まで出されたら、そう思ってしまうのも不思議ではない。ただ、吐しゃされた墨で作られたイカスミスパゲッティを食べるのは少し気が引ける。

「ち、ちげえよ。コーラを飲みすぎただけだ……」

ゲホゲホ、と咳き込む新藤。見苦しい言い訳をするが、口から出

たのは墨や咳だけではなく紫色の血もわずかながら混じっていた。
こうなればもはや言い逃れは出来ない。

「……見苦しいのう」

「なんだと？ 俺の言うことが信じられねーのか!？」

呆れたような冷たい視線を向けながら、アルヴィーは地面についた鮮血を指ですくう。見事なくらい、紫色だ。ブルーベリー味がグレープ味の何かを吐いたようにも見えるが、紛れも無くこれは血液である。

「なら、これについてはどう誤魔化してくれるというんだ」

「くっ……!」

歯ぎしりする新藤。怒りが頂点に達したか雄叫びを上げると体が液化化し銀ピカのイカのような怪人の姿に変貌した。イカの怪人の姿となった新藤を見て藤吾は、「え!？ ええっ!？ なんなんや、いったいどういう事なんや?」とうろたえる。

「アルビノドラグウウウウウンツ!! この裏切り者がああああッ!!」

「ッ! しまっ……」

正体を現した新藤は怒りの矛先をアルヴィーに向け 触手を伸ばして彼女に強く締め付ける。首や胸にしっかりと巻きつけ、グイグイと締め付けて苦痛と辱めを与える。

「アルヴィー!？」

「そ、そんな……」

緊縛され悲痛な叫びを上げるアルヴィーを見た一同に悪寒と衝撃が走る。とくに彼女との付き合いが長い健とみゆき、白峯は強いシヨックを受けていた。新藤 もといバイキングラーケンにアルヴィーを人質をとられたいま、健たちに勝機はあるのか？

「ゲーツソツソツソツソ！ 動くな！ 動いたらこのアマを窒息させるぞー！！」

EPISODE 130：スーパージャンパー（後書き）

久々の？ 【シェイド図鑑】

バイキンググラーケン

新藤剛志の正体であるヤリイカのシェイド。

ヴァニティ・フェアに所属している上級のシェイドであり、性格は残虐非道。

使命のためなら手段を選ばず、虐殺から略奪まで何でもやる。

槍などを自在に操るほど槍術や棒術に長けているにも関わらず、口から吐くイカ墨爆弾や触手による締め付けや武器の強奪などの卑怯な手段を平気で使う。

EPISODE 131：イカがわしいやつ

「うっ……うああっ」

バイキンググラーケンによりアルヴィーが捕らえられてしまい、彼女の体には触手が巻き付けられた。触手は胸などに巻き付いて彼女から自由を奪い辱しめを与えている。流石の彼女でもこのままでは非常にまずい。

「アルヴィーッ！」

「グへへへ……離してほしけりゃ武器を置きな！」

汚ならしくバイキンググラーケンが笑う。悔しいがここは指示に従わなければ、と武器を地面に置こうとする健だったがそんな彼の耳に白峯が近寄り何かをささやく。内容を理解した健は「それいいですね！」と笑みを浮かべ頷いた。

「……わかった。武器は捨てる。アルヴィーを離してくれ」

「へへ、なかなかお利巧じゃないカ。そうだ。それでいい」

バイキンググラーケンの指示に従って健は長剣と盾を置いて降伏する　と見せかけ

「えーいッ！」

「ゲソッ!？」

突然長剣をバイキンググラーケンに投げつけたッ！ その衝撃でバイキンググラーケンは怯み、隙を突いてアルヴィーは触手を豪快に引

きちぎって抜け出す。周囲にはちぎられた触手と一緒に紫色の血も飛び散った。

「や、ヤロウ……ハメやがったな」

「よく言うよ、大阪のみんな騙しといてさ！」

怒るバイキングラーケンを健は盾で殴り、それに続いてアルヴィーはパンチやキックを入れる。下卑れたうめき声を上げながらバイキングラーケンは後ずさりしていく。

追い詰められたかに見えたが、実は彼にとっては嬉しい誤算があった。それは、先程健がバイキングラーケンに投げつけた長剣・エーテルセイバーだった。

「やりやがったな……だが、天は俺を見離しちやいなかった！」

「なぬ……？」

「わざわざ俺様のもとに投げしてくれるたあ嬉しい誤算だったぜえ！」とバイキングラーケンが下卑れた笑いを浮かべる。彼が示した方向には、地面に突き立てられたエーテルセイバーがあった。彼はこれを引き抜き、形勢逆転を狙っているようだ。

「しまった……そういうことか！」

「きつと私のせいだわ。東條くん、ホントにごめんっ！」

「い、いやいいんです白峯さん！ あそこでああしなきゃアルヴィーを助けられなかった」

「フン！ なにをゴチャゴチャと……」

あわわ、と慌てながら謝る白峯を健がなだめる。そんな彼らを尻目にバイキングラーケンは「まあいい、どちらにせよ俺の勝ちだアアア！」と雄叫びを上げながらエーテルセイバーを引き抜いて

握ってしまっが

「……あり？」

重たい。すごく重たい。とにかく重たい。とてもじゃないが持たたものではない。だが自分が振り回せないのに東條が振り回せるのはおかしいと、バイキンググラーケンは長剣を振り回そうとするが重たくてそんなことはできない。むしろその逆で剣に振り回されているような感覚だ。

「く、くそう！ どうなっただこのナマクラはああああ！！」

バイキンググラーケンが怒鳴る。いきり立ち刀身を殴ったがするといっただいどうしたことが、彼を拒絶するように剣全体が激しく光り出しバイキンググラーケンは感電。黒焦げになった拳句エーテルセイバーを地面に落つことした。

「……い、今のは？」

「よくわかんない。けど、やるなら今しかないわよ！」

「はいっ！」

「健、そうと決まれば反撃だ！」

何が原因でバイキンググラーケンがああなったのかわからなかった健は白峯にその理由を聞く。だが彼女にもそれはわからなかった。しかし、今はそんな場合ではない。反撃しなければならぬ。アルヴィーに急かされながら健はエーテルセイバーを拾い、バイキンググラーケンを斬る！

「今宵はパワフルに行くぞ！」

彼だけでなくアルヴィーも両手をいかつい龍の手に変え、その巨大な鋭いツメでバイキンググラーケンを切り裂く。

「ぐへあゝつ！ な、なんなんだお前らあ！」

「アルバイトだ！ 市役所勤めのね！」

うろたえるバイキンググラーケンを、健は大きく横一文字に薙ぎ払う。よるめいた隙に剣を軸にして蹴りを一発。更にそこから片足を踏み込んで力強く剣を振り下ろして両断。いつも手堅く戦っている健にしては大胆な戦法だ。

「そしてその同居人だ！」

「ゲソおー!!」

立て続けにアルヴィーがツメで切り裂く。逆立ちしながらのキックやサマーソルトも決まった。流石に長い間に一緒に戦ってきただけあって、健とアルヴィーの息はピッタリ。連携もバッチリだ。二人の絶妙なコンビネーションを前にバイキンググラーケンはどんどん劣勢になっていく。

「野郎おおおゝつ!!」

逆境は超えなければならぬものだ。得物である穂先がイカの腹の形をした槍を取り出し、バイキンググラーケンは思い切り振り回して突風を起こす。健は盾を構え、アルヴィーは地面にツメを突き立ててふんばって耐えた。力任せにして振り回したからか、バイキンググラーケンは疲れた。だした。

「今だ、健！」

「よーし!!」

だが二人は容赦しない。まず健がバイキンググラーケンに切りかかり、次にアルヴィーが飛ばされてきたバイキンググラーケンにツメを叩きつけて吹き飛ばす。

次に健がまた吹き飛ばし　これをひたすらに繰り返し、最終的にひるんだバイキンググラーケンに健がジャンプしながらの唐竹割りを命中させてトドメを刺した。そして、バイキンググラーケンは大爆発。

「ぐぎゃーっ！　い、いでええええええッ」

爆風の中からバイキンググラーケンが転がり出す。そのまま電柱にぶつかり、痛がりながら立ち上がった。更に右腕に開いた傷口からどくどくと血が溢れており、それを押さえている。

「どうだ、参ったか！」

「ち、ちきしょう！　なんでこの俺様がお前らなんか……」

険しい表情で剣を向ける健。両腕を元に戻して腕を組むアルヴィー。そして悔しがるバイキンググラーケン　完全に彼の負けだ。片目をつぶって歯ぎしりしながら二人を睨み付ける。だが彼は一瞬二ツと笑い……

「だ、だが社長にこれ以上無いくらいイイ土産ができた。ここは……逃げるが勝ちイイイイ！」

ゼエゼエ、と息を切らしながらバイキンググラーケンが後ずさりする。そして口から墨爆弾を吐き出して爆風を煙を巻き上げ、その隙に逃亡。これで健たちは彼を完全に見失ってしまった。

「やばい、逃げられた……！」

「ううむ……厄介なヤツを取り逃がしてもうたな。今日のところはひとまず引き返そう」

二人がみゆき達の方へ下がる。みゆきは二人を見ると、「大丈夫？ ケガとかしてない？」と声をかけた。もし怪我をしていたら食事に行くどころではなくなるし、手当ても必要になる。もし大丈夫ならその必要はない。

「このくらい大丈夫さ。包帯巻いて寝たら治るよ！」

「だって、みゆきちゃん。これだけ元気だったら心配いらないわね」
「……はい！」

「それじゃ、駐車場いこっか」と声をかけ白峯は健たちと一緒に歩き出す。藤吾も食事に誘おうとしたが、彼は断った。理由はただひとつ 新藤の正体を知ってしまった以上他の者にも知らせなければならなくなったからだ。もちろんすぐには信じてはもらえないだろう。去り際に彼は健たちに告げた。

「待ちいな。あんたらどうせ、新藤さん止めに行くんやろ？」

「え？ はい、そうですけど……」

「ほんなら、ええこと教えたる。あんたら襲ったお詫びや」

彼が言う「ええこと」とはいったい何なのだろう？

EPISODE 132：社長へのみやげ

「むう……そう来るか。なかなか興味深いな」

その頃、雷雲に覆われたどこかの岩山にそびえ立つ古城　ヴァ
ニティ・フェア本部。その玉座で頬杖を突き、何らかの書物を誰か
が読んでいた。

ヴァニティ・フェアの『社長』である男　甲斐崎拓海だ。彼も
他の幹部や構成員と同じくシェイドであるが、その正体は謎のベ
ールに包まれている。彼の真の姿を知るものはほんの一握りしかいな
い。

「社長……！」

そこに叫び声を上げながら新藤こと　バイキンググレーケンが駆
け込んできた。負傷した片腕には包帯が巻かれ、紫の血が少しだけ
滲んでいる。

頭には同種族であるイカを愛好するあまり自作したイカの帽子を
被っていた。銀ピカの三角帽なのでパーティーにも使えそうだ。イ
カにできてタコにはできない芸当である。

「新藤か。何の用だ？　途中経過ならこの前報告を受けたが……」

「そ、それが耳寄りな情報があるんすよ！」

「なに？　どういうことだ、もっと近くに来い」

「ハイっっ」

甲斐崎に言われるまま新藤は彼に近づく。膝を突いて甲斐崎の耳
元で東條健と交戦したこと、彼の武器を奪おうとしたが自分には

重たすぎて使いこなせなかったことを伝えた。用件を確かに伝えた新藤は甲斐崎から少し離れ、そこでひざまずく。

「そうかそうか。となれば、アレはやはり帝王の剣に違いないと思っただな」

「ええ！ 辰巳さんから聞きましたが『帝王の剣』っていえば世界を支配する資格があるものだけが握れるっていう伝説の剣！ この俺が振り回せなかったならそうに違いないと思ったんです」

「なら聞くが……」

興奮ぎみに新藤が語る。『帝王の剣』とは、かつて世界を怪物から守り国を築いた英雄が振るっていた剣である。神にも匹敵する力を持った伝説の龍・黄金龍から『月鏡の盾』とともにその剣を授かったと伝えられている。

だが、その英雄は王となつてから屈折して力に飢えた性格となり他国からの略奪と逆らうもの達の虐殺を繰り返した。やがて年老いて死ぬことを恐れた彼は黄金龍に己を不老不死にするよう命じたが そのような願いが聞き入れてもらえるはずはなかった。

要求を拒まれたことに激しく憤った王は黄金龍と刺し違え、儚い最期を遂げたという。当たり前だが当事者はもういない。もしかしたら『そのときの記憶がない』だけで本当はその時代にいたのかも知れないが。

「新藤、お前……そう思ったのなら何故持ち帰ってこなかった」

「え？」

「仮に『帝王の剣』ならそのまま手に入っても同然だったというのに」

「で、ですけどあつしには重たすぎて……」

「この愚か者めが！」

言い訳する新藤に甲斐崎が手をかざすと電流がほとばしり 新藤を痛め付けた。基本的に冷静沉着で何事にも動じない甲斐崎だが、このときばかりは怒りを抑えきれなかった。

「重たいぐらいでなんだ？ 少し辛抱すれば済む話だろう」

「いや、ホントに冗談抜きですわ……」

「お前には呆れがついたぞ、新藤。そんなこともできないヤツを幹部に昇進させるわけにはいかん。おまえのようなヤツはクビだ」

「そ、そんなあ！」

「嫌なら汚名を返上してみせろ。今回の作戦を成功させてな！」

甲斐崎が不甲斐ない新藤へ冷たく、厳しい言葉を次々に浴びせる。「早く結果を出してこい」となじり、彼は玉座から新藤をつまみ出した。

追い出された新藤は苦い顔を浮かべながら廊下を歩き、やがて自販機がある休憩室に入り込んだ。ここは彼のみならず他の社員の憩いの場である。適当な場所に座り、コーヒーの入った紙コップを片手に新藤はうなだれていた。

「新藤、君にしてはずいぶん弱気じゃないか？ うん？」

「だ、誰だ？」

そんな新藤に突然誰かの声がかかる。見上げるとそこには、頭に包帯を巻いた男の姿があった。髪は黄褐色で、髪型は前髪が右に寄った外ハネの短髪。言うなればビジュアル系だ。服装は水色のスーツの上下に赤みがかった紫のシャツ、クリーム色のネクタイ。派手で少しけばけばしい色合いだ。

外見から察するに、年齢は三十代手前か半ばぐらいと思われる。三十代というには比較的若々しく、二十代にしてはやや老けている。そんな感じの男だった。

「ははは、わからんか。ま、顔に包帯ぐるぐる巻きしてないからな」
「え？ ってことはあんた、辰巳さん？」
「ああそうだよ。君の上司の辰巳だよ」
「えっ、えっ！ なんなんスかそれ……」

辰巳　と呼ばれた男が気さくに笑う。彼、辰巳隆介たつみ りゅうすけはこのヴァニティ・フェアの幹部のひとり。人当たりがいいが神経質で嫌味な性格であり、やや直情的な一面もある。極度の寒がりであり普段は顔を包帯で隠しコートやマフラーをいくつも重ね着しているが、何故かこの日は素顔を晒していた。

「それに辰巳さん療養中じゃ……」

「いいんだ、いいんだ。だいたい治ったから。おでこの傷はまだだがね」

「ってことはリハビリがてら様子を見に来たってことですかい？」

「まあ、そんなところだ」

「そうですね。ところで聞いてくださいよー、社長ったら今度失敗したら俺をクビにするってすごい剣幕で言ってきました」

「おろろ、そりゃかなわないな。まあ当然だ、今回の大阪侵略作戦は我が社の威信が懸かっているからな。それだけ大事だし失敗は許されないってことだ」

「でも俺やりますよ！　なにしろ出世がかかってんですからね」

「ハハッ、いいことだ。そのやる気をどんどん活かして登り詰めていかんとな」

「もちろんでさあー！」

「そうだよ、その意気だよ新藤くん！　私も陰ながら応援してるぞー」

コーヒを飲みながら、辰巳と新藤は話し合う。他愛ない世間話

や単なる雑談、仕事の話など様々だ。だが辛気くさくなつたか辰巳が途中で話を切る。それまで穏やかだった顔も急に真剣なものに変わった。

「……なあ、新藤くん。君にひとつ、いや三つほど言っておきたいことがある」

「な、なんすか？」

「一点目、人間をあまり見くびるな。確かに奴らは非力だし頭も悪いが、少しでも誰かを思いやる気持ちがあればいくらでも強くなれる。仲間がいれば更に強くなるから気をつける」

「は、はい」

「二点目、今回の作戦は必ず成功させる。もう何度も言っているが、今回の作戦には我々の威信とプライドがかかっているんだ。失敗は許されんぞ」

「はいーっ」

「そして三点目……この戦いが終わったら、どっかの居酒屋で一晩飲み明かそう」

「えッ？」

「本当は前祝いで飲みを誘おうと思つてたんだが、そんな時間はないだろうしなあ」

残念そうに辰巳が言う。うわべだけでも人当たりをよくしておきたいからか、それとも自分自身のイメージアップをしたいからか、彼は部下や同僚とのスキンシップを欠かさない。とくに誰かを飲みを誘うのが好きなようだ。場合によるが、基本的に彼が部下におこるらしい。

「まあ、そんなところだ。わかつたら大阪に戻れ」

「はい、ただちにッ！」

「それともう一点……」

そう言って辰巳が新藤に顔を寄せる。まだ何か言いたいことがあるようだ。

「……人間の中でも、とくに東條健には気をつける」

「な、なんですか？」

「知らないのか？ ヤツは8年前に死んだ、あの東條明雄の息子だ。凄腕のエスパーの息子だから……当然ながら強い」

「は、はあ……」

「私も一度彼と戦って痛い目を見たからね。君も彼と戦うときは決してぬかるんじゃないぞ」

辰巳から再三の忠告を受け、新藤は期待に答えるべく出撃する。

廊下で彼を見送ると、辰巳は来た道を戻っていった。「何もなかったらいいんだが」と呟きながら。

EPISODE 133：ようやく昼食会

あのあと健たち四人は何をしていたかというところ、みゆきが怪我をした健に応急措置を施してから四人で食事をしに向かっていた。食事をとりに白峯の車が向かった場所は『円亀』といううどん屋。しかもただのうどん屋ではなく、コシがあつておいしい釜揚げうどんで有名な店だ。その為か来客からの人気は非常に高く、全国にチェーン展開しているほど。

「着いたわよ」

「おーっ！　ここですか？　すごくおいしそう！」

先に車を降りた白峯に続いて健とみゆき、アルヴィーも続いて降りる。ちなみに宍戸は来ていない。まだ不破の病室にいるか、もしくは警視庁のシェイド対策課本部に帰ったかだ。もしかすれば対策課の大阪支部に行ったのかもしれない。

「ここ、セルフサービスなのかな。何にしようかなあ」

「かけうどんにするのも天ぷらうどんにするのも、みんなの自由よ」

「うし！　じゃあ選ぶぞー」

この店はセルフサービスだ。天ぷらや稲荷寿司等のおかずやネギ等の味付け小物が陳列されたカウンターには客がズラリと並んでいる。

どうやら先にうどんをどんぶりに入れてもらい、そこで熱いか冷たいかを決めて該当するおつゆを入れてもらってから自分で味付けしていく形式になっているようだ。なお、一番人気のおかずは鶏の

天ぷららしい。

「いらつしゃいませ！ おつゆはアツアツですか？ それとも冷たいのにしますか？」

「んー……アツアツで！」

気さくな店員のおじさんに注文を聞かれた健がそう答えると、「わかりました、少々お待ちください！」と店員のおじさんが言った。先にもらっていたうどんが入ったどんぶりを渡すとすぐに熱いおつゆが入ったので、今度は小皿をトレイに乗せておかずや味付け小物などをとりに行く。

「よし、これにしよう！」

見た感じウマそうだった鶏の天ぷらとちくわの天ぷら、定番のいも天をとって健は先に進む。これだけあれば腹も膨れるだろう。

代金を払い、調味料として少し七味唐辛子をかけてネギも多めにに入れて健はカウンターを出た。空いてる席を探していると突然「こちよ〜」という声が聞こえてきたので振り向くと、その方角には既にうどんをテーブルに置いて待っている白峯がいた。

「お早いですねえ白峯さん！ ホントびっくりしちゃいましたよ」

「ウフフ。キープしておいたらあとで困らないって思ってたね」

どうやら彼女は先にうどんをとって席をキープしてくれていたらしい。白峯と同じ席の端に寄って待っていると、やがてアルヴィーとみゆきがやってきた。二人とも具材にこだわったメニューをトレイに乗せていた。

「ほう、お主は麺1.5倍でおかず多めにしたのか」

「はーん。さてはガツツリ行くつもりね」

「うん。なんかさつきからおなか空いちやってサ……」

「さて、全員揃ったことだし……そろそろ食べない？」

これで一同勢揃いである。みな腹が減っていて食べるのをこれ以上我慢できないはず。白峯が催促を入れると三人とも目を輝かせて「もちろん！」と答え、返答を聞いた白峯は「じゃ、手をあわせましょ」と両手をあわせた。それを合図に他の三人も手をあわせ。

「いただきます！」

危うく中断されかけた食事が今、始まった。各人、うどんに天ぷらを乗せたりザルに入ったりうどんをおつゆに浸けたりとそれぞれ違う食べ方で楽しんで味わっていた。

うどんとおつゆをすすむ姿は如何にも美味しそうで、見ている方も早く食べたくなくなってくることうけあい。うどんはまさに日本が誇るソウルフードといっても過言ではない。

「ごちそうさまでしたーっ」

「ここ、おいしかったねー」

「また来てみたいのう」

「みんな満足できたみたいね。私も嬉しいわ」

そして完食。寂しいが、楽しい時間というのはあつという間に過ぎてしまうものだ。店から出て駐車場に停めてある車まで戻り、白峯がロックを外して運転席に乗り込んだのを合図に他の三人も興奮冷めやらぬまま車に乗る。白峯一行が乗った車はうどん屋をあとにして車道へ飛び出た。

「しっかし、今日は大変な一日だったなあ」

「え？　なんでそう思ったの？」

「僕たち、不破さんのお見舞いに行っただけなのに藤吾って人に襲われるし、『近江の矛』リーダーの新藤とも戦うことになっちゃったし……」

訓練に負傷した不破の見舞い、その帰りにみんなでどこかにウマいものを食べに行くつもりがいろいろと邪魔が入り　大変な一日であった。そう愚痴る健だが別に悪いことばかりではなく、良いこともあった。新しい出会いもあったし、食事にも無事にありつけたのだ。

「果たしてそうかしら？　良いこともあったじゃない」

「え？」

「ちゃんと食事はとれたでしょ。あと穴戸さんとも知り合えたし、ね」

「そ、そうですね。ははは　」

くたびれた健を励まそうと白峯が言葉をかける。ややぎこちないながらも彼女の^{うつく}ましい言葉に答えるべく健は笑った。

「それよりも　藤吾殿が教えてくれたことが気になるな」

少し和んできたところでアルヴィーがそう言って空気を変えた。

祇園藤吾が去り際に『ええこと』と称して教えてくれたことが気になっっていたようだ。その『ええこと』とは　？

「そつえば言ってたね。土日に府知事に奇襲をかけるらしいから、新藤を止めるならそのときがチャンスだって……」

「府知事って橋上さんだよな？ あの人がいそうな場所ってどこなんだろっ」

みゆきと健が首をかしげる。橋上はしがみ というのは現在の大阪市の府知事であり、フルネームは橋上鉄郎てつろうという。

元々、彼はお笑いタレント出身でありその事もあって気さくで親しみやすい人柄で知られているが、反面大阪の発展のためなら迷わず強行手段に出る過激な性格でもあった。その性格から彼を快く思わないものも多く、現に『近江の矛』メンバーは全員が橋上に対して不満を抱いている。

「そこが問題よね。どこにいるかなんてすぐにはわからないわ。役所か会議場か、それか自宅か……」

「居場所が特定できない以上、下手には動けんだろっし……まったく困ったものだ」

「じゃあさ、先に敵のアジトに乗り込んで叩き潰すとかはどうかな？」

「いいアイデアだがそれはできぬ」

「な、なんでさ」

「藤吾殿から『近江の矛』がアジトにしている場所を聞いていないからだ」

「そうだった……」

困り顔で白峯が橋上が行きそうな場所を挙げる。その後ろではアルヴィーがため息をついていた。そんな中で健が『先に敵のアジトに乗り込んで壊滅させる』という案を思い付くも、肝心の敵のアジトがどこにあるかがわからないため却下されてしまった。

やっと敵の正体をつかめたというのにこうも道が塞がれてしまうと、何よりも先に理不尽さを感じる。かといってこのまま大人しくしている場合でもない。車内で話し合った結果、健たちはひと

まず土日になるまで待つことにした。

あれから京都まで車で送ってもらい白峯やみゆきと別れた健とアルヴィーは、駅前にあるアパートを目指して歩いていった。食後の運動としてウォーキングを楽しみ、途中のコンビニで炭酸飲料も買ってやっとこさアパートに辿り着く。

「ただいまーっ」

「まり子、帰ってきたぞ〜」

だが玄関の扉を開けて中に入ると、そこにあったのはいつぞやのように蜘蛛の巣がそこら中に張られた 薄暗く不気味な光景だった。まるでおばけ屋敷のようだ。

「え……ちょ、え〜っ！ なんだコレ……また蜘蛛の巣だらけだ。僕たち、黄金のスタルチュラに呪われたの？」

「スタルチュラを倒してしるしを手に入れるようなことはしとらんが……」

「おとなのサイフと巨人のサイフ、まだもらってないぞ！」

「もだえ石もまだだ……」

変わり果てた部屋を見て話し合っていると、誰かが二人の背後に手を置いた。壊れかけのゼンマイ仕掛けの人形やロボットのようにたどたどしく、首をガタガタ震わせながら振り返るとそこには。

「う〜ら〜め〜し〜や〜」

「ひえっ」

「で……で、で」

いた。

「出たああああッ!!」

確かにそこには、白い布を被ったおばけがいた。目尻が垂れ下がった悲しげな目付きとなにかを訴えるような悲痛な表情が不気味極まりない。

このおばけは他にも「でろでろばあ」と叫んでおり、抱き合いながら恐怖に顔をひきつらせている二人を更にビビらせた。

が、何を思ったかおばけは部屋の電気を点け、「二人とも遅すぎい」と気だるげに呟いた。そして白い布を脱ぎ捨てると 中から青紫の髪に緑色の瞳をした色白の幼い少女が現れた。まり子だ。

「ま、まり子ちゃんだったのか」

「あれからずっと待ってたんだけどね、待ちきれなくなってつい蜘蛛の巣はっちゃったの。ごめんちゃい」

「えー……ま、いっか」

「てへっ」とウィンクして可愛らしく謝るまり子。勝手にこんなことをされたら本来ならばゲンコツでは済まない話だが ここは彼女がどんな気持ちで待っていたかも考えて、健はまり子を許してやることにした。

「ところでさ、さっきの話だけどさ……もだえ石つてリメイク版だとひびき石に変わってなかったっけ」

「な、なに？ 健、それは本当なのか？」

「うん」

「そうか……少し残念だの」

「僕もそう思う……」

EPISODE 133…よつやく昼食会（後書き）

どうも。SAI-Xです。

ぶつちやけた話、今回の話は丸亀ネタと某府知事のねたをやりたかったただけだったり…。

でも丸亀っておいしいですよ。何回か行った事ありますが、機会があればまた行ってみたいです。

さて、人気投票は相変わらずアルヴィーがTOPです！

正直ここまで人気出るとはおもわなんだぞ……

EPISODE 134：お役所での一幕

翌日、健のバイト先。

「はあ〜……また大変なことになっちゃった」

昼休みのことである。弁当を食べ終えて一服していると、先日の一件を思い出して健はため息をついた。『近江の矛』のリーダーと新藤は人間に化けたシェイドであり、

政治や警察への疑念や不平不満を募らせた大阪府民たちを扇動し、大阪府を混乱に陥れてそれに乗じて大阪を侵略しようとする目論んでいた。奴は使命のためなら手段を選ばない男であった。そんな新藤が次に狙おうとしているのは 府のトップに立つ男、橋上府知事。

「橋上知事ってえらい人でしょ？ そんな人が僕たち庶民の前に簡単に姿を見せるとは、そうそう思えないんだけどなあ……」

「あら、独り言かしら？」

「はっツッ！！」

愚痴をこぼしている傍ら、金髪碧眼の若い女性に声をかけられた。この役所に務めているOLの ジェシーだ。

彼女は日系ハーフで、噂によれば元々は資産家の娘だったらしい。良いところのお嬢様でありながら庶民の暮らしに憧れて、色々あつて今に至るのだという。

「じえ、じえ、ジェシーさん……もしかして聞いてました？」

「聞いているも何も、東條さんは声が大きいから思いきり聞こえてましたよ〜」

「は、はずかしーっ」

健が顔を真っ赤にする。ジェシーだけでなく、同じくOLで陽気な姉御肌の浅田と少し控えめなメガネっ子の今井も続けて現れた。

「げげ、浅田さんに今井さんまで！」

「ちよつちよい、そんなに驚くことないでしょー」

「そ、そうですね。私はともかく、東條さんはしっかりしないと」

「は、はい。キモに銘じておきます」

「……でさ、東條くん」

「な、何でしょうか？」

「あたしら、聞いてないようでも聞いてたわよ。あなた、橋上知事に会いたいみたいね？」

少しにやけながら浅田が健に訊ねる。「あ、あーと、うーんと、えーっと」と戸惑いながらも、健は「……そうですね！一度ぐらいは橋上府知事のお顔を見てみたくて」と答えた。

「なあある……やっぱりね。確かにあの人、あたしら一般市民からすれば雲の上の存在だもんね。いっぺんぐらい拜んでおきたいっていうのもわかるわ」

「で、ですよね！橋上さんテレビじゃしょつちゅう見かけますけどリアルじゃ中々お目にかかれませんし」

「そんなあなたに耳寄りな情報があるわ。……今井さーん！」

浅田に声をかけられ「は、はーいっ」と今井が返答する。何か用意してるのか、と淡い期待を抱く健。今井がそんな健に持ってきたのは一枚の広告だった。今井は健に広告を渡し、健はそれを読み始める。

「……う、これは」

「はい。それにも書いてある通り、今週の土曜日に橋上さんが大阪駅で演説するそうですよ」

「な、なるほど……ありがとうございます!!」

今週の土曜に橋上府知事が駅前で公演する。今井からそう教えてもらった健は彼女に礼を告げた。もちろん浅田やジェシーへの感謝の気持ちも忘れてはいない。

「会いに行くならそのときがチャンスよ。人がいつぱい来るし気温もだいぶ高くなると思うから、水分補給を忘れずにしてくださいね」

「はいっ！ ただちに!!」

「ハア……」

健が若くてきれいなOL三人に囲まれ華々しい思いをする中、ため息混じりにそれを見つめている中年がひとり。係長のケニー藤野だ。中年ではあるが、見た目は比較的若々しく黙っていれば十分かつこよかった。そう、黙っていれば。

「とーじょーサン、みんなみんなとーじょーサン……ミーの名前は中々出ないネ。嗚呼、悲しきカナ、これもモテナイ中年の儂いデステイニーか……」

カタコトで哀愁たつぷりにケニーが呟く。バックには悲壮感漂うBGMが流れていた……気がした。

「……係長、バラードとブルースだったらどっちが聴いてみたいか

ね？」

ケニーの背後で演歌風のBGMを流していたのは、副事務長の大杉だ。五十代で見た目はいかにも陽気で優しいおじさんである。その中身も見た目通りのよき上司だ。

「どっちもノーセンキュー……」

「あら、そりゃ残念だ」

そんな大杉の労いもむなしく、ケニーはぐったりと机に突っ伏した。童貞を捨てきれず魔法使いになってしまった彼に、果たしてモテ期は訪れるのだろうか？

EPISODE 135：戦いに備えて

「ただいま〜っ」

「おお、お帰り。早かったのう」

「あっ！ お兄ちゃん！ おつかれ〜っ」

「一服してからごはん作るから、それまでちょっとだけ我慢してね」
「はい」

あのあと健はとくに問題も無く自宅アパートに帰ることが出来た。バイト先でいつも親切にしてもらっているOL三人娘から週末に橋上府知事が大阪駅前で演説をするという情報を教えてもらえた彼は、打倒新藤の為に少しでも戦力を集めようと思い、ある行動に出た。それは、自分をライバル視しているエスパー・市村に協力を呼びかけることだ。

帰ってくるなり腹を空かせて待っていたアルヴィーとまり子に食事を我慢するように言った健は手洗いうがいと着替えを済ませ、以前市村と交換し合った電話番号を入力し電話をかける。

(これであつてたかなー……)

「あれ？ 何やってるの？」

「ん……ああ、ちょっと市村さんと電話で話したい事があるんだ」

「そうなんだ」

上目遣いであどけなく聞いてきたまり子へ健が微笑みながら答える。一見すれば明るくかわいらしい少女だがその内面には恐るべき残忍性と身も凍るような冷酷さが潜んでいる。下手をすれば殺される。

不破が何度も言っていたように今後は彼女の動向に気をつけたほうがいいのだが、今のところとくに害はない。妙に警戒する必

要はなさそうだ。妙にキャラを作ったような言動が気になるところではあるが。

「ちゃんとかかるかなー」

「今日の映画ごつつオモロかったなあ〜！」

「うんうん！ レッドが命懸けで敵のボスからみんなを守るシーンとかめっちゃカッコよかった！」

「せやるお？ わしもう3回ぐらい見に行ってるけどあそこが一番燃えるわ！」

「ウチもそう思う〜！」

「どや、たまにはヒーローものも悪くないやろ？」

「うん！ また連れてってな！」

「モチのロンや！」

「もぉー、ふーるーいー！」

「かんにん、かんにん」

その頃、市村は古巣である大阪でガールフレンドの逢坂アズサと楽しいひとときを過ごしていた。誰にでも息抜きして楽になりたいという気持ちがある。彼も今日はたこ焼き屋を休んで一日中アズサと遊んでいた。

それだけでなく、長いこと会っていない実家の両親にも顔を見せに行ったり世間話をしたりもした。映画も見れたしおいしいものも食べられたしで充実した一日であった。そんな彼のもとに一本の電話が入り 携帯電話が振動した。

「ん……」

「イツチー、どうしたん？」

「電話や。東條はんからやな」

「東條はんって確か……イツチーの友達やったっけ？」

「せや。実際は友達っちゅうかライバルやな」

携帯電話を手にしながら市村が答える。ちなみに彼の携帯電話の色は、ハデ好きな彼らしくゴールドだ。メーカーはS O C O M Oで家族間でのメールや通話が無料らしい。画面を確認すると、電話をかけてきたのは東條健だった。いったい何があったんや、と、彼は電話に出る。

「もしもし、市村やけど」

「あ、市村さんですか！？ いやあよかった繋がって！」

「どないしたんや、そない慌てて？」

「聞いてください！ 橋上府知事が土日に駅前で演説するらしいですけど知ってましたか？」

「ああ、知つとるで。それがどないした？」

「新藤率いる『近江の矛』がそのときに橋上さんに奇襲するらしいんです！」

「説明ご苦労さん……って、な、なんやてエ!?!？」

あの『近江の矛』がよりによって大阪の政権のトップである橋上府知事を狙っている。最初はすました顔で聞いていた市村だが、東條からそう聞くと一転して驚きを隠しきれなくなった。動揺したまま彼は「そ、それホンマかいな!?!？」と訊く。

「ホントです！ とにかく、新藤のやつは橋上さんを襲って殺害するつもりです」

「やりすぎちゃうんかソレ！ 連中なに考えとんねや！ そんなこ

とされたら大阪全体が混乱してまう！」

「そういうことですから土日に備えて準備をしておいてください。不破さんが新藤にやられた以上、あなた以外に協力をお願いできる人がいないんです。どうかお願いします！」

「おっし、わかった。土日やな！ 任しとき、あのアホどついたるさかい！」

「本当ですか？ ありがとうございます！！」

「では当日はよろしくお願いします！」と健は市村に礼を告げ、電話を切った。彼と市村は互いに馴れ合うような関係ではない。お互いに切磋琢磨しあうライバルだ。とはいえ、そんな彼が形相を変えて必死に自分に協力を要請していた以上断るわけにはいかない。東條の言葉から『人々を守りたい！』という意志を感じ取った市村は、彼に力を貸してやることに決めた。

「……なんて言っってはった？」

「『近江の矛』っちゅうアホらしい連中がおるやろ？ あいつらよりによって橋上のおっちゃんハジいて革命起こそうとしとるらしいわ」

「か、革命！？ でもハジくって殺すってことやんな。それは流石にアカンのとちゃうん？」

「せや。正直わしも橋上はんにはええ印象ないねんか。せやけどあのアホどもほど極端やないし、殺そうとも思っへん」

「え？」

「うん？ ちょっと難しかったかいな」

戸惑うアズサ。そんな彼女に市村は「要するにわしは『近江の矛』っちゅうアホの集団から橋上はん守ろうと思っとうとるっちゅうことや」と優しく語りかけた。そっか、とアズサは笑顔を浮かべて納得する。

「……確か土日やったね？」

「ああ。今日は水曜日やさかい、まだ時間はたっぷりあるわ」

「イッチー、ガンバってな！ 悪いやつらにやられんよう、ウチあんたのこと応援するわー！」

「ほ、ホンマか？ ありがとうなー！」

緊迫した空気が和らぎ、ほんわかした空気が二人の間に漂い始めた。デート再開、と言わんばかりに歩き出す二人。市村は良い歳してスキップしており、まるで子供時代に戻ったようだった。

「……ふう。なんとか用件は伝えられたぞ」

「お疲れ様〜」

携帯電話を閉じた健が安堵の息をつく。無理もないだろう、先程までものすごい勢いでまくし立てるように喋っていたのだから。疲れのりも当然だ。

「それでたこ焼き屋はなんと？」

「協力してくれるって！」

「やったな、健！ 相手は手強いが……たこ焼き屋が来てくれるのなら怖いものなしだ」

「うんッ！」

健とアルヴィーが笑顔を浮かべてハイタッチする。続けてまり子もハイタッチ。正直不安ではあったが希望が持てた。これで夜も安心して寝られる。そう思ったところで、三人の腹の虫が鳴った。

「……あ、そういうえばゴハンまだだったね」
「ねえ、今日はなに作ってくれるの？」
「そっだねー……すぐ出来るうどんにしよう」
「やったー！」
「うどんか……この前ご馳走になったが、まあ良しとしよう」

EPISODE 135：戦いに備えて（後書き）

えーと、その…皆様、申し訳ございません。

一度上げて前に登場したある人物を登場させました。

なんですが…あとで思い返してみても「これじゃ高揚感がない」と感じ、

泣く泣く該当する部分を編集してその人物の登場シーンをなくしました。

よって、その人物が出てくるのはあとになると思います。

大変申し訳ございませんでした。

EPISODE 136：よき週末を

新藤との戦いに備え、健たちはゆつくりと体を休めていた。だが体がなまらないよう適度に訓練も行い、家に引きこもらず外出して気分を入れ替えることもした。

そして 週末。決戦の舞台である大阪に向かうべく、健たちは電車に乗り込んだ。橋上知事の演説を見たいのか、あるいは彼に対して暴動を起こそうとしているのか電車の中は人でごった返していた。窮屈でしかも蒸し暑かったが仕方がない。

今から戦場へ向かうというのにこの程度で悲鳴を上げてどうするのだ。そんなことでは人々を守ることなど出来やしない。ここは耐えて 体力を温存しなければ。やがて電車は大阪駅に停まった。人ごみに紛れて健たちは飛び出していく。

外に出るもまだ準備中であつた。とりあえずちようど良い位置をキープできたので、そこでペットボトルを片手に待つことにする。この暑さと人数である。水分を十分に補給できずに倒れるものも出てくるだろう。

「暑い……」

「暑いのはみんな一緒さ。僕も汗びっしょりだよ……あ、暑いからつて脱いだらダメだよまり子ちゃん」

「え？ として？」

「ダメなの！ 子供の裸は児童ポルノに引っかかるから！」

「じゃあ、私は脱いでも良いののかの？」

まり子に注意を促す健。隣にいたアルヴィーに脱いでもいいのか聞いたがもちろんダメだった。公衆の面前で裸を晒すような輩がいるものか。ましてや二人とも女性だ。その辺は注意しなければ。

ちなみに三人とも動きやすい服装をしていた。健は半袖の青い薄手の上着に白いシャツと半ズボン。ほぼいつも通りだ。アルヴィーは半袖の赤いワイシャツに黒いミニスカート。ブーツ等はいつも通りだ。まり子は気分転換か薄手のチュニックワンピースとその下にデニムの半ズボンを穿いていた。あの黒いワンピースが定着しているだけに少し新鮮であった。

「しっかし、来るのちよつと早かったかなー。いま9時半、始まるのは10時から……」

「なんだ、もうちつとの辛抱ではないか。ところでトイレはすませたかの」

「駅ですませた」と健は即答。まり子もそれは同じだった。「そうか、ならいいが」とアルヴィーは口を細めた。それからも人ごみの中で暑さにうだつていると 健の携帯に電話がかかってきた。相手は市村だ。

「もしもし！」

「おう、東條はんか！ あんた今どの辺や？」

「今橋上さんが演説する辺りにいます。市村さんは？」

「わしあんたと同じとこの方におる。アズサと一緒に」

「あ、アズサ……？ だ、誰ですか」

「ん、わしのガールフレンドや。あとで紹介したる。ほな」

そう言つて市村は電話を切った。「アズサさんか……どんな人だろうなー、きつとカワイイに違いない」と健は妄想を浮かべる。この場にもゆきがいたら、恐らくキれるか嫉妬するかしていたらどう、ちなみにもゆきは来ていない。危険に巻き込まないよう、健が事前に連絡しておいたからだ。

「鼻の下が伸びておるぞ」「もう、お兄ちゃんったら相変わらず

スケベなんだから」と二人から釘を刺され現実に戻りしばらくすると。スーツを着た四十代ぐらいの真面目で落ち着いた雰囲気のある男が現れ、マイクの前に立った。彼がくだんの橋上鉄郎府知事である。スーツ、と息を大きく吸い込み橋上は心を落ち着かせる。

「皆様、おはようございます。この猛暑の中わざわざ足を運んでいただいたことを、たいへん嬉しく思っております」

少し微笑んで橋上が民衆にあいさつする。丁寧かつ明るい雰囲気、を漂わせており、安心して信頼を寄せることができそうだ。人相もいいし、とても批判が多い人物とは思えない。あいさつのあとはしばらく世間話や新聞社の批評などが続き、正直言つと健たちは退屈だった。ただ、政治の話に関しては遺憾なことだと思っていた。適当に聞き流しながら備えていると、遠くで喋っている橋上知事の表情がより真剣なものへ変わった。

「……さて、皆様もご存知のように、この大阪に東京から首都機能を移設するという話が出ていますが……私はその一環としてあることを思いつきました。ここ大阪と首都・東京とをつなぐ大型ハイウェイを海上に建設しようという事です」

「橋上知事、大型ハイウェイを建設することに何かメリットはありますか？」

マスコミの若い男性記者がマイクを片手に橋上へ尋ねる。少し微笑んで橋上は「交通がより便利になり、どちらもより発展して豊かになるでしょう」と自信を持って答えた。彼のこの発言に周囲は騒然とする。確かに利便性はあるが仮に立ったらハイウェイ周辺の海の生態系の変化などについてはちゃんと考慮したのだろうか？ これには少し、健たちも首を傾げた。やがて橋上へ対する罵声や彼を擁護する声も聞こえ始め、会場内は混沌を極めた。「皆さん、落ち

着いてください！」と橋上や警備員が呼びかける中、突然煙幕弾が投げ込まれ　爆発。

「ケホ、ケホ……な、なんだ！？　何が起こったというんだ……」

動揺を隠しきれない橋上。彼が見つめる先で「邪魔だ！　どけどけ！！」と市民や警備員をなじる声が聞こえたかと思えば、鈍器や凶器で殴られ力づくで退かされていく。

「　あ、あいつらは、『近江の矛』ッ！」

「クッ、やはり来おったか！」

健とアルヴィーが身構える。自警団『近江の矛』　市民の味方である彼らはこともあるうか、守るべき対象にさえも攻撃を加え乱暴かつ強引に人ごみを掻き分けていく。「ドッカンドッカン投げたれや！！」とメンバーの一人が叫んだのを皮切りに、他のメンバーは次々と手榴弾やダイナマイトを投げ込み橋上と周辺の護衛に攻撃を加える。突然の襲撃を前にして、市民たちは蜘蛛の子を散らしたように逃げ惑っていた。だがメンバーの中に攻撃を加えていないものが一人だけ居た。祇園藤吾だ。彼は以前新藤の正体を見てしまった。もはや彼に協力する意志は持つておらず、一人だけ市民に「早よ逃げや！　ここ危ないで！」と催促を入れてまわっていた。

「このままじゃヤバイ！　行かなきゃ！」

健が人ごみをかいくぐりながら駆け出す。その後ろにアルヴィーとまり子が続く。手榴弾やダイナマイトを切らしたことにより爆撃は収まるも、リーダーの新藤は既に鉄パイプを引きずって摩擦しながら橋上に接近していた。

「おい橋上イ！ テメエなに考えてんだ、あ、あッ！？ テメエが言うハイウェイ建設が本当に俺たちのためになると思ってるのか、どうなんだ！！」

「うっ、そ、それは……」

「ほら見る。所詮政治家なんざ口ばっかりの出来損ないなんだ。そんな奴らが俺たち府民のトップに立って府民の為になるようなことをしようとかほざいてやがるたあ、臭すぎてヘドが出らあ！！！」

ガシッ！ と新藤が橋上をぶん殴る。そこから続けて殴る蹴るの暴行を加え遂には橋上に血を吐かせた。頭からも血を流しており、もはや死に掛けた。

「あ、あかん！ このままやったら橋上さん死んでまう！」

「くそう……あのアホッ！ 早よう止めんと！」

市村と一緒に来ていたアズサがおびえる。一刻も早く新藤を止めなければならぬが、かといってアズサを一人にするわけにもいかない。そうしている間に暴徒と化した『近江の矛』のメンバーに殺されてしまいかもしれないからだ。二つにひとつの選択だ。どうすればいい？

「き、君は……私を殺して何をしようというんだ……ウッ」

「革命だ！ てめえをブツ殺して革命を起こす！」

「なっ……！！」

「そしててめえみてえな偽善者からこの大阪を守るんだ！ 死んでもらっぜ……橋上イイイイイイ！！！」

雄叫びを上げて新藤が鉄パイプを振り上げる。橋上はおびえた目つきで彼を見上げ、市村は手を差し出して止めようとし、藤吾は「

も、もうあかん！」と叫びながらあきらめかけ　　もはや状況は絶望的だった。だが、そのとき

ガンツ！　と鉄パイプを弾く音がした。

「ッ！？　お、お前は……！」

あともう少しだったのに！　目を見開き新藤は驚愕。すぐに歯ぎしりして激しい怒りを露わにした。そんな新藤の目の前にいたのは橋上を守ろうととっさに間に入った健。前方には盾を構え、彼の後ろには腰を抜かした橋上や　腕を組んで新藤を睨むアルヴィーと腰に手をあて険しい目つきをしたまり子がいた。

「危なかった……」

「あ、ありがとう……君は？」

「市役所勤めのアルバイトです」

礼を言う橋上に対して、凜とした目つきで爽やかに健が微笑む。恐怖にひきつっていた橋上は落ち着きを取り戻し安堵の表情を浮かべた。市村やアズサ、藤吾　彼らだけではなく他の人々も安堵の息をついていた。

「そ、そうでしたか……」

「速く逃げて！」

橋上を逃すと、健は険しい表情で新藤と向き合う。新藤は邪魔をされたことに対する激しい怒りと健への憎悪が混じった複雑な表情を浮かべていた。

「このクソガキ……よくも俺の邪魔を！」

健と睨みあい彼をなじると鉄パイプを振りかざして健へ襲いかかる。健は新藤の攻撃を盾で弾きあるいはかわしつつ、攻撃を入れていく。その最中、卑怯にも新藤は足元に鉄パイプを叩きつけ健を転倒させた。

「うつ……お前、卑怯だぞ！」

「ヘッ！ 勝てればいいんだよ勝てればよオ！」

「がっ！」

「橋上の代わりに死んでもらおうか！ どりゃああああああ！」

転倒したのをいいことに新藤は健を蹴り飛ばし、踏みつけたりしては蹂躪する。もはやこれまでか？ だがそうはさせまいと市村が銃からビームを撃ち出し新藤を遠ざけ、飛び込んで間に割って入る。

「い、市村さん！」

「おい、クソツタレ！ わしのライバルを殺そうとはええ度胸してるやないかい！」

「ヘッ！ 俺を誰だと思ってる！ 『近江の矛』のリーダーだぞ！ お前らみたいなクズなんかとは格が違うんだ」

「はいはい、そうでつか！」

銃で新藤を殴りよめいた際に市村は足払いをかけ新藤を転ばせる。そして銃口を向け睨みつけると、

「わしは『浪速の銃狂い』の方が強いと思うけどなあ……！」

声高々に叫んだ。その声は威風堂々としており、『浪速の銃狂い』と呼ばれるほどの圧倒的な実力と自信、そして義理堅さと男気を感じさせる。新藤のような暴力だけが取り得の小悪党とは、何もスケールが違った。

「な、なに！？　つてことはお前は……」

「気付くの遅いわ……新藤はんよオ！」

得物である大型の銃で殴り、新藤を吹き飛ばす。足の痛みが治まったか健は立ち上がり「ありがとうございます」と礼を告げた。彼に対して「勘違いすんなや。ライバルに死なれるのがイヤやっただけやさかい」と照れながら答えた。

「きゃー、イツチー！　かつこいいー！」

「え、いやあそれほどでも」

そんな彼をアズサが大喜びで称える。向こうにいる金髪の若い女性　逢坂アズサを見て、やはり市村さんにも大切な人がいたんだな、と健は思った。「あの方がアズサさん……きれいでかわいいなあ」と呟きながら。

「ち、ちきしょう……ナメやがって」

低く唸りながら新藤が立ち上がる。ハッと我に帰って振り向き身構える健と市村めがけて鉄パイプを叩きつけようとするがその時急に新藤の動きが止まった。

「か、体が動かねえ。どうなってるんだ」とうめく新藤だが、彼には原因が分からなかった。そんな彼を嘲笑うように「どうしてそうなったか知りたい？」とまり子が声をかけた。彼女の目は紫色に光

っている。

「あなた、サイコキネシス念動力っていうの知ってる？ あれね、物体を動かすだけじゃなくてこういう金縛りにも使えるの」

「!? そ、そうか、お前は……」

「フフツ！ そうよ、どこかで見たことあるでしょ？」

いつもの明るい表情とはまた違う、冷酷でなまめ艶かしい微笑。彼女が言うように、以前新藤とまり子はヴァニティ・フェアの本部で顔を合わせていた。そのときにもまり子は念動力で自分をつまみ出そうとした新藤に痛い目を見せていた、というわけである。まり子を見た市村は「か、金縛りか……わしもこの前やられたっけな」と以前の廃倉庫での一件を回想していた。

「今よシロちゃん！」

まり子が叫ぶ。言われずともシロちゃんことアルヴィーがダツシユしながら駆け寄り 以前戦ったときのように新藤にドロップキックをかまして吹っ飛ばした。華麗な見た目で豪快に技を決めてアルヴィーは着地。一方新藤は、血しぶきを上げながら地面へ無様に叩きつけられた。その血の色は紫色で、それを見た人々は「む、紫の血!？」 「なんか変、どないなってるん……？」 「まさかあの人は……！」 と騒ぎ始める。いつの間にか攻撃をやめた新藤の部下たちも、だ。

「 みんな、騙されるな！ こやつは、新藤はシエイドだ！ 人に化けてお主らを騙して、世相に対する不信感を煽った。そして大阪を侵略しようとしていたんだ！」

アルヴィーが叫びながら呼びかける。周囲は橋上が大阪の発展に

ついで述べたときと同じくらい騒然とし、新藤へ「これはどういうことやねん！」「ホンマのこと教えてください！」と怒りや疑問をありつたけぶつけた。

「へ、へへ、ウへへへへ……ウヒヤーツハハハハハハハハハハ！」

すると新藤は起き上がるなり狂気じみた高笑いを上げ 少し気合を入れて市民の目の前でイカのような怪人の姿に変貌した。

「ば、バケモノ……！」

「バレちゃあ仕方ねえなあ！ そうさ、俺アのつけからお前らを騙していたのさ！ この大阪を丸ごといただく為になあ……！」

後ずさりする市民たち。湿った足音を立てながら、新藤 いや、バイキングラーケン は市民に接近する。大きな目を光らせ鋭い歯牙をむき出しにしながら接近するその姿はきわめて不気味だった。市民の男性の首をつかむと地面に叩きつけ、血が出るほど強く顔を踏みつけた。

「侵略はあとまわしだ！ 今からこの大阪を血の海にしてやる！ 貴様らクズどもを皆殺しにしてなア！！ ゲーソツソツソツソ！！」

荒々しく下品に雄叫びを上げ、バイキングラーケンは次に口笛を吹く。すると、地面の隙間から目と鼻がないゾンビのような最下級のシェイド・クリーパーの群れが現れて 次々と人々に襲い掛かった。このまま新藤を放っておいてはまずい。

だが、人々を見捨てるわけには行かない。どちらにしても今は敵に立ち向かわねば！ 健たちは人々を襲うクリーパーの群れに立ち向かい、斬ったり撃ったりして蹴散らしていく。気付けばもう、クリーパーはいなくなっていた。新藤は唸り、不快感を露わにする。

「全員片付いた。あとはお前だけだ、新藤！」
「くそ、役立たずが！ だがもういっちょ！」

まだ余裕があるのか新藤は再び口笛を吹き、クリーパーを呼び寄せる。今度は大群だ。更にトンボ型のシェイドやキッツキ型のシェイドまで現れ、地上も空中も包囲されていた。流石の健たちも対処し切れそうにない。

「ゲソソソソソッ！ これだけいれば流石のお前らも手が付けられまい！」

「ま、待てー！」

「こいつ！ 逃がさへんぞー！」

後ずさりして逃げようとするバイキンググラーケン。健と市村はバイキンググラーケンを追いかけてようとするも、「俺は逃げるぜ！ そいつらと遊んでな！」と口から墨爆弾を吐いて目くらましをしかけ逃走してしまう。

「逃げられてもった……」

「ど、どうするんイッチー……シェイドがいつぱいやー！」

「それはわかっとなる。一掃したいんやけど……うーん」

市村の腕をつかむアズサ。市村に迷いが生じた。ここで契約しているシェイド ブルークラスターを呼び出して一斉に砲火すれば敵を一掃することは造作もない。だが、周りには一般市民がいるし巻き込んでしまう可能性が高い。だがやらなければやられる、どうすれば。

「……あ、あの、市村さん。この前みたいに一斉砲火すれば……」

「それ考えたけどあかんわ！ みんな巻き込んでまう！」

「た、確かに……じゃあどうすれば」

「それが思いついたら苦労せえへんがな、東條はん！」

健も市村も苦い顔を浮かべる。もはや万策尽きたか　と、その時。空中にいたシェイドの群れを何者かが薙ぎ払いぶった切った。その者は若い男性で髪は緑がかった黒い短髪で、袖をまくったデニムのジャケットを着て下には白ズボンを穿いていた。その両手に握っていたのは　自身の身の丈をゆうに超えるほどの長さを誇る『剛剣』。

「なんや、どえらいことになつとんなあ」

「お、お前は……伊東！」

「ひつさしぶりやな」市村はん！ それにアズサちゃんも！」

「この前の用心棒さん！？ ご、ご無沙汰してますー」

この男　伊東英機。以前、旧市街ゴーストタウンで新藤の用心棒として不破と市村の前に立ちはだかったエスパード。変幻自在に形を変える金属・トランスメタルを武器として襲いかかって来た伊東と激戦を繰り広げた末、市村達は彼に勝利してアズサを奪還したのだ。元々敵同士であったためか、市村は少し警戒していた。

「……市村さん、この人は……」

「話と自己紹介はあとや、あと！ あんたらは新藤を追うんや。行くなら早よした方がええ」

伊東が健の言葉を遮って健たちに呼びかける。

「せやけどアズサを一人にはでけへん……」

「安心せい、アズサちゃんやったら俺が守つたる」

「え？」

伊東のその言葉に市村がきよとんとした表情を浮かべる。そもそもこんな狂犬のような目つきをした男に預けてしまっただろ、うか？

「……ま、ええわ。アズサのことはお前に預ける。その代わりに……ヘンなマネしよったら、ただでは済まさんで」「任しとき！」

伊東が笑顔で親指を上突き立てる。これでもう大丈夫だ、新藤を安心して追うことができる。と思った矢先、伊東は。

「しっかしアズサちゃん、相変わらずべっぴんやなあ」

「え？ あ、ありがとうございます」

「それにしてもあんた、ええチチしとるやないの！ いっぺんもませて……」

指をいやらしく動かしながら伊東はアズサに急接近。アズサの豊かな胸を揉みしだいてやるうとしていたのだ。アズサは当然嫌がり、彼女を助けるべく市村がとっさに「なに晒しとんねんこのボケが！ やめろや！！」と叫びながら割って入り伊東のおでこにチョップをかました。

伊東は頭を抱え「痛いやないかあ〜！」と情けないうめき声を上げて後退していく。これには思わず、健たちも笑ってしまった。まり子にいたっては腹を抱えてケラケラ笑っていた。

「ま、そーいうことや。早よ行き！ わいもなるだけ頑張るさけえ」「ありがとうございます、伊東さん！ それじゃ、あとはお願いしますー！」

伊東にアズサを預けてひとまず礼を告げ、健たちは走って新藤を追う。彼らが去った事を確認すると、伊東は両手に剛剣を持ってニツと笑った。

「さて……と。わいも一仕事せんとな！」

「伊東さん……がんばって！」

「おうッ！」

EPISODE 136：よき週末を（後書き）

Q&Aコーナー、はっじまるよー

Q：藤吾は新藤がシェイド読んでから何やってたの？

A：市民の皆様に避難勧告を出しつつ、シェイドの群れと戦っていました。

Q：不破さんまだ入院中なの？

A：はい。それだけ新藤にやられた傷は大きかったです。

Q：橋上知事は？

A：あのままとんずらしました

EPISODE 137：怒りの反撃イカがかな

伊東にアズサを託した健たちは、レーダーを頼りに新藤を追っていた。意外なほど逃げ足が早く追い付くのは簡単ではなかった。

「待て！ 新藤！」

「くそ、しつげえな！」

ようやく追い付いた！ かに見えたが新藤は口から墨爆弾を吐いて目眩まし。煙幕が出ているその隙に再び逃亡してしまう。

「また逃げられた……今度はどこだ」

「ちよつとソレ見してみい。……コンビナートがある方やな」

今度はどこだ、と健がレーダーを見る。レーダーが示しているのはコンビナートがある方角。入り組んでいて広いし、身を隠すにはピッタリだ。すぐに健たちはコンビナートへ向かった。

「へへ、ここまで逃げりゃあ奴らも追ってこれないだろう」

そして問題のコンビナート。海側に面しているここに新藤は逃げ込み、身を隠そうとしていた。コンテナはそこらにあるし、建物に逃げ込めばまず見つからない。どちらにせよ隠れるにはうってつけだ。見つかることはほぼないと言っても過言ではない。

ところが、その甘い思いが命取りとなった。突然うしろから「そこまでだ！」と声が出たため振り返れば、そこには 健たちがいたではないか。しかも何を格好つけたかコンテナの上に勢揃い

して立っている。

「お、お前ら……なぜここが分かった!?」

「肉眼ではごまかせても、機械の目はごまかせなかつたってことだ
!」

「ちいつ!」

うるたえる新藤へ健が告げる。続けてアルヴィーが「お主が思っているほど人間は愚かではないということだ!」と彼の言葉に補足を入れた。元より龍という誇り高き存在であるためか、彼女のその態度と言葉と姿勢は威厳に満ちていた。

「どつちにしろ、お前はここまでや。大阪のみんなダメした責任……きちんと取ってもらおうで!」

コンテナから飛び降り市村が銃で先制する。続けて健が飛び降りて剣と盾を携え、新藤を相手に銃で格闘している市村に加勢する。アルヴィーとまり子は何かあったときの為、敢えて待機していた。

「けっ! 何人来ようが同じだ!」

新藤は槍を地面に突き立て柄に掴まって回りながらの蹴りをしかける。不意打ちだった為思わず相手の攻撃を受けるが、負けじと健は反撃。

隙を突いて斬りつけた。よろめく新藤を更に、市村の銃から放たれたビームが襲う。吹っ飛ばされ、新藤はフェンスに叩きつけられて一緒に倒れた。

「ゲソっ! この野郎ッ!」

立ち上がった新藤は墨爆弾を吐き出して反撃。槍を二人に叩きつけ奥の方へと吹っ飛ばした。転んだ二人に追い討ちをかける新藤だったが健に攻撃を剣で弾かれ、起き上がった彼に押されていく。

「うあつがあああつ」

動きがゆるんだところを横一文字に斬られ、新藤は大きくよろめいた。そこに市村が二発、いや三発ビームを撃ち込む。怯んだところに健が斜め下に切り下ろし、そこから斜め上へと切り上げトドメに縦にぶったぎった。

「ぐっは！ く、くそッ……」

追い詰められた新藤は紫の血を流しながら後ずさりする。だが、彼の目にあるものが留まった。それは 灯油が入ったドラム缶。良からぬ笑みを浮かべるとドラム缶を倒して周囲に灯油をばらまく。

「あやつ、何をやる気だ？」

「まさか……！」

後ろでアルヴィーとまり子が彼の行動を警戒した。案の定新藤は口から墨爆弾を吐き その爆風で灯油が燃えはじめ、周囲はあつという間に火に囲まれた。

「はっ！ し、しまった！ それが狙いだっただのか……」

「イーカッカッカッカ！ 燃えろ、燃えちまえ！！」

周りは火の海だ。下手には動けない。だが、このままではまた新藤に逃げられてしまう。 なんとかして切り抜けないと！

「そおい！」

だが健は勇気を振り絞り、盾を構えて前へ前へと突き進む！ 市村もそのあとに続き、思いきって火の海を突き抜けた。

「な、なにイ！？ そんなバカな！」

「ヘッ！ 今更こんなもんで足止めされるほど わしらもアホやない！」

うつたえる新藤にそう言い放ち、市村は足払いをかけて新藤を怯ませる。続けて銃で殴り至近距離でエネルギーをチャージして極大なビームを放った。

転んだ新藤めがけ、健は跳躍して剣の切っ先を下に向けてまっすぐに突き刺す。「うがああああああ！」と新藤は悲痛な叫び声を上げた。「いいぞ！」「その調子よ！」と二人のうしろで歓声が上がった。

「や、野郎……」

起き上がる新藤。だいぶ追い詰められたような疲弊しきった声を上げていたが、彼の近くにはまたもドラム缶があった。ニヤリと笑い彼は「だがドラム缶はまだあるんだぜえ！」とバカ笑いする。

「そうはさせるか！」

「なっ！？」

そうはさせじと健が大胆にも懐に飛び込み、炎の剣でドラム缶を両断。大爆発を起き新藤を吹き飛ばした。ちなみに健は盾を構えて爆風を凌いでいた。

「東條はん！　こんな汚いヤツ、クソ真面目に相手せんでええ。こつちもいつそうハデにやり返したるうやないけえ！」

「はい、ではお言葉に甘えて……」

お互いに武器を構え健は右を、市村は左を固め　新藤へ立ち向かう。幾度となく手痛い反撃を受けた新藤はもはや息絶え絶え。あともう一息で倒せそうだ。

「てめえら、さっきから……ごちゃごちゃうるせえんだよおおおおオー！」

怒り狂った新藤は口から墨爆弾を吐き二人を攪乱。更に槍を激しく振り回して突風を巻き起こし二人を吹き飛ばそうとするがそんなものは通じない。

自分で出した煙幕の向こうから飛んできたビームを受け後退、更にそこから飛び込んできた健の斬撃を受けて大きくよろめく。

「ふざけんなああ！」

「そつちこそふざけるな！」

雄叫びを上げながら新藤が槍を振りかぶる。だが健にことごとく盾で弾かれ、怯んだところに渾身の一撃を受け槍をへし折られてしまふ。

「な、なんだとお！」

槍を折られてショックを受けた新藤。その隙に健は盾に氷のオーブを装填。実は盾にもオーブをはめることが出来る。

表面にオーブをはめられる穴がついているのだ。相手の隙を突かないと装填するのは難しい。ただ、相手が律儀にも待っててくれて

いるのなら話は別だが。

「このガキイイイ！　なんてことしてくれんだああ！！」

いきり立った新藤は左手で健へ殴りかかる。だが盾で受け止められてしまう。それどころか拳からゆっくりと腕が凍り付いていく。

「があッ……！？」

「へへ、盾ってこういう使い方もあるんだ」

凍った左腕に気をとられた新藤を斬りつけ、よろめいたところに健は体当たり。吹っ飛ばされると同時に新藤の左腕は粉碎された。ショックのあまり「う、腕があああ」と新藤はわめき声を上げる。

「もろた！　集中攻撃や！」

そこへ容赦なく市村が銃を乱射！　間髪いれずにビームが撃ち込まれ、最後は極大なビームが命中して大爆発。新藤は情けない悲鳴を上げた。

「やったか！？」

「いや、まだあいつ生きてるわ！」

アルヴィーとまり子が思わず叫ぶ。しかし新藤はまだ生きていた。

「な、なにもんだてめえら……」

爆炎が収まり姿を現したのは　すっかりボロボロになった新藤。白くて銀ピカだった体は煤だらけになり口からは墨を垂らし、なん

とも惨めで情けない格好をしていた。もう目も当てられない。

「アルバイトだ。市役所勤めのね」

「たこ焼き屋兼 銃使いや」

なんだかんだと聞かれたら、答えてやるのが世の情けというものだ。せめて身分だけでもと、二人は新藤に教えてやった。もはやこいつに言い残すことは何も無い。

「か、勝てねえ……勝てつこねえ……つ」

新藤はひどく狼狽していた。自分がこんな連中に負けたのが信じられないでいたのだ。なんとも哀れで呆れる話である。完全に戦意を失った新藤はその場から逃げようとするが 健と市村がみすみす見逃すはずがなかった。

「逃がすか！」

健は雷のオーブを剣に装填し、剣で十字を描く。すると十字型の衝撃波が新藤めがけて飛んでいくではないか。それだけではなく健は逆手に持った剣を振り上げ地面に電撃を走らせた。

十字を描き雷を伴う衝撃波を放つ。更に時間差で地面に電撃を走らせる この技に名をつけるなら『クロスブリッツ』といったところだろうか。

「な、なんだ……うがあああああー！」

振り向くも時すでに遅し。二重の電撃が新藤に直撃して弾け飛び爆発した。

「こいつでジ・エンドや！」

彼が休む間もなく市村はエネルギーをチャージして極大ビームを
発射！ 流石の新藤も耐えきれず。

「かつ……甲斐崎社長ばんざああああいつ！」

断末魔の叫びを上げながら派手に大爆発。今度こそ新藤は散った。
彼のような小悪党が持つには大きすぎた野望を達成できぬまま
炎の中へ消えていったのだ。

「いよつしゃあー!!」

「これで一件落着やな！」

「はいっ！」

喜ぶ健と市村。二人はお互いタッチし喜びを分かち合った。ライ
バルというよりは、仲の良い戦友のようだ。とくに市村はあれだけ
健をライバル視していたにも関わらず。彼はいま、どのような
心境なのだろう。

「終わったようだの。これで大阪の人々もひと安心だ」

「うん。新藤のやつもやつつけたからね！」

アルヴィーが微笑む。心からの笑顔で返すと、健は他の三人に「
それじゃ、みんなのもとに帰ろう」と呼び掛けてコンビナートをあ
とにした。

「流石だな……東條明雄の息子というだけの事はある」

その背後で一つ目を模した禍々しい仮面をつけた男が佇んでいたことなど知らずに。まだ男とは断定できないが、この仮面の人物はいつたい 何者なのだろうか。

「バカな！ 新藤…… あいつなら出来ると思ったのに」
「己を過信しすぎた結果がアレだ。まったく不憫な奴め」

その頃、ヴァニティ・フェアの本部 どこかの岩山にそびえ立つ古城では、戦いの一部始終を見ていた辰巳が頭を抱えていた。

彼は新藤ならきつと今回の任務をやり遂げるはずだと信じていたのだ。ところが結果は残酷なことに彼の戦死により失敗 だった。いつものように顔に包帯を巻いていたが、きつと部下を失った無念や東條健一派に対する憤怒が入り混じった複雑な表情だったに違いない。

辰巳の隣には軍服を着た大柄な金髪の外人男性がおり、彼は割と落ち着いた表情をしていた。ただ、少し残念そうではある。

「恐らく早く手柄を立てて出世しようっていう腹づもりだったんだろ。この前社長にこつ酷くお叱りを受けたらしいが、それが堪えたんじゃねえか」

「なあ、ヴォルフガング。それはつまり、新藤の奴は汚名返上に固執していたということか……？」

「かもしれんな。お前、最後に新藤と話したのはいつだ？」
「あいつが出撃する前だ」

軍服の男 ヴォルフガングの問いに辰巳が答える。表情こそ読

み取れないものの、無念と哀愁が漂っていた。

「そうか……あいつの様子に何か変なところは無かったか？」

「とくに変わったところはなかったが……少し焦っていたようには見えた」

「そうだったか」

双方が目を瞑る。そのとき、部屋の奥から何者かが歩いてくる音がした。黒装束の男 『社長』の甲斐崎だ。

「じゃ、社長……！」

無駄な贅肉ひとつ、無いクールでスマートな見た目に合わない眼力だけで人を殺せそうな威圧感。全身から放たれている強者の覇気オーラ。そしてすぐれた英知。まだ若そうな外見ながら、甲斐崎は頂点に立つ資格を十分に備えていた。

「何をメソメソしている？ 過ぎた事を悔やんでいるぐらいだったら働け。死んだ奴のことは忘れる」

「で、ですが……」

「俺の言うことが聞こえんのか？」

甲斐崎がうるたえる二人の幹部を一睨みする。後ずさりしていくヴォルフガングと辰巳を見て、「そうだ。それでいい」と甲斐崎はほくそ笑む。

「社長、次は俺に行かせてください！」

「お、おい、ヴォルフガング……！」

ヴォルフガングが名乗り出る。辰巳は彼を止めようとするが、ヴ

オルフは顔を辰巳に向け

「辰巳、お前はしばらく休め！ 部下を何人も失っているのにまだ行く気か？ それに傷もまだ完治していないんだろう？ ここは俺が代わりに行ってやる。だからお前は休め」

「ヴォルフガング、お前……」

「フツ……同僚の代わりに行ってやるうというわけか。それもいい」

甲斐崎が冷たく笑う。直後、甲斐崎は冷徹にも「だがキャンセルだ」と言い放った。その言葉に二人は動揺し、「何故です!？」

「しばらく様子見だ。別に連中を好きに泳がせてもかまわんだらう？」

「どういうことです？」

「ふん。しばらく束の間の平和を味わわせてやるのもまた一興ということだ……」

そう言って甲斐崎はさつさと部屋から出て行った。何か含みを持たせたような言い草であったが、彼の真意は見えない。

EPISODE 138：ひとまずの別れ

新藤を倒した健たちはすぐに伊東やアズサたちがいる大阪駅の付近へと向かった。まだ戦闘中かもしれない。だとしたらものんびりしている暇は無い。加勢しに行かなければ。そう思いながら駅前の広場へと疾走する四人だったが

「遅いやないけエ、あんたら……」

「伊東！ あんた……どうしたんや、その傷！」

そこにいたのは傷だらけで血まみれになっていた伊東と少しおどおどしているアズサ。いったい何があったのだろう。まさか、対処しきれずにやられてしまったのだろうか？ 心配になった健は駆け寄って「ふ、二人とも大丈夫ですか？ それで町のみんなは……？」と訊ねた。

「安心せえニイちゃん。シェイドの群れ、全員ブツ倒したったわ。わいと藤吾とでのう……」

「藤吾？ 藤吾ってまさか……祇園藤吾さん？」

「せや……なんやその藤吾っちゅう奴、顔あわせんのが恥ずかしいからってさつさと帰ってまいおった」

「そうか、そんなことが……って、その祇園藤吾って誰やねん？」

近くで健と伊藤の話聴いていた市村が首を傾げる。彼は『近江の矛』のリーダーであった新藤とは面識があったが、祇園藤吾とは面識が無い。「知つとるか、アズサ」とアズサに訊ねるも当然アズサは藤吾のことなど知らず「ごめん、ウチもその人知らん」と返事をした。

「はは、藤吾さんのこと知らない人多いんだな……」

「ねえお兄ちゃん、その藤吾って人誰なの？」

「ん、ああ、藤吾さんはね……」

藤吾の事を聞いてきたまり子に健が答える。藤吾が『近江の矛』の一員であることと、新藤に騙されていた事を親切かつ丁寧に教えた。その話は市村やアズサももちろん聞いていた。伊東は先程シェイドの群れと戦ったときに、アルヴィーは以前健が藤吾と戦ったときにそれぞれ面識があったので聞き流していた。だが、アルヴィーはどちらかといえば見守っていたようにも見える。

「へえ、そういう人だったんだ。ちょっとかわいいそう……」

「ホント、嫌なヤツだった。……あつ、いけない。こんなことしてる場合じゃなかった！」

話し終えたところで健は伊東が戦いで重傷を負ったことを思い出し、救急車を呼ぼうとしたが 「待てやニイちゃん」と伊東に止められた。

「え？ でもそのケガ……」

「ホンマや。あんたこのままやったら死んでまうで」

「そないな心配いらんわい。病院、すぐそこやさかい」

「近ッ！」

心配する健と市村を前にして伊東が笑う。彼が指を指した方向には病院があった。ちよつと都合が良すぎないかと、全員がズツこけた。だが善は急げ、である。健たちは伊東を急いで近くの病院へ連れて行く。かくして伊東は入院することになった。しかしながら元気そうだったので早めに退院できるだろう。傷もすぐに治りそうだ。

「しっかし、今日も大変な一日になってもうたなあ」

「まあまあ、こうして何とか無事に終わったやん」

「そうですね。終わり良ければすべて良し！ なんちって……」

その帰り、健たちが談笑しながら歩いている頃にはすっかり日も暮れていた。茜色に染まった空と夕陽を背に受けながら帰路を辿る気分はなんとというか、家に帰る途中の遊び疲れた子供のようであった。

そんな中、突然アズサが立ち止まる。彼女にあわせて他の四人も止まると、アズサは

「そついえばまだ、名前聞いてへんかった。お兄さんとお姉さん、それからお嬢ちゃん……名前なんていうん？」

健たち三人の名前を教えてもらおうと、そう訊ねた。本来なら「名乗るほどのものではない」と格好つけてみたいがそんなひねくれた事はできない。簡単なものでいいからアズサに自己紹介をしようと、健から順に名乗ることにした。

「東條健です。市役所でバイトしてます、よろしく」

「アルヴィー……と呼んでくれ」

「糸居まり子つていいです。よろしくね！」

「健クンにアルヴィーさんにまり子ちゃんやね。うち、逢坂アズサつていいです！ こつちこそよろしく」

アズサが心から思い切り笑う。元気いっぱいな彼女ならではの満面の笑みだ。これで彼女も健にとって欠かせない仲間の一人となった。その光景を見守りながら「頼むからとらんといてや……」と市

村は不安げに呟いていた。

というのも、健の周りにはどういいうわけかやたらと女性が集まる。まるで磁石のS極がN極に、N極がS極に引き寄せられるように。ハーレムでも築き上げんばかりの勢いだ。そんな健にガールフレンドのアズサをとられたくないと、市村は不安になっていたのである。

「それじゃ、また！」

「健くんたちも元気であろ！」

健たちとアズサ（と市村）はお互いに手を振り、別れた。きつとまた会える日がやってくるだろう。

「……あいつら行ってもうたな。ほな、わしらも行きまひよか」

「うん！」

『近江の矛』のリーダーとして府民を欺いていた新藤は死にこうして大阪、いや関西一円を巻き込んだ一大事件は幕を閉じた。新藤に指示を出していた黒幕は滅んではないが、これにて一件落着。

EPISODE 138：ひとまずの別れ（後書き）

どうも、SAI-Xです。

今回でV.O.I.7はおしまい！ 結構長くなりましたね。

割といい人だったアンドレと違って新藤は最後までとんでもなくそつたれ、

いいやイカ野郎でした。一人のキャラとしてはともかく、

悪役としては結構いいキャラしていたんじゃないか……と思います。

では、次章をお楽しみに！

人気投票はアルヴィーさんがトップ……やはりおっぱいか！？

おっぱいがモノをいうのか！？

EPISODE 139：金が欲しいなら働け

どす黒い雷雲に覆われた岩山。そこにそびえ立つ機械仕掛けの古びた城。その内部にある会議室。

入口には「関係者以外立入禁止！」と書かれたでかでかした貼り紙が貼られており、その周囲をサングラスをかけた黒いスーツの男たちが見張っていた。その会議室の中では円卓が並び、幹部の席である円卓の背後には社員たちの席があった。

「全員集まったようだな」

部屋全体を見渡し、幹部たちが全員集結したことを確認した黒髪の男が言う。この男はライトブルーの瞳をしており、服装は黒いスーツとその下に黄色いシャツ。ズボンとブーツも黒。とにかく黒ずくめだ。更に黒いコートを椅子にかけていた。

「はい。ですが、『クイーン』だけいない」

「本当に身勝手だな、あのクモ女め……。まあ、気にするほどのことではない。はじめろぞ」

幹部のひとりである『クイーン』という女に関して不満を述べつつも、黒ずくめの男・甲斐崎は会議の開始を宣言する。

ちなみに『クイーン』とは 女郎蜘蛛のシェイドである糸居まり子のことを示す。彼女は現在ある事情から東條健のアパートに居着き、彼と同居中だ。彼女は傲慢で残忍冷酷。誰にも従わない。自分が心を開けるような相手なら話は別、だが。

「で、社長。例の青年の件ですが、このまま放置なさるおつも

りですか？」

「ああ。困ったことに、ヤツのもとにはよりによって白龍と『クイン』がいる。二人ともかなりの強さだ。迂闊に手は出せない」

「ですが……だからといってこのまま攻めないつもりですか？ あんな連中、我々が一気に畳み掛ければわけはないはずだ」

「私もヴォルフガングと同じ意見だ。事実、私の部署はあの青年の手で大打撃を受けました。連中を侮ってはいけません。このままでは私の部署、いや、この会社そのものが滅ぼされかねない」

「そうだ。今は守るべきではない、攻めるべきです。全国各地から兵力をありつたけかき集め一気に攻め落とす！ たったそれだけのことじゃないですか」

「それに8年前の光魔大戦でエスパーの数は激減しています。まず東條健を全力で倒して、残ったエスパーも全力で叩き潰す。そうすれば、残るは戦う力を持たない一般市民だけです。となれば、我々が地上を征するのにも時間の問題」

金髪をした軍服姿の屈強な男　ヴォルフガングと顔に包帯を巻きいくつもコートを重ね着した男　辰巳がそれぞれ意見を出す。

二人とも最初は人間を軽視していたが、健たちとの戦闘を重ね徐々に考えを改めてきた。そして甲斐崎にそろそろ本腰を入れるべきだとも申ししたのだ。とくに辰巳はそれが顕著だった。

「ふん。セミのようにやかましい奴らだ……」

まくし立てんばかりの勢いで意見を出した二人に辟易した様子で甲斐崎が言った。兵力をかき集めようにも時間がかかる。そうしている間にこちらが攻められてしまえば元も子もない。

「ハッ！ 愚かしい。さすが脳ミソまで筋肉で出来ている奴は考えが違うな」

ヴォルフガングと辰巳をメガネをかけた壮年の男性が嘲笑う。彼は牧師風の服装で、知的な雰囲気を漂わせていた。だが同時に陰湿さも感じさせる。

「社長が連中に手をお出しにならないのはまだ戦力に余裕があるからだ。それもこうやってのびのびと傍観できるくらいにな。お前たちが必死になるほど追い詰められてはおらぬ。そうとも知らずに騒ぎおつてが」

「くっ……!!」

嫌味たっぷりに牧師風の男性が語る。どこまでも人をバカにするような口調に苛立ったヴォルフガングと辰巳は表情を険しくし、握りしめた拳をふるふると震わせた。

「そこまでにしておけ、クラーク」

「ぬっ。社長……」

これ以上騒がれては面倒だ、と甲斐崎は牧師風の男性・クラークを止める。

「確かにクラークが言う通り、まだ我々には余裕がある」

「ふっふっふ。そうでしょう、そうでしょう……」

「だが辰巳たちが言うように、戦力を増強することにも精を出さねばな」

「な、なに!?!」

甲斐崎の言葉を聞いたクラークが冷や汗をかく。「どういうことです!」とクラークは甲斐崎へ訊ねた。周囲はうるたえる彼を見て騒然とし、中にはクラークを見て笑うものもいた。

「こんなこともあろうかと強力な助っ人を呼んである」
「助っ人……ですか？」

きよとんとした顔でクラークが呟く。

「ああ。頭が良くて、思わずため息が出るような美人をな」
「ということは女性ですか？」
「ああ、そうだ」

その助っ人が女性であることを聞いた辰巳が顎に手を当てて考える。何か心当たりでもあるのだろうか。その横ではヴォルフガングも腕を組みながら考えをめぐらせていた。恐らく彼も辰巳と同じで思い当たる人物がいるのだと思われる。

「……『彼』ではないのですね。なら、『彼』は今どこに？」
「あいつならとつくに活動を開始しているさ。裏でいろいろ工作している頃だな」
「なるほど。そうでしたか……クックック」

その頃、世間は8月中旬・お盆休み。夏休み中ならいよいよ終盤に差し掛かり、社会人なら暑い中でゆつくりと休める夢のようなシーズンだ。家族連れが子供と一緒に実家へ帰省することが多い。この期間中に思う存分アニメを観たりゲームを遊んだりするものももちろん多い。

だが この世を生きるすべての人間が盆休みを楽しめるわけではなかった。たとえば警察官はほぼ毎日、24時間ずっと仕事をしている。休みがもらえることは滅多にないことなのだ。

都内のとある銀行。とくに変わったこともなく、職員たちはいつ

もどおりお客様に対応し、客はのんびりと椅子に座ったりせわしく金の出し入れをしたりしていた。

だが突然 自動ドアの向こうから招かれざる客が二人やってきた。一見普通の若者に見えるが どこか物騒で危険な臭いがする。片方は痩せていて、もう片方は太った巨漢だった。

「きゃあああああ!!」

「おらっ! 強盗だ! 大人しくしろい!!」

「は、離してえ!」

太っている方が女性客に銃を突き付け人質にする。突然の襲撃と暴漢に絡まれたせい、女性客はひどく怯えていた。

「おい、返してほしけりや金を出せ。1分、いや30秒以内にな! でなきや女の命はないぜ!」

強盗のうち痩せた方がバカ笑いする。笑いすぎて顎が外れそうだが、彼らの天下は長くは続かなかった。目にも留まらぬスピードで何者かが太った方(以下デブ)の横を突っ切ると、女性客の姿がいつの間にか消えていたではないか。予想外の出来事に、デブも痩せた方(以下チビ)も驚きうろたえた。

「ケガはないですか?」

「あ、ありがとうございます。あなたは……?」

「名乗るほどの者じゃありません。早くここから逃げてください!」

超スピードで駆け抜け女性客を救ったのは、髪を黄褐色に染めて紺色のポロシャツを着た若い男性だった。肌はほどよく焼けた小麦色で、細身ながらも鍛え上げられた筋肉がたくましい。

おまけに甘いマスク。まるでヒーローのようだ。彼は女性を

逃すと眉を吊り上げ、強盗二人をにらむ。

「お前ら……最近この辺の銀行や宝石店を荒らし回っている中丸兄弟だな？」
なかまる

「ああん！？それがどうしたんだ！！」

「お前たちを現行犯逮捕する！」

男は左手にメカニカルな外見のランスと、右手にバツクラーを携えランスの穂先を強盗の中丸兄弟へと向けた。穂先ではバチバチと火花が走っていた。

何を隠そうこの男は 警視庁捜査一課の刑事にしてシエイド対策課のエース・不破ライである。彼はエスパーであり、超高速で走る能力と電気を操る能力を持つ。戦い慣れていることもあってその実力は本物だ。

以前人間に化けて『近江の矛』のリーダーとして大阪に潜入し、悪事を働いていた新藤ことバイキンググレーケンにやられた傷もすっかり治り、現場へ復帰していた。

「うるせえ！このままお縄になってたまるかよ！行くぞ、弟よ！」

「おうよ、兄貴イ！こんなやつブツ潰してやろうぜ！！」

そしてこの強盗二人は中丸兄弟。銀行や宝石店を中心に盗みを働いている荒くれ者だ。先に仕掛けてきたのは彼らだった。チビの兄は全身から電気を放ったかと思えば不破へ突撃し、不破を外へ突き飛ばす。あとを追うようにデブの弟が転がっていった。

「おいオッサン！ビビってんのか、え、エ！？おらおらあ！！」
「うわっ！とっ……」

銀行の外にて不破と中丸兄弟は激しい戦いを繰り広げていた。不破へ電気をまとったパンチやキックをすばやく繰り出すチビの兄。だが不破はすべて右手のバックラーでガードしていた。この程度でやられるような彼ではない。

「ブツ潰してやる！」

そこへデブの弟がボディプレスを仕掛けてきた。すばやく身をかわし、不破はランスを叩きつけて反撃。だが攻撃を受けた瞬間にデブの弟は体を岩のようにいかつく、硬くして攻撃を弾いてしまった。

まるで堅牢強固な岩団子だ。自爆して大爆発したり、水をかけられて致命的なダメージを受けたりしなければいいのだが。

「そんな攻撃効かねえよ！」

「があっ！」

不破の攻撃を弾き返したデブの弟は不破につかみかかり、ぶん投げて地面に叩きつけた。見た目通りなかなかのパワーだ。さすがの不破もこれはかなり堪えたか、少しうめきながら立ち上がった。

「ゴロツキにしてはなかなかやるな。こりゃありハビリの相手にするにはちよつとキツイか……？」

「なに寝ぼけたこと言っつてやがる！」

チビ　　というか痩せている兄が不破へ飛びかかる。そのうしろにはデブの弟が走りながら不破へ接近していた。波状攻撃だ。どちらかを先に止めなければやられる。

「……だが、そこまでだ！ うりゃっ！」
「どおおおッ!？」

飛びかかってきたガリガリの兄をランスで突き飛ばし弟に叩きつける。更に怯んだところにジャンプして急降下しながらの突きを浴びせてぶっ飛ばす。

とてもこの前病院から出たばかりの病み上がりとは思えない、機敏で巧みな動きだ。中丸兄弟は二人とも不破のあまりの強さにおびえ、すっかり腰を抜かしていた。

「な、なんだこのオッサン！ 超つええ〜っ！」

「兄貴イ！ 俺たちなんでこんなヤツにケンカ売っちゃまったんだよ
うー!！」

「し、知らねえよおー!ーっ」

見るからにガリガリで脆そうな兄はともかく、体を岩のように硬くできる弟はかなり防御力が高い。だがそれを打ち破る方法が無いわけではない。

「お前ら、覚悟は良いか？」

ランスの穂先に電気を集中させ エネルギーが最大限まで溜まった瞬間に突撃。前方に電気を帯びた衝撃波をまといながら突進し相手を貫き、爆砕する。

「サンダーストライクッ！」

中丸兄弟は断末魔の叫びを上げながら二人仲良く大爆発。真っ黒焦げかつボロボロになった状態でその場に転がったところに手錠をかけられそのまま逮捕されたのであった。病み上がりとはいえ不破

にかかれば、このくらい朝飯前である。高給取りは伊達ではない。

EPISODE 139：金が欲しいなら働け（後書き）

今回からVol.8です。

ここんどこハードというか、エロが無いあつつい展開が続いたので今回はインターバルにしたいと思います。ひよっとしたらポロリもあるかも……。

では！ 次回をお楽しみに

EPISODE 140：まさかのプレゼント

「いやー、今朝はお手柄だったじゃないか不破くん！ この前病院から出たばかりなのに、通勤途中であの中丸兄弟を逮捕しちゃうなんて！ 凄いよホントに！ これは名誉なことだ！」

「へへっ、まあこのくらい出来ないとな」

銀行強盗を働いていた中丸兄弟を逮捕したあと、不破は青い髪にメガネをかけた同僚 村上むらかみと共にエレベーターに乗ってシェイド対策課の地下本部へと向かっていた。

「自信满满だねえ。さすが高給取りさんは格が違う！」

「な、なんだよそりゃあ！」

「さあて、着いたぞ。君にとって久しぶりのモニタールームッ！」

村上が不破をからかう。やがてエレベーターは地下フロアにたどり着き、エレベーターを降りると 薄暗い中モニターが密集した大きくて広い部屋に辿り着いた。ここは東京二十三区に設置された一万台以上のカメラ、それがとらえた映像がすべてここに映し出される。

ここは、警視庁が誇るモニタールームなのだ。設備も最新鋭のものが整っている。モニターを見れば状況もすぐにわかるしその場に応じた適切な判断も下せるため、シェイド対策課が拠点にするには最適な場所だった。

「おい、穴戸ちゃん！」

「あっ、村上主任！ それに不破さんも！」

村上がオペレーターの女性 穴戸しんどに声をかける。すると穴戸は村上の方に振り向き、明るく微笑んだ。そのうしろで不破が「オレはついでなのか……？」と呟いていたような気がしたが、恐らく空耳だろう。

「不破さん、大阪でのお仕事お疲れ様でした！ それと今朝の銀行強盗を逮捕した件、みんなの間で話題になってましたよー！！」
「ちょ、ちょっと大げさじゃねえか？ でもそう言われると嬉しいな…… 八八八」

嬉々とした様子の穴戸が言う。褒めちぎられたからか、不破は頭を掻いて照れ臭そうにしていた。

「大げさじゃないですよ。ねー、カオルちゃん」
「うんうん！ 逮捕した現場を見てみたかったなあ。私たち、ずっとモニタールームで仕事だもん。ねー、由美子さん」
「ホント今日は惜しかったわー。不破さんの勇姿を間近で見れないだなんて…… ホント残念だわ」

嬉しくてたまらない穴戸がエメラルドグリーンあの短髪の女性・落合カオルとピンクの長髪の女性・要由美子かなめ ゆみこに話題を振る。少し幼さが残っているのがカオルで、このなかで一番年上で大人っぽいのが由美子だ。この三人はとても仲良しで、休日は三人一緒にちよくちよくどこかへ遊びに行くらしい。

「八八ツ…… オレの話題で持ちきりだな。これを機にモテたらいいなあ」

「そんな不破にビッグニュースだあ！」

「な、なんだ？ 仕事の話か？ また出張しろとか言わないでくれよ」

「出張しろだなんてとんでもない。はい、コレ見てちょーらい」

村上が茶化しつつ、不破に何かを渡す。それはチケットだった。南の島をイメージしたイラストがプリントされていた。

「……こ、これはッ!?!」

「そう、そのまさか! 南国リゾート4日間の旅のチケットだーッ」

村上からそう聞いた不破がわなわなと体を震わせる。青い空、広い海、そしてピキニのお姉さんたち。彼の脳裏に次々と南の島らしい何かが浮かんでいく。そして、不破は満面の笑みを浮かべ

「……いやったああああああア!!」

興奮するあまり雄叫びを上げた。それは部屋中に反響し村上たちは思わず耳を塞いだ。

「お、落ち着け。それに君ひとりだけでバケーションしようだなんてズルいぞ。チケットはあとひとり分ある」

「なにい! なら穴戸と一緒に行ってくる! 村上、お前は留守番な!」

ベロベロバー、と不破が舌を出してバカにするような表情で村上をおちよくる。その横で不破の発言を聞いていた穴戸は、「わ、わたしと一緒に南の島ですか!?!」と驚愕していた。

「ひ、ひどいな……チケットあげたのは僕なのに」

「いいじゃねえか、要と落合がいるだろ! お前は4日間ハーレム状態を楽しみな!」

不破が言う。まるで日頃から受けている扱いへの仕返しのような。彼からすれば毎日のように村上からイジメられるのはたまったものではないし、耐えがたい。ストレスも自然と溜まってくるものだ。それが今こつやって仕返しが出来ているのだ。これほど嬉しいことがあるだろうか。

「まあいい、行くなら今日帰ってから準備しといで」

「ああ！ たつぷり楽しませてもらうぜ！ なあ、穴戸ちゃん！」

「え？ は、はいっ！ お盆は不破さんとバカンスします！」

不破に確認を取らされて穴戸が焦る。周りは思わずクスリ、と微笑んだ。その晩、不破も穴戸もせつせと旅行する準備に取り組んだという。さぞかし眠れない夜だったであろう。

EPISODE 141：騒がしい朝

その頃、京都では。

「ぐっ……ぐっ」

京都駅前のアパート・『みかづきパレス』の一室。そこでは三人の男女が寝ていた。そのうち男性は茶髪の青年が一人だけで、あとの二人は女性。片方は白い長髪に長身の大人で、太すぎず細すぎずのほどよい体つきをしていた。とくに胸が大きい。

もう片方は青紫の髪に身長120cmほどの幼い子供。華奢だが将来有望だ。元々この子供は癩毛だが、寝癩のおかげで髪の毛が凄いことになっていた。

そんな三人の周りには、荷物が詰め込まれた大きなカバンが三つ。これから旅行にでも行くこうとしているのだろうか。また、閉められたカーテンの間から外の光が射し込んでいた。もし開ければ部屋中にまぶしい光が射し込んで一気に明るくなるだろう。

「……う、うん」

三人のうち、青紫の髪の子供が目を覚ます。まだ少し眠たそうだが白い長髪の女性も少し遅れて目を覚まし、子供の方が四つん這いで彼女に近付く。

「お兄ちゃん、まだ起きてない？」と小声で白い長髪の女性に訊ねた。「まだ起きとらんの……」と女性は気だるげに小さな声で、古めかしい口調で答えた。

「そっだ、ちょっとおどかしてやるっ」

「えっ、どつやっつて?」

「それはのう……」

小声で話し合う二人。白髪の女性が顔を近づけ、青紫の髪の女の子の耳元でささやく。彼女の言葉を理解した女の子は口を細めたあと笑った。何をしようとしているのか、それはすぐに分かる。

「ZZZ……」

布団に入り、すやすやと寝息を立てている茶髪の青年。妖艶に微笑みながら、白髪の女性が微睡みの中にいる彼にそっと這い寄る。そして耳元で優しく、こもこも囁く。

「 健くん 」

彼女が耳元で青年の名を呼んだ刹那、ビクッ! とひきつられるように飛び起き、キョロキョロと辺りを見渡す。真横に白髪の女性が見たのを見つけると唾を飲んで

「あ、あああ、アルヴィー……さん……? な、なななんでまたそんな積極的な、あ、あ、アプローチを?」

「なあに、ちょっとビックリさせてやるうと思ったただけだ。のう、まり子」

「やだあ 相変わらずエッチねえ、お兄ちゃんったら」

「え? ええー!」と茶髪の青年がうろたえる。彼は名を東條健とうじょうけんという。京都市の役所に勤めているアルバイターだ。だが、それは表の顔。

裏では特殊能力を用いて戦う戦士『エスパー』として白髪の女性アルヴィーと共に町中、いや世界中にはびこる怪物『シェイド』

を退治している。

近頃になって新たに蜘蛛のシエイドが化身した青紫の髪の少女・糸居まり子も仲間に加わった。ただ、少し怪しいところが彼女にはあるのだが。

「それに私もれっきとした女だぞ。たまには女らしくしても……いい・で・しょ？」

「や、やだなあ。そんな大きなおっぱい寄せないで……ッ!? は、はうっうっ!! たまらああああああああああああああああああああああん!!」

アルヴィーが健の腕に抱きつく。その豊かな胸を寄せながら。二つの柔らかで暖かい感触に包まれて健は思わず興奮。今にも顔を真っ赤にし鼻血を噴き出して倒れそつだ。健全な日本男児なら仕方ない。

「本当なら全身から抱きつきたかったが、そんなことをしたらみゆき殿に悪い」

「や、や、やめて、仮にそんなのされたら僕悶え死んじゃうよ」

「? なぜだ？」

「想像するだけでも気持ちよすぎるからだよーッ」

興奮冷めやらぬ健。言っていることは真面目だがその目付きは少しおかしかった。興奮しすぎて目が回っていたからだ。どちらにせよスケベにはたまらないシチュエーションであることは確か。

「ねーねー、朝っぱらからそんなにエキサイトしちゃっていいの?」「へ?」

まり子が割り込むように健へ告げる。

「今日はみんなで海行くんでしょ？ 朝から興奮しっぱなしだったら、お兄ちゃん鼻血の出しすぎで死んじゃうよ」

「海……ハッ！ そうだ！ 白峯さんやみゆきたちと一緒に海行くんだった！」

まり子のその言葉で健はあることを思い出す。それは先日のことだった。以前自分ひとりだけ海洋博覧会に行かず、勝手にバカンスへ行ってしまったお詫びとして白峯が「そろそろお盆だし海まで泳ぎに行かないか」と健やみゆきたちにバケーションに行く話を持ちかけてきたのだ。

もちろん「NO」と答えられるはずがなく、二人は承諾。かくして太陽がまぶしい海辺へバカンスに行くこととなったのだ。なので昨日は帰ってきてから大急ぎで準備をした。なので三人とも疲れはてて昨晩はぐっすり眠れたというわけだ。ちなみに水着は健とみゆきは予め用意しており、他は白峯が用意する予定だとか。

「うおおーっ！ 着替えは用意できたから、あとはお茶と朝ごはんだ！ アルヴィー、どいて！」

「え？ ああ……うん」

早く準備しなければ、と思い立った健は速やかに行動を開始する。まずは布団を畳んで仕舞い、次にお茶を三人分ペットボトルに注ぎ、次は肉野菜炒めを作っておわんにごはんを盛り、次はそれらを机に置く。最後はコップに茶を入れてこれで完了だ。

「お茶、みんなの分準備できたよ！」

「う、うん」

「あとはごはん食べて歯みがきと洗顔ね！」

「わ、わかった。そうしよう」

切羽詰まった様子で健が二人に呼び掛ける。手を合わせて「いただきます!」と言ったあと、健はさっさと食べ出した。アルヴィーとまり子に「さっさと出来ない人は置いてくよ!」と催促を入れながら。

EPISODE 142 : ようこそ南来栖島へ

「あーい空、ひろーい海……そして白い砂浜。真夏の海辺は最高だな」

「夏はやっぱり海ですよね、不破さん！」

「ああ、宍戸ちゃん……君が言う通りだぜ」

太陽が燦々と照り付ける海水浴場。ビーチパラソルの下でビーチエア―に腰かける水着姿の男女。不破と宍戸だ。不破は赤色のパントのような水着で、宍戸は少しオシャレな雰囲気を漂わせる黄緑色のビキニだ。二人は村上から手渡された『南国リゾート4日間の旅』のチケットを使ってこの南来栖島みなみくるしまリゾートへバカンスに来ていたのだ。

この島は沖縄県の近海にあり、自然豊かで一年中暖かい独特の気候が特徴。海辺に町が築かれていることが多く、国内でも最大級の水族館や、この島の海や山の自然について日夜研究が続けられている観測所など様々な施設や、ボートクルーズやロープウェイなどの観光スポットも充実。大自然と人間が持つ科学が共存しているまさに夢のような島だ。

「海はいいよなあ。この島にいたら嫌なことなんて全部忘れられそうだな……」

「私もです。帰ったら村上主任にお礼言わなきゃ」

「そうだな」

大きなヤシの木と空で輝く太陽が見下ろす中、リゾート気分を満喫する二人。この地球に、いや日本に生まれてきて良かった、と、そう思い始めた矢先。

「あつ、不破さんに宍戸さん！ お二人も来てたんですね」

「ど、どおあああ〜！？」

「ふっ不破さん！？ 大丈夫ですか！？」

やってきた。『彼』がやってきた。どういうわけか東條健たけるが

みゆきや白峯に、まり子といった女性陣を引き連れてこのリゾートにやってきたのだ。みゆきはいわゆるフリフリのワンピース水着で、白峯はスイムシャツの下に爽やかな白いビキニ。

まり子は自分の名前が書かれたスクール水着だ。巨乳から並乳、貧乳までよりどりみどり。格差は厳しいものの、お互い罵倒し合ったりするわけではないのでとくに問題はない。そんな健一行が南来栖島を訪れたことに驚いた不破は、ビーチチェアからすっ飛んで上半身が砂浜に埋まってしまった。だが自力で抜け出すと、赤色の英語の文字が入ったグレーの海パン（見た目はトランクスっぽい）を穿いた健と向き合い、

「おいっ！ これはどういうことだ？ なんでお前がこの南来栖島リゾートにいる！？」

「えーっと、白峯さんから海へ泳ぎに行かないかって話を聞きました。それで」

「し、白峯さんが！？」

動揺を隠せない不破。彼へ白峯が「この前、わたし一人だけで南の島までバカンスに行っちゃったのよね。そのお詫びとして東條くんたちを泳ぎに誘ったってわけ」とバカンスに来た理由を告げる。

「そ、そうだったんですか……」

「うん。そういうことだからあなたと宍戸さんにちょっと迷惑かけちゃうかもしれないけど、ごめんね」

「い、いやいいッスよ。全然大丈夫ですから！ はい！」

納得が行ったからか不破が態度を一変させる。「東條が余計だけど、水着の女の子が増えたからまあいっか！」という心の声が聴こえた気がしたが、恐らく気のせいだろう。

「あの、ところで……アルヴィーさんは来てないんですか？」
「あつ、アルヴィーさん？ あの人なら今、水着に着替えてるわよ」
「そうだったんだ。わかりました」

よく見るとアルヴィーだけがいない。疑問に思った穴戸が白峯へ問う。するとまだ着替え中だという答えが返ってきた。時間がかかっているのだろうか。あるいは 思わず着るのをためらうほどきわどい水着なのか。どちらにせよ楽しみである。

「……あつ、アルヴィーさん来たみたいよ！」

みゆきが指差した方向から走ってきたのは 膝丈まで届く白い長髪を一本の三つ編みに束ねた、透き通るような肌の美女。胸元で布が交差しているデザインの青と白のツートンカラーのビキニを着ていた。

「お、遅れてすまな〜いっ」

そう言いながら走ってくる彼女の豊満な胸が、縦横無尽に揺れ動く。小皿に落とされたプリンが如く。

「お……おっ……おおっ！ うおおおおおっ！」
「と、東條！ はっッ！ ……ま、まるで天使、いや翼を失った女神のようだぜ……」

それを見た健が瞬く間に鼻血を噴き出して倒れ、不破はあまりの美しさにメロメロだ。男性二人だけではなく、他の女性陣も彼女のビキニ姿に見とれていた。

みゆきや白峯は頬を赤く染め、穴戸やまり子に至っては恍惚の表情まで浮かべていた。この破壊力 ある意味危険物だ。もちろん胸だけではなく、程よい体つきと腰回り、そしてむちむちした太ももも素晴らしかった。

「ど、どうだった？ 似合ってたかの？」

「す、すごいわアルヴィーさん！ きれいすぎてモデルでも通用しそうー！」

「し、シロちゃんステキーっ！ 超セクシーっ！ でも私だって負けてないもん。この旧式スク水いかすでしょ？ ふふんっ」

「わ、わたしよりおっぱい大きい……でも、これは……イイ！」
「す、スゴすぎて何も言えません！」

少し恥ずかしがるアルヴィーへ対して、女子四人。白峯、まり子、みゆき、穴戸の順だ。同じ女性をも魅了してしまうとは。やはりこの女、ただ者ではない。

「ハラシヨー！ ハラシヨーッ！！ イイおっぱあああああ
！！！」

「ゆっ、ユニバアアアアスッ！ すっぱらしいイイイイ！！」

健と不破に至っては興奮するあまり、やかましいほど雄叫びを上げていた。とくに不破は健以上にハイになっていたが、どちらにしても端から見れば変人である。

「あ、ありがとう……とても嬉しいぞ」

少し戸惑いながらも、アルヴィーは皆に礼を告げた。同時に、あのセクシーな水着を着てきた甲斐があったと実感した。

「いっくわよー！ そおれ穴戸さーん！」

「はーい！ うわっと。じゃあ次みゆきちゃーん！」

アルヴィーが来てから間もなくして海の方で女子たちによるビーチボール投げが行われた。ルールはとくにない。自分がやりたいように自由にやれ、ということだ。まずは白峯が穴戸へトス。次に穴戸がみゆきへぶつける。二人ともぶるぶると胸が揺れた。

「あいたっ！ やったわね……仕返しっ！」

「うわっ！ やられたあ……なんちゃって！」

「きゃうっ！ なんでわたしがっ！」

「まり子、遊びといえども油断は禁物だぞ？」

「むっっ」

みゆきが仕返しに穴戸へボールを投げる。ボールを当てられた穴戸は、何故かみゆきではなくまり子へと投げ返す。ボールを当てられ転倒したまり子だがすぐに起き上がり、「やったなー！ お返しよ！」とボールを穴戸へ投げつけた。穴戸に当たって跳ね返ってきたボールをアルヴィーが拾い、それをみゆきへ投げる。実に楽しそうで何よりだ。

「おおっ！ すっげえ……ボールが3つ以上もあるぞ。不破さんいくつぐらい見えました？」

「ボールが3つ？ ……ああ、そういうことか。オレが見た限りじや5つぐらいはあったな。つつか、よく見えんからお前の双眼鏡貸

せ

浅瀬で開かれた女子だけによる女子のための楽しいビーチボール。それを浜辺のシートの上から観戦している健と不破。健はともかく、いつも真面目な不破のキャラではないが、男なら仕方がない。

もつと鮮明に水着姿を拝みたい不破は、健から力づくで双眼鏡を奪おうと掴みかかる。だが健はジツと耐えて放そうとしない。

「嫌です。うおーっ！ アルヴィーもだけど、白峯さんめっちゃ揺らしてるー！」

「なにーっ！？ おらっ、早く貸せー！」

「あっ！ な、何を！」

「幸せブタ野郎め。お前にばかりいい思いはさせんぞっ！」

興奮して鼻血を出す健。我慢という我慢を重ねてきた不破はもう我慢できなくなり、ついに健から双眼鏡を奪い取ることにした。

「フォッ、フォッ、フォオオオオオオウー！！ こりゃあいい、最高だぜえ~~~~ッ！！」

結果は大成功。より鮮明に、より滑らかに躍動する女性陣の姿を見れるようになった。不破も嬉しくなって、思わず途中で声色が裏返るほどの叫び声を上げた。

「いいぞー！ みんなもつとやれ！ そして脱げエエエエー！！」

「あ、あの……不破さん」

「ポロリだ！ 誰かポロリしろおい！」

「だから不破さん……不破さんってば！」

「あ、アーン!?」

エキサイトしている不破を止めようと、健。青筋を立てながら彼の顔を見て不破は、「今お楽しみ中なんだぞ。邪魔すんな!」と健をなじった。

「むう……。不破さん、僕より酷いじゃないですか」

「なんだってえ？ オレは国家公務員だぞ。その公務員に意見するとは生意気な!」

「僕だって公務員ですよ！ さあ、早く双眼鏡を!」
「オワツ!」

と、こんな風に双眼鏡の奪い合いが続く。一方で女性陣は水遊びをしたり、旗取り競争をしたり、波打ち際で砂の城やナスカの地上絵を作ったりしてビーチサイドでの遊びを満喫していた。

「ふう。できた……。砂といえども城を建てるのは、なかなか大変だ」
「きゃーっ! アルヴィーさんすごいわあ! 砂でこんなに大きなお城を作っちゃうなんて」

「ステキい! ここに住んじゃいたいぐらいだわ!」

「さすがシロちゃんねえ!」

「そ、そう……。かの?」

とくにアルヴィーが即興で作った砂の城は大絶賛。外見だけではなく細部にもこだわっており、本物さながらの迫力だった。とくに宍戸は「住みたい」と述べており、意外と俗っぽい(?)というか、二十歳の女の子らしい一面を見せた。

そして健と不破は数十分ほど喧嘩した末に。

「やっぱりピキニのお姉さんっていいですね」

「ああ……。まるで天国だぜ、この島は」

和解して二人仲良く、ビキニの女性たちを眺めていた。青アザやタンコブが痛々しいが、今は至福のひとつだ。二人ともこういったところでは意外と気が合うらしい。

「……でもよく考えたら、オレたち蚊帳の外じゃね？」

「あ、言われてみれば……」

「仕方ねえよ、見たところ男子禁制っぽいもんな……ここは割り切るしか」

「は、はははは……はあ~~~~~っ」

落ち込んでいる場合ではない。南来栖島でのバケーションはまだ終わってはいないからだ。

EPISODE 143：露天風呂といえば

「みんな、今日はお疲れ様〜！」

「はーっ！ 今日楽しかったなあ。それにしてもこのホテルってお風呂大きいんですねー。まさに大浴場！」

「え？ どのホテルもお風呂はデカイわよ」

「そ、そうですね。わたし変なこと言っちゃった」

その晩 あれから泳ぎ疲れた一行は、ホテルの大浴場の露天風呂で一日の疲れを癒していた。ここは女湯で穴戸や白傘やみゆきは先に体をシャワーで洗い流し、アルヴィーとまり子は先に浴槽に浸かっていた。みなリラックスしており、実に楽しそうなことこの上無い。

「ねえシロちゃん、わたしの水着似合ってた〜？」

「ああ、似合ってたぞー。ってお主……この前試着したときと同じこと言つたらんか？」

「いつけない、そうだった！ あははーっ」

「やれやれ。水着を着るときはもっと自分に自信を持つんだぞ。私だってあのきわどいビキニをなんとか着こなしたんだから……」

アルヴィーは頭にタオルを巻いて、その膝丈まで伸びている白い長髪をまとめていた。湯気で隠れていてハッキリ見えないがもちろん裸だ。つまり いや、何も言うことはあるまい。例外はあるが、普通に考えて服を着て風呂に入るものはいない。

「お邪魔しまーす」

そこに体を洗ったみゆきも入ってきた。いつもはサイドテールにして纏めている髪を下ろしており、いつも元気で活発な彼女とは違う大人っぽい雰囲気を漂わせている。湯船に浸かり少し焼きもちを妬いているまり子の視線に後ろめたさを感じながら、みゆきは

「うわぁ……アルヴィーさん、やっぱり大きい。私の倍ぐらい、いやそれ以上かな」

アルヴィーの豊満な胸を見てそう呟いた。やはりというべきか、彼女の恵まれた体つきがうらやましいようだ。もつともみゆき自身はそれなりにスタイルは良いし、胸も小さくはないのだが。そもそもアルヴィーがすべてに於いて大きすぎるのである。

可も不可も無い体型のみゆきと比べてアルヴィーはほどよい肉付きをしており、均整が取れている。何より胸がデカイ。ここが重要だ。太ももや尻ならまだいいが、胸のサイズでは流石にかなわない。ここに強いコンプレックスを感じているのだ。

「ははは、よく言われるな」

「そりゃそうだもん。シロちゃんも恵まれた人だから。それに比べてみゆきさんってば……ぷっ！」

「む……言ったわねえ、こいつう〜！」

照れながら笑うアルヴィー。そんな彼女を見てコンプレックスを感じたみゆきをからかったまり子に、みゆきがお湯をかける。

「ムカつくーっ！ あんただって恵まれてないじゃない！」

「ふんだ。わたしは元々大人で恵まれてたもんねー」

まり子が（今はまだ）ない胸を張って威張る。「何をーう！」と眉をしかめてみゆきは掴みかかった。まり子は精一杯抵抗して振り

ほぐく。

「ごっつ、ごめん！ 私が悪かった！」

「いいのいいの。わかればそれでよろしい」

「お詫びといっちゃんだけどお……」

みゆきに謝ったまり子が、何故かアルヴィーを指差す。「シロちゃんにおさわりしてみない？ きつとご利益もらえるよ」とみゆきの耳元で囁くと、みゆきは「……乗った！」と承諾。いつもはいがみ合う二人は珍しく意気投合し、のんびりくつろいでいるアルヴィーを見てニヤリと笑う。

「うん……？ そんな目をしてどうしたんだ、二人とも」

獲物を前にした野獣のような目付きで、舌なめずりをするまり子とみゆき。そんな二人を見たアルヴィーがきよんとする。間もなくして二人はアルヴィーの胸に掴みかかり

「はっ！ ……や、やめてっ、……さわっちゃ、らめえええええ」

アルヴィーが悲痛な叫び声を上げた。それを聞いた白峯と穴戸は、「アルヴィーさんかわいそう……恵まれた人も楽しやないわね」「むしろ楽しそうに聞こえますけど……気のせいかなあ」と呟いた。

「ブフオオオオオツ！！ あ、アルヴィー！？ 何があったんだ！？」

アルヴィーが上げた悲鳴は男湯にも聞こえていた。ちょうどその場に居合わせていた健は大興奮。全身から蒸気を吹き出すと、事態

を確かめようと男湯と女湯の境界線に近寄る。だが遮られていても見えない。

「クソツ！ これじゃ何が起きたか分かんないよ」

「ま、待て東條！」

しきりに縁石を叩いて悔しがる健。そんな彼の手を不破が掴んで制止する。

「は、離してください！ 緊急事態なのに見て見ぬふりしろっていうんですか！？ 一緒に女湯を見たくないんですか！？」

「いいから落ち着け！ ここでハッスルしたら今晚のオカズのネタがなくなっちまうぞ！」

「おかず？ おかずなら今日は作る必要は……」

そこで健は口を止める。少しの間考えると、「あ、そういうことか」と納得した。不破が言った「オカズ」の意味は いや、説明するのは止しておこう。

「まあまあ、お若いの。ここは無理に我慢せんでもいいんじゃないか？」

「……？ 誰だ、じいさん」

そんな二人にある老人が声をかけてきた。白髪で生え際が危うく額がツルツルしていてテカテカ光っている。おまけに見るからに女好きそうな顔つき。この老人、間違いなくスケベだろう。

「わしはこの道40年！ のぞきをするまでは日本一と言われた……人呼んでのぞき仙人ぢゃ！」

老人が歌舞伎役者のように見得を切る。見た目からかなりの高齢と思われるが、元気が有り余っていて歳をまつたく感じさせない。まだまだ若いもんには負けん！ という意志が強く表れていた。

「……そ、それでおじいさん」

「バカもーん！ おじいさんではないツ！ のぞき仙人じゃッ！」

「の、のぞき仙人！ 僕たちはこれからどうすれば……」

「ふおっふおっふおっ！ そんなの簡単じゃあ、今からわしの言う通りにすればよい」

まだじい呼ばわりされたくないのか年寄り扱いした健を叱り訂正させると、のぞき仙人と名乗った老人は健と不破を垣根の近くへと案内した。

「どんな温泉にもどんな大浴場にも、女湯を覗き見できるスポットは必ずある。このホテルの場合はここが穴場じゃな」

「穴場って言いますけど」

垣根を見上げて、健。彼に続いて不破が「おいつ、じいさん！ ただの壁じゃねえか、何にも見えねーぞ」と不満を述べる。

「まあまあ、そう言わんと。ほれ、ここを見よ」

「小さな穴が開いとるじゃろう？」と老人が続ける。彼が垣根から少し立ち退くとそこには小さく穴が開いており、なんと、女湯が丸見えだった。あとは気づかれない限り、湯煙に隠れた女性のヌードがいくらかでも見放題だ。

「どうじゃ感想は？」

「せ、仙人！ これはすごいです……おっぱいもお尻も、それから

「太ももまで!!」

「じいさん、あんたスゲーな! さすがに仙人を名乗るだけのことはあるぜ!!」

「そうじゃろう、そうじゃろう」

老人を含めた三人は大興奮。とくに健は今にも鼻血を噴き出しそうだ。調子に乗った仙人は「じゃがこの程度ではまだまだ甘い!」と二人をどかす。

「何様だよジジイ! まさか独占しようってわけじゃねえだろーな!?!」

「もつとスゴいものを見せてやる! 足場を作れい!」

憤慨する不破と健にそう言い聞かせ、老人は二人に風呂桶や風呂椅子で足掛かりを作らせた。これから何をしようというのだろうか? それはすぐにわかる。

「よし、できたな。では今から足場の上へ登るのじゃ!」

老人が言う通り、二人は風呂桶と椅子で作った山へ登る。すると垣根の隙間から なんと女湯が見えたではないか。さっきの小さな穴とは違い、こちらは視界も広い。

もちろん女性の姿はより鮮明に、より美しく見える。苦勞した甲斐があつたというものだ。「仙人、ありがとうございます!」と二人は心の底から老人に感謝した。

「あはは……すごいや、みゆきもアルヴィーもまり子ちゃんも、白峯さんも穴戸さんも知らない人も……みーんな見放題だあ」

「至福のひとときだ これまでの苦勞が報われたようだぜ。本当

にありがとよ、じいさん！」

「ふおっ、ふおっ、ふおっ。礼には及ばんよ、お若いの」

ここは天国なのか？ すっかり意気投合した三人は仲良く女湯を覗いていた。巨乳から貧乳、美脚までよりどりみどりだ。湯煙で隠されてしまっているのが惜しまれる。

だが、至福のひとつきは長くは続かなかった。

「……………む？」

「どうしたの、アルヴィーさん？」

「いま誰か見えたような……………」

なんとということだろう、覗き見していることを感付かれてしまったのだ。女性陣に。すぐに隠れた三人だったがアルヴィーの鋭い感覚はごまかせなかった。

「きゃあああッ！ のぞきよー！」

「変態！ 変態！！ 変態ッ！！！」

「お主ら……………なに晒しとんじゃあああああ！！！」

女性陣からの報復は凄まじいものであった。風呂桶や湯水をぶつけられるならまだしも、激しい炎や身も凍るような吹雪まで飛んできたのだから。女湯をのぞくという下品きわまりない行為を働いた報いを受け、健と不破、そしてのぞき仙人を名乗った老人は湯船の中に雪崩れ込んで気絶した。湯船の中へダイビングが出来てさぞや気分が良かったことだろう。

「まさか健くんにあんな趣味があつたなんて……まったく、失礼しちゃうわ」

「……サイテー。村上主任に言いつけなきゃ気がすまないわ」

「あとでお灸をすえてやらんな」

「不破くんも東條くんもやりすぎよ……アルヴィーさん、お灸は思いつきりキツイのすえといて」

「わかった。不破殿はそっちに任せたぞ」

「健お兄ちゃんは、わたしとシロちゃんであつぱりお仕置きしておから。フフフッ……！」

女性陣がそれぞれ怒りを露にする。その後、健と不破がきつついお仕置きを受けたのは言うまでもない。のぞき仙人を名乗った不届き者ももちろん制裁を受けたそうだ。

EPISODE 144：行きたかった人たち

翌日、京都では

「ふあ〜っ……みんなおはよう。今日寝坊しちゃったー」

役所の執務室に茶髪の女性職員が入ってくる。薄手の長袖シャツを着ており、スカートは短め。その下にはタイツと茶色のローファ―を履いていた。彼女は浅田ちあき。ここでアルバイトをしている健の先輩だ。陽気な姉御肌で面倒見がよく、後輩からも慕われている。

「浅田さん、おはよう　電車とか混んでなかった？」

「電車は大丈夫だったよ。でもバスがダダ混みでさー……結果はご覧の通り」

はあ、とため息をつく浅田。鞆を机に置き髪を束ねると、「ジェシーさんはどう？」と自分に声をかけてきた金髪碧眼のOLに話しかける。

「私はとくに何もなかったわ」

「いいなあ、ジェシーさんはラッキーで」

金髪のOLがそう答えた。彼女はジェシーといい、浅田と同じくこのオフィスにおける健の先輩。日系ハーフの彼女はおっとりした性格で心優しく、周囲への気配りが上手い

。また、ジェシーは元々ある資産家の娘であり最初はお嬢様学校

へ通っていたが、成長するにつれて庶民の暮らしに憧れるようになっていった。

今ではすっかり社会に馴染んだ彼女だが、その育ち故か今もなお金銭感覚などが少しズレているようだ。これが原因か、しばしば周囲の人物を驚かせてしまっているようだ。本人にはとくに悪気はないのだが。

「あれ？　ところで東條くんは？」

「東條さんですか？　昨日から4日間、お友達と一緒に南来栖島へバカンスに行っているみたいよ。だからお休みみたい」

「みつ、南来栖島ですってえ！？　第二のハワイとか言われてる、あの南来栖！？」

微笑みながらジェシーが語りかける。彼女から健が旅行に行っていることを聞いた浅田は愕然とする。なぜそれほどまでにショックを受けたのだろうか。

「あら……浅田さん？」

「いいなあーっ！　うらやましいわ！　あたしもそこ行きたかったな~~~~~！」

「お金を貯めて一度行ってみたら？　きつと楽しいわよ」

「うんうん。そうさせてもらうわー！　ガイドブック見てるだけじゃつまらない。早くあのエメラルドブルーの海で泳ぎたいな」

「私も両親と毎年一回は遊びに行ってますよ」

につこりと穏やかに微笑みながら、ジェシー。浅田はまたもショックを受けた。同じ人間で同じ職場に務めているのにどうしてこうも価値観や金銭感覚、その他諸々が違うのだろうか。さすがセレブは格が違った。到底かないそうにはない。

(なんとというセレブ……あたしらじゃ中々いけない南来栖島に毎年行けるだなんてーッ！)

「浅田さん、どうしたのかしら……?」

頭を抱えて浅田が心の叫びを上げる。だがジェシーにはその叫びは届かなかつた。当たり前のことのように思えるが、それはそれでなかなか辛い。仮に相手の心を読むことができたりしたら、その時はもっと辛くなることだろう。心を読むということは便利なようで、ある意味いちばん恐ろしい。

「Oops……南来栖島がなんだって言うんだ。まだ国内じゃないですか。ソノぐらいミィからすればなんてことナツシング!」

浅田とジェシーが話し合っていた背後で、健のことを妬ましく思うものが一人。この黄色がかった茶髪の、英語の教師のような口調の男性はケニー。このオフィスの係長だ。年下でしかもバイトである健が周囲から愛されたり頼まれた仕事を何でもこなしたりと信頼を置かれているため、彼に少しばかり嫉妬している節がある。

「まあまあ、係長」

そんなケニー藤野に壮年の男性が声をかける。このオフィスのチーフである副事務長の大杉だ。気さくで人当たりが良いみんなの相談役である。心配性でまだまだ青いところが多い健にも何かとアドバイスを授けている。だが、最近生え際が危うい模様。

「そう気を落とさんと。妬んだりしないで東條くんが帰ってくるのを待とう。な?」

「そんなイージーな話じゃないんですよう……」

「エ? そうか……すまなんだ」

同日の昼、京都駅前のアパート『みかづきパレス』付近にて。袖無しの藍色のベストにドクロがプリントされた黒いシャツを着た青い髪の青年が、藤色のシャツにジーンズを履いた金髪の女性と一緒に歩いていた。二人が目指しているのは アパート『みかづきパレス』の二階にある健の自宅だ。

「イツチー、東條くんの家まだなーん？」

「もうちょいや。そうカツカせんといてえな」

眉をしかめて金髪の女性が文句を言う。イツチーと呼ばれた青い髪の男はうつかり彼女を怒らせてしまわないよう上手になだめ、ウオーキングを再開。アパートに辿り着き階段を登っていく。

「……着いたわ。東條はん家はここや！」

「ホンマなん？ ちゆうことは東條くん、あのお姉さんたちここに住んでるんやな」

ついに健の部屋の前に辿り着いた。手に持った袋の中身 たこ焼きのパックを見ながらイツチーは、「ハラ減つとるやるし、たまには差し入れせえへんとな」と笑う。

「ええこと言うやん！ ほなったら早速……お邪魔しまーす！」

トントン、と金髪の女性がドアを叩く。だが返事はない。「やっぱりこっちの方がいいんかな」とブザーを鳴らすが、返事は帰ってこない。不審に思う、イツチーと金髪の女性。

「まずったなー。ひよっとしたら東條はん、いーひんとちゃうか」
「えーっ！ それやったら意味ないやん。せつかく遊びに来たのにいーひんなんて……」
「ほなアズサ、わしいっぺん東條はんはんに電話入れてみるわ。どっか行つとつたらあきらめよう。それでええな？」

携帯電話を取り出し、金髪の女性　アズサに確認をとるイッチー。「うん、わかったわ。そうする」と真剣な顔でアズサは答えた。ガールフレンドから了解を得られたイッチーは早速、健の電話番号を入力。彼に電話をかける。

「もしもしッ！　市村やけどー!!」
「あつ、市村さん！　こんにちは！」
「東條はん！　わしアズサと一緒にあんたのアパート来てるんやけど……あんたはどこにおんねん？」
「僕ですか？　えつとねー……」

電話中、健の方からさざ波の音が漂ってきた。浜辺で水をかけたリポートで海を駆け抜けたりしてワイワイ騒ぐ声も一緒に。

「僕は今、白峯さんたちと一緒に南来栖島でバカンスしてます！」
「えっ……な、なんやて。南来栖島あ!？」
「はい！　あつたかいし、海は気持ちいいし、おいしいものもたくさんあつて楽しいですよー！」
「み、水着のねえちゃんは!?　おるんか、おらんのか!？」
「水着のお姉さんいっぱいいますよー！　ビーチに行けばビキニも見放題！　巨乳からまな板、美脚までよりどりみどりですよー!」
「なんやてえ!?!　お前さんばっかりいい思いしよつてからに!」

「お手数かけますけど3日後には帰るので……それじゃあ、また！」
「ちよ、待たんかい東條はんツ……」

そこで健からの電話は切れた。嫌な予感はしていたがまさか南来
栖島リゾートへ遊びに行っていたとは思わなかった。口をあん
ぐりと開けてイッチーこと市村は愕然とし、アズサはハトが豆鉄砲
を食らったようななんとも言えない表情を浮かべていた。

「……帰ろ、イッチー」

「うん……」

「南来栖島か」。ウチもいつか行ってみたいなあ……」

南来栖島といえば国内でも有数のリゾート地だ。だが費用は高い
し、行こうと思ってもそうそう行けない。失意のまま、たこ焼きが
入った袋を持って二人はアパートをあとにした。いつかは遊びに行
きたいという淡い思いを胸に抱いて。

EPISODE 145：貝殻集めとカニ怪人

「よし、今日も思い切り遊ぶわよー！」
「おー！」

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまつもの。南来栖島に来て2日目、健たちはまたビーチへ泳ぎに来ていた。白峯をはじめ、みんなとても楽しそうだ。健と不破はのぞきの件で十分反省し、一緒に泳ぐことを許してもらえた。ただ、代わりに今後は自重するようにとキツく叱られていたが。

「それじゃ白峯さん、何して遊びます？」
「そうねー……うーんと」

健からそう聞かれて白峯が顎に手を当てる。周囲も「何して遊ぶんだろう」と少し落ち着かない様子だった。少し経って白峯が何か思いつき、「じゃあこうしましよー！」

「みんなで貝殻拾いませよ。いちばん多く集められた人が優勝ね」
「あつ、貝殻集めですか？ やるやる、やるー！」
「僕も！」
「わたしもー！」
「オレもツス！」
「混ぜて混ぜてー！」
「よし、私もふるって参加してみようかの」

穴戸、健、みゆき、不破が嬉々として手を挙げる。遅れてしまわないようにまり子とアルヴィーも拳手し、かくして貝殻拾い競争が幕を開けた。

「うし！ 大漁大漁！」

「やった、一度に三つも手に入った！」

「貝じゃないけどヒトデ見つけたよ！」

「おいおい！ それ関係ないから！」

不破や健のように真面目に貝を探して大量に手に入れるものもいれば、まり子のように貝そっちのけでヒトデを捨てるものもいた。この浅瀬には貝殻やヒトデが多い。海中に潜って辺りを見渡していれば嫌でも見つかるのだ。

「いいわね〜！ みんなその調子よ！ けどあたし、でっかいの見つけちゃうんだからね」

「やば……。このままじゃ負けちゃう！」

「じゃあみゆきちゃん、一緒に集めましょ」

「ハイ！ よろこんで！」

もちろんあの三人だけでなく、白峯やみゆきに穴戸も楽しんでいった。白峯は他のものを応援しながら自身も貝殻を掻き集め、みゆきと穴戸は共同戦線を結ぶ。このままでは負けてしまうと、お互いに少し焦っていた。賢明な判断だ。

「こっちはハズレだな。砂利と石ばっかりだ……」

その一方、アルヴィーは難航していた。確かにこの浅瀬は貝殻が良く流れている。だが全体に埋まっているとは限らない。中には石ばかりの区域もある。彼女は今、ハズレを引いてしまったので当たりを探しているのだ。

「少しだけでもいい、見つからんかのう」

少し心配になって、アルヴィー。少し深いところに潜れば見つかるかもしれない。そう思いながら彼女は潜る。見つけたのは砂にへばりつくヒトデと海中を流れゆく藻。巻貝や小さな二枚貝も散らばっていた。

「おお……っ」

砂の中から目（あるいは触覚）だけを出して様子を伺っているよな何かもいたが　彼女の興味はそちらには向けられていない。アルヴィーが注目していたのは自分の体より少し大きな貝を背負って歩くカニのような生き物。

おなじみヤドカリだ。成長するにつれて別の貝を探し、それを背負う。これを繰り返して生きていく個性的な甲殻類だ。まるで玩具屋で面白そうなオモチャでも見つけた子供のように目を輝かせ、アルヴィーはてくてくと底を歩くヤドカリを驚ぶかみ。

「ヤドカリ見つけたぞー！」

ヤドカリはアルヴィーの手から逃げ切れずそのまま捕獲に成功。嬉々とした様子で水面に上がり思わず叫ぶと、皆がいる浅い部分まで向かっていった。

「や、ヤドカリ？　すごいじゃない！　見せて見せて」

「ほら、こいつだ。なかなか愛くるしい……」

手の中でうずくまるヤドカリを白峯が見つめる。「すごい……確かにカワイイ」と呟いた直後、「アルヴィーさんがヤドカリ見つけたそうよ！　みんなも見に来てごらん」と他の五人に呼びかけた。この珍しい体験を一人占めするのは流石にずるいと思ったのだろう。

「すっげーヤドカリだ！ 生で見るの初めてなんだよね。やるじゃんアルヴィー！」

水中メガネを外してヤドカリを見た健が一言。目を輝かせたり飛び跳ねたりなどして、幼少時代に戻ったかのように大はしゃぎしていた。

「しかしヤドカリとはまーた珍しいのを拾ってきたな。いや、海ならどこにでもいるよな……」

感心を示しながらも顎に手を当てる不破。確かにどこにでもいるが。

「結構かわいいよね〜！」

「ああ、そうだな。このまま飼いたいぐらいだ」

「入ってる貝も大きいし、シロちゃん勝ちでいいんじゃないかな〜？」

まり子が微笑みながら提案する。隣にいたみゆきは「まず白峯さんに聞いてみましょう。アルヴィーさんの勝ちでもいいですか？」と白峯に持ちかける。「うーん」と少し難色を示すもすぐに笑みを浮かべ、

「うーん。貝の質じゃなくて量で決めたかったんだけどね……まあいっつか！ アルヴィーさんの勝ちです、おめでとう！」

深いところまでわざわざ潜りに行ったアルヴィーを優勝へ導いた。彼女の勝利を讃えるように健たちは歓声を上げ、盛大な拍手をアルヴィーに送った。たまにはちやほやされるのも悪くないと、ア

ルヴィーはちよっぴり嬉しくなった。

しかし、実はアルヴィーには引つかかることがあった。先程見かけた触覚のような謎の物体だ。アレは新種の魚か何かの目だったのだろうか？ それとも。嫌な予感がしてならない。

「ひゃあ!？」

「ま、まり子ちゃんっ!？」

予感的中した。まり子の周囲で急に水柱が吹き上がったかと思えば、その中から何者かが飛び出てきたではないか。何者かはまり子の動きを左腕で封じると彼女の喉に巨大なハサミをあてがい、そのまま人質にする。

「やめてよ……その手を離しなさいよ！」

「フンッ」

まり子の人質に取ったのは、体の色がオレンジ色で右手が大きなハサミのような形になっているカニのような怪人。全身が鎧のような硬い殻に覆われており少々いかつく、それでいて若干鋭い。頭部からは触覚が生えており、鋭い目は緑色に光っていた。

標準的な体型ながらも全体的に堅牢かつ重厚な雰囲気を漂わせており、ロボットか、あるいはパワードスーツを連想させる。恐らく先程アルヴィーが見かけた目のような触覚の持ち主だろう。

「誰だお前は!？」

「黙って戦え！」

健が問う。だがカニの怪人は聞く耳を持たず、右腕のハサミからレーザーを発射。爆風と共に水しぶきを吹き上げ、健たちを遠ざける。

「あいつ、あのチビを連れさらう気か？」

「わかりません。ただ、どっちにしてもほっといたらマズいですよ！」

いきなり現れたカニのシェイドを前に緊迫しながら、不破と健はどこからともなくお互いの武器を取り出す。不破はランスとバックラーを携え、健は長剣と盾を携えた。準備は万端だ。

「健、気をつける。そやつはヴァニティ・フェアかも知れんぞ！」

「わかった。アルヴィー、みゆきや白峯さん達のこと頼んだよ！」

「承知した！」

みゆき達のことをアルヴィーに託し、健はカニの怪人目掛けて走っていく。もがくまり子を拘束したまま、カニの怪人は右腕からレーザーを発射。その中を切り抜けてカニ怪人の懐に飛び込み、一発斬りつける。

「どうした、そんなものかあ？」

「何ッ!？」

「おらよ!！」

だがカニの怪人はビクともしない。それどころか健の攻撃を弾き、ひるんだ隙を見計らって右手のハサミで殴り飛ばした。水面に叩きつけられてまり子が「お兄ちゃん!？」と悲鳴を上げるが、健は立ち上がり再び武器を構える。これしきのことではこたれない健の姿を見て、まり子は安堵した。

「バカめ。そんなナマクラがこのカルキノスに通じると思ったら、大間違いだ!！」

勝ち誇った気になるカルキノス。だが気を抜いた隙に「むっつ」と眉をしかめたまり子に左腕に噛みつかれ、あまりの激痛に悶えている隙に逃げられてしまう。「くそ、逃がすか！」と走り出すカルキノスだが、彼をすれ違いざまに不破が攻撃を加えて妨害する。

「不破さん！」

「勘違いすんな。そのチビを助けようと思ったわけじゃない。このカニ男を倒したいだけだ」

「フフツ。意地張るなんて素直じゃないのね。そういうところかわいいわよ」

健のそばでくすり、とまり子が笑う。「う、うっさい！ そんなんじゃないよえよ！」と不破は少し照れながら即座に否定した。

「ちっ！ ……今の無防備なお前ら相手ならラクに殺せると思ったんだが、今日は分が悪い。ここはいったん退くか」

「逃がすかよ！」

舌打ちするカルキノス。不破は退却しようとする彼を超高速で追うが、「鬱陶しい！」とカルキノスはハサミを叩きつけて不破を落とす。更に「これでも食らえ！」と口から大量に泡を吐き出し、それを爆裂させて目くらまし。戸惑っている隙を突いてカルキノスは逃亡した。

「しまった！ 逃げられた……」

「まあいいさ。どうせまた出てくるだろ……うっ」

何はともあれ戦いは終わった。武器を仕舞う二人だが、突然不破が右肩を押さえて悶える。よく見ると右肩から血を流していた。

「大丈夫ですか!？」

「このくらい何ともない。お前はどうかなんだ？」

「僕なら大丈夫です」

「なら安心だな」と、不破。彼の肩を持って健はアルヴィー達の元へ戻る。

「しかしあいつ……何だったんだろう?」

「分らん。ただ、ひよつとするとヴァニティ・フェアが絡んでいるかもしれん。今後も気をつけたほうが良さそうだ」

腕を組みながらアルヴィーが催促する。しかし健の視線は主にアルヴィーの胸へ向けられていた。無理もない、彼女が今身につけているのは際どいデザインの水着。彼女の豊かな胸元を強調しているのだからどうしても目が行ってしまう。これが煩惱か。

(しっかし色っぺえなあ……ひひひ)

「ん? 健、今の話聞いておったか？」

「え? あ、ああもちろん! ちゃんと聞いてましたよ、ええ!

お、おっぱいばかり見てたわけじゃないからね!」

などと健は供述しているが、バレバレだ。その証拠に彼の目は泳いでいた。聞くところによると、右利きの人間は嘘をついているときに瞳が右上に泳いでいくのだという。健は右利きだ。ということはいや、それはもう分かりきったことだ。あえて何も言うまい。

「フツッ! そんなこと言っちゃって。バレバレよ、お兄ちゃん」

「ち、違っつてば! いやホントに!」

「ははは、こいつめ。顔に私はスケベですって書いてあるぞ?」

まり子とアルヴィーにそのことを見透かされ健は慌ててそれを否定。あまりに必死だった為か不破はバカ笑いし、みゆきと穴戸は笑うのを堪え、白峯は腹を抱えてケラケラと大笑い。このように周囲には笑いの渦が巻き起こっていた。

「ひ、ひどいよみんな……は、ははは」

苦笑いしながら、健。と、その時彼の腹の虫が鳴った。健だけではなくみゆきも不破も、穴戸も白峯も、そしてアルヴィーとまり子も。

「……みんな、おなか空いてきた？」

念のため確認をとる白峯。すると全員が首を縦に振った。考えていることはみな同じということだろうか。

「そっか。それじゃあみんな、海の家行きましょうか」

「はい！」

「ただし、不破くんは先にケガを手当てしてからね」

「へーい……」

EPISODE 145：貝殻集めとカニ怪人（後書き）

水着回はまだまだ続きます。

カニはまだくたばってないからまた出るかもしれない…

あ、人気投票はアルヴィーさんが独走中よん

EPISODE 146：お食事はシーサイドで

「ねえねえ、みんな昼からどこ行く〜？」

「うーん、どうしよっかなあ。海では散々泳いだし……」

突然襲いかかってきたカニの怪人　カルキノスを撃退したあと、健たちは海の家で昼食をとっていた。もちろんそれだけではなく、今後の予定も考えながら。ちなみに不破は今、近くの診療所で傷の手当てをしてもらっている。とはいえ、それほど深い傷ではなかった。なので診察はすぐに終わるだろう。

「この島って他に何か、観光スポットってありましたっけ？」

カレーライスを食べながら、健が白峯へ問う。エビやイカなどの海ならではの食材を使った味がちょっぴり嬉しい。

「結構あるみたいよ。ほら、これ見て」

白峯がそう言って観光客用のパンフレットを渡す。彼女は焼きそばを食べていた。白峯の右隣では穴戸が「おいしい！　おいしい！　」としきりに感激しながらラーメンをすすっている。

左隣では、健と同じくカレーライスを嬉々とした様子で食べているみゆきの姿。しかも何故か大盛りだ。なぜ大盛りなのだろうか？　カレーが好きなのはイエローなのに。彼女は色的にはパープルあるいはバイオレットなのに。

「ふんふん。水族館にロープウェイ、ハイキングに商店街で食べ歩きかー……」

「どこも楽しそうなの〜」

この海の家の名物であるイカスミススパゲッティを食べながら、アルヴィー。はじめて食べた味だからかとても美味しそうに食べていた。

「わぁー！ このカレーおいしいっ」

「……あれ？ みゆきってそんなにカレー好きだったっけ？」

みゆきの声を聞いて健がパンフレットを下ろす。自分も同じものをたいそう嬉しそうに味わっておきながら、何故か彼は戸惑っていた。

「健くん、もしかしてカレーが好きなのはイエローだけだっと思ってない？」

「いや全然！」

みゆきから問われたことを即効で否定する健。アルヴィーたちは思わず笑ってしまった。

「な、何がおかしいのさ!？」

「なんでもない、なんでもない。それより早よう食わねばせっかくのメシが冷めてしまうぞ？」

「……そうだった！」

アルヴィーから指摘を受けてそのことに気付いた健はパンフレットを白紙に返却。カレーを食べることに専念した。割と早く食べ終わってしまうことから、時折カレーは飲み物だと言われるが、あたながち間違っではない。現に健は早くも完食してしまった。

「……お、お兄ちゃん？ 大丈夫？ よく噛んだ？」
「うっぷ……だ、大丈夫だあ」

食べかけのフランクフルトを手にしながら、まり子。彼女は普段食事に關して健からたびたび注意を受けていたが、まさか自分が心配する側になってしまふとは思ひもしなかつただろう。周りがやや心配そうにしている一方、宍戸は相変わらず。

「このラーメンおいしくっ！ おかわりしようかなあ」

相変わらずラーメンをすすっていた。

食後に昼からどうするかを話し合った結果、白峯の提案により水着から普段着に着替えてから町の中を見て回る事となった。そのときにお土産を買ってもいいらしい。

なお、他には水族館に行く案やロープウェイに乗って山へ行く案も上がったがそれらは明日へ持ち越しとなった。

「よし、全員そろったわねー」

ホテルのロビーにて。着替え終わった健たちを見て、白峯。薄手の白い上着の下には半袖の紫のシャツを着ていた。その下には黒いジーンズ。

実に動きやすい服装だ。他のものも文字がプリントされたTシャツや袖を捲った薄手の長袖、涼しげなワンピースシャツなど各人思い思いの服装をしていた。

「準備はいいわね。それじゃー、町の中を探検しましょう」

「おーっ！」

白峯の言葉を合図に呼応するように、全員手を上げてから出発。ホテルの外に出て太陽光を浴びると、楽しく快適なウォーキングが幕を開けた。果たしていいお土産は見つかるだろうか。新しい出会いはあるだろうか？

「……あいつら、ずいぶんノンキに過ごしてるよなあ」

その様子を陰から見ているものがいた。先程ビーチで健たちに襲いかかるも撃退されたカニのシェイド　カルキノスだ。

「でもああ見えて結構手強いんだよなあ。辰巳さん、いかがいたしましうか」

心配そうなカルキノスが後ろを向くと、ウミヘビのような姿をしたもう一体の怪人　辰巳が姿を現した。両肩が蛇の頭になっており、首がいくつもあるその姿はまるでギリシャ神話に登場する無限の再生能力を誇る不死身の毒蛇　ヒュドラを彷彿させる。胴体が水色、右腕が紫で左腕が緑という極彩色の体が何とも毒々しい。

「功を焦るな、バイトくん。何も無理して連中がこの島にいるうちに倒す必要はない」

「え？」

「今は待て。奴らが本土に戻ってからでも仕掛けることはいつでも出来る」

「へへへ……そうツスよねえ」

これはいいことを聞いた。今は力を蓄えておくか、とカルキ

ノスがほくそ笑む。だが二人はまだ気付いていなかった。たまたま近くにいたちびっこにその光景を目撃されていたことに。

「……およ?」

ツンツン、と木の枝で小突かれたような感覚がカルキノスに走る。辰巳に今触ったかどうかを聞くが、辰巳には身に覚えがない。じゃあ誰かと振り返ると、そこにいたのはちびっこ二人。どちらもいたずらが好きそうな男の子だ。

「あ、兜ライダーの怪人みたい!」

「ホントだ、こいつらみたいなの出てきたよね」

どうやら二人は、辰巳とカルキノスの特撮番組の怪人と見間違えているようだ。しかも全然怖がっていない。二人ともベクトルは違えど、結構威圧感のある外見なのだ。

「(……どうします?)」

「(いや、私に聞かれてもな……)」

ひっそりと話し合うカルキノスと辰巳。どうやら少し反応に困っているようだ。

「(とりあえず追いついておくか)」

「(はい、賛成です)」

「あれ、なんか話し合ってるぞー」

「世界を侵略するための作戦でも立ててるんじゃない?」

まったく物怖じしないちびっこ二人。だがしかし。

「ウガーツ！ 悪い子はいねえがあ〜！」
「悪い子は食っちまうぞーッ！！！」

突然手を上げて唸り出すカルキノスと辰巳。面倒くさくなったので泣く子も黙るなまはげの真似を試みただけだが 効果は絶大。

「ひえええええ！！ ご、ごめんなさーいーい！！！」

ちびっこ二人は怖くなって逃げ出した。

「やっべー、みんなまだいるかな。早く行かなきゃ怒られちまう」

その頃、手当てをしてもらった不破は健たちがいるはずの海の家へ大急ぎで向かったが。

「あれ？ みんないないぞ……」

不破は目を丸くした。そこに健たちはいなかった。既にどこかへ行ってしまったあとだったのだ。

「どこ行っちゃったんだよ、おーい……」

EPISODE 146：お食事はシーサイドで（後書き）

Q&Aコーナー

Q：南来栖島に雪は降りますか？

A：一年中夏なので降りません。冬になっても少し涼しくなるだけなのでとても過ごしやすいですよ。

Q：健たちが寄っていた海の家のおすすめメニューは？

A：イカスミスパゲッティがおいしいそうですよ。個人的にはシーフードカレーもおいしいので、一度お召し上がりになってはいかがでしょうか。

Q：イツチーは？

A：そんな人知らん

Q：伊東さんは？

A：伊東四郎さんなら今頃モヤツとボールを…いやなんでもない。

EPISODE 147：みやげを求めて

健たちが訪れたその町の中にはいくつもの露店が建ち並ぶ。団子屋や饅頭の店などがあり、屋根は瓦で壁は木造。今より昔の時代に戻ったような懐かしい雰囲気か漂っていた。

「うわぁ……お店いっぱいあるなぁ。どこで何買おう」

辺りを見渡し、あまりに多種多様な売り物を見て健が迷う。元々優柔不断なものだから、何を買うかすぐには決められない。

「まあまあ、東條くん。そんなに慌てなくてもいいわよ？」

「は、はい」

「まだ時間はたっぷりあるから、歩きながらゆっくり考えましょ」

「そ、そうします」

白峯が言うように時間はまだまだたくさんある。金にも余裕がある。ひとまず後回しにして健はウォーキングを再開した。

「しかし本当にお店が多いのねー。健くんが迷うのも無理ないか」

「ふーん。そういうみゆきさんも迷いそうに見えるけど」

「えっ？ な、なんでよ」

「わたしには見えるよ？ 将来買いきでピンポーになっちゃう

みゆきさんが……フツッ」

「あ、あんたねえ！ 縁起でもないこと言わないの！」

「うそっそ。ごめんねえ」

「もう……」

みゆきをからかうまり子。お互い憎まれ口を叩いてはいるが、な

んだかんだ言って嫌いというわけではない。むしろ本心では仲良くやりたいと思っっているくらいだ。同じ恵まれなかったもの同士で仲良くやっていけるだろう。

「ところで皆さん、のど乾いてませんか？」

「いや、私は大丈夫だが……」

「どうしたの、宍戸さん？」

「あたし、さっきラーメン食べたじゃないですか。その時にスープ飲みすぎちゃって……」

ウォーキングの途中で宍戸がへたる。どうやらのどが乾いたようだ。更にペットボトルの中身も飲み干してしまったらしい。これは危険だ。

「そっか……それじゃあ仕方ないわね」

右手を口に添え、少し難しそうな顔をする白峯。他のものも「確かにのど乾いたよね」、「どうする？　そろそろ休ませてもらう？」などと話し合っていた。だが事を決めるのは彼らではない。すべては一行を引率している白峯の判断しだいだ。それですべてが決まる。

「よし！　みんな結構歩いたよね？　ちょっと疲れてきただろうし、ここらで一休みしましょう」

彼女の言葉を聞いて健たちは歓声を上げる。言い出しっぺの宍戸は「ありがとうございます！」と彼女への気遣いに感謝した。

「ふう〜」

ちょうど近くにあったお土産屋で健たちは休憩をとることとなった。飲み物も売ってあったので、一行はお茶やジュースを欠かさず購入。今は非常に蒸し暑いシーズンゆえ、水分はしっかりと補給しなければならぬ。賢明な判断だ。

「うわっ、超うっめー！ ここのソフトクリームはおいしいなあ」

みゆきや宍戸に白峯がお土産を見て回っている中、健はアルヴィーやまり子と三人でソフトクリームを食べていた。バニラ味で地元の牛からしぼった牛乳から作られており、とてもおいしい。「やっぱりソフトクリームはバニラ味だね。みゆき達も食べたらいいに」と健が呟く。

「まあ、良いではないか。先にみやげを買っておけば、その分ゆっくり出来るからもう」

同じくバニラ味のソフトクリームを食べながら、アルヴィー。一口食べた瞬間、彼女は「……うまい！」と感激したという。やはり彼女もバニラが好きなようだ。でもその胸はもっとおいしいはずいや、何でもない。

「それにしてもこの島のソフトはうまい！ 溶ける前に食べんな」
彼女が絶賛しているように、それほどこのソフトクリームはうまい。「人気商品につき、売り切れごめん！」と掲示されているのも頷ける。それにこの島は一年中暖かい気候のため、余計に売れるというわけだ。

「……」

だが、まり子は少し浮かぬ顔をして食べていた。別にまずいわけではない。惜しんでいるのだ、この島へ来るまでに大人の姿になれなかったことを。

「なんだかな〜」

「あれ？ まり子ちゃん、食べないの？ ソフトクリーム溶けちゃうよ」

「え？ あ、ああ、た、食べる！ 食べるよもちろん！」

健から催促され慌ててソフトクリームを食べ出す。彼女の口の中でバニラが少しずつ、じつくりととろけていく。そして「おいしい」「とまり子は喜ぶ。やはりうまかった。甘いものを食べて嬉しくなってしまうのも無理はない。だって女の子だもの。」

「ふーっ、おいしかった」

「暑いときに食べるアイスは絶品だの」

「うんうん！」

ソフトクリームを完食し、立ち上がる三人。いざ土産を買いに行こうとするが 何故かまり子はため息を吐く。

「……まり子ちゃん？ まだ元気でない？」

「いや、そういうわけじゃなくて……。もしわたしが今元の姿に戻ってたら、もっと楽しかったのになーって思ってたさ」

「言われてみりゃあ、確かに……」

もしまり子が大人の姿でこの南来栖島に来ていたらどうなっていただろうか？ 健とまり子、双方がその光景を妄想する。

まずビキニを着ていて、もちろん胸はデカイ。髪は足下に着きそうな超ロング。どちらもボリウムたっぷりだ。それだけではなく体型もグラマラスでスタイル抜群だろうし、そうなれば野郎共の視線は釘付け。

当然まり子が大好きな健もメロメロだ。敵対している不破もメロメロ状態になって「すみませんでした！ これまでのことはすべて謝ります。好きです、まり子ちゃん！」と頭を下げつつ言い寄ってくるだろう。

まあまず、そんなことはありえないだろうが。どっちにしても大人になったまり子が魅力的であることに変わりはない。きつとポロリもあるだろう。更にアルヴィーやみゆきとトリオを組めば効果は倍増。日本中、いや世界中が虜になるだろう。

思わず健も「ええやないかええやないか、ゲヘヘ」と下品かつ淫らに笑っていた。更によだれも垂らしていて、とても普段の真面目で誠実な姿からは想像もつかない。

「たまんないねえまり子ちゃん……」

「フフツ！ やっぱり思う？」

とても想像力豊かで感心してしまいそうだ。だが、みゆきがそんな彼を指で小突いて妄想から現実へ戻す。

「健くん……自重っていう言葉知ってるかな？」

鬼の形相で語りかけるみゆき。彼女の背後には禍々しくどす黒いオーラが立っていた。周囲は「さすがに庇いきれんな……」「もう知らないっ」「男の人って……」「昨日注意したばつかなのに」「お土産なにかないかな」と知らんぷり。もはや逃げ場はない。

「あ、あの……みゆ……き？」

「昨日白峯さんから注意されたばかりだったよね……?」

「いや、あの、その、アレはね……」

「身の程をわきまえるこのエロガキがああああ!!」

ここから先はとても恐ろしい状態ゆえ、あえてお見せしないでおく。ただひとつだけ言えることは、女は怖いということだ。

「まったくリビドー旺盛なんだから……」

「す、すみませんでした」

「次から気を付けてよー?」

「う、うん……そうする」

腕を組みながらみゆきが仏頂面を浮かべる。彼女のうしろにいる健の頭にはいくつもたんこぶが連なっており、見るからに悲惨で痛々しい。

周りからは「だ、大丈夫?」「痛くない?」と心配されていた。

ちなみに土産は買いそびれた。だが明日は水族館かロープウェイのどちらかには確実に行けそうなので、そこで買おうと健は決心した。

「おっ! 見るよ見るよ! べっぴんさんがいっぱいだけ」

「ホントだ! ナンパしようぜ! ナンパナンパ!!」

そこへチャラチャラした雰囲気の人相の悪い若い男性が二人通りかかる。彼らはたまたま近くにいたみゆき達を見つけると彼女に絡み出す。露骨に嫌らしい目で見ながら。

「へい、彼女! お茶しない?」

「やだ……ちょっと、離してよ!」

「そう言わないですよ。いい店知ってるんだよなあ。一緒にどうだい、お嬢ちゃん」
「離してっばー！」

もがいてチャラ男の腕を振りほどこうとするみゆき。だが相手は離さず。

「そうだ、うしろのお姉さま方もちょっと楽しいところ行ってみない？」

「きつと楽しいぜえー」

調子に乗ったチャラ男二人は更に白峯や穴戸らにも絡む。「ただし野郎とお子ちゃま以外ね」と余計な一言を加えて。

「ちよつと……や、やめてください！」

「やめてよ！ その手をどけて！」

「毎日仕事や学校で疲れてるんでしょー？」

「オレらが癒してあげっからついでよー！」

穴戸と白峯が絡んでくるチャラ男に反発。更に増援としてもう一人現れてアルヴィーに絡むが、彼女に鉄拳で制裁され呆気なくのびた。

「あいつら……ふざけるのも大概にしろ！」

「一発痛い目を見せてやらねばな」

怒りを隠しきれない健とアルヴィー。眉をひそめ、拳を震わせて前へ出ようとするが 何故かその前にまり子が立ちはだかり二人を制止する。

「ま、まり子ちゃん」

「……お兄ちゃんとシロちゃんは下がってて」

背中を向けたまままり子が健とアルヴィーへ言い放つ。少し声色が違う。いつものような明るくかわいらしいものではなく冷酷で傲慢な女王のようだった。目を伏せた冷たい表情を浮かべながらまり子はチャラ男に絡まれた穴戸の白峯のもとへゆっくり歩いていく。

「その人たちを離して。これは命令よ」

「まり子ちゃん……？」

「あん？ なんだこのチビ、えらそーに」

言葉にできない何かを感じたか、穴戸と白峯の顔が少しひきつる。チャラ男たちはまり子の言葉に耳を傾けず。

「はいはい帰った帰った！ お前みたいながキンちよはおうちに帰ってママのおっぱいでも吸ってな！」

「十年ぐらい経ったらまたおいでー！ そんなときはたっぷり遊んであげるからさ」

チャラ男が下品に笑いながらまり子をなじる。彼女の正体も知らず、なんと哀れなのだろう。

「……へえ、そんなこと言っちゃっていいの？ わたし、こう見えても 怒ったら怖いわよ」

「うはっ！ なあおい、今の聞いたか？」

「怒ったら怖いってさ！ オレらの方が怖いっての！ ぎゃはははははー！」

「フフフツ……本当に命知らずなのね」

チャラ男二人がバカ笑いする。そんな愚か者二人を見て冷たい笑みを浮かべたかと思っただら、次の瞬間にチャラ男の体が独りでに浮かび上がった。

「きゃあっ！」

「う……うそ!？」

穴戸と白峯が驚愕。他のものも宙を見上げて目を丸くする。それだけでは終わらず 片方は地面へ激しく叩きつけられ、もう片方は右胸に何かを突き刺された。それは まり子の胴回りほどもある巨大な蜘蛛の脚。先端からは赤い血が滴り落ちている。

「調子に乗るな」

無表情で、いつもより低い声で冷たく彼女は囁いた。

EPISODE 148：クモ女の氷解

「ぜえ、ぜえ……やっと追いついたぜ」

まり子があのようなことをしていることなどまだ知らず、不破は健たちがいる町の中へと駆け込んだ。そしてようやく見つけたのだが。

「あいつらこんなところに来てやがったのか……うん？」

彼が目撃したのは、チャラチャラした男が胸に何かを突き刺されて持ち上げられている光景。それを見上げて戦慄している健たち。そして　チャラ男たちを冷徹なまでに追い込んでいたまり子。

「おい……どういうことだよ、これは……！」

「ひいっ、あ、あああああ……は、離してくれえ！！」

苦痛にあえぐ男。地べたへ叩きつけられたもう片方もひどく怯えながら相方を見ていた。だがまり子はそんな彼らの痛々しい姿を見ても　微動だにしない。

「フフツ……あなたもバカよねえ。ああいうことするからモテないのに、それに気付かないで続けるなんて。可哀想すぎて笑えるわあ」

あまりに残虐。あまりに冷酷。そして非情。これが周囲に笑顔を振りまいている彼女の本性なのか？　ただ震えるしか、ただ戦

慄を覚えるしか他のものには出来なかった。

「う…………げえええ」

そこでまり子の背中から出ていた蜘蛛の脚が引つ込み、持ち上げられていたチャラ男が地面に落ちる。右胸から流血している姿がなんとむごい。

「ねえ、今どんな気持ち？ 痛かった？ 痛くないわけないよね」

「ば、バケモノ…………！」

「なんなんだ…………なんなんだよこいつは!？」

チャラ男二人が恐慌する。ゆっくりと歩み寄ると片方の顔を蹴飛ばし、もう片方の胸を踏みつける。手を広げさせると蜘蛛の脚を手のひらへ杭のように突き立てて、動けなくする。

「ひいひいっ！」

「あはは、すごーい！ まだ息があるなんて…………大したものね」

「た…………たすけて…………」

「あなたのような奴はクズよ。クズが生きてる意味なんてないの」

見下すような視線を浴びせながら、まり子が妖しく微笑む。

「や、やめ…………！」

怯える男。彼の眼前でまり子が手のひらをかざすと紫色の禍々しい光が収束。底知れない恐怖を感じたもう片方は逃げ出してしまった。逃げた方には目もくれず、まり子は

「……死になさい」

自分が踏んでいた男を吹き飛ばそうとした。だが 健が駆け寄り「やめろ！ やめるんだ！」とそれを止めようとする。

「お兄ちゃん……？」

まり子の手がピタリと止まり、蜘蛛の脚も引っ込んだ。騎乗していた男からどかさね、「な、何するの？」と彼女は戸惑う。

「……お、お助けエエエ！！」

血まみれになった状態で男は逃走。アルヴィーにのされた方もようやく起き上がり、身の危険を察知すると情けない悲鳴を上げて逃げ出した。何とか惨劇は免れたが、周囲にいたみゆき達は何も言葉が出なかった。しゃべれなかった。

「……ごめん。気持ちはわかる。けど、あんなことしちゃダメだよ」
「なんで……？ なんでダメなの？ あいつらみゆきさん達に酷いことしたのよ」
「だけど……」

恐らくまり子は良かれと思ってやったのだろう。あのチンピラ二人が許せなかったのだろう。だが、だからといってあんなことを見ず見す許してはいけない。咎めなければ。

「おい、クモ女……！！ お前いい加減にしろよ」

そこに不破が割って入る。彼もまた健と同じようなことを考えていた。突然現れた彼を見て、みゆき達は「ふ、不破さん……いつの間にも」「ちよつと怖い」「ケガ大丈夫かな……」など、驚きを隠せなかった。

「また誰か殺す気だったんだろ！　そうやって人の命を奪うのは楽しいのか？　だいたい、お前は命つてもんの大切さが……」

「ま、待って！　落ち着いてください、不破さん！」

憤る不破。うしろにいたまり子が彼を睨み付けあわや乱闘になりそうだったが、健が不破を制止。

「邪魔立てする気か、東條！？　お前は何もわかつちやいない！」

そいつは魔女だ。周りを不幸にした挙句呪い殺す魔女なんだ……！

「さっきの件は僕が解決します。まり子ちゃんにも僕から言っておきます。だから今は下がってください！」

「ッ……わかった。だがあまり甘やかすなよ！」

不破は渋々それを承諾。苦い表情を浮かべながらも身を引いた。

「……すみません、白峯さん。ちよつと席外します」

「えっ？　べ、別にいいけど」

「ありがとうございます。行こう、まり子ちゃん」

白峯から許可をもらい、健はまり子の手を掴む。「ちよ、ちよつとどこ行くの！？」とまり子は戸惑うが、すぐに大人しくなった。

「……健くんつまり子ちゃん、どこ行くんだらう？　ちよつと心配

少し不安げに、みゆき。そんな彼女を見てアルヴィーが、

「……なら、ついていってみるか？」

優しく声をかけた。

まり子の手を掴んだ健が向かった場所は、灯台のすぐそば。二人は堤防の地で座って足を伸ばしていた。カモメの鳴き声と波がしぶきを上げる音を聞きながら。

「……こういう所って心が落ち着くよね」

「うん……」

「ねえ、ひとついい？　なんで君はあんなことしようと思ったの？」

「みゆきさん達を、わたしの友達を汚されたくなかった　から。」

あいつら悪いことしてたから」

何故あの時チャラ男を殺そうとしたのか？　まり子がその理由を語る。

「……確かに悪い奴らだった。君がそう思う気持ちもわかる。けど、だからといって殺していいわけじゃない。一度でもそんなことをしたら、今度は自分が悪くなっちゃうよ」

「悪く……なる……」

健からそう聞いて、まり子の表情が曇っていく。以前自分がやってしまったことを思い出したような　そんな雰囲気だ。

「どうしたんだい？」

「そんなの 考えたこともなかった。一度も気にしたことなかった。いつも自分が正しいって思ってた……」

まり子が突然立ち上がる。わなわなと、今は小さな体を震わせて。

「わたし……悪いことしたのかな。許されないことしたのかな……」

「ま、まり子……ちゃん？」

「誰かの命を奪うのって……悪いことなのよね？ だったらわたし……」

涙がまり子の頬を伝い、落ちる。 すごく悲しそうだ。何かを悔いているのか？ 今までこんな表情をしたのは、見たことがない

健は少し戸惑っていた。

「な、何かあったのかい？」

「……殺しちゃったの……」

「え……？ だ、誰を？」

「はじめてお兄ちゃんの家に来たとき、警察の人に襲撃されたって話をしたでしょ？」

「そういえば……」

「あの時……あの時、わたし……相手を殺しちゃったの」

「なんだって!？」

確かにまり子は健の家に住み始めたとき、そんなことを言っていた。だが健は大して気に留めていなかった。追い払っただけなのだろうと、彼女の軽い語り口からそう解釈していた。 お互いに事

の重大さをわかっていなかったのだ。

「どうしてだよ？ どうしてそんなことしたんだ！ なんでもっと早くそれを言わなかったんだッ！！」

立ち上がりまり子を問いたただす健。激しい憤りを押さえられず、口調が少し荒くなっていた。

「殺す気は無かったの。けど、券属けんぞくを殺されて頭に血がのぼって…頭の中がメチャクチャになってた。わたし自身わけがわからなくなってた…」

「……」

子を失った母の憤怒。それが悲劇へつながったというのか。悪いのはまり子か？ それとも巢を襲撃した不破たち警察か？ だが、そもそもは勝手に巢を作ったのが悪い。不破は何も悪くはない。これは許されないことだ。

だが、だからといってまり子を見捨てることは出来ない。気まぐれで傲慢で、ときに身の毛もよだつ冷酷さを見せる彼女だが、健は知っている。心を閉ざしているだけで、本当は優しいことを。だからこそ。

「……まり子ちゃん」

トン、と健がまり子の方に手を置く。本当はゲンコツを食らわせたかった。だが、出来なかった。母も彼を叱るとき、決して手を上げなかったからだ。

甘やかしていた、というわけではない。暴力を嫌うゆえ、言葉を話せるのだから蹴ったり叩いたりせず話し合いで解決しようという思いが健の母にはあったのだ。

だから子供をぶつことなど、よほどのことが無ければしなかった。そんな母のもとで育ってきた以上、母の思いを裏切るような真似は出来ない。

「えぐっ……お兄ちゃん……？」

「確かに君がしたことは許されないし、その罪は重い。嫌なことをされたからって誰かを殺したりするなんて、もつてのほかだよ。だけど、だからって嫌なことから逃げちゃダメだ」

「えっ？」

「泣かないで」

泣きじゃくるまり子。彼女の頭を健はそつとなでる。

「これから僕と一緒に日々を過ごす。これがせめてもの償いだ。けど、君はひとりじゃない。みゆきやアルヴィーがついてる。みんな君の味方だよ。一緒に罪を償おう」

「お兄ちゃん……」

泣いていたまり子にだんだんと笑顔が戻る。そしてまた涙を流した。これは嬉し泣きだ。そしてまり子はいきなり健に抱きついた。こっそりとしてきて物陰で一部始終を見ていたみゆきは思わず目を覆ってしまった。一方アルヴィーは頬を赤らめていた。

「っ！？」

「……ありがとう！ わたしにあそこまで言ってくれたの、あなたがはじめて」

「え……えっ？」

「みんなわたしを怖がって何も言わなかった。寂しかった……。だけどあなたは違った。何も恐れずにわたしにいろんなことしゃべってくれた。優しくしてくれた……こんなの久しぶり！」

より深く、まり子は健に抱きつく。健の頬がほのかに赤く染まった。

「本当にありがとう！」

「い、いえ……どういたしまして」

「ねえ……これからお兄ちゃんって呼んでいい？」

上目遣いで甘えるようにまり子がそのあどけない視線を向ける。少し照れ臭そうに、健は「もっもちろんさ！」と微笑んだ。

「さっ、帰ろう。みんな待ってるよ」

「うん！」

話も済んで、健とまり子は手を繋いで歩き出す。その姿はまるで歳の離れた兄弟のようだ。まり子は小さく、健の腰に届くか届かないかぐらいだ。顔も近くない。だが大人になれば、本当の姿に戻ることが出来れば顔は届くはず。

「……あっ」

帰る途中で茂みの中からみゆきとアルヴィーが現れる。みゆきは頬を赤くしながら目をそらしており、アルヴィーは少し申し訳なさそうな顔で笑っていた。

「二人ともいたんだ……」

「ああ。ちいとばかり心配になったものぞ」

「何よ。私の許可なく勝手に健くんを抱きついたりなんかしちゃってさ」

アルヴィーの隣で腕を組みながらみゆきがへソを曲げる。実に分かりやすい。そんなみゆきを見てまり子は「あっ、焼きもち妬いてる〜！」とからかった。

「くおら〜！ あんたねーっ!!」

みゆきは怒ってまり子を追いかけて回す。微笑ましい光景だ。それを見た健とアルヴィーは暖かい目で、にんまり笑いながら見守った。

「これで丸く治まったのう」

「そうだね!」

EPISODE 149：思わぬ助っ人

「主任、お味はどうですか？」

「うん……うまい！ うますぎる！ もう最高だよ！！ 君たちのオススメの店っていうだけのことはあるねえ」

翌日、東京のとあるレストラン。村上はシェイド対策課に勤めているオペレーターの要と落合と食事をしてきた。たまにはこうやって外で食べるのも気分転換になって良い。

ちなみに注文したメニューは村上がミックスグリルで、要は海老ピラフとサラダとシチューのセット。落合はリブステーキとライスのセットだ。なお、ドリンクバーつきである。

「そう言っていただけですごく嬉しいです！」

「いやいや、それほどでも」

「今後もよろしければここで食事をとってもいいでしょうか？」

「ああ、是非！ 僕もこのお店気に入っちゃったからねー」

「やったー！」と要と落合が笑う。村上もこのレストランをたいそう気に入ったようでマンザラでもない笑みを浮かべていた。

そこに。

「うん……？」

注文した品を食べ終えて一息ついていると、村上のズボンのポケットの中で携帯電話が震え出す。当然マナーモードはオンだ。オフ

にしていたら今頃大音量で着信音がそこら中に鳴り響き、迷惑になるどころの話ではない。

「主任、電話鳴ってますよ」

「ん？ ああ、今出るよ」

携帯のカバーを開き電話に出る村上。

「もしもし、警視庁の村上ですが。……はい。えっ？ はい、分かりました。ただちにそちらへ向かいます」

いつもの飄々とした彼とは打って変わって、村上は真面目で誠実な雰囲気だった。察するに相手は身内か、彼より上の地位にいる人間なのだろう。要と由美子は近くでそんな彼の様子を見て「主任、なんかいつもと違う……」「誰と話してるのかしら」と少し動揺していた。

「……ごめん、急に用事が出来たみたいだ。一抜けしてもいいかな？」

「ど、どうぞ」

「ありがとう、それじゃあ代金払っというてね！」

携帯をしまうと村上はレストランを去った。要と落合に代金を払うのを任せて。もっとも、元々はこの二人が村上を食事に誘ったのだが。まるで自分たちに代金の支払いを押し付けてきたようにも聞こえて、ちょっと嫌な気分になっただろう。

警視庁。その中でもトップに立つのが警視総監の部屋へと赴き、中へ入ろうとしていた。「総監、失礼します」と言いながらそ

の扉を開けると　そこには床一面に絨毯カーペットが敷かれた広々とした空間が広がっていた。高級感溢れる赤い絨毯の上を、村上是緊張しながら一歩、一歩進んでいく。やがて警視總監のデスクまで辿り着いた。

「おお、来てくれたか村上君」

「　お会いできて光栄です。北大路總監」

「立ち話も難だ、座りたまえ」

村上がそう名を呼んだ初老の男性。彼こそが警視總監の　北大路おじである。物腰柔らかく温厚だが、同時に年相応の貫禄と威圧感を醸し出していた。近くのソファアに座り、北大路と村上是話を始める。

「それで本日は、私わたくしめにどのような御用でいらっしやいますでしょうか？」

「用というのは他でもない、君が主任を務めているシェイド対策課についてだ」

「はい」

流石の飄々とした村上も、警視總監が相手では少しばかり縮こまってしまう。なぜなら彼は警察のトップ。下手なマネをすれば大目玉どころではすまない。

「以前のクモ型シェイドの一件で戦闘部隊が甚大な被害を受けてしまったことは記憶に新しい。地下に潜んでいた親玉を叩いた分隊は不破を残して全滅してしまった。外部で戦っていた分隊だけでも生存したのが、せめてもの救いだっただな」

總監、村上がともに唇を噛みしめる。

苦かった、そして忌ま

わしい記憶だ。シエイド殲滅に執着するあまり、大切な部下達を結果的に死に追いやってしまったのだから。

このことを一番悔やんでいるのは当事者である村上だ。彼はあれから深く反省し、真面目で誠実な面が目立ち始めて誰かに辛辣な口を聞くことはほとんどなくなった。それほどまでにあの事件は彼に深い影響を及ぼしたのだ。

「あれは近年に残る惨劇だった。君も辛かっただろう……」

「はい。今でも忘れられません……なぜもう少し冷静な判断を下せなかったのか、その時の自分にキツク言ってやりたいです」

悲しみとシエイドへの憎悪、そして当時の不甲斐ない自分への憤怒。村上のその表情には複雑な感情が籠められていた。

「……そんな君に良いニュースがある」

「良いニュース……とは？」

北大路を見ながらきよとんとした顔で、村上。

「海外に救援を要請したんだ」

「えっ……海外にですか!？」

「うむ。それで捜査官が一人来てくれることになったんだが……」

「それは……頼もしい……!」

驚愕する村上。彼を見ながら少し困った顔で、「遅いな……もう日本こゝに来てはるはずなんだが」と北大路が呟く。どうやらまだ来ていないようだ。もしかや飛行機か電車が遅れているのでは、と村上は推測する。

だがそんな彼の心配をよそに誰かが扉を開く音が聞こえた。後ろ

を振り返ると、扉を開けたものが二人の下へゆっくり歩み寄り。

「少々遅れてしまい、申し訳ございません。ニューヨーク市警より配属された、捜査官の斬夜きりや耀司よすじです。以後よろしくお願いします」

名乗りながら二人の前で頭を下げた。

「来てくれたか……待っていたよ、斬夜君」

嬉しそうに言う北大路。 斬夜と名乗った捜査官は艶のある黒い短髪で端正な顔立ちをしており、穏やかな笑みをたたえている。瞳は黒く、右目には片眼鏡モノクルをつけている。スーツにもこだわっており、知性的かつオシャレな雰囲気を漂わせていた。

「あなたが助つ人……ですか？」

「ええ」

「シェイド対策課主任の村上というものです。以後お見知りおきを！」

「はっ……はあ」

何故か高揚感を感じたいきなり立ち上がり、斬夜と握手を交わす。やや高めな彼のテンションに斬夜は押されていた。

知性派で同じくオシャレ好きそうなところにシンパシーを感じたのだろうか？ 握手を終えると北大路も立ち上がり、

「うむ、そういうことだ。これから対策課のサポートをよろしく頼むぞ、斬夜君」

斬夜を信頼した様子で微笑みながらそう言った。

「もしわからないことがあれば僕に何でも聞いてください」
「わかりました。お任せ下さい、なるべく皆様のお役に立って見せます」

斬夜が上品に、村上と北大路へ敬意を払うようにお辞儀をする。

二人にギリギリ見えない角度でにやついていたような気がしたが、恐らく気のせいだろう。

その頃 南の島へ行きそびれた市村とアズサはどうしていたかと言つと。

「あついでホンマ。今日もおてんとさんがお空の上で燦々と輝いとるなあ」

パラソルの下でビーチチェアに座ってくつろぎながら、市村。彼はサングラスをかけており、黒い海パンを穿いていた。その体は細身ながらも意外に筋肉がついている。

「ホンマにあつついなあ」

すぐ近くの岸で水に浸かりながら、気持ち良さそうにアズサが咳く。水気を帯びた髪と健康的でつやつやした肌が美しい。なお水は程よい温度となっており、居心地が良かった。

「ああ。水着のべっぴんさんもようけおるし、ココまるで天国みたいや」

「うん！　せやけど、イツチー」
「なんやアズサ。どないした？」

そんな折、突如としてアズサが気難しい顔を浮かべる。気分が悪くなったのだろうか？　何があったか市村がアズサに訊ねたら、彼女はこう答えた。

「なんか物足りひんねんなあ。ここビーチじゃなくてプールやからかなあ」

そう、ここは大阪市内にある市民プール。広大な敷地の中に大小さまざまなプールがあり、一種のアミューズメントパークのようだった。海へ行けなかった代わりに、市村はアズサをここへ誘ったのだ。

「ま、まあ……そうガツカリせんといて。今度また連れてつたるし、なあ？」

「ホンマあ？」

「ほっ、ホンマやって……」

ややアズサに押され気味の市村。果たして市村はこの先、彼女と無事うまくいくだろうか？

EPISODE 149：思わぬ助っ人（後書き）

どうも。

基本中の基本である大筋を箇条書きして細かい部分をあとから付け足す方法をやってみました。が、携帯からだとちょっとしんどかったですね（^^）；

EPISODE 150 : 来栖遊海廊

「おっつ！　ここが来栖遊海廊か」

南来栖島へ旅行に来て3日目。健たちはビーチを散歩したあと、島の北西の半島にある『来栖遊海廊』という水族館へ全員で訪れていた。もちろん、不破や宍戸も一緒だ。普段は忙しくてこういうところにはなかなか来れないので、みんな楽しんでいくつもりをしている。

「いったいどんな魚がいるんだろうな!？」

「早く見たいな〜！　入りたいなあ!」

「楽しみだのう!」

「うんうん!」

皆ウキウキしていたが、とくにこの二人　アルヴィーとまり子はまるで子供のように大はしゃぎしていた。二人とも水族館に入るのははじめてである。なのでとても楽しみなのである。

「それじゃあそろそろ入りましょうか」

そうと決まれば早速、入場だ。白峯の言葉を合図に、健たちは彼女のあとについて行って遊海廊の中へ入っていく。まるで遠足か旅行中の学生のようにだった。

「はっ、なんだよあいつら。ガキくせえつたらありやしねエ」

パンフレット片手にため息混じりで、不破。その表情はせつかく宍戸と二人きりなのにいつまであいつらに付き合わされなければな

らないのだ、という不満に満ち溢れていた。だがもう少しの辛抱だ。あと1日すればこの島から帰ることが出来る。本当はもっと滞在していたかったが 期間が4日間だけなのだから仕方がない。

「とか言っちゃって、そういう不破さんもノリノリじゃないですか」

不破の腕に体を寄せながら、穴戸。

「ち、違う！ これはその……」

「せっかくですしみんなで楽しんでいきましょうよ イイ思い出になりますよ」

「お、おい、こらっ！……」

「凶星だったか不破が照れながら戸惑う。そんな彼の腕を引っ張って穴戸は水族館の中へと入っていった。

国内最大級の水族館、来栖遊海廊。その内部は広大で、一萬種類以上もの様々な魚や海洋生物が展示されている。それだけでなく、水槽ごとに熱帯林や太平洋、深海などテーマが決められているのだ。とくにジンベエザメやマンタなど、大きささまざまな海の生物が縦横無尽かつ優雅に泳ぎ回っているロビーの大水槽は必見だ。

「わあ……すっごい、きれい」

「まるで海の中に迷い込んだみたいだね」

健たちが今いるのは水中トンネルのようなフロア。水槽の中にあるガラス張りのチューブ状の通路を通り、海の中を歩いている気分になることが出来る。ちよっとドキドキするが神秘的な雰囲気だ。

「ガラス割れちゃったりしないかなー。ちょっと心配……」

天井を見上げながらみゆきが不安そうにつぶやく。こういったところでは誰しも一度はそう思うはず。「大丈夫だって。このガラスは丈夫だから割れたりなんかしないよ」とすかさず健がフォローを入れた。

「そ、そうだよねー」

少しきこちなくみゆきは笑った。気のせいか少しい雰囲気に見える。

「見て見て、イルカさん！」

ある程度進んだところにあるイルカの水槽。健に肩車してもらいながら水中を素早く優雅に泳ぐイルカの姿を指差し、まり子は大はしゃぎ。さながらまだ幼い子供のようにである。体を揺さぶったりもして健を少し困らせていた。無邪気な笑顔と仕草もあいまってなかなか愛らしい。

「ねえねえ、あっちにも何かあるよ！」

「『グレートバリアリーフ』だって。行ってみる？」

「行こう行こう！」

次に健たちはグレートバリアリーフをテーマにした水槽へ向かう。そこには天井でも魚が泳いでいる不思議な光景が広がっていた。

「あれ、この子二モじゃない？」
「ホントだ！ かわいい〜」

オレンジ色の体に縞模様が入った魚　カクレクマノミを見てまり子とみゆきが目を輝かせながら一言。どちらも女の子らしい反応であり、実にかわいらしい。ちなみにまり子は健に肩車してもらっているままだ。

「おお、これはすごいもの。実際のグレートバリアリーフっばいぞ」
「一度でいいから行ってみたいわねえ」

健とみゆきとまり子が楽しんでいるうしろで、白峯とアルヴィーはグレートバリアリーフの風景を再現した水槽に見入っていた。青い空と水平線をプリントした壁とサンゴ礁。そしてブラックライト。こちらもうっとりしてしまいそうなほど魅力的だ。

「ねえ、次どこ行く〜？」
「そうだねえ、まり子ちゃんが行きたいところに連れてってあげる」
「わーい」

健に肩車してもらうつまるでまり子と、その隣に並ぶみゆき。まるで親子のようだ。そんな光景を見て白峯が、「三人とも結構いい感じじゃない？」とアルヴィーに問う。

「うむ、悪くない！」
「でしょでしょ〜」

爽やかに笑うアルヴィー。彼女も白峯も本当はああいう風にまじってほしいのだが、こうやって見守るのに徹するのも悪くはない。

「……ねえ、ちょっといいかな」

引き続き、楽しげに水族館の中を見て回る健たち。その途中でみゆきが少し夢げに、真剣に健へ訊ねる。まり子を優しく下ろすと、健は「なんだい？」と返す。

「その、なんていうか……二人きりになりたいな、って」「ふっ二人きりッ!？」

健とまり子が声をそろえて目を丸くする。まさかデートをしようともいっのか？ 健は少し困惑し、まり子は眉をしかめる。そのうしろで見ているアルヴィーと白峯は「ついに来たか!」「その調子よー!」とこの状況を楽しんでいる。

「ちよっ、ちよい、ちよい待ちちよい待ち……っ、もしかしてデ……」「そうよっ! こっから先はデートして欲しいの!」

困惑する健を前にみゆきはそう申し込む。その横でまり子は唇を噛みしめてみゆきを睨んでいる。

「ちよ、ちよっと待ってよみゆきさん。健お兄ちゃんはわたしが……」

「そんなの関係ない! 行きましょ、健くん!」

「み、みゆきっ! なっ何を……!?!?」

まり子に脇目もふらず、みゆきは健を手をつかんで 強引に引
つ張っていく。昔から好意を抱いていた幼馴染みを盗られてたま
るか、こんなのにくれてやるわけにはいかない という思いが強か
った。それに先日、まり子が健に抱き付く光景を目撃してしまった
のだから余計だ。あまりにみゆきらしくない、大胆な行動であった。

「ちよっ……お兄ちゃん、みゆきさん！ 待ってよお!!」

二人を追うまり子。だが、二人の姿は人ごみの中に消えていく。
。やがてまり子は二人を見失い途方に暮れた。

「……行っちゃった……」

そして彼女もまた、人ごみの中に紛れて姿を消した。ちよつと自
分から離れただけなのに、そのまま遠くへ行かれてしまうような
妙な孤独感を感じながら。

「まり子ーっ！」

「まり子ちゃん！ どこお!? いたら返事してーっ!!」

一部始終を見守っていたアルヴィーと白峯は、大声を出してまで
はぐれてしまったまり子を探す。まだそんな遠くへは行っていない
はずだが。

まり子を引き離れたあと、みゆきは健と一緒に館内を歩き回って

いた。幼い頃より健へ好意を寄せていた彼女としては辛抱ならなかったのだ。まり子が健にベタベタとくつついているのを見るのが。愛する人を奪われたくはなかった。自分の立場を奪われたくはなかった。だからあのようない行動に出たのだ。それまで抑えていた感情を爆発させて。

「ねえ、あそこまですることなかったんじゃない……?」

「だってああでもしないと、健くんがわたしから離れちゃう気がして……」

誰のものでもない。だが、だからといって誰かにとられてしまうのを見過ごすわけには行かない。他人に奪われるぐらいなら先にとって独占してみせる。そんなみゆきの気持ちは、もう少し真剣に受け止めるべきだったと健は悔やんでいた。

「だけど……あれじゃまり子ちゃんが可哀想だよ」

だが、彼はいささか判断力に欠ける。優柔不断というやつだ。いざというとき、すぐには決められない。そのせいで余計に苦労してしまうタイプなのだ。

「私とあの子とどっちが大事なの!？」

「うっ……それは」

「どうなの!？」

いつもより強気で健に迫るみゆき。あまりに凄まじい剣幕で問い詰められたものだから彼も少し怯えてしまうというもの。「ど、どっちもかな」と気弱に彼は答えを出した。あまりに頼りない彼を見て「もうッ」とみゆきは頬を膨らませた。

「……あつ。見て、でっかい水槽だ」
「ホントだ、すごい……」

それからしばらく歩いた後、二人の目にあるものが留まる。それは一面に広がる巨大な水槽。その中ではロビーにあった大水槽と同じように大小様々な姿形の魚たちがゆるやかに、ときに激しく泳ぎまわっていた。圧倒的なスケールを前に二人は感銘を受ける。

「今ならあんまり人いないね」

「えっ？ た、確かにそうだけど」

突然そう言い出すみゆき。次に彼女は戸惑う健に　なんと抱きついた。しかもギュッと抱き締めていて手を離そうとしない。

「!？」

「誰も見てない、よね？」

「う、うん」

激しく動揺する健。お互い好意を抱いていたわけではあるが、ここまでしたのは今日が初めてだ。当然心拍数は高まる。胸の鼓動もだんだんと激しくなる。

「……さっきはごめんね。別にまり子ちゃんのが嫌いってわけじゃなかったの。でも、健くんをとられそうなのがしたから……それが嫌だったの」

「……」

「私、健くんから離れたくないの。今だけでもいい、私のそばにいて……」

いつも元気いっぱいな彼女がこうして儚い雰囲気を出している。

不思議な光景だ。思わずうつとりするような息遣いと、恍惚を帯びた表情。そして一点の曇りもないきれいな瞳。今日の彼女はいつにも増して『大人』だ。

「ねえ……おねがい」

「う……うん」

健の緊張が止まらない。心臓が鳴り止まない。呼吸はさんだん激しくなっていく。緊張のし過ぎで顔は真っ赤だ。更にみゆきは健に顔を近づけて唇を寄せてきた。これはつまり、「チューして」ということだろう。この想いを蔑ろにしては男がすたるというもの。ここは勇気を出して やるしかない！ 緊張冷めやらぬ中みゆきの程よく潤った唇とすれ違い、お互いに接吻を交わそうとしたそのとき 予期せぬ出来事が起きた。

「……毎度ご入場いただきありがとうございます。迷子のお知らせを申し上げます。蜘蛛の巣柄の黒いワンピースを着た女の子がお兄さんとお姉さんを探して迷子になっています。お心当たりのある方は1階のインフォメーションまでお越し下さい」

「え！？ なんで！？ せっかくいい雰囲気だったのに……」

「そりゃないよ！ でもまり子ちゃんを放っておくわけにもいかない。行こう！」

それは迷子のお知らせだった。そして迷子になっている黒いワンピースの女の子というのは 間違いない、まり子だ。彼女しか考えられない。早く行かねば！ キスを寸止めされてお預けになったことを惜しむ暇もなく、健とみゆきは1階のインフォメーションへ向かう。

「ひどいよう。お兄ちゃんもみゆきさんも……」

そこには案の定まり子がいた。彼女だけでなく、白峯とアルヴィーの姿もそこにあった。

「ご、ごめん……」

「お主がみゆき殿とイチヤイチャしていた間、私とばり殿とで必死で探したんだぞ？」

「そうだったんだ。本当にごめん」

大変申し訳なさそうに健が頭を下げる。隣にいたみゆきもまり子を探し続けていたアルヴィーと白峯に頭を下げた。事の発端はすべて彼女にある。ちゃんと謝っておかなければ。

「まあ、でもそんなことはいいんだ。それより二人きりの時間を楽しんできたか？」

「え？ まあ、とりあえずは」

「そうか。それは良かった」

にこつ、とアルヴィーが暖かく微笑む。それを見て沈んでいた健とみゆきに笑顔が戻った。ひとまず落ち着いたところで白峯は全員に「だいたい回れたし、そろそろおみやげとか見てみない？」と呼びかける。すると全員、「賛成！」と大きな声で叫んだ。

その頃、健たちを追ってこの島まで来ていた辰巳とカルキノスは。

「いやぁ辰巳さん！ この島なかなかおもしろいッスねえ！」

「おおっ、そうかぁ？ 気に入ってもらえて嬉しいぞ多良場くん！」

人間の姿で島の中をブラブラしていた。三十代半ばで黄色がかつた茶髪の男性が辰巳で、カニを正面から見たような髪型で少しちらんばらんな印象のある若い男性が多良場たらいばこと　カルキノスだ。

「メシはうまいし、景色はきれいだし、水着のねえちゃん多いし！
家建てるならココしかないツスね」

「ははは、お前な！。そんなこと言ったら社長から大目玉だぞ？
採用してもらえないかもしれんぞー？」

「えーっ」

「だがイイ心意気だ。気に入った！」

急に多良場の肩を持ったかと思えば、辰巳はにやつきながら顔を多良場へ近づける。　念のため言うておくが、これからキスをしようというわけではない。断じて。

「もっとリゾートを満喫しようじゃないの！」

「はっ、はい！　喜んで！」

何を血迷ったか、肩を組んで二人は大はしゃぎ。社長　甲斐崎に怒られる事を承知で、だ。彼らはこれでもシェイドである。人間に害をなす怪物である。だがこれでは　その辺にいるナンパな男たちとほとんど変わらない。

EPISODE 151：何にしようかな

「へへっ。最初はちょっとヤだったが、結構楽しかったな」

「でしょでしょー たまには楽しまないと」

遊海廊のお土産屋。フードコートのおすぐ近くにあるそこでは先に遊海廊を見て回った不破と宍戸が品定めをしていた。余韻に浸りながら。

「ここで買いもんしたらお昼にすっか」

「はい！ 賛成です！」

「よし！ それじゃあどねにしようかな」

おみやげの定番であるクッキーにチョコクランチ、海洋生物をモチーフにしたスプーンやフォークなどの食器、可愛いぬいぐるみにジグソーパズル 品物は多種多様だ。流石の不破も少しばかり悩んでしまうというもの。

「うん？ なんだこりゃ、マペットか……」

ふと不破の目にマペットやぬいぐるみが入ってくる。サメを模したマペットを手にとると、「おっ、こりゃあいいな！」とマペットをはめて嬉しそうに手を動かす。

「おい、宍戸ー！」

「なんですか、不破さん？」

「ガブッ」

「キヤー！ や、やめてくださいよー！」

「はっはっは、わりいわりい」

童心に帰ってちょっとばかりイタズラを仕掛けてみる。なんとなく悪ガキだった頃の自分を思い出していた。たまにはこういうのも悪くない。マペットを戻して、不破は再びなにを買うか探し出す。

「あつ、不破さん！」

「ん！？ おまつ……東條！！」

「あつ、東條くん　ここどうだったー？」

「はい、すごく楽しかったです！　また来てみたいなあ」

その矢先、二人は同じ目的でここを訪れていた健とバツタリ出くわす。買い物カゴの中には、既に職場でいつも世話になっている人々や実家の家族へ配るお土産が入っていた。更にジンベエザメのぬいぐるみもある。

これは恐らく自宅アパートに飾るか、或いは彼の姉の綾子に買って帰るためのものだろう。事実、綾子は女の子らしくぬいぐるみが大好きだった。以前ウミガメのぬいぐるみをプレゼントした為、今度はジンベエザメを買って帰ろうというわけだ。

「しっかし早いなあおい！　もうそんなに入れやがって……」

「はい　職場の先輩方や家族に買って帰ろうと思って」

「えらいなー　あたしも村上主任たちに何か買ってかなきゃ」

「それで他のみんなも一緒なのか？」

驚いたまま、不破は質問を続ける。彼の問いに対して健は「ええ、一緒ですよ」と答えた。

「そうか。じゃあ、メシは？」

「さっき外のフードコートで食べてきましたよ」

「そうだったんだ。結構早いよねー」

「はい。何しろまり子ちゃんかね、おなか空いたおなか空いたつてしきりに言うものですから、ほっといたらちよつと可哀想かなあーって」

「あ、あのチビ……お前にそんなこと言ったのか。迷惑かけるだけかけやがって」

眉をしかめ唇を噛み締める不破。やがて目をカツと見開いて右手の拳を握ると、「あのわがまま娘を早く連れてこい！ オレが根性叩き直してやるッ！」とひとり勝ちに燃え上がった。彼の隣では穴戸が「あ、熱い……三度ぐらい気温上がったかも」と呟いていた。ちよつと面倒くさい事態になった。何とかしてこの場を抜け出したいが。いい方法がないか考え始めたそのときだった。

「健ー、何しとるんだー？ 早く買わんと置いてくぞーっ」

「わあっ！ あ、アルヴィーが呼んでる！」

ハスキーな女性の声が健を呼ぶ。アルヴィーだ、他のみんなは既に買い物を終えていたのだろう。これはまずい。急いで買い物をすませねば。

「すみません、そういうことなんでそれじゃー！」

「あっ！ こ、こら、待てッー！」

こんなところで置いてけぼりを食らうのは嫌なので、さつさと不破の下から抜け出してレジへと向かう。会計はピッタリ3000円。うちジンベエザメのぬいぐるみが1000円で、遊海廊クッキーが1200円、チョコ克蘭チの缶が800円だ。結構金を使っ

てしまったが、実はまだ余裕がある。無駄遣いをしない限りは大丈夫だろう。

「みんなー、楽しかったー？」

興奮冷めやらぬ中、水族館を出る健一行。意気揚々と、嬉しそうな白峯が全員にそう訊ねるとみな口々に「楽しかった！」「来てよかった！」と答えた。につこり、と白峯は笑顔を浮かべる。

「……ふう。あと1日だけか。楽しかったなあ」

「ねえねえ、水族館行ったんだから次は動物園行こうよ！」

「いいアイデアだの。賛成！」

「そっか、確かにいいアイデアだ！　また考えておくね」

楽しそうに会話を交わす健とアルヴィー、まり子。仲睦まじい様子で何よりである。だが、みゆきはそんな三人を見て健から遠いような近いような　そんな微妙な距離感を感じていた。彼女としてはこのまま離れたくはない。故に　いつかは一気に仕掛けなければなるまい。そう、今日健に抱きついたように。

「（いい気になっちゃって。見てなさいよ、まり子ちゃん……あ、あんななかに健くんはあげないんだからねっ！　絶対にッ！）」

「ちょ、みゆきちゃん……あんまり熱くなりすぎちゃダメよ」

心配して気にかける白峯の隣でひとり、みゆきは嫉妬に燃えるのであった。

「ん……？」

「どうした、健？」

ふと健の懐から音が鳴る。ポケットの中に手を入れて発信源を取り出す。以前白峯に作ってもらった専用のシェイドサーチャーだ。反応が出ているのは 町の中のような。

「なんてこった、シェイドが出た！」

「そうと決まれば共に参ろうぞ！」

駆け出そうとする健とアルヴィー。だが 寸前で何かを思い出したように止まる。そう、荷物だ。手荷物が邪魔だったのだ。これではいざというとき、サツと動けないではないか。

「しまった！ これじゃ身軽に動けない……」

「迂闊だった！」

仕方がない。ここは誰かに荷物を預けよう。手の空いていた白峯へ「すみません、荷物預かってもらえませんか！？」と必死の形相で頼み込む。幸いにもお土産はアルヴィーの分も含めてサブリユックの中に何とか収まっていた。

「もう、仕方ないわねえ。持っけてあげるから、パパッと蹴散らしてちょうだい」

「ありがとうございますっ！ 行こう、アルヴィー！！」

「ああ！！」

白峯は快くそれを承諾してくれた。これで気兼ねなく戦いに挑める。健とアルヴィーはリーダーの反応を頼りにしながら、全力で疾走した。

「あんな調子で大丈夫かなあ……」

「大丈夫じゃない？ お兄ちゃんもシロちゃんも強いから」

「とりあえず待ちましょ。いまあたしらに出来るのはそれだけよ」

EPISODE 151：何にしようかな（後書き）

Q：健のお姉ちゃんってどういう人だったけ？

A：割とサバサバしてて明るい人。英会話学んだりギター弾いたりと多趣味だよ

Q：イッチーは？

A：いまプールだと思う

Q：アズサは？

A：イッチーとイチャイチャしてると思いますよ

Q：ぬいぐるみ高くないですか？

A：おみやげ屋の商品はそういうもんですって

Q：まり子行かなくてよかったの？

A：正直なところ、彼女は強さとかその他諸々がブツ飛んでいるので行かなくて正解だったと思うんだ。だからどうしたって話ですが

マウスに叩きつける。こんなのに噛み付かれたりでもしたら怪我するだけではすまないだろう。早く片をつけなければ。

「やつ！」

「グウウウウ」

更に叩いて斬りつける。火花が散り、うめき声を上げながらビッグマウスは後退。極端に大きい口のせい、バランスを悪くしてぶらついていた。

「とうツ！！」

「ブオオオオオ！！」

両手で剣を持ち、少し力を入れてから一太刀浴びせる。その威力は大きく、遂にビッグマウスは地面に転倒した。しばらくは起き上がれそうにないだろう。やるなら今だ！

「こいつで決める！」

声高く叫び黄色く光るビー玉　雷いかずちのオーブを剣の柄に装填。シルバーグレイの刀身が見る見るうちに輝かしい金色に変わっていき、青色の刻印は紫色に変わった。そしてその周囲に激しい稲妻が降り注ぐ。

「ふっ、はっ！」

剣をまっすぐに構えそこから十字を描く。すると十字型の衝撃波が発生し、目の前の敵めがけて飛んでいく。更に追撃で剣を逆手に持ってから振り上げ、後押しとして衝撃波を走らせる。

「クロスブリッツ！」

以前新たに編み出した必殺技。それが命中し、ビッグマウスは爆発して木っ端微塵になった。残り火を背に「これにて一件落着！」と喜ぶ健だがそこで突然触手が腕に絡み付き。

「！？ あべべべべべべべべ！！」

腕を通して健の体に電流が流し込まれた。感電した為、体内の骨が透けて見えたような。そんな気がした。気付けば髪はチリチリ、全身が少し焦げている。こういうときに口から煙を吐き出すのは、ある意味お約束か。

「い、今の何……？」

かと思えば腕から触手がほどかれ、戸惑いを隠し切れない健が咳く。身構えて辺りを見渡す健だが、心配をよそに触手の持ち主が現れた。ふよふよと体を漂わせながら。

「なんだこいつ……クラゲ？」

触手の持ち主であるシェイドは見たまんまのクラゲだった。透き通っている体はほのかに水色に染まっており、ある意味美しい。思わず吸い込まれてしまいそうな、すばらしく美しい色彩だ。だからといってこのまま見過ごすわけには行かない。

「でーい！！　　つてほげええええええええええ！！」

ゆっくりとこちらへ寄ってくるクラゲを剣で一閃。その瞬間、健の体に再び電流が走った。煙を上げながら健は後ずさりする。

「しまった……直接叩いちゃダメなのか」

どうやらこのシェイド、常に帯電している為に直接攻撃をしかけると逆にこちらが感電してダメージを受けてしまうようだ。しかも剣を雷属性にしたまま攻撃してしまった為か、電気を吸収してパワーアップしている。

しかもこのクラゲは一体だけではなく、何匹も仲間を引き連れていた。その数は圧倒的だ。打つ手がないわけではないが、この数を前にどうすればと　　思った、そのとき。

突然槍が投げられ宙に漂っていたクラゲたちを叩き潰した。更に投げられた槍が持ち主の下へブーメランのように戻り　　槍の持ち主が颯爽と姿を現した。

「ケガはねえか、東條？」

「不破さん！　来てくれてありがとうございます！！」

「フツ。これくらい朝飯前さ……」

白い歯を光らせて不破が優越に浸る。

「つてあばばあああああああああ！！」

が、たまたま近くにいたクラゲが体に接触し感電した。せつかく決めたのにこれではややカッコ悪い。呆然とした様子で、健は痺れている不破をジツと見つめていた。満足したクラゲは「ケケケ」と笑いながら不破から離れていく。なんとという屈辱であろうか。

「と、とにかく！ こいつらに直接攻撃は無謀だ。あと電気も吸収されちゃうー！」

「はい！」

「それからこいつらは海の方からウジャウジャ沸いてやがる！ こはオレがやっておく、お前はビーチに逃げ！」

「わかりました！ ビーチですね！」

クラゲのシエイドはビーチで大量発生して町の方まで来ている。発生源を叩くと そう不破から教えられ、この場を引き受けた不破にあとを託して健はビーチへと向かう。

「きゃあああああああ！」

「く、クラゲだー！！ 刺されるううう！！」

「怖いよおおおお！！」

ビーチへ行くとそこではおびただしい数のクラゲ型シエイドが屯していた。そしてその魔の手から逃げる人々が前方から次々とやってくる。観光地を襲う尋常ではない恐怖。人々がむせび泣き逃げ惑う悪夢のような光景。悪夢は終わらせねば。意を決し、人ごみを駆け抜けて健はクラゲの群れの中へと飛び込んでいく。

「なんてことだ、すごい数……」

群れの中心には食べたなら甘い味がしそうな、ピンク色で体が一回り大きいクラゲがいた。触手を健にかざすと、周りにいた小さいクラゲがいつせいに襲いかかる。

「（直接攻撃も電気もダメなら……）」

手早く長剣 エーテルセイバーの柄に手を回す健。黄色のオーブを取り外すと赤色のオーブを代わりに取り付け、今度は炎を纏った赤い剣で戦いに臨む。

「燃えるッ！」

その場で一回転し周囲に炎を撒き散らす。体が水分の塊であるクラゲのシェイドの体は、その高熱を前に次々と燃え上がり蒸発していく。更に地面に剣を叩きつけて炎の波を巻き起こし、どんどん数を減らしていく。これでだいぶ数も減って勝機が見えてきた。だが。

「グツピャアアアアアアアアア！」

号令でもかけるように大きなクラゲが奇声を上げると残っていたクラゲたちや新たに現れたクラゲたちが大きなクラゲのもとに集まり、次々とくつついていく。

「何をやる気だ!?!」

集まったクラゲたちは、やがてひとつになり ムクムクとその体を膨張させていく。あろうことか 見上げるほどにまで膨れ上がった。まるでクラゲの怪獣だ。ゼリー状の体の中で赤色の核がプカプカ浮かんでいる。

「健! 油断するな」

そこへ巨大な白い龍が飛来する。アルヴィーだ。人の姿から本来の姿である 白龍へと姿を変えたのだ。健の近くまで来ると彼に

注意を促す。

「あの巨大なクラゲからすさまじいパワーを感じる……。どちらにせよ長引いたら危険だ。早めに片付けようぞ」

「ああ……、わかった！」

さあ、戦いだ。

EPISODE 153：巨大クラゲと聡明なる翼

「ブクブク……ブクウウウウウー!!」

巨大なクラゲがその触手を振り下ろし、地面へと叩きつける。爆発するように砂塵が飛び散り、健の視界を遮る。盾を構え目もつぶってなんとか凌いだ。直後、強力な電撃が放出された。

「!? すごいエネルギーだ……防ぎきれない!」

何十、いや何百という数のクラゲが合体した上で繰り出されたのだ。その威力は大きく 防ぎきれなかった。健は吹き飛ばされ近くのヤシの木へと打ち付けられる。反動で血を吐いた。

「ッ……防ぐよりかわしたほうが良さそうだね」

立ち上がり体勢を整える健。回避はもちろんだが、こちらから攻撃を加える際にも気を付けなければならぬ事がある。それは、相手の体に直接攻撃をしかけるとこちらが感電してしまうということ。直接叩くのがダメなら間接的に攻撃すればいい。

だが 相手とは距離が離れている。中途半端な距離から攻撃しても届かない。ある程度近づく必要がある。そして雷属性は吸収されてしまう為使っても意味がない。決して打つ手がないわけではないが 苦戦は必至だ。

「……来るぞ!」

「!」

巨大クラゲが咆哮を上げ触手を振る。跳んでかわすが、そこへ

間髪入れずに二撃目が放たれる。かわしきれずに直撃し、健は吹き飛ばされた。更に巨大クラゲは電撃を放って追い討ちをかける。またも直撃し、健の全身に電流が走る！

「だあああああつっ！！」

地面が爆発し、粉塵と共に健は宙を舞う。波打ち際まで飛ばされて着水。なおも立ち上がり、剣と盾を構えて相手の様子を伺う。

「アルヴィー、どうしよう」

「見ての通りあやつには雷は一切効かん。吸収されてしまっぞ」

「じゃあ……炎と氷かな？」

「それが良いな」

アルヴィーが健の問いに答える。龍の姿になってもその流れるような姿は美しく、神々しい。

「電気を帯びていると言えどもヤツの体は水分の塊だ。熱すれば蒸発して冷やせば凍り付く」

「よし……そうと決まれば！」

アルヴィーの助言をしつかり聞いたあと、健は疾走。巨大クラゲが飛ばしてくる電撃弾をかわし、かいくぐりながら跳躍して剣を振り炎を放つ。

相手は命中した部分から蒸気を上げ悶えるが、これだけでは倒せない。それにあの巨体だ。まったく効いていない可能性もある。

「ブクアアアアア！！」

「が……っ」

悶え苦しみながら巨大クラゲが触手を振るう。地面へはたき落とされてしまう健だったが、すぐに立ち上がり跳躍。

「やったな……お返しだ！」

空中で炎をまとって回転しながら斬りかかり、触手をいくつか切断。だが電撃が横から飛んできてまたも地面へ落とされてしまう。

「くっ！」

健は赤いオーブを外し、代わりに青いオーブを装填。刀身が青くなり、剣に刻まれた刻印は薄い緑色へ変化。更に辺りに冷気が漂いクラゲの体が凍っていく。やるなら今だ。

「うおおおおーッ！！」

今度こそトドメを刺すべく健は今一度必殺の刃を振るう。凍結した相手を何度も斬りつけて粉碎！ 巨大クラゲはそのまま粉々になった。

「よっしゃ！ これでひと安心……」

「いや、安心するにはまだ早いぞ！」

「えっ！？」

ガッツポーズをとる健。だがアルヴィーが彼に注意したようにまだ終わってはいなかった。砕かれてバラバラになった巨大クラゲの破片が組み合わさってひとつになり、なんと再生したではないか。

「しまったー！」

驚きを隠しきれない健に巨大クラゲが電撃弾を放つ。今までは中ぐらいのサイズだったが、今度はかなり大きい。盾を構える健だったが。

「はあっ!!」

そこへ超高速で何者かが割り込み巨大な電撃弾を一閃。当たる寸前で大爆発を起こし、健は直撃を免れた。もし当たっていたらただではすまなかつただろう。

「ケガはないか？」

「不破さん！」

「不破殿……！」

不破がランスを回して振り払う。一息つくくと、「まったく。手間かけさせやがるぜ」と呆れるように呟いた。

「東條、あのでかいクラゲはダメージを与えてもすぐに再生しちゃうぞ。やるなら一気に決める！」

「一気に決める、か……。はいっ！」

不破のアドバイスを聞いて健が頷く。

「それで、あのデカブツを倒せる手立てはあるのか？」

「手立てなら思い浮かぶものがひとつだけある」

アルヴィーが不破へそう告げる。やや信じられなさそうに「なんだって、それは本当か？」と不破は訊ねる。

「ああ。きつとお主も腰を抜かすほどすごいぞ」

「そ、そうか。まあいいや……」

苦笑いする不破。すぐ真剣な表情に戻り、眉を吊り上げて「オレがヤツを引き付ける。お前らはその間にあいつを攻撃するんだ！」と健とアルヴィーへ告げた。

「ブク……オオオオウウウウウウウー!!」

一度体をバラバラにされたことに怒っているのか、巨大クラゲはしきりに雄叫びを上げていた。そしてその矛先は目の前にいた不破へと向けられ、触手から電撃が放たれる。

「来やがったな……?」

走りながら電撃をかわす不破。相手の攻撃は強力だが、どれも大振り。巨大クラゲの攻撃をかわすのは超高速で走る彼には容易いことだ。走っている彼を狙って触手が振り下ろされるも、不破は余裕の表情で回避。

「おおっと! かかったな……おりゃあッ」

それどころか触手を切り落とした。紫色の血しぶきが宙を舞い、巨大クラゲは悲痛な叫び声を上げる。ますます怒った巨大クラゲは不破めがけて電撃弾を数発発射したが、いずれも打ち払われてあさつての方向で弾け飛んだ。

「チッ! おつむはアレだが、こいつ……パワーだけは侮りがたいな」

思っていた以上の強さを前に不破が舌打ちする。地面ごとこちらを吹き飛ばしてきそうな敵の猛攻をかわして、「東條、まだかかるのか!」と不破は健へ呼びかける。

「はい! もうすぐ出せそうです!」

健が不破へ叫ぶ。彼が持つ長剣の柄には三つの穴が開いている。そのうちの二つには既に赤いオーブと青いオーブがはめられていた。そこに黄色いオーブをはめこみ 準備完了。刀身が三色の光を帯び始めた。

「これで決める!」

力強くそう叫び、高く跳躍する健。唸り声を上げて巨大クラゲが触手で絡めとろうとするが、アルヴィーが口から炎を吐いて焼き払い妨害。

「はあああああッ!」

彼の必殺奥義が連続で放たれようとしている。まず一撃目、激しく燃え盛る紅蓮の炎。水分の塊である巨大クラゲの体が急激に熱され真っ赤になり、蒸発していく。

「な、なんだ!? 今のは……」

不破が目を丸くする。それだけに留まらず、健は間髪入れずに二撃目を放つ。今度は輝くほどに冷たい 凍てつく氷の刃。蒸発し

かけた巨大クラゲの体は凍り付き、身動きがとれなくなった。

「でえやああああッ!!!」

そして最後の一撃　激しく轟く稲妻の太刀。大きく薙ぎ払い凍り付いた巨大クラゲの体を一刀両断。巨大クラゲは空中で大爆発を起こし、周囲には雨のように氷のつぶてが降り注いだ。あれほどの猛攻を受けたのだ。もう二度と再生することはないだろう。

「ははっ、こいつは……たまげたな。南国にあられが降るなんて」

降り注ぐ氷の中で、不破。彼の下にふらつきながら健が寄ってくる。その隣には人の姿に戻ったアルヴィーがいた。

「これで一件落着、ですね!」

「ああ!」

お互いの拳を握りしめて交わらせる健と不破。最初はあんなに険悪な仲だったのに二人ともすっかり丸くなったものだ。その光景を見守りながら、感慨深そうにアルヴィーは微笑んでいた。

その翌日、早朝　。

「いやー、いい景色だなあ」

「いい景色ツスね」

「ああーい空、ひろーい海……こんなのかなかなかお目にかかれな
ぞ
ぞ」

密かに健たちを追跡して南来栖島まで来ていた辰巳と多良場ことカルキノスは、山の展望台で朝焼けの空と海を拝んでいた。どこまでも広がる水平線に、青い空と白い雲。一見ありふれた光景だが、素晴らしいコントラストだ。

「ん……？」

そんな折、辰巳が覗いている望遠鏡に雲を突き抜ける影が映る。

「バイトくん、今の見たか？」

「え？ はい。あのジェット機みたいに速い」

多良場に確認をとると、ひらひらと羽根が一枚落ちてきた。近くで鳥が飛んだのか？ キョロキョロする二人だったが、刹那、二人の間に何者かが舞い降りる。

いったん膝を突いてから立ち上がったその者はミニスカートを履いたスーツ姿で茶色い髪を後ろで束ねており、眼鏡をかけている。その下には遠くのものも良く見えそうな鋭い切れ長の瞳。色は金色だ。最大の特徴はなんとといっても、背中から生やしていた一對の大きな翼。

「き、君は……！」

翼を生やした女性を見て辰巳が目丸くする。まるで以前から面識があるような、彼女を恐れているような。そんな風に震えながら。

「……本部へ向かう途中で立ち寄ってみれば……お二人ともこんなところで何をしておられたんですか？」

しかめっ面で、しかし丁寧な口調でスーツの女性が二人へ訊ねる。この女性、いかにも生真面目で不真面目なことや人物を嫌っていそうな雰囲気を漂わせている。

「え？ あー、その……バイトくと親睦を深めようと南来栖島^{このしま}までバカンスに来ていたんだ」

「バカンスに来た東條健を駆逐する……の間違いでは？」

「あ、あー、そっちだ！ 私としたことが言い間違いをしてみました」

バレバレの苦しい言い訳。辟易したような表情を浮かべながらスーツの女性はため息をつく。そんな二人を見た多良場は、スーツ姿の女性から言い知れない恐怖を感じていた。

「と、ところでそのねえちゃん、お名前は……？」

苦い顔をしながら、多良場が女性へ訊ねる。

「失礼、あいさつが遅れたわね。鷹梨^{たかなし}です。以後お見知りおきを」

スーツ姿の女性がすました顔で鷹梨と名乗る。眼鏡のフレームを持ち上げ位置を整えると、彼女は辰巳と多良場を見て「とにかく……無断でこんなことをした以上、どうなるかは分かっていますね？」と訊ねた。やや機嫌が悪そうだ。

「は、はい……」

「おお、鷹梨ではないか！ よく来てくれたな！」

「ええ。私もお会いできて光栄です、社長」

「俺もだ。不真面目な連中ばかりだからな　お前が来てくれたお陰でわが社は安泰だ」

闇組織ヴァニティ・フェア　その本部に当たる機械仕掛けの古城。その玉座に屯する『社長』甲斐崎の前で、鷹梨や辰巳が膝を突いていた。

先程とは違い、鷹梨はすました微笑みをたたえている。また、普段は冷徹に振る舞う甲斐崎も今日に限っては妙に嬉しそうだ。それだけ彼女を信頼している　ということだろうか。

「それより　辰巳、多良場」

「はっ……！」

「ひいひい!!」

辰巳と多良場を甲斐崎が睨む。とてつもない眼力だ。その気になれば相手を殺せそうなくらい。

「鷹梨から聞いたぞ？　二人そろって南来栖で遊び呆けていたらしないな」

「は、はい！」

「まったく見下げたものだ……」

ため息混じりに、甲斐崎。

「お前たち……まさか人間の世界を楽しんでいると思っではないか？」
「い、いえ……滅相もございません。人間どもは滅ぼすべき敵、わ

かりあおうとはこれっぽっちも……」

「くどい……」

甲斐崎が立ち上がり、言い訳がましい辰巳を一喝して黙らせる。
辰巳のすぐ横で多良場は腰を抜かしていた。

「人間は我らから『光』を奪い自分たちだけ栄光を謳歌した……許されざる者共だ。そんな連中が作り上げた世界を楽しむなど、笑止千万ッ……」

「ひええええっ」

「命が惜しいのなら、今後勝手な行動は慎むことだ……」

辰巳と多良場へそう告げると、甲斐崎は再び玉座へ腰かけた。

「……社長」

それにしても凄まじい剣幕であった。あれも彼が帝王だから成せるものなのか。少し動揺しながらも立ち上がり、鷹梨は甲斐崎の方を向く。

「耳寄りな情報がひとつだけあります」

「なんだ？ こっちへ来い、聞いてやるっ」

そんな鷹梨を手で招き、自分のそばへと近寄らせる。そして甲斐崎の耳元で鷹梨は何かをささやく。

「……そうか。『風のオーブ』のありがた……」

EPISODE 154：持つべきものは、家族

南来栖島、三泊四日間の旅。シェイドが突然現れたり、まり子が人を殺しかけたり、みゆきが急にアタックを仕掛けてきたりといういろいろあったが無事に旅を終え、本土へと帰ってきた健はある場所を訪れていた。それは 滋賀県大津市にある実家。

「二人ともいるかなあ」

玄関のドアの前で健が呟く。その片手には家族の為に買ってきた土産を入れた袋を持っていた。待ち遠しいのだ、家族に会える瞬間が。喜びを分かち合えるその時が。健の後ろにいるアルヴィーとまり子も同じ気持ちだった。

「あつ……健ちゃん！ お帰り、旅行お疲れさま！」

インターホンを鳴らすと、中から現れたのは長い髪をなびかせたおっとりした雰囲気的女性。年齢を感じさせないほど若々しく、美しい。そして胸がある。他のところも素晴らしいが、とにかく胸がある。そして母性的だ。

「お母さん、ただいまー」

何を隠そうその女性は健の母 東條さとみであった。微笑みながらそう言つと健は靴を脱いで玄関へ上がる。

「ご無沙汰しております」

「は、はじめまして」

健に続いてアルヴィーとまり子も玄関へ上がった。はじめて入った最愛の義兄　健の実家を前にして、まり子の気分は高揚している。

「あつ！　健と白石さんやん！」

「姉さん、ただいまー！」

リビングでは髪をうしろで束ねた若い女性がくつろいでいた。彼女は健の姉の　綾子だ。気さくで陽気な性格の姉御肌。健とは幼い頃よく喧嘩をしていたが、そのくらい仲が良かったというわけだ。

「これ、南来^{なんらい}栖島^{せいじま}で買ってきたおみやげや！」

「あつ！　わざわざ買^かうてきてくれたんやな、ありがとう！」

「ぬいぐるみもあるで〜」

「ホンマに？　やったー！」

「良かったやん！　これで綾子のぬいぐるみコレクションがまた増えるなあ〜」

「うんうんー！」

健が買ってきたお土産を前にして綾子は大はしゃぎ。彼女やささみの嬉しそうな笑顔を見られて健は満更でもなさそうだ。心暖まるこの空気の中で、「家族つていいなあ」「私もそう思うぞ」とまり子とアルヴィーは微笑んでいた。

「ところだね……」

「なんや、姉さん？」

「あのちっちゃい子は誰なん？」

盛り上がってきたところで綾子がまり子を指差す。ビックリした

かまり子は「えっ!?! わ、わたし!?!」と動揺していた。目を丸くしたりしてややわざとらしいが、可愛らしくもある。

「ホンマや。確かに気になるなあ。その子ってもしかして……」
「も、もしかして?」

「お母さん、あの子アレやる。健と白石さんの子供ちゃう? ひひひ」

「は……はいいいいいいいッ!?!」

母からそう訊ねられたとき、健とアルヴィーに激震が走った。一方でまり子はさほど気にしていなかった。「この二人の子供か……それも悪くない」とでも思ったのだろうか。

「な、なんでそう思ったの?」

「えっ、そう言われたかって……なあ」

「うん。あんたと白石さん、めっちゃ仲ええからデキてもおかしくないんちゃうかって思ったんやけど」

「えええええええ!?!」

自分が知らない間に、聞いていないところでそこまで話題が膨らんでいたとは。己がまいた種とはいえ、健は開いた口が塞がらない。

こうなったら最後の手段だ。嘘の上に嘘をぬったくるとは出来ればあまりやりたくはないが、それでも やるしか道はない。

「ちやうちやう! この子とはそんな関係やないって!」

「ふーん。じゃあなんなん?」

うるたえる健へ対して、綾子。やや意地悪そうに笑っている。健

の反応を見て楽しんでいるに違いない。

「あんなー、この子まり子ちゃんって言うんやけど……まり子ちゃん
は白石さんトコの親戚の子なんよ」

「な、なーんや。親戚やつたんや？」

「あらら〜、せやつたんか〜」

意を決して、健は綾子とさとみにまり子は白石の親戚だといって誤魔化す。少々気が引けるが信じてもらえたので良かったことにしようとして、健は胸を撫で下ろした。

「スイカ切れたよ〜。みんなで食べよか〜」

「はい〜！」

それからしばらくして、さとみがスイカを切っておぼんに乗せて持ってきた。まだまだ残暑は続く。だから甘くてみずみずしいスイカを食べて、スッキリするのだ。健も綾子も、さとみもアルヴィーも みんな美味しそうにスイカを食べていた。

「うつま！ 久々に食べたけど、めっちゃうまいでコレ！」

「せやる〜？ お母さんが切るスイカはやっぱり絶品やなあ〜！」

「そう言ってもらえて嬉しいわ〜。暑いはまだ続くから、みんなさっぱりしてっや〜」

水分をたっぷり含んだスイカは喉が乾きやすい夏にはぴったりのフルーツだ。一口かじっただけでみずみずしい食感が舌先から伝わ

っていく。

「夏はやっぱりスイカだのう。……ん？」

「じーっ……」

アルヴィーがまり子に目をやると、彼女はスイカを一口もかじらずにただまじまじと見つめていた。何を考えているのだろうか？ 気になったアルヴィーはまり子に、「妙に真剣な顔をしておるが… 食わんのか？」と訊ねる。

「いやさ……スイカ見てるとき、思っただよね」

「何をだ？」

「わたしもちっちゃくなる前はこのくらいあったのに、って」

「はははっ！ そうかそうか、やはりそういうことか」

スイカを見て抱いた願望。何となく思い浮かべたかつてのなまめ艶かしく美しい姿。切る前のスイカ並か、それより一回り大きい小さいぐらいで夢いっぱいの 豊かな胸。早く大人の姿に戻りたいまり子は「胸がスカスカするのって、なんか寂しいのよね」とスイカを持った手を上下に揺さぶる。

「ぶっ……くすくす」

「ちよつと、何がおかしいのよお？」

「いや、すまん……つい」

「もお」

まり子をからかうアルヴィー。眉をしかめ頬を膨らませるまり子。そんな二人を見て東條家の三人は「かわいいな……」と目を輝かせ口元を緩ませながら和んでいた。

「いつてきまーす！」

「ほな、気を付けてな〜」

「遠慮せんとまた顔見せてな〜！」

「はーい！」

翌日、実家で一晚を過ごした健たちは京都へ帰ろうとしていた。三人とも暖かく微笑みながらさとみと綾子に手を振って、大津駅へ向けて歩いていく。

三人を見届けたさとみと綾子は家の中へ戻り、リビングでそれぞれがやりたい事をはじめた。さとみは皿洗いを、綾子はテレビ番組の観賞を。

「しっかし健も薄情やなあ。アイツもうちよい家におってくれても良かったのに」

「でもしゃあないやん。あの子仕事あるさかい、あんまりのんびりもしてられへん」

「せやけど……久々に帰ってきたって思ったらすぐ帰っちゃって。

心配やねんな……、お父さんみたいになくなるんちゃうか、って」

自分が心配していることを呟きながら、ため息をつく綾子。かつて、父である明雄はある日出かけたきり帰ってこなくなった。強気に振る舞う一方で、健も父のように二度と帰ってこなくなるのではと危惧していた。つまり綾子は不安になっていたのだ。

「お父さん、か〜」

さとみが少し憂いを帯びた表情で呟く。やがて皿洗いを終え、綾子の近くへとやってくる。「どないしたん？」と綾子はきょとんとした表情で訊ねた。

「なんていうか……お父さんとおんなじにおいがするんよ」

「えっ……誰から？」

「白石さんからや」

そう言ったときのさとみはどこか嬉しそうで、しかし、切なさもあつた。彼女はひよつとしたら、薄々感付いていたのかもしれない。

生前明雄^{あつと}が何をしていたのか、その後どのような末路を辿ったのかを。母の言葉と表情に衝撃を受けた綾子は 何も言わなかった。否、言えなかった。

EPISODE 154：持つべきものは、家族（後書き）

SAI-Xです。

今回で水着回はおひらきとなります。

次回からはVol.9が始まります。

とある特撮番組はギャグ回の次はシリアスになりますが、果たして『同ドラ』ではどんな展開になっているのか？

それでは次回をお楽しみに！

引き続き感想・評価等お待ちしております！

EPISODE 155：季節の変わり目

暑かった夏も過ぎ去り、涼しい季節がやってきた。それは秋だ。秋というのは不思議な季節で、食欲が沸いてきたり、芸術やスポーツ、読書が盛んになったり　とにかく色々なことがある。

主な行事には運動会（場所によっては体育祭）、文化祭などがある。他にも紅葉や石焼き芋などは秋しか楽しめない。　だが、良いことばかりでもない。悲しいかな、季節の変わり目というのは妙な事が起こりやすく気が狂った者も出てくるのである。

「待てえー！！」

「待てつて言われて待つ奴がいるかー！ーっ！！」

ある晩の東京都内にて。逃走中の銀行強盗を警官たちが追っていた。強盗はハゲ頭にひげ面の中年の男性であり、路地裏へ逃げ込んで上手いこと警官を撒いた。

「ひい、ふう、みい……へへへ」

路地裏にある廃ビルへ逃げ込んだ強盗は盗んだ金を入れた風呂敷から札束を取り出し、下品な笑いを浮かべながら枚数を数える。少なくとも一千万は超えている。いや、三億円はあったらどうか？ 何にせよかなりの額だ。

「これだけあれば一生遊んで暮らせる！　盗んだ甲斐があったぜー
ーい！！　ダーッハッハッハッハ！！」

大方この男は会社で働き続けるのが辛くなって、楽をして儲かる

「ハア!？」

「お前が今持っているその金はどこで手に入れた？」

「し、知らねえよ!」

「ククク……そうか。あくまで教えるつもりは無いと言っわけだな」

道化師がつけてそうな仮面の下で男は笑う。手のひらで顔を覆ってまで。彼にとってはよほど滑稽な事だったのだろうか。

「しかし、遊ぶカネ欲しさに強盗か。……たとえどんなに小さな罪でもそれは許されない。いや、この私が許さない」

うってかわって、真摯な口調でそう言うと黒いローブの男は右手をかざす。するとビルの中に風が吹きすさび、男の手元に黒い風や緑色の風を伴って大鎌が現れた。柄には緑色の宝石が光っておりその鋭利なシルバーグレイの刃は外からの月明かりに照らされて光っていた。

「ひええええっ!！」

「私は死神だ。貴様のような罪人はこの世には必要ない。あの世まで貴様の魂を案内してやるう」

「か、カネならいくらでも出す! だから命ばかりはあああああッ!！」

両手に大鎌を握りしめ、『死神』を名乗る男はおびえている強盗へと歩み寄る。そして。

「死ね!！」

その凶刃を振り下ろした。上半身と下半身を真つ二つにされた銀行強盗は豪勢に血しぶきを上げ、白眼をむき絶望を抱えた表情でこの世を去った。

「先日深夜0時頃、銀行強盗で元サラリーマンの只野義男氏が目黒区の廃ビルで上半身と下半身を真つ二つにされて死亡しているのが発見されました。目撃者の情報によると、他にも同じような殺された方をした被害者が何人もいるそうです」

所変わって、京都駅前のアパート『みかづきパレス』。その一室で三人の男女が茶の間で朝食を食べながらテレビのニュース番組を見ていた。一人はやや頼りなそうな青年で、一人は白髪に赤眼の大人の女性。もう一人は青紫の髪の幼い少女。

「信じられないよ……なんでこんなことをするんだ」

右手に箸を、左手に白いごはんが入った茶碗を持ちながら青年が嘆く。彼は茶髪の外ハネヘアで瞳は青色。『まほろば』という文字がプリントされたTシャツと長ズボンを穿いていた。彼は、名を

東條健とうじょうけんという。

「輪切りにして殺害するとは……なんと面妖な。正気とは思えない」

その大きな乳房をたくしあげるように腕を組みながら、白髪に赤眼の女性が眉をしかめる。彼女は名をアルヴィーといい、透き通るような肌と抜群のプロポーシヨンの持ち主。

しかしその正体は　巨大で神々しく、威厳に満ち溢れた白龍。力の消耗を抑えるため、普段はこうして若く妖艶な女性の姿に化身しているのだ。余談だがあまりに胸が大きいためか　今にも彼女が着ているセーターははち切れそうだ。

「おかしいよ。絶対こんなのおかしい……。悪いことしたらいけないのに」

茶碗を片手に持ちながら、幼い少女がやるせない思いが詰まった複雑な表情を浮かべる。彼女は　糸居まり子。純真無垢だが反面冷酷であり、嗜虐的。

心を冷たく、堅く閉ざしていてなかなか開こうとしない。だが、本当は女の子らしく繊細で優しい。神出鬼没だった彼女は何度か健の前に現れ、最終的にこのアパートに住み着いた。

彼や旧知の仲であるアルヴィーとの交流を経て、近頃は少しずつ心身ともに成長しつつある。そんな彼女の正体は　女郎蜘蛛のシエイド。禍々しい蜘蛛の化け物だ。

しかし彼女もまた、アルヴィーと同じ理由で普段は人の姿をとっているのだ。もっとも、自分が最も敬愛している健におぞましい姿を見せたくない　という感情もあるのかも知れないが。

健たちは朝食を食べ終え、食べた跡を片付けて食器を洗った。順番に歯みがきや洗顔も終え、パジャマから着替えて気分を入れ替える。

窓を開けて空気の入れ換えも行った。今日は晴れた。外には秋の涼しい風が吹いている。洗濯物も干し、それを日光のもとへ晒す。こういう日は天日干しに限る。

「ふう〜……」

朝から結構動き回って疲れたので、健は少し休憩をとることにする。窓の近くで太陽の光を浴びて日向ぼっこだ。

彼のうしろではアルヴィーとまり子が楽しげに話をしていった。いったい何を話しているんだろう。と気にしながら、健は二度寝をはじめた。

「シロちゃん……だーいすきっ」
「わっ！」

嬉しくなったあまり、唐突にまり子はアルヴィーに抱き付く。まり子の顔はアルヴィーの胸に当たっており、だいぶん気持ち良さそうだ。

形がきれいでもちもちしていて、なおかつ柔らかい肌触りなのでから仕方がない。このままアルヴィーのグラマラスな肢体に埋もれていたいとさえ思っていた。

「こ、こらッ……やめんか」
「エへへ」
「まったく……子供っばいんだから」

いたずらに抱きついてきたまり子を見て、困った顔をしながら笑うアルヴィー。頬が少し赤くなっていた。

「……ん？」

アルヴィーが何か気付いたような視線をまり子に向ける。

「のう、まり子」
「どしたの、シロちゃん」

「お主……少し背が伸びていないか？」
「へ？」

背が伸びた、つまり体が少し成長したのではないか？ そうアルヴィーはまり子に訊ねる。が、まり子は「全然伸びてないよ。おっぱいも相変わらずスカスカだし」と即答。やはり気のせいかとアルヴィーは少しばかりしくなっていた。

が、平穏のときは長く続かなかつた。健の近くに置かれていた白くて丸い電子機器 シェイドサーチャーがシェイド反応を感じて音を発していたのだ。目覚ましがわりに。

「……ツ！？ シェイドかつ！？」

サーチャーが鳴らしていた音を聞いた健が急に目を覚ます。サーチャーのスクリーンを見ると 大きな点が二つ、いや三つ。それだけ強い怪物シェイドが来ているという証拠だ。

「のんきにしてる場合じゃない。早く行かなきゃ！」

上から赤いチェックの上着を羽織り、ズボンをグレーのカーゴパンツに履き替える。更に靴下も履いて準備万端。

「みんな……準備できた？」

「ああ、いつでもいいぞ」

「わたしも！」

確認するまでもなく、みんな準備は出来ていた。早速出ようとする一行だったが、急に健が立ち止まる。

「まり子ちゃん、悪いけど……お留守番しててくれない？」

「え？」

「もしもの事があつた時のために……」

本当ならまり子も連れていきたいが、そうは行かない。シェイドとの戦いはたった一度の勝敗が全てを決める。

健は今まで連戦連勝を続けてきたが、いつ敵の攻撃で倒されて命を落としてしまつか分らない。だからそうなったときの為に誰か一人に留守を任せようと思つたのだらう。

「わかつた。サクッとやつつけてきてね！」

「ああ！」

しょうがないな、と言いたげに微笑みながらまり子は健の頼みを承諾。一刻も早く、一人でも多くの命を守るべく 健とアルヴィーはシェイドが発生した場所に向かつた。

EPISODE 155：季節の変わり目（後書き）

どうも。

今回からVol.9スタート！

ちょっとシリアスな感じですが、いかがでしたでしょうか；

もうちょい明るめの方が良かったかなあ^^；

Q&A

Q：とばりさん作のシェイドサーチャーはシェイドの反応をキャッチするんですね？ アルヴィーやまり子に反応しないのは何故ですか？

A：とばりさんが制作したサーチャーは色が白いだけではなく、シェイドの情報を記録してアラームのON・OFFを設定できるようにカスタマイズされています。つまり、前もってアルヴィーやまり子の情報を登録してあるのでこの二人には反応しないというわけです。

EPISODE 156：見る姿は見られています

「ここかな？ サーチャーが感知したのは……」

シェイドの反応を追った末に健とアルヴィーが辿り着いたのは、
人気がない倉庫。そこには人々を襲うシェイドもいなければシェイ
ドに襲われている何の罪も無き人々もない。窓の外から光が射し
込んでいるだけの 寂しい空間だ。

「それにしても誰もいない……何かあるかもしれんな」

不気味なほどに静まり返っているこの倉庫。どこか怪しい、絶対
に何かある。そうアルヴィーはにらんだ。

「敵の罠かもしれん。健、気をつけて進もう」
「うん、わかった」

ホコリが宙を舞う中、警戒しながら二人は倉庫の奥へと進んでい
く。

「ぎゃああああー!!」

「なんだ!? 誰か襲われてるのか!？」

「健、急ごう!」

やがて誰かの悲鳴が聴こえてきた。その音程は低い。恐らく男性
だ。早く助けに向かわねば と、健とアルヴィーは悲鳴が聴こえ
てきた方向へ疾走。

そこにいたのは倒れている若い男性と、その男性を執拗に殴った

り蹴ったりしている　二体の蜘蛛のような姿をした怪人。

「やめろ！」

「シヤア!？」

険しい表情で健が叫び、蜘蛛のような怪人が振り向く。彼らは細身で片方は虎を彷彿させる黄色と黒の体色で、もう片方は茶色く煤けた体色。どちらも全身から突起を生やしていた。

とくに頭部から生えたそれは、まるで蜘蛛の脚のようである。他にも目が三つ、口元には大きなキバ。右手には鋭く長いカギ爪。肩には蜘蛛の巣のような模様が入った肩当て。　ひと言で言い表すなら不気味な姿だ。

「なんだあいつら……蜘蛛……?」

「貴様ら、何者だ！」

蜘蛛のような怪人を見て何かひっかかる健とアルヴィー。そんな二人をよそに蜘蛛のような怪人が二人へ言葉を投げかける。

「このツチグモ様の楽しみを邪魔しおつて！」

「俺たちは腹が減っているんだ！　晚餐ディナーの邪魔をするな！」

「お前からこそ何者だ！　第一、人を殺して晚餐ディナーにしようだなんて……
…そんなの見過ごこせるわけないだろッ！」

「そうだ。私たちはお主らのようなゲス野郎には容赦しない」

蜘蛛のような怪人に対して健が怒りをぶつける。両手には既に得物であるシルバークレイの長剣　エーテルセイバーと、龍の頭を模した盾　ヘッダーシールドを携えておりヤル気まんまん。アルヴィーもその姿を半分　本来の姿である龍に変身しており、頭からは角を、右手に巨大なツメと背中から一對の翼を、そして尻尾

を生やしていた。

「ぬう……」

「む？ 長剣を使うガキに白髪の子……」

齒軋りする二体の蜘蛛。そのうち虎のような模様の『ツチグモ』が何かに気づくような表情を浮かべる。

「そうか、分かったぞ」

「何がだ、ツチグモ？」

「なあ、ジグモよ。……あの二人は、我らが『女王』をたぶらかした忌むべき連中だ」

「……『女王』？ たぶらかした？ どういう意味だ！」

わけのわからない事を口走るツチグモとジグモへ健が憤る。わからないのも無理はない。彼はこの時、何も知らされていなかったのだから。

一方でアルヴィーは 二体の蜘蛛の怪人が言及したことについて何か知っているような、複雑な表情をしていた。

「ふん。貴様を知る必要はない！」

「それより……我々の邪魔立てをした以上、貴様らを許しはしない！」

「まずは貴様らから血祭りにあげてやるッ！！」

二体の蜘蛛の怪人が健とアルヴィーへ襲いかかる。その身動きは素早く軽快で、なかなか攻撃を加える隙を突けない。

「しゃあっ！」

「くっ！」

虎のような模様のツチグモが跳躍しながらキックを放つ。健はそれを盾で防ぎ即座に斬って反撃した。地面に落とされツチグモは一瞬ひるんだ。

「はあああッ！！」

「ぬがあー！！！」

跳び跳ねながらアルヴィーを攪乱する、煤けた体のジグモ。だがアルヴィーは一瞬の隙を突いてツメで切り裂きジグモを叩き落とす。

「こしゃくなアー！」

起き上がったツチグモが健めがけて蜘蛛の巣を吐き出す。それは瞬く間に広がって健を捕らえ動きを封じた。もがいて振りほどこうとするも、体がきつく締め付けられてますます自分を苦しめるばかりだ。

「わははは！　せいぜいあがけ。苦しめえー！！！」

「健ッ！」

高笑いするツチグモ。殴りかかってきたジグモを払いのけ、アルヴィーはツメを振るい衝撃波を放って蜘蛛の巣を切断。健は解放され立ち上がった。

「ええい、さっさとやられたら良いものを」

「それは……」

思い通りに事が進まず苛立つツチグモ。そんなツチグモに一気に詰め寄り、健は盾で殴りかかる。

「こっちの台詞だ！」

「ぐっはああああア！」

怯んだ隙に背後へ回り込み跳びながら回転して斬りつける。そしてそこから歯車のように回りながらの斬撃。叫び声を上げながらツチグモは吹っ飛んだ。

「せいっ！ やああああッ！！」

「グギヤアアアアア~~~~！！」

アルヴィーはジグモをその大きなツメで切り裂き、怯んだところにハイキックをお見舞い。ジグモは上空へ打ち上げられながら吹っ飛ばされた。

「お、おい……ツチグモ。こいつら、強すぎるぞ！」

「くそう！ ここは退却だ！ 貴様ら……覚えてるよ！！」

追い詰められたツチグモとジグモはその場から退却を計る。「待て！」「逃がさんぞ！」と健とアルヴィーは二体を追いかけるが二体とも鉄骨の下の影へ吸い込まれるように消えていった。

シエイドは影と隙間から出でる怪物。故にそこから現れたり、いざというときはそこへ入って逃げるのが可能なのだ。

「くそ、逃げられた……！」

「ともかく、シエイドは撃退できた。早くあいつらに襲われていた人を助けねば……」

「わかった！ そうしよう！」

相手を取り逃してしまっただが、いつまでも逃した敵にこだわる必

要はない。ここはひとまず襲われていた男性を助けて帰ることにする。男性のもとに駆け寄り健とアルヴィー。介抱して「大丈夫ですか!？」と呼びかけ安否を確認する。

「う、うーん」

「よかった。まだ生きてる」

「お主、大丈夫か?」

「は、はい。なんとか……」

幸い若い男性はまだ生きていた。彼の肩を担いで健たちは出口へと向かう。

「あれ? まだ音鳴ってる……」

「なんだい、それ?」

「あ、リーダーです。シェイドって怪物を感知して知らせてくれるんですよ」

「へえ、そっか……」

だが、健がサーチャーから鳴っているアラームを気にして取り出すとスクリーンには大きな点がまだ三つ。何故かシェイド反応が消えていなかったのだ。だが今は、男性を病院を連れていくのが先決だ。

「ここまで来れば大丈夫です」

「ああ、ごめんな。迷惑かけて」

「いえいえ。……む」

男性を連れて無事に倉庫の外へ出た健とアルヴィー。男性は血を流してはいたものの、なんとか歩けるようだ。だが　そこでアルヴィーがあることに気付く。

（この男　血が紫色だ。まさか……！）

そう、男性が流していた血は紫色だったのだ。ということは、つまり　！

「いやあ、助かったよ……」

頭を掻きながら男性が二人へ礼を言う。だが直後にニヤリと笑い、目を見開いて恐ろしい表情を浮かべる。更にその右手は　大きなハサミに変わっていたではないか。

「お前らがバカなおかげでな！！」
「ッ！」

そして豹変した男はハサミからビームを撃ち、近くにいた健を攻撃。遠くへ吹き飛ばした。よろめきながらも立ち上がる健へアルヴィーが駆け寄る。

「そのハサミ……まさか！」
「当たり前！　そうとも、俺は……」

片手がハサミになった男性があぶくに包まれ、その姿を変えていく。やがてオレンジ色のカニのような怪人に姿を変えた。甲冑をまとったような、ロボットに見えなくもない重厚でシャープな姿。

カニを真横から見たような頭部に緑色に光る眼。右手に巨大なハ

サミを携え、左手には攻撃と防御のどちらにも使えそうなハサミを携えている。

「南の島でお前らと戦ったカルキノスだ！」

「なにっ！ そうだったのかっ……！ このカニ野郎！」

「ズルいやつだの。カニのくせに」

「へっ。なんとも言え。騙される方が悪いんだよ！」

二人を嘲笑うカルキノス。こんな卑劣な奴を許すわけにはいかない。彼に戦いを挑もうとする健とアルヴィーだったが、そこへ更に「とうっ！」と叫びながら倉庫の屋根の上から新たに二つの影が飛び降りてきた。片方は顔に包帯を巻き異様なまでに厚着をした男。もう片方は軍服を着込んだ金髪の大柄な外人男性。

「久しぶりだな、東條健。バカンスは楽しかったかね？」

「お前は……辰巳^{たつみ}！」

「まさかこうも簡単に引つ掛かるとはねえ。お人好しにも程があるぞ、ポウヤ？」

「くっ」

包帯の男が健を嘲笑う。その隣にいた軍服を着込んだ外人男性が前に出て「新藤の死は無駄ではなかった、ということだな」と一言呟く。

「なに!？」

「ククク、気付かなかったのかな？ 君が持っているその機械を試してみる」

鼻で笑いながら辰巳が催促を入れる。サーチャーを取り出すと、やはり大きな反応が三つ。健はようやく気付いた。そういうこ

とだったのか、と。

「我々が何の学習もせずやられてばかりだと思ったかね？ 見る姿は見られているんだよ。そのシェイドサーチャーとやらが我々を感じずることを逆手に取ったのだ」

「せっかくこうやって言葉を話せて、物事を考えられる程度にオツムがあるんだ。使わなくては意味がないだろう？」

「久々に少々、いや、だいぶ頭を捻ったがね」

辰巳と軍服を着込んだ外人男性　ヴォルフガングが種明かしをして笑う。まさかこちらの手段を逆手に取って嵌めてくるとは思ってしなかった。健とアルヴィーは唇を噛み締める。

「……さて。お前らにはここで消えてもらおうか！　ぬおおおおおおおッ」

啖呵を切るヴォルフガング。両手を広げ天に向かって慟哭すると全身が夜の闇のような黒い霧に包まれ、直立した白銀の毛皮に包まれたオオカミのような姿に変身した。

両手からは大きなツメを生やし、その肩や四股、尻尾からは鋭利な刃が突き出ている。まさに全身が武器になっているようだ。

「はあああああッ！！」

続けて辰巳も気合いを入れ、毒霧を伴う瘴気に包まれながら変身。三つ首の蛇のような姿になった。肩から蛇の首が生えており、真ん中の胴体は水色で右腕は紫色、左腕は緑色とどぎつい体色だ。見るからに相手を殺せるほどの猛毒を持っていることが分かる警告色。

「……上級のシェイドが三体……そのうち二体は幹部クラスだ」

「幹部クラス！？　ってことは……！」

「ああ。油断はできぬぞ、健！」

「同胞の仇……取らせてもらっッ！……！」

さあ、戦いだ！

EPISODE 157：白熱！ 危険な三人組

「アオーン！！」

まずはじめにヴォルフガングが変身した狼のシェイドが雄叫びを上げ、その鋭いツメで何度も健を切り裂く。防御するもあつという間に崩され、ヴォルフは馬乗りで健に殴りかかる。

「おらおら、どうしたア！！」

「ッ！！」

マウントポジションを奪ってなんとか抜け出し、立ち上がった斬りあいへ持ち込む。だがそこに辰巳が割って入り、健に鋭い蹴りと重いパンチを叩き込む。

「はっはっは！ そんなものか、小僧！！」

「すっかり体がなまったんじゃないのかア？」

「くっ……」

「シャアアアア！！」

よろめき呼吸を乱す健。そこへ辰巳が奇声を上げて腕を伸ばし、健を掴み上げて地面へ叩きつける。

「うわああああ！！」

「そりゃあ！！」

宙へ放り出された健にヴォルフが鎌鼬を放って追い討ちをかける。肩を切り裂かれ、血しぶきが豪快に飛び散った。

「健ッ!!」

「どこ見てんだ、ネエちゃん？」

「ふんっ！」

「どあっ!？」

このままでは健が危ない！ カルキノスを正拳で突いて吹き飛ばし、翼を羽ばたかせて飛翔。健のもとへ向かい着地すると同時に衝撃波を発生させ、辰巳とヴォルフを吹き飛ばす。

「アルヴィー！」

「これっ、無茶をするでない！」

「ごめんっ」

アルヴィーは右を、健は左をそれぞれ固める。「おのれえ」「油断していた……」とうめきながら辰巳とヴォルフは立ち上がり、健とアルヴィーへ睨みを効かせる。

「さすがに二対一は無理があつた。けど、これで五分五分だ」

「ふん！ 減らず口を叩きおつて……」

鼻息を荒く、ヴォルフ。その時健とアルヴィーの背後にカルキノスが忍び寄り 泡爆弾を吹いて爆撃。だが一瞬の隙を突いて振り向き防いだ。

「正確には三対二だ。どっちにしろ君らは不利だぞ、ん？」

「へっへっへっ……今のお前らに俺たちが倒せるとでも思ってたのかア？」

「カニは黙つとれ」

「うるせエー!!」

辰巳とカルキノスが言うように、確かに状況は不利だ。相手は三人、対してこちらは二人。相手三人のうち一人はどちらかといえは格下だが、それでも強い。慎重に、かつ大胆に戦わなければ、こいつらに勝つことなど到底不可能だ。

「……フツ。私たちは逆境に立たされているわけか……面白い！」
「そんなもの、乗り越えてみせる！ お前たちには負けない！」
「ほざけエ！！」

意を決し改めてこの難関に立ち向かうことにした健とアルヴィー。その二人へ向けてヴォルフは咆哮を上げ、引き離そうとする。だがしつかりと身構えて凌いだ。

「やあああああッ」
「があっ!?!」

アルヴィーは重厚なカルキノスを持ち上げて放り投げ、辰巳へとぶつける。「ぬわっ」「いでえええ!!」とうめきながら、二人仲良く転倒した。

「流石はアルビノドラゴン……やっってくれるなあ!!」

しかし辰巳は起き上がり、口から火の玉を吐き出す。両肩にある首からも熱線を放射し、辺りを焼き払う。

「っ……卑怯な真似を」
「よそ見している場合かあ!?!」
「うあああッ」

炎に囲まれ、迂闊に身動きが出来なくなったところへヴォルフが突撃。その大柄な体格で肩からタツクルしアルヴィーを突き飛ばす。

「アルヴィーッ!？」

「うおらあああッ」

動揺する健へヴォルフが巨大なツメを振りかざす。剣で受け止めて弾き、せめぎ合いへと持ち込んだ。

「そこをどけッ」

「ハッ! 出来るものならやってみな!」

「うおおおおーッ!!!」

「ふんぬうううううッ!!!」

せめぎあう長剣と鋭いツメ。互いに激しく揺さぶり火花を散らす。やがて健は打ち勝ち、ヴォルフの防御を崩して相手を叩つ斬り、そこから少し剣を回して渾身の突きが炸裂!

「ぐおおおおおおッ!!!」

ヴォルフを吹き飛ばし、そのまま炎の中を切り抜けアルヴィーの元へ向かう。

「健……!」

「もう大丈夫! それより、こいつらを何とかしなきゃね」

「ああ、そうだな!」

近くにはカルキノスと 三つ首の毒蛇^{トリヘッド}。かつてレルネーの沼で英雄ヘラクレスが、己に課せられた試練のひとつとして戦った組み合わせだ。

もつとも、化けガニのカルキノスは戦いの最中にどさくさに紛れてヘラクレスによって踏み潰され、星になったのだが。

「チツ……まだ生きてやがったのか。うつつとうしい野郎だ！」
「こつちの台詞だ！」

憎まれ口を叩きながらカルキノスへ攻撃を加える健。流石に力二だけあって堅い。しかもパワーもあり、近くにあった鉄製のドラム缶を一撃で粉碎してしまった。

「ど、ドラム缶がぺしゃんこに……なんてパワーなんだ」
「どうだ！ こいつがこのカルキノス様自慢の怪力バサミだぜ！」

「お前も缶くずにしてやろうか！ ええ！？」とカルキノスは続け、右腕の大きなハサミをハンマーのように叩きつける。転がってかわすが、近くにいた辰巳によって腹を殴られてしまう。

「がっ！！ うっ……」
「敵はひとりだけとは限らない。それ、もういつちよ！！」

激痛のあまり腹を押さえる健へ更に鋭いキックを浴びせ、気絶させる。

「ぐ……ああああアア」
「くくく……いいぞ、もつと苦しめ。泣け。叫べ！」

辰巳は血を流して悶える健を踏みつけ、血を吐かせる。苦痛にあえいでいるその姿は凄惨で、残酷で、痛々しい。

「野郎、いい気味だぜ。辰巳さん、もつとやっちゃって！！」

「そうだ、もつと痛めつけてやれ！ こいつは俺たちの部下を何人も殺してきた憎むべき敵だからな……」

「言われなくともわかつているさ。なァ！！」

カルキノスに、ヴォルフに、そして辰巳に囲まれ健は窮地に陥った。体を踏みにじられていて身動きが取れない上、周りを敵に囲まれている。どこにも逃げ場はない。

「き、汚いぞ……お前ら……ッ」

片目を瞑りながらたどたどしく、健が呟く。

「どうした。手加減してほしいかね？ ん？」

「そ、そこからどけ……っ」

「残念だがそれは出来ない相談だね！」

「うばああああッ……！」

力強く健を踏みつけ、衝撃で吐血させる辰巳。その目は内なる狂気と激しい怒りに満ちていた。

「この頃動いてなくてね。なにぶん力が有り余っているんだよ……」
「っ……」

「そういうわけだから手加減は出来ないな。……まずはその顔を剥いでやる」

わなわなと左手を振るわせながらその鋭いツメを更に伸ばす。そして 勢いよく振り下ろす。

「とどめだ……死ねええええエエエエ！……！！！」

そのときである！

「させるか！」

「なにっ!？」

アルヴィーが空中から切り揉みしながら辰巳へ突撃！ 寸前で相手を吹っ飛ばし、健の傍らへ着地した。

「辰巳さん！」

「お前、大丈夫か!？」

「くうっ、私としたことが……」

カルキノスとヴォルフに介抱されながら辰巳が立ち上がる。胸にはアルヴィーによって切り裂かれて出来た傷口が開いていたが、たちまち塞がった。ヒュドラは不死身の怪物である。

無限の再生力を持ち、故にこの程度の傷は屁でもないのだ。流石のヘラクレスも、たいまつを用いて首を切り落とした痕を焼かねばヒュドラを討伐することはかなわなかった。

「取り込み中のところを邪魔してしまったようだの」

「アルビノドラグーン、貴様……なぜ人間に味方するんだ」

「人間が好きだからだ。それ以外に何がある」

「ちっ……言わせておけば！」

辰巳たちがいきり立つ。そこにどこからともなくエネルギー弾が何発も放たれ、辰巳たちに炸裂する。

「今のエネルギー弾……もしかして」

「ああ、間違いないな。あの荒っぽい撃ち方からしての」

誰が撃つたのだろうか？ 健とアルヴィーには心当たりがあるよ
うだ。それは。

「……誰だッ」

「なんだかんだと聞かれたら、答えてやるんが世の情け！」

辰巳が叫ぶ。見上げた鉄塔の上に 銃撃主らしき人物が立っ
ていた。そのバツクには後光が射しており、まるでヒーローのようだ。

「寄ってたかって一人の相手をリンチするとは……見下げたもんや
なあ」

銃口から上がる白煙を息で吹き消したその者は、ライトブルーの
髪と瞳をした若い男性だった。長さは男性にしてはやや長く、女性
から見たら短い方。

服装はノースリーブのデニムの上着にピンクのシャツ、そしてジ
ーパン。そして革のブーツを履いている。その手に持ったメタリッ
クブルーの大型銃は一点の曇りもなく輝いていた。

「トオッ！」

掛け声と共に男性は飛び降り、健たちの前へかつこよく着地。続
いて辰巳らへ銃口を向けた。見覚えがあるその姿を前にして健とア
ルヴィーの中に一片の希望が沸き上がる。そして笑顔になった。

「貴様はいつたい……！」

辰巳が叫ぶ。青い髪の男はニヤリと笑い、こう言った。

「ある時はさすらいのたこ焼き屋、しかしその正体は 人呼んで『浪速の銃狂い』。わしの名は市村正史やああああ!!」

青い髪の子 市村が名乗りを上げる。その背後では爆発が起き、より彼のかっこよさを引き立てた。

「市村さん！ 来てくれたんですね！」

「たこ焼き屋！ いつも健にケンカを売つとるお主が助けに来るとは、どういう風の吹き回しだ？」

「さーな。ただ、わしも正義の味方やからな。正義の味方が人助けせんでどうすんねん」

市村が笑う。普段は健をライバル視している彼がこうして健のピンチに駆けつけることは稀だ。なんだかんだ言っつて、本人も知らないうちに健のことを 大切な仲間だと認識していたのかもしれない。

「……さてと。相手は三人、こっちはわし入れて三人。これで互角やな」

「数はね。だが……強さはそうとは限らないぞ？」

「冗談言いなさんなや。わしの方が強いに決まつとるわ！」

親指で自分や健やアルヴィーを指す市村。彼のその姿からは口では言い表せないほどの頼もしさを感じられる。

「フツ、いい度胸だ。まとめて八つ裂きにしてやろう。行くぞ、愚か者ども！」

「面白い。まとめてかかってこい!!」

辰巳とヴォルフがそれぞれ啖呵を切る。一方カルキノスはしどろもどろしていたが、「君も何か言っただよ!」と辰巳から湯を入れられた。

「来な! ヴァニティ・フェアの恐ろしさを教えてやるぜ!!」

戦いはますます激しさを増していく !

EPISODE 158…のせられるな！ヒロドラの黒い罠

「おんどりゃああああー!!」

ヴォルフが野太い叫び声を上げながら健たちへ急接近。ツメを交互に叩きつけるように振り回して襲いかかる。だが健は即座に盾で弾き、そのまま立て続けに盾で殴ってヴォルフをひるませた。

「てやあああっ」

「ぐぬっっっっ……ッ!!」

連続で斬りつけて、とどめに唐竹割りを一発。そこへ間髪入れずに市村がビームで援護射撃してヴォルフを吹っ飛ばした。

「遠距離なら任しとき！ ドッカンドッカンぶっ放したるさかい！」

「よそ見している場合か？」

宣言する市村。そこへカルキノスが彼の懐に飛び込み、ハサミによる格闘戦に持ち込んできた。

「どうせ近距離はからつきしなんだろオ!? このテのキャラのお約束だからなあ！」

「さあ、どないやるなあ!!」

ハサミを振るうカルキノス。市村は自慢の銃でカルキノスの打撃を防ぎ、或いはその敏捷な動きで回避した。

「ケッ、ちょこまかちょこまかと……銃使いのくせにい!!」

「噛ませ犬のカニは黙っとけエ!!」

「のんびりしている場合か!？」

起き上がったヴォルフが健たちへ突撃。市村を突き飛ばし、続けて健とアルヴィーにツメを突き立てて襲いかかる。

「しまった……市村さん！」

市村を気にかける健。そんな彼に容赦なく辰巳は魔剣を振るう。火花と共に血しぶきが飛び散った。

「ぐあああああつ！」

「仲間の心配より先に自分を心配したらどうだ、ボウズ？」

「っ……」

険しい顔で歯ぎしりする健。二人の間にヴォルフが割って入り、敏捷に動いて健とアルヴィーを攪乱する。

「わはははは！俺のスピードについてこれるか？」

「！は、早い……」

不破も同じように超スピードで走る能力を持つが、それと同等の早さだ。肉眼でも追いつかない。

「そこか！」

隙を突いたつもりでヴォルフを斬る。だが残像であり、「ほら、こっちだ！」と叫んで背後から現れたヴォルフに殴られた。

「健、落ち着け。呼吸を乱すな……相手をよく見るんだ」

「そうは言われても」

「ダメなら相手の動きを止めてみるのもいい」
「よし、わかった！」

アルヴィーから助言を受け、健は再びヴォルフに立ち向かう。長剣に青い色をした氷のオーブを装填し、周囲に冷気を発生させる。

「ぬ……急に肌寒くなってきたな。冷気か？」

「凍れ！」

手のひらから冷気を放ちヴォルフを凍らせようとする。だが全然効いていないではないか。

「残念だったな。俺に冷気は効かん！」

「なにッ……」

何を隠そう、ヴォルフガングは元々極寒のシベリアの地に住むシベリアオオカミのシェイドである。故に寒さには慣れっこ。氷属性なのだ。なので冷気には耐性があった。

「コイツはお返しだ。もらっとけ！」

両手をあわせて冷気を発生させるヴォルフ。やがて氷の球体を作り上げ 健へ投げつけて爆発させた。氷の破片が飛び散って爆発した冷気が広がり、健を凍らせていく。

「か、体が……！」

「碎ける！」

ヴォルフが凍った健めがけて、針のような氷の弾丸を飛ばす。一発だけでなく何発も。全弾命中し、更にヴォルフがツメで粉碎して

きた為に健は気付けば傷だらけとなった。

「しもたっ……東條はん！」

「健！」

倒れた健に駆け寄る市村とアルヴィー。よろめきながらも「だ、大丈夫……」と呟き、たどたどしく笑う。

「少々かわいがりがすぎたか……？」

「確かに、な……こつも一方的に勝負を進めてもあまり面白くはない」

「え？ い、いきなり何を言い出すんで？」

辰巳のもとにヴォルフとカルキノスが集まり、話し合う。カルキノスは何故か状況が呑めていない様子だった。

「ん？ ああ、実はだね……ゴニョゴニョ」

そんなカルキノスの耳元で辰巳がささやく。発言の意図を掴めたカルキノスは納得が行った様子で「なある、そういうことでしたか」と笑った。

「東條健！ 君たちにハンデをやる」

「なんだって？ どういう意味だ」

健が辰巳へ問う。

「以前私を倒すキツカケとなった、あの技を使ってみるがいい。私は逃げも隠れもせんよ、さあ！」

そういつて辰巳は背を向け両手を大きく広げる。あまりに唐突だ。何か意図があるのでは、と 健たちは一瞬疑った。

「どうした、やらないのかね？」

だが相手は手強い。これでカタがつくのなら 言われた通りにしてみるのも悪くはないだろう。

「 畏かもしれん。どうする、健？ 」

「 …… やってみる 」

「 おまつ …… ちょ、アカン！ アカンって！ これは畏や！ あいつらがあんた倒すために仕組んだ畏や！ 乗せられたらアカンがな！ …… 」

「 でもここでやらなきゃ …… 」

辰巳は背を向けていて隙だらけ。ヴォルフとカルキノスは呆然と立ち尽くしている。またとない絶好のチャンスだ。

アルヴィーと市村の制止を振り切って 健は長剣エーテルセイバーの柄に赤いオーブ、雷のオーブを装填。氷のオーブは先程装填してあった。

「 行くぞ …… ！ 」

エーテルセイバーを天へ立てて力強く身構える。その刀身には赤・青・黄色の光が宿されていた。これで辰巳たちに勝てる！ そう思っていたが …… 。

「 …… がかつたな！ 」

「 …… ！ 」

「同じ手は食わん！」

ニヤリと笑い辰巳が振り向きざまに左腕を伸ばし、健が握っていたエーテルセイバーをはたき落とす！

「くそッ！　これが狙いだっただのか……！！！」

地面に落とされたエーテルセイバーから三つのオーブが飛び出て転がる。慌てて拾い上げて剣を携えるが。

「卑怯だぞ！」

「フハハハハハ！！　言っただはずだ。いつまでもやられてばかりの我々ではない、と」

今更気付いても遅い。憤慨する健を辰巳が嘲笑する。

「お主……こんな真似をしてでも部下の仇をとろうとこののか！？」

「そうとも。どんな手段を使っても、ね！」

「お人好しなところがアダになったな、小僧！」

「……僕がバカだった……！」

歯を食い縛る健。相手は彼の性格を把握した上であのような作戦を考えたのだろう。今回は完全に　彼のお人好しな性格が仇となった。

「こんクソツタレが……！！」

「何とでも言え。　さて、そろそろトドメと行くこうか」

辰巳が再度笑う。両肩の頭の口を開くと光を集積させ　大蛇の形をしたビームを空中へと放つ。

「食らえ！ サーベントキャノン 大蛇閃光砲ッ！！」

大蛇閃光砲　と呼ばれた大蛇の形をした光線がくねりながら健たちのもとへ飛んでいく。

「まずい……このままじゃやられるー！」

絶体絶命のピンチ。だがそんなとき　健はあることを思い出す。それは盾に備わっているバリア機能。オーブをセットすれば対応した属性のバリアを展開することが可能なのだ。

「バリアだ……バリアを張ればいけるッ」

炎のオーブをセットし、炎のバリアーを張り巡らせる健。「ば、バリアーや。すごお……」 「前々からもっと使うべきだったの」と市村とアルヴィーはそのバリアーを見て呟いた。

だが、あろうことか大蛇閃光砲はバリアを貫通し破壊。

「や　破られた！？　そんなー！」

大爆発を起こして健たち三人を吹き飛ばして転倒させた。

「カーツカツカツカツ！！　バリアーで身を守ろうとはなかなか冴えているじゃないか、東條。だが……破られてシヨックのようだな？」

「うっ……」

薄ら笑いを浮かべる辰巳。健の手を踏みつけ、「ご愁傷さまでした」と皮肉った。

「流石に可哀想になってきたな。今日はこの辺にしておいてあげよう」

「わははは！ 次に会える時を楽しみにしているぞ」

ヴォルフが真っ先に隙間へと姿を消す。吸い込まれるように。

「また会おう、諸君。次は殺す！」

続いて辰巳もヴォルフと同じ場所に飛び込んで姿を消した。遅れたカルキノスは、少し慌てた様子で「そ、そうだぞ！ 覚悟しとけよ！！」と捨て台詞を吐いて消えていった。

「完敗だ」

「うん。悔しい……」

「東條はん、姐さん……わしもや」

圧倒的な戦力差を前にしての屈辱的な敗北。「強くなってやる……！」と唸りながら、健は強くなることを改めて決意するのだった。

「社長、辰巳さんたちが帰還したようです」

「フフフ、そうか……」

シエイドによるシエイドの為の組織、ヴァニティフェア。その本部である機械仕掛けの古城の内部、玉座の間にて。

長い茶髪を束ねたメガネの女性と黒装束の男こと 甲斐崎かいさきがそこにいた。黒髪にライトブルーの瞳だ。その肉体に無駄な贅肉はついておらず、スマートながらも恐ろしいほどの実力と威厳、そして知性を兼ね備えたハンサムであることがうかがえる。

「確かあの三人の中にバイトがいたはずだ。彼に給料を渡してやれ」

「はい。ところで社長、ひとつよろしいでしょうか」

「なんだ、鷹梨？」

甲斐崎の秘書である女性が訊ねる。彼女は甲斐崎から鷹梨たかなしと名を呼ばれていた。

「なぜ『クイーン』こと糸居まり子を我が社に引き戻そうとするんです？ 彼女はもはや裏切り者同然なんですよ」

「帝王にはそれを支える『女王』が必要なんだ。たとえどのような性格でも、な」

「ですが、糸居まり子は幹部としての使命を放棄して自由に動いています。気まぐれで同族を殺しています。おまけに人間に味方までして。そんな危険な女を野放しにしておくつもりですか!？」

鷹梨は『クイーン』を 糸居まり子の存在を快く思っていないかった。その生真面目で誠実な性格ゆえ、自由奔放で極めて唯我独尊であり同族を殺し、時には『糧』として食らうまり子を許せないのだろう。

「落ち着け！ 鷹梨、確かにお前が言う通りではある。だがあの女が持つ力を手放すのはもつたいない……」

「ですが、あの女を今になって仲間に取り入れることにメリットは

「……鷹梨、やめておこう。これ以上は荒れる。いいな？」
「はい」

異を唱え続ける鷹梨をなだめ、落ち着かせる甲斐崎。いつも冷徹に、傍若無人に振る舞う彼も実は苦勞しているのだ。部下は幹部も社員も、みな個性的でアクが強いものばかり。

更に自分の組織に身を置いていないシェイドもまとめなければならぬ為、頂点に立つものとしての責任感から来るプレッシャーは計り知れない。帝王になる為にはそれだけの責任とどのような相手でも受け入れられる器、そして無数にいる下々の者をまとめられるだけの統率力が求められるのだ。

「それと鷹梨、以前お前がそのありかを調べた『風のオーブ』についてだが クラークを現地に向かわせた」

「クラーク碓氷さんを……ですか？」

「ああ。あの神父のような格好をした奴だ」

クラーク碓氷とは、幹部の一人。メガネをかけた壮年の男性で神父のような服装が特徴。狡猾でエリート意識が強く、強者には媚びへつらい弱者を見下す陰険な男だ。

「 承知しました。それで手筈通りに進んでいますか？」

「 わからん。だが、奴には秘策があるようだ」

「 わかりました。とりあえずしばらくは様子を見ましょう」

甲斐崎と話を終えた鷹梨が席を外す。そのとき、窓の外で雷鳴がとどろき光っていた。

「アルビノドラグーンに糸居まり子 ……なぜあの二人が、人間に味方しているのかしら。少し興味があるわ」

廊下で鷹梨がひとりでに呟く。メガネの下では切れ長の瞳が金色に光っていた。

EPISODE 159：健がまり子へ聞きたいこと

「……お願いします！ 僕、強くなりたいんです。だからもっと仕事を！」

「いや、そうは言われても……」

翌週、辰巳達との戦闘で受けた屈辱からすっかり立ち直った健は今日も元気にバイト先で働いていた。少々元気が良すぎたか、いつも以上に速いペースで仕事をこなしていった。しかも正確に。

そのうち与えられた仕事をやりきってしまった為、彼はこうして先輩たちに新しい仕事をもらえるように頼み込んでいるというわけだ。

だが相手は少々困っている様子。それもそのはず、窓の外は夕方。つまり退勤時間になっている。なのに健は意味もなく残業しようとしているのだ。

「今日あなたにお願いした仕事はほとんど終わりましたし……また水曜日に」

「ですけど、それじゃ僕の気持ちがおさまらない！ ここは残業しなくても……」

「き、気持ちはありがたいけど……あなたまたケガしたんでしょ？ だったらあんまり無理しちゃダメよ」

金髪碧眼の上品なおっとりした雰囲気的女性 ジェシーと茶髪を結んだ活気そうな女性 浅田が困った表情で健へ告げる。だが健は食い下がらない。それどころかますます食いついてきている。

「そ、そうですね。それにもう退勤時間来てますし。あとはわたし達でやっておきますから」

「いや、でも今井さん……」

グルグルメガネの女性　今井が言う。彼女の口からそう告げられても、やはり健は帰ろうとする素振りを見せない。なんと面倒な男なのだろう。

「ああ、もう。じれったいネ！　シッコイネ！！」

苛立つてヤケクソ気味に唇を噛みしめながら、オフィスの奥の方から英語の教師のような男性が歩いてきた。係長のケニーだ。

「か、係長」

「東條サン！　そのケガはなんデス？　そしてユーは何故残業しようと思っただンです？」

「残業したら、その分だけバイト代もいつもより多めにもらえるかなあ……って思いました」

「何度も言うケド……そんなのダメです。退勤時間が来てもする必要ナイのに残業、ダメ、ゼツタイ！　フォビドゥ〜ンツ！！」

三人のOLが手を焼いている中、見かねて入って来た彼は厳しい口調で健を叱咤。元々健に対して辛く当たる彼だが、今日はそれが顕著だった。

「ジェシーさんも浅田さんも、今井さんも……いやみんなの迷惑になりマス。それにユーは怪我人でシヨウ」

「え？　はい、確かに」

ケニーが言うとおりである。元気で真面目に明るく仕事に取り組んでいた健だが、よく見ると額に包帯を巻いていた。傷はほぼ治ってはいたものの、完全には治りきってはいない状態でバイトに来て

いたのだ。道理で周囲の者たちが心配するわけである。

「ゆっくり休んで、それからゴハンしっかり食べて、ぐっすり寝て……元気になってからまた来てくらっさい。ソレでいいですネ？」
「は、はい、分かりました……」

「ひえ〜っ……、すっかり寒くなったなあ。この前まであんなに暑かったのになあ」

バイト先を出て自宅へ帰る道中で、寒さに震えながら健が呟く。
今は秋である。夏に比べたら涼しくなり、逆に言えば肌寒くなつて肌の露出が減る季節。これと冬にかけては水着が拝めなくなるため、そういう意味ではある意味もっとも辛いシーズンである。もっとも、寒いからこそ水着を着ようという猛者もいるが。

こういう寒い時期は肉まんやおでん等の暖かいものがおいしく感じられる。なのでホットスnakなどがたくさん売れる。家にいるアルヴィーやまり子も寒がっているだろうし、暖かいものを買って帰ろうと健は考えた。向かった先は 店員ともすっかり顔馴染みとなつたいつものコンビニ。

「ただいま〜」

「おお、お帰り！ 寒くなかったか？」

「お風呂沸いてるよ。先に入ってもいいよ」

「ありがと〜。あ、肉まん買って来たから食べて良いよ」

「はい」

自宅アパートの玄関の扉を開き、靴を脱いでリビングへ上がるとアルヴィーとまり子が笑顔で出迎えてくれた。机の上にコンビニで買ったものが入った袋を置くと、健は洗面所へ向かう。きつちり手を洗ってうがいをして着替えもすると、健はリビングへ戻った。

「ねえ、お兄ちゃん何まん食べるの？」

「うーん、そうだねえ。僕カレーまんて」

「じゃあピザまんもらっていいかしら？」

「どうぞどうぞ！」

「では私は肉まんを……」

「オッケー！」

自分たちが食べたい味を選び、紙袋を開けて食べ始める。どれも作りたてでアツアツだ。三人とも少し熱そうに息をしながら食べている。とくに健が食べているカレーまんは鼻からツンと刺激が来るほど辛く、そして濃厚でおいしい。その濃さは黄色がかった皮を見れば一目瞭然だ。

あつあつの肉まんをみんなで食べあつたあと、健はテレビを見ながら今日起きた出来事についてアルヴィーとまり子に打ち明けた。強くなりたいたらもつと仕事をさせてほしいと頼んだが断られたこと、そのことについて係長から説教を受けたこと　その他諸々を。

「そうか。お主も毎日大変だのう……」

「うん。働くのってラクじゃないからね。先輩や上司に対して遠慮しちゃったりとか、迂闊に変なこと言って相手を傷付けたりしないかとか、そうやって妙に気を遣っちゃったりとかしてさ」

「まあ、そう焦らずとも良い。急には強くなれん。これからじっくりと伸ばしていけばよい」

「シロちゃんの言うとおりでと思うわ。だってお兄ちゃんは十分強

いんだもん」

健の話聞いていたアルヴィーとまり子が笑う。前者はテレビを見ながら、後者は編み物をしながら。蜘蛛であるためか、実はまり子は裁縫や服飾が得意である。

今は来たるべき10月末の大イベント　ハロウィンに向けて少しゴシックでホラーな雰囲気のある服を作っている。吸血鬼や魔女の衣装、蜘蛛やおばけをモチーフにした不気味な衣装　どれも実にそれっぽい。更にまり子は元々ハロウィンが好きであるため、なおさら熱が入るといふもの。ちなみに素材は健が着なくなった服。捨てずにタンスの中に入れていたのを健が裁縫がしたいまり子の為に取り出し、使わせてあげているのだ。放置するよりもそっちの方がいいと思っただからだろう。

「二人とも……ありがとう！　僕、もっと頑張ろうと思う。強くな
くちゃんを守れないから」

「うむ、いい傾向だ。私も精一杯お主を応援しよう」
「うん！」

腕と腕を交わして改めて誓う健とアルヴィー。言葉や表情の端々からその絆の深さが見て取れる。まり子は二人を見て「二人ともポカポカしてる。いい雰囲気ね、恋人同士みたい」と呟いた。

その晩　他の二人が静かに寝息を立てている中、どういふわけか健はいまいち寝付けないでいた。何か気になることでもあるのだろうか。

(……この前、あの蜘蛛のシェイドが言ったことが気になる。『女王』って誰のことなんだ？　それにたぶらかしてはいない……)

あの二人は、我らが『女王』をたぶらかした忌むべき連中だ

健は以前倉庫で戦った蜘蛛のシエイド　ツチグモと戦った際に彼が言っていた言葉の意味が気になっていた。見に覚えがないのに自分が『女王』なる人物をたぶらかしたことにされている。まったく意味が分からない。

(待てよ。『女王』ってまさか　！？)

そう推測しながら健はその『女王』かもしれない相手に視線を向ける。そつと彼女の布団に這い寄ると、健は「まり子ちゃん、起きて」と彼女の耳元で呟いた。

「ふえ……お兄ちゃん？」

起きたまり子は目を半開きにしていて見るからに眠たそうだ。目をこすり、まり子は健の顔を見つめる。

「こんな時間に何かしら」

「君にちょっと聞きたいことがあるんだ。悪いけど付き合ってくれない」

「え？　うん、いいわよ」

アルヴィーがすやすやと心地よく寝ているかたわらで、健とまり子はリビングにいた。これから健が彼女に疑問に思った事を打ち明けようというのだ。机の上には水分補給用のミネラルウォーター（サイズは2リットル）とコップが二つ。

「それで、わたしに聞きたいことって？」

「うん。この前倉庫で戦った僕とアルヴィーを見てシェイドが言ってきたんだ」

「なんて？」

「女王をたぶらかした連中だ、って」

「……！」

健からその言葉を聞いて、まり子の表情が一変。目を丸くした。

「そいつら……どんな奴だったの？」

「蜘蛛みたいな不気味な怪人だった」

「なんですって？ まさか、わたしを探して……」

健からそれを聞いた途端、何故かいつも落ち着いているまり子が奇妙なぐらい動揺する。やはり何か関係があるのか？

「教えてくれ。『女王』が誰のことなのか、君が本当は何者なのかを。何が狙いなのかを！」

「……やっぱり、いつまでも隠しきれないか。いいわ、教えてあげる」

ため息をついてまり子が憂いを帯びた笑みを浮かべる。そしていつもは敵に見せるような表情を。今回は健に見せた。だが冷酷で残忍というよりは妖艶な大人の女性のそれに近い。それに瞳が優しい。

「わたし、蜘蛛型シェイドの女王なの。他のシェイドはみんな、そのほとんどがわたしの事を恐れて『クイーン』って呼んでる」

「……！ そ、そうだったのか」

ツチグモが言っていた『女王』とはまり子のことだった。何となくアルヴィーと同じくらい強力なシェイドなのではとは思っていたが、まさかそれほどにも恐ろしい存在だったとは。

「……………そう言えば、前にも……………」

……………最高ね。恐怖におののき逃げ惑うミジメな愚か者の味は

何様のつもりだ、『クイーン』……………ッ

見たらわかるでしょ？ わたしが何をしたいのかは

戦慄を覚えると同時に、健は以前ヴァニティ・フェアの刺客の一人であるサイの怪人 アンドレと戦ったときにまり子に助けてもらった事を思い出していた。あの時もアンドレはまり子を見て『クイーン』と口にしていた。そのときはあまりに冷酷非情なまり子の姿に震えていた為さほど気には留めていなかったが。

「そんなに驚かなくても、お兄ちゃんの事を食べたりはしないから大丈夫よ」

「う、うん……………ねえ、もうひとつイイかな」

「なあに？」

「君が僕やアルヴィーと一緒に住みたいって言ったのはどうしてだい？」

驚きを隠しきれないまま、健が次の疑問を投げかける。そんなことを聞いても彼女は恐らく、ゴミを見るような目でこう答えるだろう。『最初から肉体を成長させるためだけに近付いて、利用しようと思ったから』だと。だが、まり子は急に黙り込んだ。

「まさか、はじめっから僕を利用して元の姿に戻るために近付いた……とか？」

「……ひどい。たったそれだけのためだって思ってる？」

「え？」

「仮にそうだったら……今頃お兄ちゃんのもとにはいない」

「？　じゃあ、なんで……」

「……昔、好きだった人に似てたから」

戸惑う健へ対して、目を伏せて儂げにまり子はそう告げた。あの何年生きているかわからないアルヴィーの知り合いだから、彼女も相当長生きなのではとは思っていたが　まさか好きだった人がいたとは思いもしなかった。

「そっか……付き合ってた人、いたんだね」

「お兄ちゃんみたいにお人好しだけど、優しくであつたかい人だつたわ。近くにいただけで温もりを感じられた」

「僕に似てたんだ。それで懐かしくなつて」

「お兄ちゃんが生まれるより、ずっと前の話だけだね」

まり子が見せた幼いながら大人っぽい微笑み。それは敵対するものへ見せるような冷たく残酷なものではなく　純粹に健のことを想う、繊細で複雑な大人の表情。健も少し、心惹かれるものを感じ取っていた。

「いろいろあつたんだね……付き合ってくれてありがとう。いろんな話をしてくれて、君の事をもっと知る事が出来たよ」

「え……もう何も聞かなくていいの？　わたし、まだ何か隠してるかもしれないのよ？　本当にそれでいいの？」

驚いた様子でまり子が健へ訊ねる。まだ聞きたいことは山ほどあるはずなのに。

「いいんだ。君はアルヴィーの古い友達なんですよ？ だったらいい人に決まってる。だから信じてみたいんだ、君の事を」

「お兄ちゃん……」

健がにっこりと微笑みをたたえる。そのうち元氣付けられたかまり子にだんだんと笑顔が戻り。急にまり子は健に抱きついた。突然の出来事に健は驚きを隠しきれず、しかも女性に抱きつかれた為か顔が赤くなった。何故スケベの彼がこんなにも動揺しているのか？ それは本気で心から惚れているのはみゆきだけ。だからである。でも他の女性は別枠らしい。

「ありがとう！ そう言ってもらえてすごく嬉しい！！」

「そ、そんなに大した事じゃないよ」

「でも嬉しい！」

「う、うん……」

まり子から彼女が『女王』である事を聞いた末、熱い抱擁を交わした翌日。布団に戻って寝ていた健の枕元で携帯電話が着信音を鳴らしながら激しく振動していた。

「っ……こんな朝に誰からだろ」

目を覚ました健は携帯電話のカバーを開き、電話に出る。

「おはよう、東條くん」

「し、白峯さん！？ おはようございます！」

相手は 白峯しほみねとばりだった。彼女はみゆきの知人であり、同時に天才科学者。雷のオーブを作り出し、その後も健が持つエーテルセイバーとヘッダーシールドについて解析を進めたり戦いに役立つツールを開発したりと健を技術面で何かとサポートしてくれている。もっともお世話になっている人物の一人だ。

「それで今日はどのようなご用で？」

「うふふ。実はね……『風のオーブ』のありがわかったの！」

「な、なんですって！？ それは本当ですか！？」

驚愕し大声を上げた健。寝ていたアルヴィーとまり子は驚いて飛び起き、電話中の健を見て目を丸くした。

「詳しい事は私の家で話すわ。それじゃ、また」

そう言って白峯は電話を切った。

「……た、健、おはよう」

「お、おはよう。白峯さんから電話があったんだ」

「それで白峯さんはなんて言ってたの？」

「『風のオーブ』っていうのが見つかったらしいんだ」

「なんだと！？ それはビッグニュースだ。急いで支度をせねば！」

アルヴィーのその言葉を合図に急に東條家は慌しくなった。急いで布団を畳み、朝食もすぐにすませ、身支度もさっさと終わらせ健たちはアパートを出た。

EPISODE 160：嵐の前

外は見事な秋晴れ。風は爽やかで心地よく、太陽の陽射しも暖かい。寒すぎず暑すぎず、程よい気候だった。快い天気のもと、健たちは散歩がてら西大路にある白峯の家へ向かう。

「あつ、こんにちは！」

「みゆき！ 来てたんた……」

白峯の家は相変わらず大きくて威圧感がある。広い庭に地上二階・地下一階建てというとてもない大きさ。まさに豪邸だ。健が住んでいるアパートとはもはや比べ物にならない。月とすっぽんである。その豪邸の前で、健たちは藤色の髪を束ねてサイドテールにした少女を見かける。彼女は健もよく知っている顔。というか幼馴染みだ。名前は風月みゆきという。着ていたのはオレンジ色の上着とその下に白い薄手の長袖、ホットパンツにとボーダー模様のニーハイソックスに毛皮のブーツ。まるでこれからよそに遊びに行くような服装だ。

「みゆき殿は今日もなんとというか、イケイケ……だの」

「そ、そうかなあ」

「なによ、つけあがつちゃって。言っとくけどお兄ちゃんは渡さないんだからね」

「む……言ってくれたわね」

まり子がみゆきを煽り、健をめぐってのいがみ合いが始まる。二人ともベクトルは違えど健のことが好きである。

片や小さいときから一緒に好意を寄せており、片や途中で現れた

にも関わらず驚くべき早さで健になつて今ではすっかりベタベタしている。そう簡単には譲るまいと 互いに躍起になっているのだ。

「まーまーまーまー、落ち着いて。落ち着いてってば。僕のために争うのはやめてくれ！」

このままいくと醜い争いが始まってしまふ。急いで割って入り、健は二人を落ち着かせて仲裁を試みる。一方でアルヴィーは事態を静観していた。

必要以上に干渉するつもりは無いようだ。健が必死で説得した成果もあり、ケンカはスケールがアップする前に無事おさまった。

「ところでさ、みゆき。君も白峯さんに呼ばれたのかい？」

「え？ 今日バイト休みだから遊びに來ただけだよ」

「そっか、まあいいや。とばりさん家に入ろう」

みゆきを加え、四人になった健たちは玄関のインターホンを鳴らす。

「はい！ あっ、みゆきちゃんと一緒なのね」

「はい！」

「それじゃあ、遠慮せずに上がって」

するとすぐに白衣姿の女性が現れ、四人を家の中へと招いた。彼女がこの家の主にして希代の天才科学者である 白峯しろみねとばりだ。

IQ160という驚異的な頭脳指数に加え、青みがかつた黒いストレートの長髪に黄色い瞳、雪のような白い肌という妖艶な姿。更に陽気で快活な性格。それでいて料理もうまいという理想的な女性だ。なのに彼氏はいないそうだ。まったくもってもったいない話で

ある。

見た目が大きければ中も広い。ゆったりとした雰囲気漂う広いリビングで、四人はソファアールに座つてくつろいでいた。健とみゆきは手を膝元に置き、アルヴィーは腕を組んでいた。胸が大きいからかやはりたくしあげるようにして。

まり子は彼女に寄り添うようにしてくつついていた。端から二人を見ると、年の離れた姉妹を連想させられる。白峯はにっこりと笑いながら座っていた。膝元にはクリップボードが置かれている。更に彼女の後ろには ホワイトボードがあつた。何かの説明に使うのだろうか。

「それで白峯さん、昨日言つてた『風のオーブ』についての話ですけど……」

「あつ、そうだったわね。それじゃあお茶とお菓子を味わいながら、ゆっくり説明しましょうか」

白峯がそう宣言して立ち上がり、ホワイトボードの前に陣取る。こつしてテーブルに置かれた茶菓子をゆっくり味わいながらの説明会が始まつた。

「おほん。『風のオーブ』は、私立しりつあまみやぐくえたじうひい天宮学園高校てんみやくえんこうこうというところに眠っています」

「こ、高校!？」

教鞭でホワイトボードに張られた地図を指差す白峯。その位置は東京都と埼玉の間であつた。すごく遠いところではないかと、健とみゆきが驚く。

「そうよ。東京と埼玉県の付近にある、たかまのはらし高天原市つてところに建て

られているの」

「東京と埼玉のあたり！？ と、遠いなあ」

「帰ってこれるのかなー、そこから……」

驚きを隠しきれない健とみゆき。一方でアルヴィーは「高天原か……」と真剣な表情で呟いていた。隣にいたまり子も最初はきょとんとしていたが、すぐ何かに感付いた表情を浮かべた。何か心当たりがあるというのか？

「それでその天宮学園までどうやって入るんですか？」

やや心配そうにしながら健が白峯に訊ねる。

「どうやるかって？ そうねー……みんなで変装して入るの！」

「へ、変装！？」

白峯以外のその場にいた全員が驚いたあまり、叫ぶ。「な、何にですか……？」と健は白峯へ問う。

「生徒や先生になって潜入するのよ。気分は学生時代」

「そうなんですかー！ 高校の時を思い出すなあ」

生徒または教師に変装して天宮学園に潜入する。そう聞いた健は、ふと青春のページを思い出していた。あの時はよく友達と一緒にバカをやったり、お互いに勉学に励んだりしたものだ。みゆきも健と同じく、学生時代を振り返って感傷に浸っていた。

「学園かー！ 青春真っ盛りじゃない！ いいなあ、わたしも行ってみたい」

「ふふふ、私もだ」

アルヴィーの横ではしゃぐまり子。まだ見ぬ学園へ行くことになって期待で未発達な胸を膨らませ、少し興奮していた。だが白峯がまり子へ、

「あの、まり子ちゃん……喜んでるところ悪いけど」

「な、なに？」

「その天宮学園は高校だから、あなたが入るにはちょっと無理かもしれないわね」

非情にも白峯はそう告げる。まり子に衝撃が走り、顔面が蒼白。目を丸くしていた。

「で、でも社会見学って事で入れてもらえないかな……白峯さん、おねがい」

「うーん、いろいろややこしい事になりそうだからそれはちょっと」

「えっ」

「悪いけどそういうことだから、ゴメンしてね〜」

申し訳なさそうに笑いながら、白峯。「はい」と少しへソを曲げた様子でまり子は返事をした。

「どんまい、まり子ちゃん。……それで天宮学園にはいつ頃行くことになるんでしょうか？」

「明日の7時に京都駅に集合ね。そこから新幹線に乗るわよー！」

「はい！ それでどこに泊まるんですか？」

「そうね〜。滞在するならホテルが良さそうだけど……あ、そうだ」

健とみゆきから次々に質問を投げつけられ、ひとつひとつ答えていく白峯。どこに宿泊するのかを聞かれて少し悩むも、彼女はすぐ

に答えを出した。

「不破くんの家泊まってみない？」

「なるほど……いいアイデアだの。不破殿の家泊まるとはなかなか」

「知ってた？ 不破くんの家はねー、高級マンションなのよ」

さすが公務員！ さすがリア充！」

「高級マンションだなんて、うらやましいにも程がありますよっ！」
「憎らしい〜！」

宿泊先が決まって盛り上がる一行。皆が騒ぐ中、まり子はひとり
「でもわたしは置いてけぼりなのよね……」と憂鬱になっていた。

その翌日。着替えなどの必要な荷物をカバンにまとめ、健たちは朝早くから京都駅へ向かっていた。健もみゆきも、バイト先には「しばらく休みます」と前もって連絡している。もちろん高天原から帰ってきたら休んだ分だけ働くつもりだ。それは社会人として当然のことである。

「ねえ、行っちゃうの……？」

京都駅の改札口。新幹線のホームへとつながるその場所の前で、悲しそうな表情をしながらまり子が言う。向かいにいるのは 今まさに新幹線へ乗ろうとしている健たち。

「大丈夫だって。そんなに長くは滞在しないから」

「でも心配なの……わたしからどんどん離れていくんじゃないかって」

「心配しないで。すぐ帰ってくるからさ。だからそんなに哀しまないで……ね？」

少し屈んでまり子の頭をなでる健。「うん……」とまり子は返事をした。彼女は、自分にこんなに優しくしてくれる健が自分の近くからしばらく離れるのが不安で仕方なかった。

これからひとりで肌寒く寂しい思いをしなければいけないのだと思つと、涙が出そうだった。でも彼女はこらえている。

仮にも蜘蛛型シェイドの女王である。孤高の女王として、敬愛する健の前で涙を流す恥ずかしい姿を晒すわけには行かない。

「わかつたわ。けど……必ず帰ってきてよ!？」

「もちろんさ!」

健が暖かく笑う。まり子も微笑むが、そのとき アルヴィーが

「健、電車が来てしまうぞ!」と告げる。

「あつ、ごめんアルヴィー!」

「まったく。それではまり子、留守番をよろしく頼むぞ」

「またお土産買ってきてあげるから、楽しみに待っていてね!」

「寂しくなつたら東條くんに遠慮なく電話してみて」

まり子へ四人がそれぞれ励ましのメッセージを送る。「それじゃ……行ってきます!」と健が言ったのを合図に四人は改札をくぐった。

「行ってらっしや〜い! ……けど、やっぱり一人ぼっちはイヤ。わたしも行くわ……!」

手を振って四人を見送るまり子。しかし 思い直したか、彼女は意地でもついていこうとする。改札をくぐるうと試みたが、改札はそれをよしとせずまり子を拒んだ。

「ま、待って、やっぱり置いてかないで……ひとりにしないでよ〜
〜ツ!」

半べそをかきながらまり子が叫ぶ。彼女の緑色の瞳からは涙が溢れ出ていた。これから始まるうとしている。まり子は孤独との戦いが、健たちは これから来るであろう『嵐』との戦いが。

EPISODE 161：都会に泊まる

「で、なんでまたオレン家に？」

夕方、東京にある不破が住んでいるマンションにて。不破の部屋に入った健たちは天宮学園に潜入する準備をしていた。まずは宿泊する場所の確保と 服の着合わせ。

健たちを見てやや難色を示しているこの男が不破^{ふわ}ライだ。黄褐色に染めた髪に色黒の肌、長身で大柄。鍛錬を欠かさない真面目な性格だからこそ作り上げることができた、屈強な肉体の持ち主だ。

「最初から高天原のホテルに泊まればいい話でしょー？ オレの家よりそっちの方が絶対近いですって」

「でもホテルを拠点に滞在するとなると、結構お金がかっちゃうのよねえ」

「はあ、なるほど。だからここで泊まらせてもらおうと？」

「そうなの！」

何故ここに宿泊することにしたのかを問われ、笑顔で答えた白峯健やみゆきにアルヴィーは彼女や不破の後ろで楽しそうに着合わせを行っていて、「うお、男子もブレザー着るんだ。かつこいいー！！」「天宮学園のやつ、一度着てみたかったのよねー」「ちよ、ちよっとこれはキツくないかの……？」などと言っていてすっかりノリノリである。アルヴィーに到っては教師に変装する為か、「いつもの口調だと怪しまれるから、言葉遣いを変えねば……」と誰よりも気合を入れて臨んでいた。

「まさかタダで泊めてもらおうだなんて思っていないませんか!？」

「半分正解よー」

「え……じゃあ、もう半分は!? っていうか、お願いですから家事とかきつちりやってくださいよ。サボってテレビ見るのは許しませんからね!!」

常識的に考えれば、タダ宿なんてごめんだ。人の家にタダで泊まる以上は何かさせなければ。そう思い白峯をまくし立てる不破。だが、白峯は おもむろに服のボタンを外し始める。

「そんなこと言わないでよー。イイコトしてあげるから……ね?」
「ウウウウウツ……こ、これは……色仕掛け!」

白峯のふくよかな胸にチラチラと視線を向けてしまふ不破。「た、耐えろ……耐えるんだっ、惑わされるな……ッ」と自分に言い聞かせるも、そんなことをしても何の意味もない。

「これでもダメ?」

トドメを刺さんとはかりに白峯が自分の胸を不破に寄せる。不破は興奮のあまり一瞬で顔を真っ赤にし、「わ、わかった! わかりました! だから離してください、気持ちよくなりすぎて死んじゃう!」と叫んだ。だが直視できておらず、彼の目はあさつての方向を向いていた。ここまで俗っぽいと 呆れるどころか笑えてきてしまう。

「しっかし、東條……お前、青春してるよなあ。制服、悔しいぐらい似合ってるじゃねえか。全宇宙が嫉妬するレベルだ」

「そ、そんなこと無いですよー」

「あ、でも良く見たらアルヴィーの女教師コスのがお前の十倍以上

似合ってるな。ま、当然だわな」

「ひ、ひでーっ」

健に対して誉めているのか貶しているのか曖昧なコメントを述べたあと、不破はみゆきとアルヴィーに視線を移す。やはり野郎は眼中にないようだ。もっともそれは、健にも同じことが言えるが。

「みゆきちゃん、すっごい似合ってるなあ！ 超キュートだぜ！！」

「えっ、そうですかー？ ありがとうございます！！」

「ああ。それなら女子高生に混じってても全然違和感ないと、オレは思うぞ」

みゆきの女子高生姿を誉めちぎる不破。さりげなく健をこき下ろしたような気がするが、それはきつと気のせいだろう。

「おおっ！ あんたも中々だなあ、アルヴィー！」

「そ、そうかの？ ちよつと嬉しいな」

「赤いフレームのメガネにはだけた胸元、そしてスリットの入ったスカート……こいつは破壊力抜群だあ」

スーツを着てミニスカートを穿き、女教師になりきったアルヴィーを見て不破が興奮気味に語る。これも男の性^{サガ}である。男なら仕方がない。

「うひょー！ 白峯さんもエロいなあー」

「白衣は自前のあつただけどねえ。まあ、いつか」

「その抜群のプロポーションが一番のクスリだと思いますっ」

またまた興奮気味に不破がコメントする。白峯は白衣姿でいつもと変わらないように見えるが、よく見るとアクセントとして赤いラ

インが入っている。彼女は医者ではなく科学者なのだが、何故だかまったく違和感がない。

「さつきから女の子にばっかり高い評価出して！ このチャラ男ツ
！！」

「あいつたあああああああ！？」

調子に乗って女性陣にばかりいいコメントをした為、不破は最終的に健に一発殴られた。

着合わせを終えて、健たちは一度元の服装に着替えた。風呂を沸かして順番に風呂に入ったり、夕食を作ったり。白峯とみゆきは洗濯物を取り込んで畳み、健と不破は料理を作っていた。なお、アルヴィーは現在入浴中だ。

「そっぴや東條、お前あのチビはどうした？」

「まり子ちゃんですか？ 彼女にはお留守番を頼んでます」

「おいおい、いくら元々大人だったからってチビ一人で留守番させんなよ……」

「でも来たら来たらで、不破さんブーたれるでしょ？」

「うっ……そりゃそうだが」

ニンジンやじゃがいも、たまねぎといった具材を切りながら話をする健と不破。健から「まり子ちゃんはたまに部屋中を蜘蛛の巣だらけにすることがあるんですね。」

そのたびに掃除をすることになって大変なんです」と聞いて、不破が顔を悪くしたりもした。そんな二人はカレーを作っており、グツグツと煮えたぎっている鍋の中に具材を硬い順から入れていく。ある程度柔らかくなってきたところにカレールーを入れ、じっくり

かき混ぜながら煮込む。

「よし、これでルーはオツケーです。ごはんは炊けてましたっけ？」
「炊けてるよ！ ちゃんと人数分な……」

「そうでしたか。不破さんっていつもコンビ二弁当かカップ麺しか食べてないイメージがあつたんで……」

「お前なんなの！？ なんでそうやって人の食生活にまで首突っ込むかなあ！？」

「ちゃんとバランス考えて食べてますか？」

「オメーに言われるまでもねえよ！！」

と、こんな感じにお互い憎まれ口を聞いてはいるが料理は無事に完成しそうだ。カレールーもちょうど良い感じに溶けてきて、いよいよ完成間近。

「それじゃあ、不破さん！ あとは僕がやっておくんで、不破さんは休憩してて良いですよ」

「おっ！ 気が利くなあ、あと頼むぞー？」

「お任せを」

不破を休ませ、あとのことは引き受けた健。じっくりかき混ぜ、途中で味見もする。味が染み込んでいてとろけるような旨さだった。これなら心配はいらないだろう。

「いやあ、良い湯であつた……」

「アルヴィー、ごはん出来たよー！」

「本当か！？ やつた！」

そして、アルヴィーが風呂から上がる頃に完成。テーブルには既にカレーが五人分置かれていた。そして手を合わせて。

「いただきます！」

夕食が始まった。料理が得意な健が不破をフォローしながら作ったカレーだが、果たしてその味はいかに？

「おいしいーい！」

試しに一口食べて良く噛んで飲み込んだあと、みゆきが黄色い声を上げる。

「本当だ……面妖なほどウマイ！」

「と、とろけるっっ！！」

彼女に続いてアルヴィーや白峯も舌鼓を打つ。本当に美味しそうだ。これだけ嬉しそうにしている様子を見れば良くわかる。

「これ、健くんが作ったの？」

「いやいや、僕と不破さんの合作！」

胸を張る健と、「どやっ」と言いたげに威張る不破。だがすぐに健は「でも僕が監修していなかったら、不破さん作の怪しい料理になっていた可能性がある……本当に危なかった」と余計な一言を加える。

「あのなーっ！！別にオレは料理下手じゃねえし、ポイズンクッキングも作らーん！！」

「す、すみませんでした。あっ……僕よりみゆきの方が料理上手いですよ」

「なにイ！？」

健の辛辣な態度に怒る不破だったが、健からみゆきが料理上手だと聞いて目の色を変える。

「みゆきちゃん、本当にそうなのか!？」

「えっ? まあ……わたし料理好きなので」

「決めた! 明日からはみゆきちゃんか白峯さんに晩飯作ってもら
うぜ!」

「味に関しては僕が保証しますよー」

「私もだ。みゆき殿の料理は本当にウマイからの」

「うんうん。あたしもみゆきちゃんから習いたいぐらいだわー」

不破が決心する。ちなみに何故白峯の名を挙げたのかというと、彼女もまた料理がウマイことを不破は知っているからである。

最初は不安がっていた不破だが、いざ健たちが来てみればとくに何も困ったことはなくむしろ楽しいぐらいだった。不破は常に独り暮らしなのでなおさらである。出来ればこのまま何も起きないでほしい と、不破は思った。

だが、その晩。

「今日は胃痛が起きなかった。久々にぐっすり眠れそうだ」

寝室にて、目を瞑る不破。健たちは四人とも和室で布団を引いて寝ている。和室は今回健たちが泊まるにあたって客室代わりになり、ふすまの中に布団がしまつてある。大きな窓もあるので大都会の景色が一望出来るのだ。

やがてその和室の方からかすかに、「やったなー! お返しだ!」

「いったーい！」「こやつめ、これでもか」「当たんなーい！」と盛り上がったっている声が聞こえてきた。

「ん……なんだよ、こんな夜中に」

気だるそうに体を起こして、不破は和室まで足を運ぶ。ふすまの向こうは案の定明るかった。まさかと思いつながらふすまを開けると。

「うわああああーッ!?　なんで!?　なんであいつら枕投げやってんの!?!」

なんとそこでは健たちが枕投げをして盛り上がっていたではないか！　不破は驚いたあまり目を丸くして口を大きく開けていて、アゴが外れてしまいそうだ。

「い、胃が………ウツ!!」

「あつ、不破さん……大丈夫ですか?」

ショックを受けて倒れる不破に、枕投げを中断して健たちが駆け寄る。これから嵐の中に健たちは飛び込もうとしているが、果たして不破の胃痛は治まるだろうか？

EPISODE 161：都会に泊まるっ（後書き）

Q&Aコーナー

Q：健のカレーがうまいのは誰ゆずりですか？

A：お母さんゆずりです。三ツ星シェフ並の料理の腕前！ 健にもちゃんと受け継がれたようで、一族も安泰かも。

Q：これからはアルヴィーをアルヴィー先生と呼ぶべき？

A：お好きなように。

Q：不破さん大丈夫？

A：きつと大丈夫

EPISODE 162：私立天宮学園高校へようこそ

翌朝。東京都と埼玉県　その付近に位置する街、高天原市。山に面した自然豊かな場所だ。ゆつたりとした街並みであり、観光名所も多い。その高天原市にある学校の中でもとくに大きくて有名な場所が　私立天宮学園高校だ。

その天宮学園の校門の前で黒いリムジンから、一人の美少女が降り立つ。バラ色の髪を一本の三つ編みにして束ねている青い瞳の彼女は、どこかエレガントな雰囲気を漂わせていた。学校の制服である紺のブレザーにグレーのスカートもとても様になっていて美しい。風にバラ色の髪をなびかせながら、歩いて門をくぐると彼女の近くに女子生徒が一人やってきた。

「あずみん、おはよう!」

「おはよう、みどりさん。今日も元気いっぱいですわね」

「そういうあずみんは?」

「わたくしですか? わたくしは……あなたを見ていたら元気が出てきましたわ」

「ホント? 嬉しいなあ」

「ふふふ。わたくしも嬉しいですわ」

元気いっぱいである女子高生　みどりから『あずみん』と呼ばれた高貴な女子高生は、そのまま玄関へ入って靴を上履きに履き変えて上がる。二人は今年で二年生だ。教室はA組。

来年からいよいよ三年生。卒業と就職に向けて努力と勉強を重ねなければならぬ時期。だが、必ずそうする真面目なものばかりではなく遊ぶものもある。とはいえ、基本的に何をするのも自由である。

「何故だかみんな盛り上がっていたけれど、今日は一体何があるんでしょうね」

「なんでも転校生が来るんだって！ しかも、二人らしいよ」

「へえ……それは楽しみですわね。どんな方なんでしょう？」

「気になるよね」

教室で席に座り、にっこりと笑うみどり。静かに微笑む「あずみん」。対照的ながらも二人は仲が良い。席もすぐ隣だ。葛城の右隣は何故か空いている。そうしているうちに ドアの方からその転校生と思しき人物が二人、担任の教師 武田たけだと一緒に来て来た。その転校生は平凡な男子と藤色の髪をサイドテールにして束ねた女子。「なんだか仲の良さそうなお二方ですわね……席、空いていたかしら」と二人の転校生を見て「あずみん」がひっそりと呟く。「確か予備があつたような……」とみどりは「あずみん」に小声で返す。

「……おほん！ みなさん、おはようございます。今日からこの2年A組に、新しい仲間が加わります。さあ、自己紹介を！」

担任の武田銅八先生（四十代、昔ながらの熱血系）が教室の生徒全員に挨拶する。そして彼に言われたように二人の転校生が前に出る。

「東條健です。目標はこの学校のヤツ全員と友達になることです。よろしく願います！」

「風月みゆきです。ただの生徒には興味ありません。この中にエイリアン、古代人、異世界人、サイキッカーがいたらわたしの元にきてください。よろしく願います！」

転入して早々、二人は突飛な自己紹介をする。あたりは騒然とな

り、「かつこいいい!」「ああいう風になりたいなあ」と憧れを抱いたり、「ステキ〜」と心奪われるものもいれば、「うわぁ……………」と逆に引いているものもいた。

「あ、あのお二方……………確かにステキですけど面妖ですね。ハルヒとフォーゼが混ざってますわ」

「な、なにそれ……………?」

「詳しくはわたくしも分かりかねますが……………」

「あずみんでも分からないことあるんだね〜」

小声でやりとりを交わす『あずみん』とみどり。雰囲気や表情から察するにこの二人は仲がいいようだ。

「東條さん、風月さん。葛城さんの右隣と妃さんの前の席が空いていますから、そこへお座り下さい」

「はい!」

「わかりました!」

立ちつぱなしも難なので、武田先生（熱血系だけど普段は丁寧口調）が二人を空いている席まで案内する。ちょうど『あずみん』ごとく葛城の右隣・窓側の席と、みどりの前の席が空いていた。

やや都合が良すぎるように思えるが、まあ大丈夫だろう。転入生の席とはそういうものなのだし。席に着いた健がカバンを机の横にかけて左手の方を向くと、そこにはバラ色の髪を一本の三つ編みに束ねた美少女の姿が。

「……………あら、一緒になってしまったわね。はじめまして。葛城あずみと申します。以後よろしくお願ひします」

優雅に微笑みながら葛城あずみが軽く自己紹介をする。「よ、よ

ろしくお願いします」と健は照れながら挨拶を返した。

「以前はどんな学校で学んでおられたのですか？」

「ええと、東京のミッシヨン系の学校かな」

「あら、そうでしたの。それで部活は何をなさっていましたか？」

「は、恥ずかしながら帰宅部です」

「まあ、帰宅部！」

少し驚くあずみ。眉をしかめて真剣な表情を浮かべる。上品でたおやかながら凛としていて、覇気があった。

「それは有意義ではありませんわ。帰ってから時間に余裕があるんでしょう？」

「え？ うん、そうだね。ゲームとかネットしたり、マンガ読んだり……」

「だからといって遊んでばかりいてはダメですよ。趣味の時間で発散するのは構いませんが、勉強や家事なども欠かさないようにしてください」

「は、はい……気を付けます」

怒られてしまった健。ちなみに彼が帰宅部だったというのはウソではなく事実。遊ぶことが多かったが、もちろん勉強も手伝いもちやんとやった。でなければ今のように家事全般を切り盛りすることは出来なかっただろう。

「はじめまして。妃みどりみどりって言います」

「よろしくお願いします」

健が葛城からダメ出しをされた一方、みどりこと 妃みどりとみゆきは気が合うのか早くも打ち解けそんな雰囲気醸し出してい

た。二人とも明るい性格なので話も合いそう。

「葛城さん、きれいだけど結構厳しそうね」

「ごめんね。あずみん、本当は優しい人なんだけど……すごく真面目だから不真面目な人は嫌いみたい」

「そうなんだ……」

「でも大丈夫！ きっとすぐ仲良くなれるよ」

「ありがとう！ まだ分からないことばかりだけど、よろしくね！」

「ううん、こっちこそ」

こうして朝のHRと自己紹介　そして休憩時間が終わって一時限目が始まった。

(……なんとか入れたけど、ここまで来るのに時間かかったなあ)

授業中に窓の外を眺めながら、ここに来るまでの経緯いきりを振り返る。青い空と白い雲、街の中に立ち並ぶビルにのどかな緑の山。

小高い丘の上に建てられたこの学校から見える景色はまさに絶景だ。いかにして健たちは天宮学園に入れたのか？ それは先日の正午にさかのぼる。

警視庁本部、地下に設けられたVR訓練室で二人の警官が戦闘訓練を行っていた。片方は長身に大柄で、もう一人はすらりとした細身。どちらも戦闘用の装着式強化外骨格パワースーツを着ていた。メカニカルでシャープな外見。防御力と機動力を両立させた理想的なスペック。

デザイン・性能共にその評価は高い。そして、訓練の相手は黒い毛皮の猛牛型シエイド　の電子映像。

「そこだッ」

猛牛のシエイドが手に持ったハンマーを叩きつけてくる。だが二人とも攻撃をかわし、空振りさせる。隙を見て細身の方がここぞとばかりにショットガンを撃ち込み、相手を後退させた。

「今です、不破さん！」

「おし、一気に行くぜ！」

不破　と呼ばれた大柄な方がその手に握ったランス型の武器を振り回して猛牛のシエイドに切り込み、そのままランスを激しく振り回して畳み掛ける。

「うりやりやりやりやりやッ！ー！」

息をする暇も与えず、不破は連続で猛牛のシエイドに突きを浴びせる。トドメに急所を狙って一突き！　断末魔の叫びを上げながら猛牛のシエイドは爆発四散し、炎の中へ消えていった。　もちろん、これも電子映像だ。

「……お見事！　さすがはニューヨーク帰りだな、斬夜」

不破がメットを取る。その素顔は黄褐色に染めた髪で肌は色黒、おまけに整った顔立ちであった。いわゆるイケメンという奴である。

「いえいえ、不破さんもなかなかブラボーな腕前でしたよ」

斬夜^{きしや} と呼ばれた細身の方がメットを取る。黒い短髪で右目に片眼鏡^{モノクル}をつけた、おしゃれでインテリな様相の男性だった。

訓練を終えた二人は部屋の外に出てパワードスーツを脱ぎ、一息つく。程なくして向かい側から、「お疲れ様です」と声をかけながら黒髪赤眼の若い女性が現れた。年齢は21で、不破や斬夜よりも下。そんな彼女は捜査一課所属の婦警ならびにシエイド対策課でオペレーターを務めている 穴戸^{しほと}小梅^{こづめ}だ。

「おお、穴戸ちゃん！」

「これ、差し入れです」

穴戸が差し入れと称して不破と斬夜にミネラルウォーターを渡す。不破はとくに不満もなく笑顔で受け取ったが、斬夜はやや不満そうに「オレンジジュースの方が良かったかな……」と呟いた。甘いものが好きなのだろうか。

「モニターで見てましたけど、お二人とも息がピッタリでしたよ！」

「実戦でもそうだといいんですけどね」

「む……なんか嫌な言い方してくれるな。毎日のようにハンバーガーとポテト食ってる国で長年活動していただけただけはある」

余計な一言を言う斬夜に対して、不破が突っかかる。対する斬夜は「ふん」と鼻息をして露骨に嫌らしい表情を浮かべて、「そういう不破さんこそちゃんと野菜採ってるんですか？」とイヤミで返した。

「何だとオ……？」

「ほら、またそうやってイライラする。野菜もカルシウムも足りていない証拠ですよ？」

齒ぎしりする不破、ほくそ笑む斬夜。どうにも二人は折り合いが悪いらしく、斬夜が配属されてから不破はいつも彼と言い合いをしている。

「お前こそ油でギットギットの食生活送ってんだろ！　せめて魚ぐらい食えよな」

「あいにく魚は嫌いなんで食べれません！」

「じゃあお米は？」

「流石にそれは食べてます」

「野菜は？　食べてないのか？」

「いいんです。ピーマン嫌いなんです！」

「だっさ！　お前いいトシしてピーマン苦手とか笑わせんなよ！」

「なにい……！？」

二人の口喧嘩はだんだんエスカレートしていく。このままではいけない。事態を見かねた宍戸はケンカをやめさせる為、思いきって。

「ケンカはやめてくださいっ！！」

「いつてえッ！？」

「うっぐあっ！？　な、なにを……」

不破と斬夜の服の襟をつかんで互いの頭をこつつんこ　と衝突させて、二人を黙らせた。少々乱暴だが仕方がない。こうでもしなければ止められなかったのだから。

訓練を終え、モニタールームへ戻った不破たち三人。そこにはおびただしい数のスクリーンがあった。東京二十三区に設置された一

万台のカメラ　そのすべてが捕らえた映像がここへ送られてくるのだ。そして中央にはメガネをかけた青い髪の男性が陣取っていた。何やら複雑そうな顔をしている。

「おつ、訓練お疲れ様」

不破の方を振り向いた青い髪の男性がねぎらいの言葉をかける。

「ああ、どうも村上……」

「三人とも、早速でアレなんだけど……さつき例の連続殺人犯がまた誰かを殺害した映像が入った」

「殺人犯？　あの死神みたいな格好のヤツか……」

「そうだ。通称、『高天原の死神』。高天原市を中心に活動しているが、最近では東京このへんでも人を殺しているんじゃないサイコパスだ」

青い髪の男性　村上むらかみによれば、死神のような格好をした連続殺

人犯が日中に姿を現し、誰かを殺害したのだという。「季節の変わり目なのかな。世の中物騒になったもんだ……」と村上は苦い顔をする。

「なんてひでえことしてくれるんだ。正気の沙汰じゃない……」

「ひどいですよね……その殺人犯。相手をバラバラにして殺害するなんて」

「果たしてそうですかね」

不破や穴戸が心を痛めている傍らで、すました顔で斬夜が呟く。

「斬夜、お前……ずいぶんドライな言い方だな」

「ドライも何も、慣れてしまったんですよね。ニューヨークじゃこっぴどい凶悪犯罪はよくあることだ。そもそも日本は犯罪者に対して

甘すぎるんですよ。アメリカではたとえ相手がこそ泥一人でも容赦はしない」

「そうは言うが……ここは日本だ。勝手におたくの価値観を持ち込まないでいただきたいですね、捜査官殿」

不破を適当にあしらって斬夜が言い放つ。メガネのブリッジを上げながら、村上は生意気な口を聞く斬夜を注意する。

「……失礼。どうもこの生ぬるい空気を吸っても落ち着けないもので」

「お前なあ……」

慇懃無礼に、斬夜。唇をかみしめて彼に視線を向ける不破と村上だったが、そのとき　ピンク髪の若い婦警が受話器を持って駆け寄ってきた。

「主任、お電話です！」

「^{かなめ}要か。誰からだい？」

「白峯さんからです！」

「なに、白峯さんから？　貸してくれ！！」

ピンク髪の大人っぽい雰囲気かなめの婦警　要から受話器を受け取り、

村上は「もしもし、村上ですが……ご用件は」と白峯と話し始める。

「実はね、潜入捜査に協力して欲しいんだけど……場所は高天原市の天宮学園高校よ」

「……えっ！？　天宮学園高校に潜入捜査ですか！？　そんなムチャな……」

「むむむ。何がムチャなの？」

「い、いや……年齢的に厳しいんじゃないかと思っ……ごほっごほ

「もうつ、失礼ね！ 口には気をつけてよ」

元気いっぱいな白峯に押され気味の村上の姿は、それはもう情けなくて威厳など無いに等しかった。彼が話している傍ら、不破や穴戸に斬夜に要は「お、おい……聞いたか？ 天宮学園高校だつてよ……」 「確かそこつて地元じゃその名を知らない人はいないほど有名なところだったような」 「そんなところまで何しに行くんでしょうね？」 「ホントですよー。青春しに行くのかしら」と四人で勝手に盛り上がっていた。

「そ、それで誰が潜入するんで……」

「私と東條くんとみゆきちゃん、それからアル……けほっけほっ、白石さんよ」

「えーと、白峯さん以下の三名様はまったく存じておりませんが……」

「私の知り合いなの。東條健くと、風月みゆきちゃん。それと白石さんね」

「は、はあ……知り合いの方でしたか。それで何をしに潜入しようと思っただんです？」

「『風のオーブ』っていうのが天宮学園にあるらしくて、それを探そうかなって思ってた」

「へ、へえ……『風のオーブ』というのを探しに潜入したいと」

メモを取りながら応対する村上。やはり押され気味だ。こうなればただの気弱で情けない男子。覇気がまったく感じられない。

「しかしそんな得体の知れない物のために、一般の方に潜入捜査に協力していただくのは個人的にどうかと思いますか……」

「いいんじゃないですか？」

会話をしている途中で斬夜が割り込んできた。やけに爽やかに笑っているが、どこか嫌らしい。斬夜と会話するために村上は受話器を口元から離れた。

「いや、しかし……捜査官殿」

「その白峯さんが潜入するのが、年齢的に無理というのは何故なんですか？」

「いや、僕としては白峯さんが生徒として潜入するのは無理があるかなと思ったのだが……」

「生徒が無理なら先生として潜入すればいいじゃないですか」

渋る村上に斬夜が告げ口する。「その発想はなかった。ありがとうございます！」と村上は歓喜した。そして受話器を口元へ持ってきて。

「わかりました、白峯さん！ 捜査を許可します！」

「本当にありがとうございます！」

「そ、それで皆さんは何に変装するんでしょうか!？」

「私が保険医で白石さんが女教師、あとの二人が男子生徒と女子高生よ」

「保険の先生に女教師に、男子生徒と女子高生ですね？」

白峯と会話しながら、重要な部分をメモに書く村上。気のせいだろうか、やや興奮気味だ。

「えーと、学生服は天宮学園のものでよろしかったですか……?」

「はい！ 天宮学園高校のものでお願いします」

「わかりました。こちらで用意しておきます。それで宿泊先はお決まりで?」

「宿泊先？ それなら不破くん家に行くつもりよ」

「ああ、不破の家ですか！ わかりました、こちらから彼に伝えておきます！」

白峯たちの宿泊先 それは不破の家に決まった。何故だ。何故わざわざ自分の家に泊まりに来るのだ？

と、そう思う不破の顔は真つ白になっていた。「あ、急にお顔が……」「一気に生気が抜けましたね」「何か嫌なことがあったのかしら？」と不破の近くにいた宍戸たちは彼を心配していた。

「ありがとうございます、それではまたー」

笑顔で礼を告げる村上。そこで白峯との通話は切れた。村上が不破たち四人へ振り向けば、彼の表情は真剣なものに変わっていた。

「……ということで急遽潜入捜査の協力を頼まれてしまった。みんな、まずは天宮学園高校の制服と女教師のコスチューム、そして保険医のコスチュームを用意するんだ！」

「いや、白峯さんは自前の白衣があるだろ」

「いいか。まずはそれが先決だからね」

「了解しました！」

「了解……っっておいつ！ 軽くオレを無視すんなよ！！」

指摘を聞いてもらえなかった不破が怒る。宍戸や斬夜に要は捜査の準備をするために去っていき、立ち尽くす不破に村上が「じゃ、そういうことだからあとはヨロシク！」と爽やかに告げて去っていた。

「うっ……オレにどうしろっというんだ。オレに恨みでもあるのか

あッ

その後、不破はしばらく頭を抱えていたという。

（白峯さんが警察の人に無理言つてまで捜査に協力してもらえように頼み込んで、制服や宿泊する場所まで用意してもらつて、不破さんは胃に穴が開きそうになつて　本当にいろいろあつたなあ）

今回は白峯や警察の協力が無くては成り立たなかつた。あとでちゃんと礼を言わなくては。だが、彼は大事なことを忘れていた。

今は授業中だ。

「あの　東條さん」

「は、はい！」

とぼけた彼を見かね、隣の席にいた葛城が再び険しい表情で話しかける。大事なことを思い出させるために。

「何をボーツとなさっていますの？　今は授業中ですわよ」

「す、すみません……外の景色が綺麗で」

「もう。しっかりしてくださいよ」

転校（という形で潜入）してから早々に、葛城からまた注意を受けてしまった。こんな調子で大丈夫なのだろうか？

EPISODE 162：私立天宮学園高校へようこそ（後書き）

だ、出したかった……お嬢様が出せた……

これでもう思い残すことは無い。

ウソです。まだ続けますよw

EPISODE 163：もつと青春するべき

この天宮学園高校に潜入していたのは、何も健とみゆきだけではない。アルヴィーと白峯とばりもいるのだ。

この二人はどういう役割かというと　アルヴィーは教育実習生で、白峯は学校の保険医。ではアルヴィーが何をしているかを覗いてみよう。

「なあなあ、聞いたかー？　今日からここに、教育実習生が来るらしいぜ」

「マジ？　どんな人！？」

「なんでもすっげえ美人な先生らしいよ！」

「おおーッ！」

健とみゆきが転入したA組より二つほど隣の、二年C組。そこは美人な教育実習生がやって来るとい話で持ちきりだった。

「あ、きたきたー！！」

「べっぴんさんキターー！！」

「フオオオオオオオオオウー！！」

やがてその『べっぴんさん』が入ってきて、教壇へ上がった。白髪に赤い眼、赤いフレームの眼鏡。前を少しはだけたスーツにミニスカート、すらりとしたおみ足。そして抜群のプロポーション。健全な生徒たちの煩惱を刺激するのは時間の問題だ。

「みなさん、はじめまして！　教育実習生の白石籠子しらいしです」

教材を置き、笑顔を浮かべる実習生　白石龍子。もとい、アルヴィー。チヨークで黒板に名前も書いてすっかりノリノリだ。そんな彼女を見た生徒たちは興奮するあまり、「すっげえきれーい!」「カッコいい!」「おっぱいでかい!」「結婚してください!」などと叫びを上げ　。

「す、すごくエキサイトしてますね。あつ、担当教科は歴史です」「歴史ですか?　白石先生と一緒に楽しく学べそう!」「はい!　ここを中心に皆さんと一緒に学んでいきたいと思えます。よろしく願いします」

白石先生の言葉を聞いて「やったー!」と声を上げる生徒たち。男子も女子も関係なく、みんな嬉しそうだ。

(ふふふ、みんな気分上々だ　。これは期待に答えねば、な)
実のところ、アルヴィー自身は教育実習生でも先生でも何でもない。この学園のどこかに眠る『風のオーブ』を求めてここへ潜入したに過ぎない。

だからといって手を抜くのは失礼に値する。ならば本格的に、この学校の先生として共に学んでいこう。そしていい思い出を残そう。そうアルヴィーは思っていた。

午前の授業も全て終わり、昼休み。みんな昼食を食べていた。弁当を食べるものもいれば、購買で買ったパンを食べるものも。

「あら、そのお弁当美味しそうですね。誰がお作りになられたのですか？」

「え？ こ、これは自分で作ったんだ。中学まで母さんに作ってもらっていたけど、いつまでも迷惑かけられないかなって思って……それで高校からは僕の手作り」

「そうなんですか。すごく立派なことだと思います。わたくし、料理が下手なのでいつもメイドに作ってもらってまして」

健は葛城と話をしながら弁当を食べていた。冷凍食品や卵焼きなどで構成された、平凡で質素な庶民の味だ。それでも健にとってはごちそうだった。

一方、葛城の弁当は分厚い重箱。中身も当然定食並みに豪華で、イセエビが丸ごと一匹入っている。他にも高級食材が目白押しで贅沢な一品だった。

「すごい……お家にメイドさんがいるんだね。ってことは、葛城さんってお嬢様なの？」

「ええ。葛城コンツェルンの会長の跡継ぎですから」

すました微笑みを見せながら答える葛城。衝撃を受けたか、健は「か、葛城コンツェルン!?」と大声を上げて椅子から転げ落ちる。

「だ、大丈夫ですか？」

「こ、このくらい、大丈夫です」

「それなら安心ですわね」

立ち上がって倒れた椅子を立て直す健。座り直して食事を再開するも、痛そうに頭のとっぺんを搔くなどまだ痛みは残っていそうだ。「この人、こんな調子で大丈夫でしょうか……」と思いながら、葛城は弁当を食べていた。

「か、葛城コンツェルンの跡継ぎって言ってたけど……?」

「うん。ロングロマリット企業っていうのかな。要するに電化製品とか自動車の工場とか、いろんな独立した会社と一緒にあってるらしいの。あずみんはそのお嬢様なんだよ」

「へ、へえ……」

みどりと一緒に食べていたみゆきは一部始終を見ており、かなり驚いた様子だった。更にみどりから葛城コンツェルンがどんなところかも聞き、ますます動揺を隠しきれないでいる。

「健くんビックリしてたけど、葛城さんってそんなにスゴいところのお嬢様だったんだね……」

「みゆきちゃんだけじゃないよ。あたしも最初はビックリしたな」

につこり笑いながら語るみどり。彼女はみゆきとはまた違うベクトルで明るく、全体的にのほほんとしていてマイペースだ。しかもすぐにみゆきと打ち解けている。

「そ、そういえば葛城さんさ……」

「なんですか?」

「料理があまり得意じゃないんだっけ。よかつたらお教えしますけど……いかがですか?」

「け、結構です! それには及びせんわ。今度メイド長に教えてもらいますから!」

赤面して声を上げる葛城。一瞬ながらすごい剣幕だった為、健は肩がひきつった。すぐ打ち解けたみゆきと違って、こちらは相手が強気なのでかなりの苦戦を強いられそうである。

「東條さん、それに風月さん。ここへ転入するにあたって下見などはなされましたか？」

「い、いえ……一応しましたけど、まだ完全には把握できてません」「わ、わたしも。急に転校することになっちゃったので」

「あら、そうでしたの。もしお暇でしたら学園の中を案内して差し上げてよろしくてよ」

「えっ、本当に？　じゃあお願いします！」

「そうと決まれば、出発進行」

放課後、葛城とみどりの計らいでこの天宮学園高校の中を案内してもらえることになった。まずは校舎の中だ。一階には保健室や理科室、二階には家庭科室、三階にはコンピューター室や図書室など　他にもいろいろな部屋があった。どれも重要な部屋ばかりだ。

次は校舎の外だ。健とみゆきも思わず目を見張るほどの広大なグラウンドと、そのすぐ近くにあるテニスコート。保健室の付近から通路に繋がる大きな体育館。その裏にはプール。プールは水泳部が冬でも活動できるようにするためか、温水でしかも屋内にあった。

そして体育館の中はとても広く、柔道部や剣道部の部室、フェンシング部の部室なども内包していた。また、葛城はフェンシング部に所属していてインターハイで優勝したこともあるほどの腕前を誇っているらしい。葛城自身も自慢げに「血もにじむような努力を重ねた末に栄光をつかみとることが出来ました。まさに努力の賜物ですわ。何事も努力と精進は欠かせませんね」と健たちに語っていた。

「お疲れさまでした。いい運動になりましたね」「広かったでしょ？　けど、これでもう明日から迷わないねっ」

「葛城さんもみどりちゃんも、今日は本当にありがとう！」

貴重な時間を割いてまでわざわざ案内してくれた葛城とみどりに礼を告げる健とみゆき。見上げれば空は茜色。もう夕方だ。「それじゃ、また明日ね！」と健とみゆきは校門から外へ出ていった。

「これから毎日、楽しくなりそうだね　健くんもみゆきちゃんもいい人だし」

「それはどうかしらね……」

嬉しそうにするみどり。一方で葛城は疑念を抱いているのか、ため息をついた。

「えっ、どうして？」

「あの二人、ちょっと怪しく感じますの。……とくに東條さんから見たならぬ何かを感じましたわ」

「それって、あずみんが健くんに惚れちゃったとかじゃないの？」

みどりが転校生二人に疑念を抱く葛城へ訊ねる。葛城の発言の意味を理解していないのか、それとも理解した上でわざと言っているのか　よく分からない。

「ちっ違います！　そういうことはありません！」

「そっかー。違ったか……」

「わ、わたくし達も帰りますわよ！」

「は、はあい」

赤面しながら全力で否定する葛城。もしかしたら脈ありじゃないのかと思いつつも、みどりは葛城と一緒に下校した。やや怒っている葛城に手を引っ張られながら。

その頃、保健室では。

「……そうか。そちらもとくにめばしい情報はなかったか」
「うん。やっぱり来たばかりじゃ大して集まらないわね」

窓の外から夕陽が射し込む中、実習生に変装したアルヴィーと保険医に変装した白峯が話し合っていた。白衣の下には薄紫のワンピースという、いつもと変わらない格好の白峯だが、何故だか様になっている。とはいえ、科学者と保険医は別物なのだが。

「けど、風のオーブを見つけ出してさっさととんずらするなんてガラじゃないし……、ここに来たからには青春していかないかね」
「うむ、私も同じ意見だ。とばり殿」
「じゃあ、決まりね。ゆっくり学校生活を楽しみましょ!」
「ああ!」

改めて意気投合したアルヴィーと白峯。自分達がここまで潜入捜査をしに来たことを忘れていたような気がするが、まあ、大丈夫だろう。

EPISODE 163 : もっと青春するべき(後書き)

Q&Aコーナー

Q : 葛城さんってツンデレ？

A : たぶんそう。

Q : 体育館デカすぎね？

A : 大学の体育館みたいなイメージで書いてしまったからなー……。
もっと小さくしても良かったかも

Q : 不破なんだけど、オレは潜入させてもらえないのか

A : お前のような高校生がいるか！！

Q : 市村やけど、わしは入れへんの？

A : お前のような(ry

Q : まり子だけど、わたしは入っちゃダメなの？

A : お前の(ry ま、デカくなったらまたおいで。

EPISODE 164：利害の一致

その晩、町外れの山の麓に立つ教会。いつ建てられてたか分からない、少し古ぼけたその教会を二人の男女が訪れていた。ヴァニテイ・フェアの甲斐崎と 鷹梨だ。

重い扉を開いて二人は中へ入る。床には赤い絨毯が敷かれており、色とりどりの綺麗な花たちがプランターの中で咲いていた。きらびやかなステンドグラスからは、青い月の光が射し込んでいる。薄暗くて明かりが少ないゆえ、余計に美しく見えるというもの。

「おお、そちらからわざわざ来てくださるとは！ お待ちしておりましたぞ」

祭壇から降りて教会の中に入った二人を出迎えたのは、眼鏡をかけた壮年の男性。髪はヘーゼルで髪型は真ん中分け、服装は神父か牧師が着ていそうな足元まで隠れた黒い学生服のような服。この男こそがクラーク確氷だ。

「ずいぶん景気がいいな、クラーク。それで上手く行っているのか？」

「はい、お陰さまで。以前も言いましたが、私には秘策がありますからなあ」

手揉みをしながら答えるクラーク。媚びを売っているように見えてどこか嫌らしいというか。甲斐崎も鷹梨も、彼を見てあまりいい気にはなれなかった。

「気になってたんですが、あなたの言う秘策というのは？」

「ソフソフ……今にお見せしましょう」

クラークが嫌らしく笑って鷹梨へ返す。うしろへ振り返ると目を釣り上げて、「姿を見せよ！」と誰かを呼ぶ。すると現れたのは黒いローブを着て右手に大鎌を持った、死神のような格好の人物。

「これは、これは……皆様おそろいで」

この死神は、低い声や高い身長から察するに男性に見えるが、ひよつとしたら女性かもしれない。身長はシークレットブーツで補えるし、声も変声機なり何なりで誤魔化せる。更に、笑い顔のような仮面を被っていて素顔を窺うことが出来ない。

「あなた方が噂に聞くヴァニティ・フェアの社長と、その秘書の方かな」

「如何にも、俺が『社長』の甲斐崎だ」

冷静に、無機質に返す甲斐崎。便乗して鷹梨も「その秘書です」と返した。

「それで、お前は何者だ？」

「『高天原たかまのほらの死神』と、人々からそう呼ばれている」

「ほう。物騒な呼び名だな」

口元を綻ばせる甲斐崎。相手を見下したような冷たい視線を『死神』に向けている。

「それで、何故我々に協力しようと思った？」

「この街のある学園に『風のオーブ』が眠っているのは知っているか？」

「ああ。それがどうした」

「私はね、どうしてもアレを手に入れたいんだ。我が主の為に、そして私自身の目的の為に……ね」

甲斐崎に協力を申し出た理由を問われ、それを語り出す『死神』。自分に主がいると彼は言っているが　まさか、彼は何者かの命令で動いているというのか。そして、その真意もまだ分からない。

「そこでクラークさんにお会いした……って事ですか？」

「ソフソフ……そうなりますな。本当に人間というのは扱いやすい」

鷹梨の問いに答えるクラーク。その下卑た笑いを見て、鷹梨はやや嫌悪感を感じた。

「　　目的を果たす為というのものもあるが、それだけじゃない。恩師の影響かな……あなた方シェイドの生態系にも興味があるんだ」

「何が言いたい？」

「まさか、物言わぬ野獣でしかないと思っていたシェイドがこうやって、独自の社会体制を築き上げていようとはね　　」

仮面の下で卑しく笑い両手を広げる『死神』。自分に酔っているように見えて、鬱陶しいというか　痛々しい。

「……まあいいだろう。だが、『死神』とやら」

気難しい表情で甲斐崎が死神を見つめる。

「忘れるなよ？　お前の命はこっちが握っているということだ」

「そっちこそ　身の守りはしっかり固めておくことだ」

余裕たっぷりな『死神』を脅す甲斐崎。だが『死神』は気にも留めず、甲斐崎たちの横を通り過ぎて教会を出た。青白い月が見下ろす中で夜の森を闊歩するその姿　まさしく人の魂を冥府へと誘う『死神』のようだ。

翌朝。

「イヤッホーイ！」

朝焼けが美しい、高天原市のとある駅。やけに嬉しそうな様子で東京から発進してきた電車から降りて、改札をくぐった健が叫ぶ。ついてきたみゆきと一緒に通学路を駆け抜けながら、途中で飛び跳ねて「今日も青春するぞーい！！」とまたも雄叫びを上げた。

みゆきも「おう！」と叫んでいて実に楽しそうだ。なお、アルヴィーと白峯は二人より先に天宮学園に行っていた。変装しているだけに過ぎないとはいえ、先生や校医というのはとても忙しいのである。

学園に着いた二人は靴を履き替え下駄箱から校舎の中へ上がって、二年生の教室がある三階へと登る。この学校は四階に一年生の教室があり、三階には二年生の教室、二階には三年生の教室がある。常識的に考えれば既に社会人である健とみゆきが転校生としてこの学校へ潜入するのはやや無理があるのだが、それが潜入できてしまった。

何故だろうか？　それは二人がいわゆるイケメンだったり、童顔

だったりしたからだ。更に社会人になっているとはいえ年も近いため、自分からボ口を出さない限りはまず怪しまれない。最も、勘の鋭いものにそんなごまかしは通じないだろうが。

「おはようございますー！！」

元気よく挨拶しながら教室である二年A組へ入る健とみゆき。「おっ、おはようさん！」「調子どう？」「わかんねー事があつたら何でも聞いてくれよ！」「それで昨日は何食べたのー？」「と口々にしながらクラスメートたちが二人へ言い寄る。

「……あの二人、すっかり人気者ですね」

「そりゃそうだよ。東條くんもみゆきちゃんも、明るくて親しみやすいし」

「そうは言うけど、二人ともここに来てからまだ一日しか経っていないのよ？ ちょっとおかしくありませんか？」

「そーかなー？」

たかられる健とみゆきを見て葛城とみどりが話し合う。葛城は頬杖を突きながらやや懐疑的な表情をしており、一方でみどりは屈託のない笑顔を浮かべていた。

「か、葛城さん、みどりちゃん！ おはようございますー！」

「ふ……二人ともおはよー」

やがて群がる生徒たちの中をくぐり抜けて、二人は葛城とみどりに挨拶した。傷だらけで頭に絆創膏をいつの間にか貼っていたりしているように見えるが、恐らく気のせいだろう。

「おはよう、東條さん。今日も元気がいいですね」

「はい、お陰さまでー！ 葛城さんは？」
「わたくしは まあまあですわ」

葛城が健から顔をそむけて答える。やはりすぐには彼を受け入れられないのだろう。

「おはよう、みゆきちゃん」
「みどりちゃん、おはよう！ 今日も一緒にお昼食べる？」
「うん！」

みゆきからの問いに清々しく笑いながらみどりが答える。「あずみんと東條くんも一緒に食べようよ！」と二人を誘うが。

「いえ、それには及びませんわ。お弁当ぐらい一人で食べられます」
「えー。昨日東條くんと一緒に食べてたじゃん」
「あ、あれは初めてお目にかかりますから少しでも印象を良くしなければと思ってそうしたのであって、決して東條さんと親睦を深めようとしたわけではなくてですね……」
「そんなこと言わないでくださいよー。僕やみどりちゃん達と一緒に食べましょうよ、葛城さん」

赤面する葛城をみどりと健が少しからかう。馴れ馴れしく誘う健だったが、葛城は「わかりましたわ。一緒に食べましょう。ただし、東條さんは除いてね」とへそを曲げてしまった。健は呆然と口を開けてそのまましばらく固まった。やはり上手いかないようだ。

「あちゃー、東條くん……あの様子じゃ、あずみんはしばらく口聞いいてくれないかも」
「あずにゃんって気難しいっていうか、繊細な人なんだね」

思わず口走ってしまった。馴れ馴れしく、葛城のことを『あずちゃん』と呼んでしまった。みゆきは気まづくなつて口を塞いだ。彼女だけでなく、周りのものにも気まづい空気が漂い始める。

「……………ぐすっ」

「い、いめん……………」

紅潮しながら半べそをかく葛城。言い過ぎてしまった、と慌ててみゆきは頭を下げてしまった。

「く、口は災いのもとってというのは本当みたいだね……………」

「うん……………」

きよとんとした顔で、健とみどりが呟く。泣きかけた葛城だが、彼女は強い心の持ち主。すぐにでも立ち直るはずだ。というか、朝のホームルームが始まる頃には何事もなかったかのように立ち直っていた。彼女は繊細で傷付きやすいが、気持ちの切り替えも早いのである。

EPISODE 165：レア物と仮入部

「この校売って何が売ってるんだろ〜な〜」

「うふふ。見てからのお楽しみだよ」

昼休み、健はみどりと一緒に一階にある校内売店（略して校買）へと向かっていた。場所は下駄箱のすぐ近くだ。午前の授業をすべて終え、昼休みが始まって二人ですぐに足を運んでみたものの既に何人が並んでいた。さほど混んでいたわけではないが。

「あちゃー。やっぱりみんな考えることは同じか……」

一応弁当は持ってきているが、あるのはおかずだけ。おにぎりも白ごはんもない。だからここでパンを買わねばならない。ついでにソフトコーヒーかりんごジュースも買うつもりだ。張り紙に書いてあるメニューを見て、並んでいる間に何をかうか考える。

メニューの一覧に書いてある文字で最初に目に留まったのは『シルバーチョコロール』なる商品。どんなものは分からないが数に限りがあるらしいので恐らく、いや確実にレア物だ。他にもチキンカツサンドやクリームパン、あんパンやクロツケパンなどもあるようだ。流石に高天原市の人間ならその名を知らぬものはいないと云われているだけあって、質素ながらも庶民から見ればなかなか豪華な品揃え。

「し、シルバーチョコロールってなんだろう。すっげえ気になる…」

「…」
「買ってみてからのお楽しみだよ。でもまだあるかなあ」

みどりと話し合いながら前を詰めていく健。やがて自分たちの番がやってきた。「やつとか!」と健は急に血相を変え、財布を片手にカウンターにいる校買のおばちゃんに迫る。

「はいよ、次の方どうぞー……」

「おばちゃんっ! シルバーチョコロールってやつ、まだある?」

健が鬼気迫る執念で校買のおばちゃんへ訊ねる。日本人は限定品やレア物に弱い人種だ。彼も日本人としての本能を抑えきれず、今のような大胆な行動に出たのだろう。

「あー、シルバーチョコロール? ごめんねえ、アレさっきの人で最後だったのよね!」

「なッ……なんだとおおおお!!」

だが、おばちゃんは非情にもそう告げる。そうやって冗談を言っ
て茶化したのだろうと思っておばちゃんの背後を見ても、シル
バーチョコロールらしきパンは見当たらない。ということは残念な
から。

大好評につき、本日は完売いたしました。

ということになる。

「まあまあ、また明日来てちょうだい。でも毎日十個限定だから、
買うならなるべく早めにねえ」

「……そんなバカな……」

しょんぼりと床でうなだれる健。みどりは彼に「ドンマイ。気に
しないで」と優しく声をかけて立ち上がらせる。

「良かったらあなたの分、キープしてあげるけど……どう」

「いいです。妥協なんかありません」

「あらあら……」

おばちゃんの気遣いもむなしく、健はみどりと一緒に失意のまま
購買所を去っていくのだった。

「ふーん、それで買いそびれましたの？ シルバーチョコロールを」
「うん……それで仕方なくチキンカツサンドとチョココロネで妥協
したんだ」

教室に戻って弁当を食べ始めるも、健の表情は沈んだまま。これ
しきの事で落ち込む辺り、どこか子供っぽい。あまり大人には見え
ない。

「まあ無理もないですわ。シルバーチョコロールは限定品で、しか
も大人気ですからね」

「か、葛城さん食べたことあるの!？」

「ええ。一度だけですが……」

葛城からシルバーチョコロールを食べたことがあると聞いた健が、
急に立ち上がって興味深そうな顔で訊ねる。さっきまで落ち込んで
いたのに気持ちの切り替えが非常に早い。情緒が豊かというか、や
やオーバーというか。

「あ、味は？ 味はどうでした!？」

「味ですか？ えーと……そうですね、表面をチョコでコーティン
グしていてパンの中には白いホイップクリームが入っていたような

覚えがあります」

「それホント!?!」

騒ぎ立てる健。葛城はもちろん、すぐ隣にいたみゆきやみどりもこれには少し驚いた。

「し、シルバーチョコロールってそんなにレアなの?」

「うん。毎日売られてるからそこまでレアってわけじゃないんだけど、十個しか売られてないの。しかもみんな買いに行くものだから、すぐ売りきれちゃうんだよね。卒業した人の中には、シルバーチョコロールを食べそびれたまま社会に出た人もいるぐらいだし」

「すごーっ……」

「だから毎日が激しい争奪戦なの。本当に凄いよね。あたしもまだ三個ぐらいしか食べたことないんだ」

シルバーチョコロールがどのようなかをみゆきに語るみどり。やはりというか、シルバーチョコロールは限定品だった。それを買えないまま卒業してしまった先輩もいると聞いて、みゆきはやや不安になっていた。目的を果たしてこの地を離れるまでになんか買えないだろうか　と。

「ふむふむ……」

放課後、部活動が始まった。学生たちが何をしているのか気になり関心を示したアルヴィーは、何となくグラウンドの方へ向かう。

「おー、みんな張り切ってやっとなるな」

柵の上に腕を乗せ、グラウンド付近にある駐輪場からグラウンドを見下ろすアルヴィー。テニスコートで熱心に練習に励んでいるテニス部の姿が目に残り、食い入るように見つめていた。台の北側にいた部員がスマッシュを放ったときに何か特殊なエフェクトがかかったような気がしたが、恐らくは気のせいだ。

「おや、実習生の白石さん。見回りですか？」

テニス部の部活動を見ていた白石先生　もとい、アルヴィーに誰かが声をかける。爽やかに聡明な雰囲気の男性の声だ。

「からすま烏丸先生！」

声の主の名を呼んでアルヴィーが振り返る。その烏丸という男は細身で長身。ツンツンとした前髪が右に流れた独特のヘアースタイルが特徴的だ。髪色は黒がまじった緑色で瞳は緑色。理知的な様相でメガネも良く似合っている。

「いいところでしよう、うちの学校は」

「はい！　本当にいいところですよ。眺めもいいし、生徒たちはみんな一生懸命な子ばかりです。まだ来たばかりですけどすっかり気に入りました」

「ははははっ。気に入っていただけたみたいで何よりです」

爽やかに笑う烏丸。見たところ、彼は器量よし、性格もよし、見た目もよしと三拍子そろったこれ以上ないくらい完璧な教師である。生徒からも、いや同じ教師からも敬われているに違いない。

「何せここは、この高天原市でその名を知らないものはいないほどの名門ですからね。教育実習が終わる頃には、きっとここへ実習に来てよかったと思えるようになっていくでしょう。僕が保証します」「はいっ！」

満面の笑みで清々しく答えるアルヴィー。どうやら彼女は心の底から教育実習生としてこの学園で生徒たちと共に学び、歩んでいく事を楽しんでいるようだ。

「それじゃあ、僕はこれからテニスコートの方に行きます。顧問なんでね……白石さんはどこへ？」

「私ですか？ 職員室に戻ります」

「そうですか。お気をつけて」

互いに微笑みを浮かべて別れる二人。が、テニスコートへ通じる階段を降りかけたところで烏丸が「あ、そうそう……白石さん」と振り返ってアルヴィーを呼び止める。

「なんででしょうか」

「近頃、この辺では夜になると『死神』って呼ばれている殺人鬼が出るそうです」

「『死神』……？」

「くれぐれも、夜は外出を控えてください。でないと 命を奪われますよ」

「は……はい」

死神という殺人鬼が出るから夜はなるべく出歩くな そう告げて烏丸は階段を下りてテニスコートへと向かった。「何か引つかかるな……」と深刻そうに呟くと、アルヴィーもそこから去った。

同時刻 体育館。フェンシング部の部室の中で部員たちが練習に励んでいた。そのうち二人は白いユニフォームに身を包み、運動用マットの上で顔も隠して剣と剣をぶつけあい火花を散らしながら。その二人より先に練習を行っていた三人は休憩を挟んで、スポーツドリンクやお茶を飲みながら世間話をしていた。内訳は男子が二人、女子が三人だ。

「入りますわよ」

練習中に丁寧な口調の少女の声が聞こえたかと思えば、部室の扉を開けて声の主であるバラ色の髪の乙女 葛城が入って来た。彼女だけではなく、何故か健やみゆきにみどりも一緒だ。

「部長!!」

「古田さん、榎本さん、練習お疲れ様」

練習していた二人の部員がマスクを外して葛城たちに挨拶する。名前を呼ばれた背の高い男子の古田と、茶髪のショートヘアで少し小柄な体格の女子の榎本 それ以外にも三人ほどいた部員も頭を下げた。

「あれ? 後ろにいらっしやるのは妃さんと 昨日来た転入生の人ですか?」

古田がすつとぼけた顔で葛城に訊ねる。

「ええ、そうよ。仮入部……といったところでしょうか」
「はあ……か、仮入部ですか？」

古田が頭を掻く。彼の隣にいた身長140cmほどで小柄な榎本が健とみゆきを見て、

「えっと、東條くん……だったっけ？」

「はい！ 僕は確かに東條だけど……」

「私は二年の榎本^{えのもと}文香^{ふみか}っていうんだけど、あなたはここに来る前は部活何してたの？」

「部活？ えーつとね……帰宅部！」

「そっかあ、帰宅部だったの」と、ちよつと残念そうな顔をする榎本。健が帰宅部以外に何をやっていたと思っていたのだろうか。サッカー部のエースか、バスケ部のエースか。はたまた野球部の四番か。それとも陸上部か。妄想が尽きる事はない。

「じゃあ、風月さんは？」

「わたしはバドミントンやってたよ！ 大会には出れなかったけど……」

「バドミントンやってたのかー。うん、すっごくいいと思うよ！」
「ありがとう！」

ニコツと笑う榎本とみゆき。彼女とも仲良くやっていけそうだ。これでまた友達が増えた。

「おほん！」

空気を換えようとしたか、葛城が少し険しそうな表情で咳をする。

「まあ、そういつわけですわ。帰宅部として無意義な生活を送っていたであろう東條さんに、有意義な経験をしてもらおうと思いたの」

「ど、どうも……」

別に健は無意義な時間を過ごしていたわけではなかった。帰ってからちゃんと家事の手伝いはしたし、勉強もちゃんとやっていた。友達とも遊んだ。でもここは葛城の好意に答えなければ。

「良ければ風月さんもいかが？」

「あ、わたしはいいです！」

「そっか。じゃあ、あたしと一緒に見学しよう」

「さんせい！」

みゆきも葛城から体験を持ちかけられるが、遠慮して見学を選んだ。みどりと一緒に部員たちが何をするか傍観しようというわけだ。

「……どうやら決まったみたいですね。では東條さん、はじめにこの天宮学園高校フェンシング部が誇る部員たちを紹介したいと思います」

「向かって右から桐生さん、谷村さん、郷田さん。加えて、さつきわたくしが名前を呼んだ榎本さんと古田さん」と葛城が右手の人差し指を出して、部員たちを順に指差していく。少し赤みがあった茶髪で長身の女子が桐生で、やや頼りなさそうだが見た目はカッコいい黒髪の男子が谷村、金髪のセミロングで凛々しい雰囲気を漂わせている女子が郷田だ。

榎本は先ほど名乗りを上げた茶髪のショートヘアでさっぱりした雰囲気の子。古田は見るからにスポーツが得意そうな体格のいい男子だ。みんな見た目や性格は違えど、実力は申し分ない。いう

なれば精鋭部隊、いや連合艦隊だ。少々たとえを誇張しすぎたか。

「そしてこのわたくし、部長の葛城ですわ。みどりさんも副部長を務めていますから、わたくしやみどりさんを含めて全部で7人いることになりますね」

「えーッ!？」

葛城からそう聞いて健が大きな声を上げて驚く。だが驚くところなのだろうか？

「す、すごい……みどりちゃんって副部長さんだったんだね」

「そんな〜。大げさだよ〜。うちのフェンシング部がインターハイに出場して優勝できたのも、あずみんのお陰だし……」

後ろ髪を撫でながらみどりが言う。謙遜しているが、それでもすごいことに変わりはない。おっとりしている彼女だが、いざ試合となれば一転して勇猛果敢な剣士となるのだろうか。

「……さて、東條さん。驚いている暇はありませんよ」

真剣な目つきになった葛城を見て健が唾を飲む。部長だけあつてか、端正で可憐ながら威圧感がある。

「ユニフォームを貸してあげますから、まずそれに着替えてきてくださいまし。話はそれからですわ」

「は、はい……」

部屋の隅に置いてあった丈夫な綿で出来たユニフォームとマスクやグローブ、ソックスなどの防具一式を、葛城は健に手渡した。白くてサイズは大きめ。男性用だ。「わたくしも着替えたいので、

なるべくお早めに」と釘を刺し、葛城は健を更衣室へ向かわせた。

「やばい、なんだろう……ドキドキしてきた」

ユニフォームに着替えるということは、まさか一戦交えることになるのでは？ と、健は考えていた。そしてすぐあることに気付いた。

ユニフォームの着方が分からない。

「あ、あの！ 誰かユニフォームの着方教えてください！」

情けない声を上げて助けを求める健。あまりにバカ丸出しな行動である。これにはさすがの葛城も難色を示し、「谷村さん、彼にユニフォームの着方を教えてさしあげて！ なるべく丁寧にわかりやすくね」と谷村を更衣室へ向かわせた。こんな調子では先が思いやられる。果たして、無事にお目当てである『風のオーブ』を見つけることが出来るのだろうか。

EPISODE 165：レア物と仮入部（後書き）

えーと……

その、ボロボロです！

自分なりにフェンシングがどういふスポーツか調べて書いたつもりでしたが……。

EPISODE 166：「の剣にかけて

「よし、これでバッチリだ。あとはマスクを被るだけだよ」

「谷村さんでしたっけ。着方教えてくれて、ありがとうございます！」

一時はどうなることかと皆心配したが、いらぬ心配だった。葛城の命を受けた谷村がユニフォームの着方を教えたところ、健はすぐに着方を覚えて着こなしたからだ。フェンシングの白いユニフォームを着た感覚はタイトに近いものと思われたが、そんなことはない。宇宙服やスズメバチの巣を駆除する際に着る防護服を着ているような感じだ。もつとも、それらに比べたらだいぶ薄手ではあったが。

「あら、案外早かったですね。それではわたくしはこれから着替えてきますから、皆さんとおしゃべりでもしながら待っていてくださいませ」

「はい！」

髪をとかしながら葛城が告げる。彼女は白いユニフォームを持って速やかに更衣室へ入った。

「ハッ！」

そのとき彼は見た。葛城の胸がぶるん、と揺れる瞬間を。

「東條くん、どうした？」

「もっと早く気付くべきだった……」

「え、何に？」

「葛城さんが巨乳だったってことに！」

興奮した健はマスクを持ちながら叫ぶ。すると周囲に笑い出し、笑いの渦が巻き起こった。

「ずいぶん正直なのね、キミ！ そりゃあ確かにうちの部長はスタイル抜群だけど……」

「健全でよろしい。まあ谷村が同じことを言ったら許さないけどね」「ひ、ひどいよ郷田さん……」

順に赤みがかった茶髪の桐生、金髪で凛々しい出で立ちの郷田、黒髪でやや頼りなさそうな谷村が言う。見るからに気さくな雰囲気、桐生はともかく、かなり真面目そうに見える郷田が割と寛容な姿勢を見せたのは意外だった。

「もう。健くんだったらほんとスケベなんだから」

「東條くんって普段からあなの？」

「ううん。普段は真面目なんだけど、興奮しちゃうとあーという面が出ちゃうのよね」

「そっか。でも男の子なら仕方ないよね」

だらしのない健を見て呆れるみゆき。一方でみどりはそれを受け入れていた。と、盛り上がっているうちに更衣室のドアを開けて葛城が白いユニフォーム姿で戻ってきた。健の対岸に立って、彼に「盛り上がっていたみたいですが、準備の方はよろしくて？」と彼女が告げる。既にマスクを被っていてヤル気満々だ。

「はいつ、なんとか！」

健がマスクを被りながら答える。これでバッチリだ。そこへ赤み

がかった茶髪の桐生が「二人とも、これ持って」と取っ手がついた細い棒を持ってきて二人へ手渡した。試合に使う『剣』だ。少し触ってみるとグニヤリと曲がったことから、硬いながらも柔軟性を持ち合わせていることが分かる。端から見れば遊んでいるようにしか見えないので、「おほん！」と咳をして葛城は鋭い視線を健に向けた。

「……ルールを説明します。フェンシングは剣で突ついたり、剣で相手の攻撃を弾いたりするスポーツですわ。マスクや胴体に突きが当たれば負けですの」

「ふむふむ……そうなんだ」

フェンシングとは何か。素人の健に分かりやすく、丁寧に説明する葛城。

「本当はもっと細かいルールがあるのですが、今回はお試しですからね。軽い気持ちで取り組んでも構いませんわよ」

「はい、また調べておきます！」

ルールを聞いて健は葛城へそう言った。そして 葛城が「行きますよ！」と言ったのを合図に、戦いの火蓋が切って落とされた。利き腕はお互いに右だ。とりあえず突けばいいのだな、と健は何度も葛城をつつくが 効いていない。いや、突く度に往なされていった。やみくもに突いてくる健とは対照的に、葛城は正確な突きを繰り出して 見事顔面に命中させる。

「あれは相手を正確に狙う、部長の鋭い突き！」

「あれ痛いよねー。東條くん、大丈夫かな」

「……ちゃんと防具つけてるし、大丈夫なんじゃないの？」

部室の端で試合を見ながら話し合う古田、桐生、郷田。三人とも部長の葛城と長い付き合いだけあって、彼女の實力をよく知っていた。なお、このフェンシング対決はあくまで練習の為か審判はいない。

「あつ、まただ。また部長が突きを炸裂させた」

「東條くん、完全に押されてるわ！」

やや頼りなさそうな谷村と小柄な体格の榎本が驚く。試合はどんどん続いていき、まったくの素人とはいえ健は葛城に完全に押されていた。

「葛城さん、すごい……健くんにつけ入る隙をまったく与えてない」

「あずみんはインターハイで優勝した実績があるんだよね。だから簡単には勝たせてもらえないかも」

みゆきとみどりが話し合う中、健は歯を食い縛っていた。焦つてめちゃくちゃに突きを繰り返したが、やはり葛城には通じない。そして胴体を突かれて　衝撃で健はずっこけた。

「……やめにしましょう。流石に可哀想になってきました」

マスクを外した葛城が練習試合をやめようと、そう宣言する。

「そんな……！」

「あなたにやる気があるのなら、続行しても構いませんが」
「……」

健が難しい顔をして考え始める。一体どうするんだ、と、みゆきや部員たちは深刻な雰囲気になっていた。やがて健が出した答えは

。

「……棄権します！」

練習試合の棄権だった。負けを認めたのだ。ややカッコ悪いが、ここでしつこく食い下がるようなタマではない。

「……まあ、ずいぶん潔いことで。うちのフェンシング部で活動するのは、帰宅部の東條さんには荷が重かったようね」

葛城が鼻で笑いながら健を見下ろす。やはりキツい女だ。

「うっ……！」

容赦ない一言を浴びせられて、健は少し悔しくなった。みゆきと周りの部員たちには気まずい空気が漂っていた。

「そうか……そんなことがあったんだな」
「はい。ひたすらに自分が情けなくて……葛城さんも容赦なさすぎるし」

その晩、健は不破の家で仮入部した際のことについて愚痴っていた。愚痴を聞いていたのは不破だけでなく、みゆきやアルヴィーに白峯も一緒だ。みんな制服やスーツから私服に着替えていてラフな

雰囲気を漂わせている。

「あの人がいけないんだ……くっそー！ 葛城さんのアホおおおのおおおお！！」

「ちよつ、おま！？」

何を血迷ったか白目を向いて健は立ち上がり雄叫びを上げた。彼は怒りに震えている。不甲斐ない自分と、尊大な葛城の態度にだらしくない　　というか、子供っぽい。

「この恨み晴らさずにおくものか！　いつかカッコいいところを見せて見返してやる！！　キーツ！！」

「お、お、お、おい！　落ち着けって！」

怒りに震える健を不破がなだめながら取り押さえる。だが「うるせー！」と健は振り払い、更にグーで叩いた。日頃から鍛えている不破でも今のは痛かったらしく、「いてえよ、おかーちゃん」と泣き言を言いながらしばらく頭を抱えていた。

「まあまあ、落ち着いて東條くん。カッコいいところ見せたいんですよ？」

「そ、それはそうですね……」

「あなた　　潜入捜査始めてからちよつと浮かれてたみたいだし、明日から真面目にしてみれば？」

白峯が健に優しく語りかける。「そうするだけでも、だいぶ印象が変わると思うよ」と白峯は笑顔を浮かべながら付け加えた。やはり彼女には笑顔が似合う。

「うむ。遊びすぎはよくないからの。少しずつその葛城殿に認めて

もらえる努力をしていけばいいと思うぞ」

「ほら、笑顔笑顔　あんまり怒ったり、暗い顔しちゃダメだよ」

励ましの言葉を送るアルヴィーとみゆき。ややぎこちなく笑いながら健は「そ、そうだよな」と答える。

「困ったことがあったら何でも言ってくれ。いつでも相談に乗るぜ？」

「不破さんまで！　ありがとうございます……ってか、立ち直るのが早いな」

さっきまで頭を抱えていた不破が立ち直り清々しい笑顔を浮かべて右手の親指を上突きだし　サムズアップ。健は思わずツツコんだ。なんやかんやでゆくり過ぎていた健たちだったが、そのとき　健のカバンの中にあつたシェイドサーチャーがシェイド反応を感知し音を鳴らし始めた。

「……サーチャーが鳴ってる！」

カバンを開けてサーチャーを手にとつた健が言う。いつになく真剣だ。こうしているうちにも人々はシェイドに襲われて蹂躪されている　急いで助けに向かわねば。

「なんですって！　東條くん、場所は？」

「高天原市……みたいですよ！」

「ちょっと遠いわよ。行ける？」

「アルヴィーと一緒になら行けますって！」

白峯と会話を交わす健。なぜアルヴィーと一緒になら行けると彼は言ったのかというところ。エスパーはシェイドを媒介にして陰や隙

間に入って行きたい場所へ瞬時に移動することが出来るからだ。以前もセンチネルズとの決戦に向かう際などにその方法を使った。もっとも普通は危険なので、不破ら他のエスパーはあまり使用しない傾向にあるようだ。

「うむ、では参ろうぞ！」

アルヴィーが立ち上がり、ワイシャツの袖をまくる。戦う準備は既に出来ていた。「それじゃ、行ってきます！」と健は残った三人へ告げて玄関へ。

「気をつけてね、健くん！」

「あんまり無茶しないでね！」

見送りに来たみゆきと白峯に振り向いて笑顔を送る健とアルヴィー。「よかつたらオレも行くぞ！」

と不破は加勢しようとするが、「大丈夫です！」「心配せずとも私達なら大丈夫だ」とキツパリ断られてしまった。そして、二人はマシンを飛び出て近くの適当な隙間へと潜った。その先にあったは 極彩色のもやもやが広がる異次元空間。

「たしかシエイドが出たのは高天原市だったな」

「うん。アルヴィー、急いで！」

「あいわかった。しっかり掴まっとれよ！」

本来の姿 巨大な白き龍となったアルヴィーの背に乗って、健は夜の高天原市へと向かった。ジェットコースターが一気に宙を突き抜けるような感覚を味わいながら。果たして何が待ち受けているのか？

EPISODE 167：夜の街は危険がいっぱい PART？

異次元空間から高天原市へと飛び出した健とアルヴィーが見たのは、大量にいる目と鼻がない、表面がドロドロしたゾンビのような怪物が 人々を襲っている光景。

「ウゴオオオオオオ！！」

「た、たすけてー！」

そのうちの一体がゾンビさながらの鈍い動きで子供に近寄り、唸り声を上げて噛みつくこうとする。刹那、青い炎が横切つてゾンビのような怪物の頭を吹き飛ばした。

「……………あ、あれ？」

それだけではなく、他のゾンビのような怪物も次々に青い炎に焼き尽くされて消えていった。何が起きたかわからず動揺する子供に、炎から逃れた一体が腕を振り上げて襲いかかるも 寸前で何者かにぶつた切りにされて霧散した。

崩れ落ちた怪物のうしろに立っていたのは 毛が外に跳ねた茶髪の青年。手にはシルバーグレイを基調とした長剣と龍の頭を模した盾を構えていた。言わずもがな東條健だ。そしてその背後にいる巨大な白い東洋の龍は アルヴィー。

「あ、ありがとう……………」

「ここは危険だよ。早く逃げて！」

「う、うん！！」

先に襲われていた男の子を逃し、健は他の人々を救うために突っ走る。

「こいつら……！ これ以上みんなに手出しはさせないぞ！」

力強く叫び、並み居るゾンビのような 最下級のシェイドを叩つ切る。老人に噛みつこうとした一体を斬り、若い女性を襲っていた三体を斬り、二体を相手に角材を持って精一杯抵抗していた工事現場の男性を助けるためにその二体を倒し 。これであらかた片付いた。「これで全部かな？」と、一息つこうとした健だが、サーチャーの反応はまだ消えていない。

「おかしいな。敵はみんな片付けたはずなんだけど」

「……いや、まだだ。来るぞ、健！」

それと同時にアルヴィーも敵の気配を感じ取っていた。「ど、どこから？」と健が訊ねるとアルヴィーは「地面の下からだ！」と返した。

「下から来るぞ、気を付ける！」

「……ごくっ」

アルヴィーが発した警告を聞いた健は、唾を飲んで盾を構える。だが本当に下から来るのか？ そう思い、ずっと地面を見ながら盾を構えていると 新手が姿を現した。同時に健を突き飛ばし転倒させた。

「健！」

「だ、大丈夫……ホントに地面から来たね。あいてて」

健が痛そうに頭を掻く。地中から現れて健を突き飛ばしたのは、いかついオケラのようなシェイド、モルケツトだ。全身が茶色く脂ぎった質感がなんとも気持ち悪い。

太く大きく発達している、その穴を掘るのに適したシヨベルのような両手で叩かれたら痛そうだ。柔らかい土だけではなく、硬いコンクリートも掘り進んできたであろうことも考えればなおさら。

「ケラアアアアア!!」
「のわッ」

両腕を振り回しながらモルケツトが走ってきた。盾を構えるも相手は怪力を備えており、ものともせず健を吹き飛ばす。血を流しながらも起き上がった健に、「慎重に戦え。相手のパワーは強いが、付け入る隙も多い」とアルヴィーが助言する。

「隙か……あるかな」

身構えつつ相手の様子を伺う。するとモルケツトは急に地面をえぐり出し。

「あいつ、何をする気だ？」

緊迫した様子で、健。やがてモルケツトは持ち上げた岩をそのまま放り投げたではないか！ しかもかなりの大きさだ。ヒト一人潰すのにわけではない。

「健、避ける！」
「おわっ!？」

だが健はアルヴィーに言われたまま横に転がって岩石をかわす。

その隙を見計らったかモルケットが腕をメチャクチャに振り回しながら健へ突っ込んでいく。

「こいつッ」

「ゲラ!?」

盾を突き出して攻撃を弾き、健はそのまま長剣を振り上げて反撃。更に回転しながら斬りつけてモルケットを吹き飛ばした。

「そおおおりヤッ」

「ゲゲラアアア!!」

ひるんだところをジャンプしながら斬りつけて追い討ち。起き上がったモルケットは地団駄を踏みながら怒り出し、地面を掘って潜行。

「また下から来るぞ!」

「と見せかけて、上から来たら嫌だよ……!!」

「なあに、ヤツが出てくる場所は土が内側から盛り上がる。それを見てからでも回避は間に合うぞ」

「わかった、アドバイスどうも!」

アルヴィーからみたびアドバイスを受けられ、礼を言う健。彼女から言われた通りに回避するのも、モグラ叩きの要領で叩くのも彼の自由だ。

「……来たな!」

そのとき健の足元の土が盛り上がった。地面を突き破ってモルケ

ツトが飛び出し、跳躍してそのまま空中へ。「今度は上から!？」と健が驚く間もなく、モルケツトは空中から健めがけてダイビングを仕掛ける。だが健は盾を天へ向けて構え、落ちてきたモルケツトを弾き飛ばして気絶させた。

「よし、今だ!」

「うむ!」

相手を倒すなら今がチャンスだ。長剣の柄に赤いオーブをセットし、真つ赤な炎の力を剣に纏わせる。健が空高くジャンプすると同時にアルヴィーも宙へ舞い上がり、剣を斜め下へ構えた健を青い炎で後押し。赤と青、二色の炎を纏って突進!

「け……ケラッ」

恐れを成したかモルケツトは逃げようとする。だが、時すでに遅し。すぐうしろに健が迫ってきていた。

「ケラアアアア~~~~~!!」

そしてモルケツトは大爆発。チリと化して炎の中へと消えていった。炎の前に佇んで「やった! これにて一件落着」と喜ぶ健だったが、戦いはまだ終わってはいない。

「……健、喜ぶにはまだ早いようだぞ」

「え? でも敵はみんなやつつけたはずだよ」

「とてつもなく強いシェイドの気配を感じる……信じられないならサーチャーを見てみる」

アルヴィーが言うにはまだシェイドの気配が消えていないらしい。

その証拠にシェイドサーチャーもやかましくアラームを鳴らしている。恐る恐るスクリーンを覗いてみると　大きな点がこの近くにひとつ。

「……まさか、上級シェイド？　いやまさか……」
「かも知れんな。嫌な予感しかしない……」

二人の間に緊迫した空気が漂う。やはりというか、嫌な予感ハ的中し。

「はっはっはっ！　やるではないか。さすが、アルビノドラグーンと契約しただけのことはあるな……」

どこからともなく低音の男性の声が聴こえる。恐らく壮年だ。同時に辺りは深い霧に包まれた。

「な、なんだ？　何も見えない……」
「いったい誰の仕業だ？　姿を見せる！」

戸惑う健をよそにアルヴィーが叫ぶ。「ククク……逃げも隠れもせんよ」と声の主は静かに笑い、霧の向こうからゆらゆらとその姿を露にした。

「ソフフフフ」

やがて霧は晴れていく。声の主はヘーゼルの髪でメガネをかけた壮年の男性。服装は黒い司祭服だ。まるで教会にいる神父のような格好だ。

「誰だお前……つて神父さん？」

身構えていた健が拍子抜けする。表情と相まってややマヌケに見える。

「我が名は【ファンタスマゴリア】。またの名をクラーク碓氷……」

名乗りを上げるクラーク碓氷。メガネのブリッジを上げ、瞳を妖しく輝かせてほくそ笑みを浮かべる。

「ファンタスマゴリア、移り変わる幻影……か。気を付けろ、健」
「えっ？」

「ヤツは幻術の使い手。幻を見せて相手を惑わし、その隙にいたぶる事を好むゲス野郎だ。決して惑わされるな！」

「あ、ああ……うん」

クラークを睨みながらアルヴィーが健へ助言する。戸惑いながらも健は返事をして、真剣な表情で武器を構え直した。

「ソフソフソフ、ずいぶん威勢がいいな……。だが、果たして上手く行くかな？」

不敵に笑うクラーク。顔の前で腕を交差させると少し気合いを入れ、辺りに霧を発生させる。

「ま、また霧だ！ 相手が見えない！」
「落ち着け。まだ近くにいるはず」

また何も見えなくなった。霧の中であわてふためく健を狙って

青紫色をした鬼火が飛んでくる。

「があっ！」

「健！？」

健は突然飛んできた鬼火を避けきれず、そのまま吹き飛ばされてしまう。「大丈夫か？　しっかりしろ！」とアルヴィーが駆け寄るが、霧が晴れて二人を嘲笑うようにクラークが姿を現す。

「ハツハツハツ！　いやー愉快愉快！」

その姿は、ぼろ布を纏った幽霊のような、ガイコツの神官のような不気味なものだった。羽織っている赤紫色の法衣は古びていて左の袖は破れており、爪を生やした長い腕とあばら骨が剥き出しになっている。

右手には黄金色に輝くドクロの杖。右肩には目玉を模したプロテクター、左肩には上半分だけのトゲトゲの輪のようなもの。これが世にも恐ろしいファンタスマゴリアの姿だ。

「くっ……」

「私も急いでいるのでな……悪いが消えてもらうぞ！」

さあ、戦いだ！

EPISODE 167：夜の街は危険がいっぱい PART？（後書き）

久しぶりだね！【シェイド図鑑】

モルケット

オケラのシェイド。

太く発達した頑丈な前足を使って、

柔らかい土から硬いコンクリートまで、

モグラのように何でも掘り進むことが出来る。

地中から奇襲する攻撃を得意としており、

また、力が強いだけではなくそこそこ素早い動きも備えているた

め気の抜けない相手である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403p/>

同居人はドラゴンねえちゃん

2011年11月25日23時56分発行